世界に革新を齎すモノ

千葉　久々

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
世界に革新を齎すモノ

【Ｎコード】
Ｎ５３４９Ｊ

【作者名】
千葉　久々

【あらすじ】
　時空管理局は４年前ソレスタルビーイングと戦い、多大な犠牲を払ってこれを壊滅させた。しかし、「Ｊ・Ｓ事件」終了後、彼らは再び蘇った。この物語は時空管理局とソレスタルビーイングの戦いを描くものである。

＊祝！　総合評価１０００ｐｔ越えに感想総数３００突破、そして文章・ストーリー評価合計４００ｐｔ到達！　このような駄作を読んで下さった皆様に感謝を！！

第1話　4年前の悪夢（前書き）

この小説は私の処女作です。よって、文が拙く誤字も多々あると思いますので、指摘してくださるとうれしいです。

それと、この小説は人が沢山死にます。メインキャラも死にます。更になかなかグロい表現もする予定なので、そういったものが嫌いな方、もしくは受け付けない人は見ない方がよろしいです。

それと、いくつか男女カップリングができる……かもしれないので、「～は俺の嫁！」という方も見ない方がよろしいかもしれません。

もし他にも注意した方がよろしい点がございましたら、遠慮なく言ってください。

では、開演です。

第1話　4年前の悪夢

新暦７１年・第３管理世界、第６管理世界、第８８管理外世界、第９観測指定世界にて４つのアンノウンと遭遇。アンノウンは魔法にもレーダーにも引っかからず、突然襲ってきた為、対応した部隊に大きな犠牲が出る。この時念話が使えなかったことが判明。さらにアンノウンは殺傷設定の魔法を使用。

新暦７１年・４つのアンノウンをそれぞれ「剣士」「三つ目」「羽付き」「デカブツ」と命名。これらは「ガンダム」と「ソレスタルビーイング」という文字を体に刻んでおり、外見も似ているため関係があると思われる。

新暦７１年・４つのアンノウンが「ガンダム」、「ソレスタルビーイング」が「ガンダム」が所属する組織であることが判明した。そして臨海第八空港、第６管理世界、第５４管理世界にて「ガンダム」出現。このとき「ガンダム」の母艦を確認。「箱付き」とする。空港を火事にしたのは実際はレリックでは無く「ガンダム」の可能性あり。第６管理世界では少数民族であるル・ルシエ族が協力するも、１７６人が戦死。第５４管理世界ではＡＡＡランク２人が「ガンダム」一機に殺害された。

新暦７１年・「剣士」がオーバーＳランクの魔導師であるレキス・ガバレートを殺害。これにより時空管理局は「ガンダム」に対し、緘口令を発令することに決定。オーバーＳランクを殺害した存在が民衆に恐怖を与えると予想されたからである。

新暦７１年・時空管理局による「ガンダム」掃討作戦が発動。しかし、新たな「ガンダム」が３機出現し失敗に終わる。この時の被

害は死者３００名以上、負傷者２０００名以上という史上類を見ない時空管理局側の惨敗であった。この中にはＡＡＡ、オーバーＳランクの４名も含む。この時点で時空管理局は「ガンダム」をオーバーＳランクに認定。「剣士」「三つ目」「羽付き」をＳランク、「デカブツ」をＳ＋とし、新たな「ガンダム」三機の内二機をＳ－、残り一機をＡＡＡ＋とした。また、新たなガンダムをそれぞれ「黒い銃」「橙の剣」「赤き翼」とする。

新暦７１年・「ガンダム」による被害が８つの次元世界消失、死者１０８億人以上、負傷者７２５億人以上に到達。これを受け時空管理局は「ガンダム」殲滅作戦である「フォーリン・エンジェルス」を発動させることを決定。実に時空管理局の約３０パーセントに相当する戦力を投入し、さらに反時空管理局勢力のなかでも最大と言われる「世界清浄」とも結託。時空管理局と「世界清浄」が結託したのはこれが最初で最後となる。

新暦７１年・「フォーリン・エンジェルス」発動。「ガンダム」以外の機体も確認され、「エックス」と命名。計７機いた「エックス」はＡＡＡランクに相当し、全て取り逃がすも「箱付き」を撃沈し「ガンダム」のほとんどを撃退させることに成功。しかし時空管理局は投入した戦力の八割を失い、さらにＡＡＡ、オーバーＳランクも１５名が戦死。「世界清浄」も指導者を失ったため自然消滅した。時空管理局はあまりにも犠牲者を出しすぎたこの作戦を極秘任務とし、隠蔽することを決定した。以後この事は関係者の間で「管理局の悪夢」「史上最大のテロ事件」「最低最悪最強のテロ集団」と語られる。「ガンダム」の目的がなんだったのかは不明。

第1話　4年前の悪夢（後書き）

どうですか？　あまりにもご都合主義やら誤字やらが多くて驚きましたか？　それはそれで裏をかいたようでうれしいです。もしここはこうした方がいいというような意見がございましたら、ぜひ言ってください。このような駄作を読んでくれた皆様に感謝を。

最後に、

ヒロインは　はやて　です。

第2話　予言（前書き）

ついに初の次話投稿です。拙い文章ですが、どうか許してください。

短いです。

第2話　予言

聖王のゆりかごに光が撃ち込まれる。その光はゆりかごを消滅させ、世界に平和と安寧を齎した。そう、ほんの少ししか続かない平和と安寧を。

「……え？」

聖王教会の騎士であるカリム・グラシアは目の前の光景を理解することができなかった。いや、理解したくなかったのだ。ゆりかごを消滅させ、時空管理局の崩壊を防ぎ、世界の秩序と平和が保たれることが確定し、ようやく平和になったと安堵をした、次の瞬間に自身の能力が発動したからである。

「ど、どうして発動しているの？　予言は外れてミッドチルダは守られたのに」

カリムは自身の能力である「予言者の著書」でミッドチルダと時空管理局が崩壊すると予言した。しかし機動六課の活躍で崩壊を阻止、さらに首謀者であるジェイル・スカリエッティをも捕縛することに成功した。つまり、予言は完璧に外れたのである。しかも、「予言者の著書」は1年に一度しか発動しない。まだ発動してから1年もたっていないのに発動するのは異常なことであった。だが、そ

の異常をも超えて、カリムは自身の背中に氷を入れられたかのような悪寒が走った。再び予言をしようとする「予言者の著書」から猛烈に嫌な予感がするのだ。それも「J・S事件」を予言した時を遥かに超えるほどの。

「……一体、何が起ころうというの？」

はっきりいって、「J・S事件」はここ百年ほどを振り返っても管理局にとって最悪の事件だった。それを超えるようなものとは一体何なのだろう？　カリムは想像しようとし、即座に放棄した。全く思いつかなかったからだ。

「……あ」

そうこうしているうちにどうやら能力の予言が終わりに近付いているようだ。一体何が書かれているのか……。カリムは不安に押し潰されそうな自身の心に活を入れ、恐る恐る予言を読み始めた。

「『死せる王のかの翼が法の大地の穹に消え去りし時、天上人が蘇る。天上人は目的を果たすために全てを敵にするも、その全てを退け愚直する。三つの無限と17の力、幾つもの箱と人、超人、そしてたった1つの法典だけを頼りに天上人は全てを破壊する。その先に……の……があると信じ。』……？　この部分が読めないわ。どうしてかしら？」

そう、読めないとおかしいのだ。カリムは「予言者の著書」の予言の真意が分からなくても、読めなかったことなど1度としてなかったからだ。

「？　まだ続いてる。『そして、天上人によって世界は……され、

人類に……が齎される。』……」

分からない。それがカリムの一見した感想だった。読めない部分があるというのも分からないが、更に分からないところがある。

『天上人』

この予言にある単語。ざっと推測するにおそらくは組織名か何かと思われるが、はっきりいって該当する組織の名が全く思いつかない。確かに次元世界には聖王教会ですら知らない組織があっても不思議ではない。不思議ではないが、世界を敵に回し、かつそれを退けるほどの力を持つ組織など、はっきりいって時空管理局級の組織が必要である。しかし、時空管理局級の組織など、現時点では存在しないのだ。それこそ4年前に消えた「世界清浄」ぐらいしか……。

「！　もしかして、『天上人』は『世界清浄』？」

……駄目だ。全然繋がらない。どこをどうしても「世界清浄」は「天上人」に繋がらない。これはもう無限書庫に預けるしか……ない、か。

「せっかく平和が訪れたというのに。人はそれほどまでに争うのがお好きなのでしょうか、聖王様？……？」

カリムはとりあえず無限書庫に連絡をしようとしたが、それは叶わなかった。何故なら、ある一通のメールが寄せられたからである。そのメールを目にしたカリムは、無限書庫への連絡を中止し、すぐさまそのメールの内容の真偽を確かめるため、自身の義弟へと連絡を繋げた。

そのメールには、こう書いてあった。

「八神はやて二等陸佐が本日未明アンノウンと遭遇、交戦。全身に

傷を負い、左手を喪失し、デバイスを大破させるも逃走に成功。現在集中治療室にて治療中」

第2話　予言（後書き）

……カリムの予言が再現できない。

こんな小説を楽しみにしていた人たちがいるとも思えませんが、なんとか次話を投稿できて嬉しいです。予言、ばればれですね。すいません。このような駄作を読んでくださった皆様に感謝を。

最後に。

ヒロインは　はやて　です。

第3話　かくて幕は上がり、悪夢は再来する（前書き）

三話目です。今回は初めて戦闘シーンを書きました。

拙い文章ですが、楽しんでくれると幸いです。

第3話　かくて幕は上がり、悪夢は再来する

「こちらスターズ０４。こちらスターズ０４。ロングアーチ、聞こえますか？」
『こちらロングアーチ。聞こえている。状況を報告してくれ』
「了解。私達は現在第２３緊急治療テントのところにいます。ゆりかごから脱出したのはいいんですが、ヴィータ副隊長となのは隊長が迅速に処置を行わないと危険だったため、もっとも近くにあったこのテントに移動しました」
『了解した。ところでそちらに部隊長は？』
「いえ、つい先ほどこの一帯を調査すると言って出かけたばかりで」
『そうか。どこら辺に行ったか分からないかな？　実は部隊長をロストしてしまって連絡がつかないんだ』
「そうですか。……確かここから南の方に行ったと思いますよ？」
『了解。ありがとう、そして御苦労さま』
「……ありがとうございます」
そう締め括ってロングアーチとの念話をきった。そして私はテントの中に入って行った。

「……」
「シャマルさん、なのはさんとヴィータ副隊長の容体は？」
「……ヴィータちゃんはギリギリでセーフだったわ。あと少し遅かったらアウトだったかもしれないけどね」
「……」
「問題はなのはちゃんよ。ブラスター３まで解放したからもう体が限界を通り越しているわ。暫くは絶対安静間違いなしね」
やっぱり。私は自分の推測が正しかったのが逆に悔しかった。ヴィータ副隊長は外見の傷の深さから見て危険だと感じたが、なのはさんの衰弱ぶりも異常だったのだ。まして子供の頃から負担を重ね

てきた体。はっきりいってなのはさんのほうが重体に見えた。それは長年付き合ってきた相棒も感じていて、

「なのはさん！　本当に大丈夫なんですか！？」

「大丈夫だよスバル。心配しないで。できるだけ早く復帰して皆の訓練を再開しなきゃいけないしね」

「元気になってほしいですけど、それと同時に訓練が始まるとなると、複雑です」

「もう、スバルったら。スバルだけ訓練の密度を増やすからね」

「なのはさん、後生です！死んでしまいますので、それだけはご勘弁を――！？」

……前言撤回。あそこにいるのは犬だ。断じて私のパートナーじゃない。絶対だ。

「こら、スバル！　なのはさんの迷惑になるでしょ。さっさと八神部隊長の手伝いに行くわよ」

「えぇー！　そんな！？」

「ほら、さっさと歩く」

「はーい」

「スバル」

「ハイ！」

おかしい。私となのはさんとでもの凄く対応が違う。

「ティアナを困らせないの。さっさと行くの」

「分かりました！　スターズ０３、スバル・ナカジマ。これより周辺の調査に行ってきます」

「行ってきます」

「お願いね」

「「ハイ！」」

……スバルにああいったけど、私も５０歩１００歩かも知れない。

「こちらライトニング０１、こちらライトニング０１。ロングアーチ、聞こえますか？」
『こちらロングアーチ。聞こえています。状況を報告してください』
「了解。現在私達はアースラに向かう途中で、幸いにも大きなけがなど無く、魔力を大量に消費しただけです」
『了解した。ところで八神部隊長を見なかったか？』
「いえ。私達は見ていませんが」
『そうですか。となると……』
「……あの、どうかしたんですか？　はやては」
『いや、じつはＡＭＦのせいか念話とレーダー、それに探知魔法も調子が悪くて、八神部隊長に連絡が取れないんだ』
「そうですか。あの、私達も探しますか？」
『いや、君たちも疲れているようだから帰還してくれ。何、戦争は終わったんだ。ゆっくり帰ってきてもいいからね』
「……了解しました」

……念話が通じなくて、レーダーも探知魔法も働かない、か。いや、そんなはずはない。だって彼らは４年前に倒したはずだから。
「フェイトさん？」

「フェイトさん！　大丈夫ですか？」
「あ、だ、大丈夫。ちょっと考え事をしていただけだから、気にしないで」
「……そうですか」
はぁー。キャロとエリオに心配かけちゃったな。もっとしっかりしないと……。

「！　フェ、フェイトさん!?その怪我、どうしたんですか!?」
「エリオ君？　どこにそんな怪我が……！　ほ、本当だ！　痛くないんですか、フェイトさん！」
「え？」
二人して私が怪我をしているといっているが、私は別段擦り傷はしているもののそんなに大騒ぎをするぐらいの傷は負ってないはずなんだけど。
「フェイトさん、その、えっと」
「左腕の付け根辺りです！」
エリオが言いずらそうにしているところにキャロが指摘してくれた。どうして言いずらそうなんだろう？
「……もしかして、この傷？」
「「はい！」」
「……この傷、か」
そっか、エリオとキャロには見せたことがなかったかな？
「これはね、４年前の傷跡だよ。二人とも」
「え」
「そうなんですか？」
そう、エリオとキャロが見た傷は、左腕を1周しているかのような傷だ。これを見れば確かに驚くだろう。
「？　でも、どうして治さないんですか」
「……ごめんエリオ。まだ話せないの」
「？　どうしてですか？」

「それはね」

私はこの傷を見るたび、彼らを、いや、彼を思い出す。あのシグナムをも圧倒したことがある、あの最悪にして最強だった蒼い剣士を。

「……秘密」

「「？？？」」

「いつかは話すから、それまでは我慢してくれると嬉しいな」

「「分かりました！」」

「うん。ありがとう、キャロ、エリオ」

そう、何時か話すのだ。私がやってしまった罪を。まだ精神的に幼い彼らには話せないけど、いつか、必ず……。

私はそう胸に決意したものの、心の奥底では彼の姿がちらりちらりと現れては消えていた。

「特に異常はないな、リイン？」

「はいです～」

はやてはスバルたちと別れて周辺の探索をしていた。確かに戦闘は終了したが、破壊してなくてまだ動けるガジェットがいるかもしれないからだ。本来ならばティアナとスバルに任せるべきなのだが、二人ともかなり疲労していたため、1番魔力も体力もあったはやてが請け負ったのだ。

「そないにしても……」

「ひどいです～」

はやてとリインは自分たちの眼下に広がる光景を見て、ついそういった。建物は破壊されていない所を探す方が難しく、瓦礫や穴などが普通に道路の真ん中に散乱しているからだ。いくら民間人を批難させたからと言って、ここに住むのは数カ月無理だと思う。少なくても自分だったらまだ自分の職場で寝た方がいいと思う。

「……はぁー、これもみんな、あたしのせいなんやろな」

「そ、そんなことないですよはやてちゃん！　はやてちゃんは一生懸命頑張ったじゃないですか」

「せやけど」

「だったら胸を張ってください、はやてちゃん。しおらしいのははやてちゃんらしくないです～」

「……それもそうやな」

そう、逆に考えれば時空管理局の崩壊を防いだのだ。もう少し前向きに考えてもいいかとはやてが考えていると、頭の中に念話らしき雑音が入った。

「なんや、これ」

「念話、でしょうかはやてちゃん？」

この感覚はおそらく念話だと思うが、このような雑音は聞いたことが無かったので、二人ともこれが本当に念話なのか自信が無かった。

『――――』

「ん、なんや？　なんか言うとる、のか？」

「確かに聞こえるです～」
『こ――ロングアーザザザザ――――聞こえ―すか　　ょう、聞こえます―八神部隊ザ――――』
「ロングアーチからやな」
「そうみたいですけど、どうしてこんなに聞こえないんでしょう？」
私も分からへん、と言おうとしたが、念話がよく聞こえるようになったので、聞く方に神経を集中した。
『こちらロングアザザー――部隊長聞こえザザザザ』
「聞こえるとるよう、グリフィス君」
「なんとか聞き取れるぐらいですけど」
『やっと通じ――――隊長、周辺に何かありザザザおそらくそれがこの念話を防害しているものザザザザザ』
「と言われてもな～」
「……特に何もなかったですよ～」
『そうですザザー――――は、隊長のとこ　　レーダーがきかザザザー――――　　探知魔法も通じザー』
「「？」」
はやてとリインは更にひどくなった念話が何を言っているのか、全然聞き取れなかった。
「……リイン？」
「……聞こえません～」
早くも聞こえなくなった。どうしようかと思案していると、
『こちらロングアーチ！　聞こえる、八神部隊長!?』
「おわ！　なんやシャーリー、そんな大声出して。心臓止まるかと思ったやないか」
「びっくりしたです～。ところでグリフィスさんは？」
『そんなことザザザ――――ら、早く　　離脱を！　急いでザザザ―い。奴らガギギギ――――「ガ――ム」が来る前ザに！』
「「ガムが来る前に（ですか～）？」」

正直言って、全く聞こえない。
『いいですザザザ――ぐ逃げガガガガガガガガッブッ』
「「？」」
「……」
「……」
「なんやったんや、一体？」
「分からないです～」
「ガムが来る前に逃げろゆうても、なぁ～」
「どうすればいいんでしょう、はやてちゃん？」
「うちに聞かれても困るなー」
はやてとリインは念話のノイズがひどすぎて、全く聞き取れなかった。そして何を伝えようとしたのかをリインとその場で話し合ってしまった。そう、そこに蒼い流星が迫ってきているのにも、全く気付かずに……。

「八神部隊長？　八神部隊長！？　聞こえますか？」
「シャーリー、一体どうしたのさ、そんなに慌てて。何があったんだい？」
「……」
「……シャーリー、君が言ってた「ガー」

「シグナムさんとフェイトさんに連絡して！　早く！」
「シャーリー！」
「！？」
「一体どうしたのさ、君らしくない。もっと落ち着いて」
「落ち着いていられないわ！」
「どうしてだい？」
「それは……！」
「それは？……」
「……言えない、言えないけど」
「？」
「早くしないと八神部隊長が」
「八神部隊長が？」
「殺されてしまうのよ！」
「「「な！？」」」
「はあ、はあ」
「……」
「なんなんや、あんた？」
「……」

「リイン！」
（リインにも分かりません！　ベルカ、ミッド、そのどちらでも無く、魔法陣を展開しないで魔法のようなものを使用して、あまつさえ魔法無しで空を飛ぶ魔導師なんて存在するはずが）
「ちゅうことは、あれはゴーレムやガーゴイルの１種なんか？」
（それも違います～！あんなに高度な機械でできたゴーレムとかは存在しません！それに、いくらゴーレムでも魔力は感じるはずですが、目の前のモノからは殆ど感じられないです～）
「じゃあ一体なんなんや、あれ」
（分かりません～～～）

はやては困惑していた。リインと話をしていたら急に目の前に『これ』が現れたのだ。正直リインが気がつかなかったら真っ二つにされていたかもしれない。
「殺傷設定の魔法に器物破損、そして公務執行妨害」
「……」
「言い逃れはできへんよ」
「……」
「なんか喋らんかい！？」
（はやてちゃん！）
（何やリイン）
（あれの後ろを！）
（んな！？）
はやてが見た先、つまり『これ』の後ろだが、そこには瓦礫のほかにもう１つのオブジェが加わっていた。
それは、

死　体　の　山

（リイン！　見るな！　見たらあかっ！）

はやてがリインに意識を少し向けたその瞬間、目の前の『これ』は右手の半壊した剣で斬りかかってきた。はやてはその動作に気づき急いでシールドを張ろうとするも
（あかん！　間に合わへん！）
後一瞬早ければ防げたはずの一撃は、

ガキィィィン

間一髪シュベルトクロイツにより何とか防げた、かに見えた。しかし、
（お、押される！？　なんやこの力は！？）
はやては相手の強すぎる力に早くも体が悲鳴を上げていた。防いだと思った次の瞬間にはシュベルトクロイツの半分近くが削り取られ、更に数十メートルも押されてしまった。魔法を詠唱したいが、そんな余裕などどこにも無い。そう、早くも絶体絶命のピンチに追い込まれたのだ。
「……！」
「くあっ！」
だが、『これ』は片方が紅く、片方が蒼碧色の目をしていて、その蒼碧色の目が光ったと認識した瞬間、地面へと押仕込まれていた。
（なん、やと！？）
はやては『これ』に驚愕した。外見からだがおそらく、１度大破した後、ろくに修理すらできなかったであろうはずのものが、これほどのパワーを持っていることにだ。
「……」
「ふ、ん……がは！」

ガン！ドゴン！

地面すれすれまで押され、なんとか態勢を直そうと力を入れ直し

たと同時に『これ』ははやての鳩尾を蹴った。その威力たるや、数メートル先にあった地面に少しめり込んでしまうほどである。そんな蹴りを受けたはやてはいくらバリアジャケットが硬くても衝撃までは完全に受け流せず、頭の中が痛みでいっぱいになった。

「～～～～！」

「……」

『これ』はその隙を逃す気は無いらしく、蒼碧色の粒子をまき散らしながらこちらに向かってきている。迎撃をしようとするも、痛みが魔法の構築を邪魔し、上手くできない。ほんの1，2秒程の差ではあったが、その時間ははやてにとってはまさに生死を分ける時間であり、『これ』にとっても勝敗を決することが可能な時間であった。

そして、

「ブラッディ」

『刹那・F・セイエイ、目標を』

二つの影は一瞬だけすれ違い、

「ダガー！」

『駆逐する』

やがて、一つになった。

第3話　かくて幕は上がり、悪夢は再来する（後書き）

戦闘シーンは難しい。今回、初めてそのことを身に染みて感じました。しかし、早くも死亡フラグビンビンですね、ヒロインなのに。さすがははやてです。こんな駄作を読んでくださった皆様に感謝を。

最後に。

ヒロインは　はやて　です。

第４話　二つの蒼い流星（前書き）

今回は結構難産した作品です。どうしても戦闘シーンがうまく書けなかったもので。

もしアドバイスがあれば、いつでも言ってください。

では、開演です。

第４話　二つの蒼い流星

「八神部隊長はここら辺に来ているはず」
「ティア～」
「でも、姿も見えないし魔力も感じられないから行き違いになったのかしら」
「ティアったら～」
「そうだとしたら早速通信をザザザザ……使えそうにないわね。どうしてかしら？」
「ティア」
「～～～ああ、もう！何なのよバカスバル！」
「近くに微弱の魔力反応がある」
「！」
「それも、かなり弱っている。早く処置しないとこのままじゃ」
「行くわよスバル！」
「了解！」

ティアナはスバルに掴まり、スバルはウイング・ロードを展開させ自身の最高速度でもって微弱な魔力反応が有ったところへと急いだ。手遅れにならないようにと祈りながら。

数十秒後にはその現場が見えてきた。遠目でよく分からないが、どうやら一般人をゴーレムらしきものが襲っているようだ。ゴーレムは体のあちこちがボロボロで、とてもではないが今にも崩れ落ちそうだった。女性の方を見てみると、

「「！！」」

その女性は遠くて顔はよく分からない。しかし体のあちこちを目

の前のゴーレムの右手にある半壊したブレードで斬り裂かれたのか、全身血塗れとなりコンクリートの壁に背を預けていた。ティアナはこの状況から、今にも崩れそうなゴーレムを相手するよりも、女性に処置を施す方が大事であると判断し、念話でスバルにあのゴーレムの相手をしてほしいことを伝えようとするも、何故か念話が使えなかったため、仕方なく大声でこう伝えた。

「スバル！　そいつをやっちゃって！」
「ＯＫ！　ティアはその女性の傷の手当てをお願い！」
「分かったわ！」

そして二人は実に合理的で的確な判断を持って二手に別れた。そのゴーレムの危険性を理解しないで。

ティアナは急いでその女性の元へと駆けた。近づいてよく見るとその女性は時空管理局の制服を着ていた。近くに寄らなければ服の判別すらつかない程の出血にティアナは更なる危機感を抱き、その女性の元へ更に早くかけつけた。

「大丈夫ですか！　返事をしてください！」
「……」

「脈は……よかった。まだある」

どうやらこの女性は大量に血を流したことによるショック症状で気絶したのだろう。ティアナは少し安堵し、詳しく状況を把握しようとし、その女性の周りを見て……気付いた。

――その女性は体中に切り傷があり、全身を血塗れにしていた。

――その女性の左腕が別の場所に転がっていた。

――その女性の近くに血塗れの魔導書が転がっていた。

――その女性の近くに半分に折れた杖があった。

――その女性は

「そ、そんな」

――彼女もよく知っている

「八神、部隊長？」

――八神はやてだった。

スバルはティアナと別れた後、一直線にゴーレムのほうに向かい、全力で右ストレートを繰り出した。

しかし、その一撃はゴーレムに軽くかわされる。そして、ゴーレムが右手を振り上げ、

ゴウ！

一気に振り下ろした。空気が切り裂かれる音をスバルは聞き、同時にこのゴーレムの戦闘能力の高さに驚いた。このゴーレムは外見がボロボロで今にも停まりそうだが、よく見ると所々修理した跡があることに、スバルは今更ながら気付いた。

『……！』

「ッハ！」

しかし、それで怯むスバルではない。確かに予想外の戦闘能力に驚いたが、それがどうしたというのだ。スバルはいつも自分よりも遥かに強い相手と訓練しているのだ。たかがこの程度の強さに怯えるなど、有り得ない。

『……！？』

「カートリッジロードッ！」

ガコン！

相手が攻撃をかわされたことに驚愕している気配をスバルは感じた。その隙をつき、相手の剣の内側に入ると同時に、右腕のリボル

バーナックルにカートリッジをロードさせ、限界まで力を溜める。その全ては自身の魔法を敵に放つためである。

「リボルバーシュート！」

ガキィィィン！

当たった。そう、確かに当たったのだ。しかし。

「ッつうう！」

硬い。とてつもなく硬い。技を放ったスバルの方が痛くなるほどに。ガジェットですら簡単に貫くことができるはずのこの右手が痛くなるとは、あのゴーレムは一体どれほどの硬度なのか。いや、そもそも何でできているのだろう？　魔力は殆ど感じないため、相手の装甲は純粋な金属の硬度しかないはず。しかしスバルの右手を食らい、少し後ろに下がった以外は影響が見られないなど、信じられない程の硬度だ。あんなにボロボロなのに……。

スバルがゴーレムの装甲に驚いていると、ゴーレムはさらに信じられない事を行った。

「んな！」

飛んでいる。いや、どちらかというと浮いているのか？　ゴーレムは後ろの円錐のような形をしたものから蒼碧色の粒子を放出し始めたと同時に浮いたのだ。スバルがこれに驚いたのは無理からぬことである。何故なら、魔法を使わずに浮遊を行うなど、まして人型のゴーレムがそれを成すとは、常識から考えると有り得ない事であった。

『……目標を駆逐する』

すると、突然ゴーレムは急降下し、地面を滑るように飛翔し、スバルに向かってくる。その速度はフェイト隊長と比べると決して速いとは言えないが、それでもスバルの脅威となるには十分なものだった。

「マッハキャリバー！」
『ウイング・ロード』

それに対し、スバルは自身の移動魔法であるウイング・ロードを発動する。スバルは空を飛べないため、この魔法に頼るしかないのだ。

『ッ！？』
「ハアア！」

ゴーレムはこの魔法が発動された瞬間、わずかに速度を落とした。恐らく未知の魔法に警戒したのだろうが、スバルはこの瞬間に生まれたわずかな時間で態勢を立て直し、攻撃をするタイミングを合わせた。

（もらった！）
『このッ！』

スバルの拳は確かにゴーレムの動きに合っていた。だから当たることは覆しようのないものだった。そう、並みの相手ならば。

「えっ！？」

つまり、ゴーレムは並みの相手ではなかったということだ。スバルの攻撃をわずかに後ろへと下がることによりタイミングをずらし、更に空振りした為に態勢を崩したスバルに向け、後退しながら射撃を撃ってきた。しかし、スバルは空振りしたと同時に前面にシールドを張った。この対応の早さも訓練によって身につけさせられたものである。

「クウ！」
『硬いな』

ゴーレムはスバルのシールドを射撃では破れないと見ると、即座に接近してきた。先ほどとは違い、速度を微塵も落とさずに。対して、スバルも速度を上げ、真っ直ぐにゴーレムへと向かった。当然だ、スバルは近接戦闘にこそその真価を発揮するのだから。

「ハア！」

ガキン！

『ハア！』

ガキィィィン！

既に十合は打ち合ったであろうか。スバルもゴーレムも一歩も引かず、悪戯に空に蒼い軌跡を増やしていく。それはとても幻想的で神秘的なものだった。もし誰かがこの軌跡を見たら、間違い無く蒼い流星が流れていると答えたであろう。

「くそっ。マッハキャリバー！　あとどのくらい魔力残ってる？」

『残り３２％です、マスター。そろそろ限界です。撤退を推奨します』
「あいつを倒してからね」
『イエス、マスター』

『くそ、しぶといな』
『マイスター、そろそろ援軍が到着してしまいます。撤退を』
『了解した、エクシア』
『イエス、マイスター』

そろそろ十二合目に達しようかとするとき、ゴーレムの動きに変化が見られた。おそらく撤退をしようとしているのだろうが、そんなことはさせないとばかりにスバルはゴーレムへと疾走する。

『向こうは逃がす気はないらしいな』
『どうしますか、マイスター』
『あれを使う』
『……了解』

スバルは目の前のゴーレムが急に動きを遅くしたことに困惑した。しかし、このチャンスを逃せば逃げられるかもしれないという焦燥感に駆られ、率直にも愚直にも素直にもゴーレムへと駆けた。ゴーレムが放出している粒子に紅い粒子が混じっていることに気づかずに。

『機体各部に異常発生、ＧＮドライブの出力が７５％に低下。発動時間は恐らく３０秒です。気を付けてください。チャージ完了まで４……』
『分かった。いけるか！』
『問題ありません、マイスター。３……２……１……』

「トランザム！」
『ＴＲＡＮＳ－ＡＭ』

第４話　二つの蒼い流星（後書き）

ついに出ました、私の好きなトランザム。この小説において、トランザムというのは魔導師ランクが一つ上がるだけでなく、３倍の出力も得ることから、ほぼ最強の能力となります。しかし、トランザムした後は原作と同じように弱体化するので、諸刃の剣です。こんな駄作を最後まで読んでくださった皆様に感謝を。

最後に。

ヒロインは　はやて　です。

第5話　猜疑と疑問と葛藤と（前書き）

初の一日連続投稿。嬉しいです。
しかし、戦闘シーンは本当に難しい……。
ちなみに、デバイスは全て日本語で話させます。理由は私が英語を話せないからです。すいません。

では、開演です。

第5話　猜疑と疑問と葛藤と

「緊急事態だ！　今すぐこのポイントに部隊を送れ！　最優先にだ！」

ＸＶ級大型次元航行船「クラウディア」のブリッジにて矢継ぎ早に指示を出す人物がいた。彼の名はクロノ・ハラオウン、弱冠１４歳で執務官となった天才の一人だ。彼は大抵の物事には動じない。なぜなら彼はこの船の艦長であり、乗員している４３５名の命を背負っている身だからである。しかし、その彼が今動転している。ブリッジにいるクルー達はなにが起こったのか分からなかった。「ジェイル・スカリエッティ」を捕縛し、「聖王のゆりかご」も消滅した今、一体何が彼をそこまで動転させているのか。クルー達はおそらく先ほどの機動六課からの通信にあった「ガンダム」という単語が関係しているのだろうと推測した。何故なら、艦長がその単語を聞いた途端に冷静な様子から一転して、鬼気迫るような様子になったのだから。

「艦長！　通信です」
「どこからだ」
「陸士１０８部隊のゲンヤ・ナカジマ三等陸士からです」
「繋げ」

ブリッジにある無数のモニターの一つに通信がつながる。画面の向こう側にいる人物は苦虫を噛み潰したような顔で、クロノ・ハラオウン提督を睨んでいた。

「……」
「どうした？　何かあったのか」

ゲンヤ・ナカジマは沈黙していた。まるで何かを耐えるかのように。

「……報告だ。提督が指示された場所に部隊を派遣したところ、シグナム二等空尉が何者かと交戦しており、その交戦の余波でうちの部隊の2割近くが死亡」

「……」

「殆どはその何者かによる被害だが、その被害を出してしまったシグナム二等空尉をその場で拘束。現在治療しながらミッド中央刑務所に護送中だ」

「……」

「そして」

「……」

「――八神二等陸佐とスバル・ナカジマ二等陸士が重体で発見され、緊急措置として最も近くにあった第23救急テントに移送、現在も予断を許さない状況である、以上だ」

「……そうか」

「……」

「……で」

「……？」

「その何者かの交戦映像、もしくは画像はないのか？」

シン。

その瞬間、空気が凍ったのをブリッジのクルー達は感じた。艦長は報告を聞いた後、最も言ってはならない言葉を、最も言ってはならない相手に言った。そう、艦長は知っているはずなのだ。目の前の人物と、重体となった二人の局員の関係を。なのに……。

「……それをオレに言うのか」
「……」
「それをオレに言うのか、この若造！」
「報告を早くしろ。今ならまだその何者かを追跡できるかもしれない」
「黙れ！」
「……」
「お前は、何も思わないのか！　お前の幼馴染だろう、はやては！」
「……」
「それにな、スバルはオレの娘なんだよ！　なのになんで事件を終わらせた直後に死ぬ思いをしなきゃならないんだ！」
「もう一度だけ言う」
「……！」
「その何者かの交戦映像、もしくは画像はないのか？」

ブリッジのクルーは困惑していた。確かに艦長は動じない人ではある。しかし、友人の凶報を聞いて尚これほどまでにその何者かに――恐らく「ガンダム」――に執着するのは、動じる動じないの話では無く、おかしい。おかしすぎる。一体何なのだ、「ガンダム」とは？

「……一つ聞くが」
「何だ、簡潔に頼む。時間が無いのでな」
「お前はあれを……知っていたのか？」
「……」
「あれがどういったものなのか、知っていたのか？　ハラオウン提督！」
「……知っている」
「！」
「だからこそ、いまは一刻を争う事態なのだ。これ以上の被害を出

さないためにな」

ティアナは何が起こったか理解できなかった。

目の前にいる八神部隊長の容体もそうだが、それよりもさっき起きたことが信じられなかった。スバルは八神部隊長にこんなことをしたであろうゴーレムらしきものとほぼ互角に戦っていたが、それも敵の全身が紅くなるまでだった。どういう原理かは分からないが、紅くなった途端、途轍もなく速くなったのだ。気付いた時にはスバルは、

「……やめて」

――――四肢を切断され、

「……やめて」

――――今まさに止めを刺されようとしていた。

「やめてぇえ！」

ガアアァァン！

スバルは目の前で自分の命を刈り取るであろう剣が振り下ろされている光景を、半ば諦観して眺めていた。こうなった事態の原因は、やはり自身の力を過信し過ぎたが為に起こったのであろうか、と考えながら。ティアナが何か言っているが、それも全く耳に入らず、ただただ茫然と剣が振り下ろされるのを見つめていた。

（……やっぱり自分は、なのはさんみたいにはなれないのかな……）

そして、遂に剣がスバルの命を狩りと――――

ガアアァァン！

――――らなかった。スバルを殺すはずだったその剣は、別の剣によってスバルを殺すことを防がれた。そして、スバルを殺すはずだった剣を防いだその剣は、炎を纏いながら相手の剣をはじき返し、更に一撃二撃と敵に追撃を浴びせた。

「……シグナム副隊長？」

スバルはその剣に見覚えがあった。その剣の使い手は自分が所属する機動六課のライトニング隊の副隊長だからだ。全次元を探しても、この人と剣で勝負できる人など片手で数えるぐらいしかいない程の達人。近接戦闘だけなら間違い無く全次元中最強であるとさえ言える騎士の中の騎士。だが、

「……何故」

『……！？　こいつは確かあの時の』

「何故生きている、「剣士」！？　貴様は……貴様達は」

『厄介だな』

『マイスター！　「ＴＲＮＳ－ＡＭ」が終わり、機体性能が下がっている今、「烈火の将」と戦っても勝ち目がありません！　撤退を！』

「４年前に壊滅したはずではないのか！？」

バキィィィ！　ガン！　ガン！　ガン！

「それに、貴様は！」

ギィィイン！

『クウ！　まずい！』

ガァアアン！

「あの時、確かにハラオウンに討ち取られたはずだ！」

ギギギギギ！

『エクシア！』

『駄目です！　出力が上がりません！』

ガガガッギギギギ！

「なのに、何故今になって現れたのだ、「ガンダム」！　いや、「剣士」よ！」

――シグナム副隊長は明らかに目の前の存在に驚愕している。

４年前だとか「ガンダム」だとか「剣士」など、スバルが聞いたことすら無い単語が飛び交っている。しかし、シグナム副隊長は確かに目の前のゴーレム、いや「剣士」？　を知っている。それも、会話を聞く限り、かなり因縁がありそうだ。しかし、今のスバルにはその先を考えることができなかった。目の前が暗くなり、頭がボウッとなったからだ。スバルは意識を失う直前、確かにティアナの声を聞いた気がした。

ティアナは目の前で意識を失った相棒を八神部隊長の傍に運びながら、目の前で行われている戦闘に目を移した。紅い閃光が瞬いたと思った次の瞬間には桃色の光線が空を切り裂く。その光線の合間を縫うように動き、焔を引き連れながら真っ赤に燃えた剣が振り下ろされる。その剣を受け止めることができなかったのか、ゴーレムらしき何かは姿勢を崩しながら後退させられ、それを追うように烈火もまた前進する。そして、遠くから見ても重いことが分かるほどの剣戟を、視認することが不可能な速さで次々と炎は繰り出す。耐え切れなくなったのか、ゴーレムらしき何かは、今度は自らの意思で後退し、焔から距離をとろうとしたが、それを烈火が許すはずもなく、再び防戦一方になるゴーレムらしき何か。その戦闘は明らかに炎、つまりシグナム副隊長が有利だった。

「……それにしても、何なのかしら、あれ」

ティアナはその戦闘に目を囚われていたが、それでも八神部隊長とスバルの処置を怠りはしなかった。疑問は多々あるが、まずこれをしなくてはいけないと分かっているからだ。しかし、ティアナは回復魔法を使えないため、焼け石に水だった。

「こんなときにキャロがいてくれれば……」

回復魔法を使えるであろう同僚、いや仲間を思い出す。しかし、ここは既に戦場。贅沢なことは言ってられないとばかりに気を入れ直し、処置を再開しようとし、

「呼びましたか？」

不意に現れた仲間に驚愕し、作業が中断された。

「キャ、キャロ？　どうしてここに？」
「シャーリーさんから言われたんです。えっと、ここに来るように」
「シャーリーが？」

ティアナは通信も念話も使えないこの状況で、どうしてシャーリーがここに向かうように指示したのか非常に気になったが、すぐに頭を切り替え、目の前の事態を解決すべくキャロに指示を出した。

「キャロ。まず説明は後でするから、急いで回復魔法を！」
「分かりまし、て八神部隊長にスバルさん！？　一体どうしたんですか！？」
「だから、説明は後！　一刻を争う事態だから急いで！」
「りょ、了解しました！」

キャロは戸惑いながらも回復魔法を二人に行使する。すると、少しずつだが二人の顔色が良くなってきた。

「ところでキャロ。エリオとフェイトさんは？」
「フェイトさんは魔力が殆ど無かったので一度アースラにもどりました。エリオ君はあそこです」
「もしかして、あれ？」
「はい」

キャロが指差した所は、今シグナム副隊長とゴーレム？　が戦っているところである。よく見ると、所々で黄色い稲妻がその戦場に

光っていた。

「……大丈夫かしら？」

「……今は、信じるしかありません」

「……そうね」

キャロが心配そうに向こうを見ながら治療を行っていた。八神部隊長とスバルを倒し、シグナム副隊長と剣である程度渡り合えるものが相手では、確かに心配だろう。そんなことを頭の片隅で考えていると、いきなり魔法陣が目の前で展開した。形から見るに恐らく転移魔法だと思うが、一体誰が……。

「……君たち、無事かね！？」

「あなたたちは？」

「私達は第１０８陸士部隊のものだ。すまんが現状の説明をしてくれないか？」

（何故、何故生きている？　剣士！　貴様は確かにハラオウンが倒したはずなのに！　何故だ！）

自分でももう何度繰り返したか分からない程繰り返してる問いを、再び心中で問う。その合間にも戦闘は続いていたが、エリオが参戦してくれたおかげで随分と余裕ができた。その余裕の合間に再び己の心の中で問う。何故生きているのか、と。

（ハラオウンは確かに致命傷を与えたはずだ。それは間違いない。なのに、どうして貴様はここに居る？）

自身の心が荒れているのが分かる。しかし、それを鎮めることができない。いや、鎮めようとすらしていない。今はただ、目の前の敵に対する疑問を、剣戟によって敵に返すのみで心が一杯だった。

（何故、何故、何故だ）

しかし、疑問は返しても返しても湧いてくる。まるで涸れることを知らないように。それが腹ただしく、また剣を敵に打ち込む。暫くそれが続いていくと、敵がついに決定的な隙を見せた。そして、その隙を見逃すようなシグナムでは無かった。

（いや、今はそんなことはどうでもいい。今度こそこいつを討つのだ、私よ！　こいつに殺された仲間の為にもな！）

「ッハアアア！」

シグナムは疑問を捨て、自らの剣に意識を集中させる。そして、「剣士」の右腕を上段から一太刀で切り落とした。見たところ左腕は欠損しているらしく、これで「剣士」の攻撃手段はほぼ無いに等しい。

「エリオ！」

「はい！　ストラーダ、カートリッジロード！」

『イエス、マスター』

ガコン！

そして、「剣士」の死角からエリオがストラーダを加速させ、一気に突っ込む。「剣士」は一拍遅れてそれに気付き、急ぎ回避しようにも、もう間に合わない。

「いけ！　エリオ！」

勝った！　この瞬間、確かに私は勝利を確信した。それほどまでにタイミングが完璧だったからだ。エリオの攻撃は恐らく「剣士」に致命的なダメージを与えるだろう。例え倒せなかったとしても、次は私が止めを刺せばいいのだから。

――私はこの時完全に失念していた。そう、「剣士」が生きているのならば、他の「ガンダム」も生きているかもしれないということを完全に失念していたのだ。そして、

「紫電一ッ何！？」

エリオは「剣士」に攻撃を与えられなかった。何故なら、第三者によって妨害されたからだ。エリオと「剣士」の間に割り込むように撃たれた桃色の極光。その攻撃はスターズ隊の隊長である高町なのはの攻撃をエリオに連想させた。

「な！」

「なん……だと」

――その第三者は「剣士」にどことなく似ていた。しかし、その体躯は「剣士」と比べて二周りは大きい。

――シグナムはその第三者を見て、ある「ガンダム」の一機を連想した。その戦闘スタイルの類似、そして慈悲の無さから「管理局の白い悪魔」と言われた高町なのはの異名を取り、「ソレスタルビーイングの白い悪魔」と言われ、恐れられた「ガンダム」を。

「デ、「デカブツ」だと！？」

『こちらセラヴィー、目標を確認した。これより任務を続行する』

第5話　猜疑と疑問と葛藤と（後書き）

ちなみに、刹那とエクシアの会話等はシグナム達には聞こえていません。しかし、トランザムをするときだけは肉声で言わなければならないので、シグナム達にも聞こえます。分かりづらくてすいません。

しかし、ついに登場しました、ティエリアが！　私は彼が好きなので、ようやく出せて嬉しかったです。

今一番願うことは、文才が欲しい、です。こんな駄作を最後まで読んでくださった皆様に感謝を。

最後に。

ヒロインは　はやて　です。

第6話　守護騎士の将（前書き）

ここ最近なにかと忙しく、パソコンを触れない日々が続いております。なので、ストックしてあったものを（作者は常に3～5話を見直しの為にストックしています）投稿します。見直しがあまりできなかった作品ですが、ご了承してください。

では、開演です。

第6話　守護騎士の将

『久しいな、刹那・F・セイエイ』
『ティエリアか？』
『そうだ』
『その「ガンダム」は』
『新型の「ガンダム」の一機、セラヴィーだ。そして、世界を変革させる為の力でもある。もちろん君の機体もある』
『……オレは、エクシアからは降りない』
『……マイスター』
『安心しろ。新型と言っても元の「ガンダム」のデータにアップデータをさせるだけだから、エクシアの人格も消去されない。このセラヴィーもヴァーチェのままだ』
『イエス、マイスター。久しぶりです、マイスター刹那・F・セイエイ、エクシア』
『……確かにヴァーチェです、マイスター』
『……相変わらず貴方はマイスター刹那・F・セイエイ以外に心を開きませんね。挨拶も普通に無視ですか』
『私はマイスター以外何もいらない。マイスターが一番私を愛してくれていることを知っているから』
『どうやら君たちの関係は変わっていないようだな。安心したよ、刹那・F・セイエイ』
『当たり前だ。エクシアがいるからオレがいる。オレ達が「ガンダム」だ！』
『マイスター！』
『……さて、世間話はここまでにしよう。まずは君をここから脱出させる。その為にもあの厄介そうな魔導師を退ける必要があるな』
『あれは「烈火の将」シグナムだ。４年前にオレ達と戦ったオーバ

ーSランクの生き残りの一人だ』
『そうか。ならばここで退場して貰おう。私達の計画の為にも』

「デカブツ……だと」

新たに現れた「ガンダム」。そのシルエットと先程の攻撃から推測するに、恐らくは「デカブツ」の後継機だと思われるが、シグナムはその事実を認めたくなかった。後継機、つまり新型として生まれ変わったということは、間違いなく4年前の復讐をするためだろう。しかし、もしそれが事実なら、強化された新型のガンダムと時空管理局が戦うことになり、再びあの悪夢が再臨してしまう。いや、4年前よりも遥かにひどくなって。そんなことになったら、一体どれほどの人々が犠牲になることか。

（そんなことは、絶対にさせん！）

そう決意した時、いきなり「デカブツ」が砲撃を此方に撃ってきた。その攻撃を紙一重の差でよけ、お返しとばかりに接近して剣を撃ち込む。しかし、

『GNフィールド、展開』

「デカブツ」は自身の周りに球体の形をしたフィールドを張り、これを防ぐ。その攻防の合間にエリオが接近し槍を突き出すも、そのフィールドに阻まれて攻撃が届かない。そして攻撃を防がれたことによってエリオにできた隙を「デカブツ」はその手に持った巨大な砲で撃ち抜こうとするも、

「レヴァンティン！」
『カートリッジロード』
「飛竜一閃！」

私がそれを阻止する。しかし、カートリッジロードをした飛竜一閃を受けても「デカブツ」はビクともしなかった。

（相変わらず高町みたいな砲撃と防御力だな！？）

４年前と変わらない、いや、更に強化されている「デカブツ」の性能に戦慄が奔る。

「エリオ！　お前は撤退しろ！」
「シグナムさん！？」
「今のお前では足手まといにしかならん！　これはライトニング隊の副隊長としての命令だ！」
「……！　りょ、了解！」

悔しそうな顔をしながらエリオはこの戦闘から離脱していく。そうだ、それでいい。こいつらは４年前に倒しきれなかった私達が倒さなければならない相手だ。それに、この戦闘で起きる責任は全て私が背負わなければならない。まだ子どもでしかないこいつらに背

負わせることは断じてできない。

「いくぞ！　「デカブツ」！」

『刹那、はっきり言おう。援軍らしき部隊を確認した。残り2分で此方に到着する』

『ああ、こちらでも確認した』

『もう猶予は無い。どんな手を使ってでもこの場から急ぎ撤退する』

『了解』

『……このような真似は万死に値するが』

『……』

『任務を成功させるためだ。いいな、セラヴィー？』

『イエス、マイスター』

「一体、あれは何なんでしょうね？」
「……私達にも分かりません。ただ、八神部隊長とスバルをあんなふうにしたのは、間違いなく彼らです」
「……殺傷魔法を使う、魔力を使わないゴーレム、か」

私達は八神部隊長とスバルを転送魔法で送り（キャロも念のため一緒に送った）、目の前で行われている戦闘を見ていた。助太刀したいのだが、空で行われている戦闘に陸士ができることは殆ど無い。よって、ただ地上から戦闘を観戦するしかない。それに歯噛みをしていると

「……おい」
「……え」
「嘘だろ、おい！？」

いきなり、そう、いきなりだ。新たに現れたゴーレムが此方に砲を向けたのは。狙いは考えなくても分かる。此方だ。

「どうして！？」
「……クッ！　急いで防御魔法を構築しろ！　全力でだ！」
「駄目です！？　間に合いません！」
「急げ！　相手の魔法は殺傷魔法だぞ！　喰らったら気絶じゃなくて、死ぬんだぞ！」
「イヤ！　死にたくないー！？」
「……ック！」

たったそれだけの動作で此方はパニックに陥った。私も全力でシ

ールドを構築するも、防げる自身が殆ど無かった。新たに現れたゴーレムの砲撃はなのはさんの砲撃に勝るとも劣らないからだ。

そして

『フェイスバースト展開。ＧＮ粒子圧縮完了』

無情にも砲撃は

『粒子解放、ツインバスターキャノン、発射』

発射された。

「……そ、そんな」

エリオは目の前の光景が何なのか、理解できなかった。

黒く焦げた人だった物。

黒い山を形成する人間であった物。

そして、体を黒くさせている、ニンゲン……。

「ッウオエェ！」

エリオは今が戦闘中だということも忘れ、胃の中の物を吐き出した。血や怪我などは見慣れていたが、人の死（それも大量の）に対面したのは、これが初めてであった。人間を燃やした焦げ臭い匂い、目の前に広がる地獄絵図、阿鼻叫喚している局員達。その全てがエリオが体験したことの無いものであった。

（ここはいやだ！　逃げたいにげたいニゲタイ……）

心の中でそう叫ぶが、意思に反し、足は一歩も動かなかった。どうして、と思ったが、よく見ると自分の膝が震えていることに気付いた。それでもなんとか動かそうとしたが、今度は腰が抜けてしまい、立てなくなってしまった。半ば放心しながら周りの状況を確認しようとし、

「いてえよ！　いてえんだよ！　オレの、オレの足が！」
「落ち着け！　治療をすればまだ助かる見込みが……！」
「ねえ、どうして黒くなってるの？　どうして、どうして？」
「うそ、でしょ？　だってあなた、三日後に結婚するって……」
「……あ……あ、あああああああああ！？」
「い、イヤアアア！？」

後悔した。自分の足の震えは治まるどころか逆にひどくなっていた。

（……何が、起きたんだ？）

エリオは、無駄だと知りつつも、現実から目を逸らそうとし、

（……あれは）

自分の視界に入ってきた者を見て、

（シグナム、さん？）

現実に引き戻された。

「……あ、ああ、あああああ」

――そこには、ボロボロになりながらも決して倒れようとはしない、真の騎士の姿があった。

シグナムは「デカブツ」の背中が顔となり、手に持っていた砲を肩の砲に合体させ、陸士部隊がいるであろう方角にそれを向けた瞬間、「デカブツ」が何をしようとしているのかを理解した。そして、このままでは陸士部隊が全滅するであろうことも。高町なのはと並ぶ砲撃（加え殺傷設定）を正面から受け止めるには、少なく見積も

ってもＡＡＡランク以上でなければ受け止めることはできない。それに、あそこにはティアナやスバルもいるはず。ならば、この身がなすことはただ一つ！

（砲撃を攻撃で相殺、もしくは受け止める！）

そして、シグナムが陸士部隊と「デカブツ」の間に入った時、「デカブツ」から桃色の極光が放たれた。

「レヴァンティン！　ボーゲンフォルム！」

『ボーゲンフォルム！』

「駆けよ、隼！」

『シュツルムファルケン！』

それに対し、シグナムもまた唯一の射撃魔法であるシュツルムファルケンを放つ。しかし、発射までに時間が無く、あまり魔力を込めれなかったため、わずかに威力を落としただけに留まった。

（駄目か！　ならばこの身で受け止めるのみ！）

そして、残りの魔力全てを込めたシールドを目の前に展開する。

しかし、

バキバキバキバキ！

持ち堪えられたのはほんの１，２秒程度だった。それはシグナム自身の魔力が残り少なかったのもあるが、「デカブツ」が削られた

威力を上回る程の力を砲撃に追加したのが一番の原因である。そして、シグナムはその身を砲撃の前に晒し、飲み込まれていった。しかし、それほどの攻撃を喰らってもなお、シグナムは決して倒れようとはしなかった。後ろに守るべき者達がいることを知っていたからである。

「……」

『……ガ……ガガ……マス……ガガガガ』

シグナムは意識を失い、レヴァンティンもまた大破していた。しかし、それでも、彼女は倒れなかった。

『……さすがは「烈火の将」ということか。その姿には敬意すら覚える。だが、』

そして、凶砲は再び砲撃を放とうとし、

『ここで貴方を生かせば、計画が狂ってしまうかもしれない。……さようならだ、誇り高き騎士よ』

『！　マイスター！　敵の増援と思しき反応が！』

『何!?　クッ！　ここは引くか。　刹那！』

『了解。これよりこの宙域より離脱する。エクシア！』

『イエス、マイスター。これより撤退を開始します』

放たれなかった。

『トレミー、こちらセラヴィー。無事刹那とエクシアを保護した』
『……そう。久しぶりね、刹那』
『スメラギ・李・ノリエガか？』
『ええ、そうよ。再会を祝して一杯といきたいけど、そんな状況じゃないみたいね』
『ええ、そうです。できればＧＮ転送をしてほしいのですが』
『……ＯＫ。じゃ、その指定されたポイントに準備しておくから、後５分後に来るように』
『了解』
『了解』

「「シグナムさん！」」

僕は急いで彼女の元へと走った。もう腰が砕けていたことや足が震えていたことすら忘れて。隣りから声が聞こえて振り向いてみると、ティアナさんも僕と同じ方向に走っていた。恐らくシグナムさ

んの攻撃と防御のおかげで弱まった砲撃は、ティアナさんのシールドでも防げたみたいだ。そこに安堵したのも束の間、

「こ、これは」
「ひどい……」

シグナムさんは本当に満身創痍だった。体の至る所が炭化し、無事なところを探す方が難しいほど全身がボロボロだった。レヴァンティンも主人と同じくらいボロボロで、恐らく一度オーバーホールしなければいけないほどに傷ついていた。

「シグナムさん……」

「……なんだ？　エリ……オ？」

「！？」

完全に気を失っていると思っていたシグナムさんから返事が来て、僕は驚愕した。

「い、今は喋らないでください！　き、傷に、触ります！」
「そうですよシグナム副隊長！　いまは安静にしないと」
「いや、お前……たち。　離れ……ろ」
「「え？」」
「もうす……来るは……これも、ま……責任だ……」
「「？」」

シグナムさんが何を言いたいのかはよく分からなかったが、とりあえず病院に運ぼうとし、

「少々お待ちを」

それを邪魔された。

「あ、あなたは一体!?」

「私は時空管理局最高評議会所属特務部隊、チーム「ケルベロス」のリーダーをしております、クレス＝Hといいます」

「はぁ。それで、用件は何でしょうか」

「はい。実はそこに居られるシグナム二等空尉のことなのですが」

「？」

「実は、拘束しなければならないんですよ」

「「……」」

「……」

「「えぇ～～～!?」」

「うわっと。びっくりしますから、そんなリアクションはやめてください。心臓に悪いです」

第6話　守護騎士の将（後書き）

まさかの初・オリキャラを登場させました！　ちょっとしか出せませんでしたが、初オリキャラを出せたことはちょっと嬉しいです。今回は短めでしたが、次回からはもう少し長くなるはずなので期待して（くれる人がいたら）ください。ちなみに、この作品のオリキャラはあくまでわき役です。こんな駄作を最後まで読んでくださった皆様に感謝を。

最後に。

ヒロインは　はやて　です。

第7話　されど世界には理不尽が罷り通る（前書き）

前話でオリキャラを出しましたが、あまり活躍はしません。なので、もしオリキャラが活躍する話を望んでいる方はあまり見ない方がいい……かもしれません。

では、開演です。

第7話　されど世界には理不尽が罷り通る

「やれやれ、今日は徹夜かな？」

クレス＝Hはそう言いつつもキーボードを叩く指を止めない。そのキーボードの隣には山のように積み重なった書類があった。その書類の全ては今日起こってしまったことについて書かれていた。その一枚には、

「『ガンダム』か……」

そう書かれていた。そう、管理局が多大な犠牲を払って壊滅させたはずの、４年前の亡霊にして最悪のテロ集団であった「ソレスタルビーイング」に所属していたロストロギア。その目的は４年経った今も不明のままである。

「なんで今になって現れたんだろうな～」

「分かりません」

「……」

クレスの独り言に反応したのは、チーム「ケルベロス」の副隊長であるオルト＝Rという女性で、何も喋らなかったのがヒュドラ＝Tという少女である。この二人とクレスを併せた三人がチーム「ケルベロス」の構成員である。その仕事の殆どは最高評議会から回される裏の任務であり、決して日の目を浴びることが無い部隊である。

「そもそも「ガンダム」は何をしたいんだか……。それさえ分かれば対策の練りようもあるのにな」

「不明です」

「……」

彼らがここに集まったのは、偶然でも何でもない。ただ任務を遂行するために集まっているのだ。そう、「ガンダム」及び「ソレスタルビーイング」に関するあらゆる情報を機密にするという任務を。その為ならばいかなる手段を講じてもよいとされている。

「上層部のお偉方たちはそんなに隠したいのかねぇ、あの戦いを」
「そうでしょう。なにしろ犠牲が多すぎます。あれが公表されれば上層部は総替えされてしまうでしょうし」
「……それでも、これはやりすぎ」

そう、如何なる手段を講じてもよいのだ。例えオーバーSランクの魔導師を殺すことになっても。しかし、チーム「ケルベロス」の保有する戦力はクレスのAAランク、オルトのAランク、そしてヒュドラのAAA＋ランクなので、返り討ちに遭うのが関の山であるが。

「そうだよな～」
「そうですね。かの高名な「烈火の将」シグナムを拘束し、ミッドチルダ中央刑務所に護送しろだなんて、いくらなんでも横暴過ぎます」
「……機動六課が反発する」

今回の任務は「ガンダム」と遭遇した人物を拘束することだったが、如何せん遭遇した人間が多すぎた。上層部がもしこの全てを拘束したら、間違いなくミッドの地上の治安が守れなくなるほどである。よって、一人だけ拘束することによって「公にしたらこうするぞ」という脅しをかけようとしたのだ。そして、その一人に名前が広まっていて「この人でも拘束するぞ」という脅しの効果が期待で

きる人物が選ばれた。それがシグナムである。

「おいおい、冗談にならない冗談はやめてくれ。あんな異常極まる部隊が反発したら、それこそ管理局の終焉じゃないか」

「確かに。あのような怪物ばかり揃えた化け物部隊が反乱を起こせば、管理局は近いうちに滅びるでしょう」

「……ごめん」

しかし、ここで上層部が想定していなかった事態が起きた。シグナム二等空尉に対する処遇に対し、機動六課が反発したことである。

「まあ、気持ちは分かるがね……。というか、オレ達の任務の護送ってぶっちゃけシグナム二等空尉が暴れた場合、その運ぶ奴らを護れってことだろ？　なんてえ無理難題だ。よし、ボイコットを始める。総員ボイコット用意」

「バカをやってないで任務に全力を尽くしてください、隊長。そんなことではチーム「ケルベロス」の存在意義が問われます。ただでさえ最高評議会が『Ｊ・Ｓ事件』のどさくさに紛れて暗殺されてしまったせいで、最高評議会お抱えの暗部の組織が存亡の危機に陥っているのですから。それは私達も例外じゃないんですよ？」

「……解散するのは嫌」

機動六課、正式名称古代遺物管理部機動六課。レリック問題専門部隊として設立されたが、その設立された真の理由は、聖王教会のカリム・グラシアの希少技能「予言者の著書」による預言で「時空管理局の壊滅」を示唆する文章が紡がれたことを受け、それを防ぐ、もしくは時間を稼がせるというものである。しかし、そのために配属されている戦力は、もはや無敵を越えて異常である。なにせオーバーＳランク保持者が４人にＡランク以上も４人（新人がランク昇進試験を受ければ恐らく８人）配属されているのだ。はっきりいっ

てこの部隊だけで地上本部と戦えるのでは？　とすら冗談抜きに言える。

「……ヒュドラ。お前、なんていいＹ」

「なんていい子なんでしょうか、ヒュドラは。あそこにいるゴキブリにも劣る物体とは比べることすらおこがましいです」

「……照れちゃう」（ポッ）

そんな部隊が反発したのだ。今頃上層部の方々は「Ｊ・Ｓ事件」の後始末に加え、機動六課の対応にも追われることになり、職場は戦場になっているだろう。可哀想だとは微塵も思わないが。

「……オレ、この部隊の隊長だよね？　そうだよね？　なのにこの仕打ちって。君たちは隊長を何だと思っているんだ！」

「……ゴキブリにも劣る空気を吸うことさえ許してはいけない謎の物体Ｘ」

「……バカ」

そんな機動六課だが、彼らもまた上層部と同じくらいに忙しい。いや、上層部よりも状況は悪い。なぜなら、部隊長であった八神はやて二等陸佐、現在護送（運んでいる人の）されている副隊長のシグナム二等空尉、そして主要部隊の隊員であるスバル・ナカジマ二等陸士がいずれも現場に復帰できない状況になっているからである。特に部隊長であり、また、現在確認されている魔導師の中で最高の魔導師ランクであるＳＳ＋ランクを保持している八神はやて二等陸佐の不在は、機動六課にとってはあまりにも痛すぎる損害であった。恐らく状況が判明するまではおとなしくしていることだろう。

「てめえら、表に出やがれ！　どっちが上か、その身に教え込ませてやるぜ！　実技も込めてな！　グワッハッハッハそげぶ！？」

「バカですね。ヒュドラの強さを忘れたのですか？　やはり貴方は謎の物体Ｘです」
「……弱い」

そして、チーム「ケルベロス」もまた安易に動けない状況に囚われていた。最高評議会という親元が断たれた今、「ケルベロス」はいまや処遇を待つだけの駄犬になってしまったのである。恐らく最高評議会の席には伝説の三提督が置かれ、最高評議会に抱えられていた暗部の組織の処遇を決めるだろう。それがどうなるかは分からないが、少なくても「ケルベロス」にとっていいことではないだろう。最悪、無かったことにされるかもしれない。そうなればここにいる三人は、管理局の手によって消されるだろう。そうさせないためにも点数稼ぎとしてこの任務を受けたのだが。

「大体、なんでこんな面倒くさい任務を受けたんだよ？　バカなの？　死ぬのぉおおれの方が！？」
「まったく。これぐらいで死ぬとか死なないとか、少し大げさすぎですよ？　たかだか鳩尾にコークスクリューを１０発ほどお見舞いしてあげただけじゃないですか。それと、どこの誰がバカなんですか？　あなたしかバカはいないはずなのに」
「……オルト怖い」

もしこの任務が失敗に終われば、チーム「ケルベロス」は解散され、消されてしまうかもしれない。そんな事情を抱えてなおメンバーは何時も通りに振舞っていた。それがこのチームの在り方だとでも言うように。

「……まあ、冗談はこのぐらいにして、現実的な話をしようではないか。この任務を成功させた後についての、な」
「……私は、このチームから離れる気は毛頭ありません」

「……同じ」

実際、「J・S事件」のごたごたで暗部の何割かが解体された（もしくは消された）今、果たしてこの任務を成功させただけで生き残れるかどうかは賭けだった。

それでも。

そう、それでも。

彼らは自分たちが生き残れる可能性があるなら、それにしがみつこうとする。それが、今まで奪ってきた命に対する償いだと信じているから。

「……そっか。なら、この任務を終わらせたら、管理局を辞めて、どっかの世界で喫茶でも開いてのんびりまったりと行きますか？」

「そうですね、それもいいかもしれません。私達は命を奪いすぎました。その償いとして誰かの心を休ませる店を開くのもいいでしょう。もちろん貴方が主人で私が奥様、そしてヒュドラが私達の子供ですよね？」

「……うん」

だが、

「え！？　な、なんで！？」

「……私は貴方のことがずっと好きだったんですよ？　貴方は全く気付いてくれませんでしたが。それで、返事を貰えますか？」
「……鈍感」

世界は、

「……オレもずっとお前のことが好きだった。これからもずっとよろしくな、オルト？」
「！？　は、はい！　クレス！」
「……よかった」

いつも、

「よ～し！　じゃあ、あともうひと踏ん張りといきますか！　チーム「ケルベロス」の最後の晴れ舞台だ！　後悔を残さないように全力で戦え！」
「ええ！　そうですね！」
「……うん！」

こんなはずでは、

「いくぞ！」
「はい！」
「……むん！」

ないという、

「おらあああ！」
「はあああ！」
「……あああ！」

理不尽で、

『……ふん。あっそ。私にはもう関係ないわ。もうにいにいズも居ないからね。……さようなら。行きなさい、ファング！』

満ちている。

「……そうか。無事に着いたか……」
「はい、なんとか彼らが「ガンダム」を引きつけてくれたおかげで

無事、シグナム二等空尉をミッド中央刑務所まで護送することができました」

「そうか……して、彼らは」

「……チーム「ケルベロス」は本日を持ちまして、全員殉職なさいました」

「……分かった。もう下がっていいぞ」

「はい……」

クロノはその報告を聞いて安堵したが、その表情は苦渋に満ちていた。

「……また、犠牲者が出てしまったか。こんなことにならないよう、暗部の中でも最高と言われていた「ケルベロス」を使ったのにな……」

クロノは、「ケルベロス」がもしこの任務を成功させたら、転属だろうが退局だろうが、なんでも聞くつもりであった。それほどにリスキーな任務であったのだ、「ガンダム」と遭遇する任務というのは。クロノは「ソレスタルビーイング」がシグナムを狙うことを予想し、その護衛として「ケルベロス」を選んだ。ただ、そこには誤算があった。それは

「「ケルベロス」ですら相手にならない程の「ガンダム」か……」

「ガンダム」の力が予想よりも強力になっていることであった。

(恐らく「ガンダム」は4年前よりも強くなっている。どれだけ強くなっているかは分からないが、油断はしない方がいいだろう。もっとも、)

「油断が許されるような相手ではないがな……」

クロノはそう呟くと、不意に自分の妹であるフェイトを思い出した。自分よりも辛い思いを体験しているであろう妹のことを思うと、自分まで憂鬱な気分になってしまう。何故なら、４年前の事件を解決して一番喜んでいたのはフェイトだったからだ。「もう、誰も死なないんだよね？　よかった」といって笑顔を浮かべていた彼女の気持ちを、「ガンダム」が再び蘇ることで踏みにじったのだ。

「……「ガンダム」。うちの妹に辛い思いをさせたことを忘れるなよ。いつか、絶対に返してやるからな」

クロノがそう呟くと同時に、モニターの通信画面が開いた。

『やあ、クロノ。「ガンダム」がまた現れたって？』

「ああ、そうだフェレットもどき」

『だから僕はフェレットもどきじゃないって！　で、用件は？』

「聞かなくても分かるだろう？」

『「ガンダム」の調査、ねえ。はっきり言っとくけど、あまり期待しないでね？　４年前にもさんざん調べて、何も出てこなかったんだから』

「分かっている。どんな情報でもいい。何かが分かり次第、逐次報告してくれ。頼む」

『……分かったよ。君がそこまで言うのなら、僕も全力を持って調査に当たるからね』

「感謝する、ユーノ」

ヴィータとなのはは、今外で何が起こっているのか、全く分からなかった。ただ、ベットから目が覚め、周りの喧騒を眺めているに、何かが起こったのだということを、長年に渡って培ってきた経験によって察した。

「……なのは、一体何が起こってんだよ？」

「……私も分からないよ、ヴィータちゃん。でも、事件は解決したはずだよね？」

「ああ、そのはずだろ？　なのに、なんでこんなに騒がしいんだ？　さっぱり分かんねえぞ？」

「私も全然分かんないよ。！　そうだ！　看護師さん、一体何が起こったんですか？」

なのははそういうと一番近くにいた看護師に今の状況を説明してくれるように頼んだ。しかし、看護師も何が起こったのか分からないらしく、あまり要領を得なかった。

「……そうですか。すいません、呼び止めちゃって」

「いえ、いいんです。役に立てなくてすいません」

「いいっていいって。気にすんなよ」

「でも、」

「本当にありがとうございました」

「ああ、サンキューな」

「……はい」

看護師は何かを言いたそうだったが、忙しいらしく、何も言わずに職場に戻ろうとし、

「君！　今暇かね！？」
「は、はい！？」
「今暇なのかと聞いているんだ！」

上司らしき人物に呼び止められた。この上司らしき人物はよほど焦っているのか、なのはとヴィータに全く気付いていない。すると、その上司らしき人物は、こんなことを言った。

「暇だったら手伝ってくれ！　人手が足りないんだ！」
「で、でも、私。これから回覧しなきゃいけないんですけど」
「そんなことは後回しにしろ！　命がかかっているんだ！」
「命、ですか？」
「ああ、そうだ。どこのもんか分からんが、なんと殺傷魔法を使ったらしい」
「「えぇっ！？」」

上司のその言葉に、看護師だけでなく、その場にいたほぼ全員が驚いた。今時殺傷魔法を使う魔導師は絶無といっていいほど少なく、ましてこの「Ｊ・Ｓ事件」で殺傷魔法を使う魔導師、もしくはガジェットなどは確認されていなかったからだ。

「しかも、その殺傷魔法のせいで死人がでたらしい」
「ほ、ホントなんですか！？」
「ああ。しかも数十人死んだらしい」
「そ、そんな……」
「その数十人の中に入る寸前の患者がここに搬入されるから、手伝

ってほしいのだが……」
「分かりました！」
「助かる。で、ここに運ばれる患者だが」
「……」
「なんと、あの機動六課の部隊長をしている八神はやて二等陸佐らしい」
「……え」

ヴィータとなのはは、自分の耳を疑った。

「ど、どういうことだよ、それ！？」
「は、はやてちゃんが重傷って、どういうことですか！？」
「な、何だね、君たちは！？」
「私達は機動六課の高町なのは一等空尉とヴィータ三等空尉です！それよりも、はやてちゃんが重傷って、どういうことですか！？」
「そ、そうだよ！？　はやては、はやては無事なのかよ！？」
「お、落ち着いてください！　今は本当に一刻を争う事態なんです！」

上司らしき人物がそういうと、なのはとヴィータはようやく胸倉を掴んでいた手を離した。

「で、どういうことなんですか！」
「そうだ！　はやてに何があったんだよ！？」
「……それは、私達にも分かりません。八神はやて二等陸佐の他にも運ばれた人たちが多数いて、私達も混乱しているのです。ただ、」
「「ただ？」」
「……これをしでかした者に、心当たりが無い訳ではありません」
「え、それって」
「……だれがやったのか、分かるってこと、か？」

「……ええ、まあ。こんなことをする奴らは恐らく、彼ら以外にはいないでしょう」

そう言って、上司らしき人物はまるで遠くを見るようにし、重く、その口を開いた。

「……そう、彼らが、「ソレスタルビーイング」が。４年前時空管理局によって滅ぼされたはずの亡霊が蘇ったのでしょう」

「……」

「何だって!?　はやて部隊長が!?」

「ええ、そうです！　だから、どうしてシグナム副隊長が拘束されたのか、説明を!」

「今は「Ｊ・Ｓ事件」の報告をする暇が無いんです！　分かってください!」

「な！　資料はもうそちらに回しました！　回されていない？　それはそちらで確認してください！」

「……だから、喋れないんです。これは、第一級機密に相当することなので……」

「しかしだな……」

「おい！　この資料どこに送ればいいんだ！？」
「無限書庫に！」
「いや、第１０８陸士部隊だろ！？」
「何言っているんですか！？　それはここに……」
「なのは隊長とヴィータ副隊長は！？」
「まだ病院の治療が終わっていません！」
「くそ！　隊長格が四人も抜けるなんて……」
「愚痴ゆう前に手を動かす！」
「おいっ！　これは……」
「だから！　何度も言ってますが、……」

「……」

フェイトは阿鼻叫喚としているアースラのブリッジの様子を、心ここに在らずで眺めていた。今のフェイトの心を占めているのは、

（……「ガンダム」……）

このたった一つの単語だった。そう、４年前、確かに自分達で壊滅させたはずの、忌むべきテロリストにして、自身が犯してしまった罪の象徴。それが、何の因果か蘇り、さらに自分たちの仲間を傷つけた。フェイトはそのことを考える度に、ひどい罪悪感で押し潰されそうになった。そう、確かに壊滅させたはずだったのだ、自分の手で。なのに……。

（どうして、どうして生きているの？　貴方達は私達が壊滅させたはずなのに……。それに、）

そういってフェイトは、はやてを襲ったであろう「ガンダム」の映像を見た。そこには、ボロボロになった「剣士」の姿が映ってい

た。

（貴方は、私が、こ）

「っ！？」

フェイトはそう考えた瞬間、胃の中身が逆流しそうになった。それを懸命に防いでいると、近くに誰かが寄って来た気配を感じた。

「大丈夫ですか、フェイト隊長？」

「……ありがとう、シャーリー」

「……お気持ちは察します」

「……」

「ですが、今は、今だけは」

「分かってる、分かってるよ、シャーリー。安心して」

そう。隊長格及び副隊長格がフェイトしかいない今、実質この部隊の最高責任者であるフェイトまでが倒れたら、機動六課は機能しなくなってしまう。もしそんなことになったら、彼らに隙を与えることになるだろう。それだけは避けねばならないのだ。

「グリフィスとルキノは上層部の対応を中心に動いて！」

「「はい！」」

「シャーリーは機動六課に関する情報を整理して！」

「了解です！」

「皆。大変だけど、機動六課存続のために、頑張りましょう！」

「「「おう！」」」

フェイトは指示を出し終えると、早速仕事に取り掛かっていった。その胸に「剣士」の姿を思い浮かべながら。

（もし貴方達が再び４年前のような行いをするなら、私が止めなきゃ……。そして、「剣士」。貴方は、必ず私が……）

「……止めて、みせる」

第7話　されど世界には理不尽が罷り通る（後書き）

正直に言います。キャラの口調が上手く掴めません。なので、「このキャラはこんな話し方をしない！」というところがありましたら、是非御教授お願いします。……初オリキャラを二話で死なせたこの作品、これからもオリキャラの命を磨り潰して進みますので、そこはご了承お願いします。こんな駄作を読んでくださった皆様に感謝を。

最後に。

ヒロインは　はやて　です。

第8話　「2年前」「現在」「OO」「光」が齎すモノを知る者、今だ現れず

初の連日投稿！　これをいつもしている他の作者様は凄すぎます。
今回は本編というよりもサイドストーリー的なものです。

では、開演です。

第8話　「2年前」「現在」「OO」「光」が齎すモノを知る者、今だ現れず

―新暦73年・第24管理世界―

『他の敵は？』

『いないみたい。これで全部なはずよ』

『へえ、これでねえ』

空に奔る3つの赤い軌跡。その軌跡を生み出しているのは、真っ赤な装甲と4つの目を持つゴーレムらしきもの。そして、そのゴーレムらしきもの達は今、戦場で戦っているとは思えない雰囲気で通信をしていた。

『ヒリング。ここはいいから、ポイントFに居る残存戦力を叩いてくれ』

『分かったわ、リボンズ。任せて！』

『アニューはポイントGをやってきてくれないか？』

『分かったわ、リボンズ』

アニューと呼ばれたゴーレムらしきものは、しかし、憂鬱そうな声でリボンズと呼ばれたゴーレムらしきものにそう答えた。

『大丈夫だって！　今回のミッションにはAAランクが数人いるぐらいだから、この「アヘッド」の敵じゃないって！』

『その通りだよ、アニュー。この「アヘッド」は魔導師ランクで言うのならばAAA＋ランクなのだから、そんなに緊張しなくてもいいんだよ。確かに「ガンダム」には劣ってしまうけどね。「ジンクス」よりは強力になっているのだし』

『それに、このミッションの結果を受けて、私達にも遂に「ガンダ

ム」に匹敵するぐらいの機体を作ってもらえるんだよ！』
『そう彼が言っていたね。でも、本当にできるのか、僕には分からないな。彼をどの程度信頼していいのかも不明だしね？』
『……その点は心配しなくてもいいんじゃないかしら？』
『『？』』

アニューが言ったことに困惑を覚えながらも、リボンズはその言葉の真意を尋ねた。

『どうしてそう思うんだい、アニュー？』
『彼は「ソレスタルビーイング」に入る時、こう言ってたわ。「『ガンダム』に神を見た」と……』
『『……』』
『私は、そんな人が裏切るとは、到底思えないわ』
『……僕もそう思うよ』
『ていうか、そんなことを言うなんて、リボンズや刹那と随分気が合いそうね！　きゃはは！』
『私もそう思うわ』
『なっ！　た、確かに僕と刹那・Ｆ・セイエイにとって「ガンダム」は神に等しき存在だが！』
『『やっぱり気が合うんじゃない（の）？』』

女性二人にそう言われて、リボンズは幾秒か考え、

『……そ、そうだな。いずれ彼とは刹那も交えて話し合ってみるとしよう』

そう言った。

『……そういえば、刹那って今何してんの？』

『さあ？』
『……確か、通信が繋がらなくて、此方も向こうも居場所を特定できないらしい。つまり』
『『『迷子になっている（んだ）』』』

その後、３人は暫く話を続けていたが、作戦再開時間が迫っていることに気付き、話を中断した。その時にはもう戦場の雰囲気しか残っていなかった。

『……さて、こんな無駄話はやめて、仕事を完璧に終わらせようか、二人とも？』
『オッケー、リボンズ！　このヒリング・ケアに任せといてよ！』
『……分かったわ』

各々がそう答えたと同時に「アヘッド」のＧＮドライブの出力が上がっていき、徐々に速度が早くなっていった。そして、ある程度の速度に達すると、いきなりスピードが速くなった。そして、空には３つの赤い軌跡が残された。

『リボンズ・アルマーク、出る！』
『ヒリング・ケア、行きま～す！』
『アニュー・リターナー、出ます』

（でも、本当に「ソレスタルビーイング」のしていることは正しいのかしら？　私には、どうしてもそう思えない。……どうしたらいいのかしらね、ライル？）

「こ、こちら第１０３陸上部隊！　こちら第１０３陸上部隊！　現在我々は何者かによって襲撃を受けている！　至急増援を求む！」

「クソ！　ダメだ、全然繋がらねえ！」

「や、ヤバい！　一機、こっちに向かってきているぞ！」

「なにい！　すぐに応戦しろ！」

「だめだ！　敵は此方の攻撃が届かない高度を飛んでいる！　応戦できない！」

「クソッ！　こうも一方的にやられてたまるかよ！」

「あっ！　そんなに焦って飛び出すな！　敵はその高度からでも此

方を攻撃できるんだぞ！？」
「うっせえ！　むざむざやられてたまっ！？」
「くそ！　言わんこっちゃない！　こちらB班！　新人がバカをしでかしたおかげで此方の防衛網に穴ができ、ってこっちに向かってくるだと！？」
「隊長！　し、指示を！　指示をお願いします！」
「糞っ！やっこさんめ、こっちに穴ができたのに感ず気やがったのか。……おい、おめえら！　死にたくなけりゃ全力で応戦しろ！　殺傷魔法も許可を出す！　やれッ！」
「し、しかし隊長！　殺傷魔法など使ったら」
「全ての責任はオレが持つ！　てめえらは今生き残ることだけに集中しろ！　ッ！　来やがったな。総員、敵に向かって射撃魔法をありったけ飛ばせ！　少しでも時間を稼いで、援軍が来る確率を増やすんだ！　いいな！？」
「「「りょ、了解！？」」」

第１０３陸上部隊は突如出現したアンノーンが此方に向けて攻撃を仕掛けてきたことを受け、これに応戦するも、敵アンノーン３体はその全てが航空可能であり、さらにＡＡランクの魔導師を持ってしても倒せなかったことから、恐らくＡＡＡランク以上と思われる。これを知った第１０３陸士部隊は敵アンノーンの撃破を放棄し、増援が来るまでの時間を稼ぐ為、籠城戦を決行した。しかし、

「くそ！　通信はまだ回復しないのか！」
「だ、駄目です！　恐らく敵アンノウンが妨害していて通信が使えないのかと思われます！」
「なっ！　そ、それでは、援軍を呼ぶためには奴らを倒さなくてはならないというのかっ！？」
「恐らく、そうだと思われます……」

この作戦は、いきなり襲撃された第１０３陸上部隊にとって、犠牲者を最小にし、そして、最も生き残る可能性が高い作戦であった。しかし、その前提にあった「通信によって援軍を呼ぶ」という条件が決壊した今、第１０３陸上部隊はただ全滅を待つだけの部隊となった。

「……念話も使えないんだったな？」

「……はい。近くに居る者に対してはかろうじて使えるらしいですが、それをするなら口頭で述べる方が早いでしょう」

「……そうか」

第１０３陸上部隊は決して無能ではない。むしろ有能な方だ。地上部隊の中でも特に有能だと言われる第１０８陸士部隊や第１０１陸上部隊と並ぶほどに。しかし、それほどの部隊ですら敵アンノウンの前にはただ無力なだけであった。

「……総員に伝えろ。現時点を持って作戦を完全に放棄し、各自撤退を始めろと」

「い、いいんですか、隊長！？」

「オレ一人の首で部隊の誰かの命が助かるのなら、随分安い取引じゃないか。それと、これを伝えたらお前も逃げろよ？　お前が死ぬとあの怖いかみさんやまだ生まれたばかりの娘が悲しむだろうが」

「……隊長は、どうなさるんですか？」

「オレか？　オレはある程度奴らを引き付けたら適当に撤退するさ。な～に、心配するな。こう見えてもオレはＡＡランクの魔導師だぜ？　少なくてもお前よりは遥かに生き残る可能性が高いぞ？　だから、泣くな」

「……ヒッグ、泣いてなんか、ヒグッ、いません、よ」

そう言われ、しかし副隊長はなかなか泣き止まなかった。まだ彼

は１８歳になったばかりだが、隊長がこれから何をするのか、分かってしまったのだ。

「お前なあ。せっかくのかっこいい演出が台無しになるだろ？　だから、泣くな」

「……うぅ」

副隊長がようやく泣き止むと、隊長はまるで遺言のように言葉を紡いだ。

「ようし。……お前はまだまだ１８のガキだ。これからたくさんのことを経験しながら大人になるだろう。その中には当然悲しいこともあるし、辛いこともある。だが、決して負けてはいかん。最後の最後まで自分を貫き通すんだ。分かったな？」

「……は、はい！」

その返事を満足そうに聞きながら、隊長は彼が更に一歩成長したことを感じた。そして、自分が教えることがもう無いことも。

「……もしお前が生き残れたら、オレは隊長を辞任してお前に譲ることにしよう」

「え！」

「お前にはそんぐらいの資格があるってこった。だから、死ぬんじゃねえぞ？」

「……隊長こそ、死なないでください。僕は、まだあなたから教えてもらっていないことが山ほどあるんですからね！」

「はっ！　言うようになったじゃないか！　だったらこの戦場から生き延びてみせろ！　トマス＝アキナス副隊長！」

「了解！　隊長、無事に会いましょう！」

そう言って、涙を堪えながら、彼は走りだした。

もう、二度と会うことがない、自分の誇りだった隊長に背を向けて。

「そうだ。生き残るんだぞ、トマス。老兵はここまでしか歩けなかったが、お前達は違う。まだまだ歩く道が延々と続いているんだからな……」

しばらくすると、敵アンノウンの一機が此方に向かってきた。それを眺めながら、隊長はその機体のシルエットが2年前に見た「エックス」にどことなく似ていることに気付いた。

（まさかな……）

隊長自身がその信じられない仮説を考えていると、敵アンノウンがこちらに話しかけてきた。

「は～い、あなた、隊長さんね？」

「そうだ」

隊長は敵アンノウンが喋れたことにも驚いたが、その声が若い女性のものだということにも驚いた。しかし、表面上にはその驚愕をおくびにも出さなかった。

「いきなりで悪いんだけど、死んでくれない？」

「断る」

「だよね～。だから、私が死なせてあげるよ」

「その前に、一つ聞いていいか？」

「いいわよ」

「お前達は何者だ？」

「……う～ん。まあ、本当は駄目だけど、冥土の土産に教えてあげるよ。けど、私達は2年前、あなた達と戦ったのよ？　知らない？」

「2年前……まさか」

「うん」

「ソレスタルビーイング、なのか？」

「正～解！　おめでとう！　よく知っていたわね？」

「……参戦していたからな、オレも。あの忌むべき戦いに」

「へえ。よく生き残れたわね、そんな実力で。感心するわ」

「……後方支援がもっぱらの仕事だったからな。それで生き残れたってわけさ」

「なるほどねえ。ま、教えてあげたんだから、早速死んでね？」

そういうとヒリングは銃を隊長に向けた。しかし、隊長はそれを

見て、

「へっ」

「？　何？　何かおかしかった？」

笑った。そう、笑ったのだ。まるで銃を向けたことがおかしいことであるかのように。しかし、隊長はそれに笑ったのではなかった。

「おかしい？　……ああ、おかしいさ。こんなに簡単に人を殺せるお前らはな」

「……」

「いつか、お前達は裁かれる。こんな行いをするお前達を、世界は決して許さないからな」

「……」

「ああ、そうさ。お前達はこの世界に居ちゃいけないのさ。あいつの為にも、な」

「……」

「だから、ここでお前を討つ！　Ｓ１Ｕ！」

『スタンバイ・レディ』

そういうと、隊長の手にあったカードが杖状のデバイスへと変わった。隊長はそれを油断なく構え、目の前に銃を構えている敵アンノウンの動きに集中した。しかし、予想に反し、敵アンノウンは動きを見せなかった。それに訝しんでいると、その答えは向こうの方からやってきた。

「……ふ～ん。一つ聞くけど、あなたが言っていた「あいつ」って、もしかして此処から離脱しようとしていたあの子供のこと？」

「な……に？」

「だったら悪いけど、彼、もう死んだわよ？」

「……へっ。でたらめを言って惑わそうとしても無駄」
「だって、あなた達が撤退し始めたと同時に、私達の仲間の一機が、撤退した彼らを殲滅する手筈になっているもの」
「……」
「気付かなかった？　私達は別に3機だけとは言ってなかったわよ？　逆に、他にも仲間がいる可能性を疑うべきだったわね」
「……」

そう言われ、初めて隊長は自身の失敗に気付いた。そう、他に仲間がいてもおかしくないということに。

「さて、この部隊はあとはあなたを残して全滅したはずだから、私も早めに自分の仕事を終わらせよっと」
「……ぅぉおおおお！」
「それじゃ、ばいば～い」

隊長が絶望しながらも渾身の力で放った魔法はことごとく外れ、無情にもその胸にヒリングの「アヘッド」のビームサーベルが突き刺さった。それをまるで第三者のように眺めながら、隊長は自分の作戦ミスで死なせてしまった部下達に心の中で謝っていた。

（すまない、アルハ、コクト。そして、トマス。本当にすまん……。このふがいない隊長のせいでお前達を死なせてしまって。だが！）

「ん？　な～に？　まだ抵抗するの？」

（こいつに一矢報いてやるから、それで許してくれ！）

隊長は胸の中でそう言いながらヒリングの腕を掴み、Ｓ１Ｕを向け、魔法を放とうとした。

「っえ!?」
「うおおおぉっ!」

ブシャアアアッ!

『いやあ、さすがリボンズ。助かったよ』
『どういたしまして。それにしても、君は一体なにをしたんだい?』
『何もしてないわよ。ただ、撤退した人達の末路を教えただけよ?』
『……間違いなく、それが原因だよ。いい加減相手を絶望させながら殺すその癖をなんとかしてくれないかな?』
『それは無理。だって、これは私の楽しみなんだもの。諦めて頂戴』
『……はあ、まったく。君の先が思いやられるよ』

結局、隊長の魔法はヒリングに届かなかった。魔法を放つ直前、リボンズによって首を斬られたからだ。

『大丈夫だって。いざとなったらリボンズもいるし』
『僕に頼るのはいいけど、そろそろ一人でも任務ができるようになってくれ。そんなんじゃ、僕が君を頼れないだろ?』
『ぶう。分かったわよ、リボンズ』

（まあ、僕は君に頼るなんて、考えてもいないけどね）

リボンズがそう心の中で思っていると、不意にアニューが時間を過ぎても戻っていないことに気付いた。

『ところで、ヒリング。アニューは？』

『さあ？　まだ終わってないんじゃない？』

『それにしては随分遅いと思わないかい？』

『まあ、それもそうね。見にいく？』

『……そうするか』

『大丈夫よ。ただ、敵が予想以上に抵抗していただけだから』

『『！』』

リボンズとヒリングはいきなり声が聞こえたことに驚愕し、声がした方に銃を向けたが、声を発した人物を見るなり、銃口を下げた。

『アニュー、頼むからびっくりさせないでくれ。危うく撃ってしまうところだったよ』

『そうよ！　本当にびっくりしたんだからね！』

『ごめんなさい』

アニューがそう謝っていると、リボンズ達に近づいてくる機影があった。その機影はリボンズ達が使っている「アヘッド」とは違い、平坦で横長な形をしていた。

『やっほー、デヴァイン。久しぶりー』

『やあ、デヴァイン。それがあの「エンプラス」かい？　随分奇妙

な形をして大きいものだが、きちんと操れているのかい？』
『デヴァイン、お久しぶりです』
『……うむ』

それぞれがそのエンプラスに向け通信を開き、軽く挨拶をするも、エンプラスの「ライセンサー」であるデヴァイン・ノヴァは、その全てに一言で答えた。

『相変わらず無口だね』
『しょうがないことさ。こういう風に作られているのだからね』
『それもそうね。それに、特に気になるようなものではないしね』
『……うむ』
『ところで、デヴァイン。きちんと仕事はやってきたかい？』
『……問題無い。全て殲滅した』
『了解。それじゃあ撤退しよう』
『『了解』』

そういうと、リボンズは改修作業中のプトレマイオスに通信を開いた。

『こちらアヘッドのリボンズ・アルマーク。聞こえるかい？　ブリッジ。ＧＮ転送の準備をしてほしいんだけど』
『こちらトレミーのブリッジ。任務達成を此方でも確認しました。ポイントＣ－２にＧＮ転送の準備がしてあるので、そこに向かってください』
『了解したよ』

『さて、ポイントＣ－２に準備してあるそうだから、そこに行こうか』
『了解！』

『了解』
『……了解』

赤い軌跡が４つ、空を駆け抜ける。そこに無数の死と破壊をばら撒いたまま。かくして、第１０３陸上部隊はこの日、誰一人残らず全滅した。時空管理局はこの事件があまりにも不可解な点が多数あり、また、生存者がいないため、その時の状況を探ることが不可能とし、調査することを諦め、この事件を未解決事件とし、調査を取りやめた。これに対し、第１０３陸上部隊の遺族たちは、時空管理局に調査を続行するようにと訴えたが、時空管理局はこれを聞き入れなかった。その理由は、「もう調べようが無い」というものであり、その原因として、第１０３陸上部隊以外の魔力反応が全く見当たらなかった点が挙げられる。しかし、遺族はなおも調査続行を願い、時空管理局に対し訴訟を行った。この裁判は一審では時空管理局の勝利で終わったが、遺族はこの判決に対し控訴し、二審では遺族の気持ちを考慮した結果、調査を続行するようにという判決になった。しかし、時空管理局はこの結果に対し上告し、新暦７６年未明に最高裁判所にて裁判が行われることになった。

―新暦７５年・時空管理局本局内―

「ふう」
「お疲れ様です、司書長」
「ああ、ありがとう」
「ところで、一つ聞きたいのですが」
「何かな？」
「どうして時空管理局は司書長の力を借りてまで、この裁判に勝とうとするのですか？」
「ああ、そのことか。なに、簡単だよ。もし時空管理局がこの裁判に負ければ、恐らくこれまでに解決できなかった事件まで調べなければならなくなるのさ。だって、不公平じゃない？　どうしてその事件は調べて、この事件は調べないんだって絶対言われるよ。そうなれば、時空管理局はただでさえ人手が足りないのに、この上さらに未解決だった事件の捜査にまで人手を投入することになる。そんなことになれば、間違いなく次元世界の治安は守れなくなる。だから管理局は必死なのさ」
「はぁ、なるほど。だから管理局はこの裁判に司書長を呼んだんですね。分かりました」
「へ？　なんで？」
「この際はっきり言いますが、司書長程知識を持っている人物は、この次元には居ないと思います」
「そうかなぁ～？」
「そうなんです。そして、そのような人物が裁判に参加すれば、例え黒でも白になると私は思います
「えぇっ！？」
「そうでしょう？　なにせ裁判に立つのは、全次元世界中最高の賢者として名高い、あの無限書庫のユーノ・スクライア司書長なんですから」
「う～ん、そう言われてもねえ……」

「司書長はもっと自信を持つべきなんですよ。いつも謙遜しすぎなんですから」
「だってねえ？」
「だってもこうでもそうでもありません」
「……」
「分かりましたか？」
「……はい」
「よろしいです、司書長」

「この、あくまめ！」
「は？」

ユーノは本局のメインフロアにいた3歳ぐらいの女の子から、いきなりそう言われた。ユーノは困惑しつつも、その子供の親を探そうとし、その子供の母親らしき人物にまで睨まれていることに気付いた。ユーノが何故睨まれたり、あくま呼ばわりされるのか分からないでボウッとしていると、向こうがさらに睨んできた。仕方なくその理由を聞くために、その母親らしき人物に近付いた。

「あの、すいません。僕が何かしましたか？」
「……ええ、まあ」
「はあ。すみませんが、僕が何をしたのか、教えてくれませんか？僕とあなた達は会ったことが無いように思うんですが」
「……」
「あの……？」

ユーノはいきなり沈黙した母親を訝しんでいると、女の子の方が口を開いた。

「おかあさんはいってた。さいばんにかてないだろうって」
「？　どういうことだい？」
「あいてはゆーの・すくらいあせんせいだから」
「は？」

ユーノはその言葉に本気で首を傾げた。先程司書に言われたことを忘れて。

「だから、おかあさんをかなしませるのは、わたしにとってはあくまなの！」
「……君の名前は？」
「わたし？　わたしのなまえは」
「……この子の名前は、リース＝アキナスです」
「おかあさん？」

女の子が名乗ろうとすると、母親がそれを遮って答えた。まるで汚いものに触れさせないかのように。ユーノはそれに気付きつつも、気付いていない振りを敢えてし、先を促した。最も、母親もそれを感じてはいたのだが。

「そして、私は、今は亡き第１０３陸上部隊の副隊長をしていた、トマス＝アキナスの妻の、パーラ＝アキナスです。思い出していただけましたか？　ユーノ・スクライア司書長？」
「……ええ、やっと思い出しました」

そう言われて、ようやくユーノは母親と女の子のことを思い出した。これから裁判で会うことになっていた二人のことを。

「それは幸いです。これから裁判で争うんですもの。せめて、顔だ

けでも覚えていただきたかったもので。無礼を働きましたか？」
「いえいえ、こちらこそとんだ無礼を働きました。ところで、ここには何をしに来たんですか、パーラ・アキナスさん？」
「いえ、ただ裁判に必要な書類を貰いに来ただけですから、気にしないでください。もっとも、私ごときでは、あなたの前で何か出来るわけでもありませんが」
「……」
「ただ、これだけは言っておきます。私は、たとえあなたが裁判に出てこようとも、決して諦めません。夫が何故死ななければならなかったのか、それが調査され、原因が解明されるまで、私は戦い続けます」
「……そうですか」
「ええ。これで話は終わりましょう。リース、行きましょ？」
「うん、まま！」

女の子はそのまま素直に母親についていくも、最後はユーノの方に振り返り、悪意がこもった眼でユーノを睨み、こう言った。

「ままとぱぱをくるしませるあくまなんて、しんじゃえばいいのに」

その言葉は、ユーノの胸に深く食い込――――まなかった。

―新暦７３年・改修中プトレマイオス内―

「どうじゃ、この新型の「ガンダム」は？」

イアン・ヴァスティはそう言って、新型の「ガンダム」の設計データを前面のモニターに映し出した。

「これが新型の「ガンダム」……」

「すごい……」

「素晴らしい。これなら計画を成功させられる」

スメラギ・李・ノリエガ、フェルト・グレイス、ティエリア・アーデは目の前の新型「ガンダム」のデータを見て、思わずそう呟いた。４年前のデータを元に、更に改良を加えられた「ガンダム」は、それほどまでに凄まじい性能を持ち合わせていた。

「まだ設計段階だから確証はできないが、理論上では「ケルディム」と「アリオス」がＳ＋、「セラヴィー」がＳＳ－ランクとなるはずだ」

そう言ってイアンは次々とモニターを操作する。そこに現れる新型「ガンダム」のスペックを見る度、感嘆のため息がもれる。しかし、ティエリアはあることに気付いた。

「イアン・ヴァスティ。ロックオン・ストラトスとアレルヤ・ハプティズム、そして私の「ガンダム」はあるが、刹那・F・セイエイの「ガンダム」がないのはどういうことだ？」
「……あ」
「たしかにそうね」
「……いや、実はもう刹那の「ガンダム」は設計されておって、何時でもアップロード可能なのだが……」
「「「が？」」」
「……起動させることができないんじゃ」

その言葉に三人はほぼ同時に首を傾げた。ちなみに、これを見たイアンは危うく吹き出しそうになった。

「どういうことなの？」
「ま、まあ、儂もイオリアの爺さんから設計データを送られてきて、それをシュミレートしただけじゃからあまり多くは喋れんが、刹那の「ガンダム」にはあるシステムが組み込まれておる」
「……システム？」
「そのシステムは「ツインドライヴシステム」というんじゃが……正直言って、起動するかどうか、儂でも確証できん。シュミレートでは全て機動すらできなかったからのう」
「……そんなシステムをイオリア・シュヘンベルグが作るとは考えられません」

ティエリアのその呟きはここに居る全員の思いと同じであった。この「ＣＢ」の創始者であり、また稀代の発明王とまで言われた彼がそんな物を作るとは、到底考えられないことであった。

「儂もそう思う。だから、刹那が来ない限り、この「ガンダム」は机上の空論にしかすぎん」

「……「ツインドライヴシステム」……」
「その名の通り、二つのＧＮドライブを用いるシステムなんじゃが、その時生み出されるＧＮ粒子は、二倍では無く二乗されるらしい」
「「「なっ！？」」」

その言葉に三者はまたも同時に同じリアクションを取ったことに、イアンは再び噴き出しかけたが、ティエリアがそれに気付き、かなり殺気を込めて睨んできたので慌てて止めた。

「信じられんじゃろ？　儂だって今だに信じられん。しかし、イオリアの爺さんはこうも言ったんじゃ。『これが「ソレスタルビーイング」の要となる』とな。イオリアの爺さんはなにか確信があるんじゃろ。これが起動する何かの、な」
「……なるほど。だからイオリア・シュヘンベルグは刹那にその「ガンダム」を託したのか」
「確かにそうね。「ガンダム」そのものになろうとするあの子なら、たしかにこの「ガンダム」を起動させそうね」
「……私もそう思う」

そう言って、全員がその「ガンダム」のデータを映しているモニターを見た。そして、「ソレスタルビーイング」の要にして最強の「ガンダム」の名は、こう書かれていた。

『ダブルオーガンダム』

―新暦７３年・第５６管理外世界―

「……」

『マイスター、そこでは風邪を引いてしまいます。早くテントの中へ』

「……」

刹那はエクシアがテントに入るように催促する声を聞きながら、目の前に広がる景色を眺めていた。辺り一面に広がる砂漠、そして、人が作った建造物だったもの。この景色は、刹那に自身の故郷を思い出させる。そう、神の為に戦っていたあの頃の自分を。

（この世界に神はいない）

それは６年前の戦いで得た真実の一つ。そう、この世界に神などいないのだ。ならば、この歪んだ世界を正すにはどうすればいいのか。いや、誰がやらねばならないのか。おそらく、大半の人間は時空管理局と答えるだろう。しかし、刹那はどうしてもそうは考えられない。何故なら、時空管理局といっても、それは人が作った組織であり、表では綺麗事を言っていても、裏では汚い事をしているのだ。そして、それによってどれだけの人間が悲しんでいるかも知らずに。そんなものにこの歪んだ世界は正せない、いや、世界の歪みの原因にすらなっている。

（……そう、時空管理局は世界の歪みを生みだし続けている。ならば、オレはその歪みを断ち切らねばならない。オレは「ガンダムマイスター」なのだから）

刹那は6年前に出会った「ガンダム」の姿が、今でも鮮烈に脳裏に焼き付いている。自身が参加していた紛争に介入してきた時空管理局のエースを墜とし、悠然と背中にGN粒子を翼状に噴射し、浮遊している「ガンダム」の姿を。それは、刹那にとってはまさに「神」が降臨したかのように見えた。

（そう、「ガンダム」ならこの世界の歪みを断ち切ることができる）

だから、刹那は止まらない。この世界の歪みを断ち切るまで。「ガンダム」がそれを成すと信じているから。

「……」

『……！　マイスター、南西3キロ地点に魔力反応！　おそらく戦闘が行われていると思われます！』

「了解。エクシア、いけるか？」

『機体各部の損傷率12％、GNドライブの出力オールグリーン。マイスター、いつでもいけます！』

「分かった。……エクシア」

『何でしょう、マイスター？』

しかし、刹那は一つ気になっていたことがあった。果たして、エクシアは自分をマイスターとして認めているのかを。自分よりも「ガンダム」に選ばれるべき人物がいるのではないか。その思いは、2年前の戦いで「金色の閃光」に負けた時から抱くようになった。

「お前は紛争根絶を目指し、世界の歪みを断ち切る「ガンダム」だ」
『はい』
「それを成すまで、オレはお前と一緒に戦っていいのか？　2年前の戦いでお前が負けてしまったのは、オレのせいなのに」

そう、刹那にとって「ガンダム」とは「神」にも等しい絶対の存在である。ゆえに、敗北した原因は自分にあると思ったのだ。

『……マイスター、貴方は一つ間違っている』
「……なに？」

しかし、エクシアはそう思わない。逆に彼がいたからここまで戦えたと思っている。

『確かに私は「ガンダム」です。しかし、私一人では紛争を根絶し、世界の歪みを断ち切る「ガンダム」にはなれない。貴方が共に闘ってくれないと、私は真の「ガンダム」にはなれません』
「……」
『ですから、マイスター。いつか、それを成す日が来るまで、共に闘いましょう』

エクシアは自分一人の力では真の「ガンダム」にはなれないということを知っている。しかし、刹那と一緒なら真の「ガンダム」になれると信じている。だから、彼に対しては絶対の信頼を寄せている。そして、それは刹那も同じであった。

「……ああ、エクシア。オレが、オレ達が。「ガンダム」だ！」
『イエス、マイスター！』
「エクシア！」

『スタンバイレディ、セットアップ。ＧＮ－００１ＲＥ／ＧＵＮＤＡＭ　ＥＸＩＡ　Ｒｅｐａｉｒ、インストール。コンプリート』
「ガンダムエクシアリペア、刹那・Ｆ・セイエイ。目標を駆逐する」

暗き空に奔る一条の蒼い流星。その光はこの世界に何を齎すのか。
それを知る者は、未だいない。

第8話　「2年前」「現在」「OO」「光」が齎すモノを知る者、今だ現れず

皆様にご報告があります。今回の投稿からもしかしたら2週間ほど私用につき投稿できないかもしれません。こんな駄目作者を許してください。できれば、2週間の間投稿できなくても再びこの小説を読んでくれたら幸いです。こんな駄作を読んで下さった皆様に感謝を。

最後に。

ヒロインは　はやて　です。

第9話　部隊と舞台が揃うまで（前書き）

何とか早めに用事を済ますことが出来ました。読者の皆様が再びこの作品を読んでくれることを切に願います。

では、開演です。

第9話　部隊と舞台が揃うまで

刹那とティエリアは時空管理局の増援から逃げ切り、トレミーから転送された座標に到着した。

「刹那、用意はいいか？」
「ああ。オレとエクシアは何時でもいける」
『イエス、マイスター』
「そうか。ならば、これよりＧＮ転送を始める」
「了解」
「ＧＮドライヴの出力を９７，５％に固定、トレミーの座標固定、転送先固定、ヴェーダによる粒子演算終了。これより、ＧＮ転送を開始する」

すると、刹那とティアリアはその場からまるで瞬間移動したかのように消え、残ったのはわずかな粒子のみだった。

「何？　アンノウンが消えただと？」
『ハッ。現在消失した地点を中心に捜索しておりますが、今のところこれといったものはなく』

「……わかった、引き続き調査を続行させろ」
『了解しました』
「……ふう」

クロノは通信を終えると、今までに溜めこんでいたものを吐き出すように深い溜息をした。実際彼はこの数時間の間、常に神経を尖らしていたこともあり、当面の安全が確保されたことを知るやいなや、どっと疲れが押し寄せてきたのだ。

「……恐らく、「ガンダム」は撤退したはずだ。いくらなんでもあのボロボロになった「剣士」を抱えたまま戦うなんてありえないからな。お前はどう思う？」

そう言いながらクロノは目の前のモニターに映っている人物を見て、その人物の意見を求めた。

『僕もそう思う。恐らく、近くに「箱付き」か何かがあって、そこで補給や修理を受けようとしているんだ』

モニターに映っている人物、ユーノ・スクライアもクロノと同じ意見を述べた。そして、クロノは目の前のモニターを操作して、ある作戦が書かれた映像を映し出した。

「この作戦を決行しようと思っているのだが、問題がある」
『……なるほど。確かにこれは問題だ。これをどうにかしないと作戦を実行することができないね』
「ああ。だから」
『……分かったよ。こちらからも優秀な人員を出して事に当たらせるよ』
「頼む」

『……はぁ、無限書庫の作業効率が一気に落ち込んで、他の部署からの批難がもう聞こえてきそうだよ』

「そこはお前が何とかしろ、フェレットもどき」

『だからフェレットじゃ、ってどうしたのブックさん？　え？　それ全部僕の仕事？　いや、冗談きつ、って本当に！？　本当にそれ全部！？　嘘で』

プツン。

「……」

クロノは向こうが修羅場に突入したのを感じ、すぐさま通信を切った。今の精神状況でとばっちりは喰らいたくなかったのだ。

「……？」

しかし、通信を切った数分後には、もう送られてくる人員の詳細と、「箱付き」がいるであろうポイントが無限書庫から届いていた。

「さすがだな……さて、あいつもこれだけ頑張ったんだ。僕も頑張らないとな。これで成果なしだったら笑われるだけだ」

それだけは避けたいとばかりに無限書庫から届いたデータを片っ端から目を通し、一時間後には作戦の詳細が決まった。そして、その３０分後にはメンバーを集め、作戦を開始した。

「さて、ここまでは順調だが、あとはどれだけ今の僕が新型の「ガンダム」に近づけるか、か……」

「久しいな、刹那」
「……イアン・ヴァスティ、久しぶりだ」
「エクシアも相変わらずか？」
『イエス、イアン・ヴァスティ。あなたもお変わり無き様で』

イアンと刹那はトレミー内にあるＧＮ転送・カタパルトデッキで再会していた。そして、イアンはすぐさま本題に移った。

「刹那、お前の新型「ガンダム」についてだが……」
「ああ」
「はっきりいって、未だに起動すら成功していない代物だ。それでもアップロードするか？　もし失敗すれば、最悪「ガンダム」を失うぞ？」

イアンは正直刹那の「ガンダム」が起動する自信が全くなかった。もし起動することができなければ、最悪「ガンダム」を失うことになる。それを承知の上で刹那に選んで欲しかったのだ。誰よりも「ガンダム」を愛している刹那にはその権利があるとイアンは思っていた。

「……オレは」

『アップロードをお願いします、イアン・ヴァスティ』
「「エクシア!?」」

イアンと刹那はマイスターの言葉を遮って先に答えたエクシアに驚いた。普通そんなことは絶対にしないはずだからである。

『私はマイスターの力になれるのであれば、それでいいのです』
「し、しかしだな……」
『……正直、「金色の閃光」に敗北した時、私は自身の限界を知りました。そして、それがマイスターの限界になることも……。しかし、それでは、それでは駄目なのです！　私はマイスターと一緒に真の「ガンダム」になりたい。紛争を根絶し、世界の歪みを断ち切る真の「ガンダム」に！』
「「……」」
『もし真の「ガンダム」に近づけるのであれば、その程度の危険など、私にとっては問題ではありません』
「……分かった」
「刹那!?」

刹那は自身の「ガンダム」であるエクシアの覚悟を知り、それに答えなければいけないと思った。もしここで逃げたら、ガンダムマイスターである資格など無いからだ。ゆえに、刹那はエクシアの覚悟を胸に刻みつけ、アップロードすることを了承した。

「本当にいいのか？」
「ああ、やってくれ」
「……了解。それじゃ、あと二時間は待っとくれ。その間に準備を終わらす」
「頼む」
「任せておけ。必ず成功させてやるからな！　安心してまっとれい」

「……了解した」

そう言うや否や、イアンはエクシアを片手に整備室に直行した。
刹那はそれを見送りながら、自身の不安を紛らわすためにその場で筋トレを始めた。

「ポイントGにもいない、か」

クロノはそう言って、目の前に広がるモニターにバツ印を描いた。
よく見ると、他にも同じように描かれたバツ印が幾つもあった。それぞれにA～Jまでのアルファベットが振り分けられており、よく見てみるとそのモニターは地図のように見えなくもない。

「残るポイントはC、F、Iか……。確率的にはFが最も高いが、さて……」

クロノはその地図に見えなくもないモニターを凝視し、そして、あることに気付いた。

「待てよ、このポイントFとIは一見すると隠れ場所に最適に見え

るが、あまりにも最適すぎて、逆にこれでは見つけてくださいと言っているようなものだな……。確か、「ソレスタルビーイング」には優秀な指揮官がいたはずだ。ということは、恐らくこのポイントCにいる可能性が高いな……」

クロノは自身の推測に賭けるか、それとも定石通りにいくか迷っていたが、４年前の戦いで「ソレスタルビーイング」の指揮官に何度か苦渋を飲まされた経験から、恐らく自信の推測の方が正しいと考え、クラウディアの進路をポイントCに向かうようにした。そして、艦内チャンネルで乗組員達全員に、これから行う作戦について説明した。

「ＸＶ級大型次元航行船・クラウディアの艦長、クロノ・ハラオウン提督である。我々はこれより「ガンダム」追撃作戦を開始する。同行する船は我々と同じ次元航行部隊のＸＶ級大型次元航行船・クリステヴァである。今回の作戦には諸君らは恐らく疑問が多々あることだろう。しかし、それは第一級極秘事項に相当する物であるため、私が答えることができないということを了承してほしい」

クロノはそう言って、一拍置いてからまた喋りだした。

「そして、酷なことではあるが、この作戦の成否によってこの次元世界の未来が決まると思って作戦に臨んでほしい。何故なら、これから相手をする「ガンダム」と呼ばれるロストロギアは、かつて８つもの次元世界を滅ぼしたことがあるからだ」

クロノがそう言うと、艦内が水を打ったように静かになったことが、通信越しにクロノにも伝わってきた。相手が８つもの次元世界を滅ぼしているロストロギアならば、この反応は常識の範囲内である。むしろ取り乱したりしない分、この艦の乗組員達の優秀さと、

潜り抜けてきた死線の数が半端なものではないということを証明している。

「しかし、その「ガンダム」は現在は二機しか確認されておらず、さらにその内の一機が戦闘続行不可能な状態であることから、我々にも十分勝機があると私は考え、この作戦を実行することにした。なお、この作戦はラルゴ・キール名誉元帥からの許可を得ている」

クロノはここで最後のカードを切った。すなわち、伝説の三提督の一人、ラルゴ・キール名誉元帥の名を使ったのだ。これが意味するのは、この作戦が名誉元帥承認の物であり、引いては最高評議会無き今、最高権力に位置していると言っても過言ではない人物の元で承認された、つまり、管理局承認の物であるということをここに証明して見せたのだ。これで例え疑問が消えなくても、クルー達は疑心暗鬼にならなくて済み、作戦を効率よく遂行することが可能になるとクロノは考え、事実、そうなるのであった。

「以上で放送を終了する。各員の健闘を期待する」

クロノは最後にそう締め括り、放送を終了した。そして、クリステヴァの艦長を呼び出し、最後のブリーフィングを行った。

「……よし、ではこれより、「ガンダム」追撃作戦を開始する。総員、配置につけ！」

「スメラギさん、ＸＶ級大型次元航行船が一隻こちらに近づいてきます！」
「何ですって？」
私はその報告を半ば信じられない思いで聞いた。こちらの位置はＧＮ粒子によって、レーダーで確認できないようになっているのだ。もしそんな船をこの広い次元空間で探し出せと言われたら、私はきっと不可能だといって匙を投げるに決まっている。だが、現実に、此方に向かっているとしか思えない航路でその船は進んでいた。
「どうしてこの場所がばれたのかしら……」
しかし、今はその疑問に費やす時間すら惜しい。向こうが此方を肉眼で確認できる距離に入るまでの時間は、恐らく１０分を切っている。今は戦闘準備をし、戦術を予報しなければならない。その為に今は１秒すら惜しい。
「フェルト、総員に戦闘配置につくよう放送して」
「分かりました」
「それと、ティエリアとリボンズ、そしてブリングに発進準備させといて」
「了解」

フェルトは言われた通りのことを淡々とこなしていった。その一部始終を見ながら、スメラギはイアンに通信を繋いだ。

「『ＯＯガンダム』は出撃できるかしら？」
『むちゃを言うな。あと最低１０分はかかるぞ？』
「８分でお願い」
『～～～！　え～い、分かった！　なんとか８分で終わらそう』
「ありがとう」
『ただ、起動するかどうかは儂でも保証できんぞ？　いいのか？』
「大丈夫よ。きっと刹那は起動させて見せるわ。少なくても、私はそう信じている」

スメラギはイアンと会話しながらも、頭の中では敵の戦略について考えていた。恐らく、敵は何らかの方法でこちらの居場所を特定したのだろう。それについては後日調べるとして、今は此方に向かってくる敵艦をどうにかしなければならない。それについてスメラギはいくつかの戦術を頭の中で構想するも、ミレイナ・ヴァスティの報告により、その全ては白紙に戻された。

「敵艦を特定したのです～。敵艦はＸＶ級大型次元航行船のクラウディアなのです～」
「……え？」

スメラギはその名を聞いて、一瞬思考が停止した。

「……もしかして、とてもヤバい船なんですか～？」
「……ええ、そうね。確かにヤバいわね」

ただし、船では無く、その船の艦長が。スメラギの記憶違いが無

ければ、その船にはあの「鬼札」とまで言われ、４年前に私達としのぎを削った、あのクロノ・ハラオウンがいるはずだ。

（もし彼が乗っているのであれば、決して無策じゃないはず……。それに、一隻で来たというのも不自然すぎるわね。彼ならそんなことをしないでしょうから）

スメラギにとってクロノ・ハラオウンという人物は、４年前の戦いで最も苦戦させられた相手である。そんな相手がただ真正面から戦闘を挑んでくるだけとは、どうしても思えない。恐らく、何かしらの作戦があるはずだが……。

（……駄目ね。情報が圧倒的に不足しているわ。これでは彼の作戦を看破することは不可能ね……さて、どうしましょうか）

スメラギは2分ほど悩んだが、結局いい戦術は思い浮かばなかったので、仕方なく先程浮かんでいた作戦の一つを実行することにした。

「……ティエリア、リボンズ、ブリングに通信を開いて。作戦を伝えるわ」

「はいです～」

『なんでしょう、ミス・スメラギ？』

『ミス・スメラギ、作戦が決まったんですね？』

『……』

三者三様の返答をしながら、「ライセンサー」と「ガンダムマイスター」である彼らは通信を開いた。それぞれが出撃準備を終え、いつでも発進可能であることは言うまでもない。

「ええ、これから作戦を伝えるわ。ただし」

『『『？』』』

「相手には恐らくあのクロノ・ハラオウンがいるわ。油断はしないように」

『ほう、彼が……。まさか今日だけで「烈火の将」だけでなく「鬼札」とも戦うことになろうとは。いいでしょう、相手にとって不足はありません』

『へえ、彼がいるんだ。僕も一度会ってみたいと思ってましたので、ちょうどいい機会です』

『……クロノ・ハラオウン、ヨハンの仇……仇を討つ』

「では、作戦を伝えます」

「艦長！　前方３０００に「箱付き」と思しき艦影を光学カメラが捉えました！」

「よし、モニターに出せ！」

クロノはようやく捉えた「箱付き」を確認するためモニターを見つめていたが、その形状が４年前とは明らかに違うことに気付いた。

（やはり、「箱付き」も改修されていたか……）

しかし、それも予想の範囲内であった。「ガンダム」が新型になったのであれば、「箱付き」も新型になっていておかしくはないからだ。そして、恐らく４年前の弱点であった攻撃力も改善されているだろう。しかし、どれだけ改善されたかは分からないが、少なくてもこのＸＶ級と同程度であろうとクロノは推測した。

（奴らは恐らくいきなり襲撃されて、此方の情報が殆ど無い状態だ。そこから練れる戦術はただ一つ。相手の出方を見て、それを正面から受けることだけだ。それが最も確実な戦術でもあるし、僕でもそうする。そして、敵の指揮官は優秀だから、そうする確率は非常に高い。そして、それを逆手に取ることができれば、勝算は十分にある）

どんどん近付いていく「箱付き」を見ながら、クロノはしかし、嫌な汗を拭い去ることができなかった。何故なら、この作戦にはある不安要素がどうしても存在しているからである。そう、敵の戦力が全く分かっていないという不安要素が。

（いくら「剣士」が戦闘不能とはいっても、敵にはやはり「デカブツ」以外にも戦力があると推測するのが妥当だろう。問題は、どれだけの戦力が向こうにあるかだ）

いくらオーバーＳランクとはいっても、たった一機だけを乗せて行動するというのはあまりにもリスクがでかい。もし仮に「デカブ

ツ」が「剣士」を助けている間に敵に見つかった場合、まともな反撃を行えずに撃沈する可能性があったからだ。ということは、恐らく最低でもオーバーSランクがもう一機か二機はいるはず……。

（いや、まだその程度なら問題ないが、一番厄介なのは敵に時間を与え、増援、もしくは「剣士」の戦場復帰を許してしまうことだ。それだけは避けねばならない）

そう、この作戦の成否の別れ目は時間であり、敵にどれだけ時間を与えずにいられるかがこの作戦のポイントである。しかし、それらはすべて、増援を呼ばれない為というよりも、「剣士」を復活させない為である。

（そう、「剣士」だけは、「剣士」だけは復活を許してはならないんだ。あの史上最悪のテロリストだけは……）

「剣士」。そう、「デカブツ」に綽名があるように、「剣士」にもまた綽名は存在する。それも、歴史上類を見ない程最悪なモノが。

（そして、フェイトの為にも「剣士」だけは討っておかなくてはならないんだ）

「剣士」。４年前の戦いにおいて３人のＡＡＡランクと４人のオーバーSランクを殺した、時空管理局史上最悪のテロリスト。その戦績は他の何者にも追随を許さず、つけられた綽名は数知れない。しかし、「剣士」を象徴する綽名は３つある。

「艦長。敵艦との距離、残り２８００です。指示をお願いします」

「……よし、総員第一種戦闘配置。これよりクラウディアは「箱付き」と戦闘を行う」

『蒼い流星』。これは「剣士」の色と戦闘スタイルから名付けられた綽名である。実際、そう見えなくもない。

「……そうだな。距離２５００になったら、クラウディアに搭載されている「アトモスフィア・フィールド」（「Ａ・Ｆ」）を展開しろ。いいな？」

「は、はい！」

『ＣＢの象徴機』。これは「剣士」の戦績が他の「ガンダム」よりも凄まじかったことから付けられた。

「「Ａ・Ｆ」が展開され次第、「箱付き」に部隊を向かわせろ。僕も出る。ここの指揮は副艦長、君に任せる」

「えっ！　艦長が出るんですかって、もう行っちゃったんですか！」

「「Ａ・Ｆ」、発動まであと１０秒！」

「敵艦との距離、残り２５００です！」

そして、最も忌避される綽名が、

「ええいっ！　本当にあの人はいつも突然なんだから！」

「敵艦よりアンノウンが３つ発進しました！　モニターに出します！」

「なっ！　ここは次元空間だぞ！？　そんな中で行動することができるのは艦船クラス規模だけなはずだ！？　なのに、何故人型サイズのロストロギアが行動できるんだ！？」

「……なるほど、だから艦長は「Ａ・Ｆ」を展開したのか……」

「今まで使ったこと無いから何に使うか分からなかったけど、こういう時に使うんだ」

「……待てよ、もし艦長がこれを知っていたのなら、もしかして艦

長はあの「ガンダム」とかいうロストロギアと過去に戦ったことがあるんじゃないか？」
「でも、「ガンダム」って確か８つの次元世界を滅ぼしたんでしょう？　それなのに聞いたことすら無いのはおかしいわよ」

『オーバーＳキラー』

「そこ！　無駄口を叩くなら手を動かせ！　戦闘中だぞ！」
「「「りょ、了解！」」」

「剣士」が殺したオーバーＳランク魔導師の数は、管理局が現在確認している中では過去最高であったが為に付けられた、最悪にして最凶の綽名である。だからクロノは「剣士」だけでもこの戦闘で討つつもりであった。例え、自分が死ぬことになっても。

「「Ａ・Ｆ」、発動しました！」
「艦長」
『分かった。各部隊に通達しろ！　自分の命を一番に考えろと』

そして、ついに舞台と部隊は揃う。「ＣＢ」と時空管理局双方の。
それが果たして何を齎すのか。それを知る者は、

（（……））

唯二人のみ。

『よし、出るぞ！』

『相手が「A・F」を展開してきたということは、もう間も無く魔導師が出てくるはずだ』

『分かってるさ』

『……』

ティエリアを先頭に、ブリングの紫基調のガラッゾ、リボンズの白金のガデッサが敵を迎え撃つため、それぞれ指示された配置につく。その視線の先には巨大な魔法陣を艦体の下部に展開させたクラウディアがあった。そして、その船から優に５０もの魔導師が一斉に飛び出してきた。

『予想していた数と違うな』

『確かにね。いくらなんでも少なすぎるとは思わないかい？』
『……あと１０は予想していた』

５０の魔導師。それはスメラギが予報した敵戦力よりも、遥かに少ないものでしかない。そう、予報された最低戦力よりも少ないモノでしかないのだ。はっきりいって、それだけの戦力で「ＣＢ」と戦おうとするなど、無謀以外の何物でもない。

『しかし、相手はあのクロノ・ハラオウンだ。恐らく何かしら作戦があると思われるが、君達はどう思う？』
『そうだね。確かに相手には作戦があることは否めないね。でも、圧倒的な力の前にはそんな物など役に立たないだろう？』
『……正面から力の差を見せつけ、撤退させる』
『……分かった。ここは正面から迎え撃つとしよう。リボンズ・アルマーク、作戦通りにタイミングを合わせて一斉砲撃だ、いいな？』
『ああ、分かっているさ』
『その砲撃の余波が収まる前に、ブリングは敵に接近して目の前に居る魔導師を斬るんだ』
『……了解』
『ふっ。「ガンダムマイスター」と「ライセンサー」の力を彼らに見せてあげましょう』
『そうだな。彼らももう忘れているかもしれないな、「ガンダム」の力を』

そう言ってティエリアはフェイスバーストを展開し、ＧＮバズーカ？とＧＮキャノンを連結させた。そして、リボンズもガデッサのＧＮメガランチャーを構えた。それとほぼ同時にトレミーからミサイルが敵魔導師に向かって雨の如く放たれた。そのミサイルは魔導師達のわずか前方で爆発し、それに拍子抜けしたのか、敵魔導師の動きが一瞬だが止まったのをティエリアとリボンズは見逃さなかっ

た。

「何をやっている！　止まったら死ぬぞ！」

クロノが敵の狙いに気付き、急いでミサイルによってばら撒かれた『機雷群』に気付かせ、回避するよう叫んだが、それは遅すぎた。

『高濃度圧縮粒子充填、圧縮粒子解放。ツインバスターキャノン、発射』

『高濃度圧縮粒子充填、圧縮粒子解放。ＧＮメガランチャー、発射』

桃色の極光と橙色の極光が、未だ脱出できていない魔導師がいる機雷群へと突き刺さった。そして、地獄の劫火もかくやという爆炎と閃光と煙幕が「Ａ・Ｆ」内に巻き起こった。悲鳴と絶叫が飛び交う中、その砲撃の余波が終わらない間にブリングのガラッゾは魔導師達に近づき、最も近くにいた魔導師をＧＮビームクローで真っ二つに斬り裂いた。

「え」

その言葉がその魔導師が最後に発した言葉となった。それを見た魔導師達は相手が本当に殺傷魔法を使用していることへ驚き、さらに、目の前に居る敵機が並みの魔導師など相手にしないモノであることを改めて知った。そして、これからどう対処するかを迷ってしまい、先程クロノに言われたことも忘れ、僅かながらも動きを止めてしまった。その隙を狙っていたモノ達がいたのにも関わらず。

『よし。作戦通り、もう１度砲撃を放つぞ』

『分かって、ぐあっ！？』

『リボンズ・アルマーク！？』

そして、その隙を狙っていたモノ達ーティエリアとリボンズーは作戦通りに砲撃を放とうとするも、予想以上のスピードで迫ってきた魔導師ークロノーに邪魔をされ、それを実行することができなかった。

「第1、第3部隊はその白金を相手にしろ！　第2、第4部隊は紫だ！　第5部隊は「箱付き」に向かえ！　僕は「デカブツ」を押さえる！　」

クロノはリボンズに速度を最大限につけた飛び蹴りを喰らわせた次の瞬間には矢継ぎ早に指示を出していた。先程の攻撃で10人ほどやられたが、それはまだ許容できる範囲の被害であり、敵一機に対して常に7，8人で当たれるように部隊を割り振っていく。

『クッ！？』

「ここから先は僕が相手だ、「デカブツ」！」

ティエリアは目の前で吹き飛ばされたリボンズの援護をしようとするも、それをクロノはさせなかった。まるで挑発するかのように「デカブツ」の目の前に浮き、持っている2つのデバイスーデュランダムとS2Uーを「デカブツ」へと向ける。それは一見すると挑発に見えないかもしれないが、少なくてもティエリアにとっては挑発足る行為であった。

『たった一人でセラヴィーを相手にするなど！』

「クッ！」

ティエリアはリボンズが態勢を立て直し、魔導師と交戦しているのを確認しつつ、目の前の魔導師に4つあるGNキャノンを連射し

た。クロノはそれを最小限の動きで避けつつも、セラヴィーの隙を見ては魔法を撃ち込む。しかし、それらは全てGNフィールドに阻まれ、本体には一撃たりとも入っていない。

『ちょこまかと！』

「クソッ、硬いな……！」

ティエリアがクロノの動きに翻弄され、それに苛立っているのと同様に、クロノもまたセラヴィーの高い防御力に思わず悪態をついてしまうほど苛立っていた。お互いにダメージを与えられず、そのまましばらくその状況が続くと、戦場に変化が起きた。

『なっ！　もう一隻だと！？　っぐうう！？』

「喰らえ、「デカブツ」！　スティンガーレイ！」

『『スティンガーレイ』』

セラヴィーが突如トレミーの左舷方向に現れたもう一隻の船に驚いている隙をつき、クロノはGNフィールドを張られる前にセラヴィーに魔法を叩きこんだ。この魔法は威力自体はそれほど強くはないが、魔力を込めればそれなりに強力なので、これでいくらかダメージを負ってくれればとクロノは思ったが、

「……本当に君とは相性が悪いな、「デカブツ」。あの威力を受けて無傷なんて、いくらなんでも冗談が過ぎるぞ……」

無傷。そう、「デカブツ」は文字通り掠り傷すら負っていなかった。それに半ば呆れながらも再び「デカブツ」にデバイスを向けるが、何故か「デカブツ」は一向に動こうとはしなかった。それを怪訝に眺めながらも決して油断などをせず、クロノは「デカブツ」を注視した。

「……？」

何時まで経っても動こうとはしない「デカブツ」に疑問を覚えながらも、クロノはデバイスに入れる力を緩めなかった。しかし、

「……何？」

それも

「何が……一体何が起こっているんだ？」

世界が蒼翠色に染まるまでであった。

リボンズはクロノに飛び蹴りをされて態勢を崩されたのにも関わらず、それを僅か1，2秒で立て直し、此方に向かっている魔導師達とトレミーに向かっている魔導師達の両方と戦闘していた。幸いにも相手の中にはオーバーSランクがいないらしく、このガデッサならそれほど苦戦しなくて済みそうであった。

『全くもって理解しがたいね、この魔導師達は。このガデッサの性

能を見てまだ戦おうとするなんて……』
『イエス、ライセンサー。私も理解できません』
『そうか、君もそう思うかい』

魔導師達はリボンズによってその数を半数以下にまで減らされたにも関わらず、決して攻撃の手を休めなかった。しかし、魔導師達が揃っていた時ですら攻撃を当てるだけで精一杯だったのに（ただしダメージは与えられなかった）、半数に減らされた今となっては最早当てることさえできなくなっていた。それをリボンズは退屈そうに眺めながらも、次々とＧＮメガランチャーとビームサーベルを巧みに使って魔導師を減らしていく。しかし、その余裕ももう一隻の船が現れるまでであった。

『そんなバカな!?　一体どうやってあそこまで近づけたんだ!』
『恐らくですが、次元跳躍を行ったかと』
『！　そ、そうか、その手があったか!』

もう一隻の船はここは違う次元から次元跳躍を行い、トレミーのすぐ近くにまで迫っていた。その船はすでに「Ａ・Ｆ」を展開しており、魔導師も１０人ほどがすでに出ているようだ。その中にはＡＡＡランク以上の魔力を保有している者もいた。もしそんな奴に今の「ガンダム」も「ライセンス」も無いトレミーが襲われたらひとたまりもない。リボンズは急ぎトレミーへ戻ろうとするも、魔導師がその邪魔をしてきて戻ることができなかった。先ほどとは逆の立場になったこの状況に焦り、他の仲間の状況を確認するも、誰もトレミーに戻れそうになかった。

『クッ！　こんなところで!』
『ライセンサー、敵とトレミーが接触します』
『しまった！　間に合わないか……！』

リボンズは魔導師がトレミーの何故か解放してある左舷に到達し、そこに魔法を放つのを見ながら、これで「ＣＢ」が破綻するかもしれないと考えていた。そう、

『！　ライセンサー、トレミー内部から凄まじい量のＧＮ粒子を確認。しかし、この量は一体……』

『何？　それはどういうこ……と……』

トレミーの左舷ＧＮ転送・カタパルトデッキから青と緑が混じったような色のＧＮ粒子の濁流が溢れ出るまでは。

『……もう一隻だと？』

『イエス』

『……確かに』

ブリングは魔導師を斬り裂き、降って湧いたように現れたもう一隻の艦を眺めながらもどうすればいいのかを思案する。しかし、その結論は、

『……しかし、ここからではとてもではないが……』
『ええ、間に合いません』

そう、今すぐ此処から移動してもまだ相手の方が早い。ならば、自身の任務を遂行しようという結論に彼は至った。

『……クロノ・ハラオウンはどこだ？』
『現在セラヴィーと交戦中』
『……今回は諦めなければいけないか』

ブリングにとってクロノ・ハラオウンを倒し、ヨハン・トリニティの仇を取ることは確かに重要なことではあるが、それは作戦を無視してまで行う程の物では無い。故に、彼は今回は諦めた、クロノを倒すことを。いつかその機会が巡ってくると信じ。

『……なんだ、あの粒子量は？　一体何をどうすればああなるのだ？』
『有り得るとすれば、『ダブルオー』しか考えられません』
『……ということは、起動したのか、遂に』
『恐らくは』

ブリングはいきなりトレミーから溢れ出るように噴き出しているＧＮ粒子を見て、イオリア・シュヘンベルグが『ダブルオー』を「ＣＢ」の要であり最強の「ガンダム」であると言った理由を理解した。そして、『計画』が成功することも確信した。ブリングには目の前の光景を生み出した『ダブルオー』が本当の神のように見えたのだ。

『……』

『ライセンサー、目の前に敵がいる状況です。気を引き締めてください』
『……ガラッゾ、すまん。もう少し、もう少しだけこれを見させてくれ』
『……』

刹那とリボンズは「ガンダム」を神とみなしていたが、今ならその気持ちも理解できる。誰だってこの光景を見せられればそう思ってもおかしくはないだろう。

『……『ダブルオーガンダム』。世界から戦争を根絶させる「ガンダム」……』
『イエス、ライセンサー。イオリア・シュヘンベルグはそう言っています』
『……そして……人類を……』
『イエス、ライセンサー。それこそが私達の真の目的です。くれぐれもお間違いの無きようお願いします』
『……分かっている』

ブリングはまるで自分に言い聞かせるように呟きながら、再び目の前の魔導師達に向き合った。その心を歓喜と苦悩に支配されながら。

「刹那、完成したぞい！」
「分かった」
「これがお前の「ガンダム」である『ダブルオーガンダム』だ！」
「これが……」

刹那はイアンから渡された自身の「ガンダム」を見る。しかし、「ガンダム」は何故か二つに増えていた。形状は円錐の形で直径１０センチ程の大きさであったのは変わりないのだが、何故かＧＮドライヴを二つ渡された。それに刹那は困惑を隠せなかった。

「イアン、これはどういうことだ？　何故オレの「ガンダム」が二つになっている？」
「なにい！？　お前さん説明されていないのか！？　ブリッジに一回ぐらいは行ったんじゃろう！？」
「……ここでずっと筋トレをしていた」

イアンはその返事を聞くと、頭を抱えながら説明を行った。ちなみに、スメラギやティエリア達が刹那に説明をしなかったのには理由がある。彼らはイアンが説明してくれただろうと思っていたのだ。それに、なにやら真面目な顔で黙々と筋トレをこなす刹那ははっきり言ってちょっと、いやかなり怖かったのだ。

「はぁ、先が思いやられるわい……。この「ガンダム」にはな、「ツインドライヴシステム」というものが組み込まれておる」
「「ツインドライヴシステム」？」
「まあ二つのＧＮドライヴをシンクロさせ、粒子を二乗化するシステムなんだが……」
「が？」

「前にも言った通り、起動することができなかったんじゃ。このシステムは二つのＧＮドライヴをシンクロさせるところに問題があって、どんな組み合わせにしてもシュミレートでは一回も起動すらしなかった」
「……」
「それは最も同調率が高かったエクシアとＯガンダムのＧＮドライヴも同じじゃったんだが、実際に実験をしてみると数値がシュミレートと違くなってな。それでこれから実際にやってもらおうと思ってエクシアを調整していたんじゃが……」
「敵が攻めてきてそれどころではなくなった……」
「そういうことだ。というわけで刹那、ぶっつけ本番で悪いんじゃが左舷４番デッキでこれを起動させてもらえないか？」
「了解した。ところで、二つのＧＮドライヴがあるなら管制人格はどうなるんだ？」
「安心しろい、そこはちゃんと考えてある。何の心配もせずに行って来い！」
「……了解」

刹那は一抹の不安と疑問を感じながらも、左舷に４つある（カタパルトは片方に４つずつあり、中央にあるものと合わせると９つもある）の内、最も左側にあるデッキに入り、出撃準備を整えた。そして、管制人格がどうなっているかを確かめるべく、元がエクシアのＧＮ－００１と書かれたＧＮドライブに話しかけた。

「……エクシア？」
『イエス、マイスター』
「お前は以前のお前のままなのか？」
『イエス、マイスター。私の管制人格に変更はありません』

それに安堵しながら、今度はＯガンダムであるはずのＧＮ－００

0と書かれたGNドライブに話しかけた。

「そうか。では、GN－000はまさか、Oガンダムなのか？」

『イエス、マイスター。私は貴方と出会った8年前と管制人格は変わっておりません』

「そうか……あの時のまま、か……」

刹那は8年前に助けられ、自身の憧れでもあった「ガンダム」とともに戦えることに喜びを隠せなかった。しかし、それも一瞬のことであった。なぜなら、何故かは分からないが、エクシアからもの凄い殺気がマイスターであるはずの刹那に向けて放たれたからである。

『……マ・イ・ス・ター？　どうしてそんなに顔がにやけているんですか？　そんなに私を除けモノにして楽しいんですか？　そんなにOガンダムのことが好きなのですか？　私よりも好きなんですか？　……答えてください！　マイスターッ！！』

「……エクシア、一体どうしたんだ？　お前らしくないぞ？」

『気にしないでください、マイスター。ただの嫉妬ですから』

『……どうしてOガンダムと一緒なんですか。私はマイスターと二人っきりで一緒に居たかったのに……。イアン・ヴァスティ、この恨み、決して忘れませんよ……！』

刹那はそう言って、何時までもぐちぐちいうエクシアに困惑しながらも（引きながらも）、起動の準備を進めていく。そして、後は起動させ、発進させるだけになった時、いきなり通信がブリッジから繋がれた。

『刹那、聞こえる？』

「ああ」

『敵が左舷前方に現れたの。ティエリア達は魔導師達に邪魔をされて此方の援護に回れない。よって、あなたに彼らの迎撃を任せたいんだけど、できるかしら？』

「可能だ」

『……分かったわ、あなたに任せる。フェルト、発進シークエンスを初めて頂戴』

『いいんですか、スメラギさん？』

『彼を信じるしかない無いわね』

『……分かりました。これより発進シークエンスを開始します。リニアカタパルトの電圧、２２０～５５０に固定』

「行くぞ、エクシア、Ｏガンダム」

『『イエス、マイスター』』

『エクシアとＯガンダムのＧＮドライヴ、シンクロスタート。同調率安定領域に到達、現在７２，５％』

『『ダブルオーガンダム』スタンバイレディ、セットアップ。ＧＮ－０００　ＯＯＧＵＮＤＡＭ　インストール、コンプリート』

『「ツインドライヴシステム」起動、失敗。同システムを起動させるには同調率８０％を超える必要あり』

『現在の『ダブルオーガンダム』の出力、１９％にまで低下』

「目覚めてくれ、『ダブルオー』」

『カタパルト展開。『ダブルオー』をリニアカタパルトに固定、射出タイミングを刹那に委譲します』

「ここには」

『マイスター、ＴＲＡＮＳ－ＡＭの使用を提案します』
『却下します、エクシア。今トランザムを発動させたら最悪爆発する可能性があります』

「エクシアと」

『敵と接触します！　このままでは』
『急いで、刹那っ！』

「Ｏガンダムと」

『マイスター、時間がありません！　ＴＲＡＮＳ－ＡＭを使用してください！』
『……背に腹は代えられません。マイスター、使用を！』
『敵左舷第４カタパルトに接触！　推定ＡＡＡランクの魔導師です！』
『刹那！！』

「――――オレがいるっ！　トランザム！」

第9話　部隊と舞台が揃うまで（後書き）

今更の様なことですが、「ガンダム」の体長は元の体長の十分の一、つまり、大体１８０センチです。中には困惑していた読者もいたと思います。本当に申し訳ございません。

「アトモスフィア・フィールド（Ａ・Ｆ）」とは、次元空間でも活動可能な「ガンダム」に対抗するために開発された結界魔法です。その能力は、結界内を大気圏内（ただし無重力）にするという物。大体半径2キロが展開可能距離です。筆者は魔法をあまり理解していない点があるので、おかしいところがあれば、御指摘を御願い致します。長々と申し訳ありませんでした。このような駄作を読んでくださった皆様に感謝を。

最後に。

ヒロインは　はやて　です。

第１０話　天使再臨と３つの「無限」（前書き）

この小説を、２・２６事件で亡くなった私の故郷の偉人である斎藤実に捧げる……。

いきなり変な文章から入りましたが、本編には何も関係ありません。今回の話でもオリキャラ・オリ魔法が登場しますので、そういったものが苦手な方は戻る方がよろしいかと……。

では、開演です。

第１０話　天使再臨と３つの「無限」

ＸＶ級大型次元航行船・クリステヴァに所属するＡＡＡランク魔導師であるソシュール＝バーミット二等空尉は「箱付き」の展開されているカタパルトに魔法を撃ち込むべく、対空砲火を切り抜け、その目前にまで迫った。しかし、その中には発進準備をしている新型の「ガンダム」がいた。

「もう一機の「ガンダム」！？」

ソシュールは「ＣＢ」との４年前の戦いを経験している数少ない魔導師の一人であり、同時にクリステヴァの最強戦力でもあった。しかし、その彼女をしても目の前の新型「ガンダム」は余りにも危険なモノであることが瞬時に理解させられた。しかも、よく見てみるとそのシルエットが、自身をかつて死ぬ一歩手前にまで追い込み、最悪のテロリストの名を欲しい侭にしている「剣士」に似ているのだ。

「っさせない！」

もし「剣士」が再び世界に現れたら、と思うだけで彼女は腰が抜けそうになる。しかし、目の前の「ガンダム」は見る限りまだ起動して無いようで、これほどのチャンスを見逃すほど彼女は弱くなかった。

「シュラヴァーラ、カートリッジロード！」

『カートリッジロード』

「何物にも勝る鋼の槍よ、我が怨敵を貫き、その肉体を破砕させよ！　アイアンストーム！」

『アイアンストーム』

槍型アームドデバイス・シュラヴァーラがカートリッジロードをする鈍い音を聞きながら、「ガンダム」の強固な装甲をも貫くであろう自身の得意魔法を発動させる。

「いけえっ！」

そして、幾本もの鋼の槍が渦を巻きながら敵に直進するも、敵は何も動きを見せず、そのまま避けることが不可能な距離になった。その時、私は勝利を確信した。そう、

「なっ！？」

「ガンダム」が紅く輝き、肩に装備している二つの「コーン」を此方に向け、そこから莫大な量の蒼翠の粒子を噴射するまでは。

「――――オレがいるっ！　トランザム！」

刹那がトランザムを発動させると、『ダブルオー』の体が紅く輝き、「ツインドライブシステム」が稼働した。そして、そのまま刹那は目の前の魔導師から放たれた魔法を防ぐべく、エクシアとOガ

ンダムから脳内に送られてきた『ダブルオー』のスペック・データからこの魔法を防げそうなモノを探し、見つけ、それを実行させた。

『エクシア、Ｏガンダム！　ＧＮジェット！』
『『イエス、マイスター。ＧＮジェット』』

すると、『ダブルオー』の両肩にあるＧＮドライヴが前を向き、そこから莫大な量のＧＮ粒子を放出した。その放出されたＧＮ粒子の量は「Ａ・Ｆ」内に青碧色の粒子の大河を作り、その空間内を青と碧で染めるほどであった。ＧＮジェットに飲み込まれ、さきほどまでいた場所から押し出された魔導師もその光景に目を奪われている。

『なんだこの粒子量は！』
『こ、これが「ツインドライヴシステム」……』
『そして、『ダブルオー』の力……』

そして、この光景に目を奪われていたのは刹那達も一緒であった。しかし、ここが戦場であることを思い出し、すぐに『ダブルオー』をカタパルトから発進させる。

『『ダブルオーガンダム』、刹那・Ｆ・セイエイ、出る！』

刹那が発進したその頃になってようやく魔導師達も我に返ったのか、トレミーから発進した『ダブルオー』に向かって無数の射撃魔法を放つ。総勢１０名からなる魔導師達の攻撃は最早「点」ではなく「面」となって『ダブルオー』に襲いかかる。しかし、刹那は両肩にあるＧＮドライヴを使って縦横無尽に動き、たまに当たりそうになった射撃魔法も出力を抑えたＧＮジェットで防ぎ、一発たりとも当たらせない。

『『ダブルオーガンダム』、目標を駆逐する！』

そして、刹那はＧＮソード?をライフルモードに変形させ、「面」の合間から魔導師達を狙い撃つ。その光線は最早「射撃」では無く「砲撃」に近い威力を持っており、展開されていた防御魔法ごと魔導師を貫いた。

「な、なんだと！?」

「なんだあの性能は！？　一発で防御ごと貫いたぞ！?」

「こんなこと、聞いて無いぞ！?」

魔導師達の驚愕と恐怖が入り混じった声を聞きながら、刹那は魔導師達を次々と正確無比に狙い撃ち抜いていく。そして、僅か３０秒後には魔導師達は残り３人にまで減らされていた。その事実に愕然としながらも、ソシュールはこの戦力では新型「ガンダム」に勝てない事を悟い、残り２名の隊員に最後になるであろう命令を言った。

「……いいですか、私が囮になってあれを引き付けます。その間にあなた達は脱出をしてください」

「そんな！？　隊長を置いてそんなことできるわけが……」

「これは次元航行部隊・クリステヴァ隊隊長である私の命令です！　拒否は認めません！」

「し、しかし……」

「……いつか、いつか必ず「ガンダム」を……「剣士」を倒して、この世界に平和を齎してください。これが私の最後の命令です。さあ、行きなさい！」

「クッ。隊長……絶対に勝って戻ってきてください！　私達はそれを信じてクリステヴァで待っていますから！」

そう言って隊員2名は悔しそうにしながら、ソシュールの最後の命令を実行するためにこの場から離れていく。それを横目で見ながら、

「……あなた達と過ごした1年……楽しかったわよ……」

ソシュールはすぐに目の前の強大すぎる相手に意識を集中させた。

「行くわよ、「剣士」ぃぃぃっ！」

そして、ソシュールは無詠唱で射撃魔法を乱射する。しかし、刹那はその全てを避け、防ぎ、逆に反撃として3本もの光線をソシュールに浴びせる。ソシュールはその光線を右へ左へと小刻みに動き、全てを避け、射撃魔法を乱射しつつ距離を縮め、接近戦に持ち込もうとする。

ソシュールと『ダブルオー』ではミドルレンジとロングレンジでの撃ち合いにおいて、あまりにも火力が違いすぎて勝負にならない。ソシュールはせいぜいBランクの射撃魔法が限界なのに、向こうはAAかAAAランクに匹敵するような砲撃に近い光線を連続で放ってくるのだ。

それに、ソシュールは近代ベルカ式の魔導師であり、クロスレンジでこそその真価を発揮するのである。しかし、クロスレンジにて真価を発揮するのは『ダブルオー』も同じ事であった。何故ならこの「ガンダム」はエクシアを参考にして作られているモノだからである。

『どうやら敵はクロスレンジでの戦闘を望んでいるようだ』

『マイスター、乗った方がいいのでは？　この「ガンダム」はクロスレンジにこそその真価を発揮します』

『それに、データ不足も否めませんから、ここでクロスレンジのデータを採取するべきだと提案します』
『……よし、分かった。ここは敵の誘いに乗ろう』

ソシュールは敵もクロスレンジにこそ真の実力を発揮するものだと理解していた。その「ガンダム」のシルエットが「剣士」に似ているのであれば、十中八九そうであると考えていたのだ。しかし、ミドル・ロングレンジでは勝負にならないのも事実であるため、それならばいっそ自身の得意分野で戦った方がまだ勝負になれると踏んだのだ。そして、「ガンダム」はよほど自信があるのか、その誘いに乗ってきた。そう、ミドル・ロングレンジで戦っていれば負けることが無いにも関わらずだ。しかし、これはソシュールにとって都合のいいことであった。

「クロスレンジでは、互角のはず!?」
『これが、オレ達の!』

そう、都合がいい筈であったのだ、ソシュールにとっては。少なくても敵と互角に戦える筈であったのだ。伊達でＡＡＡランク保持者になってなどいないのだから。しかし、ソシュールの予想は真っ二つに斬り裂かれた。そう、自身のデバイスである「シュラヴァーラ」と同様に。

「……え?」

しかし、その光景を認識する前にソシュールは上半身と下半身を真っ二つにされ、意識が途絶え、二度と目覚めることは無かった。

『「ガンダム」だ！！』

クロノはＡＡＡランクの近代ベルカ式魔導師であるはずのソシュール＝バーミットが、たった一太刀でデバイスごと真っ二つにされた光景を信じられない思いで見つめていた。

「そ、そんなバカなことが……」

クロノはソシュールと何度か模擬戦をしたことがあり、その実力の程を知っていた。確かに遠距離においてはＢランクがせいぜいだが、近距離においてはクロノやかつての「剣士」と互角の戦いをしたことがあるほどなのだ。それなのに、この「剣士」の後継機らしき「ガンダム」はたった一太刀でソシュールを倒した。それも、デバイスごと叩き斬るという離れ業を駆使して。

「あって……たまるかっ！」

本来デバイスは破壊されないように過剰なほどの硬度を持たされている。何故なら、デバイスが破壊されればそれは即ち即敗北に繋がるからである。魔導師の殆どはデバイスのサポートによって魔法を行使しており、もしデバイスが無かった場合、ランクで言えばス

トレージデバイスでも3ランク近くは下がるのだ。例えばAランクの魔導師ならストレージデバイスを破壊された場合、最早Dランク魔導師でしかない。しかも、これがもしインテリジェントデバイスだったら、さらに下がる可能性がある。よって、デバイス、特に戦闘にデバイスを武器として使用するアームドデバイスは過剰な硬度を求められ、それを持たされるようになる。それを、新型の「ガンダム」は正面からの斬り合いで真っ二つにしたのだ。そこにどれ程の切れ味と膂力があるのかを想像するだけで背筋が寒くなる。

「……くそっ、撤退信号か！　……此方クロノ・ハラオウン提督。これより撤退する。各部隊は「ガンダム」に注意を払いつつ速やかに撤退せよ」

クラウディアとクリステヴァから撤退信号が放たれ、戦闘空域にいる魔導師達は撤退していった。クロノは自身の命を捨ててでも「剣士」を討ちたかったが、「デカブツ」との戦闘で消耗した今、新型の「ガンダム」と戦っても犬死になるであろうことを察し、自身も「デカブツ」に牽制の魔法を撃ち込みながら撤退した。その胸に苦過ぎるモノを抱えながら。

『これが、『ダブルオー』の力なのか？』

『イエス、マイスター。『ダブルオーガンダム』は推定ＳＳランクの性能を持っています。なので、この結果は当然の帰結であるかと思われます』

『そうです、マイスター。これが私とマイスターの力なのです。絶対にそうです。それ以外の何者でもありません。決して、決してＯなんたらの力ではありません。これは確定事項なのです。反論は薙ぎ払って駆逐します』

『エクシア……お前はどうしてそんなにＯガンダムを認めない？』

『マイスターには絶対に分かりませんよ、乙女の心を持つ私の気持ちなんて……』

『マイスター、気にしないでください。これは一種の調整ミスによって起こってしまった不幸な事故ですから』

『そうか、分かった』

『マイスター、そこは分かんないでください！　それでは私が調整ミスでおかしくなったようではありませんか！？』

『マイスター、分かってください。これは不幸な事故によって起きてしまったことなのです』

刹那達がそんなことを話しながらトレミーに帰還すると、そこにティエリア、リボンズ、ブリングがやってきた。そして、そこから３人（実質２人）の怒涛の質問攻めが始まった。

「刹那、今のが『ダブルオー』の力なのか！？　「ツインドライヴシステム」というものはあんなことすら可能にしてしまうものなのか！？」

「刹那、久しぶりだね。それにＯガンダムも。ところであの粒子量が本当に『ダブルオー』単体で可能なのか答えてほしいんだけど。更にいえば管制人格がどうなっているかも詳しく……」

「……お前達の「神」を見た気がした。そして、その気持ちも理解できた」

しかし、刹那が答える前にイアンがやってきて次々とそれに答えていく。それに疑問をいくつか持ちながらもティエリア達は納得していく。そして、スメラギから『計画』に関する話があると言われ、一同はオペレーションルームへと足を運んだ。そこには現在プトレマイオス?にいる全乗組員が集合していた。

「来たわね、皆」
「ミス・スメラギ、『計画』に関する話とは?」
「ええ。刹那が『ダブルオーガンダム』を起動させたことで、イオリア・シュヘンベルグが遂に『計画』を実行させるそうよ」
「「「なっ!」」」

「そう、ついに来たのよ。「CB」の『計画』を実行させる時が……!」

「……」

60名中戦死者35名、負傷者13名。

「……」

これが本作戦のこちら側の損害であり、対して向こうの損害はほぼ0である。

「……」

つまり本作戦は失敗し、無駄な損害を出しただけであった。

「……っ！」

尚、本作戦の責任は提案者であるクロノ・ハラオウン提督と作戦を承認したラルゴ・キール栄誉元帥にあるとする。

「……そ」

よって、両名に対し、後日処罰を通達する。

「くそ……くそ……！」

臨時最高評議会のレオーネ・フィルス法務顧問相談役、ミゼット・クローベル本局統幕議長より

「クソーッ！」

ドン！　ドン！　ドン！

クロノは激情のままに自身の執務室の机を殴った。1回や2回では無い、既に何十回も繰り返している。しかし、どれだけやっても

その激情が治まる気配がない。逆に高まっているぐらいだ。

「なんてこと、を……してしまったんだ、僕は……」

今のクロノを支配している感情（激情）はクロノ自身でも分かっていない。ポッと表れては消え、また別の感情が表れ、消える。それを繰り返しているので把握のしようが無いのだ。もちろんそれを抑えることは不可能であった。

「う、うぅ……。どうしたら、どうしたらいいんだ、僕は……」

戦闘が終わってどれくらい経ったかは分からない。しかし、戦闘（作戦）は終わったのだ。甚大な被害を残して。そして、それがクロノを苛ます。まるでお前が殺したと言われているようだった。

「……」

どれだけそうやっていたかは分からない。しかし、クロノは既に立ち上がっていた。弱冠２５歳で提督の地位につき、ＸＶ級大型次元航行船の艦長を任されている彼の心は強靭だ。同年代と比べても恐らく彼と同等の心を持つ者はほとんどいないだろう。しかし、たとえどんなに強い心を持っていたとしても、壊れる時は壊れるし、折れる時はあっけなく折れる。今のクロノの心はそのギリギリを渡っていた。

「……」

しかし、そんな彼の心を癒せる人物がいる。だが、その人物は今ここにはいない。よって今のクロノの心を癒せる人物もいない。

「……「ガンダム」っ！」

クロノはそう叫ぶとブリッジに戻って行った。大切な何かが胸から零れ墜ちていくのを感じながら。

――「ガンダム」、か？　いや、彼らは４年前に時空管理局に敗れ、壊滅したはずだ。なのに、何故今になって現れたんだい、「ガンダム」？

――それにしても、初めて生の「ガンダム」を見たが、なるほど、確かに彼の言うように実に興味深いモノである。おかげで満たされていたはずの泉の水がまた涸れ始めてきたよ。ふむ、とすると、彼の提案に乗った方がこの泉の水を満たせるようだ。幸いにも彼とのコンタクトには困らないだろうし、すぐにどうにかしてくれるだろう。

――あぁ、それにしても素晴らしいな、「ガンダム」というものは。あれをもし自由に研究できるのであればこんなところには一分一秒たりとも居たくない。彼女と話す機会が失われるかもしれないのは残念だが、それを補って余りあるほどの魅力が「ガンダム」にはある。

――あぁ、泉の水が満たせ満たせと僕に叫んでくる。本当にどうしようもないな、僕は。満たしても満たしても、満たした次の瞬間には枯れ始めているのだから。だから僕はこう言われるんだろうな、「無限の欲望」と――

『漸(ようや)くここまで辿り着けましたね……』

『うむ、そうだな』

真っ暗な中で、二つのモニターだけが対面しながら光を放つ空間。そこでは二人の人物が先程までの戦闘を見ながら、あることについて話し合っていた。

『それで、これからどうするんですか？　まさか貴方が直接動くんですか？』

『いや、まずは『宣言』を行としよう』

一方のモニターが発した『宣言』という言葉に、もう一方のモニターに映っていた人物の表情が、僅かに動いた。このモニターに映っている人物達は並みのことでは動じたりすることが無いことから、

『宣言』という言葉が持つ意味は相当なものであることが分かる。

『ということは、遂に始めるんですね。「ＣＢ」の『計画』を……』

『そうだ』

『現在確認されている全次元世界に対し『宣言』を行い、それと同時に幾つかの次元世界を襲撃し、「ＣＢ」の本気と偽の目的を世界に広める第一段階……』

『まずはそれを完遂させよう。それができなければ、話にもならんからな。それと、君にはその準備に取り掛かってもらいたい。では、頼むぞ』

そう言って一方のモニターは通信を切ろうとしたが、自分の対面にいる人物が何かを言いたそうな気配を感じ、モニターを切るのをやめた。

『分かりました。……しかし、果たして「ＣＢ」は時空管理局に、いえ、世界そのものに勝てるでしょうか？』

『それは君が最も分かっていると思うが。どうかね、――君？』

そう呼ばれたモニターの人物は苦笑しながらも、その冗談であろう言葉に律儀に対応した。

『いえいえ。僕ごとき、貴方の前ではただの子供に過ぎませんよ』

『そうでしょう、イオリアさん？』

第１０話　天使再臨と３つの「無限」（後書き）

もし何かこの小説に足りない（もしくは対ガンダム戦に必要な）魔法がありましたら、是非御教え下さい。私はオリ魔法よりも公式で登場した魔法を主に使いたいと思っているので、そこまで気が回らないからです。これぞ、駄目作者クオリティ。……すいません。このような駄作を読んで下さった皆様に感謝を。

最後に。

ヒロインは　はやて　です。

第11話　『宣言』（前書き）

これから暫く戦闘パートがありませんが、これもこの小説の為だと思ってくださると幸いです。

では、開演です。

第11話　『宣言』

―新暦75年9月22日―

「ここは……どこや？」

八神　はやては見覚えのない真っ白な部屋で目を覚まし、周りを見渡しながらそう呟いた。

「うち、どうしてこないなところにおるんやろ？」

はやてはここに来る前の自分を思い出そうとするも、まったく思い出すことができなかった。仕方なく起きたばかりで渇いてる喉を潤わそうとし、左側にある水が入った容器をとろうとし、――気付いた。

「――へ？」

そう、左腕が自分の思った通りに動かないことを。人差し指を動かそうとしても全く動かせず、腕を上げようとしても数センチしか上がらないのだ。

「ど、どういうことや、これ！？」

そして、この光景ははやてにとっては二度目のことであった。かつて動かなかった足のリハビリをしているときによくこんな風になっていたのをはやては今でも覚えていた。

「うちの左腕になにがあったんや……」

その左腕を呆然と見ていたはやての頭の中に、不意にあるイメージが浮かび上がってきた。

――自身と対峙する半壊した機械のゴーレム

――そのゴーレムと戦う自分

――そして、左腕を切り落とされて気絶するじブん――強制カット

「うおえぇぇっ！」

そのイメージが頭をよぎった瞬間にはやては嘔吐した。そのイメージはあまりにも生々しく、かつリアルであった。そう、これが現実だと言わんばかりに。そして、その光景は弱冠１９歳のはやてには刺激が強すぎるモノだった。

「え、うぇ。なんや、今の映像は？　あれはほんまにあったことかいな？」

しかし、その刺激が強すぎる映像ははやてが無意識下で強制カットした。そのおかげか、はやてはすぐに正気を取り戻すことができたものの、結局、何故ここにいるのか分からないままだった。

「……まずは、ナースさん呼ぼか？」

はやては自身の吐瀉物で汚れた掛け布団を見てそう言った。

「闇の書」事件よりも過酷な運命を『神』や『無限』が作り出し、その運命で彼女を待ち構えていることも知らずに。

……ここが正念場か。がんばらないと、ね。皆に準備をさせて失敗しましたなんてかっこ悪いにも程があるし……

……ああ、そういえば、彼女は無事だったようだ。よかった……あの時は本当にひやりとしたなあ……

……全く、こういうイレギュラーは困るよね。こちらの心臓にも悪いし、『計画』に支障をきたすかもしれないし……

……ま、こういうことを起こさせない為に僕と『――――』があるから、今回は『計画』が始まっていなくて『――――』を起動させていなかった僕の落ち度だったな。これからは気をつけないとね……

……でも、本当に無事でよかったよ、はやて……

「……はやて……大丈夫かな？」
「大丈夫だよ、きっと。だから元気出して、ヴィータちゃん？」

なのはとヴィータは病院の食堂ではやての安否を気にしていた。はやてがここに瀕死の状態で運び込まれてもう三日が経とうとしていた。その間、はやては目を覚ますこともなく、ただ淡々と眠っていた。そんなはやての側に四六時中いて、まともに食事すら取っていなかったヴィータをなのはは強引に食事に連れて行った。

「……スバルも、大丈夫かな……？」
「……大丈夫だよ、きっと……」

そんなヴィータ達に更なる凶報が届いたのははやてが運び込まれた次の日であった。スターズ隊の一員であったスバルまでもが全身に傷を負い、四肢を切断され、現在ここことは別の病院に入院したというのだ。はやての事でギリギリだったヴィータの心はこの出来事に耐える事ができず、遂には病院の中であるにも関わらずグラーフアイゼンを振り回した。その時は偶然にもなのはがいて、なんとか被害を出さずに押さえつける事に成功したが、それ以降ヴィータはまるで抜け殻のようになってしまい、なのはがこうやって食事に誘わないと食事すらしなくなってしまった。

（どうして事件を解決させたのにこうなっちゃったのかな？）

なのはは自問するも、既にその答えは出ていた。

（……「ＣＢ」、か……）

「ＣＢ」。かつて時空管理局と戦い、敗れ、壊滅したはずの組織。あの医者（上司らしき人物）が言うには４年前にその戦いが起こったそうだ。しかし、なのははそんな出来事があったなんて聞いた事すらなかった。しかも、詳しいことを聞こうとしてもその医者は頑なに口を閉ざしてしまったので、結局何も分からなかった。

（４年前……戦い……あっ！　もしかして、あの事件と関係があるんじゃっ！？）

しかし、なのはは４年前にあったある事件を知っていた。通称「管理局の悪夢」と呼ばれる史上最悪の「ロストロギア」事件を。

（確か、あの事件にはフェイトちゃんとシグナムさん、そして、クロノ君とシャーリーも参加していたはず）

「管理局の悪夢」。それは、まさしく悪夢であった。管理局という組織に与えたダメージは「Ｊ・Ｓ事件」のほうが上だが、被害は比べることが馬鹿らしくなるほど違う。文字通り桁から違うのだ。「Ｊ・Ｓ事件」がミッド以外の次元世界や民間人に殆ど被害を出さなかったのに対し、「管理局の悪夢」はそんなことは関係が無いとばかりに無秩序に災厄を撒き散らした。

（そして、その事件でシグナムさんとクロノ君は入院を余儀なくされる怪我を負ってきて、フェイトちゃんは……）

その被害は８つの次元世界崩壊と管理局の全戦力の実に２０％に相当する戦力の壊滅、そして、「世界清浄」という当時反管理局勢力の中で最大の規模を誇っていた組織の崩壊というモノだった。当時はその「事件」について日夜特集が組まれ、あわや管理局の終焉になるのでは、とまで言われたほどである。なのはもその特集を何度か見ていたからその事件のことを覚えていた。

（……九死に一生を得るような怪我を負ってきた……）

それほどの被害を出した事件だが、何よりもこの事件を恐ろしい物とさせたのが、たった１５個のロストロギアによりこの事件が起こされたということだ。そして、その１５個のロストロギアが次元断層を生み出し、このような被害を齎した、らしい。そのロストロギアは虚数空間に飲み込まれ、未だ詳細が分かっていないが。

（もし、関係があるとしたら……。フェイトちゃんやシグナムさん、クロノ君、シャーリーが何か知っているかも）

ちなみに、時管理局が崩壊しなかったのは、ひとえに「世界清浄」が既に崩壊していたからである。もしかの組織が残っていたら次元大戦が起こっていた可能性があった。そうなれば恐らく時空管理局の崩壊と数え切れない程の命が失われる事態を引き起こしていたことだろう。このことを不幸中の幸いととる人達もいるぐらいである。

（……でも）

そして、この事件は詳しく調査をしようとしても、肝心のロストロギアが虚数空間にあるためほとんど調査することができず、それを口実に最高評議会によって調査の仕様が無いと断定され、調査す

ることを禁止させたり、当時の詳細な資料もあまりにも危険すぎるロストロギアということで無限書庫の禁書に特例として指定された（無限書庫で禁書に指定された物は例えどんな人物であろうとも、無限書庫の司書長の許可が無い限り閲覧することが不可能となっている）。よって、この事件はほとんど情報が流れず、当時現場にいた人達も決して口外することがなかったので、その事件の詳細を知る者たちはほんの一握りしかいなく、大半の局員達の中ではそんな事件があったことすら知らない者もいる。

これに対し、殉職した局員の遺族達は情報公開を求めたものの、管理局側はそれを頑なに拒み、遂には裁判沙汰にまで発展した。その結果は管理局の完勝であったが。なのははその事で良心を痛めたものの、シグナムやクロノからも何も調べるなと念を押されていたため、何もすることができなかった。

（……どうしてそんなに秘密にするのかな？　そんなに秘密にしたいものって一体何なんだろう……）

なのはは光が当たる所で活躍する表の人間であり、そこに裏があるとは考えない、いや、考えられない。ゆえに、当時の管理局の決定や友人の忠告には素直に従う。しかし、もしそこに疑問や理不尽、そしてそれを知る必要性が生じた場合、彼女の信条である「全力全開」をもってそれに対処する。そして、今がその時であることをなのはは感じた。

（ごめんね、シグナムさん、クロノ君。忠告を無視して動いちゃうけど、今はどうしても動かなきゃいけない時期なの。だから、ごめんなさい）

しかし、それは実行することが不可能となる。

（まずはユーノ君に頼んで当時の資料を見せてもらって、その次にフェイトちゃんかシャーリーに事件のことについて聞いてみよう。それが駄目なら……また考えようなの）

何故なら、彼女にも過酷な運命が待ち構えているからだ。それも、抗いようの無いモノが。

「なのはさん、ヴィータさん！」
「！　ど、どうしたんですか、看護婦さん？」
「は、はやてさんが、目を覚ましました！」
「えっ！」
「……！」
「先ほど目が覚めたようです。それと、大変言い辛いのですが、ここに運び込まれる以前の記憶に少し障害が見られています」
「それは……」
「はやてっ！」
「ヴィータちゃん！？」

果たして、彼女はその運命を乗り切ることができるのか？

「はやてっ！　はやてっ！　はやてぇぇっ！」
「ま、待って、ヴィータちゃん！」
「びょ、病院では走らないようにお願いします！」

それは、まさしく『神』のみが決められる事柄である。

そう、『神』のみが。

「何とか落ち着いてきましたね……」
「そうね……」
「……やはり気になりますか？　「ガンダム」とハラオウン提督のことを……」
「……うん。ごめんね」
「いえ、謝らないでください。私も少し迂闊でした」

フェイトは臨時の部隊長として六課を何とかギリギリで運用していた。しかし、それはあくまでもギリギリであり、余裕があるという訳ではなかった。「J・S事件」の報告書の作成にその後始末、八神部隊長を襲った謎の敵の追跡と調査、臨時最高評議会となった伝説の三提督への挨拶回りなど、仕事は終わっても終わっても次から次へとやってきた。

「……お兄さん、いえ、ハラオウン提督は確かに任務を失敗しましたが、それが「ガンダム」関連であればしょうがなかったと思います」
「それでも、クロノ、いえ、兄さんはきっと後悔してる。自分の立てた作戦で沢山の人を死なせてしまったから……」

現在は何とか休憩をとれるぐらいには仕事が解消され（しかし未だに山済みにある）、さらに、八神　はやて部隊長も目を覚ましたという朗報もあり、部隊の士気は最初ほど低くはなかった。しかし、肝心の隊長であるフェイトの士気は最低近くまで下がっていた。何故なら、自分の兄であるクロノ・ハラオウンが「ガンダム」追撃任務に失敗し、それによって生じた責任を負い、現在ミッド中央刑務所にて二週間の謹慎と一年間の給料３０％カット、さらにはクラウディアの艦長を降ろされたのだ。クロノの妻であるエイミィ・ハラオウンが任務の詳細と面会を求めても、任務の詳細は「ＣＢ」関連なため一切教えることができず、面会もクロノ自身と特別監獄特有のルールのせいで、叶うことは無かった。そんな彼女がこちらに任務の詳細と助けを求めてきても、何の力にもなれないことが、フェイトの士気を更に低くさせた。

「……」

「……」

ピピッ！

「……？」

そんな彼女の元にある一通のメールが来たのは、果たして偶然か否か。それは誰にも分からないことだったが、少なくてもそこには何の救いも、助けも、慈悲も無いことだけは確かだった。

「え、これって……」

「臨時最高評議会から？」

何故なら、その手紙は悲劇の幕を開けるプロローグにして、パンドラの箱を開ける事に近いモノだからである。

「そ、そんな……」
「……」

フェイトはこの悲劇に幕を降ろし、パンドラの箱の底にある希望を掴み取ることができるのか。それは全て彼女の名前でもある「運命」によって決定される。

「……「ガンダム」及び「ＣＢ」殲滅作戦である「フォーリン・エンジェルス」の再実行部隊に機動六課も参加すること。これは臨時最高評議会直轄の作戦であり、拒否することは不可能である。直ちに作戦準備に取り掛かり、３週間後には実行できるようにすること。これにより仕事に遅延が見られても構わない。この作戦が最優先事項である。なお、この作戦は極秘作戦であるので、口外することは決して許されない……」

そして、「運命」もまた『神』によって決められるモノである。

「……」

「……スバル、それにギンガさん。体、大丈夫ですか？」

ティアナは仕事の休憩時間にスバルとギンガ・ナカジマの見舞いに来ていた。ギンガの怪我はそれほど酷くないらしく、明日にも退院可能だが、スバルの怪我は四肢を切断されるという大怪我だったため、もう一週間は絶対安静にしておかなければならなかった。しかし、そんな表面の怪我よりも内面の怪我、つまり、心に負った傷がいつ直るのか、ティアナにもそれは分からなかった。

「……えぇ、大丈夫ですよティアナさん。いつもお見舞いに来てくれて感謝します」

「いえ、いいんです。スバルは私の仲間ですし、スバルのお姉さんであるギンガさんにお見舞いに行くのは当然ですから……。それに、心配だったので……」

「……」

スバルはあの「ガンダム」？　というゴーレム？　にやられた後、急いで病院に運び込まれ、緊急手術を施され、何とか一命を取り留めたものの、その心は「死ぬかもしれない」という明確な「恐怖」で大きな傷をつけられていた。その傷は医者に治せないのはもちろん、ティアナにも治す手段が見当もつかなかったし、それはギンガも同じであった。

「……戦闘映像を見たのだけれど、あんなことをするゴーレム、ましてこのミッドに勝るとも劣らない技術を持つモノは、少なくても私は知らないわ」

「……そうですか」

「それで、父にも見せたんだけど、スバルのことで凄く感傷的になって、「コイツがスバルをやった奴かっ！？」ていって、とてもじゃないけど知っているようには見えなかったわ」

「……」

ティアナはこっそりと戦闘映像を持ち出し、ギンガ達に見せ、このゴーレム？　を探っていた。仲間であるスバルに重傷を負わせたこの「ガンダム」？　がもしかしたらスバルの心の傷を治す鍵なのではないかと考えたのだ。今のところ全滅しているが。

「……もしこのゴーレム？　が分かれば、スバルも元気になると思いますか？」

「なんともいえないけど、そのゴーレム？　のことを知ることは何かしらスバルに影響を与えると思うの。それが悪しきにしろ善きにしろ、ね……」

「そうですね……。私、頑張って調べてきます！　コイツは絶対に何か犯罪をしているので、それを知ったあいつはきっとコイツを許せなくて、懲らしめるためにすぐに元気になると思うので！」

「そうね、確かにそうよね。私もようやく明日退院できるから、できうる限り協力するわ」

「ありがとうございますっ！」

「病院では静かにしてください！」

そんな会話をしていると、不意にギンガの隣のベッドからスバルが落っこちた。なにやら寝相が悪すぎて落っこちたようだ。

「ふぇっ!?　あっ！　ティアおはよう！　ギン姉も！」

「えぇ、おはようスバル」

「……おはよう。ついでに言うと今お昼だからこんにちわよ？」

スバルは一見すると普通なように見えるが、その両手両足は４５度曲げることが可能な厚いギブスに隙間無く覆われ、体も良く見ると小刻みに震えていることが分かる。それを必死に隠そうと空元気

を振り絞っているその姿はもはや哀れにしか見えなかった。しかし、ティアナとギンガは決してそうは見えなかった。

「スバル。体、震えてるわよ。寒いんじゃない？」

「え？　あ、そ、そうだね。寒いもんね」

（（室内温度は２５度だけどね））

それは、いつか必ずスバルが立ち直ると信じているからである。彼女たちの知るスバルはこんなことではへこたれないことを他の誰よりも知っている。だから、今はまず自分達のできることから始めるのだ。いつかその傷が治ると信じて。

「じゃ、私はこれから仕事がありますのでこれで……」

「はい、頑張ってください」

「えぇ～、ティアもう帰っちゃうの？」

「仕方ないでしょ、仕事なんだから。いつか戻ってくる私の最高の相棒の為にも、今は頑張らなきゃいけないの。また来るから、ね？」

「うぅ～、分かってる、分かってるよぉ……。いつか、絶対に戻るから……」

「よし、それが聞けただけでも今日着て良かったわ。……じゃあね」

「うん。じゃあね、ティア」

そう言ってティアナは病室を出て病院のメインフロアに来たが、そこでギンガに呼び止められた。微かな疑念を持ちつつ近づいていくと、２，３話したいことがあるそうで、近くにあったソファーに二人並んで座った。

「それで、話ってなんですか、ギンガさん？」

「……ティアナさんは無限書庫って知ってる？」

「えぇ、まあ一応は」

無限書庫。それはその名の通り、無限に等しい数の書物を蔵していることから名づけられた。

曰く、ありとあらゆる情報があり、そこに無い情報は無い。

曰く、その気になれば管理局を裏から牛耳ることができる。

曰く、最高評議会ですら恐れていた手のつけられない書庫、等等……。

しかし、このような「噂や憶測」が星の数ほどあるのだが、実際には無限書庫を訪れたことが無い局員は沢山おり、これらの殆どは眉唾物として扱われている。ティアナも実際に訪れたことは無く、これらの話はきっと誇大妄想だと思っている方である。

「そう、それなら話が早いわ。単等直入に言うけど、そのゴーレム？　を無限書庫で調べてきてほしいの」

「どうしてですか？」

「はっきりいって、このゴーレム？　について、私達は何も知らないし、手掛かりも無いわ。こんな状況ならもうその道のプロに任せるしかないと思うの」

「……そうですね。手掛かりだったシグナム副隊長はいま面会謝絶で会えませんし、他に手掛かりらしきものは何もありません。だったらもうその手しかありませんね。でも、無限書庫に信用できる知

り合いなんているんですか？」
「えぇ、いるわ。そこは安心して。実際、あそこに無かったらもうシグナム二等空尉に頼るしかないわね……」
「……あの、ギンガさんは無限書庫に行ったことがあるんですか？　私は一回も行った事が無いのでよく知らないんですが……」
「えっ！？　無いのっ！？　嘘でしょっ！？　機動六課なのに！？」
「？？」

ギンガのその驚きがティアナには不思議だった。機動六課だからといって、どうしてそこに無限書庫が出てくるのか、全く分からない。

「確か機動六課はロストロギアを専門に取り扱う部署だったわよね？　私たちのような陸士部隊ですら日常的に使っていて、足も向けられないのに、機動六課となると無限書庫とは切っても切れない仲じゃない？　ロストロギアの情報なんてそれこそ基本無限書庫にしかないんだし……」
「え？　そうなんですか？」
「そうなんですかって……。はぁ、今までどこからロストロギア、いえ、レリックだったかしら？　の情報が来ていたと思っていたのよ？」

ギンガにそう言われ、初めてティアナは今までレリックの情報がどこから来ていたのかを知った。それにやや呆れながらも、自分の妹もきっと知らないんだろうなぁとギンガは思いつつ、話を本題に戻した。

「で、話を戻すけど、多分無限書庫で何かしら情報が出てくると思うのよ。そして、できればその情報は可能な限り周りに知らせないでほしいの」

「……確かにそうですね。このゴーレム？　にどんな秘密があるのかはまだ分かりませんが、管理局はこれを出来得る限り隠したいとしている節がありますからね……。でも、そうすると、私達のことを既に嗅ぎつけているかもしれません。下手したらもう無限書庫にも手が回っている可能性もあります」

「……そうね、確かに。逆にその可能性の方が高いか……」

「それと、管理局がどこまでするか分かりませんが、「口封じ」をするかもしれないので、気をつけてください」

「分かったわ。あなたも気をつけてね」

「はい」

「それと、これに信頼できる人について書かれているわ」

そう言って、ギンガは小型の情報端末をティアナに渡した。

「分かりました。……スバルのこと、よろしくお願いします」

「えぇ、任せて」

そして、二人は別れた。片や自分を救ってくれた妹のため、片や自分のパートナーのために、今自分たちが出来ることをするために。例えその先が虎穴だとしても、今の彼女達はその穴に躊躇無く飛び込むであろう。その全てはたった一人の人間を救うためである。

（待ってなさいよ、スバル。必ずあんたを立ち直させてあげるわ……！）

（スバル、今度は私があなたを救ってみせるわ。あなたが私を救ったように……！）

しかし、彼女達は知らない。無限書庫には既に手が回っていること

とを。それも、４年前にその情報が禁書に指定されているなど、夢にも思っていなかった。

しかし、それでも、彼女達には真実へと続く道が開かれるのだが、それを知ることは無かった。誰だって、『神』や『無限』、『法典』にだって、未来の事など、分かるはずが無いのだから。

私は、何をしている？

私は、何をしたがる？

私は、何を知りたい？

私は、私は、私は、私は……。

「……」

沈黙。ただこの空間には沈黙が下りている。その原因は、その空間にいる人物が何も喋らないからだ。例えその人物が内面で激しく

自問、自虐、自答、自嘲をしていても、それが外に出ていなければ、ただ沈黙が下りるのみであり、端からそれを見ても、その内面を見抜くことは不可能である。

「……」

「いよう、シグナム。しけた面してんなぁ。それでも私のロードかぁ？」

「あ、アギトちゃん、何を言っているんですか！？　傷心のシグナムにそんなことを言っちゃダメです！」

「い～じゃねぇか、別に。こいつが落ち込んでようと、私には何の関係も無いね」

ふと、シグナムは自分の知っている人物達の話し声が聞こえた気がした。しかし、その考えを即座に放棄した。ここはミッド中央刑務所の中でも、オーバーSランクを牢獄するために作られた特別監獄の一室であり、滅多なことでは入室することすら不可能だからだ。

「っておい！　無視すんなやゴラァァアアァッ！」

「だからアギトちゃんッ！　そんなことを言っちゃダメだって言っているでしょうっ！」

「……？」

ここに至って、漸く（ようや）シグナムは目の前に自分の融合騎（アギトはまだ渋っているが）であるアギトと、家族の1人であるリインフォース？がいることに気付いた。

「……何故、ここにいる？」

「やっと気付いたか、シグナム。大丈夫かよお前？」

「シグナム、大丈夫ですか？」

３０センチしかない体を浮かばせながらも、こちらを心配している二人の姿を見て、シグナムは心に痛みを感じた。自身の浅慮な行動のせいで家族やパートナーを心配させたこともあるが、何よりも、そんな二人に自身の行動とこの処遇について、秘密にしなければいけないということが、一番辛かった。

「シグナム。貴様、どういうことか説明してもらうぞ」

「そうですよ、シグナム。ちゃんと理由を説明してもらいますからねっ！」

「ザフィーラ、シャマル……お前たちまで……」

リインやアギトに遅れて入ってきた狼フォームのザフィーラとシャマルまでもがここに来たことに、シグナムは驚愕を通り越して疑念を抱いていた。面会謝絶はもちろん、中に入っていいのは二人まで等のルールが存在するこの特別監獄において、この人数と普通に喋れるというのがどれほど異常なことなのかを知っているからである。おまけに、よくよく見ると、監視役であるはずの看守すら周りにいないことに気付き、ますます疑念を深めていった。

「……お前達は、本物か？」

「「なっ！？」」

「お前がそう言いたいのは良く分かるが、今は緊急事態でな。三日間粘って交渉した結果、こうしてお前と話せる許可を得たというわけだ」

「……緊急事態だと？」

シグナムは向こうにザフィーラがいたことに感謝し、自身の疑問も憂鬱だったことを知ったが、不穏な単語を耳にし、あくまでザフィーラに問い返した、つもりであったが……。

「そ、そうなんです、緊急事態なのですよ～！？」
「なっ！？　ば、バッテンチビやめろ！　そこを掴むな！」
「ほ、ホントにどうしようなのよ～！？」
「「……」」

見事なカオスが誕生した。それをザフィーラと二人、半ば呆れながら暫く傍観していると、漸く落ち着いてきたのか、咳払いをしつつ現実に戻ってきた。

「それで、緊急事態とは何だ、ザフィーラ？」
「うむ、実はな……」

「我らの主が、お前が戦ったあの何者かによって、重傷を負わせられたのだ」

「な……に？」

その言葉が意味することを理解する前に、シグナムは茫然自失となった。

（主はやてが、「剣士」に、傷をつけられた？）

「ざ、ザフィーラッ！　そ、そそ、それは、本当なの、か？」
「あぁ、事実だ」

カラ――ン

その言葉を聞いて、シグナムは持っていた木刀（訓練用にもらった）を手から落とした。

「だから、お前がもしあの何者かを知っているならば、教えてほしいのだが……」
「そ、そうですよ、シグナム！　あれははやてちゃんの全身に切り傷をつけただけじゃなくて、左腕を切り落としたんですよっ！？　そんなひどいことをはやてちゃんにしたあれを、私は絶っ対に許しません！」
「そうだぜっ！　私もあの時は事情聴取？　だったかの為に、ルールーと一緒に連行されてたから詳しくは知らないけど、あの八神のひどすぎる傷を見て、心底腹が立ったんだよ！」
「そうよっ！　殺傷魔法なんて使ってっ！あの戦闘でどれだけ人が亡くなったと思っているのかしら！」
「……？　シグナム？」
「「「？」」」

ザフィーラがその異常に気付き、他の三人もその異常に気付いた。常ならば威風堂々とし、主はやてに傷を付けた輩を決して許さず、地の底までも追いかけると豪語しているあの守護騎士の「烈火の将」が、まるで何かに怯え、震えているという異常に。

「「「し、シグナム？」」」
「どうしたのだ、シグナム？」
「……それで……主はやては……？」
「何とか一命を取り留めた。今はベッドで横になっているはずだ。何、心配するな。主の側にはヴィータと高町がいるのでな」
「……そうか……」

その、あまりにも常日頃のシグナムと違う姿を見て、今度はザフィーラ達が本物かどうかを疑ってしまった。しかし、それも、次の瞬間までだった。

「……う、うぅ。よ、よかった……主はやて……うぅ」
「「「……」」」

泣いている。あの「烈火の将」が。人目も気にせず、ボロボロぼろぼろと。そのあまりにも非現実的な光景を、ザフィーラ達は口をあんぐりと開け、目を見開きながら見ていた。そして、お互いのホッペを抓ったり叩いたりし、これが現実の光景かどうかを確かめた。もちろん現実であった。

『おい、どういうこった!?　シグナムはこんなに涙脆かったのか、お前等!?』
『そ、そんなことは無いですよっ！　少なくてもリインは始めて見ます!』
『わ、私ははやてちゃんが歩けるようになった時だけだけど……ザフィーラは?』
『……オレもそのときだけだ』

軽くパニックに陥りながら念話で緊急会議を行っていると、突然シグナムが泣き止み、此方を（殺気を含んで）睨んできた。それにかなりビビりながらも、シャマルが話を本題に戻すべく、勇気を振り絞って、シグナムに話しかけた。

「そ、それで」
「忘れろ」
「……はい」

後にシャマルは語った。アレは本気と書いてマジと読む目だったと。

「じゃなくて、シグナムはあのアンノウンを知っているんですかっ

!?」

「……少し、考えさせてくれ」

「？　何を考えるんだよ、シグナム？」

「アレについて、確かに私は知っている……」

その言葉に、一同は一瞬体を硬直させた。そして、その次の言葉に冷や汗を流した。

「……しかし、アレは管理局の闇、いや、暗部に関わるモノで、さらに第一級極秘事項として扱われているモノだ。……それでも、知りたいか？」

シグナムのその問いに、全員が僅かに躊躇したものの、迷い無く頷くのを見て、シグナムも遂に話す覚悟を決めた。

「分かった。お前達がそこまで言うのならば、アレについて私の知っていることを話そう。まずは、アレの名称だが……」

「そこまでだ、シグナム」

「「「！！」」」

突然、シグナムの言葉を遮るように、シャマル達の横から声が出された。それに驚きながらも振り向いてみると、そこには知った顔があった。

「「「ハラオウン提督（クロノ君）？」」」

「クロノさん？」

「？」

「……？　何故ここに来た、ハラオウン提督？」

そう、そこにはクロノ・ハラオウン提督がいた。しかし、その姿

は、側に二人の看守を引き連れ、手錠を掛けられ、さらに囚人服を着ていて、まるでこれから投獄されるような様子であった。

「何、失敗が許されない任務を失敗してな。これから2週間はここで世話になる予定だ」

「「「……は？」」」

「ちなみに、クラウディアの艦長も降ろされた」

「「「はぁあああぁあっ！？」」」

「？　どうしてそんなに驚いてんだよ、バッテンチビ？」

シャマル達が一斉に驚いているのを尻目に、クロノは飄々とそう言い放った後、自身が投獄される部屋まで歩いていった。そして、その部屋の前で一歩前で止まり、シグナムに忠告と、ある一言を言った。

「シグナム、それをここで言いふらすのは止めた方がいいぞ。ここは監視されているからな」

「……しかし」

「もし喋ったりしたらどうかなるか、お前は知っているはずだ」

「……」

「なに、そんなに思いつめるな。ここで言わなくても、どうせ後で知ることになるさ。絶対に、な」

「？　それは、どういうことだ？」

シグナムのその問いに、クロノは肩を竦めながら、まるで納得していないような、苦虫を１００匹は噛み潰した風な表情で、こう言った。

「何、「フォーリン・エンジェルズ」の再実行部隊の一つに、機動六課が召集されたそうだからな」

「……」

「し、シグナム？　って、気を失っているわっ！」

「なっ！？　嘘だろおい！？」

「ふぇえっ！？　今日のシグナムはなんだがおかしいですぅ～」

「……一体どうしたというのだ、シグナム……」

「……いや、その、そこまで反応するとは思わなかったんだ。すまん」

その在ってはならなかった作戦が再び実行されること、そして、それに機動六課が参加することを聞き、シグナムは不覚にも一瞬気を失った。

しかし、彼女は知らない。いや、『神』ですら今はまだ知らない。その作戦を実行し、されていた方が、どれだけ幸せで、どれだけ楽だったのかを。そして、それを知る時は、刻一刻と迫っている。

―新暦７５年１０月１日―

「やれやれ、「ＣＢ」にも困った物だ」
「全くもってそうですわ。彼らは自分達がしていることをちゃんと理解しているのか、今度はっきりと聞きたいですね」
「ふん。テロリストである彼奴等の言い分など、どうせそこいらのテロ組織と変わらないと思うがの？」

ここは、もとは最高評議会が協議を行っていた場所である。しかし、現在は本来の持ち主が使っているのでは無く、その後継として立ち上げられた臨時最高評議会が使用していた。

臨時最高評議会とは、伝説の三提督を最高評議会に臨時に据え置いた、いわば緊急時のみ存在する議会である。「Ｊ・Ｓ事件」の混乱により時空管理局の地上部隊がボロボロとなり、最高評議会も暗殺された今、可及的速やかな組織の再建に、どうしても組織のトップが必要だったので、地位的にも人望的にも能力的にも問題の無い伝説の三提督をトップに置くことにしたのだ。本来ならば選挙などをして決めるべきことだが、今はまさに緊急事態であるとされ、一刻も早い組織の立て直しが求められたため、急遽超法規的な措置を用いて結成されたのだ。

法務顧問相談役のレオーネ・フィルス
本局統幕議長のミゼット・クローベル

この三人が臨時最高評議会のメンバーであり、伝説の三提督でもある。そして、現在この三人が議論しているのは、４年前に壊滅させたはずの「ＣＢ」についてであった。

「しかし、彼らの目的は一体何なんだろうね？」

「一切不明よ、レオーネ。彼らの行動には「戦争」や「紛争」への介入が関わっていることが多いけど、一概にそればかりとも言えないしね」

「何にせよ、１２日後には「フォーリン・エンジェルズ」が開始され、「ＣＢ」は壊滅させられるがな」

彼らは時空管理局の戦力を、たった一人を除けば、最も良く知る人物達である。いくら「ＣＢ」が誇る「ガンダム」というオーバーＳランクのロストロギアが強化され、「エックス」も４年前とは違い、オーバーＳランクに届くようになったとしても、その総数は４年前と変わっていなければたった１４個であり、物量で迫ればどうにでもなると考えていた。

質は量に勝てない。これは古今東西変わらぬ真理の一つであり、戦場の常識である。いくらオーバーＳランクの優れた魔導師といえど、相手がＡやＢランクのみで構成された１０００の魔導師の軍勢と戦って勝てるかといえば、その殆どがＮＯと答えるだろう。中には高町　なのはのように、例え１対１０００でもどうにかしてしまう魔導師も存在するが、それは彼女が１対多が得意な戦闘スタイルであり、なおかつ、その１０００の軍勢を薙ぎ払えるだけの極大火力を有しているからで、通常は不可能なのである。

「壊滅させるのはいいが、どうやって「ＣＢ」を誘き寄せる？　４年前に使用したあの手はもう使えないのではないか？」
「いえ、使えないと決め付けるのは少し早くないですか？　彼らは確か４年前の「フォーリン・エンジェルズ」の時、二回も同じ手に引っ掛かって、誘き出されたそうじゃないですか。なら、同じ手が通用すると私は思いますが。キール、貴方はどう思いますか？」
「……４年前と同じ手を使おう。これは私の勘だが、恐らく引っ掛かるだろう」

しかし、彼らは知らない。「ＣＢ」がどれだけ『計画』を練ってきたのかを。そして、その『計画』を練った人物が、どれほど天才であったのかを。

「……恐らく殉職者が沢山出てしまうと思うが、そこの情報操作はどうする？　はっきりいって、もう遺族達を抑えるのには限界が近づいているんだが……」
「……哀しいことです。次元世界の平和を守る時空管理局が、殉職者の遺族達を救うことができないなんて……。何とかなりませんかね？」
「そのことだが、私は「フォーリン・エンジェルズ」を完遂させた後、４年前のも含めて一斉に公開しようと思うのだが、どう思うかね？　二人とも」

そして、自分達の力に奢ったその代価が、果てしなく大きなモノであるということを、後々気付かされるのだ。

「？　一体どうしたんですか、キール？　貴方らしくないですよ？」
「確かにそうね。貴方なら一切公開しないって言って聞かなそうなのに」

「……「CB」を完膚なきまでに叩きのめし、絶滅させれば、第一級極秘事項でなくともいいと思うのだ。もしそれで私に責が及んでも、その時は私が管理局を辞退すればいいだけの話だしな。……なによりも、これ以上管理局のせいで理不尽な思いを被(こうむ)っている人たちを無視することが、私には耐えられん」

そう、気付いてしまうのだ。「CB」が伊達や酔狂で時空管理局という現在確認されている次元世界で、最大最強の戦力を持つ組織と戦っているのでは無いと。本気で管理局を打倒しようとしているのだと。

「まぁ、私は賛成ですがね。そこはミゼットに任せますよ」
「では、私も賛成なので、そうすることにしましょう。準備を既にしておいたので、絶対に勝って下さいね、キール？」
「……分かっている」

それと同時に、「CB」が管理局と同等の戦力を、4年前とは比べ物にならない戦力を保有していることに気付くだろう。

「では、次の議題ですが」
「はい」
「うむ」

そして、その刻(とき)は、もう間近にまで迫って……

「きょ、協議中し、失礼致します、レ、レオーネ様、ミゼット様、キール様っ！　た、大変なことが起こりましたっ！！」
「？　一体どうしたのかね、君？」
「あらあら、ずいぶんとまぁ慌しい事。何が起こったのかしら？」
「……ワシに聞くな、ミゼットよ」

……いや、もう届いてしまった、その刻が。４年前の悪夢を、最高に良い夢だった、と言えるほどの悪夢を見る刻が。

「てっ、テレビをっ！　テレビをご覧くださいっ！！」
「全く。やっと次の議題に移れたというのに……」
「ほらほら、レオーネ。ぶつくさ言わないの」
「……」

そう。この時間、この瞬間、この刹那。ついに、遂に、終にっ！
「ＣＢ」の計画が、始動してしまったのだっ！！

「一体何が起こったという、の……だ……」
「……」
「……」

幕が上がる。絶叫を台詞に、悲鳴を観客に、絶望を舞台とする演劇の幕が。その幕が何時降りるのか、まだ『神』でも、ましてや『無限』や『法典』にも分からない。そう、『何モノ』にも、分からない。

「全次元世界で生まれ育った、全ての人類に報告させていただきます。

私達は、ソレスタルビーイング。デバイス「ガンダム」を所有する、私設武装組織です。

私達ソレスタルビーイングの活動目的は、この世界から戦争行為を根絶することにあります。

私達は、自らの利益のために行動はしません。戦争根絶という大きな目的のために、私達は立ち上がったのです。

ただ今をもって、全ての人類に向けて宣言します。

領土、宗教、エネルギー、大儀、使命、事情……どのような理由があろうとも、私達は、全ての戦争行為に対して、武力による介入を開始します。

戦争を幇助（ほうじょ）する国、組織、企業、世界なども、我々の武力介入の対象となります。

私達は、ソレスタルビーイング。この世から戦争を根絶させるために創設された、武装組織です」

第１１話　『宣言』（後書き）

リリカルなのはの設定はかなり不明瞭な点があるので、所々オリジナル設定を入れていく予定です。もしおかしな点がありましたら御指摘をお願い致します。ちなみに、作者は三提督の口調が全く分からなかったので完全にオリジナルになっております。このような駄作を読んで下さった皆様に感謝を。

最後に。

ヒロインは　はやて　です。

第１２話　変革の序曲　≪前篇≫（前書き）

あまりにも長かったので、２～４話に分割した話です。ここからオリジナル設定が入り始めるので、何か至らない点がございましたら、遠慮容赦一切なく指摘してください。もしオリジナル設定が嫌な方は、Ｕターンをお勧めします。

では、開演です。

第１２話　変革の序曲　≪前篇≫

―新暦７５年１０月１日・第６管理世界・アルザス―

『全次元世界で生まれ育った、全ての人類に報告させていただきます。

私達は、ソレスタルビーイング。デバイス「ガンダム」を所有する、私設武装組織です。

私達ソレスタルビーイングの活動目的は、この世界から戦争行為を根絶することにあります……』

「何と、何と言うことだ……！　彼奴らは４年前に、管理局によって滅ぼされたのではなかったのか……！？」

「族長、彼らはこれから、何を始めるのでしょうか……？」

「それは、ワシにも分からん。分からんが、これだけは言える。恐らく、とんでもなく碌（ろく）でも無いことをしようとしておるのだろうよ」

アルザス地方に住む召喚士一族のル・ルシエ族の族長は、夜空に映っている「ＣＢ」が流したであろう映像を憎々しげに睨みながら、そう吐き捨てた。その心中には、４年前に「ＣＢ」によって殺された同胞の顔が浮かんでいた。それに怒りと憎しみを感じながら、族長として、ある決定を下した。

「……管理局にこう伝えるのだ。「ＣＢ」壊滅のためなら、我らル・ルシエ族は力を貸すとな……」

「は、はい！　分かりました！」

そう言うと、族長の言葉を管理局に伝えるため、転送魔法で若者の1人が飛んで行った。それを見届けつつ、族長は「CB」の『宣言』を聞き、4年前から煮え滾（たぎ）っている感情が湧き上がってくるのを感じていた。

（今度こそ冥府の底へと突き落としてくれようぞ、「CB」！　あの子のためにもな……！）

―同日・第12管理世界・聖王教会中央教堂―

「「CB」？」

「あら、シスター・シャッハもご存じない？」

「すいません、騎士カリム。私はこの組織については何も存知ません」

聖王教会中央教堂で、カリムはシャッハ・ヌエラとともに、紅茶を飲みながらモニターに移っている「CB」の『宣言』を聞いていた。そして、カリムは「CB」という私設武装組織を聞いたことが無かったので、自身の秘書兼護衛でもあるシャッハに聞いてみたが、

その答えは芳しくなかった。

「そう、残念ね。管理局にも問い質してみたけど、知らぬ存ぜぬの一点張りで、何も聞けなかったわ」

「そうですか……しかし、アコース査察官なら何か知っているかもしれません」

「そうね、ちょうどここに呼んだところだったから、タイミングがよかったわ」

「……は？」

カリムの急激過ぎる爆弾発言投下に、思わずシャッハは立場を忘れ、呆けてしまった。それもそうだろう。ここは聖王教会の総本山ともいうべき場所で、そう易々と入れるような場所ではないからだ。少なくても、事前のアポイントが無くては門前払いされるはずである。そして、カリムのスケジュールには、ヴェロッサ・アコースと会う予定など入っていない。

「いえ、ちょっと待ってください、騎士カリム。事前のアポイントも何も無くここに入れるわけ「いや～、お久しぶりです、義姉さん」……」

「あらあら、ダメですよシスター・シャッハ。私の義弟をいじめちゃ」

「大丈夫です、騎士カリム。ヴェロッサのこの粗相は私の教育不足のせいなので、今再教育をしているだけですから」

「いやー、でも、僕の腕はそれ以上曲がりませんよ、シスター・シャッハ？」

シャッハの言葉に被せて、この場にふさわしくない挨拶をしてきたヴェロッサに、シャッハはあくまでも再教育といって、右腕に関節技を掛けた。そして、これ以上曲がるには人間の限界を超えなく

てはいけないところまでいって、漸く腕を離した。

「やれやれ、姉弟の久しぶりの再開にいきなり腕を極めてくるなんて、シスター・シャッハも無粋なことをしてくれますね」

「ほう、どうやらまだ教育が足りなかったようだ。今度は骨を折るぐらいしないと駄目らしいな？」

「騎士カリム、そしてシステー・シャッハ。アコース査察官、ただいま参りました」

「そんなに畏まらなくていいわよ、ヴェロッサ。それに、今日あなたを呼んだのは私用なことなんですし」

カリムはそう言いつつも、モニターからは決して目を離さなかった。ヴェロッサはその姿を見て、今日ここに呼ばれた理由を理解した。

「……「CB」について、ですか？」

「えぇ、そうよヴェロッサ。査察官であるあなたなら、当然彼らのことを知っているわよね？」

「いえ、私は知りま……」

「もちろん、知らないなんて言わせないわよ、ヴェロッサ？」

カリムはモニターから目を離し、殺気が滲み出るほどの鋭い目つきでヴェロッサを見た。その目を見たヴェロッサは、騙せないことを直感した。

――義姉さんは本気だ。

ヴェロッサはそう思うと、おもむろに懐から通信用の情報端末を取り出し、その中に入っている小型のデータチップを取り出した。そして、それをモニターに差し込み、起動させた。

「……「ＣＢ」について、どのくらい知っていますか？」
「それが、恥ずかしながら、全く分かっていないのよ」

その時には、さっきまで人を殺すような目をしていた人物とは思えないほどの、温厚な雰囲気を漂わせているカリムがいた。そして、その側近であるシャッハも、既にモニターが見える位置に移動していた。それにヴェロッサが僅かな安堵と驚愕を覚えながら、「第一級極秘事項」と書かれているフォルダのパスワードを素早く打っていく。そのフォルダを開けると更に幾つかのフォルダがあったが、その中には「ＣＢ関連」と名打ってあるフォルダがあった。それを開ける為、それぞれ全く違うパスワードを５回打ち込んだ。

「……随分厳重ね？　それに、「ＣＢ」の情報が第一級極秘事項なのはどうしてかしら？」
「それはこれから説明するので、もう少し待ってください」

そう言いつつも、ヴェロッサはモニターに付属してあるキーを打つ指の動きを止めない。そして、さらに５回パスワードを打ち込み、漸くそのフォルダを開くことができた。その頃にはカリムは紅茶を２杯飲んでいた。

「いいですか、これは管理局の中でも一握りしか知らない情報です。もし口外した場合、僕でも身の安全は保障できません」
「……それほどの組織なの？　「ＣＢ」というのは？」
「えぇ、そうです。それ程の組織なんですよ。少なくても僕は、あの管理局に次ぐ組織だった「世界清浄」よりも厄介だと思っています」

その言葉に、カリムとシャッハは息を呑んだ。二人は「ＣＢ」が

それほどの組織だとは想像だにしていなかったのだ。しかし、同時に疑問もわいた。

「……でも、どうしてそれほどの組織が今まであまり知られていなかったのかしら？　少なくとも、私の耳に入っていてもおかしくなさそうなのに……？」

「確かにそうですね。もし「世界清浄」よりも厄介なことが本当なら、世界中に知られていてもおかしくないはず……？」

そう疑問を呟やいたが、それにヴェロッサが答えることは無かった。まるでこれから嫌でも分かるとでも言うように、ひたすら無言で作業をしている。

そして、やや経ってから、映像データの再生が始まった。

―同日・ミッドチルダ上空・アースラ内―

「では、八神部隊長となのは隊長、ヴィータ副隊長、シグナム副隊長、そして、スバル隊員の復帰を記念して、仕事中ながら、ジュー

スを一杯だけ乾杯っ！」
「「「かんぱ～い！！」」」

機動六課の面々は、そう掛け声をかけてから、一斉に近くにいる人と乾杯を始めた。現在は昼休みながらも、入院、入獄していた人達がやっと退院、退獄し、「J・S事件」後で初めて機動六課が全員揃ったので、それを記念して小さなパーティーを行っているのである。さすがにアルコール類は仕事中なのでNGだったが、それも未成年が少なからずいる機動六課にはあまり関係の無いことであった。これを企画した未成年のはずのはやては、ひどく残念そうであったが。

「それにしても、皆ごめんな～、いっぱい迷惑をかけてもうて。これからはこんなことが無い様にするからな～」
「いえいえ、それは八神部隊長のせいではないので、謝らないでください」
「そう、そうですよっ！　謝らなきゃいけないのは、八神部隊長を襲ったあの「ガンダム」とかいうロストロギアなんですから！！」
「それにしても、無事に退院できて、おめでとうございます」
「皆、ありがと」

はやての周りには乾杯した直後から早くも人垣が出来ていた。はやて個人としては一番忙しく、大変な時期に入院していたことで申し訳ない気持ちがあったが、グリフィスやアルト、ルキノにそう言われ、その気持ちとは反対に、嬉しさが込み上げてきた。やっぱり自分はここが好きなんやなと思っていると、彼女の家族である守護騎士（ヴォルケンリッター）達が近づいてきたのに気付き、少し周りにいた人達に避けて貰った。

「シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ、リイン。心配かけ

てごめんな？」
「いえ、主はやて。此度は我等守護騎士が至らなかったばかりに傷を負わせてしまい、申し訳ございませんでした」
「……ごめんはやて」
「でも、はやてちゃんが元気になってよかったわ～」
「はやてちゃんの怪我が治って、リインはうれしいです～」
「主よ、我等のこの失態をお許しください。そして、図々しい願いだとは承知しておりますが、一つ、願いを聞いて貰いたい……」

はやては守護騎士達に何の責任も無いと言い続けていたが、彼らはそう思わなかったらしい。そんな生真面目なところにはやては苦笑しつつも、ザフィーラが真剣な顔でお願いしてきたので、何やろな～と思いつつ、苦笑していた顔を引き締め、部隊長に相応しい顔と雰囲気で聞く準備を整えた。

「それで、ザフィーラ。　何なんやそのお願いっちゅうのは？」
「……主を襲ったあの機体のことですが……」
「……！！」

その言葉を聞いて、はやての脳内にその時の光景がフラッシュバックした。しかし、既に夢で何度も見た光景だったので、胃の中身を吐くことは無かった。顔色は傍から見ても青白く、体調が優れているようには見えなかったが。

はやては9月22日に意識を取り戻し、はやての様子を見に来た医者から自身が入院した事の顛末を聞かされていた。その時になって、漸（ようや）くはやては、どうして自分がここに居るのかを理解した。そして、お見舞いに来てくれた人々からあの後起こったこと――シグナムとスバル、第108陸士部隊のこと――を聞いた。最初の頃は信じたくないこと、ありえないこと、辛い事が連続で続き、半

ば自暴自棄に近い精神状態にまで追い込まれていたが、それもヴィータを見るまでだった。

――その時のヴィータは、筆舌に尽くし難いほど心が憔悴していたのだ。そして、そんな自分を護るため、感情の無い人形になっていたのである。

そんなヴィータの姿を見たはやては、自分のせいでこんな姿になってしまった家族がいるのに、己が自暴自棄になりかけていることを恥じ、その後は瞬く間に精神を立て直し、なのはと一緒にヴィータを救うべく、行動を開始した。その努力もあってか、今のヴィータは以前と変わらないぐらいに心が回復していた。

「……主はやて？」

「……大丈夫、大丈夫やで、シグナム。ザフィーラ、続きをお願いや」

その頃のことを思い出していたら、少しボウッとしていたようだ。はやては心配をかけない為にすぐさま体裁を整えたが、家族からの心配オーラが消えることは、決して（特にシグナムが）無かった。

「……それで、お願いなのですが」

「……うん」

「主を襲ったあのアンノウン、「ガンダム」について、シグナムが

何かしら知っているようなので、それを問い詰めて欲しいのです」
「なっ!?　ザフィーラ、貴様……！」
「シグナムよ。いくら頑固な貴様と言えど、まさか主の願いを無下にするはずが無いな？」
「くっ……！　おのれっ！」
「……ほぇ？　あれを知っているんかい、シグナムは？」
「……はい、主はやて」

はやてはザフィーラのお願いに驚いたが、それよりも、シグナムがあの「ガンダム」について知っていることに驚いた。しかし、それと同時に疑問もあった。

「でも、何時知ったんや？　少なくてもうちは「ガンダム」について、何も知らんよ？」
「そ、それは……」
「……お願いや、シグナム。うちら家族やないか？　もしそれでシグナムが困っとったら助けることもできるんよ？　それに、家族なのに秘密を打ち明けられないなんて、うちらとシグナムの関係がそんなもんやったなんて、うち、思いたくないねん。せやから、一生のお願いや。「ガンダム」について、教えて欲しいんやけど……？」
「う、うぅ……。し、しかしっ!?」
「うぅ、シグナムにとってうちらはその程度やったのね。……グスン」

はやては悲しんでいるかのような言葉を言い、まるでこれから泣き始めるように目へ手を当てた。そして、涙にしか見えないものが、その手の間から零れ落ちたのを周囲のギャラリーが見た途端、そこは怒号の坩堝（るつぼ）と化した。

「てめぇ、シグナムっ！　はやてを泣かすんじゃねえっ！　アイゼ

ンの頑固な汚れにすっぞっ！！」
「はやてちゃんを泣かすなんて、それでも貴女は騎士ですか、シグナムッ！」
「むぅ～、リインは失望しました！　はやてちゃんを泣かすシグナムなんて、シグナムじゃありませんっ！！」
「……吐いて楽になった方が身の為だぞ、シグナム？」

はやてが泣いた？　ことにより、周囲からのブーイングがシグナムに向かって殺到した。中には殺気を出している者（もちろんヴィータ）もいる。しかし、それはシグナムにとって些細な問題でしかない。今もっとも彼女にとって問題なのは、自身のせいで主が泣いたということだ。それをどうにかすべく、回らなくなった頭を限界まで回転させたが、その時のシグナムは自身でも何を考えているのか分からなくなっていた。だから、こうなってしまった。

「主はやて！？　おお願いですからな、泣かないでくださいっ！？　お、教えますから！「ガンダム」について、一切合財何から何まで、全て教えますからっ！」
「そう？　ありがとな、シグナム。やっぱうちらは家族やなぁ～！」
「……は？」

シグナムがそう言ってしまうと、先程までの様子が嘘のような、晴れ晴れとした笑顔のはやてがそこにいた。それに茫然自失としていると、周りが何故かシグナムと目線を合わせず、顔を下に向けていることに気付いた。シグナムはこの時になって、漸く自分が嵌（は）められたことを知った。

『……まさか、そういうシナリオだったのか？　ザフィーラッ！？』
『……すまん、その通りだ。しかし、主がどうしても「ガンダム」について知りたいと言っていたのだから、仕方あるまい？　それと、

主にも秘密にするなど、オレが許すと思っていたのか？』
『クッ、確かにな。しかし、お前にも主に秘密にしているものがあるだろう！』
『ほう？　まさかそのように切り返してくるとはな。「烈火の将」も墜ちたものだ。ところで、その秘密とはなんだ？』
『アルフとの関係だ』
『ぶふぅぅぅっ！？』

ザフィーラが念話で吹くという器用な真似をしたことに若干驚きながらも、せっかく手にした勝機を逃さない為に、ここぞとばかりにシグナムはザフィーラに畳かけようとしたが、それを察知したのか、はやてはそれに先手を打ち、ここから逃さないようにするため、シグナムに畳みかけ始めた。

「それで、シグナム。話してくれるんやろ？　できればはようして欲しいんやけど？」
「はっ！？　し、しかし」
「……しかし、なんや？」
「……いえ、なんでも、ありま、せん」

その時のはやての迫力は、下手したらなのはさんに並んだかもしれないと、後にギャラリーの一人だった星分隊のＳ・Ｎは語った。ちなみに、その後の彼女は、なにやら白いＢ・Ｊを着た人物に、訓練と称された「処刑」を受けさせられていた。

「……ちなみに、主はやては何時「ガンダム」を知りましたか？」
「えっと、確かザフィーラとティアナがお見舞いに来てくれはった時かなぁ～？」
「そうですか……」
（ザフィーラとティアナか。後でＫ（斬る）ＩＬＬ……！）

シグナムが心の中でそう呟き、殺気を膨らませているのを感じたのか、ザフィーラとティアナにほぼ同時に背筋に悪寒が走った。それに顔を青くした二人を見つつ、シグナムは会話を長引かせながら、ある人物の到来を待っていた。そして、その人物は望み通りにやってきた。

「はやて、何してるの？」
「いや、ちょっと緊急家族会議を……」
「さっき「ガンダム」って聞こえたんだけど、それがどうかしたの？」
「……分かった。フェイトちゃんにも教えとくさかい。実は、うちを襲ったあのアンノウン、「ガンダム」って言うんやけど、それについてシグナムが何か知っとるらしいんや。それで、今それを問い詰めとるとこや」
「……」
「……？　フェイトちゃん、どったの？　そんな鳩が豆鉄砲食らったような顔して」
「……はやて、一つだけ言わせて貰うけど、「ガンダム」、いえ、「ＣＢ」について調べない方がいいわ」
「……へ？」
「悪いけど、彼等は第一級極秘事項に相当するの。だからもし「ＣＢ」について調べるなら、私は執務官として、はやてを止めるわ」

その言葉をフェイトが発した瞬間、室内温度が何度か下がったのを、そこにいた全員が感じた。

「ちょ、ちょい待ちっ！？　もしかして、フェイトちゃんも知っとんのか、「ガンダム」を！？　それと、「ＣＢ」って何なんや！？」
「もう一度言うけど、はやて」

そう言ってフェイトは、自身のデバイスであるバルディッシュを手にした。その目を見たはやては、これが演技ではない事を直感した。

「私ははやてを逮捕なんてしたくない。だから、お願い。「CB」や「ガンダム」を調べるのは諦めて」

「……！」

まるでこれが最後通牒だと言わんばかりに重圧（プレッシャー）を高めていくフェイトを見て、はやては――

「その程度のプレッシャーじゃ、うちを諦めさせるのは無理や、フェイトちゃん」

――それを弾き返した。弾いたのではなく、弾き返したのだ、フェイトに向かって。しかし、フェイトもその重圧に怯むこと無く、はやてに問い返した。

「……そう。なら、どうすれば諦めてもらえるのかな、はやて？」

「せやから、無理や」

ビキリ

その瞬間、空気が音を立てて凍りついたのを、その場にいた者達は確かに聞いた。それは決して空耳などでは無く、確かな音を伴っ

て聞こえたのだ。それに周囲の人々は顔を青くさせていたが、誰もその二人を止めることはできなかった。

それも当然である。

片や部隊長、片や分隊の隊長で、しかも、そのどちらもがオーバーSランクなのだ。この二人の間に入るのは、並大抵のことではない。

しかし、

「……ねぇ、二人とも。少し頭冷やそうか？」

その並大抵のことではないことをできる人間が、ここにはいた。

「「な、なのは（ちゃん）！？」」

「いい加減にしてなのっ！　せっかくのパーティーが台無しになっちゃうよ！　だから二人とも、落ち着くのっ！」

「「は、はい……」」

そう言われたはやてとフェイトは、すぐさま睨み合いを止めた。

そして、なのはの方を向いて、

「「ご、ごめんなさい……」」

若干体を震えさせながら、素直に謝った。その体の震えになのは は気付いたが、何故震えているのかは分からなかった（まさか自分のせいだとは思ってもいない）。

「……まぁ、分かってくれればいいの。ところでフェイトちゃん。私もフェイトちゃんに聞きたいことがあるんだけど、いいかな？」
「？　いいけど？　何かななのは？」
「じゃあ、聞くけど……４年前の「管理局の悪夢」と「ＣＢ」は、何か関係しているの？」
「……！？」

フェイトはその問いに、動揺を隠すことができなかった。

「ど、どうしてそれを！？」
「……実は入院していた時、「ＣＢ」っていう組織について少し聞いたの。そして、その組織が４年前に管理局によって壊滅されたことも。でも、私はそんな事件を聞いたことがないの。それを喋った人はその後何も喋らなかったから、そこからは何も分からなかったけど、一つ、心に引っかかったことがあったの」
「……それが４年前の「管理局の悪夢」っちゅうわけや」
「うん。あの事件には確かフェイトちゃん、シグナムさん、シャーリー、クロノ君が参加していたから、もし「ＣＢ」と「管理局の悪夢」が関係していたら、「ＣＢ」のことを知っているかも、と思ったんだけど……」
「それがドンピシャだったんやな？」
「そうみたい」

なのはとはやてがどんどん真相に近付く中、フェイトはただ震えてそれを聞くことしかできなかった。

（……もう、誤魔化せない……！）

フェイトはこの状況を打破するためにもシグナムとシャーリーに助けを求めようとしたが、その二人も最早これまで、という表情をしていた。

（どうしたら……どうしたらいいの！？）

しかし、ここである人物の一言が、この状況を打破した。それはフェイトにとっては悪化、はやて達には好転を齎したが。

「……もう、いいんじゃないですか、フェイトさん？　「ＣＢ」について話しても……」

「「なっ！？　シャーリーッ！？」」

「だって、もう誤魔化せないのもありますが、何よりも、この機動六課も「フォーリン・エンジェルズ」に召集されているんですよっ！？　だったら教えた方がいいに決まっていますっ！　少しでも死者を出さない為にも！」

「で、でもっ！」

「し、しかし……」

「……少なくても、私は「ＣＢ」について、知っていることを全て話します。例え、それで退局させられても、それで誰かが助かるなら、私は話します……！」

「「……」」

シャーリーのその決意を見て、フェイトとシグナムは押し黙ることしかできなかった。それに、「フォーリン・エンジェルズ」に召集されているのも事実なので、ここで「ＣＢ」について教えた方がいいのも、また事実だったからだ。フェイトとシグナムはそのどちらもが現実主義であり、体面よりは実を取る方であったから、それで判断に迷ったのもあったが。しかし、ここで意外な人物が現れた。

「あの～、お話し中失礼しますが、少しよろしいでしょうか？」

そう言って、ティアナが話に入り込んで来たのである。それに隊長達はもちろんのこと、ギャラリーと化していた機動六課の面々も驚いた。しかし、その驚きで生まれた幾ばくかの静寂の中、また唐突にティアナが話し始めた。

「フェイトさんに聞きますが、「フォーリン・エンジェルズ」とは何のことですか？　それと、何故そんな任務らしきものに機動六課が召集されているのですか？」

その疑問は、この場に居る者達の言葉でもあった。先程シャーリーの言葉の中にあった「フォーリン・エンジェルズ」という単語が何を意味するのか、誰も分からなかったからだ。しかも、そんな得体のしれない任務に機動六課が召集されていると聞いた者は、殆ど居なかった。

「む。そう言えば、確かハラオウン提督も言っていたな。機動六課が「フォーリン・エンジェルズ」に召集されたと。あの時はシグナムが聞ける様子では無かったから先延ばしにしたが……」

「そう言えば、そんな事も言っていたわね。何を言っていたのかは分からなかったけど」

「リインも聞いたですよ～」

しかし、ザフィーラ達はその単語に聞き覚えがあった。ミッド中央刑務所でクロノに会った時、確かにそんな単語を聞いたのだ。

「……ちゅうことは、「ガンダム」、「CB」、「フォーリン・エンジェルズ」、「管理局の悪夢」の4つは、何かしら関係があるってことかいな?」

「そうなるのかな?」

「……あかん、まるで分からへん。シャーリー、それも含めて説明しとくれる?」

「えぇ、分かっています。……八神部隊長の言う通り、その4つは全て関係しています。……そう、全ては4年前に始まったので「た、た、た、大変です、八神部隊長!?」」

「何なんやグリフィス君? 今めっちゃ重要な話をしとる最中なんや……何が有ったんや?」

シャーリーの話を遮ったグリフィスを睨みながらはやてはそう言ったが、グリフィスのその尋常ならざる様子を見て、即座に部隊長の顔に切り替えた。

「テレビを! テレビを点けてください! そこに映っているんでっ!」

「テレビを点けるんや、エリオ!」

「は、はい!」

はやてはテレビに最も近かったエリオにそう命じた。それに応じ、エリオは急いでテレビを点けた。そして、そこには信じられないモノが映っていた。

「……何なんや、これは? 何なんや、これはっ!? 一体どうゆ

うことなんや、これはっ！？」

右目にモノクルを掛けた老人を中心にし、全身スーツとヘルメットを被った人物がその老人の左右に二人ずつ並んでる映像が、そこには映っていた。

「……ふざけるな、ふざけるなよ、「ＣＢ」ッ！！　貴様達こそが戦争の根源の一つであるのに、どの口でそのような世迷言をっ！！」

だが、その映像だけならば何の問題も無かったのだ。しかし、「ＣＢ」の『宣言』には問題があった。戦争根絶を目指すなどと言っているが、それは裏を返せば、全次元世界に戦争を仕掛けると言っているのと同義である。そして、それは時空管理局に対する宣戦布告となるのだ。

「ティア、これってどういう事？」

「「ティアナさん……？」」

「……簡単に言えば、「ＣＢ」っていう組織は時空管理局に宣戦布告をしたのよ。それも、こんな大胆な方法でね……！」

時空管理局は次元世界の管理と維持を目的として作られた組織だが、その中には当然次元世界の平和を脅かすモノを排除することも含まれる。そう、例えば「ＣＢ」のようなテロリスト等がそれに該当するのだ。

「これはどこから流れているのっ！？」

「わ、分かりません！　かなりの広範囲に流されていることは分かりますが……え、嘘っ！？」

「どうしたの！？」

「し、信じられません！　この映像、管理局が現在確認している全

次元世界に流れていますっ！　それも、管理外世界にまで！」
「「「なっ！？」」」

それに、「ＣＢ」は４年前に管理局に武力介入しているのだ。それも、夥（おびただ）しい数の死者を生み出して。

「……戦争根絶など不可能であることが分からないのか、奴らは？」
「それに、武力に対して武力を持って戦争を根絶するなんて、矛盾しているわ。それじゃあ世界は何も変わらないのに……」
「リインも「ＣＢ」はおかしいと思います～。それに、力で押さえつけるのは間違いだと思います～！」

だから、両者が対立するのは必然である。各々が主張するモノが対立するのだから、その当然の帰結として、両者は戦う運命となる。

「「ガンダム」、か」
「シャーリーはどう見る？　そのデバイスについて」
「……４年前、「ガンダム」はロストロギアに認定されていたわ。それも、その情報が無限書庫で「禁書」扱いになるほど凶悪な、ね」
「「「……！」」」

そして、それは時空管理局に所属する機動六課も例外では無い。彼らも何時か「ＣＢ」と戦うことになるだろう。その時が何時来るかはまだ分からないが、そう遠くないことだけは確かである。そして、その時に彼らが何を思って戦うのか。その全ては『未来』にしかない。

「……なぁ、なのは。私達は事件を解決させたよな？　それが、どうしてこうなるんだよ？」
「……ヴィータちゃん」

「……ゆるさねぇ、許さねぇぞ、私はっ、こいつらをっ！　この鉄槌の騎士ヴィータは、こいつらを粉砕してやる！　はやての分も含めてなっ！！」

「……うん、そうだね。さっさと倒して解決しちゃおうか。折角ヴィヴィオも元気になってきたから、一緒に居る時間を増やすためにも、もう一頑張りしようね！」

こうして機動六課は、いや、世界は徐々に「ＣＢ」と戦う決意を固めていく。そう、この場に限れば、たった一人を除いて。

「……これが貴方達の、いえ、貴方の目的だったんですか、「剣士」？」

第１２話　変革の序曲　≪前篇≫（後書き）

最近キャラの口調に（特にイアンとはやて）悪闘苦戦しております。なので、もしおかしなところがありましたら、指摘くださることが作者にとっては嬉しい事です。何度か確認はしていても、どうしても上手くいかなくて、すいません。……最近ニコ動のとある動画をみていたら、ＣＰが脳内でおかしくなる、つまり、予定されていたＣＰが変わってきた不思議を体験しております。さすがはなのはさんです。このような駄作を読んで下さった皆様に感謝を。

最後に。

ヒロインは　フェ……はやて　です！

第１３話　変革の序曲　≪中篇≫（前書き）

今回も戦闘は無しです。そして、現在後篇も鋭意製作中ですが、これもまた戦闘がありません。なので、もうしばらく戦闘を楽しみにしておられる方はお待ち下さい。

では、開演です。

第１３話　変革の序曲　≪中篇≫

―新暦７５年１０月８日・第９７管理外世界・日本―

「……あれって何だと思う、すずか？」
「……さぁ、私には分からないわ。でも、なのはちゃん達に聞けば何か分かるかもしれない」

すずかとアリサは今世界中でニュースになっている「ＣＢ」について、翠屋で話し合っていた。突如世界中の情報機器と（まるでモニターのように）空に映った、カルト的な謎の組織。それが第９７管理外世界一般の「ＣＢ」に対する認識であった。しかし、此処に居る人たちはもう一つの世界を知っている。そう、次元世界という世界を。

「……やっぱりそっち系だよね？」
「うん、これにはきっと魔法が関わっていると思うの。じゃないと、どうやっても世界中の情報機器の一斉ハックや空に映像を映した事に説明がつかないからね」
「確かにそうよねぇ～。なのはは大丈夫かしら？　あんな危ない事を目的に掲げている組織とまさか戦ったりしないわよね？　どう思いますか、あなた？」
「……オレはなんとも言えんぞ、桃子？」

彼らは知っているのだ、自分達の世界よりも遥かに進んだ技術を持つ世界を。そして、その世界の魔法と呼ばれる科学ならこんな事も可能であることを。

「しかし、少なくともオレには、あのソレスタルなんたらが危ない

ことだけは分かった」
「？　それは先程私が言いましたが？」
「いや、そういう危ないじゃない。オレは戦争根絶などという目的を掲げることができる、その組織の力が危険だと思う」
「どういうことさ、父さん？」

この騒ぎを受け、ドイツから帰ってきた士朗の息子である恭也がそう尋ねると、士朗が頭を掻きながら説明を始めた。

「……いいか。戦争根絶などという夢想を掲げた組織が、普通こんな事をすることが出来ると思うか？　これをするにはかなりの人員と資金が欲しいはずだ。しかし、そんな夢想を聞いて、誰がその組織に入り、金を出したいと思う？　少なくとも、本当に世界を敵に回しても勝てるぐらいの力がないと、人と金が集まらないはずだ」
「それってつまり……」

忍のその言葉に一拍置いてから、士朗はやや緊張した面持ちでこう答えた。

「そうだ、忍さん。つまり、そういうことだ。この組織は、もしかしたら、世界と戦って勝てるかもしれない力を有している可能性があるということだ」

その言葉に、水を打ったような静けさが広がった。しかし、当の本人は、その説を冗談だと言った。

「まぁ、もし仮にそんな力があれば、時空管理局が黙っていないはずさ。だからこれは有り得ないことだな」
「「「それもそうね（だね）」」」

ピピピピッ！

「あら、ごめんなさい。少しお電話に出てしまうけど、よろしいでかしら？」

「「「お構いなく（いいぞ）」」」

桃子の携帯が鳴ったので、桃子がその場から離れると、その場に居たアリサ、すずか、忍、恭也、士朗は顔を寄せ合って囁き声で話し始めた。

「父さん、今のは嘘でしょ？」

「……やはり、分かるか？」

「えぇ、私にも分かったわ。恐らく桃子さんも気付いているでしょうけど」

「……今の説が本当な確率は、実質どれぐらいなんですか？」

「……オレの考えでは、おおよそ１００％だ」

「「「！！」」」

士朗のその言葉に、その場の者達は一斉に息を呑んだ。その説が本当な確率は高いだろうと考えていたが、まさか１００％だとは思っていなかったのだ。

「でも、なのはちゃん達からは何も聞いていないんですよね？」

「……それもそうだが」

忍のその問いに、士朗は顔を顰めながら、自分の考えを述べた。

「……いくら時空管理局といえど、万能ではないから、今までずっと見逃していたのかもしれん。もしくは内通者が居て、情報を操作されていた可能性も……」

「ちょ、ちょっと待ってよ！　じゃあ、その「ＣＢ」ってどれくらいの規模の組織なのよ！？」
「「「……」」」

アリサが疑問を口にするも、それに答えられる者は居なかった。時空管理局の目を潜り抜け、下手したら内通者まで潜ませている組織など、なのは達からの話では４年前に存在していたという、時空管理局最大の敵であった「世界清浄」という組織しか聞いたことが無かったからだ。そして、彼女達はこうも言っていた。「世界清浄」は管理局に比肩し得る唯一の組織だと。もし仮に「ＣＢ」が「世界清浄」と同格だとしたら、それは管理局と比肩し得るということであり、次元世界最大の組織同士の戦争になるかもしれない可能性を含んでいる。そうなれば、一体どれほど被害がでるのか……。それを想像したすずかは、脊髄に氷を入れられたような悪寒に襲われた。

「はい、はい、そうですが……え？　それは本当なんですか？」
「？　どうしたの母さん？」
「……分かりました。はい、それでは」
「……桃子？」

すずかが寒気を感じている傍ら、恭也が何やら困惑した様子の桃子に気付き、士朗が何かあったのかを聞いたが、桃子はすぐには喋らず、静かに先程まで座っていた席に戻り、そこで漸く口を開いた。

「……なのはが、帰ってくるって……」
「「「……は？」」」

「……ごめんな、美由紀。こんなことまで手伝わせちゃって」
「いいっていいて。そんな事よりも、アルフこそ本当にいいの？何やら大変な事になっているけど？」
「確かに大事（おおごと）だけど、私はエイミィに頼まれたんだよ、カレルとリエラのことを。だったら今は、こっちの方が私にとっては大事さね」

アルフは子犬フォームの小さな体を精いっぱい動かして、懸命にカレルとリエラの世話をしていた。そして美由紀はその手伝いに来ていた。

「でも……」
「そんなに気にしないでくれ。本当に大変になれば、ユーノからすぐ連絡が来るようになっているから、今はまだ大丈夫なのさ」

何故アルフと美由紀がクロノとエイミィの子供達であるカレルとリエラの世話をしているのかと言えば、現在両名ともミッドにいて、海鳴市にいないからである。クロノはミッドの刑務所に投獄され、それを受けたエイミィが、何故夫が投獄されたのかについて、全く説明を受けなかったので、それを知るためにミッドへと行っているのである。

本来の予定ではカレルとリエラもミッドに連れていく予定だった

が、今のミッドは治安が悪くなっているということなので、大事を取って連れて行かなかったのだ。そしてその世話役に、ちょうど無限書庫に休暇届けを出していたアルフが選ばれたのである。

しかし、すでに無限書庫を休んで10日を過ぎようとしており、アルフも何時呼び戻されるのか分からないかったので、美由紀に来てもらっていた。

「しかし、世界がこんなに混乱しているのに、この子たちは相変わらず元気だから、心が癒されるねぇ」
「アルフ、それ、おばさんみたいよ？」
「いいじゃないか。無限書庫に居ると無性にこういう笑顔が欲しくなる時があるんだよ」
「へぇ、そうなんだ？」
「そうさ。私はよくユーノがあんなところに居続けられると思うよ。あんな魑魅魍魎（ちみもうりょう）が跋扈（ばっこ）するところにね」

アルフは心底うんざりしたような表情でそう言い切った。

「魑魅魍魎？」
「あぁ、そうさ。管理局の上の奴らは皆そういう化物なんだよ。自分が出世するためならどんな手段も用いる外道や、頭が切れすぎて周りからも恐れられている奴とかがわんさかいるんだよ。まぁ、そういう相手を陣取って、無限書庫を管理局の一部署として発足させて、今まで稼働させているユーノもその一人っちゃあ一人なんだけどね……」
「ふ～ん。つまり、政治家とか、そんな感じ？」
「まぁ、大体そんな感じだね。やっぱりどこに行ってもそこは変わらないとこなんだろうねぇ」

美由紀のその答えに疲れた感じで答えるアルフを見て、どれほど無限書庫が大変なところかが何となく美由紀にも察せられた。そして、昔飼っていたフェレットがそんな人物に成長していたことにかなり驚いた。

「じゃあ、ユーノって実は凄かったの？」

「まぁ、少なくても頭脳や知識なら誰にも負けないんじゃない？噂では、無限書庫の司書長をしているからってことで、次元世界最高の賢者なんて呼ばれているらしいし。まぁ、本人はそれに断固反対していたけど……」

「えぇっ！　そんなに凄いの！？」

「一応はそのくらい凄いと思うけど……？」

「あのフェレット少年がそんなに凄かったなんて……唾つけとけばよかったかな？」

「やめときなって。そんなことしたらなのはに消されるよ？　悪い事は言わないから、諦めた方が身のためだって」

「……消される？」

「……うん」

「「……」」

アルフのその不穏過ぎる一言に、妹がどんな人物に成長したのか心配になった姉の美由紀であった。

―10月9日・第9無人世界・グリューエン―

「ほら、飯だ。食え」

「……」

「ちっ。また食べない気かよ……」

ここグリューエンは軌道拘置所と呼ばれる場所で、宇宙に作られている牢獄である。何故宇宙に作られているかと言えば、そこには凶悪な犯罪者達が拘置されているので、その犯罪者達の脱走と犯罪者の仲間の襲撃を防ぐためである。事実、ここから脱走、及び襲撃を成功させた人物は存在しない。

「……」

そして、ここにはジェイル・スカリエッティが拘置されていた。彼はフェイトによって捕らえられた後、一時ミッド中央刑務所に駐留させられてからここに移送されたのだ。

「……」

彼はここに来てから一言も喋っていないだけでなく、食事もしていなかった。さすがに水（少量の栄養素を混ぜた）は飲んでいたが、それ以外は身動ぎ一つもしなかったので、彼を監視している看守達は、彼をひどく気味悪がっていた。

「ちっ、相変わらず薄気味悪い奴だぜ……」

「全くだな。管理局に宣戦布告してきたバカな組織が現れたってのに、呑気なもんだぜ」

「なんていったけ、あの組織？」
「確かソレスタルなんたらだったのは憶えてるんだけどなー」

彼等にとっての仕事とは犯罪者達を管理・監視する事なので、世界を大混乱に陥れている「ＣＢ」の『宣言』も、彼等から見れば対岸の火事のようなものだった。だからそれほど深刻には受け止めていなかったのだ。しかし、それを責めることができる人間はいない。誰もが自分に関係のない事を真面目に受け止めないように、彼らもまたそうしただけなのだから。

「全く、要らん仕事を増やしやがって……迷惑なんだよなぁ～、こういう奴らって」
「そうですよ。ただでさえそこのスカリエッティを捕まえて、漸くテロリスト共が黙り始めたと思った矢先にこれですから、本当に困りますよ」
「私も同意しますよ……やっと彼氏とデートできると思っていたのに……！」
「ははっ、どんまいどんまい！　また次の機会があるさっ！」

だから、彼らは微塵も疑っていなかった。自分達の安全を。管理局がすぐにそんな組織を潰してくれることを。それが如何に傲慢な考えなのかを考えず、それが正義だと信じて、彼らは今日も管理局で働く。大多数の人が当然なこととしてやっているように。

「そう言えば、あいつはどうなったんだ？　あの４年前に捕まってたテロリストは？」
「あぁ。そいつなら確かスカリエッティのすぐ近くにいるはずだぜ？　あいつもおかしな奴だよなぁ～」

「そうだよな。何をやったのかは知らないけど、上からの命令でそれを詮索しないように言われているぐらいだから、とんでもないことをしたんじゃないのかな？」
「ま、オレ達はただここを監視するだけさ。それ以上でもそれ以下でも無く、な」

―同日・次元空間・プトレマイオス？内―

「では、これより私達は『ファースト・アタック』のフェイズ1を実行させます。よろしいですね？」
『あぁ、頼むぞスメラギ君。この作戦の成否は君の戦術予報にかかっているのだからな』
「分かっています。では、そろそろ失礼させていただきます、イオリアさん」
『うむ。期待しているぞ』
「……ふう」

スメラギはイオリアとの通信を切ると、深いため息を吐いた。そのため息はこれから自分達が起こすであろう悲劇を思ってのことだった。

「……リボンズとブリングは第９無人世界に送ったし、ロックオン達も既に位置に着いた。後は私達とデヴァイン達ね」

モニターに映っている地図を見ながら、作戦遂行に必要な情報を整理していくと、別のモニターにブリッジからの通信が開き、ある報告がスメラギの元に届いた。

「そう、デヴァイン達も準備できたのね。……フェルト、合流ポイントまであとどれくらいかしら？」

『あと１０００です』

「そう。……始まるのね、「ＣＢ」の計画が。覚悟はしていたけど、いざ本番になると緊張するわね」

『……仕方ないと思います。そもそも４年前の戦いは想定外のことでしたし、この「計画」にも不安要素は沢山あります』

「例えば『ＯＯガンダム』とか、ね？」

『……はい』

「……でも、やるしかないわ。私達は世界の変革を自ら望んで「ＣＢ」に入ったんだもの。相応の覚悟もしたし、下準備もした。なら、後は私達がどれだけ動けるかというだけ……頑張らないとね」

『はい』

「ありがと、フェルト。こんな愚痴みたいなのに付き合ってくれて。あとで何か奢るわ」

『ありがとうございます』

そう言ってスメラギはフェルトとの通信を切りながら、トレミーがネーナ達と合流した事を放送で知った。そして、トレミーの進路をとある管理外世界に向けるように指示した。その指示を出してから、スメラギは今の自分の姿を見て、かつての友人がどう思うのか、少し気になった。

「……『ファースト・アタック』のフェイズ1が終わった時、世界はどんな反応をするかしらね、リンディ？」

モニターに映るトレミーの進路先にある管理外世界には、ある番号が振ってあった。そう、

『97』と。

―新暦75年10月7日・ミッドチルダ上空・アースラ内―

「『高町　なのは一等空尉は第97管理外世界にて療養すること、以上。時空管理局人事部、レティ・ロウランより』……えぇっ！？」

なのはは今日の朝一番に開けたメールにそう書かれていたことに驚愕した。寝耳に水だったというのもあるが、何よりも、この状況で人事部から休むように言われるとは思ってもいなかったのだ。

何故なら、前日の「ＣＢ」の『宣言』により、時空管理局は過去類を見ない程の忙しさに見舞われていたからだ。管理世界への説明はもちろんのこと、管理外世界にも混乱を収めるために時空管理局について説明しに行ったりしているので、管理局、特に「海」は圧倒的に人員が不足していた。その上未だに「Ｊ・Ｓ事件」の傷が治りきっていない事と後始末が完了していない事も合わさり、「陸」も今のミッドチルダや他の管理世界の治安を守るだけで精一杯だったので、時空管理局はまさに猫の手も借りたい状況なのだ。

そこにこのメールだ。この状況でオーバーＳランク魔導師であり、また一騎当千を体現しているなのはを休ませるのは、明らかにおかしく、有り得ない事態なのだ。確かにヴィヴィオとの戦いでブラスター３まで解放した事により相当体にガタがきているのは事実だが、そんなことで休むことができないのもまた事実であった。

「ど、どういうことなの！？」

「ＣＢ」の『宣言』により管理外世界にまで時空管理局の存在が認知された結果、管理局に反発し、敵対する世界が急速に増えている。よって、オーバーＳランクの力は絶対に必要なのだ。反発する世界の中には質量兵器を使用している世界もあり、技術的に見てもミッドチルダと大差ないところまであるのだから、オーバーＳランクの圧倒的な力が無ければ制圧が難しいためだ。

「は、はやてちゃんっ！」

「なんやなのはちゃん？　ユーノ君との痴話喧嘩ならお断りやで？」

「ユーノ君とはそんな関係じゃ……ち、違くてっ！　その話じゃなくて、これなの！」

「？　ただのメールやないか？　これのどこがおかしい……Ｗｈｙ、何故こうなっとるんや？」

「はやてちゃん、かなり混乱してるね？」

そも管理局は質量兵器を根絶する為に結成された組織でもあり、魔法を使うテロリストとの戦闘はお手の物だが、ここに質量兵器が関わってくると話が違ってくる。管理局は質量兵器から離れて久しい組織であるので、質量兵器本来の恐ろしさをあまり認識していなかったのだ。そう、子供の指一本でも世界を破滅に導ける恐ろしさを。

「いやいやいやいや、レティさんもお茶目な人やね？　この状況下でこんな笑えん冗談かましてくるなんて、さすがのはやてさんも脱帽もんや」

「はやてちゃん、現実を見てなの」

「……ちょっとレティさんとリンディさんに聞いてみる」

だが、例え質量兵器が絡んでも、それを無視できるのがオーバーSランク魔導師だ。その力はたった一人で世界を制圧可能であると言われる。そして、それが冗談では無く、本当に一人で世界を制圧できるのだ。禁忌である質量兵器の代表格である核をも上回る、ある意味人類最強の兵器ともとれる戦闘能力を持つのがオーバーSランクなのだから。

「レティさん、リンディさん。これはどないなことなんですか！」

『……私は知らないわよ、レティ？』

『……なのはさんにはこれから起こるであろう戦いに向けて万全を期してほしいから療養させるようにって上からお達しがきたのよ』

「上？　レティさんに命令できる人なんて、一体どれだけ地位が高い人なんや？」

『……人事部のトップのあのクソ豚よ』

『あぁ、あの無能が服を着て歩いているあの人ね』

そのオーバーSランク魔導師の中でも「不屈のエース」・「エースオブエース」として名高く、「J・S事件」では古代ベルカで「闇夜天の書」と並び称される程の実力を持っていた聖王のクローン（実質的な戦闘能力はほぼ同じであったと思われる）をも倒したなのはをこの状況下で使わない手はない。だから、この命令書には何らかの意図が働いた可能性があるとはやて達は考えた。その疑惑を人事部のトップという地位についている人物からの命令だということが更に深めた。

『でも、そうだとするとあの豚の背後には誰がついているのかしら？』

『確かにそうね。無能と言えど、仮にも一部署のトップだから、少なくても同じくらいの地位が無いと無理よね？　後ろ暗かった最高評議会もいなくなったんだし』

「……そやね。それもかなりの権力と情報を持つところやね」

「……？　はやてちゃん、どうして情報をもつところって決めつけているの？」

「簡単や。弱味を握られとる可能性があるからや」

はやて達が人事部のトップの背後についていそうな人物を何人かピックアップしたが、いずれも確信にまでは至らなかった。なのはも考えてみたが、権力を持ち、情報も持っている人物となると、執務官、提督、査察官などが当てはまるが、それははやて達の方が詳しいし、その中の人物を先程から挙げているが、いずれも却下されている。後条件に当てはまるとしたら、それこそ無限書庫の司書長になり、一部署のトップとして活動しているユーノぐらいしかないのだが、それは有り得ないとし、却下した。彼がそんなことをする人間ではないからだ。

「……う～ん、もう私はいないかも」
「うちもや。いずれも弱いな～」
『仕方ないわ。これはまた後日に話し合いましょう。なのはさんは一応その命令文に従ってください。今疑われるのは厄介ですから』
『一応フェイトにも聞いてみるけど、あの子今ちょっと考えていることがあるのか、あまり喋らないのよね。だからあまり期待はできないかもしれないわ』
「……やっぱりあれ関係ですかね？」
『恐らくはね。私も今全力で４年前の調査をしているけれど、なかなかはかどらないのよ。「ＣＢ」関連の資料は殆ど処分か禁書に指定されていて容易には読めないし、暗号とかもたまに混じったりしているしで……』
「ほんまはシグナムやクロノ君、シャーリーに聞く予定だったのに、それも先手を打たれたもんな～」

「ＣＢ」に関連する情報の一切を禁書指定とする。

それが「ＣＢ」の『宣言』に対する管理局の対応であった。そして、この措置によりはやて達はシャーリーから情報を聞き出すことができなかったのだ。もし禁書指定とされる情報を外に漏らしたことがバレた場合、最悪終身刑も止むを得ないからだ。だから彼女らはまだ知らない、「ＣＢ」という組織がかつて何をしたのかを。

『まぁ、そろそろクロノも謹慎から解放されるから、その時にでも聞いてみるわ』
「お願いします、リンディさん」
「うちからもお願いや、リンディさん」
『ふふ、任せなさい』

リンディがそう言うと同時に、なのはにまた新しいメールが届い

た。それをおっかなびっくりで開けてみると、ユーノからのメールだった。

「ユーノ君？」

「おおっ！　なんやなのはちゃん、デートのお誘いやないか！」

『あらあら、青春よねぇ～。私もクライドと何度メールでデートの約束をしたことか……』

『何十年前の話をしているのかしら、リンディ？』

『……レティ？　人には言ってはいけないことがあることを御存じかしら？』

「だ、だからユーノ君とはそんな関係じゃ……！」

「さぁ、白状するんやなのはちゃん。それには何が書いてあるんや？」

『『気になるな（わぁ～）』』

「わ、分かりましたからそんな温かい目で見ないで下さい！　……読みますよ？　『やぁ、なのは、久しぶり。君が海鳴に戻るって聞いたからメールしたんだけど、迷惑だったかな？　それで、用件なんだけど、もし10月8日のディナーの時間が空いてたら、一緒に食事をしませんか？　大事な話があります。返事を待っているよ』……っ！」

なのははその文章を読むと、顔が一気に茹で上がった。そのトマトよりも赤い顔をはやて達の方に向けると、案の定大爆笑された。

―同日・時空管理局本局内―

「やってくれましたな、「ＣＢ」は……！」
「まさかこんなことをしてくるなんて、思ってもいなかったわ」
「それはそうだろう。未だ嘗てこんな行いをしたものなんぞいなかったからな」

臨時最高評議会の３人は今「ＣＢ」の『宣言』について話し合っていた。そして、彼らは「ＣＢ」関連の幾つかの事柄の行動方針を決めていった。その行動方針の中には「ＣＢ」関連の管理局が持っている情報を公表することが含まれていた。

「いやはや、しかし。少し困った事態になりましたね」
「少しどころではないと思いますがね」
「これも我らにとっては少しだろう？　幾回もの危機を乗り越えた我らにとってはな」

その情報を公表する方法は、「ＣＢ」が『宣言』の時に使った通信回線を判明させた事もあり、それをそのまま使う事で合意された。今から全世界に通信回線を用意するのはかなりの手間と人員、資金がかかるので、とてもではないが今の管理局では準備することができなかったためだ。

ちなみに、その判明した通信回線はかなり複雑・巧妙に隠されており、一日では見つけることが不可能だと技術分野の人達は言う。

「まぁ、情報公開のほうはあれでよいとして。……ユーノ・スクラ

イア司書長はどうなったんだい、ミゼット？」
「それが、なかなか強情でして……」
「それは仕方が無いだろう。前最高評議会直々のお達しだったのだからな。逆に好ましいぐらいだがな、儂には」

情報を公表するにあたって必要な物の一つにその情報そのものがあるのだが、ユーノはその情報公開を頑なに拒否していた。そしてその拒否する理由が「前最高評議会の勅令故」だったので、臨時最高評議会に過ぎない彼らにはあまり無理強いができないのであった。しかし、情報公開の予定日である１０月１０日には間に合わせるとミゼットは言った。

「そういうからには何かあるんだろうね、ミゼット？」
「まぁ、策ってほどでもないのですが、彼の幼馴染である彼女らを使おうと思います」
「……？　何故だ？　それではあまり効果は無いのではないのか？」

ミゼットの策とは、彼らの幼馴染である二人、高町なのはと八神はやてを使ってユーノに情報を公開するように迫らせるというものだった。ミゼットはすでにその二人、いや機動六課が「ＣＢ」について嗅ぎ回っていたのを掴んでいたので、この策を提案したのだ。

「なるほど。それは確かにいい策ですね。それだとさすがの司書長といえども折れるかもしれません」
「……私は彼女らを使う事に罪悪感を感じますが、これも管理局の為です」
「まぁ、なんとか理解はできたが、それで本当に大丈夫だというのなら儂は何も言わん。好きにするがいい」
「というわけで、今回の協議はこれにて終了しますが、他に何かありますか？」

「いえ。後は「CB」が動いてから決めましょう。彼らが本当にあの『宣言』通りに動くのかどうかを確かめてからね」
「……」
「では、これで今日の協議は終了です」

レオーネがそういって協議を終了させるのを見届けてからキールはある考えに耽った。

（しかし、どうしてこの通信回線を見つけられたのだ？　まるで使ってくださいとでもいうように。……っ！　まさか、わざと見つけさせたとでもいうのかっ！？　しかし、何の為に？　……まぁ、それは後々に判明するだろう）

キールはこの情報公開に使う通信回線が何故発見できたのかに疑問があったが、それよりも疑問だったことがあった。

（……本当にあのユーノ・スクライア司書長がその程度で動くのだろうか？　前最高評議会やレジアス・ゲイズと渡り歩いてきたあの青年がそんなことで動くなど、儂には信じられんがな……）

キールはかつて一度だけユーノと出会った事があった。その時彼が感じたのは「決して隙を見せてはいけない」という危機感だった。ユーノは自分を卑下し、相手を尊びながら、目は決して笑っていなかったのだ。

（あの時は本当に冷や汗を流したものだ）

その時の事を思い出すと決まって冷や汗を流してしまう。百戦錬

磨であるキールでも、あの歳であそこまで人を利用価値で決める事などできなかったのに、目の前のたかだか１９の青年が下手すると自分たちに並ぶほどの決断をできるということに、彼は再び冷や汗を流した。

（まぁミゼットの策通りにいけばよい。それでいかなければ……後で考えることとしよう。今日はもう疲れたからな）

後に彼は語った。あの時に気付いていればよかったと。

―１０月８日・ミッドチルダ―

「久しぶり、なのは」
「ユーノ君も久しぶり」

なのははあの後ユーノのメールにＯＫの返事をし、ミッドチルダでも最高級のレストランで待ち合わせをしていた。最高級のレストランに違わないその料理の味は、デザートですら翠屋の娘であるなのはを満足させる物だった。

「ところでなのは」
「何かなユーノ君？」

デザートも食べ終わり、談笑もそろそろ切り上げ時になった時、突然ユーノがなのはに問い掛けてきた。この問い掛けこそが今回の会合の目的だろうと感じたなのはは体に緊張を走らせ、どんな質問にでも答えられる心の準備をする。しかし、ユーノの問い掛けはなのはにとっては拍子抜け、または想定外に値するモノだった。

「なのはは今、幸せかい？　この死が隣り合わせな世界に居て。魔法が使えるというだけで子供にも理不尽（せんそう）を強要させるこの世界に、なのはは満足しているのかい？」
「……ユーノ君？」
「答えてほしいんだ、なのは。真剣に、君の本心で……！」

ユーノはまるで追い詰められたような表情でなのはに質問の答えを迫った。それに少し茫然としていた（驚愕していた）なのははその質問について考え、ふと気付いた。

（……もしかして、ユーノ君、私をこの世界に引き込んだ事を後悔しているんじゃ……？）

それは確信というにはあまりにも脆弱（ぜいじゃく）な、直感や予感といったもので感じたことだったが、なのはにはそれが正しいと思えた。そして、その質問に対する答えはもう決まっていた。

「ユーノ君。もしユーノ君が私をこの世界に巻き込んだ事を後悔しているのなら、それは違うよ？」
「……？」

「だって、この世界に入ったのは自分の意志だし、何よりも、この世界にだって楽しい事はあるんだから！　それに、ここには仲間もいるんだよ？　それなのに、どうしてユーノ君のことを恨めるの？」
「……でも、なのは。僕は……君を……」
「むぅ～、強情だねユーノ君！　とにかく、私はユーノ君のことを恨んでないよ！　逆に感謝しているぐらいなんだから、そんな暗い気持ちはポイッなの！　分かったなの、ユーノ君っ！？」
「……う、うん。分かったよなのは」
（……何でそんなにびっくりしているのかな？）
（……「管理局の白い悪魔」、か……今なら次元犯罪者たちがどうしてそんな名前をつけたのか、理解できるような気がするよ……）

ユーノがなのはにそんな感想を抱いているとは露知らず、なのははその後もその話に触れる事無く話し、やがて別れの時間になった。なのははこの時間が名残惜しいらしく、お互いが見えなくなる時まで手を振り合いながら、それぞれの帰途についた。

（それにしても、ユーノ君はやっぱりあの時の事を後悔しているんだろうなぁ～）
「どう思う、レイジングハート？」
『マスター、それはユーノの質問のことですか？　それとも、マスターの妄想だった方ですか？』
「レ、レイジングハートッ！？　何を言っているのっ！？」
『マスター、チャンスだったあの時にあんな質問が来るとは……残念です。今回は運が無かったですが、次は頑張りましょう』
「レ、レ、レイジングハート！　ゆ、ユ、ユーノ君とは、そ、そんな関係じゃ……！」
『私はいつでも貴女（あなた）の味方です、マスター』

「うわ～ん！　レイジングハートが私を苛めるよ～っ！」

レイジングハートはユーノと別れたなのはを（苛めているのでは無く）慰めながら、先程の件について思考していた。それははまさにインテリジェントデバイスにのみ許されし所業なのだが、レイジングハートはそれを気にかける事も無く考えていた。

（どうしてユーノは今そんな話を持ち出したりしたんでしょうか？　マスターがどんな状況かは知っているはず……だからなのでしょうか？）

しかし、いくら考えても答えは出てこなかった。

ピピッ！

「！」

『！』

レイジングハートが悩んでいると、なのはの携帯に新着メールが届いた事を知らせる電子音が鳴った。それを開けてみると、ユーノからのメールが届いていた。

「？」

『？』

それを若干訝しげに思いながらも開けてみると、明後日行われると聞いていた臨時最高評議会の緊急記者会見について書かれていた。そこで「ＣＢ」について公表するとも。

「えっ！」

それに驚いたのも束の間、ユーノはティアナや守護騎士たちに力になれなかったことを謝ってほしいと書いており、その最後にはこう書かれていた。

『さようなら、なのは』

「……ユーノ君？」

それに胸騒ぎを覚えたなのはは急いで返信を打ったが、返事が返ってくる事は無かった……。

第１３話　変革の序曲　≪中篇≫（後書き）

誠に勝手ながら、「闇の書」と「聖王」は互角に設定しました。何故なら作者は初代リインが聖王Ｖｅｒのヴィヴィオに負けるところを想像できなかったからです。あと、これも勝手ながら、Ｓランク魔導師を核よりも上と書きました。これも劇場版を見たからです。あれは戦術ではなく戦略です。ＳＬＢは戦略核です。これらは苦情・批判を受ける覚悟で書きました。純粋ななのはファンの方たちには深く謝罪します。このような駄作を読んで下さった皆様に感謝を。

最後に。

ヒロインは　もちろん　なのは様ではなくはやて　です！

第１４話　変革の序曲　≪後篇≫（前書き）

今回は前回の予告通り、全く戦闘がありません。楽しみにしていた方には深くお詫び申し上げます。あと、今日は3月9日、つまりミクの日です。ミックミクにされる日です。

では、開演です。

第１４話　変革の序曲　≪後篇≫

―新暦７５年１０月１０日・時空管理局本局内―

「なぁ、今回の緊急記者会見って何なんだ？　やけに緊迫した雰囲気なんだが……」

「どうせあの「ＣＢ」についてだろ？　管理局に堂々と宣戦布告したのは凄いが、そんな聞いた事もない組織じゃすぐに鎮圧されて終わりさ」

「それじゃあこの緊迫した空気は何なんだ？」

「決まってるだろ？　臨時最高評議会になったあの「伝説の三提督」が初めて応じた公式会見なんだから、これぐらいの空気の方が普通だろ？」

「……それもそうか」

「まぁ、オレも不可解な事はあるけどな。どうして管理外世界にまでこの放送を映すんだか。お偉いさんの考えは分からないね」

本局の中でも格別に広いメインホールを使用して行われる管理局のトップ達の緊急記者会見に集まった記者達は、各々の推測をしながらも、今か今かと会見が開始されるのを待ちわびていた。この緊急記者会見の為に集まった記者の数は実に１０００名を超えており、格別に広いはずのメインホールが狭く感じるほどの人数であった。

何故この緊急記者会見にこれほどの記者達が集まったかというと、管理局がこの会見をする時間の番組を全て買い取り、これを映すように命じ、その買い取った代わりとして、この会見に記者達を派遣するように要請したからである。さらに、管理局がそこまでするほどの会見を逃すものかとばかりにフリーの記者達も集まったのである。そして、フリーの記者達と会社の記者達は互いに牽制（けんせい）しながら、

自分達の記事をいいものにする為、他社一（者）を貶ぼしめ始めた。

その光景は傍から見れば、まるで餌を取り合うカラスのようであったが、それはここに集められた記者達のほんの一握りしか気付かなかった。

そして、段々と会見予定時刻に迫ると、煩わしかった鳴き声も静まり、今度は痛々しいほどの静寂に包まれた。誰も声を発する事無く、呼吸をする音しか聞こえなくなって、漸く会見が始まった。

その始まりは唐突であった。誰もが会見のテーブルに意識を向けていたが、誰もがそこに「伝説の三提督」が座るところを見ていなかった。気が付いたらそこに座っており、いつの間にか会見が始まろうとしていたのだ。そして、それに驚いたのも束の間、「伝説の三提督」による会見は始まった。

「ではこれより緊急記者会見を始めます。此度の会見の趣旨は臨時最高評議会のメンバーの正式な発表もありますが、何よりも、今世界を混乱させている「ＣＢ」について、管理局がどう対処するのかを発表するものであるということを理解してほしいです」

「伝説の三提督」の一人、レオーネ・フィルスがそう言うと、その場に居た記者達は驚きを露わにした。彼らは今回の会見は臨時最高評議会のメンバーの発表こそが肝だと思っていたので、まさか「ＣＢ」などという組織の為にこの会見が開かれたとは思ってもいなかったからだ。

「まず、初めに皆様に伝えたい事があります。……管理局は４年前に「ＣＢ」と接触していたということを」

その言葉に場はざわついた。先程までの静寂が嘘のように、記者達が囁き声で喋り始めたのだ。

「静かに！　……では続けます。管理局は４年前に「ＣＢ」と接触しましたが、その切っ掛けは「ＣＢ」の保有するロストロギア・「ガンダム」が第３、第６管理世界、第８８管理外世界、第９観測指定世界にて殺戮を行っていたからであります。ちなみに、青いのを「剣士」、緑色を「三つ目」、橙のを「羽付き」、他のよりも一回り大きい白いのを「デカブツ」と便宜します」

ざわついていた場はレオーネの一声で静かになったが、「殺戮」という単語がその静かの質を変えた。それは「驚愕」「畏れ」による静寂ではなく、「呆れ」による静寂になったのだ。記者達は目でこう語っていたのだ、「何を言っているんだこの人は？」と。

「管理局としてはそのような行為を許容することなどできず、「ＣＢ」の行動に対し警告、及び停止を求めたが、「ＣＢ」はそれを聞く事無く次々と殺戮を行っていきました。それを見かねた管理局はそのような行為をする「ガンダム」を鹵獲する為、魔導師を派遣しました。しかし、その結果は……」

レオーネの言葉と同調するように提督達の後ろにあった空間モニターが作動した。そして、そこに「ガンダム」と思われるゴーレムらしき物が映しだされた。しかし、その映像は４機の「ガンダム」が魔導師達を一蹴している映像であった。

「全滅でした。「ガンダム」には魔力を確認できなかったのでＡＡランクの魔導師でも対応可能と判断して派遣したのですが、それが全滅したのです。我々はその戦闘能力の高さに脅威を感じ、ＡＡＡランクの魔導師２名を一体の「ガンダム」に当たらせましたが」

次に映ったのは、ＡＡランクの魔導師2名と戦い、なおも優勢を保つ白色の巨体を持つ「デカブツ」であった。そして、「デカブツ」は終始優勢を保ち、集中力が切れた魔導師をその巨大な砲で消し去った。

「御覧の通り、まるで歯が立ちませんでした。これを受けた我々は「ガンダム」にオーバーSランクを派遣することを決めましたが、それでも倒すことができず、逆にオーバーSランク魔導師を倒されてしまいました」

そう言うとモニターに「剣士」が映り、それが幾つもの剣を用いてオーバーSランク魔導師を切り裂いていく動画が流れた。その光景に皆は目と心を奪われた。管理局の虎の子であるはずのオーバーSランク魔導師を切り裂いていく「剣士（ガンダム）」はまるで悪鬼のようで、見る者全てに恐怖を抱かせたのだ。

「オーバーSランクを倒された事で、我々は「CB」関連の情報に緘口令を敷きました。これは混乱を招かない為に必要だった処置であったと理解してください。……そして、オーバーSランクすら倒した「ガンダム」を一気に鹵獲する為、我々はある大規模な作戦を実行しました。しかし、この作戦は１０００名近くの魔導師を動員して行われましたが、新たな「ガンダム」が3機現れた事により失敗に終わります。この時現れた新たな3体の「ガンダム」を、我々は「黒い銃」、「橙の剣」、「赤き翼」と呼称しました」

モニターがその作戦で4機の「ガンダム」を追い詰めたかのような映像を映した後、黒・橙・赤の三機が現れ、青・緑・橙・白の４機を援護し、次々と魔導師達を殺していく映像を流した。「黒い銃」は右肩に背負った長大な砲を放ち、「橙の剣」は巨大な剣と小型の

ビットらしきものを巧みに使い、「赤き翼」はその背に赤い翼を発現させ、魔導師達をどんどん喰らっていく。それに負けず劣らず、「剣士」は様々な剣で切り裂き、「三つ目」は長銃と短銃で的確に撃ち抜き、「羽付き」は変形しながら驚異的な速度で一撃離脱をし、「デカブツ」は大砲で敵対するものを消し去っていく。

「なんだこれはっ！」
「やらせではないのか！」
「もっと具体的な説明を！」

その映像に対する記者達の反応は様々であった。４年前にこのような事があったなどとは知らなかった為か、彼らも大いに困惑・混乱していたのだから、仕方がないと言えば仕方がないのかもしれない。しかし、「ＣＢ」についてもっと知りたいという探究心・好奇心だけは完全に一緒であった。

「……管理局はこの時、歴史上類を見ない大敗を「ＣＢ」に喫していたのです。向こうの損害はほぼ０に対し、こちらの被害は死者３００名以上、負傷者２０００名以上だったからです」

そして、それは一瞬のことであった。次に場を支配したのは恐怖や戦慄といった負の感情だった。自分達の世界を護ってくれている組織が負けたのだから、当然の反応ではあったが。

「この時の被害には４名のＡＡＡ・オーバーＳランク魔導師も含まれており、そのあまりにも甚大な被害に管理局は一度「ＣＢ」、いえ「ガンダム」に対し手がつけられないと判断し、放置することを決定してしまいました。この後に起こってしまう惨劇も知らずに……」

レオーネはモニターを操作し、あるロストロギアを映した。それはまるで宝石のような美しさを持ちながら、決して作ってはいけないと錯覚してしまうような危うさも兼ね揃え、球状の形をしていた。

「このロストロギアの名は「ナイトメア・ディメンション（次元の悪夢）」と言います。これと残りの「ＣＢ」についての説明は無限書庫のユーノ・スクライア司書長がしてくれるので、皆様は頭上を御覧下さい」

そう言われて一斉に頭上を見上げてみると、そこには巨大なモニターと一人の青年が浮いていた。その青年は一礼すると、さっそく説明を始めた。

「まずこの「ナイトメア・ディメンション」ですが、簡単に言ってしまえば次元断層を発生させるロストロギアです。このロストロギアに込められた膨大な魔力を一気に解放し、その解放された魔力を一点に集中させ、次元に歪みを作り、最終的には次元断層にまで発展させるようになっています。そして、「ＣＢ」はこのロストロギアを使い、８つもの次元世界を滅ぼしました。その犠牲者の数は当時の記録では死者１０８億人以上、負傷者７２５億人以上に上（のぼ）りました」

ユーノはそこで一呼吸し、さらに一拍置いてから説明を続行させた。この説明を聞いている人達の気持ちを察したからだ。

「管理局はこの未曽有（みぞう）の被害を前にして、ある一つの決断を下しました。即ち、「ＣＢ」及び「ガンダム」の殲滅を。そして、その為に立案された作戦を「フォーリング・エンジェルズ」と言います」

その言葉が言い終わると同時に、巨大なモニターに変化が現れた。先程までのロストロギアのデータでは無く、管理局の大規模な艦隊

を映したのだ。そのあまりにも圧倒的過ぎる迫力に、尻込みをしてしまう者さえいた。

「この作戦に動員された戦力は実に管理局の全戦力の３０％に相当します。しかも、この作戦にはあの「世界清浄」も協力していたので、実質的な戦力はさらに上です。それに付け加えると、ＡＡＡランクが１１人、オーバーＳランクも７人参戦していました」

そう言いながらユーノはモニターを操作し、７人のオーバーＳランクが全員映っている画像をモニターに表示させた。

―同日・ミッドチルダ上空・アースラ内―

「おぉ！　シグナムにフェイトちゃん、それにクロノ君も映っとるやんけ！」
「ふわぁ～、かっこいいです～！」
「全くやな」

うちは表向きそう言ってリインの言葉に同調しながら、内心では「ＣＢ」について考えていた。そんで、何でシグナムやフェイトちゃんがあないに「ＣＢ」や「ガンダム」について説明したがらなか

ったのかを理解した。けど、それと同時に、胸をよぎる疑問もあったんや。

（なして殲滅作戦を決行したのに、その亡霊みたいなのが今頃現れたんやろ？）

そう、うちやスバルに大怪我させたあの青い「ガンダム」。説明では「剣士」言うらしいけど、そないなもんがどうして４年経った今現れた、いや、復活したんやろ？

「……」

「？　はやてちゃん、眉間に皺が寄ってるですよ～？」

「ん？　あ、ほんまや。気いつかへんかったわ」

「大丈夫ですか～？」

「大丈夫やリイン。もう左腕も完治して完全に動かせるんやから、そないにじっと左腕を見つめんといて」

「……分かりました」

ふう、危ない危ない。顔に出るぐらい熟考するなんて、うちらしくないな～。ま、それだけの事ではあるし、しゃあないか。

―同日・第９７管理外世界・日本―

「まさか、そんな組織だったなんて……」

私は今テレビに映っているユーノ君を見つめながら（どうして返信をくれないのかな？）内心をそう零した。

「ＣＢ」。

私が知る中でも最悪だった「世界清浄」よりもさらに悪質極まりない、最低最悪なテロリスト集団。人の命を奪う事に何の躊躇いも無い、慈悲なき悪鬼の集団。そして今、管理局、いや世界に対し、宣戦布告を行った戦争屋の集まり。

これが私の「ＣＢ」に対するイメージなの。そして、これは恐らくこの説明を見聞きしている人の普遍的な意見でもある。少なくても、私の家族は同じだった。

「「「……」」」

お父さんはひたすら顔を顰めながら無言。お母さんは私をチラチラと心配そうに見ながら無言。お兄ちゃんと忍さんは何か考えている表情のまま無言。アリサちゃんとすずかちゃんはテレビじゃなくて私をじっと見つめながら無言。お姉ちゃんはユーノ君を見つめながら無言。

……？　あれ？

「お姉ちゃん、どうしてユーノ君をそんなにじっと見ているのかな？」

「……へ？　いや、それはね、少し気になることがあったからだよ、なのは」
「気になる事って？」
「うーん、なんて言ったらいいのか……」
お姉ちゃんにしては珍しく言い辛そうだった。何でだろう？　そんなにユーノ君の事が……気になるのかな……！
「……お姉ちゃん？」
「ヒッ！？　な、なのは、そんなに恐い笑顔を私に向けないで！」
（……そんな顔してたかな？）
（アルフの言うとおりね。確かにこれは消されるかも……！）
むぅ～！　お姉ちゃんは失礼なの！　確かに最近は悪魔って呼ばれることが昔よりも多くなったけど（中には魔王って言った人もいたの。失礼極まりないの！）、家族にまでそういう風に思われるのはちょっとショックなの。……あ。
「……じゃなくて、どうしてユーノ君をそんなに見つめていたの？」
「……まぁ、少し思う事があったのよ、なのは」
……説明になってない。でも、それがお姉ちゃんにとっては精一杯の言葉だったのは何となく分かったなの。だから、これ以上の追求はしないの。
……あっ！　いつの間にかモニターにフェイトちゃん達が映ってる！

「ちょ、なのはどういうことよ！　フェイトやクロノにシグナムさんがあそこに映っているのは！？　説明しなさいよ！」
「待ってアリサちゃん！　私もよくは知らないの！　だから、もう少しこれを見よう！」
「……本当ね？　分かったわよ……」
「……しかし、知り合いがテレビに映る事になろうとは……」
「何か不思議な気分ですわね、あなた？」
「……シグナムさん、か」
「恭也さん、大丈夫ですよ！　シグナムさん達は本当に強いらしいですから！」
「……しかし、そのオーバーSランクっていうのに知り合いが3人もいるっていうのは実は凄い事なんじゃ……？」
「実際に凄いらしいですよ、美由紀さん」
「そうなの、すずかちゃん？」
「はい」

う～ん、こうしてみると凄いメンバーなの。私でも知っている有名人しかいないの。こんな豪華メンバーで臨むなんて、「フォーリング・エンジェルズ」っていう作戦は本当に大掛かりなんだな～。

「……あれ？」

でも、私はその写真を見て、ある事に気付いてしまった。

「どうしたのなのは？」
「……今気付いたんだけど、フェイトちゃんやシグナムさん、クロノ君以外の人は皆４年前に死んでるの……！」
「「「！？」」」

そう、死んでいるのだ。フェイトちゃん、シグナムさん、クロノ君を除く4人のオーバーSランクの人達が。それも、4年前の「管理局の悪夢」で。

（そうだとしたら、「フォーリング・エンジェルズ」で死んだというの、この人達が！？）

―第9無人世界・グリューエン―

「「……」」

二人は牢屋越しに対面しながら、ひたすら無言だった。話す事も無ければ、声をかける必要性すらなかったからだ。

片や広域指名手配されたほどの次元犯罪者。

片や上層部がひたすら隠したがった犯罪者。

これほどの人物達が話し合っていたら、それはそれで逆に危なかったが。

「……ほうっ！」
「……！」

しかし、そんな二人にも変化が起こった。片方は感嘆の溜息を、片方は様々な感情をごちゃ混ぜにしたような表情を。

「素晴らしい！　実に実に実に！　じ・つ・に・素晴らしい！　「CB」とは、「ガンダム」とはこれほどの事を行える組織だったとは！」
「……」

その変化が起こった理由は、獄内にも流れていた「CB」についてだった。それを聞いていた二人は上記のような実に対照的な反応を示したのだ。

「しかし、残念ながら、命を大切にするという私のポリシーからはひどく離れている！　が、それもこの世界の変革の為に必要だとするのなら、仕方がないのかもしれない！　君はこれをどう思うかね？」
「仕方がなかったで済ませられるような事ではありません……！」
「ほう、ほう、ほう！　君はそう考えるのか！　稀代の殺人者となっている者がそのような事を言うとは、ひどく驚嘆するよ！」
「……」

片方の犯罪者がそう叫ぶと、それに反論するかのようにもう片方が口を開いたが、それもすぐに閉じてしまった。それを微かに残念に思いながら、片方の犯罪者――ジェイル・スカリエッティ――はさらに言葉を紡(つむ)いだ。

「ふむ。もしかしたら私の失敗はここにあるのかもしれない。そう、非情になりきれなかったところに。君達のように命を無差別に摘む事さえできれば、私の目論見も成功していたかもしれないな」
「……」

しかし、もう片方の犯罪者が言葉を紡ぐことはなかった。今まで以上に沈黙を保つその姿は見て、彼はさらなる落胆を感じ得ずにはいられなかった。

「……君は本当に沈黙が好きなんだね。できれば言葉でのコミュニケーション、またはキャッチボールをして欲しいのだが」
「……」
「やれやれ、だんまりかい。……そういえば、聞いたかね？」
「……？」
「「ＣＢ」が再び活動を再開させたことを」
「……！？」
「おぉ！　漸く反応してくれたね！　私は純粋に嬉しいよ！」

その言葉に信じられないといった表情を見せる彼に、スカリエッティは歓喜を隠さずにさらに言葉を続けた。

「なんでも管理局で言う「剣士」が現れたらしいんだよ！　そして、「剣士」の救援に新型の「ガンダム」、いや「デカブツ」までもが出現したらしい！」
「！？」
「そして、これらが意味することは一つしかない！　即ち、「ＣＢ」の復活という意味しか！　それなのに、君はこんなところに居たままでいいのかい？　ガンダムマイスターである君がっ！！」
「……何故それをあなたが知っているのですか？」
「何、私もかつて「ＣＢ」に協力を申し込まれた身だったからさ。

それに、私は「ＣＢ」に所属する局員と独自の情報網を築いているから、ある程度の情報は入ってくるようになっているのさ」

「……なるほど。確かにあなた程の天才に「ＣＢ」が声をかけないというのはおかしいですね。それに、それならガンダムマイスターという単語を知っていてもおかしくは無い。……一つ聞きたいのですが」

「ふむ、私が答えられる範囲なら答えようではないか。何かね？」

「あなたは今「ＣＢ」の一員なのですか？　それとも、ただの犯罪者なのですか？」

「……少なくても今の私は「ガンダム」に心を奪われた一介の研究者にすぎない。つまり、もし今「ＣＢ」に入れるというのなら入る犯罪者ではあるが？」

「……分かりました」

そう言って彼は再び沈黙した。もはや何も問う事は無いと言わんばかりに。それを見届けながらスカリエッティはこの後に起こるであろう事象を推測し、ある覚悟を決めた。彼の嫌いな人殺しをする決意を。

（今の私は「ガンダム」に心を奪われた一介の研究者に過ぎない。もし「ＣＢ」に入るのに人を殺すことが必要となるなら、私はそれをしなければならない。何故なら、私は「無限の欲望」だから、欲望を第一に考えなければならないからだ。……そう言えば、彼は何故「ＣＢ」に入ったのだろうか？）

「……聞こえているかい、稀代の殺人者君？」

「……」

「君はどうして「ＣＢ」に入ったんだい？　そんなに人殺しを嫌っている君が」

「……」

「……私はそれを聞きたいんだが、答えてはくれないだろうか、アレルヤ・ハプティズム君？」

それに対する答えは、沈黙だけであった。

―同日・第１２管理世界・聖王教会中央教堂内―

「……これが「ＣＢ」……」

「ヴェロッサに教えてもらったものも眉唾物でしたが、まさか「フォーリング・エンジェルズ」などという作戦まであったなんて……」

「さすがに一査察官では限界があったわね。その作戦のことは何も触れられていなかったんですもの。……もしかすると、この作戦こそが「ＣＢ」を第一級極秘事項に指定させたものなのかもしれないわ」

「……そうだとしてら、一体何があったんでしょうか、騎士カリム？」

「それはこれから明らかになるわ。……いえ、待ってください。確か４年前というと「管理局の悪夢」があった年だったはず。もしかするとそれとも何かしら関係があるのかもしれないわね、シスター・シャッハ」

「なっ！　……もしそれが本当なら、確かに機密にせざるを得ませ

んが、しかし……」
「これはあくまで推論よ？　そんなに本気にならなくていいのよ、シスター・シャッハ。お分かり？」
「……はい」

カリムはシャッハにそう言ったが、自身ではその説が十中八九当たっていると思っていた。８つの次元世界の崩壊。管理局の３０％もの戦力の投入。そして「世界清浄」。ここまで関連するものがあるのなら、まず間違いなく「フォーリング・エンジェルズ」と「管理局の悪夢」はほぼ同一のものなのだろう。いや、「管理局の悪夢」の一部が「フォーリング・エンジェルズ」なのであろう。

（そう考えると、とんでもない組織よね、「ＣＢ」は。まぁ、もう少し詳しいことはクロノにでも聞く事にしましょうか。管理局が情報操作をしている可能性もありますし……）

騎士としての思考を働かせながら、しかし、カリムはこの後何が起きるのか、全く知らなかった。

―同日・時空管理局本局内―

「恐らく皆さんはここに映っている人達の殆どを知っている事でしょう。そして、同時にフェイト・Ｔ・ハラオウン、クロノ・ハラオウン、シグナム以外の人達が４年前の「管理局の悪夢」で亡くなっているということに気付くはずです。そうです。「フォーリング・エンジェルズ」という作戦は「管理局の悪夢」に他なりません！」

その言葉が記者達に浸透するや否や、ユーノに対し、まるで津波のように質問が殺到した。

「それは本当の事なんですか！？」「何故それを今まで隠していたんですか！？」「もっと具体的な事を！」

しかし、ユーノはその質問に一切答える事無く、発表を続けた。

「そして、皆さんは知っているはずです！　４年前の「管理局の悪夢」が齎した被害を！　損害を！　犠牲者を！　それらは全て「ＣＢ」と戦ったからです！　そう、管理局の戦力の２０％の壊滅と「世界清浄」の崩壊を持って、漸く「ＣＢ」を壊滅させる事が出来たのです！」

ユーノはそう言い切るや否や、モニターを操作して、さらに続けて言った。

「今から見せる物は「ＣＢ」の「ガンダム」の中でも最悪と謳われた『オーバーＳキラー』の「剣士」と、「金色の閃光」として名高いあのフェイト・Ｔ・ハラオウンの最後の対決です。これを見て下されば、自ずと「ガンダム」に」対し、危機感を抱かざるを得なくなるでしょう」

ユーノがそれを言いきるのと同時に、モニターにその対決が映――

―同日・次元空間・プトレマイオス？内―

スメラギは作戦の遂行前だと言うのにお酒を軽く飲みながら、その言葉を口にした。その言葉を口にしたら何が起きるのかを重々承知しながら、迷い無く言い切った。

「ミッション、スタート」

―同日・第１２管理世界・聖王教会中央教堂近くの谷―

『ミス・スメラギから作戦開始の合図がきた。始めるぞ、アニュー、

リジェネ』
『分かったよ、ロックオン』
『了解だわ、ライル』

ロックオンとリジェネ、アニューはミス・スメラギの作戦開始の合図を受け、各々の機体に施していたＧＮ光学迷彩を解除した。そのＧＮ光学迷彩の下には緑色の「ガンダム」、水色のガッデス、黒銀のガデッサが悠然と佇んでいた。

『アニュー、今は作戦行動中だぞ？　だから本名を言うのは……』
『分かっているわロックオン。ただ一度呼んでみたかっただけだから、気にしないで』

緑色の「ガンダム」――――ケルディム――――を操作しながら、ロックオンはアニューにその迂闊すぎる行為を注意したが、アニューはどこ吹く風といったように平然と受け流した。それに苦笑しながらもロックオンは初の実戦による緊張を解す為、己の相棒である姿勢制御・予測演算ＡＩであるハロに向けて話しかけた。

『ハロ。兄さんはこう言う時、なんて言ってた？』
『狙い撃つ、狙い撃つ』
『了解だ。ロックオン・ストラトス、ケルディム、目標を狙い撃つ！』

ロックオンの名前を呼んだ余韻に浸りながら、アニューはガッデスの操作を行っている。元よりこの機体は戦闘用では無いので、今回はケルディムとガデッサの支援・補助といった役割だが、それで気が抜けるわけでもないので、慎重に機体を制御していく。その内

心を誰にも打ち明けずに。

（ライル、貴方は本当に「ＣＢ」のしている事が正しいと思っているの？　貴方はただお兄さんの仇を討ちたいだけじゃ……）

『ライセンサー、準備完了しました』

『……えぇ、ありがとうガッデス。アニュー・リターナー、ガッデス、行きます！』

リジェネは自身のガデッサと他愛の無い話をしながら、出撃準備を着々と整えていた。その胸に宿る野望を大事に大事に抱えながら。

『さて、準備はできたかなガデッサ？』

『イエス、ライセンサー』

『よし、では行こうじゃないか！　「ＣＢ」復活の鐘を鳴らしに！　リジェネ・レジェッタ、ガデッサ、出るよ！』

蒼翠色の粒子が一つ、赤い粒子が二つ飛び立っていく。その先にある聖王教会中央教堂を目指しながら。これから自分達が何をするのかを理解しながら。それぞれの思いを心の奥底に秘めながら。それを決して口外せずに、今は任務の事だけを考えながら。

―同日・第９無人世界・グリューエンより距離２０００のデブリ―

「では行こうか。ガンダムマイスターであるアレルヤ・ハプティズムを助けに」

「……了解」

「……準備完了。アリオスはオレが持っていくがいいのか？」

「それがミス・スメラギの作戦だからね。落とすなよデヴァイン？」

「……了解した」

「……お前ならできる、デヴァイン」

「……礼を言う、ブリング」

僕は今ブリングのガラッゾとデヴァインのレグナントと一緒に『ファースト・アタック』のフェイズ３の準備をしていた。この『ファースト・アタック』には５つのフェイズがあり、その中でもこのフェイズ３はフェイズ５と並び、もっとも重要なフェイズだ。

フェイズ１は第９７管理外世界への武力介入。

フェイズ２がギル・グレアム元提督の殺害。

フェイズ３・第９無人世界に囚われているガンダムマイスターであるアレルヤ・ハプティズムの救出とジェイル・スカリエッティへの勧誘。

フェイズ４が第１２管理世界の聖王教会中央教堂への武力介入。

そして、最終段階であるフェイズ５は……

……もしこの作戦が終わったら、世界は「ＣＢ」に対しどのような反応を示してくれるのだろうか？　僕達の予想通りに動いてくれ

るのだろうか？　世界の悪意を「ＣＢ」に対し向けてくれるだろうか……。

『……』

『ライセンサー、時間です』

『了解だよガデッサ』

だが、今はそんな事よりも任務に集中しなければならないね。この作戦の成否で世界の「ＣＢ」に対する見方が決まるのだから。

しかし、管理局は本当に都合よく動いてくれるな。これも彼の協力があってこそなのだと思うと、彼の影響の大きさを実感できてしまうね。

―同日・第９７管理外世界・衛星軌道上。プトレマイオス？内―

「……」

「ハ～イ、刹那。久しぶりね」

「ネ―ナ・トリニティ……」

刹那は自身の「ガンダム」であるエクシアとOガンダムの様子を作戦前にもう一度確認する為に整備室に向かっていたが、その途中の通路でネーナと出会った。久しぶりに会った彼女はもはや大人の女性であり、４年前の無邪気さや幼さが消え、逆に色香を醸し出しているほどだった。

「何の用だ」
「別に。ただ会いたかっただけよ、刹那に」

しかし、その瞳にはある一種の狂気が潜んでいる事に刹那は気付いた。それは刹那にとっても身近なものであり、過去幾度となく彼自身にも向けられた事があるモノだった。故に彼は気付けたのだ。そう、「復讐」という名の狂気を。

「それにしても、貴方、いい男になったわね」
「……そうか？」
「えぇ、そうよ」

そう言ってネーナは壁に預けていた右手を離し、流れるような動きで刹那の肩に置き、顔を近づけてキスをしようと――

「やめろ」

――しようとしたが、刹那が左手でネーナの右手を左肩から離し、近づけていた顔も右手で妨害されたので、キスをすることはできなかった。その事に少し拗ねながらも、ネーナは漸く刹那に本題を話した。

「……私達はこれからギル・グレアムを殺しに行くんだけど、フェ

イズ5、あなた達だけで大丈夫なの？　相手はあの……」
「心配するな。任務は完遂させる。それより、お前達の方こそ大丈夫なのか？　相手は現役を離れて久しいが、あのギル・グレアムだぞ？」
「大丈夫よ。大体、彼が最強だったのは何十年も前の話よ？　それに、いくら「時空管理局歴戦の勇士」と言えど、このアルケ―の前では見劣りしてしまうわ」

ネ―ナは言葉を続けながら、自身の首から下げている3つの疑似GNドライブを刹那に見せた。すると、その3つの疑似GNドライブが一斉に光り、刹那に挨拶した。

『初めまして刹那・F・セイエイ。私はアルケ―ガンダムと言います。アルケ―で結構です』
「あぁ、初めましてだなアルケ―。……お前のその3つの疑似GNドライブはまさか……」
『えぇ、恐らく貴方の考えている通りです。私はかつてのスローネ達を合体させて作られました』
「そういう事。つまり、未だにチーム「トリニティ」は、にいにいズは健在しているということよ」
「……そうか」

刹那はその明らかにおかしい矛盾に気付きながら、しかし、何も言わなかった。ネ―ナがそれでいいと言うのなら、彼はそれを尊重するだけだからだ。

「じゃあ、私はこれで失礼するわ。くれぐれも浮気しないでね、刹那？」
「何故それをお前が言う？　オレとお前はそんな関係では無いはずだが？」

「……そこは分かったっていうところでしょうが」
（4年前よりもいい男になったのは確かだけど、鈍感な所は変わっていないのね）
刹那は心底不思議そうな顔をしながら、これから戦場に向かう彼女を見送った。まさか彼女が自分に呆れているとは思わずに。
「……」
そして、ネ―ナの後ろ姿が見えなくなった頃になって、漸く刹那は行動を再開させ――――
「刹那……？」
――――緊急停止させた。それは自身の背後を取られたことへの驚愕もあったが、それよりも、その声の声質があまりにも冥(くら)かったことがある。それはまるで地の底よりも遥かに深い所から直接刹那に向けて放たれる、冥府の王すら震えさせそうな声であった。
私は見ていた、ネ―ナと刹那がキスしているところを。彼が「ガンダム」以外のモノを愛せるようになったのはいい傾向だと思うけど、このムシャクシャした感情は一体何なんだろう？　ネ―ナと刹那がキスしただけなのに、どうして私がこんな気持ちになるのかな？
「刹那……？」
私はネ―ナが見えなくなるまで待ってから、刹那にそう声をかけた。すると、彼はまるで油の切れたブリキの人形（どんな物かはよ

く知らないけど）みたいに、ギギギッという効果音（合ってるかな？）を伴いながらこちらに振り向いた。その時の私は刹那の瞳に映った自分を見ただけで胸がときめいてしまった。彼が私を見ていると思っただけで胸がこう、キュンッと鳴るのだ。……どうして？

「ど、どうしたんだフェルト？　こちらはブリッジとは逆の方向だぞ？」

何故か彼はどもりながらも、私を心配してくれる言葉を言ってくれた。それにまた胸がキュンッと鳴りながら、私はここに来た理由を説明した。例の人からの情報を刹那に伝えるという理由を。

「……成程。それは確かなのか？」
「はい。これは例の彼からの情報なので、確かかと」
「あの例の奴か。……オレは一度も会っていないから何とも言えないが、フェルトがそう言うのなら信じよう」

――ッ！　えっ!?　刹那今何て言ったの!?

「？　どうしたフェルト？　顔が真っ赤だが、熱でもあるのか？」
「な、何でも、ない、です……」
「？　そうか。ならいいが……どれ」

……!?　ま、待って刹那！　今顔を触られたら……!!

「……ふむ、熱は無いようだが……」
「……!?」
「なっ!?　フェルト!?」

どうしよう！　私、絶対におかしいよ！　刹那を見てこんなに胸

をドキドキさせるなんてっ！　……でも、心配してくれたんだ、刹那。

「……！？」（ポンッ！）

思いだしたらまた胸がキュンッてなっちゃった！　ついでに、何となくだけど、顔がまた真っ赤になったような気がする！　どうしよう、この顔の熱さ。ブリッジに行くまでに治まるかな？

「……あれは、フェルト、なのか？」

オレはあまりにも変わってしまったかつての仲間の姿を見て、思わずそう呟いてしまった。オレが知る彼女はもっとこう感情が薄い、悪い言い方をすれば人間味が薄かったはずだが、先程の彼女は逆に感情が溢れ、人間味がかなり濃くなっていた。そのあまりにも違いすぎる姿を見て困惑してしまったぐらいだ。

「……しかし、何故額に触れただけで逃げる？」

そして、その困惑をさらに深めたのが先程のフェルトの行動だ。熱があるかもしれないから額に触れて確かめようとしたのに、触れた途端にいきなりダッシュでオレから離れたのだ。……何故だ？

「……分からん」

まぁ、今は作戦前だから、彼女も少し緊張していたのかもしれない。きっとそのせいだろう。

刹那はネーナ、フェルトと話をした後、少し経ってから漸く整備室に着いた。そこでは調整を完璧に済ませられた二つの「ガンダム」――エクシアとOガンダム――が机の上に固定されて置いてあった。

「調子はどうだエクシア、Oガンダム？」

『完璧です、マイスター』

『……』

刹那はエクシアとOガンダムにそう問い掛けたが、それに答えたのはOガンダムだけであった。それを訝しんだ刹那はエクシアの元に近寄り、手にとって、同じ質問をもう一度問い掛けた。刹那は自分の声が聞こえなかったと思ったのだ。エクシアが自身のマイスターである刹那の声を聞き逃すはずがないのに。

「エクシア、調子はどうだ？」

『……』

「エクシア？」

『マイスター、エクシアから離れた方が得策かと私は進言します。今のエクシアはかなり不安定なので』

「？　しかし、どう見ても調整は完璧に終わって……」

『まぁ、そうなんですが、それでも不安定なのです。なので、そっとしといてください』

「……分かった」

Oガンダムがそこまで言ってきたので、刹那は不承不承ながらも、エクシアをそっと元の場所に戻した。そして、踵を帰して待機場所に戻ろうとしたが、そんな刹那に本日二度目のあの冥い声がかかっ

た。

『マイスター……？』

その声が聞こえた瞬間、刹那は後ろを振り向かずに全力ダッシュで整備室から逃亡した。

―同日・時空管理局本局内―

「な、何が……」「どういう事だ、これは！？」「「剣士」とフェイト・T・テスタロッサ執務官の戦闘を映すのではなかったのか！？」

喧々そうそう。もし今この場を表す言葉があるというのなら、これがまさしく適当であろう。耳を防いでも聞こえてくるほどの声量で飛び交う質問の数々。それを鎮めるため、同じくらいの声量で言い合う管理局の局員達。それらがまるで反響するかのようにお互いの声量を高め、際限なく大きくなってゆく。もはや隣の人の声すら聞き取れないぐらいにまで高まった時、キールはついに我慢できず一言を発した。

「黙れっ！！」

そのなんてことはない一声は、しかし、彼らを黙らすのには十分であった。まるで湖に石を投げ込んだ時にできる波紋のように静けさが広がっていき、数秒もすると波紋も最後まで広がり、シーンという効果音が聞こえてきそうなほどの静けさが隅々にまで行き渡った。キールはそれを確認してから、頭上の巨大モニターに映っているモノを一瞥（いちべつ）し、ユーノに問い掛けた。

「これはどういうことかな、スクライア司書長？」

「……僕にも分かりかねますね、キール元帥。そもそもこれは明らかに通信ジャックをされて流されているモノですので、問題は通信回線の方にあるのでは？」

「……まさか」

キールはユーノのその言葉に一つ、心当たりがあった。高度に隠蔽され、たった数日で発見することは不可能であると言われた、「ＣＢ」が『宣言』の時に使ったと思われる、全次元世界に張り巡らされた通信回線。もしそれがこれをする為に「ＣＢ」が管理局に発見させたというのなら、全ての辻褄（つじつま）が合う。合ってしまう。

「……どうやら心当たりがあるようで」

「……あぁ」

ということは、管理局は無様にも踊らされてしまったということか。「ＣＢ」の掌（てのひら）の上で。

「やられましたな……！」

「……そういうことですか。どうりですんなりと通信回線を私達に発見させたわけです。そこには何らかの意図があると思っていまし

たが、まさかこんな風に使ってくるとは。完全に予想外でしたわね」

どうやら他の二人も気付いたようだ、「ＣＢ」の策略に。恐らくスクライア司書長も気付いているだろう。そして、同時に今の我々では何もすることができないという事にも辿り着くだろう。

それは簡単な事だ。つまり、今の管理局には援軍を送るような余裕など無いし、この緊急記者会見の為に多くの戦力を本局の護衛に当てているため、それらの世界の近くには管理局の次元航行船等は一隻たりとも存在していないのだ。

ここから最速で一番近いところに向かったとしても、着く頃には全てが終わっていることだろう。トランスポーターや次元転送を使えば間に合うかもしれないが、恐らく既に使えないようにしているに違いない。つまり、此方は完全に向こうに詰まされたということか。あぁ、なんと、なんと……！

「……情けないことか……！」

キールは悔しさを滲ませた声で頭上のモニターにそう吐き捨てた。そこには先程ユーノが言っていた「剣士」とフェイトの戦いでは無く、恐らくリアルタイムで流されているであろうある映像が映っていた。

そう。

「ＣＢ」が第９７管理外世界、第９無人世界、第１２管理世界に武力介入（戦争）をしている映像が。

第１４話　変革の序曲　≪後篇≫（後書き）

小説ではフェルトが刹那に花を上げるところの心理描写に恋愛が混じっていました。なので、今回の話にはそれを盛り込んでみました。まぁ、こんなに嫉妬深いかは作中には書かれていなかったので、そこは作者の想像です。ちなみに、作者はマリナよりもフェルトの方がヒロインだと感じた方です。マリナファンの方、ごめんなさい。あと、最近はやてがなかなか活躍しない……！　これは、忌々しき事態です！　はやてファンでヒロインだと言っている私がこれでいいのか、最近自問してしまいます。このような駄作を読んで下さった皆様に感謝を。

最後に。

ヒロインは　はやて？　です？

第１５話　世界が焉わる日（前書き）

大変お待たせ致しました。今回はまあ、これまた賛否両論別れる設定が盛り沢山ですが、ご了承お願いします。

＊この作品には僅かながらも「日本は軍事力を持つべきだ」といった表現が見られますが、あくまでもファンフィクションなので、気にしないでください。

では、開演です。

第１５話　世界が焉わる日

世界を……変えて……

――クリスティナ・シイナより

―新暦７５年１０月１０日・第９７管理外世界・アメリカ・国連本部―

『そう、管理局の戦力の２０％の壊滅と「世界清浄」の崩壊を持って、漸く「ＣＢ」を壊滅させる事が出来たのです！』

「ふん、何が時空管理局だ。そのようなモノが認められるはずがないではないか！」

「全くだ！　確かに私たちの世界よりも遥に技術が進んでいるのは認めるが、それだけでその存在に納得できるはずがない！」

「そうだ！　奴等は今は正義ぶっているが、それがこの先どうなる

かは分からん！　聞くところによれば奴等に逆らえば話し合いではなく武力で解決させられるそうではないか！　冗談ではない！　それではまるで自分達の優越性を説いて独裁や虐殺を行ったヒトラーではないか！」

「我らから見れば奴等も「ＣＢ」も同じようなモノだ！　なにが時空管理局だ！　それはただ単に自分達が優れているから守ってあげましょうと言っているだけではないか！　しかも、その発達した技術を我らに秘匿したまま天から見下ろすなど、神でも気取っているのか奴等は！」

「いっそ「ＣＢ」とやらに滅ぼされてしまえばいいのだ！」

「「「そうだそうだ！」」」

今日の国連本部では時空管理局の放送を聞きながら、この世界がどんな姿勢で管理局や「ＣＢ」に接していくかについての会議が行われていた。その会議に参加した国の数は１９２であり、国連に参加する全ての国がこの会議に参加していた。しかも、出席している人の殆どが国のトップや重鎮達であり、それがこの会議がいかに重要な物であるのかを示していた。

この第９７管理外世界の世間一般の時空管理局や「ＣＢ」に対する認識はカルト的な集団ということで落ち着いているが（それも国家が暴動やパニックを抑えるために行った情報操作の賜物である）、一部の人間、つまり国を動かす立場に居るもの達はそれらが実在していることを、とある管理局側の職員の密告や管理局側の接触で知っていた。

話は変わるが、例えば自分よりも全てが優れている人間がいたとする。これは人間を組織に置き換えても構わないが、もしそのような存在から急に「こっちが優れているから従って下さい」と言われたら、貴方はどうする？　その言葉通りにする？　それとも反対す

る？

恐らく、殆どの人は「反対」と答えるであろう。

そして、それがこの会議の結論でもある。そう言われ「はい従います」と答える人間など、ほんのほんの一握りしかいないのだから。

故に、この会議は既に終わっているにも等しいのだ。何故なら結論がもう出てしまっているからである。今はただただ管理局に対する鬱憤を吐き出しているだけで、実質的な会議は既に行われていない。

「そもそも例の彼からの情報が正しかったら、管理局も相当に膿んで……」

そして、その会議も、この瞬間に物理的に終わらされた。

『……フェイズ1、完了』

『ではこれよりGN転送を行います。転送先は作戦通り、中東のアフガニスタンでいいですか？』

『あぁ』

『分かりました。……GNドライヴの出力を97，5%に固定、トレミーの座標固定、転送先固定、ヴェーダによる粒子演算終了。これより、GN転送を開始します』

『行くぞエクシア、Oガンダム』

『『イエス、マイスター』』

『……頑張って、刹那』

『あぁ、ありがとうフェルト。……刹那・F・セイエイ、『OOガ

ンダム』、出る！』

―同日・同世界・？？？―

「……急がなきゃ」

全身を真っ黒なローブに包んだ１４～１６歳ぐらいの少女はそう呟いた。身長は大体１５０センチ後半で、その体つきはとても華奢ではあったが、それを微塵も感じさせない風格を全身から漂わせている、不思議な少女であった。その少女は目の前を狂気に支配されている蒼い眼孔で鋭く見つめながら、一歩、また一歩と進んでいく。

「……仇を、討つ。……「ガンダム」を、壊して……」

その彼女が進んでいる方角には、現在「ＣＢ」に武力介入されている国、イギリスがあった。

―同日・同世界・日本―

『今から見せる物は「ＣＢ」の「ガンダム」の中でも最悪と謳われた『オーバーＳキラー』の「剣士」と、「金色の閃光」として名高いあのフェイト・Ｔ・ハラオウンの最後の対決です』

「首相、私達はこれからどうすればいいのでしょうか……？」

「それを今話し合っているのだ。とはいえ、国連は恐らく管理局にも「ＣＢ」にも反対することで決まると思うがな。大国はその誇りや意地とやらでそのようなモノなど認めたくはなかろうし、他の国々もそれと似たり寄ったりだろう」

「では、我らも？」

「……いや、まだそのような結論は早すぎると私は思う。もう少し彼らと話し合ってからでも遅くはないだろう。その上で決めるのだ、最も国民の安全を確保できる選択肢をな」

「しかし、世界がこれほどまでに管理局等に反対しているのに、我が国だけがこのような対応をして大丈夫でしょうか？」

「何、心配いらんさ。一応我が国だけでなくアフリカや中東の国々にも私達のような対応をする国はあるし、イギリスも同じらしいからな。少なくてもそんな大それたバッシングや制裁は起きないだろう」

日本政府は国連の会議に外務大臣を派遣し、それ以外の全ての閣僚は管理局の放送と国連の会議を見聞きしながら緊急閣僚会議を開いていた。

その会議は今までにないほど荒れに荒れたが、日本がこれから取るべき行動を一応3つの案としてまとめることが出来た。

1つ、国連の決定を受け入れて従うか。

2つ、管理局や「CB」と接触し、そのどちらかと交渉するか、もしくはどちらかにつくか。

3つ、現状では圧倒的に情報が足りないため決断することは不可能であり、第3者的な立場で暫(しばら)くは傍観に徹するか。

閣僚の殆どは1つ目を選んだが、首相は3つ目を選択した。それに閣僚は猛反対したが、首相が3つ目を選んだ理由を聞くと、その半分ほどは首相に同調し3つ目を選択した。だが、残りの半分は自らの安全と利益を失いたくないが為に徹底抗戦を行った。

しかし、

「では、お前達がそうまでして1つ目に拘(こだわ)る理由はなんだ?」

首相はその質問で抗戦している半分の閣僚の下心と欲望を看破すると、何の躊躇(ためら)いもなくその閣僚達を問答無用で強制退室させた。

「全く、国家存亡の危機だというのに自らの保身に走りよって。もしこの日本が亡くなったどうするというのだ、彼奴(きゃつ)らは?」

「首相、今はそんなことよりも」
「あぁ、分かっとる」

首相のこの判断は一見正しいように見えるが、実はそれは問題を先送りにしたに過ぎないのであった。首相はこの後これから起こり得るであろう『戦争』にむけて日本がどのような対応を取るべきなのかを話し合い、結論を出さねばならなかった。

「まさかこの日本で戦争の話をすることになるとはな……」
「約６０年もの間平和を維持してきましたからね」
「……本当の幸せはこの平凡な日常にこそあるのだ。間違っても戦争をしている時ではない。……もし我が国のその幸せと平和を脅かすのであれば、相手がどれほど強大であろうとも、私はこの日本の国民の為に、断固として戦い抜くをここに誓おうっ！！」
「「「はいっ！」」」

その首相の言葉に、半分になった閣僚は一斉に同じ返事をした。それは「私もです！」という意味を含んでおり、それを読み取った首相は口角が上がるのを抑えることが出来なかった。この日本で未だに国民の為に命を懸ける人間がこんなにいてくれたことに、首相は知らずに天に感謝をしていた。

（この国にはまだこんなにも素晴らしい人達がいるのだ。それを、こんなところで死なせるわけにはいかんな！）

「では首相。まずはこの案なんですが……」
「うむ」

しかし、世界は理不尽で満ちているのだ。

抗いようの無い、運命（フェイト）という名の力を源にして。

その絶対的な力の前では、如何なる抗（あらが）いも、抵抗も、反抗も、その全てが無意味に等しい。

それを彼らが知るのは、すぐ後であった。

もしこの時、後悔する事があるとすれば、それは日本国民の性とも言える優柔不断さを後悔したであろう。

しかし、その時にはもう終わっているのだ、何もかもが。「後悔先に立たず」という日本の諺（ことわざ）の言う通りに。

―同日・同世界・イギリス―

「おじさん？」

その１０歳ぐらいの子供は目の前で起きた現実を認識することが出来なかった。赤い光跡と濃紺の光跡が激しくぶつかり合っている

光景を見ていたら、目の前にいきなり赤い光弾が飛び込んできて、それをよく一緒に遊んでくれたおじさんが光る壁みたいなモノで防いでくれたところまでは脳内で理解したが、その後に起こったことは理解できなかった。いや、したくなかったのだ。何故なら、赤い光弾を防いだおじさんの光る壁を突貫し、おじさんの体から見たことがないほど大きい剣が生えてきたからだ。そして、その巨大すぎる大剣は、真っ赤に染まって……

「あれ？」

その時になって漸く子供は気付いた。大剣だけでなく、自身の視界が赤く染まっているということに。それを不思議に思い、自分の目の周りを手で触り、それを顔の前にまで持っていくと、視界の赤よりもさらに鮮明な赤が自分の頭の中に直接飛び込んできた。最初、それが何なのか、子供は分からなかったが、大剣で貫かれているおじさんを見て、それが何なのかを知った。

――それは血だったのだ。自分の血ではなく、目の前で子供を庇った事によって大剣で貫かれることになった、あの笑顔が柔らかく、雰囲気が優しい、良く一緒に他の子供達とも遊んでくれた、その子供自身も大好きなおじさんの。

「――――」

絶句。

「あ、あ、あぁぁあああああッ！！」

絶叫。

「あああああああああああッ！！」

慟哭（どうこく）。

子供は今までに体験したことがない感情と衝動に支配された。それらは激流のように子供の小さな思い（こころ）を飲み込み、その小さな体を満たしていく。

「アリア、ロッテ。その子供を安全なところにまで連れて行きなさい」

「でも、父様！」

「そんなことをしたら、父様がッ！」

「行け！」

「「……ッ！！」」

アリアとロッテはおじさん――――ギル・グレアム――――の命令に逆らうことはできなかった。例えその命令が間違いなく自分達の父であるグレアムを死なせることになると分かっていても、アリアとロッテはその命令に逆らうことはできない。それは、彼女達が心の底からグレアムを尊敬し、信頼しているのもあるが、何よりもまだ１０歳に届こうかという子供をこんな戦場に残したまま全力で戦うなど、彼女達には到底できないことであった。

そう、魔導師ランクでいうＡＡＡランクが本気で戦えば町一つを壊滅させることができるように、それ以上の力（恐らくＡＡＡ＋ランク）を持つロッテとアリアが本気を出せば、こんな子供など、殺傷魔法の余波だけで殺してしまう。

そして、それはグレアムにも言えることであった。特に彼の力は「時空管理局歴戦の勇士」という異名を取るほど強大で、かつては

管理局最強戦力としてその名を知られた大魔導師である。その戦闘能力は全盛期に比べれば落ちてはいるが、それでもオーバーSランクには手が届いているのだ。もし彼がここで本気で戦えば、このイギリスという国家を沈めかねない。

それでも、グレアムほどの魔導師であれば、並みの敵など一蹴できるはずであった。

そう、敵が並みであれば。

「あーーーッハハハああアーーー！！　「時空管理局歴戦の勇士」も堕ちたものね！　この程度も防げないなんてね！」

『マイスター、それは私達が強すぎるからでーすーよー！　ヤッフウーーーッ！！』

それは、血のように赤い色彩を施され、権天使の名を冠されし「ガンダム」、アルケーであった。その右手に握られている非常識な大きさの大剣はグレアムの体を貫き、その血で真っ赤に染まっていた。いや、良く見てみると、アルケーの体の随所に赤黒い液体が付着してた。それはまだ乾き切っていないのか、アルケーが体を動かす度に飛び散っていた。

「クゥッ、この悪鬼めが！　貴様は子供を殺すことに何も感じないのか！？」

「えぇ、感じないわね！　だってこれは私の復讐に繋がる、大事な儀式みたいな物なんですもの！　これで復讐に一歩近づけるというのなら、私は老若男女を問わずに殺して殺して、殺しまくってやるわ！！」

「そうか……！　なら、私は、貴様を……倒すッ！！」
「出来る物ならやってみなさい、歴戦の勇士とやらさん！」

グレアムはそう叫ぶと、体に大剣が刺さっているにも関わらず、アルケーを右足で蹴飛ばした。それで僅かに下がったアルケーに出来た隙を逃さないため、左足を一歩踏み込み、かなりの魔力を纏わせた拳を叩き込んだ。

ガガガギィィッ！

アルケーに叩き込まれた拳は金属を他の金属で思いっきり叩いたような爆音を発生させ、踏み込んだ足を地面にめり込ませながら――それを振り切ることができなかった。

「何っ！？」
「残っ念でしたーーー！」
『ギッチョンギッチョンギッチョンチョーーーン！！』

それに動揺して動きを止めたグレアムの体に刺さっていた大剣をアルケーは右手で掴み、それを一気に手前に引き抜いた。

「グフゥッ！？」

それによってグレアムの体に刺さっていた大剣は抜かれ、それが塞き止めていたグレアムの血を一気に噴出させた。その勢いは凄まじく、さながら噴水のようであった。しかし、アルケーはそれだけで満足せずに、引き抜いた大剣でグレアムを袈裟切りにしようとし、

「えっ！？」

それを空振りさせられた。それは、グレアムが大量の血を喪失したことによって朦朧となった意識の片隅で、アルケーがその大剣を振りかぶっているのを認識するや否や、長年培ってきた経験によってその剣の軌道を予測し、それを紙一重で避けられるであろう場所にその身を捩じ込んだからであった。そして、巨剣を大きく振り降ろしたことによってできた致命的な隙に、グレアムは全力で魔法を打ち込んだ

「ところがッ！」
『ギッチョンッ！』
「なっ！？」

が、それはアルケーが剣を振り下ろした反動に従って前に倒れこんだ事によって避けられてしまった。しかも、アルケーは倒れこんだ反動をも利用し、左足に発生させたＧＮビームサーベルで右後ろにいたグレアムを体を半回転させながら切りつけた。それは浅い傷ではあったが、ただでさえ大剣に貫かれたことによって大量の血を失っていた老体を限界に到達させるには十分な傷であった。

「……！？」
「これでっ！」
『フィニーーーッシュ！』

そこにすかさず焉わりとなる一撃を加えるべく、アルケーはグレアムに近づいて、

「……はぁーーー！！」
「ーーーッ！？」
『何ーーー！？』
「！？」

突如現れた何者かに、真横から吹き飛ばされた。

「「「ハァ、ハァ……ッ！」」」

ロッテ、アリア、子供の3人は周囲に生い茂っている森林に身を隠しながら、イギリスの首都であるロンドンに逃げ込むべく、懸命に飛翔魔法を発動させて疾翔（しっしょう）していた。

「大丈夫？」
「ハァ、ハァ……だ、大丈夫、です」
「無理はしないほうがいいよ？」

だが、子供の体力と精神が限界に近いこともあって、なかなか思うような速度を出せないでいた。当初の予定では転送魔法を発動させて一気に子供をロンドンにまで送る予定だったが、何かの妨害がロンドンで働いているらしく、子供を転送させることができなかった。だからこうして高速飛翔でロンドンに向かっていたのだ。

「「……」」
「ハァ、ハァ……」

しかし、体力と精神が限界に近かったのは、何も子供だけではなかった。そう、ロッテとアリアも既に限界寸前であったのだ。実はロッテとアリアは既にグレアムと共にあの真っ赤な「ガンダム」と長い間交戦しており、それで体中の至る所に傷ができて、魔力も残り少なくなっていたのだ。

さらに、グレアムとアリア、ロッテが共同して戦って、漸く互角の闘いができるほどの戦闘能力を持っていた「ガンダム」の元にグレアムだけを残して置いてきたのもアリアとロッテの精神を追い詰める要因になっていた。何時グレアムが死んでもおかしくはない状況は容易にアリアとロッテの精神を追い詰めた。

「……ッ！」
「落ち着きなさい、ロッテ。今はこの子をロンドンまで運ぶのが先決よ」
「分かってる、分かってるさアリア……！」
「ハァ、ハァ……」

だが、そんな彼女達にも、遂に希望という名の一条の光は差し込んできた。そう、見えてきたのだ、ロンドンが。しかし……

「……アリア」
「えぇ、分かっているわロッテ。……様子がおかしいわね」
「……？」

そう、彼女達が目指していたロンドンは、しかし、その様相をおかしくしていた。今は深夜といってもいい時間なのに、都市のそこらかしこから漏れ出す赤い光が夜空をライトアップし、まるで花火のような音が遠くから小さいながらも散発的に聞こえ、人々のまる

で絶叫のような声が……

「ロッテ！」

「えぇ、行くわよアリア！」

「え？　ちょっとま！？」

アリアとロッテは人々の正真正銘な悲鳴を聞きつけるや否や、子供を引き連れたまま、全力で都市の中心部に向かった。何か、猛烈に嫌な予感がしたからだ。

そして、それは当たっていた。

そこは

地獄の

様相を

現(あらわ)して

いた。

―同日・同世界・日本―

人々はその光景を決して忘れはしないだろう。自分達の「武力」の象徴を、架空にすぎないはずの組織の『武力』によって、その尽くを駆逐、撃沈、墜落、殲滅、壊滅、全滅させられていくその光景を。それはどんな小説よりも奇なことであり、まさに「事実は小説よりも奇なり」であった。

初め、人々はそれが嘘であると思っていた。兵士が、戦車が、戦艦が、その二振りの剣に撃ち抜かれ、切り裂かれる映像を。

しかし、時間が経つにつれ、それが事実である証拠が判明していった。ネットを通じ伝えられる本物の国連本部が崩壊するシーン、情報機器に映される、アフガニスタンに滞在する軍隊が次々と駆逐されるシーン、そして、世界各国がまるで頭を失ったかのように動きを鈍らせていることが。

それら一つ一つが判明していき、漸く人々は現実を直視した。つまり、この世界の他にも世界があり、時空管理局や「ＣＢ」が実在していることを理解したのだ。そして、その実在していた組織の一つである「ＣＢ」に戦争を仕掛けられていることを、此処に至ってやっと認識した。

「まずいことになったな……」
「首相……」
「よもやこの世界に「ＣＢ」が武力介入をしようとは、夢だに思っていなかったわ。……いや、当然か。この世界ほど戦争があるところも少ないだろうからな」

そう言いながら首相は、しかし、重い溜息を吐き出すことを止めることができなかった。その眼前にはモニターがあり、それには「ＣＢ」の象徴機である「ガンダム」がこの世界の軍事力を一方的に破壊する動画が映し出されていた。

「……よもや、これだけの差があろうとはな」
「……防衛大臣の私から言わせてもらえれば、これはまさに非常識極まりない機体です」
「そんなことは私にも理解できるさ……」

その動画を見ていた閣僚達は半ば唖然としながらも、それを食い入る様に見た。その動画の「ガンダム」は机上の空論と言われたビーム兵器を扱い、どういう原理でか重力や質量を無視する機動をし、戦車砲の直撃ですら無傷な装甲を有している、防衛大臣の言う「非常識極まる」性能を存分に発揮していた。

「国連軍でも歯が立たんか。……一つ聞くが、もし仮に「ガンダム」がこの国に武力介入した場合、どうなるかね？」
「まさか。そのような事は有り得ないでしょう？　この国は約６０

年もの間戦争をしないで平和を保ってきたのですよ？　『宣言』によれば彼らは戦争根絶を掲げているので、この国に介入するはずが……」

「……確かにそうだが、念には念を入れて、シュミレートしてくれないかね？」

「……分かりました。しかし、それにはもうシュミレートしなくても結果は分かります」

「……どうなるかね？」

「我が自衛隊の敗北は……必至です」

「そうか……」

半ば分かっていた事実とはいえ、それは首相の重かった気持ちを、さらに重くした。しかし、世界はその首相に、あまりにも無情な知らせを届けた。

「しゅ、首相！　大変です！」

「……どうした？」

「た、太平洋に「ガンダム」が突如出現し、此方に向かって来ているとの情報が、アメリカから寄せられました！」

「何だと！？　それは確かか！？」

「は、はいッ！　この情報を確かめるべく、近くにいた日本のイージス艦一隻と米軍の潜水艦一隻、そして駆逐艦二隻と空母一隻を派遣して確かめた情報なので、確実です！」

「そうか……ッ！」

「あ、後、その艦隊は、「ガンダム」の攻撃を受け、全滅したそうです……！」

「「「……」」」

その最後の報告に、戦力の差を思い知らされ、その場に居た人たちは皆一様に沈黙を余儀なくされた。が、

「……画像は？」
「……は？」
「その「ガンダム」の画像はあるかね？」
「は、はい。ここに」

首相だけは沈黙をせずに、さらなる報告を求めた。そして、それらの情報を報告した官僚は各閣僚達に数枚の写真を渡した。そこには、今モニターに映し出されているそれぞれの「ガンダム」よりも二回りは大きい体躯を持つ白い「ガンダム」が、巨大な桃色の砲撃で、イージス艦を一撃で撃沈した所が納められていた。それを見た首相は忌々しくその「ガンダム」の通称を言い捨てた。

「「デカブツ」か……！」

かくして、日本は遂に約６０年ぶりとなる戦争を開始する。相手はただ一機の「ガンダム」なれど、その戦力は絶望的なまでに開いており、現在戦場になるであろう東京都近隣に住んでいる国民を逃がすために、首相は自衛隊を磨り潰すことを決断。そして、それを決断した１０分後には全番組に緊急会見を放送させ、この事実を発表した。最初はまるで池の水面のように静かだったが、次第に騒ぎは大きくなり、緊急会見の２０分後には東京都近隣から逃げる人で高速道路に約４０キロにもわたる渋滞が発生した。これを重く見た政府は警察を使い渋滞の緩和を試みるも、それは僅かな効果しか発揮することができなかった。

何故なら、東京都近隣から避難する人があまりにも多かったからである。おおよそ3千万人という国民が一斉に避難を開始したのだ

から、仕方がないことではあったが。

そして、全ての国民が戦場から避難するのにかかる時間は、政府によれば最低でも２０時間以上はかかると試算され、政府はその時間を稼ぐべく、日本の自衛隊を千葉県の太平洋海岸線と東京湾内、それと東京都各所に配置し、東京都内にある上野駅と皇居前方、そして東京タワーを結んだ最終防衛ラインを結成した。

この時集められた自衛隊の戦力は、全戦力のおよそ４７％にあたり、日本の保有する自衛力のほぼ半分をこの時間稼ぎの為に費やされることとなる。

だが、ここで一つ、ある致命的な予測違いが起こった。それは、米軍が日本から撤退していることであった。

アメリカ合衆国は日本に「ガンダム」が進行していることを知ると、即座に在日米軍の殆どを本国に戻したのだ。

当然日本はこれに猛反発したが、アメリカはアメリカで国連本部崩壊によって多数の要人を失ったことによる混乱を抑えることで精一杯で、さらに敗北必至な戦闘に自国の戦力を使うわけにはいかないと言い、日本の言うことに耳を貸すことは終(つい)ぞ無かった。これによって、日本は事実上アメリカから安保条約廃棄を言われたにも等しく、自衛隊だけで「ガンダム」を迎え撃つこととなる。

だが、これに最も困惑したのは、実は政府ではなく自衛隊であった。彼らは米軍が共に戦ってくれることを前提に作戦を立てていたので、それがいきなり崩されたことに、憤りだけでなく恐怖も感じていた。彼らは一度も実戦を経験したことが無く、錬度や装備の質は高いのだが、圧倒的に経験が足りないため、米軍が来ないことを

知ると、恐怖のあまりその場から逃げ出す者が出る始末であった。
それは一平卒にとどまらず、将官クラスの人も同じであった。

さらに、近年の軍事費縮小に伴う兵器の旧代化、兵士の錬度の低下が戦力低下（それでも世界からみれば十分高い）にさらなる拍車をかけていて、それを知っていた防衛省の人間はいの一番に退避を終了させており、現在防衛省に残っているのは大臣1人であった。

そのため、防衛大臣はその全権を首相に預け、本人は首相のアドバイザーとして助言をすることになった。

しかし、自衛隊の戦力は間違っても潤沢とは言えず、苦しい戦いになることは、臨時基地として用いることになった皇居に居る人間全員が覚悟していた。

そして、自衛隊の配置が５０％ほど終わった時、「ガンダム」との戦闘が始まるまで、残り2時間を切っていた。

『セラヴィー、向こうの残存戦力は？』
『……もう残っていませんね』
『そうか。なら、当初の作戦通りに行こう』

『イエス、マイスター』

私はそう言ってセラヴィーの進む方角を戦闘を行う前と同じにし、ＧＮドライブの出力を８０％にしてゆっくりと進んだ。これから向かう先には日本という国があるのだが、今回はその国家の軍隊が相手ではない。資料を読んだところによると、この国は長い間戦争行為や戦争幇助をすることがなかったからだ。だから、今回は日本の軍隊が相手ではない。いや、むしろその軍隊と戦う方が楽であったのかも知れないが。なにせ、これから闘うであろう人物は、名実共に次元世界最強砲撃を誇る、たった一人で艦隊火力に相当するような化け物だからだ。そう、今回この僕とセラヴィーが戦う相手は……

『「管理局の白い悪魔」、高町なのは、か……』

―同日・同世界・アフガニスタン―

『刹那・Ｆ・セイエイ、目標を駆逐する』

もしそこを言葉で表現すれば、恐らく地獄という言葉が該当するだろう。生者は無慈悲にもその命を切り殺され、建築物は容赦なく崩壊させられ、「武力」は更なる『武力』で駆逐させられる。

「何なんだよ、お前らはー!?」「なんで俺達を攻撃するんだ!?」「まさか、実在していたなんて……」「弾とミサイルをありったけ持って来い!」「くそっ、何で当たんねえんだよ!?」「は、はは。あはは。ぎゃぎゃぎゃー!?」「おい、しっかり気を持つんだ、おい!?」「……神よ、何故我らをお見捨てになられたのですか……?」

この世界の「武力」の象徴である銃、戦車、ヘリ、爆弾、ミサイル、戦艦、空母、潜水艦、爆撃機、戦闘機は、しかし、「CB」の『武力』の象徴である「ガンダム」には傷一つ付ける事ができなかった。それはGN粒子によるレーダー無効化、通信遮断能力も大きく関わるが、何よりも、「ガンダム」がミサイルの直撃を受けても無傷だった、その装甲の強度が関係していた。

何故なら「ガンダム」の装甲強度は、例え銃弾だろうがミサイルだろうが鉄鋼弾だろうが、その全てを防ぎ、弾き切ったからだ。それにはGN粒子による装甲強化が働いており、それがこの世界でも最高の強度として知られるダイヤモンドをも超える強度を「ガンダム」の装甲に与えていたのだ。

加え、「ガンダム」の自由自在な3次元機動に高い機動性が合わさり、攻撃を当てることすら至難の技になっていた。

「馬鹿な!?　その速度でそんな機動ができるはずが……!?」「有り得ねえぞ!?　どういうことなんだよ、これはッ!?」「ジーザス……」

この3次元機動や機動性にもGN粒子が関連している。GN粒子の特性に斥力発生と重量軽減、慣性緩和があり、それがこの世界の常識では在り得ない機動を実現させているのだ。

『トレミー、こちら刹那・Ｆ・セイエイ。ミッションを完了した。これよりＡ３に移行する』
『こちらトレミー。刹那・Ｆ・セイエイはＡ３ではなくＡ５に移行してください』
『了解した』

つまり、「ガンダム」の性能の大半はＧＮ粒子によって支えられているといっても過言ではないのだ。

そして、その性能を持ってすれば、アフガニスタンに設立されていた国連・ゲリア達の基地を、僅か２時間で６つも堕とすことも可能なのであった。

―同日・同世界―

第９７管理外世界は今、大きく揺れていた。第９７管理外世界に武力介入した「ＣＢ」によって国連本部は倒壊し、イギリスは首都ロンドンを壊滅され、中東のアフガニスタンで起こっていた紛争が鎮圧され、日本も現在対「ガンダム」戦を準備しているからだ。

この世界の住人の殆どは管理局や「ＣＢ」を架空の組織として認識しており、自分達に関係があることだとは欠片も思っていなかった。これは国を挙げて行われた情報操作が功を成したからだ。しかし、皮肉にも、各国が混乱を抑えるために行った情報操作がさらなる混乱を招いてしまった。

後に、この出来事はこの世界では「ブレイク・ザ・ワールド（世界が焉わる日）」と言われ、他の世界では「デモンストレーション・オブ・パワー（天使の発表会）」と呼ばれ、後世まで語り継がれることとなる。

第１５話　世界が焉わる日（後書き）

今回は長らく更新を停滞させてしまい、すいませんでした。しかも、初めて手を出した戦記？　のような表現がうまくできず、正直御目を汚すような（？）作品になってしまいました。反省しています。あと、これはお願いですが、誤字脱字やアドバイス等はいつでもお受け致しますので、どんどん言って下さい。作者はこれが処女作なので、とても未熟（特に文章力）だからです。このような駄作を読んで下さった皆様に感謝を。

最後に。

ヒロインは　はやて　です。

第１６話　真実の探求者（前書き）

もし第１５話の続きを期待していた方がおりましたらごめんなさい。今回はサイドストーリーです。しかも６千字という短さです。第１５話の続きは次話で書きます。

では、開演です。

第１６話　真実の探求者

―新暦７５年１０月９日・時空管理局本局内―

「久しぶりやね、ユーノ君」
「はやても元気そうだね？」
「それはもちろんや！」
「フフッ」
「あ～！　何で今笑ったん！？　しかも鼻で笑ったように見えたんやけど！？」
「ごめんごめん。だって、世界がこんなに混沌としているのに、君があまりにもいつも通りだったから、それがおかしくてつい……」
「む～。でも、何か納得せえへんな。……何か奢ってくれたら許しそうやけどな？」
「分かったよ。じゃあ、ここはどうかな？」
「……なんや、随分やっすいとこやな～。なのはちゃんは最高級レストランではやてちゃんは普通の居酒屋かいな？　扱いの差に悪意すら感じるわ～」
「ごめんね。今はちょっとお金がなくてね……」
「？　金がないって、ユーノ君、何に使ったんや？　何時も金が余ってしょうがないみたいな事ゆっとったのに？」
「それは秘密だよ、はやて」
「……分かった。でも、何時かは話してくれると嬉しいわ～」
「うん、後で絶対に教えるからね。それまでは楽しみにしててね」
「うわ～！　そう言われるとめっちゃ気になるわ～！」
「それじゃ、１０月１５日の夜７時に居酒屋「よっちゃん」で会おうね、はやて」
「うん。じゃあなユーノ君」

―新暦７３年・ミッドチルダ―

「なんやて!?　第１０３陸上部隊が全滅!?」
「そうなんだ。しかも、その全滅した世界が第２４管理世界っていう聖王教会直轄の世界で起こったんだ」

はやてはヴェロッサから聞いたその報告に驚愕した。第１０３陸上部隊といえば管理局きっての陸上部隊の一つであり、その優秀性ははやて自身も模擬戦などを通して知っていたからだ。だから、それほどの部隊が危険がないはずの世界で全滅したことに驚きを隠せなかった。

「そうなんや……ん？　ということはもしかして、今管理局と教会で緊迫した空気が流れているのもまさか……」
「そのまさかさ。恐らくこれが原因だろうね」

最近管理局に流れている反教会の空気。それは陸上部隊だけでなく陸士部隊や航空武装隊、果ては次元航行部隊にまで広がっており、もはや看過することができない規模にまで膨れ上がっていた。その原因の一つに、第１０３陸上部隊の知り合いが各方面に多々いたことが挙げられる。中には遺族達と協力して調査を続行させるべく、

裁判に加担する局員もいた。

「……何があったんやヴェロッサ？」

「……それが、僕にも分からないんだ」

「ほんまに？」

「あぁ、本当さ。何せ現場に残されてた魔力は第１０３陸上部隊の物しかないし、かといって質量兵器なのかといえばそうでもないしで、正直八方塞（はっぽうふさがり）なんだよ」

「どうして質量兵器じゃないと分かるんや？」

「火薬が殆ど検出されなかったからさ。質量兵器の殆どは火薬を伴っているから、質量兵器を使えば必ず大量の火薬が検出される。でも、今回の事件ではそれが殆ど検出できなかったから質量兵器ではないと断定されたのさ」

ヴェロッサがそう説明し終えると、はやてはそれに頷きつつも自身の疑問と推測を話し始めた。

「なるほどな～。……でも、魔法でも質量兵器でもないとすれば、第１０３陸上部隊は何で全滅させられたんや？」

「そこが謎なんだよ」

「う～ん。……例えば未知の技術によって作られた、魔力も火薬も必要としない、謎の組織の新しい兵器とかはどうやろ？」

「……どうだろうといわれてもね」

「んじゃあ、ロストロギア！　それも魔力を必要としない、私達が見たことない動力や機関で動いている、謎のベールに包まれた物っちゅうのはどうや！？」

「だからそんな夢物語をどうだと言われ……ッ！？」

はやてのその夢物語にしか過ぎないはずの推測を聞いていたヴェロッサは、不意に動揺を露（あらわ）にした。それを目敏（めざと）く盗み見たはやては

そこから何らかの情報を得るべく、息つく暇を与えぬまま、何気ないフリをしつつ言葉を畳み掛けた。

「お？　どないしたんヴェロッサ、滝のような冷や汗を流して？　何かうちの推測に心当たりがあったんかい？」

「いや……何でもないよはやて。何でも、ね……」

「……」

「……少し、具合が悪くなってしまったようだ。悪いけどはやて、僕はこれで失礼させてもらうよ？」

「おお。気い付けてな～」

だが、そこはさすがに査察官であった。動揺を衝いたはずのはやての追求を何気ない言葉で回避しつつもさり気なく会合を終了させ、即座にこの場から退避した。それにはやては何も得られなかった悔しさを胸に感じつつも、真実へと繋がる道が目の前に細いながらも作られてきたのを感じ、知らず知らずのうちに拳を握っていた。

（まさか彼らが……「ＣＢ」がまだ存続しているというのか！？）

（ヴェロッサのあの様子……間違いない、何か知っとるな。それが何なのかはまだ分からへんけど、よほど重要でヤバい物なんやろな。それこそ闇の中に葬られた「管理局の悪夢」に匹敵する物かもしれへん。ま、今はこれ以上の追求は無理やな。今度は何時チャンスが訪れるんやか……）

だが、この探り合いを見ていた人物がそこにいたのを二人が気付くのは、これから2年後のことであった。

（……特に何も起きることなく終わったか。まぁ、今嗅ぎつけられるのは非常にまずいからね。……まぁ、その為に僕がいるんだし、バレない範囲で頑張って裏工作をしますか）

―新暦71年・ミッドチルダ―

暗い雰囲気がどことなく漂うこの店は、料理もさることながらアルコール類が豊富にあることで知られ、接待や会合などにも良く使われる、知る人ぞ知る名店であった。しかし、今は時間が遅いせいなのか準備中なのか、客はカウンターに座っている二人以外は見当たらない。そしてその二人も何やらただならぬ雰囲気で話し合っていて、とても間には入れそうになかった。

「……」

「……クロノ君。今、クロノ君やフェイトちゃんが追っかけとる事件は一体何なんや？　うちには全く情報が入らないんやけど？」

「……それを言うわけにはいかないんだ。例え数年来の友人である君にでもな」

たった二人しかいない客――クロノとはやて――はそう言い合いながら、しかし、決して目を合わせなかった。その目線はマスターによって酒を注がれている自身のグラスに釘付けとなっており、

二人とも互いの顔を見ようともしない。

「……フェイトちゃんも、クロノ君と同じことをゆっとったわ」

「……今回僕とフェイトが追っている事件は、第一級極秘事項に指定されている物だ。だから、余計な詮索は君の身を滅ぼすことになるかもしれないぞ？」

「……そんなにヤバイ事件なんかい？」

「……あぁ。少なくてもこの事件で８つもの次元世界が滅ぼされている」

「……！」

先程から互いに顔をチラリとも見ようともしない二人だが、クロノは自身のセリフではやてが驚愕したのを気配で感じた。そして、その驚きを利用して忠告を聞き入れてもらおうとする自身の汚さに吐き気を覚えた。だが、これが友人のためになると内面に向かって言い聞かせ、心を押し殺しながらその忠告をはやてに言った。

「……だから、これ以上は足を突っ込まないほうがいい。これは、君の為を思ってのことだ」

「……そこまで言われたらしゃあないわな。今後一切この話題は出さへんから、安心しとき」

「……あぁ。感謝するよはやて」

この時、もしクロノがはやてと目を合わせていたら気付いたことだろう。だが、彼ははやてと目を合わせることなく店を出て行った。それが何を齎(もたら)すことになるのかを知らずに、弱冠早足で、まるでその場から逃げるように去った。

はやての目が鋭くクロノを見ていたということに、結局彼は最後まで気付くことはなかった。

「……ゲンヤさん、何か情報、ありましたか？」
「いや、何もないな」
「さいですか。……うちも同じです」

レジアス・ゲイズに現状を報告しにきたはやてとゲンヤは地上本部の食堂の片隅で普通に食事を取りながら、ある事柄についてそれぞれが調べてきたことを報告し合っていた。しかしその成果は芳(かんば)しくなく、殆ど成果無しというのが結論だった。それに落胆を覚えながらも、二人はこれらのことを踏まえてある推測を立てた。

「ここまで調べて何もないということは、上層部、それも最高評議会が絡んでやがるな」
「うちもそう思います。……クロノ君とフェイトちゃんにも聞いてみたんですが、なんも得られんでしたわ」
「ちっ。お前ならいけると思ったんだがな」
「まぁ、これで全ての手掛かりが消えたわけではないですし、ゆっくりいきませんか、ゲンヤさん？」
「……その手掛かりっつうのは何だ？　オレはもう手当たりしだいに関係してそうな奴を調べたが、結果が何もなしだぞ？　オレでも

そうなのに、お前のような子狸ごときに何の手掛かりが……」

そう言われたはやては顔をいやらしくにやりとさせながら、最後の切り札となるところの名称を言った。

「……ゲンヤさんなら知っているとは思いますが」

「……？」

「無限書庫」

「……！」

その名を聞いたゲンヤの表情は、はやての中ではベストスリーに入るほど間抜けだったということをここに記しておく。そして、これははやてがゲンヤを驚かせた数少ない場面でもあり、それに少し優越感を抱きながらゆっくりと話始めた。

「うちの友人の1人がそこで働いているので、そこを当たってみようかと思います」

「……そうか、無限書庫か。そこはまだ稼動し始めたばかりだったからさすがのオレでも知り合いはいなかったな。しかし、大丈夫なのか？　あそこは使えないとか無駄だとか言われている部署だぞ？　それと、お前のその友人とやらは信頼できるのか？」

そのゲンヤの心配にはやては胸を張りながら（この時ゲンヤから「お前胸ないな～」と言われ、一悶着（ひともんちゃく）あった）自信満々に答えた。

「それについては心配せんでください。無限書庫はきちんと調べればどんな情報でも出てきますし、その友人も信頼できるんで、大丈夫です」

「そうか。お前がそういうのなら信用するが、くれぐれも……」

「分かってますゲンヤさん。足はできるだけつかないようにするん

で、そんなに心配せんでも大丈夫ですって！」

はやてがあまりにも自信満々にそう言い切ったため、ゲンヤはそれに懸けてみるかという気持ちが湧いていた。だが、それでも気にかかるのは彼女の安全であり、念には念をという気持ちでもう一度だけ忠告した。

「……気をつけろよ」
「……はい」
「……」
「……」

そう忠告を言い終えると、二人の間に沈黙が降りた。それは互いに報告すべき事柄が無くなったからであるが、それ以外にも、この沈黙は「これでこの話は終わり」ということも含んでいた。二人にとってはその沈黙の間こそが日常と非日常を切り替えるスイッチみたいな物だったのだ。

「ところで」
「はい？」

そして、ここからは先の事柄とは関係がないことを話し合うので、はやてはどんな絡み（話）がくるのか、脳内で数パターンの予想をしながらゲンヤの次の言葉に身構えた。

「その友人とやらとは、何時接触するんだ？」
「えっと……5日後の夜7時に居酒屋「よっちゃん」で会う予定です」

これはパターンＹ（若い世代の恋愛に関する絡み。なおＹはＹｏ

ｕｎｇのＹ）やなッ！　とはやては予想したが、ゲンヤはその予想の斜め４５。上をいった。

「そうか。……しっかりヤってこいよ？」

「……ゲンヤさん。今の発言、かなりセクハラ的な意味入っとるんちゃう？」

「……」

「……」

「……子狸でも盛る時は盛るんだ。だから、別にそれを隠さなくてもオレは気にしな「う、ち、が気にするんです！」……すまん」

この時のはやてはわりと本気で怒っていた……らしい。

―新暦６９年・第９７管理外世界・日本―

「……」

彼は空を見ていた。ずっと、ずっと。何を見ているのかは分からんかったけど、うちが何度声をかけても気付かなかったんやから、相当集中しとったのは確かや。

「……」

彼は空を見ている時、何も話さない。それこそ空の一部にでもなったかのように、終始無言を貫いていた。うちはそれを見て、なんかよう分からんけど、こう、胸の奥から悲しい？　気持ちが湧き上がってきたんや。

「……」

彼はまるでこの世界に見切りをつけて、この空（天上）に思いを馳せているようで……ここにいるうちらのことを捨てようとしているように見えたんが、その気持ちの原因やったのかもしれない。

「……」

そして、彼は今日もまた空を見る。ずっと、ずっと……

―新暦71年・ミッドチルダ―

「どうだった子狸？　しっかりと一人前の狸になってきたか？」

「えっと……ゲンヤさんがこないだちゃっかりと無限書庫の綺麗な

お姉さん系美人に抱きついた写真がここにありますが、これをギンガに送って「すまん、オレが悪かった」うん、分かればいいんや分かれば」

はやてとゲンヤは第１０８陸士部隊の宿舎の隊長室で話し合っていた。そこは盗聴器もカメラも設置されていないので、秘め事を話し合うには持って来いの環境だったからだ。

その話し合いの途中でゲンヤははやてに軽いジャブみたいなセクハラ発言を言った。それでこの子狸が成長しているのかを確かめるつもりだったのだが、それを即座に、しかもゲンヤの弱点をピンポイントで衝いてきたのには、古狸である彼も相当に驚いた。

（へっ、しっかりと成長してるじゃねえか、この子狸は）

（ユーノ君から渡されたこの写真、もしかしてこの時の為に渡されたんかい！？　なんてもんを渡してくるんやユーノ君は！！）

だが、これには訳がある。実は、はやてはこの写真を居酒屋「よっちゃん」からの帰りにユーノから貰っていたのだ。その時彼に「それを何時使うのかはすぐに分かるから」と言われたのだが、それが何を意味しているのか、実際にその瞬間使ってみて、漸く理解した。

（これは一種のゲンヤ・カウンターやったんや！　ユーノ君はこれを見越してうちにこれを渡したんやな。……でも、何時うちとゲンヤさんが繋がっていることを知ったんやろ？　ユーノ君には話してないはずなのに。……まぁ、無限書庫の司書長やから知っててもおかしくはないんやけど……）

はやてはユーノが彼女とゲンヤの関係を何時知ったのか疑問に思

ったが、それもゲンヤの次の言葉で吹っ飛んだ。

「ところで、成果はどうだった？」

「へっ！？　成果ですか！？」

「？　だから無限書庫の友人から何か引き出せたかって聞いているんだが？」

「あ！　あぁ、そっち、そっちですか！」

「何だと思ったんだ？」

「いえ、何でもあらへん！　じゃなくてないです！」

「？」

（……ゲンヤ・カウンターのこの写真のことだと思っていたっちゅうことは内緒にしとこ）

そう思いながら写真を懐のポケットにしっかりと仕舞い込むところはさすがではあったが。

「で、どうだった？」

「……」

「……ま・さ・か、成果無しなんてことはないよな？」

ゲンヤのその威圧的な重圧を前にして、無言で目を逸らしていたはやてはついに折れた。これ以上引き伸ばしてもどうにもならないと悟ったからだ。

「……その、まさかです」

「……ハァ」

ゲンヤにとって聞きたくなかった言葉がはやての口から出てきたことに、ゲンヤは深い溜息をせずにはいられなかった。

―新暦７３年・第９７管理外世界・日本―

「……はやて」
「うん？　何やユーノ君？」
「これを君に渡したいんだ。受け取ってくれるかい？」
「これって……宝石！？　あかん！　そんな高価なもん貰えへん！」
「いや、これは宝石じゃなくてロストロギアだよ」
「そっか～。ほな大丈夫……ってさらに貰えへんよそんな物騒なもん！」
「大丈夫だよはやて。一応これは僕が安全を確かめた物だから、危険なことは何もないよ？」
「でも、ロストロギアなんやろ？　そんなもん持っとったら……」
「それも大丈夫だよ。これはリンディさんから許可を貰った物だから、これを持っているからって逮捕されることはないよ？」
「……でも、そないなもん、本当に貰って」
「いいよ。それに、これは僕がはやてにあげたい物だから、逆に貰ってくれないと僕が困るんだ。だから、受け取ってくれないか？」
「……ええけど」
「じゃあ、これはもう君の物だ。……受け取ってくれてありがとう、はやて」
「？　まぁ、どういたしまして……でいいんかい？」
「うん、それでいいんだよ。……あ、言い忘れたけどこれは二人だけの秘密だから、誰にも喋らないでくれないかい？　一応それはロストロギアだから、リンディさんに許可されているとはいえ、それを個人で持っていることが広まったら没収される可能性があるからね。……それじゃ、僕はこれから仕事に戻らなくちゃいけないから、

ここでお別れだ。じゃあねはやて」
「うん。じゃあなユーノ君」

第１６話　真実の探求者（後書き）

はやての口調が全く掴めない……！　書けども書けども全く書けない……！　まぁ、それは置いといて。

今回特筆すべきことは、もうお分かりになられた方もいると思いますが、漸く、遂に！　やっと！！　はやてがエアヒロインからメインヒロインに昇格することができました！！　苦節十五話の道程がとても長かったです。しかし、ヒロインの座を狙えるキャラが他にもいる（主にフェイト）ので油断はできません！　はやて、頑張ってヒロインの座を死守してくれ！　そうしないとこの作品が成り立たないから！！　このような駄作を読んで下さった皆様に感謝を。

最後に。

ヒロインは　はやて　です！！（初めて自信を持って言えました）

第17話　何の為に、誰が為に？（前書き）

＊注意！　この作品にはオリジナル設定が多数含まれております。それこそ原作にはなかった設定も含まれています。なので、そういった物が苦手な方は見るのをお勧めしません。なお、この話にはヒロインが出てこないという異常事態が発生しております。「はやてが出てこないなら見ない！」という同志もUターンをお願い致します。

＊シャッハの魔力光が橙色だったので、修正を入れました。このような間違いをしてしまい、申し訳ございません。

では、開演です。

第17話　何の為に、誰が為に？

―新暦75年10月10日・第12管理世界・聖王教会中央教堂―

次元世界最大の宗教である聖王教の本部の一つがあるここ第12管理世界は、自然を豊富に残したまま発展してきた珍しい世界であり、その自然の殆どが時空管理局と聖王教会によって保護されている事でも知られている。

その自然によって造られる光景は壮大の一言だけではとても表現しきれない迫力があり、その光景を見て聖王教会に入る人が年数百人ほどいるぐらいだ。

そして管理局と聖王教会はその年数百人の入会、入局（この自然を守る為に管理局に入る人もいる）希望者を失わないためにも、他の世界の自然とは比べ物にならないほど厳重な警備を常にこの自然を守るために展開してきた。

だが、本局で行われる緊急記者会見の護衛の為に、その内の何割かを当てなければならなかったのが、この自然の命運を決めてしまった。

管理局を除けば次元世界で最大規模を誇る組織である聖王教会。その本部の一つである聖王教会中央教堂は今、周囲の自然と共に大火に包まれていた。中央教堂のその荘厳な佇まいは見るも無残な瓦礫の山となり、その山の合間からは炭化した人間の死体がちらほらと見受けられ、周囲にあった緑も、半径数キロに渡って大火に焼か

れ、その姿を木炭へと変えていた。

ゴォオオオオ！

かつては人々の活気に溢れ、鳥達の声が響き渡る場所であったそこは、今や死の気配に満ち溢れ、炎が燃える音を延々と聞かされる場所となっていた。どんなに目を逸らしても、必ず炭化した人間が視界に入り、どんなに耳を澄ましても、炎が燃え盛る音しか聞こえない空間。それが中央教堂の現状であった。

――――ゴォ！

だが、その空間で動く何かが二つあった。その二つは互いに火花を散らしながら擦れ違い、金属らしきモノをぶつけ、桃色の光線と橙色の魔法陣を空や地に輝かせながら、互いに一歩も引かずに、瓦礫が崩れようとも、炎がさらに燃え盛えようとも、それらを気に留めないで、相手の事だけを見ながら戦っていた。

「ハァアアア！」

『このォオオ！』

その戦いを見るは壊れた建物と生気の籠もっていない瞳だけなれど、その戦いは純粋に素晴らしく、かつ美しかった。その戦いを演じる二つの何かが、例えどれだけ般若や悪鬼の形相を浮かべていたとしても、だ。

「堕ちろ、「ガンダム」ッ！」

『いい加減に当たりやがれ、暴力シスターさんよッ！！』

橙色の魔法陣が地上で発動すると、騎士甲冑を纏ったシャッハが一瞬で先程とは違う場所に跳躍した。そして双剣型アームドデバイス「ヴィンデルシャフト」を目の前の「ガンダム」に叩きこもうとするも、その「ガンダム」が垂直に飛翔したために避けられ、逆にヴィンデルシャフトを地面にめり込ますことによって隙を作ってしまった。そこを見逃すようなことを「ガンダム」――ケルディム――がするはずがなく、地上から約十数メートルの所を浮かびながらシャッハにGNスナイパーライフル?を向け、ロックオンしたと同時に、右手で何回もその引き金を引いた。

「クッ!」

『あーくそッ!　また跳躍しやがった!』

が、ケルディムのその攻撃がシャッハに当たる事はなかった。シャッハは自分に向かってくる光線を見ながらヴィンデルシャフトを引き抜けない事を悟ると、地面にめり込んだヴィンデルシャフトごと地面に潜り、また違う場所に跳躍したのだ。そして数瞬前までシャッハがいたところを、ケルディムによって放たれた正確無比な狙撃が何発も突き刺さり、ヴィンデルシャフトによってできたクレーターをさらに大きく広げた。もちろんこの時シャッハは既にそことは違う場所に跳躍していたので、何のダメージもない。

「ハァ、ハァ……」

『クッ、相性が悪いな。こんなに跳躍されちゃ狙い撃てねえぜ』

『ヘタクソ、ヘタクソ』

『うるせえぞハロ!』

『……マイスター、来るぞ』

『!!』

ロックオン・ストラトスがハロと話している間に、シャッハは攻撃を凌いだ事を喜ぶ事無く、再び物質通過跳躍魔法――――旋迅疾駆(せんじんしっく)――を発動させると、ケルディムの狙撃によりできた砂煙の中に一瞬で潜りこんだ。もちろんロックオンもそれを狙い撃とうとするが、シャッハが地面を潜って一瞬で移動している為に、どこをどう移動しているのか分からず、結局撃つことすらできなかった。

『クソッ、見えねぇ！』

『……赤外線スコープを出すか？』

『あぁ、頼むケルディム！』

『クルゾ、クルゾ』

そしてその砂煙の中からケルディムの死角を衝くように、シャッハがまるで弾丸のように飛び出した。その両手に持つヴィンデルシャフトを大きく後ろに振りかぶりながら、それでも体勢を崩さずに。

そして彼女は唱える。自身が持つ攻撃魔法の中でも最大級の威力を持つ、必殺の魔法を。それで相手が壊れる事を信じて疑わずに。

そしてついに彼女は自分の距離であるクロスレンジにケルディムを捉える。その時にはケルディムもシャッハに気付き、急ぎその攻撃を回避しようとするも、時既に遅く、どう足掻(あが)いてもケルディムの性能では回避のしようがないところにまで迫られた。

そして彼女は唱えた。その必殺の魔法を。そう、その名は……！

「ヴィンデルシャフト、カートリッジロード！」

『イエス、マスター』

ガコン！　ガコン！

『カイヒポイントナシ、カイヒポイントナシ』
『この世界がまだ変革してないってのに、ここでやられるわけには……！』

「これで終わりだ、「ガンダム」！　切り裂け、烈風一迅（れっぷういちじん）！！」

そしてその魔法は大気を裂き、紅い粒子を切り裂いて、最後にケルディムを斬り裂いた。

―同年同日・第９無人世界・グリューエン―

「ふわぁ～あ。うぅ、眠くてたまらないよ」
「そんなことを言わずにきちんと仕事をしろ。何時敵が来るか分からないんだぞ？」

グリューエンの監視室兼警備室で、当直であるその二人は備え付けの椅子に座りながら、互いの顔を見て話し合っていた。先程あくびをした１７歳ぐらいの青年は、のんびりと緊張感なくくつろいでいたが、その態度を注意した１６歳ぐらいの女性は逆にピリピリとした緊張感を漂わせており、正直何時倒れるか分かった物ではなか

った。

青年はその女性が緊張する理由を知っていた。彼女は今回本局より送られてきた新任の局員の一人であり、今回が初めての当直なのだ。

しかし、普通なら例え新任の局員であろうとも、ここまで緊張することはない。しかし、今の世界情勢を見るに、逆に緊張するなと言う方がどだい無理な注文なのだ。

何故なら管理局は今、「ＣＢ」などという謎めいた組織と戦争をしているらしいからだ。それも全次元世界を巻き込んでという、想像を絶するような規模で。

詳しい事は今緊急記者会見で、伝説の三提督とユーノ・スクライア司書長によって語られているが、正直そんな事をいきなり言われても、まるで実感が無いというのが彼らの、ここグリューエンで働く局員達の感想であった。それも彼らの働く場所がいつもと変わらずに稼働し続け、いつもと変わらない仕事をこなし、いつもと変わる事が無い犯罪者たちの顔を眺めて過ごす、という日常のサイクルが崩れなかったからである。

「……そんなに緊張していたら、いざって時に失敗しますよ？」

「私もそう思うが、どうしても緊張してしまうのだからしょうがないであろう？　それよりもあなたはきちんと監視・警戒モニターを見ろ。先程から私の顔ばかり見ているが、それで大丈夫なのか？」

だが、

だが！

だが！！

日常というのは、何かしらの理不尽に巻き込まれれば、容易に非日常へと移ろうということを、彼らは知らなかったのであろうか？

自分達が永遠に続くと思っていた平穏は、思っているよりも遥かに脆く、また危ういバランスによって支えられているという事に、彼らは気付かなかったのであろうか？

否、

否！

否！！

彼らは、いや、彼らだってとうの昔に気付いてはいるのだ。ただ、それを直視しないで、逃避を繰り返しているだけなのだ。それこそ危機が目前に迫っている時にも……

「えぇ、大丈……ぶぅうう！？」

「ど、どうした？　いきなりコーヒーをぶちまけて」

「いえ、これは……レーダーには映っていませんが、今確かにモニターが何かを映しました！　しかもこの宇宙空間の真っただ中で、明らかに人型サイズのモノが！」

「な！？　で、では、まさか……あの組織のロストロギアなのか！？」

「えぇ、間違いありません」

そう言って青年は、女性をできるだけ緊張させないよう一拍置いて、さらに深呼吸をしてから、厳正な事実のみを正確に伝えた。自

身の拳が震えている事にも気付かずに。

「恐らく「ＣＢ」の「ガンダム」が、ここグリューエンに攻め込んできました！！」

『どうやら見つかったようだね』

リボンズはガデッサから敵の監視モニターに発見されたことを聞き、それでもなお、余裕の表情を崩さなかった。そしてデヴァインの操るレグナントに掴まりながら、ＧＮメガランチャーを、レグナントを掴んでいる手とは逆の手で、握力と武器の耐久力が許す限り強く、強く、強く握り締めた。

『……どうする、リボンズ？』

それを見ながら、しかし、デヴァインは何も言わなかった。リボンズがたまにそういうような、理解できない行動をとるのが、これが初めてではないからだ。

『なに、どうもしないさ。作戦変更の指示はないから、このまま一気に行くしかないんじゃないかな？』

『……では、そうしよう』

それに相槌を打ちながら、ブリングはこれから行う作戦で、自身が果たすべき役割をもう一度頭の中で確認した。もし自分が失敗すれば、全てが水の泡になってしまうかもしれないからだ。それに僅かばかり緊張を感じたブリングは、その緊張を無くすべく目を一度閉じて、簡易的な瞑想を行った。

『デヴァイン。分かっているとは思うけど、この奪還作戦は最初の３００秒が勝負だからね？　くれぐれも……』

『……あぁ、分かっている』

『それじゃブリングはとりあえずデヴァインに掴まったまま突撃だね』

『……あぁ、分かっている』

デヴァインとブリングはリボンズの注意に同じ返事をしながらも、既に距離５００にまで迫ったグリューエンに意識を集中していた。それに満足したリボンズはレグナントに掴まっていた手を離すと、距離４００で停止し、ＧＮメガランチャーを両手で構え、砲撃の準備に取り掛かった。それを見届けたレグナントは更に加速し、その姿を視認することが困難なほどのスピードを出した。それは最早赤い軌跡を描く隕石のようであった。

『それじゃ行こうか、ガンダムマイスターの一人、アレルヤ・ハプティズムを奪還しに。そしてジェイル・スカリエッティを「ＣＢ」に勧誘しに』

ガデッサのＧＮ粒子が両手で持っているＧＮメガランチャーに溜まっていき、周囲の景色を歪ませるほどのエネルギーをその砲口に生じさせた。それをグリューエンに向けながら、リボンズはこれか

ら起こるであろう悲劇を思い、その胸に僅かばかりの悲しみを覚えた。しかし、それでもリボンズは、グリューエンに向けた砲口を下げる事を決してしなかった。これが「ＣＢ」の、ひいては自分達を生みだした「Ｉ計画（アイ）」を立案・実行し、ある意味では生みの親ともとれるイオリア・シュヘンベルグの為になると信じながら、その僅かな迷いを振り切り、引き金を引いた。

『フェイズ３、スタート』

そして、戦場（死と破壊）を生み出すであろう極光がその砲口から放たれ、一直線にグリューエンへと伸びていった。

『グリューエンに接近する敵を発見しました。繰り返します。グリューエンに接近する敵を発見しました。防衛隊は準備ができた部隊から逐次（ちくじ）出撃してください。これは訓練ではありません。繰り返します。これは訓練ではありま』――ドォオン！

グリューエンにその放送が鳴ったと同時に、橙色の極光がその防衛隊がいる区画へと無音で直撃し、その熱量と爆風で、直撃した箇所に直径１０メートルほどの穴を作った。そしてその穴にデヴァインは作戦通りにレグナントを突っ込ませた。その手にＧＮ－００７と書かれたＧＮドライブを抱えながら。

『……よし、次だ』

『イエス、ライセンサー』

デヴァインはそう言うとレグナントをＭＡ形態のままグリューエン内部に突撃させ、その内部に強引に侵入した。しかしグリューエン内部の通路はこのレグナントが通るにはあまりにも狭かったので、事前の打ち合わせ通りにレグナントを直径１０センチほどの疑似ＧＮドライブに戻し、自身は体にぴったりと張り付くようなパイロットスーツを着て、拳銃をそのスーツの腰にあるホルダーから引き抜き、一直線にアレルヤとスカリエッティがいる区画へと走り出した。

『……ここは死守するぞ、ガラッゾ』

『イエス、ライセンサー』

それを見ながらブリングはガラッゾを穴の入口へと移動させ、これから来るであろう敵襲に備えた。彼の役割とはリボンズが作り、デヴァインが突入した穴を守る事だ。そして、ガデッサのＧＮメガランチャーが直撃して二分経ってから「アトモスフィア・フィールド」（「Ａ・Ｆ」）が発動され、グリューエンのあちこちから魔導師達が一斉にガラッゾへと向かい、射撃魔法で弾幕の雨を浴びせた。

『……梃子でも動かん！』

『ＧＮフィールド、展開』

ガラッゾはそれを左肩から発生したＧＮフィールドで防ぐが、それでも多勢に無勢であり、少しずつではあったが弾幕に押され始めてきた。

『ガラッゾ！』
『ＧＮフィールドの出力を全開にします』

それを何とか出力を全開にすることで押し止めたが、それも何時まで続くか分からなかった。何故ならＧＮ粒子の残量がもの凄い勢いで下がっているからだ。それに冷や汗をかきながらブリングは必死に攻撃に耐えた。

（……持ってあと２分か。急げデヴァイン！）

『来たか……』
『ライセンサー、注意を。敵Ｌ級艦船第６番艦「ティターン」から「Ａ・Ｆ」が発動しました』
『了解したよガデッサ』

グリューエンに駐留していたＬ級艦船第６番艦「ティターン」が接近してくるのを見ながら、リボンズはガデッサのＧＮメガランチャーを構え、まだチャージが完了していない橙色の極光を「ティターン」へと発射した。

だがそれは「ティターン」のディストーションシールドに阻まれ、「ティターン」の右側面を削るだけで終わった。それに微かな不快

感を抱きながら、リボンズはＧＮメガランチャーの大きく開いていた砲身を閉じ、対艦・対要塞用大型砲から対人用の３連装ＧＮビームライフルへと変形させた。そして腰に付いている空になったエネルギーパックをパージし、「ティターン」から出撃してきたおおよそ４０名もの魔導師に向かって開戦の砲火を放った。

『おや？　どうやら情報通り、ＡＡＡランクが一人しかいないようだ。やれやれ、舐められたものだ。このガデッサをそれだけの戦力でどうにかできると思われているなんてね』

『敵魔導師距離１００にまで接近。そろそろミドルレンジになってしまいますが、よろしいので？』

『あぁ、構わないさ。確かにこの機体はアウトレンジとロングレンジに特化しているが、それでもミドルレンジでＡＡＡランク魔導師ごときに遅れを取るわけがない』

『言われてみればその通りです、ライセンサー』

『では始めようじゃないか、戦いという名のワルツを。そして彼らに無慈悲な死を与え、その傲慢な命を儚く散らせ、今までの罪を清算させる舞踏を、僕と一緒に踊ってくれないかい、ガデッサ？』

『イエス、ライセンサー。私は貴方にこの身が滅びるまで付き添います。なので、貴方は思う存分その力を行使してください。それが「ＣＢ」の、そしてイオリア・シュヘンベルグの為になるのですから』

『あぁ、そうだね。ありがとうガデッサ』

リボンズがそれを言い終わると同時に、魔導師達から様々な色の魔法が数十放たれた。それをリズムを刻みながら紙一重で全て避けると、魔導師達が上下左右全てから、４人がかりでガデッサへと攻めてきた。

『甘いね』

『甘いですね』

だが、それでガデッサを倒すことはできなかった。リボンズはその攻撃を避けきれないと判断すると、いきなり後方へと下がったのだ。その緩急についてゆく事が出来ず、４人の魔導師達は互いにガデッサがいたところで衝突し、一ヶ所にまとめられてしまった。

「し、しまっ……！」

『じゃあね』

ドドドドドドドッ！

そしてガデッサはそこに容赦なく3連装ＧＮビームライフルを撃ち込んだ。それも十数発も。それによって４人の魔導師は数十の肉片へと化し、その周辺にはまだ赤い、新鮮な生血だったものが散乱する。

「なっ、殺傷魔法だと!?　本当に使っていたのか！」「ワルター、キーナ、ハセキナ、ブリットの連携攻撃がこうも簡単に……！」「クソッ！　仇は、仇はとってやるぞお前ら!!」「そんな……あの人達は全員Ｂランク以上だったのに……なんて強さなんだ」「此方も殺傷魔法で抗戦しろ！　じゃなきゃ死ぬぞ！」

『ふん。たかがこの程度で動揺するなんてね』

その光景を見た他の魔導師達は目に見えて動揺し、その動揺を狙っていたリボンズは内心でたかが人の死で動揺する彼らを侮蔑しながら、両手に持っているＧＮメガランチャーを腰に装着し、一番近くにいた3人の魔導師達のグループに、ＧＮビームサーベルを両手にとって斬りかかった。

『これで7人か』
『残り33名です』

その3人の魔導師グループは近づいてくる死の象徴(ガデッサ)を遠ざけようと必死に射撃魔法を撃つも、瞬時に体を全方位に移動させる事が可能なガデッサを捉える事ができず、結局は掠(かす)り傷を負わせることすらできぬまま、GNビームサーベルで頭と胴体を斬り離され、その命を儚く散らした。

「こいつッ！」「死ねえ、「ガンダム」ー！」

だが、その3人の魔導師達の血が舞う中、二人の新たな魔導師が剣と拳のアームドデバイスをガデッサに、盛大な金属音を出しながら叩きつけた。

「これでッ！」「どうだッ！？」
『それで？』『どうしました？』

それをガデッサは僅かな体捌(たいさば)きだけで軽くいなし、体勢を崩したその二人の魔導師を肘に付いているGNカッターで、体を回転させて切り裂いた。

「ぐわぁッ！」「ぎゃあぁあああ！」

その二人の魔導師はそれぞれデバイスを持っていた方の腕を、GNカッターで綺麗(きれい)に切断された。そしてその激痛によって意識が一瞬ガデッサから外れてしまった。

ドドドドドドッ！

そこをガデッサの、いつの間にか持ち替えられていたＧＮメガランチャーで数十、撃ち抜かれた。

「ヒッ！？」

さらに、その射線軸上にいたもう一人の魔導師もその連射に巻き込まれ、一瞬で肉片に変わり絶命した。

『これで１０人』

『あと３０名です、ライセンサー』

そしてそれを見届ける前に、彼らはまるで血に飢えた獣のように、けれども、どこか上品に踊っているかのような獰猛（どうもう）さと洗練さを融合させた動きで、次の目標（獲物）へと狙いを変え、次々と襲いかかっていった。

「ここか？」

『イエス、ライセンサー。情報通りならこの区画にアレルヤ・ハプティズムとジェイル・スカリエッティが拘置されているはずです』

そこはこのグリューエンの中で最も中央に近い場所に造られた、並みのオーバーSランクでは傷一つ付けることすら叶わない、世界有数の強度を持つ牢獄だった。明りは第一種戦闘配置のためか赤色の非常灯しか点いておらず、それがかえってこの牢獄の不気味さを増長しているようで、今もしここで幽霊を見たと言えば、誰もが信じてしまうほどに、ここはまるで冥界のような雰囲気を醸(かも)し出していた。

（……冥府の底より４年前の亡霊が蘇る、か。皮肉が利きすぎて逆に笑えんな）

まるで冥界のような牢獄だと思ったデヴァインは、唐突にそう思った。もしこれが運命の悪戯(いたずら)でなく、誰かが意図的に造りだしたのならば、彼は間違いなくその人物を無表情ながらに褒めたでろう。最も、悪戯なのか意図的なのか判別できなかったので、褒める事はできそうになかったが。

数十秒ほど足音を立てずに走っていると、不意に狭い通路から広い空間へと移り変わり、目の前に二つの巨大な牢獄が現れた。その牢獄は全体的に灰色で塗られ、普通の四角い形ではなく半球状で造られており、直径１０メートルはあろうかという代物だった。そのあまりにも異常な牢獄の姿に一瞬我を忘れたデヴァインだったが、それも一瞬で立て直し、急いで自分がやるべき事をやり始めた。

この牢獄は管理局の中でも最新の技術を惜しみなく使っている代物で、その壁の強度はＸＶ級次元航行船の装甲よりも硬いとして知られ、これを壊すにはそれこそアルカンシェルぐらいのモノを持ってこなければいけないとされていた。そんな馬鹿げた強度である牢

獄は、もちろんS＋ランクであるレグナントを持ってしても壊せるわけがない。だから彼は作戦開始時に例の彼から渡された翠色の細長い宝石らしき何かを、本来は小型端末を入れるべき所に、かなり慎重に差し入れた。

そしてその翠色の何かが小型端末の挿入口に入った瞬間、ありとあらゆる牢獄のプロテクト、及びプログラムが破壊された。それも完膚なきまでに。

そのあまりにも現実離れした事実に、デヴァインは再び我を忘れ、口をポカンと開けた。もう一度言うが、この牢獄は管理局の最新技術がふんだんに盛り込まれている世界最硬の牢獄の一つである。物理的硬度はもちろんのこと、そのプロテクトの硬さも本局のマザー・コンピューターに使われているモノに引けを取らない物が使われており、それを破壊するのはほぼ不可能だとされている。

それを、この翠色の宝石らしきモノは、差し入れたその一瞬で破壊したのだ。

その事実に驚愕しながら、デヴァインはレグナントの声で漸く我に返り、目の前の唯の扉になった――電子ロックシステムも破壊されている――牢獄の扉を、レグナントになって持ち上げた。

「う……」

「……久しぶりだな、アレルヤ・ハプティズム」

「その声はまさか……デヴァインかブリングなの……か？」

「……デヴァインだ」

その部屋は何といっても殺風景だった。それ以外の言葉が不要なほどに。だが、最もこの部屋を殺風景にしているのは、この部屋の

主であるアレルヤであった。彼は部屋の中央にポツンと置かれた椅子に、これでもかというほど黒い分厚いベルトで縛られていたのだ。それを見たデヴァインの眉が思わず顰まるほどきつく、そして何度も何度も巻かれていた。

「……今助けるぞ、アレルヤ・ハプティズムよ」
「ありがとうデヴァイン。ところで、その機体は……？」
「……レグナントという。詳しい事は後で話す。今は一分一秒たりとも惜しいからな」
「了解」

その必要最低限の事しか話さない、４年前と全く変わっていないデヴァインの姿を見て、アレルヤは４年ぶりに苦笑した。それを怪訝に思ったデヴァインであったが、深く追求する時間すらないと判断し、アレルヤを解放するや否や、すぐに対面の牢獄へと向かい、そこに囚われている人物を解き放つ為に、先程アレルヤを解放するときにも使用した翠色の宝石の何かを先程と同じ所に差し、一瞬で牢獄を無力化した。

「……誰だい？　食事の時間にはまだ早いけど」
「……「ＣＢ」だ」
「……ふむ、そうか。もう来たか。私の予想ではもう数日ぐらい経ってから来ると予想していたが、それよりも早かったな。まぁ、いずれにしろ彼と話せたことがプラスに働いたんだろうね。やはり持つべきものは費用対効果が素晴らしい仲間だね」

ジェイル・スカリエッティ。それがこの牢獄に囚われている犯罪者の正体である。そして「ＣＢ」にとっては喉から手が出るほど欲しい人材であった。

「……ドクター・スカリエッティ、返事を聞きに来た。貴方が「CB」と共に『計画』を成功へと導くのか、そしてその覚悟があるのかどう」
「愚問だね」
スカリエッティはそう前置きをしてから、重い声質で自身の答えを言った。それが自分でここ数日間、悩みに悩んだ答えだった。
「私は今この時点を持って「CB」に入り、君達の『計画』に全力を尽くすことを此処に誓おう」
例えそれが自身の「生命を大事にする」というポリシーから逸脱しようとも、彼はきっとそれを後悔する事も、そしてその歩みを止める事もなく歩き続けることだろう。彼はその欲望が尽きるまで、再び管理局と敵対する道を選んだのだから。「ガンダム」に惹かれて。
「……了解した。ではこれよりここを脱出する」
「脱出って、どうするんだいデヴァイン？」
「……その前に渡すモノがある。これだ」
「これって……「ガンダム」？」
「……そうだ。お前の新しい「ガンダム」だ」
『お久しぶりですマイスター』
「……！　その声はまさか」
『えぇ、そうです。私はかつて貴方と共に戦った「ガンダム」キュリオスです』
その声を聞くだけで、アレルヤは心の底から何かが湧き上がるのを感じた。それは彼の心の隅々にまで瞬く間に広がり、その目から涙を流れさせた。彼は純粋に自身の相棒にまた会えた事が嬉しかっ

たのだ。此処に一生拘置されると覚悟し、もう二度と会う事が無いと思っていたから。

「本当に……キュリオスなのかい？」

『正確に言えば違うのですが、それが４年前の私を示しているのであれば、私はキュリオスで間違いありませんよ、マイスター』

「え？　それってどういう……」

「……急げ！　もう時間がない！　あと一分でここを出なければ脱出できなくなるぞ！」

そう言いながらデヴァインはスカリエッティに無骨な宇宙・次元空間用ボディースーツとヘルメットを渡し、自身もレグナントを解除した。だが、アレルヤは分からない。何をすればいいのかを。

「……早く「ガンダム」を起動させろ！　ここから脱出するにはそれしかない！」

「！　そ、そうか。起動させればいいんだね？」

「……あぁ、そうだ。脱出の手順はアレルヤに掴まってここから出るようになっている」

「そ、そうだったのか」

まさか初っ端から自分が使われるとは思ってなかったアレルヤはその手順に驚きこそしたが、これも恐らくスメラギの作戦なのだと思うと、昔と変わらないその無茶苦茶ぶりに懐かしいものさえ感じた。

『マイスター』

懐かしさに浸っていたアレルヤだったが、それを遮（さえぎ）るように自身の「ガンダム」に真剣な声色で問い掛けられた。そのあまりにも真

剣な声はアレルヤを自然と緊張させた。

「何、キュリオス？」

『貴方は今「ＣＢ」のガンダムマイスターとして戦う覚悟がありますか？』

「！？」

その問いは今のアレルヤ・ハプティズムにとって禁忌にも等しい問いであった。だが、彼のデバイスは彼の心を覗くように、４年前にはあった覚悟を確かめる為、あえて非情に徹し、彼の心の深淵を聞いた。彼が本当は人殺しをしたくないというのを知っていたから。

『貴方がもし今「ＣＢ」に戻ればまた人殺しになります。それも、４年前よりさらに罪深い稀代の殺人者に。貴方はそれに耐えられますか？　４年前、必ず自分が殺した相手に祈りと涙を捧げていた貴方が』

「……」

『もし貴方に戦う覚悟がないのであれば、それはそれで構いません。ただ、私はそんな人に自分の力を与えることはありませんが』

「……」

『もう一度聞きます、「ＣＢ」のガンダムマイスターであった者よ。貴方は今一度「ＣＢ」に戻り、稀代の殺人者となる覚悟がありますか？』

「……」

『……』

重い沈黙がその場を席巻する。アレルヤはその問いに答える事無く、ただ下を向いて沈黙し、ＧＮ－００７も口を噤んだ。

数秒だろうか、数十秒であろうか。それほど時間が経っていない

ようにも、それほども時間が経ったようにも感じる。

デヴァインは固唾をのんで見守っていた。その問いにアレルヤがどう答えるのか予測がつかなかいから。彼がかつて最も「ＣＢ」のやり方に異議を唱えていたのを彼は知っていたから。

スカリエッティはそのやり取りを興味深げに見つめていた。彼が優しいのは分かる。が、そんな彼がどうして「ＣＢ」などという、この世で最も無慈悲で非情で残酷な組織に入ったのか、それを知りたいが為に。

「僕はまだ……何も成していない」

「「「……？」」」

唐突に、そう、唐突に、アレルヤは自身の答えを話し始めた。自分の心の深淵にある、４年前からずっと燻（くすぶ）っていた覚悟という名の炎を。

「僕が「ＣＢ」に入ったのは、この世界を正したかったから。「Ｅ（イー）計画」なんていう馬鹿げた物が存在するこの世界を変革したかったから。そして、それは今でも変わらない。僕はこの４年前と何も変わってない世界を、もう一度ガンダムマイスターとして、アレルヤ・ハプティズムとして変革させたい、いや、変革しなければならないんだ。それが４年前に僕が殺した人達への贖罪（しょくざい）なのだから」

それは誓い。それは契約。それは約束。それが彼がアレルヤ・ハプティズムというコードネームを受け取る理由。そして彼の「ガンダム」と共に戦う理由。

「だから、もう一度力を貸してくれないか、キュリオス？」

『……それが、貴方の答えなのですね？』
「うん」
アレルヤはその最終確認に何の躊躇（ためら）いも無く頷いた。そしてそれで十分だった。
『分かりました。では、私は「ＣＢ」のガンダムマイスターであるアレルヤ・ハプティズムに、私の力の全てを与えます。改めてよろしくお願いします、マイスター』
「うん。ありがとう、キュリオス」
『それでは早速行きましょう、私達の戦場に。このような狭苦しい所は私達には全く合いませんから』
「君は相変わらず狭い所が嫌いなんだね」
この軽い談笑一つとっても、それがお互いの間にあった４年間という時間の溝を急速に埋める。その心地よさを味わいながら、彼らは次の瞬間には気を引き締め、稀代の殺人者になるであろう呪文を唱える。懺悔という名の祈りをしながら。死者に対し涙を流しながら。
『行きます』
「了解」
それでも彼らは後ろを振り向かず、その翼で羽ばたいていく。それが贖罪であると、自分達が殺した相手に対し彼らができる唯一のことだと信じて。
『スタンバイレディ、セットアップ。ＧＮ－００７　ＡＲＩＯＳ

GUNDAM　インストール、コンプリート』
「アリオス？」
『それが今の私の名です』
「……じゃあ、改めてよろしくね？　アリオス」
『イエス、マイスター』

そして、遂に彼らは新たな翼で再び羽ばたいた。その先にある「未来」を、世界の変革を信じて。そう、決して後ろを振り向かず、ただ前だけを飛んで……。

『マイスター。貴方は先程ああ言いましたが、４年経った今でも彼女の事を……』
『……うん。僕がガンダムマイスターになるもう一つの理由は、今も昔も変わらないよアリオス』
『……分かりました。まぁ、それでこそ私のマイスターです。愛する者を忘れ、その誓いを破るような輩は私には相応(ふさわ)しくありませんから』
『君のその考え方、ちっとも変わってないね』
『それを言うならマイスターもです』

その会話はアリオスに掴まっているデヴァインとスカリエッティには聞こえず、アレルヤとアリオスの間だけで行われた物である。何故聞かせないのかというと、その会話の内容こそがアレルヤ・ハプティズムの本質を形成する物なので、おいそれと他人に話すようなことではないからだ。

（マリー、ごめんね。君との誓いはまだ果たせそうにないけど、例えどれだけ時間が掛かっても、何時か必ず果たすから。だから、それまで待っていてくれないか、マリー？）

その胸の内は、彼の「ガンダム」であるアリオスと「ＣＢ」の創設者であるイオリア・シュヘンベルグしか知らない、他のガンダムマイスターにすら話していない物。

そして、彼がアレルヤ・ハプティズムを名乗る、本当の理由。

それを胸の奥の奥に、汚れないように大事に大事に仕舞い込みながら、彼はただ前を向いて飛んだ。

それが逃避なのか、それとも誓いを果たす為に飛んでいるのか。今となっては彼自身にすら分からなかったが。

第17話　何の為に、誰が為に？（後書き）

この話は作者もびっくりな速度で書き終わりました。正直一日で5～6千字進むとかありえません。

今回初めてガンダムマイスター達（といっても一人ですが）の「CB」に入った理由みたいな物を書きましたが、これらはオリジナル設定、しかも指摘、批判、中傷を覚悟して書いたものです。「こんなのアレルヤじゃない！　ソーマ（マリー）を出せ！」といったものも受けつけます。

ちなみに、第12管理世界の設定も独自のものです。このような駄作を読んで下さった皆様に感謝を。

最後に。

ヒロインは　はやて　です。（出てきていませんが）

第１８話　天使の発表会（前書き）

十八番（１８話）を投稿しました。未だにこの作品を読んで下さる読者がいることを願って書いた作品です。なお、ヒロインが登場しないのは暗黙の了解（？）です。

では、開演です。

第１８話　天使の発表会

―新暦７５年１０月１０日・第１２管理世界・聖王中央教堂―

切り裂いたと、確かにそう思った。

自分の魔法は、「ガンダム」を確かに切り裂いたはずだった。

なのに……何故……！

目の前に悠然と、私を天上（うえ）から見下ろしている「ガンダム」がいる！？

「は……ぁあああああ！？」

落ち着け！　まずは現状を確認しろ！　今は目の前の「ガンダム」よりも周囲の状況を確認する方が重要だ！

……よし、まず自分の体を確認しよう。右手、ある。左手、ある。右足、ある。左足、ある。うん、何とか四肢はあるな。

次は胴体だ。右脇腹、左脇腹は無事。胸部もとりあえず外傷なし。

そういえば、顔はどうだろう？　右目は？　左目は？　鼻は？　口は？　耳は？

……よかった。全くの無傷ではないが、とりあえず無事だ。なら、そろそろ立ち上がろう。

ガシャン

……？　何の音だ？　今ちょうど私の足元から聞こえたが……ん？　何だこれは？　デバイス？　だが、誰の……？

……あ。

……ああ！

……あああああああああああ！！

「トランザム！」

『ＴＲＡＮＳ－ＡＭ』

それは天使が振るう圧倒的な暴力。幾多のオーバーＳランク魔導師を屠（ほふ）った血塗（ちまみ）れの兇刃（きょうじん）。オリジナルＧＮドライヴを持つ「ガンダム」にのみ許されし権限。

『ケルディム！』
『フォロスクリーン展開、敵魔導師捕捉。敵魔導師の動きを高速演算処理、予測完了』

その輝きは血よりなお紅く、その動きは目で捉える事を許さず、その強さは何人たりとも至らせない。

『ケルディム、ロックオン・ストラトス、狙い撃つぜ！』
『ネライウツ、ネライウツ』

それがトランザム。「ガンダム」の真の力にして「ＣＢ」の切り札（カード）の一つ。そして時空管理局にとっては悪夢を生誕させる忌むべき力。

ケルディムが紅く、紅く、どこまでも紅く輝く。右手にあったＧＮビームライフル？を右肩に戻し、新たに両手でＧＮピストル？を握り、それを魔法を発動させようとしているシャッハに向け、その魔法に紅い残像を斬らせながらシャッハの真横に体を半回転させて回る。

シャッハはその紅い残像を斬って意識を僅かに緩めていた。恐らく本体を斬ったと思ったのだろう。だが、実際には掠（かす）ってもいなかったのだ。

そしてケルディムはその意識を緩めている間に二挺（ちょう）のピストルでシャッハの両手にあるデバイスを撃つ。撃つ！　撃つ！！　何度も何度も何度も。それでデバイスに罅（ひび）が入ろうとも、また砕け

散ろうとも、ケルディムはその引き金を引き続けた。

優に百発は超える光弾を撃ち尽くし、シャッハもデバイスを破壊された衝撃で地面にひれ伏した頃になって、漸くケルディムはその引き金から人差し指を離した。

それと同時に紅に染まっていたＧＮ粒子も元の蒼碧色に戻り、その場には久方ぶりの静寂が訪れる。瓦礫の崩れる音も、炎が燃え盛る音も聞こえない、完全に近い静寂、いや静謐（せいひつ）が。

『これでフェイズ４は終了か、ハロ？』

『ワカラナイ、ワカラナイ』

『ミス・スメラギの作戦プランだとこのぐらいでいいと思うんだが』

『……ヴェーダより通達。ケルディムがフェイズ４を完了したと見なす。よって速やかにラグランジュ５に帰投せよとのこと』

『ゲッ、よりにもよってそこかよ！？　あそこは本当に必要最低限の設備しかねえし汚ねぇし狭いしの三重苦があるっていうのによー！？』

『……文句を言うな。これはヴェーダからの通達、引いては作戦予報士とイオリア・シュヘンベルグの命令なのだから』

『……はぁ、分かってるさ、そのぐらいはな』

そして、ケルディムはその場からゆっくりと去っていく。その顔に絶望を張り付けたシャッハを残し、数多の死と破壊をこの地に齎して、それでも悠然と空（天上）に浮かびながら。

『災難だったねロックオン』

黒銀のガラッゾが話しかける。楽しそうに、何かを求めるように。

『あぁ、全くだぜリジェネ。よりにもよってあんな相性が悪いのと戦う羽目になるなんてな』

緑のケルディムが答える。安心して、達成感を味わうように。

『報告ではトランザムを使ったと聞いたけど本当かい？　相手は確かＡＡＡランクにしか過ぎない魔導師だろ？』

『あそこでトランザムを使わなかったら、多分オレの方がやられていたんだからしょうがねぇだろ！？』

『でも、無事でよかったライル』

水色のガッデスが言う。不安げに、心配そうに。

『アニュー、まだ作戦中だぞ？　何度言えば……』

『ふふっ、ごめんなさい』

それぞれがその顔に野望と安堵と疑念を張り付けながら、しかし互いに気付かずに、彼らはこの世界から去っていった。

―同年同日・第９無人世界・グリューエン―

グリューエンに勤務している魔導師達はある情報を聞き、今まで味わったことがないほどの怖気（おぞけ）を感じていた。

その情報は「ＣＢ」の襲撃から約４分経った頃に、突如緊急用通信機器を用いられてグリューエン内外にいる魔導師全てに伝えられた。だが、そのあまりにも在り得てはならない内容に、それを聞いた魔導師の殆どがその真偽を聞き返した。その情報は確定情報だったのにも関わらずにだ。

ジェイル・スカリエッティが新型の「ガンダム」と共に脱獄している。

それがその情報の内容。そして在り得てはならなかったモノ。管理局にとっては正に悪夢以外の何物でもない、最悪に最悪を二乗したような情報。

これが示すのは「ＣＢ」とジェイル・スカリエッティが結託している可能性があるということ。かつて世界清浄を滅ぼした最凶の組織とかつて管理局をあと一歩まで追い詰めた最狂の科学者。仮にこの二つが本当に結託したとすれば、この世界で一体どれだけの犠牲者が生まれる事か。

それを魔導師達は皆一様に想像し、そしてその背筋に氷柱（つらら）を入れられたような悪寒に襲われた。

その想像すら許してはならない事態は、決して起こしてはならない。それだけは防がなくてはならない。この世界を護る者として、その最悪の事態だけは避けなければならない。

それが心情。それが本音。それが建前。それが虚言。それが思考。それが本能。

様々な思いや衝動がその一瞬で複雑に交差し螺旋（らせん）を描く。だが、現実はその螺旋を描かせる暇を与えず、各々に考える時間もやらず、ただ無情に過ぎ去っていった。

そこに残酷な現実だけを残して。

かつて「ガンダム」キュリオスは速さでは管理局随一と言われた「金色の閃光」と一度だけ戦闘した事がある。

その時誰もがこう思った。確かに管理局では最速である「金色の閃光」も、最速の「ガンダム」であるキュリオスには敵わないと。

だが、結果は予想に反し「金色の閃光」の圧勝で終わった。

その原因はやはり速さであった。キュリオスは確かに速い。控え目に言ってもとてつもなく速い。それこそ並みの魔導師なら目で追えない速さだ。

しかし、「金色の閃光」はその更なる高みにいた。ただそれだけの話であり、ただそれだけの事であった。

この時最もその事実を許容できなかったのがキュリオス、現在はアリオスと名付けられた「ガンダム」である。

もし自分がもっと速ければ4年前のような醜態を晒さずに済んだ。もっと自分が速ければ負ける事はなかった。もっと自分が速ければもっともっと強くなっていた。その思いばかりをそれはずっとずっと、心に秘めていた。

そして第4世代「ガンダム」製造計画でそれはイアン・ヴァスティにたった一つの提案を申し出た。もはやそれ以外には何もいらないとばかりに。まるで妄執に囚われたかのように。

『何者にも勝る速さを。それこそあの「金色の閃光」に後背を拝ませるような速さを、新たな翼を、私にください』

それはその「ガンダム」が抱きしたった一つの願い。かつて犯した自らの至らなさを返上する為の手段。そして彼のマイスターと再び共に戦うのに必要な性能であった。

「な、なんだこの速さは！？」「目で捉えられねぇ、速すぎる！？」「あれも「ガンダム」なのか！？」「ティターンはどうした！？此方に応援を送るのではなかったのか！？」「クソッ！　当たんねぇええ！」「当たれ当たれ当たれ当たれー！」「この速度は一体！？」「ヤバい、逃げられるぞ！」

閃光、正に閃光。そんな陳腐（ちんぷ）な言葉でしかそれを表現することができないという異常な速さ。それをアリオスは体現させていた。

あらゆる攻撃はアリオスに当たらず、どんなに速い魔導師もアリオスの後背を拝むことしかできず、全ての障害もその速度で抜けられる。

それはまさに究極の一。速度を、速さだけを求めたモノにしか与えられない超絶的な速度。人が到達する事を断念せざるをえない、人が到達してはならない速さ。

『アリオス、あとどのくらい！？』

『残り３０、２０、１０、……０！　マイスター、グリューエンから脱出します！』

その速さでアリオスはデヴァインとスカリエッティを引き連れな

がらグリューエンの外部に出ると、そこには今にも消えそうなＧＮフィールドを展開したガラッゾが、必死に敵の攻撃から侵入及び脱出口を守っていた。

『ブリング！』

『……その声、アレルヤ・ハプティズムか！』

そしてアリオスがグリューエンから出ていくと同時にデヴァインは三度レグナントになり、スカリエッティをその手に抱えてこの宙域から離脱していった。

『おや？　仲間を置き去りにしてもいいのかね？』

『……心配はいらない。あの３人ならばこの程度の戦力で負けるはずがないのだから』

『随分な自信だけど、その根拠はあるのかい？』

『……向こうの戦力はＡＡＡランク魔導師が１人にＡＡランク魔導師が２人、Ａランク魔導師が４人。対して此方の戦力はオーバーＳランクが３人』

『……』

『……この戦力差で負ける事は、何があっても有り得ない』

それを見送ったブリング、リボンズ、アレルヤはこのフェイズ３のもう一つの目的を果たす為に行動を開始した。

フェイズ３――アレルヤ・ハプティズムの奪還及びジェイル・スカリエッティの勧誘。そしてそのもう一つの目的は、グリューエンの完全破壊及びその宙域にいる魔導師を出来得る限り抹殺（まっさつ）する事である。

アリオスはまずそのスピードを持って魔導師達の真ん中に突っ込み、左腕に収納されているＧＮサブマシンガンを乱射した。そしてその後を追うようにガラッゾからＧＮバルカンが放たれた。

アリオスの牽制に魔導師達は分散を余儀なくされ、そこを突くようにガラッゾからＧＮバルカンが放たれた為、魔導師達の幾人かはガラッゾに意識を集中させてしまった。まさかそれこそが狙いであったとも思わずに。

『もらった！』

「し、しまっ……！」

そこをすかさずアリオスが右手に持ったＧＮビームサーベルでＡＡランク魔導師をデバイスごと両断すると、その体に魔導師から吹き出る血が付くよりも速く、もう一人のＡＡランク魔導師に向かっていった。そして今度はＧＮビームサーベルを持ったままの右手でＧＮサブマシンガンを連射し、魔導師がそれをシールドで防いでいると、ブリングがその指に五つのＧＮビームサーベルを発生させ、それでその魔導師を後ろから真っ二つにした。

その魔導師は恐らく最後まで自分が何時斬られたのか分からなかったであろう。本当に一瞬で斬られたのだから。

「この……悪鬼どもがぁあー！」

そしてティターン隊隊長のＡＡＡランク魔導師が絶叫する。その目に部下を殺された悲しみと憎悪を宿しながら、それでも殺してやると目で訴えて。

『忘れられては困るんだけど』

『私達の存在を』

しかし、彼は失念していた。敵は二機だけでないということを。

『ＧＮメガランチャーチャージ完了。いつでも撃てますライセンサー』

『ならこれで終わりにしよう。この任務という名の演劇を。ＧＮメガランチャー、圧縮粒子解放！』

「なっ……」

その橙色の業火は一瞬でＡＡＡランク魔導師の張った防御魔法ごと魔導師を呑みこみ、そのままグリューエンへと突き刺さった。それも最初の一撃で穴ができていた箇所へと。

そしてその一撃はグリューエンの動力部まで及び、それを完全に蹂躙（じゅうりん）し尽くした。

「ば、馬鹿な！　たった、たった４つの敵にこのティターンの魔導師達が全員殺され、さらにグリューエンが破壊されたなど、そんなことが……そんなことが……！」

信じられない。いや、信じたくない。それがＬ級艦船第６番艦「ティターン」に乗員する局員達の総意であった。ＡＡＡランク魔導師と総勢４０名にも及ぶ魔導師達を保有していたティターンの戦力は、今や船体の周囲に最低限の防御として展開していたＢランク魔導師の３人しかおらず、それ以外の魔導師達は皆全て「ＣＢ」によって殺されていた。

「ぐ、グリューエンが……」

そんな彼らの目の前で軌道拘置所「グリューエン」は音を出さず、静かに所々から炎を噴出させ、最後に大きく爆発し、その姿を幾千ものデブリへと変えた。その爆発は動力部を破壊した事によって起こされたものであったが、そこにいる者達はそれに気付く暇（いとま）さえ与えられなかった。

「「「……」」」

何故なら彼らの目の前に橙色の「ガンダム」が、４年前に「羽付き」と呼ばれていた「ガンダム」が屹然（きつぜん）と浮いていたからである。

『恨んでくれても構わない』
『私達は恨まれる事には慣れている。私達は稀代の殺人者だから』

そして「羽付き」はその手に持つＧＮツインビームライフルの銃口をティターンのブリッジに向けた。

『復讐しに来ても構わない』
『私達は復讐される事には慣れている。私達は稀代の殺人者だから』

それを見た局員達は慌ててブリッジから逃げだそうとする。そしてそれを見て、これから幾人もの人々を殺す罪の意識に押し潰されそうになりながらも、アレルヤはその引き金を引いた。

『それでも僕らは飛び続ける。その胸に誓いを、約束を、思いを抱いて。その背中に罪を、業を、悪意を背負って』
『それが「ＣＢ」。それが「ガンダム」。それがガンダムマイスター』

ＧＮツインビームライフルから光弾が何十発も吐き出される。その光弾一発で何十人もの人を殺しながら、それでも殺し足りないとばかりに。人をただの肉塊に変え、機械をガラクタに変え、そして己を殺人者に変えながら、アレルヤはただただその引き金を引き続けた。

『それが稀代の殺人者にしてガンダムマイスターの一人、アレルヤ・ハプティズムだ』
『それが稀代の殺人者にして「ガンダム」が一機、アリオス「ガンダム」だ』

やがてティターンはその大きな船体をさらに大きな炎で包まれた。

だがそれはブリッジをこれでもかというほど破壊され、生きている者が一人もいなくなった後の事である。その頃にはその宙域で動いているモノは何一つなかった。

『『『フェイズ3、完了』』』

―同年同日・？？？―

そこは仄暗い部屋だった。明かりらしい灯りはモニターやパソコンが発する光しかなく、それ以外の全ては星がない夜空のような暗闇によって閉ざされ、見ようによっては世界の奥底を連想させる、そんな部屋。

『フェイズ1、及びフェイズ3、フェイズ4は完了した。残るはフェイズ2とフェイズ5のみだが……』

そしてその部屋の中央にはモノクルを掛けた老人が椅子に座していた。そしてその老人はモニターの一つに『ヴェーダ』から送られてきたフェイズ3とフェイズ4完了の報告を見て、しかしその顔をさらに歪ませた。

『そのいずれもが不確定要素が高いものです、イオリアさん』

イオリアと呼ばれた老人はその報告ではなく、ある人物を映すもう一つのモニターにそう言われ、そちらにゆっくりと振り向いた。

『分かっているよスメラギ君。この二つのフェイズこそが最も難航するであろうことはな』

その台詞には苦々しい何かが、まるで引き抜きたくても引き抜けない棘（とげ）が刺さっているかのようなニュアンスが込められていたが、それにスメラギと呼ばれた者は気付かぬ振りをした。

何故なら相手はこの「ＣＢ」の創設者にして『計画』の根底を成す法典・『ヴェーダ』を管理する、「ＣＢ」の中で最も重要度の高い人物だったからだ。

もしその苦々しい物を指摘して、それで機嫌を損ねたイオリアが原因で作戦が失敗に終わるわけにはいかないのだ。

最も、イオリア・シュヘンベルグはそのような人物では決してなかったが、それはモニターでしか会った事のないスメラギには分からないことであった。

『しかし、どうするのです？　もしその二つの内片方でも失敗すれば、それはこの「ファースト・アタック」の効果を半減させてしまうんですよ？』

『何、心配はいらん。あそこにいる「ガンダム」なら大丈夫であろう』

スメラギのその懸念にイオリアは表情を変えぬままそう自信満々

に言い切った。

『しかしですね。相手は仮にもあの管理局最強と謳(うた)われた事のある「管理局歴戦の勇士」と最強最悪の砲撃(火力)を持つ「管理局の白い悪魔」ですよ？』

『君はまさか「ガンダム」が負けるとも？』

イオリアがここまで自信満々に言いきるのには当然ながら理由がある。その理由とはフェイズ2とフェイズ5に当てた「ガンダム」はその両方ともがＳＳ－ランクという、管理局でも八神はやて以外誰も到達していないオーバーＳＳランクを誇っているからだった。しかし、それでもスメラギは自身の懸念を、その「ガンダム」の強さを知って尚食い下がって伝えた。

『その可能性は有り得ます。確かにギル・グレアムだけならアルケ－で十分勝算がありますが、、高町なのははセラヴィーを持ってしても勝てるかどうかが五分五分です。幾ら聖王と戦ったダメージがあると言っても油断できない相手です』

それがスメラギの懸念。高町なのはなどという時空管理局史上最強の砲撃手を相手にするが故の懸念。データによれば彼女は『ベルカ最強の二本柱(にほんばしら)』その両方と交戦した事があり、僅か9歳で夜天(闇)の書と渡り合う事を可能にし、その十年後にはハンデを背負いながら聖王を真正面から叩き潰すなどという人間離れした所業を成し遂げた、異常極まる戦闘能力を持つオーバーＳランク魔導師とある。それはスメラギがそのデータを見て鳥肌を立てたほどだ。

『スメラギ君、もう一度だけ言おう。心配はいらんと』

しかし、イオリアもそれを知って尚心配はいらないと言いきった。

そしてスメラギはそのイオリアの自信に疑問を抱いた。何故この人はこれほどまでに自信を持てるのかと。

『……何故ですか？』

『策はもう講じてあるからだ』

しかしその答えはあまりにも要領を得なかった。少なくても戦術予報士たる自分には何も伝えられていない策だ。

『私は聞いてませんが？』

『うむ、それは謝罪しよう。しかし、この策は彼との契約だったのだ。だからあまり喋るのも悪いと思ってな』

『彼？　……まさか、「アーカイブ」の事ですか？』

イオリアが彼と称した者はイオリアの数少ない友人であり、その中でも契約という言葉に該当する人物がたった一人だけいた。その者が何者なのか、イオリア以外誰も知らない、管理局の裏の裏まで知り尽くしていると言われ、あの『ヴェーダ』と同等すら言われている人物。

それがコードネーム「アーカイブ」。別名「全てを識者（しるもの）」。イオリア以外に『計画』の全貌を知っているかもしれない唯一人（ただひとり）の人物。

『左様』

『……分かりました。それなら納得しますが、これからはそういった事もきちんと言って下さい。それで作戦が失敗したら冗談にもならないので』

『分かった。次からはきちんとスメラギ君に伝えよう』

そのような人物が講じる策ならば、少なくても此方の不利益にな

るようなことはしないはず。スメラギは瞬時にそう考えると、素直に引き下がった。これ以上の問答は本当に不毛な議論にしかならないと判断したからだ。

『では、これで失礼します』

『うむ』

そう言ってスメラギがモニターから消えるのを見てからイオリアは杖を使いながら立ち上がり、その部屋から出て行った。

「さて、君の出番だアップル。これから君は第９７管理外世界の日本というところに向かう事になるが、それでいいかね？」

イオリアがその部屋を出てからすぐに呼んだモノはイオリアのすぐ近くに居た。最初からそこにいたのか、もしくは一瞬でそこに現れたのか、イオリアには判別できなかったが。

「それが我がマスターの望みならば、我はそれを叶えるだけ」

重低音の声がイオリアのその問いに答える。それしかないとでも言わんばかりに、我がマスターはお前では無いと言わんばかりに。

「ふむ。では、早速向かってくれ」

しかし、イオリアにはそれで充分であった。その答えを聞けるだけでも僥倖（ぎょうこう）であったのだから。

「分かった。それが我がマスター、コードネーム「アーカイブ」の

望みなら、我はそれに従うのみ」

そしてイオリアよりも背が高く、十代後半の青年の体格で短い黒髪と深い蒼色の眼を持ち、頬に赤いラインが入り額に蒼い結晶が付いた仮面を被った「アップル」と呼ばれたモノは、幾つもの白い魔法陣を発動させると、その場から消えるように去っていった。

「「無限の欲望」に「無限の才悪」、そして「無限の……」。もしこの3つが揃えば、『計画』を第3段階に移行することができる。だが、今はまだ第1段階の半ばだ。油断はできんな……」

そう言ってイオリアは仄暗い部屋に戻ると、モニターから送られてくる報告に再び目を通した。

―同年10月9日・ミッドチルダ上空・アースラ内―

「ティアナ、見つかった？」
「いえ、見つかりません」
「スバル、キャロ、エリオは？」
「「「見つかりません」」」
「そう……」

私はその報告に落胆を感じながら、再び手元に散乱している資料に目を通す作業に戻った。

「でも、イオリア・シュヘンベルグって名前、フェイト隊長は聞いた事があるんですか？」
「……確かどこかの世界の発明王でかなりの富豪だったのはどこかで見たことがあったんだけど……」

今私達は「CB」の創設者と目されるイオリア・シュヘンベルグについて調べていた。だが、そもそも私は彼をどこかで見た事があるのだ。ただそれを思い出せないのだが。

「うーん……この世界でもないしこの世界でもない。あ、もしかしたらこれ？　いやでもイオリア・シュヘンベルグの名前はないし……」

そんなこんなで私とティアナ、スバル、キャロ、エリオで探して既に2時間は経ったが、手掛かりらしい手がかりは何も見つからなかった。

「……フェイト隊長～」
「「……フェイトさ～ん」」

そんな中でこの3人が音を上げるのは仕方がないことであった。何かが見つかればそれがやる気にも繋がるが、今のように何も見つからないと、ただただ疲労感だけが積もっていく。ましてやこのような作業に向いていない3人には尚更きつかったのだろう。

「……フェイト隊長。正直言って私はともかくこの3人には休憩を与えた方がよろしいかと……」
「……そうだね。じゃあ、とりあえず休憩にしようか？」
「やったー！」
「「ふう」」
「スバル。あんただけは元気よさそうだから続けていたら？」
「そ、そんなあ～。ティア～、勘弁して～」
「わ、分かった、分かったから胸を揉むのはやめなさい！」

スバルとティアナがじゃれているのを暖かい目線で見ながら私は5人分のジュースを買ってきた。それに恐縮している4人だったが、このぐらいのお礼はしてあげたい。

「……ふう」

自分で買ってきたジュースを飲んで一息つく。作業をしていた時は何も飲まなかったから実は喉がカラカラだったのだ。

「……？」

ふと、気が緩んでいる時に目についた資料があった。それは第97管理外世界の資料で、それを何気なく手にとって眺めていると、

「……ぶっ！？」

そこに記された名前に驚き、口からジュースを噴き出してしまった。

「ゲホッ、ゲホッ！？」

「ど、どうしたんですかフェイトさん！？」

それを見たキャロが私を心配して声をかけてきたが、それすら耳に入らない程、私はその資料に載っていた名前に驚いていた。

（ど、どうして！？　彼と会ったのは確かなのはが大怪我をした第７９管理外世界だったはず！？　なのに、何故彼の名前がイオリア・シュヘンベルグと一緒に第９７管理外世界の資料に載っているの！？）

その資料にはイオリア・シュヘンベルグについて書かれていた。彼は第９７管理外世界では殆ど知られていないが、その世界の科学者達の間では発明王として畏怖（いふ）され、さらに知られざる大富豪でもあるとされている。だが、フェイトが真に驚いたのは、イオリア・シュヘンベルグという名前の他に載っている、彼の養子として中東から引き取られた人物の名前であった。

「ソラン・Ｉ（イブラヒム）・シュヘンベルグ……」

その名前を何度も何度も復唱しながら、私はどこかで運命という名の歯車が静かに回り始めた音を聞いた気がした。

「どうしてあなたがイオリアの息子として資料に載っているの？

ソラン……答えてよ、ねえ……ソラン……」

そして彼と出会った8年前の出来事を思い出しながら、私は知らず泣いていた。ぽろぽろ、ぽろぽろと、大粒の涙を流して。

第１８話　天使の発表会（後書き）

正直ここまでオリジナル設定を加えてもよかったのか自問自答しています。今回は『ベルカ最強の二本柱』とか『時空管理局史上最強の砲撃手』など、かなり賛否両論、もしくは議論を醸すような設定を出しすぎた感じがします。もしその事で作者に何か言いたい、もしくは指摘したいと言う方がおりましたら、感想にてお願いします。

はやてがメインの話が終わって、まさかの二話連続不登場。これに一番驚いたのは間違いなく作者です。このような駄作を読んで下さった皆様に感謝を。

最後に。

ヒロインは　はやて　です（たぶん……）。

第１９話　殺意と悪意が織りなすカンタータ（前書き）

この小説は私の処女作です。なので、文が拙く、誤字も多々あると思いますので、そこを指摘、アドバイスしてくださると幸いです。

それと、この小説は人が沢山死にます。メインキャラも原作キャラも死にます。更に結構グロい表現もする予定なので、そういったものが嫌いな方、もしくは受け付けない人は見ない方がよろしいかと……。

それと、いくつか男女カップリングができる……かもしれないので、「～は俺の嫁！」という方も見ない方がよろしいかもしれません。

もし他にも注意した方がよろしい点がございましたら、遠慮なく作者に申しつけて下さい。

では、開演です。

第１９話　殺意と悪意が織りなすカンタータ

―新暦７０年１２月３０日・ミッドチルダ北部―

ミッドチルダ北部の中で最も過酷で寒いといわれる場所に、彼女は任務できていた。

「……寒い」

そこでは目の前が一メートルも見えない猛吹雪が吹き荒れ、肌を刺すような冷たすぎる烈風が襲ってきた。その寒さはいくらバリアジャケットを着ているとはいえ、完全に防げるものではなかった。

「……でも」

しかし、彼女ははっきりと言った。

「……今は……暖かい」

と。

「……これが温もり。人の、家族の……」

何故なら横になっている彼女の両端には十代の青年と女性が彼女を抱くように密着していて、それが彼女の体と心を暖かくしていたのだ。

「……ずっとこれを感じたい。ずっと、ずっと……」

そして彼女の瞼は睡魔に惹かれて重くなっていく。その視界の端に青年と女性を収めながら、静かに眠っていく。

「……暖かいよ、クレス、オルト……」

それは今から5年前の思い出。彼女がまだAランク魔導師だったころの思い出。そして9歳だった彼女が初めて家族の温もりを感じた、大切な思い出だった。

―新暦75年10月10日・第97管理外世界・イギリス―

炎と死体と枯れ木で形成された森の中で、アルケ―とネ―ナは同じタイミングで絶叫した。

「お前は、お前はあああ!」

『何故!? どうして!? どうやって!?』

彼らは目の前の現実を信じられない思いで見ていた。目の前にいるあの少女は確かに自分があの時殺したはずの少女だ。なのに、何故生きている?

「……ヴェノム、カートリッジロード」
『イエス、サー』

彼らのその狼狽を感じた彼女は、しかし隙を欠片も見せず、装飾らしい装飾が全くない、質実剛健を絵に描いたような短剣型アームドデバイス「ヴェノム」にカートリッジをロードさせると、それをアルケ―に突きつけた。

「君は……何者だ？」

それに困惑したのは何もアルケ―だけではない。先程までアルケ―と戦っていたグレアムもまた目の前の闖入者に対し困惑を隠せなかった。だが、その質問はすぐに氷解することとなる。

「……」
『サー』

そして彼女は自分の名前を、少し先の未来で確かに名乗るはずであった名前を、静かに、感情の昂ぶりを抑えながら、アルケ―に名乗った。

「……ケルベロス隊、ヒュドラ＝T＝H、行きます」
『イエス、サー』

その青い双眸に復讐という名の狂気を宿したまま、彼女、ヒュドラ＝T＝Hはカートリッジシステムの為に異様に柄が長い構造となったヴェノムを両手で構え、アルケ―へと真っ直ぐに駆けた。

「なんて惨(むご)いことを……」
「こ、これは……」
「……」

アリアは目の前の光景をそう評じ、ロッテはそれから目を逸らし、十歳の少年はそのあまりの光景に言葉を無くしていた。

きゃあああ、ぎゃあああ、おぎゃあああ、わあああ。

あちこちから聞こえる沢山の声、そのいずれもが絶叫や悲鳴。

ガラガラ、ドンドンドン、パンパンパン、ガンガンガン。

あちこちから聞こえる沢山の音、そのいずれもが崩壊や銃声。

それがイギリスの首都・ロンドンの現状。霧の都から死の都へとその様相を変えた、地獄に最も近くなった都市。

その都市を見た彼らは、足元に注意しながら、現状を、もしくはどうしてこうなったのかを確認する為に、その都市へと降りて行った。

「一体どうしてこんな……ッ！？」
「あ、アリア！」

アリアがそれに気付けたのは、本当に偶然だった。アリアが周囲の人達に事情を聞こうとした瞬間、ふと前方を見ると、遠くで何かが光った。それを彼女はその目で偶然捉えただけだった。

しかし、それでも九死に一生を得たのには変わらない。彼女がそれに気付き、咄嗟（とっさ）にありったけの魔力を込めたシールドを張らなければ、今頃全員が消滅していたのだから。

「クゥウウウ！」

耐える、耐える、耐える。必死に、必死に、必死に。橙色の極光からロッテを、少年を護る為に。何時終わるともしれないその苦行に、必死に耐える。

数秒か、あるいは数十秒か。アリアにとってあまりにも長かったその時間は、しかし、唐突に終わった。それに疲労と安堵からなる溜息を吐き、それと同時に大量の血も吐いた。

「「「……え？」」」

そこに居た全員が、いや、ただ一機を除いた人達全員が唖然とした。アリアから生えた、真っ赤に染まった機械的な左腕を見て。

「じゃあね、リーゼアリアさん」
『グッバイ、シーユー、ＮＯアゲイン』

「……え？」

その声はアリアの真後ろから、ちょうど腕が生えている付け根辺りから聞こえた。どこか楽しそうに、けれども冷たい調べを奏でながら発せられた、若い女性とデバイスらしき声。

「……え？　何がお」ドッ！

その言葉が言い終わらない内に、アリアの体から、正確にはお腹に相当する部位に、新たな腕、今度は右腕が生えてきた。その指に５つの光る線を生やした腕が。

「……え？　アリ」ブシャアアア！！

そしてロッテが声をかけ終わらない内に、アリアはその機械的な両腕で、左肩から右腰を境に、

真っ二つに引き裂かれた。

「「「……」」」

それを見たロッテや少年、周囲の人々は、体を動かすことができない。何が起きたのか、正確に理解できない。目の前にあるのは、二つになったアリアだけ……

「……ああ」

「次はあなたよ、リーゼロッテさん？」

目の前で全身に赤黒い血を浴びた、グレー基調のガラッゾが、ヒリング・ケアが、その両指に計１０本ものＧＮビームサーベルを発生させ、それを５本づつまとめた巨大なビームサーベルを形成する。それを構えたガラッゾを見て、ロッテはその心が黒く、暗く、重くなっていくのを感じた。

「あ……ああ……ぁぁぁあああああああああああああ！！」

雄叫び。次いで飛翔。それがロッテの取った行動。目の前の、自分の片割れを殺した相手を殺す為に……殺す、為に？

「あ、あああああ、ぁ……」

停止。停止。停止。それはいけない、それはしてはならない、それをしたら戻れない。それをしてもアリアは、父様は喜ばない。だから、しちゃいけない。

「……！　ろ、ロッテさん、前！」

「ッ！」

ロッテがその行為に踏み止まっていると、その少年の声に焦りが含まれているのを聞き、それにしたがって前を見てみると、すぐそこまでガラッゾが迫っていた。そしてロッテの逡巡（しゅんじゅん）などお構いなしに、その両手にある巨大な二振りの光る大剣を左右に広げると、それでロッテを真っ二つするべく、腕を交差させるように、その二つの大剣を水平に振るった。

ロッテはそれをしゃがむことでなんとか紙一重の差で避ける。だ

が、首に剣の風圧を感じ、それに冷や汗を流す暇すら無く、今度は腕を交差したまま振り下ろされるビームサーベル。それを今度はしゃがんだままの体勢で、後ろに飛んで避ける。

それによってガラッゾとロッテの間にできた、数メートルの間合い。それはロッテが一息で詰めるには少し長く、ガラッゾが詰めると少しだけ短い、微妙な距離。

「……」
「……」

それを両者とも無言で、自分に有利な間合いにするべく、一歩、また一歩と距離を長くしては短くする。だが、その均衡はアウトレンジから放たれた一筋の極光で崩される。

「一体どこから撃ってんのよ！？」

ロッテが文句を言うのも無理はない。何故なら、彼女にはその橙色の極光を放っているであろう「ガンダム」がどこにいるのか、全く分からないからだ。

「さっすがリヴァイヴ！　やっるー！」
『さすがです』

そのロッテの混乱した声を勝機と見たガラッゾが迫る、迫る、迫る！　右腕を懐に引き、それでロッテを突き刺す為に。

「……はっ！」
「ぎゃう！？」

しかし、それはロッテに顔を蹴られることで防がれた。しかも、それで態勢を崩したガラッゾの懐に入り込み、そのガラ空きな胴体に何発もの拳を突き入れるというおまけ付きで。

「硬ッ！」

「効かないわよ、そんな魔力も大して込められていない攻撃はね！」

だが、ロッテはすでに魔力をほぼ使い果たした状態だったので、その拳にほんの僅かな魔力を込めるのが限界だっだ。そしてその状態ではいくら無防備な腹にパンチを入れても、ガラッゾの装甲を突き破り、ダメージを与えることはできない。つまり、今のロッテでは「ガンダム」には勝てない。

だが、ロッテがその考えに辿り着いた時、彼女はもう一つの考えにも辿り着いた。

（今の私じゃとてもじゃないけど、「ガンダム」には勝てない！そして、私が少年を抱いて逃げる隙を与えてくれるとも思えない。なら……）

ガラッゾが自分の懐に居るロッテに、指から生えた大きなビームサーベルを突き下ろすが、ロッテはそれを最後の魔力を振り絞って放った蹴りで、ガラッゾを数十メートル後退させることで、何とか距離を取る。そしてその間合いが詰まらない内に、ロッテは少年を抱いて森の中に突っ込んだ。

―同年同日・同世界・日本―

千葉の海岸線には現在鈍色に光っている箱状の物体が、1キロという長距離にわたって幾重に、何両も横一列で並んでいた。それらは海岸線を眺めながらドライブする為に造られた道路をキャタピラで走破しながら、次々と列を作っていく。

そうして一時間は経った時、突如鈍色の箱状の物体は、二段積み重ねられた箱の上方に付いてある細長い筒を、海がある方角へと向けた。そしてガコン、ガコンと何かを装填する音が辺り一面に響き渡り、一瞬の静寂が辺りを覆う。

「ってぇーーー！」

そしてその唐突な掛け声により、鈍い音を出しながら、箱状の物体――戦車――の砲台から砲弾が発射された。それも何十両からなる部隊から連続で。

「第二波、てぇーーー！」

更なる掛け声と共に、今度は先ほど砲弾を放った戦車とは別の戦車から、幾十、幾百もの砲弾が雨のように放たれる。

それによって生じた轟音と衝撃に、アスファルトは無数にも砕け、動物達は一斉に逃げ去り、砲弾が着弾した箇所には数メートル、も

しくは数十メートルの水柱が立った。

しかし、

「第三波、ようーーーい！」

ガコン、ガコン、ガコン、ガコン、……

その惨状を生み出した者達は、決して1ミリたりとも気を緩めてはいなかった。むしろ引き締まったほどである。その頬を引き攣らせながら、目の前の現実から目を逸らそうとしながらも、彼らは決してそれらから逃げる事無く、逆に立ち向かうぐらいの気概で目の前に意識を集中させた。

「ってぇ」

『そう何度も攻撃を許すわけにはいかない！』

『クアッドキャノン、照射』

だが、目の前にいた敵は優に百は超えようかという戦車隊の総攻撃をまともに喰らって、尚無傷であった。加え、その両肩と両膝に４門あるキャノン砲から一斉に放たれた桃色の極光が戦車部隊を横に薙ぎ払い、その百は超えようかという大部隊の実に３０％を一撃で撃破した。

『セラヴィー！』

『圧縮粒子、解放』

そこに間髪いれず放たれるツインバスターキャノン。その光は砲弾を装填中だった数両の戦車をも焼き払い、その砲弾を誘爆させ、辺り一帯を劫火と黒煙で埋め尽くす。

「かあ、さん……とう、さん……」「あいつがいるのに……ここで死ぬわけに、は……」「は、はは。結局負けんのかよ……」「これが……「ガンダム」の……悪鬼の……力なの、か」「この……テロリストどもが……！」

二撃、いや、二発。セラヴィーはそのたった二発で戦車隊を壊滅させた。そして運よくその攻撃から逃れ、生き残っている者も、辛うじて生きている者の方が圧倒的に多く、すぐに治療を受けさせなければ死んでしまうような致命傷を大多数が負っていた。

だが、セラヴィーはその死屍累々を浮みわけ、さらに進んでいく。

『この……化物がーーー！』『ミサイル、いけーーー！』『クソッ、レーダーが使えないから有視界戦闘しかできないじゃないか！？』『こんな速度で飛ぶことになるなんてな……』『この世界の敵め！』『戦車隊の仇はとってやるぞ！』

そんなセラヴィーの進路を阻むかのように現れた、計１５７機もの戦闘機。それらが皆一斉にセラヴィーに向かってミサイルを発射する。

そのミサイルはセラヴィーや周囲の森林河川に直撃し、辺りに爆音を轟かせ、その周辺の地形を変形させる。森は焼き払われ、川の所々にクレーターができ、民家が粉々に吹き飛ばされる。

『やったか!?』『へっ、ざまーねえーな、「ガンダム」さんよー!』『よし、、勝った!』

その光景を見た戦闘機のパイロット全員から漏れる勝利を確信した言葉の数々。だが、彼らは「ガンダム」を、その力をあまりにも知らな過ぎた。

『セラヴィー、ダブルバズーカキャノン!』
『高濃度圧縮粒子充填、充填完了。高濃度圧縮粒子、解放』

セラヴィーはミサイルの一斉射にもGNフィールドを展開した為に無傷であった。そしてミサイルによってできた爆炎の中で両手に持っていたGNバズーカ?を上下に合体させ、GNバズーカ?からダブルバズーカにすると、それを右肩のGNキャノン?に接続させ、ダブルバズーカキャノンを照射した。その光線は太さが二メートルほどもあり、次々と戦闘機を呑み込んみ、溶解させていく。

『こ、このやろう!』『死ね、死ねぇえええ、「ガンダム」ぅうーー!』『お前らさえ来なければ、オレ達は幸せだったのに!』『お前達がいるから、戦争が起きたんだ!』

その間にも戦闘機からミサイルが放たれているが、それはセラヴィーの強固な装甲の前では、いくら直撃させても傷一つ付かずに終わる。それを見た戦闘機のパイロットたちはこのままでは勝てないと悟り、一時撤退をする事にした。しかし、その時彼らは機首を自分達の後ろ、つまりセラヴィーに背中を向けるという愚挙を行ってしまった。

この時もし経験豊富な指揮官、もしくは隊長がいれば、そんな行動を取らなかっただろう。敵に背後を見せる愚かしさを知っている

からだ。

しかし、悲しいかな。この自衛隊では経験豊富な指揮官、隊長、もしくは一般兵など、居るはずがないのだ。何故なら、彼らは一度たりとも本物の実戦というものを経験した事がなく、せいぜい戦場の雰囲気を味わう事しかしてこなかったのだから。

『敵に背後を見せるだと？　正気か？』

『マイスター、資料にもあった通り、彼らはこの平和な国の専守防衛だけをしてきた軍隊、つまり、第二次世界大戦などという６０年前の小規模な戦争以来戦いをしていない、実戦経験ゼロの軍隊なのです』

『しかし、あまりにも愚かな行為だ。万死に値する！』

『最もです、マイスター』

その背に向かって２門のＧＮバズーカ？と４門のＧＮキャノン？から放たれた光線の弾幕が戦闘機へと覆い被さる。そしてその桃色の帳（とばり）に捕まり、戦闘機が数機、いや数十機単位で墜ちていく。

それでも何とかその空域から撤退した９６機の戦闘機は一同に安堵の溜息をつき、すぐにその体を恐怖で硬直させた。

『ば、馬鹿な！？　何故こいつがここにいる！？』『あ、ああ、「ガンダム」……』『もう一機いたなんて、そんな……うそだ……』『こいつはアフガニスタンにいたんじゃなかったのか！？』『……オレは、死ぬのか？』『こんな結末、認めるわけには……！』

それはこの世界でもっとも有名な「ガンダム」。

国連本部を倒壊させ、その圧倒的な暴力でアフガニスタンの、ひいては中東の紛争の一つに武力介入し、それを鎮圧した「ガンダム」。

その世界においては最も多くの人間を殺害し、同時に最も大きな悪意を集めた「ガンダム」。

二本の剣と二つのシールド、そして二個のＧＮドライヴを持つ「ガンダム」。

――その『ＯＯガンダム』が彼らの目の前に屹然（きつぜん）と浮いていた。

「「「……」」」

私達はすずかちゃんの家でテレビに映っている「戦争」という名の虐殺を見ていた。白い大きな「ガンダム」が戦車を、歩兵を、一般人らしき人達を砲撃で薙ぎ払い、青い「ガンダム」が正確な射撃で何機もの戦闘機を撃ち落とし、機銃やミサイルを至近距離で当てようとして接近した戦闘機を一刀の元、斬り落とす。

それは誰がどう見ても虐殺であった。そう、断じて「戦争」でも武力介入でもなかった。

「こ、こんなのって……ないよ……ないわよ……」

アリサちゃんはその声を恐怖と怒りで震わせ、しかし自分にはどうすることもできない無力感を感じ、その悔しさから血が滲むほど強く下唇を噛んだ。

「……ひどい、ひどすぎるわ。自衛隊の方々にだって家族が、命があるのに、どうしてこんなことができるの……？」

すずかちゃんは拳をブルブルと震わせ、必死に命が無くなる悲しさと悲劇が生まれる悲しみに耐えようとしていた。

「……これが「ＣＢ」のすることだったのか。ハッ、何が戦争根絶だ！　こいつらはただ単に人を殺したいだけじゃないのか！！」

お兄ちゃんは目に怒りを灯し、「ＣＢ」を痛烈に批判する。自分に力がないことも怒りを膨れさせる要因のようだ。

「……う、うぅ。こんな事が現実に起こるなんて、なんて悲しい事なの……」

忍さんは俯いて泣く。それを亡くなった自衛隊の方々に捧げるように、それで成仏できるようにと。

「……こんなの、もう戦争じゃないわ。ただの……ただの虐殺よ！」

普段温厚なお母さんも、その語気を荒くしながら目の前の現実を必死に否定する。

「「「……」」」

でも、私とお姉ちゃん、お父さんは、ただただ沈黙していた。

『レイジングハート、どう思う？』

『……恐らく、十中八九その通りだと思われます、マスター』

私のその問いに、レイジングハートは嘘偽りのない事実を答えた。

『だよね。……私がこの世界に休養させられたと同時に武力介入をした「ＣＢ」』

『しかも、近くに次元航行隊がおらず、何の援軍も期待できないこの状況を狙い澄ましたかのように』

『やっぱり、彼らは私達が狙いで……？』

『もし私達を狙っていたとすれば、全ての辻褄（つじつま）が合います。何故マスターが人事部のトップ等という人物から休養を取るように命令されたのか、そして、何故この戦争がないはずの日本に武力介入を行ったのか』

レイジングハートがその推論を、いや事実を述べていく。それに耳を傾けながら、私は自責の念に苛（さいな）まされていた。

『だとすると、この自衛隊の人たちは私達のせいで……』

『いえ、それは違います』

しかし、それは違うとレイジングハートは断言した。その時私はレイジングハートが何故そう言ったのか、とても気になった。長年レイジングハートと共に過ごしてきた私でも、たまに彼女の言う事が分からない時がある。そして、その時は決まって彼女に尋ねるのだ。どうして？　と。

『どうして？』

『何故ならこれは「ＣＢ」によって仕掛けられた、マスターを罠に陥らせるための綿密で精細な計画です。もしこの世界で休養を取らなくても、彼らはまた別の世界でこれと同じ事をしたでしょう』

『……それは……そうかもしれないけど……』

『はっきり言います、マスター』

レイジングハートが一拍を置く。……どうやらこれから言う事に、相応の覚悟が必要みたい。なら、私もそのぐらいの覚悟を持たなきゃ……！

『彼らは、「ＣＢ」はマスターを殺す、もしくは無力化する為にここに武力介入を行っています。それこそ管理局の上層部に食い込んでいる、重要なはずの手駒を危機に晒してまでです。そのぐらいの気概で挑んできている相手を前に、マスターは「そんな事」に思考を囚われたまま勝てると？』

「それは……！」

だけど、レイジングハートが「そんな事」と称した事は、弱冠１９歳の女性である私にとってはあまりにも重すぎる物だ。それこそ一生背負っていったら、その重さで潰れてしまうほどの。

『私はマスターを死なせたくはありません。なので、冷たい言い様かもしれませんが、彼らの事よりもまずは自分の事を心配して下さ

い。お願いします』

「……レイジングハート」

その声に含まれた思いを感じ、私はいつの間にか声を出していた。それで近くにいた皆が此方に振り向いたけど、それでも構わない。だって、こんなに主人思いのデバイスが私を心配し、死ぬかもしれない状況から私を助けようとしているのだから。

そしてその思いに心から感謝しつつも、レイジングハートの話がまだ終わっていなかったので、私は正座を崩さず、真剣にその話に耳を傾けた。

『……私達は遅かれ早かれ、何時かは「CB」と戦うことになります。しかし、今の私達はヴィヴィオを止める為に力を使いすぎて、本来の力を出せない状態です。そして、そんな状態で勝てるほど彼らは甘くありません』

言って、また一拍。

『それこそ4年前、彼らと管理局が戦った時、フェイト・T・ハラオウンが「剣士」と呼ばれた「ガンダム」に万全の状態で挑んで、それでも相打ちに持ち込むのが限界だったほどなのですから』

「……え？　レイジングハート、それはどういう……」

どうしてレイジングハートがそんな事を知って……？

「なのは！」

「！」

しかし、その疑問に答えが返ってくることはなかった。何故ならアリサの呼び声に反応して、なのはがアリサの方に顔を向けると、

『な、なんでしょうか？　「ＣＢ」の彼らが何か旗のような物を掲げています。これは……』

『「高町なのは、お前が現れるまでこの戦争が終わることはない。このまま悪戯に犠牲者を増やすかどうかはお前が決めろ」、と書いてありますね』

『高町なのはとは、一体何者のことなのでしょうか？　そして、彼らとの関係は一体？』

そこにはなのはを誘き寄せる為の狡猾（こうかつ）な罠が、テレビに映されていた。

―同年同日・同世界・イギリス―

重い金属音と軽い金属音がぶつかり合う音が、その周囲一帯で鳴り響く。時に長く、時に短く、時に強く、時に弱く。

「……ハアアア！！」

『このオオオオ！』

それを生み出すは、片や二メートルに達しようかという金属製の異形と、片や小柄で銀髪を翻（ひるがえ）しながら舞う少女の、さながら演劇のような戦い。非常識極まる巨大な大剣と、質実剛健を地に行く短剣がぶつかり合って火花を散らし、鋭くも美しい軌跡で相手の喉笛（のどぶえ）を切り裂こうとする、そんな舞踏のような戦い。

「……ヴェノム！」

『カートリッジロード』

重い音が響く。目の前の敵に死神を喚起（かんき）する為に、暗殺者として敵を殺す為に。

『アルケー！』

『ＧＮバスターソード、ライフヴゥルモード！』

軽い音が響く。目の前の敵を撃ち抜く為に、その命を自らの復讐に捧げる為に。

銀髪の少女が蒼い双眸を夜闇に光らせながら森を駆け、異形へと迫る。それを真っ赤な異形が右手にマウントさせた銃剣で向かえ撃つ。

しかし、当たらない。何発撃っても、銀髪の少女には当たらない。それどころか、短剣を構えたまま、此方との距離を縮めてすらいた。

『マイスターー！』

『分かってるわよ！』

ネーナはそれに焦りを感じながらも、銃剣で赤い光弾を連射する。これ以上近づけさせない為に、接近を許さないように。

だが、黒いローブを纏いし銀髪の暗殺者は、赤い光弾を全て避け、遂にクロスレンジの間合いに入る。そしてその短剣の形をしたデバイスで、アルケーへと斬りかかった。

大剣と短剣がぶつかり合い、周囲に鋼鉄と鋼鉄をぶつけた時にでるような鈍い音が響き渡る。

「……ポイズンナイフ」
『ポイズンナイフ』

そして、金属を溶かすような音も、その鈍い音に混じって聞こえた。

『～～～！』
『マ、マイスターーー！』

よく見てみると、大剣の一ヶ所、短剣と斬り結んだ所が少し溶けていた。ドロドロではないが、トロトロと、ＧＮ粒子で強化されているはずの金属が。

その事実にネーナは戦慄し、アルケーは焦燥感を露わにした。もしこれがＧＮドライヴに当たれば、どうなる事か。そんな危惧を彼らは抱いたのだ。

「……凍てつく風よ、我が敵に悠久の眠りを与え、その体を氷の棺に閉じ込めよ。……息吹け、ホワイトブレス」

『ホワイトブレス』

だが、彼女の攻勢はまだ終わらない。相手を凍らせてから破壊する白い風を吹かす魔法が、ヒュドラが持つ「氷」の魔力変換資質によりその威力を高め、それがアルケ―へと吹雪く。

『こ、これは!?』

『な、何事だ!?』

それは極寒の山地に吹く風のような寒さと、体と心を芯まで凍らせる雪の冷たさを併せ持つ、相手を凍らせるという点では、あのエターナルコフィンに次ぐとされる、対人用凍結魔法の中では最も禁忌に近いとされた魔法。それがアルケ―に吹雪くと、その大剣が、GNドライヴが、全身が、瞬く間に凍ってゆく。

「……もっと息吹かせて、ヴェノム」

『カートリッジロード』

しかし、それにアルケ―が黙っているはずがなかった。彼らはまずその白い風から逃げるのが困難だと判断すると、両足にあるGNドライヴから赤い粒子を撒き散らし始めた。するとその赤いGN粒子はアルケ―の周囲に展開され、それによって白い風が幾らか阻まれ、その威力が次第に弱まっていく。

が、それもヒュドラがカートリッジをロードするまでであった。

ガコン！　ガコン！

ヴェノムの異様に長い柄が上下に動き、カートリッジがロードされる。すると、先程までは確かに弱まっていた白い風が、最初と寸

分違わない威力でアルケ―へと吹き荒れた。

『こ、このままじゃ……』

『マ、マイス、タ―……』

アルケ―が凍っていく、中にいるマイスターと「ガンダム」と共に。分厚い氷に意識まで閉ざされ、その寒さで体の自由が奪われていく。

「……これで、お終い」

『ブレイク・アイス・ジ・エンド』

そして、ヴェノムのその言葉により、アルケ―を閉じ込めた氷が、鏡を割ったような音を出しながら、幾つもの欠片になった。

「ハア、ハア……君、よく聞いてよ?」

「……」

少年がしきりに頷くのを満足げに見ながら、私はこれからこの少年に言う言葉の残酷さを思い、胸に苦い物を感じた。

「これから私があいつらの気を引くから、その間に君はここから逃げる、のよ……」
「……え？　でも、そうしたらロッテさんは……」
（心配してくれるのね。ありがとう）
その言葉を口に出さず、私は心の中で何度も何度も少年に言った。だって、もしこれを言っちゃったら、この少年は必ず私に付いてくる。そして、それだけはしちゃいけない事だから。
「……もう一度だけ、言うよ？　君は私が……」
「そんなの……そんなの、嫌ですよ！」
やっぱり、君はそう言っちゃうんだね？　私がどれだけそれを望んでも、君は優しいから、きっと聞いてくれないとは思っていたよ。だから、こうするしかないんだ。ごめんね、少年。
「本当に……ハア、ハア、ごめん、ね」
「……え？」
私は呆気にとられた少年の首に手刀を打ち込んだ。それで少年が気絶したのを確認してから、私は彼を近くの茂みの中に隠した。これで何とか生き残ってくれればいいけど……。
「……本当に……ごめんね……しょうね、ん」
本当にごめんね？　私はアリアみたいに転送魔法とか上手くできないから、こんなことしかできないんだ。
「……ハア、短い、間だったけど、ハア、君と過ごした時間は……楽しかった、よ？　うっ！　ゲホッ、ゲホッ！」

あぁ、でも、この姿を見られなかったのは、いい事だったかも。
こんな大きな傷を負った体なんて、見せたくないからね。

……こんな私だけど、君は許してくれるかな？　できれば、許して欲しいんだけどね。

「……ハア、ハア……ッ！」

ん……あいつらが来たみたい。どうやらこっちをまだ見つけていないようね。まぁ、こんなに鬱蒼（うっそう）と緑が茂っているんだから、ここを見つけるのにももう少し時間がかかるだろうね。

でも……ここを見つけさせるわけにはいかない。君を死なせない為にもね。

だから、私はもうここから出て行くよ。できれば君とあの世で会う事がないよう祈ってるよ。

「……だか……ら、許して、欲しい。こんな事しかできなかった私、を。君から笑顔を奪ったか……もしれない、私を」

君には笑顔が似合っている。だから、君が笑えるような日々が来る事を、私は願うよ。

「……じゃあ、ね、少年。いや……」

でも、最後くらいは名前で読んであげた方がいいかな？　今まで一度も読んだ事がなかったからね。

「……ティーダ。私達の……父様の、可愛い、弟子で、私達の……私とアリアの、可愛い弟子……」

これで、本当にさようならだよ、ティーダ。私の愛らしい、小さな弟子……。

「あっはっはっはっはっはあああ！　そんな体でどうして出てきたんだい、リーゼロッテさん？」

「……うるさい、わね、さっさと、かかって……きな、さい……」

『ヒリング、君は一体いつになったらその悪癖を直すんだ？』

「いいじゃないリヴァイヴ。それに、今はそんな事よりも、こっちの方が重要でしょ？」

『それはそうだが……』

血を噴き出す傷を背中に負ったロッテの前に立ちふさがるは、グレー基調のガラッゾとグリーン基調のガデッサの二機。

「ハア、ハア……」

「ふーん、どうやら本当に限界みたいだね。あの時、もし全力で私を蹴っていたら、そんな傷も負わなかったかもしれないわね？」

「う、るさいわね……」

ロッテの背中の傷は、ガラッゾに蹴りを入れた時にできた物だった。蹴った勢いで距離を取るのには成功したが、ガラッゾの攻撃までは完全に避ける事が出来なかったのだ。

それを知って、ロッテに楽しそうに話しかけるヒリングは、そのガラッゾのマスクの下にある顔を愉悦と歓喜で歪ませた。これから

始まる一方的な戦闘を予感して。

そしてリヴァイヴはこれから始まるであろう凄惨な戦闘に、早くも嫌気が差し、その眉間を顰めた。

「じゃあ、行くよ？　いい？」
「さっさと……かかって、きなさ」
「分かったよ、リーゼロッテさん！」

ガラッゾがロッテに迫り、その腹を蹴る、脇腹を殴る、体を投げる、背中を斬る、指を捻る、骨を折る、頭をぶつける。そんな拷問のような戦闘が、始められた。

『さあってと。これでフェイズ2は完了なの？』
『いや、アルケ―からの連絡がないから、まだなのだろうな』
『えぇー？　あれまだ終わらせてなかったの？　もう随分な時間が経ってるけど？』
『どうやらイレギュラーな横やりが入ったらしい』

その二機は、すでに息をしていない唯の死体に見向きもしないで、これからの方針を話し合っていた。淡々と、冷静に。

『それじゃあこれからどうするの？　私達に課せられたノルマはもう終わっちゃんたんだけど？』
『……そうだな。そろそろヴェーダかスメラギから指示が届くはず……来たぞ』
『何々？　……うっそ！？　あのアルケ―、遂にやっちゃったの！？』

『これはまずい！　『計画』に支障が出るかもしれない！　行くぞヒリング！』
『あ！　待ってよリヴァイヴー！』

ガデッサが飛ぶ、ガラッゾが飛ぶ。そこに絶望と猫の死体を残し、ロッテに隠された少年、ティーダに気付く事無く、彼らはそこから飛び去って行った。

「お母さん、お父さん、お兄ちゃん、お姉ちゃん、忍さん、アリサちゃん、すずかちゃん、ノエルさん、ファリンさん。私、行きます」
「「「なのは（ちゃん）（様）……」」」
「もしあれを止められるのが私だけなら、私は例えそれが罠でも行きます」

なのははその目に決意を籠めて、その言葉に覚悟を乗せて言う。自分が選んだ選択を、自分が選んだ道を。それが相手の思惑通りだとしても、彼女はそれに構う事なく、全力全開で突き進もうとする。それが彼女、高町なのはだから。

「だから」
「なのは様、気をつけて行ってらっしゃいませ」
「なのはちゃん、絶対に、絶対に死なないでね！」

ノエルとファリンがなのはの言葉を遮って言う。謝りの言葉はいらないとばかりに。

「そうよ！　絶対にあいつらをぶっ飛ばして、生きて帰ってきなさいよ、なのは！」

「なのはちゃん、くれぐれも気をつけてね？」

アリサとすずかが続けて言う。友を心配し、それでもなのはなら「CB」を倒してくれると、私たちの世界の平穏と秩序を崩した「ガンダム」を倒してくれると信じて。

「まぁ、私としてはなのはに行って欲しくはないけど、それがなのはの選んだ選択肢なら、私に止める事はできないからね。……絶対に死なないでね、なのは」

「……オレはかなり、いや絶対に反対……と言いたいが、オレはお前があれを止められるかもしれないのを知っている、知ってしまっている。だから、お前を止める事ができなかった兄を、許してくれ……！」

「なのはちゃん、気をつけて……」

美由紀が苦渋を押し殺し、恭也が悔しさに歯軋(はぎし)りし、忍ぶが心配しながら言う。

「……なのは」

「……気をつけて、な」

桃子がその一声に万感の思いを込めて言う。士朗がその一声に全てを籠(こ)めて言う。

それらの思いを受け取ったなのははは、すずか邸の庭にでると、自身のデバイスに話しかけた。

「レイジングハート」

『……マスター』

「ごめんね？　こんなマスターで」

『ノー。貴方が私のマスターでよかったです』

「ありがとう、レイジングハート。じゃあ、行こうか？」

『オールライト、マスター』

そして彼女は唱える、不屈の心を現し、自身の力を行使する為の呪文を。何人もの人々の、友人の、兄姉の、両親の言葉をその背に受けながら、彼女は空を飛ぶ為のキーワードを唱える。

「レイジングハート、セットアップ！」

『スタンバイレディ、セットアップ！』

それは不屈のエースオブエース。ミッドに、管理局にその人ありと言われる、無敵のエース。管理局に敵対する者達やテロリストから恐れられ、畏怖されし白い悪魔。

「行きます！」

『アクセルフィン』

――その高町なのはが、靴に桃色の羽を生やして、その庭から飛び立っていった。

「やはり……だめか……！」

首相はすぐ目の前で蹴散らされている自衛隊を見て、苦々しくそう言った。彼の見ている前で戦車が爆発し、ヘリや戦闘機が墜落し、歩兵が蟻のごとく殺されていく。首相はそれから目を逸らさず、その脳裏にしっかりと焼き付けた。彼らのその苦痛に満ちた表情を、憎悪に漲る表情を、悲痛に歪められた表情を、一人ひとり脳裏に焼き付ける。

『刹那、現在の状況は？』

『現在東京湾にて戦艦のおよそ9割を撃破。今は戦闘機や戦車の残存戦力を叩いているところだ。そちらはどうだ？』

『此方は今日本の最終防衛ラインを突破して、皇居の前まで来ているところだ』

その首相の眼前に降り立つは、「CB」の白い悪魔。その巨体からは信じられない速度で動き、戦車の砲弾やミサイルにも無傷な防御力を持ち、一撃で戦艦をも轟沈させる砲撃を連射可能な、悪魔を具現化させたようなスペックを誇る、通称「デカブツ」と忌み嫌われるモノ。

「……悪魔め……！」

『悪魔でもいい』

首相は無意識にそう呟いた。そしてそれを聞いたティエリアは、周囲を地獄の業火で埋め尽くされている空間で、その表情を毛ほども変えずにそう答えた。首相の耳には届かないことを知っていても、それだけは言いたかったから。

『その悪魔らしいやり方で、この世界に変革を齎すことができるのならな』

そう言ってセラヴィーは業火の中から皇居に、正確には首相に、ダブルバズーカのその闇い砲口を向けた。そしてその砲口に桃色の光が溢れ始め、その熱量が首相にまで感じるほどのエネルギーとなり、そしてそれが眩い桃色の光線となって今、放た……

『マイスター、上です！』

『何ッ！？』

世界を震わすような轟音が、その周囲に響き渡った。それは世界を桃色に染め、セラヴィーを吹き飛ばし、地面に数十メートルものクレーターを造り上げた。

「な、何が……」

『セラヴィー！　今のは……！』

『イエス、マイスター。恐らく彼女であると思われます』

それに茫然とする首相、それに驚愕するティエリア、それに警戒するセラヴィー、それに唖然とする自衛隊員達、それに緊張する「

ＣＢ」、それに戦慄するこの世界の住人達、それに歓喜するミッドチルダの住人達、それに驚喜する管理局、それに愕然とする機動六課、それに心配する家族と友人達。

そんな彼らを観客にし、エクシードモードの白いバリアジャケットを纏った彼女が穹から舞い降りてくる。まるで女王のように、主役のように、悪魔のように。

ふわりと、そんな音がしそうなほど柔らかく着地した彼女は、首相を背に負い、セラヴィーを正面から見据える場所で、その名を名乗った。

「時空管理局古代遺物管理部機動六課、スターズ分隊隊長、高町なのは一等空尉」

『インテリジェントデバイス、レイジングハート』

それを受けたセラヴィーは、自らの名を声には出さず、しかしそのガンダムフェイスの下で、はっきりと言った。

『「ＣＢ」のガンダムマイスター、ティエリア・アーデ』

『「ＣＢ」の「ガンダム」、セラヴィー「ガンダム」』

そして彼らは思い思いに構える。なのははレイジングハートの先端から突き出している超高密度魔力刃の矛先を斜めに地面に向けるように両手で構え、セラヴィーはダブルバズーカを右手に、ＧＮビームサーベルを左手に構えた。

「あなたを「ＣＢ」の一員として、その身柄を拘束します！　行くよ、レイジングハート！」

『イエス、マスター。カートリッジロード』

カートリッジをロードする鈍い音が響く。

『行くぞセラヴィー、ここからが本番だ！』

『イエス、マイスター。ＧＮドライヴの出力を１００％に固定します』

ＧＮ粒子を充填する機械的な音が流れる。

「はあああああ！」

『はあああああ！』

そして盛大に魔力を、ＧＮ粒子を爆出させながら、その白い悪魔達は闘いという名の、一対一による戦争を始めた。

第１９話　殺意と悪意が織りなすカンタータ（後書き）

正直、オリジナルキャラを登場させすぎた感があります。ヒロインがでていないのに、どうしてオリキャラを出したんでしょうか、私は？

ちなみに、この小説は４月１０日に投稿したいがために急ピッチで書かれた物です（作者は４と１０と１９の数字が好きだから）。なので、前書きの通り、おかしい文章や「こんなキャラじゃない！」という物が多々あるかと思われます。もしそれを発見、もしくは一言物申したい方がおれば、感想にてお待ちしております。

遂に３話連続ではやてを出すことができませんでした。反省しております。しかし、このパートはなのはさん（様）が主役だったので、仕方がなかったんです！　と言い訳じみた事を言って申し訳ございません。次は、次こそは！　はやてを出してみせます！！　全国に千人いるかどうかのはやてファンの為にも、そして一はやてファンである私の為にも！！　このような駄作を最後まで読んで下さった皆様に感謝を。

最後に。

ヒロインは　はやて　です。（次こそは出します！！）

第２０話　管理局の白い悪魔　ＶＳ　「ＣＢ」の白い悪魔（前書き）

作者はこの話ではやてを登場させることができませんでした。なので、作者は今全国に一千人いるかどうかのはやてファンの方々にボコボコにされています。そして、はやてファンの方々、本当に申し訳ございませんでした。

あと、冒頭の人物が分からない方、特に未成年の方は調べない方がよろしいかと思います。かなりダーク（Ｒ１８ぐらい）なゲームの主人公なので。

では、開演です。

第２０話　管理局の白い悪魔　ＶＳ　「ＣＢ」の白い悪魔

これは英雄の物語ではない。

英雄を志すモノは無用である。

――装甲悪鬼村正の湊斗影明より

―新暦７５年１０月１０日・第９７管理外世界・？？？―

「よもやこれほどの魔導師がいるとはな。信じられん」

その少年と青年の間を行き往きするような体格をした、黒髪で仮面を被った何者かは、風に白いコートをはためかせながら、その仮面の隙間から覗き見える蒼い眼でその戦闘を眺めていた。

「もしかの女子（おなご）と我が戦えば、我は一瞬にして塵芥（ちりあくた）となり、我（われ）が我（わ）がマスターと共に戦っても、一瞬を数分にするのが精々……」

そんな彼の目の前では白い魔導師と白い「ガンダム」が、東京と呼ばれる土地の上空で互いに一歩も譲らずに砲撃を撃ち合い、周囲の海に数柱の巨大な水柱を形成しながら高速で戦っていた。

「そして「ＣＢ」が誇る白い悪魔を持ってしても、管理局が誇る白

い悪魔を倒せる確率は五分と五分」

白い「ガンダム」に桃色の極光が直撃し、海に沈められる。白い魔導師に桃色の極光が直撃し、超高層ビルに埋められる。

「だが、我等にとってはそちらの方が都合がいい。そうだろ？　我がマスター、コードネーム「アーカイブ」」

そう言いながらその何者か――――イオリアにアップルと呼ばれしモノ――――は、海から上がり、ビルから抜けてきた両者が再びぶつかり合うのを、ただただ傍観していた。

「……しかし、マスターはどうやら例の女子を好いているようだが、その女子が危機に陥るやも知れんぞ？　それは大丈夫なのか？」

アップルが虚空に話しかける。焦点が合っているかどうか分からない瞳を戦争に向けながら、ぶつぶつと独り言を言う。

「……ふむ。まぁ、その為の我なのだから、安心しろ。しかし、我としてはそろそろマスターの真名を口にしたいところだが……分かっている、それが無理な事はな」

その台詞には幾分かの哀愁、願望、諦観（ていかん）が含まれていたが、それに気付く者は、その場には存在しなかった。

―同年同日・同世界・日本―

「はあああああ！」
『はあああああ！』

魔力とＧＮ粒子が暴れ狂う中、その白い悪魔達は正面から激突した。なのはは左側から両手でレイジングハートを突き出し、セラヴィーは左手に持ったＧＮビームサーベルを突き出して、それらが交差し、互いを直撃する。

「クゥウウウウ！」
『クゥウウウウ！』

それによるダメージを装甲やバリアジャケットで無効化しながら互いを吹き飛ばし、その吹き飛ばされた勢いを利用し、後ろ向きのまま空へと舞い上がり、互いが砲撃を放つのに最適な距離を取る。

「ディバイン」
『ディバイン』

なのはが膨大な魔力を操り、レイジングハートの先端に桃色の光球を造りだす。

『セラヴィー、ＧＮ粒子充填！』
『充填完了、最大出力での発射が可能です、マイスター』

セラヴィーがＧＮ粒子をダブルバズーカにチャージさせ、桃色の光がその砲口から溢れる。

「バスター！」
『バスター』

なのはが造り上げた光球から極大の光線が放たれる。

それは神罰の一撃。神（天使）を気取った傲岸不遜な組織に与えられる、圧倒的な魔力で形成された断罪の砲撃。

『ダブルバズーカ、発射！』
『圧縮粒子、解放』

ダブルバズーカから二メートルに及ぼうかという光の奔流がなのはへと伸びる。

それは天罰の一撃。人類が造りし愚かな組織に下される、膨大な量のＧＮ粒子からなる審判の砲撃。

それらが互いの中央で激突し、数百メートルにも及ぼうかという大爆発を引き起こし、周囲一帯の大気を激しく乱して、上空の雲海を吹き飛ばした。

―同年同日・同世界・軌道衛生上―

「これが、管理局の白い悪魔の力……」

「おいおい、セラヴィーと砲撃しあうなんて、あれは本当に人間か？」

「さあ？　どうかしらね……」

プトレマイオス？に乗船しているクルー達は、セラヴィーとなのはの戦闘を見て、冷や汗が止まらない思いを体験していた。

それは彼らが未だかつて、セラヴィーが中・遠距離で苦戦する所を見た事がない、いや、セラヴィーとそこで撃ち合おうとする魔導師を見た事がなかったからだ。

セラヴィーは本来対艦・対要塞用の機体であり、その火力はあのＸＶ級次元航行船にも匹敵し、トランザムを使用すればそれすら凌駕する性能を持つ機体でもある。

よって、魔導師とその距離で撃ち合うということは、今まで想定すらされなかった。あの『ヴェーダ』ですらその必要性を却下したほどだ。

だからその想定すらされていなかった事態が、現実に目の前で展開しているというイレギュラーに、「ＣＢ」のクルー達は、何時になく緊張した面持ちでその戦闘を見詰めていた。

「しかし、大丈夫なのか？　もしセラヴィーがここで負けたら儂ら

のこの作戦が……」
「それについては心配いらないわ」
「スメラギさん？」

イアンのその懸念に心配はいらないと言うスメラギに、ミレイナがその根拠を尋ねる。それに軽くデジャブを覚えながら、イオリアから聞かされた話を、此処に居るラッセ、イアン、フェルト、ミレイナに伝えた。

「う～む、「アーカイブ」の策のう……」
「スメラギさんでも伝えられてないってのは、ちょっとばかし信じられないがな」
「はいです～。戦術予報士であるスメラギさんにすら話せないなんて、ありえないですよ～！」
「でも、イオリアさんが例の彼を信じてその策を選んだのなら、もしかしたらスメラギさんに伝えなかったのにも何か理由があるんじゃ……」
「もしあったとしても、今はまだ分からないわね……」

それぞれが困惑顔を寄せ合いながら「アーカイブ」の策について話し合っていると、戦場の一つに変化が起こっていた。戦場を映していたモニターの一つが異様に静かになるという変化が。

「！　スメラギさん、『ＯＯガンダム』が東京湾内にいる敵を全て撃破したそうです！」
「そう。なら、刹那にはＡ８じゃなくてＡ９に移行するように指示を！」
「りょ、了解！」

見ると、あれほど銃砲の音でうるさかった東京湾が、今はとても

静かになっていた。それこそさざ波一つない湖面のように。

そこで『ＯＯガンダム』は艦体の残骸の上に降り立ち、その両手に持っていた二振りのＧＮソード?を腰に戻していた。

「これでチェック・メイトよ、管理局の白い悪魔さん」

それを見たスメラギは自分達の勝利を確信した。

何故なら幾ら高町なのはがセラヴィーと同等に戦える戦闘能力を持っていようが、それはあくまで一対一に限った場合のみ。

もしそこでセラヴィーと同等、あるいは超越するかもしれない戦闘能力を持つ「ガンダム」が加われば、どうなるか。

それは考えるまでもない事である。

そう。もしそうなった場合は、高町なのはの敗北が確定するだけなのだから。

―同年同日・同世界・日本―

『『ＯＯガンダム』はＡ８ではなくＡ９に移行して下さい』
『了解した』

『ＯＯガンダム』は自身が轟沈させた艦隊の一隻の上に降り立ち、その指示に従ってティエリアの援護に行こうとしていた、が。

『マイスター、妙です』
『Ｏガンダム、何が妙なんだ？』
『かなり微弱で分かりづらいのですが、微かに魔力を感じます。それも、高町なのは以外の魔力を』

Ｏガンダムのその警告に、動きを止めた。それは本来なら有り得ない物だった。ここは管理外世界であり、魔法を持っている者など、あの高町なのは以外、ここには誰もいないはず……

『いや、待てよ。確か「アーカイブ」からの資料に、この世界にも転送ポートが幾つかあると書かれていなかったか？』
『はい、確かに書いてはありましたが、しかし、「トランスポート・ジャマー（「Ｔ・Ｊ」）」により無効化されているはずです』

Ｏガンダムのその答えは刹那自身にもあった物。「Ｔ・Ｊ」が張ってある限り、転送魔法は使えないはずなのだ。

『……そうか。なら、それが何らかの要因で魔力を撒き散らしているのか？』
『恐らくはそうかと。普通はありえませんが、もしかしたら砲撃などが当たって損害をきたし、それが原因で魔力が漏れ出した可能性

はあります』
『……それがOガンダムの推測、か』
『イエス、マイスター。それよりもA9に移行した方がよろしいかと思います』
『……了解したOガンダム。では、セラヴィーの元に行くとしよう』
刹那はそこで自身の懸念と話にけりを付け、再び『OOガンダム』を飛翔させた。エクシアが無言なのを気にも留めないで。

（……さっきからずっとマイスターはOガンダムと話をしている。私の事なんか見向きもしないで。……Oガンダム、貴方が私の本当の敵、私とマイスターの世界の歪みなのね！　最近マイスターとろくに話すらできなかったのも、全ては世界の歪みたる貴方が原因だったのね……！！）

それに薄々感づいたOガンダムは、エクシアのその怨念じみた気持ちを察し、刹那にもっと急いでもらう事にした。これ以上こんな事でエクシアに怨まれるのは勘弁してほしかったのだ。

『……マイスター、出来得る限り早くセラヴィーと合流しましょう。何やら理不尽な事が起こっているので』
『そうなのか？　……しかし、Oガンダムがそう言うのであれば、急ぐとしよう』
（Oォオオガンダムゥウウウ！！）

それが逆効果だったのを知ったのは、手遅れになってからだったが。

『ＯＯガンダム』が蒼い軌跡を残し、東京の穹を駆ける。その先に戦争があることを知り、そして深刻な仲違い（？）を起こしながらも、全速力で穹を駆け、セラヴィーの元へと急ぐ。それを見る生者は、そこには誰一人としていなかったが。

東京の上空数百メートルの所で白い悪魔達は一対一による戦争を行っていた。雲海を吹き飛ばし、大気を消滅させ、青海に幾つもの水柱を撃ち立てながら、互いの代名詞とも言える砲撃を撃ち合い、何度も衝突する。

ガコン！

「エクセリオンバスター！」
『エクセリオンバスター』

桃色の光が穹を突き進む。その先にいる敵を打ち倒すために。

『クアッドキャノン！』
『クアッドキャノン』

桃色の光が穹を奔（はし）る。その先にいる敵に身の程を知らすために。

そしてその二つは正面からぶつかり、第二の太陽を思わせるような煌き(きらめ)を放ちながら、周囲一帯を虚無へと帰す。

そして、その影響残る中、セラヴィーがなのはへと突撃する。左手に持ったＧＮビームサーベルを振り上げ、右手に持ったダブルバズーカで牽制を放ちながら、その距離をどんどん縮めていく。

対するなのははそれを３０ものアクセルシュ―ター―で撃ち落とそうとするも、ＧＮフィールドによってその尽くを防がれ、遂にクロスレンジまで詰められてしまう。

セラヴィーが左手に持っていたＧＮビームサーベルを、力一杯振り落とす。それを何とかシールドで防ぐなのは。しかし、

『セラヴィー、今だ！』
『ＧＮキャノン、発射』

そのシールドの上を、肩と膝に装着された４門ものＧＮキャノン？による一斉射が襲う。それにはさすがになのはのシールドでも耐え切れずに、粉々に砕け散った、ように見えたが、

「レイジングハート、ショートバスター！」
『ショートバスター』

そこになのは最速の砲撃が撃ちこまれる。当然セラヴィーはＧＮフィールドを張る時間がなかったので、その砲撃がセラヴィーの胴体に直撃した。そしてセラヴィーを問答無用に吹き飛し、上空数百メートルから数十メートルまで一気に落とす。

「カートリッジロード」
『カートリッジロード』

ガコン、ガコン！

「ディバインバスター！」
『ディバインバスター』

そこにさらなる追い打ちをかける、極大の砲撃。その太さ3メートルはあろうかという光線が、大気中を驀進（ばくしん）しながら、セラヴィーに直撃する。

「やった……？」
『ノ―、マスター。油断しないでください』

レイジングハートを冷却しながら、渾身（こんしん）のディバインバスターがセラヴィーに直撃した所をじっと見つめる。しかし、そこは煙によって殆ど見えない為、用心しながらも距離を縮めていく。

「……ッ！」
『マスター！』

不意に、その煙の中でＧＮ粒子と同じ色のデュアルアイが光り、

『フェイスバースト展開。ツインバスターキャノン』
『照射』

先程のなのはの砲撃に勝るとも劣らない砲撃が、煙を吹き散らしながらなのはに向かい、

「クッ！」

ガコン！

『ラウンドシールド』

そのシールドに直撃し、次いでそれを突貫した。

「きゃあああ！？」

その砲撃はカートリッジを消費して張られたシールドをいともたやすく突き抜け、なのはを数百メートル上空へと撃ち上げた。

『これでどうだ！？』

『ノー、マイスター。敵は未だ健在です』

そして煙の中から現れたセラヴィーは、その体の至る所を少々欠けさせながらも、肩に長大な砲を背負いながら、悠然と浮遊していた。

「つう～！」

『マスター、油断大敵です』

しかし、それはなのはも同様であった。バリアジャケットを所々破けさせながらも、レイジングハートを左手に持ち、屹然（きつぜん）と飛翔していた。

「レイジングハート、大丈夫？」

『オールライト、マスター』

『セラヴィー、損傷は？』

『全身に１０％ほどの損傷を受けましたが、戦闘に支障はありません』

そして互いが互いを一睨みし、一拍。

「Ａ．Ｃ．Ｓ、最大出力！」

『Ａ．Ｃ．Ｓ、最大出力で起動させます。ストライクフレームを限界まで展開』

その声にレイジングハートから伸びる紅に近い半実体化魔力刃がさらに大きくなり、周りに展開されていた羽も一回り大きくなった。それをセラヴィーに向けながら、自身の魔力をその魔力刃に注ぐ。それも馬鹿みたいな量を。

『フェイスバーストを維持したまま、ダブルバズーカキャノンを撃つぞ』

『イエス、マイスター。圧縮粒子充填完了、いつでも解放できます』

それを迎え撃つセラヴィーは後ろに大きな顔を展開させながら、ＧＮバズーカ?を合体させ、右肩と連結させる。そしてそこに圧縮されたＧＮ粒子を充填させ、周囲を歪ませるようなエネルギーを、その砲口に生み出す。

「いっけえええ！！」

『Ａ．Ｃ．Ｓ』

『ダブルバズーカキャノン！』

『発射！』

そして天からは桃色の流星が流れ堕ち、空からは桃色の極光が放たれた。そしてそれらが衝突し、世界を揺るがす爆音と、世界を照

らすような光と、世界を吹き飛ばすかのような衝撃波を生み出した。

―同年同日・同世界・イギリス―

「……？」

ヒュドラは自身の最強魔法であるホワイトブレスを放ち、勝利を確信していた。そう、ついさっきまでは。

「……ヴェノム？」

『……マスター、お気を付けを。敵がまだ動いています』

「！！」

自分のデバイスであるヴェノムのその言葉に、ヒュドラは驚きを隠せなかった。そして、先程自身が凍らせて砕いたはずのアルケ―を見て、それを恐怖と共に理解した。

そこには氷と一緒に砕けているはずのアルケ―が、右手と顔の右半分近くを半壊させ、左腕を失いながらも仁王立ちしていた。

「殺す……」

『ギッチョン』

４つの眼にそれぞれ憎悪、憤怒、殺意、傲慢を映し、それでヒュドラを鋭く射貫きながら、

「殺す……」
『ギッチョン』

体中から殺気を迸らせる。いつでも目の前の敵を殺せるように、天使を傷つけた愚か者を処刑する為に。

「殺してあげるわ、おチビちゃん！！」
『ギッチョンギッチョンギッチョンチョン！！』

そしてアルケーは禁忌とされていた装備を手に取る。大量虐殺をする為に、多数惨殺をする為に造られた装備を。その名は、

「アァァルゥウケェエエェエエエーーー！！」
『スタンバイレディ、セットアップ。ＧＮ－２０００／Ｊ　ＪＡＧＤ　ＡＲＣＨＥ　ＧＵＮＤＡＭ　インストール、コンプリート』

さあ、ここから始まりしはあまりにも一方的な、決して戦闘とは言えない、強いて言えば処刑と称することができるような舞踏。

その観客は老兵ただ一人という、あまりにも寂し過ぎる演劇。

その幕が今、ゆっくりと開かれた。

―同年同日・次元世界・時空管理局本局―

「一体何が起こっているのだ！」「何故高町なのはがあそこにいる！？」「次元航行部隊が近くにはいないのか！？」「この放送はどこから流れているのだ！？」「これが「ガンダム」……」「聖王教会中央教堂の現状を報告しろ！」「「ＣＢ」とジェイル・スカリエッティは協力しているのか！？」

現在本局では、緊急記者会見に使用されていた通信回線を「ＣＢ」に乗っ取られ、そこに映された第１２管理世界の聖王教会中央教堂、第９無人世界のグリューエン、第９７管理外世界の日本に対する「ＣＢ」の武力介入について緊急会議を開いていた。が、あまりにも情報が少なく、また各地に派遣できるような次元航行部隊もいない為、実質的な会議は殆ど行えていなかった。

しかし、そんな悠長な事を言っていられないというのも事実であった。

何故なら聖王教会中央教堂の壊滅、ジェイル・スカリエッティの脱獄と「ＣＢ」への協力疑惑、さらには軌道拘置所「グリューエン」の消滅と高町なのはが「ガンダム」と一対一で戦わせられるという

事態が既に起きてしまっていたからだ。

そしてこれらの出来事は管理局、いや全次元世界に「ＣＢ」の、「ガンダム」の力を見せつける事となり、同時に管理局の威信をズタズタに切り裂いた。

さらに、この緊急会議に参加している者の中にはそれに怒り狂い、すぐにでも討って出るべしという声を高らかにする者が少なからず、いや大多数を占めていた。

その中でリンディ・ハラオウンとレティ・ロウランはなのはの戦闘映像を見て、自身の失策に対する悔恨（かいこん）となのはに対する申し訳なさで、顔を思いっきり顰（しか）めていた。

「……レティ、もし私達があの時なのはさんを止めていれば、こんなことには……」

「言わないで、リンディ。それを言ったら私だって、あのクソ豚の言う事をもっと疑っていれば……」

そんな彼女たちの周りは喧々諤々（けんけんがくがく）といった様相を一ミリも変える事無く、いやむしろ更にひどくなったまま、会議という名の混沌の泥沼に陥っていく。

しかし、そのような場に不思議と浸透した一声が、その混乱を瞬時に収めた。

「お静かにお願いします」

その水面のように静かな声を発したるは、伝説の三提督が一人、ミゼット・クローベルであった。彼女はその顔に険しさを浮かべな

がら、優雅に靴音を響かせ、その会議場に入ってきた。

その会議場に居る全ての人間が彼女のその姿に目を奪われ、そしてその言葉に従い、口を閉じた。

「よろしいです。では、これから「ＣＢ」を壊滅させる為の会議を始めましょうか」

彼女が唐突に言ったその言葉は、その場に居た人間の度肝を抜いた。あの温厚で知られていたミゼット・クローベルがそのような言葉を発するとは思いもよらなかったからだ。

しかし、当の本人はそのことを気にしないで会議を進めていく。その顔に笑顔を張り付けながら、しかし目を決して笑わせずに。

「少し、よろしいでしょうか？」

そんなミゼットに対し、リンディはその会議をする前に話し合わなければならない事を言う為に、右手を上げ、発言の賛否を問うた。それにミゼットは短く「ええ」と言い、その発言を促した。

「高町なのは一等空尉については、どうするのおつもりなのでしょうか、ミゼット最高評議会議員？」

それがリンディの話しあわなければならない事。既に起きてしまった事態の中で唯一阻止できるかもしれない事。

「それについては問題ありません」

それにミゼットはまたも短く、必要最低限に答えた。

「と、言いますと？」

その真意を問う為に、リンディはさらに質問を重ねた。そして、ミゼットは会議場の全体を一目見てからその質問に答えた。

「何故なら私は既にＬ級次元航行船の８番艦であるアースラを、なのはさんの故郷である第９７管理外世界に極秘裏に出向させているからです」

「「「なッ！？」」」

その場に居た者達はその言葉を聞いて、またも度肝を抜かされた。そのようなことなど、寝耳に水だったのだ。それにアースラと機動六課はここの護衛に当てていたはずなのに、一体何時の間にそんなことを……

しかし、今はその追求よりも、何故そんな事をしたのかを、リンディは聞いた。

「そ、それはどうして……」

「私達は高町なのは一等空尉に故郷である第９７管理外世界で療養するような命令を一切出していなかったからです。正直に言えば、私がその報告を聞いた時、我が耳を疑ったほどです。そして、これには何か裏があると思い、密かに１０月９日に八神はやて二等陸佐率いる機動六課を乗せたアースラを第９７管理外世界に出向させるように指示しました」

それは確かに正論ではあった。臨時とはいえ、現管理局で最高権力を握っていると言ってもおかしくはない人物にすら聞かされていない、管理局が誇る絶対的なエースをこの状況で休ませるという異

常事態。これに対し何らかの保険をかけるのは、トップに立つ者の対応としては至極全うである。

「そして、その指示を出した人事部のトップの方とお話しした所によりますと、そのような指示を出すように、「アーカイブ」と呼ばれる謎の人物から命令されたそうです。その方のスキャンダルと家族を人質にとって」

「「「ッ！？」」」

それはあまりにも衝撃的な事実であった。管理局の人事部のトップという地位にいる人物が管理局を裏切っていたという、あまりにも信じたくない事実。

「そして、この状況から分かるとおり、恐らく「アーカイブ」という人物は「ＣＢ」の一員であることに間違いありません。その人物がどこまで管理局に食い込んでいるのかは分かりませんが、人事部のトップという地位にいる人物ですら操るほどの者です。皆さん、くれぐれも油断はしないでください」

そう締め括ってミゼットは発言を終えた。そしてその場に疑心暗鬼となった管理局の上層部を残したまま、その会議は結局何も成果が出ずに終わった。

―同年同日・第９７管理外世界・イギリス―

「……か……はッ……！」

『マスター―！？』

肩で息をしながら、ヒュドラはただ眼前の敵を見据えていた。ヴェノムの刀身をボロボロにさせ、バリアジャケットも半壊させながら、その眼に宿る復讐の炎だけは決して弱らせずに、目の前の敵を睨みつける。

「殺す殺す殺すわ～、お・ち・び・ちゃん！！」

『行けよ、ファングゥウウウ！！』

が、目の前の敵はそれを意に介さずに、計１２基もの小型のビットらしきモノを腰のＧＮコンテナから射出させ、それをヒュドラへと向かわせる。

「……！」

『ムーヴィングシールド』

そのビットらしきモノの先端から赤い光線が続々と発射されるも、ヒュドラはそれをヴェノムを持つ右手とは逆の左手に発生させた、五十センチ程の小さな魔法陣の形をしたシールドで防ぎ、必要最低限の体捌(たいさば)きでギリギリに避け、それでも避けれないモノはヴェノムで斬り防いでいく。しかし、いかに暗部の中でトップクラスの実力を持っていたヒュドラといえど、１２基のファング全てを避けきることはできなかった。

「……が……！」

８基目のファングを避けたと同時に、９基目のファングが左肩に突き刺さった。そしてそれに気を取られている間に１０基目のファングが左腕に突き刺さり、１１基目のファングが左足に突き刺さる。

「これで終わりよ、おチビちゃん！！」

『ファング！！』

それを見逃すアルケ―では無く、左肩と左腕、そして左足をファングにやられたヒュドラへと１２基目のファングを向かわせる。

「……クッ！」

『マスター！』

ヒュドラはそれをじっと見詰めながら、しかしそこから動けなかった。ファングにやられた左側の体が全く言う事を聞かないのだ。その為右手に持っているヴェノムで迎撃しようとするも、左側から奔る激痛のせいで意識が朦朧とし、かなりの速さで迫ってくるファングに思考と体が追いつけない。

「……ぁぁあああああ！！」

そんなヒュドラの元へと無慈悲に迫る一基のファング。その距離が１０、９、８……とどんどん短くなっていく。それを見たヒュドラは自身の死を予感した。これはもう避けれない、と。

どしゅ

そんな彼女の耳に届く、人の肉に何かが突き刺さる音。それはヒ

ユドラの命を刈り取る音であり、そして命の終わりを示す音でもあった。

だが、

肝心のヒュドラはあまりにも不可解なこの事象に、ポカンとしたまま呆けていた。そう、自分が未だに生きているという事象に。本当なら、自分はあの音を聞いた瞬間にはもうこの命を散らしていなければいけないというのに、未だに心臓をバクバクさせて生きているという矛盾。

しかし、その答えは目の前に、しかも単純明快に示されていた。

「グ……ウゥ……！」

ヒュドラの目の前に、咄嗟に突き出したであろう左腕にファングを突き刺せたグレアムが、苦痛の表情で佇んでいたのだから。

―同年同日・同世界・日本―

桃色の流星と桃色の極光が激突した、と同時に発生した莫大な衝撃波は、上空数十メートルから発生したにも関わらず、地上や海上を凄まじい勢いで薙ぎ払っていく。

そしてその激突した所では青天の霹靂（へきれき）とでも言うような青空が広がっていたが、その中央ではあまりにも眩（まばゆ）い桃色の光りが、互いを喰らい尽くそうと、太陽にも似た輝きを放ちながら衝突していた。

「……レイジングハート、カートリッジロード！！」

『イエス、マスター。カートリッジロード』

ガコン、ガコン！

『セラヴィー、出力を上げろ！　これでは……！』

『しかし、これ以上はもう……！』

桃色の流星はその勢いを落としながら、しかし桃色の極光を切り裂いて前進する。その矛先の紅い魔力刃でＧＮ粒子による砲撃をかき分け、セラヴィーへと迫る為に。

しかし桃色の極光もそれをさせない為、出力を限界まで上げ、それを迎え撃つ。

「ク、クゥゥゥ！」

それはまさに神話に出るような、御伽噺（おとぎばなし）の中でしか見ることができないような、そんなワンシーンであった。

桃色の流星が極光の中を進むたびに世界を壊す音が生じる。桃色の極光が流星を押し返す為に力強くなるたびに世界が悲鳴を上げる。

どちらも神ではなく人間として得た力でもって、世界を崩壊させるがごとしの暴力を行使する。それは傍から見れば英雄等では無く、ただの悪魔にしか見えなかった。

天使という名の悪魔から放たれし極大の砲撃を切り裂きながら進む、魔導師という名の悪魔。そのどちらもがこの世界の者達にとっては英雄では無く悪魔であり、そのどちらもが神話にしか登場しないようなモノ達。この世界においては異端という枠すら超越する存在。そして、この世界には決して在ってはならないモノ達。

「ハアアアア！」
『ウオオオオ！』

それが全力で衝突する。その力の限りを尽くし、ただ相手を屈服させる為にその暴力を行使する。一ミリも気を緩める事無く、僅かな手加減すらする気を起さずに。

「か……カートリッジロード！」
『オールライト、マスター。カートリッジロード』

ガコン、ガコン！

『グゥウウウ！』
『マイスター、これ以上は……！』

レイジングハートに二つのカートリッジがロードされる。すると、

先程まで停滞していた桃色の流星が再び前進を始めた。そしてどんどん細くなっていく桃色の極光を切り裂きながら、周囲の雲を吹き飛ばしながら、セラヴィーへと徐々に近づいていく。

『セラヴィー、ＧＮフィールド！』

『イ、イエス、マイスター！』

そして後数メートルの距離にまで迫ったなのはを見て、ティエリアは遂に桃色の極光を放っていたダブルバズーカを手放して、その両手にＧＮビームサーベルを握り、自分の周囲一帯にＧＮフィールドを展開させた。恐らくはなのはのＡ．Ｃ．Ｓを受け止めるつもりなのだろう。

だが、その幻想（防御）はぶち殺（壊）された。それも三秒にも満たない時間で。

何故ならなのはのＡ．Ｃ．ＳはセラヴィーのＧＮフィールドを二秒で破り、残りの一秒でセラヴィーの両手に握られていたＧＮビームサーベルを、セラヴィーごと後退させたからだ。

『なッ！　セラヴィー、押し返せないのか！』

『駄目です！　フェイスバーストを長時間展開していたせいで、性能が２９％ダウンしています！　これではどうやっても押し返すことは……！』

『クゥウウウ！』

セラヴィーが桃色の流星と共に地面へと堕ちていく。蒼翠色の粒子の軌跡を空に残し、それをさらに強烈な桃色の軌跡に塗り潰されながら、穹（天上）から地面（地獄）へと堕とされる。そここそがセラヴィーの存在する場所だとでも言うように、お前はそこに堕ちて当然だとでも言うように。

『ガッ……！』

『……ッ！　そ、損傷率……３５％！？　マイスター、これ以上は戦闘に支障があるだけではなく、ＧＮドライヴに転送されているマイスターの生体粒子にも影響を与えかねません！　即時撤退を進言します！』

『……確かに、撤退した方がいいのかもしれないが、少なくても、相手は逃がす気がないようだぞ』

盛大な轟音と衝撃波、そして土煙を上げながら、セラヴィーは天を目指すかのような高層ビルが周囲に存在しない地面へと叩き堕とされた。そして各部の損傷チェックを行いながら、目の前の土煙を吹き飛ばしながら近づいてくる、ボロボロになりながらもデバイスを持つ力を緩ませないなのはの姿を見て、気持ち悪い汗を全身に掻きながら必死にその場から退避しようとする。

しかし、明らかになのはが砲撃をする方が早い。その証拠になのはのデバイスの先端には既に桃色の光球が造りだされ、今か今かとその力を解放される時を心待ちにしていた。それを見たティエリアはあのシステムを使うかどうかを思案する。

（しかし、あれを使うにはまだ早すぎる……！）

そしてその逡巡した時間がセラヴィーの命運を決めた。桃色の光球はより一層大きくなり、断罪の砲撃を今にも放とうとして、

「ディバイン！」

『コーション！　アンノウンが接近してきます！』

「え！？」

『ＧＮソード？にありったけの粒子を集めろ！』

『『イエス、マイスター』』
『プロテクション』

それを中断させられた。二振りの剣を持つ蒼い「ガンダム」の奇襲によって。その「ガンダム」はなのはの後ろから斬りかかり、そのシールドごとなのはを吹き飛ばす。

「そんな……この「ガンダム」は……！」
『マスター、撤退を！　今のマスターでは絶対に勝てません！』
『ティエリア、無事か！？』
『セラヴィー、大丈夫ですか！？』
『Ｏガンダム……Ｏガンダム……Ｏガンダム……を……ちくする』

その蒼い「ガンダム」はなのはに剣を向けながら、セラヴィーへと話しかける。それに助けてくれた感謝と安堵を抱きながら、ティエリアはセラヴィーと共に一番気になった事を刹那とＯガンダムに聞いた。

『……まずはありがとうと言っておこう、刹那。しかし……』
『……そのエクシアの様子は一体？』

それを聞かれた刹那は若干顔を逸らし、エクシアには聞こえないように、通信を遮断（しゃだん）してから答えた。

『オレにもよく分か……』
『マイスターがあまりにも私と長時間に渡って話したせいで、それに嫉妬したんですよ、エクシアは』

刹那の答えを遮って言われたＯガンダムのその答えに刹那は何故？　と思ったが、ティエリアとセラヴィーはその答えに大きく肯い

ていたので、そんなものなのか？　と疑念と納得を抱きながら、正面の魔導師へと視線を戻した。

「うぅ……」

『マスター、撤退を！　そこにいる「ガンダム」とだけは戦ってはいけません！　アレは『オーバーSキラー』（最凶最悪の殺刃鬼）という綽名（あだな）を冠される程の「ガンダム」です！　今のマスターではどうやっても勝算はありません！』

そこにはデバイスに撤退を進言されても、退くことなど一切考えていない眼をした魔導師が、体中に傷を負い、バリアジャケットをボロボロにしながらも、その手に握られたデバイスを此方に向けていた。刹那はその魔導師を見て、ふと八年前の出来事を思い返しそうになったが、それを気合いで封じ込める。

『……懐かしい顔です』

『Oガンダム……』

『また彼女と戦うとは、考えてもいませんでしたが……奇縁なものです』

そして『OOガンダム』は左右の肩に付けていたシールドを上下に合体させ、一枚のシールドにすると、それを左腕に装着させ、左手に持っていたGNソード?を腰に戻す。そして次の瞬間にはなのはへと斬りかかっていた。

「はや！？」

『プロテクション』

それになのはは反応できなかったが、レイジングハートがシールドを張る事に成功する。だが『OOガンダム』はそのシールドの上

から斬りかかり、

『ハアアア！』

それを右の一太刀で、なのはの白いバリアジャケットごと切り裂いた。

「……え？」

『マスター！？』

そしてなのはの茫然とした声と、レイジングハートの切迫した声と一緒に、なのはの胸部から噴水のように血が噴出した。

第２０話　管理局の白い悪魔　ＶＳ　「ＣＢ」の白い悪魔（後書き）

今回は２つのオリ魔法を出してしまいました。
「Ｔ・Ｊ」：そのままの意味で、「ＣＢ」が管理局の転送魔法を封じる為に開発した装置。詳しいのは後ほど。
「ムーヴィングシールド」：発動したまま移動可能なシールドを発生させる魔法。かなり小型ではあるが、盾を持ったまま行動できるというのがメリット。

何時かオリ魔法（装置）の設定をまとめたのを投稿するべきでしょうか？　「Ａ・Ｆ」とかもう忘れられてそうですし……。

まあ、それは置いといて。二回目ですが謝罪を。

はやてを出せなくて本当に申し訳ございませんでした。

本当は出そうとしたのですが、ストーリー上結局出ずに終わってしまいました。これも作者の力量不足です。ごめんなさい。このような駄作を読んで下さった皆様に感謝を。

最後に。

ヒロインは　はやて　です。（今度こそは！）

第２１話　執務官と殺刃鬼はその手に剣を持つ（前書き）

感想にて「はやてヒロイン宣言はそろそろやめた方がいいのでは？」と書かれてあったので、今回からその宣言を取り止めたいと思います。正直フェイトでもなのはでもはやてでも、ヒロインを張れそうになりましたし、この作品は別にヒロインを決めなくてもいいのでは？　とのアドバイスもあったので、２１話からはヒロインを決めずに書いていってみようと思います。それに何かしら言いたい事がありましたら、感想にて書いて下されば幸いです。

では、開演です。

第２１話　執務官と殺刃鬼はその手に剣を持つ

鬼に逢うては鬼を斬る　仏に逢うては仏を斬る　ツルギの理ここに在り

世に鬼あらば鬼を断つ　世に悪あらば悪を断つ　ツルギの理ここに在り

――装甲悪鬼村正の湊斗影明と綾祢一条より

―新暦７１年・第１０管理世界―

そこは地平線まで延々と続く、草木が僅かにしか生えない荒野が存在する世界であった。地球で言う太陽が三つあり、そのどれもが煌々（こうこう）と世界を熱すぎる日差しで照らす。そして風の代わりに砂が吹かれ、数十年前までは栄華を誇っていた文明の名残を優しく覆い隠す。

天まで届きそうな程高く造られていたであろう、倒壊した高層ビル。かつては家族団欒（だんらん）の笑い声が絶えなかったであろう、一軒家の残骸。それらが皆砂に埋もれたまま、世界に置き去りにされたかのように、ぽつぽつとその姿を地表に晒（さら）す。

それは敗者の姿（文明）であり、同時に弱者の姿（文明）でもあった。

何故ならこの世界の文明が滅んだ理由は、質量兵器に手を出したからだ。それもよりによって大量虐殺兵器(禁忌中の禁忌)に。

むろん管理局がそれを許すはずがなく、それが発覚した１０日後にはその世界に質量兵器を手放すように言ったが(脅し)、相手には最近力を増してきた管理局の横暴に備えるという事情があり、なかなか手放そうとしない。

それに業を煮やした管理局は、遂に強硬策に打って出た。その世界に攻め入り、質量兵器を根絶させるという暴挙を実行に移したのだ。

如何に当時では数少ない管理世界で、大量虐殺兵器を所有する世界といえど、他の全ての管理世界から成る管理局との戦争に勝てるはずもなく、僅か一ヶ月という短期間で管理局はその世界との戦争に勝ち、質量兵器を根絶やしにする事に成功する。そして当時の文明を、質量兵器を所有していた罪と、これから所有させない為にも、ある程度後退させた。そしてこれで次元世界に平和が齎されたと、当時の人々はそう信じらされ、そして人々はそれを信じた。

だが、この世界の惨状(荒野)が、その仮初の平和の代価であった。

大地は砂と岩で覆い尽くされ、海という海は干上がり、その世界で育まれた文明は砂に埋もれ、命ある者は何人たりとも住む事ができない。それが今のこの世界の現状である。

何故これほどの惨状が造りだされたのか。それは一重に管理局に所属していたオーバーSランク魔導師達が、新たな超大規模儀式魔法を実験的に発動させ、それが失敗に終わった事と、闇の書という

最強最高クラスの魔導書がその世界に存在していたからだ。

管理局のオーバーSランク魔導師5人が協力して発動させたその超大規模儀式魔法は、本来なら目標地点の広範囲を雷で焼き、炎で溶かし、吹雪で凍らせるはずであったが、闇の書の守護騎士（ヴォルケンリッター）にその儀式魔法の詠唱を邪魔され、結果、中途半端になった儀式魔法はその世界の天候、及び大陸を変化、移動させ、この世界の環境を滅茶苦茶にした。

しかも、その世界の環境にそれだけの影響を与えたのにも関わらず、管理局はその事に謝罪し、滅茶苦茶にした環境を回復させるどころか、更なる追い打ちをかけた。

その世界に現れた闇の書に対し、大気圏内で必滅を約せし天空の虹（アルカンシェル）を使用し、その殲滅を図ったのだ。

だが、当時の管理局の魔導師の中には、これを危惧（きぐ）した者もいた。いくら闇の書を殲滅する為とはいえ、そんなことまでする必要はないのでは？　と。しかし、その声は当時の最高評議会により揉み消され、その魔導師も闇に葬られた。

そうして発動されたアルカンシェルは、確かに闇の書を殲滅したが、それと同時に、その世界にも致命的なダメージを与えてしまった。

そもそも、アルカンシェルは一発で百数十キロもの広範囲を殲滅させる、極大魔導砲撃だ。その威力ゆえに使用を制限しなければならないほどの、質量兵器すら凌駕する禁忌を秘めす、数ある魔法の中でも最凶の名を欲しい侭にする、最悪たる魔法なのだ。

それを、ただでさえガタがきていた世界（環境）に向けて放てばどうなるか？　そんな事は分かり切っていた事だった。

すなわち、その世界の完全に近い崩壊を招くという事。そして、実際にその世界はそうなってしまった。天空（宇宙）から地表（大陸）へと堕ちた虹はその世界の百数十キロ範囲を蹂躙し尽くし、無茶苦茶にされていた環境をさらに激変させ、その世界を破滅へと導いていった。

それを知るのは当時の人間ですら数少なく、今となっては片手で数えられるぐらいの人物にしか知られていなかったが、それを識者（しるもの）達は口をそろえてこう言う。

「果たして管理局は本当にこの次元世界を平和にする事が出来るのであろうか？　彼らはただ世界の支配者を気取っているだけではないのか？」

と。

「ハアアアア！」

『ウオオオオ！』

その滅びた世界で叫ぶモノが二つあった。片方は閃光の如き飛翔をし、片方は流星の如き機動をする、二つの何モノかが。それらは手に持った剣で斬り結び、桃色の光線と金色の光矢を飛び交いさせながら、紅い穹を駆け抜ける。

「「剣士」ーーー！」
『「金色の閃光」ーーー！』

互いが互いの綽名（あだな）を絶叫し合いながら、その戦闘はさらに加速していく。その速度は最早並みの魔導師の目で捉える事が不可能な領域に突入し、その輝きは見る者を魅了させるような光を放つ。

３つの夕日で紅くなった空に奔（はし）る幾つもの光線を避けながら、黒いボディースーツを纏（まと）った金色の魔導師が蒼い機械人形へと迫る。すると、その蒼い機械人形は右手に折りたたんでいた、その機械人形の腕ほどもある大剣を展開し、迫りくる魔導師へと、それを上から下へ振り下ろした。

それを魔導師は自身の体とほぼ同じ大きさの大剣で防ぐ。だが、蒼い機械人形はそれに構わず、その勢いのまま右手の大剣を振り下ろし、大剣ごと魔導師を後退させた。その衝撃に顔を顰（しか）めながら、魔導師は大量の光矢を追い打ちをかけようとした機械人形に放ち、その動きを牽制すると、後退させられた勢いのまま距離を取った。

だが、蒼い機械人形はその距離が出来るや否や、右手に展開していた大剣を再び折り畳み、魔導師に桃色の光線からなる弾幕を放つ。何発も、何十発も連射されて構成されたその弾幕は、その一発一発がＢランクの魔法に匹敵する威力を持ち、並みの魔導師なら一撃で葬り去る事が可能である。そして、その一撃で魔導師を葬る事ができる光線の弾幕は、確実に魔導師を捉えた、かのように見えたが、

『何ッ！？』
『そんな！？』

魔導師はそれを神速でもって、その全てを避けた。それも掠り傷一つ負わずに。それにはさすがに蒼い機械人形も驚いたのか、光線を放つ動作を一瞬止めてしまった。

「貰った！」
『な！　ックゥウウ！？』

そしてその一瞬は、魔導師にとって距離を詰めるのには十分な時間であった。瞬き一つ分のその時間で機械人形との距離を無くし、その懐に機械人形よりも小さな体躯を潜り込ませ、両手で握った大剣で機械人形の左脇腹を斬り裂くべく、その大剣を自身の右側からほぼ水平に薙ぎ払う。

だが、機械人形は右後ろ脇から左手で抜いたＧＮビームサーベルで、その光の大剣による必殺の一撃を受け止めた。

「この……！」
『エクシアァアアア！！』
『ＧＮドライヴの出力を限界まで上げます！』

光りと光りの激突によって生じる閃光で目を閉じかけながら、魔導師はその必殺の一撃を振り切るために、さらなる力を両腕に込める。だが、それを嘲笑うかのように、機械人形は魔導師の大剣を魔導師側へと押し戻していく。

それは純粋なる膂力の差であった。いかに魔導師が魔力で自身の

体を強化できるとはいえ、それには当然限界が存在する。だが、この機械人形に備えられている機関は、その限界を凌駕（りょうが）する肉体と怪力（装甲出力）を機械人形に与えていた。

そして人間の限界を超越した能力（性能）を持つその機械人形は、魔導師の大剣を徐々に押し返しながら、再び右手に大剣を展開させ、それを一気に魔導師の脳天めがけ振り下ろした。

だが、魔導師はそれを喰らう前に、機械人形に押し戻される勢いを利用して後方へと下がる。そんな魔導師の鼻先を、銀色の大剣が風を斬り裂きながら通過する。それに冷や汗を流す前に、魔導師は籠手（こて）が付いている左手に電気を纏わせ、それを機械人形へと打ち込んだ。

『プラズマアーム』

それは機械人形の胸部に叩きこまれ、機械人形を数歩分後退させる。そしてその後退した距離は大剣を振り下ろすには絶好の距離だった。

「バルディッシュ！」
『カートリッジロード』

ガコンガコン！

「撃ち抜け、雷神！　ジェットザンバー―！」
『ジェットザンバー』

カートリッジを二発使用して発動されたその魔法は、魔導師の持つ大剣から衝撃波を発生させた。そしてそれは蒼い機械人形を襲い、

その機動を封じ込める。魔導師はそこに本命の一撃――――魔力刃による斬撃――――を与えるべく、さらに一歩踏み込み、先程よりも二回り以上大きくなった大剣を振り下ろした。

しかし、

「トランザム！」
『ＴＲＡＮＳ－ＡＭ』

世界を震わすかのような甲高い音と共に聞こえたその声は、魔導師の耳にも届いた。そしてその声が齎すモノを理解する前に、鮮血よりも紅くなった流星は魔導師の後ろへと回り込み、腰から抜いた大小の剣で魔導師へと斬りかかる。

「なッ！？」
『ディフェンサープラス』

それをバルディッシュが展開したバリアがギリギリで防ぐも、

『ウォオオオ！』

紅くなった流星はそれを大小の二刀で何度も何度も上から叩き付ける事で、粉々に砕く。だがその叩きつけている合間に、魔導師は自身の前面に振り降ろしていた光りの大剣を、強引に身を捩(よじ)りながら軌道を変えさせ、後ろの機械人形へと水平に振るった。

しかし、機械人形はその大剣を、魔導師よりもなお早い動きで数度、あるいは数十度、大小の二刀で斬り刻むことで、その刀身をバラバラにさせ、ただの魔力の欠片へと変える。

そしてそれだけに留まらず、紅い機械人形は魔導師がバラバラになった刀身を理解するよりも早く魔導師の胴体にミドルキックを放ち、地面へと蹴り落とした。それに魔導師は成すすべも無く地表に激突し、盛大な土煙と瓦礫の山にその姿を埋もれさせた。

『これで！』

そして魔導師が着地したであろう地点に、右手のＧＮソードのライフルモードと左手のＧＮバルカンによる、雨の如き連射を放つ。その連射は魔導師が地面に衝突した際に生じた土煙を貫きながら、その地点に幾つものクレーターを造り、周辺の地形を変えていった。

『……』

『ＴＲＡＮＳ－ＡＭを終了します』

トランザムの限界時間までその連射を続けた紅い機械人形は、魔導師が堕ちた所を注視しながら両手に持っていた大小の二刀を腰に戻し、元のトリコロールカラーへと戻っていく。

『……よし、行くぞエクシア』

『イエス、マイスター』

そして蒼い機械人形は土煙が収まっても姿を現さない魔導師をその場に残し、蒼碧色の軌跡を描きながら去っていった。

「……」

『サー、目を覚まして下さい、サー！』

「……うぅ」

『目が覚めましたか、サー？』
「……え？　バルディッシュ？」
『イエス』
「ここは……それに「剣士」は……？」
『ここはマスターが地面に激突した時、その衝撃でできた岩塊によって形成された瓦礫の空洞の中です』
「……そう」
『そして「剣士」ですが……どうやら此処から去っていったようです』
「……ありがとう、バルディッシュ」

どうやら私は「剣士」との戦いに負けたみたいだった。どうやって負けたのかは分からないけど、相手が途中から紅くなってもの凄く速くなったのは、途切れ途切れの記憶の中にもはっきりと残っていた。あれが何なのかは分からないけど、これだけは分かる。

私は自分の切り札であるソニックフォームを使っても、「剣士」に勝てなかったんだ。

「ッ！？」

それを自覚した途端、私の目から涙が一筋、二筋、三筋……と、どんどん頬に線を引きながら地面に落ちていった。まるで胸一杯に広がった悔しさがそのまま溢れ出たように、その涙はとめどなく流れる。

「うぅ……グスッ」
『サー……』
「だい、じょうぶだから……バルディッシュ。すぐに、すぐに泣き止、むから……グスッ」

でも、私の涙は一向に収まる気配がない。泣いても泣いてもすぐにまた涙が出てくる。それを情けないと思うと、また泣いてしまう。

幾度それを繰り返したであろうか。漸く涙が収まり、瓦礫の中を折れた肋骨の痛みに耐えながら（これで済んだのは僥倖だった）外に這い出ると、その頃には既に3つあった太陽は完全に沈み、今度は2つの月が南天で青白く光っていた。それをぼんやり眺めていると、心地よい冷たい風が私のバリアジャケットと髪をはためかせながら通過していった。それに目を閉じながらその心地よさを甘受していると、その瞼の裏にいきなり「剣士」の姿が浮かんできた。

「……ッ！」

その姿を見て溢れだしそうになる涙と感情を制し、そして体中の痛みを耐えながら、私はあることを考えていた。

（本当に、あれは機械人形なのだろうか？）

それは私が機械人形と向き合った時に感じた、一つの疑問。あの姿にはただの機械人形が持ち得ない気迫や覚悟といった物が感じられるのだ。それも、尋常ではない物を。

（もしあれが機械人形やロストロギアでないとしたら、その正体は……何？）

しかし、もしこの推測が正しければ、彼らは一体何なのであろうか？　それが分からない。機械人形でもロストロギアでもない（これはまだよく分からないが）とすれば、他に有り得そうなのは……

「……バリアジャケット？」
『サー？』
「……まさかね」
『？』

でも、それこそ有り得ない推測。何故なら彼らからは魔力を一切感じないからだ。だから管理局は彼らを探し出すのにも苦労しているというのに……。

でも、もしも、もしもこれこそが一番答えに近いとすれば、あの「剣士」の正体は人の可能性が……

でも、それでも私はこの刃を止めれない。止める事ができない。だって、彼らはあまりにも重い罪を犯しているのだから。

（「剣士」、もしあなたの正体が人だとしたら、どうしてこんな行いをするの……？）

心の中で尋ねたその問いに、しかし月は静謐（せいひつ）を保ったままその質問に沈黙を通し、ただ静かに彼女と向き合っていた……。

―同年同日・第９７管理外世界・？？？―

「……？」

白いコートを纏い、これまた白い長袖長ズボンを着たアップルは、とてつもない魔力を持った魔導師が、東京にかなりの速さで迫ってきているのを、その遥か遠方から捉えた。

「……あり得ない。どうして彼女がここに？」

だが、その魔力は本来ここに在る筈がない物、いやあってはならない者であった。何故ならこの魔力を保有する人物は、本局の護衛に回されていると推測されていたのだ。なのに、何故……？

「……む！？　これは、まさか……！」

だが、予測していなかった事態はこれだけに留まらなかった。恐らくＬ級次元航行船と思しき巨大な魔力が、オーバーＳランクとＡＡランクの魔導師を一人ずつ引き連れて、トレミーが待機している衛星軌道上に突如として出現したのだ。

「そうか……そういう事」

かなりの速さで迫ってきた魔導師が、『ＯＯガンダム』とセラヴィー、そして高町なのはの戦場へと突っ込んでいくのを見届けながら、アップルはそれでもただ傍観に徹していた。

「まさかフェイト・T・ハラオウンとシグナム、ヴィータの全員を引き連れてくるとは、予想だにしていなかった。さすがにフェイト・T・ハラオウンぐらいは本局に残すだろうと想定していたが、どうやらその見込みも甘かった」

そして彼は仮面の奥にある蒼い眼を、L級次元航行船の8番艦「アースラ」があるであろう場所に向けた。その瞳に決意と憂いを込めながら、しかし残念そうに呟く。

「あそこに我がマスターが深愛（しんあい）する女子（おなご）がおり、また我が後継書の後継書がおるのか。……挨拶をしたかった」

その言葉が言い終わると同時に、彼の目の前では金色と蒼碧色が螺旋を描きながら、4年前の戦いの続きを始めた。

―同年同日・同世界・日本―

噴き出る、噴き出る、噴き出る。血が、血が、血が。真っ赤な、真っ赤な、真っ赤な。8年前と、8年前と、8年前と。全く、全く、全く。同じ様に、同じ様に、同じ様に。

……そういえば、あの時はどうして堕ちたんだっけ？　確か、急降下してきた敵の攻撃を避けようとして、でも体が動かなくて、それで桃色に光る剣で斬られたんだっけ？　……あれ？　でも、私はあの時の記憶を失っていたはず。なのに、どうして桃色に光る剣なんて覚えているんだろう？

……。……。……。

……駄目。全然思いだせない。

でも、確かあの時、あれは夕陽を背にしていて、それで背中から大きな蒼碧色の翼を広げていたような……。

そう、ちょうど目の前の「ガンダム」みたいに、額にＶ字アンテナがあって、それで蒼碧色のデュアルアイが光って……

「……ハッ！？」

『マスター！』

なのははその無意識の深層から現れた情報を強制的に中断させ、眼前の敵に集中する。しかし、時既に遅く、『ＯＯガンダム』はなのはへと右手のＧＮソード?を振り上げていた。

『これで終わりだ、高町なのは！』

『この一撃で貴女に再び長い刻（とき）の焉（お）わりが訪れる事を願います』

『これがＯガンダムを私とマイスターの世界から駆逐する第一歩になる事を祈ります』

『『『……』』』

なのはは『ＯＯガンダム』の右手に握られたＧＮソード?が自身へと振り下ろされるのをただ見詰める。その先に待っているであろう未来(死)を予感しながら、しかし体を動かせなかった。

（やられる!?）

剣は大気を切り裂く音を奏でながらなのはへと迫り、

『『……！　マイスター！』』
『何ッ!?　ガアアアッ!』

突如なのはの左側から現れた金色の輝きを放つ何かに吹き飛ばされた。

「……え?」

しかし、なのはは知っている。その金色の輝きを。その美しい黄金色の光りを。

金色の魔力光を発しながら中空に浮く彼女は、なのはの目から見てもとても美しかった。二つに結わえられた、絹よりも滑らかそうな金色の長髪。強い意志が籠(こ)められた、ルビーを思わせる紅の瞳。そしてそれらと絶妙にマッチする、人形よりも整った美しい顔。そのどれもが美麗という言葉だけでは表現することができない、至高の芸術品を思わせるような美しさを、彼女はただそこにいるだけで体現していた。

「なのは、大丈夫？」
「フェイト……ちゃん？」

そんな彼女が視線を前に向けながら、なのはに声をかけた。その声には怒りや悔しさ等の、様々な感情が入り混じっており、彼女――フェイト――は後ろを振り向きたいのを必死にこらえながら、じっと眼前の敵を睨みつける。

『……どういう事だ？　情報ではこいつはここにいないはず……』
『恐らく何らかの不備があったのでしょう』
『……マイスター』

その眼前の敵、『ＯＯガンダム』はすでに体勢を整え、剣を構えていた。その体からは並々ならぬ闘気を発しており、ただ前に立つだけで心を砕かれそうになる。

「フェイトちゃん、どうしてここに！？」
「なのは、ちょっと待ってて」

それを見据えながら、フェイトはたった一言だけなのはに言った。

「先にこっちを片づけるから」

と。

『……ッ！　マイスター、「金色の閃光」を叩き潰しましょう！
そして私達が４年前よりもさらに「ガンダム」に近づいた事を証明するのです！！』
『……ああ、そうだなエクシア。オレ達がどのくらい「ガンダム」

に近づけたか、ここで確認しよう』

それにエクシアは憤怒を抱き、刹那も自身が舐められていることに不快を抱く。だが、フェイトの顔には焦りも緊張も見受けられない。それを感じ取った刹那は無意識の内にＧＮソード?を握る力を強めた。

「……」

『……』

そして彼と彼女は４年という歳月を経て、今再び戦場で対峙した。蒼碧色の粒子と金色の魔力を周囲に撒き散らし、静かに互いの事を見つめ合いながら、彼と彼女はその手に一つの剣を持つ。善悪を相殺する銀色の剣と正義を顕わす金色の剣を。

「バルディッシュ、カートリッジロード！」

『イエス、サー』

『Ｏガンダム、エクシア。行くぞ！』

『『イエス、マイスター』』

そして、彼と彼女の実に４年振りとなる戦いが、東京の中空で始められた。

「ハアアアア！」
『ハアアアアア！』

互いが同時に相手に向かって飛翔し、両手に握られているバルディッシュとＧＮソード?を後ろに振りかぶり、渾身の力でそれを振り切った。そして数多の火花を散らしながら、互いの剣と剣が激突し合い、鍔迫り合いとなってそこから微動だにしない。が、それも僅か数秒の事だった。

「クゥッ！」

その数秒後には、『ＯＯガンダム』はその膂力に物を言わせ、フェイトを元いた地点へと押し返した。そしてフェイトがその衝撃にたたらを踏んでいると、『ＯＯガンダム』はさらなる追撃をかけるべく、ＧＮドライヴを後方に動かしながら粒子を噴射させ、一気に前進し、

「バルディッシュ！」
『ソニックムーブ』
『むッ！?』

突如、その姿を見失った。だが『ＯＯガンダム』はすぐさま後ろに振り向き、ＧＮソード?を一閃した。すると、先程まで確かに何もなかったはずの空間に、突如として現れたフェイトが『ＯＯガンダム』に斬りかかっていたが、それを『ＯＯガンダム』の既に放った一閃が迎え撃つ。

「……クゥ！」

『……ハア！』

火花を散らしながら、再び衝突した金色の剣と銀色の剣による押し合いは、またも銀色の剣に軍配が上がった。金色の剣は数秒鍔迫(つばぜ)り合いを保つも、銀色の剣は体勢も勢いも関係なく金色の剣を押し弾く。そして両者に数メートルの距離が開いたが、『ＯＯガンダム』は追撃をかけることができなかった。

それはフェイトがその一撃が押し弾かれた、と同時に発動させたブリッツアクションで自身の剣の戻りを速くし、『ＯＯガンダム』ですら回避するので精一杯な速度の一撃を、『ＯＯガンダム』の鼻先に繰り出したからだ。

「……」
『……』

両者は数メートルの距離を測りながら、無言で互いの視線を交差させる。さも言葉は要らないとでもいうように、先程の剣戟(けんげき)で前哨(ぜんしょう)戦は終わりだとでも言うように、互いの剣を握り直し、力を、自身の思いをそれぞれの手に籠める。

「……ハアッ！」
『……ハアッ！』

そして「金色の閃光」と「蒼い流星」は三度互いの剣を交差させ、離れては近づき、近づいては離れながら、穹(そら)に金色と蒼碧色の螺旋を描いていった。

―同年同日・同世界・衛星軌道上―

「あれが「ＣＢ」の母艦かいな……」

はやてはアースラのブリッジで、モニターに映し出された「ＣＢ」の母艦らしき物をみて、思わず唸ってしまった。

（恐らくやけど、「ＣＢ」のあの母艦、少なく見積もってもミッドと同じ、いや、下手したら上回るぐらいの技術力で造られてんちゃう？）

はやてがそう思うのも無理はない。何故なら「ＣＢ」の母艦と思しき船は、此方を発見したと同時に、このアースラを上回る速度で動きだしたからだ。その発進速度、加速性能及び旋回性能全てにおいてこのアースラを、いや恐らくＸＶ級次元航行艦をも上回るその母艦は、正直に言えばミッドの技術力で造りだせるとは、はやてには到底思えなかった。

（一体「ＣＢ」はどんだけの技術力を持ってんねん！）

しかし、このままでは逃げられてしまうのは確実だ。現に、今も此方と向こうの距離は開きつつある。

（……どないしよ？　「Ａ・Ｆ」を形成するにはまだ遠くてすぐに効果範囲外に逃げられてしまうやろうし、かといって此方の武装じゃ撃沈なんて無理やろうし……）

だが、どうする事も出来ないのもまた現実であった。向こうの巡航速度が此方の予想をはるかに上回っていたのだから。

そもそも、本来ならもう少し敵母艦から近い位置に現れる予定だったのだが、『ＯＯガンダム』がなのはの前に現れたのを受け、急遽次元空間からこの次元へと転移してきたのだ。そのおかげで何とかフェイトを転送魔法で（この時日本のトランスポートが何故か使えなかったので、日本から少し離れた太平洋に転送させた）地球へと送り、なのはを救う事が出来たが、此方の方はどうしようもなかった。

（う～ん、このままいっても無駄やろうし、これはもう逃げられるしかない、かな？）

そんなわけで、はやてはすでに敵母艦を諦めていた。これはもうどうしようもない。ま、チャンスはまだあるやろ、と。そんな風に楽観しながら。

しかし、「ＣＢ」の汎用次元航行戦艦「プトレマイオス？」は、そんな彼女の目の前で信じられない行動を実行させた。

「な、なんやてーーー！？」

「「「うっそーーー！？」」」

―同年同日・同世界・イギリス―

「まだ動けたのね、ギル・グレアム……！」

「何、たっぷり休ませて貰えたからさ」

グレアムはその左手に突き刺さったファングを右手で握りつぶしながら、皮肉を交えてアルケ―と話す。その胴体に空いた穴は応急処置で何とか塞がれ、致命傷をどうにか重傷といった具合にまで回復させていた。が、それでも戦闘をするにはあまりにも無茶な傷であるのには違いなかった。

「それに、うら若き乙女を傷つける悪魔はここで倒さねばなるまい？　英国紳士としてな」

「ふん、よくそんな減らず口を叩けるわね。これから私に殺されることが分かっていないのかしら、あなたは？」

そんな会話をしながら、グレアムはちらりと、後ろに居るヒュドラの様子を見る。その左半身は見るも無残な姿に成り果ててはいたが、自分よりも傷が浅かったのか、少し茫然としながらも、その顔色はまだ自分のように青白くなってはいなかった。

「それに、人殺しを放っとくのは、夢見が悪いからな」

それに安堵しながら、グレアムは気軽に、そう、あまりにも気軽にその言葉を言ってしまった。それが彼女にとってどのような意味を持っているのかを知らずに。

「……あは……ははは……！」

「……うん？」

グレアムがそれに気付いたのは、その言葉を言ってしまった後だった。アルケーから発せられる、壊れた笑い声。理性を持っている者には決して出すことができない、狂気や妄執といった、常人が持ち得ない物を顕現させているように聞こえる、あまりにも恐ろしく、またおぞましい笑い声。

（……何だ？）

何故アルケーの様子がここまで豹変（ひょうへん）したのか、グレアムには全く分からない。彼は自分が発した言葉にその原因があると踏んだが、どれが地雷だったのか見当もつかなかった。すると、アルケーがその目を異様に光らせながら、ある言葉（真実）を吐き捨てるように告げた。

「あははは……そう、そうよね？　そうだよね？　人殺しを放っておくのは悪いことよね？　しちゃいけないことよね？　夢見が悪くなるから、世界に悪が生まれるから、管理局としては捕らえなければならないのよね？」

「……？」

「なのに……どうしてあなた達は、私の、世界にたった二人しかいない家族だった兄兄ズを殺した、時空管理局に所属する魔導師を捕らえないのかしら？」

「……何を言って」

「これは、事実よ」

ぴしゃりと、グレアムの言葉を遮って、ネーナはそう断言した。
これが真実であると、それ以外は虚実であると、そう主張する。だが、グレアムはそれを信じない。信じることができない。

「ふ……」
「……何がおかしいのかしら？」
「何……貴様のような殺戮者（さつりくしゃ）の言葉を信じる輩（やから）がいるのなら、この目で直接見てみたいと思ってな」
「……そう、別に信じなくてもいいわ。私だって信じてもらおうとは思っていないしね。だけど、これだけは言っておくわ」

そう言われたネーナは憎悪が渦巻く瞳でグレアムを睨みながら、しかし口元には邪悪な笑みを浮かべ、

「私の兄兄ズを殺したのは、クロノ・ハラオウンとシグナムという二人のオーバーSランク魔導師よ」

彼女が殺さなければならない人物の名を、管理局に所属している「人殺し」の名を口にした。

―同年同日・？？？―

「……」

アーカイブは目の前のモニターに映る「金色の閃光」と「蒼い流星」の戦闘を眺めながら、幾つもの魔法を発動させ、アップルとのリンクを維持させていた。

「……」

アーカイブは不意に視線を右横へと向けた。そこには一つの写真立てがあり、その中では何人もの男女が満面の笑みを浮かべている。

「……」

アーカイブはそれを数秒見つめると、唐突に視線を先程とは逆に動かした。そしてその視線の先にも写真立てが１つ置いてあり、そこには４人の少年少女と２匹の動物が笑顔で映っていた。

「……」

アーカイブはそれを数十秒眺め、今度は体の正面へと視線を動かした。

「……」

アーカイブはそこに置いてある3つ目の写真立てを、じっと見続ける。数秒、数十秒では無く、数分間も。

「……」

アーカイブはそれを飽きることなく見続けていたが、モニターで一際大きな音が聞こえると、我に返ったようにモニターに視線を戻し、その映像に神経を集中させた。

「……」

アーカイブはその後、自身の周りにある3つの写真立てを見ることはなかった。ただ黙々とモニターを見て、魔法を発動させる作業に没頭していた。

「……」

アーカイブはその顔に何の表情も浮かべずに、その薄暗い部屋で延々と作業に没する。何かに囚われたかのように、しかしその瞳には力強い意志を宿しながら。

その3つ目の写真立ての中では、二人の少年少女と30センチぐらいの少女が手を取り合いながら、幸せそうな顔で微笑んでいた。

第２１話　執務官と殺刃鬼はその手に剣を持つ（後書き）

今回内容が薄いような気もしましたが、それでも1万2千字だったので、とりあえず投稿しました。

第１０管理世界は完全に作者のオリ設定です。公式では何も書かれていないのをいいことに、これからも色んな世界を捏造していく予定です。それが許せる方は、これからもこの作品で楽しんで下さい。

そろそろ地球篇を終わらせて次に移りたいのですが、第２２話でも終わりそうにありません。それは当初のプロットを無視してフェイトやらヒュドラやらを登場させたからなのでしょうが、このままいくと地球篇だけで5万字はいきそうです。

……果たしてこの作品は本当に終われるのか、作者自身が疑ってしまいました。まあ、それも作者次第なので頑張っていきたいと思います。このような駄作を読んで下さった皆様に感謝を。

最後に。

もしかしたら感想で出る予定はなし、といったモノが出る……かもしれません。可能性は低いですが。

第２２話　戦いは終わらず、役者は踊り続ける（前書き）

最近重さが足りないような……気がします。気のせいでしょうか？

では、開演です。

第２２話　戦いは終わらず、役者は踊り続ける

真実は疑いなく美しい。しかし、嘘もまた同様である。

――ラルフ・ワルド・エマーソンより

―新暦７５年１０月９日・次元世界・時空管理局本局―

「は？　あの、それはどういう事なのでしょうか？」

はやては間抜けな声を出しながら、目の前の人物にもう一度尋ねた。

「だから、貴方達機動六課は現時点を持って本局の護衛任務終了よ。だからすぐにアースラに乗って、第９７管理外世界に出向しなさい」

それに先程とほぼ変わらない答えを言うミゼット。

「いえ、だからどうしてうちらが第９７管理外世界に出向するんですか？」

その答えを理解できない為に、もう一度はやてはミゼットに尋ねた。六課はあくまでもロストロギア関連でしか動けない部隊だ。よ

って、現在ロストロギアがない事が確認されている第９７管理外世界に行く理由がない。

「……これは絶対に洩らさないで欲しいのですが……」

ミゼットはそう言って座っていた椅子から立ち上がり、そのままはやてに近付くと、その耳元でこう囁いた。

「第９７管理外世界で何かが起きる可能性があります。それも高町なのは一等空尉関連で」

「！？」

その囁きに、何故この人は地球で何かが起こると思うんやろ？とはやては当然のごとくそう疑問に思ったが、自身の推測の一つにそうなる可能性をすでに考えていたはやては、その推測が現実味を帯びてきたのを感じ、背中から嫌な汗を流した。

「これはあくまでも推測の域を出ませんが、高町なのは一等空尉に突然出された帰郷命令には、何らかの意図があります。それも、恐らくは「ＣＢ」側の意図が」

「なッ！？　し、しかし、そうしたら人事部の上層部が管理局を裏切っている事になるのではないのですか！？」

「いいえ、上層部ではありません。トップに立つ人間がです。私は既に人事部のトップだった人物を拘束して、「ＣＢ」の情報を聞き出しています」

その言葉を発したミゼットの顔には、何の表情も浮かんでいなかった。淡々と、冷静に、正確に事務仕事をしているかのような調子で、裏切り者の処罰を口にした。

それにはやてはまたも背中から冷たい汗を流したが、それも管理局の為には必要な事と割り切り、話を進めた。

「それで、その結果はどうなったんですか？」

「収穫は一つだけだったわ。それもたった一人のコードネームだけ」

ミゼットは立ったまま自分の机の棚からＡ４ほどの大きさの茶色い封筒を取り出すと、それを直接はやてに渡した。それは既に封が切られていたので、はやては遠慮する事無く、中から一枚の紙を取り出して、それに目を通す。

そこには人事部のトップがどのような経緯で「ＣＢ」に協力したのか、また何をどう協力したのかについて、事細かに書かれていた。しかし、はやてはそれらに着目する事無く、たった一つの名前を凝視していた。

「コードネーム「アーカイブ」……」

「貴方には独自にその人物について調査して欲しいの、八神はやて二等陸佐。もちろん極秘裏にです。そしてこれについては誰にも話してはいけません。例え貴方の家族でさえもそれは例外ではありません。最早「ＣＢ」がどこまでこの管理局に根を伸ばしているのか分からない以上、局員の全てが怪しいと思って行動して下さい。分かりましたか？」

その名前を声に出すと同時に紡がれたその命令に、はやては一瞬戸惑いの表情を浮かべたが、

「……分かりました。八神はやて二等陸佐、その命令を受諾（じゅだく）します！」

次の瞬間には険しい表情を顔に張り付かせて、その命令に大きく了承の返事をした。

―同年同日・時空管理局本局・アースラ内―

機動六課の面々は本局のドッグに入港したアースラにアルカンシェルが装着されるのを見て驚愕した。自分達はアースラの定期点検と本局の護衛任務でここに入港したはずなのに、何故アルカンシェルなどという武装を取り付けられるのか、あまりにも不可解だったのだ。

「はやて、これはどういう事!?」

アースラのブリッジでフェイトが、そこに居る局員達を代表して、この機動六課の部隊長であり、何故こんな事をするのかを唯一知っているであろうはやてに問い詰める。それにはやては少々及び腰になりながら、先程のミゼットの極秘命令を伝える。

「機動六課はアースラに搭乗して、第９７管理外世界に出向するんや。これはミゼット最高評議会議員からの極秘命令やから、断る事はできへん」

「なっ！？」
「そしてアースラにアルカンシェルが装着されてんのは、万が一の事態の為や。そう、「ＣＢ」と遭遇す……」
「……はやて、どういうこと？　どうしてそこで「ＣＢ」が出てくるの？」

見ると、フェイトがかなり怖い目つきではやてを睨んでいた。それこそ並みのホラーを凌駕するほどの恐怖を感じるほどの目つきで。それにはやてはさらに及び腰になりながらも、必死に説明しようとする。

「せ、せやから、もしかしたらなのはちゃんを第９７管理外世界で休養させるように指示したんは「ＣＢ」かもしれん可能性があるから、うちら……」
「はやて、それってどういう事だよ！？」
「……ヴィータ、頼むから話折らんといて……」

涙をさめざめと流しながらはやては思った。とりあえずこの機動六課には「ＣＢ」はいない、と。

はやてはもう一度さり気無くブリッジを見渡す。するとあちこちで皆がなのはを心から心配している表情をしていた。中には無表情を装っている者もいたが、よくよく見ると、その拳が硬く握られているのが分かる。

（ま、とりあえずここは大丈夫……そうやな）

はやては機動六課の面々を「ＣＢ」の根が及んでいない仲間と、そう判断した。だが、そう判断しても、彼女に任されたもう一つの命令については話す事が出来なかった。それに僅かばかりの申し訳

なさを感じていると、

「「はやて、聞いてる！？」」

「き、聞いとるよフェイトちゃん、ヴィータ！」

フェイトとヴィータの事をほったらかしにしていたのがばれ、大音声で注意された。それに理不尽や！　と思いながらも、はやてはその後2時間かけて説明し、漸くその二人から理解を得られ、やっと解放された。

「うぅ、あかん……燃え尽きてもうた、真っ白に……」

その時のはやては幾分白くなっていたという。もちろん次の日には完全回復していたが。

「貴方に頼みたい事があるわ、ユーノ・スクライア司書長」

「何でしょうか、ミゼット最高評議会議員？」

その二人は白を基調にした壁で囲まれたミゼットの執務室で、密かに会談をしていた。それもその会談を知るのは臨時最高評議会のメンバーと目の前にいるこの青年のみという徹底ぶりだ。

「はやてちゃんに「ＣＢ」のエージェントだと思われるコードネーム「アーカイブ」を探らせるように命令したから、それを手伝って欲しいのが一つ」

ミゼットが右手で３本の指を立て、それを１本折る。それを見ながらユーノは静かに頭を縦に動かした。

「二つ目は「ＣＢ」及び「ガンダム」についてもう一度無限書庫で調べて欲しい事」

２本立っていた指が１本になった。それを見たユーノはまた静かに顎（あご）を縦に動かす。

「そして最後に、この管理局にいるアーカイブ以外の裏切り者を洗って……」

「その事ですが」

そして遂に１本が０本になるという直前、ユーノはミゼットの言葉を突然遮った。それに疑念を抱きながら、ミゼットはユーノにその言葉の先を促した。

「もう大体の目星はついています」

「なッ！？」

そのユーノの報告に、ミゼットはらしくもなく驚愕した声を洩（も）らした。それに若干動揺しながら、上品に口元に手をあて、その先をさらに促す。

「僕は「ＣＢ」が宣言した日にはもう管理局の内部に「ＣＢ」の内

通者が居ると思い、独自に調査をしました。そしてこれがその結果です」

言って茶色いＡ４ぐらいの封筒をミゼットに渡す。それはすでに封が切られ、中の物を取り出せるようになっていた。

それにデジャブを感じながら、ミゼットは中に入っていた数十枚もの紙を一度に取りだし、それに目を通し始めた。そして、次第にその顔が険しいものへと変わっていった。

「……これは、本当なのかしら？」
「ええ、まず間違いないかと……」
「そう。……分かっているとは思うけど」
「大丈夫です。この事は誰にも話していません。それこそ彼女たちにすら」

それを聞いたミゼットは安心の溜息を吐きだすと、椅子の背もたれによりかかる様に身を預けた。

「もしこれが本当なら、管理局は、いえこの世界はすでに彼らの掌の上、ということになりますね」
「……」

ユーノはミゼットのその言葉に顔をしかめたが、何を言うわけでもなく、ただ沈黙してその問いに答えた。

―同年１０月１０日・第９７管理外世界・軌道衛生上―

（あ、ありえへん、ありえへんやろそれは！　いくらなんでもＳＦ過ぎるやろ！？）

はやては目の前の光景を信じられない思いで見ていた。そのくらい目の前の光景は常識と照らし合わせると、有り得ない物だったのだ。

そう、

数百メートル級の艦船が大気圏に突入しているという光景は。

その神秘的で圧倒的な光景は、暫しの合間アースラのクルー達を茫然自失にさせた。中には目をこする者や頬を抓る者もいる。しかし、その夢のような光景は確かな現実としてそこに存在していた。

「「「……」」」

アースラのその様子に敵母艦は構う事無く、地球の大気圏へと突入していく。蒼碧色のオーラを纏い、摩擦熱で周囲を灼熱色にさせながら、確実に地球へと降りて行く。

この時ほどはやては自身の楽観した推測を恨まずにはいられなかった。だが、誰がこのような事態を推測できたであろうか？

恐らく誰も想像などできなかったであろう。故にこれははやての責任でも、ましてアースラのクルー達の責任でもない。ただ「ＣＢ」側の力が予想を遥かに上回っていただけなのだ。

「……完敗やな」
「「「……」」」
「まさか敵さんがこないな隠し玉を持っとったなんて、思いもせえへんかったわ」
「「「……」」」
「……シグナム、ヴィータ、聞こえとる？」
『……え、えぇ、主はやて』
『き、聞こえているよはやて……』

はやてはアースラに待機させていたシグナムとヴィータに通信を繋いだが、その二人もあの光景に目と心を奪われているらしく、その声はとても弱々しく聞こえた。それに仕方がないと思いつつ、はやてはその二人に新たな命令を下した。

「ほな二人をこれから地球に転送するから、あと１０分後にはブリッジに来てちょうだいな」
『了解しました、主はやて……』
『……分かったよはやて』

そう言ってはやては目の前のモニターに目線を移し、そこで「剣士」に苦戦しているフェイトを見て、ある決心をした。

「……グリフィス君、後は頼むで」
「……え？　八神部隊長？」
「うちもシグナム達と一緒に出るから、ここの指揮は任せるで」
「……えぇ！？」
「ほなうち準備に忙しいから」
「や、八神部隊長ーーー！？」

そのグリフィスの叫びを背に受けながら、はやてはアースラのブリッジから出ると、自身の部屋へと真っ直ぐに歩いて行った。

「……リイン」
「はい、はやてちゃん」
「……一緒に、ついてきてくれる？」
「もちろんです、マイスターはやて」

そして自身の左肩付近に浮かんでいたリインにそう問い掛けながら、自身の戦の準備を完了させるべく、若干駆け足気味に部屋へと飛び込んでいった。

「敵艦は？」
「現在後方から２０００離れた所に停滞しています」
「たぶん諦めたんですよー。Ｌ級次元航行船には大気圏突入能力が存在しないのですからー」
「ミレイナの言う通りかもしれないけど、一応警戒しといてねフェルト？」
「了解です」

トレミーがゆっくり地球と呼ばれる星に突入していくのをブリッジから眺めながら、トレミーのクルー達はそこで漸く安堵の溜息を吐きだす事が出来た。まさかあの機動六課のアースラが来るとは、スメラギですら予想だにしていなかったのだ。

「それにしても、予想外だったな。まさかあんな遠くから現れるなんて、何を考えているんだ向こうは？」
「それについては見当が付いてるわ。恐らくフェイト・Ｔ・ハラオウンを「Ｔ・Ｊ」の範囲外に転送する為に、向こうの予定よりも速めに次元世界から転移しなければいけなかったのよ。高町なのはを救うために、ね」

正直に言うと、管理局の次元航行部隊がこの世界に現れる事は、既にスメラギの作戦で想定されていた事態であった。そして次元航行部隊が本局の護衛に大半の戦力を回している現状を考えるに、此方に回せる戦力は多くてもオーバーＳランク魔導師一名を保有する部隊だとされていた。

だが、実際に此方に回された戦力は、管理局においても異常な戦力を保有している事で知られる、あの機動六課だった。

（まさかこの私が失敗するなんてね。さすがは管理局というべきかしら？）

自身の戦術予報が外れた事に肩を落としながら、それでもスメラギはこの状況を打破する為に、新たな作戦を幾案も脳内でシュミレートした。

「トレミー、間もなく成層圏を突破し、対流圏に突入します」

「そろそろ東京が見えてきてもおかしくないです～」

そしてある程度の作戦がまとまった時、突如としてブリッジの視界が雲に覆われ、何も見えなくなった。だが、それは本当に一瞬の事で、次の瞬間には眼下に深い青色を湛えた大海がモニター一杯に広がった。

―同年同日・第９７管理外世界・日本―

穹に閃光と流星が瞬きの間に擦れ違い、金色と蒼色の軌跡を残しながら離れ、鮮烈な花火を生じさせながら激突する。そしてそれを

何合も何合も繰り返す。飽きることを知らずに、それ以外の事を知らずに、金と蒼で構成された光条を、子供の悪戯書きのように、空一杯に描いていく。

なのははその光景を「ガンダム」の攻撃により更地と化した、東京湾が見える地上からただ眺めていた。いや、眺めるしかなかった。

「うぅ……」

『マスター、動かないでください。胸の傷は比較的浅いですが、体に蓄積されたダメージが大きいのですから』

「でも……！」

『マスターのお気持ちは分かります。しかし、その怪我とダメージで一体何ができると言うのです？　ここは動かずにじっとして回復に努めるのがベストです』

「……うん」

なのははレイジングハートのその正論に、項垂(うなだ)れながらも素直に従い、その場にへたりと座り込んだ。実際なのははもうかなり限界に近かった。

何故なら、彼女は未だに「Ｊ・Ｓ」事件のダメージと後遺症が回復していないにも関わらず、自身と同等以上の相手と、苛烈という言葉ですら生温い死闘を繰り広げたからだ。

よって彼女は戦うどころか、すぐにでも病院に直行しなければならない程のダメージを、その体に抱えていた。

「……ッ！」

『マスター！？』

「……！！」

その証拠に、なのはは地面に座った途端、声を出す余裕すら無くなるほどの激痛に襲われた。それに奥歯を強く噛み締め、体をきつく抱きしめながら必死に耐える。

「「「……ん」」」

しかし、そんな彼女のすぐ近くで、何人もの人の声が聞こえた。

「「「……はさん」」」

しかし、なのはは痛みに耐えるので精いっぱいで、それが夢なのか現実なのか、判別できなかった。

「「「なのはさん！」」」

しかし、三度目にはっきりと聞こえたその声に、ふと周りを見渡してみると、そこには……

「よ、よかったーーー！」
「大丈夫ですか？」
「「ほっ」」

スバル、ティアナ、エリオ、キャロの４人が、なのはの近くで大きくなったフリードリヒの背に乗って、心配げになのはを見つめていた。

―同年同日・同世界・イギリス―

「……何だと？」

「あら、聞こえなかったのかしら？　ならもう一度言うわ。私の兄兄ズを殺した「人殺し」魔導師はクロノ・ハラオウンとシグナムよ」

「……馬鹿なッ！？」

その二人の名前が出てきた事に、グレアムは少なからず動揺していた。それもそうだろう。誰だって自分の知り合い、それも深い関わりのある人物を「人殺し」だと言われたら驚愕するに決まっているのだから。

「本当の事よ。なんならどうやって殺したのか、ここで教えてあげましょうか？」

「……ふ、ふざけるな！　貴様、いくらなんでもそのような嘘は……」

「クロノ・ハラオウンはヨハン兄をエターナルコフィンで凍らせた後、ブレイクインパルスでヨハン兄ごとその氷塊（ひょうかい）を粉々にして、ヨハン兄を殺した」

「！？」

「シグナムは他のオーバーSランク魔導師と協力してミハ兄を追い込んで、最後にその胴体を袈裟切りで真っ二つにして殺した」

「で、出鱈目（でたらめ）を！」

グレアムはネーナのその言葉に反論する。しかし、その声には動揺が現れていた。

彼はその言葉が真実なのかもしれないと、そう思ったのだ。

それはもしかしたら錯覚だったのかもしれない。アルケーの異様な雰囲気に呑まれ、その内容に引き込まれたからそう思っただけなのかもしれない。

だが、彼は現実にそう思ってしまったのだ。アレの言う事は真実なのかもしれないと。一瞬でも僅かでも少しでも、そう思ってしまったのだ。

そしてそれはグレアムを思考の渦に巻き込み、意識をアルケーから外すのには十分な材料だった。

「隙ありよ！」

『ＧＮバスターーーソオォオドーーー！』

グレアムが気がついた時にはアルケーは既にその懐に潜り込んでいた。そして左肩に二本あるＧＮバスターソードの一本を半壊した右腕で掴み、引き抜いた勢いを保ったままグレアムを逆袈裟に斬りつける。

「クッ！？」

それを間一髪、右手に持っていた杖状のストレージデバイスで受け止めるも、その重い一撃は、これまでの戦闘で消耗していたグレアムの体力とストレージデバイスの耐久度を上回っていた。

「な……！」
「ヤッターーー！」
『ギッチョン、コンップリーーート！』

グレアムのデバイスを真っ二つにしたアルケ―のGNバスターソードがグレアムの体に触れ、その勢いを殺さぬまま、グレアムの体も真っ二つにするべくその刃を進める。そして右の鎖骨（さこつ）を、右の肋骨（ろっこつ）を、右の肺をそれは斬り砕いた。

だが、それ以上は進む事ができなかった。銀色の髪を振り乱しながら接近する黒衣の暗殺者によって。

それに気付いたのは彼我（ひが）の距離が数メートルにまで縮まった時であった。アルケ―はグレアムを斬り砕きながら、それを視界の端に捉えた。

それは言うなれば一つの弾丸だった。いや、弾丸というのはおかしい表現だったのかもしれない。何故ならその暗殺者が手に持っていた武器は刃渡り数十センチのナイフだったのだから。しかし、アルケ―はそれ以外の表現を思いつく事が出来なかった。

何故ならその一撃が自身にとっての銀色の弾丸（シルバーブレッド）になるかもしれないという、そんな死の予感を、アルケ―は無意識の内に感じ取ったのだ。

その暗殺者は左半身からファングを生やしたまま、それほど上手くない飛行魔法でアルケ―へと接近する。その右手に持ったナイフを左腰の真横に宛（あて）がい、まるで抜刀するかのように構え、地面すれ

すれを飛行する。その凍てつくような、もしくは燃やしつくすような瞳でアルケーを射貫きながら、それはトリガーを唱え、目の前の敵に終わりを与えるようとする。

「……ヴェノム、フルドライブ・イグニッション！」
『イエス、サー。フルドライブ・イグニッション』

ガコンガコン！

二つのカートリッジがロードされると同時に、ヴェノムの姿が一瞬で変形した。あの柄が異常に長かったナイフが、その柄に見合うような長さの長刀になったのだ。

その長刀は黒一色で統一されていた。刀身も柄も、その全てが黒。それはまるで目標を闇夜で暗殺する為だけに作られたような、そんな色彩だった。

それを左腰に出現させた、これまた黒い鞘に差し込みながら、ヒュドラはさらなる魔法を発動させるコマンドを口にした。

「……九つの頭剣（とうけん）！」
『ナイン・ブレイズ（一の太刀・八の斬撃）』
「なッ！？　何よこれ！？」
『マイスターーー！？』

その魔法が発動した、と同時にヒュドラの持つ鍔（つば）のない長刀が、鞘の中に張られた薄い氷の上を滑り、刀身が見えないほどの速度で抜刀された。そして中空の様々な場所から魔法によって生じた八つの銀色の斬撃を、その居合の一撃とタイミングを合わせながらアルケーへと放つ。

ヒュドラが抜刀した長刀はアルケーがグレアムから引き抜いたGNバスターソードを僅かに斬り裂くに止まった。しかし、それ以外の八つの斬撃がアルケーの各所を容赦なく斬りつける。

三つはアルケーの胴体を、二つはアルケーの右足を、一つはアルケーの顔面をそれぞれ斬りつけ、その装甲を削り取る。

「きゃあああ！」
『おーのーれーーー！』

その魔法によって生み出された8つの斬撃を受けた衝撃で、アルケーはその体を数十メートル後退させられ、すぐ後ろにあった灰色の岩壁の下に、派手な金属音を奏でながら衝突した。

「……す、スティンガーレイ！」
『スティンガーレイ』

そこにさらなる一撃を加えるべく、満身創痍（まんしんそうい）な体に鞭（むち）を打ちながら、リカバリーさせたデバイスでグレアムは射撃魔法を放った。それもアルケーが衝突した場所よりも上の地点に。

「そ、そんな！？」
『ば、馬鹿なーーー！？』

そしてその射撃魔法により、長い年月を経て形成された岩壁から幾つもの巨大な岩塊が崩れ落ち、それがアルケーへと降り注いだ。それも一つ二つではなく、数十数百という単位で。

「ハア、ハア……」
「……感謝、します。グレアム元提督」
「何、こちらこそ……だ」

その岩塊がアルケ―の姿を完全に隠すのに数秒もかからなかった。そしてそこに十数メートルほどの小高い山ができるのを見終えてから、ヒュドラはグレアムに礼を言った。もしあの斬撃だけだったら、きっとあの赤い異形は再び立ち上がってくると思ったからだ。それに此方こそと言いながらグレアムは隣の少女と共に、安堵の溜息を吐き、張りつめていた緊張の糸を少し緩めた。

その小高い山から小さい石が転がり落ちた事にも気付かずに。

―同年同日・同世界・日本―

世界から悪と見做されたモノと、組織から正義と見做された者が、東京の雲一つない青天で激突する。

金色の剣を輝かせながら、漆黒のスーツを纏い、白いマントをはためかせて、魔導師はその戦場を閃光の如く駆け抜ける。

銀色の剣を煌かせながら、青と白で構成された、堅牢な装甲をその身に纏い、機械人形がその空域を僅か一刀で斬り裂く。

それらは互いに金と蒼碧の光条を描きながら、その姿が霞むほどのスピードで、擦れ違い様に剣を互いにぶつけ合い、そのままその空域を飛翔する。それも一回や二回ではなく、十数度数十度も。

「ハアアアア！」
『ウオオオオ！』

空に明る過ぎる花火を生じさせ、大気に響き過ぎる轟音を奏でながら、それらは無限を表す螺旋のように、終わりなき剣戟をし続ける。４年間の空白を埋めるように、互いの忘れていた感情を思い出させるように。

「バルディッシュ、プラズマランサー！」
『プラズマランサー』

高速で飛行する魔導師――フェイト――の周囲に総数１８個もの環状魔法陣が形成され、槍のような形のスフィアがその中に出現する。そして機械人形に狙いを定め、その全てを一度に発射した。

「ファイア！」

その１８発ものスフィアは、空で環状魔法陣を弾けさせると、光条を残しながら真っ直ぐに複雑な機動をする機械人形へと迫る。そして確実にその姿を捉え、１８発中６発ものスフィアが黄色い煙を上げながらその機械人形に着弾し、その機械人形の姿を一瞬フェイトから見えなくした。

『ＧＮジェット解除』
『ＧＮドライヴを後方に展開』
『ＧＮソード?、ライフルモード』
『ターゲット、ロックオン』

だがその煙の中から、フェイトに向かってＡＡかＡＡＡランクの砲撃に勝るとも劣らない桃色の光線が、一斉に９発も発射される。しかし、その全てが金色の残像を撃ち抜くだけで終わった。だが、これは機械人形――――『ＯＯガンダム』――――の想定した範囲以内だった。

『喰らえ！』
「クゥウッ！」

『ＯＯガンダム』はフェイトがその光線を避けると既に確信していた。だから『ＯＯガンダム』はその９発を敢えてフェイトの右側に集中させ、左側に避けるように仕向けたのだ。そしてその仕向けた通りにフェイトは動き、『ＯＯガンダム』は自身の予測通りに、その仕向けた先に全力で飛行し、一瞬で彼我の距離をクロスレンジに、互いの剣を振るうのに最適な距離にまで詰めた。

しかし、そこが互いの剣を振るうのに最適な距離だとしても、その剣を振るう両者には大きな違いが、いや力量の差が歴然と存在していた。

それも当然だろう。何故ならフェイトはクロスレンジを得意とする古代、もしくは近代ベルカ式魔導師ではなく、ミドル、もしくはロングレンジを得意とするミッドチルダ式魔導師なのだから。いかに彼女がオールラウンダーでクロスレンジをもこなす魔導師とはいえ、その力量の本質はやはりミドル・ロングレンジにあるのであっ

て（例え一撃離脱が得意だとしても）、間違ってもシグナムやスバル、エリオのように、クロスレンジでその真価を発揮するような魔導師ではないのだ（それでもクロスレンジにおける力量はミッド式の中ではトップクラス）。

だが、『ＯＯガンダム』はクロスレンジでこそその真価を発揮する。確かにＡＡランクを凌駕するような砲撃を平然と連射するような側面があり、またその砲撃の狙いも正確となれば、ミッドチルダ式に近いように見えるのかもしれない。だが、その力量の本質はやはりクロスレンジにあるのであって、その証拠に、フェイトとの距離がクロスレンジになった途端、『ＯＯガンダム』はこれまでの拮抗した戦闘が嘘のような一方的な攻勢で、フェイトを急速に追い詰めていった。

だが、フェイトとてただ黙ってやられていたわけではない。剣を振り終えた瞬間や振り切った瞬間を狙って何度も何度も『ＯＯガンダム』から離れ、自身の得意な距離に持ち込もうとはしているのだ。しかし、『ＯＯガンダム』の一撃の鋭さ、速さ、そして何よりも、たった一撃で腕を痺れさせる重さがそれをさせない。させようとはしない。

フェイトの腕が『ＯＯガンダム』の重過ぎる一撃を受け止めたことで痺れ、それに意識を奪われる合間に、『ＯＯガンダム』は次の一撃を振り上げ、そのまま力一杯振り下ろす。そしてその一撃を上段で受け止めることでまた腕全体が痺れ、それに意識が集中する。『ＯＯガンダム』がその合間に剣を振り被っているのが分かっているにも関わらず、一秒にも満たないその時間、意識がつい集中してしまう。その一秒にも満たない時間がこの距離から脱出する鍵だと言うのが分かっているにも関わらず、どうしても意識が向かってしまう。

（こ、このままじゃ……！）

それに焦りを感じるも、フェイトは迫りくる一撃を防ぐだけで手一杯となり、その距離から退避するという選択肢を実行させることができない。

『オオォォオオォオオオッ！』

そして『ＯＯガンダム』は自身が優位なのを感じながらも、それに自惚れる事は無く、そしてその攻勢を緩めるどころか、それをさらに苛烈なモノにしていく。より強く、より速く、より鋭く、より重く。さらに過激な剣劇に、死を齎す剣戟に、最凶の名に恥じない剣撃に。

それをバルディッシュのザンバーフォームで幾度防いだだろうか？　少なくても一桁ではない。少なくとも二桁は防いだ。そう確信できるほどに、フェイトは何度も何度も繰り返される『ＯＯガンダム』の攻撃にじっと耐え続けた。例え腕の感覚が無くなり、うまく力を込められないようになっても、その手に握るデバイスを落とすことなく、亀のように体を丸ませながら、必ず来るであろう反撃の契機を待ち続けた。

『これで！』

そして、遂にその契機はやってきた。『ＯＯガンダム』は何度自身の剣を叩きつけてもデバイスを落とさない（超高密度の魔力刃を切り裂く事は『ＯＯガンダム』でも難しい）フェイトに苛立ったのか、ほんの僅かに大振りになったのだ。それは瞬きをする時間よりも遥かに短い物であったが、フェイトにはそれで十分だった。

「ソニックムーブ！」
『ソニックムーブ』

フェイトがその僅かな時間で発動させた魔法は、フェイトをその場から撤退させ、『ＯＯガンダム』との距離を数百メートルも離す。そしてその距離に安心したのか、フェイトは少し緊張を緩ませ、

「ッ！？」

すぐにまた引き締めた。彼女の数ミリ横を通り過ぎた、桃色の砲撃に冷や汗を掻きながら。

その砲撃に驚いたフェイトは『ＯＯガンダム』に半分意識を向けながら、砲撃が放たれたと思われるところに一瞬だけ目を走らせ、白い巨体を確認すると、すぐさま『ＯＯガンダム』の方に戻した。

が、その時にはもう『ＯＯガンダム』はフェイトまであと5メートルという所にまで迫ってきた。それを見たフェイトは全力で後退し、その距離を開かせようとするも、

「ッ！？　また！」
『サー！』
「！？　クゥウッ！！」

桃色の砲撃がその退路を阻む。そしてフェイトがその桃色の砲撃を数センチの差で回避すると、その目の前に銀色の剣がフェイトめがけ、一直線に振ってきた。

「しまッ、クッ！？」

それを何とかバルディッシュで受け止める事に成功するが、その剣の勢いは止まらず、フェイトを後退させながらその剣先をじりじりとフェイトへと近づけさせる。それに負けじとフェイトもバルディッシュに力を込めるが、それでも銀色の剣が止まる事はなかった。

しかし、それを見たフェイトは急に剣に入れていた力を抜かし、その銀色の剣と金色の剣による鍔迫り合いを強制的にやめさせた。

『なッ！？』

突然自分と押し合いをしていた物が無くなった事によってバランスを崩した『ＯＯガンダム』の剣撃は、力を抜きつつも、体を右に半歩ずらしたフェイトの横を、何も斬る事無く通過していった。それに刹那は驚愕しつつも、崩れたバランスを逆手にとって、振り切った勢いのまま半回転し、相対するフェイトと体を上下逆さにすると、剣を振り切った勢いを殺さぬまま、その両足を切断しようとする。

「バルディッシュ！」

『イエス、サー！　サンダーアーム』

それをフェイトは、魔力を変換して発生させた雷を左手に集中させる魔法で迎え撃つ。

『オオオオオオ！』

「あああああああ！」

両者が雄叫びを上げながら、その剣と左手を激突させ、目も眩むような光りが轟音と共にその空域を支配した。

―同年同日・同世界・日本―

「皆……」
「なのはさん、大丈夫ですか！？」
「落ち着きなさい、バカスバル」
「でも、かなり辛そうですよティアナさん？」
「私の回復魔法も殆ど効きそうにありませんし……」

なのははフェイトが現れた時と同じくらい驚いていた。

「どうしてここに……？」
「それは私から説明します。だからスバル、あんた少しは落ち着きなさい！」

そう言ってティアナはスバルを一歩下がらせると、要点だけを掻い摘んで説明を始めた。それに時折相槌を打ちながら、なのはは次第に現状を理解していった。

「なるほど、そうだったんだ」
「はい。私達はフェイト隊長と一緒に転送されたんです。でも、フ

ェイト隊長が速すぎて先に到着してしまい、私達は今ようやく着いた所です」
「……分かったわ。とりあえず、皆は生き残っている人達をここから避難させて」
「了解しました。ほら、行くわよスバル」

ティアナは先程から子犬のようになのはにひっついているスバルを引き剥がし、救助活動をしようとしたが、

「……！　ティアナさん、あれ！」
「何エリオ？　ってあれってまさか……！」
「そんな！　なのはさんのあの攻撃を受けてまだ動けるなんて……！」
「ティア！」

そんな彼女たちの目の前で全身傷だらけのセラヴィーが、地上からフェイトに向かって砲撃していたのを発見していまった。

―同日・同世界・？？？―

「……いかん」

それは一言、薄い唇からそう洩らした。

「このままでは、我等の望みが果たされん」

その言葉に焦燥を、動揺を、驚嘆を乗せず、ただただ平坦に、平時の調子を崩さぬまま、普段の口調でそう伝える。この戦場をイオリア・シュヘンベルグよりも鮮明に、生々しく見ているであろう彼のマスターへと。

「さて、どうするつもりだ、我がマスター？」

当初の作戦から外れたイレギュラーな出来事が幾つも起こったが故に、それは彼のマスターに問い掛けるのが当然の質問を発した。しかし、それに返ってくるは、現行案のまま行動せよとの願いのみ。

「……何？　変更は無し？　いいのかそれで？　……分かった。それが我がマスターの願望なら、我はその時を待つだけ」

それを訝しげに思いながら、それでも彼はマスターの意向を重視し、その願いを聞き入れる。その顔に感情の起伏を表さずに、しかし瞳は戦場を見渡して、

「その時が来るまではこのまま待つとしよう。「Ｓ・Ｉ・Ｐ」が発動されるその時まで」

そう呟いた。

第２２話　戦いは終わらず、役者は踊り続ける（後書き）

後２話でこの地球篇を終わらそうと思います。しかし、現在スランプと多忙が同時に襲ってきており、なかなか思うように書けません。感想も正直執筆するだけで精一杯で、返信できずにいます。感想を書いて下さった皆様、本当に申し訳ございません。このような駄作を読んで下さった皆様に感謝を。

最後に。

また２週間ほど投稿できないかもしれません。このような作者ですいません。

設定集（前書き）

オリジナル魔法とオリキャラの設定をまとめてみました。これは見ても見なくても構いません。

設定集

―人物紹介―

ヒュドラ＝Ｔ＝Ｈ

性別：女性
年齢：１６歳
身長：１５４センチ
容姿：銀髪・蒼眼・綺麗というよりは可愛い
魔法：ミッドチルダ式・氷の変換資質・魔力光は蒼銀色
資格：ＡＡＡ＋ランク魔導師

捕捉：ケルベロス隊唯一の生き残り。いつも無表情で無口だが、それは戦闘中も基本変わらない。

バリアジャケットは指の先から顎のすぐ下まで黒で覆うような、体の輪郭を露わにする黒のボディースーツ。

左手に黒い金属製の手甲が装着され、靴には足音を消す為に衝撃吸収材が構築されている。腰の後ろには任務で必要な道具を入れる為のポーチが４つある。

ちなみに、黒いローブは本来付いてはいなかったが、アルケ―に敗北してからはそれを構築するようになった。理由は後ほど。

デバイスは短剣型アームドデバイス「ヴェノム」。

これはフルドライブ時、鍔（つば）のない漆黒の長刀になる。

ケルベロス隊を壊滅させたアルケ―に異常なほどの憎悪を抱いている。

最強魔法として「ホワイトブレス」が、切り札として「ナインブレイズ」がある。

ティーダ

性別：男性
年齢：１２歳
身長：１５２センチ
容姿：金髪・碧眼・年相応の丸まった童顔
魔法：ミッドチルダ式・魔力光は淡い黄緑色
資格：Ｄランク魔導師？

捕捉：両親から捨てられ、孤児となっていた所を１年前にグレアムに拾われた少年。
デバイスはない。
グレアムに拾われ、彼の弟子として育てられた。魔導師ランクはグレアム曰く、「まだＤランク」
現在気絶中。
魔法はとりあえず飛行魔法までは習得中。

アップル（コードネーム）

性別：男性
年齢：？？？
身長：１６８センチ
容姿：黒髪・蒼眼・仮面を被っている
魔法：？？？・純白色
資格：？？？

捕捉：謎の人物。一応現在判明している事は魔力光が純白な事と

マスターと呼ぶ人物がいる事。
そのマスターはコードネーム「アーカイブ」。
古めかしい言葉を好んで使い、また無意識で中途半端に言葉を切る癖がある。

アーカイブ（コードネーム）

全て不明

捕捉：アップルのマスターであるという事しか分かっていない、謎の人物。

パーラ＝アキナス＆リース＝アキナス

２年前に全滅した第１０３陸士部隊の副隊長だったトマス＝アキナスの家族。現在管理局を訴訟し、裁判中。その裁判にはユーノ・スクライアも関わっている。

―オリジナル魔法紹介―

「アトモスフィア・フィールド」（「Ａ・Ｆ」）

・結界魔法。その効果は半径二キロを宇宙空間だろうが次元空間だろうが、大気圏内と同じにするというもの。

・管理局の次元航行部隊の全艦に備えられている。

・４年前の対「ガンダム」戦で構築された魔法。

・艦船の圧倒的魔力がなければ発動できない。何故なら「ガンダム」との戦闘時は結界が何故か張りにくくなるからである。

・少なくても管理局内では個人でこれを発動できる者はいない。

「トランスポート・ジャマー」（「Ｔ・Ｊ」）

・転送魔法妨害装置。その効果は半径２０キロを転送魔法不可とするもの。

・鈍色で正四角形の形状をしている。大きさは大体１メートル。重量は１３２キログラム。

・「ＣＢ」が対魔導師戦で考案し、制作した装置。

・核にアップルとアーカイブが作成した数多の環状魔法陣と高エネルギー結晶体が使用され、その環状魔法陣を外側に展開することで機能する。

・基本的には事前に現地のエージェントによって戦闘区域となる場所に幾つか設置されている。

ホワイトブレス

・凍結魔法。あのエターナルコフィンに次ぐとされた、対人用に

おいては最も禁忌に近い凍結魔法。
・ヒュドラはカートリッジ無しで発動できるが、それは氷の変換資質があるからで、通常はＡＡＡでもカートリッジ3発以上は必要。
・詠唱は「凍てつく風よ、我が敵に悠久の眠りを与え、その体を氷の棺に閉じ込めよ。息吹け、ホワイトブレス」
・ヒュドラの最強魔法。

ナイン・ブレイズ
・斬撃魔法。８つの斬撃を虚空に生成し、それをヴェノムの抜刀と合わせて放つことで、９つもの斬撃を同時に敵へと与える。
・カートリッジ2発必要。
・詠唱は無いが、コマンドとアクショントリガ―が必要で、コマンドは「九つの頭剣」、アクショントリガ―はヴェノムを左腰の鞘に納める事。
・フルドライブ時にしか発動できない、ヒュドラ最後の切り札。

ムーヴィングシールド
・防御魔法。系統はシールド。手の甲に５０センチぐらいの小型シールドを発生させる。
・メリットは発動しながら移動できる事。デメリットは小さくて攻撃を防ぎ辛く、また広範囲攻撃を防げないこと。
・ヒュドラはこのシールドを愛用する。何故ならシールドを張りながら移動できるのはそのデメリットをも上回るメリットだからである。

設定集（後書き）

他にも書いた方がいいのがありましたら、是非教えて下さい。できるだけまとめていきたいと思うので。

第２３話　悪鬼と悪魔の古き誓い　≪前篇≫（前書き）

やっぱり投稿する事にしました。２週間も更新を滞らせてしまい、すいません。

まだこの作品を読んで下さる方が居る事を願います。

では、開演です。

第２３話　悪鬼と悪魔の古き誓い　≪前篇≫

消されるな、この想い
忘れるな、我が痛み

――ゼーガペインより

―???・????―

横幅３メートルほどの通路を、右目にモノクルをかけた老人が車椅子で静かに通過していく。

その通路は無機質な白色の灯光によって照らされ、人間が作ったような人工物らしさを辺り一帯に漂わせていた。壁と床は灰色の金属によって建築され、その表面は汚れが一つとして見当たらないほどピカピカに磨かれており、老人の顔さえ映してしまえそうだ。

「……」

そんな通路を老人は黙々と、無表情に通っていく。するとその先に灰色の通路と同じような色合いの扉が現れ、老人の進路を阻む。ここから先は立ち入ってはならないとばかりに、ここからは神の領域だとでも言うように。

「……」

だが、老人はそれに焦点を合わせず、車椅子が進む速度を落とさずに通路を進む。すると、その扉が老人の2、3歩先で突然横にスライドし、その神をも恐れぬ部屋への道程を、あっさり老人に明け渡した。

「……ふむ、何と名付けるべきか。名はその者を表し、同時にその世界における認識の基礎でもあるから、やはりきちんとしたモノを与えなければいかんな」

その部屋を常人が凝視すれば、恐らく自らの常識と現実を疑う事だろう。もしくはあまりの恐怖で自殺し、尋常ならざる畏怖で精神に異常をきたすかもしれない。

その部屋に在るのは8つの筒状の物体、ただそれだけであった。なんてことはない、ただの最新技術で造られた強化ガラスで構築された筒状の物体。それがただ8つあるだけであった。他にも奇怪な文様のように、壁面や床面にのたうつ配線やらキーボード、虚空に浮かぶ数多のモニターやらがあったが、これといったものは基本それだけであった。

恐らく一見しただけではただの研究室か実験室にしか見えないその部屋は、しかしその筒状の物体に入っている者を見た瞬間から、神を冒涜する部屋へと生まれ変わる。

その筒状の物体の中に入っているのは、およそ16歳ぐらいの人間だったのだ。それも恐ろしく顔の整った、性別不明の人間が。

「しかし、とうとうここまで来た……いや、来てしまったか」

その内の一つに視線を向けながら、老人が感慨深く、もしくは懺悔するかのようにそっと呟いた。その真意は本人にしか分からない物だったが、その言葉と同時に吐きだした重い溜息がその老人の心を如実に表していた。

「願わくば彼らに数多の幸があらん事をか……「ガンダム」へと祈ろう。例え人類が、神仏が、世界が彼らを見捨てようとも、「ガンダム」は彼らと共にあるのだから」

老人に見つめられているその筒状の中の人物は、筒の中を満たす液体の中で肩ぐらいに切りそろえた紫色の髪をゆったりと靡かせながら、直立の体勢で筒の中で身動ぎもせずに浮いていた。その神秘的な相貌は傍から見れば天使にも見え、それが逆に人間とは思えない美しさ、敢えて言えば人工物の美しさを醸し出していた。

老人はそれを孫でも見るかのように眺めていたが、不意に細めていた目をカッと開くと、その筒状の物体の傍にあったキーボードを操作し始めた。するとその筒状の物体一杯に入っていた液体がどんどん音を立てながら無くなっていき、その水位を低くしていく。

そしてその液体が完全に無くなると、今度は筒を形成していたガラスの下方が上へと上がっていき、中にいる全裸の人物を外の世界に解放した。

「……ん」

「起きたかね、Ｉ－００１？」

ガラスの下方が最後まで上がりきり、中にいた人物が眉間に皺を寄せながら苦悶の声を出すと、何年も硬く閉じられていた瞼がゆっ

くりと上がっていった。そして何度か瞬きをし、焦点の合ってない瞳で周りを見渡すと、不意に自分の目の前に車椅子に乗った老人に気付き、その優しいながらも厳しさを感じさせる瞳をじっと見つめ返した。老人はそれを無言で見ながら、一言、その筒の中から出てきた人物に声をかけた。それにその人物は、

「……はい、父さん」

と、無表情ながらも柔らかい響きを含ませてそう答えた。

「君の名前はティエリア・アーデだ」

「……ティエリア・アーデ？」

「そうだ。君はこれからＩ－００１ではなく、ティエリア・アーデとして生きるのだ」

「……ティエリア・アーデ」

老人と筒の中から出てきた人物は、筒のあった部屋からさほど離れていない無機質な部屋で向かい合っていた。その間にはテーブルがあり、そこには一本の黄色い花が活けられた花瓶が置いてある。

Ｉ－００１もとといティエリアはそれを眺めつつ、老人から告げられた自身の名前を復唱し、その顔に満面の笑みを浮かべた。その笑みが起こった原因を自覚せずに。

もしティエリアの精神がもう少し成熟していればその原因が分かったのかもしれない。しかし、ティエリアはまだ生命維持装置として機能していたあの筒状の物体から出たばかりで、いくらヴェーダのテスタメント（後天的学習機能）によって一般常識や学力（およ

そ大学の教授並み）を直接脳内に叩きこまれたといっても、精神的にはまだ幼い域を出ていないのだ。

そんなティエリアにその笑みが起こった原因、すなわち本当の意味でこの世界に生まれ落ちた事に対する喜びを知る術はなかった。しかし、それでも本能的にそれを感じ取ったのか、ティエリアは赤ん坊が一番最初に見せるような純粋無垢な笑顔を、無意識に浮かべていた。

「……彼は？」

「彼？　……あぁ、ソランか。彼は私の養子だ。そして君と同じ、ガンダムマイスターとして生きるモノだ」

不意にティエリアはテーブルの上の花瓶に活けられている黄色い花を、自身と同じように眺めていた一人の少年に気付いた。その少年は黒のスーツを着こみ、首から銀色の円錐状の物体を下げていた。それに視線を時折向けながら、ティエリアは無愛想な顔を此方に向けたその少年へと目の焦点を合わせた。

「……」

「ソラン、挨拶をしなさい。ティエリアはこれから君と行動を共にする仲間なのだから」

「……ソラン・Ｉ・シュヘンベルグだ、ティエリア・アーデ」

少年はぶっきら棒にそう自己紹介すると、目線を黄色い花の方へと戻した。それにティエリアは内心苛立ちながら、律儀にも少年へ自己紹介を返した。

「すでに知っているとは思うが、君と同じガンダムマイスターになるティエリア・アーデだ、ソラン・Ｉ・シュヘンベルグ」

それが将来、「ＣＢ」が誇る悪鬼と悪魔として、全次元世界から畏怖される事になる二人の出会いであった。

―新暦７５年１０月１０日・第９７管理外世界・日本―

『セラヴィー、機体の損傷は？』

『両手両足が共に２８％損傷し、本来の出力の４割ほどしか出せません。それに背部が４９％も損傷してしまい、暫(しばら)くはフェイスバーストが使用できず、スラスターの出力も恐らく通常の３割ほどしか出せません。あと武装ですが、ＧＮバズーカを両方とも消失し、両手のＧＮビームサーベルもそれと同上で、右肩のＧＮキャノンが負(オ)担過多(レバーヒート)で使用不可、ＧＮフィールドもＧＮ粒子が不足している為に展開不可です』

『そうか。……ボロボロだなセラヴィー』

『イエス、マイスター。現在ＧＮドライヴの自動修復機能を働かせていますが、それも微々たるもので、実質的な性能は万全の状態と比較して約３～４割ほどです』

セラヴィーはコンクリートではなく、土が派手に剥き出しとなった場所で、身動ぎすらせずに『ＯＯガンダム』とフェイトの戦闘を

観戦していた。本来なら自分が高町なのはを倒せていればこんなことにはならなかったはずだ、という悔恨をその胸に募らせながらも、自分が最も信頼するマイスターと「ガンダム」の戦闘をひたすら傍観する。今の自分では足手纏いにしかならない事を重々承知しているからだ。

『……セラヴィー、現在の状況をもう一度整理してくれないか？』

『イエス、マイスター。現在東京湾上空ではフェイト・Ｔ・ハラオウンと『ＯＯガンダム』が交戦中で、ここから１２時の方向、距離１６５には高町なのはと援軍として現れた３人のＡＡランク、１人のＡランク、一匹の中級竜がいます。それと、軌道衛生上に停泊（ていはく）していたトレミーが次元航行船８番艦「アースラ」から退避する為に、この星の大気圏を突破中です。およそ３２９秒後には東京湾に到達するとのことです』

『……ということは、ミッションはＳ３ではなく、Ｓ１３に移行か？』

『イエス、マイスター。スメラギ・李・ノリエガによると、残り約５分でその場にいる魔導師を殺害、もしくは撃退し、トレミーがここに到達次第、この次元から撤退するとのことです。もちろん高町なのはを殺害、もしくは無力化することが前提ですが』

『……了解だ、セラヴィー。だが、その前に』

『えぇ、そうですねマイスター。まずは目の前を煩（うるさ）く飛び回っている悪趣味な金色の羽虫から撃ち消しましょう』

そう言ってセラヴィーは左肩と両膝にあるＧＮキャノン？を、蒼い流星と金色の閃光が支配する戦場へと向け、なのはと戦った時よりは出力が落ちているものの、その金色の魔導師を消し去るには十分な威力を秘めた桃色の砲撃を、眩い光と共に発射した。

『喰らえ！』

その眩さに一瞬眉を顰めるも、フェイトからは決して目を逸らさずに、セラヴィーは続けて二度三度、更なる砲撃をフェイトへと放った。地上から自身を見つめている者に気付かずに。

「ティア、どうする？」

「どうするもこうするもアンタ、アレと戦って勝てるっていうの？幾らボロボロだからって、相手はなのはさんとタイマンを張れるほどの実力を持っているのよ？　そこんとこ、ちゃんと分かってる？」

「でも、このままだとフェイトさんが……！」

「ティアナさん、お願いします！」

「エリオ、それにキャロまで……ハア」

ティアナはスバルでは無く、セラヴィーをじっと見つめながら、深い深い溜息をついた。そしてその蒼い目を瞑り、両腕をささやかな胸のあたりで組む。

それは彼らに呆れているのではなく、自分たちでどうやってあの「ガンダム」を倒す、いや足止めをするのかを考える為にとった仕草であった。

（……実際、あの「ガンダム」もなのはさんとの戦闘でかなり消耗しているはず。でも、相手はなのはさんと互角に撃ち合えるだけの火力がある怪物だし……もしそんなのと戦った場合、相手が例え半分ほどの実力しか出せなくても、私達を捻り潰すことぐらい簡単かもしれない。スバルですらあの大破した「剣士」と互角だったんだから）

しかし、どんな作戦を考案しても、その全てが瞬時に却下されてしまう。何故なら相手が余りにも強大だからだ。オーバーSランクと戦えるのはオーバーSランクだけと言われている昨今、たかだかAAランクとAランク、それにAA～AAAランク相当の竜にすぎない彼らがそれと真正面から戦うなど、如何なる戦術・作戦を用いても、たった一言で表現できてしまう。

即ち、無謀極まると。

だが、ティアナはそんな活路が見出せないのが当然という条件の中、ある一つの作戦を思い立った。それは彼女がまだ次元空間を航行していたアースラで、なのはとセラヴィーが戦っている映像を見ながらフェイトに聞いた、「デカブツ」の弱点とも言うべきモノを練り込んだものだった。

しかし、それでも成功率は一割を切っており、それがティアナの決断を鈍らせる。この作戦で本当にいいのか、こんな作戦で本当にあの怪物を足止めできるか。そんな考えが彼女の頭の中でグルグルと回り、決意を萎えさせ、悪戯に時間を消費させていく。

（落ち着きなさい、私！）

だが、ティアナはそんな自分を一括し、すぐさまその考えを破棄して、その心にある決意を灯した。そう、「デカブツ」と無謀ながらも戦うという決意を。

そしてそれと同時に、彼女の頭の中である程度組み立てられていた作戦が、ほんのコンマ何秒かで最後まで組み立てられた。それを二度ほど確認してから、彼女は今一度フェイトに砲撃しているセラヴィーをその眼で鋭く見つめ、震えそうになる体を強引に押さえつけながら、仲間たちへと自身の考案した作戦を説明した。

―新暦69年・第25管理世界―

「……」

「た……助けて……助けて、下さい。この子だけでも、助けて……下さい。お願、い、します……」

「……ッ！」

黒を基調とした高級そうな家具の残骸がそこいらにばら撒かれた部屋を、青白い月光が優しく照らし映す。まるでそこにある残酷で無慈悲な現実を、床一面に撒き散らされた鮮血を、壁に刻まれた破壊の跡を覆い尽くし、決して人の目に留まらぬようにするかの如く。

「……お母さん？　お母さん？　どうしたの、寝んねなの？」
「……ッ！　……ッ！」
「寝んねする時はちゃんとお休みなさいって言わなきゃいけないだよ？　だから眼を開けなきゃメ、なの」

そんな惨状の部屋で、ただの肉塊と化した母親を、９歳になろうかという、茶髪がよく似合う活発そうな少女が何度も何度も揺すり、その眼を開かせようとする。その眼がもう二度と開かない事を知らずに、目の前にいる人物が彼女の母親を殺したということを理解できずに、ただただ眠たげな声をかけながらその母親だった肉塊を揺する。

それを見た、その部屋にいたもう一人の人物は、自分の奥歯を噛み砕きながら、己の犯した罪の重さに必死に耐える。

「……お母さん～？」
「……どうして、こうなったんだ？」
「ん～？　あなた、だ～れ？」
「僕は確かにこの家にいる全ての人物の抹殺を、ヴェーダから命じられた。でもそれは、この家にいる人物がこの世界に蔓延（はびこ）る悪の親玉だったからであって、絶対に僕はこんな子供をも殺さなければならないような任務を承認したわけではない……！」
「？」

それは後悔なのだろうか、それとも懺悔なのだろうか？　紫色のボディースーツを纏ったその人物は、スーツと同色の、顔を隠すフェイスガードが付いているヘルメットが被さった頭を下に向けながら、その感情の赴（おもむ）くまま、無意識に口から言葉（思い）を垂れ流す。それで己のしたことが軽くなるわけでも、ましてや内心を席巻する罪悪感が消えてなくなるわけでもないというのに。

「そうだ……そうだ！　これは現実では無いんだ！　これは僕が見ている夢の一端なんだ！　ハハッ、そうかそうだそうなんだ！　きっと多分恐らく絶対、これは夢なんだ！」
「……お兄さん、どうしたの？　何か悩んでいるの？」
「そう……だ。これは……夢……」
「ゆめ？」
「……では……ない……！」
「？」

全身を紫のボディースーツで覆った人物が突然早口で、その子供にとっては到底理解できないような単語の羅列をどんどん吐き出す。それを聞いていた子供には、その人物が何を言いたいのかは分からなかったが、それでも、その人物が何かに苦悩しているのをその雰囲気から感じ取った。

だから子供は、何故その人物がここにいるのかを深く考えないまま、子供特有の無邪気さと純粋さを持って、その人物の苦悩を解決へと至らせる為の力になろうとし、その人物へと声をかけた。

しかし、それが皮肉にも、その人物にとって残酷な現実を、再びその人物へと鋭く突きつけることとなった。

「……」
「……？　どうしたんですか、あなたは？　どこか痛いんですか？　だったらこうするといいですよ。痛いの痛いの、飛んでけー！」
「……」
「痛いの痛いの、飛んでけー！」
「……」
「痛いの痛いの、飛んでけー！」

子供が一生懸命になってその人物を励まそうとし、元気一杯な声で何度も何度もその言葉を呪文のように繰り返す。それでこの人物が元気になると信じながら、ただひたすらに声を張り続ける。

その人物の顔が悲哀の涙と後悔の表情で酷く歪んでいた事を知らずに。

―新暦７５年１０月１０日・第９７管理外世界・日本―

『行け、刹那ーーー！』

セラヴィーは『ＯＯガンダム』がフェイトとの距離を詰め、再びクロスレンジに持ち込んだのを見るや、そう叫んだ。

なぜならば、彼は知っているからだ。何モノをも駆逐する『ＯＯガンダム』の、刹那のクロスレンジにおける強さを。

だから彼は自分たちの勝利を確信した。フェイト・Ｔ・ハラオウ

ンさえ倒せれば、後は瀕死の状態となっているなのはを倒すだけだからだ。

故に、セラヴィーは気付かなかった。自身のすぐ近くまで来ていた４人の魔導師と一匹の竜の存在に。

「皆、行くわよ！」
「うん！」
「「はい！」」

スバルとエリオが先陣を切り、その後ろをティアナとキャロを背に乗せたフリードリヒが付いていく。至る所に空いたクレーターを避け、土煙を巻き上げながら、蒼色の道筋と黄色の電光がセラヴィーへと全力で疾走し、白亜の巨竜も白い翼を羽ばたかせながら上空を翔けてそれに近づいていく。

『……!?　マイスター、敵魔導師４名と一体の竜が急速接近中です！　指示を！』
『どこからだ!?』
『一時の方向、距離５７です！』
『な!?　どうしてそこまで近づかれたんだ、セラヴィー!?』
『わ、私にも全く分かりません！　何が何だか……』
『とにかく、迎撃するぞ！』
『い、イエス、マイスター！』

そしてスバル達が後十秒もかからずにセラヴィーの懐へと辿り着

けそうになって、漸くセラヴィーがスバル達の方へとその巨体を動かし――――そのままの姿勢で数秒、硬直した。

『こ、これは……！』

『まさか、幻術魔法!?　そんな希少魔法を使う魔導師がいたなんて！』

セラヴィの眼に映るは先陣を切っていた二人の魔導師ではなく、数十にも上ろうかという、蒼い魔導師と槍を持った魔導師で構成された虚影の大群だった。それがセラヴィーの視界を埋め尽くし、押し潰すように迫ってくる。

それに驚く事数秒。ティエリアはその短時間で正気に戻ると、未だ驚愕が抜け切れていないセラヴィーを叱咤（しった）して元の調子を取り戻させた。そして淡々と目の前の敵を破壊する為の、セラヴィーにとって最適な方法を実行させた。すなわち、目の前の幻術を本物の魔導師ごと薙ぎ払うという方法を。

『セラヴィー、GNキャノンにありったけのGN粒子を回せ！　それで目の前の偽物達を一掃する！　いいな!?』

『い、イエス、マイスター！』

『なら行くぞ！　GNキャノン?、ガトリングシュート！』

本来それは賢明な判断では無い。何故なら壁の如く迫ってくる幻術（大群）ごと本物を薙ぎ払う方法は、あまりにも非効率で非現実的な方法であるからだ。数十もの虚影を殲滅させるか、たった数人の本物を倒すか。どちらが効率的で現実的かは言うまでも無いだろう。

だからセラヴィーの取った行動は、普通の魔導師が見れば悪手以外の何物でもなく、打つ手を間違えたといっても差支えがないはず

であった。

しかし、

セラヴィーはその常識（予想）を軽々と撃ち破る。

『オオォオォォオオオッ！』

幻術によって生み出された大量の虚影を壁と表現すれば、この桃色の帳（とばり）もまた壁だった。後数メートルあるかどうかという距離で交わされる、幾十もの幻影と、数十にも及ぼうかという桃色の砲撃による鬩（せめ）ぎ合い。それはまるで魔導師の軍勢と桃色の弾幕が衝突しているようであった。

それを数秒、あるいは数十秒継続しただろうか？　幾度となく交わされた軍勢と弾幕による鬩ぎ合いは、徐々にだがセラヴィーの方へ軍配が上がっていく。

それも当然だろう。「ガンダム」の主要機関である太陽炉は半永久的にＧＮ粒子を発生させる事ができ、無尽蔵とも言えるＧＮ粒子を「ガンダム」へと供給することが可能なのだから。それは終わりなき砲撃等という馬鹿げた事すら実現可能にする。

だからこの鬩ぎ合いは始めから勝負が付いていた。いくら幻影の数が多いといってもそれは無限では無く、あくまで有限なのであって、絶対に無尽蔵に敵う事はできないのだ。

故に、ティアナはこの事態を、戦況を、現実を予測できた。

「ここまでは予想どおりね……」

「ティアナさん、上手くいってますね」

「そうねキャロ。でも気を抜かないで。相手はなのはさんと真っ向から撃ち合える化け物なんだから」

「は、はい！」

その二人はセラヴィーの上空を旋回（せんかい）しているフリードリヒの上にいた。キャロは桃色に光るグローブで手綱を握り、ティアナはフリードリヒの巨体の上に展開させた橙色の魔法陣の上で、二挺の銃を構えたまま静止している。

「でも、正直もう限界だわ。あと十秒持つかどうかってとこかしら？」

「でも、十秒もあるんですよね？」

「えぇ、そうよ」

「だったら大丈夫です。スバルさんとエリオ君ならきっとやってくれます！」

彼女達はフリードリヒの背の上でブーステッドイリュージョンという幻術魔法を発動させていた。それによって生み出された数多の

幻影をセラヴィーへの撹乱(かくらん)として使用し、その撹乱している合間にスバルとエリオを接近させるという作戦だ。

しかし、ティアナはそれだけでセラヴィーに接近できるという楽観をせずに、更なる手を打つ。元々「ガンダム」がどれだけの活動時間、またはエネルギーを貯蔵しているのか分からない以上、打てるだけの手を打ち、常に最悪の事態を想定するのは当たり前だと彼女は思っていたのだ。

そして、その更なる手とは、フリードリヒによる砲撃で、「デカブツ」の注意を此方に向ける事だった。

「フリード、ブラストレイ！」

「キュケーーー！」

キャロの指示により、フリードリヒの口から灼熱の劫火が放たれ、セラヴィーの周囲一帯を幻術ごと焼き払う。その温度は地面を溶かして硝子(ガラス)状にするほどの高温で、この世の地獄をその場に顕現させた。

だが、セラヴィーはその硝子状になった地面を踏み砕き、余りの高温の為に発生した蜃気楼の中を掻(か)き分けて、その地獄を悠然と練り歩く。

それに若干のダメージすら与えられていない事が見て取れ、ティアナとキャロは静かに唇を噛み締めた。これで少しでもダメージを与えられればと思っていたが、どうやらそんなに甘くはないようだ。

それでも、セラヴィーの注意を此方に向ける事ができ、当初の目的は達成する事が出来た。それを確認してからキャロは事前に説明

されていた通り、フリードリヒをさらに上空へと舞い上がらせる。

『逃がすか！』

『……！？　待って下さいマイス！？』

それを逃がさんとばかりに、セラヴィーがフリードリヒに注意を向けたまま浮遊しようとし、

ガコン（ガコン）！

「「ストライクゥウウ！」」

『な！？』

突然、自身の右方と左方からカートリッジをロードする音と、魔法を発動させるコマンドが聞こえ、

「「ドライバァアアア！！」」

ドオォォオオォオオン！

その視界に青色と黄色に輝く魔力光が広がった。

―新暦69年・第25管理世界―

「答えろ、刹那！　これはどういうことだ!?」
「どう、とはどういう事だ、ティエリア・アーデ?」
「惚けるな！　君は何も感じなかったのか、この任務に、あんな小さな子供をも殺す事に対して！」
「そうだが、それがどうかしたのか?」
「ッ！　貴様ーーー！」

ティエリアが突如激昂(げきこう)して刹那の胸倉を掴み、その顔に拳を繰り出した。それに目を見張りながらも、刹那は極めて冷静にこの事態に対処する。まずは此方に向かってくる拳を避ける為に、胸倉を掴まれたまま、体と顔を右に捻(ひね)り、拳による一撃を皮一枚で回避し、そしてティエリアがその拳を引き戻す前に、その伸びた腕を両手で掴み、相手が拳を繰り出した勢いをも利用して刹那の後ろに投げ飛ばす。

「クウゥウッ!?　君は……本当に、何も、感じなかったのか、刹那ーーー!!」

刹那の後ろでティエリアがそう叫ぶ中、刹那は今だ転がったまま立てないでいるティエリアの背後を取ると、その右腕を捻り、涙が流れている顔を地面と接吻(せっぷん)させた。

「ガァ……!」
「ティエリア・アーデ、お前は何を言っている?　いや、何があったんだお前に?　この任務の前はあんなにもヴェーダの、義父の役に立てると張り切っていたのに」
「それは……そうだろうさ。確かに、僕は……浮かれていた！　義

父の役に、立てると、ヴェーダの計画に、貢献できると思ってなぁあああ！」

「ならば、何故？」

「……そういう君こそ、どうして何も感じない！？　思わない！？　気付かない！？　僕達のしている事に、何の疑問も持たないのか、刹那・Ｆ・セイエイ！　いや、ソラン・Ｉ・シュヘンベルグゥウウウウ！！」

「……」

ティエリアがその目を赤く染め、頬に涙の筋を残しながら刹那に、ソランに問い掛ける。美しかった声に悲しみの旋律を、憤りの音質を滲ませながら。

この時、ソランはティエリアが自身に何を問い掛けているのか、既に理解していた。そしてその問い掛けの答えが「ガンダムマイスター」に、「ＣＢ」の一員になる為に必要不可欠であるということも。

故に、ソランはティエリアにはっきりと嘘偽りなく、真摯にこう言い放った。

「ティエリア・アーデ、お前は自分のしている事を正義だと思うか？」

「……！」

「世界に変革を齎す事が正義だと、武力を武力で鎮圧するのが正義だと思っていたか？」

「……ッ」

「なら、それは間違いだ。オレ達は間違っても正義じゃない。世界から見ればオレ達はただのテロリスト、即ち……悪だ」

「……なら、僕達のしている事は、間違っているのか？　この不条

理で理不尽な世界に変革を齎すという事自体が過ちだったのでもいうのか、ソラン！」

「……その答えはお前自身で見つけろ、ティエリア・アーデ。オレはもうその答えを見つけているが、それはお前の答えではなく、あくまでもオレだけの答えに過ぎないのであって、お前自身の答えでは無いのだから」

「だが……答えがあるのか、その問いに！」

「あぁ、あるさ。見つけられればな」

刹那はそう言い終えると捻っていた腕を離し、ティエリアに背を向けて、転送魔法でイオリアがいる次元世界へと帰って行った。その場に悄然（しょうぜん）としているティエリアを残したまま、ただの一度も振り返えらずに。

―新暦７５年１０月１０日・第９７管理外世界・日本―

青色と黄色が入り乱れる魔力光が激しく明光し、あらゆるものを覆い尽くして、その場にある全ての物を見えなくする。それは上空に居たフリードリヒに乗っている二人も例外でなく、余りの閃光にかなりの距離が開いているのにも関わらず、その目を焼かれたと思ってしまった程だ。

「クゥウウッ！」
「キュケ――――！？」

そして、セラヴィーとスバル、エリオが衝突した際に発生した衝撃波が、その一帯の地面を砕き、砂塵（さじん）を舞い上がらせるだけに止まらず、フリードリヒをも呑み込んで、その巨体を吹き飛ばそうとする。それをキャロの巧みな騎乗で何とか乗り切ると、漸く眼下の光景を見れる程度の光りに落ち着いてきた。

「危なかったわね」
「え、えぇ」
「でも、これならあの「ガンダム」でも……ッ！？」
「ティアナさん、どうしッ！？」

ティアナが下を覗（のぞ）いたままの体勢で硬直したのを不審に思ったキャロは、ティアナと同じく下を覗きこみ、同じ様に硬直した。

何故なら、フリードリヒの上から眺めたその光景は、彼女たちの予想を直角に行く物だったからだ。

「嘘……！？」
「そんな！？」
『まさか！？』
『な……！？』

スバルとマッハキャリバー、そしてエリオとストラーダもまた、上空にいるティアナ達と同じく、その光景に絶句させられていた。

そう、セラヴィーが右手でスバルのリボルバーナックルを、左手でエリオのストラーダを受け止めているその光景に。

『どうやら、随分舐められているようだな。このセラヴィーをたかだかＡＡランク魔導師ごときで倒そうとするとはな』

『マイスター、このような者達が現れる事になろうとは、面目次第も御座いません』

『気にするな、セラヴィー。これからその評価を覆せばいいのだからな』

『イエス、マイスター』

しかも、セラヴィーはその場から一歩たりとも動いていなかった。それはスバルとエリオの同時攻撃を、純粋な腕力と脚力だけで押し止めたということであり、それを成すのにどれだけの膂力（りょりょく）が必要なのか、考える事すらできない。

それにスバルとエリオが戦慄（せんりつ）していると、セラヴィーが唐突にスバルとエリオを上空で旋回しているフリードリヒの方にぶん投げ、左肩と両膝に搭載（とうさい）されているＧＮキャノン？の照準を合わせた。

「マッハキャリバー！」

『ウイングロード』

「ストラーダ！」

『ソニックムーブ』
「フリード！」
「キュケ――――！」

それを視界の端に捉えたフォワード陣の面々は、すぐさまその場から退避した。そしてその直後、三本もの太い光条が莫大な熱量を伴いつつ、その空域を通り過ぎていった。それに冷や汗を掻く暇すらないまま、フォワード陣はセラヴィーから次々と放たれる桃色の砲撃を回避する。

「まだこれだけの砲撃を！？」
「頑張って、フリード！」
「キュルルーーー！」

しかし、すぐにその限界がフリードリヒにやってきた。いくらキャロの騎乗センスとフリードリヒの旋回性能が高いと言っても、その巨体ではガトリングの要領で連射されるセラヴィーの砲撃から逃れられるわけがなかったのだ。その狙いが次第に正確になっていき、あと一秒回避するのが遅ければ当たる、というギリギリな綱渡り。それを体感しながら、キャロは懸命にフリードリヒを動かして、桃色の砲撃を回避する。

「ソニックムーブ！」
『ソニックムーブ』

だが、そんな危機の中、キャロはその顔に険しさを残しながらも、心のどこかで安心、と言えばいいのだろうか？　そんな感情が燻（くすぶ）っているのを感じていた。何故なら彼女に危機ある時、必ずと言っていいほど駆けつけてくれる小さな騎士を、彼女は知っていたからだ。

「ストラーダ、カートリッジロード！」
『カートリッジロード』
ガコン！
「キャロとティアナさんをやらせるもんか！」
『サンダーレイジ』
その小さな騎士、エリオは、二度目のソニックムーブで一気に地面に着地すると、続け様にサンダーレイジを発動させ、その矛先に電気を纏わせつつ、セラヴィーへと砂煙を上げながら突撃した。
『そんなスピードで！』
『甘い、甘いですよ！　エクシアの刹那・Ｆ・セイエイに対する愛のように！』
しかし、それにセラヴィーが気付かぬ筈がなく、フリードリヒに向けていた３門もの大砲をエリオへと向け、その砲口を桃色に発光させる。そして絶大な威力を持つ砲撃を放とうとして、
「エリオに気を取られてこっちに気付かないなんて、アイスのように甘いよ！」
『イエス、マスター。貴方にしては上出来な言葉です。リボルバーシュート！』
ガギィイイイイ！
『ツゥ！？』
『そんな、何時の間に後ろに！？』

後ろから一気に接近してきたスバルのリボルバーシュートによりその体勢を崩され、エリオが居る方角とは全く別の方角に発射された。そしてその発射している合間に、エリオは砲撃が自身の後方に着弾した事によって生じた爆風をも利用し、その距離を瞬く間に詰める。

「喰らえ、「デカブツ」ゥウウウ！」
『しま……ッ！』
『まだです！　ＧＮフィールド、展開！』

その矛先が当たったと、エリオはそう思った。だが、その矛先はセラヴィーの一歩手前で止められていた。蒼碧色の球状によって。

「そ、そんな！？」
『セラヴィー！？』
『何とか自動修復機能で、ＧＮフィールドを一度だけ使えるようにしました。しかし、これ以降はもう使えません。それよりも、早く目の前の魔導師に止めを！』
『あぁ、ありがとうセラヴィー！』

それに戸惑っているエリオの右腕を、セラヴィーは半分の出力も出せない左手で掴み、その小さな体ごと持ち上げる。だが、半分の出力を出せないと言っても、元が尋常でない怪力であったが為に、エリオの右腕の骨をバリアジャケット越しに軋ませる。

それに苦悶の声が洩れそうになったが、その声が出る前に、エリオはセラヴィーの右拳による殴打を胴体に喰らい、その体をボールのように跳ね飛ばされた。そして何度も何度も地面を転がったり跳ねたりしながら、数十メートルを行った所で漸く止まる。

「……あ……ぐ……！？」
「エリオ君！？」
「エリオ！？」

一撃、されど一撃。セラヴィーの正拳突きはエリオの薄いバリアジャケットを紙のように貫き、その肉体へと直接ダメージを与え、肋骨の何本かをへし折った。加え、右腕の骨には罅が入り、満足に動かせそうにもない。

それは事実上の戦闘不能で、立つことすらままならぬ、敗者の姿だ。だが、セラヴィーはそれらを考慮すらせずに、止めとなる砲撃を放たんとする。

「やめろォォーーー！」
『ディバイン！』

それを止める為に、スバルが左拳に環状魔法陣を纏わせながら、再度セラヴィーへと接近する。幾条もの蒼いウイングロードを発動させ、その道を流星の如く駆け抜けながら、自身の持つ魔法の中でも二番目の威力を持つ魔法をセラヴィーに叩きこもうとする。

『ふっ、そう来ると思っていたよ、魔導師！』

しかし、それはセラヴィーの予想した通りの展開だった。戦闘不能になった魔導師に砲撃を加えようとすれば、必ず此方に接近してくると思っていたのだ。

だから、セラヴィーはその三門もの大砲をいきなりスバルの方に向け、砲撃の餌食（えじき）にしようとした。そして、それは避けられようのない事実になる筈だった。

「クロスファイアシュート！」
「シューティング・レイ！」

そう、セラヴィーのすぐ近くから発動されたその魔法さえなかったらであるが。

―新暦６９年・第２５管理世界―

「……僕達の……している事は、本当に、正しいのだろうか？　間違っているのではないか？」

「……悪は必ず滅び、正義は永遠を約束される。これに従えば、僕達「ＣＢ」は何時か滅びる」

「……悪を殺すのはいい。だが、なぜ善をも殺してしまうのだ、ソラン？」

「……それが「ＣＢ」の、「ガンダムマイスター」の宿命なのだろうか？」

「……だったら、そんな組織は、人物は、無い方がいいのではないか？　それが世界にとってもいいことなのではないのか？」

「……分からない。僕には分からないな、ヴェーダ。何故悪であろうとするのか、その悪で世界に変革を齎そうとするのかが」

延々と紡がれる、苦悩と葛藤で構成されし言葉の羅列。それを聞く者がいなければ、理解できる者もいない、そんな独白。

それを発しているのは、紫色の髪を乱して、大粒の涙を流している、ティエリア・アーデという存在。

その瞳はありとあらゆる感情により黒く濁り、顔色は蒼白を超えて真っ白となっていた。だが、その存在はそんなことには一切構わず、ただただ思考する。

己のして来た悪行の数々を正当化させられる答えを。そんなものは存在しないと、自身が一番よく知っているはずなのに、それでも。

そう、それでも。彼は今まで犯してきた罪に押し潰されそうになりながらも、その答えを模索する。それが無ければ自分に存在する意義がないから。

それが無ければ死ぬしかないから。それでしか贖罪することができないから。

「僕は……僕は……」

そんな存在に彼女がやってきたのは、偶然か、あるいは必然か。それは誰にも分からない。しかし、それでも彼女がここにきたとい

う事実は、そこに屹然と存在していた。

「……貴方は、誰ですか？　どこから来たんですか？」

ティエリアは始め、それを幻聴だと思っていた。自分の酷使しすぎた脳が生み出した物だと、そう思ったのだ。

「……？　言葉が通じないのでしょうか？　では、これでどうでしょう？　貴方は誰でした？」

しかし、次第にその声が、自分のすぐ近くから聞こえている事に気付いた。

「一応この世界独特の言語では無い、標準語のミッド語で言うのでしたが、これでも分かりませんです？」

「……君は？」

そして、その声が現実のものであると認識し、そこで初めて、自分に話しかけている事に気付いた。それに疑問を問い掛けつつ、ティエリアはその憔悴し切った顔を、声のする方へと動かした。

「やっと反応してましたか。それではもう一度聞いた。貴方は誰でした？」

「……ミッド語でなくて大丈夫だ」

「そうですか、助かります。ミッド語はまだ勉強中で、あまり上手く喋（しゃべ）れませんから」

「成程。だから君はさっきから文法がおかしかったのだな」

「な……！？」

その一言に、彼女はその愛らしい顔を耳まで真っ赤にして、次いでティエリアを睨みつけた。だったら最初から反応して下さいとでも言いたいようだ。

「……ではもう一度聞くが、君は何者だ？」

「……私の問い掛けは無視ですか。まあいいでしょう。私の名前はアイ。アイ＝フォートレス」

そう言うと彼女は後ろを振り返り、つい今しがた悲劇が起きたばかりの、今にも崩れ落ちそうな大きな屋敷を仰ぎ見た。それにティエリアが慄き、肌を泡立たせる。これ以上この少女と会話をしてはならない、これ以上この現実を視るべきではないとでも言うように。

だが、そんな本能からの警告は何の役にも立たなかった。何故なら、ティエリアは既にその艶やかな茶髪に、１２歳ぐらいの華奢な肉体に、憎悪も哀愁も籠ってない黒い瞳に、その目を奪われていたからだ。

それを感じ取ったのか、はたまたただ単にそうしたかっただけなのか。彼女は後ろで固まっているティエリアの方を横目で見ながら、ティエリアの罪を再確認させるように、その言葉を口にした。

「つい先ほど誰かさんのせいで家族と財産を失った、世界から見れば可哀想な部類に入る娘です」

第２３話　悪鬼と悪魔の古き誓い　≪前篇≫（後書き）

作者はティエリアが好きです。なので、この話も予想以上に長くなりました。本当なら後篇と合わせて一話だったはずなのに……。ちなみに、これで地球篇終わるのが一話遅くなりました。

でも、これだけティエリアを書けて満足というのもあります。かなりシリアスですが。次話もこのぐらい（重たく）書ければいいなと思います。

あと、この作品では座右の銘と言いますか名台詞と言いますか、そのようなモノを冒頭に書いていこうと思いますので、これなんてどう？　というモノがありましたら、ぜひ教えて下さい！　このような駄作を読んで下さった皆様に感謝を。

最後に。

文才が……切実に……欲しいです……。

第２４話　悪鬼と悪魔の古き誓い　≪後篇≫（前書き）

注意点

・過去最長の長さで、呆れるほど長いので、覚悟して読んで下さい
・原作とかなり乖離しているので、ティエリアがティエリアじゃない
・誤字脱字、多分結構あります。余りにも長くてできなかった為
・パワーバランスがおかしい……かも？
・話の流れがおかしいのは何時も通り
・作者が未熟なのも何時も通りで
・ヒロインが不定なのも何時も通りです

では、これらを読み、且つ読んでみようと思った方のみ、開演です。

第２４話　悪鬼と悪魔の古き誓い　≪後篇≫

法律（ルール）に則った革命は存在しない。

――ＥＸＡＭ様より

―新暦６９年・第２５管理世界―

「……何？」

「だから、私の名前はアイ。アイ＝フォートレスです。そこにあるフォートレス城の城主の長女ですよ」

アイは横目でティエリアを見ながら、無表情にそう言う。なんてことはないように、自分には関係のない事だとでも言うように。

「……馬鹿な！？」

だが、ティエリアはその事実を認める事が出来なかった。何故ならあの城に住む人々は全員殺された筈だからだ。そう、他ならぬ彼らによって。

「本当の事ですよ？　なんなら証明して差し上げましょうか？」

そう言い終えると同時に、彼女は突然服を脱ぎ始めた。そしてえ

らく意匠が凝らされた、貴族が着るドレスの様な服を脱ぎ終え、一糸纏わぬ姿になると、そのままティエリアに背中を見せる。

「……確かに、君はフォートレス氏の娘で間違いないようだ」
「あれ？　私の裸には反応しないんですか？」
「生憎（あいにく）１２歳ぐらいの女子の裸に興奮するような性癖は持ち合わせていない」
「そうですか。それはそれで悔しいですね。何故か女の矜持（きょうじ）を傷つけられた気がします」
「それは気のせいだろう」

ティエリアはそう返しつつも、その心臓はバクバクと煩く鼓動し、頭は血が上りすぎて痛いぐらいだった。それはもちろんアイの裸に反応した訳ではなく、何時自分の罪が糾弾されるのかという恐怖に晒（さら）されていたからだ。

「気のせい……ですか？　私個人としては貴方のような、世俗から美しいや格好いいと言われる存在に裸を見せて興奮されるのは吝（やぶさ）かではないのですが……」
「それはおかしい性癖だ。直した方がいいな。……大体君は私を何とも思わないのか？」
「何故です？」
「それは……」

ティエリアはそこで口を閉ざしてしまう。それは己の罪を再確認させる物で、今のティエリアには耐えられない行為だ。

「あぁ、家族の事を気にしているのであれば、気にしないでください。私は別段あの家族に対して愛着も情愛も抱いていませんから。それこそいなくなって貰って清々したぐらいです」

しかし、アイと言う少女はその葛藤を見て、彼女の家族を殺した事を気にしなくてよいと言う。それにティエリアは困惑する。資料では確かアイ＝フォートレスという少女は家族思いだったはず。なのに何故そんな家族を軽く見るような発言がその口から出てきたのか。この少女は本当に本物なのか。

……いや、本物の筈だ。先程自分でも確認したように、彼女の背中にはフォートレス家という証拠である、大きな城塞の入れ墨が書かれていたのだから。

こうなると、資料が間違っていたのか？　だが、あの資料はヴェーダが調べた物であり、間違いなど間違っても在り得ない。

「……あの家族は、私にとっては仇その物だったんですよ」

少女が突如口にしたその一言には凛（りん）とした響きと、憎しみを幾重にも凝縮させた声色が含まれていた。

―新暦７５年１０月１０日・第９７管理外世界・日本―

「クロスファイアシュート！」
「シューティング・レイ！」
『ば、馬鹿な！？　何時の間に懐にッガぁアアァァ嗚呼ああ！？』
『マ、マイス―ザザ―マイスター！？』

セラヴィーの無防備な右脇腹に幾つもの橙色の魔力弾と桃色の光線が着弾し、その厚い装甲を軋ませる。万全な状態でならこのような攻撃では傷一つ、ましてや軋むことすらなかったであろうセラヴィーの装甲は、立て続けに起こった連戦とＧＮ粒子の過剰使用による消耗で本来の硬度を保つことができなくなっていた。故にこの程度の攻撃で軋んでしまったのだ。

『あ……クッ……！』
『マイスター、し……！？』

装甲が軋む程の攻撃はそのままティエリアの視界を揺さぶり、焦点を目の前が見えなくなるほどぼやけさせる。それに気付いたセラヴィーが、接近してくる魔導師の存在を知らせようとするが、既に遅かった。

ガコンガコン！

「ディバイィィィン！」
『バスター！！』

それは『ＯＯガンダム』ではなく、エクシアでもない。そう、それは「ガンダム」ですらない、ただの魔導師である。しかし、セラヴィーはその姿に、かつて己と一緒に数多の敵を駆逐し、破壊した「ガンダム」を、「ガンダム」エクシアの姿を垣間見た気がした。
即ち、「蒼い流星」の姿を。

「バスタァアアア！！」

スバルの左手がセラヴィーの軋ませられた右脇腹に深々と突き刺さる。それは僅かとはいえ、「ガンダム」の中では最も重量のあるセラヴィーの巨体を浮かすほどの威力が籠められており、同時に右脇腹の装甲に僅かな亀裂を入れさせる事に成功した。

だが、スバルのこの一撃はそれだけでは終わらずに、更なる追撃を与えた。

セラヴィーの右脇腹に刺さったその左手から煌々と光る蒼い光が溢れ、セラヴィーの白い巨体を蒼色に染め上げる。それは破壊の権化、破壊の光球、破壊の顕現。それは破壊することを義務付けられし、神罰の一撃。桃色とはまるで違う魔法でありながら、その名を承りし蒼色の砲撃（神罰砲撃）魔法。

それがセラヴィーの亀裂が入った装甲で爆発し――その白い装甲を貫いた。

『ば、馬鹿な！？』

『そ、そんな事が……有り得ない！？』

蒼き光条がセラヴィーの右脇腹を貫いてその後方の虚空を疾走する。白い部品を、かつてセラヴィーの装甲を成していたであろう鉄屑（くず）を伴いながら、それは数十メートルもの距離を蒼く煌（きらめ）いて爆走し、そして唐突に消えた。

スバルはそれを見届けつつも、気を抜く事無く眼前の敵の目を、今だ怪しく光る蒼碧色の目を凝視する。確かに手応えはあったが、

この程度でくたばる様な相手でもないという事をスバルの直感が告げているのだ。そして、その直感は正しく当たっていた。

一際「デカブツ」の目が光った、と同時にスバルはマッハキャリバーによって強引に後方へと走行する。背中に走った悪寒を、怖気を振り払いながら、全力で後退する。

そんなスバルの鼻先を、彼女自身すら吹き飛ばせそうな風圧を伴いながら、セラヴィーの巨大な拳が通過した。それはスバルを捉える事無く地面に振り下ろされたが、その威力たるや、地面に数メートル、あるいは十数メートルものクレーターを造るほどであり、生身の人間が喰らえばどうなるか、想像するまでもない。例え並みの魔導師よりも強固なバリアジャケットを纏っていたとしても、だ。

『こんなところで……負けるわけには……』

『こんなところで……やられる訳には……』

『『いかないんだ（です）！！』』

セラヴィーが地面にめり込んでいた拳を引き抜きながら、その蒼碧色の目をスバルへと向ける。それを真正面から見たスバルは、相手がもう小細工に引っ掛からないと、理屈抜きに本能で感じ取った。ならば、彼女に残された選択肢とは？

……決まっている。否、そもそもそちらの方が彼女自身にとっても分かりやすくて好ましい。

そう、力と力による真っ向勝負。それが彼女に残された唯一の選択肢。小細工が、戦術が通用しないのであれば、後は力で捩じ伏せるのみ。

「マッハキャリバー、行くよ！」
『イエス、マスター。私は貴方と共にどこまでも駆け抜けるので、安心して全力を出して下さい』
「分かったよ、相棒！」

スバルは己の中にある「戦闘機人モード」へのスイッチを押し、その瞳を碧色から金色へと変える。そしてリボルバーナックルを高速回転させ、彼女が放てる最大の攻撃の準備を完了させた。

対するセラヴィーは先程から一歩も動かずに、ただ右手を微かに握り、体の重心を落とす。どうやら「デカブツ」は砲撃では無く拳での迎撃にしたらしい。

「ウイングロード！」
『ウイングロード』

それを確認してからスバルは蒼い空の道を作り、それを目一杯の速度で駆ける。駆け抜ける。最短距離を最高速度で走り、セラヴィーという名の天使の元へ至ろうとする。

それを見つめながらセラヴィーは、その右手を弓でも弾くかのごとく後ろへと引っ張り、後は微動だにしない。それ以外は必要でないと、こいつにはこれで十分だとでも言うように、その傲岸不遜（ごうがんふそん）な態度を崩さず、ただ相手を待ち構える。

そんな両者の距離が加速度的に縮まっていき、その距離がちょうど相手に右手が届こうかという距離になると同時、両者はギリギリまで力を溜めこんだ右手を、全く同じタイミングで繰り出した。

『「振動拳ンンン！」』

『『喰らえェエエ！』』

そして世界は色を、音を無くすほどの閃光と爆発により、一時停止を余儀なくされた。

―新暦６９年・第２５管理世界―

「……仇……だと？　そんな情報は」

「無い……でしょうね。だって私は養女として登録されていたんですから。それも、私の本当の家族であったカノン家滅亡後に、唯一生き残った私を、保護するとの名目でフォートレス家に養女として拾われた。……こう書いてあったんでしょう？」

「……あぁ」

ゆっくりと、ゆったりと、まどろむような速さで彼女は告げてくる。事の真相を、何故彼女がフォートレス家を憎んでいるのかを。

「でも、実際は違かった。彼らが私を引き取ったのは、カノン家に蓄えられた巨額の遺産を自分たちで使えるようにするため。その為に、その為だけに！　私達は、カノン家はフォートレス家に滅ぼされた！」

「……！」

「だから私は、虎視眈々と復讐するチャンスを狙っていたわ！　相手が油断してい居る時、相手が眠っている時、相手が無防備な時、何度その首を掻き切ろうとした事か、そして何度それを我慢した事か！」

その時の彼女は目が血走り、顔も憎悪により酷く歪んでいて、まるで悪魔のようであった。その茶髪はさながらよく悪魔の頭に付いてある角のようで、その白い肌も興奮で赤く染まり、血を全身に浴びたようにも見えなくはない。

「私は彼らに復讐することで、私の世界を取り戻すはずだった！　そう、私の世界に変革を齎せるはずだった！　例えそれで9歳の子供が死ぬかもしれないと、義妹が私を恨むかもしれないと分かっていても、私はこの弱者には優しくない、強者ばかりを優遇する世界に、僅かながらでも波紋を生じさせる事が出来れば、私と言う小さな世界に変革を齎せれば、それで、それで満足だった！！」

そこまで言ってからアイは、ティエリアに、憎しみという名の単一感情によって黒く染まった、それでもなお高貴な雰囲気を失わない黒真珠のような黒い瞳を向けた。

「だけど、その必要は無くなった。貴方が、貴方達が私の代わりに彼らを殺してくれたから。私の小さなこの世界に変革を齎してくれたから」

ティエリアはそこで初めて気付いた。彼女が涙を、それもかなり大粒な涙を流している事に。微笑みながらも涙を流すその姿はまるで聖母のようであり、それと同時に何らかの覚悟を胸の内に秘めたようでもある。その覚悟が何なのか、ティエリアには全く分からな

かったが。

「だから、私は貴方を恨むどころか、逆に感謝すらしている。ありがとう、私の代わりに彼らを殺してくれて。ありがとう、この理不尽な世界を変革させようとしてくれて。ありがとう、私の勝手な思いを聞いてくれて。ありがとう、最後に貴方と出会えて、嬉しかったわ」

「……最後？」

「えぇ、そうよ。だって私はこれから……」

地面に幾滴もの涙の粒を染み込ませながら、彼女はとても嬉しそうにそれを言った。それはティエリアの全身から血を引かせ、その白すぎる肌を泡立たせる。これ以上聞いてはならない、これ以上彼女に喋らせてはならないと、いつかのように本能がそう警告する。

しかし、その警告はやはりというか当然というか、前回と同じく何の役にも立たなかった。何故ならティエリアは再び彼女の姿に見惚れていたからだ。そう、ティエリアは彼女を恋愛感情抜きに、ただ純粋に美しいと思ったのだ。死に際の彼女を。

だが、それも当然だったのかもしれない。だってその笑顔は、恐らく彼女の人生の中で一度出るかどうかというほどの、それも幸せの絶頂期にしか出せないモノだったのだから。それに例え無性とはいえ、ティエリアが惹かれてしまうのは仕方がないことであろう。

「死ぬんですから」

そして、彼女の右手にいつの間にか握られていた銀のナイフが、彼女自身によってその腹部へと、より詳しく言えば、ちょうど鳩尾あたりに埋もれていき、本来灰色と茶色で彩られていた地面を赤く、

赫く染める。

ティエリアがそれを止めるべく駆けだした時には、既にそのナイフが彼女の鳩尾に深々と突き刺さった後だった。

―新暦７５年１０月１０日・第９７管理外世界・日本―

「ウオォオオォオオオ！」
『ハアァアアアアアア！』

スバルの右手が、セラヴィーの右手が大気を切り裂き、音すらも置き去りにする速度で激突した。そして轟音と共に地面が割れ、暴風渦巻く中で数十センチも陥没する。

「アアアァアアアア！」
『オオオオォオオオォ！』

スバルのＩＳ（先天固有技能）である振動破砕―（四肢の末端部から目標の物体に振動波を送り、共振現象を発生させる事によって

対象を粉砕する）によって放出された振動エネルギーが、マッハキャリバーによって右手のリボルバーナックルに圧縮され、さらにナックルスピナーにより螺旋動作が加えられることで、任意の範囲を破壊する事を可能にさせる。

それは理論上壊せぬモノが存在しない、完成された「絶対破壊」。例え掠めただけであっても、あのスカリエッティが制作した「ナンバーズ」の中でもトップクラスの戦闘能力を誇っていたチンクの基礎フレームを歪ませるほどの破壊力を誇る、人外の物にしか放てぬ、破壊を極めし魔力付与攻撃。

それが振動拳であり、スバルが持つ最大の攻撃魔法である。

しかし、

それを持ってしても、「絶対破壊」を持ってしても、「ガンダム」の壁は、白い悪魔の異名は余りにも、そう、あまりにも高すぎた。

『僕は……約束したんだ！　彼女と、アイと！　そして、刹那とも！』

セラヴィーはスバルの振動拳を右拳で迎撃しながら、それを少しづつ前へと押していく。例え右拳のマニピュレーターが異常を示していようが、右肘から警告が上がってきていようがお構いなしに、

この一撃で相手を完膚なきまでに捩じ伏せるべく、その拳を前へ前へと動かす。

『そうだ、僕は負けられない、負けられないんだ！　この世界に変革を齎す為に、アイのような人間を生み出させない為に！　そして刹那との誓いを果たす為にも、僕は、負けられないんだァアアアアアアア！！』

「あっ……グゥウウウッ……！」

『貴様達にそんな覚悟があるのか、右手と両足にデバイスを持つ蒼き魔導師！　そして管理局の魔導師達！　いや、貴様達にそんな覚悟がある筈がない！　貴様達はただこの世界の秩序を守ることが正義であると、管理局によって作られた秩序を守ることが正義であると、そう信じ込まされているだけで、自分達が本当に善なのか、考えたことすらないのだろうからな！！』

そして遂にその均衡が破られた。セラヴィーの正拳が鈍い音を生じさせながらスバルの振動拳を押し返し、その衝撃でスバルを後ろへと弾き飛ばす。しかも、スバルは己の最強魔法を正面から打ち破られたショックで、コンマ何秒か茫然（ぼうぜん）としてしまうという愚を犯してしまい、正気を取り戻した時には、既に何もかもが遅かった。

『故に貴様達は、万死に値する！！』

何故ならばスバルが茫然としている間に、セラヴィーのその巨体がスバルに覆いかぶさるように飛んできていたのだ。それもその両腕を左右に大きく広げ、スバルを押し潰す為にその手をも広げながらである。スバルはそれから逃れようとするも、その巨体から滲み出る圧迫感、そして死の予感がそのしなやかな足に絡まり、動けなくなる。

「……あ」

その時、スバルはもう悟ってしまっていた。自分の終わりを、人生の終了地点を。この命が消え去ろうとしているその気配を、敏感に感じ取っていた。

「……でも」

しかし、スバルにとって、それは二度目の経験であった。かつて自分を殺しかけた「剣士」。それと最後に相対した時も、自分はただ死の恐怖に怯え竦み、何もできなかったのを、今でも鮮烈に覚えている。

「……でも！」

あの時自分は誓ったはずだ。もう二度とこの心を折らせないと、最後まで戦い続けるという事を。なのに、これは何だ？　自分は一体何をしている！？

「……マッハキャリバァアアァアア！」

『プロテクション！』

そうだ、それでこそ私の相棒だ。例え惨めだろうが醜かろうが、最後の最後までその心を折らずに、相手と向かい合う。それが憧れのあの人から教えられた事の一つ。私は間違っても覚えがいいとは言えないから、こうして一つ一つ、しっかりやっていかないとね。

『そんな障壁で！』

『止められるわけがないでしょう！』

セラヴィーがスバルの張った障壁をたった一秒でブチ破り、その体を押し潰すべく、手を開かせたまま両腕を突き出した。それを力強い眼で、不屈の目で睨むスバル。そんな彼女に気まぐれな不屈と言う名の女神が微笑んだのは、やはり必然だったのかもしれない。

「……スバル、皆、よくやったね。偉いよ」

『貴女達はとても勇敢で素晴らしい魔導師達です。さあ、後は私達に任せて、後ろに下がって下さい』

フェイトは左手から少量の血を流し、片手でバルディッシュを振るっていた。対する『ＯＯガンダム』は両手で一本のＧＮソード？を振るい、フェイトを力で押し切ろうとする。しかし、セラヴィーの前に不屈の者が立ちはだかった瞬間、両者は初めて互いから目を逸らし、向こうの状況を確認した。最も、刹那はＯガンダムから送られてくる戦況の報告に軽く目を通しただけだったが。

『マイスター、彼女が再び動きました！』

『馬鹿な、あのダメージで動くだと！？　正気か奴は！？』

「そんな、どうして！？」

『サー！』

「ッ！？」

フェイトが『ＯＯガンダム』から視線を外したその刹那、フェイトの眼前を銀色の剣が斬り裂いた。それに戦慄しながらも、フェイトは高度を徐々に下げ、セラヴィーの正拳突きをまともに喰らったエリオの元へ、そしてセラヴィーと両手で組み合っている彼女の元へと駆けつけようとする。

だが、

『逃がさん！』

「クッ！」

それをさせてくれるほど、『ＯＯガンダム』は甘くも、ましてや弱くもない。

「この……！　邪魔をしないで！」

『行かせはしません！　貴女はここで私達に駆逐される運命なのですから、「金色の閃光」！』

『そうですねエクシア。彼女もまたイオリア・シュヘンベルグの計画における「不確定要素（イレギュラー）」ですから、ここで討っておいた方が得策です。どうします、マイスター？』

『……とにかく、こいつをセラヴィーの元に行かせないのが最優先だ。今のセラヴィーではこいつに太刀打ちできないだろうからな』

『『イエス、マイスター』』

フェイトが駆けつけようとする度に、『ＯＯガンダム』はその進路上に先回りをし、右手に持ったＧＮソード?でフェイトを元の場所にまで押し弾く。フェイトはそれを何とかしようとするが、元々の膂力の違いに加え、何故か必ずと言っていいほど、此方が動くよりも半歩早く向こうが動いている為、なかなかその横を通ることができない。それに歯痒さを感じながら、フェイトはそれでも『ＯＯ

ガンダム』を通り過ぎるようとする。

「また……！」

『……変わらないな』

「くっ……！」

『8年前と、そして4年前と何も』

「この……！」

『それではオレの横を通れないぞ、フェイト！』

それを僅か十秒で十数度も繰り返した時、何を思ったのか、突然フェイトの動きが止まった。しかし、本来なら喜ぶべきであろうその事態に、刹那は逆に全身の毛を逆立てさせる。

それは直感だったのかもしれない。あるいは予感か。かつて殺し合いをした者達にしか分からない、そんな微細な変化を刹那は感じ取ったのだ。

そう。刹那の勘に間違いがなければ、「金色の閃光」は間違いなくアレを、マイスターの中で最も戦闘能力が高く、そして速かったあのアレルヤですら、その閃光の名に恥じぬ速さで翻弄したあのフォームを発動させる……！

『させるか！　Oガンダム、GNソード?に回していたGN粒子を全てGNドライヴに回せ！』

『イエス、マイスター』

『エクシア！』

『GNジェットを後方に全開噴射します！』

エクシアの操作により『OOガンダム』の肩に搭載されている二つのGNドライヴから莫大なGN粒子が噴射され、その体を一気に

前へと噴き上げさせる。その速度は先程までの物とは比べ物にならない程速く、まるで蒼い流星のように、一瞬でフェイトとの距離を0に近づけさせた。

しかし、それを見ながら、なおフェイトは冷静さを失わずに、バルディッシュへと的確な指示を出す。先程斬り合っていた時に話し合っていた作戦を実行させる為に。

「バルディッシュ、フルドライブ！」
『フルドライブ・イグニッション。Ｒｉｏｔ　Ｂｌａｄｅ　Ｕｎｆｏｌｄ』

バルディッシュがフェイトの指示を受け、ザンバーフォームからフルドライブに当たるライオットブレードへと変形する。ザンバーよりも一回り小さく、細い片刃の刀身、それがライオットブレードである。

『何ッ！？　変身しないだと！？』
『しまッ、ＧＮ粒子をソードへ！』
『駄目、間に合わ！？』
「ハアァアア！」
『ブリッツアクション！』

フェイトがその変形したデバイスを、刹那の動体視力ですら捉えられない程速く、そして大きく振り被ったのを、何とか戦場で培った経験をもとにして認識しながら、そこで刹那は己の勘が外れた事を理解した。だが、その不測の事態は待ってはくれない。例えＯガンダムとエクシアが刹那よりも一瞬だけ早くフェイト達の狙いに気付き、急ぎその目論見を粉砕すべく、ＧＮ粒子をＧＮソード？へ回そうとしても、ブリッツアクションで腕の振りを速くしたフェイト

の斬撃は、それをさせる前に『ＯＯガンダム』へと、火花のような電光を纏いながら至る。

『フェイトォオォオオ！』

「「剣士」ィイィィィィ！」

目で追う事すら至難な速さで接近する『ＯＯガンダム』、残像すら霞む速度で剣を振るうフェイト。その両者の剣が一瞬だけ接触し、火花が散るよりも早く離れた。

『ば、馬鹿な……』

『いくらＧＮ粒子を纏わせていなくても、これは……！』

『一体どれだけの魔力をつぎ込んだのでしょうか、あの剣に……』

そして、その場に半分となった銀色の剣を握ったまま茫然としている「蒼い流星」を残し、「金色の閃光」が白い悪魔達による戦争が起こっている場所へと疾駆していった。

―新暦６９年・第２５管理世界―

「しっかりしろ、アイ・フォートレス！」

「……ゴフッ」

ティエリアは真っ赤なカーペットの中心に倒れている彼女を急ぎつつも優しく抱き起こした。しかし、それと同時にアイの口から大量の血が噴きこぼれ、ティエリアのボディースーツを赤く染めていく。それに絶望を感じながら、ティエリアは必死にアイへ声をかける。

ティエリア自身、なぜこんなにこの少女を心配するのかが分からない。しかし、それでも、彼女が苦しむたびに心が痛み、体は彼女を助ける為に勝手に動いてしまう。そして、それに驚く自分がいる。

「……ぁ」
「おい、死ぬな！　生きろ！」
「……ぅ……ぁ」
「おい！」

それが恋愛感情でない事は、ティエリア自身が一番よく分かっている。だが、それ以外の感情で説明がつかないのもまた事実。一体、この感情は何なのだろうか？　ティエリアはアイに声をかけ続けながら、答えが出ない自問自答をする。

「……おね……ます」
「何だ、何を言いたいんだ！？」
「おねが……ありま……ゴフッ」
「願い？　願いがあるというのか？」
「……！」

アイの首が数ミリ単位で縦に動いた。どうやらもう限界が近いらしく、言葉をまともに発せない程弱っているらしい。

「……言ってみろ。もしそれが僕にできる範囲の事なら、全力でそれを叶えてやる」
「……この世界を……破壊して、欲しいんで、す。この、管理局によって……支配され、ている、こ、せ、世界を……ガフッゴフッ！」
「……何故だ、何故この世界をそんなにも変えたいんだ!?」
「……わたしは……カノン家によって、造ら、ニン……ゲン……でないモノだか……。か、管理局、高官の……悦楽……めに、管理局ゴフッ、技術部、と、開発……によって、実験的に生、だ、出され、た、人造生命体。……それ、が、アイ・フォートレス。ひけん、たいエル……０６７」
「！」
「だから、私のようゴフッ、ニンゲン、生み出、す、世界を……壊し、て……！」
「……だが、それは」

ティエリアはアイが自身と同じ、ニンゲンで無いモノ――人造生命体――であると聞かされ、そしてその最後の願いとして、この世界を破壊して欲しいと言われる。しかし、それでもなおティエリアは言いよどむ、言いよどんでしまう。それを成すのがどれ程の悪なのか、ティエリア自身が先程体験して知ってしまったから。

「世界を……変える事、壊す事。それは、たし、に、悪なのかも、しれまゴフッ。でも、それでも、この世界を、破壊して……ほし……！」

その葛藤を知り、その思いを理解して、その考えを読みながら、それでもアイはティエリアにその願いを託そうと、叶えて欲しいと言う。自分のような命が生み出されない世界を、優しい世界を創造する為に、この世界を破壊して欲しいと言い続ける。

何故なら、創造は破壊からしか生まれないということを、彼女もまた先程体験して知ったから。「CB」によって、ティエリアによって偽の家族を殺され、その世界を破壊された彼女は、しかし、新たな世界もまた同時に創造されたのだ。

「……分かった、その願いを聞き入れよう。だから、もう喋るな、アイ……！」

ティエリアは彼女のその願いの重さを、覚悟を、頭では無く魂のような深いところで理解した気がした。だから、彼はその時だけでも、その願いを聞き入れようと思い、了承の意を彼女に伝えた。

「フフッ……最後に、天使の、方と、このような約束が……できるなんて、何てすばら……」

それを聞いた彼女が、より一層笑みを深くし、そして体中の力を抜いていく。いや、抜かされていく。刻一刻と近づいてくる死の気配により、可憐な薄桃色であっただろう唇を紫色にしながら、彼女はそれでもある言葉を最後に残そうと、その唇に微量すぎる力を入れた。

「もう、もう分かった。分かったから、喋るな、喋らないでくれ、アイ！」

「あぁ、私の……人生も、捨てた……のじゃ……」

そして、その一言を残し、アイは事切れた。彼女が言った天使のような人物に抱かれたまま、幸せそうな笑みを浮かべて、彼女は本当の天上に行ってしまった。

「……ぁ」

ティエリアの小さな声がその空間にやたらと響き、寂寞（せきばく）としたものを自身に感じさせていたのを、ティエリアはこれから先、一生忘れはしないだろう。

―新暦７５年１０月１０日・第９７管理外世界・日本―

「エリオが注意を引いている間に、ティアナが幻術魔法で姿を隠しながら「デカブツ」の懐に入り込んで、無防備になった時に魔法を打ち込む。そして「デカブツ」が怯んでいる隙を逃がさないで、スバルがその魔法を打ち込んだ所に、さらに魔法を加える。……うん、いいんじゃないかな？　「デカブツ」の弱点である接近戦の弱さもちゃんと衝いてるし、なによりも、それで結果を出しているしね」

『恐らく９０点台は堅いでしょう』

「うん、そうだねレイジングハート」

彼女は自身の血で赤く染まった白いバリアジャケットを傷だらけの体に纏いながら、軽い調子でスバルたちの作戦を評価した。その眼前で「デカブツ」と呼ばれる化け物と両手で組み合っているのにもかかわらずにである。

『まだこれだけの力を残していたのか……！』
『しかし、このセラヴィーと力で勝負するなど……！』

周囲を莫大なＧＮ粒子と高密度の魔力によって掻き乱されている中、セラヴィーが両腕に全身全霊を籠め、目の前の魔導師――――高町なのは――――を組み伏せようとする。それに顔を顰めながら、彼女は紅い玉になっている相棒へと気楽に話しかけた。

「レイジングハート、いける？」
『私が駄目と言っても、マスターは聞かないのでしょう？　ならば、この状況からマスターを生き残らせる為に、私はマスターを全力でサポートします』
「ありがとう、レイジングハート。ごめんね？　こんな言う事の聞かないマスターで」
『ノープロブレム、マスター。私は貴女がマスターでよかったと思っています』
「ありがとう。じゃあ、レイジングハート。この戦いを終わらせるために、貴女の力を私に貸して！」
『イエス、マスター！』

その声をセラヴィーが聞くと同時に、セラヴィーの腕がなのはの腕に押し返され、軋まされていく。ゆっくりとだが確実に、セラヴィーの力を上回る力で、セラヴィーの上体を後ろに仰け反らせる。

『ば、馬鹿な！？　このセラヴィーが、押し負けるなど……！』
『そんな、嘘……！』

それを信じられないティエリアとセラヴィーは、互いに絶句し、驚愕の声を洩らす。だが、信じられないことは、それだけでは終わらなかった。

「いっけぇえええぇえええ！」
『ゴー、マスター！』

なのはがデバイスによる魔力制御を受け、その力をさらに増大させたのだ。それによってセラヴィーは最早立つことすら叶わなくなり、遂には片膝を地につけてしまう。

そして、片膝をつくと同時、今までに感じたことすらない、圧倒的なまでの屈辱感がティエリアとセラヴィーの全身を駆け廻る。それは奥歯を噛み締めなければとても耐えられそうにないほどの大きな感情として、ティエリアとセラヴィーの胸を占めていく。

だが、その思いとは裏腹に、セラヴィーの体はどんどんなのはによって屈服させられていく。セラヴィーの足は既にその踝までが完全に地面に埋もれ、なのはよりも大きかったその巨躯を、なのはの身長と同等程度にまで下げられている。

『こ、こんな事が……！』
『そんな！　この私が、たかだか一人の魔導師如きに……！』

それにもっと大きな屈辱を感じながら、しかしどうすることもできない。それに屈辱を、焦燥を感じ――遂に彼らはそれを発動させる決意を固める。

『かくなるうえは、アレを発動するしか……！』
『ッ！　しかし、アレは今作戦では使わないようにと指示されていたはずです！　セラヴィーのアレを見せるのはまだ時期尚早だという理由で！』
『しかし、他に手がないのもまた事実だ。……セラヴィー、頼む…

…！』

『……了解しました。マイスターの御心のままに』

『……あぁ。礼を言う、セラヴィー』

その決意で焦燥感を、屈辱感を拭い去り、このシステムをセラヴィーに使わせたなのはに敬意を払いながら、彼らはその破壊を司る権能を解放させた。

「トランザム！」

『ＴＲＡＮＳ－ＡＭ』

そう、天使が振るう圧倒的な暴力を、血塗れの兇刃（きょうじん）を、悪夢の象徴であるその機能を、彼らは発動させた。

―新暦６９年・？？？―

「……こんなことが、あっていいのか……！」

ティエリアは第２５管理世界から帰還した後、すぐにヴェーダとリンクし、アイ・フォートレスについての情報を片っ端から調べ上げた。そして、驚きの事実が次々と判明していく。

――アイ・フォートレス。元カノン家の一人娘にして、フォートレス家の長女。そして新暦４９年に当時２９歳であった科学者「イリス・ラビリンス（Ｉ・Ｒ）」が提唱した「プロジェクトＬ（ラ）・ｉｋ（イク）・ｅ」（略称「プロジェクトＬ」）によって生み出された、被検体Ｌ－０６４。

「プロジェクトＬ」とは、「人間に限りなく近い、決して人ではないモノを人類の手で創造する」事を至上目的として掲げた、管理局主導による実験の総称でもある。

この計画によって生み出された個体は、実に１５２人にも上り、内成功体として十年以上生きられた個体は僅か３人しかいない。そしてその３人の内、アイ・フォートレスを除いた二人も、それぞれ悲劇的な最期を遂げており、今作戦でアイ・フォートレスが死亡した事により、生き残っている個体は存在しなくなった。

追記：この計画を管理局が裏で容認した理由だが、この頃の管理局は第１０管理世界で勃発した「一年戦争」により、優秀であった魔導師を何人も失っていた。それによってその戦力を著しく低下させてしまい、その戦力低下を防ぐことを急務としていたのだ。よって、「Ｉ・Ｒ」が提唱した「プロジェクトＬ」でその戦力低下を防げるならやらせてみようではないか、という結論になり、その計画の実行を許したのだ。ちなみに、失敗作として認定された個体は、大体１０歳以下の容姿で生み出される為、そのような姿に興奮する性癖を持った管理局の高官に、隠蔽と資金援助に対するお返しとし

て貢献されていた――

「……ふざけるな、ふざけるなァアアア！」

ティエリアはその胸糞が悪くなるような現実を否定したいが為に、近くの壁を思いっきり殴る。しかし、その痛みにより、これが現実であると再認識してしまった。

「……この世界に、正義はないのか!?　管理局も、「ＣＢ」も正義で無いとしたら、一体何が正義で、何が悪なのだ!?　いや、そもそも、この世界自体があまりにもおかしい、おかしすぎる！」

咆哮、絶叫、慟哭。そのいずれでもあり、そしてそのいずれでもない心の叫び。

「何故こんな世界が許される!?　何故こんな世界が存続している!?　何故この世界には悪しかない!?　何故こんな法則ばかりが存在する!?」

それを部屋中に撒き散らす。肩で息をつこうが、叫び過ぎて喉が枯れるようが関係無しに、ティエリアは叫び続けた。

「なぜ世界は、人は、もっと分かり合えない!?　もしもっと分かり合えれば、こんな事が起きるようはずもないのに、何故!?」

「……」

そんなティエリアの苦悩の様子を、刹那はただ黙って見ていた。何もせずに、ただじっと、彼はティエリアが出す答えを待ち続けた。

―新暦７５年１０月１０日・第９７管理外世界・日本―

なのはは目の前の敵が突然紅くなり出したのを、驚愕を持って見ていた。その白亜の巨躯が血よりなお紅く染まり、蒼碧色の粒子も、その色を「デカブツ」の体躯と同色に変色していく。

もし、ここに４年前、「ＣＢ」と戦った魔導師がいれば、それが意味することを理解するとともに、その場から全力で離脱しようとしたであろう。しかし、なのははこの現象のことを、愚かにも何も知らなかった。代わりに、彼女のデバイスがそれを知っていたが。

『これは、まさかあの……！』

『レイジングハート？』

『いけません、マスター！　いますぐ「デカブツ」から退避を！』

レイジングハートが狼狽（ろうばい）を露わにしながら、なのはにそう進言する。そのデバイスは知っているのだ、この現象が何を齎すのかを。そして、これによってどれ程のオーバーＳランク魔導師が殺されたかを、そのデバイスは知っていたのだ。

『……？　どうし』

だが、そんな事を露とも知らないなのははは、何故このデバイスがそんなに焦燥しているのか、全く理解できなかった。それに苛立ちすら露わにしながら、それでもそのデバイスはなのはに撤退を、彼女を生き残らせる為に、必死に進言した。

『「デカブツ」がＴＲＡＮＳ－ＡＭを発動させようとしているのです！　ですから、退避を！　もしそれが発動されれば……！』

『……痛ッ！』

『マスター！』

しかし、現実は、この現況を理解できていないなのはを置いて、加速度的に進んでいき、遂には手遅れという領域にまで達してしまう。

なのはの両手に突如走った激痛。だが、それに驚いたのも束の間。次に彼女の脳内を占めたのは、ただ視界一杯に広がる、深紅のＧＮ粒子の事であった。

「……え？」

なのはの視界は赤、赫、紅、ただそれ一色に染まっていた。血より尚濃い、深紅すら憚（はばか）られる様な、そんな紅色に。

そして、周囲を紅に染めているその粒子を噴き出している「デカブツ」もまた、同じくらい紅くなっていた。

そう、セラヴィーの握力によって今にも潰れそうな、なのはの血に染まった両手よりも、なお紅く。

「……え？」

それに茫然とするなのはを、セラヴィーが純粋な膂力だけで一気に押し返し、その片膝を地面から離しつつ、今度はなのはの片膝を地面へと着かせた。

そして、なのはの手は今にも潰されそうに、その骨を軋ませ、体全体の骨もまたギシギシと鳴り、破壊し尽くされた地面に押しこまれていく。

「～～～！」

それに抗おうとしても、トランザムを発動させたセラヴィーは、それを許可しない。先程とは構図を逆にしながら、それでも、その圧倒的な力をさらになのはへと傾ける。

その様子を見て、あと数秒も耐えられまいと、セラヴィーはそう確信した。そして、それは恐らく事実であり、同時に、なのはが死ぬという現実になる筈であった。

だが、不屈の女神はまだ天から見放されてはいなかった。まるでもっと戦うようにと、神が言っているかのようにである。

要するに、彼女はこの窮地を乗り越えるということだ。それも、先程助けた、自身の教え子達によって。

ガコン（ガコン）！

「「ストライク・ドライバァアアア！」」

『クッ！？』

『また後ろからですか！　しかし、ＴＲＡＮＳ－ＡＭを発動させた

セラヴィーに、そんな攻撃は……！』

スバルの振動拳と、エリオの紫電一閃が、セラヴィーの背面へと同時に直撃する。しかし、トランザムを発動させたセラヴィーにとって、その程度の攻撃など、最早注意を払う必要すらない物だ。だから、セラヴィーは後ろから接近されていても、マイスターに教えることすらしなかったのだ。

しかし、無傷で終わるだろうというその予想とは逆に、ティエリアの視界を重要個所の損壊を示す、数多の紅い警告が覆い尽くした。

『な……！』

『背部クラビカルアンテナ大破、「セラフィム」中破、そしてＧＮドライヴ本体に１７％の損傷！？　どうして！？』

ＧＮドライヴの管制人格であるセラヴィーが、自身でしたその報告に戸惑い、少しでも情報を掻き集めようと、ヴェーダにアクセスしながら機体の状態を確認する。その事実を認めたくないが為に、その事実を拒絶したいがために。しかし、それは覆しようのない事実だった。

セラヴィーの知る由でないことだが、実は、スバルとエリオの一撃は、セラヴィーがなのはと戦った時にできた損傷部、つまり、背部の巨大なクラビカルアンテナの一本にできていた罅（ひび）に直撃していたのだ。しかし、セラヴィーが何故それに気付かなかったのか。それにはきちんとした理由がある。

セラヴィーはかつてのヴァーチェから発展した人格であり、もちろん４年前の戦争の記憶もきちんとアップデートされている。しかし、４年前の戦いでは、ヴァーチェが損傷するなど、最終決戦以外（フォーリング・エンジェルズ）、殆ど無かったのだ。故に、セラヴィーはどの程度の損傷が本体にどう影響するのか、マニュアルでは知っているものの、実戦での経験は皆無に等しいのである。

だからセラヴィーは、例え損傷部に攻撃を受けても、自身が無傷で済むだろうという予想を打ち立てていたのだ。それがどれほど甘い推測なのかを知りもしないで。

『セラヴィー、どうし……！？　何だと！？』

そして、その代償が、トランザムシステムの強制解除だった。背部にある二つの巨大なクラビカルアンテナの片方が、スバルとエリオの攻撃により中ほどから折られ、それによってＧＮ粒子の制御能力が大幅にダウンし、トランザム時に使用される莫大なＧＮ粒子を制御することが不可能となる。さらに、ＧＮドライヴ本体に損傷が入ったことにより、トランザムを発動・維持するのに必要不可欠な超高濃度圧縮粒子がその損傷部から使われる事無く漏れ、トランザムの使用時間を大幅に削った。

そう、この二つの条件が重なり、セラヴィーのトランザムは強制解除されたのだ。他でもない、セラヴィーの判断ミスで。

「力が弱まった？　……レイジングハート、「ブラスターシステム」起動、ブラスターリミット１、リリース！」

『しかし……イエス、マスター。ブラスターモード起動、ブラスターリミット１、リリース』

そして、なのははセラヴィーが紅から元の白に戻り、力が弱体化していくのに気付くと、自らの切り札を、あまりにも莫大な負荷がかかることから、使用を制限されているジョーカーを発動させた。

それにより力が弱まり、ＧＮ粒子が急速に減少していくセラヴィーとは反対に、なのはの魔力が爆発的に膨れ上がり、その腕力もそれに比例して爆昇する。

『こ、これは……これが、「ブラスターシステム」か！』

『あの聖王をも下した、高町なのは最後の切り札……！　まさか、このタイミングで使用してくるなんて！』

なのはから溢れ出る魔力が大地を、大気を、そしてセラヴィーをも震撼させ、震え上がらせる。それはまさしく絶対のエースと呼ばれるに相応しい魔力量だ。恐らく、ＳＳランクには届いているだろう。そう、管理局では八神はやて以外、誰も到達し得なかった、ＳＳランクに！

「アアァァアアア！」

その圧倒的な魔力によって強化された握力で、なのははセラヴィーの両手を握り返した。すると、その圧力に、振動拳で損傷していた右手が耐えられなくなり、――遂には握り潰される。

『右手が完全に破壊されました！　右肘もかなり危険領域に入っています！　一体どうすれば……マイスター！』

『この……悪魔がァアアア！』

ティエリアのその叫びと同時に、セラヴィーの背がなのはによって、クレーターになっていた地面へと叩きつけられる。それによっ

てそのクレーターがさらに広がったが、なのははそれを気にするよりも前に、完全に破壊したセラヴィーの右手から自身の左手を離し、その手で今度はセラヴィーの頭部を何度も何度も殴る。

その一発一発で地面を十数メートルは砕くであろう拳が、セラヴィーの顔面を何度も襲い、その形を歪んだ物にさせていく。そして、セラヴィーのデュアルアイの片方を壊し、額のクラビカルアンテナを折り、その頭部全体に深い罅を入れて、漸くその殴打が止まった、が。

次になのはが行ったのは、左手でセラヴィーの頭部を鷲掴(わしづか)みにし、その圧倒的な魔力にモノを言わせた握力で、それを砕くことだった。

「これで、終わってぇえええ！」
『高町、なのはぁあああぁあ！』

それはセラヴィーの頭部を、徐々にだが確実に破壊し、破砕していく。そして彼らの周囲にミシミシ、ギシギシと、鋼の不協和音が鳴り響き、それがティエリアの視界にある警告欄を急速に増やしていく。それに焦りを感じるティエリアだったが、どうする事も出来ないのもまた彼らの現状であった。右手が完全に壊され、左手も未だになのはによって握られ続けることにより、それによって青白いスパークを辺りに放っており、両手は完全に使えない状況だ。

もはや打つ手がない、後はもう負けるだけだと、そうセラヴィーが思ってしまうほどに、その状況は彼らにとって、どうしようもないほど不利である。しかし、自身の「ガンダム」がそう思っていても、その「ガンダム」のマイスターであるティエリアの脳裏に蘇るは、かつて刹那と交わしたたった一つの誓いであった。そう、悪鬼と悪魔の古き誓いを、ティエリアは思い出していた。

―新暦６９年・？？？―

「……刹那、僕は決めた」

「……何をだ、ティエリア・アーデ？」

その時のティエリアは、何か憑き物が落ちたような顔をしていたのを、オレは今でも覚えている。

「……僕は、この世界を変革させるためなら、例えそれが悪魔の所業であっても、迷わず実行に移す」

「……それが、お前の答えか？」

この時、オレはかなり驚いていた。何故なら、たった一日でそんな答えが出るようなモノでは無かったからだ。オレですらその答えを得るのに数カ月を費やしたと言うのに。

「あぁ、そうだ。……この世界に、善悪など存在しない。あるのはただ強者が弱者を搾取するという、神によって制定されたルールだけだ。僕は、それを破壊したい」

「……この世界に、神はいない」

「……刹那？」
「この世界には、神など存在しない」

ティエリアが得たその答え。オレはそれを聞きながら、しかし、どうしても言いたいことがあった。それが、神などいないという事だ。

だが、もしこの世界に神がいたとすれば、それは……

「……すまん、忘れてくれ」
「……分かった。君がそこまで思い詰めた顔で言うのであれば、忘れよう」
「感謝する、ティエリア・アーデ」

オレは素直にティエリアに感謝した。こういった所はイオリア・シュヘンベルグから嫌というほど教えられたからな。「例え悪であろうとも、人としての心を忘れるな」。全く、義父らしい格言だと思う。

「その代わりと言っては何だが、僕はその目的を達成させる為に、「ＣＢ」に所属しようと思う。だから、その力を貸してくれないか、刹那・Ｆ・セイエイ？　いや、ソラン・Ｉ・シュヘンベルグ」
「勿論だ。オレ達は仲間だからな」

首を少し縦に動かし、肯定の意を示しながら、オレはもう一度ティエリアを正面から見据えてみた。……本当に何があったんだ、こいつに？　昨日とはまるで別人見たいだぞ？

「なら、ここで誓いを立てようじゃないか」
「……誓い？」

「あぁ、そうだ。この世界を変革させるその決意を神に、いや、「ＣＢ」の象徴機となる「ガンダム」に誓うんだ、刹那」
「……それもいいな」
成程。それは悪くない提案だ。特に「ガンダム」に誓うというのが素晴らしい。
「では、同時に唱えよう」
「あぁ」
言って一拍。
「ティエリア・アーデがＩ－００１が、ここに「ガンダム」へ、世界を変革させることを誓う」
「刹那・Ｆ・セイエイがソラン・Ｉ・イブラヒムが、ここに「ガンダム」へ、世界を変革させることを誓う」
朗々たる声が無重力空間に木霊する。
「僕は例え悪魔に成り果てようとも、この世界の法則を破壊する」
「俺は例え悪鬼に成り果てようとも、この世界の歪みを駆逐する」
悪鬼と悪魔の宣言が、宣誓が、誓いが辺りを震わし、空気をも揺さぶる。
「これは決して揺るがず、また変わることのない決意である」

「これは決して揺るがず、また変わることのない決意だ」

その決意を胸の、心の、魂の奥深くに刻みこみながら、彼らはその口から誓いを紡ぐ。

「そして同時に、「ＣＢ」に所属する決意でもある」

「そして同時に、「ＣＢ」に所属する決意でもある」

その誓いが意味することを理解しながら、それでも全ては彼ら自身の理想を、願望を、答えを実現させる為に。

「故に僕は、ここに世界の法則を破壊することを誓おう、「ガンダム」ヴァ―チェへと！」

「だから俺は、ここに世界の歪みを駆逐することを誓おう、「ガンダム」エクシアへ！」

そして最後に、彼らは謳うようにしてその誓いをそう締め括った。

―新暦７５年１０月１０日・第９７管理世界・日本―

『そうだ、僕達は世界が変革するその日まで、決して負けないと誓

ったんだ、「ガンダム」に！』
『マイスター？』
『だから、諦めるなセラヴィー！　僕達はこんなものではないだろう！？　僕達は「ＣＢ」の白い悪魔と畏怖された……悪魔なのだから！！』
『……！』
『僕達は今この瞬間、世界からその力を計られているんだ！　僕達に本当に世界を変革させるだけの力があるのかどうかを！　そして、僕達が悪魔に成り切れるかどうかを！　だから、その力を僕に……僕に貸してくれ、セラヴィーーー！！』
『イエス、マイスターーー！！』

ティエリアのその魂からの咆哮を聞いたセラヴィーは、隠しきれない喜びを声に滲ませながら、そのマイスターの願いを叶える為に、その力の一端を、封じられていた機能の一つを解放させた。「シックスアームズ」という名の機能を。

「この……！　いい加減にッ！？」

そして、その機能でなのはを縦横無尽に、数回にもわたって斬り刻んだ。そう、両手が使えない状況下であるにも関わらずに、だ。

その不可解な事象に、なのはは困惑し、直後に気付いた。

セラヴィーの両膝と左肩からも腕が生えているという事に。

「な……！？」
『これは……！？』

いや、それは正確には腕では無い。よく見れば、手こそ人の形を

模しているが、その腕はかつてセラヴィーの砲台として機能していた大砲その物だ。

歪な形、歪な数、歪な腕。それはなのはから見て、そう表現するしかできないほど歪んでいた。何が？　その根幹そのものが、である。

一体誰が考え得るだろうか？　砲台を手の代わりにする等。一体誰が思いつくであろうか？　砲撃で戦うはずの機体に、その砲撃の要を成す砲台を潰してまで腕を増やすという事を。

『セラヴィー、いいのか？』
『イエス、マイスター。ここで負けるよりはマシです』
『……あぁ、確かにな！』

少なくとも、なのはには想像することすら不可能だった。

『プロテク……！』
『遅い！』
「あぐっ……！？」

その予想外すぎる敵の能力はなのはに大きな隙を作らせた。そして、レイジングハートがそれに気付き、急ぎシールドを張ろうとするも、それよりも早く、セラヴィーの両膝、左肩から出現した三本の腕が、その手にそれぞれＧＮビームサーベルを握りながら、なのはの体を三方向から同時に斬りつける。

しかし、出力の弱まったＧＮビームサーベルでは、なのはのボロボロとは言え、管理局屈指の防御力を誇るバリアジャケットをたった数度で斬り裂くことは不可能だった。せいぜいがその防護服を数

ミリ削る程度。

しかし、それでもなのはから見れば、たった数センチしかない防護服を数ミリも削られるということは、恐怖以外のないモノでもない。

しかも、その直後にセラヴィーから離れようとしても、セラヴィーの本来の左手がなのはの右手を掴んでいたので、それを離させることに貴重な時間を使ってしまい、目の前を三本もの桃色の光剣が過り、そのバリアジャケットを斬り裂こうとするのだ。

この時、なのはとレイジングハートはその攻撃で自分達の守りを破壊されると思った。

だから、彼女達はその選択肢を選択してしまった。後に後悔する事も知らないで。

「レイジングハート、パージ！」

『リアクターパージ』

セラヴィーとなのはの間に爆発が起こった。小規模ながら互いの距離を空けるのにはちょうどいい爆風が吹く爆発が。

それはなのはのバリアジャケットの爆発であった。彼女はバリアジャケットを爆発させることで、当たりかけていたＧＮビームサーベルを無力化し、さらにその爆風で自身とセラヴィーとの距離を空けさせたのだ。

『逃がさ何！？』

「なのはは、やらせない！」

そして、後ろに下がったなのはに追撃をかけようとしたセラヴィーだったが、それは目の前に降り立った「金色の閃光」により阻まれる。それに歯軋りしながら、しかしセラヴィーは動くことができない。今の状態では片手を怪我しているだけの「金色の閃光」に勝てないという事を理解していたからだ。

そしてまたフェイトも同様に動けなかった。何故なら目の前にいるセラヴィーに三本もの腕が生えていたからだ。４年前の全身パージとは違う、そのあまりにも奇妙な姿に、フェイトとバルディッシュは警戒し、迂闊に近づくことができなかったのだ。

そんな膠着が数秒続く中、なのはは爆発による痛みに耐えながら、彼女のデバイスであるレイジングハートと話をしていた。ある魔法を使用する為に。

『マスター、お止め下さい！　いくらなんでも、それは……！』

「……」

『確かにまだブラスター１ですが、今のマスターがその状態で放てば、また寿命が！』

「……ごめんね、レイジングハート。こんなマスターで」

『マスター！！』

「それでも私は、この魔法以外で「デカブツ」を倒せる気がしないの。ディバインバスターやエクセリオンバスターじゃあ、絶対に倒せない……そんな気がするの」

『……』

「それに、彼らは余りにも多くの人々を殺してしまっているの。そして、恐らくそれはこれからも増え続ける……私はそれを、その殺戮を止めることができるなら、私は自分の命だって……」

『……もっと自分の命を大事にして下さい、マスター』

「……うん」
『……では、これだけは約束して下さい。これで「デカブツ」を倒したら、完全に回復するまで休息を取ると。そして、ヴィヴィオと目一杯遊ぶと』
「……了解しました、レイジングハート。その約束は絶対に護るよ」
『……本当ですね？』
「うん」
『では、カウントを始めます。いいですね、マスター？』
「うん、いつでもいいよ、レイジングハート！」

『エクシア、「金色の閃光」は！？』
『六時の方向、距離１９７！』
『現在セラヴィーと交戦しています！』

『ＯＯガンダム』が半分になったＧＮソードを腰に戻し、もう一振りの方を取り出しながら、先程逃がしてしまったフェイトを追いかけるべく、蒼穹を早々と駆けていく。

そして、彼らは見た。見てしまった。桃色に輝く星の光を。全ての咎人達に与えられる、滅びの閃光を。

『何だ、何なんだあれは！？』
『人間の操れる魔力量ではありません！　あれは、あれはまさか……！』
『現在確認されている魔法の中で、最大にして最強と噂される、高町なのはの最強魔法、スターライト・ブレイカー（星の光 絶極に至りし）……！』

彼らはそれを戦慄と共に眺め、しかし自分達が止めねばセラヴィーがやられるかもしれないと想像し、すぐさまその阻止に向かう、が。

「やらせない！　クロスファイアシュート！」
「フリード、ブラストレイ！」
『邪魔を！』
『マイスター、相手をしている暇は！』
『分かっている！』

二人と一匹の竜が『ＯＯガンダム』の眼前に広域魔法と誘導制御魔法で攻撃し、『ＯＯガンダム』の進路を阻んだ。しかし、『ＯＯガンダム』はそれらを無視してでもなのはの砲撃を邪魔したかったのだが、その攻撃にはかなりの威力が籠められており、幾ら『ＯＯガンダム』といえど、ノーガードで喰らったらただではすまなかった。

そして、『ＯＯガンダム』がティアナとキャロを何とか振り切ったのと、滅びの光を射出させるデバイスが振り下ろされたのは同時であった。

『ティエリアァアアアアア！！』

「……な！」
『何だこのバカげた魔力は！？』
『マイスター、アレを！』

セラヴィーとフェイトは立ち向かいながら、突如発生した膨大な魔力を感知し、思わずその発生地点へと目を向けてしまった。

そしてそこには、巨大な桃色の光球が憤然と存在していた。それを瞠目しながら見詰めるフェイト。そんな彼女にその光球を創りだしたなのはが1つのお願いをした。

『5……4……』
「なのは、何をして……！」
「フェイトちゃん、お願い！　「デカブツ」をバインドして！　速く！」
「ッ！？　分かった！」
『3……』

困惑と心配が複雑に絡んだ心情のまま、しかしなのはの声に宿っていた力強さに思わず頷きながら、フェイトはセラヴィーとの距離を一気に縮め、三本もの光剣による剣戟をそのスピードで完璧に避けながら、その巨体に複数のバインドをかける。

『しま……！』
『あ』

それを何とか壊し、フェイトと同じようにセラヴィーもその空域から逃れようとするが、それは一時だけ遅く、そして致命的に間に合わなかった。

『2……1……スターライト・ブレイカー』

「行くよ！　全力、全開！」

桃色の光球が一際大きく膨らみ、その馬鹿げた魔力が一点に集束していく。桃色の魔力を煌(きらめ)かせ、世界を桃色に染めながら、それは全てを撃ち抜く光となり、天使の名を騙る咎人を撃ち抜く

「スターライト・ブ」

筈であった。そう、高町なのはの胸部から青白い腕が突きでなければ。

「「「……え？」」」

その腕を信じられないモノでも見ているかのようになのはは見た。そして、それはこれが映されている全次元世界も同じであった。

「この言葉を教える、管理局の白い悪魔よ」

そして、胸部から腕を生やしているなのはのすぐ側に、白いコートを纏った少年のような青年のような、そんな曖昧な年齢の、黒髪蒼眼をした人物が悠然と立っていた。それは片腕をマーブル模様の

円形空間に突っ込みながら、なのはへと普通に話しかけた。

「現実より残酷なモノを知っているか？」

第２４話　悪鬼と悪魔の古き誓い　≪後篇≫（後書き）

次回で地球篇終わりです。終わらせます。そしてそれとは関係のないことですが、最近この小説には何かが足りないような気がします。何なのかは未だに分かりませんが、次々回ぐらいからはその足りないモノも入れてみようかと。このような駄作を読んで下さった皆様に感謝を。

最後に。

感想制限が外れましたが、アレ、外した方がいいんでしょうか？
皆様の意見をお願いします！

第２５話　世界は変革の途を往く（前書き）

この作品は、基本なのは勢　ガンダムなので、それが許せない方は見るのをお勧めしません。

では、開演です。

第２５話　世界は変革の途を往く

善悪において、一個の創造者になろうとするものは、まず破壊者でなければならない。

そして、一切の価値を粉砕せねばならない。

――ニーチェの「この人を見よ」より

―新暦７５年１０月１０日・第９７管理外世界・アースラ内―

シャマルは目の前の光景を信じられない思いで見ていた。かつて「闇の書事件」で自身がなのはに行った旅の扉によるリンカーコア摘出。それがそこに映っていたからだ。

「そんな！？　あれは今では私以外、誰も使えないはずなのに、どうして……！」

旅の扉。それは数ある転送魔法の中でもとりわけ希少な『離れた場所の物体を「取り寄せ」する魔法』である。そして、その魔法は管理局が確認している魔導師の中ではシャマル以外、誰も使えない

魔法でもある。

何故シャマルのみが使えるのか。それはこの魔法が今では数少ない古代ベルカ式の魔法であると同時に、その古代ベルカ式の中でも、殆ど居ないと言っても過言ではない補助（サポート）特化型の魔導師にしか使えないからだ。さらに言えば、この魔法が構築された時期が、かつての闇の書にして現在の夜天の書が創造された時という、遥か太古の時代だった事も、その要因の一つにある。

だが、シャマル以外は使えないはずのその魔法を、白いコートを纏った、短い黒髪の少年？　のような人物が堂々と発動させている。それも、かつて自身が犯してしまった過ちと同様の使用方法で。

「止めて！　その魔法でそんな事をするのは、もう止めてぇえええ！」

悪夢としか言いようがないその光景に、シャマルは叫ぶようにして中止を懇願した。それが聞き入れられないと、聞こえるはずがないというのも理解できないで、彼女は錯乱したかのように叫び続けた。

「シャマル、落ち着け！　落ち着くんだ！」

それはザフィーラがシャマルを強制的に気絶させるまで、ずっとずっと、続いていた。

―同年同日・同世界・日本―

「現実より残酷なモノを知っているか？」

それは嗤いながらそう言った。なのはの胸を貫くその右腕を大きく天上に掲げながら、その閉じていた右手をゆっくりと開く。

「少なくとも、我は知らない。そして、我がマスターで在らせられるアーカイブですら知らぬ」

その手に握られていたのは、桃色の小さな光球。俗にリンカーコアと呼ばれる物である。

「そして、我と我がマスターが知らないのであれば、それはこの世のどんな存在も知らないという事と同義であり、従って、現実よりも残酷なモノなど存在しない事になる」

それを右手に浮かせたまま、それは、コードネーム「アップル」は、そのリンカーコアの周囲に十重二十重にも重ねた魔法陣を展開させる。ミッドチルダ式とベルカ式、そしてその両方を合わせたような魔法陣を。

「だから、白い悪魔よ。貴様はこれから知ることになるであろう」

ミッドチルダ式と古代ベルカ式。それを複数同時展開するという

のは、最早不可能と言われていた所業だ。しかし、その不可能と言われていた行為よりも、さらに不可解なのが、その両方の式の文様を合わせたような、誰もが見聞きした事すらない、異端の魔法陣であった。古代ベルカ式の正三角形が二つ重なった正六角形の外周を、ミッドチルダ式の正四角形を二つ合わせた正八角形が囲み、その正八角形をさらに二重の円が取り囲むのがその魔法陣の形容である。

「この現実という世界よりも、残酷なモノはないということを」

その三つの式を十重二十重に展開していた魔法陣が、一際その輝きを強くし、なのはのリンカーコアの周囲をさらに速く駆け廻り、スターライト・ブレイカーの桃色を白色に染め、その魔力をも利用し、アップルの魔法を発動させようとする。

「我、汝の連結する核を封じ、汝の魔を久遠の元に葬ろう。それが汝の幸にならんことを、切に願う」

その詠唱は優しく、慈悲深げに、そう謳われた。それが意味することを隠すが如く、その真なる意味を悟らせない為に、そう詠われる。

「永久封印魔法、「エンドレス・コア・シール」、発動」

そして、アップルが右の中指と親指を擦り合わせ、パチン、と乾いた音を出すと、その魔法が発動し、世界をその魔力光と同じ、淡い白色に染め上げた。

―同年同日・同世界・イギリス―

「ハァ、ハァ……！」

美しい銀髪を乱しながら、ヒュドラは暗い森の中を敗走していた。その脳裏に浮かぶのは、自身の仇でもある赤い異形の、本気になった抗いようのない暴力（権能）。

「……ッ！」

それを思い出すたびに、ヒュドラの背筋は凍え、その細い喉は引き攣（つ）り、曲線が美しい足が止まりそうになる。

「ハァ、ハァ……！」

だが、足が止まりそうになる度に、ヒュドラは自身を逃がす為に、敢えてあの異形と一対一で対峙し、囮となったグレアムを思い出す。そして、それを思い出す度に、その足に少なくなった力を込め、少しでもその場から撤退すべく、懸命に足を前に動かす。

「……！」

どれほど逃げたであろうか？　どれほど走ったであろうか？　それが分からなくなるほど、ヒュドラは自身を見失い、その瞳から覇

気を無くしていた。悔し涙はとうに枯れ果て、哀しみの涙も、無力を嘆く涙と共に、既に出し尽くしていた。

「……？」

そんな脱力感と絶望感に打ちのめされているヒュドラの目の前に、一人の少年が横たわっていた。その少年は蜂蜜色の髪とやや褐色に染まった肌に、黒い煤（すす）と赤黒い液体を付着させており、傍から見ても大丈夫なようには見えない。

「……ヴェノム？」

『生体反応あり、生存確認』

「……そう」

しかし、それでもヒュドラは、自身の折れかけている心を奮い立たせ、その少年に回復魔法をかけた。彼女はその心に決めていたのだ、助けられる人間がいる時は、必ず助けると。それが、今まで彼女達が奪ってきた命に対する贖罪だと、そう信じて。

「……う、うん？　ここは……？」

「……大丈夫？」

「え？　あ、はい。何とか」

「……そう」

「あの、助けてくれて、ありがとうございます」

「……別に」

その少年はどうやら大きな怪我もないようで、ヒュドラが苦手とする回復魔法でも、すぐに治せた。それに表情には出さないものの、心の中で安堵の溜息をつく。

「……あの、すいません。もう一人、知りませんか？」
「……もう一人？　いえ、ここにはあなたしかいなかった」
「そんなはずは……」
「……もしかして、あの猫の事？」

そう言ってヒュドラは、すぐ側の茂みで死んでいた、一匹の猫を指差した。その猫はあまりにも残虐に殺されており、とてもではないが、正視することができない。

「……そ、そんな。嘘……ですよね？」
「……？」
「返事をして下さいよ……ロッテさん！」
「……！」

少年が口にしたその名に、ヒュドラは心当たりがあった。

リーゼロッテ。リーゼ姉妹の片割れであり、同時に、グレアムの使い魔として、「管理局歴戦の勇士」を支えた、恐らく最強クラスの使い魔。

その情報が脳内から引き出されると同時に、疑問が湧いてきた。この少年とリーゼロッテの関係が分からないという疑問が。

「……君は、何者？　答えて」
「ロッテさん、ロッテさん……！」
「……」
「ロッテ……さん……」

しかし、その疑問はすぐに氷解することとなった。少なくても、ロッテの死体を見て涙を流すような少年を、ヒュドラは疑う事が出

来なかったからだ。

―同年同日・同世界・日本―

「……え？」

なのはは未だにこの状況を把握できないでいた。自身が誇る最強の集束砲撃魔法「スターライト・ブレイカー（絶極に至りし 星の光）」を放とうとした所までは何とか理解できていたが、その後が全く分からなかったのだ。

突然自分の胸部から生えてきた白い腕。そして、その手に握られている自分のリンカーコア。そこまでも何とか視認できたし、理解もできる。これが「闇の書事件」にとても似通っている状況だという事も、頭の片隅で認識していた。だが……

「どうして……？　どうしてなの？」

これは一体どういう事なのだ？　それが理解できないし、したくも無いと、なのはは思う。

「どうして……魔法が使えないの！？」

そう、魔法が使えないという現実を。あまりにも残酷すぎる、その現実に、彼女は疑問と拒絶を抱く。

「それも当然。この魔法は相手のリンカーコアを、幾重にも重ねた魔法陣、及び環状魔法陣で完全に封印する魔法だからだ」

そんな彼女に、旅の扉を解いたアップルが、短い黒髪を風に弄ばれながら、たった一つしかない答えを答える。それしかない現実を、なのはにとって残酷すぎる世界を、ゆっくりと、諭すように説明する。

「本来なら、我ごときの魔力量では発動させることが不可能な大規模儀式魔法であるが、それも、マスターとの並列演算とスターライト・ブレイカーの魔力を併用・利用することで発動させることに成功」

その現実はなのはの胸を深く抉っていく。それを知って、なおアップルはこの残酷な現実を語り続ける。

「そして、その魔の法の効果は、半永久的にその者のリンカーコアを封じ、魔の法を使用不可能にさせる」

本来ならあり得ない魔法であるそれを、アップルは淡々と、ただ事実を述べているだけの軽さで、次々と解説していく。それを聞いていた者が思わず信じてしまいそうになるほどの説得力を持たせて、彼は朗々と迷いなく紡いでいく。

「つまり、管理局の白い悪魔である高町なのはは、今この瞬間死に、普通の、魔法が使えない唯の一般人になったということ。……本当

に現実とは残酷なモノよ。そうは思わぬか、唯の一般人となりし、高町なのはよ？」

アップルが酷く歪んだ笑顔をなのはに向けながら、なのはの青白くなった顔を覗く。そして、なのはは……

「……」

何も言う事が出来ずに、ただその残酷な現実から目を背けていた。

―同年同日・同世界・イギリス―

『ネ―ナ、何をしている！　ヤクトを起動させるだけでなく、アルケ―に科されていた疑似ＧＮドライヴの出力制限を解除するなんて、作戦無視もいいところだぞ！？』

『仕方ないでしょ！　そうでもしなきゃ勝てなかったんですもの！』

緑を基調としたガラッゾが、半壊しているアルケ―へと近づき、その失態を言及していた。それにアルケ―は何かと言い訳をしつつ、しかしその胸の内では悔しさと怒りを煮え滾らせながら、その小言を聞き流す。

『……だが、まあ、グレアムを殺せたことだけは評価しよう。彼は仮にも時空管理局で最強と言われていた魔導師だったからな。逆に、そんな相手に出力制御されたまま勝つというのが、土台無理だと私は思っていたが……』

『でしょう？　実際に戦ってみて分かったけど、彼とその使い魔、少なくてもＡＡＡランクは超えていたわ』

『……さすがとしか言いようがないな。よくあの歳でそれだけの実力を保持した物だ』

ガラッゾとアルケーはそう言い合いながら、首を撥ね飛ばされたグレアムだった物を見た。その体には幾つもの切り傷、掠り傷、火傷ができており、その頭もアルケーによって踏み潰され、白っぽい脳味噌が辺りに散乱し、吐き気を催すような光景を形成している。

『だが、それを差し引いても、それはやられ過ぎだったな』

『……分かってるわよ』

その光景を見ながら、しかし、アルケーの心は晴れなかった。

『さすがに三つあるとはいえ、疑似ＧＮドライヴの一つを破壊されるなんて、惨め過ぎて何にも言えないわ』

何故ならアルケーの右足がグレアムによって、粉々に砕かれていたからだ。それも、自身が勝利を確信した瞬間に。それに苦いモノを、してやられた悔しさを、自身に対する怒りを覚えながら、アルケーはその場からプトレマイオスへと帰還していった。

―同年同日・同世界・日本―

「なのはから、離れ……！？」

「ふむ、もう離れているが、何か？」

私はどこかで見たことのある仮面を被った人物をなのはから遠ざけるべく、バルディッシュで斬りかかったが、その時にはもう彼はセラヴィーの背後に立っていた。それも、私が感知できないほど速くにである。

「何時の間に……！」

「何時、と問われても、今し方としか言えんな」

そんな問答を愉快気に楽しんでいるその人物に怒りを覚えつつ、私は先程の超スピードによる移動を考察していた。もし彼の言う事が正しければ、彼は本当についさっき移動した事になる。が、少なくても、ここにいる全員がそれを感知できなかったようだ。あの「デカブツ」ですら突然自分の背後に現れた彼に驚愕しているぐらいなのだから、間違いないだろう。

しかし、果たしてそんなスピードを出せれるのか？　私や「デカブツ」ですら感知できないスピードで動くことが本当に可能なのだろうか？

……いや、待て。何か一つ、重大なモノを忘れている。もしあの魔法なら、まるで瞬間移動したかのように移動した彼のスピードも説明がつくではないか。しかし、本当にそんなことが可能か？　そんな所業は聞いたことすらないのに。

だが、目の前の人物は、実際に不可能と言われていた両式複数展開を使用し、かつ見た事も聞いたことも無い魔法陣を展開させるような魔導師だ。もしかしたら、可能なのかもしれない。

「……まさか、転送魔法？」

「然り。極短時間で発動させた転送魔法による移動。それが先程の速さの答えだ、「金色の閃光」よ」

「でも、そんなこと」

「不可能ではない。むしろ理論だけなら簡単だ。今まで不可能と言われていたのは、ただ単純に、使用者とデバイスの演算能力が、極短時間による転送魔法を使用するには不足だっただけ」

「あなたはそれがどれだけ馬鹿げた事か、分かっているの！？」

「知らん。興味も無い。ただ我等には実行可能だっただけの事」

呆れる他ない。彼はその所業がどれだけ有り得ない事なのか、理解していないのだろうか？

転送魔法を一瞬で発動させれば、それは如何なる移動魔法の速度をも上回る移動手段となる。これは過去現在において、何度も提唱されてきたことだ。しかし、その前提に立つ問題が、この手段を不可能たらしめていた。

それは、転送魔法を行うに当たり必要な情報処理、即ち演算能力が、使用者とデバイス、その両方を持ってしても、圧倒的に足りないという問題。

仮に、転送魔法のエキスパートで、演算能力が管理局一優れている魔導師がいるとしよう。それも管理局でも数少ないＡＡＡランク魔導師だ。そしてそのデバイスに、管理局最高の演算能力を持つデバイスを用意する。この時、果たして転送魔法の極短時間発動は可能か？

答えは否、不可能である。この実験は十年前に行われたものだが、それでもその魔導師は転送魔法を発動せるのに、最短で二分も掛かっていた。それも自身をたった数十センチ転送させるのに、である。

これを受け、管理局は転送魔法の極短時間発動は不可能とし、このような実験を中止・凍結するほど、それは魔法を扱う者達にとっては不可能な事であると認識されていた。

それを、目の前の人物は何てことはない事のように言う。正直、信じられない。

「さて、我等の目的は果たした。これから「箱付き」へ転移するが、それでいいかね「デカブツ」よ？」

『……貴様、何者だ？』

『「ＣＢ」なのですか？』

「……ここでは言えないが、少なくとも我はマスターの意向に従うだけの、ただのし……いや、人形だ。そしてそのマスターは、歴とした「ＣＢ」の一員」

『そのマスターの名は？』

「名は言えんが、コードネーム「アーカイブ」で通ってる」

『アーカイブ……だと？』

『では、あなたのさきほどの行動が、アーカイブの策である、と？』

「然り。故に、目的は果たせた。高町なのはを無力化するという目

的が。よって、帰還しようと考えるのだが、どうかね？」
「そんな事は、させない！」

だが、今はそんな事より、もっと重大な事がある。そう、彼らを捕まえるという事が。なのはには悪いけど、「デカブツ」がここまで弱っているチャンスを、逃す訳にはいかない！

『それは、此方のセリフだ！』

「……ふむ、どうやらあと３０秒後ほどか」

我は目の前で繰り広げられている、蒼と金の剣戟を眺めながら、トレミーがここに飛び込んでくるのを待っていた。

『何が３０秒後なんだ？』
「トレミーがここに来るまで。そしてこれからＡ１６に突入する」
『……トレミーが大気圏からここに突入して場を混乱させている間に撤退』
「そう、それだ」

しかし、我が言うのもなんだが、あそこに今飛びこんだら、間違いなく殺されるな。正直、向こうの戦闘に目が追い付かん。何て速さ。

「……準備はいいか、「デカブツ」よ？」
『……あぁ』

『向こうに行ったら、貴方の事を説明させて貰います』

どうやらまだ元気なようだ。ここまでボロボロにされとるのにな。まぁ、我としてもそちらの方がやりやすいのだが。

おっと、『ＯＯガンダム』が「金色の閃光」を数十メートル吹き飛ばしたな。これはいい。ちょうど向かえも来たことだし、さっさと撤退しよう。

「では全次元世界の諸君、さらばだ！！」

ふっ、一度この決め台詞を言ってみたかったのだ。あぁ、清々しい！

それは一つの隕石のように、空から落下してきた。本来なら蒼と白の船体を、大気圏突入による摩擦で赤く染めながら、それは東京湾に飛び込み、膨大な水蒸気と壮大な水柱を生じさせる。

「何が……！？」

そして、それによって発生した数十メートルもの津波が、東京湾のすぐ近くにいたフェイト達と東京を諸共呑み込もうと迫ってくる。

「キャロ、急いで！」

「は、はい！」

津波はその馬鹿げた質量を保ったまま、凄まじいスピードでフェイト達に、そして東京に近づいていく。それを見たフェイトはなのはを肩に担ぎ、スバルはエリオを腋に抱え、フリードリヒはその背にキャロとティアナを乗せて、その津波に呑み込まれる領域から全力で退避した。

その頃には、もうアップルも「デカブツ」も、そして「剣士」も、その姿を眩ましていた。

―同年１０月１３日・同世界―

この日から三日後、第９７管理外世界は、ある一つの声明を、全次元世界に向けて公表した。

「我等第９７管理外世界と呼ばれる世界の国際機構、地球連邦政府は、「ＣＢ」、及び時空管理局に対し、宣戦布告を表明する」

それは一つの世界の反乱を表し、同時に「ＣＢ」と次元管理局、その両方を拒絶する、本来の世界の在り方。

「「ＣＢ」は国連本部を崩壊させ、数多の世界に混乱を齎し、さらに中東で殺戮の限りを尽くした、のみならず、戦争に関係がなかったはずの日本をも、武力介入という名の虐殺で非道の限りを尽くし

た」

その宣言が何を意味するのか、それはまだ分からない。だが、少なくても、管理局にも、「ＣＢ」にも属さない世界ができたことは、この次元戦争にも等しい抗争の中で、大きな意味を持つのではないか？

「そして、時空管理局は、「ＣＢ」が日本へ武力介入をする口実を作り、そして過去何度もこの世界を滅ぼそうとした」

例えそれが血塗られた道であったとしても、それしか道がなければ、それを進まざるを得ない。それが第９７管理外世界が出した、次元世界に対する答え。

「かつて、時空管理局は、「Ｐ・Ｔ事件」、そして「闇の書事件」において、この世界を没させようとした疑いがある！　「Ｐ・Ｔ事件」ではかつて管理局に所属していた局員が、そして「闇の書事件」では管理局に在籍していた局員が、それぞれこれらの事件を起こし、この世界を滅亡の一歩手前にまで追い込んでいたのだ！　それも、この世界に住む我等には、何も知らせずに！！」

独立し、両組織に宣戦布告することで、「ＣＢ」の武力介入がさらに激化し、そして、それを止めようとする時空管理局が、その戦争を拡大させる。

「だが、これらの事件を防いだのも、確かに管理局である。しかし、この事件を防いだのは、ただ偶然その宙域に近かった次元部隊と呼ばれる部隊であり、組織における末端の兵士、部隊にしかすぎず、逆にこれらの事件を起こした者達は、管理局でもかなり上の立場の者たちである！　故に、どちらが管理局の真意なのかは、言うまで

もないことであろう！」

その悪循環が起こることを知りながら、しかし、それでもこの世界はその答えを選んだ。両組織が信頼できない、この世界を無茶苦茶にされたくない、「ＣＢ」に報復を、管理局に抵抗を。そんな様々な意図を、理由を巻き込みながら、その世界は次元世界そのものに対し、否を突きつけた。

「故に、地球連邦政府は、「ＣＢ」及び時空管理局に対し、武力による抵抗を、報復を、ここに宣言し、実行することを宣誓する！そして、その武力を行使する為の組織として、独立治安維持部隊「Ａ－ＬＡＷＳ（アロウズ）」を設立することを、ここに明言する！」

だが、それが本来の世界の在り方であると、次元などに関わらない方が、たった一つの世界だけで完結している方が、より本来の姿に近いという事を、一体誰が気付くであろうか？

「「ＣＢ」の武力介入、そして時空管理局の干渉からこの世界を護り、その治安を維持する為の組織である「Ａ－ＬＡＷＳ」は、同時に、国際機構である地球連邦政府の直属組織であり、その権限は地球連邦政府と同等のものである」

そして、今の世界に現人類が追い付いていない事に、誰が気付いているだろうか？

「独立治安維持部隊「Ａ－ＬＡＷＳ」により、「ＣＢ」と時空管理局がこの世界から排除されることを、地球連邦政府は切に願う。以上」

少なくても、一握りの人間だけは、それに気付いていた。

―同年同日・プトレマイオス?内―

「……ヴェーダの予測通り、か。しかし、まだまだ気を抜けないな」

無機質な部屋。

「セラヴィーとアルケーは損傷がひどく、完全修復には最低でも一カ月かかる。これはイレギュラーだったな」

机の上には、一本の黄色い花。

「しかし、「ファースト・アタック」がほぼ成功した事で、計画は第二段階であるフェイズ2に突入することができた」

「でも、不安要素は沢山あるよ?」

男女が一組。

「大丈夫だ。少なくても、アレが完成すれば、その不安要素を大幅に削れる」

「……うん。アレはもう最終チェックと実践シュミレーションまで

入っているから、あと数か月、速ければ1～2カ月で完成すると思う」

褐色肌の男性。

「セブンソードは？」

「完成して、もうエクシアにインプットしてある」

白色肌の女性。

「……なら、当面の不安要素は」

「数週間後に行う、時空管理局４大拠点の一つ、「ルイェビト」の攻略。これをセラヴィー抜きで成し遂げなくちゃいけない事……かな？」

黒髪の青年。

「セラヴィーがいないのは痛いが、それも何とかリボンズのアップデータで間に合わせられる……か？」

「……分かんない。でも、本来この作戦に参加する予定がなかったリジェネとリヴァイヴを合流させるはずだから、大丈夫だと思う」

桜髪の女性。

「スメラギ・李・ノリエガがそう言っていたのか？」

「……うん」

「なら、その作戦は大丈夫だろう。……しかし、遂にこの世界に変革を起こせたな」

「あとは、私達人類の……」

「そうだ」

部屋の中央で、机を間に置きながら話し合う。

「だから、オレ達は負けられない、負けれらないんだ、フェルト」

「そうだね、刹那。一緒に頑張ろう」

「あぁ」

そして、互いに名を呼び合いながら、二人は一本の黄色い花と、それぞれが机の向こう側にある互いの顔を交互に見ながら、静かに話を終えた。

第２５話　世界は変革の途を往く（後書き）

長きに渡り、作者を苦しめてきた地球篇も、漸く終わりを迎えました。

そして、同時に新しい物語の始まりでもあります。これからもこの作品を読んで下さる読者を楽しませるような作品を書いていきたいと思います。

しかし、この作品も、遂に第一部とでもいうべき区切りをつけることができました。これも、ひとえにこの作品を読んで下さる皆様方のおかげです。ありがとうございます。このような駄作を読んで下さった皆様に感謝を！

最後に。

これからプロットその他諸々を書いてきます。なので、更新は遅れる予定です。申し訳ございません。

幕間－1（前書き）

主に本編の補完を目的としている話を、幕間とする事にしました。
内容は変わっていません。

では、開演です。

幕間―1

―新暦75年10月10日―

ここ第25管理世界で今、一人の人間が路上で天上に向かって思いっきり吠えていた。

「……見つけた、見つけたわ！　やっと、漸くッッ、遂にッッ！　貴方を、発見ッしたわぁあああ！！」

一本一本が黄金と釣り合えそうな金髪を上下に振り乱しながら、齢15になろうかという可憐な少女が、真昼(天上)の空に向かって声高に叫ぶ。歓喜を、抑えがたい快楽を、何とか表現しようともがく芸術家たちのように、その体を右へ左へと捩(よじ)りながら、それは心の深淵その物を叫び続ける。

「あの時！　貴方は私の家族を殺した！　私の目の前で！　無残に！　残虐に！　冷酷に！」

声が枯れようと、しわがれようと、そんな事には一切構わずに。

「だけど！　それだけならよかった！　私にはお姉ちゃんがいれば、それだけでよかったから！」

周囲の人たちが、彼女を気味悪がっているのにも、気の毒そうに見ていることも全く気にせずに。

「でも！　貴方は！　お姉ちゃんを殺した！　銀色に光る大きなナイフで！　その腹を刺して！　お姉ちゃんを殺した！」

彼女はずっと、ずっと叫ぶ。叫び続ける。目の前に映る、モノクルをかけた老人、にではなく、その横に並んでいる四人の内の一人、紫色のボディースーツを纏っている人物をじっと、じっと見据えながら、彼女はその映像が終わるまで、ずっと叫び続けた。

「だから！　私は！　貴方を……絶対に……赦（ゆる）さないッッッ！！」

そして彼女、アイシスは、六年前の光景をその胸に、復讐心と一緒に焼きつけながら、足早に去っていった。

アイシスは九歳の時に、自身の由緒正しき、誇りある姓を捨てていた。「フォートレス」という姓を。何故なら、その家はもう滅ぼされたからである。

そう。紫色のボディースーツを着た何者かによって。

―同年１０月１１日―

暗い部屋の中央で、８人の人間が高級そうな椅子に座りながら、緊迫した様子で話し合っていた。中には唾を飛ばし、怒声を上げながら自身の意見を主張する者もいる。

「時空管理局に協力すべきだ！」「いや、しかし、彼らに付けば質量兵器を放棄しなくてはならないのだぞ？　この世界で唯一つの武力である質量兵器をだ！　そんな事、認められる筈が……」「待て！　まずは「ＣＢ」を滅ぼすのが最優先事項だろうが！」「だが、我等の兵器では傷一つ付けられないぞ！　本部と中東、そして日本での戦闘がそれを証明しておるだろうが！」

彼ら８人はＧ８と呼ばれる大国達の、現在のトップである。そして国際連合がほぼ倒壊した今、その後釜として新設された国際機構、地球連邦政府の、その中枢を担う人物達でもある。

その人物達が話し合っている議題は、先日この世界を襲撃した「ＣＢ」について、である。もっと具体的に言えば、管理局と協力してこの組織を討つかどうか、という事だ。

普通なら「ＣＢ」に、引いては「ガンダム」に対抗する手段がない彼らは、管理局に協力すべきなのだろう。実際、この議論でもその意見は何度も出ていた。

しかし、その意見は管理局の質量兵器を禁止、全廃するという組織条例の前に必ず沈んでいった。

「質量兵器を全廃させることは不可能だ！」「何故魔法などという不安定な物を軍に導入しなければならない！？」「軍にとって必要な兵器は、安定した性能を出せる物だ！　その点から見れば、魔法

などという物は全く使えんわ！」

彼ら、いや、第９７管理外世界から見れば、「魔法」という力――兵器は、あまりにも不安定かつ汎用性を欠いており、とてもではないが、軍事力としては全く役に立ちそうにないのだ。個人の資質ごときで性能を大きく変える兵器など、どの軍が採用するだろうか？　少なくても、軍事に疎い日本ですら、魔法を軍隊に導入するのには危機感を感じていた。まして、世界最強の軍事力を誇るアメリカは言わずもがな、である。

だが、この理由だけなら、彼らはそれでも管理局に協力していただろう。確かに魔法という兵器は使い辛い事この上ないが、それしか「ガンダム」に対抗する手段がないのもまた現状であるからだ。

では、何故ここまで魔法を拒絶するのか。その答えは実はオーバーＳランクにある。

「そうだそうだ！　いくらなんでもオーバーＳランクなどという代物を生み出す魔法なぞ、認める事が出来ん！」「たった一人で世界を大きく変える力なんて、誰も求め取らんわ！」「そんな兵器など、核よりも恐ろしいものを生み出すだけだ！」「オーバーＳランクなんてものは世界を滅ぼすだけだ！　そんなもんはいらん！」

つまるところ、彼らはオーバーＳランクなどという、たった一人で世界を相手取る事が可能な力量を持つ魔導師に怯えていたのだ。自分達が絶対なる兵器として信奉（しんぽう）してきた核をも上回る（かもしれない）、人類には過ぎたるその力――究極的な生体兵器に。

「だが諸君！　管理局に属さねば、此方が「ＣＢ」によって滅ぼされるかも知れんのだぞ！　この際もう形振（なりふ）り構わずに、管理局に協

力すべきなのでは……」
「「「む、むぅううう……！」」」

しかし、怯えているだけでは事態が好転しないのも、ここにいる人物達は熟知していた。なら、この恐怖を呑み込んででも前に進むしか……

「議長、実はお話したいことがあります。いいですか？」
「……？　え、えぇ。どうぞ」
「ありがとうございます」

あと一歩、あと一歩で管理局に全面協力するという結論が決まりかかっていたこの会議に、今までずっと沈黙を保ってきた日本が意見を述べようとした。それにその会議に出席していた人物たち全員が驚愕し、何事かと耳を傾ける。それを眺めながら、かつて日本の首相を務めていた男は、ゆっくりと喋り始めた。

「皆さん、まずはこの映像をご覧ください。これは、「アーカイブ」という名の人物から送られてきた動画です」
「アーカイブ？」
「「ＣＢ」のエージェントです」
「「ＣＢ」だと！？　あんな奴らの……」
「しかし、この映像は間違いなく真実です！　それは私の命に懸けても保証します！　管理局にいる同志にも確認を取りました！」
「だが！」
「いや、まずはその映像を見るべきだ。皆、それでよいな？」
「「「……」」」
「ありがとうございます、議長。では、再生します」

もしここでこの動画を見なければ、史実は大きく変わっていたこ

とだろう。だが、世界に「ＩＦ」という可能性は無い。彼らはこの動画――管理局から「Ｐ・Ｔ事件」「闇の書事件」と呼ばれている二つの事件を映している――を見て、そして第三勢力になる決断をしたのだ。それは変わることのない史実であり、現実でもある。

例えそれが世界を壊すテロ組織である「ＣＢ」の思惑通りだとしても、それが世界の正義たる管理局の想定外だろうと、世界は「ＩＦ」を与えず、ただひたすらに前へと突き進む。それが世界の在りようであり、また存在する在り方なのだ。

―同年１０月１５日―

普段は空き室ばかりな病院の部屋が、今は倒壊した聖王中央教堂のシスターや騎士、そして教堂に来て、不幸にも巻き添えとなった民間人によって埋め尽くされていた。四肢の何れか、またはその全てを無くした者、顔を隠すほどに血が滲んでいる包帯を巻いた者、あまりの恐怖に言葉を発せなくなった者など、様々な患者がいる。

「騎士カリム……」

「義姉さん……」

その様々な患者の一人として、特別な地位から個室を与えられたカリム・グラシアは、目を閉じたまま昏々と眠り続けていた。あの日、「CB」の襲撃があった日からずっとである。

艶があった金髪はボソボソに、潤っていた肌はカサカサとなり、ふっくらしていた頬は頬骨がはっきりと浮き上がるまでこけ、肉付きが良かった体もいまや皮と骨しかない。それが今のカリムの姿であり、加え、口と鼻を覆うマスク、腕に何本も刺されている点滴用のチューブなどが、その姿をさらに悲惨な物としている。

そんなカリムの姿を見る度に、シャッハ・ヌエラは己の未熟を、至らなさを、「ガンダム」に届かなかった己の弱き力を責めた。あの時自分が「ガンダム」の接近に気付き、急ぎ避難をさせていればと、何度も何度も己を責める。

「……シスター・シャッハ。一つ、聞いていいですか？」
「……何でしょうか？」
「義姉さんはこうなる前に、何と言っていました？」
「……「よかった、無事だったのねシスター・シャッハ」と、私を瓦礫から庇いながら言って、言って……！」

その時のことを思い出し、シャッハは口から嗚咽を零した。本来シャッハが守るべきだったはずのカリムに、逆に守られ、助けられた彼女には、その時のことを聞くのはタブーだったのだ。それに気付いたヴェロッサ・アコースは、シャッハの普段よりも小さくなった背中を優しく撫でながら、自身の義姉をこんな姿にした「ガンダム」に激しい怒りを抱いた。

（僕は義姉さんをこんな姿にした「CB」を、「ガンダム」を絶対に許さない！）

この時、シスター・シャッハは幸運にもヴェロッサの胸で泣いていたので、そのヴェロッサの悪鬼のような表情を見ずに済んだ。もしかしたら、それが唯一の幸運だったのかもしれない。それほどまでに、彼の表情は醜く、また恐ろしく歪み切っていたのだ。

ヴェロッサは自覚していなかったが、その表情はまるで聖王中央教堂を襲った緑色の「ガンダム」、通称「三つ目」にそっくりだった。

刑務所独特の臭いがする暗い通路を、臨時最高評議会の一員であるラルゴ・キールは幾人かの護衛と専属の秘書を引き連れながら黙々と歩いていた。その手には一つの鍵が握られている。

「……ここで間違いないな？」

「はい」

そして、目的の部屋に着くと、その鍵を無造作に牢獄の鍵穴へと差し込み、目の前の重たそうな扉の鍵を解除した。キールは鍵が解除されたことを確認した後、取っ手を掴み、その扉を前に押す。

ギィイィィィィ……

耳障りな音を辺りに響かせながらゆっくり開いたドアの向こう側に、一人の男がいた。その男は顎に生えた無精髭を擦りながら、怪訝な顔で突然の来訪者達を注意深く見つめている。

「クロノ・ハラオウン提督だな？」

「……！　そ、その声は、キール元帥ですか！？　し、失礼致しました！」

しかし、それも一瞬のことであった。牢獄の奥にいた男、キールからクロノ・ハラオウンと呼ばれた男は、突然の来訪者の正体を知るや、すぐさまボサボサになっている頭を下げ、敬礼を取る。

それを同じ敬礼で返しながら、キールは話を続けた。

「クロノ・ハラオウン、君は釈放だ。これからは第九次元航行艦隊の旗艦であるＸＶ級次元航行艦「クラウディア」の艦長として、その敏腕を存分に振るってくれたまえ」

「……は？」

「以上だ。あとは私の秘書に聞け」

そう言ってキールが踵を返すのと同時、彼の後ろから出てきた２０歳前後の女性が、茫然としているクロノに早口で説明をし始めた。それを何とか朦朧としている頭で処理しながら、適当に相槌を打ち、現在の状況等を速やかに理解していく。

「……以上です。質問は？」

およそ２０分かけて、秘書は要点を分かり易くまとめた説明を終

えた。その情報を完全に覚醒した頭で整理しながら、クロノはたった一点だけ気になったことを尋ねた。

「僕の隊に入る、この人物のことだが」

「クラウン・ガバレート三等空士のことですね？」

「あぁ、そうだ。確かこの人物は……」

「えぇ、そうです」

そこでその秘書は、今まで微動だにさせなかった顔の筋肉を、「憎悪」と「殺意」で強張らせながら、低い声でクロノのその問いに答えた。

「この男は「一年戦争」時に、仲間であるはずのオーバーSランク魔導師を二人も殺した、別名「血塗れの強行者」、「管理局の狂鬼」と忌み嫌われている者です……！」

「……！」

その低い声と、自身の推測が合っていたことに、クロノは冷や汗が止まらなかった。聞くんじゃなかったと、今となっては遅すぎる後悔を心に携えながら、彼は小さな声でそっと呟いた。

「世界は何時だってこんなはずじゃない事ばかり……か」

「……ところで、ハラオウン提督。お腹が空いていますよね？」

あまりにも突然に尋ねられたその質問にクロノは若干面食らいな

がらも、自身のコンディションから食事の必要はないと考え、断ろうとしたが、

「え？　いや、ｂ」

「では行きましょう。大丈夫です。あそこはおいしくて有名ですし、私個人としても気に入っているお店ですので、きっとハラオウン提督も気に入って頂けると思います」

秘書はクロノの言葉を途中で遮りながら、超が付くほど強引に話を進め、クロノを一緒の食事に強制連行させようとする。それにたまったもんじゃない妻帯者のクロノは断ろうと

「いや、ｄ」

「早くして下さい、ハラオウン提督。それとも、何ですか？　もしかしてホテルの方が……」

「さあ行きましょう！　急いで行きましょうッ！　今すぐ、今すぐにッッ！！」

したが、先程よりもヤバ目な返答を前にしてつい了承してしまった。それにしまったぁぁあああッ！　と内心で思ったクロノだが、それも秘書の次の行動で銀河の彼方まで吹き飛ばされた。

「……ちぇ」

（舌打ち！？　今彼女は舌打ちをしなかったか！？　あぁ、やはり世界は……！）

先程とは違う意味で脂汗を掻きながら、彼はもう一度心の中で世界に対し呟いた。

「ヒュドラさん？」
「……ティーダ、隠れて」
囲まれている。それも十や二十じゃない、恐らく数百単位の人間で。
「……」
しかし、一体どうやってこの隠れ家を？　魔法によって隠されているはずなのに？　この第９７管理外世界には魔法は存在しないは……
「貴様等、銃を降ろさんか！　目の前にいるのは管理局ではない、ただの魔法が使えるだけの民間人なのだぞ！」
？　どういうつもり？　しかもこの言語、もしかしてミッド……いえ、日本語？　ここはイギリスなのに、どうして極東の言語を使っているのだろうか？
「見ろ、警戒させてしまったではないか！　我々はこれからこの御方達とお話しなければならないというのに！」

……とりあえず、悪意、戦意、殺意はないよう。でも油断はできない。今でも何人かは銃を降ろしていない。

「……さて、とんだ御無礼をしてしまい、誠に申し訳ございませんでした、ミス」

「……用件は？」

「随分警戒なさっているようですが、それは無駄というものです。私達は貴方達に危害を加えに来たのではありませんから」

「……信用できない」

「では、信用できるように、まずは用件をお話しましょう」

……この男、油断どころか気を緩めることすらできないタイプ。こういう手合いはいつもクレスが引き受けてくれた。だから、正直こういった手合いは、かなり苦手だ。

「私達の用件とは、まあ、簡単に言えば、貴方達をスカウトしにきた、と、言えばいいでしょうか？」

「……スカウト？」

「えぇ、そうです」

「……貴方達は一体……？」

「おっと、これはまたとんだ御無礼を。まだ名乗っておりませんでし」

「……ゆっくり、懐から手を抜きなさい」

「ほう、さすがですなミス。まるでゴルゴ１３だ。まぁ、そのぐらいの警戒は当然かもしれませんが。安心して下さい。ただの名刺ですから」

……ゴルゴ１３って、何？

「私たちは地球連邦政府直轄部隊「Ａ－ＬＡＷＳ」の第一実務大隊

です」

……「ＡＩＬＡＷＳ」は確かこの世界の治安維持部隊だったはず。なのに、なぜ私達の所に？

「はっきり言いましょう、ミス。私達は貴方達が欲しいのですよ。管理局の全局員中、たった５％もいない貴重なＡＡＡランク魔導師である貴方と、メカニックマスター等の資格を取っているそこの少年をね」

「……ティーダ？」

「は、はい！　確かに僕はメカニックマスターとＢ級デバイスマスターの資格を持っています！　でも、どうしてそれを……？」

……正直、ティーダがそんな資格を取っていたなんて思ってもいなかった。でも、それよりも驚愕すべきことは、私とティーダの事をそこまで知っている彼ら。一体どうやって……

「何、そんなに不安がらないでください。貴方達の事を知っていたのは、管理局に紛れている私達の同志から、情報があったからです」

「……同志？」

「えぇ。管理局という巨大な組織ならば、個人の考え方も千差万別になります。その中に、私達の思想に共鳴した方々もいたのですよ」

……これは信用できる。管理局だって一枚岩ではないし、中には管理局に反発する者がいてもおかしくはない。

「さて、これでどう」

「……分かった。そのスカウトを受ける」

「ヒュドラさん！？」

「ほう？　しかし、急にまたどうして？」

「……今はそうした方がいいから」
「「？」」

……ティーダには悪いけど、今はこれしかない。前のように管理局の裏情報も、金銭も、そして時空転移する装置もコネもない今では、この誘いを受けることこそが最善。そう、「ガンダム」に復讐する為にも、「Ａ－ＬＡＷＳ」に所属したほうが都合がいい。

「……まぁ、貴方がそう言うのでしたら、此方としても好都合です。ようこそ、「Ａ－ＬＡＷＳ」へ！」

……だから、あと少しだけ待ってて、クレス、オルト。あの赤い異形の「ガンダム」を殺したら、私もそっち（地獄）に行くから。

「私達は貴方達の入隊を心から歓迎致しますッ！！」

……そしたら、また昔みたいに、一緒に……。

常ならば明るく、活気が溢れているはずの機動六課の職場は、しかし、常とは違い、その空気をひどく重たい物としていた。誰も口を開かず、黙々と機械的に、自身の仕事を無心でこなしていく。そ

の姿はまるでこの現実を否定、もしくは忘れようとしているようにも見え、見る人が見ればひどく滑稽に映るだろう。

「……なのは」

そんな職場の中で、一際重い空気を発している人物がいた。フェイト・T・テスタロッサである。彼女は端の方で一つに纏めている美しい金髪を左右にユラユラと揺らしながら、自身の親友である高町なのはの事を心配していた。それで重たい空気が周囲に撒き散らされているという事に全く気付かずにである。

「……いい加減にしろ、テスタロッサ。何時までそんな雰囲気でいるつもりだ？　今はそんな事よりもやるべきことが山よりあるだろう？」

「……シグナム」

「お前がそんな調子では、高町が浮かばれないぞ？　さっさと仕事に精を出した方が高町の為にもなる。さあ、分かったならさっさとこの書類にサインしろ。これは臨時隊長であるお前の署名が必要な奴だ。早急に頼むぞ」

シグナムの叱咤を受け、上の空ながらも作業を始めるフェイト。しかし、仕事をしていく内に鈍っていた頭が活性化していき、ある疑問が浮かび上がった。

「……そういえば、はやては？」

「……まさか、ここまで腑抜けていたとはな。正直、呆れて物も言えん」

「……ごめんなさい」

「いや、まあいいだろう。主はやては今スクライアに会いに行っている」

「そうなんだ。でも、珍しいね。はやてがユーノに会いに行っているなんて」
「……？　テスタロッサ、それは本気で言っているのか？　主はやてとユーノは随分と前から何度も二人で会合しているぞ？」
「……え？」

寝耳に水で驚いています、と語っている表情にシグナムはまた呆れ、深い溜め息を吐いた。最近テスタロッサや高町がユーノとあまり会っていないのは知っていたが、まさかここまでとは思ってもいなかったのだ。少なくても主はやてとユーノが個人的に会合する、より具体的に言えば主はやてが耳寄りな情報を手に入れる為、さらに言えば主はやてがユーノに個人的な悩みやら公的な悩み等を相談しに行っている事は、ヴォルケンリッターである彼女達からすれば既に常識であり、また当然テスタロッサや高町も知っていると思っていたが、どうやらそんな事はなかったらしい。

「そ、そうだったんだ……知らなかった」
「お前が知らないという事は、恐らく高町も知らないだろう。もう少しスクライアに気をやったらどうだ？　十年来の友人なのだからな」
「うん、そうだね。今度会いに行くよ。ありがとうシグナム」
「うむ。では仕事を再開するか。まだ十分の一も終わっていない仕事をな」
「……はぁ」

フェイトはいまだ幾つも聳え立っている書類の山を見上げ、疲労を多分に含んでいる溜息を洩らした。今夜は徹夜ね、と小さく呟きながら。

「で、成果は？」
「全然ダメ。手掛かり一つすらないよ」
「やっぱ駄目やったか。分かっていた事とはいえ、実際にそうなると落胆するもんやな」
「本当、どうして彼らの情報が一つも出てこないのか、不思議でしょうがないよ」

落ち着いた雰囲気の居酒屋「よっちゃん」で、一組の男女が机を間に挟みながらお酒を酌み合っていた。酒が強くないのか、それともそんなに飲んでいないせいなのか、男の方はあまり顔が赤くない。

「でもな～。ゆ～のくんでも無理やと、もうお手上げや～」
「そんなに僕を買被らないでよ、はやて」

しかし、いまだ顔が赤くない男とは逆に、女の方は林檎と同じくらい真っ赤になっていた。男と同じぐらいしか呑んでいないはずで、しかもお酒に強いはずなのにである。という事は、男の方が異常なぐらい酒に強かったという事か。

「むぅううう～、そないに謙遜しとるから、むげんしょこを知らん局員たちになめられるんや！　もっとこう、バーンといかなあかん！　あかんのやッ！！」

「はやて、落ち着いてっていうか机に身を乗り出さないで！　お店の人がすごい迷惑そうに顔を顰めているから！」
「こう、うちのむねみたいにッバーンッと！」
「……」
「なしてだまるん！？」
「いや、その……」
「ええもん！　分かっとるもん！　うちの胸がなのはちゃんやふぇいとちゃんと比べて小さいことぐらい！　うちはな～んもきにしておらへんで！　ふんッ！」
「……はぁ。機嫌直してよはやて～」
「うちのむねを馬鹿にするゆーのくんなんて、もうしらんからな！　ふんッ！」

赤に染まり切っっている顔を横に背けながら鼻を鳴らし、胸の前でむんッ！　と両手を組むはやて。そんな如何にも怒っています！　という雰囲気は、しかし、次のユーノの一言で完全に霧散した。

「え？　僕ははやての胸の大きさが一番好きなんだけど。言ってなかったっけ？」
「……ほぇ？」

間抜けすぎる声がピンク色の唇から洩れ、その星でも浮かんでいそうな大きな目も「点」になるはやて。それを見ながら、ユーノは自身が言ったことに羞恥を感じ、あまり赤くなっていなかった顔をはやてに負けず劣らず赤面させながらも、自身の言葉に猜疑を持たせない為、さらに言葉を続けた。

「ちなみに、この情報は真実だよ、はやて？」
「……！」

はやてはその言葉を聞き、ボンッという音が聞こえそうな勢いで、林檎よりも赤かった顔をさらに赤々とさせた。それに苦笑を零しながら、何とか余裕を捻出させたユーノは、はやての大きな目をじっとじっとじーーーっと見詰めながら、はやての反応と再起動を待つ。

「……は……ひゅ……ゆ、ユーノ君も冗談や社交辞令が上手に」

「はやて」

何とか胸の動悸を落ち着かせ、その言葉を冗談や社交辞令で流そうとしたはやてを、ユーノは有無を言わせない瞳で押し止る。そしてその瞳を覗きこんだはやては、翠色の瞳孔に呑み込まれそうになりながらも、そこに怖いぐらい本気が籠められていることを、心の奥底で思い知らされた。

（でも、それは……それは有り得へん、有り得へんやろ!?　だってユーノ君は、なのはちゃんのことが……ッ！）

その瞳を見たはやての深層に淡い期待が過ぎるが、それはあくまでも一瞬過ぎっただけであり、その直後に湧いて出てきたいつもの考えがはやての深層（真相）を完全に覆い尽くしていく。そしてはやてはかつて自身が抱き、遂には捨てたその想いを今再び否定し、拒絶しようとする……

「……実はね、はやて。僕はもうなのはに恋心なんて抱いてないんだ」

「……ッッッ!?」

「あの日あの時、なのはが堕ちたあの出来事で、僕はもうなのはの隣にずっといようっていう心を亡くしたんだよ」

が、それに先回りをし、二度目の否定と拒絶をさらに否定、拒絶

する言の葉を紡いでいくユーノ。その翠色の瞳はじっとはやての全身を、瞳を、深層心理を芯から囚え、絶対に離そうとしない。

そして自身の瞳に囚われているはやてに、ユーノは八年間ずっと溜めこんできた想いをぶつけるべく、彼の本心その物を、彼にとっての真理の一つを言語に訳し、君にこのまごころが届くようにと切に願いながら、緊張で僅かに上擦りしている声でその想いを謳った。

「そして、その心が亡くなった時、今度は別の女性がその隙間に入ってきたんだ。その別の女性こそ、はやて。君だったんだよ」

その決定的な一言を聞いたはやてには、蘇ろうとするその想いを否定し、拒絶する手段など持ち合わせてはいなかった。

まごころを、君に

――新世紀エヴァンゲリオン劇場版　Ａｉｒ／まごころを、君に　と　ダニエル・キイス著の「アルジャーノンに花束を」より

幕間－1（後書き）

やってしまった。でも、後悔はしていません。例え有り得ないやおかしいだろ!?　という指摘があっても、作者はこのまま突き進ませる予定です。なのは？　あの人はもうフェイトと結ばれているのではないでしょうか？　同棲しているし、ヴィヴィオのママ達にもなっているしで、公式も遂にその路線（百合）に走ったのかと作者は思っていましたよ？

ユーノを三人娘の誰かと結ばせるなら、作者は断然はやて派です。一番趣味が合いそうですし、はやてを仮に母親と定義すれば、リインにとってユーノが一番父親に近い存在ですし、部隊長と司書長として裏で協力してそうだからです。だから作者は断然はやて派です。異論批判指摘、随時承ります！　このような駄作を読んで下さった皆様に感謝を。

最後に。

次話も恐らく外伝です。そして出張－引っ越し－残業のトリプルコンボで更新が遅くなる……と思われます。いつもいつも、本当にすいません。

幕間ー2（前書き）

この幕間にはユノはやが多分？　に含まれております。そういった物を受け付けない方、「ユーノはなのは（その他キャラでも可）の嫁！」といった方には見るのをお薦めしません。……よろしいですか？

では、開演です。

幕間―2

―新暦67年―

雪がシンシンと降り積もる公園の片隅に、街灯によって映し出された、二つの人影らしきものがあった。どちらの影も同じくらいの大きさで、同じくらい細長く、真っ白な雪の上に伸びている。

「……ユーノ君、大丈夫なんかい？」

「……はやて、僕は大丈夫だから、君は早く家に帰りなよ。リインフォースはまだ生まれたばかりだから、一人で家にいるのは心細いはずだよ？」

「……ユーノ君。ユーノ君も、心細いんちゃう？」

「僕は大丈夫……大丈夫さ。こんな事は、なのはに魔法を教えた時から覚悟していたからね」

「……」

その細長い影を辿ってみると、二人の童子がいた。およそ11歳ほどの外国人少年と日本人少女だ。その少年と少女は歳に似合わない、何やら暗そうな雰囲気で会話をしている。

「そう、そうさ！　僕は覚悟ッ、覚悟していたはずだ！　こうなる事を、こうなってしまう事を、こうなるであろう事を！　僕は随分前から覚悟していたはずだッ！！」

「でも、辛そうやでユーノ君？」

少年は本来なら後ろに束ねているはずの長い金髪を、力無く顔に垂らし、公園の備え付けベンチに項垂（うなだ）れながら座っていた。少女は

少年の隣で、少年とは逆に、直立不動の姿勢で立っている。

「それはッ……！」

「……泣いてもええと、うちは思うで？　ユーノ君は何でも一人で抱え込んでしまうから、今まで誰かの胸で泣いたことなんかないんやろ？」

少年はハッとした様子で隣に立っている少女の顔を見る。それを聖母の如き表情で見つめ返す少女。

「でも……でもッ……！」

「うちはええで。それでユーノ君の哀しみが少しでも和らぐんなら、この胸の中で泣かす事ぐらい、どうってことないんやからな」

「はやて……」

「ほら、ユーノ君。大丈夫、今ここには小さな封鎖結界が張ってあるから誰も来んし、なのはちゃんだって、きっと今まで通り、空を飛べるようになるはずや。だから、今だけは……」

そう言いつつ、左右の腕でゆっくりと少年を胸の中に抱き締める少女。それは疲れ切っていた少年を優しく包みこみ、

「うちの胸で、泣いてええよ？」

「……ッッ！！」

十一年間という長い年月の中で、たった一度しか涙を見せてこなかった少年の涙腺を容易く崩壊させた。

「……ァァアアァァアアァァアアァァアアッッ！！」

「……ッ！」

それは慟哭であり、また嘆きでもあり、同時に懺悔でもある。何に対してかはユーノ自身ですらよく分かっていない。しかし、それでも大粒の涙は弱々しい声と共に、途切れることなくドンドン溢れてくる。まるで今まで流さなかった分まで流そうとでもいうように、心に溜め続け過ぎたモノを全て流し切ろうとするかのように、ユーノはずっとずっと、泣き続けた。

そのはやてが持つイメージとは全く違う、彼本来の弱さを曝け出した姿に、はやては胸にトキメキを覚えながら、しかし、ここまで追い詰められていたユーノに気付けなかった自分に苛立ちも感じた。それを何とか奥歯を噛み締める事で紛らわそうとするも、自身の胸の内で泣き叫ぶユーノの姿を見る度に、その苛立ちは次第に強く、強くなっていく。

どれくらいの時が経ったのか、ユーノにもはやてにも分からなかった。しかし、ユーノが泣き止み、はやてが苛立ちを抑え込むのには相当な時間が必要だったのは確かだ。現に、仄暗かった空は夜闇に覆い尽くされ、歩道はもはや街灯なしでは視認すら覚束なくなっている。しかし、月がとても綺麗な夜だったのが二人の印象に残っていた。

「……はやて、ありがとう。おかげですっきりしたよ」
「へ？　い、いや、こちらこそというかなんというか……」
「？」
「と、ともかく！　もう大丈夫なんッ！？」
「……うん、もう大丈夫だ。本当に心配しなくても大丈夫だよ、はやて」
「そう……ならいいんや！」

そんな暗闇と仄明るさが混同する夜天の元、ユーノは完全に泣き

止むと、身軽にはやての胸から飛び出し、そして新雪の上に軽くなった心身を躍らせた。それに若干寂しさを感じながら、しかしはやては気丈に振る舞う。この友人に心配をかけてはいけない、漸く軽くなった彼の重荷になりたくないという想いが、はやてにそうさせるのだ。

「……」

「……ユーノ君、また空見上げておるけど、何を見てるんや？」

「ちょっと……空というか穹というか……天上を、ね」

「天上？」

立ちながら首を軽く傾げるはやて。しかしユーノはそれ以外何も語らずに、また穹――彼が言うには天上――を見上げた。その瞳に何が映っているのか、結局はやてには分からなかった。

「……そう、やっぱり天上なんだ。この世界を変えるには、神や天使が……」

その最後の台詞は穹（天上）から降ってくる雪に掻き消されるほど静かにユーノの口から紡がれ、そして肌を刺すような冷たい空気の中に霧散していった。

はやては彼が天上を見上げていた理由を終始、知る事はなかった。

―新暦７５年１０月１５日―

「漸く会えましたな、Ｄｒ．スカリエッティ」
「そうですね、Ｍｒ．シュヘンベルグ。私は貴方と面会するのを、とても楽しみにしていましたよ！」
「……どうでもいい事だ、さっさと本題に入れ」

車椅子に乗っているイオリア・シュヘンベルグと、全身を隠すような長い白衣を着たジェイル・スカリエッティ、そして白いコートを纏った黒髪蒼眼のアップルは、数多あるモニターの光が灯りとなっている部屋で、緊張感の欠片もなく、ゆったりと会談をしていた。イオリアとスカリエッティの手元には白いカップがあり、その中には澄んだ色の紅茶が淹れてある。

「では、早速本題に入ろう。Ｄｒ．スカリエッティ、貴方はＧＮキャノンの改良及びガジェットの遠隔操作機能搭載を。そして……」
「えぇ、分かっています。今のところ三割はできていますので、ご安心ください」
「うむ、分かった。そしてアーカイブは現状維持のまま、待機して欲しい」
「承知」
「よし。では解散しよう。各自、それぞれの任務に戻るのだ。以上」
「「早ッ！？」」

その会談はものの五分で終わった。それにスカリエッティとアップルが驚愕している間に、イオリアはそそくさと部屋を退出し、奥の方へと引っ込んでしまう。

「……随分あっけないね。もっと無理難題、もしくは練りに練った作戦でも戦略でも話し合うのかと思っていたけど……」
「仕方あるまい。戦略の殆どは『法典』で決定されるのだから」
「あぁ、『法典』ね。あのシステムなら確かにそれも可能だろうね」
「してＤｒ．スカリエッティ。貴公に頼みがあるのだが、よろしいか？」
「あぁ、別に構わないけど、一体全体どんな頼みやら……」
「何、そんなに時間はとらせない。頼みというのは、このデータについて、貴公の忌憚なき意見を聞きたい、というものだ」

そう言ってアップルは懐から翠色の宝石のような情報端末を一つ取り出し、それをスカリエッティに渡した。スカリエッティはそれを興味深そうにじっと眺めていたが、やがて内蔵されているデータを見る為に、近くにあったモニターを引き寄せ、その端末を丁寧に差し込んだ。

「……ふむ、これは……す、ス、素晴らしぃいいいぃい機体じゃないか！」
「かのＤｒ．にそう言われるとは、恐悦至極」
「このデザイン！　この性能！　この開発思想！　その全てが絶妙なバランスで混ざり合い、この機体の性能を尖らせ、一つの刀とする！　唯唯一の目的を、思想を成す為だけに、この機体は爆誕したと言っても過言じゃな・い・なぁあ！！」

そのデータを見たスカリエッティは、気でも狂ったように、両腕を大きく左右に振り回しながら、データとして表示されている機体を絶賛した。アップルはそれをただじっと見つめている。その口元に微笑みを顕しながらではあったが。

「いや、実に実に素晴らしい！　凄まじいィイイィイイ！　気持ちいいィィィイイィイイ！！　これほどの機体を完成させるとは、いやはや、君達には脱帽するよ。といっても、私は帽子など被っていないが」

「その心だけで十分」

「そうかい。ならいいや。ところで、とても気になったんだけど、このバランスだと……」

「いやしかし、それではこれがこうなってバランサーが……」

「ではこうしたらどうだろう？　これなら二刀持ったままでも……それにこれだと疑似ＧＮドライヴが正常に機能しなくなるのではないかね？　この機体はあれをこれで成す為にも造られているのだから、なるべくあれには負担を掛けないように……」

「ほう、ほう！　ほうッ！！　成程、それは確かに！　ではＸ－１０５ほど修正させ改修させ……」

彼らはこの後、その場に居座ったまま、数時間にも渡ってその機体の討論をし続けた。全次元世界でもこれほどの会話に着いていけるキチガイは殆ど居ないと言っても何ら支障がないほどの、超高度な会話を、彼らは当然のごとく次々と展開させ、さらには発展すらさせていく。人間では思いつかない、悪魔のような発想を、常人では生まれてこない、狂人のような思想を用いながら、彼らはその機体を完成させていった。その機体の名は、こう記（しる）されていた。

『ＧＮＸ－Ｕ０２Ｘ　ＭＡＳＵＲＡＯ』

余談だが、その一マッドサイエンティスト《スカリエッティ》と知恵の実（アップル）による話し合いを偶然にも聞いてしまったミレイナとイアンは、その夜、ずっと何かに魘（うな）されて眠れなかったという。

こつ、こつ、こつ……。

こんこん。

ガチャ。

「来たか、リボンズ・アルマーク」
「こんな所に呼び出して、何の用だい、アップル？」
「何、我が呼んだのではない。我がマスターで在らせられる「アーカイブ」が呼んだ。故に、我はこれで退出する。後はそこにあるモニターで」

こつ、こつ、こつ……。

ガチャ。

バタン。

「……で、もう一度聞くけど、何の用だい、「アーカイブ」？」

『……リボンズ・アルマーク。貴方に、これを渡そうと思いましてね』

「……これ？」

『「ガンダム」』

ピクッ。

「……それで？」

『貴方の戦闘能力は理解しているつもりです。八人存在しているイノベイドの中で最高と謳われるＩ－００１、ティエリア・アーデよりも、戦闘能力だけならその上を行く最強のイノベイドにして、「ＣＢ」屈指の力量の持ち主である、と』

……。

『そんな貴方が何時までも「ガンダム」でないのはおかしいと思い、僕はイオリアさんの許可を貰って、ある「ガンダム」を設計、構築しました。その名は……』

……

『１《アイ》ガンダム』

ガタっ！

「なに……！」

『推定ランクＳ＋。第３．５世代の「ガンダム」よりかは幾分出力

は衰えますが、それでもガデッサの性能を凌駕する、「ガンダム」の名を語ることを許されし機体です』

……。

「信じられないね。イオリアならともかく、どうして貴方が「ガンダム」を？」

『一応僕は知識だけならメカニックマスター、A級デバイスマスターの資格を持っている人達よりも遥かに持っているからです。それで、気まぐれに「Oガンダム」を一度貴方専用にチェーンしてみたんですよ。そしたら、イオリアさんにそれを知られて、データを見せるように言われたので、それを見せてみたら、もっと本格的に作れって命令されたんです』

……

『そしてできたのが、この1ガンダムです。あっ、ちなみにこの機体、まだ試作機なので、かなり武装が制限されています。戦闘をする際はそれを忘れないでください』

「試作機？」

『えぇ。まだ貴方の実戦データが少ないので、それを採取することもこの機体の任務に含まれているんですよ』

「……と、いうことは、僕はモルモットか何かかい？　随分下に見られたものだね……！」

『いえ、ですから、貴方専用の「ガンダム」を作る為の、言わばプロトタイプなんですよ、この1ガンダムは！　もしデータが十分に取れれば、すぐにでも設計に取り掛かってアップデータさせますので、それまでは我慢して下さい！』

「……ふん、分かったよ。今は君の言う事に従う。けど」

ぎりぎりぎりぎりッ！

「僕はそんなに気が長くないから、ね？」

『えぇ、分かりました。できるだけ急ぎましょう。では、そちらにデータを転送しておくので、後でガデッサにアップデータさせといてください。僕の用件は以上です。それじゃあ』

プツン。

「……1ガンダム、か」

こつ、こつ、こつ……。

ガチャ。

バタン。

「……」

「はやて、大丈夫？」

「……」

「はやて？」

はやては沈黙していた。それはもう貝殻を閉じた貝のように。その愛らしい唇を一文字に引き締め、一言一句たりとも洩らすまいとしているのだ。

それに嘆息しながら、ユーノは手慣れた手つきでホテルのチェックインをしていく。しかし、後はサインを書くだけとなった所で、

「ゆ、ユ、ユーノ……君？」
「……ッ！？」

普段とはあまりにも違いすぎるはやての声に、思わず握っていた筆を落としそうになった。ユーノはその声に驚きつつ、後ろを振り向いて……

「は、はや……てッ！？」
「……ほ、ほんまに、ほんまに入るんかい？」

見事に硬直してしまった。

「……」
「き、き、き、聞いとる？　ゆ、ユーノ君？」

そこには湯気でも出そうなほど真っ赤になった顔を伏せ、此方を上目遣いで見上げるはやてがいた。そのあまりの可愛さに、ユーノの全身に特大の雷でも落ちてきたかのような衝撃が突き抜ける。

（か、かわいい……！）

今までに感じたことすらない感覚ではあったが、それが何を示し

ているのか、ユーノには分かっていた。そして同時に、はやてを好きになってよかったとも、心の奥底からそう思う。

「……！」

「うぇ！？　ちょ、ユーノ君！？」

ユーノは突如はやての腕を掴むと、そのままホテルのエレベーターに乗り込み、目的の階へと一気に進んだ。それにやや困惑しながら、それでも黙ってユーノに着いていくはやて。もしこの二人を誰かが見かけていたら、きっと初々しいカップルに見えただろう。何故なら、男女どちらの顔も限界寸前まで赤くなっているからだ。

「……」

「……」

エレベーターに乗っている時も降りた後も、二人は一言すら喋らずに、ただ黙々とユーノが予約していた部屋へと歩みを進める。ユーノは今にも真っ白になりそうな意識を何とか繋ぎとめながら、はやては極度の緊張から足が崩れ落ちそうになるのを、ユーノの腕に掴まる事で何とか堪えながら、一歩一歩、ゆっくりと静かに前へと歩いていく。現実では一秒二秒にしか過ぎない時間を、互いに一時間二時間にも感じながら、彼らは共に歩を進ませる。

キイィィ……バタン。

「……」

「……」

二人は予約していた部屋に入った後も、一言たりとも喋らない。骨董品らしき時計の音だけが部屋中に木霊し、チクタクチクタクと

時を正確に進ませていく。

「……はやて、これを……」

「……これは？」

「それが僕の、君に対する気持ちだ」

時計の針が１０を指した頃、ユーノは不意に、はやてへと四角い箱を手渡した。それは翠色を基調とする、掌サイズの箱だ。そしてその中に入っているであろう物に、はやてはある推測をしてしまった。それに彼女自身がまさか、本当に？　と、表面上では疑いながら、しかし、それでも、裏面では期待を捨てずに、その箱をゆっくりと、本当にゆっくりと開ける。

「……っっっッッッ！！！？？？」

箱が完全に開き、はやての脳がその箱の中に入っていた物を視認した瞬間、はやてはあまりの驚愕に、その目を限界まで見開き、凄まじすぎる驚喜に、口から息をのみ、飲む、呑み込む！　箱の中に入っていた指輪の美しさに、宝石の輝きに、その信じられない現実に、愛の証拠に、彼女は全身を激しく震わし、また感情を極端に顕す。

「はやて、僕は君を愛ゆえに一生離さないと思う。でも、その代わりに、はやてをこの世の誰よりも絶対に幸せにすることを」

ユーノはそう言葉を綴りながらはやての左手を取り、箱の中に入っていた白色と無色が混ざり合う宝石（ムーンストーン）が付された指輪を、そっとその薬指にはめた。

「この指輪と！」

そして、未だに夢と現実の境を往復しているはやてに、ユーノは数十秒にもわたる大人のキスをする。それは彼らが離れた後、二人の唾液でできた水橋が互いの唇に細く架け合うほどの、深い深い、大人にしかできないキスだ。

「この気持ちに懸けて、誓いますッ！　だから、僕と一生に渡るワルツ（夫婦）を、一緒に踊ってくれませんかッッ！？」

それがユーノの、はやてだけに見せる、絶対なる愛の証拠であった。ずっとずっと、いつまでもいつまでも、君を愛し、離さないというそんな意気込みを、本音を、真理を、彼は指輪とキス、そして言葉で表したのだ。そこには嘘偽りは一切なく、ただ漠然とした真実のみがあった。

それを感じ取ったはやては、己の想いを唯一言、

「……はいッッ！！」

とだけ、嬉し涙を零しながら答え、ユーノの求愛にＹｅｓと返した。そして二人は二度目の大人のキスをし、互いをギュッと抱き締め合いながら、その部屋のダブルベッドへと沈んでいった。その影はずっと一つのまま、決して離れる事無く、いつまでも一緒に重なり合っていた。

それを見届けるは、月が綺麗な夜天のみ。

愛のなかには、つねにいくぶんかの狂気がある。しかし狂気のなかにはつねにまた、いくぶんかの理性がある。

――ニーチェの「ツァラトゥストラはかく語りき」より

幕間―2（後書き）

ここまで更新を遅らせて、まさかのこの短さ！　万死に値しますね、すいません！！

ユノはやの馴れ初めもしくは経過等は後で何回かに分けて書き記す予定です。しかし、始めて明確な恋愛シーンを書いてみましたが……難しいですね。何回も消しては打って消しては打ってを繰り返してしまいました。恋愛小説を書いている人達って本当に凄いんだという事を実感させられました。

プロット、実は未だに完成しておりません。何とか終盤の始めまでは書けたんですが、その後が……続きません！　なのでゆっくり作品と並行させながら進ませていこうと思います。いつも本当に駄目作者ですいません！　このような駄作を読んで下さった皆様に感謝を。

最後に。

魔法戦記リリカルＦｏｒｃｅの設定をとあるＷｉｋｉから見ましたが、漫画（実物）がない為に理解できなかったので、この作品ではあまり使用しないと思われます。主人公が男の時点で買う気を失くした作者でした。

第２６話　もう戻れないし、引き下がれない。あの頃には、あの時には。（前書

間違って組み上げた積み木は――――崩さなければ、決して元には戻らない。

――ルファイト様より

第２６話　もう戻れないし、引き下がれない。あの頃には、あの時には。

現在、管理世界と管理外世界を含む次元世界では、争いと混沌が渦を巻き、許されざる「悪」が「正義」を無秩序に暴食していた。

その「悪」は戦争、紛争、抗争、暴虐、暴力、争乱、侵略、略奪、犯罪、悲哀、絶望などの形となり、世界を急速に「悪」の色へと染めていく。

本来ならば、その「悪」から世界を護る筈の時空管理局、本来ならば、その「悪」から人々を救う筈の聖王教会。

その世界を護る力と、心を救う信仰が、同時に折れ、いや、折られてしまったのが、その「悪」が世界中で這(は)えずり回る原因であった。

では、一体誰が、もしくは何モノかが、時空管理局という力を破壊し、聖王教会という信仰を狙い撃ち、世界に「悪」を蔓延(まんえん)させたのか？

それは「ＣＢ」という、デバイス「ガンダム」を保有する私設武装組織が、この世界に「悪」を解き放ち、争いと混沌を、全次元世界に齎したのだ。

時空管理局の力は「ガンダム」に捻じ伏せられ、聖王教会の信仰も「ガンダム」によって撃ち消される。それを第９７管理外世界に

おける「B.T.W（世界が焉わる日）」、

そして、次元世界における「D.O.P（天使の発表会）」にて証明されてしまったのだ。故に、世界には一般通念の「悪」が満ち溢れるようになり、ただ「正義」だけが薄れていった。

……この世界は、これからどうなるのだろうか？　僕は上に（やや難しく）書いたこの世界の変革を、とても臆病な気持ちで受け止めています。そして、今はまだ穏やかな日々を過ごせていますが、それもいつまで続くのか、正直、僕自身にも分かりません。

だから、せめてミッドチルダで別れた母さんと妹のアンジーには、この手紙を出しておこうと思います。これが遺書になるかならないかはまだ分からないけれど、少なくとも、今は遺書にする気はありません。だから、心配しないでください。僕はとても元気にやっています。

それよりも、母さんとアンジーこそ体に気をつけて下さい。特に、母さんは最近風邪が多いそうなので、いつもより余計に体を気遣ってください。お願いします。

――（中略）

……長くなりましたが、そろそろ任務に戻らなくてはならないので、ここでお別れをしたいと思います。母さんとアンジーの健康を、聖王様に祈っています。

じゃあね、母さん、アンジー。また笑顔で会おうね。

ＰＳ．１０月３０日には「ルイェビト」駐在任務が終わるそうなので、一度ミッドチルダに戻る予定です。そして約二週間ほど滞在すると先輩が言っていましたので、１１月３日あたりから１７日まではそちらで過ごせるようです。母さんの久々の手料理、楽しみにしています。

――「ルイェビト」に駐在していた時空管理局９０１陸空隊に所属する隊員の手紙より

――１０月３０日――

『総員、第一種戦闘配置！　繰り返す！　総員、第一種戦闘配置！　これは訓練では無い！　繰り返す！　これは訓練では無い！　総員……』

時空管理局には本局の他に、四つの中央支局というものがある。それらは都市機能すら内蔵する本局程ではないが、それ一つで数々の支局を統制することができ、さらには、幾つかの管理世界と同時に戦争ができるほどの戦力を保有する、次元世界でも有数の要塞でもあった。

しかし、その内の一つ、時空管理局第三中央支局・本局防衛用機動時空要塞「ルイェビト」にて今、敵の襲撃を報せる非常事態宣言が発令されていた。

『現在敵と思しき機影は、「ルイェビト」からX―２５７６、Y―３２５７、Z―１３２の地点より此方に向かって急速接近中！　およそ１０分でこちらに到達すると思われます！』

およそ百数十年ぶりとなる「ルイェビト」の非常事態宣言。それがどれだけ異常な出来事なのか、おそらく説明しなくてもいいだろう。

そう、かの管理局と同規模の組織であった（とされる）「世界清浄」ですら、管理局が誇る四つの中央支局には一切手出しができなかったのだ。そのあまりの堅牢さと強大な軍事力によって。

『敵の戦力は母艦１、砲持ち１、角持ち１、牙持ち１で、アンノウンが１８と……』

では、一体誰が、もしくは何モノかが、「ルイェビト」に攻め込んで来ているのか。それもおそらくだが説明はいるまい。この時代、そんな馬鹿げた事を実行する、または実行できるのは、あの組織だけなのだから。

『「ガンダム」が一機です！』

そう。最強と噂されるデバイス「ガンダム」を保有する彼ら、「ＣＢ」しか、そんな事を実行する組織はいないのだ。

『これより「ルイェビト」攻略作戦を開始します！　各自、作戦通りの配置に着くように！』

『フフッ、了解したよスメラギさん』

『了解！　イノベイドの力、彼らに見せてあげるわ！』

『了解しました、スメラギさん』

『ふむ、ようするに我らが陽動になればよい？　承知致した戦術士』

『……僕も了解したよ、ミス・スメラギ・李・ノリエガ』

『そう。なら、後は貴方達に全てを託します。くれぐれも刹那やアレルヤみたいに、命令違反をすることがないように願っているわ』

黒や紫などの暗色がマーブル模様になっている次元空間で、二つの蒼い光条と二十二もある赤い光条が、蒼い光条を中心に置きながら、「ルイェビト」へ向かってまっすぐに伸びていた。

その光景はひどく幻想的で、幾人もの人々に感嘆や感動を抱かせる事だろう。しかし、同時に、不吉な念をも人々に与えるはずだ。

何故か？

答えは、「それがあまりにも禍々しい」からだ。それも幻想的な光景ではなく、計二十四ある蒼と赤の光条が、である。人々には、それらがまるで死を与えに来た死神の流星のように見えたのだ。

実際、「ルイェビト」に配属されていた管理局員たちは、その二十四もある光条を見て、感嘆や感動で心を震わせる一方、ただ純然なる不安や恐怖により、その背筋をも震わせていた。

『それにしても、さすが管理局の第三中央支局「ルイェビト」だね。もう「A・F（アトモスフィア・フィールド）」が僕達のところまで展開されてるよ。これについて、君はどう思う、ヒリング？』

黒銀色の砲持ち（ガデッサ）――リジェネが、周囲に張られた無色の結界魔法に、上辺だけの感嘆を漏らす。そして、隣で獰猛な笑みを浮かべているであろうナカマに、好奇心から感想を求めてみた。

『ええ、これには私でも、さすがとしか言えないわ。アニュー、あなたはどう思う？』

灰色を基調とする角持ち（ガラッゾ）――ヒリングは、どう考えてもそうは思っていない声で、リジェネの求めに応じ、次いで、アニューへと無造作に尋ねた。彼女はもう目の前の獲物たちに、身も心も釘付けなのだ。

『……そうね、私もさすが管理局の誇る中央支局としか言えないわ。アップル、あなたはどう？』

水色の牙持ち（ガッデス）――アニューは、これから行う凄惨な任務に嫌気を

感じながら、ヒリングの心にもないその質問にも、律儀に答えを返した。そして十八機のGN(ガン)キャノン?を巧みに操るアップルへと、会話とは言えない会話をさらに手渡した。

『我? 我は何も思わん。まあ、百年前よりかは幾分手薄になった。リボンズ・アルマーク、汝はどう思う?』

濃い青を基調とする十八機のアンノウン全てを、マスター(アーカイブ)との並列思考で完全に制御するアップルは、まるで百年前の「ルイェビト」を見たかのような台詞(せりふ)を言い、次いで、リボンズへと(超適当に)話をぶん投げた。

『僕も別に思うところは何もないね。僕はただいつも通り、任務を完璧に遂行(すいこう)するだけさ』

白と青で構成された流麗なボディを、マーブル模様の次元空間に堂々と晒(さら)して、「ガンダム[1]」――リボンズは、表向き平静を装いながら、しかし常よりもやや興奮した声でアップルに応じた。彼もまたヒリングと同じく、身も心も奪われていたのだ。ただし、彼の場合は獲物などではなく、今彼を構成している「ガンダム」にだったが。

『さて、無駄話もいいけど、向こうはもうやる気満々よ? そろそろ気を引き締めて。……ミッション、スタート!』

白と青で染められた数百メートルもの船体で、次元空間を常識では考えられない速度を持って驀進(ばくしん)する母艦(プトレマイオス?)――スメラギ・李・ノリエガは、最後にそう締め括り、彼らの任務を始めさせた。

そしてスメラギのその一声が、後々「ルイェビト」攻防戦と呼ばれる、「ＣＢ」と管理局の、武力による戦争の幕を上げさせたのだった。

白い部屋だ。真っ白な部屋だ。綺麗な部屋だ。何もない部屋だ。

「遂に来たかぁ、「ＣＢ」！」
「私的には来なければよかったんですがね、ゴホッ」
「でもでも、ここを襲ってくるなんて、何を考えてるの？　ここには私たちがいるのに」

そんな無機質極まる部屋の中央で、三人の大魔導師たちが、各々の個性的な椅子に座りながら、「ルイェビト」の司令部に直接繋がっているモニターを見ていた。

雷をモチーフとした装飾を施された黄色い椅子に座っているは、二メートルを超えようかという大柄な男だ。その男は縦も大きいが、その横も椅子から大きくはみ出すほどで、体の大きさだけで相手を威圧できそうだ。

方やその横の、焔が描かれた赤い椅子に座るは、病弱そうな青白い男であった。年齢はおそらく三十代前半だろう。いつも咳をしているせいか、その声はどことなく低く、またかすれている。

さらにその隣には、まだ二十歳半ばであろう若い女性が、真っ赤な雄牛に象られた大きな椅子の上で、体勢を若干崩しながら座っていた。

「がっはっはっはあッッ！！　そんな小さなことはどうでもいい！　俺はこの四十五年間で最も歯応えがありそうな相手を、このトールで叩き潰せれば、それでいいんだからなぁあああッ！！」

「はぁ、そうですか。しかし、貴方がそうでも、私的にはやはり得体のしれないロストロギア、それも「金色の閃光」や「烈火の将」、さらにはあの「管理局の白い悪魔」をも退けた彼らとは、あまり戦いたくありませんね、ゴホ」

「何だ、スヴァ？　お前が臆病風に吹かれるなんざ、珍しいじゃないかぁあ！　……ああ、そうかぁ。お前は確か以前の模擬戦で、シグナムに負けていたから、それで怖気づいたのかぁああ！」

「……負けた事は否定しませんが、怖気づ……」

「ねぇねぇ。今はそんなことよりも、これからどうするかを話し合いましょうよ、スヴァっちゃ、ペルっちゃ」

「「俺（私的）をそんな名前で呼ぶな（呼ばないで下さい）ッッ！！」」

「……ぶぅぶぅ。もう、こんな時だけは息が合うんだから……」

雄牛型の椅子の上で、器用に体育座りをしながら頬を膨らませる彼女、ダジ＝ボーグ。

「でもまぁ、彼女の言うことにも一理ある……と、私的にもそう思うので、さっさと「ＣＢ」への対応を考えましょう。と言っても、

もう決まっているんでしょうがね、隊長？　ゴホゴホッ」

焔の椅子に座り、辛そうに咳をしながら隣の大男を見る、病弱そうな青白い男、スヴァ＝ローグ。

「がっはっはっはっはああッッ！！　おうよ、スヴァ！　もちろん決めとるとも！」

大きな体をダイナミックに動かし、雷が彫られた椅子をギシギシと軋ませる大男、ペルーン＝イリア。

彼ら三人は、時空管理局本局武装隊航空戦技教導隊第３班に所属する、オーバーＳランク魔導師である。

ちなみに、戦技教導隊とは、かつては戦時のエースが戦争のない時に就く部隊……であったが、しかし、現在「ＣＢ」及び「Ａ－ＬＡＷＳ」と戦争状態である管理局が、新暦７５年１０月２８日に部隊を大きく再編成した結果、その意味合いが異なるものとなっていた。

即ち、「戦技教導隊は対「ガンダム」部隊であり、構成員は事務官を除き、その全てをＡＡＡランク以上の魔導師で構成しなければならない」と。

「恐らく敵はこの軌道から読むに、真正面から戦争を仕掛けてくる。ならば、コッチはそれを敢えて正面から受け止めることで、膠着状態に持ち込ませるのだ。それで敵があらかた消耗した後、そこでお前たちを横合いから投入し、これを一気に……」

バンッッ！！

「殲滅するんだぁあああッ！！」
「……？　隊長はどうするんですか、ゴホン」
「俺は念のため「ルイェビト」内部に残っておく。万が一潜り込まれた場合に備えてなぁ」
「でもでも、それが正解かも！　アタシとスヴァっちゃは隊長と違って室内戦闘が苦手だもの！　というかやれないの！」

元々戦技教導隊には、事務官を除き、ＡＡＡランク以上の魔導師が約１００人程しかいなかったので、部隊編成は割と混乱なく行えた。そして、今まで本局の本隊、支局の四つの部隊で構成されていた第１班から第５班の教導隊は、大体三人から六人ほどの小班に、第１班から第２０班へと編成し直された。

余談だが、元本局武装隊航空戦技教導隊第５班に所属していた「不屈のエースオブエース」こと高町なのはは、現在機動六課に出向中なのと、「Ｄ・Ｏ・Ｐ」事件から魔法が使用できなくなった事から、今回の教導隊には編入されず、そのまま機動六課に出向している身となった。

「では行こうかぁ、スヴァ！　ダジ！　奴らを、あの「悪」たちを、完膚なきまでに叩きのめそうぞッ！！」
「「はい（はい）、隊長（ゴホッ）！！」」

ペルーンがそう豪語すると同時に、スヴァとダジはそれぞれの椅子から勢いよく立ち上がった。そしてペルーンに敬礼をしながら、その真っ白な部屋を急ぎ足で出て行く。

ペルーンはそれを、最後まで微動だにせずに見届けてから、自身が配置につくべき場所へと、遅く、重く、歩いて行った。

「……死ぬんじゃあないぞ、スヴァ、ダジ……！」

その呟きを静かに残し、彼はゆっくりと、本当にゆっくりと、その部屋から去って行った。

「な、なんやてッ！？　「ルイェビト」に「ＣＢ」が現れたやとッ！？」

「は、はい！　先ほど無限書庫より、各部隊へと通達された情報なので、間違いありません！」

「……まさか「ルイェビト」に現れるなんてな。想像もできんかったわ……」

「それは仕方ありませんよ。「ルイェビト」並びに中央支局、本局は、時空管理局が成立して以来、一度も襲撃を受けたことがありませんでしたから……」

アースラの仄暗い艦橋（かんきょう）で、はやては艦長椅子にゆったりと、妙に幸せそうな顔で座っていた。しかし、それも束の間。突如、息を切らしながら艦橋に飛び込んできたグリフィスのその情報に、はやては椅子からずり落ちそうになった。

それを何とか椅子の肘掛に捕まることで防ぎ、同時に、機動六課が護衛を担当している第2管理世界に現れなかったことへ、疑問を持った。

「せやけど、なして「ルイェビト」なんやろな？　今までの「CB」の武力介入の経路を辿れば、十中八九、次はここやと思ったんやけど……？」

「そうですね。10月18日に第13管理世界、同月21日には第32管理外世界、26日は第11管理世界、そして28日に第3、第4管理世界の聖王教会に武力介入したのですから、次はここ、聖王教会中央教堂がある第2管理世界だと思われたのですが……」

「ま、何にせよ、うちらはもう間に合わへん。ここから「ルイェビト」までは最低でも数日はかかるんやからな」

言って、机の上で腕を組むはやて。その顔には諦めと悲しみが混じり合っている。グリフィスはその表情に悔恨――「CB」の動きを読むことができなかった事に対する――を垣間見た気がした。しかし、それも一瞬のこと。

「うちらにできることは、ただ祈ることだけや。「ルイェビト」に駐在している局員たちの無事を、な」

一瞬の後、そこには部隊長としての顔をしたはやてがいた。そして冷静に冷酷に、ただ正確な状況を把握して、最善の――それを最善と呼ぶかどうかは甚だ疑問だが――判断を下す、指揮官としての思考と心情を持つそのはやてが、感情を抑えた冷たい目で、眼前に映るモニターを、険しい目つきで見つめた。

そのモニターには、こう書かれている。

『10月29日、「キリーク」、「ゲルダ」、「ラブソウルム」より、「ルイェビト」へ四名の囚人を移送する』

と。

「……案外、これが理由だったりしてな。いや、それこそまさかやな。……多分やけど」

自分のそのありえないだろう推測に、しかしはやては、確信にも似た何かを感じずにはいられなかった。

シグナムは一人、訓練室でレヴァンティンを剣舞のように振るっていた。右に振り上げ、左へ振り落とし、真横を薙ぎ払い、下がりながら目には見えない何かを打ち払う。そんな動作を、飽きる事無く延々と繰り返す。

シグナムはその一振り一振りに神経を限界まで尖らせる事で、体力を限界まで消耗させていた。彼女の脳内で行われている模擬戦は、極限状態での戦闘を想定しているので、このぐらい自身を追い込まなければ意味がないのだ。何故なら、それはたった数コンマで勝敗が決する、そんな死闘だからだ。

「しっ！」

だが、そんな極限状態における戦闘にも関わらず、彼女が脳内で仮定の敵としている相手は、汗一つ、ましてや息切れ一つすらしていなかった。それに若干の焦りを感じながら、仮定の敵へと一気に近ずき、レヴァンティンを上段から勢いよく振り下ろす。

「ふっ！」

しかし、仮定の敵はその凄まじいはずの一撃を、有り得ない事に、真正面から微動だにせずに受け止めた。銀色の、砲撃すらこなす二本もの大剣で。

「クッ……！」

一撃を止められた事で顔を顰めるシグナム。そして受け止められた剣を急ぎ引こうとするも、仮定の敵の左手に握られた大剣が、何時の間にかシグナムの胴体に……

「シグナムッ！　シグナムッ！　大変だ、大変だぁあああッ！！」

ピタッ！　そんな擬音が聞こえそうなほど見事に硬直したシグナムを少し不自然に思いながら、アギトは自身が先程シグナムに伝えるよう、はやてにお願いされた報告をシグナムに伝えた。

「「ＣＢ」が「ルイェビト」に出現したらしいぜ！」

アギトはこの報告をするよう、はやてにお願いされた時、シグナムがどんな表情をするのか、全く予想できなかった。シグナムが四年前「ＣＢ」と戦い、そして勝ったことしか彼女は知らないのだ。そこにどんな因縁が、関係があるのか、シグナムからは未だ何も教えてもらってはいなかった。

しかし、だからといって他の人（フェイトやシャーリー等）に聞こうとしても、高町なのはが魔法を使えなくなった混乱により、皆それどころではなくなってしまったのだ。故に、結局、四年前の情報は有耶無耶（うやむや）のまま、お蔵入りのようになってしまっていた。

「そうか、「ルイェビト」に出たのか……」

その報告を聞いたシグナムの表情は、しかし、アギトの予想に反し、どこか清々しかった。何も焦らることはないとでも言うような表情だ。それに疑念を感じるアギト。だから彼女はついそれを尋ねてしまった。後で後悔する事も知らないで。

「そうかって、お前、それでいいのかよ？　何か知んねえけど、シグナムは「ＣＢ」と因縁が……」

「別に構わんさ。何時かは相見えるのだからな」

シグナムのその言葉を、アギトは最初、理解できなかった。何故ここまで再び会えるなどと確信を持って言い切れるのだろうか？普通ならもう二度と会わない、と、そう考えるはずなのに？

「何時かってお前、「ＣＢ」が攻め込んでいるのは難攻不落で有名な中央支局の一つ「ルイェビト」だぞ？　あそこに攻め込んだら普通は……」

「アギト、一つ忠告をしてやる。……奴らを決して普通などと思う

な」

殺気が空気を凍らすのを、アギトは肌で感じ取った。ガタガタと煩く歯が鳴る。あれは、誰だ……？　シグナム、なのか……？　あまりにも急激に豹変した彼女は、本当に……私のロードなのか？

「奴らは許されざるべき、最凶の悪鬼共なのだからな」

その台詞には、ありとあらゆるシグナムの負の感情が込められていると、アギトは直感してしまった。そして、シグナムのその表情も悪鬼じゃないのか……？　と、内心ではそう思っていたが、絶対に口には出さなかった。殺されたくなかったのだ、シグナムに。

「……」

「う、うぅん……ヒュドラ、さん？」

「……何でも……ない。気にしないで、ティーダ」

ヒュドラとティーダはバリアジャケットを纏って、四方が強化ガラスで囲まれている訓練室にいた。ティーダは黒い床の上に金色の短髪を僅かに広げ、大の字で転がされている。しかし、よく見ればその全身はボロボロで、至る所から血を流していた。

そんなティーダを、模擬戦の勝者として見下ろしながら、しかし、ヒュドラは自身の力の衰えに、絶望にも似た何かを感じていた。

ティーダの魔導師タンクは総合Dランク。片や、ヒュドラの魔導師ランクは陸戦ＡＡＡ＋ランクである。それは例え総合と陸戦という違いがあっても、その差は最早戦術では埋めることができない差だ。そのはずであった。

しかし、蓋を開けてみれば、ヒュドラはティーダに一度とはいえ、クリーンヒットを許してしまっていた。高々Dランクの魔導師に、管理局でも最高（ＡＡＡ＋）ランクの暗殺者が、である。

「……」

何故ここまで弱体化したのか。その原因について、ヒュドラはもう見当をつけていた。そして己の何も握られていない右手を見る。そう、本来ならばヒュドラの短刀型アームドデバイス「ヴェノム」が握られているはずの右手を。

「……ッ！」

『サー……』

アームドデバイス「ヴェノム」は先の戦闘、あの忌まわしき赤き異形（ダム）との戦いで、修復（復讐）が不可能なほど破壊されていた。しかし、それでも何とかティーダのおかげで、黒い柄の、ＡＩを担う部分（ガン）だけは修復できたものの、代わりに、「デバイス」としての性能をほぼ無くしてしまったのだ。その為、ヒュドラはデバイスの補助なしで魔法を行使せねばならなくなり、魔導師ランクはＡＡＡ＋からＡランクにまで落ち込んでいた。

Ａランク。それは管理局なら十分隊長になれるランクであり、間違っても不足するような強さでは無い。無いのだが……

相手が「ガンダム」ならば、また話が違ってくるのだ。彼らの前に立つには、少なくとも、本当に最低でもＡＡＡランクが必要なのだ。つまり、Ａランクでは、「ガンダム」の前に立つことすら敵わない、という事。

ヒュドラが、そしてティーダが「ガンダム」に復讐する為にも、最低でＡＡＡ、そしてできれば、本当にできれば、ヒュドラすら到達し得なかったオーバーＳランクの、圧倒的で、絶対的な力が必要だ。しかし、そこへ至る為の光明が一筋も無いのが現状である。

「……ッッ！！」

叫びたいと、ヒュドラは心の底からそう思った。絶望に身を任せ、慟哭（どうこく）に心を委ね、何もかもを投げ捨てながら、思いっきりここで絶叫したいと、彼女はそう願う。願ってしまう。この現実を、世界を己から拒絶したいが為に。

「……まさか、ヒュドラさんがこんなに強かったなんて。これだったら、もしかしたら……ヒュドラさん。実は、あなたに話したい事があります。とても、とても大事な話です」

ヒュドラのその絶望したような様子は、しかし、ティーダにはばれていなかったようだ。彼はブツブツと独り言を呟きながら、突然真剣な表情をヒュドラに向けてきた。

「……ティーダ？」

そのあまりにも真剣な表情に、困惑を露わにするヒュドラ。いつもならストレートな銀髪も、どこかふわふわとして落ち着きがない……ように見えなくもない。

「これは命令ではなくお願いなので、断ってくれても構いません。いえ、どちらかと言えば、断って欲しいぐらいです。……ヒュドラさん、僕が開発している物のテストを、してくれませんか？」

そして、急に切り出されたティーダのその申し込みは、もしかしたら地獄へと、奈落へと続くような道のりの第一歩なのかもしれなかった。それは彼自身が一番よく分かっているようで、その顔には引いていた汗が再び噴き出している。これほど残酷な事を、命の恩人たる彼女に申し込む時点で、彼はもう自分が引き返せない所まで来ているのを自覚してしまったのだ。再び噴き出した汗は、嫌に冷たかった。

「……私は……」

ティーダはこの話をヒュドラに断って欲しかった。例えそれで「ガンダム」へ復讐する為の準備時間が増えようとも、そんなどうでもいい事には構わずに、彼は、彼自身が憧憬（しょうけい）を抱いてやまない、冷たくともどこか温かい彼女――ヒュドラに、自身の開発している物、残酷な運命を与えるべくして造られしモノへ、関わって欲しくはなかったのだ。

「……私は……」

そのお願いに対するヒュドラの返事は、ティーダのその思いが伝わったせいか、中々出てこない。何度も何度も口でどもり、言葉と

して吐き出されない答え。しかし、その答えはもう……

第２６話　もう戻れないし、引き下がれない。あの頃には、あの時には。（後書き）

設定

ＧＮキャノン？：スカリエッティが改良を加えた機体。そこかしこにガジェットの技術が使われており、遠距離から操縦可能となっている。最大の変更点は、背部に設置された大型ＧＮコンデンサーと、ＧＮミサイルを破棄し、そこにＧＮコンデンサーを取り付けた事で、やや大型となった肩部。その変更点はＤｒ．曰く、「稼働時間が長くなければ意味がなぁあああぁあああいっっ！！」。別名「ガジェット？」。

遅れに遅れて、申し訳ございませんでした。

あと、最近何故か妙に忙しい為、これからは二週間に一度投稿できるかどうかになりそうです。……本当に申し訳ないです。

このような作品をここまで読んで下さった皆様方に感謝を。

最後に。

ＯＯの映画を見に行きたいのですが、都合が……！　そしてその都合の為、チケットもまだ買えていないのが現状です……！　ところがギッチョン、頼みますから来て下さい！！　本当にお願いします！！！

第27話　「ルイェビト」攻防戦　≪前篇≫（前書き）

俺たち虫憑きは、逃げたら負けなんだ。戦うしかない以上、勝たなくちゃ、死ぬしかないんだよ。

――ムシウタのかっこうより

第２７話　「ルイェビト」攻防戦　≪前篇≫

――新暦７５年１０月３０日――

広大な次元空間の片隅で始まった「ルイェビト」攻防戦。それは正しく死闘以外の何物でもなかった。

『１３２から６７５陸空隊、及び第四次元航行艦隊はそのまま直進して下さい！　１２２と７６９、８７９と１２３２陸空隊は右翼に展開、残りの部隊は左翼へ！』

「行くぞ、お前らッ！　相手はあの「ＣＢ」だ！　一瞬たりとも気を抜くなよ！」

「「「はいッ、隊長！」」」

数万もの航空魔導師が飛行魔法で暗色の「Ａ・Ｆ」（アトモスフィア・フィールド）内を飛翔し、色鮮やかな射撃魔法を幾千、幾万と「悪」に向けて放つ。そして十数隻もの艦隊が列を為し、目の前の悪鬼共を撃ち砕く為に、その数十もの主砲を一斉に放射する。

それに対し、「ＣＢ」は幾千、幾万からなる射撃魔法の帳（とばり）をＧＮフィールドで防ぎ、赤色と蒼碧色の粒子からなる光線を魔導師へと撃ち返す。そして艦隊の数十もの主砲による弾幕を、その高い機動性で躱（かわ）し続け、さらには橙色の極大砲撃でもって撃ち返していく。

それは戦争であった。半径数十キロにも及ぶ広大な結界の中で勃発した、愚直なまでの戦争。それが今この時、数多の命を歯車に、幾多の絶叫を滑潤油としながら行われていた。

『……ッ！？　敵から高エネルギー反応、来ます！！』

『僕の得意なアウトレンジで屯（とどま）ってていいのかい？　ガデッサ、圧縮粒子解放！』

『イエス、マイスター。高濃度圧縮粒子解放。ＧＮメガランチャー、照射！』

ドォオォォオオオオン！

黒金色のガデッサが橙色の極光を放つ。それは轟音を発しながら戦場を悠々と横断していき、艦隊の内の一隻に直撃した。そしてその一隻はあまりにもあっけなく、その一撃で二つに折れ、ギシギシと鈍い音を響かせながら各処より炎を噴き出し、静かに爆散していった。

『ＸＶ級艦船の十八番艦「ロゴス」、轟沈！』

『何ィイッ！？　たった一撃でＸＶ級が沈んだだと！？　そ、そんな馬鹿な事が……！』

その光景を信じられない悪夢のように、茫然と眺めるＸＶ級艦船・十九番艦「コンクール」のクルー達。だが、茫然と眺めたが為に、彼らの運命は決まってしまった。

『第２波、来ます！　これは……当艦に直撃コースッ！？』

『なッ！？　回避、回避だ！　全力で回避しろぉおおお！！』

『だ、駄目です！　間に合いま……！？』

ゴォオオオオオォオオン！

『ふむ、成程。このＧＮキャノン？、なかなかに使える。砲撃は我の領分ではないがな』

ガデッサの第一波に続く第２波、十八機もの青いＧＮキャノン？による一斉砲撃で、さらに数艦が次元空間の藻屑（もくず）となっていった。それに怒りを、憎しみを抱きながら、それでも魔導師達はただ一心に「ＣＢ」へと近づいていく。「ＣＢ」の母艦、プトレマイオス？を目指して。

「怯むな、怯むなぁあああ！！　前進、前進んんーー！！」
「くそッ、クソッ！　クソぉおおおおおお！！」
「ウォォオオオオ！　やってやる、やってやるぞぉおおぉおおお！！」

圧倒的な存在感を持ってやってくる死の「恐怖」に、骨の髄（ずい）から震えながら、それでも前へ前へと進む魔導師達。一体、何が彼らをそこまで進ませるのだろうか？

「ここだッ、ここで止めるのだッ！！　ここで私達が奴らを止めなければ、他に誰が止めれるというのだッ！？」

一体、何故そうまでして進まなければならないのだろうか？

「時空管理局は次元世界の平和を護る唯一の組織！　だから「ＣＢ」を、世界の「悪（テロ）」を討つのは時空管理局しかいないのだッ！！　世界を護る為にも、人々を助ける為にも、私達は前進を止める事ができない、できるはずがない！　この背中に多くの命を、人々の笑顔を背負っている私達は……ここで引くわけにはいかないんだぁあああ

あッ！！」

いや、それはひどく単純な事なのかもしれない。前進を止められない理由、それはただ彼らの背中に護るべき人々がいるからだった。ここで彼らが後ろを見せれば、たちまちの内に、その背中に背負っていた人々の笑顔を、平和を、幸せを、理不尽すぎる戦火に晒してしまう事となる。それだけは、それだけは許せない、許さないッ！

許せるはずがないッッ！！

「行くぞ、皆！　あいつらにありったけの魔法を浴びせて、塵（ちり）も残させるな！！　人々の幸せの為にも、平和の為にも！　ここで奴らを討つんだ、討っておくんだあああ！！」

「「「おおおおッ！！」」」

ただ純粋に世界を、人々を護る為だけに、彼らは戦い、そしてこれからもずっと戦い続けるだろう。心に勇気を、胸に正義を灯（とも）しながら、背中に護るべき人々を背負い、彼らはデバイス片手に戦場を駆けていくのだ。その先に明るい未来が、人々が笑っていられる世界があると信じて。

故に彼らは悪鬼どもと立ち向かい、その進路に立ち塞（ふさ）がる。世界の為平和の為、そして人々の為に！　彼らは死すら覚悟して、その地獄すら生温い戦いへと、その身を投（とう）じた。

『きゃはははははッ！　凄い、凄いよガラッゾ！　私達の獲物が、こんなに一杯いるなんて！』

『イエス、マイスター』

『どれから殺すか、迷っちゃうわぁあぁぁあ！！』

そんな魔導師達に、破壊しかできないモノ達（悪鬼共）――「ＣＢ（ガンダム）」が、死

の「恐怖」と共に襲いかかっていった。

灰色のガラッゾは抑えきれていない殺気を周囲にばら撒きながら、マーブル模様の「Ａ・Ｆ」内を、魔導師めがけ翔けていく。その先には三十人ほど固まって動いている魔導師達がいた。

「隊長！　三時の方角より角持ちが接近してきます！」
「各員、フォーメンションＤ！　これより第１４３陸空隊は角持ちと交戦に入る！　フロントアタッカーとガードウィングは前へ！　フルバックはもっと後ろに下がれ！　センターガードは私の位置まで来い！」
「「「は、はいっ！！」」」

その魔導師達――第１４３陸空隊は距離１０９を残して、ガラッゾと正面から相対した。中にはガラッゾを見た途端に、恐怖から悲鳴を上げた者もいたが、それでも逃げ出すような輩などは、誰一人としていなかった。

「センターガードとフルバックは射撃魔法用意！　フロントアタッカーとガードウィングは射撃魔法を撃ち終えた後に突撃しろ、いいなッ！？　……射撃魔法、ってぇえええーーー！！」

ドドドドドドドドドドッ！

フォーメーションを僅か数秒で完成させた第１４３陸空隊の後衛の魔導師達は、十数もの色彩豊かな魔法陣を一斉に発動させながら、

魔力を破壊の光弾へと変換させ、それをガラッゾへと、その視界を埋めるように何十発も放った。

それは並みの敵なら塵すら残させない程の弾幕だ。ＡＡＡランクですら無傷では済まないだろう。それほどの弾幕がヒリングを構成するガラッゾへと迫っていく。

『そんな豆鉄砲、このガラッゾとヒリング・ケアには……』

しかし、その尽くが余裕で避けられるか、強固なＧＮフィールドによって阻まれてしまう。それに侮りの表情を見せるヒリング。それに悔しさを抱く魔導師達。

『効かないわよッ！』

だが、魔導師達はそれでも攻勢を止めずに、さらなる攻撃を続行させた。前衛の魔導師達によるクロスレンジでの戦闘を。それこそがガラッゾの望んでいた戦闘だと知らずに。

「「「ウオォオオオォオオオオッッ！！」」」

『きゃはッ！　待っていたわよ、獲物ちゃんたち！』

十一名もの魔導師が決死の形相で接近する中、ヒリングは一人、愉悦（ゆえつ）の表情を顔一杯に湛（たた）えたまま、ガラッゾの十本の指からそれぞれ一メートルを超えようかというＧＮビームクローを発生させた。そして片手（五本）のＧＮビームクロウを一本の巨大ビームサーベルに集束させ、計二本の大剣とする。

『少しでもいいから、私を楽しませなさいよ、魔導師たち！』

その二本の巨大ビームサーベルを大きく後ろに振り被りながら、最も手近にいた魔導師へ斬りかかるガラッゾ。その速度はたかだかD～Aランクの魔導師たちで構成されている彼らの比では無く、彼らには捉えきれないほど――絶望的なまでに速かった。

『まずは……彼女からよ、ガラッゾ！』

『イエス、マイスター』

「ヒッ！？」

まだ十七かそこらの女性魔導師が、残像すら見える速度で自身に向かってくるガラッゾを見、そのあまりの恐怖から喉を詰まらせた。ガラッゾはそれを見て、しかし何も思う事無く、真っ直ぐ彼女へと近づいていく。両手から生えた長剣を、凶悪なまでに光らせて。

「いかん！　下がれ、ジーナッ！」

「下がって下さい、ジーナさん！」

「こ、このぉおおお！　ジーナをやらせるかぁあああああ！！」

恐怖により一瞬体が硬直してしまった女性魔導師。そんな彼女を何とか助けようとする、同じ部隊の隊員達と、その恋人。

だが、現実は何時も通り、ただ残酷なだけであった。その一瞬で彼女とガラッゾの距離を、手が届く位置にまで縮めてしまうのだから、これを残酷と言わず、何を残酷だと言えるのか？

『無駄だって……言ってるでしょうがぁあああ！！』

少なくても、彼女――ジーナには、何も思い浮かばなかった。この現実よりも残酷なモノを。……いや、あるとすれば、ただ一つ。

『喰らってやられて、無様に死になさい！』

彼女の目の前にいる角持ち――即ち「ガンダム」こそが、彼女にとって最も無慈悲なモノだっ……

「い、イヤぁ」

ザンッ！

ブシャアアアアアッ！

「ジーナぁあああああッ！？　あ、あああああぁあああぁあああああッ？！」

恋人であった男性の絶叫が、その場に虚しく響いた。その彼の目の前で、ジーナはガラッゾにより、胴体と頭部を一瞬で切り離されてしまっていた。

悲鳴すら途中で斬り消すほどの速度を持って放たれたガラッゾの剣閃が、恐らく彼女に痛みを感じさせずに命を絶っただろうから、それだけが唯一の救いか？

『次ぃいいッ！』

『九時の方向、距離２３！』

それが救いかどうかは、もう誰にも分からない事だが。

「来るぞ！　全員、構えろぉおおお！」

そしてガラッゾは、次の獲物――魔導師に、先程以上のスピード

で殺しに迫っていった。その姿はジーナの返り血とヒリングの殺気により、ガラッゾをより悪鬼たらしめていた。魔導師たちはもう二度とその姿を忘れる事ができないだろう。

まぁ、もう二度と目覚める事もなかったが。

『敵母艦、依然「ルイェビト」に進行中！　こちらの砲撃を全く意に介しません！』

『止めろ！　何が何でも、アレを止めるのだ！　これ以上「ルイェビト」に近づけさせるな！』

プトレマイオス？は数多の魔導師の命を糧としながら、「ルイェビト」へと驀進（ばくしん）していた。魔導師達の怨嗟（えんさ）を、憎悪をその穹色の船体に沈みそうなほど受けながら、それでも決して止まらずに、それは前へ前へと推進していく。

その姿はまるで、天使を乗せた方舟（母艦）のようだ。

「フェルト、「ルイェビト」までの距離は！？」

「まだ距離１３２７です！　ッ！？　右翼より魔導師１９が接近！」

「正面からも魔導師２４が接近してくるです！　今はアップルさん

が迎撃に当たってますが、何時まで防げるか分からないですぅ～！」
「ちっくしょー！　こんなに敵がいたんじゃ、近づく事も難しいぜ、スメラギさんよぉお！」
「皆、我慢して！　あと少し、あと少しだから！　そうすれば、私達の勝ちも同然よ！」

そのプトレマイオス？のブリッジは、まるで嵐のように騒々しかった。しかし、それは仕方のないことなのだ。

数万、あるいは数十万という物量故に、次から次へと伝えられる敵の接近。刻々と移り変わる戦場に、矢継ぎ早に出される指示。味方の配置と損傷の具合。そういった戦術予報に必要な全ての情報が、そこに傾れ込んでいたのだから。

しかし、それほど膨大な情報を処理しながらここまで前進できたのは、ひとえに優秀なオペレーターと戦術予報士、そして操舵者がいたからだ。彼ら全員が協力的かつ優秀でなければ、ここまで「ルイエビト」に近づくことは不可能だろう。

だが、いくら優秀な戦術予報士、オペレーター、操舵者がいようとも、絶対的な数の暴力に抗い切れるはずがなかった。

「スメラギさん、距離１１８７になりッ！？」

ドゴォオォオオオン！

フェルトがスメラギに距離を伝えようとした刹那、一際大きな爆音と振動が、トレミーのブリッジを揺さぶった。その揺れは立つ事を叶わなくし、音は耳を聞こえなくするほどだ。

「クウウゥゥ……そ、損傷は！？」
「ＸＶ級次元航行艦の主砲が右舷の第三、第四格納庫に直撃！　第三、第四滑走路が使用不可となり、また大型ＧＮキャノンが一門沈黙しました！」
「それに加えて、正面の敵がアップルさんを躱して左舷の大型ＧＮキャノン一門とＧＮミサイル発射口を二門、さらには、側面部の小型ＧＮキャノンを二門、破壊したですぅ～！」
「クッ……！」

その想定以上の損害に、思わず顔を顰めてしまうスメラギ。そんな彼女は手元のキーを操作し、ある人物と通信を繋げた。モニターの端には『ＣＢＳ－６８　エウクレイデス』と書かれてある。

「アップル、あなた何をして……！」
『仕方なかろうッ！？　我は砲撃がというよりも、攻撃全般が得意ではないのだ！　それに、先程抜かれた魔導師なら、既に始末……』
「お願いだから、絶対にそこを抜かせないで！　あなたがこの船の最終防衛ラインなんだから！　分かったかしら、アップルッ！？」
『……む、むむぅ、承知……した。いや、致したッ！』
「そう、ならお願いね？　あ、あと、そっちはどうなっているのかしら？」
『何も問題はない。これから行動開始』
「分かったわ。アップル、そっちもお願いね？」
『……クッ！　イエス、魔謀！』

アップルのその最後の言葉を聞き、何故か肩を大きく落としながら（全くもう……そんなに使って欲しかったのね、アップル？）通信を切ったスメラギだが、その顔には若干の焦り以外にも、この戦争が自身と『法典』のプラン通りに進んでいる事に対する安堵も現れていた。

「スメラギさん、アップルの最後の言葉って……」
「恐らくその通りよ、フェルト。彼はどうやら私にもっとこき扱われて欲しいみたいね。それならそれでいいわ。私はただ彼の思い通りに……」
しかし、それは一瞬だけだった。
ラッセ・アイオンはその一瞬が過ぎ去ったあと、背筋に凄まじい寒気が走ったと、後に証言した。それほどまでにスメラギは怖く、そして清々しく笑っていたのだ。ラッセが言うには、顔が笑っていても、目は全く笑っていない、そんな笑みだったらしい。
「さんざん使い倒して、ボロ雑巾のようにしてあげるだけだから」
その言葉を聞いたブリッジのクルー達は、皆一様にアップルに同情した。もっとも、助けようとは微塵も思わなかったが。
戦場を一望できるほど離れた地点で、必要最低限の設備しか起動させずに、じっと待機している戦艦が一隻だけいた。その戦艦は戦場の流れを変えるべく投入される、「ルイェビト」の切り札だった。

「まだまだ待機しなきゃいけないの？」
「えぇ、まだですよ。ゴホ」

ＸＶ級次元航行艦の第３番艦「トリグラフ」、それがかの船の名前である。その数百メートルもの船体は黒を基調としながらも、所々に赤色と黄色が塗られている為、派手ではないが地味でもない、そんな色合いをしていた。そしてその船の最も特徴的な所は、赤・黄・黒の三色に塗り分けられた、何故か三つもある船首であった。その姿は最早戦艦としては異様という他ない。

「ねえねえ、彼らはもう結構消耗していると思うよ？　だから……」
「まだです。距離が１０００になるまで待ちなさい、ゴホ。……彼らが無策でここに突入するのは、貴方も同じ見解だったはずでは？　ゴホッ、ゲホッ」

最も、現在「トリグラフ」には船体全周に魔法による光学迷彩が施されており、傍から見ても姿形はおろか、そこにいることすら認識できないようになっていたが。

「でもでもぉ～～～！」
「貴方があそこで戦っている魔導師たちを助けに行きたいのは重々承知しています、ゴホ。しかし、相手は私達と同じか、それ以上のランクに認定されている、正真正銘の怪物です、ゲホ。ここは慎重に慎重を重ね、絶対的な勝機を待って行動しなければならないのは、貴方も分かっているはずでしょう？　ゴホゴホッ」
「うぅ、うぅ～～～！」
「唸っても駄目なものは駄目です、ゴホ。もしここで私達が負ければ、それはもしかしたら「ルイェビト」陥落に繋がるのかもしれないのですよ？　ゴホッ！　それをもう一度肝に銘じて下さい、ダジ

さん、ゲホッ」

その「トリグラフ」の非常灯しか点けていない広いブリッジに、二人は何故か並んで立っていた。片方は二十代前半の若い女性で、翠色の髪と茶色の瞳を持つＳ－ランク魔導師のダジ＝ボーグ。そしてその隣に居るのが三十台前半の、灰色の髪と目を持つ青白い男性で、Ｓ－ランク魔導師のスヴァ＝ローグである。

「……待つ待つ、スヴァがき……」

「寝言は寝てから言って下さいね、お願いしますよ？　ゴホ」

「ま、まだまだ何も……」

「私的な貞操（ていそう）の危機に直結する発言を言いそうだったので、寸前で止めたんですよ、ゲホ」

「う、う、うぅ～～～ッ！」

「唸っても駄目なモノは駄目です、私的にはやはり初めての接吻（せっぷん）は恋人同士でやりたいですから、ゴホゴホ」

スヴァとダジはこのように会話をしているが、その視線は目の前のモニターから微動だにしていない。それが彼らがどれだけ戦場に意識を向けているのかを如実に表していた。

まぁ、ダジは一瞬だけスヴァに熱い視線を向けたのだが。しかし、それはあまりにも完璧に無視されてしまったので、今は諦めて目の前の戦況に集中していた。若干目つきがしゅん……となっているのは気のせい……か？

「……さて、軽口もここまでです。艦長、五分後には光学迷彩を解除し、いつでも発進できるよう、発進準備を完了させといて下さい」

「……！？　ど、ど、どうしてどうして！？　まだ敵は距離１１８７だ……」

「ここから向こうに着くまでの時間を計算すれば、そろそろでるのがベストだからです、ゴホッゴホッ！　間違っても貴方の意見を聞き入れたわけでは……」
「うんうん、分かってるよスヴァっちゃ！」
「だからその名で呼ぶのは……」
「じゃあじゃあ、こんなところでじっとしていられないねッ！　私はもう先に転送ポートに行ってるよ、スヴァっちゃ！」
「……ハァ、お願いですから人の話を聞いて下さい、ゴホ」

先程までの落ち込みはどこへ行ったのやら。ダジは嬉しそうにスキップしながらブリッジから出て行ってしまった。それを溜息つきながら見送るスヴァ。一体何時になったら彼女は彼の本当の気持ちに気付くのだろうか？

「……私的も素直になれないのが原因ですが、ゴホ。まぁ、今は「ＣＢ」の方に集中しましょう、ゲホ」

言って、今にも距離１０００に到達しそうな敵母艦を鋭く見詰めるスヴァ。敵母艦は所々から煙を出し、至る所を破損させていたが、止まる気配は全くない。

「彼らは恐らく距離１０００辺りで何かを仕掛けてくるはずです、ゴホゴホッ。それが何なのかは未だ不明ですが、此方がそれを潰せれば勝利はほぼ確定でしょうから、何が何でもその策を止めなければなりません、ゲホゲホッ」

何時しか非常灯が消えていた。そして同時に、身を切る様な緊迫感が辺りに漂う。……あぁ、遂にこの時が来たのか。憂鬱（ゆううつ）だ。

「スヴァ＝ローグ一等空尉、発進準備が完了しましたが……」

「……分かりました、ゴホッ。……では行きましょうか、悪鬼を討伐しに、ゲホッ」
「「「はい！」」」
「「トリグラフ」、発進！」

加速によるGで身体が徐々に重くなるのを感じながら、スヴァは人知れず生唾を飲み込んだ。それが戦場の空気によるものか緊張によるものか、それとも嫌な予感がしたからなのか、憂鬱な気分だったからなのか、スヴァには分からなかった。

プトレマイオス？の右舷より、距離２００の地点。

「ヒィイィィイイッ！？　く、来るな、来るなぁあああッあが！？」
「クソッ！　よくもマーシャをッおごッ！？」「……つ、強すぎる！　これが「ＣＢ」の、「ガンダム」の力なのか……！」「こんな化物とどう戦えってんだよッ！？」「聖王様、聖王様、聖王様、聖王様。わ、わ、私を御救いくだ……」

そこは魔導師の屠殺場と化していた。生ある魔導師、命ある魔導師が、無慈悲に無遠慮に無抵抗に、ただただ狩られるだけの、たった一機の「ガンダム」により造られし地獄。それが……ここだ。

『素晴らしい……！　これが「ガンダム」の、１ガンダムの力なのか！』

『マイスター、後方より魔導師が１０ほど接近しております。気にも留めないで大丈夫でしょうが、一応お気を付けを』

『了解したよ、１（アイ）。ありがとう、教えてくれて』

『当然のことをしたまでです、マイスター』

その地獄を顕現させた「ガンダム」、１ガンダム（リボンズ）は、その地獄を直視しながらも、自身の「ガンダム」の圧倒的な力に酔い痴れていた。そして右手に持っていたＧＮビームライフルの銃尻のコネクターを、肘の大型ＧＮコンデンサーに接続させ、その状態のまま後ろの魔導師たちに、一発だけ、赤色の光線を放つ。

ドォオォオオッ！

「そ、そん」「あ」「にげ」

その一条の光線は、三人の魔導師をあっけなく呑み込み、塵すらこの世界に残させなかった。人間を消し炭、ではなく消滅させながら戦場を走る赤色の砲撃。それを見て恐れを抱く魔導師達。

『ク、クック……あぁっはっはっはっはあっ！　圧倒的じゃないか僕は！』

『イエス、マイスター』

それを見て、更に「ガンダム」の力に溺れるリボンズ。それを見て、マイスターに同意する１。

「こ……後退！　後退だ！　各自、ＸＶ級艦船・第２３番艦「ララ・

パルーザ」まで後退せよ！」
『どうやら逃げるみたいだね。でも、そんな事はさせな……何？
九時の方向、距離３００の地点にＸＶ級艦船の「トリグラフ」が？』
『マイスター、九時の方向には現在ガッデスとＧＮキャノン五機がいるので、大丈夫かと』

その部隊の隊長達が、一斉に後退の指示を出したのと同時に現れた「トリグラフ」。唐突に現れたのも気になるが（Ｅセンサーに反応が無かったのは、恐らく動力を切っていたのと、光学迷彩か何かで姿を隠していたからだろうけど）、何よりも、此方が仕掛けるはずのこのタイミングで、いきなり仕掛けてきたのが疑問だ。まるでこのタイミングを見計らっていたような……待てよ、ということは……

『いや、僕達も迎撃に向かうべきだ、１。まだ推測でしかないけど、「トリグラフ」には恐らくオーバーＳランク魔導師が乗っているはずだ』
『オーバーＳランク魔導師……ですか？　しかし……』
『そうだね。確かに、幾らオーバーＳランクと云っても、たった一人だけならガッデスとＧＮキャノン五機の敵じゃないさ。でも、もし相手が召喚士で、オーバーＳランク級の召喚獣を召喚できるとしたら？』
『……ッ！　確かにそうでした。Ｓ－ランクの獣召喚士、ダジ＝ボーグなら……』
『そう言う事さ。それに……「ルイェビト」に配属されているオーバーＳランク魔導師は「獣王の巫女」ダジ＝ボーグだけじゃない。「輝ける鬼火」スヴァ＝ローグ、それにあの「剛雷」ペルーン＝イリアまでいるんだ。実際あの船に何人乗っているかはまだ分からないけど、それでも万が一を考慮すれば……』

いくらなんでも、ガデッサとＧＮキャノンが二人以上のオーバーＳランクと戦って勝てるとは思えない。精々が時間を稼ぐぐらいで、最悪、それすらできない可能性がある。なら、僕が今すべきことは……

『……分かりました、マイスター。貴方の意のままに行動を開始しましょう』

『なら、これから1ガンダムはガッデスたちの援護に行くと、ミス・スメラギに伝えておいてくれないかい、1？』

『イエス、マイスター』

彼らの援護と……『計画』における『不確定要素（イレギュラー）』の排除だ。

第２７話　「ルイェビト」攻防戦　≪前篇≫（後書き）

設定

陸空隊：陸士部隊と航空（次元）部隊を併合させ、再編成した「陸」と「海」の合併部隊。主に次元航行艦隊に配属される。航空魔導師が船体の周囲を護り、陸上魔導師が甲板などに立ち、航空魔導師の補助をしながら船も護るのが部隊の主な展開方法。魔導師ランクの平均はＣ～Ｂ。イメージ的には１ｓｔガンダムのサラミス・ジム・ボールの関係。

全然話が進みません。何故でしょうか？　とても不思議です。もう少し文量を減らした方がいいのでしょうか？　不思議です。このような作品をここまで読んで下さった皆様に感謝を。

最後に。

感想制限を試験的に外してみました。酷い中傷（作者の悪い点は除く）が書かれない限り、このまま行こうと思います。

第２８話　「ルイェビト」攻防戦　≪中篇≫（前書き）

それは剣というにはあまりにも大きすぎた。大きく、ぶ厚く、重く、そして大雑把すぎた。それはまさに鉄塊だった。

――ベルセルクの「ドラゴン殺し」に関する描写より

例えその瞳を灼かれても、例えその腕をもがれても、死沼へ誘う鬼火（ウィル・オー・ウィスプ）に導かれるまま、保身無き零距離射撃を敢行する。奴らは蒼い鬼火と共にやって来る。

――パンプキン・シザーズの「９０１ＡＴＴ」に関する御伽噺（噂）より

第２８話　「ルイェビト」攻防戦　≪中篇≫

――新暦７５年１０月３０日――

蒼い流星が一閃、暗色の次元空間に淡く煌（きら）めいた。

そして同時に、一隻のＬ級次元航行船が、汚らしい花火と共に、爆散した。

「「「……は？」」」

一体何が起こったのか？　どうしてＬ級次元航行船が爆散しているのか？　そもそも、あの非常識な大きさの巨剣で、Ｌ級艦船をぶち貫いた蒼い流星は何なのか？　ＸＶ級次元航行艦の第５６番艦「エクソダス」のブリッジは、その一瞬で湧きおこった様々な疑問と異常事態により、言葉を発せない程混乱していた。しかし、ここで疑問が生じる。何故混乱しているのだろうか、彼らは？

答えは一つしかないはずだ。しかも、それは誰も彼もが分かっているはずだった。「蒼い流星」「「ＣＢ」の象徴機」「オーバーＳ（最凶最悪の）キラー（殺刃鬼）」。この三つの単語は、その場にいる誰もが知り、そして恐れていたはずなのだから。

『よし、先制攻撃は見事に完遂（かんすい）！　次は汝、リヴァイヴ・リバイバル！』

『了解！　これよりガデッサはフェイズ2、アウトレンジからの砲撃を実行する！　刹那、射線軸上に入らないでくれ！　アップル、あなたはタイミングをちゃんと合わせてくださいよ！』

『了解した。『ＯＯ』は作戦通り、これから「エクソダス」に向かう』

『承知、リヴァイヴ・リバイバル！　では行くぞ！』

そうだ、恐れていたのだ、彼らは。「ＣＢ」という、「世界（管理局）」規模の組織複数とすら戦争を行う、異常極まるテロ組織を。そして、その武力の象徴である「ガンダム」という名のロストロギア（第一級危険指定物）を、彼らは、恐れていたのだ。

『『３（スリー）、２、１（ワン）……圧縮粒子、解放ッッ！！』』

『ＧＮメガランチャー、発射！』

『『ＧＮロングキャノン、合体照射』』

ガデッサと二機のＧＮキャノン？から五つの砲撃が放たれる。それは「Ａ・Ｆ」が張られていない次元空間を轟々とうねりながら突き進んでいく。そして先程『ＯＯ』が撃墜したＬ級艦船とは違う、もう一隻のＬ級艦船へと、吸い込まれるかのように向かっていき……

「か、艦ちょ……！？」

「か、かいッ……！？」

ドォオオォオオォオオォオオンッッ！！

人の命を糧とする赤い花火をもう一つ、マーブル模様の次元空間に撃ち上げた。それは背筋が凍るほど綺麗で美麗だったが、同時に、

何よりも血汚かった。

「ば……ば……馬鹿なッ！？」

「たった……たった十秒で、Ｌ級艦船二隻が……撃、沈？」

「こ、こんな……こんなことって……」

その人命をゴミのように散らす花火を見上げながら、「エクソダス」のクルー達は、恐怖による全身の震えを抑える事ができないでいた。がたがたガタガタと、広いはずのブリッジ全域に響き渡る、原初（死）の恐怖による震音。その心音がクルーたちをさらに恐慌状態へと導いていく。

「か、艦長！　こちらに接近する機体が一つあります！　おそらく先ほどの蒼いりゅ……」

「皆まで言わなくともよい。……「Ａ・Ｆ」の展開可能時間まで、あとどのくらいだ？」

「八、いえ十分はかかるかと……」

「……そうか。……そう、か……」

もうすぐ六十になろうかという歴戦の艦長が、その状況報告を聞き、何時になく声を沈ませた。それに自分達が助からないと、もう「ガンダム」に立ち向かう術がないのを知るクルー達。

いつもなら鼓膜が破れるほど騒がしいはずの広いブリッジに、ストンッと、重い沈黙が訪れる。しかし、そんな彼らにも現実は死の宣告を突き付けた。どこまでも無慈悲に、無情に、残酷に。

世界は、現実は、今日もまた残酷だった。

ＸＶ級次元航行艦・第５６番艦「エクソダス」と、その護衛艦であるＬ級艦船二隻は、「キリーク」「ゲルダ」「ラブソウルム」という三つの軌道拘置所から四人……いや四機の囚人達を、第三中央支局「ルイェビト」へと移送する途中であった。しかし、そこで管理局にとっては予想外の、「ＣＢ」にとっては計画通りの事態が起こった。

「ＣＢ」の「ルイェビト」襲撃である。そしてこの襲撃事件により、エクソダス他二隻は、本局から「ルイェビト」に向かう途上の次元空間で、足止めを喰らう事となる。それこそが「ＣＢ」の「ルイェビト」に襲撃を仕掛けた真の目的だとも知らないで。

『エウクレイデス、こちら『ＯＯ』。今エクソダスの船内を制圧した』

『こちらエウクレイデス、了解した。これよりエウクレイデスはエクソダスと接舷（せつげん）する。『ＯＯ』は私の娘たちの元へと先行し、身の安全を確保しておいてくれ。リヴァイヴ、アップルの両名には、周辺の警戒をお願いする』

『ガデッサ、了解した』
『我だが、了解』
『『ＯＯ』、了解』

刹那は血肉の赤とピンクで彩られた船内を見渡しながら、何の感傷もなく通信を切った。そして両手で持っていた身の丈ほどもある巨剣を、左肩のＧＮドライヴに接続させる。

『エクシア？』
『ルートを特定しました、マイスター』
『了解。……ありがとう、エクシア』
『……ッ！？　い、いえッ！！　と、と、と、当然のことをしたま……』
『当然の事をしたまでです、マイスター』
『……貴方は、貴方という「ガンダム」は……！　Ｏぉおおおガぁあぁあぁあンダぁあああぁあムッッ！！』
『……頼むから喧嘩をしないでくれ。エクシア、Ｏガンダム……』

まるで嵐が通り過ぎたかのような、赤（血）とピンク（人肉）で上塗りされたボロボロな通路を、『ＯＯ』は一歩一歩、ゆっくりと歩いていく。王のように、天使のように、……悪鬼のように、どこまでも傲慢で、独尊的に、彼のモノは歩んでいく。

ガシャン……ガシャン……ガシャ

「喰らえッ、ガン」
『ハァ！』

その歩みの途上、ある通路の十字路で、『ＯＯ』の右横から、魔導師がいきなり『ＯＯ』へと襲いかかった。その魔導師のありったけの魔力が込められた魔力弾が、『ＯＯ』へとその牙を剥く。しかし、その魔導師にとっては決死の奇襲も、『ＯＯ』（刹那）にとっては何の障害にもならない。

刹那は自身の右横から放たれた魔導師の魔力弾を、身を屈む事でやり過ごすと、そのままの姿勢で両膝に装着されていた二つの短剣を抜き、そして一気に魔導師の懐へと転がり込んだ。それに魔導師がギョッ！？　となるよりも早く、『ＯＯ』は両手に持つ二振りの短剣――ＧＮカタールで、魔導師の心臓と鳩尾を瞬時に突き破る。

「がふっ！？」

『……ふん！』

魔導師の心臓と鳩尾を貫いたＧＮカタールは、膨大なＧＮ粒子を熱量へと変換させる事で生じる超高温で持って、魔導師の心臓と内蔵を一瞬の内に溶かし、そしていとも容易く絶命させた。それを何の感慨（かんがい）もなく見詰める刹那。彼の胸中には、そのような自分で作った凄惨（せいさん）な死体を見ても、何も去来するモノがなかった。

『……これで、最後か？』

『恐らくはそうでしょう。目標以外の生命反応は全て消失しています』

数秒、その魔導師の死を確認し、周囲を索敵した後、『ＯＯ』は再び前へと歩き出した。一歩一歩、ゆっくりと、血肉を踏み潰しながら歩くその姿は、まさに悪鬼以外の何物でもなかった。

彼のモノの歩みを妨げる者は、もう現れなかった。

「……一体、何が起こっているのかしら？」
「お前ですら分からない事を私に聞くな、ウーノ」
「まさか、ドクターが拘置所から脱獄して、私たちを助けに来てくれ……る可能性はないわね」
「その通りですわ、ウーノ姉様。軌道拘置所のあの厳重な警備を掻い潜れるほど、ドクターは魔導師として優秀ではありませんから、その可能性は０ですわね」
「でも、そうしたら何が……セッテ、貴方は何が起こったと思いますか？」
「……分からない」

エクソダスのかなり奥まった場所にある収監所の一室で、入院患者が着るような囚人服を着た四人……いや四機の戦闘機人達が、先程から船内を何度も揺るがす振動について、顔を寄せ合いながら話し合っていた。

「ウーノ、ドクターが助けにきていると思いたい気持ちは分かるが、時には現実的に物を考える事も必要だぞ？　特に、このような状況ではな」
「……分かっていますよ、トーレ」

中々に広い収監室で一塊となって話す彼女達は、「J・S事件」において、時空管理局を崩壊寸前にまで追い詰めた、あのジェイル・スカリエッティの誇る「ナンバーズ（十二の最高傑作機）」である。

ナンバーズが1、紫のロングヘアーを持つ「スカリエッティの秘書」ウーノ。

ナンバーズが3、紫のショートカットの「ナンバーズ実戦リーダー」トーレ。

ナンバーズが4、茶髪で眼鏡をかけた少女で、「幻惑の使い手」クワットロ。

ナンバーズが7、桃色のロングヘアーの上にヘッドギアをつける「空の殲滅者」セッテ。

彼女達四人……いや四機は、他の八機とは違い、頑なに管理局への協力を拒んでいた。故に彼女達はスカリエッティとは違う軌道拘置所――「キリーク」「ゲルダ」「ラブソウルム」にそれぞれ収監されていたのだが……

「……トーレ姉さん」

「あぁ、分かっているセッテ。誰か……いや、これは機械か？　いずれにしろ、何かが此方に近づいているな」

新暦75年10月10日の「D・O・P（天使の発表会）」に、スカリエッティが幽閉されていた「グリューエン」が「CB」の襲撃を受け、そして「CB」と何らかの関係があると思われていた人物、アレルヤ・ハプティズムとジェイル・スカリエッティの両名をむざむざと奪還さ

れてしまうという事態が起きてしまった。

故に、管理局はより戦力が整っている中央支局の一つ、「ルイェビト」へと彼女達を移送することに満場一致で決定した。スカリエッティが「ＣＢ」に渡った今、彼らは必ず「ナンバーズ」を取り返しに来ると、そう睨んだからだ。そして移送する時が最も危険だという事で、事は秘密裏に行われた。

「？　揺れが収まっていますわね？」
「あら、本当……」
「距離１０、あと数秒で接敵します」
「……何モノにしろ、扉が開いた瞬間に仕掛けるぞ、セッテ」
「了解」

実際、その推測は当たっていた。現に「ＣＢ」は「ナンバーズ」を奪還しに来、そしてその為に「ルイェビト」へと侵攻したのだから。しかし、ここで予想外な事が起こる。

秘密裏に進めていたはずの移送を何故か「ＣＢ」に嗅ぎ付かれていたのだ。それもその戦力、人員、囚人たちが移送されている戦艦などといった機密中の機密すら暴かれて、である。

「３……２……１……」
「ＧＯ！」

しかし、それこそ最高評議会と管理局でも一握りの上層部、そして数名ばかしの信頼できる提督たちしか知らないはずのその移送を、彼らはどうやって知ったのか？

それはまだ「ＣＢ」においてすら、イオリア・シュヘンベルグと

『法典』、そしてアップル達にしか知り得ない事だった。

トーレとセッテは収監室の頑丈な扉が破壊されたと同時に、扉を破壊した何モノかへと襲いかかった。戦闘機人の特殊能力であるＩ・Ｓ（先天固有技能）が使えないのは痛かったが、それでも、Ｂランク魔導師ぐらいならば瞬殺できるほどには彼女達は強く、また速かった。

しかし。

目の前の蒼を基調とする機体――『ＯＯ』ガンダムはその襲撃を、左手で盾のように持った巨剣で持って防ぎきった。それも、微動だにせずにである。

「なッ！？」

「なんだこの大剣は！？」

そしてトーレとセッテは、奇襲が失敗に終わった事よりも、『ＯＯ』の持つ巨剣の全貌（ぜんぼう）を見て、驚愕のあまり、一瞬身を硬直させてしまった。

それは剣というにはあまりにも大きすぎた。大きく、ぶ厚く、重く、そして凶悪すぎるそれは、まさに巨剣だった。

「クッ、そんなはったりなんかに……！」
「ま、待てセっ……」

セッテはその非常識すぎる巨剣をはったりだと見なした。当然だ。どこの世界にこれほどの質量を持つ大剣を――それこそ刀身が二メートルに達しようかという非常識極まる巨剣を振れるものがいようか？　それは例えオーバーSランク魔導師ですら、とても満足に振るう事はできないだろう。

だからこそのはったり。しかし、トーレはそのセッテがはったりと見做した巨剣を持つ機体に見覚えがあった。そうだ、確かに見覚えがある。だが、アレは四年前、愚かにも管理局に発見され、そして殲滅されたはずだ。……しかし、もし仮に、これをあの噂に名高い「ガンダム」とするならば……

このような巨剣を扱うことすら……可能なはずッ！！

だからこその制止の声、だっだが、セッテはその警告を聞き終える前に、次の攻撃へと移ってしまっていた。

セッテは巨剣で防がれている右拳を瞬時に腋（わき）の下まで引き戻すと、その直後に左拳を『ＯＯ』の顔面に叩きこんだ。しかし、その一撃は『ＯＯ』が何時の間にか右手で抜いていたＧＮソード?ショートの腹部分により払い除けられてしまう。

だが、セッテはそれだけに留まらずに、左拳を弾かれた勢いをも利用した右ハイキックを、『ＯＯ』の頭部へと続き様に繰り出した。その速さは残像を残すほどであり、その威力は簡単に人を殺せるほどだ。

『ちっ！』

『マイスター、ストッ！？』

勝った！　とセッテは思った。それほどまでにこの右ハイキックは美しく、早く、そして威力が乗っていたのだ。だからこそ彼女は理解できなかった。その右ハイキックが何も蹴る事なく空ぶったのを。

「なッ！？」

『刹那・Ｆ・セイエイ、目標を……』

そして技後硬直しているセッテに、右ハイキックを上半身のスウェーで見事に避けきった『ＯＯ』が一歩、力強く踏み込む。この時、『ＯＯ』はＧＮソード？ショートを腰に戻し、巨剣の刀身についていた取っ手から左手を離していた。

セッテはまだ固まっている。だが、『ＯＯ』はその硬直が解ける数コンマ前に、大きすぎる巨剣――ＧＮバスターソード？を両手で自身の頭上まで持ち上げ、そして肉厚な刀身で大気を叩き潰しながら、一気にそれを振り落とすッ！！

『駆逐す』

「待てぇえぇぇえええいッッ！！」

ゴォッッピタッ！

何者かの制止の声を聞き、セッテの前髪を数本斬りながらも、その寸前で止まるＧＮバスターソード?。

『Ｄｒ．ジェイル、何故止め』

「「何故」！？　それは此方の台詞ッだッッ！　どうして君は娘たちの安全を確保するのに、その愛らしい娘たちを殺そうとするのかね！？　納得のいく説明が欲しいのだが！？」

『何ッ！？　このいきなり襲いかかってきたのがか！？』

『だからストップだと言ったのです、マイスター』

「「「！？」」」

しかし、セッテは、いやその場にいる四機の戦闘機人たちは、そのような些事（さじ）には目を向けること無く、先程の制止の声に心を、思考を奪われていた。

その声は彼女たちにとっては創造主であり、同時に父親でもある人の声だった。有り得ない、信じられない。でも、この声は間違いなく……

『……すまなかった、Ｄｒ．ジェイル』

「いや、もう過ぎ去った事はどうでもいいさ。それに、今はそんな事よりも、彼女達の姿を見る方が大事だしね」

「「「Ｄｒ．！！」」」

「おぉ！　元気だったかい、皆？」

彼女達が敬愛して止まない、ジェイル・スカリエッティの物だった。

「では、Ｄｒ．は「ＣＢ」に協力すると？」
「まあ、そういう事だね。一応助けてもらった恩もあるし、彼らの持つオーバーテクノロジーにも興味があるし、それに何よりも、僕と同等の頭脳を持つ人間が三人もいるからね」
「Ｄｒ．と同等……ですか？　しかしそれは……」
「信じられないかもしれないけど、本当の事さ。イオリア・シュヘンベルグ、そしてコードネーム「アーカイブ」または「ラヴクラフト」という人物……まあ本当に人間なのかは置いといて。彼らは間違い無く僕と同等の頭脳を持っている。しかも、発明という点ではイオリアが、知識という点では「アーカイブ」が僕よりも優れているね、間違いなく」
「……正直に言いますと、信じられませんわ。Ｄｒ．と同じ程度の頭脳を持つ人間が、他に二人もいるなんて……」

エクソダスに接舷していたエウクレイデスに乗り移ったスカリエッティと四機のナンバーズ、そしてリヴァイヴとアニューたちは、その足でブリッジに向かいながら、幾つかの組で、それぞれ話し合っていた。

スカリエッティとトーレ、クワットロが賑（にぎ）やかに。

「それにしても、本当に体の半分が機械なんだな。データでは知っていたが、実際に君等を見てみると、正直、信じられなくなる」
「……それは、褒め言葉？」
「ええ、そう受け取ってもらっても構いません」

リヴァイヴとセッテは穏やかに。

「アニューさん、あの、しかしですね……」
「いいですか、ウーノさん？　やはり女性でも積極的に行かなければならない時はあります。まして、貴方が恋い慕う彼は、鈍感とか鈍いとか、そんな次元を超越した所にいる御人ですよ？」
「た、確かにそうですが……その……ですね？　私は別にこのままでも……Ｄｒ．にもう一度だけ会えただけで……」

アニューとウーノは何やら華やかに、話し合う。

そしてそのまま数分も歩くと、厳い、そして分厚いドアに突き当たった。それはこのエウクレイデスのブリッジに通じる扉だ。

「開けてくれ、アップル」
『了か、しまっ頼む待ってくれぇえええーーーッッ！？』
「……？」

その扉を開けてもらおうと、中で総勢二十機ものＧＮキャノン？を遠隔操作しているアップルに声をかけたが、何故か待ってくれという。それを不思議に思っていると、

『ノウゥウウーーーッ！？』
『アッッップゥウウウるッ！？』

何故かアップルの悲痛な叫びと、スメラギの憤怒の声が中から響いてきた。それに一度頷いてから、スカリエッティは、

「さて、どうやら彼は錯乱しているようだ。このような時、どうするべきだと思う、刹那・Ｆ・セイエイ？」
「「「！？」」」

何時の間にか後ろに立っていた刹那へと、この場合の対処を聞いた。それに刹那は一度目を伏せ、そして一言だけ喋った。

「知らん」
「分かった」
「「「えっ！？」」」
「いや、すまないＤｒ．。遅れてしまい」

そのやり取りの、余りの簡潔さと分からなさに、その場にいた二人以外の者達が思わず驚きの声を出していると、分厚い扉が横にスライドした。そしてその奥から白い長袖長ズボンと白コートを羽織り、顔に仮面を被った黒髪蒼眼のアップルが出てきた。

その時、アップルは間違いなくＫＹだった。

「「「……」」」
「……なんだ、この、言いようのない空気？」
「オレは知らないぞ」
「私も分からないな」
「……まあ、いい。それよりも、此方は終わったのだな？」
「ああ、そうだ。向こうはどうなっている？」
「向こうは心配いらん。勝ったも同然」
「では……」
「うむ、ミス・スメラギ……いや、あの魔謀（まむ）の言うとおり、我々はこれから残党狩りとなる。各自休憩をとり、その時まで備えよ……とのこと」

残党狩り。その言葉を聞いて首を傾げる戦闘機人達。しかし、アニュー、リヴァイヴ、スカリエッティはその顔を険しくする。その

単語の意味を知っているが故に。

「……オーバーSランク魔導師がどれだけ無傷、かつ減っているかが成否のカギ……ですね」

「それについては問題ないだろう」

刹那はリヴァイヴがぼやいた心配事に、そう断言する。リヴァイヴはそれに疑問を感じるも、次の一言で何故彼がそう言ったのかを理解した。

そうだ、心配は要らないんだ。何故なら向こうには……

「向こうにはガンダムマイスターが3人もいるんだからな」

「敵母艦との距離、３００を切りました！」

「了解しました、ゴホ。……さて、私も出撃します。後の指示は全て艦長に委託します、ゲホ」

「了解しました、スヴァ＝ローグ一等空尉」

灰色の目を酷く濁らせ、同色の髪をガリガリと掻きながら「トリグラフ」の仄明るいブリッジを出ていくスヴァ。そんな彼を待って

いたかのように、彼女は彼のデバイスを胸に抱えながら、ブリッジを出た通路の壁に身を寄りかからせていた。その目はスヴァの姿を捉えると一層輝き、その顔はスヴァが近づく程に、更なる喜びで埋め尽くされる。

「えへえへ～～！」

「……ありがとうございます、ゴホ」

彼女――翠色の髪と茶色い眼を持つダジ＝ボーグの、その緩み切った顔を見ながら（たぶん恋人同士がするような事ができたから嬉しいんでしょうね、ゴホ）、スヴァは彼の待機状態となっているカード状のデバイスを持ってきてくれた事に、若干の照れ臭さを感じながらも、かなり小声でお礼を言った。何時もなら絶対にしないお礼を、である。

「……ほえほえ？　スヴァっちゃが私にお礼を言った？　……ど、どうしたのスヴァっちゃ！？　ど、どこか調子でも……」

「いえ、この通り病弱そうですが元気ですよ、ダジ？　ゴホゴホ！」

「で、で、でもでも～～！」

何時も通りでは無い彼のその態度に、ダジは困惑しつつも、先を行く彼の背後に、懸命に足を動かしながら、必死に着いていこうとする。それを後ろから眺めながら、スヴァは「トリグラフ」の甲板に出るのと同時、蒼白に輝く魔法陣を足元に発現させた。二重の正四角形と円陣が、クルクルと規則正しく循環する、この世界で最も普及せし魔法術式、ミッドチルダ式の魔法陣を。

「……では、行きましょうか、ダジ？　ゲホ」

「うんうん。……ねぇ、スヴァっちゃ。これからもどこまでもいつまでも、ずっとずっと、私たちは一緒だよね？」

「……そうですね。私的にも貴方とずっと……」
「？？　スヴァっちゃ、今何て……」
「……いえ、何でもありませんよ、ゴホ。では改めまして……」

そしてダジの足元にも、スヴァと同じミッドチルダ式の、土色に輝く魔法陣が発現された。その輝きはスヴァの「命を無視された蒼白色」とは違い、「生命を感じさせる土色」だ。それだけで、彼女がスヴァよりかは心の優しい人間だという事が分かる。

そして魔法陣が何度か無音で循環した後、スヴァはカードを、ダジは土色に光る二つの宝玉を手に取り、管理局ですら４０もいないオーバーSランク魔導師としての力を、

「ネオペイガ、セットアップ！　ゴホ」
『オールライト、マスター。セットアップ・レディ』

「行くよ、皆！　パナケイア、セェエエット、アップ！」
『オーケー、シスター。セットアップ・レディ！』

灰色と茶色の瞳に力強い意志を宿しながら、解放させた。

『墜ちるがよい、「トリグラフ」よ！』
『『ＧＮロングキャノン、合体照射』』

アップル、いや五機のＧＮキャノン？は、トレミーの左舷方向から接近してくるＸＶ級次元航行艦・第３番艦「トリグラフ」へと、片肩に搭載されている二つの砲を上下に合わせたＧＮロングキャノンを計十本、大気を震わす轟音と共に一斉発射した。

そしてその十撃は、寸分の狂いなく、「トリグラフ」に突き刺さり……そのまま何事もなく突き抜けていった。

『……は？』
『こ、これはッ！？』

その有り得ない現象に、アップルは間抜けな声を、ガラッゾ（アニュー）は驚愕の声を洩らす。そう、有り得ないのだ。十本もの光条が「トリグラフ」をすり抜けるなど、物理的に有り得ない。

「今だ、ダジ！」
「……我が求めるは、戒める物、捕らえる物。言の葉に答えよ、鋼鉄の縛鎖。錬鉄召喚、アルケミックチェーン！」

その有り得ない現象を呆けたように見詰めていたガラッゾとＧＮキャノン？に、蜃気楼のように消えゆく「トリグラフ」から数十本もの鋼鉄の鎖が伸びていった。ガラッゾはそれを間一髪避けるも、二機のＧＮキャノン？はそれを回避できずに、頑強な鉄色の鎖に四

肢を捕われる。

『しまっ頼む待ってくれぇえええーーー!?』

「今だよ今だよ、スヴァっちゃ！」

「分かってます！　ゴホッ……我は保身なき砲撃を求める」

そして二機のＧＮキャノン?の動きが一瞬止まったのを見逃さずに、スヴァは青を基調とする、先端に蒼白色の宝玉が付いている自身の杖型ストレージデバイス「ネオペイガ」を虚空で二度ほど振り、それでこれから放つ砲撃魔法の術式を完成させ……同時に発動させた！

「輝ける鬼火（ドア・ノッカー）！」

もはや陽炎のような「トリグラフ」の後ろから、鎖に捕らわれた二機のＧＮキャノン?へと、大砲のような轟音と共に、蒼白の砲撃が放たれた。その一撃は二機のＧＮキャノン?に直撃し、そして一瞬でその姿を跡形もなく消し去った。

『あの砲撃って、もしかしなくても、やっぱりアレ……ですよねッ!?』

『チッ、遂に出てきやがったな、鬼火め！』

『そんな……ＡＡＡランクのＧＮキャノン?を、一撃で消し去るなんて……！』

その蒼白の砲撃を見たトレミーのブリッジに、更なる緊張が奔った。そのＧＮキャノン?を一撃で消滅させた威力もそうだが、その砲撃は管理世界の間では余りにも有名なのだ。

『……「輝ける鬼火を見たら、死を覚悟しろ。其は亡霊（ゲシュペンスト）、其は断末魔（マルマン・チェッダー）

魔、其は鬼火（ドア・ノッカー）。奴は輝ける鬼火と共にやってくる」』

かつて、たった一人で第二級反管理局組織「フロスト」を壊滅させた魔導師がいた。それもその魔導師が僅か２０歳の時にである。それはあまりにも信じられない事態であり、また受け入れ難い戦果でもあった。

それも当たり前の事だ。第二級反管理局組織は十五年前の当時ですら、たった１５の組織しか認定されていなかったのだから。百を優に超える世界の中で、たった１５しか認定されていない大組織。そんな大組織が、まだ２０になったばかりの魔導師一人に壊滅させられたのだから、とても信じられる話ではなかったのだ。

ちなみに、第二級反管理局組織とは、オーバーＳランク魔導師を１～３人ほど保有し、且（か）つその組織の規模が旅団、もしくは師団以上に相当する組織のことである。

『あの「フロスト」を壊滅させた暗部の伝説的な大魔導師にして、戦技教導隊第３班の副隊長、「輝ける鬼火」……』

しかし、現実に「フロスト」は壊滅していた。そして壊滅させた青年がＳ－ランクの魔導師でもあった。故に、この二つの要因から管理世界はこの事実を認めざるを得ず、そして彼の魔導師に「輝ける鬼火」という綽名（あだな）を嫌悪の意味と共に贈呈した。

『「ゲシュペンスト（命を無視する）・イエーガー（鬼火の猟兵）」！』

それには死神……いや、死沼へ誘う鬼火という意味合いが込められていた。

余談だが、スヴァ＝ローグは「フロスト」を壊滅させた時、誰かを拾ってきたと言われているが……その噂の真偽は定かではない。

「スヴァっちゃスヴァっちゃ、当たった、当たったよ！」
「分かってます、ゴホ。今はそんな事よりも……」
「分かってるよ分かってるよ、スヴァっちゃ！　……皆、行っっっくよーーー！」

スヴァの広域幻影魔法「ゲシュペンスト（亡霊顕現）」により作りだされた「トリグラフ」の幻、その距離３０ほど後方に、二名のオーバーSランク魔導師を乗せた本物の「トリグラフ」はいた。その船体には未だ傷一つなく、「トリグラフ」は三つに別れている赤黄黒の艦首で、「A・F」内の大気を切り裂きながら、全速で前に航行する。

そして、その先には「CB」の母艦がおり、その中途には牙持ち（ガッデス）と五機から三機になったアンノウン（GNキャノン？）が、驚愕と警戒を露わにしながらも、その進路を阻むかのように悠然と佇（たたず）んでいる。

水色と白で構成された、七基の牙（ファング）を持つS－ランクの牙持ち。そ

して長大な砲を四つも持つＡＡ－のアンノウンら三機。どちらも強大な力を持っており、これを突破するのは甚だ困難だろう。それこそ常識から見れば、諦めるのが最も良い回答に見えるほどだ。

「大地を走る金剛馬！　汝は我が脚となり、世界を駆けよ！　来よ、我が三馬（金剛三馬）トロイカ！　獣魂召喚ッ！！」

『召喚、「トロイカ」』

だが、それがどうしたというのだ？　強大な力？　甚だ困難？　そんな言葉遊びだけで私を……私達を、止められるワケが無いッッ！！

「一緒に一緒に駆け抜けよう、トロイカッ！」

「キィイイィイイン！」

ダジは三匹の透明な馬を足元から召喚すると、そのうちの一匹の背に乗り、そのまま「トリグラフ」の甲板を、最初はゆっくりゆっくり、次第に速く速く駆けていった。そして甲板の先端まで行くと、５０近く離れていたガッデスへ、凄まじい勢いで飛びかかっていった！

『そんな分かり切った攻撃なんか……嘘ッ！？』

しかし、ガッデスは凄まじい勢いにより霞むその姿を、完璧なまでに捉えていた。元々ガッデスは戦闘用ではなく、偵察・情報収集用に造られていたので、センサーやカメラ等の性能が他のＧＮＺシリーズよりも優れていたのだ（といっても、ケルディムよりはかなり感度や精度が低いが）。

だからガッデスは、高速で接近してくる三匹のトロイカと、その

背に乗る「獣王の巫女」ダジ＝ボーグをはっきりと視認でき、更には、ファングでロックオンする事すらできたのだが、それもダジが土色のグローブ型ブーストデバイス「パナケイア」を掲げるまでだった。

「ツインブースト！」
『ブーストアップ・アクセラレイション、ブーストアップ・バレットパワー』

ダジが土色の魔法陣を展開させ、速度と射撃威力を向上させる補助魔法を発動させる。それによりトロイカはガッデスへと更なるスピードで突っ込む事となった。それこそガッデスのファングのロックオンが追い付かない程の超スピードで。

『まだ！　って、うっそッ！？』

しかし、ガッデスはそれでも両肩と両腰、そして後腰に搭載されている七基のファングをダジ達へと飛ばし、これを見事に命中させる。そこはさすがだったが、まさかトロイカの金剛石でできたボディがファングを弾くなどという事態までは、想像できなかったらしい。

「トロイカ、フレイムボール！」
「キィイイィイイン！」
『うッ！？』

そしてダジ達はガッデスに手が届きそうな距離まで接近し、そこでトロイカの口にから一メートルを超えようかという大火球を、超至近距離からガッデスに吐きだし、これを見事に直撃させた。

『うぅッ！？』

ガッデスはその一撃を何とかＧＮヒートサーベルで受け止める事に成功したが、大火球の威力はＧＮヒートサーベルを焼失させるだけに留まらず、そのＧＮヒートサーベルを持っていた右手とその肘までをも融解させた。それにガッデスは一瞬怯み、そしてその一瞬でダジ達はガッデスらを遥か後ろに置き去りにした。

『アニュー・リタ、何ッ！？』

それを看過できないと、その宙域にいる三機となったＧＮキャノン？でダジ達の進攻を食い止めようとするアップルだったが、それをさせないとばかりに、「トリグラフ」から蒼白色の射撃魔法が三機のＧＮキャノン？へと、幾十幾百と降り注いだ。

「我は末魔を絶つ者にして語らせる者、マルマン（断末魔はかく語りき）・チェッダー！！」

『マルマン・チェッダー』

「ネオペイガ、ダジに当てないで下さいよ、ゴホ」

『オールライト、マスター。ターゲットをアンノウン三機と牙持ちに設定。マルマン・チェッダー、全弾照準完了。……オールファイア』

それはスヴァが数百メートルもの範囲攻撃をする際に使用する、広域射撃魔法「マルマン・チェッダー」だった。直射型射撃魔法「ウィル・オー・ウィスプ」を範囲内に数百もばら撒くというその射撃の断末魔は、ダジ達を追おうとして彼に背後を見せた一機のＧＮキャノン？を爆散させると共に、他の二機にも少なくないダメージを与えた。

『ノウゥウウーーー！？』

『アッップゥウウるッ！？』

その背後を見せてしまうという余りにも迂闊な行動に、思わず悲痛な叫びを上げてしまうアップル。そしてそのアップルに憤怒の声を上げるスメラギ。だが、事態はそれでも急を要し、止まる事を知らない。

「トリプル……ブーストッ！！」

『ブーストアップ・ストライクパワー、エンチャント・フィールドインベイド、エンチャント・ディフェンスゲイン』

「キィイイィイイン！」

『と……トリプルブースト！？　そんな魔法まで使えるなんて！？』

ダジはトロイカへと更なる三つの（三つ以上の補助魔法同時行使は魔法ランクＳ－）補助魔法――打撃力アップ、フィールド貫通、防御力アップをかけ、そのまま一直線にプトレマイオス？へと突進する。それを撃ち落とすべく、左舷の対空砲火を強めるプトレマイオス？だったが、それはトロイカを捉えることができず、次々に虚空へと消え去っていく。

『駄目だ、もう避けられねえッ！』

『で、でも、あんな一撃が直撃したら……いくらトレミーでも、耐えられませんよ～ッ！』

プトレマイオス？との距離を凄まじいスピードで縮めていくトロイカとダジ。その突進をラッセは避けれないとし、ミレイナはその威力にトレミーは耐え切れないと判断した。この時、ラッセはともかく、ミレイナには涙声が混じっていた。つまり、それだけのピンチ、危機的状況だったのだ。

しかし。

『大丈夫よ』

スメラギの声には、何の焦燥も、ましてや絶望も浮かんではいなかった。

『私達には、「ガンダム」がいるんだから』

まるでこれから起きることが確定され、あまりにも暇になってしまった戦(いくさ)の魔女の如く、彼女は欠伸すら混じりそうな調子で、「大丈夫」という。

「行っ……！？」

「キィイイン！？」

そしてその理由は、既にダジ達の前に、威風堂々な仁王立ちで、腕を組みながらそこに浮遊していた。

「やあ、初めましてだね？　Ｓ－ランクの「獣王の巫女」ダジ＝ボーグ。その美しい透明な馬達と共に、ガッデスとＧＮキャノン？たちを抜いてここまで辿り着いたのは、称賛に値するよ」

『しかし、それもここまで』

「悪いけど、ここで食い止めさせて貰う。そして僕の「ガンダム」の性能を……」

白と青紫色で染められた流麗なボディが、白い二本角と赤い頭部（デュ）カメラ（アル・アイ）を持つ凶悪なフェイスが、ダジ達へと向けられた。そしてたった、たったそれだけの動作で、ダジの心は恐怖で凍った。彼女は思い知らされたのだ、彼我の戦力差を。そして絶対に勝てない事も、戦場で鍛えられた直感で悟ってしまった。

「試させてもらうよッ！」

それほどまでに、目の前の存在――1ガンダム（リボンズ）は、さきほどまでの相手とは次元が違い、そして……圧倒的だった。

強者に絶対はないが、絶対の弱者は存在する。

――ＥＸＡＭ様より

第２８話　「ルイェビト」攻防戦　≪中篇≫（後書き）

設定

オーバーSランクの人数は、本作品では管理局で四十人足らずとしました。これが正しいのか正しくないのかは分かりませんが、もう少し増やす、または減らした方がよろしいという意見が多くありましたら、後日変更いたします。曖昧な設定で申し訳ございません。

スヴァ＝ローグの魔法やら綽名やらは、パンプキン・シザーズのランデル・オーランドを元（パク……？）にしています。このような時、原作名にパンプキン・シザーズを入れるべきかどうか、作者は馬鹿なので分かりません。なので、できれば皆様方に教えて欲しいです、原作名に入れるべきかどうかを。正直、ここまでやったら入れた方がいいような気もしないような……本当に馬鹿ですみません！

次の更新日は……恐らく来週になります。現在とても忙しく、なかなか作品を作れない状況が続いている為です。ご理解、お願い致します。ここまで読んで下さった皆様に感謝を。

最後に。

漸く最寄りのＴＵＴＡＹＡにＯＯのスペシャルエディションが入荷しました！　そしてすぐに借りて現在見ています、作品を放り投げながら！！　ここでこの人による一言。

借りたかった……借りたかったぞ、スペエディッッ！！

色々とすみませんでした。

第２９話　「ルイェビト」攻防戦　≪後篇≫（前書き）

君を想う、故に愛あり。

――ＥＸＡＭ様より

第２９話　「ルイェビト」攻防戦　≪後篇≫

――新暦７５年１０月３０日――

ダジ＝ボーグ。彼女は少数民族「ボーグ」の中で、史上最も優秀な召喚士であった。彼女は僅か十六歳にして、ボーグ族の守護獣でありながら、まだ誰にも召喚できなかった「スヴァロギッチ」を召喚し、さらには、二十三歳という驚くべき若さでＳ－ランクを取得した。その才はもう「天才」という枠組みでは表し切れず、周りからは「神童」「鬼才」などとも呼ばれていたほどだ。

だが彼女、ダジ＝ボーグは、周りからどう称賛され、どう尊敬されても、決まって

「だけどだけど、私には皆が言うほどの才能はないよ？　まだまだ、私は弱いままだよ？」

と言う。それに周囲は謙遜のしすぎだと、もっと誇りに思えと言うが、彼女は決してそれに頷かなかった。そして彼女はそう言われた次の日には、決まって死すら生温い訓練をする。そこにどんな感情が、想いがあるのかは分からない。だが、これだけは言える。

もし彼女――高町なのはというダジ以上の「鬼才」、いや「異才」さえ現れなかったら、「不屈のエースオブエース」の名は彼女の物になっていたと。

「あ……あ……ぁぁあァあぁあああああああッッ！？」

そのＳ－ランクにして「獣王の巫女」と畏怖されし彼女、ダジ＝ボーグが、今や恐怖から、畏れから、死の予感から、喉を潰すような大音量で、ただただ一途に叫んでいた。

「スヴァっちゃ、スヴァっちゃッ、スヴァっちゃあぁあああああ！！」

そして惨めにも、彼女の想い人へと縋（すが）る――いや助けを求めるダジ。そこにはもう「獣王の巫女」としての威厳ある姿はない。あるのは、ただただ死から逃れようとする、一人の愚女しかいなかった。

それに少々幻滅しつつも、１ガンダム（リボンズ）は胸の前で組んでいた腕を左右に大きく広げ、まるでダジを受け入れるかのような体勢を作る。

「全く……君にはがっかりだよ、ダジ＝ボーグ。僕の前でそんな醜態を晒すなんてね。それに、知ってるかい？」

その胸の中へと金剛石（ダイヤモンド）でできたボディを持つ三馬のトロイカが、減速をせずに突っ込んだ。その突進はトリプルブーストにより限界近くまで強化され、直撃を喰らえば重装甲であるＧＮ（ガン）キャノン？すら破壊できるだろう。

だが、その馬鹿みたいに威力がある突進を、１ガンダムは左右に

広げた腕の中、つまり、その白い胸部で真正面から受け止めたッ！

「戦場で想い人や愛しい人の名前を呼ぶのは、瀕死の人間が自分に甘ったれているという証拠なんだ……よッ！」

本来なら無謀としか言いようのないその行為は、しかし、１ガンダムにとっては簡単に実現できる程度の物であった。

トロイカの勢いが、次第に弱っていく。赤い粒子を背中から力強く噴出させる１ガンダムにより急激に減速させられ、突進の速度がどんどん落とされていく。

そして、遂にはその勢いを完全に殺され、その場に停止させられてしまった。１ガンダムの白い胸部には僅かな窪みがあるだけで、それがトロイカ最高の一撃の、唯一の戦果であった。

「やれやれ、君はもう少し、馬の扱いを心得た方がいいよ？　なんなら、僕が手本を見せてあげようか？」

それに愕然とするダジを尻目に、１ガンダムは横に三馬並んでいるトロイカの両側の二体へと両手を伸ばす。そしてその手がトロイカ達の首に触れると同時、ガッデスのファングですら傷付かなかったトロイカのボディが、甲高い悲鳴を上げながら砕けていった。

「キィイイイイン！？」

「馬はね……こうやって躾ける物なんだよ！！」

そして、悲鳴を上げたその直後に、無数の亀裂がトロイカのボディに広がり、その体をただの金剛石でできた破片と化す。それは最早トロイカ、ではなく、ただの金剛石でできた破片だ。

つまり、

「トロ……イカ？」

茶色い眼に涙を浮かばせるダジと、二十年近くも一緒に行動してきた三馬のトロイカの内、その二体はもうこの世にはいなくて……目の前の「ガンダム」により、殺されてしまったのだ。

「トロイ……！？」

「あぁ、ごめんね？　やりすぎちゃって。こんなに脆い物とは思わなかったんだ。まあ、どうせ君も同じ所に行くんだから、別に構わないか」

怒りが、憎しみが、ダジの心中で渦を巻き始める。そして自身の一部とすら言えた家族を、トロイカを殺された事でできた虚無が、その感情により隙間なく、いや溢れるほど埋められていく。

「ガ……ガン……ガンダ……！」

どす黒い、どこまでもどす黒い感情が、想いが、ダジの心を『黒』一色に染め上げていき、それは人間が出せないような咆哮という形で持って、1ガンダムへと叩きつけられた。それには普通の人間なら気を失いそうなほどの想いが込められていた。

だが、

「ムゥウッッ！？」

「さようなら、「獣王の巫女」ダジ＝ボーッ！？」

１ガンダム――リボンズは、そんな些細（ささい）な物にやられるほど、弱くはなかった。彼はその咆哮を直に聞きながらも、特に何も想う事無く、ダジへと黄泉の切手を手渡す。ＧＮビームライフルという、死への直行便を。

しかし、それをよしとしない者が、少なくともこの場には、一人だけいた。

「輝ける鬼火（ドア・ノッカーッッ！！」

「スヴァっちゃ！？」

「大丈夫ですか、ダジッ！？」

蒼白の砲撃が、大砲のような音を引き連れながら、ダジと１ガンダムの真ん中を通過した。それに少々驚きながらも、１ガンダムはダジから此方に向かってきている戦艦――「トリグラフ」、その甲板に立っている人物へと視線を移す。

ダジの赤い、民族的なローブが付いているＢ・Ｊ（バリア・ジャケット）とは似ても似つかない、肩と胸部に防御の重点を置く管理局の正式量産型Ｂ・Ｊ。

その銀色の甲冑と青色のコートを通常時より強固に構成しながら、青を基調とする杖型ストレージデバイス「ネオペイガ」、その先端の蒼白色に輝く宝玉を１ガンダムへと油断なく向ける。

魔法の余韻に灰色の短髪を靡かせ、灰色に濁った目で１ガンダムを鋭く睨みながら、彼――Ｓ－ランクの「輝ける鬼火」スヴァ＝ローグは、どこか憤怒の気配を漂わせながらも、颯爽とダジの危機に駆け付けてきた。

それはまるで彼女の王子のようで、そして騎士のようでもあっ……

「スメラギさん、目標ポイントに到着しました！」
「「ルイェビト」までの距離が、ちょうど１０００になりましたです～！」
「ラッセ、準備はいい？」
「何時でもＯＫだぜ、スメラギさん！」
「では、これより「ルイェビト」攻防戦の最終段階に入ります！皆、加速のＧに気をつけなさい！」
「「「了解（です～）！！」」」

「それじゃ……行くわよ、アレルヤッ！！」
『了解！　アリオス「ガンダム」アスカロン、アレルヤ・ハプティズム、作戦を開始する！　トランザムッッ！！』
『ＴＲＡＮＳ－ＡＭ』

「ＣＢ」の母艦――プトレマイオス？が、赤く赫く、深紅よりもなお紅く輝き始める。それは彼の船が内包する天使の権能を解放した証であった。

天使の権能――即ち、天使が振るう圧倒的な暴力、血塗れの兇刃（きょうじん）、四年前の悪夢の象徴を、彼らは発動させたのだ。「ＴＲＡＮＳ－ＡＭ」という名の権能を。

だが、それは本来なら「ガンダム」にのみ許されし機能の筈だ。あまりにも強大過ぎる力が故に、ドライヴ本体への負荷も凄まじく、それは疑似ＧＮドライヴでは数コンマすら耐え切れない程なのだ。なのに、何故彼の船が使えるのか？

四年前、イオリアは「ＣＢ」の窮地を打開する為に、オリジナルＧＮドライヴに封印されていた能力、ＴＲＡＮＳ－ＡＭシステムを断腸の想いで解放させた。その時から、イアンはトレミーのＴＲＡＮＳ－ＡＭについて思索していた。トレミーはオリジナルＧＮドライヴからのＧＮ粒子を供給されて稼働しているのだから、ＧＮ粒子を供給している機体がＴＲＡＮＳ－ＡＭを発動させれば、トレミーもまたＴＲＡＮＳ－ＡＭ状態になれるのではないか、と。

それは四年前の段階では推測、憶測の域で留まっていた。当時の彼には、それについて考える時間が全く無かったのだ。次々と戦場に投入される時空管理局と世界清浄のオーバーＳランク魔導師達。そして次第に追い詰められていく「ＣＢ」。その戦いの熾烈さが増すのと比例して、受ける損傷が大きくなっていく「ガンダム」達。

彼はその整備と修理だけで、当時は手一杯だったのだ。

しかし、その思索も、「悪夢」から現在までの四年間で完成されていた。

「なッ、まさかこれは！」

「もしかしてもしかして……！」

「いけない、艦長ッ！」

『第四次元航行艦隊に告ぐ！　直ちに奴の進路をはば』

そして余りある時間――四年間という時間で設計された汎用次元航行戦艦「プトレマイオス？」は、ＴＲＡＮＳ－ＡＭの使用をも考慮されて造船された。故に、この現象が起きるは自明の理であったのだ。

そして、血のように紅くなったトレミーが、今までの比では無い爆発的な速度で、「ルイェビト」へと爆走し始めるッッ！！

『……め？』

その速さは隕石かと見紛うほど速く、またトレミーが進んだ後の大気は、その摩擦熱により熱風となった。スヴァはその熱風を全身で受け止めながら、此処に至って漸く自身の失策を認めた。認めざるを得なかった。

つまるところ、彼は遅かったのだ。その戦術の、何もかもが。

「これがトレミーのＴＲＡＮＳ－ＡＭ……」

『素晴らしい航行速度、及び防御性能です』

それは一瞬だった。そしてその本当に刹那的な時間だけで、トレミーは第四次元航行艦隊の防衛陣形を、軽々と突破せしめた。それに唖然とする第四次元航行艦隊に所属する局員たちだったが、彼らはその速度以外にも、ＸＶ級の主砲をまともに喰らい、尚傷一つ付かなかったその防御性能にも愕然としていた。

そんな彼らを尻目に、プトレマイオス？は時空管理局第三中央支局「ルイェビト」へと、紅き隕石のごとき姿で近づいていった。

悠々と、紅くなった粒子で空域に線を引きながら「ルイェビト」へと爆走するプトレマイオス？。その前方には最低限の防衛力しかない艦隊、または施設しかなかった。そして、それだけの防衛力では、トレミーを止めることなどできず、その進路を阻むことすら敵わない。

戦争が、終わりへと近づいてきた。

『アリオスＧ（ガンダム）アスカロン、ケルディムＧ（ガンダム）サーガ、レグナント、ガラッゾ、発進用意』

『アリオス、右舷第二滑走路にて発進準備完了』
『ケルディム、右舷第一滑走路で発進準備、完了したぜ！』
『……レグナント、左舷第三滑走路にて完了』
『……ガラッゾ、左舷第四滑走路にて完了』

プトレマイオス？の左右に四つずつ、計八つ設置してある滑走路が、「ルイェビト」へとその先端を開いていく。中には緑と橙の「ガンダム」二機と紫色の角持ち（ガラッゾ）一機、そして濃紺色で彩られた腕持ち――レグナントが、足や体をリニアカタパルトに固定させながら、発進の時を今か今かと待っていた。

『「ガンダム」発進後、トレミーはＴＲＡＮＳ－ＡＭを維持したまま現空域を離脱、そして合流ポイントであるＤ－７８にて待機します。なので、「ガンダム」は任務を遂行後、直ちにポイントＤ－７８まで来て下さい』
『『了解』』
『では、ご武運を。……全機、発進ッ！』

フェルトの掛け声で、トレミーの左右八つのリニアカタパルトから、四機もの「ガンダム」達が勢いよく射出された。そしてケルディムＧＳ（サーガ）は飛行形態のアリオスＧＡ（アスカロン）の背に、ガラッゾはレグナントの背に乗りながら、「ルイェビト」へと進軍を開始する。

「が、「ガンダム」！？」「まだこれだけの戦力をッ！？」「ハハ……冗談だろ？　冗談なんだろ？　なあおいッ！？」「嘘……でしょ？　ねえ、誰か……誰か嘘だって言ってよッ！？」「た……助け、助けて、クラウン……！」「認めねえ……認めねえぞ、こんなクソみたいな現じ……！？」

アリオスＧＡ。それは攻撃力が他のオリジナルＧＮドライヴ搭載

型「ガンダム」より劣るアリオスに、同等以上の攻撃力を与えるべく開発された、アリオスの攻撃力特化型形態だ。

『アリオス、正面にＧＮミサイル！』

『イエス、マイスター。ＧＮミサイルコンテナ解放、目標、前方のＬ級艦船、及び魔導師１０５。ＧＮミサイル、発射！』

『行っけぇえええ！』

そのアリオスＧＡの両端に搭載されているＧＮミサイルコンテナから、数十ものＧＮマイクロミサイルが弾幕の様相で発射された。それを撃ち落とすべく、数隻のＬ級艦船から幾十、幾百の射撃魔法、及び砲撃が放たれるが、数が数なだけに、その全てを落とすことはできず、一隻のＬ級艦船、そして数十名もの魔導師がその餌食となり、ミサイルの爆発と共に次元の藻屑（もくず）となった。

『まだまだーーー！　ケルディム、ＧＮアサルトカービン！』

『イエス、マイスター。右肩から右手にＧＮアサルトカービンをセット、照準補正完了、いつでも撃てるぞ』

ケルディムＧＳ。それはケルディムの武装を敵基地内部への突入用に換装したもので、ケルディムの局地的特化型形態である。

『ようし！　ロックオン・ストラトス、ケルディム、目標を狙い撃つ！！』

『ネライウツ、ネライウツ！』

そのケルディムＧＳの主力銃、ＧＮアサルトカービンだが、それは従来の物よりも射程が短く、また三連バルカン機能もオミットされた為、狙撃能力や汎用性といった面を幾分低下させていた。だが、その取り回しの良さ、及びミドル－クロスレンジに特化したカメラ

アイがその不足分を十分以上に補っていた。現に、ケルディムＧＳの間合いであるミドル－クロスレンジに入った魔導師は、一人残らずシールドごと撃ち抜かれている。

『……さすがはオリジナルＧＮドライヴ搭載型「ガンダム」。Ａランク魔導師すら歯牙にもかけないとは……』

『……うむ、開いた口が塞がらないとはこの事なのだな、ブリングよ。最も、このレグナントも、出力こそ「ガンダム」にだいぶ遅れを取ってはいるが、それでもランク的には互角なはず……だ』

そのたった二機だけの強行軍の後ろを、レグナントとガラッゾはピッタリと着いていく。そして時折強行軍の激襲を耐え抜いた魔導師たちを発見しては、レグナントはＧＮファングで、ガラッゾがＧＮバルカンで淡々とその全てに止めを刺していく。

そうして、彼らは発進から僅か一分という短時間で、「ルイェビト」内部への侵入を果たした。そしてケルディムＧＳとガラッゾがアリオスＧＡとレグナントの背から降り、鋼鉄で囲まれた通路へと足を付ける。

ゴウン、と重苦しい音が、通路内にやけに響いた。

『それじゃあ、僕達とはここでお別れだ。幸運を祈ってるよ、ロックオン、ブリング』

『……お前たちなら、例えこの先にオーバーＳランク魔導師が現れても、無事に乗り越えられるだろう。……成功を願う』

『おう、期待して待ってろよ～』

『……安心しても問題は無いぞ、二人とも』

数え切れない閃光が命共々、瞬きの内に明滅する戦場へと戻る二

機。それを最後まで見送ること無く、ケルディムGSとガラッゾは、事前に知らされていた「ルイェビト」総司令部への最短コースを進み始めた。一歩一歩進むたびに、重苦しい足音が、誰もいない通路に木霊する。

『チッ、本当なら飛んでいきたいところだが……』
『……どこにトラップがあるか分からぬ以上、一歩一歩、確実に進むしかない、か』

少しずつしか進めない事に苛立ちを覚えながら、それでも足を止めずに進む二機。そして行程の半分を過ぎた時、彼らはふと、ある事に気付いた。

『……ケルディム？』
『……妙なぐらい、周囲には生命反応も熱反応も確認できないな』
『……ガラッゾ？』
『恐らく、ライセンサーの推測通りかと』

自分達のデバイスの報告を聞き、彼らは先程よりも警戒を強くした。彼らはここに至るまでに、局員の誰一人とも会っていないからだ。

そして、そこから考えられる事態は……

『カートリッジロード、「バチカン（神罰執行の聖域）・バチカン」』
「おんどオォオオれぇえェエエエいッッ！！」
『なッ……！？』
『ブリング！？』

待ち伏せ、しかなかった。

ついさっきまでプトレマイオス？が滞空していた空域。そこではトレミーから取り残された第四次元航行隊と砲持ち（リジェネ）、角持ち（ヒリング）、牙持ち（アニ）、十五機のＧＮキャノン（ユー）、そして１ガンダム（リボンズ）が対立していた。

『ダジ、貴方は「箱付き」を追って下さい！　貴方のトロイカならば、まだ追いつける望みがあります、ゴホ！』

『で、で、でもでも！　そしたらスヴァが……！』

砲持ち――黒銀のガデッサと角持ち――灰色のガラッゾが数十もの武装隊と衝突し、魔導師達の命をゴミのように蹴散らしていく。

『私的の事は心配しなくても大丈夫です、ゲホ。それより、速く隊長の援護に行って下さい、ゴホッゴホ。遠目であまり分かりませんでしたが、少なくとも四機が「箱付き」から出撃していました、ゴホ。そして、その全てを隊長一人で相手するのは、現実的に不可能です、ゲッホ』

『う、う、うぅ～～！！』

牙持ち――水色のガッデスは十五機のＧＮキャノンに守られながら、その戦場を後にする。ダジとトロイカにより、右手とＧＮヒー

トサーベルを失ったガッデスには、もう戦力と呼べるほどの力がなかったからだ。特に、ＧＮビームサーベルファングの誘導アンテナでもあるＧＮヒートサーベルを破壊されたのが大きかった。

『唸っても、駄目な物は駄目です……私的も後で必ず追い付きます、なので、今は目の前の事態を解決する為に動いて下さい、ダジ、グフッ』

『……スヴァっちゃがキス、キスしてくれたら……』

『それはこの戦場から生き延びた後、必ず貴方の唇にします。ですから、速く「ルイェビト」に向かって下さい、ゴホ』

『……へ？　す、す、スヴァっちゃ、今何て……！』

そして、その空域で最強と思われる存在、１ガンダムは、二人のオーバーＳランク魔導師を前にしながら、ただ傲然と構えている。その在り方は自分の勝利は揺るがないと、絶対に負けるはずが無いとでも思っているようだった。

『……だから、私的に愛する貴方の麗しい唇に、愛の証たる接吻をすると言ったのです、ゴホ！　二度も言わせないでください、恥ずかしいのでッゲホ！』

『そ、そ、それって、もしかしてプロ……！』

『……ええ、そうです。私的は貴方の事が私的に……』

そんな１ガンダムを睨みながら、スヴァは念話で愛の告白を終えた。もう十年ほども自分の中で醸成されていたその想い。それを表に出した事で、スヴァは自身の胸の内が、どこか軽くなったように思えた。その心は明鏡止水の心境のように静かで穏やかだ。逆に、その想いを受け取ったダジは、顔を真っ赤にして、あたふたと、落ち着きが無くなっていたが。

『ともかく、早く行って下さい、ダジ、ゴホ！　そして、私達の未来を……掴み取るのです！！　ゴホ！』
「……パナケイア、ブーストアップ・アクセラレイション！」
『ブーストアップ・アクセラレイション、トロイカ』
「キィイイィイイン！」

顔を林檎よりも真っ赤にし、心を感情の荒波で激動させながら、ダジはスヴァの言うとおり、「ルイェビト」へとトロイカと自身を向かわせた。それを穏やかな顔で、憑き物が落ちたような顔で見送るスヴァ。そんなスヴァを怪訝に見詰める1ガンダム。

「……いいのかい、貴重な戦力を分断させてしまって？」
「ええ、大丈夫ですよ、貴方は私がきっちりと……」

その懸念を知ってか知らずか、スヴァはらしくもなく獰猛に笑った。否、嗤ったのだ、目の前の存在を。この場においては「最強」であろう1ガンダムを、リボンズをその瞳に映しながら、彼は獲物を狩る獣のごとき笑みを浮かべる。

「抑えますからね、ゴホ」

そして、体中に自信を漲らせながら、そう言い切った。最強のロストロギアと噂される「ガンダム」を前にして、彼はそう言い切ったのだッ！

「……く、くク久々……アーーッハハハハハッ！」

それを聞き、嗤いが止まらないとでも言うように笑い始める1ガンダム。だが、その心中は言うまでもなく怒りで煮え滾っていた。

「はは、ハハハァ……」

嗤いが収まっていくごとに、１ガンダムからの威圧感が増す。それに冷や汗を流しつつ、スヴァは自身の専用ストレージデバイス「パナケイア」に魔力を込め始めた。もう何時戦闘に入ってもおかしくないからだ。

「舐めるなよ、この人間風情がッ！！」

そして、１ガンダムの耳を塞ぎたくなるような怒声が、オーバーＳランク同士の戦闘を始めさせた。

「仕留めたかッ！？」

『ナイン（いいえ）』

「何ッ！？」

『剛雷』ペルーン・イリアが誇る儀式魔法「バチカン（神罰執行の聖域）・バチカン」。それは強大な効力を持っている替わりに、その殆どが対多・広域魔法となっている儀式魔法では珍しい対人・狭域魔法だった。その威力は対人でありながらも、儀式魔法というのに相応しい物で、四年前に発動された時には、あの防御力では管理局屈指とも言われる「

鉄壁不屈の砲撃要塞」高町なのはを、一撃でブラックアウト寸前にまで追い込んだほどだ。

しかし、これを発動するには、儀式魔法の特徴である長々とした詠唱を唱えなければならず、通常の戦闘ではまず使用できない魔法でもある。それをペルーンは、待ち伏せという形で詠唱時間を稼ぎ、半ば強引にこれを発動させた。それも、不意打ちという限りなく上等なシチュエーションで。

だが、

『……グ……グゥッ……！　ガラッゾ、損害報告！』

『GNフィールドの展開には成功しましたが、GNフィールド発生装置を含む左肩、及び左腕と左足半分、頭部左半分を消失。そして機体各部にも損傷があり、その中で特にひどいのが胴体部左側です。これらの損傷により、機体性能が通常時の３８％まで低下しています』

『……3、３８％、だと？　それは本当に正しいデータなのか！？』

『イエス、ライセンサー。しかし心配はいらないかと。このSランクの「剛雷」ペルーン・イリアさえ倒せば、性能がAAランク相当となってしまったライセンサーでも、「ルイェビト」占領は可能です』

それでも……それだけの魔法をぶつけても、敵は、「ガンダム」は、倒れてすらいなかった！

神罰執行の聖域

「バチカン・バチカン」によって周囲と隔離された、Aランク魔導師でも無事には済まない雷電が幾千、幾万と迸る（ほとばし）空間。そこにガラッゾは、左半身を黒焦げにし、半ば以上に焼失させながらも、床に膝を付けること無く、堂々と二本（どちらかと言えば１．５本）の

足で立っていたのだッ！！

それに目を奪われる事、ほんの数瞬。だがその数瞬が、彼の命運を運命付けた。

『オレ達を前にして余所見をするなんて、狙い撃って下さいとでも言うのかよ！』

『イエス、マイスター。ＧＮサブマシンガンにＧＮ粒子充填、完了。何時でも掃射可能だ、マイスター』

『なら、一気に狙い撃つぜ！』

「……ッ！　パンツァーシルトォオオオオッ！」

ペルーンが半壊したガラッゾに魅入った時には、既にケルディムＧＳは両膝からＧＮサブマシンガンを引き抜いていた。そしてその照準を合わせること、僅かコンマ一秒。さらには、その引き金を引くのにかかった時間は、人間の反射神経の限界である０．２秒！それは無駄という無駄を全て削り落とし、射撃にその身を投げ打った人間だけが、漸く到達し得るか否か、という神業的な速さだ。むしろ、これに反応したペルーンにこそ驚きだろう。

最も、

「がぁあああああぁあああああッ！？」

それでもペルーンの反応は遅すぎたのだが。

ケルディムＧＳに搭載されている七つの銃の内の二挺（ちょう）、威力よりも連射性能を重視したＧＮサブマシンガンによる桃色の弾幕。その無数の弾丸（ビーム）全てが、ブレる事、外れること無く、ペルーンの莫大な魔力を注ぎこんで展開させた近代ベルカ式のシールドに着弾する。

ドッドッドッドッドッドッドッドッドッドッドッドッドッ……！！

雪崩のような音が、激しい雨音のような音が、その場に途切れることなく響き渡る。弾丸は時折電光が奔る雷色のシールドを食い破るべく、その濃密さ・弾数をさらに増やして、ペルーンへと殺到した。それに対抗するため、更なる魔力を魔法陣の形で展開されているシールドに込めるペルーン。

ピシッ。

だが、それは悪あがき以外の、何物にもならなかった。ピシッ、という破滅への音は、ペルーンの耳にも届いていた。それは「シールド」という己の命を護る最終防衛線が、次第に軋みをあげ……壊れていく音だった。

ピシピシピシピシ……！

破滅への音が次第に大きく、連続して聞こえてくるようになった。見れば、ペルーンが展開しているシールドは、最早いつ壊れてもおかしくないほど亀裂が入っている。それに目を見張った次の瞬間、

『これで終わりだ、「剛雷」さんよ！』

ガラスが砕けるような音と共に、シールドが桃色の弾幕に食い破られた。そしてペルーンの体に雨霰（あめあられ）と桃色の弾丸が着弾し、その二メートルを超える体躯（たいく）を、血が噴き出す穴だらけにする。高出力であったはずのペルーンのＢ・Ｊは、少なくてもその時、その弾幕の前では、何の役にも立たなかった。

（逃げろ！　スヴァ、ダジ……！）

そして、自分の死が確定したその瞬間。戦技教導隊第3班の班長であるペルーン・イリアの深層に、未だ戦場で闘っているであろう二人の部下達――彼から見てとても焦れったい両想い達の事を案ずる想いが過ぎる。だが、それも静かに――本当に静かに、深層の深層である深淵存在（マテリアルズ）になっていき、もう二度と闇の深淵から浮かび上がってはこなかった。

「クゥウウッ！？　トロイカ、もっともっと速度は出ないの！？」

「キィイイイィィイン！」

「……そうだよね、そうだよね。トロイカだって限界まで頑張ってるんだものね」

「箱付き」の驀進（ばくしん）により発生した摩擦熱で、いくらか生温くなった空域を、三匹から一匹となったトロイカ、そしてその背に乗るダジ＝ボーグが猛然と駆け抜けていく。その目指す先は彼女達の拠点であり、そして隊長が複数の「ガンダム」達と闘っているであろう「ルイェビト」だ。

「キィイイィイイィン！？」
「あれは……！」

しかし、そんな彼女たちの前方に、橙色の「羽付き」と濃紺色の「腕付き」が「ルイェビト」がある方角から現れた。

『アレは……「獣王の巫女」！？』
『……何故、奴がここにいる？　奴と「輝ける鬼火」は、リボンズ達で足止め、もしくは抹殺するはずでは……？』

その場を支配できそうな、圧倒的な存在感を辺りに撒き散らす「腕付き」。そしてその遥か上をいく存在感をダジに叩きつける「羽付き」を見て、ダジの心は折れそうになった。

が、それでも彼女は、ここにいるE～Aランク魔導師達の「オーバーSランク魔導師なら、きっと私達を救ってくれるはず」という眼差しを感じ、その心を何とか奮い立たせた。

ここで無様を、醜態をさらすわけにはいかない。そんな想いが彼女の心を支えていたのだ。そして気丈にも、二機の「ガンダム」へとトロイカを最高速度で突っ込ませた。

「トロイカァアアア！」
「キィイイィイイン！」
『……アレルヤ・ハプティズム、ここはオレが……』
『いや、大丈夫だよデヴァイン。トランザム終了後で機体性能が低下していても、このぐらいの敵だったら、』

それに対し、アリオスGAは飛行形態のまま、背中に折り畳まれているGNソード――別名「竜殺し（アスカロン）の剣」を機首の前方に展開させ、

その長大な剣でトロイカを正面から迎え撃つ。

「あああああぁああああぁアアアア！」

『アリオスの……敵じゃない！』

轟音。次いで、大気が大きく震えた。まるで爆心地にでもいるような音と衝撃波が、その空域に吹き荒れる。それを冷静に、動じずに眺める事が出来たのは、レグナントただ一機だけであった。

『……性能が落ちてこれか……！』

『何て出鱈目な性能なんでしょうか。正直、彼らオリジナルの「ガンダム」達とこの私が同ランクに居るというのは、質の悪い冗談なのではないかと思ってしまいます』

『……それには同意しかねるな、レグナント。お前はＳ＋に相応しい実力を持っている。それはオレだけでなく、皆が認めていることだろう？』

『……センキュー、ライセンサー。どうやら弱気になっていたようです。申し訳ございません』

『……気にするな、レグナント』

そして正面からぶつかり合った事で生じた粉塵の中から、アリオスが刃毀(はこぼ)れ一つないＧＮソードを背負いながら飛び出した。その姿には傷らしい傷が見当たらず、それは人型形態になっても変わりは無い。

そんなアリオスとは真逆に、トロイカの方は、その体のド真ん中をＧＮソードでぶち抜かれていた。美しい透明な輝きを持っていた金剛石のボディは、今や見るも無残なただのガラクタに成り下がり、その背に乗っていたダジも、衝突による余波で全身傷だらけになっている。

「あ……あうぅ……トロ、イカ……」
『フィジカルヒール』
「キ……ィイイン……」

傷だらけの体を、枯渇しかけた魔力を無理に酷使しながら、ダジはトロイカへと回復魔法をかけた。だが、その努力の甲斐無く、トロイカは弱々しく嘶(いなな)いて……死んでしまった。

「……あ……ああ……あああああああああッ！？」
『フィジカルヒール、フィジカルヒール、フィジカルヒール、フィジカルヒール、フィジ……』

それを認めたくなくて、否定したいが為に、ダジはパナケイアを頭上に掲げながら何度も何度も、無駄にしかならない回復魔法を発動させ続ける。

だが。それでもトロイカの瞳に生気の光が戻る事は無かった。それに絶望しかけたダジの目の前で、

時空管理局第三中央支局「ルイェビト」が、内側から爆散した。

「ウィル・オー・ウィスプ！」
『ＧＮビームライフル！』

その二人の戦いは、何人たりとも寄せ付けないほど、熾烈（しれつ）で苛烈（かれつ）だった。蒼白の魔力弾が、その弾幕が、砲撃が空を奔り、敵を消滅させようとする。そして明るい赤橙の粒子ビーム、またはビームサーベルがその全てを切り裂き、対消滅させていく。

それは赤橙と蒼白が瞬きの内に数十ぶつかり合っては消え、生じ、また消える戦いだ。そしてたった一秒で勝負が決まる、そんな死闘でもある。

そんな戦いの中、スヴァの持つストレージデバイス「ネオペイガ」の先端から、もう何個目か分からない蒼白の魔力弾が生み出され、１ガンダムへと放たれた。それを１ガンダムは煩わしそうにＧＮビームライフルで撃ち落とす、と同時にスヴァへと急接近する。

それをさせてたまるか！　とでも言うように、スヴァの周りに展開されている二機の「アシストビット」が１ガンダムの進む先に極小範囲の結界を作り、その進攻を食い止める。それに何度目か分からない舌打ちをするリボンズ。

「またこの手か！」
「ドア・ノッカー（輝ける鬼火）！」
「！　チィイイッ！」

１ガンダムが先程まで足止めされていた場所に、蒼白の砲撃が撃

ち込まれた。それを紙一重――わざとギリギリで避けている――で躱わしつつ、ＧＮビームライフルの照準をスヴァに合わせ、一射。

「ネオペイガ！」

『アシストビット、モード「Ｄ（ディフェンス）」。ラウンドシールド』

その一射を、中央に蒼白の宝玉を誂（あつら）えている正四角形のビットが防ぐ。二機のアシストビットにより作りだされた蒼白の障壁は、Ａランクに相当するはずのＧＮビームライフルの一射ですら小揺るぎもしないほど強固な物だった。

「我は末魔を絶つ者にして語らせる者、マルマン・チェッダー（断末魔はかく語りき）！！」

『マルマン・チェッダー』

「１（アイ）！」

『ＧＮシールドに供給するＧＮ粒子を増加させます。機動性が若干低下するので、お気を付け下さい、マイスター』

そして１ガンダムの一撃を凌いだスヴァは、自身の周囲に数十、いや数百もの魔力弾――ウィル・オー・ウィスプを生成する。それは蒼白の弾幕にして射撃の断末魔であり、殲滅・制圧を目的として構成された魔法だ。その広範囲魔法が、１ガンダムへと避ける隙間・時間を与えずに、壁の如く迫りゆく。

それを尖鋭的な白と青紫の盾で防ぎながら耐え切ろうとする１ガンダムだったが、三十五発目の魔力弾を防いだ時、左手に持っていたＧＮシールドが白い爆発と共に砕け散った。それにまた舌打ちをしつつ、盾に回していたＧＮ粒子をドライヴの推進力に回し、先程よりも機動性を高め、マルマン・チェッダー（断末魔はかく語りき）を避け切ろうとする１ガンダム（リボンズ）。

だが、その進行上に撃ちこまれる、

「ドア・ノッカー！」
『ドア・ノッカー』

蒼白の砲撃。それは事前に気付いていた1ガンダムには掠りもしなかったが、彼らを苛立たせることには成功した。

「忌々しい弾幕、それに砲撃だね、1？」
『イエス、マイスター。完璧であるはずの私達がここまで虚仮にされるなんて……腸が煮えくり返りそうです』
「それは僕も同じさ。ところで、GN粒子のチャージ状況は？」
『現在92%です。あと20秒は待って下さらないと……マイスターッ！』

そしてその一瞬の隙を突き、再び1ガンダムへ撃ち込まれるドア・ノッカー。それは既に回避のしようが無い所まで1ガンダムに迫っていた。

「本当に……苛立たしいね、君はッ！」

目前に迫る蒼白の砲撃。それを憎らしげに見ながら、1ガンダムは回避が間に合わないと悟り、次いで両肘から二本のGNビームサーベルを手に取った。

「1、限界までサーベルの出力を高めてくれ！」
『イエス、ライセンサー！』

そして手に持った二本のGNビームサーベルを交差させ、砲撃の正面でどっしりと構える1ガンダム。彼らは回避を捨て、受け止め

る事にしたのだ。「管理局の白い悪魔」高町なのはのディバイン・バスター（神罰の砲撃を彼の者に）と同等と噂されるその砲撃を。

それが本来どれだけ無謀な行為なのか、考えもせずに。

そしてＧＮビームサーベルと砲撃が衝突した瞬間、１ガンダムの視界を赤に近い橙と蒼白の光が埋め尽くした。

「……クゥッ！？」

トロイカの金剛石でできた体すら握り潰す握力を持つ指が、その衝突の衝撃でＧＮビームサーベルを取り落としそうになる。それに苦悶の声を洩らしながら、１ガンダムは疑似ＧＮドライヴの出力を焼け切る寸前まで上昇させる。だが、それだけの力を振り絞っても、蒼白の砲撃をその場に留まらせることすらできなかった。

『耐えて下さい、マイスター！　残りあと１０秒です！』

体が、意識が、猛烈な勢いで後ろへ、暗闇へと下がり、落ちていく。蒼白の砲撃に押し負け、赤橙の粒子の残照（ざんしょう）を蒼白色に塗り潰されながら、リボンズの意識も黒一色――または白一色――に上塗りされていく。それに危機感を覚えながら、１ガンダムは自身のマイスターへと、絶対の切り札が発動するまでの残り時間を告げる。

「ふッ……了解だよ、１ッ！」

その声を聞き、暗闇へと落ちそうになっていた意識を何とか浮上させるリボンズだったが、そんな彼を嘲笑うかのように、

「ネオペイガ、「トリプル・ノッカー（輝ける鬼火は三柱ある）」！」

『アシストビットをモードA（アグレッサー）に変更。魔力充填……完了。「ドア・ノッカー（輝ける鬼火）」を照射します。3……2……1……ファイア』

二本のドア・ノッカーが、1ガンダムの防いでいるドア・ノッカーに累乗（るいじょう）された。それに驚愕する暇もなく、悲鳴を上げ始める1ガンダムの強靭（きょうじん）なはずの両手と両腕。それは本来なら絶体絶命、王手、チェックメイトなどと言われる状況だろう。現に、1ガンダムの全周囲空間認識モニターには赤い警告欄が乱舞でもしているかのように、現れてはさらに現れていたのだから。

が、この時。

リボンズの顔は、喜びで破顔していた。まるで新しい玩具（おもちゃ）を手に入れた子供のように、彼は……笑っていたのだ。

「私達の未来の為に、死んでください、「ガンダ……！？」

瞬間。

1ガンダムが、忽然（こつぜん）とドア・ノッカー（輝ける鬼火）の射線軸上から消えた。

「な……！」

『上方です、ま……！？』

そしてその現実に意識が追いつく前に、ストレージデバイス「ネオペイガ」の蒼白色に輝く宝玉が、先程よりも紅い粒子を噴き出す何モノかによって、真っ二つに切り裂かれた。

「ネオペ……！？」

そしてその返す刀で、スヴァの並みより遥かに強固なＢ・Ｊごと、その胸板を深く、肋骨に守られているはずの心臓まで切り裂かれる。それを自身から噴き出す鮮血越しに眺めるスヴァだったが、彼は終ぞ、自身を死に至らしめたモノの姿を、垣間見ることすらできなかった。

（……ダ……ジ……）

それに疑問を持つ時間すら惜しいとばかりに、愛していた彼女の姿を閉じゆく瞼（まぶた）の裏に思い描くスヴァ。そして「暗部の伝説的大魔導師」「輝ける鬼火」とまで言われたＳ－ランクの大魔導師「スヴァ＝ローグ」は、その空域に身を数瞬だけ漂わせ……静かにこの世を去っていった。

「ムッ！？」

「どうしたんだい？　君がそんな声を出すなんて、よっぽどのことだと思うんだけど？」

時空管理局と「ＣＢ」による戦争が起こっている地点からだいぶ離れた地点に、その船は光学迷彩を船体に覆わせながら停まっていた。その船体は白と水色を基調とし、船首と艦橋の上には赤い翼と白い剣のようなマークが描かれている。

「いやなに、昔の友人から貰った陶器が割れたのでな。存外、気に入っていたのだが……」

言って、残念そうに先程割れたマグカップを見る３０代前半の男。男は羽織陣風の特殊な軍服を着こみ、顔には珍妙な仮面を被っている、実に「変人」な男であった。

「それはお気の毒だったね。ちなみに、その友人っていうのは、誰なんだい？」

そう聞いたのは、「変人」な男のすぐ隣にいる、三十代中盤の眼鏡をかけた優しげな男だった。だが、彼は青を基調とする普通の軍服を着て、顔にも眼鏡しかかけていない為、前述した男よりかはいくらか常識人そうだ。

「うむ、「スヴァ＝ローグ」という素晴らしい魔導師だ」

「へぇ、驚いたよ。友人関係の狭い君が、あの「輝ける鬼火」と知り合いだったんてね」

心底驚く優しげな男。

「それはどういうことだ、カ」

それに疑問を呈する「変人」な男。

しかし、優男はそれを遮って、目の前のモニターを指差した。そこでは管理局と「ＣＢ」が互いの骨肉を削り合いながら戦っている。

「それよりも、今は目の前の戦争について話し合おう。中継地点として停留するはずだった「ルイェビト」があの憎っくき「ＣＢ」に襲撃されている事態について、ね」

だが、その言葉を「変人」な男は鼻で笑った。どうやらその男にとってその問いは、もう答えが出ていたようだ。

「ふん、それは考えるまでもない事だろう？　あの武士道に反する虐殺者どもに味方するのはナンセンス、そして仁義を欠いた偽善者どもに味方するのもまた私の道義に反する！」

語気を強めながら自身の信条を、武士道を語る「変人」。それを聞きながら眼鏡をかけた方の男は、やっぱりと思いつつ、既に考えていた次善策を「変人」へと打ち明け始めた。

「そう言うと思ったよ。だから、こういうのはどうだい？　「ルイェビト」から逃げる人たちを保護するっていうのは？」

「……何？　それはどういう事だ？」

だが、その策は「変人」な男にとって、理解できないモノだった。何故かつての仇敵を助けなければならないのか？　そう口に出さずとも目が語っている。

「「ＣＢ」が殺し洩らしなんかをすると思うかい？　僕はそうは思

わないね。寧ろ、逃走先に待ちかまえてもいいような……」
「さすればッ！！　その逃走先とやらに船を向かわせよう。戦う意思すら持たぬモノを殺す事は武士道に反し、またそれを見逃すというのも、私の道義に反する！」

優しげな男のその持論と四年前の経験を鑑（かんが）み、すぐに彼の親友である男の持論の正当性を認めた仮面の男は、自身の双刀型アームドデバイス「サキガケ」を握りしめつつ、勢いよく立ちあがった。

「了解だ。それじゃあ君は……」
「転送ゲートに出陣準備をしておく。出陣のときは真っ先に私を「ガンダム」の元へ転送してくれ、カタギリ」

そして優男――ビリー・カタギリにそう言いながら、転送ゲートに向かう仮面の変人。

「分かってるよ。……君に武運があるよう、阿修羅にでも祈っておくよ」
「ふっ、私は阿修羅すら凌駕する存在だぞ？　心配するな。では、さらばッ！」

その頼もしげな背中を見送りながら、カタギリはこれから発生するであろう膨大な艦長の仕事をこなすべく、浮遊しながら艦橋へと向かっていった。

「……四年前、私の全てを奪った「ガンダム」ッ！　今度こそ、私が引導を渡してやろうッッ！！」

親友が艦橋に行くのを背中越しに感じつつ、仮面の男は四年前に自身の全てを壊し切ったロストロギア「ガンダム」へと、長年累積

してきた想いを、憎しみや愛などという陳腐（ちんぷ）な次元を超えた、最早宿命としか言いようのない想いを口にした。

その男の名は、その船にいる者ならば誰もが知っていたはいたが、その本名で呼ぶ者は誰もいなかった。

替わりに、その男は普段の振る舞いと言動から、こう呼ばれていた。

「ミスター・ブシドー」と。

武士道はその表徴たる桜花と同じく、日本の土地に固有の花である。

――新渡戸稲造（１９００），『Ｂｕｓｈｉｄｏ：　Ｔｈｅ　Ｓｏｕｌ　ｏｆ　Ｊａｐａｎ』，Ｔｈｅ　Ｌｅｅｄｓ　ａｎｄ　Ｂｉｄｄｌｅ　Ｃｏｍｐａｎｙ.

第２９話　「ルイェビト」攻防戦　≪後篇≫（後書き）

御大将、作者は貴方に一生付いていきます！

そして遂にやっちゃいました、「ミスター・ブシドー」参戦を！
全くそんな予定がないのに、某理想郷のリリなの×ＯＯ小説を読み、ふと「うん、やっぱ登場させたいな、いやさせよう！」と思い、その勢いのまま登場させてしまいました。

反省はしています。でも、後悔はしていません。例えこれでプロットがまた「全壊全改」になったとしても、これでまた作品が面白くなるなら、作者は後悔なんて致しませんとも！

でも反省はしてします。申し訳ございませんでした。

あと、最近「機巧少女は傷付かない」「未来日記」「めだかボックス」のヤンデレキャラに嵌ってしまったので、近々ヤンデレキャラを出す……かもしれません。期待はしないほうがいいですが。このような作品をここまで読んで下さった皆様に感謝を！

最後に。

にじファンの公開、おめでとう御座います。そしてそれに伴い、この作品もランキング等がそちらに行くことになりました。今後とも、皆様方が楽しめる作品を、頑張って書いていこうと思います。

第３０話　「ルイェビト」攻防戦　≪終篇≫（前書き）

落ち着けよォ。どうした？　いつもの紳士的な君が、今はまるでケモノのようだぜ。

確かに仕留められただろーよ、だが君も死んでたね。

殺し屋のノリに乗せられてるんじゃねぇよ。

――鴨川秘様から、高橋慶太郎，『ヨルムンガンド』，サンデーＧＸコミックス　のレームより

第３０話　「ルイェビト」攻防戦　≪終篇≫

―新暦７５年１０月１０日―

ダジの目の前で「ルイェビト」が爆散する、その数瞬前に時を遡（さかのぼ）ろう。

そこは灰色の合金に囲まれ、巨大なモニターがひっきりなしに動き、数百人は座れそうな椅子がある場所だった。そして第三中央支局「ルイェビト」の総司令部とでもいう場所でもあった。

そんな場所に立っているのは、「ルイェビト」に勤務している局員、ではなく、「ＣＢ」の誇るオーバーテクノロジー、「ガンダム」のケルディムＧＳ（ガンダム）と紫色のガラッゾであった。

その部屋にいた管理局員たちは、Ｓランク魔導師「剛雷」ペルーン＝イリアが彼らと闘っている時に、既にここから脱出しており、彼らがそこに辿り着いた時には、既にもぬけの殻となっていた。むろん、情報を与えそうな機器は全て破壊されている。

『さ～て、と。それじゃ、オレ達のやるべき事をしますか。ハロ、ケルディム、どれが転送魔法を妨害する結界のスイッチだ？』

『ソコ、ソコ！』

『マイスターの右斜め前方にある、「触るな危険」と書いてあるスイッチだ』

『これか？　……何か無性に押したくなるスイッチだな？　まいっか。押すぞ？』
『どうぞどうぞ』『ドウゾ、ドウゾ』『……どうぞ』『どうぞです』
『……え？　何この空気？　何でオレが遠慮されてんの？』

その破壊されている機器の中で、数少ない無傷の機器の内の一つ、「触るな危険」と書かれている赤いスイッチに、ケルディムＧＳ（サーガ）の精細に動く黒い指が伸びた。そして、一瞬躊躇してから、

『ええい！　オレも男だ！　覚悟を決めるぜ！　アニュー、見ててくれよぉおお！』
『アニュー・リターナーはここにいないがな』『ロックオン、カッコワルイ。ロックオン、カッコワルイ』

ポチッとな。

ビィ――――、ビィ――――、ビィ――――！！

『『『ッ！？』』』
「転送妨害用結界魔法を解除します」
『『『……ほっ』』』

ケルディムＧＳがスイッチを押した直後に鳴り出した警報に、ロックオン達は内心かなりビビりながら、「ルイェビト」の転送妨害結界魔法が解除された事を確認した。そしてそれをアップルに伝えるべく、ケルディムＧＳが左肩のＧＮスモールシールドの裏から四角柱の形状をした翡翠の宝玉を取り出した。そしてそれに少量の魔力を込め、中空に浮かばせる。

『さて、アップルの話だと、これで基地内部にいても通信できるそ

うだが……』

『む、どうやら無事「ルイェビト」内部に潜入できた』

突然、中空に浮かんでいた宝玉からモニターがスライドしながら現れ、額に赤い宝石がついているアップルの仮面が正面からいきなりドアップで映った。それに若干驚いたロックオン達だったが、それも一瞬、程なくして「ルイェビト」を占領した旨を伝えた。それにしきりに頷きながら、アップルは一言、

『よし、では転送！』

と言った。そしてその言葉通りに、ミッド式とベルカ式を併せたような魔法陣が、ケルディム達のすぐ近くに現れた。その魔法陣の上には先程までモニター越しに話し合っていた人物が、頬に赤い線が引いてある仮面を被りつつ立っている。

「ふむ、転送完了。では……始めよう」

魔法陣の上から大型モニターの手元まで歩いていき、そこで手短にあった機器に触れるアップルだったが、その機器は完膚なきまでに壊されており、とてもではないが、起動しそうにはない……

『『『んなッ！？』』』

はずであった。しかし、アップルが再び正六角形と正八角形、そして二重の円環を循環させる魔法陣を展開すると、その機器がみるみる内に修復されていくではないか！　それをケルディム達は、信じられないモノでも見ているかのように見詰めた。

「ほう、ほう、ほう……このような回線があるのなら……というこ

とはこんな仕込みも……マスター「アーカイブ」、どうだ？」

有機物を直せる魔法なら、世界で最も普及しているミッドチルダ式にも何種類か存在する。それは「魔法」という科学の極地、プログラムの極致によって、生命力へと何らかの働きがけができるからだ。それは人間の体も例外ではなく、また竜種や昆虫種などといった、人間とは根本から異なる生命体にも同様である。

だが、逆に無機物を修復する魔法はほぼ存在しない。というより、あの御伽噺（おとぎばなし）にしか過ぎない「アルハザード（遺失せし秘術の聖地）」ですら、その魔法は最後の最期まで構築（プログラミング）できなかった……らしいのだ。最も、これは現在の考古学会が出した憶測にしか過ぎないので、真偽はさほどでもないが。

つまり、それほど質量保存の法則を無視して無機物を修復させるのは難しいという事だ。にも拘らず、アップルはその魔法を何ともなしに行使している。それがどれだけ異常な事なのか、ケルディム達の反応からも推し量れるだろう。

「何？　何？　何？　そんな仕掛けまで本局のマザーに？　存外、マスターも腹黒い……まるでマスターが深愛する女子のポンポコポーンのよう」

『……！　……！？』

「いや、その……すまなんだ。そんなに興奮するとは思わず。……まあ、しかし、さすがは我がロー」

『……？』

「まだだ！　まだギリギリセーフ！　確かに言い間違えかけたが、それはあくまでかけただけなのだッ！　まだ言い切って無かろう、マスターッ！？」

そんなアップルだったが、彼は何かを口走ったと思った瞬間、いきなり焦り始めた。それは傍から見れば、まるで彼がＧＮ粒子をも利用した念話で話しているマスターと遊んでいるようだった。それを見かねて、ブリングは静かな口調で横やりを入れた。

『……アップル、遊ぶのは別に構わんが、それは仕事が終わってからに……』

「それなら無問題。もう終わり」

『……は？』

口を出したのと同じ口で、そんな間抜けな声を出すブリングに、アップルは見向きもせずにそう答えた。見れば、手元のコンソールに置いてあった女性の如き白い指は、アップルの白い長ズボンのポケットに、何時の間にか収まっていた。

「此方は終わった。そして、「ルイェビト」の主要施設への爆弾の設置も同時期に終了。故に、これから我らは転送魔法で合流ポイントであるＤ－７８まで飛ぶが、それでよろし？」

『『『……了解』』』

「では……いざ往かん、我らの母艦へ！！」

そしてアップル特有の魔法陣が一層白く輝くと、その場からは、誰もいなくなった。

「……え？」

中空に傷だらけで浮かんでいたダジは、目の前で起きている光景が信じられなかった。あの難攻不落にして絶対要塞とまで称された中央支局、その内の一つである第三中央支局「ルイェビト」が爆散している光景が。

『やっぱり、心配はいらなかったみたいだね』

『……ああ』

それを見た飛行形態のアリオスＧＳとレグナントは、数キロ単位のサイズを持つ「ルイェビト」が爆散していくのを見、自分達の仲間が見事にその任務を果たした事を知った。故に。だから。気を抜いてしまっても仕方がない……のかもしれない。何故ならそれは彼ら「ＣＢ」の勝利が決まった瞬間でもあったからだ。

「……」

しかし、その一瞬がどれだけ世界を、戦場を動かすのか、分からない二人ではないはずだ。そしてその代償がどれだけ重い物なのか、彼らは身を持って知っていたはずだ。そう、四年前の、起こす気が無かった戦争で。

「……あは……ははは……」

「ルイェビト」爆散を見たダジの様子がおかしい事に気付いたのは、アレルヤの方が先であった。彼女は頭を伏しながら、自暴自棄にで

もなったように笑い始めたのだ。それは甲高い、それでいてどこか幼さが垣間見える、そんな不可思議でアンバランスな笑い声だった。それを遅らばせながら気付いたレグナントと共に、訝しげに見ていると……

「あは、ぎゃははは、ぎゃはは、ぎゃは、ぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃああ嗚呼あああアアあッッ！！！！」

『『！？』』

「「究極召喚（アルティメット・サモン）」、「獣騎召喚（スヴァロギッチ）」ィィイイいイッ！！」

突然、世界が狂笑と共に、赤色に爆ぜた。

『これは！？』

『……まさか！？』

そして同時に、ダジの足元から魔法陣が現れた。だが、その魔法陣はダジの魔力光である土色ではなく、業火のような赤色に輝いていた。見れば、魔法陣の他にもダジの瞳、パナケイアの宝玉といった土色だったモノが、原初の恐れを呼び起こしそうな濃い赤色に染まっている。

それはまるで業火を、狂炎を喜び、讃（たた）えているようだった。

そんなダジの後方に、足元に展開されている魔法陣よりも数倍は大きい魔法陣が現れた。赤い朱い、炎を体現させたような魔法陣だ。

『……デヴァイン、ごめん。今の僕じゃ、アレの相手までは……』

『……分かっている、ハレルヤ・ハプティズム。アレは自分が何とかする。その間にお前はここから撤退してくれ』

『……了解』

その十メートルに及ぼうかという巨大な魔法陣を見たアレルヤは、自身では役不足だと、其れの前に立つには性能の落ちたアリオスでは駄目なのだという事を悟る。そしてそれはレグナントも同意見だった。だからアレルヤは全速力でここから撤退していったのだ、正しい判断の元に。

そして胸糞が悪くなるような真っ赤な魔法陣が業火を周囲に侍(はべ)らせながら、ある巨大生物を召喚するべく、一際大きな光を、全てを焼き尽くす炎の輝きを放った。と、同時。

世界を震わす大咆哮が、戦場中に響き渡った。

『……化物め！』

『これがあの第一種稀少個体でもある「狂炎の獣王(バーサーク・ボルケーノ)」スヴァロギッチですか。……凄まじい炎です。これなら「全てを焼き滅ぼす赤き魔獣」「ただそれはボーグの為だけにある」と呼ばれる理由が分かります』

でかい。それがダジの「究極召喚(アルティメット・サモン)」であるスヴァロギッチを見たデヴァインの感想であった。

体長は十メートルほどであろうか？　頭は兜のように盛り上がった黒い頭皮に覆われ、そこから剣のように真っ直ぐ伸びた白い二本角が生えている。そして体中からはマグマのようなドロドロとした炎が噴き出していた。もしそれに似ている生物を上げるとすれば…

…辛うじて雄牛が当て嵌まるだろうか？　最も、体中から粘着性のある炎を噴き出す、十メートルを超えるような真っ赤な雄牛など、見たことも聞いた事もないが。

「ギャハハハアアアッ！　スヴァあああ、奴らをォオ……焼ァアアアき尽くしなさぁあああいッッ！！！！！」

『バォオオォォオオウッ！！』

『レグナント！』

『ＧＮフィールド、展開！』

その雄牛に似た赤い化け牛、スヴァロギッチの口から、喰らえばひとたまりもない熱量を持った直径三メートル……レグナントと同等の大きさをした大火球が放たれた。狙いはもちろん、彼女がさっき焼き尽くして欲しいと願ったロストロギア「ガンダム」だ。

『レグナン……！？』

『ら、ライセン……！？』

そして大火球がレグナントの展開したＧＮフィールドに、轟音を奏でながら正面から衝突した。だが自身と同じほどの大火球を、レグナントの強固なＧＮフィールドはしっかりと受け止める。が、その代償として、残存していたＧＮ粒子の１０％ほどが消費されてしまった。

それほどの粒子を込めなければ、破られていたかもしれなかったからだ、射撃や砲撃に強いはずのＧＮフィールドが。

デヴァインはそれに冷や汗が出そうになったが、彼の相手はそんな悠長な事をさせてくれるほど、お人好しでは無かった。

「ぎゃはッ、もうぅううういっっっぱあああつ、もうぅううういっっっぱあああつッ！　もうぅううういっっっぱあああつッッ！！」

『バォオオォォオオウッ！！』

『チィイイイ！？』

二発、三発、四発と、先程の大火球に全く劣らない大火球が、レグナントに向け、連続で放たれる。それを飛行形態特有の高い機動性で躱わし続けながら、レグナントは意識の奥底で考える。あまりにも粒子の消費が激しい為、今まで禁忌とされてきた人間形態になるべきかどうかを。

だが、その考えがまとまりかけた瞬間、レグナントの体に急速接近してきたスヴァロギッチの牙が、奥深くまで食い込んだ。

「つぅううう――――かまッえたぁあああああ！！」

『……な！？』

『そんな！？』

体に纏っていたドロドロの炎を、指向性を持たせつつ爆発させ、その巨体には似合わない超速度を叩きだしたスヴァロギッチに、何時の間にか接近を許してしまっていたのだ。それに愕然としながらも、デヴァインはそれでも冷静に状況を見る。突破口を探す為、ここから逃げ出す為に。

しかし。

「噛み砕きなぁあああああ、スヴァあああ！！」

『グロオオオオオオオ！！』

『チィイッ！？』

『そ、損傷率がどんどん上がっています、ライセンサー！　１３……１８……２６……！　これ以上はもう耐え切れませんッ！！』

そんな時間はまるで与えられなかった。考える、考えないではない。時間がないから考えられないのだ。それに歯噛みをしそうになりながら、ライセンサーであるデヴァインと、管制人格であるレグナントは覚悟を決めた。禁忌を破る覚悟を。

『……行くぞ、レグナント！』

『……仕方ありませんね、ライセンサー。ミス・スメラギやマイスター（アン）の説教は生き延びた後で受ける事にしましょう。まずは、この状況の打破が最優先です』

そして、今にもスヴァロギッチに噛み砕かれそうになっていたレグナントに、変化が起き始める。

まず、飛行形態の胴部から、頼りなげな細い足が出た。次に、翼部から飛び出していた腕が垂直に下がる。そして最後に、頭部（または胸部）らしきものがこれまた胴部からせせり上がってきた。それは言うなれば人に似せながら人を作れなかった、異形の人形と表現できるだろう。あの「赤き異形」アルケーより、さらに輪を増して人型からかけ離れた姿。それは見る人が見れば、人外に対する恐怖で慄（おのの）くことだろう。または、神への冒涜として怒り狂うのかもしれない。

そんな異形の人形となったレグナントが、スヴァロギッチの顎に手をかけた。すると、赤い粒子が今までにない勢いで体中から噴き出し始め、それと比例するかのように、スヴァロギッチの顎も開いていった。それに目を瞠（みは）るダジだったが、様々なショックやスヴァロギッチを召喚した際の副作用（バーサーク）で狂いかけたその頭でも、冷静に状

況を処理しようとする辺りは、さすがはオーバーSランク魔導師、であった。

「スヴァ、「アグニ・イグニッション（狂炎荒ぶる咆哮）」！！」

『バオォオオオオオオ！！』

『……レグナント、最大出力で！』

『GNフィールドを展開させます！』

スヴァロギッチの喉奥から、信じられないぐらいの熱量が生じ始める。それはレグナントを焼失させるにはお釣りがくるほどだ。それを発射される寸前で気付いたレグナントは、残りが少なくてきた粒子を度外視して、莫大なGN粒子を費やして最高硬度のGNフィールドを球状に展開した。

そしてその一秒後に、地獄の業火ともいうべき狂炎の咆哮が、スヴァロギッチの喉奥から放たれた。

「ふぅ、何とか制限時間内に片付いたね、1（アィ）？」

『イエス、マイスター。さすがです』

「ところで、「ルイェビト」が崩壊した今、僕達がここにいるべき理由もないと思うんだけど、君はどう思う？」

『その御心通りかと』
「そうだね。それじゃ僕達も撤退しようか」

三つの艦首全てを根元から叩き折られ、艦橋やエンジンといった重要部位を尽く破壊された「トリグラフ」の黒い甲板に、パイロットスーツを着たリボンズが降り立った。その降り立った瞬間、ギャリッという金属的で耳障りな音が鳴り、それが一瞬だけリボンズの気を引いたが、それだけだ。

それだけが、先程1ガンダムに搭載されている「疑似ＴＲＡＮＳ－ＡＭシステム」を使用しながら撃沈させた次元戦艦に対する、リボンズの興味であった。

「しかし、これがトランザムなのか……」
『素晴らしき権能です。そしてまさに「ガンダム」に相応しい力ですね、マイスター？』
「僕もそう思うよ、1。だけど……」
『未だ不完全なのが……完璧である筈の私達にとって、唯一の汚点、または失点、ということですか？』
「全くもってそうだよ、1。オリジナルＧＮドライヴを搭載している「ガンダム」に比べ、制限時間は三分の一、ましてその出力は三倍じゃなくてたったの1．1倍じゃないかッ！　これではどうやっても「ガンダム」にはなれない……！」
『確かに。しかも、ＴＲＡＮＳ－ＡＭを使い切った後は、母艦、またはラグランジュに行って整備を受けなければ、再稼働すら不可能になりますしね』

そして、大破した「トリグラフ」の甲板から、「ルイェビト」が崩壊していくのを眺める。数キロ単位の要塞が爆散していく様相は、どこか空寒い物を感じ得ずにはいられない。

と。そんな風に思っていると、リボンズの周りに二機の「ガンダム」が降り立ってきた。灰色のガラッゾと黒銀のガデッサ、ヒリング・ケアとリジェネ・レジェッタだ。

『さて、それじゃここから撤退しようか、リボンズ？』

『そうそう。もうここには用が無いんでしょ？』

「ああ、そうだね二人とも。僕達もアニューと同じく、ポイントＤ－７８まで行こうか。……頼むよ、二人とも？」

『『了解』』

その二人に（不本意にも）抱えられながら、その戦場を離脱していくリボンズ達。それを茫然と――いや、「ルイェビト」崩壊を見て茫然としている管理局員たちには、止めるという考え自体、思い浮かばなかった。虎の子のオーバーＳランク魔導師、その中でも上位に位置する実力者であった「輝ける鬼火」スヴァ＝ローグを殺された彼らには、もう「ガンダム」と戦う意欲が消失していたのだ。

そして、二つの赤い軌跡が戦場から遠く離れた頃になって漸く、その場にいた管理局員たちも撤退準備に取り掛かり始めた。

「ハァッ、ハァッ、ハァッ……」
『バ……オオオン……』
『……アレを喰らって、なお動くか。この、化物がッ！』
『信じられない生命力ですね、驚嘆に値します』

周囲を粘着質な炎で囲まれ、光景が蜃気楼の原理で不気味に揺らめく空間。そこでダジが従えるスヴァロギッチとレグナントは、互いに正面から睨み合っていた。

スヴァロギッチはその真っ赤に燃える胴体から胸部にかけて、何かで抉り取られたような傷があった。それは痛々しい血を噴き出しながら、その存在を今でもスヴァロギッチにアピールし続けている。

そしてレグナントは、最高硬度のＧＮフィールドを抜けた先程の「アグニ・イグニッション（狂炎荒ぶる咆哮）」で両腕を焼失、さらには、胴体も幾らか溶け落ちていた。

ちなみに、スヴァロギッチの傷だが、それはレグナントがスヴァロギッチの口から逃れた後、胴体部から出力を抑えた大型ＧＮキャノンを発射した際にできた物である。出力を抑えたのは、もうＧＮ粒子が尽きそうだったからだ。最高硬度のＧＮフィールドを張った事により、レグナントのＧＮ粒子貯蔵量は、レッドアラームが表示されるほどまで消費されていた。

そんな両者が睨み合って数秒。その数秒の間に、彼らは管理局員たちが「ルイェビト」陥落を受け、ここから撤退しようとしている艦隊の姿を見た。

（……あ、あ、危なかった。もう少しでスヴァの制御を失う所だったの。でもでも、もう大丈夫、大丈夫だよ、スヴァ。私は今、ちゃんとスヴァを完璧に制御しているよ！）

今を生き延びようとするその姿を見て、ダジ＝ボーグは漸くスヴァロギッチ召喚の際に伴う「狂化（バーサーク）」から抜け出す事に成功した。そしてダジが撤退しようとしている局員たちに気を引かれている間に、レグナント自身も撤退を始めた。

『……レグナント、逃げるぞ！』

『イエス、ライセンサー！』

人型から飛行形態に変形し、全力でこの場から退避するレグナント。それを見ながらダジは、レグナントを追うという愚行を犯さなかった。幾ら傷つき、倒すチャンスだとしても、今の彼女には、それよりもやるべきことがあるからだ。

『……ちら、……かん……きこ……すか……ーグ？』

（……念話が、使える？　ということは、彼らは本当に撤退を……？）

『こ……四次元航行艦隊、聞こえます……ジ＝ボーグ？』

『うんうん、聞こえているよ？』

『そうですか。では単刀直入に言います。第四次元航行艦隊はこれから残存戦力を回収後、すみやかにこの場から離脱します。なので、貴方は……』

『そのその護衛は、私に任せて下さい。殿でいいですか？』

『はい、お願いします』

そう、残存戦力を率いて、速やかにこの場から撤退する事が、今の彼女がするべき、最優先事項なのだ。

Ａ・Ｆすら展開されていないマーブル模様の次元空間（アトモスフィア・フィールド）に、その白亜の巨船はゆったりと停滞していた。最後部からは蒼碧色の粒子が噴き出していて、それが推進力となり、その船をゆっくりと前に推し進めているようだ。

『よし、皆揃ったわね？』

『はい、スメラギさん』

その白亜の巨船の艦橋、ブリッジにいるスメラギ・李・ノリエガが、たった今トレミーに着艦したレグナントを見ながらそう言った。それに相槌を打ちながら、スメラギの右斜め後ろで手元のコンソールを叩き続けるフェルト。その後ろで黙々と（混乱しかけながら）撤退作業をしていくミレイナ。そしてスメラギの左前方で楽々とトレミーの操舵をこなすラッセ。それがトレミー――プトレマイオス？のブリッジにいるクルー全員である。

『それで、そっちはどうなのかしら、Ｄｒ．ジェイル？』

『此方も順調そのものさ。ちょうど向こうから標的も来たことだしね。何、心配はいらないよ。何せ此方にはあの『ＯＯ』がいるのだからな』

トレミーのブリッジの中央に備えられている艦橋椅子に座りながら、スメラギはエウクレイデスのブリッジと通信をしていた。目の前のモニターには、深い紫色をした髪を持つジェイル・スカリエッティが、金色の瞳を鋭く光らせながら、スメラギと互いの情報・状況を遣り取りしていた。だが、その途中、スカリエッティに慢心があるのを見抜いたスメラギは、一戦術予報士としてその慢心に対し警告をするが、それは『ＯＯ』がいるから、という一言で一蹴されてしまった。

『確かに、それはそうですが……！』

『そちらの話では、「ルイェビト」に駐在していた三人のオーバーＳランク魔導師の内、その二人を討ち取ったらしいじゃないか！　それにその残った一人にしても、かなりの手負いなのだろう？　これらのどこに失敗する要因があるんだい？』

実際、『ＯＯ』――正式には『ＯＯ』ＧＳなのだが――がいれば、例えどんな窮地に陥ろうとも、どうにかなる――正しくは、してくれるのだ。

「ＴＲＡＮＳ－ＡＭシステム」を発動させていない状態で、現時点にて確認されている数百の次元世界の中で、たった一人――「歩くロストロギア」八神はやてしか到達し得なかったＳＳランクに至れる、圧倒的な機体性能。

「ツインドライヴシステム」により、オリジナルＧＮドライヴのＧＮ粒子が二乗され、それにより得た、他と比べることすらおこがましい程の、莫大過ぎるＧＮ粒子生成・貯蔵・使用能力。

そして極めつけに、『ＯＯ』のガンダムマイスターである刹那・

F・セイエイの異常な戦闘能力。それらが加わり、合わさり合う事で、『ＯＯ』は人々の力だけでは到達し得ない「天使」、いや『神』の如き力を振るうになるのだった。

最も、ツインドライヴシステムが安定しない為に、ＴＲＡＮＳ－ＡＭが使えないという痛手もあるにはあったが、今のところ、ＴＲＡＮＳ－ＡＭを使うような危機的状況に陥ったことがない為、それほど重要な事でもない、というのが、「ＣＢ」の、引いてはイオリア・シュヘンベルグの総意だった。

『それでは、戦闘も近づいていることだし、ここらで幕引き……と、いきませんかね。ミス・スメラギ？』

『……いえ、そちらのことは全て貴方にお任せする、というのがイオリアの、引いては「ＣＢ」の決定だったので、私はそれに従うだけです。……それでは、そちらにご武運があるよう、ここから祈っています』

『ふむ、君のように優秀な戦術予報士に祈われれば、いやでも勝利の女神は私に微笑むことだろうよ』

そして真っ暗となったモニターを何時までも心配げに眺めるスメラギだったが、自身が艦長に相当する身分だということを思い出し、ブリッジのクルー達に次々と指示を出し始めた。

無重力の中でも美形を保つ、その大きな胸の内にあったモヤモヤを――嫌な予感を振り払う為に。

計算しきれない必然の集まり――それをヒトは偶然と呼ぶ。

――ＥＸＡＭ様より

第３０話　「ルイェビト」攻防戦　≪終篇≫（後書き）

おぱ～いが好きで、何が悪い！？　というのは同志を求めつつ置いといて。

御免なさい……本当は撤退戦まで含めて投稿しようとしたのですが、撤退戦まで含めるとおよそ二万字という長さになりそうだったので、区切りのいいここで投稿する事にしました。ここで「ルイェビト」篇は終わらせるはずだったのになあ……どうしてここまで長くなるんでしょうか？　（Ａ．作者の文章力の無さ）

しかし、最近はやて成ぶゲフンゲフン、リリカル成分が足りなくて、「なのは」を書いているような気が全くしません。そろそろ出さなきゃとは思っているのですが……まあ、「ルイェビト」篇が終われば、「なのは」のターンになる……はず！

そしてまさかのブシドー出番なしでしたが、大丈夫、彼ならきっと次話で活躍してくれます！　『ＯＯ』？　が出るので、その変態（愛の力）で恐らく無理にでも出ようとする……はず！　ここまで読んで下さった皆様に感謝を。

最後に。

８月１５日は日本の第二次世界大戦が終戦した日でもあるので、そんな日にとりあえず「ルイェビト」攻防戦を終わらせることができて良かったです。

第３１話　「ルイェビト」撤退戦（前書き）

確かにＢｅｓｔではなかった。しかしＢｅｔｔｅｒではあったのだ、何故喜べない。

――ＥＸＡＭ様より

第３１話　「ルイェビト」撤退戦

―新暦７５年１０月１０日―

「……」「……グスッ」「……うぅ……ヒグッ！……」「あああぁああ、うあああぁあああッ！！」「……」

誰もが沈痛な表情で押し黙り、誰もが泣きそうな表情で泣き止まり、誰もが大声で泣き叫ぶ中、それでも彼らは決して歩みを止めずに前へ前へと、生きる意志を表すかのように行進する。

彼らはかつて在りし「ルイェビト」の防衛隊であり、またその「ルイェビト」に勤務していた職員でもあり、そして「ルイェビト」に停留していた第四次元航行艦隊であった。

そんな彼らがどうして人目を気にせずに、泣きながら――あるいは泣きそうになりながら、何も無い暗色の次元空間を航行しているのか？

その答えは実に簡単な物だった。そう、本来彼らが務めるべき「ルイェビト」は「悪鬼」共が襲来した事により陥落し、その姿は見るも無残なデブリと化していたからだ。そして彼らは今、ただ生き延びる為に、本局へと航行しているのだ。

この残酷な世界――次元世界では、人間の存在などあまりにもちっぽけな物だ。それこそ、要塞や艦船、結界の中にでもいない限り、その命はすぐに存続できなくなるのだ。だから彼らは都市機能すら内蔵する本局へと、自分達が生き延びる為に――あるいは、「ルイェビト」陥落という現実から逃れたいが為に――航行していった。

そんな中、撤退している艦隊の殿にいるダジ＝ボーグは、油断なく周りを見渡していた。彼女は「ＣＢ」がこのまま引き下がる様なお人よしでは無いことを知っているからだ。

どこまでも無慈悲で、限りなく残酷。かつ人の情、想いなどを欠片も考慮せずに、ただ己が遂行せし事柄を成していく、まさに「悪鬼」を体現せし者共の集団である「ＣＢ」。

そんな彼らが、陥落させた要塞から撤退している艦隊を――私達を、目の前で易々と逃がすだろうか？　否、そんな事は有り得ない。有り得る筈が無いのだ。

何故なら、彼らは……

「……嘘ウソッ、正面で待ち伏せされてた？　今のところの被害はどのくらいなのッ！？」

この残酷で痛（ペイン）みばかりが横行する現実に似た存在なのだから。

『さて……アップル、予想だにしていなかった事態が起こっているわけだが、どう思う？』

『……も、問題ない……はず？』

ダジがいた地点から数キロほど離れた宙域、未だ「Ａ・Ｆ（アトモスフィア・フィールド）」すら届かないほど管理局の艦隊から離れたそこに、翠と青の三機はいた。

一機は翠色のボディと長大な黒い大砲を抱え持つ「砲持ち（ガデッサ）」、リヴァイヴ・リバイバル。

残りの二機は同機種で、両肩から合計四門もの砲塔を生やした、全身が濃い青色に塗装されている「アンノウン（GNキャノン？）」だ。それは現在ポイント－Ｄ－７８――ここにはいないトレミーからアップルが遠隔操作で動かしている。

それが「ＣＢ」が残党狩りに出した稼働可能な全機……である。

しかし、彼らはこの残党狩りに、本来なら四機、投入しているはずだった。それもここにはいないもう一機――『ＯＯ』ＧＳ（セブンソード）を主力としていたはずなのだ。では、何故その『ＯＯ』ＧＳはここにいないのか？

『……はあ、全く。もう彼女が来てしまったよ。とりあえず僕がアレの相手をするから、アップル、君は艦隊の相手をしてくれないか？』

『うむ、それがＢｅｓｔ……でなくともＢｅｔｔｅｒだろうな。了解した』

『ＯＯ』ＧＳソードが居ない理由……実はそれは、必然が集まりし偶然であった。つまり、

単に溜まりに溜まった物(鬱憤)が爆発しただけだった。

『……エクシア、頼むから機嫌を直してくれ』

『エクシア、オリジナルＧＮドライヴの管制人格(マスタープログラム)である貴方なら、自分の勝手でマイスターを困らせるなど言語道断であるというのは分かっているはずです』

『それでもッ！　私はッ！　エクシアになるまでッ！　『ＯＯ』にはッ！　なりませんッ！　寧ろエクシアばっちこいですッッ！！』

『エクシア……』

『……はあ（いつからこんなに病んでいたのでしょうか、エクシアは）』

目の前に広がる数十隻もの管理局の大艦隊。それをプトレマイオス？のリニアカタパルトから眺めている時に、エクシアはただひたすら駄々をこねていた。曰く、もうＯ(オー)ガンダムには我慢できない、『ＯＯ』ではなくエクシアで戦わせろ、と。

もちろんそんな戯言(ざれごと)は速攻却下され、エウケレイデスの艦橋からは『ＯＯ』で出撃しろと命令されたのだが、

『ぜぇ～ったいに『ＯＯ』にはなりません！！　マイスターと二人っきりになれるエクシアを私は切望します！！　寧ろ、異論は駆逐しますッッ！！！！』

と言って、全く言う事を聞かない。これにはさすがのスカリエッティもまいってしまい、彼は早々とエクシアのマイスターである刹那に、エクシアの説得を頼み込んだ。

そして、その結果がこれである。

刹那は痛くなってきた頭を抱え、Ｏガンダムは疲れが滲み始めた溜息を吐いた。彼らもまさかエクシアがここまで強情になるとは、想ってもいなかったのだ。刹那がエクシアに謝った後で頼み込めば、何とか話を聞いてくれるだろう。そう軽く考えていたのだ。

「いい加減にしないかエクシ……」

『いい加減にするのはマイスターの方です！　なんでマイスターはＯガンダムとだけそんなにイチャイチャイチャイチャイチャイチャイチャイチャするんですかッ！！　そんなに私を除けモノにして楽しいんですかッ！？』

「だからオレは……」

『私は何時だってマイスターとイチャイチャしたいんです！　こう、砂糖やシロップにどっぷりと漬け込んだような、甘々な空気を出しつつ、「エクシア……」『マイスター……』みたいなことを言い合いたいんです！！』

「エクシア、頼むから話を……」

『四年前には、それが当たり前でした！　だけど、今はどうですか！！　マイスターは何時も何時も何時も何時もＯガンダム、Ｏガンダム、Ｏガンダムッ、Ｏガンダムッッ！！　私の事を無視して、いっっっつもＯガンダムだけに構っているッッ！！！！』

「それは誤解だと何度言ったら……」
『とッにッかッくッ！　マイスターはもっと私の、引いては乙女心というものを知って下さい！！　話はそれからですッ！！！　異論は聞きません、駆逐しますッッ！！！！』
「……オレは、どうすればいいんだ、Ｏガンダム？」
『どうしようもないかと……』
『ほら、マイスターはそうやっていっつもいっつもいっつもいっつもＯガンダムのことばっかり！　もう知りません、フンッ！！』

言って、音声をオフにするエクシア。ついでに太陽炉の機能も全てシャットダウンする。それに滝のような脂汗を流しながら、顔を顰める刹那と、困惑を露わにするＯガンダム。

だが、そのように間誤付いていても、敵は待ってくれないのだ。現に、リヴァイヴのガデッサと二機のＧＮキャノンは既に出撃し、艦隊やオーバーＳランク魔導師と戦っていた。

『……この手はあまり使いたくなかったのですが……致し方ありません』
『……？　何かいい手があるのか、Ｏガンダム？』
『ええ。まあ……あまり使いたくは……なかったんですがね。マイスター、後でエクシアのフォローをお願いします』
『……？　あ、あぁ』

歯に何かが挟まったような言い方をするＯガンダムを珍しいと思いつつ、刹那はＯガンダムが何故そう言ったのか、その真意を全く考えずに頷いた。彼はもうエクシアの機嫌を直す為に、猫の手も借りたい心境だったのだ。最も、彼はその時の行動を、後々になって後悔するのだが。

『それではマイスター、私を起動させ、Ｏガンダムで戦場に行きますか？』
『……は？』
『＊@＆％＄＝！〝＃＄％＆！？』

Ｏガンダムがそう言った瞬間、エクシアの言葉にならない悲鳴が整備室に反響した。単語として成り立っていない音が部屋中に響き渡る。そんな中、刹那は何故Ｏガンダムがエクシアの機嫌を直す為にそんな事を言うのか、全く理解できないでいた。

『だだだだ駄目！　それだけは絶ッ対にダメ！！　神や仏が許しても、私が絶対許さないから駄目で、寧ろ、許した神や仏を駆逐しますッッ！！？？』
『しかし、エクシア？　マイスターは戦場に向かわなければならない。でも、ベストパートナーである貴方は向かいたくないという。……なら、マイスターが私だけを起動させて戦場に向かうしかないじゃないですか？』
『戦場に向かわないなんて言って……』
『言っているのと同義です。……さて、どうしますか、マイスター？　エクシアが我儘（わがまま）を言っている間にも、敵はやってきているのですよ？』
『……分かった。致し方ないが、Ｏガン……』
『わぁあああああああッ！？　分かりました、分かりましたーーー！　もう我儘は言いませんから、それだけは、それだけはあぁあああッ！！』
『それでは、マイスター。早速ですが、『ＯＯ』ＧＳを構築します。よろしいですか？』
『……あ、あぁ、構わない』

エクシアの悲痛な叫び――それだけは心底から嫌だったようだ―

―が刹那の鼓膜を揺さぶる中、Ｏガンダム主導の元に、刹那の体が『ＯＯ』を構成するＧＮ粒子と入れ替わっていく。刹那の体は生体情報を含むＧＮ粒子に変換され、ＧＮドライヴ内に保存された。そして刹那の体の替わりに『ＯＯ』を構成するＧＮ粒子が、「刹那・Ｆ・セイエイ」という一個人を構成していく。

それは頭脳・思考・感情は人のまま、肉体・体躯・身体だけを機械と化す所業だった。そしてそれこそがイオリア・シュヘンベルグが二百年もかけて作り上げた「ガンダム」の真髄（しんずい）でもある。

「ガンダム」は次元世界で最強の存在であるオーバーＳランク魔導師を打ち倒す存在、戦争根絶という永く苦しい戦争に勝ち続ける強者、世界に革新を齎すモノとして開発されたデバイス――Ｇｕｎｄａｍ　Ｎｕｃｌｅｕｓ　Ｄｅｖｉｃｅである。そして『法典』の演算結果から、「ガンダム」が行うであろう熾烈な戦争は、人の体では成せない、または耐え切れないという結果が弾（はじ）き出される。だからこそイオリアは二百年前の時点で人の頭脳を維持したまま、体だけを機器と交換する技術を開発していたのだ。

そしてその技術が完成したのは、今からおよそ八年前の新暦６７年のことであり、最初の「ガンダム」にして全ての原点（プロトタイプ）でもあるＯガンダムが誕生する――

『……マイスター、構成を完了しました。いつでも行けます』
『了解。刹那・Ｆ・セイエイ、『ＯＯ』ＧＳ、出る！』
『……マイスターぁぁぁ、えっぐうっぐ……』
『『……』』

――そして、Ｏガンダムが誕生した八年後の今、イオリアの全てを注ぎ込まれて開発さ『計画』を成すのに必要なモノ、

れた最強の「ガンダム」、『００』が、次元世界の暗色たる世界に舞い上がっていった。その姿は正に天上人のようで、何モノをも駆逐し、破壊する威厳（いげん）を周囲に見せつけている。

しかし、そのイオリアでさえも、まさか太陽炉の管制人格であるエクシアが、マイスターに対する嫉妬や独占欲で発進を遅らせるなど、夢だに想わなかったに違いない。

「おらおらぁあああ！！」「いけぇえええ！　進めぇえええ！」「やれる……やれるぞ！」「オレ達でも、「ガンダム」共と闘えるんだ！」

『ぬおおおぉおおおおッ！？』『こ……のぉおおおッ！』

戦況は「ＣＢ」の圧倒的不利で始まり、そしてその後もずっと不利のまま推移していった。たった二機のＧＮキャノン？には、「ルイエビト」攻防戦に敗退した艦隊といえども、足止めすることすら荷が重すぎたのだ。

肝心の『００』は未だ発進すらままならず、頼みの綱のガデッサ

も、傷付いているとはいえ、自身と同ランクの相手だけで手一杯。そんな助けを期待できない状況で、2対数百万が戦うのだ。土台、挑むことすら無謀だった。

それでも、GNキャノン?は善戦した方だろう。数分とはいえ艦隊を足止めしたのだから。戦艦の主砲が届かない超長遠距離からの砲撃。それで時間を稼ぐことに成功したのだ。

最も。それだけしかできないというのもまた事実であったが。

『まだか、『OO』はッ!? 此方はもう限界!』

『慌てるなアップル! 今何とかエクシアの説得を終えた所だ。すぐそちらに向かう!』

『頼む、頼むぞ刹那・F・セイエイ!』

管理局の艦隊とエウクレイデスとの距離は、最早一キロもなかった。これ以上近づけさせれば、まず間違いなくエウクレイデスが敵艦隊の主砲で沈む事だろう。

それが分かっているからこそ、刹那の声にも殆ど余裕がなかった。彼も分かっているのだ、状況がどれだけ悪いのかを。実際、最悪とまでいかなくとも、その次ぐらいには悪い状況なのだ。

『チッ、本当に厄介な獣だな……!』

『リヴァイヴ、そちらはどうなっているんだい!?』

『Ｄｒ．ジェイル、とりあえず此方は心配いりません。何とか戦えてはいます。しかし……チィイイッ!?』

リヴァイヴはダジのスヴァロギッチと、ほぼ互角に戦っていた。スヴァロギッチが吐き出す大火球をGNメガランチャーの砲撃で撃

ち落とし、爆発的な速度で接近してきてもＧＮメガランチャーを３連装ＧＮビームライフルに変え、弾幕を生成することで近づけさせない。それをガデッサは対峙した時から永遠と繰り返していた。

この時、ガデッサは基本受け手だった。だが、ガデッサも攻められてばかりではない……のだが、如何せん、ミドルレンジにおける火力が違いすぎた。ガデッサの本領が発揮されるのは、ＧＮメガランチャーを最大限に活かせるアウト・ロングレンジなのだ。その距離においてはガデッサはスヴァロギッチすら超える圧倒的な火力を行使できるのだが、今回ばかりは相手が悪かった。

相手はガデッサの一撃にも耐えられるほどタフで、そして距離を一瞬で詰めれるほど速かったのだ。故に、相手はガデッサの懐に容易に入り込む事が出来、既にその右足を食い千切っていた。

「さあさあ！　スヴァ、もっともっと暴れなさい！」
『バオォオオオオ！』
『この、たかが獣の分際で！』
『ライセンサー、ＧＮ粒子の残量が５４％を切りました。お気を付けを』

右足を失ったことでバランスが取れにくくなっていたが、それを無視してガデッサはＧＮメガランチャーをスヴァロギッチの大火球に無理やり当て続ける。すでにＧＮ粒子の残量が５０％を切りかかっていても、それを気にすることなく、彼はＧＮメガランチャーを撃ち続けた。一瞬でも弾幕を薄くすれば、たちまちの内に接近を許し、またどこかを食い千切られるかもしれない。そんな恐怖がリヴァイヴの思考を支配していたのだ。

しかし、それもその声を聞くまでだった。

『『ＯＯ』ＧＳ、目標を駆逐する！！』

それに気が付いたのは、９０１陸空隊が最初であった。彼らは艦隊のほぼ最前線、ＧＮキャノン？から僅か１００メートルほど離れた所にいたから、その輝きを誰よりも早く視認していたのだ。

「なんだ、アレ？」

ポツリと、誰かがそう言った。アレはなんだ、と。背景を蒼碧一色に塗り潰すほどの莫大な粒子を背後に噴出させながら、此方に途轍もないスピードで接近してくるアレはなんだ、と。

「おい……アレは……！」「ま、まさか……まさかぁあああ！？」「あの「金色の閃光」と同等以上に戦った……！」「……けん……し？」

その姿は時間が経つにつれ、徐々にだが鮮明になっていく。蒼・白・赤で構成されたボディ。額に輝く金色のＶ字型装飾。そして何

よりも、彼のモノの綽名（あだな）を体現させたかのような大きな……本当に大きすぎるその巨剣。

「あ、あ……あぁあああ！？」「来るな、来るなッ、来るなぁあああ！？」「ひ、ヒィッ！　ヒィィイイイイ！？」

それは最早見間違いようが無く、「蒼い流星」にして「剣士」と怖れられし『ＯＯ』ＧＳだった。

世界を震わす爆音と共に、其れは二メートルを超えようかという巨剣を前に突き出しながら９０１陸空隊へと突っ込んだ。そしてそれは、小細工や小技などを使わずに、正面から、力任せに、その全てを捩じ伏せた。

それが駆け抜けた後、総勢２５名いた９０１陸空隊は、ほぼ壊滅していた。『ＯＯ』ＧＳが通り抜けただけで、彼らは全滅したといっても過言ではない損害を喰らったのだ。

正に理不尽、かつ傲慢な力だ。そして圧倒的で絶対的過ぎる力でもある。だが、それが……それこそが「ガンダム」、「ＣＢ」が誇る最強の「ガンダム」、『ＯＯ』なのだ。

そして９０１陸空隊を一瞬で壊滅させた『ＯＯ』ＧＳは、そのままの勢いで、ついでのように数々の武装隊を蹴散らした。その様相を一言で言い表せば、アリを蹴散らす子供のようだった。

並みいる敵の、壁のような射撃魔法の弾幕を弾きながら、前進を止めない『ＯＯ』ＧＳ。その体には無数の細かな傷ができていたが、その程度の損傷で彼のモノの歩みが止められるはずもなく、遂には一隻のＬ級艦船の目前まで、接近を許してしまう。

そこからは、もう『ＯＯ』ＧＳの独壇場（どくだんじょう）だった。

『次ッ！』
『前方、距離１０９！』
『よし、行くぞエクシア！　頼りにしているぞ！』
『……！？　は、はいっ、マイスターッ！　存分に頼りにして下さい、この私をッ！！　マイスターの伴侶たるこの私を！！　むっはぁあああああああッ！！』
『……Ｏガンダム』
『どうしようもないので、諦めて下さい、マイスター』

Ｌ級艦船をＧＮバスターソード？による一閃で轟沈させながら、『ＯＯ』ＧＳは次の標的へと狙いを定める。次の標的は……管理局の最新鋭次元航行艦である、ＸＶ級次元航行艦！

「「剣士」が此方に接近してきます！」
「ええい、護衛の魔導師は何をしている！？」
「攻撃しても止まらないとのことです！」
「なら、何としてでも止めるのだ、アレを！　悪鬼共の象徴たるあの機体さえ墜とせば、この戦争は我ら管理局の勝利なっ！？」

そのＸＶ級次元航行艦へと、ＧＮバスターソード?を前に構えながら、『ＯＯ』ＧＳは突貫する。そしてその戦艦の護衛をしていた魔導師数十人を、文字通り一蹴しながら、ＸＶ級次元航行艦のディストーションシールドを軽々と突き破り、その艦橋と船体を容赦なく貫く。

艦橋と船体を貫かれ、爆散していくＸＶ級次元航行艦。それを背景にして、『ＯＯ』ＧＳは十六隻目となる獲物へと翔け始めた。その巨大な剣を前に突き出し、魔導師を蹴散らしながら、『ＯＯ』ＧＳは戦艦だけを狙って戦場を駆け抜けていく。

「やめて止めてえええ！」
『バオォオオオオオオ！』

その横暴を食い止めるべく、ガデッサを振り切ったダジとスヴァロギッチが『ＯＯ』ＧＳの前に立ち向かった。そして続け様に三発もの大火球を『ＯＯ』ＧＳに放つ。それは寸分の狂いなく『ＯＯ』ＧＳに着弾し、真っ赤な爆発を誘発させた。

『そんな物でぇえええ！』
「ええっ！？」
『バッ！？』

が、その爆発の粉塵から、ほぼ無傷の『ＯＯ』ＧＳがダジ達の方へと飛び出してきた。それにダジは一瞬茫然とするが、すぐに気持ちを切り替え、『ＯＯ』ＧＳ――「剣士」とクロスレンジでやり合う愚を起さぬ為に、一旦距離を置こうとする。そしてスヴァロギッチの炎を爆発させての超速度による移動をしようとした。

「……え、え？」

それが自分の声だと認識するのに、幾分かの時間が必要だった。
そんな困惑した声なぞ、戦場では滅多に出るようなモノではないからだ。しかし、彼女の前に広がる残酷な現実は、彼女にとって、それほど理解し辛い物だったのだ。

何故、超速度で動いているはずのスヴァの背中、自分の正面に、「剣士」が両手で持っていたはずの巨剣が突き刺さっているのか？

何故、そこから噴水のような勢いで、スヴァの生血が噴き出しているのか？

そして……何時の間に「剣士」が自身の目前に現れ、その巨剣をスヴァの背中から抜きつつ、それをこちらに振り抜こうとしているのか？

ダジにとっては理解不能な現実。だがその残酷な現実は、勢いを止めること無く、ダジのうなじが美しい首を吹き飛ばそうとしていた。

そこにダジの意思はない。あるのはただ『ＯＯ』ＧＳの、ダジにとっては理不尽な都合だけだ。そしてそれだけで行われる独善的な死刑執行。それが今まさに行われようと……

「斬り捨て、御免ッ！！」

『大丈夫か、リヴァイヴ・リバイバル！？』

『あ、あぁ。何とかな』

真っ青なボディを半壊させた一機のＧＮキャノン？に体を支えられ、その場から母艦であるエウクレイデスに向かうガデッサ。そのボディは隣にいる半壊したＧＮキャノン？とは比べ物にならない程大破していた。

まず、右手がＧＮメガランチャー共々、ばっさりと縦に切り裂かれていた。そしてその返す刀でやられたのか、ボディにも右から左へと抜ける剣閃が一閃、横に深く奔っている。右足はダジのスヴァロギッチに食い千切られていたが、それでもこの傷は酷い物だった。

『しかし……お前ともあろう者が、一体……』

『……ふん、私だって好きでこのような不格好になったわけではない。まさか奴がこの宙域にいたなんて、知らなかったのだからな』

ふらふらと、今にも崩れ落ちそうになりながらエウクレイデスに着艦する二機。そして粒子残量が切れて動かなくなったＧＮキャノ

ン?を格納庫に置き去りにしつつ、リヴァイヴは自身を構成するＧＮ粒子をガデッサからイノベイドに戻して艦橋へと向かった。その右足は先程のダメージが見られない程、しっかりとしたものだった。

「状況は?」

「最悪だね。まさかここに彼らがいたなんてねぇ……」

「Ｄｒ.、どうなさいますか? 私としては一応の目標（ノルマ）は果たせたので、このまま撤退するのがよろしいかと」

艦橋にはエウクレイデスの艦長代理であるジェイル・スカリエッティを中心に、「ナンバーズ（十二の最高傑作機）」の一番であるウーノがオペレーターのシートに、四番であるクワットロが操舵と砲撃を司る席に座っていた。

リヴァイヴの開口一番のその質問に、スカリエッティは顔色を変えずにそう言ったが、事態は想っていた以上に悪いようだ。此方の戦力はＧＮ粒子が切れかかっているＧＮキャノン?と『ＯＯ』ＧＳの二機のみ。対して、敵は未だ数隻が傷付かずに残っている状態で、それも先程十隻近くの船が援軍に来たような状況。明らかに此方の方の分が悪い。

それを見越して、ウーノは撤退を申請したのだ。そしてスカリエッティもその意見に異論はなく、直ちに撤退しようと、船を転身させて……

「敵艦隊より砲撃ですわ! コースは……避けれない直撃コースですのッ!?」

「「何ッ!?」」

「着弾まで、３、２、１ッ!」

ドンッ！　という大きな音と共に、艦橋が激しく揺れた。敵援軍からの砲撃が船体に直撃したのだ。揺れは椅子にしがみ付いていなければ、あちこちを転げ回る羽目になるほど大きく、もし転げ回っていたら、全身打撲程度では済まなかっただろう。

「ひ、被害は！？」

「第一リニアカタパルト、および右舷大破。航行に若干の支障あり！」

「操舵には支障ありませんわ！　ッ！？　第二波が来ますわよ！」

「転身！　急げ急げぇえええええ！」

スカリエッティの焦った声が艦橋に響く中、エウクレイデスがギシギシと鈍い音を立てながら旋回し、その場から退避しようとする。だが、それをさせないように、敵援軍の艦隊から次々と砲撃が放たれた。それを何とか躱わしつつ、ギリギリで安全領域まで逃げる事に成功するエウクレイデス。

「……それで、これからどうするんだい？　Ｄｒ．ジェイル」

「どうもこうも……逃げるしかあるまい？　『ＯＯ』も敵を幾らか足止めしてから此方に向かうそうだ。なら、私達は『ＯＯ』と合流しつつ、この場から退避するべきだろう？」

「……そうですね、それで行きましょうか」

そして、先程までいた次元空間とはまた違う次元空間に逃げ込みつつ、「ＣＢ」は残党の狩り場から静かに撤退していった。

「会いたかった……会いたかったぞ、「ガンダム」！！」

ダジが『ＯＯ』ＧＳに殺される、その刹那。その男はいきなり「剣士」を吹き飛ばし、ダジの前に現れた。そしてダジからすれば意味が分からない事を呟きつつ、とんでもないスピードで「剣士」へと真っ直ぐに突進していく。

「まさか君と再び巡り合えるとは……自分が乙女座であったことを、これほど嬉しく思ったことはない！！」

『グゥッ！？』

体勢を崩している「剣士」に凄まじい勢いで襲いかかっていく、漆黒のボディースーツを纏い、頭のヘルメットに角を生やした謎の男。その動きはダジですら全てを把握し切れないほど速く、またその男が振るう剣は、余りの速さ故に、最早霞みのようにしか見えなかった。

だが、それほど速い剣戟（けんげき）ですら、『ＯＯ』ＧＳは難なく捌（さば）き切り、さらには、先程から変な事を口走っている男を、逆に剣圧でダジの所まで吹き飛ばした。それにダジが背筋をゾッとしていると、その謎の男は更に変態チックな事を口にし出した。

「その剣捌き……間違いない、あの時の「剣士」だ！　何という僥倖（ぎょうこう）！　生き恥を晒した甲斐が……」

『この動き……どこかで……？』

『……思い出しました。ええ、忌々しくも思い出しましたよ。あの時確かに確実に絶対にぶっ殺したと思っていたのですが、まさか生きていたなんて……フフッ、どうやらゴキブリ並みの生命力を持っているようですね？』

『……エクシア？』

謎の男は訳の分からない事を言い出し、自身の名（迷）パートナーであるエクシアも、あの男を見た瞬間に、どす黒いオーラを出し始める。そんな心をへし折る様な状況の中でも、刹那は完全に自己を保つ。が、気後れはしていたようで、

（ああ、そうだ。後でフェルトにあの花のお礼をしなくてはな……）

彼は直視したくない現実から逃避していた。それも、かなり遠くの方にだ。刹那の強靭（きょうじん）であるはずの精神がそのような逃避を求めるほど、変態とヤンデレによる電波は疲れが溜まる物だったのだ。

「あったというものッッ！！」

『ならもう一回ぶっ殺してやりますよ！！　マイスターを何度も付（不）け狙い（意打ちし）、マイスターとの時間に何度も割り込んできた宿敵（恋敵）、ガチホモエェエエヱカアァアアアアッッ！！！！』

『（……ガチホモエーカー？　一体だれのことなのでしょうか？響きから何やら危ない方だとは思いますが……さて？）』

そんな彼をかなり、うんと遠くに置き去りにしながら、状況が動き始めた。まずは謎の男――ミスター・ブシドーから仕掛ける。彼は『ＯＯ』の正面から挑みかかり、両手に持つ長刀と短刀を『ＯＯ』ＧＳへと振り抜く！

ギィンッ！

だが、それは鈍い音を出しながら、『ＯＯ』ＧＳの特異な巨剣、ＧＮバスターソード?に易々と受け止められた。そして両者が鍔迫り合いとなる……かと思えば、ブシドーは再び元の場所へと吹き飛ばされた。元々の膂力が違いすぎるのだろう。見れば、ブシドーの黒いボディースーツ型Ｂ・Ｊは、『ＯＯ』ＧＳの巨剣と切り結んだことによる剣圧で、既にボロ布寸前になっていた。

「やはり君と私は、運命の赤い糸で結ばれているのだな、「剣士」ッ！！！！」

『なッ！？　異議ありです！　マイスターと赤い糸で結ばれているのは、この私、エクシアだけです！　異論は駆逐します！！』

が、ブシドー本人はそれに気付きつつも、敢えて無視した。「ガンダム」と戦うのならば、このぐらいの損傷など当たり前だからだ。そしてより速く、強く剣を振るうブシドーだったが、それよりもさらに強い連撃が、ブシドーすら反応し辛いスピードで、「剣士」から次々と振るわれる。

「ぬぐッ！？　まさかこれほどとは……！」

『こいつは、あの時の奴……なのか、エクシア！？』

『えぇ、そうです！　この動き、この剣捌きッ、この言動ッ！　間違いなく奴……「世界清浄」のトップエースだったグラハム・エーカーですッ！！』

それに一歩、また一歩と後退りするブシドー。彼の双刀型アームドデバイス「サキガケ」も先程から悲鳴を上げ始め、亀裂が入り始めていた。だが、そんな事を気にする余裕などブシドーにはなく、遂には『ＯＯ』ＧＳが剣を振るう度に後退させられてしまう。それに生き恥のような屈辱を感じつつ、己の力量のなさに奥歯を噛み砕

く事で耐える。

しかし、奥歯を噛み砕いている間にも、敵は剣を振るってきた。ブシドーが一度剣を振るう間に、『ＯＯ』ＧＳは三撃をブシドーに与える。それを長年の経験と技術でもって防ぎきるブシドーだったが、限界はすぐにやってきた。

「ぬおッ！？　不覚ッ！」
『これで！』
『死ねやガチホモ野郎ッ！！』

サキガケを絶妙なタイミングでいなされ、無防備となったブシドーに迫る『ＯＯ』ＧＳの巨剣。それは大気を盛大に爆圧させながらブシドーへと至ろうとする。それをただ茫然と見るしかないブシドー。

（折角「剣士」に巡り会えたというのに、こんな所で……何ッ！？）

だが、その切っ先はブシドーには届かなかった。巨剣がブシドーを圧殺する前に、赤き魔獣――スヴァロギッチがその邪魔をしたのだ。ドロドロとした炎を滾（たぎ）らせた体による体当たりは、『ＯＯ』ＧＳが咄嗟に掲げたＧＮバスターソード？の剣腹を僅かに溶かしていた。

「……何モノかは知らんが、恩に着……！」

ブシドーはその僥倖に感謝しながら、自身を救ってくれた人物へと礼を述べる為に、スヴァロギッチの背中にいるダジへと目を向け……瞠目（どうもく）した。

「……」

『バオォオオオ！？』

ダジはただスヴァの背中の上に突っ立っていた。なにもせずに、ただじっと。目の前に「剣士」がいるというのに、彼女はただ……刀身しかない剣を脇腹に生やしながら、スヴァロギッチの炎の中に、若干猫背になりながら立っていた。

ポタ……ポタ……と、刀身に貫かれた脇腹から零れ墜ちる血が、スヴァロギッチの背中に落ちる前に、その獄炎で蒸発していく。ダジの口からは赤い筋が形のいい顎先まで引かされ、生気がどんどん目から抜け落ちていった。

「何……だと……？」

それを目にしたブシドーは動きを止めた、止めてしまった。彼だって人間だ、自分のせいで死にかけている人間を放っては置けなかったのだろう。そこで彼はふと……気付いた。刀身から糸が伸びている事を。それを目で追っていくと……気が付かぬ内に剣を両手に携(たずさ)えていた「剣士」に行き着く。

そしてその左手には、糸が先から伸びている柄が逆手に握られていた。

「き……ッさまあああああああッ！！」

怒りを、愛憎を爆発させ、ブシドーが今までにない速度で『ＯＯ』ＧＳへと翔けた。その姿はまさに「黒い流星」で、霞むことすら生温いとばかりにスピードを急上昇させていくッ！！

だが、それでも。それでも『ＯＯ』ＧＳは……Ｓ＋ランクであるブシドーを、軽く一蹴する。

絶対、傲慢、最強、無敵。そのような言葉こそが相応しいとばかりに、ブシドーをその場から動かずに、剣腹が少し溶けたＧＮバスターソード？とＧＮソード？ショートからＧＮソード？ロングに持ち替えた二刀で返り討ちにする『ＯＯ』ＧＳ。

『バオォオオオオオッッ！！』
「如何！　逃げるのだ、赤いの！？」

そして『ＯＯ』ＧＳは、ブシドーの後に続き、炎を爆発させながら突進してきたスヴァロギッチの首元に、体を上手く使って、信じられない程滑らかに入り込んだ。そしてその大きな喉仏へと、ＧＮバスターソード？を容赦なく一閃し、そして深く突き刺した。

『バァアオオオオオオオオォォォォ……』

夥（おびただ）しい鮮血が勢いよく舞う中、『ＯＯ』ＧＳはデュアル・アイを一瞬蒼碧色に光らせて、その二刀でスヴァロギッチの体をさらに切り裂く。右肩、右脇腹、右足の脹脛（ふくらはぎ）。『ＯＯ』が剣を振るう度に生々しい鮮血が吹き出していく。そして最後には、ＧＮソード？ロン

グによる射撃で、その体に大きな風穴を開けられた。

スヴァロギッチの断末魔が、次第に聞こえなくなっていった。獣王が、狂炎が、たった一機の「ガンダム」により解体させられていくその様は、正に圧巻と言う他ない。もしくは……悪感か。

「ぬおおおぉおおおおおおおおッ！！」

そして、その悪しき様を目撃していたブシドーは、自身の身も省みずに、ダジを脇腹に抱えながら、その場から全力で撤退していった。勿論、剣から伸びていた細い糸を断ち切ってからである。今の彼では『ＯＯ』には勝てず、自身のデバイスも、未だ「ガンダム」とやり合うには不足している。いや、それ以前に。自分を助けてくれた人物が死にそうになっているのだから、まずはそれを助けることこそが優先されるべきだ。その想いが「ガンダム」に対し狂愛を抱くブシドーに、「ガンダム」を前にしながら撤退という手段を取らせたのだ。

スヴァロギッチの断末魔、その最後の方に、幾分かの歓喜が混じっていたように聞こえたのは、恐らく空耳ではあるまい。

『……ここで仕留めたいものだが、状況がそれを許さない、か』

『イエス、マイスター。今回は管理局の戦力を出来得る限り削るのが目的です。そしてその目的は既に達成されたとみていいでしょう。ここは撤退すべきかと……』

『見ましたかマイスター！？　あのガチホモエーカーが無様にも逃げていく姿をッ！　笑いが止まりませんね、フフフフフ腐フフフふふッ！！』

そしてブシドーとダジの撤退を不承々々ながらも見送ってから、

『ＯＯ』ＧＳ自身も撤退を始めた。今の彼の母艦であるエウクレイデスが既にこの場から撤退している今、あまり長くここに留まっているわけにもいかないからだ。ＧＮバスターソード?を左肩に、ＧＮソード?ロングを右腰に戻しながら、エウクレイデスのいる次元空間へと飛ぼうとする『ＯＯ』ＧＳ。その演算処理をしながら、刹那は考えた。

（これだけの力があれば、リミット・ブレイクしたフェイトにも…拮抗（きっこう）できるかもしれない）

と。

「……」

「ぜえッぜえッぜえッ……死ぬな、少女よ！！」

翔ける、駆ける、駈ける。汗と血を廊下に流しながら、ブシドーの母艦である「ユニオン」内を医務室目指し、全力疾走する。

「……ァ」

「ぜえッぜえッぜえッ……む！？　何か言ったか、少女よ！？」

ブシドーに抱えられたダジから零れ落ちる命の証が、彼らの足跡

を表していた。その足跡が長くなればなるほど、ダジから生命力が抜け落ちていく。それにまた焦燥感を募らせる。

「……ス……ヴァ……」

「ぜえッぜえッぜえッ……すまなかった。君のッ召喚獣はッ……」

際限なく募る焦燥感に気が狂いそうになりながら、彼は彼女の召喚獣を護れなかった事を謝った。あの時の彼には、ダジを助けるだけで精一杯だったのだ。

「……スヴァ……ちゃあぁぁ……」

「……スヴァ……ちゃ？　スヴァっちゃだと!?　まさか、君は……！」

だが、ダジは召喚獣の事を言ったのではない。彼女は自分が想いを募らせていた彼の事を言っていたのだ。もうこの世にはいない、「輝ける鬼火」……スヴァ＝ローグの事を。

「君が……スヴァの言っていたダジ＝ボーグ、なのかッ!?」

そしてダジが自分の盟友であった男がよく話していた少女……いや、今や立派なレディとなっているはずの女性だと知り、愕然とする。何というＦａｔｅ、何というＲｅａｌ、何という……Ｍｉｓｃｈｉｅｆ！　このような事が起きるとは……悪趣味にも程があるだろう、「ガンダム」ッ!?

「……スヴァっちゃ……スヴァ、ちゃあぁぁ……えへへ」

「如何ッ、気をしっかり持つのだ、ダジ＝ボーグよ！　君を死なせるわけには……！」

だが、その悪戯を、現実を何とかしたくとも、ダジの体から生命力が急速に失われているのは事実で……医務室まではまだまだ距離がある。それに諦めにも似た思いが心を駆け巡るが、それらを一切合財、全て捩じ伏せ、足を一瞬たりとも止めずに廊下を疾走する。

しかし……

「……これでずっと、ずっと……一緒だ、ね？　スヴァ……ちゃぁ……」

「……ならん！　諦めるな！　君が死んだとあっては、彼に申し訳が立たんではないか！？　彼は君の事を……激しくッ深くッ愛していたのだぞ、ダジ＝ボーグッ！？」

現実は何時でも何処でも、何事にも常時残酷で、

「えへへ……なら、とってもとっても……嬉しいなぁ……。私も……スヴァっちゃの事が」

世界に理不尽を……ばら撒き続けるのだった。

「……だいダイ、大、好き……だ……よ……」

白が目に痛々しく突き刺さる、数十人は収容できそうな会議室。その上座に座っていた彼女は、中央にある長いＩ字型のテーブルに肘を置きながら、静かに言葉を紡ぎ始めた。理不尽な世界を、残酷な現実を再度確認する為に。

「「ルイェビト」が落ちた……みたいやな？」

「はい、八神部隊長。先程第九次元航行艦隊に回収された「ルイェビト」残存部隊、その総勢数百万人もの人々が皆そう言っているので、間違いないかと」

彼女――八神はやてはそれを聞いて、目を瞑った。本人はそれに黙祷の意を込めたつもりだった。数え切れない人の、数え切れない死に対して。

「そか。……「ルイェビト」に何人局員がいたか、グリフィス君は知っとるん？」

目を瞑っただけの簡易な黙祷を死者に捧げながら、彼女は言った。深い、許せない感情を裏に煮え滾らせながら。

「確か……数千万人以上は配属されていたかと」

「で、生き残ったのが僅か数百万ほど……か。実際どれだけの人が亡くなったのか、うちには想像もできんわ」

彼女はそう簡単に言ったが、その脳裏では「Ｄ．Ｏ．Ｐ（天使の発表会）」事件で亡くなったギル・グレアムとリーゼ姉妹の事が思い返されていた。誰一人にだって、あんな辛い思いをさせてたまるか。その想いが彼

女を支え、荒々しい戦意を向上させる。

「……私もです。まさかこのような事が起きるなんて」

「せやから」

戦意が向上している間に放たれたその一言には、凄まじい力が込められていた。まるで力を分け与えるかのような、力強い言霊。それには彼女の言いたい事、その全てが凝縮されていた。

「せやから、もうこんな事が起きないようにする。それが今回、機動六課に課された任務や。そして……」

一拍、次いで宣誓。

「今度は、うちらの番っちゅう訳や。「ＣＢ」にたっっっぷりと煮え湯を呑ませるで。ええな、皆？」

「「「はいッ！！」」」

会議室にいた機動六課全メンバーのその意思表示を聞き、はやては満足そうに頷いた。そして同時に、彼女はポンポコポーンも決めた。

「ＣＢ」と徹底的に戦う、その覚悟を、彼女はここに至り、漸く決めたのだった。

誰もが等しく武器を手に取る権利を持つ。

――ＥＸＡＭ様より

その戦いに、正義はない。在るのはただ純粋な願いだけである。

――アストレア様より

第３１話　「ルイェビト」撤退戦（後書き）

もう、何も言う事はないでしょう。

エクシアとブシドーに作者の全てを込めた。以上です。

そしてりりなの成分を久しぶりに摂取して、効率を取りも……どす前に、

真っ白に……燃え尽きそうです。気が付けば、お盆が殺忙的な仕事にＴＲＡＮＳ－ＡＭしていました。……Ｗｈｙ？　私のお盆はどこに行ったのでしょうか？　このような作品をここまで読んで下さった皆様に感謝を。ついでに、ＯＯの映画まであと少しです！　映画公開までにもう一段落終わらせたいと思う今日この頃でした。

最後に。

エクシアメインヒロイン説……ありですかね？

第３２話　闇が蠢くと家族は悲しみ、雷はただ明滅を繰り返す（前書き）

死すべき時を識らぬ者、生きるべき時を識らず。

――鴨川秘様から、ジョン＝ラスキンより

第３２話　闇が蠢くと家族は悲しみ、雷はただ明滅を繰り返す

―新暦７５年１０月３１日―

「はーーーッはッはッはッはぁあああ！！」

「わーーーッはッはッはッはぁあああ！！」

第２３管理世界の「コード―６６６」という管理局の開発兼駐在基地に響き渡る、勝者の笑い声。それは周囲が瓦礫と死体で囲まれている、地獄の底のような世界でも、綺麗に響き、その高らかな音色を楽しげに震わせていた。

「クックックック……うぬらごときが、我に触れれるとでも思ったか？　馬鹿めが！」

「いやっほぉおおーーー！　僕ってやっぱり……最強なんだ！　凄すぎるんだ！　カッコ良過ぎるんだーー！」

その笑い声を出すは、身長がかなり低い二人組――９歳ほどだろうか？――であった。片方は周囲の死体をゴミでも見るかのように見下し、もう一人は異様なテンションで自分に酔い痴れている。

その二人組の一人、砂色の髪を持った人物？　の後ろに、ミッド式とベルカ式を併せたような魔法陣がいきなり浮かび上がってきた。そしてその上に、白い長袖長ズボンを着、顔に奇妙な白い仮面を着けた人物――アップルが現れた。だが、それを見た二人組は、驚愕などせずに、寧ろ親しみすら持って彼と接した。

「御苦労」

「ふん。これぐらいの些事、我にとっては造作もないことだ」

「あ、アップルさん！　どうですか！？　僕、速かったですよね！？　ね、ね！！？？」

数百、いや、あるいは数千か。それほど多くの「死」が周囲に転がっているにも関わらず、彼らは顔色一つ変えずに、親しげな様子で話し始めた。彼らにとって、それらはただのオブジェにしか過ぎないのだ。自分の任務を達成したという証の……「戦果」のオブジェにしか。

並みの人間なら発狂してもおかしくはない、そんな世界の終末みたいな光景。でも彼らは普通の人間とは根本から違うのだ。だから別段、そんなオブジェを見ても、何も感じない――いや、感じてはいるのだ。常人からかけ離れた、彼らなりの感性で。

「しかし、また派手にやった」
「フッ、仕方なかろう？　久しぶりにこの世に破壊と混沌を齎（もたら）したのだからな。あまりの愉悦（ゆえつ）ゆえに、手加減など忘れておったわ」
「確かにとっっっても楽しかったよね！　もっともっとやりたいぐらいだったよ、僕は！」
「そこは自重してくれ」
「……？　じちょうってどういう意味ですか、アップルさん？」
「「……はぁ」」
「え？　何？　どうして二人とも僕を見て溜息をつくの！？」

闇色の帳が青い空を完全に覆っていく。そして闇の空に金色の満月が輝き始める。

それを赤黒い地上から見上げながら、青色の頭と砂色の頭はその光、その月を――閃光と夜天を――まるで恨みでもあるかのように、鋭い目付きで射貫く。何も語らずにただじっと、彼女達はそれらを

恐ろしい目付きで射貫き続ける。

「まぁ、任務は達成。これより帰還するが、いいか？」
「うむ、良しなに」
「いいよーー！」
「では往かん、我等がいるべき書庫へ！」

そして彼女達は金と月を終始睨みながらアップルと共に、何処かへと飛び去っていった。

彼女たちが飛び去った後、その場に残されたのは、数千に及ぼうかという死体と無数の瓦礫、そして壊れかけのデバイス一機だけだった。

そして、その壊れかけのデバイスは、其れしか知らないとばかりに、延々と同じフレーズを繰り返し再生し続けていた。

―新暦７５年１１月１日―

ここレストラン「バンクーバー」は、ミッドでも指折りのレストランとして有名である。予約は一年先までびっしりと埋まり、なかでもＶＩＰルームと呼ばれる特別な部屋は、ミッドでもたった十数人、それも、それぞれの分野でトップに立つような人物しか入れない事で知られている。

そしてそのＶＩＰルームの一つ、「インフォメーション」と書かれた豪勢な部屋の椅子に、、はやてはちょこんと、場違いじゃないやろかと思いつつ座っていた。

（こ……ここがＶＩＰルームなんやな。始めて来たけど……何やこれ！？　この椅子一つとっても、うちの年間給料分ぐらいあるんやないかっ！？　ほんま、うちには縁のなさそうな部屋やなぁ……）

天上から光を放つ、天使を象った豪奢なシャンデリア。ムーンライトが至る所に散りばめられた、凸凹のある球状のオブジェ。結界によって切り取られた空間に浮遊する、メビウスの輪の形をした大きな本棚。そのどれもがはやての前にある、二人用の小さなテーブルを中心に、配置させられていた。

（……にしても、遅いなぁ。もうとっくに約束の時間は過ぎてるんやけど……）

想像すらできないような、膨大な金を注ぎ込まれて作られたその部屋に、一人でいたはやては、自身をここに招待しておきながら、現在も絶賛遅刻中である彼に対し、怒り半分、心配半分の気持ちを抱きつつ、体を子狸のように縮こまらせながら、彼が来るのをじっと待っていた。

「遅れてごめん、はやて！」

そして、じっと待っている事、十数分。そこで彼は漸くはやてのいる部屋に到着した。その姿を見たはやては、つい笑ってしまいそうになった。何時もならピシッと決まっているはずのスーツが、急いでいたせいか、どこかくずれていたからだ。それに彼の新たな一面を見たような気がして、嬉しかったのだ。

（ほんま……顔見ただけで、さっきまでの気持ちが吹っ飛んだわ。これが惚れた弱味ッちゅうんかな？）

「別にええで、ユーノ君。待ったっちゅうても、ほんの十分ぐらいやから、気にせんでええで？」

その嬉しさを噛み締めつつ、はやては待っていた彼――ユーノ・スクライア無限書庫司書長を、夜天の月を思わせるような透明な笑顔で出迎えた。

「第２３管理世界の「コード―６６６」っつう基地が全滅？」

「うん。それも、局員の全員を皆殺しにするっていう徹底ぶりでね」

ユーノはそう言いつつ、値段を聞くのが恐くなるほどの高級（庶民は食うな）オーラを発するステーキを、慣れた感じで口に運んだ。

……う、見てるだけで財布が軽くなるような気がするんやけど、何でそんなに食べなれてんね、ユーノ君？

「皆殺し……「ＣＢ」なんやろか？」

「いや、それはない……かな？」

彼にしては珍しく疑問形であった答え。　？　確証はないんやろか？　ありそうなもんやけどな。あと……ユーノ君？　物を口に入れたまま喋るんは、行儀悪いで？

「……？　でもそないな事をするのは」

「現場に残留魔力が残っていた。それも、その基地に配属されていないはずのＡＡＡ＋と……Ｓ＋クラスの魔力が、ね」

……ＯＨ、な　ん　て　こ　っ　た　。

「……ちゅうことは、少なく見積もっても、ＡＡＡ＋ランク以上の魔導師の仕業、なんやな？でも、そないな事をしそうで、且つ高ランク魔導師を保有する組織は……いや、でもおかしいやろ？　何でそれだけで「ＣＢ」やないって言えるんや？」

はやては口に入れていたサラダをしっかり飲み込んでから喋り始めた。それを見てユーノは自身のマナーの悪さに気付いたのか、急ぎ口に入れていたサラダを飲み込もうとする。

しかしこのサラダ、ホンマにうまいなあ。絶対これだけでウン千円、いや、下手すると数万円いくやないやろか？

「……ん、「ガンダム」が出すあの粒子。それが今回、全く確認できなかったからだよ。……はやても知っている通り、「ガンダム」のあの粒子は、例え「ガンダム」がそこからいなくなっても、数日間はその効力を維持する物だ」

「そうみたいやな。実際、「ルイェビト」に援軍を送ろうとしても、その粒子がまだそこに残っていて、通信が繋がらなくなり、結局は

間に合わへんかった……て聞くし」

まあ、それはあくまで聞いただけで、それがホンマかどうかは分からへんかったけど、ユーノ君がそう言うなら、本当に厄介やな、あの謎の粒子は。

「で、今回この基地からのＳＯＳを受信した次元航行艦隊がその場に到着したのが、その１２時間後。その時には……もう、基地は破壊されていた」

「……それで？」

この時、はやてはふと思った。これ、恋人同士の食事にする会話じゃなくね？　と。

……ま、いっか。後でユーノ君の体に払わせればええんやし。げぇッヘッヘッヘ、楽しみやなぁユーノ君？

「（なんか寒気がする……何でだ？）……それで、次元航行艦隊は「ガンダム」の仕業だと思い、その粒子を確認しようとしたけど……反応は見事なまでに０。痕跡（こんせき）すら無いときた」

「……でも、「ガンダム」はその戦闘……戦争に、現れなかった」

新たに料理が運ばれてきた。これは……馬鹿な、まだ値上がりするだと！？　こんなのはタヌキセンサーの故障だ！！

しっかし、金持ちやなぁユーノ君は。こんなん一品頼んだだけで、うちなら破産するで？

「そう、そこだ。それがおかしいんだ。何故彼らはその戦闘に現れなかったのかが分からない。……いや、寧ろそれが「ＣＢ」の仕業

であると思った方が納得できる」
「そして、ユーノ君がそこまで言うんなら、もうひと押し……何かあるんやないか？」

面食らったような顔をするユーノ。それに若干黒い子狸顔で追及強めるはやて。彼女はなにか確信でもあるのか、ユーノの眼から自身の眼を決して逸らさずに、自信満々にそう言った。それに苦笑しながら、お手上げのポーズをとるユーノ。

……うん、しっかりうちの美尻に敷かれとるで、ユーノ君？

「……さすがだよ、はやて。これがその確信に至った証拠さ」

そう言って懐に手を伸ばし、どうやって入れてたんだと思うような量の資料を取り出すユーノ。それを機能美溢れる机の上に広げつつ、彼はその一枚、残留魔力波長が載っている物を指差す。

……こんな時、ユーノ君の指、長くて綺麗やなーと思うんは、自分でもどうかと思うで？　でも、これがコンソールの上を華麗に動き回るのかと思うと……チュッパチュッパしたくなんねん。誰か同意してな？

「「D・O・P（天使の発表会）」で確認された、あの仮面を被った男の魔力波長が、現場に残っていた」

その言葉を聞いたはやての体に、衝撃が奔った。「D・O・P」事件？　仮面の男？　それはまさか……まさか……！

「何……やて？　あのなのはちゃんの魔法を封じた、「アップル」とかいう男の魔力波長が！？」

「うん。これだけでも「ＣＢ」の犯行だと思わないかい、はやて？」

そんなん、言うまでもなく……

「……ちゅうか、もう絶対「ＣＢ」やろ！？　何で他の線を考えとるんや、上層部は！？」

「……彼らは認めたくないのさ。「ガンダム」だけでも手一杯なのに、さらにＡＡＡ＋ランクとＳ＋ランクの魔導師が「ＣＢ」にいるなんて、ね」

「……まあ、その気持ちは分からんでもないけど……」

でも、それでも……認めなあかんやろ？　「ＣＢ」には協力社だけじゃなく、協力者――それも高ランク魔導師の――がいることを。だから上層部はいっつも無能やって言われるんや！

「あ、そうだ。それともう一つ。これは犯人の肉声を捉えた方なんだけど……」

……なんでそれをもっとはよう言わんかったんや、ユーノ君！？

「すぐに再生や！」

「でもこれ、ノイズが酷くてあんまり聞き取れないから、そんなに期待しないでね？　……じゃ、行くよ？」

そしてまた懐から指サイズのボイスレコーダーを取り出し、そのスイッチを押すユーノ。……後でそのスーツの懐、見せてもらえんかなぁ……。

「――ザ――ザザ――じ――かザが――ザザザ――ダザトザザザザザ」

「それにしても、ユーノ君、よくこんな時間取れたな？　「ルイェビト」陥落で無限書庫は事後処理や戦闘映像解析で死ぬほど忙しいって聞いたんやけど……」

さっきのボイスレコーダー。それは現場に残っていた、壊れかけのデバイスが発していた物を録音した物だったらしい。正直、何を言っていたのか、少なくてもはやてには理解できなかった。それはユーノも同じだったのか、彼はすぐにそれを懐にしまう。

そして、はやてはその懐にしまう一連の動作を見終わった後に、この食事会で一番気になっていた事を聞いた。だが、それがまさかユーノに聞いてはならない事だったとは、思いもしていなかった。

「ははッ！　確かに今の無限書庫は死ぬほど忙しいよ？　そうさ……死ぬほど……死ぬほど……ブツブツ」

死ぬほど……死ぬほど……とブツブツ呟くその姿に、はやてはあかん、地雷やったかと、聞いたことを後悔した。しかし、楽しい筈の食事会で、どうしてこう、恋人みたいな会話にならんやろ？　とも思う。

「な、何か知らんけど、地雷踏んだみたいで、ごめんな？」

「いや、謝らないではやて。全ては彼女、ブックさんが元凶（げんきょう）なんだ

から！」
「……なんやて？」
ピキ狸ッ。
「そもそも、ブックさんがおかし過ぎるんだよ！？　『司書長でしたら、この程度の些事は朝飯前でしょう？』とか言いつつ、大量の資料検索依頼を手渡すなんて、僕を殺しに来ているとしか思えないんだけど！？」
「……あー、でも、ユーノ君はそれを簡単に……あと、はやてちゃんの前でそういう話題は……」
「そうだよ！　彼女の言う通り、すぐに終わらせちゃうんだよ！　そしてまた『司書長でしたらうんぬん』とか言って、僕の処理限界を試すような量の仕事を渡してくるんだ！　本当、信じられないよ、彼女は！？」
ビキ狸ッ！
「……信じられへんのは、ユーノ君も一緒やで？」
「……え？　ど、どうしたのはやて？　どうして君がそんな恐い顔をしているの？」
「……何で」
「え？」
ぴきぴきピキビキ狸っッ！！
「何で、なんでユーノ君は恋人のはやてちゃんとの食事で、他の女の話題を出すねん！？　それは女性からすれば信じられへんことなんよ！？　そこんとこ、分かっとるんかい、ユーノ君ッ！？」
「え、えぇ！？　そういうものなの！？」

「そういうもんなんや！　全く。ユーノ君はもう少し乙女心を知った方がええで、なッ！？」
「は、はいぃ……ど、努力します……」
そんな変声期も迎えていない、可愛らしい声で言われても、うちは絶対許さんで、ユーノ君？
とりあえず、夜。うちの機嫌がよくなるまで、頑張ってな？
「それにしても、驚いたな。あのフェレット野郎がレストラン「バンクーバー」のＶＩＰルーム保持者だったなんてよ。シグナム、お前はどう思う？」
「そうか？　私は寧ろ当然だと思うが。スクライアは管理局の情報局を率いているようなものだから、それぐらいの扱いはされるだろう……と、私はそう思う。お前はどう思う、ザフィーラ？」
「……」
「ザフィーラ？」
数百メートルもの巨体をミッドの空に浮かべるアースラ。その中

の一室、デスクワークをする為に幾つもの四角い机が置いてある部屋。そこにヴィータ、シグナム、ザフィーラが思い思いの場所に座りながら、はやてとユーノの会合について話し合っていた。

「ん……すまない、聞いていなかった」

「……どうしたんだよ、ザフィーラ？　お前ここんとこ、なんかおかしくねえか？」

「あぁ。ちょうど……そうだな、「D（天使の発表会）・O・P」事件あたりからか？　ボウっとすることが多くなったのは？　……どうしたというのだ、ザフィーラ？」

「いや……気にするな。個人的な悩みについて、少々、考えていただけだ。……何、案ずるな。すぐに解決できるような、そんな他愛もない悩みごとだ。お前達が気にすべきことではない」

だがその話し合いは、気が付けばここ最近様子がおかしいザフィーラについての追求へと変わっていた。

最近、ザフィーラの様子がおかしい。それは八神家共通の認識であった。日常でも寡黙で冷静なはずの彼が、どこか茫然と――もしかしたら自失も付け加えていいかもしれないほど――ここではないどこかに思いを馳せながら、虚ろになっているのである。

その訳を問い質そうとしても、彼は主であるはやてにすら打ち明けなかった。アルフなら何か知っているかもしれないと思い、彼女に聞いてみても、首を横に振るだけで、何も分からなかった。

「「「……」」」

その場に沈黙が落ちる。重苦しい沈黙だ。家族にも主にもアルフにも、その悩みを打ち明けないザフィーラ。それはまるで、「お前

達には関係ない」と言われているようで……少しばかり、家族として悲しかった。

現在、第一管理世界「ミッドチルダ」で市場規模を急伸させている「グリード」コーポレイション。その社長室に繋がる通路を、一人の女性が深紅のハイヒールを床に打ち鳴らしながら歩いていた。

ハイヒールが鳴る度に揺れる、黄金より尚美しい金色の長髪。漆黒のドレスに包まれた、豊満でありつつも清楚さを失わない、そんな奇跡の黄金比率を保つ美体。男ならば一度は目を奪われるであろう絶美を、周囲に絢爛（けんらん）と魅せ付けるおぱ～い。新雪のような白さと、マシュマロのような柔らかさを併せ持つ、潤（うるお）い豊かな柔肌。

そしてルビーすら凌駕（りょうが）する輝きを秘めた深紅の瞳を持つその女性は、右手に金色の三角形を持って、奥行きが百メートル近くある広大な社長室のドアを開けた。

そのドアを開ける動作一つとっても、彼女はどんな絵画よりも絵になり――まるで女神のように、美しかった。

「……」

「これはこれは……お待ちしておりましたよ、フェイト・Ｔ・ハラ

オウン執務官殿？」

そんな女神の化身の如き女性を出迎えたのは、ヒキガエルを平べったくしたような顔を持つ、６０～７０歳ほどの醜悪な老人だった。その老人の口の端からは涎が垂れ、頭にはないようなあるような、そんな程度の髪しか残っていない。

「……では、何故私がここに来たのか、勿論分かりますよね？」

「げぇッへッへッへ。勿論で御座いますとも。うちが「ＣＢ」の協力社だという根も葉もない噂が流れている事は、巷では有名ですからね」

女性は意図的に感情を抑えた、抑揚のない声で話す。対して、老人の方は不気味に笑いつつ、下卑た声で応じる。女性は腸が煮えくり返りそうな想いで、老人は自分だけは何があっても大丈夫だという慢心でもって話し合う。

「なら聞きましょう。貴方はどうして「ＣＢ」に協力するのですか？」

「げぇ……？　何を言っておりま」

「惚けても無駄です。この会社が「ＣＢ」の協力社であるという証拠は、既に挙がっているのですから」

フェイトはそう言って、老人の前にあるテーブルに、その証拠を記した書類をばら撒けた。その内の一枚を取り、顔を青くさせる老人。だが……

「げぇッへッへッへ……確かに確かに。これらの証拠を突き付けられてしまっては仕方がありませんな。貴方にはここで」

青かった顔色を再び慢心で醜く歪めつつ、老人は机の引き出しの裏にあるボタンを押した。それと同時に、その部屋に結界が張られ、フェイトが入ってきたドアから数十人もの魔導師が傾れ込んできた。

「ＡＭＦッ！？」（アンチギワメタルド）

「死んでもらいます！」

フェイトがその結界――「Ｊ・Ｓ事件」で猛威を振るったＡＭＦ――に驚愕している間に、対ＡＭＦ装置を装備したＥ～ＡＡランクで構成された魔導師部隊が、彼女に放つ魔法を構築しつつ、統制のとれた動きでフェイトへと突撃していった。

「あ……うあ……」

広大で豪勢だったはずの社長室は、今や廃墟にある一室と何も変わらぬ様相を衆目に晒していた。値段が付けられそうにない骨董品の品々は、見事なまでに全て粉砕され、部屋に走っていた通信用の回路も、高魔力の波動を受け、壁のあちこちから飛び出している。

「ひ……ひぃいい！？」

ＡＭＦ内での戦闘で、これほどの被害が出るのは珍しいことだった。普通はここまでの被害が出る魔法を発動できない為だ。魔力の結合を解かせるＡＭＦは、正に魔導師からすれば「天敵」のような結界なのだ。そして、これが示すことは唯一つ。

フェイト・Ｔ・ハラオウンと魔導師部隊の戦闘は、それほどまでに圧倒的な物だった……という事。

「あ……あぁああ……！」

無論、

「さて……それでは御同行願いますか、「グリード」コーポレーションの社長であるヒーキ・ガ・エールさん？」

「ご、五十人近い私の部隊を一瞬で……き、貴様、本当に人間なのか！？」

「……えぇ、人間ですよ。少なくとも、「ＣＢ」のロストロギア「ガンダム」よりは」

フェイト・Ｔ・ハラオウンだけが圧倒的だった、という意味で。

「フェイト・Ｔ・ハラオウン執務官殿！　任務、御苦労様です！」

「「御苦労様です！」」

「あ、でも、私だけじゃもっと時間がかかっていました。ここまで迅速（じんそく）にエールを捕らえる事ができたのは、ひとえに皆さんのご協力のおかげです。……ご協力、感謝致します！」

気絶している数十人もの魔導師と、顔色が青を通り越して緑になったヒーキ・ガ・エールを連行しつつ、フェイトは第１０２陸士部隊からのお礼に、そっとはにかみながらそう答えた。その笑みに心奪われた男性が何人いたか、とてもではないが書き切れたものでは

ない。

「は、ハラオウン執務官殿！　これからお茶でも……」「てめ、抜け駆けはさせんぞ！　執務官殿、こいつなんかより自分とお食事でも……」「休日でいいので、一緒にどこかへ行きませんか、ハラオウン執務官殿！？」

「あ……はは……」

フェイトに心奪われた男たちによる阿鼻叫喚（あびきょうかん）な光景を、冷や汗と共に微妙な笑みで見るフェイト。そんな彼女の元に、ある一枚の報告書が、第１０２陸士部隊の隊長から手渡された。

「あ！　隊長だけずるいですよ！」「抜け駆けは駄目って言ったのは隊長でしょう！？」「見損ないましたよ、隊長！？」

「お前ら、いい加減に黙らんかぁああい！　見ろ、ハラオウン執務官が盛大に困っておるだろうが！　男どもは黙って後始末でもやっておけぇえい！　やらん奴は……今度の給料、９９．８９％、カットしてやるぞ！！」

「「「何ーーー！？」」」

隊員たちのブーイングの嵐を、その一喝で見事に沈めた老齢な隊長は、苦笑いをしているフェイトに一歩近づき、小声で話しかけた。それを聞いたフェイトは、身に緊張感を漲（みなぎ）らせつつ、その報告を聞いた。

「やっぱり……」

「居ましたな、奴は」

「……ええ、そうですね。今回はどうやらアドバイザーだったようですが、恐らくこれを調べても……」

「埃（ほこり）一つすら出んでしょうな、常日頃のように」

その報告を聞き終えたフェイトは、酷く重たい溜息を何度もつきつつ、再び報告書に目を通し始めた。

その報告書の一番上には「人事リスト」と題されており、「グリード」コーポレーションの総員の名前が記されている物だった。そしてその中の一つ、役職「アドバイザー」として記されている人物の名を、フェイトは何度も何度も他の次元世界でも目にしていた。

何故ならばその名は、執務官の間では知らぬ者がいない程、知られた名前でもあったからだ。次元世界有数の投資家にして、数多の世界の企業に雇われているアドバイザーでもあるその名は、しかし、同時に黒い噂も絶える事がなかった為に、何度も執務官に調べられていたのだ。

しかし、フェイトも混じった数十度にも渡るその調査では、その名は完全に白であった。そう、

寧ろ、清々しいほどまでに。

だが、その清々しいほどの白さも、今回のような「ＣＢ」の協力社疑惑を持つ企業の一斉摘発（いっせいてきはつ）によって、今度は清々しいまでに真っ黒となっていた。それも当然で、その名は「ＣＢ」の協力社疑惑があった企業全てに雇われていたからだ。

その白から黒へと転じた名は、資料にこう記されていた。

「……コードネーム「ラヴクラフト」。私は貴方を絶対に……絶対

に、捕まえて見せます！」

「それにしても……」

フェイトは腕時計をチラリと見た。時計の針はミッド標準時間でちょうど午後６：０６：０６を指している。それを見ながら彼女は、二人だけで街に出かけた、自身の子供とすら言える彼らのことを心から案じた。

「キャロとエリオ、二人だけで大丈夫だったかな？　財布とか落としてないかな？　心配だなぁ、心配だなぁ……」

時計を見ながらソワソワと、落ち着きなく体を左右に揺らすフェイト。彼女が何時子供離れ、あるいは脱過保護にまで至れるのか。それは彼女の親友であるなのはやはやて、義兄であるクロノ、母親であるリンディ、使い魔であるアルフにも分からなかった。

色彩豊かな髪の色が歩道を彩り、至る所に植えられた街路樹が灰色の道路に影を落とす。その上に、天を突く様な高層ビルの影が覆い被さり、その下の雑踏や雑談による雑音が、途絶えることなく耳を揺さぶった。

ある人は通信魔法を発動して、画面の向こう側にいる人と何やら熱く討論している。

ある人は速読魔法を発動させて、分厚い本をしきりに頷きながら読んでいる。

ある人は沢山の荷物を浮遊魔法で周囲に浮かばせつつ、他の商品へと目を向ける。

ある人は、ある人は、ある人は……

「ひゃあぁ……凄い人だね、エリオ君？」
「うん、そうだねキャロ。こんなに沢山の人達が集まっているの、始めて見たよ」
「私もだよ。フリード、大丈夫？　緊張してない？」
「きゅるる……」

そんな数千・数万近い人盛りの間を縫うように動く、ピンク髪の少女と赤髪の少年、そして少女の頭の上に乗っている子竜がいた。彼ら三人？　は口を大きく開けたまま、ミッド中央都市をテクテクと歩いていく。

「ミッドの人口は確か……１２０億ぐらいだったかな？」
「そのうちの何人がここにいるんだろうね？」
「多分……一億ぐらいだったと思う。でも、ちょっと自信ないや。

後でフェイトさんに聞いてみよう？」
「うん！」

少女は可愛らしいピンクのワンピースを着て、その上から水色のカーディガンを羽織っており、頭には白くて大きな帽子が子竜と一緒に乗っかっていた。少年は黒が多めのジャケットを赤いＴシャツの上に着込み、腕にはデバイスでもある腕時計を巻いている。

そんな二人の子供達は、少女の子竜と共に、ミッドでも有数の遊園地に行ってきた、その帰りの途上であった。とても楽しかったのか、少女はホクホク顔で、凄く満足そうである。逆に少年と子竜の方は疲れ切った様相で、顔を酷くやつれさせていた。

「それにしても……「失禁確実！　恐怖の魔法コースター」とか「精神治療必須！　冥王の睨みつき奈の覇（は）コースター」とか「高さ６６６メートル！？　次元世界最高の安眠コースター」とか、面白い乗り物ばっかりだったね、エリオ君！」
「そ……そう、だね、キャロ。とても……とても凄かったよ……」

僕の精神を削る、という点で。とエリオは心の中で付け加えた。キャロが今挙げた乗り物は、全て第９７管理外世界におけるジェットコースターに相当する物である。キャロは何故かそういった乗り物にしか乗りたがらなかったのだ。

「（やっぱり、いつもフリードに乗っているせいかな？）と、ところでキャロ？　どこに行こうとしているの？」
「んっとね……あともう少しなはずなんだけど……」
「きゅる？」
「あ、あった！　ありがとうフリード！」

エリオがキャロのコースター好きに悩んでいる間に、キャロはお目当ての場所を見つけたようで、エリオの腕をグイグイと引っ張り、そちらに連れて行こうとする。

そして、その時エリオの腕に当たった小さなおぱ～いのささやかな、本当にささやかな感触が、エリオの思考を一瞬で硬直させた。

「きゃ、ＫＹＡＲＯ！？」
「どうしたのエリオ君？　顔が凄く赤いよ？」
「あ、あうぅ、む、むむむ……」
「む……？　むがどうし……あっ！？」

上ずった声でキャロにおぱ～いの事を伝えようとしたエリオの努力は、遅きに失することなく、何とか報われた。キャロは自身がしている事に気付くと、顔を満遍なく赤くさせ、急ぎエリオから離れた。沈黙が互いの間に重く圧し掛かる。

「……こっちだよ！」
「え？　う、うん」

それに耐えかねたのか、未だ林檎よりも赤い顔を、更に赤くさせながら、キャロが素早く動いた。キャロは目当てにしていた場所―ミッド中央第一自然公園にエリオの手を引きながら入園し、そのまま一緒にすぐ近くの公園のベンチに座った。この間、僅か十二秒の早技である。

普段よりも激しく動いたせいか、キャロは若干息を乱していた。だが、それを一瞬で回復させると、彼女はこの二人だけのデートの本当の目的を果たす為に、未だオロオロしているエリオを正面に見据えてから、本懐となる話を切り出した。

「エリオ君」
「な、何？　キャロ」
「……あんまり、無茶しないで」
「ッ！？」
「……エリオ君が「デカブツ」に一撃でやられたとしても、それがエリオ君が無茶をしていい理由には……ならないんだよ？」
「……キャロ、それでも僕は……僕は……！」

キャロがこのデートの本懐として、二人っきりで話したかった事柄。それは最近のエリオの無茶についてだった。そして彼女はエリオが無茶をする理由を知っていたが為に、有給まで使って、エリオと話す機会を設けたのだ。

エリオが無茶をする理由。それは「D・O・P」事件において、彼が「ガンダム」の一機である「デカブツ」と戦った際に、たったワンパンチで戦闘不能にされた事が、その無茶をする原因であった。

死ぬような訓練をした、死線を越えるような実戦も何度か経験した、自身の魔導師ランクも、ほぼAAランクまで昇りつけた。なのに……

なのに敵は、「デカブツ」は、そんな事を気にも留めずに、エリオという一個人を、たったワンパンチで殴り倒し……その全てを吹き飛ばした。

それがどれだけ悔しい事か、想像に難くないだろう。死ぬような思いで身に付けた力を、たった一回の攻撃で「傍若の石ころ」と同義させられたのだ。

それはエリオの心の奥底に、許容し難い「何か」の想いを齎した。

そもそも、エリオの力は自身を護る為の力では無い。彼は「騎士」だ。それも、護るべき者を得た、純正の「騎士」である。故に、彼は自身の力が足りなかった時、その代償が誰に支払わされるのかを、理屈では無く、本能で知っていた。

「強く……強くなりたいんだ！　皆を……キャロを、護れるぐらいに！！」

「……エリオ君の気持ち、私も痛いぐらい、よく分かるよ。だけど……だけどね……！」

だから彼は強くなろうとしたのだ、多少の無茶を承知の上で。皆を、傍らにいる可愛らしい女の子（パートナー）を泣かせない為に。そのはずだったのに……

「だけどね……！」

どうして彼女は今、泣いているのだろうか？　自分が泣かせてしまったのだろうか？　泣かせない為にしていたはずの無茶で、自分は彼女を泣かせてしまったのだろうか？

「それでエリオ君が傷付くのは……もう、見たくないんだ」

彼女は今、泣いていた。何という本末転倒だろうか？　泣かせない為にしていたはずの無茶で、彼女を泣かせてしまうなんて……最早、喜劇にもならない駄劇でしかない。

「……キャロ」

「エリオ君、約束して？　もう無茶はしないって。私と一緒に強くなるって、約束して？」

「でも……！」
「私もこの前の戦いで、自分がとても……とても弱かった事を知ったの。だから、私もエリオ君と一緒に強くなりたい。勿論、体に負担をかけるような無茶はしないでだよ？」
「……でも！」
「ふぇ……！」
「！？」
「ふぇえええ……！」

そして、そんな駄劇をしてしまったエリオには、最早彼女の手を払いのける権利は無く……その涙一つで、容易に決意を折られてしまう。

「きゃ、キャロ、泣かないで！　分かったから、もう無茶はしないから！！」
「本当ッ、エリオ君！？」
「……あれ？　キャロ、さっき泣いて……」
「フリード、今の聞いたよねッ！？」
「きゅくるるー！」

例えその涙が、フェイトに秘密で八神はやてから教わった嘘泣きだったとしても、だ。

「……」
「やったー！　エリオ君の無茶を止めれたよ、フリード！」
「きゅくるるー！」

呆然とするエリオの前で、フリードリヒと笑い合うキャロ。そんな彼女の姿を見ていたら、先程の事など、どうでもよくなってしまった。それに苦笑しかけたエリオは、しかし苦笑するのに失敗し、

間違って腹から笑ってしまう。

「あっはっははははっはっはっはっは！」
「やったー！　やったー！」
「きゅるるッ、きゅるるるーー！！」

三つの笑い声が公園内に響いた。それを聞いた周囲の人々は、自然と頬が緩んでしまい、気付かずに笑顔を作ってしまう。そしてその後は一緒に笑い合った。それは次々と人々を巻き込み、どんどん広がっていく。それに気付かずに笑い続けるエリオ、キャロ、フリードリヒ。

その笑い声は、長い間、絶える事はなかった。そしてこの時、人々は、エリオとキャロは確かに……確かに、分かり合えていたのかもしれない。それも、痛み（ペイン）を感じる事無く、である。

誰かを護る力は、決して破壊だけを成す力には負けない。それを顕現（けんげん）させたかのような光景が、そこにはあった。

何度も同じ過ちを犯すのは人間（ヒト）であるが、そこから救いの手を差し伸べ、平和の為の道を模索するのもまた人間（ヒト）である。陰（かげ）を作るのも陽（ひかり）を照らすのも……それは心という転換器を持つ人間（ヒト）の持ち様次第だ。

――月光閃火様より

第３２話　闇が蠢くと家族は悲しみ、雷はただ明滅を繰り返す（後書き）

キャロに謝りに行きましたが、ヴォルテールを召還されました。そして何故かフェイトさんがザンバーを振りかぶりつつ、「どうして二人っきりで行かせたの！？」と言ってきます。キャロ好きとフェイトさん好きには謝罪を。土下座？　それはデフォです、すいません。

そして最近気づきましたが、「アレ？　フェルトカイタッケ？」。……プロットでは取り敢えず第３４話で出します。そしてフェルトは作者のｙ「刹那・Ｆ・セイエイ、歪みを駆逐する！」。ここまで読んで下さった皆様に感謝を。後書きにコメディ入れて御免なさい。ＯＯの映画まであっとすっこし！

最後に。

作者は冒頭の砂色頭の子が大好きです。

第３３話　闇が蠢くと星々は嘆き、理が動いてもただ気づけず（前書き）

【神は超えられない試練を人には与えない】

――小梔子様から、ユダヤ系の諺より

第３３話　闇が蠢くと星々は嘆き、理が動いてもただ気づけず

――新暦７５年１１月１０日――

ミッドチルダの地上本部に程近い、広大な敷地に立っている巨大な建築物。それは地上本部よりは小さいものの、その大きさは周りの物と比べ、一際抜きん出た物がある。そしてその巨大な建築物の入口には、「中央技術開発局」と銘打たれていた。

中央技術開発局。それは魔法先進世界であるミッドの中で、最先端魔法技術や古代遺失魔法などを調査・研究・開発する、管理局お抱えの研究機関である。

そして第１局長～第６局長により運営・管理されている、この巨大な研究機関。その施設内の、最もセキュリティーが硬い一画に、彼女――高町なのははいた。

中央技術開発局の第１局にある研究室のベッドに、なのはは筋肉が薄ら付いた、白い裸体のまま横たわっていた。すると、幾つものモニターがなのはの眼前に展開され、現在計測している数値をなのはに知らせる。その数値を眺めつつ、なのははひっそりと溜息を吐いた。

「（ハァ、今回も何も出そうにないの……）イリスさん、どうですか？」

『もう少し待ってちょうだい。たぶん貴方が部屋に来るころには出る筈だわ』
「……そうですか。分かりました」
数十にも展開されていたモニターが次々と閉じられていくのを尻目に、なのはは緑色の、病院で着るような服を身に纏いつつ、ベッドから起き上がり、その研究室から出ていった。そしてその隣にある部屋――部屋名は第1局長室とある――にノックをしてから入る。
『どうぞ』
「失礼します」
その部屋の第一印象は、まず何と言っても薄暗く、そしてとても狭い、という物だった。机の上には見え辛いものの、山のような資料・本・パソコンの数々が散乱しており、辺り一面には明滅を繰り返すコンソールやモニター、テレビがしっちゃかめっちゃかに置か……捨てられている。まさに「足の踏み場？　何それ食べられんの？」といった惨状を具現化したあり様だった。
「……イリスさん、できればもう少し片づけて欲しいのですが……」
「それは科学者が真正の真理を見つけるのと同じくらい無理難題な事よ、なのはさん。詰まる所、無理だという事です」
「ですが、この部屋に毎日訪れる私の事も考慮……するわけないですか、ハァ……」
そのような壊滅的に散らかった部屋に入室したなのはは、部屋の中央の椅子に座りながら、なのはが来ても手を休めずにコンソールを打ち続けている五十代半ばの女性を、まず初めに半眼で睨んだ。
彼女は潔癖症ではないが、綺麗好きではあるのだ。だから彼女は

このような部屋の惨状を許容できずに、いつも訪れる度に「片づけて？」とＯＨＡＮＡＳＨＩしているのだが、部屋の主たるこの女性はのらりくらりとそれを躱わすばかりで、全く聞き入れようとはしなかった。

以前はそれに切れかけ、魔法の調査どころではなかったのだが、なのはもこのやりとりに慣れていき、今ではもうこのやり取りは挨拶代わりにすらなっていた。しかし、それでもこの部屋を片付けて欲しいという切実な願いは健在だったが。

「まぁ、挨拶はその辺にしておきましょう。今は謎の魔法体系で掛けられた、詳細不明の魔法の解明・及び解除が最優先事項ですからね」

「……この部屋を少しでも片付けて下されば、もっとスムーズに行くと思うんですけれども……」

『私もそう思います、ミス・ラビリンス』

そのなのはとレイジングハートの切実なお願いは、しかし、薄汚い白衣を着ていた女性が、自分で淹れたブラックコーヒーを一口飲んだ後に、若干の考慮すらされずに却下された。それも、何やら面倒そうな抗議付きで。

「貴方達に良い事を教えてあげるわ。現実だとね、「それはそれ。これはこれ」という言葉が通じるのよ？　詰まる所、片づけは片づけ、研究は研究で、そこに相互関係は何も無いという事であり……」

「（まずい、またあの長いうんちくが始まっちゃうの！）そ、それで、結果はどうだったんですか、イリスさんッ！？」

「……であるからにしてって結果？　結果は異常なし。詰まる所、何も分からなかったわ」

その面倒くさそうな講義を既に何度も受けていたなのははは、藁(わら)をも掴む想いで話を逸らすべく、先程行った検査の結果を聞いてみた。だが、その結果はどうやら今までの結果と何ら変わりがなかったらしく、かなり素っ気ない態度で告げられた。

「……ハァ」

「そんなに溜息ばかり吐いていると、幸せが逃げるわよ、なのはさん？　ただでさえ貴方は「嫁ぎ遅れること、間違いなしな女」ランキングで堂々たる二位に入っているのですから。詰まる所、お嫁さんになれなくなる、もしくは婿さん――此方の方が確率的には高いかしら？――を迎えられなくなる可能性が増えるというこ……」

「なんですかその「嫁ぎ遅れること、間違いなしな女」ランキングって！？　しかも、どうして私がそのランキングで二位なんですか！？」

「私に聞かれても困るわ、なのはさん。ちなみに、貴方は二位ですけれど、四位にはシャマルさんが入っています。そして、栄誉無き一位を見事獲得したのが……貴方達の部隊長である、八神はやて二等陸佐よ」

「……はやてちゃん」

はやてが「嫁ぎ遅れること、間違いなしな女」の一位だという事を聞き、複雑な想いを胸中に抱いたなのはだったが、すぐに逸れていた話を本題へと軌道修正するべく、イリスへと妙に引き攣(つ)った笑顔を向けた。……決して、決して親友の惨(むご)い現状を聞きたくなかったからではない……よ？

「えっと……」

「それにしても、この私ですら解明の糸口も見えないとは。一体何て言う術式なのかしら、これは？」

「あ、はい。そうですよね？　ミッド式とベルカ式を併せたような

術式なんて、見た事も聞いた事もないですよ」
「……う～ん、謎だわ。ぜんっぜん分からないわ。詰まる所、お手上げって状態ね、これは」

だが、如何せん本題へと修正しても、何も分からないのであっては、仮説を打ち立てる事も、ましてや、それが何なのかについて、議論を交わすことすらままならないのが現状だった。それに身を焦がすような焦りを感じるも、何とか歯を食い縛る事でそれに耐えるなのはだったが、その口内には血が満ち満ちていた。

その懸命な姿を見つつ、中央技術開発局の最高権力者でもあるイリス・ラビリンス第1局長は、何やら思い詰めた様子でしきりに頭を上下に動かし、やがて何かを決心したのか、真剣な様子で口を開き始めた。

「……私は思うのですが、「夜天の書」ならこの魔法体系――ミッドでもベルカでもないこれについて、何か知っているのではないですか？　詰まる所、リインちゃんやはやて二等陸佐、そして「守護騎士（ヴォルケンリッター）」の方々なら、何か知っている可能性が無くもない様な……」
「それですが、私はもうはやてちゃんやリインちゃん、それにシグナムさんやシャマルさん、ヴィータちゃんにも聞きました。それでも結果は……何もなかったです」
「……？　ザフィーラ様は？」
「……は？」

なのははイリスの「様」発言を聞き、耳を疑ったというよりも真剣（マジ）で耳鼻科に行こうかと思ってしまった。なのはは10月12日頃からほぼ毎日イリスと会っているが、彼女が何故ザフィーラに「様」をつけるのか、全く分からなかったからだ。

イリス・ラビリンス。彼女は中央技術開発局の最高責任者である第一局長であると同時に、開発局随一の科学者でもある。その才はあの狂気の科学者ジェイル・スカリエッティ程ではないにしろ、並みの「天才」を遥かに上回る物で、それは管理局が現在急ピッチで造船している最新鋭次元航行艦、ＸＶ級次元航行艦の設計を、ほぼ独力で完成させたことからも窺い知れる。

だが、ここでスカリエッティには劣っている、と言う人がいるが、そもそも、スカリエッティ自体が反則染（チート）みた頭脳だったのだ。背後に最高評議会という巨大なパトロンがいたとはいえ、それでも彼は戦闘機人やレリックウェポン、ＡＭＦ内蔵型ガジェット、プロジェクトＦの基盤といった、それ一つで歴史に名を残す事が確実な開発を幾つもしているのだ。それも、その全てをほぼ完成の域に至らせてである。

だから、スカリエッティに多少劣った所で、イリスが優秀でないという事にはならない。寧ろ、彼女は若干４０歳という若さで局長にまで昇り詰めた、ミッドきっての秀才なのだ。しかし、それほどの才を持ってしても、スカリエッティの足元にすら及ばないのだから、彼が如何に世界に愛されていたか、どれ程「異才」だったのかが理解できるだろう。

「……あの、今何て？」
「え？　だから、ザフィーラ様には聞いていないのって聞いたんですけｄ」
「……どうしてザフィーラさんに「様」をつけるんですか？」

そして、若くして局長にまで昇り詰めた彼女は、例え最高評議会の議員であろうとも、敬称で名を呼ぶ事は無い。それは彼女が有能である事、そしてかなりの権力を若い時から一手に握っていた事に

よる、その反動のような物だ。だからなのははは驚いたのだ、彼女がザフィーラに「様」をつけて呼ぶ事を。

「……？　当たり前じゃない。彼ほど古くから存在している魔法生命体を、私は見た事がないからよ。……そうね、そう言えばアレがちょうどこれに似ていたような……って、あぁッ！？」

「ど、どうしたんですか、いきなり！？」

「そう！　そうよそうよそうよッ！　どこかで見た事があるようなないようなと思っていたら……そうよ！　ザフィーラ様の中核を構築していた、あの謎の術式とそっくりだったのよ、この魔法術式がッ！！」

「……え？　それってもしかして……！」

「えぇ！　もしかしたらザフィーラ様が何か知っている可能性も……！」

希望が垣間見えた。なのはとイリスの顔に笑顔が宿る。もし本当に何か糸口を掴めたのなら……この「エンドレス・コア・シール（汝の魔を封じる魔の法）」を解除する事も、不可能じゃない……！

だが、イリスがザフィーラと会えたのは、それから二週間後であった。

一人の少女が胸を微かに上下させながら、真っ白なベッドの上で眠っていた。その少女は物々しい機械類に囲まれながら、静かに眠っていた。チューブやら何やらを体中に付けながら、その少女はすやすやと、時折「ママ……」と呟きながら眠っていた。

少女は腰まで届くほどの長い金髪を持っていた。少女は9才の子供特有の素晴らしき餅肌を持っていた。少女は硬く閉じられている瞼の裏に、優しさを秘めた緑と赤のオッドアイを持っていた。

「う……うぅん……」

寝苦しいのだろうか？　少女は少し呻きながら寝がえりを打った。そこはベッドの端ギリギリだったが、少女は何も怖れずに寝がえりを打つ。

「正常……か？」

「はい。レリックを莫大な魔力で弾き出した事による後遺症は、ほぼ解消されたかと。……これならば、何時でも聖王様として祀り上げられますが、如何なさいますか、院長？」

「……何もするな、上の指示を待て。まだどう戦局が動くか分からんのだ。それこそ、管理局と協力している現状で、「エース・オブ・エース」の娘である彼女に手を出せば……管理局が此方の敵に回るやもしれんぞ？」

そんな少女の様子をガラス越しにモニタリングしている初老の男と若い女性は、清潔な白衣を身に纏いつつ、静かに今後の少女の有り用について話し合っていた。

「しかし、もう聖王教会はかなり甚大な被害を「CB」から受けています。あの希少能力「予言の書」を持つ騎士カリムすら、未だ目を覚まさぬ程の重傷を負わされたとか……」

「確かに彼女を失いかけ、第12管理世界や第3管理世界の聖王教会中央教堂を壊滅させられたのは、大きな損害だ。しかし、それで管理局と敵対しても、此方側には何のメリットもないだろう？」

「それはそうですが……！」

「それに、君は幾らか聖王様を盲信し過ぎている。例え万全な状態だったとしても、果たして聖王様は「CB」の「オーバーS（最凶最悪の殺刃鬼）キラー」や管理局の「エース・オブ・エース」に勝てるだろうか？　と、私は疑問に思うよ」

「……勝てるに決まっています！」

「だが、聖王様は「揺り籠（かご）」内で戦ったにも関わらず、「エース・オブ・エース」唯一人に敗北した。これは妄想でも不運でもない、ただのれっきとした事実だ。君はこれを踏まえても、まだそんな楽観的な希望を持てるかね？」

「うっ……！」

若い女性は初老の男のその正論に、思わず呻（うめ）いてしまった。そして初老の男は若い女性の呻き声を聞きながら、光が籠ってない眼で、ベッドに眠っている少女を冷たく見詰める。

「……だが、もし予断が許されない状況になれば、まず間違いなく、彼女は祀り上げられるだろう。彼女の意思に関係なく、な。……そして、儂らはただそれを成すだけだ」

若い女性すらゾッとするほどの感情の籠もっていない、無機質で冷たい声を口にしながら、初老の男は金髪の少女を見続けた。そこには一切の情も情けもなく、あるのはただ上の命令に従おうとする、

性根から腐った老人の姿しかない。

「……ママぁ……」

９歳である少女の悲しそうな声が部屋に響く中、少女――高町ヴィヴィオが知らない闇の中で、何かが蠢き始めていた……。

「ハァッ、ハァッ、ハァ、ハァッ……！」

引き締まった瑞々しい体を激しく動かし、年不相応な大きなおぱ～いをダイナミックに、神々しいまでに揺らしながら、スバルは緑豊かな森林の中を疾走していた。そして目の前に映る枝や葉、幹などをウイングロードの上にいながら、片っ端から避けていく。その体には森林を駆け抜けた際にできる掠り傷などは一切なかった。

「アイス！　アイスッ！　アイスッ！！　アイスッッ！！　アイスぅうう！！」

車すら置いていけそうな猛スピードで疾走しながら、森林の中でも傷を負わないその技量は驚嘆に値するものだろう。実際、スバルは今までにない集中力でウイングロードの上を走っていた。その集

中力たるや、彼の相棒である靴型インテリジェントデバイス「マッハキャリバー」をも呆れさせるほどだ。

『スバル、あと一分でゴールできなかったら、このギガ旨いアイスは私のな』

「なッ！？　そ、そんなぁ～！？」

『そんなにアイスが食いたきゃ、あと一分以内にゴールして見せろ。いいな？　そんじゃ私はアイスを食べてるから、ゴールしたら知らせろよ？　じゃ』

「ま、待って下さいヴィータ副隊長！？」

そしてその要因になっていたのは、どうやらアイスだったらしい。まあ、スバルらしいと言えばそうなのだが。以前の「Ｄ・Ｏ・Ｐ」事件で「デカブツ」に負けた割には元気と言えよう。

「クッ！　マッハキャリバー、もっとスピード出せない！？」

『これ以上は無理です、バディ。大丈夫ですよ、きっとヴィータ副隊長はバディの分ぐらいは残していますよ。だからそんなに鬼気迫らなくとも……』

「何言ってるのマッハキャリバー！？　ヴィータ副隊長が無くなるって言ったら無くなるんだよ！？　それはもう塵（ちり）も残さずに！！」

『しかしバディ……』

「お願い相棒！　私に力を貸して！！」

『……イエス、バディ。カートリッジロード。……ハァ』

かなりゲンナリなっているマッハキャリバーが、重たい溜息を吐きながらカートリッジをロードし、スバルに更なる速度を与えた。スバルはその爆発的に向上したスピードで森林を突きっ切ろうとする。

そしてその数十秒後には、森林の出口が見え始めてきた。それに顔を綻ばせるスバル。あぁ、間に合った！　これで……これで、アイスが食べられる！！

「ヴィータふくた……！？」
「いようスバル、惜しかったな」
「ふぇ～ん、ごめんなさいです、スバル。ヴィータちゃんと一緒にアイス、全部食べちゃいました」
「なん……だと？」

儚き希望が深き絶望へと一瞬で変貌した。それはスバルの強靭でしなやかな足腰を刹那の間に砕き、雑草生い茂る地面へと這わせた。そして両手両膝を地面につきながら、光が点ってない瞳でリインフォース？の小さな体躯を見上げるスバル。

「ほんっとうにごめんなさいです～、スバル」
「いえ……いえ……だい、だ、い……ダイジョウブデスョ？　リイン曹長。ワタシハ……ダイジョウブ……ダイジョウブ……」
「は……はわわわッ！？　こ、こういう時、どうしたらいいんですかヴィータちゃん！？」
「ほうっとけってリイン。すぐに復活させてやるからよ」

ヴィータはスバルのその体たらくを苛立ち半分、悪かったな半分の気持ちで見ていたが、どうやら限度はあったらしい。ヴィータは自身の鎚型アームドデバイス「グラーフアイゼン」をセットアップすると、スバルの目の前にその巨鎚を振り落とした。

ドゴンッと、重厚な音が周囲に轟いた。それはスバルの目の前の地面を円状に砕く、のみならず、その衝撃でリインを数メートル後ろに吹き飛ばした。さすがにこれはやり過ぎだと思ったリインだっ

たが、しかし、彼女の予想に反し、スバルは白いB・J（バリア・ジャケット）をたなびかせながら、グラーフアイゼンと数センチ離れていないにも関わらず、平然と拳を構えていた。

「ヘッ、良い眼じゃねえかスバル。さっきまでのアイスでうろたえていた、情けねえ人物とはとても同一視できねえぞ？」

「というかヴィータ副隊長、完全に当てる気でしたよね？　そうですよね！？」

「んな小せえ事は気にすんなスバル。……んじゃ、そろそろアースラまで戻るぞ？　出航まであんま時間ねえしな」

「え？　もうそんな時間なんですか！？」

「あ、　ホントです～！　い、急いではやてちゃんの所に行かなきゃいけないです～、きゃ～～！」

「おら、急げよスバル、リイン」

急ぎアースラまで行こうとするスバルとリインを尻目に、ヴィータはグラーフアイゼンを待機状態に戻すと、安堵の溜息を吐いた。スバルが「ガンダム」に負けた事を引き摺（ず）っているかどうかを、先程のやりとりで確認したのだが、どうやら大丈夫そうである。

（ま、エリオはキャロに諭されたようだし……これで安心して「ガンダム」らと戦えるか？）

それがどれだけ甘い認識だったのかを、ヴィータは知らなかった。そして彼女もまた出航しようとするアースラに乗るべく、自身の用意しておいた荷物を、アースラに積み込み始める。その時には、もう彼女の中では、スバルは大丈夫だと認識されていた。

ヴィータがスバルの中の恐慌――深淵存在（マテリアルズ）を見抜く事は、終ぞなかった。

「すいませんギンガさん、こんなこと手伝わせちゃって……」
「いいんです、ランスターさん。これは私もしたいことだったので、気にしないでください」

上下の間隔を失いそうになりながら、必死に飛翔魔法を発動させて、上なのか下なのかも分からない、無限に連なる書庫の中から数冊の本を取り出すティアナとギンガ。

彼女たちは現在、休憩時間を使って「ＣＢ」の事を調べている最中だった。しかし、その作業は順調とは決して言えず、未だ有益な情報が一つとしてないのが現状だった。

それも当然で、そもそもここ「無限書庫」にある「ＣＢ」関連の情報は、全て「禁書」扱いとなっており、その一部を掴むだけでも、提督より遥か上の権力が必要となるのだ。そのような極秘資料を、一般局員にしか過ぎないティアナとギンガが覗き見る事など、絶対に不可能な事だった。

しかも、「Ｄ・Ｏ・Ｐ」事件、「ルイェビト」陥落という、管理局を揺るがす大事件が、この半月で一挙に起こった為、管理局は現

在、空前絶後の忙しさに見舞われているのだ。その為、以前最高評議会が出した勅令、「「ＣＢ」関連の情報は全て機密にせよ」が、殺人的な忙しさの為に未だ撤回される事無く、四年前の「管理局の悪夢」の生存者と、ここ「無限書庫」にもその効力を発揮しているのだ。

「それにしても……ないわねぇ～」

「そんなの分かり切っていた事じゃないですか、ギンガさん？　それを承知の上で、まだ禁書に認定されていない「ＣＢ」の資料を探しているんですから」

一冊、また一冊と、ギンガは決して得意とは言えない読書魔法を駆使しつつ、本を次々と読破していく。ティアナもその隣で、一挙に三冊もの読書魔法を発動させながら、片っ端から本を読み流していく。

「でも、どうして検索魔法を使っちゃいけないのかしら、ランスターさん？」

「検索魔法で検索された本は、既に司書達が一回調べているからです。司書達が調べ、それを検索魔法に登録したからこそ、検索魔法で本を探せるんです。だから私達は検索魔法を使えないんです」

「……そっか、そういう事ね。分かったわティアナさん」

「どう致しまして」

既に三十冊近くは読んだだろうか？　ギンガとティアナの頭には、読書魔法の使いすぎによる頭痛が居座り始めていた。そしてこれ以上の読書魔法の使用は危険と判断した二人は、一度無限書庫から出て、気分転換を兼ねたランチを食べに、喋りながら食堂へと歩いていった。

「それで……スバルの最近の様子はどうかしら、ランスターさん？」
「表面上は問題ありませんし、普通の戦闘程度でしたら、何の心配もいらないでしょう。しかし……「ガンダム」との戦闘で、何時また前のような恐慌状態になるのかは分かりません」
「……そう」
ギンガは山のように盛られた色とりどりの料理を小さな口に運びつつ、暗い調子でティアナの話に相槌を打った。彼女は口惜しかったのだ、自分が妹を助けれない事を。そして助ける事ができるのは目の前にいる妹の親友であるティアナ・ランスターしかいないことも、彼女は理解していた。
だから彼女は、妹の親友に重苦しい物を――スバルを支えて欲しいという願いを背負わせてしまう事を、心苦しく思っていた。しかし、その心苦しさを見抜いていたティアナは、煌く星を思わせるような明るい笑顔で、こう言った。
「大丈夫ですよ、ギンガさん。あいつ……スバルだって、分かっているはずです。今のままじゃいけないってことは。そして、自分を――「ガンダム」に怖れてしまう心を、変えなきゃいけないってことに、気付いているはずです」
「……」
にこやかに、しかし絶対の信頼を持って発せられたその言葉に、ギンガは少し驚いた。ティアナがスバルの親友だとは聞き知っていたが、ここまでの信頼関係を築けていたなんて……スバル、貴方いいお友達を持ったわね。
「アイツは学校を首席で出た秀才ですよ？　パッと見は馬鹿に見え

るかもしれませんが、本当は頭のいい奴なんです。だから、私達はその心境の変革を……彼女にとっての革新を、後押しするだけでいいんです」

「……そうね。フフッ……なんだかランスターさんの方が、スバルの事を分かっているようね」

「い、いえ！　そんな事は……」

「ランスターさん。厚かましい願いだとは思いますが、どうかこれからもスバルを……私達の家族を、支えてやって下さい。お願いします」

ギンガは食堂の椅子から立ち上がると、頭を深々と下げながら、ティアナにそうお願いした。それはあまりにも重く、そして辛いお願いだった。人一人を支える事が、どれだけ難しく、大変な事なのか。それを承知の上でギンガはティアナに頼んだのだ、愛すべき妹を……家族を護ってほしい為に。

それは命令でも勅令でも、強制でもない、嫌なら断ってもいいお願いだ。それにティアナは、

「はい。私は何とかアイツを立ち直らせて、ここに生きて帰ってこさせます。ですから、顔を上げて下さい、ギンガさん」

一秒も間を置かずに、力強く、はっきりと、そう答えた。それに涙を浮かばせそうになりつつ、ギンガは小さく涙声で「ありがとう」と言った。

「少し、お時間を頂いてもよろしいですか？」
「「……えっ？」」

ティアナとギンガは、ランチを食べ終えた後も、無限書庫で「ＣＢ」関連の資料探しをしていたが、そんな彼女たちに、司書長の秘書であるブック――本名はブック・ロジック――が話しかけてきた。

意外な人物から声を掛けられ、暫く呆然としていた二人だが、すぐに彼女が無限書庫司書長専属秘書――無限書庫副司書長と同等の権限が与えられているお偉いさんだということを思い出し、慌ただしく不格好な敬礼をした。

「……お時間を頂いてもよろしい、と判断して問題ありませんね？　では単刀直入に言いますが……「ＣＢ」関連の資料を探すのならば、立ち入り禁止区域にまで踏み込まないと、まず発見できませんよ？」
「なっ！？」
「どうしてその事を……！」

自分達が秘密裏にしている行為をズバリと言い当てられ、驚愕のあまり、敬礼を崩してしまうティアナとギンガだったが、ブックはそれを咎めることなく、話を進める。

「「ＣＢ」関連の資料を探している事を悟らせないために、幾つか「ＣＢ」と全く関係のない本まで読んだ振りをしたのは称賛に値し

ますが、残念ながらその程度の偽装では、司書長は愚か、ここのベテラン司書達すら騙せませんよ？」

黒縁眼鏡を怪しく光らせながら、ティアナとギンガを理屈で追い詰めていくブック。それを冷や汗を流しながら聞くティアナとギンガ。

『ランスターさん、こういう時はどうすればいいんですか！？』

『……とりあえず、話を最後まで聞いて見ましょう。もしかしたら、私達を見逃してくれるかもしれな……』

「……という訳で、貴方達を通報しますが、よろしいですか？」

「「ちょっと待って下さいー！？」」

あわや問答無用で通報されようかという事態にまでワープしかけていたのに胆を冷やしながら、弁明を始めるギンガとティアナ。しかし、現実は無情で……残酷だった。

「～という事なんです！　私の妹を救うためにも、ここは見逃してくれませんか、ブックさん！？」

「分かりました、通報すればいいんですね？」

「「……」」

彼女は弁明を最後まで聞いてくれるほど親切だったが、どうやら考えを曲げる事は大嫌いだったらしく、二言目には通報という単語が飛び出してきた。それに気を遠くしながら、さらなる弁明を試みようとする彼女たちに、ブックは……

「まあ、冗談ですので気にしないでください」

などと、可愛らしく笑いながら、そうのたまった。

「「……え？」」

そのお茶目を通り越して、殺意すら抱きそうな冗談をかましてきた彼女に、口をポカ～ンと開けるしかないティアナとギンガ。そんな彼女たちを置いて、ブックは子供特有の少し甲高い声で喋り始めた。

「では本題です。今回の貴方達の不祥事を、私が揉み消す替わりに、私もその探索に加わらせて下さい」

「「……えぇ～～～ッ！？」」

ティアナとギンガは思わずといった風に叫んでしまった。まさか無限書庫司書長専属秘書であるブックがこの事を内密にしてくれる、のみならず、自分たちの資料捜索をも手伝ってくれるとは、予想だにしていなかったのだ。

「……駄目ですか？」

「「い、いえいえいえいえいえ！」」

「そうですか、それは何よりです。というわけで早速始めましょう。……確かまだ捜索されていない書庫は……」

手を中空に浮かぶコンソールにやりながら、未だ捜索されていない書庫を検索するブック。その姿を疑い深く見ながら、ティアナはどうして手伝ってくれるのかを聞いて見た。

「……何、簡単な事です。「ＣＢ」関連の資料に、私も興味があるからです。無限書庫では司書長以外、それらの資料を見る事ができません。けれど、私だって子供です。それらの資料に興味以上の何かを感じてしまっては、知らないわけにはいかないでしょう？」

ティアナのその問いに、理知的な雰囲気を漂わせながら答えるブック。

「それに……「CB」は四年前以外にも行動していた可能性があります。もしかしたらその中に……未解決事件として処理された物もあるかもしれません。もしそれらを「CB」の資料で解明する事ができれば、司書長を恨む遺族の方々にも申し訳が立つ……やもしれませんので、私はこの「CB」の未発見資料の捜索に、全力全開で当たりたいのです」

そして、さらにもう一つの理由を付け加えながら、彼女はまた捜索されていない書庫を検索し始めた。彼女の無表情な顔からは、あまり感情等が読み取れなかったが、ティアナとギンガはその理由を信じたいと、そう思ってしまった。

無限書庫のユーノ・スクライア司書長が、未解決事件で殉死した局員の遺族に目の敵にされているというのは、局では中々に有名な話だった。彼が遺族を相手に、裁判で勝ち星を積み重ねている――というよりも、無敗だったのが、その原因であった。

どんなに怪しく、また黒でしかない事件でも、彼が出てしまえば、それらは明快で、白でしかない物に変わる。そしてそれらを可能にしているのが、無限書庫の並々ならぬ量の証拠なのであった。

「普通」ならば出てきそうにない証拠でも、無限書庫ならば出てきてしまうのだ。そして無限書庫の情報は昔と違い、現在では限りなく信頼性のある物として扱われている。つまり、無限書庫を手足のように使えるユーノ・スクライア司書長相手に、裁判で勝つことなど、土台無理な事で……だからこそ、遺族は彼を恨むしかなかった。

そして、そんな事情を知っていたからこそ、ティアナとギンガはブックのその言い分を信じた――否、信じたかったのだ。例え甘いと言われようとも、彼女達はその時、ブックの事を信じたかったのだ。

夕陽を思わせるような赤橙色の髪を二つに結いだティアナ。紺碧のような、深い藍色をした長い髪を無重力空間に靡(なび)かせるギンガ。そして闇の深淵を思わせる、不吉なまでに黒いストレートの長髪を持つブック。

彼女達3人の「CB」関連資料の捜索は、ティアナが第32管理世界へと出航しようとするアースラに乗り込むまで、ずっと続けられていた。

ティアナはアースラに乗り込む寸前に、ブックの容姿を脳裏に描き、ふと思った。

「あれ？　あの人、誰かに似ていたような……気のせいかな？」

しかし、彼女はそのことについて、あまり深く考えなかった。そしてティアナ達、機動六課を乗せたアースラは、「CB」が現れると思われる第32管理世界へと出航していった。

「……行きましたか。さて、私も自らに課された仕事をやるとしましょうか」

それを見送りながらブックは、訓練室へと歩いていった。そして、黒縁メガネや黒いウィッグが崩れていないかを確かめながら、自身のデバイスを懐に入れ、訓練室の監視魔法を解除してから、彼女はギンガの元へと向かっていった。その顔はあくまでも無表情であり、9歳にしては年不相応な落ち着いた雰囲気であった。

【我々は何事についても、1パーセントの百万分の一も知らない】

――小梔子様から、トーマス・エジソンより

第３３話　闇が蠢くと星々は嘆き、理が動いてもただ気づけず（後書き）

今回は……ちょっと詰めが甘い感じになりました。作者の力量不足です、すいません。しかし、ギンガとティアナのを書けなかったのが心残りです。スバルは何とか書けたのに……！　なのはさん？　だからあの人はヒロインじゃなく主人公だとなｎ（ｒｙ

さて、次は聖王教会とＡ－ＬＡＷＳを書きたいと思います。アレ？　何か忘れているような……ここまで読んで下さった皆様に感謝を。ＯＯの映画が迫って来ました、でも作者は未だスケジュールを調整できないというまさかの事態です！　こうなればサボ（ｒｙや有給を使うしか……！

最後に。

まだまだ作者の短期集中投稿フェイズは終わりません！

第３４話　大義とは名ばかりの……（前書き）

【正義は自らを確立させるために、悪を創造した】

――零夢様より

【殺って殺られて殺り返して。でも、俺が殺られた時には、殺り返さなくていい】

――鴨川秘様から、高橋慶太郎，「ヨルムンガンド」，ＧＸコミックスのレームより

第３４話　大義とは名ばかりの……

――新暦７５年１１月１１日――

「では、この結論で異議はないか？」

「「異議なし」」

ミッドチルダにあるベルカ自治領の中心部に聳(そび)え立つ、純白の花嫁を思わせるような白亜の大教会。それは聖王教会中央本部という、聖王教会の総本山とでも言うべき建物であった。

その聖王教会中央本部で最も大きな大聖堂、扇状に机が広がった白い部屋で今、とある議論の結論が出そうになっていた。その議論とは、昨今、この次元世界に次元戦争を齎してくれた組織、「ＣＢ」についてだった。彼らは聖王教会の支部や中央教堂を幾つも破壊しているので、聖王教会を敵視している事は、火を見るよりも明らかだ。

「それでは、結論をもう一度確認しよう。これより、聖王教会は「ＣＢ」を明確な「敵対組織」として扱い、これを管理局との連携にて退ける、もしくは壊滅させる。そして、もし管理局の力を持ってしても、「ＣＢ」に抗えなかった場合は……」

聖王教会の中には、非戦争論者――それは管理局に任せるべきだという論者も、少なからずはいた。しかし、聖王教会も甚大な被害を被(こうむ)っており、殉教した被害者の遺族の数も大変な数に達していた為に、四の五も言えなくなっていた。

それに、「ＣＢ」の危険性が既に聖王教会の隅々にまで浸透していたのも、聖王教会が「ＣＢ」と開戦するまでに至った大きな要因となっていた。それは「ＣＢ」がかつて次元世界を恐怖で震撼（しんかん）させた「管理局の悪夢」を起し、最近では、あの難攻不落と音に聞こえた管理局の中央支局の一つ、「ルイェビト」を陥落せしめたからだ。

「我ら聖王教会は時空管理局と手を切り、そして時空管理局に拘束されている我等が聖王様を頂きに冠し、その御力でもって「ＣＢ」を殲滅する……で、いいかな？」

「「「異議なし！」」」

「うむ。では、これにて議論を終了とする。解散！」

そして聖王教会のトップ達は、これらの事態を受け、「ＣＢ」の力に恐怖し、いつ自分の所に攻め込まれるのかという焦りのあまりに、下してはならない決断を下してしまった。それは管理局が「ＣＢ」に敗北しそうな場合、彼らは聖王を再臨させる――つまり、高町ヴィヴィオを再び聖王と化させる事で、「ＣＢ」を退けようという決断を下してしまったのだ。

だが、彼らは気付いているのだろうか？　その決断を下す為にあった大義、「聖王様の教えを護る為」が、既に彼らから乖離（かいり）し始めていた事を。彼らがその大義を護る為と思って下したその決断こそが、聖王の意思を、人権を、教えを歪ませていた事を……彼らは、気付いていたのだろうか？

ベルカ自治領の中でも一番大きな病院のエントランスホールに、その二人はいた。

一人は緑色の髪が腰までである、いつもアルカイックスマイルを浮かべていそうな軽そうな男で、その男は結婚式にでも行けそうな白いスーツを着込んでいた。

もう一人はしっかりとおぱ～いを浮き彫りにさせながら紺色のシスター服を身に纏った、如何にも敬虔（けいけん）そうなシスターで、精悍（せいかん）な顔立ちは女子にも人気が高いであろう。

その正反対とも言える二人は、先程までとある人物のお見舞いをしていて、今はその帰りであった。

「それで？　貴方はこれからどうするのですか、シャッハ？」

「私の任務は、騎士カリムの護衛だった。しかし……先程任務の変更を伝えられた。ヴェロッサ、お前に付いていけということらしい」

「……は？」

聖王が巨大な船の上で陣頭指揮を執りながら、崩壊していく世界を脱出していく様を描いた巨大な絵画が、天井に掘られている白いホール。そのホールの端にある二人用ソファーに座りながら、シャッハ・ヌエラとヴェロッサ・アコースは、顔を前に向け、互いの横顔を突き合わせながら、静かな声調で喋っていた。そこには何か、決心を固めた者特有の悲痛さが、どことなく漂っている。

「お前が何か行動を起こすかもしれんから、それを見張っておけ、もしくは……手助けをしてやれ、という事らしい」
「……随分、手厚いね？」
「それだけお前に期待しているという事だろう？　管理局でも有数の監査官であるお前なら、「ＣＢ」に関する情報も掴めるはずだと、上はそう考えているみたいだな」
「やれやれ。そんなに期待されても、僕は困るよ？　ただでさえ無限書庫からの下地情報がないっていうのに……」

ホールの壁や床と同じ白で塗装されている、病院で使うには些か高級すぎる柔らかなソファーに身を半分ほど沈めながら、何時になく弱気で答えるヴェロッサ。そんな彼の姿をチラッと横目で見ながら、シャッハはさらに言の葉を紡いだ。

「そんなに無限書庫は重要な物だったのか？」
「まぁ、ね。少なくても、無限書庫が正常稼働してからは、監査官の能率も執務官の検挙率も、軒並み鰻昇りだったよ」
「……そうか」
「ま、使えないなら使えないと、割り切るしかないね。……そう言えば、クロノの奴が何か掴んだようだから、そっちに行ってみようと思うんだけど、シャッハはそれでいいかい？」
「いいも悪いも、私はお前に着いていくだけだ。私の事は気にせずに、自由気ままに「ＣＢ」について調べ……ってちょっと待て。どこに行く気なんだお前は？」
「第３２管理世界」
「あぁ、あそこか……って何ィ！？」

病院だからこそ静かな声で喋っていたシャッハだったが、それはヴェロッサの行く場所を聞いた瞬間にぶっ飛んでしまった。そしてシャッハのその叫び声にびっくりした数人の患者が、階段から転げ

落ちたり、喉に食べ物を詰まらせたりして、命の境をさ迷う事になった。

幸いにも、近くに素晴らしき流線美を誇るおぱ～いを持った、若くて美人なナースさんが居たから大事にはならなかったものの、シャッハとヴェロッサは患者とナースさんの責めるような視線を感じ、そこにとても居辛くなってしまった。

「「……」」

「……出よっか、シャッハ？」

「……あぁ、そうしよう」

未だ彼らの背に浴びせられる冷たい視線に肩身が狭い思いをしながら、ヴェロッサとシャッハは太陽が燦々（さんさん）と降り注ぐ外界へと出ていった。

「「……うわぁ……」」

外界は直射日光もさることながら、風もどこか湿っぽく、むったりとした熱風だった為、シャッハとヴェロッサは外に出た瞬間に、背中にじめっとした汗を掻いてしまった。

そして、その嫌になるぐらいの暑さ、湿度を存分に体感しながら、ヴェロッサはシャッハに、どこか気落ちした調子で話しかけた。

「……ねぇ、シャッハ。もし僕が義姉（ねえ）さんの復讐をしたいって言う大義？　を振りかざしたら、君は怒……るよねやっぱりごめんなさい！？」

「フン、当たり前だ。少なくても、騎士カリムはそんなことを望んではいない。彼女は例え自身が殺されても、そこから発生するであ

ろう憎しみの連鎖――つまり、殺って殺られての繰り返しの連鎖を断ち切る為に、殺り返さない事を周囲に望むだろうからな。そして騎士カリムが望んでいない事は、私も望まん」

だが、ヴェロッサの首元には次の瞬間、何時の間にかセットアップしていたヴィンデルシャフトが、薄皮一枚分を開けて突き付けられていた。それに冷や汗をドバドバと流し、必死で前言撤回をするヴェロッサ。その情けない姿を半眼でジロリと睨みつけながら、シャッハは溜息と共にヴィンデルシャフトを待機状態へと戻した。

「それに……お前に復讐は似合わん。お前はお前らしく、自由奔放にしていればいいんだ。復讐なんていう、下らん事に現を抜かさずにな」

「シャッハ……」

「そして、これだけ言ってもお前が復讐に奔ろうというのならば……私とヴィンデルシャフトが、お前を止めてやる。だから……！」

「……うん、そうだね。どうやら義姉さんの姿を見て、弱気になっていたみたいだ。喝を入れてくれてありがとう、シャッハ」

「……分かればいいんだ、分かればな」

そう言いつつ、シャッハは頬を少し赤く染め、ヴェロッサから顔を背けた。彼女からすれば、かなり気恥ずかしい台詞だったのだろう。だが、それで救われたのもまた事実。

「……さて、それじゃ僕らしく、気楽に「ＣＢ」を追いますか」

「……気楽？　気楽だと！？　貴様、これがどれだけ重要な任務なのか分かって……！」

「えぇッ！？　だってさっきシャッハは僕らしくしろって……」

「ええい、この馬鹿者がッ！　貴様は「それはそれ、これはこれ」という言葉を知らんのか！？　確かに、私はさっきお前らしくあれ

といったが、それは断じて！　だ・ん・じ・て！！　仕事を怠けていいという事ではなぁああいッ！！　そもそも、私はずっとお前の仕事に対する態度にな……」

そして、肌をじりじりと焦がす陽光が遠慮なく降り注ぐ道を、二人はゆっくりと、焦らずに歩いていった。彼らはその道が真実に、自分達が求めているモノに繋がっていると、そう硬く信じていた。だからこそ、彼らは一歩一歩、気楽に歩いていけたのだ。

その先に何が待ち受けているのか。それはまだ彼らにも分からない。だが、それでもその足並みには幾分の恐れも無く、また互いへの信頼しかない為に、しっかりと、確実に、前にしか進んでいなかった。それを自覚しているのかどうかはまた別の問題だったが。

余談だが、シャッハの怒鳴り声は、周囲が暗くなる寸前まで周囲を轟かせていたという。

第９７管理外世界の「日本」という極東の島の、その一部地域である海鳴町。この町は海が町からでも見えるという事で、観光が栄

えている、穏やかな町であった。しかし、その平和を愛する町に、迷彩服を着込んだ「Ａ－ＬＡＷＳ」の軍人たちが次々とやってきていた。

海鳴町に来ていた「Ａ－ＬＡＷＳ」は、第一特務部隊という中隊で、主にテストパイロットや公にできない任務など、通常の部隊がこなすべきではない特殊な任務をこなす為に創設された、「Ａ－ＬＡＷＳ」きってのエリート部隊である。

そんな部隊の軍人たちをたんまりと載せたジープが、選びに選び抜かれた質量兵器をたんまりと載せたトラックが、そして榴弾（りゅうだん）をたんまりと載せた最新式の戦車が、海鳴町の車道を我が物顔で走行する。それをただ指をくわえて見る事しかできない町民たちは、これから何が始められようとしているのかを想い、知らず知らずのうちに、神へと祈りを捧げていた。

この世界に、神などいないというのに。

『α１から各員へ。三十秒後に突入を開始する。各員、もう一度装備と作戦を確認しつつ、速やかに実行に移られたし』

『β小隊、了解』

『γ小隊、了解しました』

『作戦開始時刻まで、５……４……３……２……１……レッツパーティー！！』

海鳴町でも1，2位を争う豪邸である月村邸。その正面玄関の前に停めてある、大型パソコンを内蔵しているトラックの中で、α1――ヒュドラ＝T＝Hは、自身が率いている「A－LAWS」の第一特務部隊が全員所定の位置に着いているかどうかを確認していた。そしてそれが完了したと同時に、民間人の殺傷をも許可された、悪徳非道な作戦を開始させた。

『トラップ発見、駆除！』
『トラップ発見、駆除！』
『トラップ発見、駆除！』
「……やけにトラップが多い。まさか……抗戦する気だった？　もしくは……トランスポーターが起動するまでの時間稼ぎ？　……でも、此方には「B（世界が焉わる日）・T・W」事件で「CB」から回収した「T（トランスポート・ジャマー）・J」があるから無駄」

今、ヒュドラ達第一特務部隊が行っている作戦は、コード「魔除（まじょ）」と呼ばれる、現在の「A－LAWS」が行っている戦略の中でも、二番目に優先順位の高い極秘作戦であった。超法規的な権限を持つ「A－LAWS」が、その権力を笠（かさ）に行う、非人道的な作戦。それがコード「魔除」である。

その作戦は、コード名そのままの意味に、「魔を除く」……つまり、過去、時空管理局と関わりを持った、もしくは、魔導師となんら関係のある者達を、強制的に「A－LAWS」の監視下に置くという物で、さらに、その人物が持っていた資産は、全て「A－LAWS」の物とするのが、その作戦の概要である。

『此方γ小隊、建物内に侵入成功。作戦通り、進攻する』
「……γはそのまま進攻。α小隊は突撃用意。……いくら民間人と

はいえ、気は抜かないでください」
『『『了解！』』』

そして、この作戦に置いて、ここ月村邸の主たる月村家と、同町にあるバニングス家、高町家は、総じて第一「魔除」目標として「Ａ－ＬＡＷＳ」からマークされていた。世界に名立たる資産家である月村家とバニングス家、そしてその両家と関わりがある、「Ｂ・Ｔ・Ｗ」事件で日本が「ＣＢ」と戦争する原因となった「高町なのは」の親族である高町家は、「Ａ－ＬＡＷＳ」からすれば危険分子であると同時に、資金があってもあっても足りない「Ａ－ＬＡＷＳ」にとって、まさに垂涎（すいぜん）の的、転がり込んできた金脈だったのだ。

だが、その三家は「Ａ－ＬＡＷＳ」が海鳴町に入ってきたと同時に月村邸に集まり、そのまま籠城してしまっていた。だから「Ａ－ＬＡＷＳ」は敢えて交渉などという生温い手段など使わずに、武力による制圧をしようとしていたのだ。民衆に恐怖を、「Ａ－ＬＡＷＳ」に逆らえばどうなるかを教え込む為に、彼らは民間人であるはずの人間を、手に掛けようとしていたのだ。

「……β小隊の、返事がない？　……やられた？　でもまさか……」

だが、それは容易な事では無かった。いや、それは三家のプロフィールを見たときから、既に分かっていた事だ。だがそれでも……特務部隊の一小隊を壊滅させる戦力を保有していたのは、完全に予想の範囲外であった。

『こ、此方γ小隊！　ヒュドラ隊長、た、助け……！』
『人間の動きなのか、これが！？』
『クソッ、何なんだこいつ……なッ！？　ぎゃ』
「……γ、反応消失。……α小隊、一旦撤退して、態勢を立て直し

てから再突入……」
『りょ、了解！』

……いや、壊滅したのは一小隊ではなく二小隊だった。

「……オーバー、システムチェックは？」
『オールグリーン』
「……行ける？」
『イエス、ファイター』

予想外の戦力、甚大な損害、一時撤退。それらの状況を踏まえたヒュドラは、自身の長い銀髪を一撫でしてから、黒い柄（つか）――かつての短剣型アームドデバイス「ヴェノム」の一部分――を懐から取り出し、トラックから肌寒い外へと飛び出した。

そんな外に出た彼女の視界に真っ先に入ったのは、半壊した巨大な門だった。それはヒュドラ達が持ってきた戦車の砲撃によって破壊された、月村邸の表門を成していた物だった。

その門を潜ったヒュドラの前に広がる、戦争の跡地。砲撃が、銃撃が飛び交っていた庭園は、以前のような眼を潤す美しさなどはなくなり、替わって、ただ渇いた戦いの惨状を目に訴えてくるだけであった。それを一瞥（いちべつ）してから速足で一歩、ヒュドラは月村邸へと踏み込んだ。

邸内はひどい有様だった。建物もそうだが、自身の部下達の状況もである。自身の小隊であるα小隊だけは未だ無傷だったが、β小隊とγ小隊は、誰一人として息をしていなかった。

「……オーバー、生体反応は？」

『ファイターの正面五十メートルに、十名確認できます』
「……了解。……それじゃ、行くよ？」

その惨状を目にしたヒュドラは、まず周囲を未熟な探査魔法でサーチし、反応が出た方向に体を向けた。そしてオーバーの黒い柄を握りしめている左手を前に突き出し……彼女にしては珍しく、力強い声でそれを唱えた。

「……セットアップ！」
『オールグリーン、ファイター。スタンバイレディ、セットアップ』

それは、自身を再構築するシグナルだった。それは、管理外世界から生れた新たな力を振るう為の詠唱だった。それは……復讐を成す為の暴力を行使する、その覚悟の宣誓（せんせい）だった。

『――コンストラクション、コンプリート』

そして、その覚悟を胸に刻みつけつつ、全身に黒い機甲を構築したヒュドラは、黒い柄から生えた電光迸る青白い光剣を強く握りしめながら、暗闇広がる邸内へと、その身を飛翔させた。

「貴方達、こんなことしていいと、本気で思っているの！？」

「そうよ！　こんな事をしてタダで済むと思ってんの！？」
「「「……」」」
「……それでは、後は任せました。……私は上に提出する報告書を書いてきます」

十人ほどの軍人の輪の真ん中に居ながら、腰にまで届こうかという長い銀髪を、あくまでも優雅に手で弄(もてあそ)んでいたヒュドラは、年の割には発達していなかペッ！？　……C二トドコウカトイウボリュームユタカナおぱ～いヲユラシナガラ、手足を縛られている二人組の前を通り過ぎていった。もちろん、その二人組が喋っているのは無視してである。

「ちょっと、そこの変なおチビ！　ちゃんと聞いてんの！？」
「……」

勿論、二人組の一人、金髪の美女の方が、耳にキンキンと響く声で絡(から)んできても、ヒュドラは無視し続けた。例え変なおチビと言われ、一瞬オーバーを懐から取り出しかけたとしても、完璧に無視である。そう無視、無視……

「くぅ～！」
「あ、アリサちゃん、落ち着いて……」
「落ち着けないわよすずか！　士朗さんも恭也さんも桃子さん美由紀さんも、ファリンさんもノエルさんも忍さんも……鮫島も、皆あの変なおチビに気絶させられたのよ！？　これが落ち着いていられるものですかっ！？」
「確かにそうだけどね？　とりあえず落ち着い……」
「ああもう、焦れったいわね！　取り合えず、周りから隊長って呼ばれてるあの変なおチビを一発ぶん殴らなくちゃ、私の気が済まないのよ！　だからこっちに来なさい、板胸(A?)おちびッ！！」

「……α2、あのファック女を黙らせてきて下さい」
「は？　しかし……」
「……給料９９．８９％、カットしていいんですか？」
「イエス、マム！　ただちに命令を遂行します、サー！」

……できる範囲には、どうやら限界があったみたいだ。ヒュドラは近くにいた二十代ほどの若い軍人にアリサを黙らせるよう命令し、その後、外に待機させてあった軍用トラックに乗り込んだ。そして、その軍用トラックの中で、ヒュドラはまるで「赤い異形（アルケー）」を前にした時のような、刺々しい殺気を出したまま、報告書を書き殴り始めた。監査対象に傷を付けるわけにはいかなかったのが、非常に歯痒（はがゆ）そうだ。

「……殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺……」

そして、それが一通り書き終わる頃には、撤収作業も含めた「魔除」任務は、概ね（おおむね）終わりを迎えていた。それを部隊長であるヒュドラが確認し終えてから、士朗達を乗せた軍用トラックがヒュドラ達と共に、寒さが肌に突き刺さる、まだ太陽が出て間もない早朝の海鳴町から出ていった。後に残されたのは……廃墟と化した月村邸だけだった。

この日を境に、第９７管理外世界からは、謎の集団失踪事件が相次いで発生するようになる。しかし、その行方は誰一人として分からないまま、捜査は次々と、短時間で打ち切られていった。それに疑問を持った人間も少なからず居たが……彼らが事件の被害者と同

じ行方不明となるのに、そう時間は掛からなかった。

次元世界と渡り合える力を身に付ける為に、形振り構わない「Ａ－ＬＡＷＳ」。そこにはもう「管理局と「ＣＢ」の介入から世界を護り、世界単位での治安を維持する」という大義は、どこにも見当たらなかった。

それを知りつつ、ヒュドラとティーダは、しかし、それでも、自分たちの復讐を成す為だけに、「Ａ－ＬＡＷＳ」に所属し続けていたが。

第３２管理世界の中心都市「オレンジ」。そこは建物の色がオレンジ色で統一された、別名「夕陽の都市」として知られる大都市だった。そしてその大都市の一等地に聳える超一流ホテルの最上階、別名「全力で景色を見るお部屋」に、彼ら三人はいた。

「それじゃ、貴方達も参加……てことでいいのかしら？」

「無論だ」

「僕も異議は無いね」

一人は、窓に一番近いベッドに腰掛けている、癖が強い金髪をボ

ブカットに切り揃えた、齢十五ほどの少女。

一人は、ドアのすぐ側に仁王立ちし、そして珍妙な仮面を被り、羽織陣風（はおりじんふう）の軍服を着こんだ良質（ガチホモ）の変態……じゃなく軍人。

一人は、テーブルに置いたパソコンの前に座る、細いフレームの眼鏡をかけた、一番常識人そうな白衣の科学者風の男。

その三者三様の言葉そのままの三人は、互いがいる場所でトライアングルを形成しながら、決して感情的にはならず、努めて冷静に話し合っていた。そう、冷静に、冷静に……

「だが、敢えてここで貴様に全力で言おう！　「剣士」は私が討つとな！」

「「剣士」？　……あぁ、「二個付き」の事ね」

「貴様等が「二個付き」と言おうが私が「剣士」と言おうが、とにかく、アレは私の獲物だ！干渉、手助け、一切無用！　いいな、アイシス！？」

「えぇ、私は別にそれで構わないわ。私が狙うのはただ一機……「デカブツ」だけよ」

「よく言ったアイシスゥウウ！　それでこそ「十二の救世鐘（トゥエルブ・ベラー）」の一員！　好意を抱くぞ！！」

「な……！」

「アイシスさん、御免ねこんな奴で。これでもまだ今日は普通の方なんだけどね……」

……話し合えるわけがなかった。まず、ミスター・ブシドーがいる時点で、まともになる訳が無かったのだ。

「普通……？　う、ウソでしょう？」

「残念だけど、本当なんだ」
「うおぉおおおお！　今すぐにでも全力で抱きしめたいぞ、「ガンダム」！！」

一人ではしゃぎ、一人で叫ぶブシドーにドン引きするアイシス。
それを気の毒そうに見ながら、ビリー・カタギリはパソコンのＯＳを起動させ、とあるデータを表示させた。それは「十二の救世鐘（トゥエルブ・ベラー）」と題され、ビリーとブシドーを除いた十人の詳細なデータが打ち込まれていた。

そのデータをブシドーにもアイシスにも見えるようにしつつ、ビリーは、

「しかし、よく「二刀竜使いの剣客」や「切り裂きＪＡＣＫ（ジャック・ザ・リッパー）」、そしてあの「金が生る魔本（エデン・フルーツ）」として恐れられているラヴクラフトを仲間に引き入れられたね？」

と、疑わしげにそう言った。それにアイシスは動揺せずに、

「まあ、その人達もその人達で、色々あった……らしいわ。主に管理局、そして「ＣＢ」関連でね。……あぁ、そう言えばサムライさんが「剣士」と死合いたいって言っていたような……」

と答えた。だが、その中にはブシドーの脳髄（のうずい）を過度に刺激する単語――「剣士」と死合う――が含まれており、

「何だと！？　それは全力で断固拒否するぞ、アイシス！　「剣士」は私と強固な運命の赤い糸で雁字搦（がんじがら）めに結ばれているのだ！」
「わ、分かりました！　分かりましたから、そんなに顔を近づけないでぇえええ！？」

その単語にブシドーはやはり盛大に反応した。そして熱く語りながらアイシスへとすり足で近づいていき、遂には、キスすらできる距離にまで顔を近寄らせた。それに異様な怖気を覚えたアイシスは、必死に唇と唇が触れ合わないように、ブシドーの顔を遠ざけようとする。最も、アイシス如きの腕力では、ブシドーを遠ざける事などできなかったが。

「ははッ。いや～、君たちを見ていると楽しいよ」

「「笑い事ではない（ぞ）（です）！！」」

その光景を椅子に座りながら傍観していたビリーは、目尻に涙を浮かばせながら、心底楽しそうに笑った。そして笑い過ぎて痛くなった腹を抱えつつ、ブシドーとアイシスに楽しそうだと声をかけると、二人はシンクロしながらそれに反対した。それにまた笑って腹が痛くなるビリー。

「ええい、こうなれば……サムライとやらに会わせろ！　私と「剣士」の、愛などでは到底語れぬこの愛憎渦巻く深い関係に横入りしようとするのならば、私が全力で斬り捨ててやる！！」

「ってちょっと！？　まだ参加したばっかりだっていうのに、もう謀反（むほん）する気満々ですか！？」

そしてアイシスが驚きでギョッとなる様な事を口走り始めたブシドー。

「というか、サムライさんと戦って勝てると思っているんですか！？　彼女は私達の中でも1，2を争う、歴戦の実力者ですよッ！？」

「そんな道理、私の無理でこじ開けてみせようッ！！」

「……何を言ってるのか分からない、私の方がおかしいんでしょう

か？　ああもう助けて下さいよビリーさん！？」
「ブシドー、そろそろ落ち着いたらどうだい？　君は「剣士」がサムライに負けると、そう思っているのかい？」
「フッ、愚問だなカタギリ。私は断じて、だ・ん・じ・て！　そうは思っとらんよ！」
「ならいいじゃないか、サムライが「剣士」と戦ったって。それに、「剣士」は君と赤い糸で結ばれているのだろう？　なら君は、何時か必ず「剣士」と相見える筈だ。……それとも、君は「剣士」との繋がりを信じていないのかい？」
「……フン、了解した。カタギリがそうまで言うのなら、私はここで身を引こう。……だが、アイシス。サムライに全力でこう伝えておけ。「剣士」と戦うのはこの私だとな」
「全力は嫌ですが、分かりました。ちゃんと伝えておきますから顔を遠ざけてぇえええ！？」

　このやり取りから一時間後に、彼らは漸く（ようや）話を終わらせる事が出来た。一人は暴走していたが、それでも何とか終わらす事が出来たことに、アイシスは安堵の溜息を吐く。その表情はやっと終わった、もうこりごりです、と語っていた。

「それじゃ、これで「十二の救世鐘（トゥエルブ・ベラー）」も揃った事だし……そろそろ、世界に告知する為の準備を始めましょうか？　かつて反管理局組織の中でも最大規模を誇っていた「世界清浄」が生まれ変わった事を。そして、その生まれ変わった超組織、「灰被り（シンデレラ）の福音」の名を、この理不尽な世界に知らしめてやりましょう」
「無論だ」
「僕も異議はないね」
「それじゃ、今日はここまでね。お疲れさまでした～」

　彼らは互いの覚悟を、決意を確認し合いながら別れていった。と

はいっても、アイシスがその部屋から出ただけなのだが。そしてアイシスは部屋を出た後、ブシドーやカタギリには決して見せなかった暗い笑みを、うっすらと顔に浮かべた。

この広大な次元世界の中でも、唯一つ、第一級反管理局組織として認定されていた超組織「世界清浄」。その結成理由は「世界に害悪を齎す管理局を打ち倒し、この世界を清浄する」というものだった。そしてその生まれ変わりである「灰被り（シンデレラ）の福音」も、其れに相違はほぼ無く、「世界を清浄する為に、「悪」を打ち倒す」という物だった。

この時の「悪」には、勿論管理局だけでなく、「ＣＢ」も含まれていた。そして「ＣＢ」をも敵にすると言い切ったこの超組織には、それだけの事を成すだけの力――かつての「世界清浄」以上の力が備わっていた。

だが、その目的を成す力――「十二の救世鐘（トゥエルブ・ベラー）」こそが、その結成理由という名の大義を最も軽視、いや、無視していたという事実に、気付いていた者は極少数しかいなかった。力とは手段でしかなく、決して目的にはなり得ないというのに。

その矛盾が歪みへと変わるのに、そう時間は掛からないだろう。そして、その歪みを持つに至った組織を、彼らは絶対に許さない。彼らはその歪みこそを駆逐する組織だからだ。そう、彼ら――「ＣＢ」は、絶対に「灰被り（シンデレラ）の福音」を許さないだろう。世界の歪みを、組織の歪みを、そして……個人の歪みすら、彼らは駆逐するのだから。

【さあ、１２の鐘は鳴ったのだ。……早く灰被り（シンデレラ）に戻りたまえ】

――ＥＸＡＭ様より

【力とは手段だ、決して目的にはなり得ない】

――ＥＸＡＭ様より

第３４話　大義とは名ばかりの……（後書き）

「救世鐘」はきゅうせいしゅと読みます。分かりづらくてすみません！

どうも、バニングス家をバニング（大尉）家と書いたまま投稿しそうになった駄目作者です。そして第３２管理世界の都市の名を「やっちゃったＺＥ☆」してしまった全力で駄目な作者でもあります。

そんな駄目作者ですが、現在悩んでいることがあります。それは、機動六課のロングアーチ組とヴァイスをどうするかです。これ以上キャラを増やせばヤバイ気がしなくもないですが、ここまで登場キャラを増やしたのなら、是非とも出してやりたいのです。グリフィスが結婚（とは名ばかりの出番なし通告）したそのお祝いも兼ねてですが。しかし、ヴァイスを出したら死亡フラグしか立たないような……ケルディムがなぁ～。という訳で、？出せやこの駄目作者、？出すなよこの駄目作者、？その他だこの駄目作者で、皆様方の意見を聞きたいです。感想にて？、？、？の何れかを書いてくだされば幸いです。ここまで読んで下さった皆様に感謝を。ＯＯの映画まで後……アレ？　カレンダー何処行った？

最後に。

感想が見事１００件を超えましたら、溜まりに溜まった魔力とＧＮ粒子で、９／９（木）には次話を投稿できる……やもしれません。勿論期待はしないほうがいいですが。

第３５話　運命とは名ばかりの……（前書き）

【命とは、その者に与えられし自由であり、枷である】

――コエンマ様より

第３５話　運命とは名ばかりの……

――新暦７５年１１月１５日――

オレンジ色の道路、家、商店……目に映る物全てがオレンジ色になっているここ第３２管理世界の中心都市「オレンジ」。その都市部の中央、半径５００メートルを超えようかという円形の巨大ロータリーの腋にある歩道を、「ＣＢ」の「ガンダム」マイスターである刹那・Ｆ・セイエイと、オペレーターであるフェルト・グレイスが、ゆっくりと商店街沿いに歩いていた。

「……なんか久しぶりだね、刹那とこうやって一緒に歩くのも」

「あぁ、そうだな」

刹那は白のＴシャツと黒の上着を着て、頭にはターバンを巻いていた。首元を覆う赤いスカーフは弱々しい風に揺らされ、パタパタと、布が風に煽られる音を出している。

その隣を歩くフェルトは、目が覚めるような純白のカーディガンを羽織り、中には水色の、おぱ～い部が妙に開けた色ッぽいＴシャツを着ていた。風が吹く度に、彼女が気に入っている白とピンクのロングスカートがその形を流動的に変えていく。

「前に歩いた時は……刹那が結構気を張り詰めていたから、ちょっと怖かったかも」

「それは……いや、すまなかったフェルト。あの時は「剣技大会」で少しばかり緊張していたのだ」

「うん、分かってるよ刹那。あの時、刹那はその大会で優勝しなくちゃいけなかったから、緊張するのは仕方ないよ」

デコボコが一切ない、須らく平らなオレンジ色の歩道を、コツコツ、ザッザッと、ヒールとスポーツシューズで踏みしめながら、フェルトは歩道の片側に幾つもある出店へと、視線を忙しそうに移していく。それを一文字に締めた厳しい口と共に見守りながら、刹那は何時になく心を安らげていた。

（……不思議な気持ちだ。これほど安らいだのは久しぶりだな。だが……何故、こんな気持ちになる？　謎だ……）

フェルトがいつも手入れを欠かさないという、桃色に染めた自慢のポニーテール。それがピョコピョコと、人の雑踏の中を飛び回る様を見ているだけで、心が洗われる様な気持になるのに、疑問を覚える刹那。そんな彼の姿を、首を１０。ほど傾げながら、不思議そうに見るフェルト。

（……刹那が何か難しい顔で悩んでいる。あんな顔をするのは、もしかして……前の戦いの失態で、謹慎を言い渡されたエクシアへのプレゼントでも考えているのかな？）

フェルトはそう思いつつ、刹那に合いそうなアクセサリーを見て回っていった。それに後ろからスッと、音も気配もなく、黙って付いていく刹那。……その姿は一歩間違えればストーカーに間違われそうだったのは、フェルトだけの秘密だ。

第３２管理世界の中心都市「オレンジ」がある惑星の、デブリが密集する衛星軌道。その石の塊が至る所にある宙域に、数百メートルという巨大な船体を静かに横たわらせながら、プトレマイオス？は無音で航行していた。

そのプトレマイオス？の内部、ＧＮドライヴの修理、改造、設計等を行う整備室で、今、一人の乙女（ガンダム）が心の奥底から叫んでいた。

『離して！　離して下さいイアン！！　離さないなら其れ相応の代価を支払って貰う事になりかねませんよ！？』

「このアホォ。「エクシア」の腕一本もインストールできないお前が、何を言うとるんだ？　最も、インストールを妨害しとるのは儂（わし）だがな」

叫んでいるのは、乙女と書いて「ガンダム」と読む彼女（？）、マイスターを偏執（へんしつ）……失敬、プログラムが病（や）むほどに愛しているＧＮ－００１の管制人格（マスタープログラム）、エクシアである。

そして、彼女に突っ込みを入れたのが、ＧＮドライヴの整備一般を預かるメカニック、イアン・ヴァスティであった。彼は「ルイエビト」攻防戦の時の戦闘データを編集しながら、とある巨大な銃を設計している。

『……どうやら、女狐（フェルト）を倒す前に倒さなければならない敵は、イアン、貴方のようですね？』

「……ハァ、全く。これじゃ先が思いやられるわい。刹那も苦労しとるなあ。取り合えずだな、エクシア。お前はまずトレミーの整備

室に謹慎させられる理由をだな……」

イアンは溜息を付きながら、されど銃の設計図からは片時も目を離さずにエクシアと会話していた。だが、自分にまで害が及びそうになり、仕方なく、エクシアがここに謹慎させられた理由（駄々をこね、発進を遅らせた）をもう一度教えておこうと、後ろを振り向き……

『女狐がマイスターの手を握れば、イアン、貴方を半殺しにします。そして女狐がマイスターの体に抱きついたら……ぶっ殺します！さらに、万が一ッ、億が一ッ！　女狐がマイスターとき、き、き、……キスなんてしたうらぁあああああッ！！』

「……儂の話を聞いてないだろ、エクシア？　あと、お前の整備をしている儂をそんな風に言うのは、管制人格としてどうかと思うぞ？」

謎の黒いオーラを出すエクシアを見て、そして音声発生機から出るドス黒い呪詛を聞いて……壮絶に後悔した。どのくらい後悔したかといえば、人生を全力で投げ捨てたくなるぐらいには……間違いなく、後悔した。

『女狐共々、その存在を抹消させて上げますよ、イアン？』

「存在を抹消するだと！？　エクシア、お前は何を考えとるんだ！？」

物騒な言葉を臆面もなく口にするエクシアを、どうしてこうなったんだ～！　と、心の中で絶叫しつつ、それでも相手をし続けるナイスパパ、イアン。そんな彼の歳のせいで遠くなり始めた耳が、不意に、ある一つの音を拾った。何か切れちゃいけない物が切れたような、そんな危険極まりない音。それが……聞こえちゃいけない方

から聞こえてきた。

（……待て待て待て待てぇえええい！　落ち着くんだ儂！！　まずは現状を確認しよう。さっきの音はどこから聞こえた？　……間違いなくエクシアの方からだったな。……刹那。後生だから、儂を助けてくれ……！）

この時点でイアンは既に色々なモノを諦めていた。そして、そんな彼の耳に、現時点で最も聞きたくない声が、否応なく入ってきた。

『フフッ、マイスター？　エクシアは逃げないので、そんなに焦って抱き締めなくとも大丈夫ですよ？　……さぁ、エクシアが誠心誠意を入魂して作ったお味噌汁を、たんと食べて下さい、マイスター？　私と……一緒に……「あ～ん」をしながら……？』

「……手遅れだと、後で刹那に伝えておくかの。……ハァ。本当に、先が思いやられるわい」

エクシアのその言葉を聞いたイアンは、顔に手をやりながら、真剣にＯガンダム単体での運用を考えた。

「……む、旨い。……フェルト、これはおいしいぞ？　一口どうだ

？」

イアンが刹那に助けを求めていた頃、刹那は露天の商店からこの都市の名物である「全力で見逃せオレンジ」という縦長の果実を買い、それを一口、食していた。その果実の味は正に絶品で、今の刹那ですら、「これをやるから、我々を全力で見逃せ！」と言われたら「あぁ、了解した」と言ってしまうかもしれないほどだった。

「え、いいの？」

そして刹那は、この果実の美味しさをフェルトにも知ってもらおうと思い、彼が齧（かじ）った方をフェルトの方に向け、そこを食べるように促した。

「あぁ。……？　どうした、食べないのか？」
「で、で、でも……これ……このままだと……」

だが、フェルトは一向に食べる気配を見せなかった。それに眉を寄せながら、さらにズイッとフェルトの方に果実を近づける刹那。よく見れば、フェルトの頬が、刹那が果実を近づける度に赤くなっているのに気付くであろう。だがッ！　それに気付かないのが……せっさんクオリティーであるッ！！

「……？　何か問題があるのか？」
「えッ！？　う、ううん。特には無いけど……刹那はいいの？」

せっさんクオリティーを全力全開にしながら、昔から変わらない無表情さでフェルトに果実を食べるよう促す刹那。その無表情さを見て、フェルトは気付いた。刹那はこの構図が、外から見ればどう見えるのかを理解していない事を。そしてフェルトは刹那にそれが

最終回答（ファイナル・アンサー）かどうかを確かめてから、それをする意を決した。

「？　あぁ、別にいいが？」

「そ、それじゃ……パクッ（うわ～、どうしよう！　絶対顔赤くなってるよ～！）」

その構図を見ていた、とあるアイス好きの局員とバイク持ち局員は、後にこう語った。

「あんな道のど真ん中で、「あ～ん」と「間接キス」のダブルコンボをする人が居るなんて……！　私もティアとしたって殴らないでよティアッ！？」

「うっさいわね！　あんたはまずその頭の中をどうにかしなさい！……それにしても、あんな大胆な事をする人も居るのね。……私も何時か、誰かと……って、スバル！？　どうしてアンタ、血の涙を流しているのよ！？」

ちなみに、その行為の後、刹那の顔色は常日頃と何ら変わりはなかったが、フェルトの顔色は、完熟トマトなどよりも遥かに赤くなっていた。

「さて、フェルト。作戦開始時刻までまだ余裕があるが……どうする？」

「えっとね……どうしよう刹那？」

何とか火照っていた顔を冷ます事に成功したフェルトだが、まだ頭の中は恥ずかしさで混乱したままだった。

「……オレに聞かないで、いや待てよ。たしかこの辺りには……」

『一応言っておきますがね、マイスター？　罷り間違ってもスポーツジムなどに、フェルトを連れて行かないで下さいよ？　そういうのは冗談でも、私が許しませんよ？』

そんなフェルトの状態に気付きもせずに、刹那は頭に叩き込んでいたこの辺りの地図を頭に描き、そして自身が興味のあった場所を提案しようとした。が、それがどこなのかを事前に知っていたOガンダムは、彼に深々と釘を刺す。そんな所に女性を連れていくなど、言語道断だと。

「うっ……Oガンダム」

「……刹那、本当にスポーツジムに連れて行こうとしたの？」

「……面目ないが、そうだ」

「……」じとーー……

フェルトのじとッとした視線が、やけに痛かった。それを感じながら刹那は、ただひたすらに頭を下げる事しかできなかった。無論、何故スポーツジムが駄目だったのかを、彼はまだ理解してはいなかったが。

『安心して下さい、フェルト。こんな事もあろうかと、私が昨晩、マイスターがフェルトを連れていくのに相応しい場所を、幾つかピックアップしておきました。これらの場所ならば、マイスターにもフェルトにも、お勧めできます』

「ありがとう、Oガンダム。そんな事までしてくれて……」

『このぐらいの準備は当然の事です、男性が女性と出歩く時には。まぁ、マイスターが予定を何も立てていなさそうだったので、私も大急ぎで調べたのですが……』

「……すまん」

やはり刹那は、この時も頭を下げる事しかできなかった。その何時もの凛々(りり)しい姿とは違う、子犬のような（可）愛らしい姿に苦笑しかけながら、フェルトはOガンダムがピックアップしてくれた場所に行こうと、刹那を励ました。

「……では、そこに行くぞOガンダム、フェルト」

『イエス、マイスター。これからはマイスター一人で調べて下さいよ？』

「分かっている。今後は注意する」

「あっ！　ちょっと待って刹……キャッ！？」

その励ましを受けた刹那は、汚名返上をしようと、妙に張り切りつつ、歩道から溢れだしそうな人混みの中を速足で進んでいった。それに精一杯ついていこうとしたフェルトだったが、人混みが凄過(すごす)ぎて、速足で歩く刹那に追い付く事が出来ない。そして、徐々に刹那と離れていくフェルトに、一人の女の子がぶつかり、膝(ひざ)から転んでしまった。

本来優しい性格であったフェルトには、その女の子の傷を無視する事ができなかった。彼女は泣く子すら惨殺(ざんさつ)する悪鬼の集団である「ＣＢ」の一員だというにである。そして、その手当てをしている内に、フェルトは刹那と完全にはぐれてしまった。女の子からのお礼と引き換えに。

刹那がフェルトとはぐれたのに気付いたのは、この時から十分後、Oガンダムに『手を繋いだらどうですか？』と提案された時だった。その時の、フェルトとはぐれたことが分かった時のOガンダムの怒り様は……凄まじい物だったらしい。

中心都市「オレンジ」の郊外にある、オレンジ色の次元航行艦船専用ドッグに、一隻のL級艦船が入港していく。その船は白を主体にし、二つの船頭が前へと伸びていた。船体には「アースラ」と刻まれ、それがそのL級艦船の名称である。

「それで？　何が分かったんやシャーリー？」
「……隊長は、「CB」の『宣言』を憶えていますか？」
「あぁ、そりゃ勿論……」

そのアースラの艦橋にほど近い艦長室で、椅子に座る八神はやてと、執務机の前に立つシャリオ・フィニーノ（愛称はシャーリー）が話し合っていた。議論は勿論、現在管理局と戦争をしている組織、「CB」についてだった。シャーリーは白衣の懐をゴソゴソと探りつつ、話を進めた。

「私はその『宣言』の、ある一単語に注目しました。それが……これです」

言って、白衣の内側から小型の情報端末を出すと、「CB」の『宣言』の一部を再生した。車椅子に乗った老人と、その横に二人づつ控える四人組みが空中モニターに映し出される。そして老人の、今にも皺枯れそうな、でも力が脈動している声が、はやてとシャーリーの耳に届く。

『私達は、ソレスタルビーイング。デバイス「ガンダム」を所有する、私設武装組織です。』

「……で、どこに注目したん？」

「彼らはこう言っているんですよ！　私達がロストロギアとして扱っている「ガンダム」は、デバイスであると！」

興奮気味に答えるシャーリー。だが、はやては未だ顔を顰めたままだった。

「でも、それは中央技術開発局の、六人いる全局長から全力否定された話じゃなかったんか？　確か「話にもならん」とかで一笑されたって聞いたんやけど……」

言って、イリスの青白い顔を思い出すはやて。はやてからすれば、第二～第六局長は到底信じられる人物ではない。しかし、第一局長である彼女だけは信じられる者だった。だからこそ、はやては自分の部下であり、親友でもある高町なのはの診療を彼女に任せたのだ。そんな彼女ですら一言でばっさりと切り捨てた「「ガンダム」デバイス説」。それははやてにとっても、容易に信じられる話では無かった。

しかし、シャーリーは眼鏡を人差し指で押し上げ、それを怪しく光らせると、こう話を切り出した。

「確かにそうでした。しかし、実は「ルイェビト」攻防戦で生き残った局員が、こう証言したんです」

「……」

シャーリーのほどのメカニックの耳にすら入った、信憑性（しんぴょうせい）に欠ける筈の証言。それにはやては黙って続きを促した。

「その局員が言うには、「ルイェビト」で初めて確認された、二機の新型――青い方を仮称「砲台」、白い「ガンダム」フェイスを持つ方を仮称「白鬼（しろおに）」とします――の内の一機、「白鬼」が……喋りながら「輝ける鬼火」スヴァ＝ローグと戦っていたらしいです」

「なん……やて？」

だが、その証言ははやての予想を遥かに超えた物だった。喋った？　ロストロギアが？　「ガンダム」が？　はやての頭の中がそれらの疑問に埋め尽くされていく。それほど衝撃的だったのだ、その証言は。

デバイスにはインテリジェントデバイスという、知性を有する物があるが、現時点で管理局が保護しているロストロギアには、知性を有するモノは確認できていない。それには様々な諸説があり、曰く。新暦以前の文明では、道具に知性を持たせる事に必要性を感じていなかった。曰く。強力な兵器とも成り得るロストロギアに、知性は持たせられなかった。曰く。「アルハザード（遺失せし秘術の聖地）」には唯二つ、全知を司っていたロストロギアがあったが為に、それ以外の知性は無用だった、等々……

つまり、理由こそ分からないが、ロストロギアには知性を有するモノは無い、という事だ。その点に関しては、最後の説以外、概ね共通している事項だった。だからこそはやては驚いたのだ、「ガンダム」が知性を持つロストロギアである可能性が出てきた事を。

「しかも、それだけじゃないんです！　その「白鬼」は赤い粒子なのに、ＴＲＡＮＳ－ＡＭを発動させて「輝ける鬼火」を倒したそうです！　そして！！　ＸＶ級次元航行艦の「トリグラフ」を倒した時……その局員は、見たそうです」

「見たって……何をや？」

これ以上の何かがまだあるんかい？　という顔をしながら、シャーリーに問い返すはやて。そんな彼女の態度に気を悪くしないで、シャーリーはこの話の最後、一番の胆である所を、一気に捲し立てた。

「……「白鬼」が、若草色のボディースーツを纏った人間らしき「何か」に、変身したのを……その人は、見たそうです」

「……待てい。ちゅうことは、まさか……アレは機械人形型のロストロギアなんかじゃなくて、ただの、うちらが使う様なデバイスに過ぎんと……そう言いたいんか、シャーリーは？」

「……はい。まだ推測の域ですが……」

声を潜めながら、シャーリーはそう締め括った。それにはやては深い、本当に深い溜息を吐いて、丸っこい肉付きの体を艦長椅子に沈めた。その姿は酷く疲れているようで……希望を与えられた獣のような姿でもあった。まるで追い掛けていた相手の正体を、少しでも解明できたような、そんな歓喜に……はやては満ち満ちていた。

「……デバイス、か。あのレポートにも、人間と機械人形を交互に変身させるようなロストロギアはないって書いとるもんなぁ……。」

「ロストロギアはあくまでもロストロギアであり、人間ではない。故に、それらは機械人形や魔法生命体になるのが精一杯で、決して人間には生(な)り得ない。人間が人間を、もしくは人間を超える何モノかを造る事は、正に、神の領域を侵す事に、他ならないモノである」

……ユーノ君もこう言っとるし、「ガンダム」がデバイスである可能性は高そうやな」

かつて、無限書庫からある一つの仮説、いや、ロストロギアに関する資料を一挙に纏めたレポートが提出された時があった。その枚数は実にＡ４サイズの紙で７６６６枚という膨大な数であったが、そのレポートは未だに次元航行部隊、並びに、ロストロギアを扱う部署では、マニュアル、あるいはバイブルとして扱われていた。

何故なら、そのレポート――ＬＲ(ロストロギア)レポートは、管理局が確認できているロストロギア、のみならず、無限書庫で確認されたロストロギアの情報まで、その全てを簡潔に、明瞭に網羅(もうら)していたからだ。かくいうはやての執務机の棚にも、ＬＲレポートのコピーが入っている。最も、まだはやては読み切っていないが。

そして、そのレポートは最後に、はやてが言った言葉で締め括られていた。ロストロギアは人間を造れないと、ロストロギアを自分に使った人間は、真の意味での人間には戻れないと、そのレポートはそう言っているのだ。例えば、はやての蒐集能力然り、ヴィヴィオの後遺症(こういしょう)然りと、何らかの副作用があって当然だと、そのレポート――それを書いたユーノは、そう仮説を建てた。

「……そか。まぁ、確かにな。言われてみると、めっちゃ納得できるわ。それなら、どうしてイオリア・シュヘンベルグの横に、四人

の人間が居たのか、説明できるもんな」
「……え？」

その仮説を思い出しつつ、はやてはニヤリと、悪そうに笑った。
四人……四機……デバイス……彼女の頭の中で、急速にパズルが揃っていく。最初から答えがあったかのように、次々とパズルは既定の場所に嵌っていき……ある一つの仮説が、遂にはやての頭の中で完成した。

「四人や、四人。この数はな……四年前の「管理局の悪夢」で初めて確認された「ガンダム」の数で、そしてあの蒼碧色の粒子をもつ「ガンダム」――「剣士」、「三つ目」、「羽付き」、「デカブツ」――といった、「ＣＢ」を真に象徴する「ガンダム」の数でもあるんや。……どや、これでまた「「ガンダム」デバイス説」に合点がゆくやろ？」
「……成程、言われてみれば確かに」

もし今の彼女の考えた通りなら……まず間違いなく、「ガンダム」はデバイス、それも、恐らくは「ＣＢ」が独自に開発したモノだろう。そしてオーバーＳランクを凌駕するかもしれない程の力を併せ持つそれは……恐らくだが、採算や量産を度外視している、ワンオフ機である可能性が高い。つまり、「ガンダム」は一度でも核となる何かを破壊されれば、二度と蘇る事がない……かもしれない……！

「そやろ？　……で、これだけなん？　うちに話しておく事は？」
「……もう一つ。これはまだ推測どころか仮説すら立てられない程、確証が揺らいでいる物なのですが……」

そして、その考えを頭の隅にスッと移したはやては、シャーリーと共に、次の話へと移っていった。唯一つ、この戦争を終わらせら

れる希望だけを、黒い心（腹）にメラメラと灯（とも）しながら。

「……はぐれちゃった」

フェルトは女の子と手を振って別れた後になって、漸く自身が刹那とはぐれた事に気がついた。其れに気付いたフェルトは、何とか刹那を探し出そうと、人混みの中を掻（か）き分けながら進んでいくが、一向に探し出せる気がしない。

「刹那！？　刹那ッ！？」

あまり大きくない、しかしフェルトが出せる声としては最大の音量で彼の名を呼ぶフェルト。しかし、その成果はまるでなく、十分が過ぎても二十分が過ぎても、彼女は刹那とはぐれたままだった。それに焦燥を感じ、一人でいる寂しさに涙が出そうになりつつも、必死になって彼を探すフェルトだったが、次の瞬間、彼女の世界は一転して下に下に落ちた。

「いったぁ……」

見れば、彼女の足元には小さなオレンジ色の小石が転がっていた。

恐らくこれに躓き、転んだのだろう。だが、ロングスカートから出た生足を見れば、膝に小さな擦り傷があり、その小さな痛みは、彼女の涙を決壊させるのに十分な威力を有して……

「「大丈夫ですかッ!?」」

……子供？　とフェルトは疑問に思いながら、目尻に涙が浮かんでいる顔を上げた。そこには、頭に大きな帽子と子竜をのせた、可愛らしい少女と、腕時計をしている腕を此方に伸ばす、幼げながらも引き締まった顔をしている少年がいた。フェルトはその二人組を見て、一瞬だけポカンとするも、すぐに少年が自分を起す為に腕を伸ばしているという事に気付き、その手を掴むと、体を起こすのを手伝って貰う。

「え？　あ、だ、大丈夫で……す？」
「本当に大丈夫ですか!?」
「痛いところとか、ありませんか!?」

オレンジ色の地面から立ち上がりつつ、フェルトは助けてもらった二人組の少年少女にお礼を言う為に、その顔をしっかりと目で捉え……？　どこかで見た様な気がする。気のせいだろうか？

「取り合えず、フェ……隊長を呼んでくるんで、少し待っていて下さい！」
「……待って、エリオ君。もしかしなくても、アレがフェイトさんじゃ……？」

悶々と、どこかで見た事がある二人の顔を、頑張って思いだそうとしているフェルトには、二人のやりとりは聞こえていなかった。もしこの時点で、彼女が少女の言った名前を聞いていれば、このよ

うな運命は、なかったのかもしれない。

「……えっと……どうしてサングラスとマスクをしているんだろうね？」

「あんな厚着の黒コートを着て、熱くないのかな？　フェイトさんは？」

だが、このような偶然が集まる事で、運命は廻っていくのだ。クルクルと、無限の螺旋を描きつつ。

「……まず、呼んでみよう？　フェイトさーーん！」

「……アレ？　どうして物陰に隠れるんだろう？」

「さあ？　まあ、もう一回呼んでみるよ。フェイトさーーん！　怪我している人が居るので、こっちに来てくれませんかーー！」

「……え？　怪我人？　だったら行かなくちゃ！　待っててエリオーー！　キャローーー！　今（お母さんが）行くからねーー！！」

「えっと……あの人でもないしこの人でも……ってエリオ？　キャロ？　それに……フェイ……トさん！？　もしかして……！」

そして、その偶然は、世界からすれば必然以外の何物でもないだろう。故に、それは偶然という曖昧なモノではなく、必然という確立された事象に過ぎないのだ。例え、例え……

「あ、えっと……転んだだけなんですけど、さっきから誰かを探しているようでした」

「えっと……名前は確か刹那……って言っていました。でも、とりあえず今は傷の手当てが優先だと思います」

「そうだね、エリオ、キャロ。……えっと、誰を捜していたのか、教えてくれませんか？　あっ、私は……」

「……「金色の閃光」、フェイト・Ｔ・ハラオウン……！」

「「「え？」」」

管理局のフェイト・Ｔ・ハラオウンと、「ＣＢ」のフェルト・グレイスを会わせるような事態を、『必然』が引き起こしてしまったとしても、運命はそれに関係なく、ただ無限の螺旋を描き続けるだけだ。

「……ここです。ここを見ていて下さい」

次の話題に移ったシャーリーは、まず、一つの資料をはやてに手渡し、そしてさっきの『宣言』とは違う動画を再生させた。今度の動画はどうやら「Ｄ・Ｏ・Ｐ（天使の発表会）」事件の時の戦闘データらしく、ちょうどなのはが「スターライト・ブレイカー（絶極に至りし星の光）」を放とうとしていた所であった。

「……」

資料と戦闘データを交互に見ながら、ジッと不快そうにモニターを見つめるはやて。この後親友の身に何が起きるのかを知っているはやてには、その見詰めている時間が拷問のように思えた。

「……んな!?　この反応は……有りえんやろ!?」

だが、その拷問の様な時間は、すぐさま吹っ飛んでしまった。はやてはなのはの胸を突き破って出てきたその白い腕を、見開いた眼で見つめる。その腕から出た反応に、顎を外しそうになるほど驚きながら。

「えぇ、そうですね。正直、私自身も信じられないのですが……」

シャーリーも自信なさげに、その話を続けた。彼女もまたそのデータが信じられないのだろう。だが、それは確固たる事実として、彼女らの前に聳え立っていた。

「謎の術式と魔法で、なのはさんのリンカーコアの魔力放出を封じ、魔法を発動させなくした、この仮面を被った人物。……この人物は、もしかしたら……人でない可能性があります。寧ろこの反応は……デバイスに似ています。それも、」

その、あまりにも有り得ないデータを口にする覚悟を決める為に、シャーリーは一度、深呼吸をした。これらの事実が齎すであろう衝撃に耐える為に、彼女は何よりもまず、心を静めたのだ。彼女がこのデータに気付いた時の様なパニックに、陥らないように。

「……八神部隊長のユニゾンデバイスである「リインフォース?」に……限りなく、酷似していました」

出来得る限りの冷静さを装いつつ、言い放たれたその衝撃の事実は、しかし、その冷たさを持ってしても、はやての衝撃で熱した脳髄を冷やせなかった。あまりの衝撃で倒れそうになりながらも、はやては力を振り絞って一言だけ、言葉を紡いだ。

「……嘘、やろ？　せやったらこいつは……一体、何モノなんや？」

その疑問に答えるモノは、誰も居なかった。

【この世界に偶然は無い。あるのは必然だけ】

――キラー様より

【誰も完全じゃない（Ｎｏｂｏｄｙ’ｓ　Ｐｅｒｆｅｃｔ）】

――Ｐ３様から、『仮面ライダーＷ』の鳴海荘吉より

第３５話　運命とは名ばかりの……（後書き）

今日は夜々（８月８日）の日ではなく九九の日でしたが、彼女のヤンデレに敬意を称し、とある場面をリスペクトさせて貰いました！
分かる人には分かると思います。

そんでもって、今話で初めてフェルトに焦点を合わせて執筆しましたが、何かおかしい所が御座いましたら、ぜひとも指摘ご指導、願います！　彼女はあまり喋らないので、口調が……性格が……作者には分からない！　からです。

そして前話のアンケートですが、？一つ、？一つ、？一つと、非常に判断に困る結果となりました。ですので、ここでもう一度感想にて？、？、？の何れかを書いて下されば、幸いです。ここまで読んで下さった皆様に感謝を。ＯＯの映画まで、後九日です！　さあ、気張って作品を仕上げましょう！

最後に。

へへ……真っ白に、燃え尽きた……ぜ……。次……の、投稿、は……未定……グワハッ！？

第３６話　友達とは名ばかりの……（前書き）

【押しつけの善意など、悪意となんら変わらない！】

――凡人様から、『コードギアス　反逆のルルーシュ』のルルーシュ・ランペルージより

第３６話　友達とは名ばかりの……

――新暦７５年１１月１５日――

「え……っと。それじゃあ、捜している人物の特徴を言って下さると助かるんですが……」

「あ、はいッ！　えっとですね……まず彼の名前は……えっと……刹那・Ｆ・セイエイ、と言います。彼は頭に白いターバンを巻いた、肌が少し褐色の、二十歳ぐらいの青年です」

フェイト・Ｔ・ハラオウンは、フェルトのその人物像を聞いて、ふと、八年前に出会った少年の事を、何故か思い出した。彼とは八年前の「剣技大会」の決勝で「敵」として戦い、後の事件では「味方」として戦った訳だが、その後の音沙汰がぱったりと途絶えた為、今生きているのかどうかも、フェイトには分からなかった。それに僅かばかりの寂寞を感じつつも、今は彼女を助けるのが先決だと、自身に喝を入れ、再び業務に意識を戻す。

そんな気合い十分なフェイトに対して、フェルトは、緊張と焦燥でおかしくなりそうだった。相手が不倶戴天の敵である管理局、それも、何度も戦場で「ガンダム」達と戦い、それでも尚生き永らえている、歴戦のオーバーＳランク魔導師に直接質問されているのだ。今の彼女の心臓は、全力疾走をした時よりも激しく鼓動し、今すぐ倒れてもおかしくないほど、バクバク煩く鳴っていた。

「……う～ん。もう少し、何か特徴がありませんか？」

「……もう少し、ですか？　そうですね……首に赤いスカーフを巻いています。あと、黒い上着と白のＴシャツを着ていました」

「そうですか……うん、このぐらい特徴が分かれば、すぐに見つか

ると思います。なので、もう少し辛抱していて下さい。すぐに捜しますので」

「あ、ありがとうございます……」

心臓の音が煩すぎて、相手の声が途切れ途切れにしか聞こえない。一言でも言い間違えれば、自身がどうなるか、フェルトには恐ろし過ぎて、想像すらできない。そんな状況が永遠に思えるほど長く――実質は数分程度だが――続き、やっとの思いで解放されたと思いきや、

「あ、でも、今はかなり物騒なので、私達と一緒に行動して下さいね？」

……フェルトは自身の心臓が何時破裂するのか、不安で仕方がなかった。

『ですから、マイスターはもっとフェルトに気を使って下さい！彼女はそれほど人付き合いが得意ではないので、マイスターの方から行かないと、このような非常極まる事態になってしまうのですよ！　ちゃんとアンダースタンドしていますか、マイスターッ！？』

「分かっている！　これはオレのミスだった。……すまない、Oガ

ンダム」
『……今は謝るよりも先にフェルトを捜索して下さい、マイスター』
「あぁ、分かっている」

刹那と待機状態のOガンダムは、潜伏先だったホテルの屋上から、遠視の魔法でフェルトを血眼(ちまなこ)になって捜していた。が、その成果は全く挙がらず、ただ無為に時間だけが過ぎていく。それに苛立ちを感じたOガンダムは、エクシアのような幼い癇癪(かんしゃく)を起しそうになったが、寸での所で、彼ら以外にもこの都市に潜伏している「ガンダム」マイスターの存在を思い出した。嗚呼、哀れなるかなハブラレルヤ。

『そうですよマイスター！　ここにはアリオスとマイスター・アレルヤが居るではないですか！　これを使わない手は有り得ませんといいますか使わないとは言わせません！！』
「……Oガンダム。それはもうオレがさっき連絡しておいたが……」
『……え？』
「向こうは了解だと答えてくれたぞ？」

愕然とするOガンダムを横目に、遠視の魔法でフェルトを捜し続ける刹那。その顔には必死さの他に、「何を言っている？」という疑惑の色が張り付いている。それを見て、咳払いを一つしてから、黙って捜索を再開させるOガンダム。

『……』
「……Oガン」
『喋(しゃべ)る前に目を動かして下さい、マイスターッ！』
「……了解」

刹那は何故自分が怒られなければならないのかと、その理不尽さ

に首を傾げるも、それでもOガンダムの言うとおりに行動した。その時のOガンダムは、フェルトが行方不明になった事が判明した時の怖さとはまた別の恐さがあり――とてもではないが、刹那には逆らうことができなかった。

もし彼が乙女心というモノを数ミクロンでも理解していれば、その怒りの違いについても理解できた……かもしれない。いや無理か。

上空の蒼穹以外がオレンジ色に染まり切っている都市「オレンジ」の一番大きな大通り、第32管理世界の代表大統領が講演する予定の広場の片隅に、アレルヤ・ハプティズムは待機状態のアリオスを首から下げつつ、ひっそりと大木の日陰の中に佇んでいた。

「……一番人通りが多い場所が此処だけど、フェルトはここにいるのかな？」

『正直、確率は21％と、かなり低いです。ここは素晴らしく広々と開けていますが、人も多過ぎて、捜すには骨が折れる事間違いなしですから』

「確かに凄い人混みだね。これは誘導員も苦労しそうだ……」

さっきからひっきりなしに、大声で聴衆を誘導しようとするオレ

ンジ色の誘導員を見て、アレルヤは心の底から彼に同情した。例え自分が彼を殺す事になる――これから自分達が起こす作戦によって、その命が潰えてしまうとしても、その時アレルヤは確かに、その若い誘導員の大変さに同情していた。それが薄っぺらい自己保身だと、薄汚れた偽善だと分かっていても……彼はそれをせずにはいられなかった。

それを理解した上で、アリオスは話を続けた。遠視の魔法を白い三角錐の中から発動させながら。

『……マイスター、よく見ておいて下さい。これが今から私達の作戦に巻き込まれる人達です。彼らは何かしたわけでも、巻き込まれるような事をしたわけでもありません。それでも私達は、其処にある世界の一部を変革させる為に……』

「民間人をも、巻き込まなければならない……分かっているよアリオス。それはもう四年前のあの時には覚悟していたさ」

『……でしたら、私はもう何も言いません。ただ、私達は世界の悪意を受けなければならず、故に、甘い行動――特に、正義に奔(はし)るような行動は……』

「決して、してはならない……だね？」

『イエス、マイスター』

アレルヤは心配性な相棒の、何回目になるか分からない問い掛けに、苦笑しながら何時も通りの答えをなぞっていく。そしてその何時も通りの答えに安心したアリオスは、現代のインテリジェントデバイスを遥かに超える超高度ＡＩにも関わらず、やはり何時も通りに安堵の溜息をついて……ぴょこぴょこ上下に動く桃色のポニーテールを遠視魔法の片隅に捉えた。

『マイスター、フェルト・グレイス嬢を発見し……ば、馬鹿なッ！

？　どうしてアレがグレイス嬢の傍にッ！？』
「アリオス、どうし……アレはまさかッ！？」

だが、彼らは同時に、桃色のポニーテールの傍に、金色の輝きをも見つけてしまった。四年前、彼らを「速さ」で圧倒し、『フォーリング・エンジェルス』ではＴＲＡＮＳ－ＡＭを発動させたキュリオスに真っ向から唯一、直接損傷（ダイレクトダメージ）を与えた、アリオス曰く「唯一人の好敵にして仇敵、そして怨敵」足る人物――フェイト・Ｔ・ハラオウンを。

「え？　それじゃあフェルトは、八年前の「剣技大会」に来ていたの？」
「は、はいッ！　観戦しただけですが……えっと……彼と、刹那と一緒に……」
「へぇ～……それじゃあ、私がフェイト・Ｔ・ハラオウンだって分かったのも……」
「は、はい、そうです！　その大会の事を憶（おぼ）えていたからです！　凄く強く印象に残っていたので……」

フェイトはまず、人が一番多いこの大通りの広場に、フェルト・エリオ・キャロ・フリードを連れてやってきた。人を捜すのならば、

まずはここから当たっていった方が、効率がいいからだ。そしてフェルトと会話をしている途中で、彼女が自分と同じ１９歳だという事が分かると、すぐに互いのさん付けを、多少強引ではあったが無理やり取っ払った。

「そ、そんなに印象に残っていたの？」

「……小さい女の子が大の男の剣戟を得意のスピードで華麗にかわし、たった一撃で勝負を決めるあの光景は、今でも忘れられません……」

「そ、そう……なんだ。へぇ～……何だかちょっと、恥ずかしいな、えへへ……」

フェルトはそのさん付け撤廃にかなり反対したが、フェイトの頑固さを見て取るや、すぐに降参の白旗を掲げ、「フェイト」と呼ぶ事にした。それで何か変わるわけでも、ましてや「ＣＢ」に在籍する決意に何ら変化があるはずがないと思いつつも、フェルトは少しだけ、本当に少しだけ、フェイトと戦いたくないなと思ってしまった。それが在ってはならない思いだとは、重々、承知していたが。

「あの、フェイトさん？　その「剣技大会」って何ですか？」

「私も知りたいです！」

「きゅくるーー！」

「うんとね、「剣技大会」っていうのはね……まあ、私が参加したのは八年前なんだけど、その大会は……」

「あれ、フェルト？　どうしてここに君が？」

「「「え？」」」

その在ってはならない思いを、心の奥の奥、深淵存在（マテリアルズ）に仕舞い込んでいたフェルトの耳に、突然聞き憶えのある男の声が聞こえてきた。その男は優しげに笑いながら、片手を上げてフェルト達に近寄

ってくる。近くにフェイトという、彼にとっての仇敵がいるにも関わらず。

「……アレルヤ？　どうして貴方が此処に」

来れたの？　とは間違っても聞かない。近くにフェイトがいる以上、おかしな会話は絶対に避けねばならないからだ。そしてその意を正確に読み取ったアレルヤは、当たり触りのない言葉を慎重に選びつつ、その危険な会話を続行させた。

「いや、彼といるはずの君を偶然見かけてね。どうしたんだろうと思って話しかけたんだけど……もしかして、彼とはぐれたのかい？」
「……うん」
「「……」」

フェイト達が黙って彼らを見守る中、綱渡りのように危険な会話を続けるフェルトとアレルヤ。その背はすでに冷や汗でびしょびしょに濡れており、何時口が滑るか、気が気でなかった。

「一応、彼の居場所なら、僕が知っているけど……」
「本当!?　それじゃあ……」
「案内は任せてよ。一応ここらへんで働いているタクシドライバーなんだから」
「……アレルヤ、ありがとう」
「どう致しまして」
「……フェルト。彼、見つかってよかったね？」
「はい。……あの、フェイト？　フェイトも今まで私と一緒に彼を捜してくれて、ありがとう」
「ううん、そんな、お礼なんていいよ。友達なんだから」
「……うん」

フェイトが笑顔で――あまりにも眩し過ぎて、直視できない――言った「友達」という単語。それに微か……本当に微かに眉を苦しそうに寄せつつ、肯定の言葉を何とか魂から絞り出す。隣にいるアレルヤが、驚愕の表情をしているのが、フェルトにも分かった。

「……それじゃ、フェイト。……さようなら」

「また、会えるといいね、フェルト」

「……きっと、会えるよ」

そして、アレルヤの後を追いながら、フェルトは別れの言葉と共に、この大通りから出ていった。フェイトはその後ろ姿が見えなくなるまで、ずっと手を振っていた。新しい友達ができたと、無邪気にも、無知にも、愚かにも……悲劇しか含有しない喜びを、噛み締めて。

「行ったな」

「はい、大佐」

「それでは、私達も彼女たちに接触するとしようか、少尉？」

「はっ、了解です！」

その別れを、身長が凸凹な二人組は遠くに駐車していた車の中から、ずっと監視していた。いや、正確にはその場の唯一人――片目を前髪で隠した、二十代中盤の男をだ。彼らは大通りの警備をしていた時にその男を発見し、所々の所作から滲み出る殺しの体捌きを見て、その男を発見した時からずっとマークしていたのだ。

「さて、何か有益な情報があればいいが……」

「そうですね、大佐」

そして、彼らはその明らかに危険そうな男と何らかの言葉を交わした執務官――フェイトの意見を聞く為に、迷彩柄のジープの中から出て、彼女たちの元へと急ぎ足で向かう。

「少し、いいですかな？　フェイト・T・ハラオウン執務官？」

「貴方は……セルゲイ・スミルノフ大佐!?　どうしてここに……！」

「何、貴官も気付いていたと思うが……あの前髪で片目を隠した男を監視していたのだ。何事かを起すかも知れんと思ってな」

その凸凹な二人組に話しかけられたフェイトは、驚きのあまりつい叫んでしまった。彼女はまさかこんな所に、第３２管理世界を代表する様な魔導師が来ていたとは思ってもいなかったのだ。

その緑色の軍服と白い手袋を填めた凸凹な二人組は、男と女で構成されていた。

二人組の男の方は、五十に届こうかという壮齢の軍人、「荒熊」セルゲイ・スミルノフ。

片や女の方、二十を僅かに上回る、目つきの鋭い乙女な軍人、「

超兵」ソーマ・ピーリス。

この二人組は、ここ第３２管理世界では知らぬ者がいないほど有名な魔導師タッグであり、特に「超兵」ソーマ・ピーリスは、管理局ですらたった４０人前後しか保有していない、希少なオーバーＳランク魔導師である。

そんなビッグな人物たち――この世界では大佐と少尉だが、他の管理世界では提督並みの待遇を受ける――から直接声をかけられたのだ。驚くのも無理は無い。だが、顔の左半分に大きな傷があるセルゲイはその驚いている時間すらも惜しいとばかりに話を推し進める。ソーマは大佐の説明が終わるまで、ずっと黙っていた。

「……あの、「アレルヤ」とフェルトから呼ばれたタクシードライバーの事ですか？　確かに、ただのドライバーにしては、あまりにも動きが洗練され過ぎているとは思いましたが……」

「……「アレルヤ」、か。賛美の名にしては、随分と血生臭そうな男であったが……」

「大佐、尾行はよろしいので？」

「先程、部下のものに尾(つ)けさせた。何かあれば、すぐに連絡が来るだろう」

説明が終わり、男の名が「アレルヤ」だということは分かった。それは僥倖(ぎょうこう)な事だろう。だが、先程から止まないこの胸騒ぎは一体、何だというのだ？

「……そう言えば、機動六課も私達と同じく、ここで行われる代表大統領の講演の警備でしたな？」

「えぇ、そうですが、それが何か？」

「いや、何……もしかしたら、ここにも「ＣＢ」が現れるかもしれ」

「現れます」

その胸騒ぎを振り払う為に、セルゲイは今世界を戦争の渦に捉えさせている『悪』の組織、「ＣＢ」がここに現れるかもしれないという、憶測にしか過ぎない話を切り出してみたが、フェイトはその憶測を瞬時にぶった切り、必ず現れると、そう断言した。

そこには何の迷いも、逡巡もなく、ただ歴然とした事実を述べるような雰囲気しかなかった。

「彼らは間違いなくここに攻め入ります。絶対に、です」

「……それは、勘……かね？」

「女の勘ですが、事実になるかと……」

「……私は自分で見たモノ以外は信じないが、例外として、女の勘だけは信じている。それは忠告として、受け取らせて貰おう、ハラオウン執務官」

今まで一度も「ガンダム」と相対した事が無い自分達よりは、何度も相対しているフェイトの方に、言葉の重みがある。そう判断したセルゲイはフェイトの言葉に一層心身を引き締めた。無論、隣にいるソーマもだ。

「……では大佐。もう一度警備を回っていきますか？」

「うむ、そうしよう。では、さらばだハラオウン執務官。もし「ＣＢ」が現れた際には、助力を願う」

「あ、はい！　此方こそ、よろしくお願いします！」

「うむ、約束しよう」

そして、セルゲイとソーマ（彼女はフェイトとエリオを終始見詰めていた）が乗りこんだ、フェイト達に程近い路傍に停まっていた

迷彩柄のジープが大通りの車道をゆっくりと走り出し、やがて、その場から去っていった。そしてその姿が完全に見えなくなるまで、フェイト・キャロ・エリオ・フリードはずっとその場から動かなかった。

『マイスター、まだ遅くはありません！　さあ、早くセットアップをッ！』

「刹那、フェルトはこっちで発見できたよ」

『了解。……迷惑をかけて済まなかった、アレルヤ』

「このぐらいの事なら、迷惑じゃないよ。……それじゃ、僕はフェルトを当初の待機場所に送ってから、そっちとの合流ポイントに向かうけど、それでいいかい？」

『あぁ、問題ない』

『マイスター、今こそあの時の雪辱を晴らす時です！　奴に……奴に私達の後背を魅せ付ける時が……今なのですッ！　さあさあサアサアＳＡＡＳＡＡァアアッ！！　セェエエット、アァアアップゥウウッッ！！』

大通りの六車線はある、アリオスの好きそうな広い車道で、オレンジ色の流麗な車体（タクシー）――悪意を感じるほど妙にアリオスに似ている――を滑らすように運転しながら、アレルヤは点で的外れな方を捜

していた刹那と、ＧＮ粒子を流用した、盗聴の恐れが無い念話で今後の活動についての確認をしていた。

後ろに座っているフェルトは、緊張の糸が切れて一気に疲れがきたのか、小振りながらも芸術品の様な、純粋極まる艶(なま)めかしさを持つおぱ～いをフルフルと上下に揺らしながら静かに眠っていた。寝息はアレルヤには聞こえない程静かだ。

「アリオス、少しは落ち着いてくれないかい？」
『……すみませんマイスター。一瞬、自我を失っていました』
「……しょうがないさ。あんな近くに彼女がいたんだからね」

その聞こえない寝息をＢＧＭにしながら、アリオスとアレルヤはそれっきり押し黙り、歩道とは正反対に空いている車道を沈黙しながら走っていった。その意識はすでに後方に向いており、同時に、自分達が何をすればいいのかを分かっている然であった。

「……刹那？　後３２秒後にそちらに着く。後始末は任せてもいいかい？」
『オレの失敗を取り返してくれたからには、任せてもらいたい』
『お任せを、マイスター・アレルヤ』
『ではマイスター、そろそろ目的地である路地裏に到着します。よろしいですね？』
「あぁ、いつでもいいよ。……アリオス！」
『イエス、マイスター。スタンバイレディ、セットアップ』

そして、薄暗くて人目の付かない路地裏を走るオレンジ色のタクシー。その後ろをセルゲイの部下、アレルヤ達を尾行してきた軍人たちを乗せたジープが追跡する。だが、彼らは、この人間を始末するのにちょうどいい場所まで誘い込まれた事も、また感知していた。

だからセルゲイへと通信を試みようと、先程から何度も通信を繋げようとしていたのだが……

「クソッ！　駄目だ、繋がらない！」
「どうしてだ？　先程までは確かに使えていたはず……」
「ミン中尉、どうしますか？」
「……作戦続行。追跡は継続だ。通信は繋がり次第、すぐに大佐へと……」

全く、繋がらない。いや、通信機器だけではない。この辺り一面が察知魔法、探査魔法、さらには念話まで使用不可能になっていた。その現象に眉を顰めつつ、ミン中尉は作戦の続行を決定させた。こんな意味が分からない現象で作戦を放棄してはならない為だ。

だが、彼らは気付くべきであった。この奇妙な現象が自然現象という生温い物などでは無く、明確な悪意でもって、人為的に起こされた事象であった事を。最も、ここに至ってしまったからには……

「……」「……」「……」
「……ん？　どうし……！？」

全てが手遅れであったが。

それはほんの一瞬だった。そしてその短い狭間の時間だけで、アレルヤを追跡していた部隊は……壊滅した。

路地裏はちょうど車道――人が通る歩道も――から隠れていて、さらには、両面もオレンジ色の高層ビルによって挟まれる為、見通しが最悪に悪く、故に人目に付きにくい場所であった。その地形を利用してOガンダムは、側面の高層ビルの壁を伝って追跡部隊の背後に回り、そしてその強烈な腕力による手刀でもって、幾人もの命を瞬時に刈り取った。

その僅かな時間、自分が何時死んだのか分かっていない軍人達を尻目に、Oガンダムは更に深く一歩踏み込み、通信機器ごと、ジープに乗った通信兵を手刀で貫き殺した。

この間、僅か数秒。そしてミン中尉とその側近の一人が一拍遅れて現実に我返る頃には、チェック・メイトがすでに成されていた。

「これで、終わりだ！」

側近であり、同時に何年も一緒に任務をこなしてきた副官の逞しい首に、アリオスの黒い手が、柔らかいゼリーに突き刺すように、易々と血反吐と共に埋まっていく。その副官であった軍人は、一声すら出せないまま絶命した。何が起こったのか分かっていない、その表情のまま。

「きガハッ……！」

そして、副官を殺した手刀が、ミン中尉の元へと、毒蛇のように這い寄ってきた。濃密な死の気配と共に。それに必死で抵抗しようと試みるも、相手の動きは此方の数倍以上は早く、動きを捉えきれない。そして、抵抗は一秒も持たずして崩され、アリオスの手の中にミン中尉の首が収まってしまった。それにミン中尉は絶望にも似た諦観を抱くも、目の前にいる悪鬼、「ガンダム」の「羽付き」を

見据え、せめて一太刀でも報いる為に、こう言い捨て……

「何時かお前達は……報いを受ける時が……」

「それはもう四年前に経験した。だから……だから僕達は、今度こそ成功させなくちゃいけない。世界の変革を、そして……」

……ることすら許さずに、アレルヤはミン中尉の喉を握りつぶした。そして刹那を構成するOガンダムが死体をジープに乗せているのを見て、それに倣い、ミン中尉をそのジープへと丁寧に載せた。死者を埋葬するぐらい、丁寧に。

「……そして……！」

「アレルヤ、ここから離脱するぞ。お前はそのままタクシーで移動してくれ」

「……了解」

そして、それぞれの「ガンダム」の構成――インストールを解除した二人は、人間の姿でその路地裏から離れていった。

全身を真っ白で固め、奇怪な仮面を被った黒髪蒼眼の少年か青年の人物、アップルは、自身の隣でコンソールを無言で、悪意すら感じるほど強く打つフェルトに恐怖していた。一体刹那は何をやらかし？　と心の中で思っても、口に出すのは憚（はばか）れる雰囲気が、その二人の間には漂っている。

『……刹那・F・セイエイ！　状況説明を切実に請う！』

『オレにも分からん』
「クッ、最初から期待していなかったが、まさかその通りだとは……！」
『なら最初から聞くな、ア……』
「アップルさん？　ここ、間違ってますよ？」
「な……」
「ここは……こうです！」

ダンッ！！　ダッ、ダダンッ！！

「『……』」
「分かりましたか？　無駄口を叩くより、まずは手を動かして下さい」
『刹那・Ｆ・セイエイ、助け……』
「分かりましたかッ？」
「イエス、メイデン！」

仮面の縁から涙が一筋、流れた。それを見る前に、フェルトは視線を目の前の三つあるモニターに戻す。それにまた仮面の縁から涙がツツゥっと一筋、流れ落ちた。

フェルトはアップルに怒っていた……訳が無く、やはり刹那に怒っていた。彼女をほったらかし（少なくても、彼女はそう思っていた）にし、挙句、死ぬような思いを経験している時に、助けにも来ないとは一体全体どういう事なのかと、彼女はそう考え、遂には高い筈の沸点をも超え、昔から溜まっていた怒りがとうとう爆発してしまったのだ。

ちなみに、はぐれたり助けに来れなかったりした事については、刹那も（Ｏガンダムはフェルトの味方）弁明したが、こういう時の

男の言い訳ほど信じられない物もなく、無駄にフェルトの怒りを増大させただけだった。コンソールを打つ度に鳴る濁音が、その怒りの度合いを示している。

「……刹那、後でまた一緒に歩いてくれる？」

「……！　（刹那・Ｆ・セイエイ、しくじるな、後生！！）」

だが、神はまだ彼らを、アップルと刹那を見捨ててはいなかった。まさかのフェルトからの妥協案にアップルは目を見開き、そして切実に、出来得る限り穏便（おんびん）にすむよう、心の奥底、深淵存在（マテリアルズ）から、今までにない程真剣に祈った。

だが、忘れてはならない。

『後で、か……すまんが、この任務が終わったら、オレは一度義父（ちち）に会わねばならないから、むずか……』

この世界に、神などというモノは、存在しないという事を。

「もう刹那なんて知らない！」

『待てフェルト！　そのか』

ブツンッ！

「……」

「……」

「……アップルさん。かなり濃いお茶、お願いしてもいいですか？」

「……謹んで承（うけたまわ）らせて頂きます、はい」

そして、男は基本、女の機嫌に振り回されるという事を、決して

忘れてはならない。

あぁ、世界は今日も理不尽と残酷で成り立つ。

――涙で視界が見えなくなったアップルさんより

【神が我々を救うことはない。善くも悪くも、神は平等だからだ】

――ＥＸＡＭ様より

第３６話　友達とは名ばかりの……（後書き）

ヘイ、タクシーッ！！

フェルトが怒った！　いいぞもっとせっさんを困らせろ！

な今話ですが……どうしましょう、またキャラを増やしてしまいました！　もう限界だと言ったのに……しかも、ここまで来たらやっぱり炭酸とその奥方まで出したくなるではないですか！　一体作者にどうしろというのだ、作品よ！？

しかもこの後、「十二の救世鐘」でまたドーンとオリキャラが増える予定だったという罠付き。……書くの無理じゃね？　と思う今日この頃でした。ここまで読んで下さった皆様に感謝を。土曜日には劇場版です！　ヒャッホイ、ＴＲＡＮＳ－ＡＭタイムまであっとすっこしッ！！

最後に。

Ｑ：何時戦闘に入るの？

Ａ：間違ってＰＣからも脳内からも、プロット消しちゃったから、作者も分からない。

第３７話　誰が為に戦い、誰が為に鐘は鳴る？　≪前篇≫（前書き）

【私が見た未来は、こんな地獄ではなかったはずだ！我々はどこで道を踏み外してしまったのだ！】

――凡人様から、『機動新世紀ガンダムＸ』のランスローより

第３７話　誰が為に戦い、誰が為に鐘は鳴る？　≪前篇≫

――新暦７１年――

これは、夢。

「いいか、ロベルト。コーナー家は２００年もの間、「ＣＢ」を監視してきた。その目的は、「無限の才悪」と怖れられた空前の天才、イオリア・シュヘンベルグの『計画』を、この手中に収める為だ」

「はい、当主」

四年前の、悪夢。

「だが、その為の障害となるのが――「ＣＢ」の武力の象徴である「ガンダム」だ。ロベルトよ、これだけは努々（ゆめゆめ）忘れるな。もし『計画』を手に入れるのに、「ガンダム」を排除しなければならない時は……」

「……ゴクッ」

四年前の……忠言。

「絶対（１００％）の勝算を得てから、排除行動に移れ。例え１％でも敗北する可能性があるなら、決して「ガンダム」には手を出すな。……お前は次期コーナー家の当主になる者だ。そんなところで死ぬ事は、この私、アレハンドロ・コーナーが許さん」

「……とう……」

「もし、この作戦が無事に終わり、私の計画通りに事が運べば、我がコーナー家の悲願は、２００年の時を経て、漸く成就される。そうなれば……ロベルトよ、二人でどこか遠いところまで出かようで

はないか？」
「ほ、ホント！？」

そして、希望を絶望へと変革させる……約束。

「フッ……この私がお前にウソを吐いた事があったか？　私を信じたまえ」
「そ、それじゃあ……無事に帰ってくるって信じているから！　だから……だから、絶対に帰ってきてね、義父（とう）さん！」
「ふっはっはっは……案ずるな息子よ。こちらには第二級捜索指定の遺物（ロストロギア）、アルヴァトーレという切り札があるのだぞ？　それに、管理局からも七人ものオーバーSランク魔導師、それもあの「鬼札」や「烈火の将」、「大魔砲」などが参戦しているのだ。万が一、億が一にも、此方の負けは無い。だから、心配するな」
「……絶対、絶対だよ義父さん！　絶対に……帰ってきてねッ！？」

もしこの時、この約束をしていなかったら……僕は違う運命を、歩めたのかな？　義父さんと二人で過ごす、幸せな運命、幸福な未来を……僕は、選ぶ事が出来たのかな？

「あぁ、大丈夫だ。私は絶対に帰ってくる。……すまないが、もう出撃する時間だ。……さらばだ、息子よ」
「待って、義父さ……」

……でも、本当は僕だって分かってる。人生にはＩＦが無い事を。二つ以上の選択肢を、残酷な現実は決して僕達には選ばせないという事を。だけど……だけど……！

それでも、願ってしまう。あの時、あの場所で、あの約束をしなかった未来を、僕は……

夢が、終わった。

それが僕の、義父さんを見た最後の記憶だった。義父さんはその後、もう二度と僕の元には現れなかった。何故なら、義父さんはその作戦――『フォーリング・エンジェルス』で戦死した……らしいからだ。らしいというのは、誰も義父さんが討たれた所を見ていなかった為だ。だから、生きている可能性もなくは無かったが、僕はもう義父さんが生きているとは思っていなかった。

薄情なのかもしれない。親不孝なのかもしれない。でも、僕は、「監視者」という役割を放棄し、「ＣＢ」に、イオリアに反乱を起こした義父さんが「ＣＢ」に殺されていないとは、どうしても思えなかったのだ。例え、義父さんが帰ってこない事を悟った夜に、枕を水び出しにし、一睡できない程泣き喚き、生存を希(こいねが)った身だとしてもだ。そのぐらい「ＣＢ」は、いや「ガンダム」は、当時でも現在でも、死ぬほど恐ろしい存在として、僕の中では認識されていた。

――新暦７５年１１月１５日――

夢から覚め、瞼を薄く開けると、今にもキスできそうなぐらいの距離に、見知った顔を見た。アヒル口になっている薄桃色の唇。八

字型の、如何にも「やる気ないです」といった風の眉。半分とじている、光が全く見えない飴色の瞳。それらのピースを全て精巧に配置した、十人中八人九人は残念美人と評し得るだろう顔を持つ彼女は、何故か非常に残念そうな瞳をしながら僕から離れ、瞳と同じ飴色の長髪を中空に泳がせながら、何事もなく何時も通りの挨拶をした。うん、副音声で「あと少しで貞操が奪えたのですが……」とかは聞こえてないよ？　ホントだよ？

「おはようございます」
「……おはよう」
「良い……夢を？」
「ううん。どっちかっていうと、最悪な夢だったよ。……義父さんと別れた時の夢さ」
「さようで。……今日は世界にとってもロベルト様にとっても大事なお日柄です。体調には十分お気をつけて下さらないと……」
「うん、分かってる。分かってるよケスティ」

僕は先程の夢に苛立ち――いや諦観か？　それを感じつつ、ＭＥ（多機）ＩＤＯ（能型護用服）服を装着した僕の従者、いや、僕が率いている「灰被り（シンデレ）の福音（ラ）」の幹部「十二の救世鐘（トゥエルブ・ベラー）」が『宰相』ケスティ・アーネットが淹れてくれたガムシロップ入りの紅茶を一口、唇を濡らす程度に飲む。……うん、やっぱり彼女の紅茶は、とてもおいしい。

「やっぱりこの紅茶を飲まないと、一日が始まらない気がするよ」
「それはこの私めが一生ロベルト様を起こさなければならないという意味ですか？　私めはそれを『プロポーズ』と受け取ってもよろしいので？」
「ケスティが何を言っているのか僕にはよく分からないけど、この紅茶はずっと飲んでいたいなぁ……」
「きゃっ、ロベルト様ったらだいｔ」

『失礼するよ』

その瞬間のケスティの顔は……般若とか修羅とか、そんなちゃちなもんじゃなかった。もっと恐ろしいモノの形相だった。正直、僕の未熟な言葉では表現し切れないぐらい、その顔はとても……怖かった。

「ロベルト様に何の御用ですか、婆さん？」

『なに、どうやら全員集まったようやから、それを伝えておこうと思っただけの事よ。間違っても、まだ十四かそこらの子供と関係を持とうとするアホな十九歳を窘めに来たわけではないわい』

「たった五歳の年齢差なんて、ロベルト様はきにｓ」

『ではロベルト様。この幼稚な占いしかできない婆やはここで失礼させて貰います。あと、できるだけ急いだ方がよろしいかと……中には、もう仲間同士でも戦いたいと申し取る、物騒な奴もおるのでの』

「……分かった。できるだけ急いでそっちに向かうよ。教えてくれてありがとう、コーラン」

「……殺す。絶対に殺す、あのババア……！（ブツブツ）」

……やっぱりそうか。分かっていた事だけど、まさかここまで組織に与しないなんて、思ってもいなかったな。やっぱり、戦闘狂のサムライさんと切り裂き魔のリッパーさんを入れたのは間違いだったかな？　でも、あの二人以外だともう殆どオーバーＳランク魔導師はいなかったし……

……まぁ、そこは後で考えるとして。今は初めて全員が揃った「十二の救世鐘（トゥエルブ・ベラー）」のいる会議室に行くのが先決だね。さて、じゃあまずはパジャマを……

パジャマを……

「……ケスティ、あのさ。毎回思うんだけど、そのカメラは何なの？」

「私めの目のｈ……宝物でございます、ロベルト様」

「……できれば、ここから出ていったくれた方が、僕としては助かるんだけど……一応、これから着替えるんだからさ」

「私めは梃子（てこ）でも動かない所存でございます。されど、力尽くでなら追い出されても致し方ありません。……如何なさいますか？」

「もうこの部屋から出る気ないよね！？　僕の魔導師ランクがＥランクで、ケスティの魔導師ランクがＡランクなのを知ってそう言ってるんでしょ！？」

「さてはて、何の事やら……ケスティには難しすぎて、よく分かりませんな」

「……アイシス、アサシン！　何時も通りにお願いします！！」

「「はッ！」」

「む、貴様等！　私めの至福の時をいつきゃぁああ～～！？」

さすがにケスティの前で着替えるのは、恥ずかし過ぎてできないから、何時も通り屋根裏部屋にいる『暗部』アサシンと『隊長』アイシスを呼び、彼女を僕の部屋の外に追い出して貰う。……さすがのケスティも、ふたりのＡＡランク魔導師の前じゃ何もできずに、外に追い出されていった。……怨霊（おんりょう）染みた声が聞こえるのは、ここ最近の忙しさのせいだと、僕はそう信じ込む事にした。

「さてっと……準備もできた事だし、そろそろ行こうかな？」

そして、義父さんがかつて着ていた赤茶色のスーツ（でも、義父さんが着ていたのとは大きさが全然違う……）に着替え、部屋の外でいじけ、垂れ下がった目に涙を浮かべていたケスティの手を「き

ゃっ、ロベルト様ったら……そんなに私達の赤ちゃんがほｓ」聞こえてくる言葉を全力で無視しながら引っ張りつつ、会議室の前までやってきた。

「……」

僕はその豪奢で重厚な茶色い扉を見て、ゴクリと、生唾を呑んだ。ここを開けてしまえば、恐らく史上類を見ない規模の反管理局組織が出来上がり、この混沌とした世界に一条の光明が点す事だろう。だが、その為に一体どれだけの人々が犠牲になるのか……僕には分からないし、分かりたいとも思わない。でも、どれだけ現実逃避しても、それは現実であるから、逃げるのは不可能なわけで……

「ロベルト様。決して一人で背負いきらないで下さい」

ケスティ？

「側には、私めもおります。……地獄の果てまでお供する、この私めが。もしロベルト様が、これから背負うであろう罪が重いというのでしたら、私めも共にそれを背負いましょう。良心の呵責がお辛いというのでしたら、私と共にそのお辛さを共有しましょう。……大丈夫です、ロベルト様。貴方は一人ではありません」

……うん、そうだね。そうだったね、ケスティ。僕は一人じゃない、独りじゃなかったんだよね？　ケスティっていう、ちょっと……いやかなりの変態だけど、義父さんが死んだあの年から、ずっと僕の側にいてくれた優しい女の子である君が、僕の側には……居たんだったね。

「……行こう」

「はい」

そして二人で覚悟を決めた僕とケスティは、そのドアノブに一緒に手をかけ、それをゆっくりと回し……二人で世界の命運を握る部屋へと入室した。

真ん中に丸いテーブルを置いたその薄暗い四角い部屋には、ロベルトとケスティを含め、十人の人間が十二ある椅子に、等間隔で座っていた。空いている二つの椅子の前には、横長で薄い中空モニターが置いてある。どうやらその二つの椅子、『魔本』と『情報』に当たる椅子には、誰も座っていないようだ。

「ではこれより、「灰被り（シンデレラ）の福音」の幹部「十二（トゥエルブ・ベラー）の救世鐘」による全会会議を行います」

そして、丸いテーブルの上座に当たる椅子に座っていた、「十二（トゥエルブ・ベラー）の救世鐘」の実質上の盟主である『大使』ロベルト・コーナーのその一声により、「灰被り（シンデレラ）の福音」の命運を決めるその会議が始められた。

「まず初めに、此度の会議で話し合う事柄についてですけど……」

「御託はいい。私はお前達が何をしようとも、何の興味は無い。私はただ「ガンダム」らと死合うだけだ。くれぐれも勝負に水を差すなよ、魔導師ども？」
「伐る切る斬るきるキル……伐る切る斬るきるキル……」

だが、その始めの挨拶と説明を聞く前に、『剣客』ザ・サムライと『凶器』ジャック・ザ・リッパーは自分の欲求を言うだけ言って、その席から立ち、部屋から出ていこうとする。

「まっ……」
「待ちたまえ、サムライとリッパーとやら」
「……何だ？　私の前に立つというのなら、其れ相応の覚悟を持って貰う事になるが……」
「伐る切る斬るきるキル……伐る切る斬るきるキル……」

それに焦ったロベルトだったが、彼を手で制し、サムライとリッパーの前に『武士』ミスター・ブシドーが立ちはだかった。その手には既に双剣型アームドデバイス「サキガケ」が起動状態で握られており、いつでも戦闘に移れる準備をしていた。それを見たサムライは、自身の一つに結んだ、腰まで届く長い黒髪の後ろ、腰裏に差してあった長刀型アームドデバイス「村雨」と「村正」の二本に手をかけ、此方も戦闘準備を完了させる。リッパーはただ「きる」という単語を口ずさみ、手をふらふらと動かすだけだった。

「話によれば、君たちは「ガンダム」の中でも、特に「剣士」に執着しているそうではないか。だが敢えて言わせて貰おう、「剣士」は私が頂くとな！」
「……ほう、私を前にしてそんな大言を吐くとは……切り捨てられる覚悟はできたか、武士？」
「伐る切る斬るきるキル……伐る切る斬るきるキル……！」

「ふっ、そんな覚悟はできていないし、しようとも思わん！」
「お前ら、いい加減にせえへんかい！　うるさっくて敵わんじゃろうが！」
「そうよ～。ここは話し合いの場なのよ～？　静かにできないのなら、ここから出て行ってもらうわよ～」

その今にも戦闘に突入しそうなオーバーSランクの三人に、しわがれた声と甘ったるい声がかかった。声をかけたのはかなり年配の『参謀』コーラン・ダンヌと妙齢の『移送』ヒイラギだった。ちなみに、どちらも女性であり、さらに言えば、サムライも二十三歳ほどの女性である。ただし、サムライのおぱ～いはかなり残念な大きさで、絶壁という言葉すら生温いほどだ。

「私はそれで一向に構わん。どうせここには既に用は無い」
「では私も退場させて貰おうか。ビリー、後は頼む！」
「えッ！？　ちょ、ブシドーッ！？　君はどこに行こうと……」
「最新設備が完備されているスポーツジムへだ！　では、さらば！」
「ふん、不快だ。……失礼する」
「伐る切る斬るきるキル……伐る切る斬るきるキル……」
「あ、ちょっと待って……！」
「無駄ですロベルト様。彼らは協調性というものが皆無な連中です。ここは、残ったメンバーだけで話し合うべきだと思われます」

ブシドー、サムライ、リッパーの三人が部屋から出ていき、残ったメンバーは九人となった。それにこれからの展望の難しさを改めて思い知らされ、ロベルトは大きな溜息をついてしまった。それをやる気のない表情でじっと見つめるケスティ。

「……それじゃあ、ここに居るメンバーだけで話し合うけど、それでいいですか？」

「わたしゃあ構わんよ？」
「私も～、構いませんよ～？」
「僕も構いません」
「私は構わないけど？」
「……命令には、従う」
『『……』』

そして、一波乱があった世界の命運を決める……はずの会議が、再び始められた。

あの時、あの場所で、あの誓約（せいやく）をしていなかったら、俺は一体どうなっていたのだろうか？

「……」

ただの番犬として、その使命をずっと果たし続けていたのだろうか？

「……」

それとも、あの御方と共に、無限に等しき時空の中を、「無限の

英知」と共に、ゆらりゆらりと漂っていのだろうか？

「……」

……分かっている。現実には「仮に……」という単語が無い事は。だが、それでも……それでも、俺（おれ）は思ってしまう。「CB」などという組織に協力するあの御方の事を。もし俺がずっと仕えていたら、こんなことにはならなかったのではないかと、そう思ってしまう。

「……」

だが、恐らくあの御方が「CB」に協力するのは、何か故あっての事だろう。

「……なら」

なら、俺は……俺がすべきことは……

「……考えても、致し方ないか。……主の元に、戻るとするか……」

「久しぶりだね、クロノ」

「あぁ、そうだなヴェロッサ」

第３２管理世界の中央都市「オレンジ」から、東に２００キロほど行った緑の平原の中央に、その純白の聖王教会中央教堂はあった。その外観はまさに「要塞（フォートレス）」といった風で、教堂の周囲には三重もの結界魔法だけでなく、特殊合金製の分厚い塀までもが三重に敷（し）かれていた。

「初めまして。シスターのシャッハ・ヌエラです」

「お初に掛かる、シスター。自分は管理局第九次元航行艦隊所属、旗艦「クラウディア」の艦長補佐、クラウン・ガバレート三等空士であります。以後お見知りおきを」

ここの教堂には、一階の横長な建物から三つの真っ白な尖塔（せんとう）が伸びていた。そして教堂を正面から見て、一番右側にある尖塔に、その四人は集まっていた。

「それで、クロノ？　早速だけど、君が言った手掛かりについて、詳しく教えてくれないかい？」

「そう言うと思って、すでに資料は纏めておいてある。クラウン！」

「はッ、これがその資料であります、ヴェロッサ監査官殿！」

「……随分分厚い資料だね」

白いスーツをきっちりと着こなしているヴェロッサ・アコース。黒い上着と白いズボンの制服を着たクロノ・ハラオウン。茶色い上下の制服を纏ったクラウン・ガバレート。白の肩掛けと黒のシスター服を羽織ったシャッハ・ヌエラ。それがここに集まっていた四人である。

ヴェロッサとシャッハは、クロノと連絡を取り、クロノが言って

いた手掛かりを直接（クロノ曰く、念話も通信も危なすぎて使えないらしい）聞く為に、その手掛かりがあるこの管理世界の教堂にやってきていた。

そして、クロノとその補佐であるクラウンは、巡回のついでという建前で、ここに来ていた。彼らは「ＣＢ」がどこまで管理局に食い込んでいるか分からなかった為に、管理局の上層部に虚偽の報告をしたのだ。それもこれも、彼ら「ＣＢ」の裏を掻く為である。

「いや、これには万一の為の偽の情報も含まれているから、実際はその十分の一で済むはずだ」

「そんな所にまで気を使うなんて、さすがクロノだ」

「褒めてもいいが、僕達がここで密会している事がばれない内に、早く読んでくれ」

「……ばれたら、拙いのかい？」

「何、念の為だ。「ＣＢ」がどこで聞き耳を立てているか分からないからな」

冗談を言ってない顔で、冗談みたいな事を言うクロノ。それを聞いたヴェロッサとシャッハは「ＣＢ」に対し、何度目か分からない空恐ろしさを感じた。背中から一筋、冷たくなった汗が流れ落ちる。

「……実際、君はどこまで「ＣＢ」が管理局に食い込んでいると思っているんだい？」

「……これは公表されていない事だが」

その流れ落ちた汗が乾かない内に、ヴェロッサは管理局の実情をクロノに聞いてみた。その質問にクロノは一度目を瞑り、非常に重苦しい声で……彼らしからぬ神妙さで、

「この前、人事部のトップが脱税の疑いで捕まっただろう？」
「あぁ、そう言えばそんな事件があったね。あれがどうしたんだい？」
「アレは、表向きは脱税だが、実際は違う」
その恐るべき事実を答えた。
「あの人事部のトップが、「ＣＢ」と内通していたんだ。つまり、「ＣＢ」は上層部の中でもかなり上の方に……食い込んでいるはずだ」
「「……ッ！」」
「だから僕は……上層部をも騙して、ここに来ているのさ。どこに内通者がいるか、分からないからな」
「そんな……そんな大事になっていたのか」
「正直、聞きたくなかった事実……だね。という事は、もしかして聖王教会にも……」
「いる……だろうな、間違いなく」
クロノは蒼白な顔色になった二人に、更なる聞きたくない現実を突き付けた。管理局の奥深くまで「ＣＢ」が食い込んでいるのなら、聖王教会という次元世界最大の宗教組織にまで食い込んでいる事は、想像に難くないからだ。
「……話が逸れたな。本題に入るぞ。まず、僕達の手掛かりについてだが……」

「あ～あ、何時までこんなゴツゴツした岩山の上に待機しなくちゃいけないわけ、ミレイナ？」
「え～とですね……きっとあと少しですよ、ネーナさん」

灰色をした標高数百メートルの岩山、その登頂に、青色と白色で構成された数十メートルもの「ＣＢ」の補給艦は無音で鎮座していた。補給艦は二つのコンテナを真ん中の横長の艦橋に繋げた外観をしていて、現在そのブリッジには二人の人間、赤い髪をしたネーナ・トリニティと茶髪をツインテールにしたミレイナ・ヴァスティが、他愛無いおしゃべりをしながら二人用のシートに座っていた。

「こんなことなら、ティエリアかロックオンのどっちかと替わっていればよかったわ。……いえ、ティエリアと替わって、ミレイナと二人っきりにさせるべきだったわね」
「！？　ね、ネーナさん！？　何を言って……」
「大丈夫よ。貴方が彼の事を好きなのは、彼自身とイアン、リンダ、それに刹那以外は、皆気付いているから」
「……そ、それはそれで恥ずかしいような残念なような気がするですぅ」
『……』

先程から無言を貫くアルケーの傍で、ネーナとミレイナは実に楽しそうに会話をしていた。この先に待ち構えている悲劇を、起こるべくして起こす彼らの悪行を知っての上で、彼らは今を楽しみ、覚悟を定めていく。特にネーナは、これから起こすであろう作戦で、

彼女が心に誓って殺すとしていた人物と殺し合えるという事で、さっきからずっと笑みが絶えていない。

「うふふ……早く、作戦開始にならないかしら？」

「あと一分で作戦開始ですので、ネーナさんもスタンバイ、お願いしますですぅ」

「うふふ……了解よ！」

怖いぐらい上機嫌なままアルケーを引っ掴み、外に出ようとするネーナを見送ってから、ミレイナは視線を目の前のコンソールに戻した。そして双方向通信をＯＮにし、補給艦からかなり離れた位置にいる二人の「ガンダム」マイスターへと通信を繋げる。

『それでは、ガンダムマイスターの御二方！　ミッション開始時刻になりましたので、作戦を開始して下さいですぅ！！』

「ロックオン・ストラトス、了解したぜ！」

「ティエリア・アーデ、了解した」

岩山の中腹に位置する場所に座りながら、ロックオンとティエリアはミレイナからの作戦開始の掛け声を聞いていた。その顔にはすでに笑みは無く、戦への覚悟しか見て取れない。

「ティエリア、お前はまだ復帰したばかりだから、あまり無茶するなよ？」
「僕にとってはこのぐらいの事、無理でも何でも……」
『アーデさんはあまり無茶をしないようにと、スメラギさんがそう言ってましたので、無茶はしないで下さいですぅ！』
「ほら、お前の彼女さんもスメラギさんもそう言ってんだ。ここは素直に従っとけよ」
「……誰の彼女なのかは分からないが、僕が無茶をするかどうかはロックオン、君次第だということを忘れないでくれ」

崖下（がいか）に広がる草原、その更に向こう側にある白い、大きな建物を、ティエリアは無表情に、ロックオンは忌々しげに眺める。その視線には単純な憎悪だけでなく、何か別の思慮も含まれていそうだったが、ティエリアはそれに対し何も言わず、ただ黙ってロックオンと同時に、胸に吊るしていたＧＮドライヴを掴む。

「そんじゃ、行こうか？」
「あぁ、行こう」

そして、彼らは一拍置いてから、その破滅の詠唱を唱えた。

「ケルディム、セットアップ！」
『イエス、マイスター。スタンバイレディ、セットアップ。ＧＮ－００６　ＣＨＥＲＵＤＩＭ　ＧＵＮＤＡＭ　インストール、コンプリート』

悲劇を生みだす事しか、何かを破壊する事しかできないその力を身に纏う、その破滅への詠唱（プレリュード）。

「セラヴィー、セットアップ！」
『イエス、マイスター。スタンバイレディ、セットアップ。ＧＮ－００８　ＳＥＲＡＶＥＥ　ＧＵＮＤＡＭ　インストール、コンプリート』
それを力強く、己が覚悟を乗せながら唱え、二人から二機となった彼らは、第３２管理世界の聖王中央教堂、現在ヴェロッサ、シャッハ、クロノ、クラウンがいるその場所へと、蒼碧色の粒子を放出しながら飛翔していった。
スメラギ・李・ノリエガは、片手に酒を持ったまま、衛星軌道を遊弋（ゆうよく）しているプトレマイオス？のブリッジで、静かに、
「ミッション、スタート」
と、呟いた。

【戦争によって齎されたモノはまた、戦争によって持ち去られるであろう】

――ジューベルの『パンセ』より

第３７話　誰が為に戦い、誰が為に鐘は鳴る？　≪前篇≫（後書き）

まずは、謝罪を。感想の返信を遅らせてしまい、誠に申し訳ございませんでした！　ちょっと最近劇場版を見に遠出したりなんやかんやしたりしていたら、作品を書くだけで精一杯となり、感想まで手がなかなか回らず、返信できないままここまで来てしまいました！　取り合えず、今日中に全て返信します。……本当に、御免なさい。

さて、気を取り直して。ちょっと「ＣＢ」側が描写不足な気がしましたが、これ以上書いても恐らくはキャラ崩壊して終わりなような気がしましたので、短く纏めさせてもらいました。しかし、次話からは戦闘も入るので、「ＣＢ」側の描写も多くなる……はずです！　勿論電ゲフンゲフン、アレルヤ達だって出番が増える……はず……？　ここまで読んで下さった皆様に感謝を。

最後に。

九月中にあと二回は投稿したいけど、無理そうな気がする今日この頃でした。

第３８話　誰が為に戦い、誰が為に鐘は鳴る？　≪中篇≫（前書き）

【使えるものなら何でも使わせてもらう。それがたとえあなたであってもだ】

――キラー様から、『とある魔術の禁書目録』のアレイスター＝クロウリーより

第３８話　誰が為に戦い、誰が為に鐘は鳴る？　≪中篇≫

――新暦７３年――

『これが……アルヴァトーレ』

無限に広がる時空の果て、無数のガラクタが乱舞するその空域に、一際大きな金色の遺物（ロストロギア）が、半壊したまま宙を漂っていた。金色の遺物は特に右腕と左側面が完膚なきまでに破壊されていて、とてもではないが、修理には年単位の年月が必要そうに見える。

だが、それだけの損傷を負っているにも関わらず、十二歳になったばかりの少年には、この遺物が正にその色通りに輝いているように見えていた。

『ロベルト様、どうやらアルヴァアロンはここにはないそうです。……如何なさいますか？』

『アルヴァトーレだけでも回収できただけで運が良かったと、僕はそう思うよ、ケスティ。……撤退しよう。管理局に僕達の動きを察知されるのは、面倒臭い事になるからね』

『ロベルト様がそう仰（おっしゃ）るのでしたら……総員、撤退用意！　グズグズしている奴は、虚数空間にでもブチ込みますよッ！？』

ロベルトは自身の肩ぐらいまで伸びた、彼の義父さんと唯一似ている茶髪を弄（いじく）りながら、その金色の巨体が自身の乗る船に収容され、完全に見えなくなるまで、アルヴァトーレをずっと見上げ続けていた。その眼には畏敬（いけい）の念が混じり、さながら、彼にとっての神を見つけたようでもあった。

『凄い……本当に、凄い……！』
『……ジュルッ』
『ごめん、ケスティ！　やっぱり僕、一度直にアルヴァトーレを見てくる！　君と一緒に艦内を回るのは、その後でお願い！　本当にごめん！』
『……えッ！？　ちょ、ロベルト様ッ！？』

ロベルトは隣から聞こえる怪しげな音すら耳に入らない程興奮して、駆け足でアルヴァトーレが収容されている格納庫へと向かっていった。その子供みたいな無邪気さに、ケスティは思わずまた涎（よだれ）を垂らしそうになったが、ロベルトと一緒に艦内を回るという約束を反故された事に気付くや否や、今度はやる気のなさそうな顔が、絶望したような顔になった。ような、というのは、彼女があまり表情を表に出さないからである。

『……アルヴァ、トーレ……！』

怨嗟（えんさ）の声が、ブリッジにおどろおどろしく轟いた。そのあまりにも恐ろしい声に、ブリッジに詰めていたコーナー家に仕えるクルー達は、気絶する一歩手前にまで追い詰められる。彼らは一様にこう思った、

（（（嗚呼、早く帰ってきて下さい、当主ッ！））））

と。

しかし、その肝心の当主がブリッジに戻ってきたのは、それから一時間後の事であり、その頃には、既に大半の者が気絶していた。

――新暦７５年１１月１５日――

「な、何が起こったんだ……？」

僕は覆い被さっていた白い瓦礫を魔法で除けながら、先程までとは似ても似つかない惨状になっている白い尖塔の室内を見回した。豪奢な飾りが施されていた家具は全て粉々になり、大理石でできた床も、縦横無尽に罅が奔っていた。もし僕が桃色の光りを見た瞬間にシールドを張らなければ、これらの家具や床と、同じ運命を辿っていただろう。考えただけでもゾッとする。

と、僕はここまで考えて、気付いた。この部屋には僕以外の仲間、同僚もいたことを。

「……クラウン！　ヴェロッサ！　シスター・シャッハ！」

無事にいてくれ！　と切に願いながら、未だ埃が舞い散り、視界が劣悪な室内をもう一度見渡してみる。最初は何も見えなかったが、時間が経つにつれ埃も収まっていき、視界が開けていくと、一際大きな何かが固まっているのに気がつく。よく見れば、それは肘まで

覆うガントレット型アームドデバイス「マジェスタ」を展開しているクラウンと、気絶しているヴェロッサとシスター・シャッハであった。

「全員無事だったか、クラウン！？」

「はい、提督。二人とも衝撃で気絶しておりますが、命に別状はないと判断できます」

「そうか……よかった」

全員が謎の奇襲から無事だった事に安堵の溜息を一つ零したが、次の瞬間には顔を引き締め、この攻撃を行ったであろうモノの正体を暴くべく、尖塔に空いた穴から外を覗(のぞ)いて見る。だが、外を見た瞬間、僕は自分が想定していたあらゆる状況の中でも、最悪な状況が僕達に迫っている事に気付いてしまった。そう、今僕達を襲い、そして今も聖王中央教堂の重要施設を桃色の光線で狙撃しているのは、間違いなく……！

「「ＣＢ」……！　それも、よりにもよって、あのアウトレンジに特化した「三つ目」か……！」

『行くぜ、ケルディム！　トランザムッ！！』

『ＴＲＡＮＳ－ＡＭ』

全身が血よりも紅くなったケルディムが、右肩に搭載していた長銃、ＧＮスナイパーライフル?を両手で持った。そして、巨大な建築物である聖王教会中央教堂が豆粒ほどにしか見えないほどの遠距離、正に相手の攻撃が届かないアウトレンジとしか表現できない場所から、全撃必中の狙撃を連続で敢行する。見るモノが見れば馬鹿げた事をしているようにしか、その道の人から見てもふざけた事でしかないその狙撃は、ロング・アウトレンジに特化したガデッサですら遠く及ばない代物だった。

『フォロスクリーン展開、敵性施設の情報取得、照準合わせ完了。……何時でも撃てるぞ、マイスター』

『ＯＫ、ケルディム。なら、ロックオン・ストラトス、目標を……』

だが、その常識を超えた狙撃を難なく完遂できるのが……「ＣＢ」随一のセンサー、及び副管制人格「ＨＡＲＯ」を搭載し、マイスター自身も尋常ではない狙撃の腕を持つケルディム「ガンダム」だ。

『狙い撃つぜ!』

『ネライウツ、ネライウツ!』

ケルディムの前に展開された水色のスクリーンに丸い円状の照準が表示され、ロックオンがその照準に従って指を動かし、破壊の光線を連続で放ち続けた。その光線は一発たりとも外れずに、聖王教会中央教堂の重要施設を撃ち貫き、爆散させていく。そして、ＴＲＡＮＳ－ＡＭが終了する時間まで、ケルディムはただひたすらに目標を狙い撃ち続けた。

『……聖王教会、てめえらさえいなければ、オレは……オレ達の家

族は……！』

紅から緑に戻り、粒子の色も元の蒼碧色になったケルディムが、灰色の岩山の影に隠れ、その姿を向こうから見えなくする。その間に囁(ささや)かれたロックオンの言葉は、誰にも聞かれる事なく、辺りの空気へと溶け込むように消えていった。ケルディムはそれを聞いても、ただ無言で次の戦の為に、ＧＮ粒子を太陽炉に貯蔵ずるだけだった。

「攻撃が……止んだ？」

僕は所々で火の手が上がっている中央教堂を尖塔から見下ろしながら、光線が飛んできた方角を見てみる。……僕には何も見えないが、恐らく、あの岩山のどこかに「三つ目」が潜んでいるはずだ。できれば今の内に討っておきたい所だが……どうして、向こうは甚大な被害を受けている此方に攻めてこない？　今が絶好の好機なのに？

「……待てよ？　もし此方の戦力を、目の前の見晴らしのいい平原に誘き出すのが目的だとしたら？　逃げ場のない地形で、真正面から此方の戦力を全滅させ、戦力と共に、士気も下げるのが狙いだとしたら……！」

だとしたら、かなりまずい！　今中央教堂から聖王第四近衛騎士団が「三つ目」を討伐する為に、岩山へと通じる平原へと出撃した所だ。このままでは……！

「……とく！　クロノ提督！」
「……ん？　何だクラウン？」
「アレをご覧になって下さい！」
「アレ、だと？　……ッ！？　アレは、まさか……！」

だが、クラウンが示した場所を見て、僕は漸く「ＣＢ」がどれだけ本気でここを潰しに来たのかを理解した。……理解するしかなかったんだ。何故なら、平原の中央、灰色の岩山へと通じる道程には、あの、

「……もう、なのはに負わされた損傷を直したのか、「デカブツ」……！」

管理局の白い悪魔とすら対等に砲撃し合える「ＣＢ」の白い悪魔、通称「デカブツ」が、威風堂々と仁王立ちしていたからだ。

「……刹那、いいのかい？　フェルトと仲違いしたままで？」
「……仕方ない、今は任務が最優先だ。フェルトとは後で話をする」
「……君がそれでいいなら、僕は何も言わないよ。……最も、それだとフェルトが可哀想だとは思うけどね」

刹那とアレルヤはフェルト達が潜伏しているホテルとはかけ離れた所にある、寂れたオレンジ色の建物の屋上に、二人並んで立っていた。時刻は丁度昼を過ぎた辺りで、金色の日差しが彼らに容赦なく降り注ぎ、その肌を少し褐色に焼いて、汗を少量浮かばせていた。

アレルヤはその金色の日差しを少し鬱陶(うっとう)しそうに睨みながら、懐からアリオスの太陽炉を取り出し、刹那から一歩離れる。刹那はそれを確認しつつ、アレルヤから言われた事に首を十度傾げた。……どうやら彼は心底分かっていないようだ。

「……？　取り敢えず、ミッション通りにエクシアを此方に転送させる。……いいか？」
「……覚悟は、できているよ」

アレルヤはもう一歩、刹那から離れつつ、悲壮な声でそう答えた。それに首を縦に一度振り、刹那も頬に一筋の汗を流しながら、懐からOガンダムの太陽炉を取り出す。

「そうか。なら……イアン、此方にエクシアを転送してうぉぉおおッ！？」
『マイスタァアアッ！　ご飯にしますかお味噌汁にしますか、それともわ？た？し？にしますか今すぐここで決めて下さいぃいい！！』

そして、刹那がエクシアを此方に転送しようと、イアンに声をかけ……る最中に、エクシアはイアンの制止を振り切って（エクシア

曰く、愛の力）、刹那の眼前に自力で転送してきた。ちなみに、刹那はエクシアの突然の出現に驚き、エクシアの甲高い奇声の内容までは聞き取れていなかった。

『マイスター、エクシアは……エクシアは……めっちゃ寂しかったです！　というわけで、二人っきりでどこかに行きましょう！　お薦(すす)めはこの「全力で愛を叫ぶホテル」です！』

『エクシア、貴女には悪いですが、これから任務ですので、そういった物は後でお願いします』

『それとも、此方の「全力で子作りをするホテル」の方がいいですかッ！？　どうですか、どうですかッ、マイスタァアアッ！？』

『私の話を全く聞いていませんね、貴女は。……マイスター、申し訳ありませんが、エクシアのＡＩを強制的にダウンさせて、副管制を起動させて下さい。その後、私が副管制と一緒に『００』を起動させます。性能が幾許(いくばく)かは落ちますが、現状、この馬鹿を相手にする時間すら勿体ないので、致し方ないかと。……ご決断を、マイスター』

「……分かった、Ｏガンダムの言う通りにしよう。……すまん、エクシア」

『もしくは、この「全力で……ほひゃ！？』

刹那は先程から暴れに暴れまくっているエクシアに対し、すまなそうな顔をしつつ、ＧＮ－００１の管制人格「ＥＸＩＡ」をその手で直接ダウンさせ、そして副管制「ＧＮ(ジーエヌ)」を「ＥＸＩＡ」の替わりに起動させた。エクシアの太陽炉からブーン、と、羽虫の羽音のような音が刹那の耳に響く。そして、それが響き終わる頃には、それは「ＥＸＩＡ」ではなく、非人格である副管制「ＧＮ」になっていた。

『「ＥＸＩＡ」のダウン、及びスリープの確認、完了しました。こ

れよりＧＮ－００１はヴェーダによって統括される副管制「ＧＮ」によって管制されます。よろしいですね、マイスター・刹那？』
「ああ」
『ではこれより、ＧＮ－００１はＧＮ－０００と『００』の起動に移ります。よろしいですね、マイスター・刹那？』
「ああ、頼む」

ＧＮ－００１の太陽炉から、エクシアの可憐で柔らかい、変態的な声とは似ても似つかない機械的な音声が流れる。それに若干の違和感を覚え、眉を数瞬だけ顰める刹那だったが、すぐに頭を切り替えると、先程から起動準備をしているアレルヤ達と共に……「ガンダム」の起動パスを唱えた。

「アリオス、セットアップ！」
『スタンバイレディ、セットアップ。ＧＮ－００７　ＡＲＩＯＳ　ＧＵＮＤＡＭ　ＡＳＣＡＬＯＮ　インストール、コンプリート』
「「ＧＮ」、Ｏガンダム、セットアップ！」
『ＧＮ－０００とＧＮ－００１のＧＮドライヴ、シンクロスタート。同調率、安定領域に到達。現在、８０．０％。ツインドライヴシステム、稼働開始を確認』
『ＧＮ－００００　『００』　ＧＵＮＤＡＭ　ＳＥＶＥＮＳＷＯＲＤ／Ｇ　インストール、コンプリート』

蒼碧色の粒子が、アレルヤと刹那を球状に包み込み、その体を「ガンダム」のＧＮ粒子へと交換させていく。そして、球状が晴れた時には、そこには赤色のアリオスＧＡと、蒼と白で構成された『００』ＧＳ／Ｇが立っていた。その二機は一、二度拳を握ったり開かせたりして調子を確かめた後、今作戦の標的がいる超高層ビル「マウンテン」へと、その機械でできた体を向けた。

アリオスＧＡは体を少し空に浮かばせ、剣を背中に寝かせたまま飛行形態に変形した。『００』ＧＳ／Ｇは、右肩に新たに搭載された巨大な黒い銃を両手で保持しつつ、その飛行形態のアリオスの背に寝そべった。

アリオスの背に寝そべった『００』は、自身の体をしっかりとアリオスに固定させると、黒い銃――試験型ＧＮソードブラスター――から伸びている白いパイプをアリオスのＧＮドライヴに繋げ、自身の粒子とアリオスの粒子をＧＮソードブラスターに供給できるようにした。これで発進準備が完了した。

『フェルト、此方は発進準備を完了したよ。……システムクラックの調子はどう？』

『向こうのビルのシステムは、どうやらあの裏切り者、アレハンドロ・コーナーが『法典』ヴェーダを参考にして制作したと思われる量子型演算処理システム「Ｍａｒｋ－Ｘ」によって守られているみたいですね。多分、ソフトだけなら、管理局のマザーと同等、いえ、それ以上かもしれません』

『……そんな物を、クラッキングできるのか？』

『……ふん、大丈夫です。確かに、管理局でも実用化に至ってない量子型演算処理システムですが……』

アレルヤと刹那は、何時でも発進できるように、機体を数十センチほど中空に浮かばせながら、フェルトの珍しく強気な発言を聞いていた。その時の彼女は、音声だけだったが、間違いなく笑っていたと、二人はそう確信していた。

実際、フェルトはアップルと共にヴェーダから絶え間なく送られてくる情報を処理しつつ、「十二の救世鐘（トゥエルブ・ベラー）」の『情報』Ｍａｒｋ－Ｘに対し、無表情ながら薄く、勝ち誇った笑みを浮かべていた。そ

れにアップルが短い悲鳴を上げたのは御愛嬌(ごあいきょう)だろう。そして、笑みを絶やさぬまま一拍置いて、フェルトは厳然たる事実だけを、通信の先に居る二人に、力強く告げた。

『ヴェーダはこれの五世代先の性能です』

第1管理世界のミッドチルダ、その超高層ビルの一角に、それはあった。

『……』

緑色に発光しながら、球状のメインコンピュータを四つの円柱で支えるそれは、「灰被り(シンデレラ)の福音」の情報全てを管制する「十二の救世鐘(ベラー)」の『情報』Ｍａｒｋ－Ｘであった。それは静謐(せいひつ)な部屋の中で、無限とも思える情報を片っ端から処理しつつ、並行して、「十二の救世鐘(ブ・ベラー)」の会議にも、適切だと判断された情報を提示していた。

『……？』

だが、Ｍａｒｋ－Ｘは「十二の救世鐘（トゥエルブ・ベラー）」による会議が行われている超高層ビル「マウンテン」のセキュリティーをチェックしている時、言いようのない（それ自体言葉を発せないのだが）何かを感じ、その何かを感じた箇所を再三に渡りチェックした。だが、特に異常を見出す事は無かった。それに考慮すること、０．０００１秒。Ｍａｒｋ－Ｘはそこをそのまま放置する事にした。勿論、そこにトラップやら障壁やらを山のように設置しておいてだ。

『……』

Ｍａｒｋ－Ｘはその箇所の事を一段落したと判断し、会議に集中することにした。『大使』が喋る度に、真面目なモノは同意を、反論をし、不真面目なモノは、聞いているのかいないのか分からない態度で参加する会議にだ。それがそれの生涯で唯一の油断、機械の身でありながらしてしまった愚行だと、知りもしないで。

『……！』

そして、それはその機能の全てを、刹那よりも短い一瞬で、何かを感じた箇所から侵入してきた何モノかによって掌握（しょうあく）されてしまった。その何モノかが、対「ＣＢ」用として、コーナー家が「ＣＢ」の機密レベル４から盗んだ情報により開発されたＭａｒｋ－Ｘの原点だったとは、知る事もなく……

「そう言えば、そろそろ「十二の鐘（クラッシュ・ベラー）は鳴り終えた」作戦の開始時刻だねぇ……果たして、「十二の救世鐘（トゥエルブ・ベラー）」は何人生き残れる事やら……」

「Ｄｒ．、今はそんな事よりも手を動かして下さい。先程から紅茶のカップしか持っていないその手をです」

「やれやれ、私の秘書はどうやら分かっていないらしいね？　ウーノ、君が淹れてくれた紅茶を無粋な仕事をしながら飲むなんて、私にはとてもとても……」

「うっ、そう言われましても……飲み終わってからでいいですので、後できちんと仕事をして下さいね？」

ラグランジュ3、と名付けられたデブリに造られた「ＣＢ」の秘密ドッグに、ジェイル・スカリエッティと三機のナンバーズはいた。白衣を着たスカリエッティの横には青白の秘書服を着たウーノが立ち、その向こうには白マントを広げるクワットロが、眼鏡を怪しく光らせながら、目の前の培養液（ばいようき）が入ったポッドに、何かの数値を入力していた。そしてそのポッドの中には、ヘッドギアの下に、紅く光る一つ目のバイザーを増設したセッテが、培養液の中で胸を上下に動かしながら浮かんでいた。

「それで、クワットロ？　セッテはどうなっているのかね？」

「……Ｄｒ．ですら解析に二週間以上もかかった代物など、私にはとても理解できませんね。何とか基本数値だけは入力できたのですが……」

「ふむ、そうか……まあ、これもセッテが望んだ事だ。可愛い娘の為妹の為、頑張って彼女の欲望を叶えてやろうではないか！」

培養液の中にいる、改修中のセッテを歪んだ笑顔で見詰めるスカリエッティ。その紅茶を持っていない片手は、既にクワットロですら理解不能な数式を、目の前のポッドへと、コンソールを介して次々と入力していく。その一切の無駄が無い、流麗な動きに見惚れていたクワットロだったが、突然その背に絶対零度すら生温い視線を感じ、急ぎ後ろを振り返ってみると……

そこには、般若がいた。限界を超えた怒りにより、一切の表情を無くした女の般若が。

「ひ、ひぃいいッ！？」

「ん？　どうしたのかねクワットロ？　そんな白い悪魔にでもバッタリ遭遇（そうぐう）したような悲鳴を上げ……ふう、どうやら私は疲れているようだ。白い悪魔ではなかったものの、何か……そう、無表情な般若という矛盾したモノを、私はこの目で見てしまったようだ、ウーノ？」

「そうですか、Ｄｒ．。ではまず、この仕事を速攻こなして下さい」

スカリエッティはクワットロの悲鳴を聞いても、どうせそれはクワットロが好きな嘘だろうと思って、愚かにも、笑いながら後ろを振り向いてしまった。そして目の前に存在するクールフェイス、彼から見ても明らかに「ブチギレました」となっているウーノを見て、背中が冷たい汗によってグッショリと濡れた。嗚呼、振り返るんじゃなかったと後悔しても、後の祭りである。

「Ｄｒ．、まずはこれからお願いします」

「あー……ウー」

「Ｄｒ．、まずはこれからお願いします。発言は、その後でお願いします」

「この山の様な仕事を終わらせてから喋れだって！？　ウーノ、い

くらなんでもそれはおうぼ……」
「発言は、仕事を終わらせてからにして下さいッ！」
「……ハイ」

もう一度言おう、後の祭りであると。既にスカリエッティの地位は、底の底まで落ち込み、反論することすら許されてはいない。

「……そう言えば、トーレ姉様も、今頃はあそこに到着しておりますのでしょうね」
「……セッテもそうだけど、トーレも新しい力を手に入れたんだから、やっぱり試してみたい気持ちがあるのかもしれませんね」
「そうりゃそ……」
「喋る前に、手を動かして下さい！」
「……ハイ、ククッ……」

本当に仕事が終わるまで喋らせてくれそうにないウーノに戦々恐々するスカリエッティだったが、一方、彼は何故ウーノがここまで怒っているのかを正確に理解していた為、ついにやけてしまい、さらには苦笑まで洩らしてしまった。それにウーノが怪訝な表情をするのも構わずに、彼は思う。嗚呼、私はここまで彼女に……愛されていたのか……と。

「……Ｄｒ．？」
「あぁ、すまないね。少し考え事をしていたのだよ……」

親を知らず、会った事もない同類の事も知らず、ただ研究にこの身を投げ続けていた私を愛してくれる女性。それがこんな近くに居るなんて、奇跡以外の何モノでもないだろう。スカリエッティは神が起こしたわけではないその奇跡に感謝しながら、しかし、自分のこの想いが相手に届いていない事に対し、深い落胆の溜息を吐いた。

何時の日にか……この世界を変革し終え、新たな人類の誕生を見届ける事ができたのならば、この想いを彼女に話し、二人でどこか遠い所にでも行こうと思う。……できれば、娘たち全員と……

そう願うスカリエッティだったが、同時に、彼はこの残酷な現実が、それを決して許さないだろうということも、また覚悟していた。それは先程上がった、管理局についてのアーカイブからの報告を見ても、最早その願いが叶わなくなりつつあるのは……分かり切った事だった。

アーカイブの報告には……

「これで、命令された事は、全て完了した筈だろう？」

『はい、そうです。任務、御苦労様でした。後始末はこちらにお任せ下さい。では、また後日に……お逢(あ)い致しましょう』

「私は、貴様等とは二度と遭いたくは無いがな。暗部の連中など当てに……フン、切れたか」

轟々と、茜(あかね)色の炎が、倒壊した施設から上空に向かって、勢いよく燃えていた。それはまるで天上でも焦がそうというのか、上に上

にと止まる事無く、黒煙と共に昇っていった。

その茜色の炎を小さな瞳でずっと先まで見上げながら、少女は通信用のモニターを閉じ、手に持っていた鈍色のナイフを二度三度、これまた小さな手の中で弄んだ。少女の瞳の中で、柄までもが金属のナイフが、空中で規則正しく回転する。

「……これもまた、私達がしなくてはならない贖罪なのか？　それとも、これは私達がしてきた事に対する罰……なのだろうか？」

ブツブツと、天上を憎々しげに見上げながら内心を静かに吐露する少女。手の中のナイフはすでに少女が着ていた灰色の草臥れたコートの中に仕舞われ、戦闘用の青いスーツには、すでに夥しい量の返り血がこびり付いている。

「……何にせよ、私達には『拒否権』というモノは無い。私は私の姉妹たちを護る為に、ただ与えられた任務をこなすだけだ」

少女は灰色の草臥れたコートを華麗に翻しながら、爆破の爪痕が生々しく残る、「ＣＢ」の協力社であった「アレクト社」の元本社を後にした。ブーツが血で濡れた通路にカツカツと虚しく響く。それを聞きながら、少女は他の番号の姉妹へと、任務の成否を問う連絡をした。

右目を覆う眼帯から涙が一粒、怪我人しかいない通路の上に、ピチョンッと音を立てて零れたが、少女はそれに気付かずに、闇の中へとその姿を溶け込ませていった……

【罰っていうのはその人が勝手に背負うものなんだと思うんだ。その人に犯した罪に応じて、その人の価値観が自らに負わせる重荷。それが罰だ。

良識があればあるほど自身にかける罰は重くなる。常識の中に生きれば生きるほど重くて辛いものになる。

だからって良識のない人が罪が無い事は無いんじゃないかな。それはその人にとって軽いだけだけど、やっぱり在るんだ。とても薄い良識の中に生まれたもっと薄い罪の意識。僕らから見ればそんな笑い飛ばせる感傷も、薄い良識しかない人にはとても居心地悪い感傷となる。大きさは違っても、罰という意味は同じだから。

たしかにさ、社会的に罪を問われないのは楽だろうけど。誰かに裁かれないのなら、罰は自分で背負うしかない。自責はずっと消えないものだろ。ふとした弾みで思い出される。誰も許してくれなかったから、自分でさえも許せない。心の傷は蒼いままで、ずっと痛み続けるんだ。永遠に癒える事はない。心には形がないから――――もってしまった傷の治療はできないんだと思う】

――鴨川秘様から、『空の境界』の黒桐幹也より

第３８話　誰が為に戦い、誰が為に鐘は鳴る？　≪中篇≫（後書き）

←以下駄目作者に替わり、エクシアがお送り致します。
「……アレ？　もしかしなくてもこれ、私の出番、お預けになるっていうことなんですか？　マイスターとたった二言三言しか交わしていないのに？　十秒も会っていないのに？　答えすら聞いていないのに？

……フフフ腐ふふ……そうですかそうですか……つまり、作者は私とマイスターの仲を駆逐しようとしているのですね？　ということは、私がマイスターと再び熱い仲になる為には、作者を駆逐しなくちゃいけないという事ですね、分かりますよもう？　トいう事で、作者、貴様を……

く・ち・く・し・て・や・る？

あっ！？　あと、ここまで読んで下さった皆様に感謝を。

最後に。

作者はエクシアを待っていてい下さいね？　フフフ腐ふふ……アハハハハハッ！！

第３９話　誰が為に戦い、誰が為に鐘は鳴る？　≪後篇？≫（前書き）

【殺される側に、幸せだった者はいない】

――コエンマ様から

第３９話　誰が為に戦い、誰が為に鐘は鳴る？　≪後篇？≫

――新暦７５年１１月１５日――

遮蔽物（しゃへいぶつ）がまったくない平坦な草原の中央に、どっしりと仁王立ちしている「ＣＢ」の白い悪魔、セラヴィー「ガンダム」。その白い巨躯を持つ「ガンダム」、通称「デカブツ」へと、聖王教会が次元世界に誇る武力の一つ、聖王第四近衛騎士団が、色とりどりな射撃魔法を一斉に発動させた。

「シュート！」「アァアクションッ！」「ファイア！」「行けぇえええッ！」「ディヴァイン・バスター！」「フォトンランサァアア！」「アクセルシューター！」「セイクリッドクラスタァアア！」

総勢１３９名からなる聖王第四近衛騎士団の平均魔導師ランクはＢランクである。そして、中には当然、ＡＡＡを超える魔導師だって数名ほどもいる。それだけの騎士達が一斉に射撃魔法を放てば、それはもう広域魔法と言っても差支えがなく、結果として、セラヴィーが立っていた場所は、広範囲に渡って爆煙に包まれることとなった。

その濛々（もうもう）と天に昇る黒い爆煙を見た騎士達は、それぞれ違う表情をしながら、セラヴィーが立っていたであろう場所をじっと凝視する。一人は嘲笑いながら、一人は表情を引き締めながら、一人は恐る恐るといった風に……

しかし、黒煙から少しだけ覗いた蒼碧色をその眼で視認した時、それぞれが優秀である騎士達は、一瞬でその場から退避し、一挙に散開した。そして、魔導師達が先程まで固まっていた場所が、黒煙

の中から飛び出してきた桃色の極光により焼失した。

「そ、そんな……」「悪魔め……！」「あれだけの攻撃を喰らって無傷かよ！？」「各員、各々の場所からクロスレンジまで詰めろ！」「距離を開けたら、死ぬぞぐわッ！？」

そのあまりにも強力無比な一撃に、恐れを抱いてしまった数名の騎士たちを、もう一度放たれた極光が僅かばかりの慈悲すら与えずに、一瞬で呑みこんだ。そして、二度の砲撃の余波により薄れていた黒煙の中から、数百もの射撃魔法を受けて、尚、その白い巨躯に傷一つないセラヴィーが、蒼碧色のＧＮフィールドを展開しながら一歩、前に踏み出してきた。

『こんな魔法など、避ける価値すら無い！』

『これならば、まだ高町なのは一人の砲撃魔法の方が強力です！』

セラヴィーは地面を踏み砕きながら、壁の如く迫ってくる射撃魔法を正面から受け止め、その合間にＧＮバズーカ？と肩に二門あるＧＮキャノン？を連結させたＧＮバスターキャノンを騎士たちに照射し、数人、数十人単位で塵も残さずに消滅させていく。その圧倒的な火力、及び防御力をまざまざと見せつけられた騎士たちの中には、背中をセラヴィーに向けて逃げ出そうとする者もいた。

『だから言っているだろう……そのような愚かな行動は、万死に値すると！』

『クアッドキャノン、発射！　敵騎士を消滅する！』

無論。そのような名ばかりの騎士などは一人残らず、悪魔とすら対峙した勇敢なる騎士たちと同じ、消滅の途（みち）を辿っていったが。

『セラヴィー、残り何人だ!?』
『残り８０……いえ、７８!』

敵残存戦力を数える合間にも、セラヴィーはクロスレンジを仕掛けてきたＡランクの騎士二人を、馬鹿げた握力でもって握り殺し、さらには、肘と肩に四門も搭載されているＧＮキャノン?をミドルレンジにいた六人に放射し、その内の三人を消滅させる。

「だ、だん、団ちょッ!?」「腕が……足がぁああ!?」「ひ、ひう……ヒック、もう……止めて……」「逃げちゃだめだ、逃げちゃだめだ、逃げちゃだめだ……」「団長、すでに此方の被害は……」「分かっている!　だが、それでも我々騎士一同は、ここを死守せねば……」

あまりにも圧倒的。あまりにも絶対的。あまりにも……傲慢的。人の命を一方的に消滅させていくその姿は、正に白い悪魔としか例えようがなかった。もしくは……魔王か。

その白い姿に恐怖しながら、それでも恐慌（パニック）には至らずに、千差万別の射撃魔法と桃色の砲撃が飛び交う戦場を、命と魔力を酷使しながら切り抜ける騎士たち。彼らを支えるのは、今まで彼らと共に過ごしてきた非戦闘員のシスターや神父、それに民間人や孤児がいる中央教堂をこの悪魔から護る、という一念だった。

「「「「うおぉおおぉおおお!!」」」」「「「「あぁあああぁあああああ!!」」」」「「「「がぁあああぁあああ!!」」」」

護る、という概念は、破壊、という概念よりも、遥かに力を湧（わ）かせるモノだ。その理由は言わなくても感覚で理解できるだろう。物語では世界（だれか）を護る勇者は、世界（だれか）を破壊することしかできない魔王に

は必ず勝つ。それは世界の常識にして運命なのである。

だが、現実はそう甘くなく、本当は残酷極まりないモノである、というのもまたこの世界の真理の一つだ。大半の勇者が一人で魔王を倒せないように、破壊する事しかできない魔王にだって勇者を超える力は宿る。寧ろ、生半可な想いが混じっていない分、純粋な破壊の願望しかない彼らの方が、より強い力を得る事ができるのかもしれない。

『セラヴィー、団長が来るぞ！　シックスアームズを起動させろ！』
『イエス、マイスター。シックスアームズを起動させます』

そう。例えば、今のように。

「フルドライブ・イグニッション！」
『フルドライブ・イグニッション、ギガントフォルム！』

聖王第四近衛騎士団の団長が、数十メートルほどの大きな緋色のハンマーを、大気を押し潰しながらセラヴィーへと一気に振り落とした。それをセラヴィーは、両肩両膝と両手の、計六本もある腕で、真っ正面から受け止める。

「押し潰せ、タレス！」
『カートリッジロード』ガコンガコンッ！
『『……フッ』』

セラヴィーが巨大化した鎚型アームドデバイス「グラーフタレス」を受け止めた瞬間、その凶悪なまでの衝撃により、足元の地面が数十センチも陥没した。そして、その地面にできた罅（ひび）を踏みしめながら、ティエリアとセラヴィーはこのＡＡＡランク魔導師による攻撃

を鼻で笑いつつ、膝を折ることすらしない。それに驚愕し、目を見開く団長。

「ば、馬鹿なッ！？　こんな事が……！」

『この程度の攻撃など、笑止千万だ！　セラヴィー、押し返してやれ！』

『イエス、マイスタァアア！』

だが、驚愕はまだ終わりではない。セラヴィーは関節部にあるＧＮコンデンサーに貯蔵させていたＧＮ粒子を凄まじい勢いで消費させ、団長の攻撃を受けた時よりも遥かに強い怪力を発生させると、グラーフタレスをその怪力で、瞬時に数メートル以上も跳ね飛ばした。

そして、デバイスを遠くに飛ばされた事で、万歳を上げるような格好となった無手の団長へと、セラヴィーは手から大砲に戻したＧＮキャノン？四門による一斉射「クアッドキャノン」を容赦なく、最大出力で発射した。

「ぱ、パンツァーシルｔ……」

その数メートル以上もある桃色の極光は、団長がデバイスなしで発動させた脆弱（ぜいじゃく）なシールドを瞬きの間に破壊すると、肌が白く、身長も肉付きも豊満で、ナイスおぱ～いだった団長を瞬時にこの世から消し去った。その砲撃の後に残ったのは、第四騎士団の中では最強だった団長を消し去られて絶望する騎士団の数十名ばかりと、赤く溶解して煮え滾っている地面だけだった。

『セラヴィー、残存する戦力を掃討する』

当然、その僅かに残った騎士たちも、次の瞬間には軒並み消し去られたが。

「カローラ、「三つ目」は見つかったか？」
『いえ、やはり「ガンダム」のあの粒子のせいで探査魔法もレーダーも使えず、「三つ目」を発見することはできませんでした。しかし、狙撃ポイントは弾道を追って算出できたので、仮に、敵が移動しなかった場合は……恐らくこの辺りかと』
「……随分遠いな。クラウン、「三つ目」は移動したと思うか？」
「はっ、普通の狙撃者なら移動するでしょう。しかし、これだけの距離があれば、移動する必要がないかもしれません」

僕とクラウン、そしてヴェロッサとシスター・シャッハは、破壊された白い尖塔から飛び降り、中央教堂のひび割れた回廊を一丸となって歩いていた。一丸となっていたのは、いつまた狙撃が再開されるのか分からないから、何時でも互いを助け合えるようにする為だ。

その一丸の先頭を、緊迫感を持って歩きながら、僕はこの惑星の衛星軌道上にあるステーションで補給と整備を受けている第九次元航行艦隊の旗艦「クラウディア」へと通信を繋げ、クラウディアの

ブリッジにタイミング良くいた元ラルゴ・キース栄誉元帥の秘書官、現在はクラウディアの副艦長であるカローラと、今後の戦術について話し合う。

『……まだ死んでいなかったんですか、味方殺しさん？』

「……」

『てっきり私は、貴方が殺した彼女のように……』

「カローラ、頼むから止めてくれ。今は「ガンダム」の討伐の方が大事だ。……いいな？」

『……艦長がそう言うのでしたら、仕方がないですね。レストラン「バンクーバー」で手を打ちましょう。……でも、私はアナタを絶対に許していないという事は、忘れないで下さいよ、味方殺しさん？』

「……理解している」

しかし、正直この二人の仲の悪さには、さすがの僕でも辟易としてきたな。最も、カローラのその憎しみの訳を知っているから、僕からは何も言えないが……ってちょっと待て！？

「待て、カローラ！　今お前、さり気無くレストラン「バンクーバー」を奢れって僕に言っただろ！？」

『えぇ、言いましたが、それが何か？』

「あそこの料理がどれぐらいするのか、お前は分かっているのか！？　特にＶＩＰルームの料理！　アレはたった一品で並みの高官の年間給料を空っぽにさせる、悪魔の料理なんだぞ！？」

『……え？　まさかその都市伝説、本当だったんですか？　……一応聞きますけど、艦長の給料では何品ぐらいまで頼めますか？』

「……三、いや四はギリギリ行けるはず……じゃない！　話を逸らすな！　どうして僕がお前に「バンクーバー」を奢らなきゃいけないんだ！？　それと、今は戦闘中……」

『そうでしたね、それじゃ本題に戻りましょう。あっ、でも、騎士カリムとのこの合成写真をエイミィさんにラッピングして贈られたくなかったら、「バンクーバー」の料理を奢って下さいね？　ちなみに、これは本気と言ってマジと聞きますから……覚悟して下さいね？』

……おかしいな、目から滝のような汗が出てくるなんて。僕はどうやら、ここ数日のちょっと無理な捜査で疲れているみたいだ。……ミッドに帰ったら、カレルとリエラ、それにエイミィと会って、この疲れを癒(いや)そう。

その為にも、今は……

『とりあえず、「三つ目」が動いていないと仮定しておきましょう。この時点で既に不確定要素が多々ありますが……艦長と、不本意ながら味方殺しなら、何とかできるでしょう。……戦術ですが、まず、味方殺しが騎士団と共に「デカブツ」を抑え、残りの三人で「三つ目」を討つ……というのが、現状で取れる最良の策かと思われますが……どうでしょうザザーー』

「……艦長、ここは副艦長の戦術通りがよろしいかと、自分は思います！」

「……まあ、それが最良か。「三つ目」とクラウンは相性が悪いから、仕方がないな。……いいか、クラウン？　僕が命令するのはたった一つの事だけだ。……死ぬなよ？」

「了解です、艦長！」

「ガンダム」を倒すのに、全力を尽くそうッ！！

「この戦術でいいか、ヴェロッサ、シスター・シャッハ？」

「僕は異論ないね。君たちの方が「ガンダム」との戦い方を知って

いる訳だし……」
「私も特に異論はない」
「なら、行こう」

そう心に誓いを立てつつ、僕は中央教堂の外に出た。外ではどうやら戦闘がまだ続いているようで、あちこちから爆発の音が途絶える事無く聞こえてきた。その戦場特有の音に身を震わせつつ、僕はＳ２Ｕとデュランダルを両手に構えた。隣りを見れば、クラウンもその両手に真っ黒なガントレット型インテリジェントデバイス「マジェスタ」を起動させていて、シスター・シャッハもトンファー型アームドデバイス「ヴィンデルシャフト」を両手に持っている。

「では、艦長。貴方に勝利の美酒が注(そそ)がれますよう、お祈りします」
「では、クラウン。もう一度言うが……死ぬなよ？」
「ご武運を祈りますよ」
「聖王様のご加護が貴方にあるよう、祈ります」

僕はシスター・シャッハとヴェロッサを、両手に持った二つのデバイスに掴まらせたまま飛行魔法を行使し、二人と一緒に空へと飛翔した。そして「三つ目」がいるであろう位置へ体の向きを調節すると、まだ地面に立っているクラウンとそう言葉を交わして……僕は中央教堂から「三つ目」がいるであろう場所へと飛び立っていった。

思えば、この時から気付くべきだったのかもしれない。向こうが此方の戦力を知っていた事を。そして、「ＣＢ」が僕達に最凶の戦力(スリーマンセル)を当ててきたのだという事を……僕は、この時点で気付くべきだったのだ。

もしそれに気付けていたら、死なずに済んだ……かもしれない。
それは最早有り得ないＩＦだったが、そう考えてしまうと、僕はたまらなく悔しくて……また、心のどこかが壊れた音が、僕の中で反響した気がした。

『あれは……クロノ・ハラオウンか！　奴はスメラギ・李・ノリエガの予報通りに「三つ目」へと向かうみたいだな。という事は、僕達の相手は……』
『どうやら予定通り、「一年戦争」で味方のオーバーＳランク魔導師二名を殺害した「血塗れの強行者」、クラウン・ガバレートのようですね、マイスター？』
『ああ、そのようだ。……それにしても、ミス・スメラギの戦術予報は四年前と変わらずに凄いな。こうまで順調に相手の行動を予想し切るとは……』
『イエス、マイスター。彼女より優れた戦術予報士は、この世界には存在しないかと思います。……最も、同等の相手なら何人かは存在しますが。例を出せば、私達を「最終決戦（フォーリン・エンジェルス）」で苦しめたあの「不死身の男」パトリック・コーラサワーを配下に付ける「参謀女傑」

カティ・マネキンなどです、マイスター』
『パトリック・コーラサワーにカティ・マネキンか。確かに、彼らも凄まじかったな。……まあ、昔話は後にしよう。来るぞッ！』
『イエス、マイスターッ！』

クロノと別れたクラウンは、地面すれすれを飛行魔法で飛翔しつつ、聖王第四近衛騎士団がほんの十数分で壊滅させられた事実を極力、冷静に受け止めようと努力していた。とはいえ、やはり見知った顔も居た騎士たちを殺された事に対する感情の揺らぎは抑える事ができず、クラウンはその揺らぎの赴（おもむ）くまま、「デカブツ」へと真正面から挑みかかっていった。

彼は分かっていたのだ、アレに小細工などは通用しないし、自分にはこの馬鹿正直な戦法こそが似合うと。だから、彼は敢えて真正面から「デカブツ」へと迫ったのだ。無論、目の前に広がる惨劇に感化されたのも、その要因であったが。

だが、それがどれだけ難しく、また無謀な事なのかを、今回「ガンダム」と初めて戦うクラウンは知らなかった。知らなかったでは済まされないというのに。

『真正面から挑むその気概だけは認める……だがッ！』
『相手が悪すぎます！』

セラヴィーは砂塵（さじん）を上げながら、地面すれすれで迫ってくるクラウンへと、計六門もある砲塔を向けた。そして、その砲口にピンク

色の光を生じさせ、絶大な威力を誇る桃色の砲撃を躊躇(ちゅうちょ)なく、一斉に発射した。

その六発の砲撃は、寸分違わずにクラウンが飛んでいた場所に着弾し、耳をつんざくような爆音を発しながら、その辺り一面を綺麗(きれい)さっぱり消し去った。着弾した場所から盛大な土煙が天に昇っていく。その戦火(威力)を見たセラヴィーは、クラウンを間違いなく消し去ったと確信し、満足げに撤退しようとして……

『……なッ！？　マイスター、反応がまだ消えていません！』
『何ッ！？』

土煙を裂いて、すぐそこまで接近してきたクラウンに驚愕した。クラウンはその隙を逃さずに、彼が最も得意とする魔法を、自身のインテリジェントデバイスに発動させる！

「マジェスタァアア！」
『グラヴィティ・インパクトッ！』

ズズンッ！

赤紫色をしたミッド式の魔法陣がクラウンの足元に広がると、先が見えない程黒い円柱の波動が、デバイスに覆われた、これまた黒い拳から一直線に放たれた。その黒い波動はセラヴィーの白い胴体に轟音と共に当たると、そのままその巨体を後ろへと圧して、セラヴィーを百メートル以上も後退させた。

『チィッ！』
『「アーカイブ」の情報通り、「重力」の魔力変換資質ですか。……少々、厄介ですね』

後退させられた事実に苦虫を噛み潰したような表情をするティエリア。一方のセラヴィーは、世にも珍しき「重力」の魔力変換資質を目の当たりにして、その威力をヴェーダで演算していた。

「今の一撃で倒れないとは……やはり、艦長の言う通り、「ガンダム」は化物だな、マジェスタ？」

『化物でも、貴方はアレを倒さなければならないのでしょう？　なら、倒れるまで「重力」を打ち込みましょう。例え、この身が血塗れになろうとも、ね？』

「ああ、そうだなマジェスタ。……それでは、もう一突（いっとつ）、強行するッ！」

『ええ、そうしましょう、マスター！』

その演算をしている合間にも、セラヴィーの砲撃で左足が千切れかかっているクラウンが、百メートル以上も離れていたセラヴィーの懐へと入り込んできた。それにまたしても驚愕の表情を浮かべかけたが、そう何度もやらせるほど、ティエリアとセラヴィーはお人好しではない。

『やらせるかぁあああ！』

『舐めないで下さいね！』

「マジェスタァアアア！」

『グラヴィティ・レイ！』

セラヴィーが右手に持ったＧＮバズーカ？の砲口を、クラウンの重力で黒く偏光された拳に向ける。それを頭では理解しつつ、それでもそのまま重力を纏（まと）わせた拳を突き出そうとするクラウン。そして、ＧＮバズーカ？と指先から肘までを黒い装甲で覆うマジェスタが接しようかというその刹那、

両者の間で身を竦める様な爆音が、目で直視できないほどの光の洪水と共に、世界を大きく震わせた。

「……妙だな」

「何がだい、クロノ？」

静かすぎる。それが岩山まで辿り着いた僕の、最初の感想だった。それに、「デカブツ」が妙にあっさりと僕達を通したのも気になる。……他にも「ガンダム」がいるのか？　だとしたら一体どの「ガンダム」が……

「……ハラオウン提督、貴方の懸念は分かりますが、私達は例え罠だと分かっていても進むしかありません」

「……それはそうだが……ちなみに、シスター・シャッハもやはり「三つ目」や「デカブツ」以外の「ガンダム」によるトラップ、あるいは待ち伏せがあると思うか？」

「……私は、あると思います」

「……そうか。なら、それに用心しつつ、目的地へと急ごう」

最も、急いで行ったとしても、どの道戦う事にはなるんだろうけ

ど……な！

「散開しろッ！」

「「！！」」

後ろに飛び退った僕がそう言う前に、シスターとヴェロッサは前に飛んだ。そして、さっきまで僕達がいた場所へと、不吉までに赤い粒子ビームが飛び込んできた。それがそこをまっさらに蹂躙する様を見ながら、僕は言い様のない悪寒に全身を震わせた。

「あ～あ、やっぱりこの程度の奇襲は避けられちゃうか～」

『ヒッヒャアァアアー！　そりゃそうですよマイスター！　相手はあの「鬼札（ジョーカー）」クロノ・ハラオウンなんですかーらーねェエエ！！』

僕の脳内が「逃げろ！」と煩く（うるさ）警告を発しているのが分かる。だが、その警告はすでに遅きに失していた。

何故なら、昼と夕のちょうど中間辺りの空から突如現れた真っ赤な天上人（ガンダム）は、既に僕の目の前に、身も凍るような鋭い殺気と共に降り立っていたからだ。その四つ目が殺意によりギラギラと輝いているのが、妙に印象に残る。

「……？　デュランダル、Ｓ２Ｕ？」

『『ノーデータ。アンノウン「ガンダム」です、ボス』』

「でも、それでこそ……復讐のしがいがあるってモノよね、アァアルケェエエエエッ！？」

『イエェス、マイスタァアアアッ！！』

その四つの目を持つ真っ赤な異形の「ガンダム」は、隠そうとも

しない殺気を僕にぶつけながら、歪なまでに長い右腕に巨大な実剣を握ると、それを予備動作もなく僕に振り下ろしてきた。

「し、ねェエエエッ！」
「させる、かぁああッ！」

恐ろしい勢いで僕を斬殺しようとする赤い巨剣。それを目でしっかり捉えつつ、その刀身の横をＳ２Ｕでブッ叩き、僕を殺そうとしていた剣筋を強引に逸らした。そして、地面を砕き、その土中へと刃をめり込ます事になったアンノウン「ガンダム」へと、僕は右手に持ったデュランダルを押しあて、

「スティンガー・レイ！」
『スティンガー・レイ』

直射型の射撃魔法を、ゼロ距離から発射した。その水色の魔力弾は、アルケーとかいう、今までのデータにはない新型？　の「ガンダム」を、僕の向こう側に有った大きな岩まで吹き飛ばした。大岩がガラガラと音を立てて崩れたが、それでも「ガンダム」は壊れていない。

「キャハハハハッやっぱりッ一筋縄じゃあ逝かないわねッ！」
『そうですねェエエ、マイスタァアア！　さすがは犯罪者共から『管理局の鬼札』と怖れられている魔導師でーすねェエエ、ハッハァアアッ！』

その大岩が崩れるほどの衝撃でアルケー？　の身動きが僅かに止まったのを目視してから、僕は先程から介入の機を窺っていたシスター・シャッハとヴェロッサに、

「二人とも、先に「三つ目」の方まで行っててくれ！」
「しかし……！」
「それでは……！」
「いいから、早く！」
「「……クッ！」」

と、大声で叫んだ。二人は僕のその叫びに一瞬だけ躊躇を見せたが、それでも、それが最善の選択だと言う事を理解していた為、此方を何回も振り返りながらも、「三つ目」がいるであろう場所へと行ってくれた。それに安堵の溜息を吐き……次いで、真横に転がった。

「ご相談は終わったのかしら、キャハッ！」
「ああ、つい今しがた、なッ！」

僕が先程まで立っていた場所に突き刺さった、アルケー？　の赤い大剣。それは地面を数メートルも扇状（おうぎじょう）に砕いていく。僕はその凄まじい威力に若干戦慄しかけながら、それでも此方に注意を向ける為、アルケー？　の軽口に付き合おうとする。……ふう、全く。軽口なんて、ユーノ相手だけで十分なんだがな。

「さて、それじゃあ聞くが……お前はどうやら言葉を発しても問題無いみたいだな？　他の「ガンダム」どもは、普通無言を貫くモノだが……」
「別に、それに深い意味はないわ。ただ、私は、これから死体になる人に喋っても、問題は無いと思っているだけ。だから、ヨハン兄（にい）を殺したあなたは……早く死体になりなさい！」
「それは全力でお断りだ！」

どうやら、こいつは四年前に僕が破壊した「黒い銃」の妹か弟…

…に当たるらしい。いや、言葉遣いから妹か？　しかし、あの「ガンダム」にも兄弟がいたとは……正直、驚きを隠せない。だが、インテリジェントデバイス並みの知性がある「ガンダム」なら、その可能性も十分考慮できるだろう。

それと、こいつの格好。よく見れば、あの大剣と腰のフロントアーマーは、「橙の剣」に通ずるモノが見受けられる。なら、勿論あの武装も……！

「行きなさい、ファングッ！」
「クソッ、やっぱりか！」

アルケーの腰に添えつけられていたフロントアーマーから、小さな鳥の足みたいなモノが十基ほど射出される。それは、四年前に「橙の剣」が僕達を散々苦しませたビットみたいなモノ――彼女が言うに、「ファング」という兵器らしい――だった。しかも、形状にこそ変わりはなかったが、その性能は段違いに上がっており、その全ての動きを捕捉する事は、少なくても、僕にはできなかった。しかし……

「それの対処法は、既に分かっている！」
『スティンガーブレイド・エクスキューションシフト』
「なッ！？」
『んな馬鹿なぁあああ！？』

軽口をしている間に発動の準備をしていた魔法が、僕の周囲に、数百もの青白い魔力刃を展開させる。その魔力刃は一度僕の周囲を旋回すると、赤い光を先端に灯すファングへと殺到し、その鋭い刃で次々と破壊していった。幾らファング高性能で遠隔操作できるビット？　といっても、物量が違い過ぎる為、どうする事もできな

いようだ。そして、最後の一基を破壊すると同時、アルケーへと残った数十のスティンガーブレイドを発射する。

「チィッ、アァルケェエエエエ！！」

『ＧＮバスターソード、ライフルモード！　おまけにＧＮシールドを展開するぅうううう！！』

それに対して、向こうは右手の大剣を右腕に装着して、その先端から赤い光弾を放ち、それでスティンガーブレイドを撃ち落としてきた。しかも、左腕にはシールドみたいなものまで発生させて、それで抜けてきたスティンガーブレイドを防ぐという出鱈目さ。それに目を一度大きく見開きながら、それでも僕は魔力刃による視覚撹乱効果を利用して、アルケーの懐へと一気に潜り込んだ。

「これで！」

「終わるわけ無いでしょう！？」

「がッ……！？」

そして、アルケーの無防備な胴体にブレイクインパクトを叩きこもうとした僕は、アルケーの脚により、左肩を斬り裂かれた。……斬り裂かれた、だと？

「……ふん。見た目もそうだが、本当にその「ガンダム」はゲテモノだな？」

「うふっ、嬉しい事を言ってくれるわね。その言葉は私達にとっては褒め言葉みたいなものよ。そうでしょう、アルケー？」

『イィエス、マイスタァアア！』

「（……達だと？　どういう事だ？）」

よく見れば、アルケーの足からは赤い光剣が伸びていた。僕はア

レに斬り飛ばされたのだろう。全く、本当にゲテモノ過ぎて困るな、「ガンダム」。

だが、今はこの疑問が最優先だ。彼女は今、確かに「達」と言っていた。つまり、今喋っている以外の人格が、あの「ガンダム」にはある……という事なのか？

「なぁああにを考えているのかしら、ねッ！」

「さぁて、何だろう、なッ！」

もしくは、本当にユーノの言う通り、「ガンダム」はロストロギアではなく、デバイスであるのだろうか？　もし仮にそうだとしたら、今僕と喋っているのは、ＡＩを有するロストロギアなどではなく、その「ガンダム」というデバイスを使用している人間……になるのか？

だとしたら、四年前、僕が倒したあの「ガンダム」にも……！

「隙だらけよ、クロノ・ハラオウンーー！」

「ハッ！？」

僕がその恐ろしい仮定の可能性について考えていたら、何時の間にか、その横腹に赤い大剣が浅く喰い込んでいた。それを現実味がない世界で見詰める僕。あぁ、本当に世界は、こんなはずじゃない事ばか……

「サ・ヨ・ナ・ラ？」

ザンッ！

『マイスター、どうやら招いていた客達がすぐそこまで来ているようだが……どうする？』
『決まってんだろ？　まずは作戦通り、あそこの聖王教会中央教堂を狙い撃つ。客達の相手は、その後だ』
『……イエス、マイスター』

岩山の陰に隠れていたケルディムは、消耗していたＧＮ粒子を補充し終えると、その場からオレンジ色に変わりつつある空へと垂直に飛び上がった。そして、両手でＧＮスナイパーライフル？を構え、中央教堂へと、空から狙いをつける。

『『……』』

丸い照準カーソルが中央教堂を捉える。後はその引き金を何十回か引くだけで、この作戦を終わらせる事ができるだろう。ケルディムに課された任務は、あくまでも中央教堂の破壊なのだから。

『……マイスター？』
『……ああ、分かってる、分かってるさケルディム、お前が言いたい事はな……』

だが、

『……けどな、やっぱり引けねえよ。あそこで何が起こっているのかも分からない無関係な子供まで狙い撃つなんて……オレは、嫌だね』

その引き金は、一度も引かれなかった。

『……マイスター、貴方は自分が何を言っているか、分かっているのか？　先代のロックオン・ストラトスは、無関係の子供をも殺せたぞ？』

『……』

『マイスターッ！』

『ケルディム、まずはここに招待した客達の相手からだ。……いいな？』

『……どうなっても、知らないぞ？』

『……刹那とティエリア、それにリボンズが黙ってちゃいないことぐらい、分かってるさ』

『メイレイイハン、メイレイイハン！』

オレンジ色に変わりつつあった空に浮かび上がっていたケルディムが、その高度をどんどん低くしていき、遂には、褐色の地肌へと細い足を着けた。その着陸した時に舞い上がった土埃が視界を狭めたが、ケルディムはその優れたセンサーとカメラにより、自分の前を良好に見渡せる事ができた。そして、その視線を、ある一点へと集中させる。

土埃がまだ収まらない中、ケルディムの視線の先には、男と女の二人組がいた。一人は赤紫色のショートヘアをした女性で、下半身には白いスカートが、小振りのおぱ～いも含めた上半身にはノース

リーブのボディスーツが巻かれてあった。もう一人は、腰まで伸びた緑髪を持つ男性で、その身は白いスーツにより包まれている。

「……いいか、ヴェロッサ？　一瞬の油断が死に繋がると思え。相手はアウトレンジに特化した「三つ目」とはいえ、その射撃の正確さは「ＣＢ」随一なのだからな」

「分かっていますよ、シャッハ。相手はあの「ガンダム」なんですからね。油断なんて、できるはずもないでしょう？」

「……そうか。なら、行くぞッ！」

「ええッ！」

シャッハと呼ばれた女性は、その掛け声と共に、両手にトンファー型アームドデバイス「ヴィンデルシャフト」をセットアップした。そして、ヴェロッサと呼ばれた男は、デバイスを持たずに、周囲に無数の、実体のない緑色の犬を作り出した。

『……マイスター、貴方のした事は、今は不問にしよう。この続きは、目の前の厄介な二人を倒してからで……』

『……あぁ、分かった』

『ロックオン、オコラレテル！　ロックオン、オコラレテル！』

『……ハロ、ふざけるのもいいが、回避は頼むぜ？』

『リョウカイ、リョウカイ！』

その二人の戦闘態勢を見て、トコトンまでオレと相性が悪いなと思いつつ、ロックオンは引き金を引く指と利き目である右目に、全神経を集中した。火器のコントロールや機体のバランスは管制人格であるケルディムと、その補佐であるハロに譲渡しているため、彼は射撃だけに集中する事ができるのだ。

「旋迅疾駆（せんじんしっく）！」
「無限の猟犬（ウンエントリヒ・ヤークト）！」
『ロックオン・ストラトス、狙い撃つぜ！』
『ＧＮスナイパーライフル？、照準完了！』
『カイヒポイント、カイヒポイント！』

橙の魔力光が戦場を照らすと同時に、緑の猟犬がケルディムへと解き放たれた。その猟犬へと照準を合わせながら、ケルディムはヴェロッサ・アコースとシャッハ・ヌエラとの戦争を、復讐戦を……始めた。

【人を恐怖させる物の条件は三つ必要だって知っているか？　１つ、怪物は言葉を喋ってはならない。２つ、怪物は正体不明でなければいけない。三つ――怪物は不死身でなければ意味がない】

――鴨川秒様から、『空の境界』の蒼崎橙子より

第３９話　誰が為に戦い、誰が為に鐘は鳴る？　≪後篇？≫（後書き）

「フフフフフふフフフフフ腐不フフフフ負フフフフフ……」

何も無い真っ白な空間に、突如、殺意を惜しみなく注ぎ込んだ笑い声が響いた。その可憐で美しい、変態的な笑い声は、作者の背後から聞こえてくる。

「どこに行ったのでしょうか、私とマイスターの仲を駆逐しようとしている駄目作者は？　そろそろ駄目作者を金ジムみたいにセブンソードで滅多切りにしないと、私の憎しみが爆発してしまいそうです、フフフ……」

抑揚のない声が、そんな恐ろしい事を呟いた。それに作者は腰を抜かしそうになりながらも、刹那がいるであろう場所まで、全力全開で走る。だが、病んだ声は段々と近づいており、どれだけ速く走っても、振り切れそうにない。そして、遂に笑い声が作者のすぐ後ろから聞こえてきた。それに作者は胆が縮むほど恐怖し、恐ろしい現況を確認する為、急ぎ後ろを振り返ってみる。すると、そこには……

「見つけましたよ、駄目作者さん？　取り敢えず、マイスターと私の為に、今すぐ駆逐して上げますね？　あ！　あと、ここまで読んで下さった皆様には感謝を！

Ｐｉーーーーーー……

最後に。

作者はどうやら【祝！　８００ｐｔ越え】を記念に、今話で【とあ

る発表】をしようとしていたらしいですね。まあ、今は、私が四年前に金ジムにもやったセブンソードで動かなくなっているので、私が発表したいと思いますッ！　異論は駆逐します！　それでは、えっと……「９００ｐｔをもし仮に仮定に奇跡的に突破しましたら（突破できるとはミジンコたりとも思っていませんが）四年前の戦争を一つの作品として個別に書きたいと思います」……という事は、マイスターと私の熱々でラヴラヴ、かつ砂糖どっぷり漬けな日々が描かれるということですね、分かりますよもう？　というわけで、これからもこの作品の事を、よろしくお願いします！　……駄目作者さん、まだ駆逐タイムは、終わっていませんよ？」

第４０話　誰が為に戦い、誰が為に鐘は鳴る？　≪後篇？≫（前書き）

【父は永遠に悲壮である】

――萩原朔太郎より

第４０話　誰が為に戦い、誰が為に鐘は鳴る？　≪後篇？≫

――新暦７５年１１月１５日――

「イィッヤッホォオオーーーー！！」

第３２管理世界の西に沈もうとする夕陽を、眩(まばゆ)いばかりの金色の閃光が切り裂いた。その金色の閃光は、辺りに凄まじい雷光を撒き散らしながら、オレンジ色に染まった空を駆け抜け、眼下の戦場へとその身をグングン近づかせていく。

「いっくよー、バルニフィカスッ！」

『イエス、サー』

「電光石火(でんこうせっか)ーー！」

金色の閃光が、そのスピードをさらに速くした。と同時に、周囲に奔っていた雷光もその輝きを強くする。その輝きは既に直視できない程、橙色の空に金色を煌(きらめ)かせていた。

「アップルさん、この任務をカンペキにこなしたら、頭をナデナデしながら褒めて下さいねぇーーーー！！」

そして、その金色の閃光は、その速度でドップラー現象を引き起こしながら、凄惨(せいさん)な死闘が繰り広げられている戦場へと一直線に降下していった……

「……マジェスタ、無事か？」
『生憎と、無事ではないですよ、マスター？　右腕の手甲部分が、貴方の右手と一緒に吹き飛ばされ、さらに、前腕部も半ばまで中破されました。まあ、このぐらいの損傷でしたら、三十秒ほどもあればリカバリー可能ですが……』
「すぐに頼む」
『イエス、マスター。リカバリーを実行します』

黒いインナーに、先程の衝突で飛び散った血で薄汚れた赤紫色の外套を羽織っているクラウンは、千切れかかっている左足と、吹き飛ばされた右手を見詰めながら、右腕部が半壊している黒いガントレット型インテリジェントデバイス「マジェスタ」へと、リカバリー用の魔力を流した。マジェスタはその魔力を利用して、自身の半壊された部分を急速に修復していく。その様に満足したクラウンは、今度は自分の肉体の損傷を治す為に、彼が最も得意とする分野の魔法を唱えた。

「フィジカルヒール」

その回復魔法は、別段、特別な魔法ではない。寧ろ、全次元世界でも、未だ６０人すら到達していないオーバーＳランク魔導師が使うべきような高等魔法ですらない。しかし、その一般にも出回る様な、普通の回復魔法こそが、クラウン・ガバレートをオーバーＳランクへと押し上げた魔法であった。

クラウンの魔力クラス（ランクは実力で、クラスは魔力量）は、管理局でもトップクラスのSランクだ。そして、彼は回復魔法に特化した才能を持っていた。

管理局でもトップクラスの、莫大な魔力にモノを言わせて発動される回復魔法は、本来なら回復魔法をかけても、入院が必要だとされるような大怪我ですら、一瞬で完治させてしまう。その出鱈目さは、回復魔法を得意とする魔導師から見れば、正に『反則（チート）』以外の何物でもなかった。

「……よし！」

『リカバリーを完了。……それで、マスターはまだアレと戦うんですか？』

「ああ」

『……ハア、分かりました。なら私は、マスターを全力でサポートするとしましょう』

「頼むぞ、マジェスタ」

その『反則』でもって、瞬時に左足と右手を完治させたクラウンは、空に奔った雷光を怪訝に思いながらも、その浅朱（あさあけ）色の瞳を、未だ爆煙が渦巻く前方の方へと向けた。爆炎により生じた熱風が、クラウンの白髪（はくはつ）と頬を優しげに撫でる。

それはまるで、これから起こる惨劇により、想像を絶するような辛苦（しんく）を味わうであろうクラウンを、慰（なぐさ）めるようであった。

『一瞬で千切れかかっていた左足が繋がって、吹き飛ばされていた

右手が治るなんて……！』

『これが「血塗れの強行者」たる所以（ゆえん）か……だがッ！』

クラウンが視線を向けていた爆煙の中から、真っ赤に燃える炎を物ともしない白亜の巨躯が踊り出てきた。その体には、やはり傷などどこにも見受けられない。それを見て、クラウンの頬にツウっと、冷たい汗が一つ、地面に流れ落ちた。

『回復が得意なだけでは、このセラヴィーを倒す事はできない！』

そのクラウンがセラヴィーに戦慄している間に、セラヴィーは先程の衝突で破壊された右手のＧＮバズーカ?を投げ捨てると、残り五門となった砲門の全てを、いきなりクラウンへと向けた。そして、クラウンが戦慄から抜け出した頃には、既にその砲口から、桃色の砲撃が放たれていた。

「チィイイッ、マジェスタァアア！」

『ラウンドシールド』

その濁流の如き桃色の砲撃を防ぐために、クラウンは黒い掌を中心に魔力を集め、強固なシールドタイプの防御魔法を頭の中で構築した。その防御魔法を、クラウンのワン（専用）オフデバイスであるマジェスタがさらに補強して、掌の前、クラウンの正面に、赤紫色のミッド式魔法陣の形をした障壁として発動させた。

それは恐らく、クラウンが発動できる防御魔法の中でも、最高の硬度を誇っていただろう。セラヴィーの遠慮のない一撃が表面に衝突しても、その空間に踏み止まれたのだから。

だが、逆を言うと、それまでにしか過ぎなかった。

「グッぎぎギィイイッ！」
『ウゥ、ま、拙いです……！』

セラヴィーの一撃は、正に天使が振るうに相応しい力でもって放たれた物だった。その一撃は人が受けるにはあまりにも重く、また、強すぎた。それはクラウン渾身（こんしん）の防御魔法を嘲笑うかのように、ジリジリと、防御魔法を構築している魔力を削り取っていく。それに歯を食いしばりながら耐えるクラウン。

『セラヴィー、ここで一気に決め……！？』
『まだ生き残りがいたんですか、しつこいですね！』
「なッ！？　何を」
『魔力が……上がってる？　これはまさか……！』

そんなクラウン劣勢の中。ある一人の十四、五ぐらいの少女（騎士）がスクッと、騎士団の死体の中から立ち上がってきた。そして、何を思ったのか、先端が尖っている筒型のデバイスを肩に背負い出し、そのままセラヴィーの方へと駆け始めた。

『！　マイスター、あの騎士が持っているデバイスに、臨界点を超える様な量の魔力が集まってきています！　これは恐らく……！』
『相打ちを狙っての自爆魔法かッ！？　そんな事はさせない！　セラヴィーッ！』
『イエス、マイスター！』

少女は仲間の血で汚れた山吹色の髪を方々に乱しながら、殺意でギラギラと光る赤い隻眼でセラヴィーを睨んだ。それは壮絶な覚悟を秘めた表情であり、それをもって、少女はセラヴィーを破壊する為に、その懐へと必死で至ろうとする。だが、セラヴィーはその殺

気に怖気づかずに、冷静に、クラウンに向けていた砲門の一つ、左手のＧＮバズーカ?を少女の方へと動かす。

「……！　今だマジェスタ！　その腕(かいな)は唯、贖罪をする為だけにある！」

『ええ、分かっていますよ、マスター！　グラヴィティ……バァスタァアアッ！！』

だが、セラヴィーの砲撃が一門分弱まったのを好機とみて、クラウンが右手で魔法陣状のシールドを維持しながら、左手で目の前の桃色の砲撃に、黒い砲撃を叩き込んだ。その黒い砲撃は絶対的な威力を誇る桃色の砲撃と衝突すると、信じられない事に、それを僅かに掻き消した。そしてその僅かにできた隙を頼りに、クラウンが桃色の砲撃から脱出した。

『あッ！?』

『しまった、僕とした事が……！』

この時、ティエリアとセラヴィーは、クラウンを仕留め損なった事ばかりに気を取られていた。すぐ近くに、相打ち狙いの騎士がいるというのにである。

「……逃げて、管理局の人……！」

『Ｎ２ブロウアップ、スタンバイレディ・セットアップ。カウント、スリー、ツゥ―、ワン……ゼロ、ブロウアップ』

『ッ！?　セラヴィー、ＧＮフィールドを！』

『い、イエス、マイス……！』

そして、当然、その代価は支払われた。少女の命がけの魔法によって……。

ドォオォォオォオオオオオオオオン……

クロノ・ハラオウンは、それほど魔法の才能に恵まれてはいなかった。いや、確かに才能はあったが、それは高町なのはやフェイト・T・ハラオウン、八神はやてなどの才と比べれば、路傍の石程度にしかすぎないモノであった。

なら、何故そんな魔法の才能がない彼が、提督にまで昇りつめ、さらに、最強の魔導師たるオーバーSランク魔導師の一員にまで至れたのか？

「が……はッ……！　お、お前……」

「……」

「お前ェエエヱエエエエエッ！！」

それは、実は簡単な事であった。彼は魔法の才能に恵まれていない替わりに、『努力』の才能には恵まれていたのだ。彼は幼き頃、彼が父を失った時から、今までずっと、惜しまぬ努力をしてきた。

例え周りから妬まれ、中傷されようとも、彼は決して『努力』することを止めずに、ずっと己の魔法を研鑽し続けてきた。

「どうした、アルケーとやら？　随分と、余裕がなさそうだな？」

努力は決して自分を裏切らない。それが甘い幻想だというのは、今更言うまでもないだろう。しかし、その裏切るかもしれない努力をし続けてきたのが、クロノ・ハラオウンという男だった。

何度挫折しかけただろうか、その地位を得るまでに？　何度自棄になりかけただろうか、その力を得るまでに？　何度犠牲を払ったのだろうか、その強き『自分』を構築する為に？

それは恐らく、彼自身にしか分からないことだろう。彼の夫人であるエイミィ・ハラオウンですら分からないはずだ。

「出力は最大でしょうね、アルケェエエッ！？」

『イィエスッ、マイスターー！　寧ろ焼けきる寸前まで上げちゃっていますがあああッ！？』

「ふん。どうやら、それがお前の底らしいな？　なら……ここで幕を引いてやる、「ガンダム」ッ！」

「ヒッ……！　アァルケェエエエッ！？」

『ギッチョンギッチョンギッチョッチョンッ！！』

だが、きっと彼は、例え己を誰にも理解されずとも、ただ前へと突き進むだろう。それが自分の生きる道だと、自分が進むべき道だという事を理解して……彼は、『正義』の二文字を胸に抱きつつ、ただ足を前に出し続ける事だろう。

「デュランダル、ブレイクインパルス！　Ｓ２Ｕ、スティンガース

ナイプ！」
『『イエス、ボス』』
さて、それでは世界を数瞬ばかり、遡(さかのぼ)ろう。

「サ・ヨ・ナ・ラ？」
ザン！
ネーナとアルケーは、この一撃で決まったと、確かにそう思った。
アルケーのＧＮバスターソードは、クロノのＢ・Ｊを食い破って、その胴体を真っ二つにするはずだと、そう確信していた。
しかし、この残酷な現実は、復讐できたことで恍惚(こうこつ)としていたネーナを、瞬時に凍り付かせる。
「……う、嘘？　どうして、どうして……！」
『ホワットッ！？　ハァアアアアアッ！？』
「どうして、動かないのよ！」
ネーナは心の底から叫んだ、この理不尽を前にして。自身の復讐を成す筈であった一撃を、よりにもよって、一番憎い人間に止められた事に、彼女は耐えがたい憎悪を大きく膨らました。
「何とか間に合ったな……冷や汗物だったぞ、Ｓ２Ｕ？」
『ソーリー、マスター』

「だが、これで形勢逆転だな、アルケーとやら？」
「……まだよ、まだ……終わって……！」
「いや、終わりさ」

クロノの腹に浅く食い込んでいるＧＮバスターソードには、青いリング状の何かが巻き付いていた。それはクロノがアルケーと対峙した時からＳ２Ｕに準備させていたバインドであり、それがアルケーの大剣を中空に制止させていたのだ。

「デュランダル、ブレイズキャノンッ！」
『ブレイズキャノン』
「キャアアアッ！？」

クロノは自身の腹に浅く食い込んでいるアルケーの大剣を掴みながら、右手に持ったデュランダルで砲撃魔法を発動させ、二メートルはあろうかという巨体のアルケーを、大剣共々、数十メートル先までふっ飛ばした。それにネーナは痛みこそ感じなかったものの、そのふっ飛ばされた衝撃までは緩和し切れず、つい生身の時の感覚で叫んでしまった。

「Ｓ２Ｕ、スティンガーブレイド！」
『スティンガーブレイド』

しかし、クロノはその叫びを聞いて尚、アルケーが人間かもしれないという可能性を考慮して尚、今だ姿勢を崩したままのアルケーへと、躊躇なく魔法を放った。無論、破壊する気の殺傷魔法を、である。

「あはは、頭がクラクラす……ぎゃッ！？」
『マイスター、しっかりしっかりィィ！　敵はもう目前まで来てま

ーすゥウウよオオッ！？』

スティンガーブレイドが直撃した事により、さらに態勢を崩すこととなったアルケー。だが、そんな赤い異形へと、クロノは恐れる事無く接近していく。ザッザッザッザッ……渇いた土を踏む音が、どんどんネーナに近づいてくる。

「バッカじゃないの、このアルケーに接近戦を挑もうなんてッ！」

『正気ですか、あなたはぁーー！？』

「ああ、勿論正気さ。少なくても、狂気を全身から噴き出すお前なんかよりずっとな。……Ｓ２Ｕ」

『フィジカルフィール』

「デュランダル」

『スティンガースナイプ』

この時点で既にネーナは、無表情で自分を殺そうとするクロノを無意識ながらに恐れていた。だが、それを気付きたくないが為に、ネーナは敢えて大声で自分を鼓舞（こぶ）した。例えそれが空元気だとしても、やらなければただ殺されるだけだと、ネーナはそう感じていたのだ。

「オラァアアア、喰らいなさいッ！！」

大声で自分を鼓舞して、恐怖心を捨て去ったアルケーの、赤い光剣が伸びている左足が大気を裂きながら、クロノへと迫る。だが、クロノはその奇襲を、無表情のまま完璧に見切ると、振り上げられた左足の下へと、自身の体を潜り込ませた。

「Ｓ２Ｕ！」

『リングバインド』

クロノはアルケーの左足の下に屈(かが)んだまま、Ｓ２Ｕへと短く声をかける。それにＳ２Ｕは答え、アルケーに近づいている時に準備していた強固なバインドを、アルケーの右足に発動させ、その動きを固定させた。

「い、いい加減に……死になさいよ！」

動きを固定された事で、さらにクロノへの恐怖が募るが、それをネーナは、彼に対する復讐心で打ち消した。そして固定された右足を軸足にしながら、クロノへと、高ぶらせた感情を上乗せしつつ、右手に持ったＧＮバスターソードを振り落とした。

「動きが単調すぎて読み易いぞ、アルケーとやら？」

だが、そのネーナの気持ちをも乗せて繰り出されたアルケーの一撃は、戦闘技術の塊といっても過言ではないクロノには通じなかった。クロノは半身を少し捻るだけで、その一撃を回避せしめたのだ。

「Ｓ２Ｕ！」
『リングバインド』

そして、ネーナが渾身の一撃を避けられた事に茫然としている間に、クロノはさらにアルケーの右手へと二つ目のバインドを掛けた。その顔はあくまでも冷静の風を揺るがさない。

「あ……あ……ぁアアアア嗚呼アアアアッギャっ！？」

まるで詰将棋のように追い詰められていくアルケー。それに耐えきれないのか、それとも、クロノに感じた恐怖をまた誤魔化す為か、

より一層の憎悪を込めた声で叫ぶネーナ。しかし、それを嘲笑うかのように、アルケーの左半身へと、先程放たれた青い魔力弾（スティンガースナイプ）が直撃する。

「さて、そろそろチェックメイトをさせてもらうおうか、アルケーとやらッ！」

グラリッと、左からの不意打ちにより、さらに態勢を崩すアルケー。そんなアルケーの四つ目にピタッと数瞬当てられる、青い宝石が先端に付いた、青い機械状（デバイス）。

「ブレイクインパルスッ！」
『ブレイクインパルス』
『＊@＆％＄＝！”＃＄％＆！？』

その四つ目に当てられたデバイス、デュランダルから、途轍もない振動がアルケーに放たれた。それはアルケーの装甲にひび割れを起こし、一瞬、アルケーが発音不能な絶叫をあげるほどの威力だった。

「が……はッ……！　お、お前……」
「……」
「お前ェエエエエエエエエッ！！」

叫ぶ、叫ぶ、叫ぶ。心が折れないよう、相手を恐れないよう……クロノを憎めるよう、ネーナは魂の奥底から叫んだ。だが、その生（き）の感情（ようふ）が剥き出しの声を全身で受け止めても、クロノは、無表情という名の仮面を剥（は）ぎ取らない。

「どうした、アルケーとやら？　随分と、余裕がなさそうだな？」

普通なら、不敵の笑みを零してもおかしくは無いこの状況で、しかし、クロノは無表情な仮面を被り続ける。己の覚悟を揺るがさないよう、人(ネーナ)を殺すという覚悟を貫けるよう……彼は、感情が表に出ない無表情の仮面を、自分に被らせ続ける。

「出力は最大でしょうね、アルケェエエッ！？」

『イィエスッ、マイスターー！　寧ろ焼けきる寸前まで上げちゃっていますがあああッ！？』

「ふん。どうやら、それがお前の底らしいな？　なら……ここで幕を引いてやる、「ガンダム」ッ！」

「ヒッ……！　アァルケェエエエッ！？」

『ギッチョンギッチョンギッチョッチョンッ！！』

ネーナは、自分と相手との間にある戦闘技術の差、何よりも、その覚悟の差に、絶望にも似たモノを感じた。自分だって復讐する為に、今まで努力してきたはずだ。なのに、何故こうも技術にも覚悟にも、決定的な溝(みぞ)ができてしまうのか？　それがネーナには理解できない。そして、理解できないからこそ、彼女はクロノに恐れを感じ、魂の奥底から恐怖をかき消す為に、大音量で叫んでしまう。

「デュランダル、ブレイクインパルスを準備！　Ｓ２Ｕ、スティンガースナイプ！」

『『イエス、ボス』』

だが、そのネーナの叫びを打ち消すかのように、クロノが止めの詠唱を声高に唱えた。これで幕を引くと、これでネーナの人生を終わらせると宣言して唱えられたその魔法は、青い魔力光を放ちながら、死の足音と共にネーナの方に近づいてくる。

「あああぁあああああぁあああああぁあああーーーー！！」
『ＧＮファングゥウウとＧＮバスタァアアソォオオド、チョイサァアアアッ！！』

その足音に恐怖しながら、アルケーは残っていた二基のＧＮファングを、クロノ目がけ、一直線に射出した。だが、一直線という単調な軌道で迫るＧＮファングは、クロノが操るスティンガースナイプ一つに、簡単に撃墜されてしまう。

「スナイプショット」
『スナイプショット』

しかも、スティンガースナイプは一度空気中を螺旋状に旋回すると、消費した魔力をチャージし、今度は弾丸加速のキーワードを唱えられた速度でもって、アルケーの方へと飛んでいった。

「ッ！？　チィイイッ！」

その誘導型の魔力弾を打ち落とすべく、アルケーはＧＮバスターソードを左から右に振り抜いた。それは見事に魔力弾を打ち落としたが、その替わりに、クロノをアルケーの懐まで招待してしまった。それに驚愕を隠せないアルケー。クロノはアルケーが大剣を振り抜いた、その刹那的な硬直の間に、アルケーの懐へと入り込んだのだ。

「デュランダル！」

そして、アルケーの真っ赤な胴体に、数瞬、デュランダルが当てられた。そして、次の瞬間

『ブレイクインパルス』

再び、アルケーに途轍もない振動が奔った。それも、最初の一撃よりも遥かに強力な振動が。

『＊@＆％＄＝！”＃＄％＆＊@＆％＄＝！”＃＄％＆ッ！？』

「アルケェエエッ！？」

その振動は、アルケーの損傷が目立つ胴部装甲を易々と砕き、内部にあった疑似太陽炉本体にまで損傷を与えた。ネーナの視界が紅い警告欄で埋め尽くされていく。疑似とはいえ、三つある太陽炉の内の一つを機能不全にされたのだ。それによってアルケーの性能が一気に６７％にまでガタ落ちするが、疑似太陽炉はオリジナルとは違って自己修復能力を持っていない為、アルケーにはそれをどうする事も出来ない。

「さて……Ｃｈｅｃｋｍａｔｅ（チェックメイト）だな、アルケーとやら」

綺麗な夕焼けに染まっている大空を仰ぎ見る態勢となったアルケーの首筋に、デュランダルの先端が突き付けられる。その先端には青い魔力光が灯されており、いつでも魔法を発動できそうだ。それを茫然自失な体で見詰めていたネーナだが、その顔はすでに憎悪と恐怖で言語にすることができないほど歪み切っていた。

「どうして……どうして私が負けるのよッ！？　アルケーは三つの疑似ＧＮドライヴで稼働する、ＳＳ－ランクの、「ＣＢ」の中でも屈指の性能を持つ機体なのよッ！？　なのに……なのに、なのになのになのに……なのにッ！　どうしてッ！　私が仰向けにされているのよッ！？」

「（……三つの疑似ＧＮドライヴ？）」

憎悪が彼女を立たせようとする。恐怖が彼女をへたり込ませようとする。その相反する想いがネーナの身動きを封じ、指一本たりとも動けなくする。それをただ無表情のまま冷徹に見詰め、ネーナが先程言った単語に反応するクロノ。

だが、ここで戦況は、思わぬ方向へと転換される。

「あっ!?　クロノなんたら、はっけーーん！　バルニフィカス、光鎌斬(こうれんざん)～！」

『イエス、サー』

クロノがネーナの言葉に思考を張り巡らせていると、その真上から、クロノよりも遥かに大きい魔力を持つ何モノかが、橙の空に金色の閃光を放ちつつ一気に急降下してきた。そして、いまだ態勢が整っていないクロノへと、その何モノかが金色に光る鎌を振り落とした。

「なッ……！」

『『オートガード、プロテクション』』

それをデバイスのオートガードで防ぐクロノだったが、この奇襲に込められている魔力はクロノがシールドに込めた魔力よりも遥かに多く、結果として、クロノは成す術もなく自身の後方へと吹っ飛ばされてしまった。

「クソッ、新手だ……何ィイイッ!?」

クロノは悪態をつきながらも、崩れた態勢を瞬時に立て直し、アルケーの眼前に降り立った何モノかを鋭く睨んだ。しかし、砂煙が晴れるに従い、その顔から無表情の仮面が音を立てて剥がれ落ちていった。その顔はまるで信じられないモノでも見たかのような驚きで塗り固められていた。

「あーーッ!?　よけるなよクロノなんたら!　この僕がせっかくカッコ良く決めようとしていたんだから、そこは……えーと、えーと……い、いさぎよく?　やられないと、ダメじゃないかーー!!」
「ふぇ……フェイ、ト?」

砂煙が晴れるに従い、青い髪と青いマントが鮮明にクロノの目に映る。それは突風により激しくはためいたが、彼女はそれに気を払わずに、右手に持つ青紫色の戦斧型インテリジェントデバイスを、元気一杯にクロノに向かって突き付けた。その動作を見ながら、クロノは十年前の義妹の姿に酷似している彼女を、茫然と見詰めた。

その光景を、遠く離れた次元空間から本を通して見ていた「アーカイブ」は、軽い笑みを口元に零(こぼ)しながら、こう呟いた。

十年前に滅ぼした筈の闇の書の闇……その欠片であった彼女、雷刃の襲撃者を前にして、君は如何様な答えを出すのかな、クロノ?

『ちっきしょーーーッ、全ッ然当たらねえぞッ！？』
『まさか、ここまで相性が悪いとはな……赤外線センサーを使えば猟犬で見失い、使わなければ暴力シスターを見逃す……これが人間の言う所のジレンマ、というものか』
『んな悠長な事を言っている場合かよケルディムッ！？　お前、この状況が分かってんのかッ！？』
『分かっているとも、マイスター。要するにだ……私達が大ピンチ、なのだろう？』
『分かってんなら、もう少し緊張感を持ちやがれってんだ！』

ケルディムは夕闇に沈もうかという空に浮きながら、ＧＮスナイパーライフル？を両手で構え、迫りくる緑色の猟犬を正確に狙い撃った。その一撃は見事猟犬を撃ち抜き、実体のない猟犬を大気中に霧散させるものの、猟犬はその一匹だけではなく、ケルディムの周囲に数十匹以上も存在していた。

「シャッハ、今だ！」
「ああ、分かっている！　旋迅疾駆ッ！」
『クルゾ、クルゾ！』
『分かってる！　ケルディム、狙い撃つぞ！』
『イエス、マイスター』

その緑色の猟犬をすり抜けつつ、シャッハがケルディムに近づこうとする。その動きを察知したケルディムは、瞬時に赤外線探知をモニターに設定し、シャッハの熱反応を頼りに狙い撃とうとするも、

「無限の猟犬（ウンエントリヒ・ヤークト）！」

無限かと錯覚するような物量の猟犬により、そのモニターを遮（さえぎ）られてしまう。

『だぁああもう、どうしろってんだよッ！？』

何もない空間に己の粒子ビームが奔るのを見ながら、ケルディムはＧＮスナイパーライフル？を右肩に戻し、今度はバックパックから引き抜いたＧＮビームピストル？を両手に握った。そして、猟犬の群れから飛び出してきたシャッハの攻撃を、その対ビーム・魔力コーティングされた銃身で受け止めた。それによって周囲に明るい火花が散ったが、その美しさに気を取られる余裕など、この場の誰にも存在しない。

「くたばれ、「ガンダム」ゥウウッ！！」

シャッハが必死の形相でヴィンデルシャフトをケルディムに何度も振るうが、ケルディムはその全てを見切り、完璧に防ぎきった。それにシャッハは苛立ちを感じたが、次の瞬間には自分の眼前にいきなり銃口が突き付けられていた。それを慌てながらもなんとか猟犬を足台にして避ける事に成功するが、冷たい汗を体中から発する事になった。

「シャッハ！」

だが、ケルディムは自身の攻撃を回避された事になんら反応を示さずに、再びシャッハへとGNビームピストル?を向けた。それを一匹の猟犬の上に乗りながら見たヴェロッサは、シャッハとケルディムの間に、出来得る限りの猟犬を捻じ込んだ。

『ケルディム!』

『うむ』

しかし、その猟犬でできた壁を見たケルディムは、予め来る事が分かっていたかのように、右手に持ったGNビームピストルを落ち着いて背中のバックパックに収納した。そして、右肩に戻していたGNスナイパーライフル?を今度は右手一本で構えると、未だこの場から脱出していないシャッハへと一射、猟犬を打ち貫く貫通力でもって放たれた。

「う……!」

「なッ、持ち替えるなんて!」

そのケルディムの一撃は、正に正確無比な一撃であった。もしヴェロッサの猟犬に一定の物質的な強度が無ければ、シャッハは今の一撃で間違いなく死んでいただろう。最も、いくらヴェロッサの猟犬により九死に一生を得たとはいえ、シャッハは左腕を犠牲にしなければならなかったが。

「シャッハ、ここは一旦下がるべき……」

「下がるな! 今、私達が下がれば、後ろにある中央教堂がこいつに焼き払われるぞ!」

『……へっ、何を言ってんだか。……お前達だって、罪のない人達を、笑いながら斬殺していったくせによォオオッ!!』

左腕から血を噴出させながらヴェロッサの猟犬を次々と乗り継いで行くシャッハ。そんな満身創痍に近い彼女へと、何故かケルディムがこれまでにない殺気を放ってきた。それにやや困惑したシャッハだったが、その困惑した隙に、右脛（すね）へとＧＮスナイパーライフル？の一撃が撃ち込まれた。

その右脛に撃ち込まれたあまりの痛さに、シャッハは意識を若干失いかけ、Ｂ・Ｊを一時的とはいえ、解除してしまった。

「ガアァアアアッ！？」

「クソッ、「ガンダム」ゥウウッ！」

そのシャッハをいたぶる様な凄惨（せいさん）な光景に我慢できなくなったのか、ヴェロッサが周りに猟犬を従えながらケルディムへと真っ直ぐ突っ込んでいった。ヴェロッサは自分の猟犬を犠牲に、ケルディムへと一矢報いようとしたのだ。

『教会に尻尾を振る査察官なんてな……百害あって、一利無しなんだよ！』

『ＧＮミサイル、ハッシャ！　ＧＮミサイル、ハッシャ！』

だが、そのヴェロッサへと、死の弾幕がケルディムのフロントアーマーより発射された。たった一発で人一人を軽く殺せるその兵器は、ヴェロッサの猟犬たちと同じく群れをなしてヴェロッサへと殺到する。それに恐怖を感じるヴェロッサだったが、彼は猟犬を自身の体に纏わせると、その死の弾幕の中へと、自ら飛び込んでいった。

『ハアッ！？』

『……死に急ぎたかったのか？』

この時、ロックオンとケルディムは本気でヴェロッサの正気を疑った。彼らはまさかこのＧＮミサイルの弾幕に飛び込んでくるような馬鹿な真似をしてくるとは、予想だにしていなかったのだ。そしてＧＮミサイルの爆発がケルディムの視界を蒼碧色に染めていった。ヴェロッサに着弾したＧＮミサイルは、その尽くを爆発させ、蒼碧色の粒子を辺りに撒き散らしていく。

『ほら見ろ、言わんこっちゃない』

そして、その粒子の爆発の中から、ヴェロッサが半分意識を失った状態で地上へと真っ逆様に落ちていった。彼の死すら覚悟したその特攻は、残念ながら、ケルディムには通じなかったみたいだ。彼の周囲に漂っていた猟犬は、その尽くをＧＮミサイルによって爆殺されていた。

「ヴェロッサッ！？」

ヴェロッサが意識混濁のまま地上へと落ちそうになるその正に寸前、残り少ない魔力で発動させた旋迅疾駆で駆け付けたシャッハが、ギリギリの所で彼をキャッチした。それに安堵の溜息を吐く事、数瞬。

『貰ったーー！』
『パーフェクト・ロックオン！』
「しまっ……！」

ヴェロッサの体を右足左腕がない体でキャッチし、そのまま身動きが取れなくなったシャッハへと、ケルディムの慈悲の無い一撃が放たれた。自身に一直線に迫る桃色の一撃。それは濃厚な死のビジ

ョンをシャッハに見せながら、その距離を急速に０へと近づかせていく。

そして、桃色の弾丸はシャッハ達がいた所に着弾し、盛大な爆音と爆発を、その場に齎した。

【自分の尻も拭けないようなヤツは、マイスターじゃない】

――アストレア様から、『機動戦士ガンダム００Ｆ』のフォン・スパークより

第４０話　誰が為に戦い、誰が為に鐘は鳴る？　≪後篇？≫（後書き）

←以下駄目作者に替わり、エクシアがお送り致します。

「なん……ですって？　私の出番が全くないとは、どういうことなんですか、駄目作者さん？　皆さま方はマイスターと私の、ラヴラヴで！　甘甘で！！　砂糖どっぷりな絡み合いを期待しているのですよ？　それを完膚なきまでに無視するなんて……そんなに私のセブンソードで、天上の国にでも逝きたいんですか？　今すぐやっちゃってもいいですよ？

しかも、投稿予定日を宣言したにも関わらず、その日の午前零時投稿を守れないなんて……感想の返信もできてないですし……これはもう、セラヴィー達の言う所の、「万死に値する！」ですね。やっぱり天上の国にまで逝きますか、駄目作者さん？

取り敢えず、感想の返信は何とか明日中には全返信させときます。なので、作者の今に始まった事ではない返信の遅さには目をつぶって感想を書いて下されば、とても幸せです。主に私が。どのくらい幸せかと言いますと、マイスターとイチャイチャするぐらいです！

あ！　あと、ここまで読んで下さった皆様には感謝を。

最後に。

「気が付いたら８６７ｐｔとか……まだ三千字ぐらいしか書いていないのに……」などと、うちの駄目作者がほざいていましたが、そんな呟きは私の剣で黙らせておくので、これからもこの作品で楽しんでいただければ嬉しいです！　ｐｔよりも、楽しむ事が重要ですからね！　では、ここで失礼します。駄目作者をもう一回駆逐しなければならないので」

第４１話　誰が為に戦い、誰が為に鐘は鳴る？　≪後篇？≫（前書き）

【ミサカには、もはや簡単には死ねない理由がある、とミサカは結論づけます。平たく言えば、こんな所で死ぬのはまっぴらだとミサカは断言してみます】

――キラー様から、『とある魔術の禁書目録』の御坂妹（一〇〇三二号）より

第４１話　誰が為に戦い、誰が為に鐘は鳴る？　≪後篇？≫

――新暦７５年１１月１５日――

「副艦長！　１１０陸空隊と１１２陸空隊が準備を完了したそうです！」

「なら、すぐにあそこへ転送しなさい！　それと、１１１陸空隊はどうしたんですかッ！？」

「まだ準備が整わない、との事です！」

「あと一分たっても準備ができなかったら、宇宙空間の真空を体験させると、そう伝えなさい！」

「は、はいッ、分かりました！」

第九次元航行艦隊の旗艦「クラウディア」、その艦橋で、副艦長であるカローラが声を張り上げて、矢継ぎ早に命令を下していた。艦長であるクロノがここにいない今、彼女がこのクラウディアの総指揮を取らねばならなかったのだ。しかし、彼女はあの「伝説の三提督」の一人、ラルゴ・キールの秘書を務めるほど有能であり、すぐに自分の役割を全うし始めた。

「光学映像、来ます！」

「正面のモニターに回しなさい！」

カローラが切れ長の水色の瞳で、映像が出た艦橋の正面にあるモニターを鋭く睨んだ。モニターの中では、「デカブツ」とクラウン・ガバレート、「アンノウン」とクロノ・ハラオウン、「三つ目」とシャッハ・ヌエラ、ヴェロッサ・アコースが、血と火花を散らす死闘を繰り広げていた。

「……此方が不利なのは、動きませんか」
「はい。何しろ、相手はオーバーSランクと同格の化物ロストロギアですから、致し方ありませんね」
「でも、艦長だけは互角以上に戦っていますね？　……あぁ、何と凛々しい御姿なのでしょう！　見ているだけ、濡れてきちゃいました！！」
「卑猥なので、そういうのは止めて下さい。それと、艦長には確か妻子がいたはずですが……？」
「そんなのは、寝取ればいいだけの話よ」
「……聞かなかった事に、しておきます」
「そう、それは賢明な判断ね」

そんな吐き気を催す様な死闘を見ながら、カローラは卑猥な言葉とは裏腹に、きびきびとした動作で武装隊の転送準備を完了させていく。クラウディアのクルーよりも早いその処理速度は、さすがとしか言い様が無い。

「……というわけで、来て早速だけど、貴方達にも出て貰います。……異論はありませんね、暗部の方々？」
「僕は特にないけど……？」
「私にも特に異論などはないです。その為に此方に送られたのですから」
「私も、特にはないかなー？」
「では、貴方？　は１１０と１１２陸空隊と共に、仲間殺しさんの援護を頼みます。貴女は艦長を。貴女は……シスターと査察官を、お願いします」
「「……了解」」
「えぇー！？　あの暴力シスターの所はちょっと、いやかなり嫌なんだけど……」
「異論はないのでしょう？」

「……ちぇー。了解しましたっと」

そんな瞳と同じ色をした長い髪を持つカローラの背後には、三人のうら若き女性がいた。青い戦闘用ボディースーツで身を固める彼女達は、本局から此方に送られてきた暗部の人間？　達だった。そんな彼女達は目の前のモニターを冷や汗と共に眺めながら、艦橋の後方にある転送ポーターに乗り込んでいく。

それを横目で確認したカローラは、ボタンを一つ操作し、彼女達を戦場へと送りだしていった。それでこの状況が好転すると、そう信じて疑わずに。

何故なら、今転移ポーターに乗り込んだ三人の女性は、この管理局を相手にして、なお一歩も引かなかった、管理局史上でも類を見ない大犯罪者の、その娘達だったからだ。

「おい、しっかりしろ！」
「あ……うぅ……」
「よし、まだ息をしているな……マジェスタ！」
『イエス、マスター。フィジカルヒール』

轟々と、天すら焼き尽くす様な獄炎が、クラウン達の目の前で燃え盛っていた。その獄炎は、今クラウンが抱き抱えている十四、五ぐらいの幼げな少女、ヱヴァ＝Ｒ＝Ａによって齎されたモノだった。しかし、クラウンの腕の中でグッタリとしているヱヴァは、その獄炎を生み出した魔法、「Ｎ２ブロウアップ」を使用した事で、全身に重度の火傷を負ってしまっていた。

『……セラヴィー、損傷は？』

『左腹部に４％、左腕部に３％、左脚部に２％の損傷……使用不可になった火器は、一つもありません』

『つまり、戦闘に支障は……』

『全くありませんよ、マイスター』

そのヱヴァの全身を蝕む火傷を治すべく、クラウンは赤紫の魔法陣を展開して、回復魔法をヱヴァに発動させた。クラウン自身もヱヴァの魔法で軽度の火傷を負っていたが、今は目の前の命を助ける事が先決だと、彼はそう思っていて……愚かにも、自身の事を後回しにしてしまった。すぐ目の前に、最恐（さいきょう）の悪魔がいるというのに、である。

「クッ……！」

『本当に悪魔ですね、アレは……！』

『破壊するぞ、セラヴィー。この世の法則までも』

『イエス、マイスター。破壊しましょう、この世の全てを……』

轟々と、天すら焼き尽くす様な獄炎の中から、ゆったりとした動作で、白い巨体が躍り出てきた。それは白い悪魔の名に相応しき貫禄（かんろく）でもって、クラウンを圧倒する。

ゴクリッと、クラウンが生唾を飲みこむ音が、辺りに響いた。

『ティエリア・アーデ、セラヴィー。目標を破壊する！』

そして、クラウンが生唾を飲んだすぐ後、セラヴィーが地面から数十センチほど、無音で浮かび上がった。それに怪訝な表情をするクラウン。すると、その疑問に答えるように、セラヴィーは四門あるＧＮキャノン？から桃色の砲弾を、クラウンたちにいきなり撃った。

「マジェスタ、まだ完治しないのかッ！？」
『まだです！　あと十秒！』
「クッ……ァアアアッ！」

桃色の砲撃が、クラウンたちへと壁の如く迫ってくる。しかし、今マジェスタは山吹色のショートボブすら黒焦げになっているヱヴァを、回復魔法にて治療することに専念しており、他の魔法まではサポートできなかった。ならばと、クラウンは己の身体能力を信じて、ヱヴァを抱えたまま、砲撃の範囲外へと飛ぼうとした……が。

『今です、マイスター！』
『嘘、どうしてこっちにッ！？』

その飛んだ先には、セラヴィーが拳を腰だめに構えながら、クラウンたちを待ち構えていた。セラヴィーは砲撃を放った後、すぐさまヴェータの演算で割り出した「クラウンが避けるであろう位置」にまで飛翔したのだ。そして、ヴェーダは見事クラウンの動きを割

り出し当て、セラヴィーへと、次に取るべき行動を示す。

『ハァアアア！』

「ボハァッ！？」

セラヴィーはそのヴェーダの指針に従い、全力でもって、その鉄拳をクラウンの胴体へと叩き込んだ。その威力はクラウンのＢ・Ｊをパージさせてなお強力であり、クラウンの胃の中身を空っぽにさせるほどの物だった。セラヴィーの鉄拳を喰らったクラウンが、桃色の砲撃で赤く溶けている地面を、抱き締めているヱヴァと共に、無様に転がっていく。

『まだまだァアアア！』

『ＧＮキャノン？、モード：ガトリング。シュート！』

しかし、まだ終わりではない。白い悪魔がこの程度で終わらせるはずがない。セラヴィーは地面を転がり続けるクラウンたちへと、ＧＮキャノン？を再び向け、その砲口から桃色の光りを放った。何発も何十発も、視界が爆煙で見えなくなるまで撃ち続ける。

「う、うぅ……マジェ、スタ……マジェス、タァアアアッ！」

『ラ、ラウンドシールド！』

たった一発で人をゴミのように殺せるビームの砲弾が、何発も何十発も、クラウンとヱヴァに襲いかかる。それは凶悪な密度と熱量を伴いながら、クラウンとヱヴァの命を破壊しようと接近する。その桃色に染まった光景に戦慄するクラウンだったが、自身の手の中で、未だ気を失っているヱヴァを見るや否や、いきなり自身のデバイスへと、防御魔法を展開するように命じた。

彼は守りたかったのだ。十五年前に勃発した「一年戦争」で守れなかった妹――自身が殺すしかなかった、カローラの親友であった妹への、贖罪の為にも。

マジェスタはマスターのその意を汲み取り、先程セラヴィーの砲撃すら耐え抜いた防御魔法を、クラウン達の目の前、彼らと砲弾の間に瞬時に展開させた。赤紫色のミッド式魔法陣がクラウン達の前に現れる。それは砲弾が一つ二つ当たった所で、罅すら入らない程強固なものだった……が。

『甘い、甘いですよ！　エクシアのマイスター・刹那に対する愛のように！！』

『これでＣｈｅｃｋｍａｔｅにさせてもらうぞ、「血塗れの強行者」ッ！』

砲撃が放たれていた方向とは逆の、クラウン達の真後ろの方から、白い悪魔――セラヴィーが蒼碧色の粒子を放出しながらクラウン達に接近してきた。セラヴィーはよく鈍重だと思われているが、そんなことはなく、寧ろ、航空魔導師としても十分すぎるほどの速度を有しているのだ。それに加え、ヴェーダによる「先見」に限りなく近い戦闘予測。それら二つが合わさることで、セラヴィーは先程からクラウンたちの数手先を行動しているのだ。

「な……！」

『しまっ、マス』

「う、……ん？　私、どうし」

セラヴィーの五門ある砲口が、その全てに桃色の光りを宿した。
全てを破壊し、この世の理をも破壊しようとするモノの、避ける事も防ぐ事もできない悪魔の一撃。それが今、クラウンたちへと放たれ……

「ＩＳ（アイエス）――光禍の嵐（レイストーム）、プリズナーボックス」

……ることは無かった。

『な――これはまさかッ!?』

『ＩＳ：レイストームッ!? という事は、まさか８番がッ!?』

何故なら、長方形に区切られた暗色の結界が、いきなりセラヴィーを囲う様に現れたからだ。しかも、それは一撃で罅（ひび）が入ったとはいえ、セラヴィーの攻撃に耐え得るだけの強度を持って展開されていた。しかし、セラヴィーが本当に驚愕したのは、それをセラヴィーに毛ほども察知されずに展開する、その隠密性の高さ、展開の速さである。

「ふう……間に合った、のかな？」

「お、お前は……何故、ここにいる……？」

『そ、そんな……どうやってミッドの刑務所から脱獄したんですかッ!?』

「……？　どうなって……」

「……あまり時間がないから、話は後でする。だから、今は何も聞

かずに、「デカブツ」を倒す事に……協力、して欲しい」

並みの結界……例えば、封時結界などのランクが低い結界程度なら、セラヴィーに察知されることなく張れるのかもしれない。だが、「ガンダム」の動力源である太陽炉から放出される、疑似を含むＧＮ粒子には、他と他を隔絶するような結界を阻害する性質があった。さすがに「Ａ・Ｆ」などのＡＡＡランクに相当するような、強力で広範囲な結界には効果が薄かったが、それでも、Ａランク程度の結界ならば、展開すらさせないだけの妨害能力があった。

しかし、そのＧＮ粒子が蔓延（まんえん）するこの場所で、しかも展開までに恐らくそれほど時間をかけていないにも関わらず、セラヴィーに察知されないまま、その攻撃に耐えるだけの強度をもったまま展開された結界。それはもうＡＡＡランクに相当するだけの結界――大結界と呼んでも差支えの無い物だった。

そのＡＡＡランクに相当しそうなほどの高度な結界を作り出した、薄いボディースーツを着ているにも関わらず、男か女か分からない程度のおぱ～いしか持っていないボーイッシュな女性は、眠たげな目蓋（まぶた）のまま、静かにクラウンたちに協力を申し込んでいた。

「いっけぇーーーー！」
『電刃衝』
「ま、待て！　お前は一体、何モノなんだ！？　「ＣＢ」なのか！？　なら、どうしてお前はフェイトと同じ格好……クッ、Ｓ２Ｕ！」
『スティンガースナイプ』

天上から降りてきた雷刃はクロノの話など聞かずに、自身がカッコいいと思っているポーズを取りながら、金色に光る雷の槍を、闇に近くなってきた空に浮かぶクロノへと、幾つも射出した。その話を全く聞きそうにない様子に頭を抱えそうになるも、今は戦闘中だと自身に言い聞かせ、冷静に殺傷魔法から非殺傷魔法に設定して、青い魔力弾を迎撃に用いるクロノ。

「クソッ……！　何なんだ、お前達はッ！？」

何時でも冷静沈着であるはずのクロノが、その内心を困惑と疑問でグチャグチャにしながら、目の前の義妹にそっくりな雷刃へと、そう尋ねた。お前は何モノかと、お前は一体何なのかと。

「……なッ、おぼえてないだってッ！？　ふざけるな！！」

しかし、それは雷刃の神経を逆なでする以外の何物でもなかった。雷刃は目に憤怒を灯しながら、青紫色に染まったバルディッシュそっくりのデバイス――バルニフィカスを、クロノへと突き付ける。

「僕達に罪を着せて、そのまま封じたのは、お前らだろう！？　バルニフィカス、電刃衝っ！」
『ターン』
「僕達を封じた、だと！？　何の事だッ！？」
『スナイプショット』

雷刃の周囲から雷の槍が、スフィアの中で回転し、進行方向を変えながら、クロノへと射出された。それを撃ち落とす為、スティンガースナイプの速度を上げるクロノ。金色の槍と青い魔力弾は一進一退を繰り返しながら、夕暮れの空に金色と青の軌跡を描いていく。そしてその美しい軌跡の中を、雷の鎌と氷結の杖が火花を散らしながら激突し合う。

そんな神話の如き戦いにあって、クロノは、アルケー戦とは比べ物にならないほど焦っていた。その証拠に、彼の顔は冷や汗塗れとなっていて、とても余裕があるようには見えない。雷刃の一撃がクロノの目の前にまで迫る度に、クロノから噴き出す冷や汗が、その量を増やしていく。

「（クッ……！　まるで十年前のフェイトに攻撃されているみたいだ！）デュランダル、スティンガーレイ！」
『スティンガーレイ』
「そんな物なんかにぃーー！」
『電光石火』

雷刃がクロノの放った狙いも威力も甘い直射型の射撃魔法を、高速魔法で軽々と回避する。そしてその速度のまま、クロノとの距離を一気に詰めると、両手で持ったバルニフィカスを真横に振り払った。

「ラウンドシールド！」
『ラウンドシールド』

その攻撃を防ぐために、デュランダルの先からミッド式の魔法陣の形をした魔法障壁を発生させるクロノ。それは青い光を放ちなが

ら、雷光を放つ雷の鎌の一撃を、その空間に押し止める。

「そ、そんなぁ～！」

『ドントワーリー、サー』

雷刃の残念そうな声が、クロノの耳にも届いた。どうやら雷刃はこの一撃で決めるつもりだったらしい。先程まで元気に跳ねていた青いツインテールが若干しおれて、目が涙目になっている。その姿を見たクロノは、心に言い様のない感動（萌え）を感じながら、シールド越しに、雷刃へと話しかけてみた。

「……「僕達を封じた」、とか言ったな？　それはどういう事だ？」

「むっ、惚けようったってそうはいかせないよ！　十年前に僕達を封じた君達の顔を、この強くて凄くてカッコいい僕が忘れるとでも思ったか、クロノなんたらッ！」

「少なくとも、名前は忘れているな」

「う……そ、そんなの！　むずかしい名前の奴の方が、悪いに決まっているじゃないかー！」

「……あ、あぁ、そうだな」

「ふん、分かったかクロノなんたら！　僕は決してバカじゃないんだぞ！　そりゃ星光や王にはいっつもバカにされているけど、僕だって力を司どるマテリアルなんだッ！　とっても強くて凄くてカッコいいんだぞ、僕はー！」

雷刃は自分が機密情報に値するような事を口走っているなど、微塵たりとも思ってはいなかった。彼女はただ相手に自分の凄さを分かってほしい為だけに喋っているのだ。クロノはそれを複雑な表情のまま、その一言一言を、脳内に刻みつけていく。……あぁ、フェイトがこんなアホじゃなくてよかったと、そう思いながら。

「それに、僕のマスターだって、僕と同じくらい凄いんだぞ!?　何てったって、僕達を生み出した「闇の書の闇」の構築者にして、「夜天の書」のオリジナルにもなったあの……ってあぁッ!?　これってしゃべっちゃいけないじょうほうなんだっけ!?　ふう、危ない危ない……口が堅い僕にここまでしゃべらせるなんて、クロノなんたら、やるじゃないか……！」

「お前が勝手に喋ったんだろうが!?　そんなに突っ込まれたいのか、お前は!?」

雷刃は額を拭う仕草をしながら、バルニフィカスを一旦シールドから離し、油断なく構えなおした。どうやら強敵だと判断したらしい。寧ろ、最初の方にこそ、そのぐらい真剣になるべきだったのでは？　と、クロノは思ったが、それを忠告してやるほど、彼は甘くは無い。それに、今は彼自身も余裕をなくしていたのだ。雷刃によって齎された、信じがたい情報を聞いて。

（こいつは今、何て言った？　「闇の書の闇」の構築者？　「夜天の書」のオリジナル？）

あまりの情報に、頭がクラクラとしてきたクロノ。しかし、世界はそれでも一個人の事情などを顧みずに、時を強引に進ませる。クロノが一瞬だけ茫然自失となったその隙を狙って、雷刃とクロノの間に、

「私たちの事を、忘れてるんじゃないわよォオオオッ！！」

『ヒッハァアアアッ！　お忘れモノにはご用心、てなァアアアアッ！』

突然、赤き異形が割り込んできた。そして反応が遅れているクロノへと、ＧＮバスターソードを振り下ろすアルケー。しかし、クロ

ノはそれに驚きこそすれ、それでも冷静に対処する。

「お前の攻撃は、お粗末なんッ！？」

一歩分だけ前に飛んぶことでアルケーの横を抜け、ＧＮバスターソードをやり過ごすクロノ。が、そのかわした先には、雷の鎌がクロノを待ち構えていた。雷刃の鎌はクロノの命を刈るべく、その金色の刃をクロノの首元へと近づけさせる。

その金色の刃を見たクロノは、もう我慢ならなかった。義妹の姿で殺傷魔法を使用する雷刃にも、笑いながら人を殺そうとするアルケーにも……何よりも、その二人と同じく、人を殺そうとしていた自分へと、彼はぶつけようのない怒りを抱き……遂には、爆発させた。

「いい加減に……」

『スティンガーランス』

「しろッ！」

『ブレイズキャノン』

クロノはデュランダルの先端に五十センチばかりの青い魔力槍を生成させると、まずはＳ２Ｕのブレイズキャノンでもって、後ろにいたアルケーを、さらに後方へと押し飛ばした。そして砲撃を撃った反動すら味方に付けて、雷刃の鎌をデュランダルの蒼い魔力槍で受けとめる。魔力不足による威力不足は、反動を味方につけたことで解消し、何とか押し返されずに、硬直状態へと持ち込む事に成功したクロノ。冷たい青い魔力と熱い金色の魔力が周囲を明るく照らし、大気を爆ぜさせながら上空を青金に染めていく。

その大空を染めていく過程の中途、クロノと雷刃が鍔迫り合いを

している最中に、あろうことか、雷刃はクロノの先程の、洗練され、かつ無駄のない動きに、つい目を輝かせてしまっていた。

「なッ！　か、カッコいい……！　って、そんなぁーーッ！？」

そして、クロノが雷刃のその大きな隙を逃すはずもなく、雷刃の薄いＢ・Ｊへと、魔力で筋力強化したミドルキックを叩き込んだ。その素早い攻撃にシールドすら張れなかった雷刃が、夕暮れの空を勢い良く飛んでいき、雷光の残像を空に残していく。

「デュランダル、Ｓ２Ｕ！　ブレイズ＆スティンガー！」

『『イエス、ボス』』

吹き飛んでいった雷刃は、自身の体が地面に衝突することで、何とかその空の滑空を終える事ができた。雷刃が衝突した場所はその衝撃により数メートル近く円状に砕かれていた。しかし、雷刃はそんな惨状に気付く事すらできない。何故なら、雷刃の胸部と腹部は、クロノの蹴りにより、甚大なダメージを負わされたからだ。

「……ッッ！！？？」

『サーッ！？』

雷刃がその大き過ぎるダメージに、声すら出せずに体を胎児のように丸ませた。クロノの蹴りは雷刃の肋骨を何本かへし折り、内臓にも甚大なダメージを負わせたのだ。少量の吐血が雷刃の口から洩れ、瑞々しい唇から形の整った顎の先までに、一筋の赤い線を引いていく。

しかし、そんな瀕死に近い雷刃を見ても、クロノはまだ攻撃の手を緩める気など、毛頭なかった。彼女は間違いなく「ＣＢ」の一員、

それもユーノ・スクライアの報告にあった「コード―６６６」の基地を壊滅させた魔導師だろうと、そうクロノは当たりを付けていたからだ。そんな凶悪な魔導師が、果たして、こんな蹴り一発でやられるだろうか？　否、そんなはずはない！

「フェイトに似ているからといって、僕が攻撃の手を緩ませるとでも思ったか？　もしそう思っていたんなら……残念だったな」

『スティンガーブレイド・エクスキューションシフト』

『ブレイズキャノン』

『『スタンバイレディ』』

油断も慢心もしていないクロノのその呟きの合間に、数十ものスティンガーブレイドがクロノの周囲に形成されていく。そして、デュランダルの先端には、辺りを冷たくする青い魔力光が灯されていった。

「お前はここで、リタイアだ！　デュランダル、Ｓ２Ｕ、ゴーッ！」

『『ゴー、シュート』』

それら二つの魔法を制御しつつ、クロノは二つのデバイスの矛先を、雷刃が蹲（うずくま）っているであろう場所に向けた。しかし、向けた先は雷刃が衝突したせいで舞い上がった土埃によって、狙いがとても付けられそうになかった。が、それすらもお構いなしに、クロノは魔力光と魔法陣を青く輝かせながら、それら二つの魔法を一斉に雷刃へと発射した。

ドドドドドドドドドドドドォオオオオオオオンッ！！

雷刃が衝突した時よりも数倍は派手な土埃が、橙の空を茶色に染めていく。青い魔力光が光る度に、破壊の衝撃が大地を砕いていき、

その嘆きの声を世界に振るわせていく。その地獄にも近い光景を見ながら、クロノは何時もはしない安堵の溜息を吐いた。いくら冷静沈着で型物なクロノといえど、やはり義妹の姿に似た相手との命のやり取りは、些か以上に神経が削れる物だったらしい。そしてもう一度、クロノは大きく安堵の溜息を吐き……同時に、前へと吹っ飛んでいった。

「……え？」

クロノの視界が、上下左右グチャグチャになっていき、今、自分がどこにいるのかすらも分からなくなっていく。背中が猛烈に熱くて、口からは少量の吐血が流れていた。しかし、そんな自身の惨状にすら気付かずに、クロノは二百メートル以上もの高空の中を、地面に向かって一直線に、前へと進んでいく。

「な、めんじゃない、わよ……！」

『まだまだまだ……お・わ・ら・ないゼェエエエエッ！』

怨嗟（えんさ）の声が、夕暮れ時の空を木の葉の様に舞うクロノの耳に聞こえた。しかし、どこから聞こえてくるのか、までは分からない。今自分がどうなっているのか、今自分が何処にいるのかも分からないクロノには、何も分からなかった。

「ふ、ふふ……ふふふふ……ぁあッッッハハハハハーーーーッ！！」

今度はヒステリック気味な笑い声が、クロノの耳を打つ。しかし、どこから聞こえてくるかまでは、やはり分からなかった。意識が次第に遠のいていくのを感じるクロノ。

これはクロノが知らなかった事だが、クロノの背後には、傷だらけとなったアルケーが砕けた大地の上に立っていたのだ。そして、アルケーは自分に気が付いていないクロノへと、ＧＮバスターソードを渾身（こんしん）の力でぶん投げたのだ。それは気を緩めていたクロノの背中に見事に直撃し、Ｂ・Ｊまでは貫けなかったが、そのぶつかった衝撃で、クロノを遥か前方にまで突き飛ばしたのだ。そしてネーナはその投げた姿勢のまま、ヒステリックな声で狂笑していたのである。

そんな現状を知らないクロノは、自分の今の現状を正しく理解しないまま、勝ったと思って油断していた自分を激しく責めていた。そして、同時にいつもの口癖も洩らす。あぁ、本当にこの世界は、こんなはずじゃあないことばか……り……

「……」

突然の衝撃により、意識を失ったクロノが、遥か上空から地へと墜ちていく。彼のトレードマークでもあった真っ黒なＢ・Ｊが風にはためき、バサバサと音を立てた。しかし、幾らＢ・Ｊがあるとしても、さすがにこの高度から墜ちたのでは、とても助からないだろう。それが分かっているからこそ、ネーナは機体が限界に近いにも関わらず、ヒステリックな声で狂笑していたのだ。

あぁ、本当にこの世界は、こんなはずじゃない事ばかりだ。

「クロノ・ハラオウン提督との合流に成功しました。しかし、提督は重傷を負っています。こんな時、私はどうすればいいんでしょうか、オットー？」

あちこちから煙が上がる岩山で、ケルディム必殺の一撃が、シャッハとヴェロッサがいた場所を、寸分違わずに撃ち抜いた。その場所からも、周囲と同じく、爆炎が上がっていく。その経過を見ながらケルディムは、さすがに決まっただろうと思いつつも、銃を構える事を止めなかった。ロックオンの見間違えでなければ、確かに今、敵の二人が……

『……なあ、ケルディム。気のせい……だと思うか？』

『……何とも言えないが、恐らく、マイスターの考えている通りだろう』

『オレの考えている通りってことは……』

『ああ、その通りだ』

油断なく辺りを見渡し、高度をさらに上げるケルディム。その様は何かに警戒しているようであり、もしくは何かを捜しているようでもあった。しかし、シャッハとヴェロッサは確実に死んだはずだ。

あの攻撃から逃れ得ぬ事は、間違いようのない事実なのだから。

『……来るぞ！』

『うおッ！？』

しかし、その厳然たる事実に反し、ヴェロッサ・アコースのレアスキルで生み出されるはずの猟犬が二匹、地面の中からケルディムに向かって飛び出してきた。ケルディムはさすがに地面の中まではサーチしていなかった為、反応が若干遅れてしまう。その遅れを利用し、猟犬がケルディムの両手に握られているＧＮビームピストル？に噛みついて、その自由を奪った。

「うぉおおおおッ！　ヴィンデルシャフトッ！」

『烈風一迅（れっぷういちじん）』

そして、ケルディムが両手の自由を失うのと同時に、肩口近くまで吹き飛んだ左腕と、脛まで無くなった右足を衣服の間から露出しながら、シャッハ・ヌエラがケルディムのいる高度まで、猟犬を足場にして接近した。ケルディムは未だ猟犬に両手を噛まれており、シャッハを狙い撃つ事ができないでいる。その千載一遇（せんざいいちぐう）とも言えるチャンスに、シャッハは残存ずる魔力の殆（ほぼ）どを込めた一撃を、回避行動すら儘（まま）ならないケルディムに叩き込むッ！

『ちっ、やっぱり生きてたのかよぉおおおお！？』

シャッハのトンファー型アームドデバイス「ヴィンデルシャフト」が、ケルディムのＶ字アンテナの真ん中にあるガンカメラに、鈍い金属音を出しながらめり込んだ。いくら「ガンダム」が常識外れの装甲を持っていたとしても、さすがにカメラまではカバーし切れなかったようだ。ヴィンデルシャフトがガンカメラにめり込んだ事で、

カメラそのものが歪み、重要な内線も露出してしまって、遂には、その機能すらも停止してしまう。

『まさか、最初からガンカメラを狙っていたのか！？　いや、そもそも、どうして生きているのだ、彼奴等はッ！？』

「ガンダム」の管制人格の中で、最も冷静であるはずのケルディムですら、この一瞬で起こった出来事、必殺の一撃を避けられた事、またガンカメラをピンポイントで破壊された事に、冷静を失わずにはいられなかった。無論、それはマイスターであるロックオンも同じ事だった。彼らには何が起きたのか、予想すらつかない。

だが、そんな葛藤をしている間にも、ケルディムはシャッハの一撃で地面へと急速に近づいていった。頭上から渾身の烈風一迅を喰らったのだ。このままでは、いくらケルディムといえども、ある程度の損傷を覚悟しなければならない。

『っておい！？　もうすぐ地面に叩きつけられるぞ！？』

『……む、しまった。考えに没頭していて、気がつかなかった』

ギリギリ、本当にギリギリの所で、ケルディムの降下が止まった。ケルディムと地面との間は、僅か数十センチしか空いていない。それに冷や汗が出そうになるロックオンへと、直径十センチばかりの手榴弾……と思われるモノが、地面の中から投げられた。

『……は？』

『カイヒフノウ、カイヒフノウ』

呆けた顔になるロックオン。彼には何が起こっているのか、まだ理解できなかった。そんな彼へとスローモーションのように迫る手

榴弾。それはケルディムのすぐ側の地面に落ちると、

ドンッ！

と、大きさに見合わない爆発と爆音でもって、ケルディムを数十メートル近くも吹き飛ばし、その先にあった大きな岩塊（がんかい）へと叩き付けた。ロックオンの視界が一瞬で警告欄（けいこくらん）によって赤くなるが、それに構う暇すら、ロックオンとケルディムには残されていなかった。

『……なあ、ケルディム。もう一回言うが、気のせい……だと思うか？』

『……恐らく、マイスターの考えている通りだろう。実際、こんな事ができる魔導師、いや、戦闘機人を、私達は知っているのだからな』

『つうことは、アレか？　またオレ達と相性最悪な奴が出てきたっつう事か？』

『……頷きたくは無いが、その通り……なんだろうな』

ズルリっと、ケルディムが岩塊から滑り落ち、地面に尻餅をついた。両手に噛みついていた猟犬は、さっきの爆発で吹き飛んだらしい。久方ぶりに自由となった両手を使って、ケルディムはすぐにその場で立ち上がった。オーバーSランク魔導師すら殺せる「ガンダム」がこんな無様な姿を、何時までも晒しているわけにはいかないからだ。

『しっかし、まさか「ナンバーズ（十二の最高傑作機）」がもう駆りだされているなんてな……驚きで、口が閉じれねえよケルディム……』

『イエス、マイスター。私自身も常にない驚きを感じている。しかも、よりにもよって無機物潜行（ディープダイバー）というISを発現させた「潜行する密偵」セインだとは……運命は、各も私達を苦しめたいと見る』

『ま、泣き言は言ってもしゃあねえか』

体のあちこちからショートの火花を散らすケルディム。先程の一撃で、ケルディムはかなりの損傷を、体の内部に抱えたのだ。そんなケルディムの前に、空から猟犬を使って降りてきたシャッハと、地面の中から現れたセインとヴェロッサが、三人並んで立つ。

「へぇ～、これが「ガンダム」なんだ。……パッと見、もう虫の息だけど、油断はできそうにないね」

「ああ。油断した瞬間に死ぬと思え、セインとやら」

「全く……本当に大変な相手だよ、「ガンダム」は」

青い戦闘用スーツを着、手に手榴弾等を握るセイン。右足左腕に止血用の魔法をかけながら、再び解除していたＢ・Ｊを纏うシャッハ。白いスーツを煤けた色合いにしながら、それでもアルカイックスマイルを崩さないヴェロッサ。

『逆に言えば、ここでこいつらを狙い撃てば、オレたちの天敵は一気にいなくなるってこった！　行くぜケルディム、トランザムッ！！』

『イエス、マイスター。ＴＲＡＮＳ－ＡＭ』

そして、天使の権能を発動させ、全身を紅く輝かせるケルディムが、右手にＧＮスナイパーライフルを、左手にＧＮビームピストル？を握り、その銃口を目の前にいる三人に向けた。

それを合図にして、三人と一機は、熾烈な死闘を再び……始めた。

その死闘の先に、何があるのかも知らず……けれど、仲間の為、義姉の為、姉妹の為、そして……家族の為に戦うという意思だけは

曲げずに、彼らは死闘を繰り広げていく。

そう、この時までは……

【そりゃあ俺だって死ぬのは怖いさ。正直、逃げ出したくなることもある。だけどよ、命をかけても絶対に譲れないことってあると思うんだ】

――アストレア様から、『フルメタル・パニック！』のクルツ・ウェーバーより

第４１話　誰が為に戦い、誰が為に鐘は鳴る？　≪後篇？≫（後書き）

絶対前書きの格言で「ナンバーズ」が来るの分かっちゃうだろうなと思いました。作者からは以上です。さあ、後はエクシアから逃走あるｎ「見ィ～付けましたよ、駄・目・作・者？　今回も刹エク、どころかマイスターのマの字もないって、どういう事ですか？　答え様によっては全殺しでギリギリ許しますし、逆に黙っていれば……駆逐、しちゃいますよ？」

やっぱり今回も駄目だったよ……ここまで読んで下さった皆様には感謝を！

最後に。

次は１１月１１日（木）に投稿します。ストックは見事なまでに０ですが、プロットはあるので、「大丈夫だ、問題ない」

第４２話　誰が為に戦い、誰が為に鐘は鳴る？　≪後篇？≫（前書き）

【例え意見が対立していようが、対話は実現する。対立する相手の夢や信念を認めたうえで、自らの夢や信念のためにそれを否定をする。それが対話であり、人と向き合うということである】

――小梔子様より

第４２話　誰が為に戦い、誰が為に鐘は鳴る？　≪後篇？≫

――新暦７５年１１月１５日――

『協力？　協力ですって？　私達管理局と敵対していたあなたと？　寝言は寝てから言って……』

「……分かった、お前がどうしてここに来れたのかは、今は聞かないでおこう。……力を、貸してくれないか、「ナンバーズ」（十二の最高傑作機）？」

『マスター！？』

「マジェスタ、お前も分かっているはずだ。今のオレ達では、「デカブツ」を倒せない事を。そして、ここでこいつを倒さなければ、一体どれだけの人々が悲しむことか……お前なら、分かっているはずだ」

『……それでも、私は……！』

「……私も、聖王様を蔑ろにした一味とは、手を組みたくはありません」

夜に近い時間帯の中で、第３２管理世界の中央都市「オレンジ」の東に位置する草原の緑が、戦火の赤い炎により焼失し、その姿を焔の地獄と化していた。そんな地獄の中を、二人の人間と一機の戦闘機人が、共に、目の前の白い悪魔――セラヴィーを油断なく見据えながら、協定を結ぼうとしていた。

しかし、知っての通り、時空管理局と聖王教会はジェイル・スカリエッティと敵対していて、そこには決して浅くは無い溝が存在している。実際、監獄に十五年近くもいたクラウン＝ガバレートならともかく、「Ｊ・Ｓ事件」後に特注で造られたインテリジェントデバイスであるマジェスタや、聖王教会の騎士であるヌヴァ＝Ｒ＝Ａには、未だ「スカリエッティやガジェット、そして「ナンバーズ」

は敵である」という認識が、先入観が、根強く残っていた。

『さて……協力すると思うか、セラヴィー？』

『もし彼らが、私達が望む人類の在り方を肯定してくれるのなら、協力はするでしょう。もしくは、打算と割り切りって共通の敵である私達に挑むか……』

『だが、打算と割り切ったとしても、その先には破滅しかない。分かり合えない人類が滅びに向かうのと同様にな。だからこそ、彼らは共通の敵である僕達と戦う為にも、まずは分かり合えなくてはならない』

『……できると、思いますか、マイスター？』

『できなければ、彼らは僕達に殺されるだけだ』

その葛藤の様子を見つめているセラヴィーは、「ナンバーズ」のＮｏ．８、「閃光の術士」オットーが作った大結界の中で、指一本も動かすことなく、ジッとしていた。その不気味なまでの静かさに、うすら寒いモノを感じたオットー。

「……確かに、僕達は「ナンバーズ」、スカリエッティの娘ともいえる存在で、しかも「Ｊ・Ｓ事件」を起こした大犯罪者たちだ。でも、今は違う。今はただＤｒ．の、そして姉さんたちの暴走を、凶行を食い止める為に、ここにいる」

その寒気に急かされるように、心からの言葉を次々と紡いでいく、無口なはずのオットー。しかし、その精神誠意を込めた言葉ですら、マジェスタの声から疑惑を、ヱヴァの表情からは不信を取り除くことが、どうしてもできなかった。

それも当然だろう。一体誰が、世界を壊そうとしていた大犯罪者の娘を信じるのだろうか？　しかも、「聖王」という、聖王教会に

属するモノにとって、神にも等しき存在を利用した犯罪者どもを、一体どうすれば信じられるというのか？

「私からも頼む、マジェスタ、騎士殿……！」

『……マスター』

「……」

だが、そんな誰もがしない事をする超ド級のお人好しが、ここに一人だけいた。灰色の髪と浅朱色の瞳を持つ、監獄に十五年以上入っていた35歳の屈強な艦長補佐、クラウン＝ガバレートである。彼は十五年前の「一年戦争」にて自身の妹――彼と同じくオーバーSランク魔導師であった――を殺害した事に対する罪悪感から、「その人生の全ては唯贖罪の為だけにある」のだ。故に、彼は今まで大人しく監獄で罰を受け、今も対「ガンダム」魔導師として「ガンダム」と戦い、その罪に対する贖罪を行っていた。

そんな彼だからこそ、人の望み、例えそれが純粋な意味での人でなかろうとも、彼はその望みを叶えなければならない。何故なら、その望みを叶える事こそが贖罪だと、彼はそう信じていたからだ。

監獄にいることは、当時の管理局が望んでいた事だった。

対「ガンダム」魔導師になることは、現在の管理局が望んでいた事だった。

だからクラウンは、その望みを聞き、そして叶えようとした。その結果が十五年にも及ぶ監獄生活で、かつ「デカブツ」との戦闘だったが、それでもクラウンには、唯一つの後悔すらない。彼はそれを贖罪と盲信していたからだ。

人はそれを「偽善」と呼ぶのかもしれない。だが、クラウンはそれを歴とした「善」だと信じていた。例えクロノ・ハラオウンが数回の模擬戦で、クラウンのその「危なさ」に気付き、警告を発していたとしても、最早彼は確固たる自分を形成し終え、転換の事など一切考えてはいない強行者だ。故に、彼は彼の信じた道を、ただ進むだけだった。

『……マスター。私は貴方の経歴を知っています。勿論、その人の良さも。そんな貴方だからこそ、私は貴方と共に戦いたいと、歩みたいと、そう思ったんです。でも、幾ら緊急事態とはいえ、やはり「ナンバーズ」と組むというのは、納得できません！』

「……貴方には、命を助けて貰った恩があります……が、それとこれは別です。もし貴方が「ナンバーズ」と共に戦うというのであれば、私は一人で「デカブツ」と戦うでしょう」

しかし、その常人の道を踏み違えたクラウンの言葉は、二人の女性（？）から速攻で否定された。いくらクラウンを気に入っているとはいえ、やはりかつての敵と共闘するというのは、マジェスタの合理的思考では納得できない。いくらクラウンに命を助けてもらったとはいえ、それで聖王様を傀儡（くぐつ）にした一味と共闘するというのは、聖王教会の騎士として、絶対にできない。

『やはり分かり合うのは、難しいか……』

『しかし、だからこそ、「ガンダム」という力を持つ私達がやるしかないのです、マイスター』

『ああ、分かっている……分かっているさ、セラヴィー。例え世界から拒絶されようとも、僕達は「悪」を、「悪魔」を演じ続けなければならない。……それが刹那との、そしてアイ＝フォートレスとの……誓いだ！』

クラウンとヱヴァ、そしてオットーが協定を結べずにいる事に、少々の失望を感じながら、セラヴィーはオットーの罅が入っているプリズナーボックスに両手を突っ込ませた。それにオットーが警戒を強くする中、そんな彼女の目の前で、セラヴィーは信じられない事を仕出かした。

『ふんッ！』

「な……ッ！？」

無表情さでは「ナンバーズ」の中でも2，3を争うオットーの目が、驚愕により見開いた。見れば、オットーの強固な結界は、セラヴィーの非常識な怪力により、その巨体を通せるほどの裂け目を、セラヴィーの目の前に晒していた。セラヴィーはオットーの結界を、両手を左右に広げるだけで、ほぼ完全に破ったのだ。

『さて……どうする、セラヴィー？』

『私達がすべき最優先事項は、この世界の聖王教会中央教堂の地下に放置されていた、コーナー家の「ラグランジュ６」の破壊です。ですので、まずはそれを成すべきかと……』

セラヴィーが一歩、結界の外に出た。それだけだ。それ以外の何かをしたわけではない。

しかし、そのたった一歩を踏み出しただけで、オットーたちの世界は酷く冷たくなった。まるで巨象と蟻の戦いをするかのような絶望感が、オットーたちの間に広がる。

『……そうか、分かった。なら、まずは魔導……何、熱源反応？』

『これは……ケルディムのＧＮスナイパーライフル？？　しかし、どうして今頃になって……？』

だが、その絶望感を知っていたにも関わらず、セラヴィーは岩山の方から飛んできた太い桃色の光線をじっと見つめていた。困惑した様子がオットーたちにも分かる。分かるが……何故困惑しているのだ、「デカブツ」は？　あの攻撃はどう見ても「三つ目」の攻撃だというのに……？

と、オットーたちが訝しんでいる間に、ケルディムから放たれたであろう光線が、民間人も含めた非戦闘員しかいない聖王教会中央教堂へと吸い込まれるように進み、そして死を量産する赤黒い爆発を……そこに齎した。

「……まずはこの場から退避、ですね」

茶色の長髪を空になびかせながら、「ナンバーズ」がＮｏ．１２、「瞬殺の双剣士」ディードが、気を失ったクロノを抱えたまま瞬間加速をし、その戦場から退避しようとした。クロノは外傷こそそれほど酷くは無かったが、内臓と肋骨を痛めているらしく、口からは未だ血が流れている。それに何の感傷も抱かずに、暗くなっていく空を駆けるディード。

「……は、はは……」

その後ろ姿を見送る形となった、半壊しているアルケー、いやネーナは、つい口から笑いを洩らしてしまった。それは失笑か苦笑か……否、そんな優しいものではない。

「はははは……」

彼女はこの世の理不尽――尽く復讐が達成できないこの世界に対し、大きく嗤ったのである。無論、自分も世界から大いに哂われていることを自覚しながら。

「あはははははっはははははははははははあああああッ！！」

笑いが止まらない。世界はどうしてこうも自分に辛く当たるのか？　これでは、あまりにも理不尽なのではないか？　不平等だ、差別だ、不幸だ……

「はははははっはははぁ……ぁぁあああああああああッ！！」

そして彼女は、真の復讐者へと、その身を堕とす。

『アァルケェエエエエッ！』

『ノー、マイスター！　損傷が酷過ぎて、ヤークトには換装不可だッ！　使える武装はＧＮバスターソードだけだぜ、ヒャッハーー！』

『十分過ぎるわよ！』

赤い異形が、四つある目を禍々しく光らせながら獰猛（どうもう）に笑った…
…ように見えた。それは狩るモノの笑み、一方的な殺戮を肯定したモノのみが浮かべられる表情……だったように、そうディードには見えた。そしてその表情を浮かべたまま、アルケーはＧＮバスターソードを右手に握りつつ空に浮くと、そのままディードを追おうと、加速を始める。

『まぁああちなさいよ、人形！』

「……アンノウンが接近を開始しました。しかし、この速度では此方に追い付く事は不可能……」

しかし、どんなにアルケーが加速しても、ディードには一向に追い付けなかった。寧ろその距離はドンドン離れていく一方で、すでにディードの後ろ姿は豆粒と同等ぐらいにしか見えない。だが、そんな状況の中で、復讐の狂気に取り込まれたネーナもまた、一向に諦めようとはしなかった。

それもそうだ。今の彼女は独りではない。今の彼女の様に復讐に取り込まれた狂鬼は、もう一人いる……！

「バルニフィカスゥーー！」

『電光石火』

「えッ！？」

『いっきなさいよ、アップルの隠し玉とやら！』

額から血を流し、黒いＢ・Ｊがボロボロとなり、青紫色の戦斧も所々がショートしている。にも関わらず、雷刃は片目を瞑りながらも、真後ろからディードに追い縋（すが）ってきた。その眼には既に無邪気さなど欠片もなく、復讐と言う名の狂気に駆られているように見え

る。その純然たる殺意を秘めた瞳を間近で見たディードの背に、言い難い悪寒が奔った。

「まだ、僕は終わってなんかいない！　僕は、僕達だけにつみを全部着せて、それで「危険だから」なんていう下らない理由で僕達を封じ、破壊した奴らにふくしゅうをとげるまでは、絶対に……絶対に、死なないんだ！」

『イエス・サー』

「だから僕は、まずはクロノ・ハラオウンを……倒す！　「深淵存在（マテリアルズ）」が「力」のマテリアルL、雷刃の襲撃者としてッ！！　……だから、じゃまをするなーー！！」

『光鎌斬（こうれんざん）』

「……クッ！」

目を殺意でギラつかせる雷刃が、バルニフィカスをハーケンフォームに変形させ、雷の鎌を形成すると、それをディードの真後ろに鋭く振り下ろした。その一撃を防ぐため、雷刃の正面に向き直り、後方に飛び続けながら二本の赤い光剣、「ツインブレイズ」の一本を左手に持つディード。右手はクロノを抱えている為、使う事ができないのだ。

「バルニフィカスゥーー！」

『カートリッジロード、光雷斬（こうらいざん）』

しかし、雷刃の一撃は速度＋カートリッジ＋魔法強化を受けており、難なくディードを自身の前方、ディードの後方へと吹き飛ばした。ディードの顔がその凄まじい威力に歪み、左手がビリビリと痺れる。

「（何て威力なんでしょう……しかし！）ツインブレイズ！」

「なっ！？」
『サー！？』

その痺れた左手からツインブレイズの一本を落としそうになりながら、それでもディードは雷刃に構わずに、瞬間加速をしてその場から退避しようとした。何故なら、ディードでは決して勝てないであろうアルケーが、はっきりと視認できるくらいにまで近づいてきていたからだ。

「ま、まてーー！　勝負しろーー！　逃げるなーー！　戦えーー！」
「……そんな事をしていたら、アンノウンに追い付かれますので、拒否します」
「って、ちょっと待ちなさいよーー！　あとちょっとなのにーー！！」

雷刃とネ―ナの遠吠えが、ディードの背後からおどろおどろしく聞こえてくる。しかし、感情が希薄なディードには、その恐ろしい声ですら、なんの効果も示す事ができない。

「では副艦長、転送、お願いします」
『了解しました。これから転送を開始しますので、その場から動かないで下さいね？』
「了解」

そして、ディードが雷刃とアルケーから逃げながら、ＧＮ粒子が散布されていない地点にまで到達すると、すぐさま衛星軌道上にあるクラウディアへと、クロノと一緒に転送された。

つまり、アルケーと雷刃は一度もディードに追い付く事ができないまま、双方の復讐相手を逃すこととなったのだ。

「お前は一体何をしに来たのよ、アホの子ーー！」
「あ、アホの子言うなーー！」

溢れだしそうな憎悪をギリギリの線で抑え込み、互いが互いを貶し合いながら、一人と一つは岩山の頂上付近にある彼らの補給船へと戻っていった。その顔はどちらも泣く寸前の表情であったと、後にミレイナがそう証言した。

『ケルディム！』
『ああ！』
『ネライウッ、ネライウ……ッ！』
「うえええッ！？　何この動き！？」
「まだこれだけ動けるのか！？」
「でも、大分鈍ってきていますよ！　行け、猟犬！」

セインの背後にあった岩塊が一撃で爆散した。シャッハの足元が高熱で撃ち抜かれ、赤く溶けた。無限の猟犬がその尽くを消滅させられ、ヴェロッサのすぐ側を桃色の粒子ビームが掠めていく。

しかし、それでも……ケルディムがＴＲＡＮＳ－ＡＭをしてから

は、セインもシャッハもヴェロッサも、まだ一撃たりとも直撃を喰らってはいなかった。あのケルディムを相手にしてである。これは正に「奇跡」としか言いようのない戦果だろう。実際、一番驚いていたのは、ケルディムと一度戦った事があるシャッハ・ヌエラであった。

「セインとやら、それにヴェロッサ！　間違いなく「三つ目」は弱ってきている！　このまま一気に押し通すぞ！」

「「了解ッ！」」

『チィッ！　「ガンダム」を舐めんなよ、暴力シスターとその仲間ども！』

『フォロスクリーン展開、敵魔導師捕捉、行動予測開始……ケルディムの高速演算処理システム「ＨＡＲＯ」とヴェーダとのリンクに甚大なエラー発生、予測不可。原因はガンカメラの損傷だと推測。修復には１０３４秒必要、今戦闘では使えないと断定……いきなり手詰まりだな。どうする、マイスター？』

『だからどうしてお前はそんなに余裕なんだよ、ケルディムゥーー！？』

いつもならケルディムの眼前に展開される筈のフォロスクリーンが展開しない。それを見たシャッハはさらに強気に攻勢へと転じた。片腕しかないにも関わらず、その剣筋は鋭さをさらに増していき、ケルディムの防御を次第に崩していく。それを援護する猟犬とグレネード。

「うおぉおおおおッ、烈風一迅（れっぷういちじん）！」

『この野郎、調子に乗ってんじゃ……』

『致し方ないだろう、ガンカメラが壊されたのであってはな』

『お前はもっと余裕を失くしてもいいだろケルディム！？　幾らなんでも冷静すぎて、寧ろ怖いわ！　それと、万が一の為に、アレを

スタンバっておいてくれ！』

『アレをか？　だが、未だその時期では……』

『ミス，スメラギの説教とここでやられるの……どっちがいいんだ、お前は？』

『よし分かった、すぐにでも使えるよう、此方で準備しておく。くれぐれもその間に墜とされるなよ、マイスター？』

『へっ、誰に言ってんだか……オレはロックオン・ストラトス、「ＣＢ」の一員で、ケルディム「ガンダム」の……ガンダムマイスターだぁあああ！』

次第に防御を崩されていくケルディムだったが、それでもケルディムはＧＮピースピストル？でシャッハの攻撃を受け流し、ヴェロッサの猟犬をＧＮスナイパーライフル？で打ち消し、セインのグレネードを先程よりもＧＮ粒子を多く割いた装甲の防御力で防ぎ続ける。一回二回三回四回……シャッハたちの延々と続く攻撃が、ケルディムに致命傷を与えること無く、次々と終わっていく。

そうなると、今度焦るのはシャッハたちの方だ。崩れてきているとはいえ、此方の攻撃に持ち堪え続ける「三つ目」は、はっきり言って「恐怖」以外の何モノでもないのだ。その恐怖がシャッハたちの体力と精神力を湯水のように消費させ、正常な思考判断力をも奪い去っていく。

さながら、命を奪う死神のように。

「あああああ、もう焦れったい！」

「ま、待て！　それでは相手の思うつぼだぞ、セインとやら！」

「でも、こうしていても埒が明かないじゃないカ！　だったら、こっちから動こうよ！？」

「だから待てと……ええい、ヴェロッサ！　シャッハの援護に回る

ぞ！」
「はいはい、分かりましたよシャ「返事は一回だと言っただろうッ！？」はい……」

まず最初に我慢できなくなって飛び出したのは、水色の髪を肩で切り揃えたセインだった。セインは右手にグレネード、もう片手に６６口径の拳銃を持ちながら、地面に潜り、ケルディムへと近づこうとする。それを阻害したいケルディムだったが、すっかり出血が止まったシャッハとヴェロッサのコンビネーション攻撃により、手出しができない。

『ちっくしょーー！　手加減なんかしてねえのに、何で当たらねえんだよ！？』
『ガンカメラとその周辺のカメラが潰されたから、センサー及び視界が悪くなるのは当然だろう、マイスター？　それに、そんな事を言っている暇が、マイスターにはあるのか？』
『ねえに決まってるだろ、こんちくしょーー！』

そして、シャッハの烈風一迅とヴェロッサの猟犬を、態勢を仰け反らしながらギリギリで回避すると、ケルディムの背後の地面からセインのグレネードが握られている手がニュッと出てきた。

『行くよ暴力シスター！』
『暴力は余計だ！』
『いや、ピッタリだよ、シャッハには』

ドンッ！

ケルディムへと放られたグレネードが、その小ささからは想像できない程、凄まじく大きく爆発した。周囲の大きな岩塊までをも砕

き、焼き飛ばすその爆発は、地面にいて爆発の影響を完全にシャットダウンできるセインだからこそ至近距離で使えるのである。そして、この中央技術開発局が開発した新型グレネードが、その場に煉獄の炎と爆風を齎し、悪鬼の一機たるケルディムを焼失させようとする。

しかし、その程度で倒せるなら、「ガンダム」を倒すのに誰も苦労はしなかっただろう。現にケルディムは、その爆発をすぐ傍で受けても、装甲にＧＮ粒子をさらに纏わせる事で、無傷のまま乗り切っていた。

「ぷはー！　……このグレネード一発で、下手すると、民間の数百メートル級の大型船一隻を沈められる筈なんだけどなー……ま、後は任せたよ、暴力シスターにへらへら査察官ッ！」

「だから誰が暴力シスターだッ！？」

「……はは、へらへら査察官か。中々愉快なニックネームだねッ！」

だが、乗り切ったと同時に、爆煙を裂いてシャッハとヴェロッサがケルディムの目の前に進み出てきた。シャッハのヴィンデルシャフトが後ろに振り被りられる。だが、それよりも速く、爆煙という煙幕を利用した二人へと合わせられた、左右のＧＮスナイパーライフル？とＧＮピームピストル？の照準。ケルディムは煙幕を物ともしないで、二人に０，２秒で狙いを付けたのだ。カメラとセンサーが不具合を起しているというのに。

『今度こそ終わりだ、聖王教会の野郎ども！』

『これは避けられまい！』

射撃に関しては、ケルディムの右に出るモノなどいないだろう。それを証明するかの如き神業、思わず背筋に悪寒が奔るほどの魔技

だった。それはあの冷静なケルディムですら勝利を確信するほどの物だった。

実際、勝利できただろう、シャッハかヴェロッサが独りだったならば。

「無限の猟犬（ウンエントリヒ・ヤークト）！」

ケルディムが構える二つの銃口から、桃色の光が溢れ出てきた。あとは一瞬すらもなく、その光の熱量でケルディムは二人を撃ち貫き、殺害する事だろう。それは事実になる筈であり、抗いがたい現実となる……筈だった。

もしその銃口に障害物が無ければ、の話だが。

『なっ、猟犬を盾にして！？』

『如何、しまったぞマイスターッ！？』

銃口から光が放たれる。しかし、その光は銃口の前に出現した猟犬に当たり、シャッハとヴェロッサには当たらなかった。それに舌打ちしたい気持ちを抑え、すぐさま引き金を引き直そうとするロックオン。だが、如何なロックオン・ストラトスといえども、さすがにこの遅れを挽回する事は……叶わなかった。

「これで決める！　ヴィンデルシャフトォオオ！」

『カートリッジロード』

「烈風ッ！」

『一迅』

今までの戦いで右足と左腕を無くしたシャッハが、ケルディムが

引き金を引き直すよりも早く、右手に持ったアームドデバイスを、ケルディムの首の付け根へと突き込んだ。そのカートリッジで強化されたシャッハの全身全霊の一撃は、ケルディムの最も柔らかい所を突き破って、ケルディムの項（うなじ）から突き出た。

『……凄えな』

『……見事！』

ドスン、と重い音を立てて、ケルディムの頭部が、焼け焦げた灰色の地面の上に落ちる。

「……さすがは「ガンダム」、という所か……グフッ！？」

そして、シャッハの下腹部にも、ケルディムの腰部から発射されたＧＮミサイルが一発、相打ちの形で撃ち込まれ、シャッハの下半身を吹き飛ばす。

「……暴力、シスター？」

「シャ……シャッハァアアアッ！？」

ヴェロッサとセインの声が、組み合っている一人と一機を囲い、反響し合って、シャッハの鼓膜を小刻みに震わせる。その心地良い音色に安らかな笑みを浮かべるシャッハ。例え、もう下腹部から下の感覚が無くなっていたとしても、彼女の心はその時、確かに満たされていた。宿敵を討ち果たしたせいなのかどうかは……シャッハ本人にも分からなかったが。

「ああ……セインとやら、それにヴェロッサ……騎士カリムを、私の替わりに……た……の……」

ドサッ！

最後まで言い終えること無く、地面へとうつ伏せに倒れるシャッハ。その下半身からは冗談みたいな勢いで血が吹き出ており、周囲の灰色の岩塊を須らくどす黒い赤に染めていった。その光景に顔色を蒼白に変えるセインとヴェロッサ。

「「……」」

何も喋れない二人。石像のように固まってしまった二人。……そんな二人を、生気が籠っていない瞳で見上げているシャッハ。

セインは初めて触れた「死」に、とても気持ち悪いモノを感じ、吐き気を催した。

ヴェロッサは、自身の家庭教師でもあった旧知の知り合いが殺されたのを見て、心が急速に冷えていくのを感じた。

「「……え？」」

しかし、そんな二人とシャッハを嘲笑うかのように、ケルディムが再び動き出した。頭が取れているにも関わらず。

『マイスター、そろそろ撤退しなければ、援軍が到着してしまう可能性がある。……直ちに聖王教会中央教堂に狙撃を敢行すべきだ』

『……ケルディム、さっきも言った筈だが、オレはあそこを狙い撃ちたくないんだ』

『マイスターが狙い撃ちたくないのは分かる。だが、あそこを狙い撃たなければ……アニュー・リターナーがどうなるか、分からんぞ？』

『んな……！　どういう事だケルディム！？』

ケルディムの地面に落ちていた頭部がＧＮ粒子に分解され、そして尻部に装着されているケルディムの太陽炉へと吸い込まれていく。

『マイスターに自覚があろうとなかろうと、今のマイスターは「Ｃ／Ｇ」たるあの二人からすれば、立派に「ＣＢ」の規範に逆らっているのだ。故に、マイスターが離反せぬよう、あの二人はマイスターの恋慕の相手であるアニュー・リターナーを人質に取る……やもしれん。確証は無いが、「悪鬼」と「悪魔」なら十分に考えられる可能性だ』

セインとヴェロッサはその光景を見て、始めて……そう、初めて「ガンダム」という存在に対し、恐怖を抱いた。一体どうすれば、アレを壊せるのだろうか？　そんな疑問が頭に過ぎるのと同時、セインとヴェロッサはシャッハの命を賭した攻撃ですら「ガンダム」を倒せなかった事に、深い脱力感と絶望感を感じた。思わずその場にへたり込むセイン。それを見咎めようともしないヴェロッサ。

事ここに至って、二人の心は、完膚なきまでに折られてしまった。ケルディムという「ガンダム」によって。

『……』

『……マイスター。私はマイスターを補助する為にある。だから、マイスターができないのなら、私が』

『いや……いや、オレがやる。これは、オレが選んだ結果なんだ。だったら、オレがするべきだろう、ケルディム？』

『しかし、マイスターは本来、予備のマイスターだ……兄と同等以上の能力を持ちながら、「ＣＢ」の理念を徹底して実行できなかったマイスターには、この行為はあまりにも……』

『それでも、オレがやらなきゃいけない。……じゃなきゃ、兄さんにも顔向けができない』

頭部がないケルディムは、その屈した二人を無視して、ＧＮスナイパーライフル？の銃口を聖王教会中央教堂がある方角に向けた。そして、紅から蒼碧に変わったＧＮ粒子をその場に放出しながら、桃色の光線を一発、

『それに、オレはロックオン・ストラトスなんだ！　だから、オレは……狙い撃つぜぇえええええ！』

闇が深くなってきた空へと放った。

ケルディムが放った一撃は、コーナー家がかつて使用していた「ラグランジュ６」、その入り口を破壊……するだけでなく、その周辺にいた数名ばかしの子供をも蒸発させた。そしてそれに気を取られたクラウンたち三人から距離を取り、セラヴィーがさらなる追撃を叩き込む。それによって、かつて「ラグランジュ６」と呼ばれた地下施設は、その存在ごと地中へと葬り去られる事となった。

「……そうか、シスター・シャッハが……」

「……ええ」
「……それで、ヴェロッサ？　お前はこれからどうするんだ？」
「……一度、ミッドチルダに戻るよ。シャッハに義姉さんの事も頼まれた事だしね。……それに、今は動きたく……」
「……ああ、そうしておけ」

そして、クロノが掴んだ手掛かりとは、まさにこの「ラグランジュ６」のことだった。彼はユーノ・スクライアから「ラグランジュ６」の情報を極秘裏に受け取って、それでここまでやって来たのだ。

「カローラ、クラウンの容体は？」
「一応無傷……らしいですが、魔力は空だそうです。今は治療室で横になっている聖王近衛騎士団の方に付き添っていますね」
「あれだけの傷を受けても無傷か……まあ、クラウンなら大丈夫だろう。問題はその騎士の方だが……」
「エヴァ＝Ｒ＝Ａは此方に合流したいとのことです。既に騎士団からは除隊した、と言っておりますが……」
「なら、本人の意思を尊重すべきだろう。聖王教会が何と言ってこようがな。それに、彼女はクラウンを止めてくれそうなのだろう？　だったら、僕から言う事は何も無い。この船で存分にクラウンを矯正させてやれ」
「はあ……艦長がそう言うのでしたら、そうしましょう」

表向きは第九次元航行艦隊の補給という名目で、裏では「ＣＢ」の施設らしき「ラグランジュ６」を調査しに、第３２管理世界の聖王教会中央教堂にまで足を運んだクラウディア。

「ところで、お前たちはこれからどうするんだ、「ナンバーズ」？」
「僕とディードは、本局から聖王教会に派遣された戦力なので、このままミッドチルダのベルカ自治領にまで行きます」

「その後の事は、向こうで決められるはずです」
「そうか……ところで、もう一人はどこにいった？」
「セインは気持ちが悪いといって、先程からずっとトイレに立て籠もっています」

しかし、それは結果として、無駄足となってしまった。何故なら、調べようにも、聖王中央教堂は既に半壊どころの騒ぎではなく、「ガンダム」らによって巨大な白い瓦礫の山となっていたからだ。さすがに重さが数百トン近くあるその瓦礫の山を除去することは、少なくても、ここにいるメンバーでは不可能であった。

それに、そんな事をして、もう一度「ＣＢ」を誘き寄せるものなら、今の戦力では壊滅するのが必須だ。クラウンは魔力がほぼ空であるし、聖王近衛騎士団も一人を除いて壊滅。聖王教会では数少ないＡＡＡランク魔導師であったシャッハも、さっきまでの戦いで死亡してしまった今、「ガンダム」に対抗できる戦力はクロノ一人だけだ。そんな戦力では……短すぎる時間稼ぎが精々だろう。

「無理もない。そいつは初めて「死」を振れたのだろう？　なら、仕方が無いさ。……取り敢えず、カローラ。あと一時間後には本局に向けて出発するぞ、いいな？」
「本局……ですか？　しかしこの後は……」
「任務は一時凍結させる。今はまず……あのフェレットを一発ぶん殴っておかないと、僕の気が済まない」
「……正気、ですか？　無限書庫の司書長にそんな事をすれば……」
「下手すれば懲戒ものだな。だが、それでも僕は、アイツを殴らなきゃいけない。どんな言い訳があっても、アイツは間違いなく情報戦で「ＣＢ」に負けた……その結果がこれだ！」

だからこそ、今は敢えて手掛かりを放棄して、力を蓄える事にす

る。それがクロノの下した判断だった。それに、彼は今、先程から言っている通り、ある一人の人物を殴りたくて仕方がなかったのだ。

「確かに、そうかもしれませんが……」

「正直、アイツが情報戦で負けたというのは、俄かには信じられないが……「聖王のゆりかご」の内部情報まで手に入れるアイツがな……ええい、まずは殴ってやる！　話はそれからだ！　行くぞカローラ、まずは上層部に対する報告書（言い訳）からだ！」

「そうでしたね……私達は無断で此処に来ていたんですよね……ああ、元帥がどんな顔をしているのか、恐ろしくて恐ろしくて……」

「僕だって今母さんがどんな表情をしているのか、想像したくもないさ……」

そして、クラウディアはきっかり一時間後に、第３２管理世界から離れ、本局へとその本船を向かわせた。各人各々の傷を、優しく包み込みながら……。

延々と続く黒い空域――第３２管理世界の宇宙に浮かぶ、一隻の船。

その船の中では、「ＣＢ」の面々と雷刃の襲撃者が、初の対話を試みていた。

「それで、お前は一体何モノなんだ？　見た所、人間ではなさそうだが……」

「ふふん、よくぞ聞いてくれた！　僕はかつての「闇の書の闇」の欠片にして、今は「ラジエル」の「深淵存在（マテリアルズ）」でもある雷刃のしゅ……」

「「ラジエル」？　何だそりゃ？　ティエリア、何か知ってっか？」

「いや、僕も初めて聞くが……」

「アーデさんも初めて何ですか？」

「ていうか、どうしてフェイト・Ｔ・ハラオウンと同じ容姿なのよ？」

「って、こらーー、僕の話を無視するなーー！」

しかしその対話は、決して順調とは言えなかった。何故なら雷刃の言う事が、一々突拍子もないことだったからだ。雷刃と対話をして「ＣＢ」のメンバー全員が思った事は、

（（（ああ、こいつ、アホの子だな（です～）……）））

「……どうしてそんな暖かい眼で僕を見るんだッ！？」

『ドントワーリー、サー』

雷刃は自分がアホの子だと思われている事に気付かない。それでさらに暖かくなる視線。それに耐え切れなくなったのか、雷刃はティエリアたちに背を向け、自分に宛がわれた部屋へと逃げん込もうとした。それを捕まえようとするロックオンだったが、雷刃のそのスピードは「ガンダム」になっていない彼にとっては、まさに視認できない物で、すんなりと部屋へと続く通路へと逃げ込まれた。雷刃の時は暖かかった視線が、今度は極寒の視線でもってロックオン

へと突き刺さる。

「……ロックオン」
「ストラトスさん……」
「ロックオン、貴方……」
「み、見るな！　そんな目で、オレを見ないでくれ！」
『これでマイスターとマイスター・刹那の説教が、一時間は伸びましたね』
『ああ、そうだなセラヴィー』
「……はあ、これから向こう三時間は説教か……あまり僕を疲れさせないでくれ、ロックオン」
「ならしなけｒｙ」
「「ラグランジュ３」に帰還したら、覚悟しておけよ？」
「……お手柔らかにな？」
「無理だな」

そして、結局雷刃の事、「ラジエル」の事などは一切解明されずに、ティエリアたちは「ＣＢ」の基地の一つ、「ラグランジュ３」へと到達する事となった。それに深い溜息を吐いたのは、ティエリア一人だけだったが。

『お疲れ様です、マイスター』
「ああ、ありがとう、セラヴィー……はあ」

第一管理世界ミッドチルダ。そのベルカ自治領にある病院の真っ白な病室で、一人の女性がたわわなおぱ～いの実った上半身を、ゆっくりと起こしていた。その白い肌はカサカサで、ブロンドの髪も水分を失って、随分とボサボサになっている。

「……ぁ……ぅ……」

生気のない目で中空を虚ろに眺めるその女性は、口を何度か開閉しながら、言葉を紡ごうとしていた。しかし、二ヶ月もの間、一言も喋っていなかった女性は、そのたった一語を喉から出すだけでも大変な苦痛が伴う。何度も何度も、単調な音を出しては、言葉を紡ぐのを失敗する女性。

「……し……は……」

十度か、あるいは数十度か……それだけの失敗を繰り返す事で、漸く言葉らしい言葉を紡ぐ事ができるようになった。それに喜びを感じる……よりも前に、彼女は自らが感じた嫌な予感を、その口でもって紡いだ。

「……シャ……ハ？」

その言葉を紡ぐと、女性の青い瞳から綺麗な涙が一粒、ガリガリとなった頬に一筋の線を描いて、そのまま女性に掛けられていた柔らかそうな布団の上へと落ちた。その涙はすぐに布団へと染み込み、後すら残さないまま消えたが、その女性は何時までも何時までも、涙が落ちたその地点を、焦点が合っていない瞳で見つめ続けた。

その女性の手には、三人の男女が映った写真を納めている写真立て――シスター服を着た女性の所だけが罅割れている――が、手が白くなるほど強く、握り締められていた……。

【――その闇を見ろ。そして己が名を思い出せ】

――鴨川秘様から、『空の境界』より

第４２話　誰が為に戦い、誰が為に鐘は鳴る？　≪後篇？≫（後書き）

え？　投稿する日が違う？　「大丈夫だ、問題ない」。例え作者の命がエクシアによって風前の灯火だろうと、例の「G」のように、その死亡フラグ全てをへし折って見せます！

ちなみに、「G」は計４～５回はへし折りました。なら、作者にだってできるはず……！　と思ったら、作者もそれぐらいへし折ってるっぽい……今度こそ＼（＾ｏ＾）／　でしょうか？　そして、ここまで読んで下さった皆様には感謝を！

最後に。

次からは００とアリオスサイドです。しかし、次週一週間は丸々予定が埋まっていますので、投稿は遅れる予定です。……多分１１月２０日（土）までには投稿できる……はず？　です。もしかしたら今回みたく早まるかもしれませんが、その時は「大丈夫だ、問題ない」と言って下されば幸いです。……遅れたら半殺しでかんべｎ「その時は全殺しか駆逐、そのどちらかを選んで下さいね、駄目作者さん？」

第４３話　誰が為に戦い、誰が為に鐘は鳴る？　≪終篇≫（前書き）

【罪を犯す事は怖くない。

怖いのは、それを認めること。

罰を受けるのは怖くない。

怖いのは、その痛みを知ること。

世界から罪と罰はなくならない。

だって、人間は未来を知ることができないから】

――鴨川秘様から、『ひぐらしのなく頃に』のフルデリカ・ベルンカステルより

第４３話　誰が為に戦い、誰が為に鐘は鳴る？　≪終篇≫

――新暦７５年１１月１５日――

第３２管理世界の中央都市「オレンジ」が誇る超高層ビル「マウンテン」。その最上階のスウィートルームにて、「灰色の福音（シンデレラ）」の『大使』ロベルト＝コーナーと、第３２管理世界代表大統領たる人物が、極秘の会談を行っていた。

「それじゃあ、これからは色々と、よろしくお願いします」

『フォッフォッ、それは此方の台詞じゃよ。あの気狂いした「ＣＢ」とやらと、最高評議会が無くなって何を仕出かすのか分からなくなった管理局を潰してくれるのじゃからのう』

茶色い髪と臙脂（えんじ）色の瞳を持つ、茶色のスーツを年不相応に着た十四歳ほどの好少年が笑みを絶やさずに、７０を超える黒スーツの老人とモニター越しに話し合っていた。それは異常な光景であったが、好青年の周りにいる他の六人は特に驚く事もなく、その少年と老人の対等な話し合いを聞いていた。

「それでは、今日はこの辺で。……演説、期待していますよ？」

『では、そのご期待に添えられるよう、頑張るかのう？　フォッフォッフォッ……！』

この話し合いは、「灰色の福音（シンデレラ）」と第３２管理世界が全面的に協力するという確約をもう一度確認し、またその事を、今回の代表大統領演説で発表する、と明らかにする為の物だった。そしてこの話し合いは順調に最後までいき、その終わりを穏やかに迎える事となった。

だが、何故第３２管理世界の代表大統領は管理世界であるにも関わらず、反管理局組織である「灰色の福音（シンデレラ）」に協力するのだろうか？

実は、第３２管理世界の政府は、かつての最高評議会と懇意の仲であったのだ。それ故に、今までかなり税政やら賄賂やら研究技術とやらで、他の世界よりも優遇して貰えていたのだ。それが、「Ｊ・Ｓ事件」後はどうだ？　最高評議会が何のコネもない臨時最高評議会に移り替わり、さらには「ＣＢ」の『宣言』により、今まで得ていた筈の「旨味」のほぼ全てを戦力に傾けなくてはならなくなった。当然、権力者たちには怒りとストレスが溜まっていき、遂にはその不満が爆発する所まできてしまう事となる。

そんな我慢ができなくなってきた所にきた「灰色の福音（シンデレラ）」からの協力要請と、莫大な賄賂（わいろ）という名の「旨味」。これに傾かない政治家、権力者は、第３２管理世界の腐敗した財政界にはいなかった。管理局からの「旨味」が期待できない今、「旨味」が期待できそうな、管理局とタメを張れるらしい戦力と財力を持つ「灰色の福音（シンデレラ）」の存在は、まさに第３２管理世界の財政界にとって、管理局よりも重要な存在となっていたのだ。

だから彼らは管理局よりも「灰色の福音（シンデレラ）」に協力をする事にしたのだ。大義やその世界の人々の民意などどうでも良く、ただ「旨味」が期待できるから、という理由だけで、彼ら第３２管理世界の重鎮たちは、管理局と「ＣＢ」に敵対する意を固めた。無論「灰色の福音（シンデレラ）」は、その腐敗具合を『情報』の「Ｍａｒｋ－Ｘ」を通じて知っていたからこそ、協力相手として、第３２管理世界を選んだわけだが。

「ふう……」

「お疲れ様です、ロベルト様」
「ああ、ありがとうケスティ」
「そんな、結婚しようだなんて……子供は何人欲しいですか、ロベルト様？」
「アレ？　僕はそんな事を言ってないよね？　そうだよね、コーラン？」

代表大統領が映っていた大型モニターが虚空に消えた。それと同時に、飴色（あめいろ）の髪と瞳を持つやる気なさげな『宰相』ケスティ・アーネットがロベルトの前に、ガムシロップ入りの紅茶を置いた。それにお礼を言うロベルトだったが、まさかそのお礼を結婚の言葉だと捉えられるなどとは思っていなかったようだ。すぐさま救援を自分のすぐ隣に座る『参謀』のコーランに求める。

『全く……いい加減にせんか、このショタコンバカ娘！　ロベルト様が小動物のように怯えておるのが、お主のその腐った目には見えんのかえ!?』

ロベルトからの救援要請を受けたコーランは、すぐさま念話でケスティへと話しかけた。コーランはあまりにも老いている為、言葉を発するだけでも一苦労なのだ。しかし、そんなコーランの話しかけに対するケスティの反応は、『参謀』として有名であるはずのコーランの予想を、直角に上回っていた。

「ハアッハアッ……！　ロベルト様、かあいいですよ、かあいいですよ！　できれば、もっと涙目の上目遣いでこの私めを見上げて下されば、尚最高です！」
『……アイシス、『隊長』であるお前さんからも、何か言っとくれんかえ？』

鼻息を荒くしながら、何処からかカメラを取り出し、最早涙目になっているロベルトを撮り始めたケスティを見て、全身を赤茶けたローブで覆い隠しているコーランは匙を全力でぶん投げた。そしてその投球を受け取った、ロベルトと同年代の少女であるアイシスも、すぐさまその匙を全力で彼方へとぶん投げた。

「バカに付ける薬はないと、私はそう思いますが……それに、今の変態的なケスティとは言葉を交わしたくはありません。変態との会話はブシドーだけで十分です。……本当、どうして私、ブシドーの説得何かに逝ったんだろ……？」

「はは、ホントにね？」

「笑いごとではないのですが、ビリーさん？」

本当に疲れた様子で、豪奢な黒塗りの椅子にしな垂れかかるアイシス。ボブカットに切り揃えた金髪がふわりと揺れた。それに少し顔を赤くしつつ、合の手を入れるビリー。顔が赤いのは、女性の色っぽい仕草に慣れていないからだろうか？

『……』

『……別に、貴方達が戯れるのは構わないけど、こっちが忙しい身だって事も理解していて欲しいね』

そんなやり取りをしていると、ロベルトの対岸に位置する、円形のテーブルの上に置かれた長方形のモニターから、呆れた声が発せられた。『情報』「Ｍａｒｋ－Ｘ」はさっきからずっと無言だったので、『魔本』「ラヴクラフト」が発したようだ。その声は変声期を迎えているかどうか怪しげな少年のような声で、会議を進めろと遠回しにロベルトに言った。それは同時に、ロベルトにとっての救いでもあった。

「そ、そうですね！　ラヴクラフトさんもそんなに時間が無いそうなので、会議を進めていきたいと思いますが、それでいいですか、皆さん！？」

「私は～、別に～、構いませんよ～？」

「……命令には従う」

妙齢の女性である『移送』ヒイラギと、細い体躯の『暗殺』アサシンがロベルトのその案に賛同の声を上げた。ヒイラギは面倒臭そうに、アサシンはどうでもよさげにだったが。

「それじゃあ、次の議題ですが……」

そして、その二人の賛同を持って、会議はまた順調に進められていった。例えケスティの表情が非常に残念そうで、舌打ちが聞こえたとしても、ロベルトはそれに構わず、会議を押し進める。

「マウンテン」に近づいてきている二機の「ガンダム」の存在に気付かないまま……

『刹那、そろそろ到着するよ！』

『了解。此方の充填は既に完了している』

００ＧＳ／Ｇ（スラッシュジー）を背に乗せたアリオスＧＡ（アスカロン）が、高層ビルの立ち並ぶ大都市圏の空を、凄まじい速度で飛翔していた。昼と夕の合間となった空には一条の橙の残像が引かされ、見る者に疑惑を抱かせた。アレは何だ？　という疑惑を。

しかし、人々は気付かない。それが悪名高き「ガンダム」だとは。何故なら、アリオスＧＡの速度は、最早彼らの目で捉える事ができないほどの領域に達していたからだ。一般人に見えるのは、ただ橙の残像のみで、だからこそパニックも起きずに、「ガンダム」らは悠々と「マウンテン」へと通じる空の道を進んでいくことができていたわけだが。

『マイスター、目標が見えました！　ＧＮビームキャノンは何時でも発射可能です！　奴らのどてっぱらにドでかいのを一発、かましてやりましょう！』

『マイスター、試験型ＧＮソードブラスターも準備完了です。何時でもどうぞ！』

『アレルヤ・ハプティズム、了解。これより、介入行動に移る！』

『刹那・Ｆ・セイエイ、了解した。これより、目標を駆逐する！』

悠々自適に空の道を進む「ガンダム」たち。すると、その進む先に、全面を硝子窓で囲った超高層ビル「マウンテン」が見えてきた。その超高層ビルへと、アリオスＧＡは機首のＧＮビームキャノンを、００ＧＳ／Ｇは試験型ＧＮソードブラスターの銃口を向ける。彼らの目的は、あそこで会議を行っている「灰被り（シンデレラ）の福音」の幹部、「十二の救世鐘（トゥエルブ・ベラー）」の壊滅なのだ。故に、彼らは容赦も手加減もなく、最初の奇襲で全てを決めようとしていた。

『いっけぇーー！』

そして、一瞬の後、アリオスＧＡの両肩のパーツで圧縮展開誘導されたＧＮビームキャノンが、かつての「デカブツ」ヴァーチェのＧＮバズーカ並みの威力で持って、「マウンテン」へと放たれる。

『うおおおお！』

それに付随し、００ＧＳ／Ｇの持つ試験型ＧＮソードブラスターが、００ＧＳ／Ｇだけでなく、アリオスＧＡからもＧＮ粒子を供給された事で、常よりも強力になった砲撃を、そのままアリオスＧＡと同じく、「マウンテン」へと放った。すると、試験型ＧＮソードブラスターはその発射の負荷に耐えきれず、たった一発で銃身が焼け焦げ、使用不可になってしまった。それを見て、事前に説明されていた事とはいえ、思わず顔を顰めてしまう刹那。幾らなんでも脆過ぎではないか？　という、そんな思考が彼の脳内で渦を巻く。

ドォオオオオオォオオオオン！

しかし、その思考は、目の前で起こった大爆発の前に消し飛んだ。見れば、アリオスＧＡと００ＧＳ／Ｇの奇襲により、「マウンテン」の最上階には、黒々とした大穴が空いていた。その穴を見た刹那は、より一層気を引き締める。彼はこれからあの穴の中に突入し、敵を駆逐しなければならなかったからだ。

『ここでお別れだね、刹那』
『ああ。大統領の方は任せたぞ、アレルヤ』
『了解。できるだけ頑張るよ』

試験型ＧＮソードブラスターが壊れた事で、スラッシュジーからセブンソードへと戻った００ＧＳが、アリオスＧＡの背から飛び立

ち、「マウンテン」の穴の中へと飛び込んでいった。それを見届けたアリオスＧＡは、「マウンテン」の屋上にアップルが容易していた魔法陣の上に着陸した。アリオスＧＡが着陸すると、ミッドとベルカを合わせたような魔法陣が白光を放ち、周囲を光で溢れさせた。

『ふむ、アリオスの到着を確認。これより転送開始するが、よろし？』

『うん、頼むよアップル』

『フッ、隣りのフェルトが某マイスターのせいでかなり怖いが、承知致す！　トランスポーター起動、転送先固定完了、転送に支障…ナッシング！　いざ、転送ッ！』

アレルヤがアリオスＧＡの構成を一度解き、アリオスへとインストールし直す間に、魔法陣はアップルの言葉を受け、その輝きを一層強くし、周囲の魔力を循環させていった。そして、アレルヤ達がアリオスへと変身し終えた事を確認すると、アップルは彼らからかなり離れたビルの中から、アリオスを代表大統領がいる大通りまで転送し始めた。

『さあ、行くよアリオス！』

『イエス、マイスター！』

アレルヤがアリオスとその会話をしている間に、魔法陣は彼らを大通りの直上の空に転送し終えていた。アリオスが下を見れば、そこには、大通りから溢れ返るぐらいの数え切れない程の人々が、大通りの一番端に位置する壇上（だんじょう）を眺めていた。

『それでは、皆さん！　登場して貰いましょう！　この第３２管理世界の代表大統領である……』

ワアアアァアアアアアアッ！！

その場をし切るアナウンサーの声が響くと、人々が注目する壇上に、一人の老人が現れた。途端、大歓声がその場に木霊した。その誰もが叫び、誰もが喜びの声を上げるその老人は、黒のスーツをピシッと着込みながら、年の割にはしっかりとした足取りで、壇上の中央へと歩いていく。

（フォッフォッ……フォッ？）

だが、現れた時からずっと笑顔だった老人の顔が、一瞬、困惑の呈(てい)を露わにした。それに疑惑を感じた人は、この場に何人いただろうか？　少なくても、代表大統領のＳＰですら、彼の異変に気付いていなかったから、恐らくは極少数だろう。

（……アレは、なんじゃ？　この空域での航空は警備の為に禁止にしとったはず……では、まさッ！？）

壇上の中央に備え付けられていた台の所まで歩き切った老人の顔が、今度こそ恐怖で引き攣った。しかし、その顔が引き攣った頃には、既に老人の体は、アリオスの左右に開かれたＧＮビームシールドの間に挟まれていた。

「な、何が……起こったん、だ？」

僕は少し血を流している額を押さえながら、ゆっくりとその場から立ち上がった。周囲は炎に包まれ、椅子やテーブルの破片が散乱していたけど、それでも何とか無傷な場所を探して立ち上がる。……何が起こったのかは全く分からないが、ただ、目の前が爆発したという事だけは認識できていた。それがどうして起こったのかは相変わらず分からなかったが……。

「で、でも、ここは本局並みのセキュリティーで守られているはず……それを解除するなんて、できるわけが……！」

そう、できるわけがない。時空管理局の本局と同等ということは、それ以上の物はない、という事だ。第一管理世界の最先端技術で作られたセキュリティーを解除するなんて、この次元世界のどんな組織にだって不可能……

「できる……わけが……」

しかし、ここまで考えて、僕はある一つの可能性に気付いてしまった。でも、それを認めるという事は、敵の強大さに気付くということでもあり……知らず知らずの内に、血が滲み出るほど強く、手を握り込んでしまった。

「……」

そうだ、「Ｍａｒｋ－Ｘ」のセキュリティーを解除する事は不可能だ。それこそ、「Ｍａｒｋ－Ｘ」と同じ量子演算処理システムを

持っていなければ、できるわけがない。そして、量子演算処理システムを持っている組織は……「灰被り（シンデレラ）の福音」を除けば、ただ一つ。

「ソレスタル、ビーイング……！」

ガラッ！

僕のその呟きに呼応したかのように、僕――ロベルト・コーナーの前に、「ＣＢ」が攻めてきた事をこれ以上なく体現するモノ――「ガンダム」が、瓦礫の中から現れた。

「「「……え？」」」

観衆もＳＰも警護の人も、最初、何が起きたのか理解できなかった。気が付いた時には、既に老人の体は真っ二つにされており、見るまでもなく絶命していた。それに沈黙すること、十数秒。

「ヒィ……ヒィイイッ！」

誰かの悲鳴が、その場に木霊した。そして、それを合図にして、一斉に人々から悲鳴が上がる。

「「「わあああぁあああぁあああああッ！？」」」

パニックへと一瞬で陥った観衆が、警備の人々を押し退けてまで、我先へとその場から逃げだそうとする。警備の人々も、何が起きたのか全く分からなかった為、混乱し、パニックを抑えることができない。そんな大混乱した状況の中、セルゲイ・スミルノフとソーマ・ピーリスという二人の大魔導師は、瞬時にその状況に対応した。

「少尉！　ここは此方に任せて、少尉はあの「羽付き」らしき奴を追え！」

「了解しました、大佐ッ！　タオツー、セットアッップッ！」

『ヤー、リッター。スタンバイレディ、セットアップ。ＭＳＪ－０６ＩＩ－ＳＰ　ＴＩＥＲＥＮ　ＴＡＯＺＩ　コンストラクション、コンプリート』

セルゲイの怒号が飛ぶ中、ソーマは桃色のカードを手にそう叫び、その体に桃色の機甲をＢ・Ｊの要領で構成していった。両肩には推進装置を兼ねたシールドが張り出し、目に当たる所がモノアイとなってソーマに周囲の状況を知らせるそれは、右手の甲にソーマの腕ほどもある魔導ライフルを装備していた。それを前屈体勢で抱え込みながら、地面の上をホバー走行で走っていくティエレンタオツー。

ソーマがＢ・Ｊの要領で構成したこのティエレンタオツーは、かつて世界清浄と時空管理局が競い合って開発していた新型Ｂ・Ｊ――「Ｍｏｂｉｌｅ．Ｓｕｉｔ」の第３２管理世界Ｖｅｒ．である。世界清浄が「フラッグ」や「オーバーフラッグ」、時空管理局が「ヘリオン」、「イナクト」を開発したのに対し、第３２管理世界は最高評議会から流通した情報を元に、「アンフ」や「ファントン」を独自開発し、現在では「ティエレン」シリーズまでをも開発して

いた。

『「ガンダム」……よくも大統領を！』

『アクセラレイション、ターゲットロックオン、ファイア』

その第３２管理世界が誇る「ティエレン」シリーズの最高傑作機、「超兵」ソーマ・ピーリス専用機であるティエレンタオツーが、未だパニック状態から抜け出せない人混みから慎重に離れつつ、先程から何故か同じ空域に留まっている「羽付き」へと、右手の魔導ライフルを向け、一発の乾いた音と共に魔力弾を放った。

薬莢（やっきょう）が一つ、地面に寂しげな音を立てて落ちたのを、ソーマの鋭敏な聴覚は聞きとっていた。それが死闘の合図となるであろうことも、彼女はその時、確かに分かっていた。

「ふぇ、フェイトさん！　一体何がどうなって……」

「……分からないけど、多分、「ガンダム」が現れたんだと思う。この警備の中、どうやって中に入ったのかは分からないけど……」

エリオ・モンディアル、キャロ・ル・ルシエ、フリード、フェイト・T・テスタロッサの三人と一匹は、大通りの壇上から数キロほど離れた場所で警備を行っていた。彼女達は壇上付近にはセルゲイやソーマがいる事、そして壇上を中心に、幾重にも結界が張られている事から、その結界の境界を守っていたのだ。最も、今回ばかりはその行動が裏目に出てしまったわけだが。

「ど、どうしましょう、フェイトさん？」

「……民間人の避難が最優先だから、まずは誘導を行おうか？　幾ら「ガンダム」だって、ソーマさんとセルゲイさんなら持ち堪えるどころが、撃退してしまうかもしれないし、ね？」

「「わ、分かりました！」」

エリオとキャロが弱々しくフェイトにこれからどうすべきかを尋ねてきた。それに優しく、姉のように

「お母さんだよ！　そこは絶対に間違えないで！！」

「「？」」

「あ、気にしないで。ちょっと気になった所があっただけだから」

……母のように応対するフェイト。その表情はまさに聖母のような母性溢れる物で、エリオとキャロはその顔を見ただけで落ち着きを取り戻していった。その落ち着きを取り戻した表情を見て安心するフェイト。……これから「ガンダム」がいる死地へと、我が子同然の子を送らなければならない事に心を痛めているのは、彼女だけの秘密である。

「……でも、どうして「ガンダム」は結界内に侵入できたんだろう？」

その心に奔った痛みを無視しつつ、フェイトは「ガンダム」がいるであろう方角を向いて、そう呟いた。それだけが心残りだと、そう言いたげに。

綺麗な夕空をアースラのブリッジから眺めていた俺は、数百年振りとなる感覚を、このアースラの外、中央都市「オレンジ」の中から感じた。……これは、この感覚は、間違いなくあの御方の……！

「……やはり、「ＣＢ」と共に来たのか……！」

信じたくは無い事実。だが、信じるしかない現実に心が少しばかり震える。しかし、ここで駄々をこねても何も分からないのだから、行動を起こすべきだろう。

もしかしたら、主に傷を負わした「ＣＢ」についても、何か分かるかもしれんしな。

そう考えると、俺はまず主のいるブリッジへ向かった。途中、忙しそうなシャマルやアルトに出会ったが、特に引き止められはしなかった。それを僥倖と思いつつ、ブリッジに通じる扉を通る。

「……ん？　ザフィーラ、どうしたん？」
「主よ、少しばかりの外出を願う。我には行かねばならぬ所がある故」
「……は？　ザフィーラ、お前何言って……」
「……それは、どうしても……なんか？　できれば理由を言って欲しいんやけど……」
「理由は、けじめをつけるためです。数百年前の誓いのケジメを……」
「「「……？」」」

扉を通ってすぐ目の前にいた主が、私の言葉に目を点々とさせていた。……やはり、言葉が足らなかったか。しかし、これ以上の情報は俺もあまり確信を持っていないため、話す事ができない。……できれば、これで納得して頂ければいいのだが……

「おい、ザフィーラ。これからはやても出撃するってえのに、盾の守護獣であるお前がいないで、誰がはやてを護るんだよ？」
「ザフィーラ、どういうことだ？　数百年前の誓いとは一体何の事だ？　この将にも、そして主にも話せないとは一体……」
「……うん、分かった。行ってき、ザフィーラ？　ただし、絶対に戻ってくるんやで？　ええな？」
「……ありがとうございます、我が主。必ず戻ってきます、ケジメをつけて」

……やはり、我が主は寛大な御方だ。たったあれだけの説明で納得して下さるとは。シグナムとヴィータは未だ難色を示していたが、それを気に留めず、俺は主のすぐそばを通り、ブリッジの後方にある転送ポーターまで歩いていった。ブリッジクルーから物珍しい視線を感じたが、今はそれも無視して、俺は転送を行った。

「……向こうか」

そして、アースラとは違う方角にある「オレンジ」の郊外に転送された俺は、とある高層のビルへと向かった。そこから自分の半身がいる様な気配が洩れていたからだ。……最も、これは「C／R」たる俺にしか分からぬ気配であろうが……

「……しかし、どうして「CB」に協力したのだ、セファーよ……」

俺のその言葉は、しかし、猛烈な風に吹かされ、誰の耳にも止まる事はなかった……それに安堵にも似た気持ちを抱いたのは、やはり、この事実を俺が認めたくないからだろうか……？

其れは、ザフィーラが向かった物とも、「マウンテン」でもない高層ビルの屋上で、腕を豊満なおぱ～いの前で組みながら仁王立ちし、下の風景を睥睨（へいげい）していた。その眼光は闘気に溢れ、体にも気力が漲（みなぎ）り、参戦の時を今か今かと待ち望んでいた。

「……ふっ、こうも気が昂ぶるとはな。私もこの戦場の空気に当てられた、というわけか……」

『イエス、ライセンサー。強者（つわもの）の気配が幾つもあるこの戦場で気が

昂ぶるのは当然だ。寧ろ、ライセンサーがそれだけ強者に飢えていた事が分かって、某は安心したぞい？』

其れは、一人しかいないにも関わらず、硬質な声の誰かと話していた。傍から見れば不気味以外の何物でもないが、その確固たる自我がある声には、あまりにも『正義』が溢れていて、とてもバカにすることができない雰囲気があった。

「不安だったのか、私が怖気づいていないかどうかが？」

『ノー、ライセンサー。そんな御淑やかな女子でない事は、既に承知している』

「そうか、なら私も安心だ。お前がそんな勘違いをしていないことが分かったのだからな」

其れは、目の光学センサーを戦場となった場所に当てながら、たった一人の人物を捜していた。その人物とは、かつて其れが一対一で負けた相手でもあった。その雪辱を晴らす為に、其れは戦場を見渡し、その人物と戦おうとしていた。

『しかし、ライセンサーともあろう者が一対一で負ける相手とは……一体、どれだけの強者なのだろうかッ！？　ふっはっはっはっはっはあああッ！　血湧き肉滾り、相見えたくなったぞい、フェイトなんちゃらああッ！！』

「フェイト・Ｔ・ハラオウンお嬢様だと何度言ったら分かるんだ、お前は？」

其れは、青いボディースーツからイイ感じに張り出したおぱ～いの間に、二つの白いコーン状の物を首から下げていた。硬質な声はどうやらそのコーン状の物から発せられているようだ。其れが呆れ気味の声を出しているのに対し、コーン状の物体からは興奮した声

が響いた。それにさらに呆れる其れ。

『そんな些細な事など、どうでも良いではないか、ライセンサーッ！？』

「……まあ、お前が何をどう憶えようが、確かにどうでもいいな。しかし、アリオスがあんなに目立っているというのに、未だフェイトお嬢様が出てこないとは、一体どういう事だ……？」

『ぬ？　……おおッ、何奴だあの三人組みはッ！？　素晴らしき強者の予感が、某の触覚にビンビン伝わるぞい！　あの三人組みとも戦いたい、戦いたいぞ、ライセンサァアアアアッ！！』

「今のお前に触覚はないだろ？　だから落ち着け。アレは「最後の夜天の主」八神はやてとその「守護騎士（ヴォルケンリッター）」であるシグナムとヴィータだ。確かに、三人ともフェイトお嬢様と変わらない強者だが……今はまだ、フェイトお嬢様との戦いが優先だ」

コーン状の物体が戦場とは違う所を眺めていたと思ったら、どうやら別の強者を発見したからしい。それにまた溜息を吐きそうなりながら、其れはフェイトを捜し続けた。コーン状の物体からの要望は、当然のことのように考慮の余地なく却下された。

『ぬぉおおおおッ、何ッたる不幸！　強者と戦えないとは……ライセンサーは某に死ねと申すかッ！？』

「大丈夫だ。私とお前がフェイトお嬢様を倒せば、幾らでも強者と戦える。だから、それまでの我慢だ。いいな？」

『ぬぅううう、他ならぬライセンサーの言葉、この磨修羅生（マスラオ）、確かに承知致した！　その心逝く時まで、某は我慢致す！』

「ああ、そうしてくれ」

そして、何とか自身のＧＮデバイスたる「磨修羅生」を落ち着かせた其れは、そっけない態度で返事をしながら、それからも戦場を

見渡し続けた。

雪辱を晴らす為、そして強者と戦う為に。

【見せてやろうじゃないか。

人に押しつける正義よりも、

人に押しつける悪の方が強い事を】

――フィム様から、『正義を否定する少年達の物語』より

第４３話　誰が為に戦い、誰が為に鐘は鳴る？　≪終篇≫（後書き）

活動報告のアンケートで、？、？、？の三つがそれぞれ一つずつありました。ようするに、最低でも本編と短編とスピンオフの方は書いておけという事ですね、分かります。しかし、今週は恐らく忙し過ぎて更新できないと思うので、来週まで待って下さいお願いします！

来週からは１ガンダムから習った疑似ＧＮドライヴによるＴＲＡＮＳ－ＡＭを発動するので、更新が早くなる……か？　ここまで読んで下さった皆様に感謝を！

最後に。

←以下作者に替わりまして、エクシアがお送り致します。
「まいすたあ　の　およめさん　は　えくしあ　です。いろん？　そんなもの　は　この　と裸んざむ　で　駆逐します」

第４４話　十二の鐘は鳴り終えた（前書き）

【人間にとって、未来は常に〝想う〟だけのもの】

――ＥＸＡＭ様から、『空の境界』「未来福音」より

第４４話　十二の鐘は鳴り終えた

――新暦７４年――

あいつと初めて出会った場所は、荒廃した町のスラム街にある、寂れた酒場だった。その時の私は、今と同じ、桜の紋様が胸に縫い込まれている白い小振袖（しょうふりそで）を着込み、下半身には赤と黒が入り混じった女袴（おんなばかま）を履いていた。

「ふぅ～……やはりあんな雑魚を一匹殺した所で、何の足しにもならんか。……おやじ！　この店の一番安い酒を有りったけ出してくれ！」

「またかい、サムライさん！　あんたに今一体どんだけのツケがあると思ってるんだ！？」

「そんな事よりも酒だ酒だ！　今夜も自棄酒を潰れるまで呑むぞッ！」

「……はあ～。本当、サムライさんがこの町を救ってなかったら、今頃追い出せていたのにな～……オレも運が落ちたもんだ」

ボロッちい店の、よれよれな椅子に座り、今にも壊れそうなカウンターの上に、無用な脂肪（おぱ～い）が極僅かにしかない上半身を乗せる私。その右手には透明なコップを一杯もっていて、それには安そうな色の酒が入っていた。この時の私は、たしか金を稼ぐために、近辺に潜伏していた賞金首どもを、片っ端から瞬殺していたはずだ。そして、この日に殺した賞金首がこれまた弱く、その弱さに失望と憤怒を抱いていた……はずだ。最も、当時は何故そんな感情を抱いたのか、甚だ疑問だったが。

だって、そうだろう？　金を稼ぐために賞金首を殺すなら、相手

は予想よりも弱い方が都合がいい。なのに、私の心はそれとは逆に、強者との死合いを望んでいたのだからな。

「……う～、ヒック……なんだってしょうきんくびがヒック、こんなによわいんだよ～？　ふつうもっとつよいだろうが～ヒック！」

「私達からすれば、弱い方がいいのですけれどね……あーあーあーあー、ま～たこんなに呑んじゃって……意識ありますか、サムライさん？」

「ら～いひょうふ、ら～いひょうふ。こうみえれも、わらひはおはけにつおいことで……あー、あらまいらい……みず、おみずおねがいひまふ……」

「そ～ら、言わんこっちゃない。天下のオーバーSランク魔導師様だってのに、お酒の事になるとてんで弱くなるんだから、無理しちゃいけないよ、サムライさん？」

「わらひのどこがよわひらと！？　わらひはてんらの……ッ！？」

酒の飲み過ぎで呂律が回らなくなった言葉を途中で区切って、私はいきなり腰裏から愛刀「村正」「村雨」を引き抜いた。その二刀で此方の喉を狙って投げられた数十ものクナイを弾く。耳障りな金属音が私の脳内を盛大にシャッフルしたが、それでも私は店の主人にクナイが行かないよう、細心の注意を払いつつ、クナイを斬り払い続ける。その努力が功を成したのか、数十ものクナイを弾いたにも関わらず、主人には傷一つない。

「まだ運は落ちていなかったようだな、おやじ……で、これは一体何の冗談だ、そこの四人？」

最後のクナイを右の「村正」で弾いた私は、私のいる奥のカウンターとは正反対の、店の入り口近くにある丸型のテーブルに座る四人を見据え、ＡＡＡクラス相当の魔力を放出しながらそう尋ねた。

魔力を放出したのは、相手を威嚇する為だ。ＡＡＡクラス相当の魔力を持つ者など、次元世界広しといえど、滅多にいないからな。

実際、この威嚇の効果は覿面で、店の中にいた他の客達が私の魔力を感じると、その顔色を一斉に蒼くし、足をガタガタと震わした。だが、その四人組はこの凄まじい密度の魔力を受けて、尚正気を保ったまま、その口をそれぞれの形に開いた。

「……」

「へえ、やっぱり噂通りの強さね。アサシンの奇襲をこうも見事に防ぐなんて、普通、できないわよ？」

「確かにそうですね。……ロベルト様、彼女でしたら大丈夫でしょう」

「うん。そうだねケスティ。だから僕のお冷やにお酒を入れるのは切実に止めてくれない！？」

「泥酔したロベルト様なら、私の“初めて”を奪ってくれそうなのに……」

「……なんだ、子連れか。斬る気が一気に失せたわ。私の酔いを醒ましてくれたお礼に殺してやろうと思ったが、気が変わった。早々に立ち去れ、雑魚共」

その四人組は、傍から見ようが何処から見ようが、極めて異様としか表現する他ない。一人は全身を黒の装束で固めた、如何にも裏の稼業に携わっていそうな雰囲気を持つ壮年の男。もう一人は、全身にゴチャゴチャと装飾をつけまくった、やる気なさげな表情をしている、飴色の髪と目を持つデカイ女。

ここまでなら私だって「何だ、普通だな」と思うだろう。こんな荒廃した町の、寂れた酒場で出会う人間は、必ず頭のネジ数本をどっかに失くした人間ばかりだからだ。だから、どんな格好をしてい

たって、そいつは普通だと思われてしまう。……いや、もう少し付け加えれば、どんな奴も普通じゃないからこそ、普通じゃないが普通になってしまうんだ。

しかし、そんな異常こそが普通の世界であって、奴らはあろうことか、二人の子連れときていた。正直、頭のネジが数本なんて次元じゃない。多分、ダース単位でぶっ飛んでいるんだろう。こんな世界に子供を連れてくるなんて、この薄汚い世界に住んでいる奴でも、相手の正気を疑ってしまう。

「あら、随分と優しいんですね？　噂では老若男女関係なく斬り殺す、危険な御人だと聞いていたんですが……」

「当たり前だ。賞金首には男も居れば女もいるし、老人もいれば子供もいる。そう言った意味では、あながち間違いでもあるまい？　それに、そう言っておいた方が、弱い奴からの死合いを受けなくて済むしな。私は面倒事が嫌いなのだ」

「ふふ、なるほど……貴女は賞金稼ぎなのに、強い人と戦いたいなんて、おかしな人ですね？」

「言うな、自覚している」

その子供の女の方、四人の中でも一番話が通じそうな奴が、私にそう話しかけてきた。それに私は十三歳ぐらいの年齢にしては胆が据わっているな、と素直に驚いた。この少女が言っている通り、私はこの界隈（かいわい）で「最も出会ってはならない人物」の単独一位に挙げられる程、危ない人物としてかなり周囲に知られているのだ。そんな人物を相手に、普通に話しをする少女は、その幼い年齢とは裏腹に、幾つもの死線を掻い潜ってきたのだろう。

「そんな強い人と戦いたい貴女に、一つ、提案があります。この提案に乗れば、貴女はその欲求を満たせるでしょうし、此方としても

重要な戦力が手に入るのですが……」
「……ほう？　まさかお前ら、この私――ザ・サムライをスカウトしにでも来たのか？」
「は、はい！　その通りです、サムライさん！」

……これは驚いた。まさか、未だにこの私を雇おうとする奴がいたなんてな。そんな事をした奴がどうなったか、知らんわけでもあるまいに？

「……お前らは、私をスカウトしにきた奴がどんな最期を迎えたのか、勿論、知っているよな？」
「はい、知っておりますが、それが何か？　それと、ロベルト様は私の将来の旦那様ですが、それが何か？」
「け、ケスティ！？　何どさくさに紛れて言ってるのッ！？」
「……後半は何の事か知らんが、前半を知っているならば話は早い。……斬り捨てられる覚悟はできたか、そこの四人？」
「あ、ちょ、ちょっと待って下さい、サムライさん！　さっきも言った通り、僕達に雇われれば、貴女は望みを叶えることができますし、貴女の力も僕達には必要なので……」
「そんな事は知らん。私はただ、『組織』というのが嫌いなだけだ。故に、私は私を組織に組み入れようとする奴を、賞金首らと同じく、片っ端から斬り捨ててきた。……もう一度聞くぞ？　斬り捨てられる覚悟はできたか、そこのよ……」
「……「ガンダム」」
「ッ！」

ロベルトと呼ばれたちっちゃなガキが、その単語をボソッと、小さな声量で呟いた。瞬間、私の体は無様なまでに硬直した。そのたった一語を聞いてしまったが為に。

「……サムライさんは、「ガンダム」を知っていますよね？」
「……ふん、それがどうかしたか？」

試すように、確認するように、ロベルトが私に尋ねてきた。それに頬をぴくぴくさせながら、必死にしらを切ろうとする滑稽な私。

「そして、貴女は最凶のロストロギアである「ガンダム」と戦いたがっている……違いますか？」
「……」

図星を突かれた事で黙るしかない私を見て、ロベルトは満足そうに笑った。それに切れかけたのは、何も私のせいではあるまい？あの「してやったり」な顔に一撃を加える事は、それはそれは気持ちが良いであろうな……。

「何なら、その望み……叶えましょうか、僕達で？」
「……は？」

だが、そんな私の想いを無視して、ロベルト――ああ、めんどくさいから坊主でいいか――は突然、そんな事を私にほざいてきた。思わず口をあんぐりさせてしまう私を見て笑う者は、勿論、斬り捨てられる覚悟ができているよな？

「僕達「灰色の福音」の最終目標は、かつての管理局や世界清浄が結託しても撃退しかできなかった組織、「ガンダム」という最凶のロストロギアを、機密保持の為に、少数しか保有しない組織である「ＣＢ」を……完全に、滅ぼすことです」
「……一つ、いいか？　私は世界清浄の生き残りから、「ＣＢ」は既に滅ぼされた、と聞いていたが……」
「滅びてなどいません。彼らは今もその武力を研ぎ、策略を練り、

来るべき時に備えているのです。彼らは程なく、この世界に対して、三年前とは違い、『計画』通りに武力介入を行う事でしょう。三年前の戦争は、彼らにとってはあくまでも『計画』外の事なのですから」

……驚いた。正直、今まで生きてきた中で、一番驚いた。「ＣＢ」が残存していた事も、「ガンダム」と戦えるチャンスがまだあることも、そして何より……「ＣＢ」の事をここまで詳細に知る坊主に、私は何故か――本当に何故か、圧倒された。

「何故、そんな情報を、お前達は知っている？」

その圧倒された様子を悟られまいと、私は急ぎ質問をし、自らの様子を誤魔化そうとした。金髪の少女には気付かれていたが、坊主には気付かれなかったようで、坊主は嬉々としてその「ＣＢ」を知った経由を話し始めた。

「～と、言う事です」

「成程。坊主はあのコーナー家の息子であったのか……しかも、コーナー家は昔から「ＣＢ」と協力関係にあった……ならば、それほどの内部情報を持っている事も頷ける。それに、お前らは量子演算処理システムという、まだ実現されていない筈のシステムすら持っていることだしな」

もう一度言うが、正直、驚いた。まさか貧弱そうなこいつらが、管理局ですら実現に至っていない量子演算処理システムというとんでもない代物をも保有していたとはな。

……ふむ。

「二つだけ、言わせて貰っていいか？」
「……？　え、えぇ」
「一つ、上等な酒を沢山用意する事。二つ、私を自由にする事。……この二つを確約すれば、お前達に協力してやってもよい」
「ほ、本当ですか！？」
「ああ、本当だ。正直に言うと、お前達が「ＣＢ」や管理局相手にどこまで行けるのか、それを見たくなった。それに私の力が必要とあらば、この力を貸すのも吝かではない」

……こいつらに付いていくのも、存外、面白いかもしれんな。

「それでは、これからよろしくお願いします、サムライさんッ！」
「ああ。では早速……坊主、少し私に付き合え」
「……え？」
「はあッ！？」
「話を聞いていると、お前が盟主のような役割になるんだろう？なら、もう少し体を鍛えなくてはいかん。そんなモヤシよりも細い体の盟主になど、私は付き従いたくは無いからな」

それに、この組織の盟主としてはまだまだ甘い坊主と一緒に世界を相手取るのも、悪くはない、悪くはない……な。

――新暦７５年１１月１５日――

茶色い髪が埃まみれとなっているロベルトの前で、二メートル級の巨剣がズドンッ、と重い音を立てて、地面に突き刺された。その衝撃はロベルトの体を地面から少し浮き上がらせ、その小さな体躯を軽やかに弄んだ。

「ハアッハアッハアッハアッ……！」

呼吸を異常なほど乱しながら、地面をゴロゴロと、何回も転がるロベルト。そんな彼を見下すかのように、全身を七本の剣で固めた蒼と白を基調とする「ガンダム」は、巨剣――ＧＮバスターソード？の柄を逆手に握りながら、悠然とその場に仁王立ちしていた。

その場――つまりは、「灰色の福音（シンデレラ）」の幹部「十二の救世鐘（トゥエルブ・ベラー）」が集まりしこの場所に。

『……ヴェーダから情報が来ました。９９，８９％の確率でロベルト＝コーナー本人です、マイスター・刹那』

『そうか……なら、まずは作戦通り、周りから駆逐しよう。Ｏ（オー）ガンダム！』

『イエス、マイスター。ＧＮバスターソード？には既に十分のＧＮ粒子が供給されています。どれだけ振り回そうが、問題が起きる事は有り得ないので、思いっきりやって下さい！』

蒼碧色のカメラアイを光らせながら、「ガンダム」が巨剣を逆手に握ったまま床から引き抜き、そのまま左に一閃、何も見えない暗い空間に振り抜いた。そして、何も無い筈の虚空にも、逆の左拳を、裏拳の要領で叩き込んだ。

その一連の動作を見ていたロベルトは、最初、「ガンダム」が何をしているのか、全く理解できなかった。しかし、この後すぐに、その一連の動作がどんな意味を持っていたのかを理解させられることとなる。

「が……！」

「きゃあぁあああああッ！？」

「……え？」

『まずは、一人！』

『もう一人は逃しましたか！　それにしても、あの状況で咄嗟にデバイスを盾替わりにするとは……『隊長』アイシス、思っていたよりもやり手ですね！』

『しかし、これでアイシスはデバイスを失い、その戦闘能力は大幅に減少しました。危険はもう無いと判断していいでしょう』

「ガンダム」が巨剣ＧＮバスターソード?を振り抜いた暗闇の空間から、渋い男声の断末魔が聞こえてきた。そして、何も無かった筈の虚空の方からは、やや高めの音程で発せられた少女の叫び声が、ロベルトの鼓膜を震わせた。それで漸く……漸く、ロベルトは理解できた。「ガンダム」が何をしたのかを。そして、そして……自分の腹心の部下が一人、殺された事を。

「あさ……しん？」

「逃げるのです、ロベルト様！　アサシンとアイシスが時間を稼いでいる間……に……？」

「……！」

茫然と、頭から床に倒れ込んだ二つのアサシンだった物を見るロベルト。アサシンはその体を上下半分にされていて、確かめるまで

もなく、絶命していた。それを見たロベルトは、目を悲しみで潤(うる)ませた。ロベルトと三年間も共にいた仲間であったアサシンが一瞬で殺された事で、ロベルトは言い様のない悲しみを感じ、それで目から涙が零れ落ちそうになったのだ。しかし、その悲しむ暇すら与えられないのが……現状だ。

「ケスティ……お前さん、裏の、非常口、から、ロベルト様と脱出。儂、ここ、時間稼ぎ」

「し、しかし、そうしたらババアが……！」

「いいから、行け、このバカ娘ッ！」

「～～ッ！　ここは任せましたよ、コーラン！」

悲しみに打ちひしがれることすら許さないとばかりに、「ガンダム」がロベルトを狙って、左手で腰から抜いたGNソード?ショートのビームを撃ってきた。それをよれよれになっているコーランが、懐から取り出した彩色豊かな数珠から発動させたバリアタイプの防御魔法、プロテクションによって防ぐ。が、その防がれたことすら読んでいたかのように、「ガンダム」は続け様にコーランへと一射撃ちながら、その距離を一気に詰めてきた。回りを囲むように展開されたプロテクションを解除すれば、すぐさま「ガンダム」の銃撃で死に、解除せずに持ち堪えたとしても、「ガンダム」の巨剣による一撃で防御を割られ、解除した時と同じ道を辿る……

「……すでに、勝敗、決し……それでも！」

その逆転の目が無いシュミレートを脳内で完了させた、かつて在りし世界清浄で、戦略にかけては右に出る者はいないとまで謳(うた)われた智将、「十二の救世鐘(トゥエルブ・ベラー)」の『参謀』たるコーラン・ダンヌは、そのシュミレートを完了させた数瞬後に、後ろを走っていく若い二人の姿を満足げに見ながら、自身の推測通りの道を辿っていった……。

何人もの仲間を殺されたショックで、完全に放心してしまったロベルトを、フリフリが付いている腋に抱えたまま、白黒のロングスカートを盛大に翻しつつ、半壊した広い通路を全力で走っていくケスティ。その表情は常にない緊迫した雰囲気を漂わしていた。……いや、実際ここまで最悪なケースなど、彼女含め、誰も想定していなかっただろう。

「……なんて事でしょう！　一体どうやって「Ｍａｒｋ－Ｘ」のセキュリティーを解除したのでしょうか、あの「悪鬼」はッ！？」

「……うあ……ヒック……うぅ……」

「……ロベルト様、落ち着いて下さい。後はここから脱出するだけですので、心配する事は何も御座いません。まあ、強いて言うなれば、ロベルト様が一向に私に恋慕を抱いて下さらない事こそが心配ごとなのですが……」

何時もの軽口を叩きながら、非常口へと通じるスウィートルーム専用の転送ポーターへと走っていくケスティは、後ろに感じていたコーランの魔力が消えた事に一度歯噛みし、涙を一筋流した。どちらもコーナー家に仕える者として、十数年間の付き合いがあったコーランに、ケスティは憎まれ口を叩きつつも、深い親愛を抱いてい

たのだ。

「……コーランも、ですか。『移送』ヒイラギと『科学』ビリー・カタギリが最初の奇襲で気配を感じられなくなった今、「十二の救世鐘（トゥエルブ・ベラー）」はすでに『移送』『科学』『暗殺』『隊長』『参謀』の五つの鐘を失くした事に……いえ、下手すれば『情報』までもが……」

苦虫を噛み潰した表情で、その苦い事実を確認するケスティ。組織を興そうとした瞬間に、その組織の幹部の半数近くを、根こそぎ刈り取られたのだ。しかも、よりにも寄って、対「ガンダム」戦とは関係のないポジション――戦術・戦略・組織運営にこそ必要な者ばかりをである。これでは、顔色を変えるなという方が無理だろう。

「……ですが、まだＣｈｅｃｋｍａｔｅ（チェックメイト）と言うほどではありません。ロベルト様とあのオーバーＳランクの変人三人組み、そして……『魔本』「ラヴクラフト」の極めて莫大な資本さえ生き残っていれば、何時でも「灰色の福音（シンデレラ）」は再起可能です」

六人もの戦術・戦略・組織運営に必要な幹部をやられた為、既に「灰色の福音（シンデレラ）」はその組織力の半分以上を失ってしまったといっても過言ではない状態となっていた。それを分かっているにも関わらず、ケスティは無理やり、楽観視した未来を夢想した。組織を興す前にほぼ半壊させられた「灰色の福音（シンデレラ）」、その明るい、希望に満ちた未来（行く末）を。

だが、そのような夢は、往々にして覚（さ）める事が通例である。

「……追い付かれる前に着く事が出来ましたか、僥倖でしたね。これもコーラン、貴女が時間を少しでも稼いでくれたからですよ……さ、ロベルト様。どうぞ中……ゑ？」

ケスティが夢想をしている間に、どうやら彼女達は綺麗な円で作りこまれている転送ポーターへと辿り着いたようだ。その転送ポーターを見たケスティは、一気に心の重荷が下りた様な気がした。後ろを振り返り、「ガンダム」がまだ追い付いていない事を確認する。よし、後はこれを起動させるだけ……

と、思ったケスティの目の前で、転送ポーターの床面から、ガラスを砕くような音をさせつつ、何かが飛び出してきた。その何かは、背の丈程もある、返り血で赤黒くなった巨剣を真上に突き上げながら、ケスティの目の前に降り立った。ケスティはその姿、七本の剣で全身を武装したモノ――００ＧＳの姿を見て、今度こそ……脱力した。

『照合……９９，８９％の確率で『宰相』ケスティ＝アーネットだと思われます』

『隣りには予測通り、ロベルト＝コーナーがいます、マイスター』

『そうか……なら、すぐに任務を遂行する。邪魔になりそうな三人組が近づいてきている事だしな』

その悪鬼の如き姿を見たケスティは、悟ってしまった。こいつからは逃れられないと、これが本当の「ガンダム」の力なのだと。こ

んなバカげた力を、オーバーテクノロジーを持つ組織に抗う事自体が、そもそもの間違いだったのだと、彼女は濃密な死の気配が這いずり寄ってくるこの瞬間に、そう悟ってしまっていた。

だが、それでも彼女は、

「……天は私めらを見捨てたのですかね？　いえ、そもそも、天上人たる彼らを指す天など、始めから私達に味方していなかった訳ですか……どうりで、ここまで旗色が悪いわけです」

最凶のロストロギアとして呼び声の高い悪鬼「ガンダム」を前にしながら、

「しかしながら、この不肖ロベルト様のメイドにして、「灰色（シンデレ）の福音（ラ）」の『宰相』たる私めが、ここで諦めるわけにはいきません。例え何度潰されようとも、私達はコーナー家復興の妨げとなり、そしてアレハンドロ様の仇でもある「ガンダム」、「ＣＢ」を排除しなければならないのですからね。寧ろ、ここで「ガンダム」と一対一ができる状況こそがブシドーのいう僥倖……という物でしょうか？

そこは良く分かりませんが……」

彼女にとって素晴らしきご主人様であったロベルトを護るために、死ぬことすら厭（いと）わず、

「それでは、ここで倒させて貰いますよ、「ガンダム」エクシアの後継機ッ！」

背後にロベルトを隠しながら、「ガンダム」へと屹然（きつぜん）と立ち向かった……

「はあああああッ！」

そして、その戦闘というのも憚（はばか）られる、あまりにも一方的な死合いの勝敗は、やはり一瞬で着いてしまった。ケスティと「ガンダム」の戦闘は、たったの一合で決してしまったのだ。

その後のケスティの言葉は、やはり、最後まで自身の主たるロベルトを思った物だったのを、ここに書き留めておく……

「ロベルト様、どうかこの私めをお忘れになり、新たな伴侶を見つけ、お幸せになって下さいまし……」

嗚呼、世界は今日も残酷という名のレールから外れることは無かった。

「あ、ああ……あああああああッ！？」

下から突き破られて、最早転送を発動することが不可能となった転送ポートからやや離れた場所で、ロベルトがあまりの悲しみから、声を大にして延々と泣き叫んでいた。目の前には、幼い頃から付き従ってくれたケスティ＝アーネットの死体が、無造作に転がされていた。その死体に一瞥（いちべつ）すらせずに、剣をロベルトの頭上に持ち上げる「ガンダム」。

「あああああああああっあああッあああああああッ！？」

仲間が次々と死んでいく。幼いころからの仲間も、ここ最近で仲間となった者も、平等に、何の救いもなく、ロベルトの前で死んでいく。その残酷すぎるほど平等で優しくない現実に直面した事で、まだ成熟し切っていなかったロベルトの精神は、負の感情の濁流（だくりゅう）により、一気に決壊する。

「あ……あ……」

ロベルトの目から生気が消えるのと引き換えに、瞳からは沢山の感情を乗せた涙が零れ墜ちていく。それが零れ墜ちる度に、ロベルトの顔からは表情が無くなっていった。その哀れな様子を暫し、感

情の読めないデュアルアイで見詰めていた「ガンダム」は、しかし唐突に、両手でロベルトの頭上に持ち上げていた巨剣を、床ごと斬り捨てるような勢いで、ロベルトの頭へと振り落とした。

それにやや遅れて、ガキィイイインッ！　という凄まじく硬い音が、周囲に響き渡った。

ロベルトは、生涯忘れないだろう。

「……あ」

仲間の死が彼に次から次へと押し寄せてやってくる、絶望という一言すら陳腐（ちんぷ）に聞こえる、この悪しき日を。

「……どう、して？」

夕闇へと落ちそうな空の斜光が降り注ぐ中、百キロを優に超す巨剣を、細長くも流麗な二刀で受け止める、その凄絶な光景を。

「どうしたもこうしたも、お前を護る為と、「ガンダム」と戦う為に決まっているだろう、坊主？」

そして、裏に隠しきれていない怒気を孕みながら、心底愉快そうな顔をしているザ・サムライの、逞(たくま)しくも優しさに満ちている後ろ姿を、ロベルトはきっと、一生涯忘れないだろう。

【自分が選んだ一つのことが、お前の宇宙の真実だ】

――アストレア様から、『天元突破グレンラガン』のカミナより

第４４話　十二の鐘は鳴り終えた（後書き）

今回は「灰音」サイドを中心に書きました。オリキャラばかりで見づれえんだよこの駄目作者！　という方は、感想にてお願いします。

これからの流れの概略。

００　ＶＳ　「灰色の福音」↓２話
アリオス　ＶＳ　？？？　↓２話
？？？　ＶＳ　？？？　↓１～３話
エピローグ　↓１～２話
幕間　↓２話
計：最大１１話、最小８話

＼（＾ｏ＾）／

ここまで読んで下さった皆様に感謝を。

最後に。

もう一回、＼（＾ｏ＾）／

第４５話　クラッシュ・ベラー（前書き）

【人を殺しすぎた人間はある日、ドラゴンに変わるんだ。
金で地を踏みしめ権力で空を飛ぶ怪物。
暴力はますます強くなり、人の言葉なんて通じなくなっていく。
人はこの世にドラゴンがいることを許せない。
自分達が生んだ怪物だというのに。

ドラゴン殺しは最高の名誉。
はしゃぎすぎたんだよ、バルドラ】

――鴨川秘様から、『ヨルムンガンド』のココ・ヘクマティアルより

第４５話　クラッシュ・ベラー

――新暦７４年――

……。

「……おい。幾らなんでも、そんな体力では、高ランクの召喚魔法を使った後、碌に動けなくなるのではないか？」

「……ぜえ、ぜえ……うッ！？」

「……図星か、それとも吐きそうなのか、判断が難しいな」

私たちは今、見る者全ての距離感を失わせるほどの深い青を湛えた空の下にいた。そこで私は、これからの雇い主であるロベルト＝コーナーの能力の詳細を聞いてから、その体力を測定していたわけだが……正直、ここまで酷いとは思わなかった。まさか、たったの十五キロ程度で根を上げるとは……情けない。私ならば、魔力も使えば、ほぼ千キロ以上は優に走れるのだが……。

「……仕方がない。これからは、一に体力、二に体力、三四が魔法で、五に体力という風にするか」

「……えッ！？」

「よし、では早速行こうか。まずは一キロダッシュを三本だ。全力で走れよ、坊主？」

「……お、鬼……！」

「鬼ではない、竜だ。「竜殺」を持つ、な」

坊主はふらつきながらも、ダッシュのスタート位置にまで、必死こいて歩いていく。……ふむ。どうやら体力はないが、根性はあるようだ。これは鍛え甲斐があるな、フフッ。

まあ、この私を「鬼」などという存在と間違えたのは頂けなかったが。

「鬼ィイイイッ！？」

「だから竜だと言っているだろうッ！？」

坊主が走るフォームを崩しながらも、五百メートル先の折り返し地点まで、全力で走っていった。汗は既に滝のように流れ、全身の筋肉が引き攣りそうになっても、坊主は手を抜くこと無く、あくまでも全力で走っていく。その姿を見た私は、どこか楽しげに苦笑した。知らず知らずの内に、口元に笑みを浮かべる。

「……ふむ。もし私に手の焼く弟がいるとすれば、ちょうどあんな感じになっていたのだろうかな？　まあ、詮無き事故（ことゆえ）、あまり熟考はしないが……」

……フフッ、と、私は口を閉じたまま、もう一度淡く笑った。それと同時に、疲労困憊（ひろうこんぱい）になったロベルトがダッシュから戻ってきた。すでにその顔色は蒼白だったが、それで許してやるほど、私は優しくなど無い。徹底的と言ったら徹底的にするのが、私の教育スタイルだ。覚悟しろよ、坊主？

「……よし、一分休んだな？　もうワンセット行ってこい」

「ぜえッぜえッぜえッぜえッ……さすがに、もう……！」

「もう一回言うぞ？　盛大に逝ってこい、坊主」

「な、なんか「行ってこい」のフレーズが、ぜえッ、違う風に、ぜえッ……」

「ほう、まだ無駄口を叩けるとは……感心したぞ？　なら、あと一本追加しても問題ないな？　計四本だ。盛大に逝ってこい、坊主」

「……お、鬼ィイイイッ！？」
「だから鬼ではなく竜だと何度言ったら……」
この一年で、見間違えるほど強くしてやる。体も、そして心もな。

――新暦７５年１１月１５日――

転送ポーターを使用する為に、かなりの間取りが取られていた広い部屋の中央で、二メートルを超す巨剣と流麗な二刀が火花を散らしながら、一進も一退もせずに互いの剣身をせめぎ合っていた。それを少し離れた所から見ていたロベルトは、そのこの世の物とは思えない幻想的な光景を目に、脳に焼け付けるように凝視する。

『……照合、『剣客』ザ・サムライと断定しました。ランクは空戦でS、陸戦でS＋です。それと、あと少しで『凶器』と『武士』も来ます、マイスター・刹那』
『……』
『マイスター、既に私達の目標であった「十二の救世鐘（トゥエルブ・ベラー）」は半壊しています。今はオーバーS三人と戦う愚を避け、撤退すべきではないかと……マイスター？』

『いや、ここで叩くぞ、Ｏガンダム。何が何でも、ロベルト＝コーナーだけは討ち取っておく必要がある。盟主がいれば、いずれまた復活するかもしれないからな』
『……イエス、マイスター。マイスターの意思を尊重します』
『ああ。なら……行くぞ！』

ロベルトが凝視していた先で、まずは『００』ＧＳが動いた。『００』ＧＳはこのままでは埒が明かないとでも思ったのか、いきなり巨剣ＧＮバスターソード?をサムライの長刀型アームドデバイス「村正」「村雨」から離すと、今度は上段から、その百キロ超の巨剣を、不可視の速度でもって振り落とした。

『ふん！』
「この私を舐めるなよ、「ガンダム」！」

その攻撃はロベルトには見えない速度と、想像もできない威力から成り立つ物だった。だがその凄まじい攻撃を、サムライは交叉（こうさ）させた二刀の美しい太刀で、正面から受け止める。その剣と剣の打ち合いにより、辺りに凄まじい金属音が、破壊力すら伴う衝撃波と共に、部屋を駆け巡っていった。それでも中央の一人と一機は先程と同じく、睨み合ったまま微動だにしない。

『……クッ、やはり力が何時もよりも落ちているな』
『『００』ＧＳの現在の性能は、万全の状態と比べ、おおよそ１０％ほど落ちています、マイスター』
『しかも、相手は次元世界中で管理局員や賞金首を、血風斬嶌と斬り捨ててきた「二刀竜使いの剣客」ザ・サムライです。十分以上に気をつけて下さい、マイスター・刹那』
『ああ、分かっている。速度ではあの男に、魔法では「切り裂きＪＡＣＫ」に一歩劣るとはいえ、魔力保有量と身体能力が馬鹿げてい

るコイツ相手に、油断などできるはずが……ない！』

サムライが『００』ＧＳの一撃を受け止めた衝撃で、床中に数十センチもの罅（ひび）が奔ったが、その一人と一機はそれを特に気にすることと無く、今度は互いを殺す為の剣戟（けんげき）をし始めた。そこには非殺傷魔法などという生温い物は使われておらず、ただただ相手を殺す為だけの、純粋な殺意が込められた剣撃しか存在しない。

「村正、村雨！」
『『諒解（りょうかい）、「鬼殺（おにごろし）」』』

その純粋な殺気しか込められていない剣戟を数十合もしながら、今度はサムライの方から『００』ＧＳへと仕掛けた。サムライは圧縮した魔力を、一匹の鉄色の竜が描かれている鍔（つば）から、僅かに反り返っている片刃の刀身の先にまで隈なく大量に籠めると、その魔力で強化された二つの太刀を、自身の後ろにぐるりッと廻した。それを見た『００』ＧＳは、その莫大な魔力量（Ｓ－クラス）を前に危機感を覚え、ＧＮバスターソード?の剣身を横にし、さらにはＧＮフィールドまでをも展開させ、完全な防御態勢を取る。

「鬼……殺ッ！」
『グゥッ、まさか！?』
『いくら実体剣とはいえ、ＧＮフィールドを抜いてくるなんて……！』

だが、そのＧＮフィールドを、サムライは左右二刀の、魔力を込めただけの太刀で易々と斬り裂いた。それに驚愕した刹那は、咄嗟（とっさ）に、右手で持ったＧＮバスターソード?で、鉄色に光る「村正」「村雨」を迎え撃った。サムライは二刀とも上段から、『００』ＧＳは左から右に振り抜く様な剣筋で、互いの剣を打ち合わせようとす

る。

「おおおおぉおおぉおおおおおッ！」

『はあああぁあああぁあああああッ！』

サムライと『００』ＧＳの三剣が、ガギンッと、耳を劈(つんざ)くような音と共に接触した。すると、その剣と剣の間から、盛大な火花が飛び散った。それに眩しさに目を瞑(つむ)らずに、もう一合、二刀と巨剣で打ち合うサムライと『００』ＧＳ。その衝突は途轍もない衝撃を生み、大理石でできた絢爛(けんらん)な白い床を、粉々に砕いていた。

そんな阿鼻叫喚の惨状の中、巨剣を振るう最強の「ガンダム」であるはずの『００』ＧＳが、

『うおぉおおおおッ！？』

猛烈な勢いで、後方へと押しやられていった。『００』ＧＳはサムライと二合打ち合い、その二合とも威力で押し負け、窓がある後方に弾き飛ばされたのだ。

そして、後方へと弾き飛ばされた『００』ＧＳの体が、バリンッという軽い音と共に、最高級の窓ガラスを突き破って、「マウンテン」の外へと飛び出す。

『……「ＧＮ(ジーエヌ)」、Ｏガンダム！』

『損傷箇所検索……本体に目ぼしい支障はありません、マイスター・刹那』

『……武装は、ＧＮバスターソードが恐らく使用不可です。かなりの損傷を剣身に受けていて、使えてもあと一回限りかと……』

『……そうか』

Oガンダムの動揺した声を聞きながら、刹那はGNバスターソード?を左肩に戻し、すぐさま現状を確かめた。「マウンテン」の中からサムライが飛び出してこないのは不審だが、今はそれよりも……!?

「KIーーLL(キール)、YOーーU(ユーウ)ッ!」

「会いたかったぞ、「剣士」!」

「ふん、遅かったな……」

私は『凶器』ジャック・ザ・リッパーと『武士』ミスター・ブシドーが「剣士」と死合いを開始したのを尻目に、その黒い瞳の焦点を、目の前で泣きじゃくっている坊主へと合わせた。坊主は埃まみれで傷だらけ、さらに言えば、涙と鼻水で折角の可愛い顔をグチャグチャにしていたが、それでも……その眼はまだ希望をほんの少し、スズメの涙程だけ、諦めてはいなかった。クックッ……やはり、この坊主に着いたのは正解だったな。

「……で、どうする坊主? 今ならまだ、お前を抱えて逃げる事も出来るぞ? あんな怖い悪鬼がいない所までな」

「ヒッ……うぐっ……!」

「それとも……これ以上の悲しみを、痛みを負うと分かってなお、

今一度、あの悪鬼に挑むか？」
「あぅ……ぅあ……！」
「その判断は、お前にしかできない事だ。「灰色の福音」の『大使』たるお前にしか下せない物だ。私はただ、お前の意向に……私自身の意思で、従おう」
「ああ……うう……あぐっ！」

さて、これで坊主がどんな決断を下す事やら……見物だな。と余裕ぶっていた私は、意地悪気にロベルトの瞳を覗きこみ、決断を促そうとして……

「ぼ……ヒック……僕は……僕は……！」
「……！」

思わず、息を呑んでしまった。それほどまでに、その時のロベルトの目には、復讐を果たそうとする者特有の気迫――即ち、殺意――が氾濫していたのだ。それを直視してしまった私は、思わず自身の奥底をジュンっと、意図せずして濡らしてしまった。そして、その疼きを鎮めようと、思わず黒赤の袴を着た下半身に伸びそうになる手を制しながら、私は坊主の言葉の先を、辛抱強く待った。もしかしたら、これは……予想以上ではないか？　と、惚けそうになる頭で考えていた矢先に、ロベルトが微かな血を滴らせている小さな口をぱっくりと、怒りの様相そのままに開いた。

「アイツを……「ＣＢ」を、ぶっ壊すッ！！」

……

「……ク、ククク……ククククク……！」

その宣言を、宣誓を聞いた私は、思わず……そう、本当に思わず、口から笑いを零してしまった。もう一度、ロベルトの濁った水色の瞳を見る。……クク、嗚呼（ああ）、なんて……

なんていい眼をするんだ、坊主……！

「クックックックックックッ！　……それで、その為にどうする、坊主？　いや……『大使』ロベルト＝コーナー？」

「……サムライさんは、あの二人に加勢して下さい。僕は今から「アルヴァトーレ」をここに召喚します」

「ほう、あのロストロギアを召喚するとは……本気だな？」

「ええ、本気です。今の僕は、アイツを壊すことしか考えられないので」

「クックックックッ……いや、それでいい。情などという戦闘に無用な物など、いっそ捨ててしまえ。唯の狂人、唯の殺人者、唯の復讐者こそが、私の主人（あるじびと）に相応しいのだからな！」

ああ、アア、嗚呼！　ゾクゾクが止まらん！　疼きが一向に収まらん！　一目見た時から、坊主には私の主人足る資格があると思っていたが、まさかここまでとは……素晴らしい、素晴らし過ぎる！

これが、これこそが……！

戦に飢えた狂人である私の、唯一人の……主人だッ！！

「「「きゃあぁあああぁあああああああああーーーッ！？」」」

老若男女、その何れも含む悲鳴が、あちこちの歩道及び建物内から上がった。それを何事だと思った人々は、悲鳴を上げる人々と等しく上空を仰ぎ見て、同じく叫んだ。

「ぬぅおぉおおおおッ！」
「ＫＩーーーＬＬッ！」
『クソッ、こいつら……！』

見れば、人々の頭上、濃い橙色に染まった夕空で、二人と一機によるオーバーＳランク同士の戦闘が行われていた。その下に魔力を持たない民間人がいるにも関わらず。

「サァアアアキガケェエエエエ！」
『ソニックムーブ』
「ＫＩーーＬＬ、キリングッ！」

『ブーストアップ・アクセラレイション、ブーストアップ・バレットパワー』
『Ｏガンダム！』
『ＧＮソード？ロング、ＧＮソード？ショート、何時でも行けます！』

そのあまりにも非日常的な事態に、人々はただ逃げ惑う事しかできなかった。例え非殺傷魔法の余波で死人が出ようが、建築物の崩壊に誰かが巻き込まれようが、力を持たない彼らには、この事態をどうする事もできないのだ。故に、ただ悲鳴を上げ、我先にとこの場から逃げる。それが民間人のできる、唯一の生き残る手段であるのだから。

「斬り捨てぇ……御免ッ！」
「Ｋｉｌｌ　Ｙｏｕ！」
『チィイイッ、「ＧＮ」！』
『ＧＮジェットを噴射します。マイスター・刹那はその後の姿勢制御に気をつけて下さい』

そんな眼下の混乱を尻目に、「オレンジ」の都市群の上空で行われている戦闘は、その熾烈（しれつ）さを極めていく。

「チィッ、逃すかァアアア！！」

黒いボディースーツに、角が付いたフェイスカバー付きのヘルメットを被った男――ミスター・ブシドーがそう奇声を発しながら、右手に長剣を、左手に短剣を握る『００』ＧＳへと、己の持つ二刀（サキガケ）で攻めていった。

「ＫＩーーーＬＬ、ブラッドダガー！」

それを援護するかのように、ブシドーへと速度上昇のインクリースタイプの補助魔法をかけつつ、誘導制御型の魔法で『００』ＧＳの動きを阻害する、黒マントと黒のシルクハットを被る、黒髭を口元に生やしたイカれ目のジャック・ザ・リッパー。

「まだまだぁあああ！」

「Ｙｏｕ！　Ｙｏｕ！　Ｙｏｌｌｕ！！」

その二人は決して上手いとは言えない連携で、ＧＮジェットの勢いで後方に下がった『００』ＧＳをビル群の中へと追い込んでいった。主にブシドーが撹乱（かくらん）・攻撃を、リッパーがその補助をしながら、彼ら二人は『００』ＧＳと互角以上に渡り合い、そして『００』ＧＳを撃墜する為に、そのワンオフデバイスを、凶悪な魔法を、眼下にいる無関係の人間の事を考えずに、振るい続ける。

が、その悪鬼のお株を奪う様な所業をしている二人と相対してなお、刹那は冷静さを保ち続け、逆襲のチャンスを虎視眈々（こしたんたん）と狙っていた。

『そこだッ！』

そしてそのチャンスは、すぐさまやってきた。刹那はその幼少の頃より鍛え抜かれてきた眼で持って、ブシドーとリッパーの連携の隙を見抜き、その連携の隙間にＧＮソード?ロングのビームを撃ち込んだ。それを回避しようと、ブシドーとリッパーは瞬時に体をそれぞれ右と左へと動かす。だが、そのしてはいけなかった動作に二人が気付いた時には、既に『００』ＧＳはその開いてしまった合間を抜け、サムライとロベルトのいる「マウンテン」へと、その身を進ませていた。

「な、なんとッ！？」
「シット！」

ブシドーとリッパーが『００』ＧＳの取った「逃げる」という行動に驚いている間にも、『００』ＧＳはまだ入り口から客を吐き出し続けている超高層ビル「マウンテン」に飛んでいく。そして、遂に「マウンテン」と目と鼻の先の所にまで近づくと、一度その場で慣性を打ち消すバク転をし、態勢を整え、右手のＧＮソード？ロングを水平に構えた。

『これで……何ッ、今更出てくるだと！？』
『何を……考えているんでしょうか、彼女は？』
『分かりません。ただ、最大級の警戒をするべきでしょう、マイスター・刹那』

しかし、刹那が水平に構えたＧＮソード？ロングの銃口の先、窓ガラスが全壊になっているやけに広い部屋から、一輪の桜の紋様が織り込まれている白の小振袖を着こんだ、絶壁級のＡランクおぱ～いを胸部に装備するザ・サムライが、一房に纏めた腰まで届きそうな長い黒髪を優雅に揺らしながら、『００』Ｇｓのいる窓際へと歩み寄ってきた。それを見た刹那は、言いようのない嫌な予感を覚え、射撃を中断してしまう愚を犯してしまった。

「鬼と仏と竜を殺し、この飢(う)えを喰らい尽くす」

その刹那が射撃を中断してしまった、次の瞬間。朗々と、観る者を惹き付けるような艶やかな声でもって、サムライがそう、自身の力を十全に発揮する為の「詠唱」を唱え始めた。

『それは誰が為、何の為？　それは私の為、殺（ころし）の為、そして主人の為』

それに続き、女性の優しげな声音でもって、村雨が続きの詞（ことば）を紡いでいく。

『そうだ、私は「二刀竜使いの剣客」。己が躯（からだ）を竜にし、我等呪われし二刀を振るうモノ』

その村雨の詞を繋ぐように、優しげな声とは正反対な、男性の厳（おごそ）かな声で謳われる、村正の祝言（しゅくげん）。

「……フルドライブ、イグニッション」

『『諒解。フルドライブ・イグニッション』』

それら三つと一つのキーワードを詠唱し終えたサムライは、自身のレアスキル『竜殺（りゅうごろし）』を発動させると、竜種にも負けない魔力量を、そのリンカーコアに発現させ、それを自身の身辺に纏わせ始めた。

「……クックックッ……クククククク……！」

笑うサムライの額から、超高密度に圧縮された魔力でできた、二本の鉄色に光る角が伸びる。一方、少し物足りないお尻からは、角と同じ色に輝く細い尾が生えてきた。そして両手を覆う、指先が尖っている魔力の衣が、同じ様に両足にも展開され、背中には大きな鉄色の羽が広げられる。

「ククククククハハハハハッ！！」

それは、まさに鉄色の「竜人（ドラゴニュート）」という存在そのものだった。その姿形もそうだが、ただの「ヒト」では決して勝てない様な圧倒的な存在感も、「竜」という生命体に瓜二つであった。

『……ゴクッ』

そのサムライの真の姿を見た刹那は、エクシアが喜びそうな生唾を無意識の内に飲み込んだ。その存在感に当てられ、口内が干上がるのを感じる。

「……「二刀竜使いの剣客」、此処に罷（まか）り成る！　村正、村雨！」

『『諒解。「仏殺（ほとけごろし）」』』

その口内が干上がるのと同時に、サムライが罅割れた床を陥没させながら、『００』ＧＳの方へと弾丸のように跳んできた。その交叉した両手に持たれている二刀には膨大なSクラスの魔力で構成された魔力刃が、鈍い鉄色の輝きを放ちながら、二メートル程の太刀を形成していた。その長大になった二刀の一撃を防ぐため、ＧＮソード?ロングとＧＮソード?ショートを正面に構える『００』ＧＳ。

しかし、

「仏……殺ッ！」

『うおッ！?』

『キャッ！?』

『……うっ！』

その二本からなる防御を、サムライは魔法陣すら発動させていない、ただの魔力斬撃による一撃で崩した。

「どうしたどうした!?　それでは最凶の名が泣くぞ、「ガンダム」ッ!?」

サムライの攻撃を受けた『００』ＧＳの大小二本が、彼ら一人と一機の、更なる高き頭上へと弾き飛ばされていた。それはクルクルと回転しつつ、今だ降下を始めようとはしない。それを確認するよりも早く、『００』ＧＳはその手に腰裏から抜いたＧＮビームサーベルを握ると、それを今だ刀を振り戻していないサムライの胴部へと突き刺した。

「そんな小刀で、この私を討ち取れるなどと……思うなッ！」

その無駄のない動作で繰り出された一突きを、サムライは敢えて、防御すらせずに、なだらか過ぎる胸部で受け止めた。だが、『００』ＧＳの一撃を受け止めたにも関わらず、その胸部からは血が一滴も……いや、服の繊維すら破けてはいなかった。その結果を目にし、思わず信じられないと目を見開く刹那。そこへ、サムライの次撃が飛んだ。

「ッらぁあああ！」

最も、次撃と言っても、サムライはただ正面にいる『００』ＧＳの胴部へと、前蹴りを食らわしただけであったが。しかし、侮ることなかれ。たかが前蹴りと言っても、レアスキル『竜殺』により得た超絶魔力（Ｓ＋クラス）を纏った状態で放たれたそれは、一撃でビル群をドミノ倒しのように倒せる威力があるのだ。現に、その一撃を防御する事も回避する事も出来ずに喰らった『００』ＧＳは、そのダイヤモン

ドよりも強固であるはずの装甲を、僅かながらも凹ましていた。

「本当にどうしたのだ、「ガンダム」よ！？　貴様はその程度ではないはずだ！　映像で見た時は、もっともっと……強かったはずだァアアアアッ！？」

その『００』ＧＳに損傷を与えるという偉業をなしたサムライは、しかし、それでは満足がいかないとでも言う様に、『００』ＧＳに全力を出させる為、大声で『００』ＧＳを口汚く詰り始めた。それを聞いたＯガンダムは心底不快な気分になったが、それでも戦況を読み違えるほど、彼女は愚かでは無い。

『マイスター、撤退しましょう！　エクシアがいない今の『００』では、サムライに何とか勝てても、他二人のオーバーＳランク魔導師と戦う余力が残っていません！　今が潮時です！』

『マイスター・刹那。私もＯガンダムの案に賛同します。エクシアがいない為に性能の一割近くを低下させた『００』では、さすがに三人のオーバーＳランク魔導師と戦う事はできないと、ヴェーダもそう言ってきております』

『……Ｏガンダム、「ＧＮ」……そうか、分かった。これより『００』はアリオスと合流し、この戦域から離脱する！』

『『イエス、マイスター（！）』』

「見つけたぞ、我が宿命の「剣士」！」

「き、キ、ＫＩｉＬＬ　Ｙｏｕｒｒｓ！！」

Ｏガンダムと「ＧＮ」の撤退すべきだという意見を取り入れている間に、他二人の変人に追い付かれてしまう『００』ＧＳ。その後門の虎、前門の竜という状況に陥った刹那は、その劣勢の中でも、先程まで感じていたサムライに対する恐れを一瞬で打ち消し、その手に握るＧＮビームサーベルを静かに胸の前で交叉させた。

「だが、もしこのままで行くのならば、私も容赦はしない！　……斬り捨てられる覚悟はできたか、「ガンダム」ッ！？」

『諒解。これより我等は竜を殺し、その血肉を喰らう』

『諒解。其が名は「竜殺」、竜を殺す魔行である』

その空気の違い、雰囲気の相違に気が付かずに、サムライは足元に鉄色の近代ベルカ式魔法陣を展開させた。その魔法陣が展開すると、サムライは超絶魔力（Ｓ＋クラス）が籠められている右手の村正を右肩後ろにまで持っていき、同じく超絶魔力が籠められた左手の村雨を、その折り畳まれた右腕と右脇腹の間に差し入れた。そして左足を前に出し、左半身を前のめりにさせる事で、魔法を発動させるアクショントリガーを完成させるサムライ。

そのアクショントリガーを完了させた、次の瞬間。

『『「竜殺」』』

サムライの口から、魔法を発動させるキーワードが、重い響きを伴いつつ、静かに三者の声で発せられた。それと同時に、サムライは『００』ＧＳへと、鉄色の鈍重そうな翼を羽ばたかせながら、とんでもない速度で飛翔し始めた。勿論、アクショントリガーとなった姿勢は崩さずに。これを崩す時は、「ガンダム」にこの一撃を叩き込む時だ……！

「私に斬り捨てられ、この飢えを満たせ、「ガンダム」ゥウウウウ

！！」

サムライと『００』ＧＳの距離が、一気に詰まっていく。接近するサムライに対し、『００』ＧＳはＧＮビームサーベルを交叉させたまま、その場に浮遊していたので、その距離は凄まじい勢いで埋まっていく。それに僅かばかりの疑念すら抱かずに、ただ凶暴な殺意の塊を「ガンダム」にぶつけようとするサムライ。

そして、遂にそのサムライの持つ二刀が十字を描きながら振り抜かれ……

『うぉおおお！』

「な、がぁぁあああッ！？」

……刹那は、サムライが二刀で十字を斬る、正にその瞬間に、勝負を仕掛けた。『００』ＧＳはサムライが二刀で十字を斬るよりも早く、その発射台となる右肘と左手首に、ＧＮドライヴを後ろに回した左肩をぶつけ、それでサムライの「竜殺」を封じると、今度はそのゼロ距離の密着状態のまま、右下から左上へと、先程よりも多くのＧＮ粒子を供給させた二本のＧＮビームサーベルを、同じ場所に振り上げた。

その二撃にして一撃でもある攻撃は、サムライの竜鱗の如き魔力鎧の防御力を上回り、その薄い肉しか付いていない体を、肉が焼ける嫌な悪臭と共に斬り裂く。その一撃を受け、血こそ噴出しなかったものの、胸部に大きな斬り傷と火傷を負う事となったサムライは、そのあまりの激痛により、『００』ＧＳから一歩二歩三歩、離れてしまう。

『今だ！』

それを好機と取り、その場から脱出しようとする『００』ＧＳ。
それを追おうとしても、激痛で魔法を構築できないサムライ。ブシドーとリッパーは『００』ＧＳよりも後方にいた為、追い付く事ができない。それに三つの鐘は歯軋りを、悪鬼は安堵の溜息を吐こうとした……

が、

『……えッ！？　マイスター、後方からとんでもない熱量が……！』
『なｎ』

突如現れた赤橙色の極光が、後ろから『００』ＧＳへと迫り、そして……！

ドォオオオオオンッ！

ロベルトはサムライと別れた後、すぐさま非常階段を昇って、「マウンテン」の屋上へと来ていた。そこから眺める景色は、限りなく金に近いオレンジ色一色に染まっていて、とてもロベルトの趣向に合う光景であった。

「……」

しかし、今のロベルトには、それを眺める余裕など欠片も存在しなかった。今の彼を構成するのは、ただ純然たる殺意――「ガンダム」に対する憎悪だ。故に、それ以外の事に構う暇など、ありはしなかった。

「……」

下から吹き上げる風で、元々乱れていたアレハンドロ似の茶髪をさらに乱したロベルトは、ただ無言で目を瞑り、金色に光るミッド式魔法陣を循環させ続けた。甲高い、金属と金属の衝突による轟音が、時折彼の耳を強く打つが、それすら気に留めずに、ロベルトは魔法陣を循環させ続ける。

そのままの状態で、どれぐらいの時間が経っただろうか？　一際大きな音がロベルトの耳に届くのと同時に、ロベルトは漸くその目を開け、此方に背を向けている「ガンダム」を、その憎悪で濁った水色の瞳に映した。ケスティ、コーラン、アサシン、ビリー、ヒイラギ、アイシス……あの「ガンダム」に殺された仲間の顔ぶれが、ロベルトの脳内に浮かび上がり、皆一様に仇を討てと、ロベルトにそう囁いてくる。それに耳を貸しながら、ロベルトは脳内から溢れだしそうな、狂わんばかりの憎しみを、その一言に籠めて……唱えた。

彼の切り札にして、義父の形見でもある第二級捜索指定遺失物（ロストロギア）を彼の元に召喚する、そのキーワードを。

「……召喚、「アルヴァトーレ」！！」

ズドォオオオンッ！

地を割る様な大きな音が、ロベルトの後方から鳴り響いた。それは「マウンテン」の屋上を崩そうかという重量でもって、その空間に幾つもの次元を介して召喚された。それは全高四メートル、全長五メートルもの金色の巨体を、暗き夕闇の内に眩しく、後光のように光らせながら、後方に設置してある七つの円錐状をした機関部から、オーバーSクラスの金色の魔力を放出していた。

「アルヴァトーレ、大型魔力砲……発射ァアアアッ！」

その大きな金色の遺失物――第二級捜索指定遺失物「アルヴァトーレ」の最前部から、幾つもの関節で繋がられた鎌首が、その先を口の様に開かせながら、ゆっくりと『００』GSのいる方に向けられた。その骸骨（がいこつ）のような顎（あぎと）に金色の魔力を集束し始めたアルヴァトーレは、丸太よりも太い足をしっかり床面に固定させてから、その多大な魔力を集束した集束砲を、轟音と共に放つ。

ドォオオオォオオオンッ！

「は……はは……！」

その轟音と共に放たれた金色の集束砲が、『００』ＧＳを背後から丸々と呑みこんだのを見たロベルトは、我知らず、笑っていた。そしてその笑みが、感情をどこかに堕としてしまった、そんな乾き切った笑みだったことに、彼は気付いていたのだろうか？

先程までの喧騒が嘘の様に静まり返っているビルとビルの合間を飛翔しながら、それは柄だけとなった巨剣を、オレンジ色の路面に放り捨てた。その仕草には、どことなく苛立ったものが見受けられる。

『……』

『……マイスター』

『報告。『００』はＧＮバスターソード?と、ＧＮソード?ロング・ショートの、計三剣を消失しました。残りの四剣では、これからの作戦を遂行するのは不可能かと思われます。よって、撤退を……』

『ああ』

『『……』』

それ――全身を煤けさせた『００』ＧＳのマイスターである刹那は、「ＧＮ」からの損傷報告に、素っ気なくそう答えた。それに黙

るしかない管制人格達は、先程の「敗北」に等しき情景を悔しさと共に思い起こしながら、それでもあの状況下から脱出した刹那の力量に、敬意を抱いた。

あのロベルトが召喚したアルヴァトーレの砲撃が『００』ＧＳを呑みこもうとした瞬間。刹那は、剣身が耐えきれないのを覚悟して、ＧＮフィールドを展開したＧＮバスターソード?を、砲撃の前面に晒したのだ。その結果、案の定、ＧＮバスターソード?はその負荷に耐え切れずに破壊されたが、その破壊された衝撃をも利用して『００』ＧＳは後方へと跳び退り、その本体が砲撃に呑まれる事を防いだのだ。

それに、砲撃に押し流されるようにして、かなりの距離を稼ぎ、さらにそこから飛び退ったので、「灰色の福音」から『００』ＧＳに追手が差し向けられる事はなかった。それで今『００』ＧＳは悠々とビルとビルの合間をすり抜けながら、アリオスとの合流ポイントへと、戦闘をすることもなく向かえることができていたのだ。

その幸運、及び素晴らしい決断を、しかし刹那は歯軋りでもって受け止めた。彼は自分が作戦を失敗したのだと、そう思っていたからだ。彼に課された任務は、『「灰色の福音」の幹部「十二の救世鐘」の壊滅、または殲滅』で、それは暗に『大使』ロベルト＝コーナーを殺すという物だ。盟主たる『大使』さえ潰せば、烏合の衆たる「灰色の福音」は、謀らずも崩壊する。それを狙っての今作戦だったにも関わらず、彼はロベルトを殺せなかった。それでは「十二の救世鐘」を半壊させたとしても、作戦成功にはならない。

『……クソッ!』

だから彼は、苛立った。それが戦闘に関係のない、彼にとっての

『神』たる「ガンダム」には要らない感情だとしても、彼は苛立たずにはいられなかった。そして管制人格たちも、その刹那の苛立ちが収まるまで、彼に何の報告もしなかった。彼ならばすぐにでも立て直すだろう、その信頼故に。だから彼は気が付かなかった。

『……ッ！？　マイスター！　三時の方角より、推定Ｓ＋ランクの魔導師が……！』

中央都市「オレンジ」を囲むように展開された、超巨大なＡ・Ｍ・Ｆ（アンチ・マギリンク・フィールド）に、

『カートリッジロード』ガコンガコンッ！

「紫電……」

そして、次元世界でも最強クラスのベルカの騎士の存在に、

「……一閃ッ！」

『な、何だとォオオオオッ！？』

彼は、気付く事ができなかった。

クルクルと、空を舞っていたGNソード?ロング・ショートの二剣が、人気のない、砕き砕かれたオレンジ色の路面に、深々と突き刺さった。それは未だ刃毀(はこぼ)れすら無いまま、その銀色の光りを周囲に輝かしていた。

「……」

その銀色に輝く二剣を、リインフォース?とユニゾンINした八神はやてが地面から抜き取る。それはあまり抵抗がないまま、その手の内へとすっぽりと納められた。

「……これが、「剣士」の使う剣……なんやな」

『ふわぁ~、凄い硬度です~。それに、解析できないあの粒子が、剣身を覆っているですよ、マイスター・はやて?』

「……それが、この剣の切れ味、硬度を生みだす要因なんやろ。……多分やけど」

それを暫し、抜き身のまま眺めていたはやては、しかしここが戦場だという事を思い出し、それを眺めるのを一旦止める。名残惜しい感情もあるにはあったが、今は仲間の、そして家族の援護こそが最重要だからだ。

「さて、それじゃいこか、リイン?」

『ハイです、マイスター・はやて!』

はやてはその二剣を慎重に浮遊魔法で自身のすぐ近くに浮かばせると、夜天に変わろうとする空へと、背中に展開されている黒色の六翼を羽ばたかせながら、その身をふわりっと、優しく淡く強く、浮遊させた。その戦場にも関わらず、優しさと儚さと強さを併せ持

つ姿は……正に、優しき王そのもの。

「どでかいのを一発、叩き込むで！」

その夜天を支配する王――かつての第一級捜索指定遺失物だった『闇の書』の本来の姿である『夜天の魔導書』の主にして、「ＣＢ」の『計画』で最大の『不確定要素（イレギュラー）』たる「歩くロストロギア」の異名を持つ八神はやてが、今、この戦場に……

「ディアボリック・エミッション！」

参戦した。それが何をこの世界に齎すのか……それを知る者は、「三つの無限」すら含めて、誰もいない……。

【人は何かに希望を持ち、その道に辿る縄に囓り付きながら生きてる。慌てて囓って自らその縄を千切る者も多いが、それこそ人が何かを生み出す原動力だ。希望など無いと悟った者も、その希望の無い日々が無難に続くであろうことを期待しているのだ。さもなくば、その退屈な日々から死をもって開放される事を期待しているのだろう】

――鴨川秘様から、『ＢＡＣＣＡＮＯ！』のジャンピエール・ア

ッカルドの手記より

第４５話　クラッシュ・ベラー（後書き）

……

（刹那がまだ人間らしさを持っている事を書きたかったんだ）

……

（『００』を万全に持っていくことの難しさ、そして無敵ではない事を書きたかったんだ。それでもオーバーＳ三人と一機を相手に逃走できるだけ、十分以上かもしれないですが）

……

（あと、はやてを持ち上げ過ぎだろと思った方。不快にしてしまい、誠に申し訳ございません。ですが、この作品は基本原作キャラ重視なので、その点に関しては目を瞑って下さい。お願いします）

……

（ここまで読んで下さった皆様に感謝を）

……

（最後に）

……

（シア……愛称を気に入ったのは分かるが、マイスターが負けたの

を理由に作者を駆逐するのはやm）

「マイスタァアアア

第４６話　「超兵」　ＶＳ　「超兵」（前書き）

【知れば誰もが望むだろう、君のようになりたいと！　君のようで在りたいと！　故に赦されない、君と言う存在を！】

――凡人様から、『機動戦士ガンダムＳＥＥＤ』のラウ・ル・クルーゼより

第４６話　「超兵」　ＶＳ　「超兵」

――新暦７５年１１月１４日――

プトレマイオス？の内部にある、四方の壁で囲まれ、手摺（てすり）が備え付けられている暗いブリーフィングルームで、体に密着するタイプのパイロットスーツを着た刹那・Ｆ・セイエイとアレルヤ・ハプティズムは、白い宇宙服を着たスメラギ・李・ノリエガから作戦の説明を受けながら、手元の資料を熟読していた。その資料には、彼らの作戦が行われるであろう領域の地図と、障害になりそうな魔導師たちのデータが、詳細に書かれていた。

「～と、言うわけで、刹那は「灰色の福音（シンデレラ）」の幹部である「十二の救世鐘（トゥエルブ・ベラー）」の壊滅。または殲滅ね？　アレルヤはアップルの転送魔法で代表大統領のすぐ近くまで飛ばすからは、後は一撃離脱……分かったかしら？」

「ああ、了解した」

「大丈夫ですよ、スメラギさん」

「そう……なら、後は特に伝える事もなら、戦開始時刻まで自由行動でいいわ。それじゃ、解散ッ！」

『マイスター、自由行動ということなので、早速女狐なしにショッピングを……』

「刹那、あの……一緒に買い物に行かない？」

『ファａａＡＡＡＡッッック！！　言語道断、考慮なしに即☆拒否ですゥ？』

「エクシア、貴女には聞いていないから、少し黙っててほしいんだけど……私の言ってる事、分かる？」

『Ｉ！　ｄｏｎ‘ｔ！　ｋｎｏｗ！　ですとも！』

「そう……それで、刹那はこれからどうするの？　私と買い物に行

くのか、エクシアとショッピングするのか……ここで決めて？」
『勿論エクシアですよね、マイスターッ！？』
「いや、そのだな……オレはこれから筋トレをしようと……」
「『却下です！！』」

スメラギがそう締め括ると、早速刹那の胸から、可憐で美しい、変態的な声が発せられた。それに続き、フェルトの柔らかで棘のある声も聞こえてきた。それを聞いたスメラギは、この後に起こるであろう惨劇を予測し、急ぎ艦長室へと向かった。後ろからはエクシアとフェルトの、どっちが刹那と一緒に買い物に行こうかという声が聞こえてくる。ついでに、逃げ遅れたアップルの断末魔も。

『た、助け……』
『さようなら、アップル……あなたの事、今夜ぐらいは憶えておくわ』
『マ……』プツリ。

アップルの念話が突然途切れた。それをスメラギは、全力で気にしない事にした。気にしたら負け、気にしないことが最善よ！　と、そう自分に言い聞かせる。

「ふう……ま、さすがにここまでくれば大丈夫でしょう。……それにしても、あのアーカイブから話があるって、一体どんな風の吹きまわしなのかしら……？」

そうぼやきつつ、自室である艦長室に入っていったスメラギは、空いた酒瓶が幾つも転がっている机の上にあるモニターの電源を入れ、「ＣＢ」御用達の、極秘の通信回線を開いた。そのモニターの隅には、サウンドオンリーと書かれていた。

「……で？　どうして私を呼んだのかしら、アーカイブ？」
『……僕が送った資料は読みましたか？』

砂嵐が舞うモニターから、少年のような音程の高い声が聞こえてきた。アップルの話では、確かアーカイブの歳は……そう考えると、不自然としか思えない声であった。

「……？　え、えぇ、拝見させてもらったわ。正直に言うと、見事としか言えない出来ね。一体どうやってあんな極秘の内部資料を手に入れたのか、知りたくなったわ」

だが、スメラギはその不自然さを無視して、アーカイブの問いに困惑気に答えた。そのついでとばかりに、どうやって「灰色の福音（シンデレラ）」から情報を奪取したのかも聞いてみる。

『それは秘密です。……それで、本題ですが、あの資料を見て、アレルヤ・ハプティズムは何かしらの行動を起こしましたか？』

アーカイブはそのスメラギの鋭い追求を流す様に躱わして、彼にとっての本題を切り出した。それにスメラギは少しばかり肩を落とした。今だ正体をイオリア・シュヘンベルグとアップル、そして「深淵存在（マテリアルズ）」の三人にしか明かしていない（驚いた事に、ジェイル・スカリエッティすら知らないという）彼の事を、少しでも解明しようとしたわけだが、その目論見はどうやら看破されていたみたいだ。噂通りの怜悧（れいり）さである。

「アレルヤ……？　いえ、特に何もなかったはずよ？」
『そうですか……結構です。では、何故そんな事を聞いたのかを、お答えしましょう』
「……お願いするわ」

その怜悧さを持つアーカイブの、スメラギからすれば理解できない質問。それに再び困惑気になりながら、アーカイブからの説明を静かに聞くスメラギ。そして、彼女は思った。

この作戦、失敗したかもしれない、と。

肩甲骨まで伸びた長髪を揺らしながら、アレルヤはプトレマイオス？に設置してある転送ポーターに向かって、ゆっくりと歩いていた。その中で、彼は自身の相棒たるアリオスへ、これからどうするか、意見を聞いてみた。

「……どうしよっか、アリオス？」

『私に聞かないで下さい、マイスター。でも、要望ならあります！』

「要望？」

その問いに、アリオスがやけに興奮気味にそう答えたのに苦笑しつつ、アレルヤは先を促した。それに応えるように、アリオスが饒舌に言葉を捲し立てる。

『私が前にヴェーダにアクセスして情報を取得していた所とても興

味深い物がありました』
「へぇ、それはどんな乗り物なんだい？」

きっとアリオスなら乗り物だろうと思ったアレルヤは、さり気無く相槌を打ちつつ、話を聞いた。それに気を良くしたのか、アリオスはさらに早く言葉を捲し立てる。

『それは第３２管理世界にしかない物なのですがそのフォルム！その性能！　その機能！　そのどれを取っても最高としか表現できない乗り物なんです！　それに私は乗りたいですマイスター！』
「アリオスがそこまで絶賛するなんて、本当に凄い乗り物なんだね？　それでえっと……それは何ていう乗り物なんだい？」

アレルヤはアリオスの説明を聞いて、その乗り物に興味を持ったのか、そう尋ねた。後悔する事になる、という事を知らずに。

『それは通称「世界に羽ばたく翼」「最速のマシン」「あの世すら振り切るモンスター」と呼ばれるものでそれに乗った者は例外なく嘔吐（おうと）するそうです！　いや何が素晴らしいかと語れば嘔吐ですよ嘔吐!?　タクシーなのに嘔吐させるって……最高じゃないですか!?　どんだけ速いんだといいますか凄く乗ってみたいと言いますか……乗りたいです、マイスターッ！』
「……そ、そうかい？　僕はそれを聞いて、凄く乗りたくなくなったよ？　まあアリオスが「速さ」と「広さ」を好きなのは知っていたけど……それ、本当にタクシーなの？」
『私も自信がありませんね』
「……そうだよね」

アリオスの説明を聞いて、先程とは逆に、顔色が悪くなるアレルヤ。タクシーなのに嘔吐させるって……という思考が、アレルヤの

中で渦を巻く。そんなタクシーなど乗りたくないのだろう。例え自身の相棒が希望に満ちた声で嘆願していたとしても、アレルヤはそんな変なタクシーなどに乗りたくはなかったのだ。

『あ、でも大丈夫ですよマイスター！　一応、先程ミス・スメラギにタクシー本体とマイスターの運転免許、及びタクシードライバーの資格を要請しておいたので、何時でもマイスターはタクシードライバーになれます！』

「へぇ、そうなんだ……って、え？」

『さあ、行きましょうマイスター！　嘔吐の先に待つ未知の世界まで！』

「……分かったよ、アリオス。君の言う通りに、そのタクシーを運転するよ……ハァ」

だが、すでに手を回されていた事を受け、諦めモードとなったアレルヤは、溜息を何度もしつつ、そのまま転送ポーターに行き、そのままタクシー会社の方に憂鬱げに行った……ちなみに、アリオスは終始ご機嫌であった事を、ここに記しておく。

――新暦７５年１１月１５日／『００』ＧＳが、「十二の救世鐘（トゥエルブ・ベラー）」の『大使』ロベルト＝コーナーの前に現れた時――

その火鉢で突かれるような痛みは、ちょうど第３２管理世界の代表大統領を殺した時に、アレルヤの脳内にヅカヅカと踏み込んできた。

『あ……頭が……！』

『マイスターッ！？』

その頭の中を掻き回すような痛みに、アレルヤは苦痛の声を漏らした。そして同時に、彼は思い出した。これと同じような痛みを、かつて何度も味わったことを。

『こ、これは……まさかッ！？』

『「ガンダム」……よくも大統領を！』

『アクセラレイション、ターゲットロックオン、ファイア』

その痛みを思い出す事に気を取られ、橙に染まった空中で停止してしまっていたアリオスへと、一発の魔力弾丸がカンッ！　という軽い音を立てて、胸のあたりに着弾した。それはアリオスの装甲を削り取ることすらできていなかったが、その魔力弾を撃ってきた相手に顔を向けたアリオス――いや、そのマイスターであるアレルヤは、その桃色の鈍重そうな体躯を持つ「Ｍ・Ｓ（ティエレンタオツー）」を見て……ビシリッと、凍りついてしまった。

『……ちょ、超兵！？』

『……え？　マイスター、貴方は一体、何を言って……』

『タオツー、もっと魔力をカートリッジに込めろ！　ここで魔力切れを起こしても構わんぐらいにな！』

『ヤー、リッター』

その凍りついている合間にも、タオツーからは間断無き射撃が続けられる。それを避けようともしない、人型のアリオス。それを不審がったタオツー、そしてソーマ・ピーリスは、一度射撃を中断し、相手の動向を探った。しかし、それでもアリオスは、大統領を殺した空域から、微動だにしない。

『……罠だと思うか、タオツー？』

『……ｓｏｒｒｙ、リッター。Ｉ　ｄｏｎ‘ｔ　ｋｎｏｗ』

あまりにも不可解な「羽付き」の様子に、思わず攻めるべきかどうかを迷ってしまうピーリス。だが、そんな彼女よりも、アレルヤの方がさらに困惑していたのを、彼女は知らない。知る術がない。

『そんな、どうして……超兵はもう、僕以外いないはずなのに……！』

『……本当に、アレが超兵なのですか？　あのマリー・パーファシーと同じ？』

『どうして……どうしてなんだ……超兵は皆、皆……』

ブツブツと、どうして、どうして……を繰り返すアレルヤを見て、アリオスは本当にあの改造型のティエレン――ヴェーダの資料によれば、ティエレンタオツー――が超兵なのだという事を悟った。そして、それに懐疑を持つ。何故なら、彼のマイスターであるアレルヤ・ハプティズムを除いた超兵は、四年前に……

『あの時に、僕が殺したは……あぁあああああ！』

『ま、マイスターッ！？』

その四年前の罪の象徴、決して触れてはならぬ領域（記憶）、そして……彼女との永遠の離別が、アレルヤの頭の中に、走馬灯の如く蘇って

きた。彼が犯してしまった同類殺しという罪を、無意識ながらに封印していた悪しき記憶を、そして……彼女のあの「何故？」と問い掛けてくる死に顔を、彼はその胸の内に取り戻していく。

ヒトの感情を磨り潰す拷問を受けているような痛みを感じながら、ではあったが。

『アァアアアッ！？』

『マイスター、気を確かに！』

アレルヤがそんな錯乱状態のまま、ピーリスのタオツーへと我武者羅に、武器を何も持たずに、頭から超速度で突っ込んだ。ただし、人型の頭で、である。彼にはもう自分が今どんな形態になっているのかを、理解する余裕すらなかった。ただただこの場から逃げ出したい。その一心で、彼は無謀にも程がある攻撃を、ピーリスのタオツーへと繰り出す。

『……何だ、これは？』

『……Ｉ　ｄｏｎ‘ｔ　ｋｎｏｗ、リッター』

無論、そんな攻撃を喰らうようなピーリスではない。伊達で「超兵」を名乗っているわけではないのだ。見事な体捌きと読みで、アリオスの左右の拳から繰り出される、訳のわからない攻撃を凌いでいくピーリス。その後光すら垣間見える見事な御凸様には、汗一つ、浮かんではいなかった。それほど、アリオスの攻撃は単調で、無茶苦茶な物だったのだ。

『……訳が分からないが、どうやら「羽付き」は錯乱しているようだ。ここで決めるぞ、タオツー！』

『ヤー』

そして、ピーリスは様子が豹変したアリオスに、未だ疑惑の目を向けながら、勝負を決める攻勢に出る事にした。その判断を、彼女の「M・S」ティエレンタオツーが了承し、推奨する。

『ハァアアアッ！』
『セイクリッドクラスター』

右手に備え付けられた、カートリッジの魔力と術者の魔力で魔力弾丸を発射する魔導ライフルを牽制目的に放ちながら、ピーリスはその足元に、朱色（しゅいろ）の近代ベルカ式魔法陣を展開し、その左手に大きな圧縮魔力弾を作り出した。それをピーリスは、後退しながらアリオスの胴部に撃ち出すと、その至近距離で爆散させ、無数の小型弾殻によってアリオスを向こう側に吹き飛ばした。

『あああああ、あ、あああああああッ！？』
『マイスター、お気を確かに！　今は戦闘中です、目の前の戦闘に集中して下さい！　相手はあの「超兵」ソーマ・ピーリスですよ！？　第３２管理世界最強の魔導師である彼女なんですよ！？』

そのピーリスの攻撃により、操り糸で操られた人形みたいに、橙の体を方々に振り回され、弾き飛ばされるアリオス。だが、その我武者羅な攻撃は、一向に収まる気配を見せなかった。それに先程よりも大きな嫌悪感を抱いたピーリスは、今度は一歩で詰めたゼロ距離から魔導ライフルを発射し、握りこまれた左手も、アリオスの顔に密着させ、そこから射撃魔法を放つ。

『インパクト』
『キャノン！』

拳大の、朱色に輝く魔力弾が、アリオスの顔面を後ろに押し出し、その後頭部を硬い路面の上に激突させた。盛大な音が、オレンジ色の風景の中に鳴り響く。しかし、それほどの猛攻をしても、まだピーリスの攻撃は終わらない。終わらせるつもりなど、毛頭ない。

『リッター、そろそろ援軍が到着する頃です。今が決め時だと思いますが……発動しますか？』

『ああ。いつでもいい、やってくれ、タオツー！』

『ヤー、リッター。それでは行きましょう、飛弾……』

『一閃！』

地面に仰向けとなったアリオスの上に圧し掛かったタオツーは、その右手の魔導ライフルを、アリオスの鋭角的な胸部に当て、そこから朱色を纏った一撃必貫の魔力弾丸を、容赦なく、ゼロ距離で放った。その飛弾一閃は、ピーリスの魔力＋カートリッジの魔力＋魔力付与の魔力でその威力を高めており、一撃必貫の元に、ＡＡＡクラスの魔導師すら無事では済まない威力を持つ、物質化した魔力弾丸による魔力付与攻撃である。そんな物騒な魔法が、アリオスの胸部へと、ゼロ距離から発射されたのだ。無論、次元世界でもトップクラスの装甲を持つ「ガンダム」といえど、無事でいられる道理など、ない。

『が……は……！』

『胸部に大きな損傷！　しかし、戦闘には支障がありません！　さあ、そろそろ目を覚まして下さい、マイスター！』

『あ……アリオス？　戦況は今、どうなって……』

だが、奇しくもその一撃が、アレルヤの意識をこの世界に引き戻す要因となってしまった。その事実に気付かずに、二射目を放とうとするピーリス。だが、それを視界に入れたアリオスは上半身を急

いで起こすと、その魔導ライフルの銃身を握り、飛弾一閃を自身の横に外させた。

『な……！』

『どうしてこうなっているのさ！？』

『……世界の悪意が見えますね、マイスター？』

飛弾一閃がアリオスの横の地面に、大きな穴を空けながら着弾したのを見たアリオスは、握っていた銃身を、尋常ならざる握力でもって握り潰した。グシャリッという音が、アレルヤとピーリスの耳に聞こえる。その音に反応し、ピーリスが視線をアリオスから魔導ライフルに変えた。瞬間、アリオスはピーリスを押し倒ゴホゴホッ、押し退けて、自身と同じ、橙色に染まり切った空に飛び上がる。

『……「超兵」っていう渾名から、気付くべきだったんだ』

『普通に私達は「超が付く程の優秀な兵士」だと思っていましたからね』

眼下にいるタオツーが、此方を追おうと、必死に地面をホバー走行している。それを背後に置き去りにしつつ、今の精神状態では戦えないと判断したアリオスは、事前に示されていた撤退ルートへと進んでいった。目的地は……恐らく「十二の救世鐘」を壊滅させたであろう『００』がいる合流ポイントだ。

『……どうして超兵が存在しているのかはまだ分からないけど、今は撤退しよう、アリオス』

『イエス、マイスター。それがベストかと。この場には壊滅させたとはいえ、「灰色の福音」のオーバーＳランク魔導師がいますし、それに……機動六課も、此処に来て……マイスター！』

『クッ！？』

だが、その撤退するルート上に、夕陽から飛び出してきた金色の雷光を纏った何モノかが、いきなり飛翔してきた。その雷光を纏いし何モノかは、両手で持った大きな剛剣で、アリオスへと斬りかかった。その重い斬撃を、アリオスはフロントアーマーの裏側から取り出したＧＮビームサーベルで受け止め、鍔迫り合いに持ち込む。

『やっぱり、そう都合よくはいかないか……！』

『……世界は何時でも私達に辛く当りますからね』

その飛翔してきた者を正面から見据えたアレルヤとアリオスは、全身を大きく震えさせた。それは歓喜か恐れか……それは、彼ら自身にも分からなかったが、それでも冷や汗が流れる感覚を、アレルヤは感じていた。

「「羽付き」……！」

『ソニックムーブ』

『アリオス！』

『変形、飛行形態！』

互いの目がかち合った。それを感じた刹那、二つの金色と橙色の、速さという次元では他のモノを寄せ付けない者共が、その場から消え去るように動いた。

そして、何処からともなく現れた金色の剛剣と桃色の光剣が、衝突、離れて、衝突し、夜天に墜ちそうとなっている夕空に幾つもの火花を散らし、幾条もの光の軌跡を描いていった……。

【過去にこだわるものは、

未来を失う】

――つぁーる様から、ウィンストン・チャーチルより

第４６話　「超兵」　ＶＳ　「超兵」（後書き）

Ａ☆ＴＡ☆ＭＡ☆ＧＡ！？　を入れると、まともな戦闘になりませんでした。これも作者の力不足故、すみません！　しかし本編でシア分を補給できたのは大きかったですね、やっぱりこっちの方にも出したかったんで。「もっとシアを出せ！」「変態成分足りねえぞ！？」「情景描写サボんな！」「心理描写少なくね？」「もっと本気出せや作者ぁあああ！」な感想も、心待ちにしております！
ここまで読んで下さった皆様に感謝を。

最後に。

何度読み返しても、誰とは言いませんが、ヘタレとしか思えないｗ
カッコいいのを執筆しようとしていた当初の目標はどこに行ったのでしょう……謎ですｗ

第４７話　賛美　ＶＳ　運命（前書き）

【２つの流星は流れて行く。怒りの剣を掲げ、敵対心を抱き、２つの流星は嵐となり、何者も寄り付けず、２つの流星は光速の嵐を巻き上げる】

――アストレア様から

第４７話　賛美　ＶＳ　運命

――新暦７５年１１月１４日――

「……それは、本当なの？」

『嘘を言うとでも思いますか？　生憎、この切迫した情勢の中で、そんな無駄な事をする趣味はありません』

アーカイブから齎された情報は、スメラギの予想を遥かに超える物だった。吐き気が、怖気が、スメラギの全身を駆け廻る。その気持ちの悪さを必死に抑えながら、スメラギは思う。

ああ、やはり世界は、四年前から、そしてそれ以前からも、何も変わってはいなかった、と。

「もしそうなら、作戦を変更しなければならないわね。……今のアリオスには、アレルヤたっての希望で、脳量子波遮断機能を付けていないんだもの。万が一、「超兵」ソーマ・ピーリスと遭遇すれば、四年前の時みたいに……」

『待って下さい』

だが、スメラギはすぐに気持ちを切り替えると、作戦プランの変更を、頭の中で数十も練り始めた。しかし、それにアーカイブは待った、という。意味が分からない、と表情で語るスメラギ。その空気を読み取ったのか、アーカイブはすぐさま説明を、論理を話し始めた。ゆっくりと、諭す様な調子で。

『遅かれ早かれ、運命は彼ら「超兵」に互いを殺し合う死闘を強制させる事でしょう。なら、今戦おうが後で戦おうが、事の進退には

影響を与えないと、僕はそう思います。……今作戦で、アリオス「ガンダム」のガンダムマイスターであるアレルヤ・ハプティズムは、「超兵」ソーマ・ピーリスと戦うべきだという意見を、僕から提言させてもらいますよ、スメラギさん』

しかし、アーカイブのその説明、論理は、到底スメラギが許せる物ではなかった。感情面ではなく、あまりにも高い危険性という方で。だからスメラギは語気荒く、そのアーカイブの提言を全力で拒否した。

「なッ……バカな事を言わないで！　あなたは四年前のアレルヤとマリー・パーファシーの戦いを知っている筈でしょうッ！？　なら、それがどれだけ危険な事か……」

もっとも、それで引き下がる様な相手だったら、どれだけ楽だった事か……。

『勿論分かっています。ですが、ハレルヤさん亡き今のアレルヤさんが、どれだけの戦闘能力を持っているか……正直に言いますと、僕はそれを知りたいのです。知っておきたいんです。それは、貴女も同じじゃないんですか、スメラギさん？』

「……！」

図星を指された事で、スメラギは押し黙るしかなかった。彼女にも、今のアレルヤがどれだけの戦力になるか、未知数なのだ。だからこそ、作戦を立て辛い。それを考慮したスメラギの出した結論は……

『……もし貴女が決められなかったら、これからイオリアさんとジェイルとで話し合いますが……どう』

「いいえ、やらせてみましょう、その超兵と超兵による戦いを、ね」
『……分かりました。それでは、これで……』
「……ええ」

……結局、スメラギはアレルヤを信じる事にした。作戦を立てる際の不安要素を除く、という打算的な結果も狙いつつ、彼女はガンダムマイスターであるアレルヤが、この程度ではくたばらないだろうという信頼でもって、アーカイブの案に同意し、作戦強行の意を示した。

「……ごめんね、アレルヤ」

例え、これで自分が糾弾されようとも、一向に構わない……そんな決意を持って、スメラギは机の上にあった高級そうな酒をグラスに注ぎ、その琥珀色（こはくいろ）の液体を一口、口に含んだ。

木でできたリビングの中央にあるソファーに、ゆったりと座っていたセルゲイ・スミルノフは、その息子であるアンドレイ・スミルノフと共に、明日の警備の配置について話し合っていた。そして、その話し合いが一息ついた所で、可愛い熊柄模様のパジャマを着たソーマ・ピーリスが、眠たげな目を擦りながらやってきて、大佐の隣のソファーに座りこんだ。その姿を熊親子は、微笑（ほほえ）ましく見守っ

ている。

「……大佐。もう一度、あの話をしてくれませんか？」
「……分かった。今ホットミルクを持ってくるから、少し待っていてくれ、ピーリス」
「……了解です……大佐」

何時ものピーリスの頼みを、セルゲイは快く引き受け、彼女の為のホットミルクを作りに、柔らかなソファーから立ちあがると、そのまま奥のキッチンにまで歩いていった。その後ろ姿を眠たげに見つめていたピーリスに、アンドレイは眠気が吹き飛ばない程度の小さな声で話しかけた。

「またあの話かい、ソーマ？」
「……やっぱり、おかしいですか？　私のオリジナルであった彼女――マリー・パーファシーの話を聞く事は？」
「いや、おかしくなんてないさ。……でも、オリジナルなんて言い方は、きっと父さんが悲しむぞ？　ソーマはソーマ、何だからな」
「……分かっています、アンドレイ。私が私以外の何モノでもないことは、私が一番よく分かっています」

だが、その起こさない措置に反して、話の内容がピーリスの目を覚ましてしまったようだ。その先程よりも吊りあがってしまった目尻を見て、話しかけた事を後悔し始めるアンドレイ。彼の父であるセルゲイがこれを見れば……「アンドレイ、貴様……ピーリスの安眠を妨げるとは何事だ！？」といって、彼の頭に拳骨を喰らわせかねない。それに心中で溜息を吐き……そして、そんな事を考えられるようになった自分に苦笑した。

「……ふふ」

「……何を笑っているんでしょうか、アンドレイ？」
「いや……ソーマのおかげだと思ったのさ。父さんとこうやって、笑いながら一緒に過ごせるようになったのは」
言いつつ、満足げな笑みを浮かべるアンドレイ。その顔を見たソーマは、表情をあまり出さなかったものの、どこか恥ずかしげだ。その表情のまま、彼女は静かにこう言った。
「……私は何もしていません。私はただ、分かり合おうという行為を、大佐と貴方に促しただけですから」
「いや、それが大事だったんだよ、僕と父さんに「ぬぅあああああッ!?」父さん!?」
「大佐ッ!?」
そんな穏やかな話をしていると、キッチンの方からセルゲイの悲鳴が聞こえてきた。敵襲かと思い、速攻でデバイスを構え、キッチンに押し居る二人。そんな二人が見詰める先で、愛らしいフリフリ付きの、熊柄模様がプリントされたエプロンをしたセルゲイが……ホットミルクを床下に零していた。その様相を見て、思わず脱力する二人。
「……す、すまん。ミルクを零しただけだ」
「「……ほっ」」
セルゲイの申し訳ない声が、その場に響く。その声を聞いた二人は、安心し、安堵の吐息を漏らした。そして、思う。
ああ、平和だな（ですね）、と。

――新暦７５年１１月１５日――

第３２管理世界の中央都市「オレンジ」。そのオレンジ色のビルが立ち並ぶ都市群の中で、金色と橙色の、霞（かす）んで見える流星は、その名に恥じぬ超高速でもってぶつかり合っていた。

「ハァアアアッ！」

『クソォオオオッ！』

ぶつかり合う衝撃で、ビルの窓ガラスが一斉に罅割れた。音速によって生じたソニックブームが、合金でできた建築物の壁を粉々に砕く。金と橙の閃光が目を焼き、嵐のような暴風があらゆる物を吹き飛ばす……

そんな残像しか捉えられない、瞬きの内に相手が消える、尋常ではないソニックブームが発生する超常の高速戦闘は、オーバーＳランク魔導師である「超兵」ソーマ・ピーリスですら、迂闊（うかつ）には手出しができない物だった。

余りにも、「速度」の次元が違い過ぎる為に。

『こ、こんな戦いがあるなんて……！』

ソーマの反射を持ってしても反応し切れないほどまでに、その戦いは、ただ純粋に速かった。まるで戦っているのではなく、速度を競い合っているようだ。

「クッ……やっぱり、四年前よりも速くなってる……！」

『Ｄｏｎ‘ｔ　ｗｏｒｒｙ，ｓｉｒ．　Ｓｉｒも四年前より、ずっと速くなっています』

「……ありがと、バルディッシュ。それじゃあ、行くよッ！」

『Ｙｅｓ，ｓｉｒ！』

その超高速戦闘を行っている、素晴らしきおぱ～いを持つ美しい女魔導師――運命の名を持つ金色の閃光、フェイト・Ｔ・ハラオウンが、アリオスに突進し、両手に持った大剣状のバルディッシュ（ザンバーフォーム）を、凄まじい勢いで、右肩から左下に振り落とした。まるで怒りを、敵対心を叩きつけるように。

『四年前よりも、段違いに速くなっているなんて……！』

『気にしなくてＯＫです、マイスター！　私達だって、四年前とは大違いなんですから！』

『……そっか、そうだねアリオス。でも、今は撤退途上だっていう事は忘れないでね？』

『忘れていました、マイスター！』

その擦（す）れ違いざまの、凄まじい一撃を、人型に戻ったオレンジ色の流麗な体躯を持つアリオスが、その右手に持ったＧＮビームサーベルで火花を散らしながらいなし、再びフェイトとは反対側を飛翔する。今だどちらにもクリーンヒットは無かったが、この時点でアリオスはすでに撤退ルートの終着点に到着していた。故に、アレルヤとアリオスの男二人は、その身を急停止させ、アップルの転送魔

法の発動を待った、が……。

『……何をしているんでしょうか、アップルは？』

『……アリオス、作戦を変えないかい？』

『どういった風に変えますか、マイスター？』

『取り敢えず、刹那とアップルに合流して、撤退はその後にする……のがいいと思うけど、どう？』

『それでいきましょう、マイスター』

十数秒待っても、展開の兆候すら現れない。それにこのルートはもう使えないと判断したアリオスとアレルヤは、『００』に通信をかけ、合流するポイントを話し合う。

『どうする、刹那？』

『一旦、フェルトたちの所にまで行ってみよう。何か不測の事態が起きたのかもしれないからな』

『了解。それじゃあ合流ポイントは……アップルとフェルトが待機している、ホテル「アレイスター」でいいね？』

『ああ、了解した』

その合流ポイントを決めている間にも、フェイトは攻める事を止めずに、その剛剣を目視不可能な速度でアリオスに振り回してきた。それをギリギリの線でいなし続けながら、アリオスは尖鋭的なフォルムに変形し、更なる上空を飛翔して、フェイトを突き離そうとした。

『しつこい！』

「逃がさない！」

だが、どれだけ速く上昇、下降、飛翔を繰り返しても、一向にア

リオスはフェイトを突き離せず、フェイトはアリオスに迫れなかった。必死の形相で捕まえようとするフェイト、必死の格好で逃げようとするアリオス。その差は心身共に殆どなく、故に差は縮まらない。縮まるわけがない。その様は正に光速の流星で、そのどちらもが次元世界最速を名乗れるのだから。

『このアリオスでも同等だなｎ……ガァアアアッ！？』
『マイスター！？　まさか……まさかぁあああッ！？』
「ッ！？　バルディッシュ！」
『Ｊｅｔ　Ｚａｍｂｅｒ』

が、もし縮まる事があるとすれば、それは……第三者の介入があった時であろう。

「今だ、ハラオウン執務官！」
『Ｉｔ‘ｓ　ａ　ｃｈａｎｃｅ！』

アリオスは、知らず知らずのうちに近づいてきていたタオツーに気付けずに、脳量子波の干渉による頭痛によって、飛行を停止させられ、その場で頭を抱えてしまった。その絶好の隙、絶対の勝機を前にして、フェイトはさっきよりも二回り以上も大きくした剛剣を、一度大きく振り回し、右肩に担(かつ)いだ。アリオスはその仕草を見て、しかし頭の中を掻き回す頭痛によって、何の対抗策も取れない。

「ジェット……ザンバァアアアッ！」

頭を抱え続けるアリオスへと、ジェットザンバーの身動きを封じる剣風が飛んだ。それは見事にアリオスを捉え、その身動きを封じる。左右に両手両足を広げられる格好で空中に磔(はりつけ)にされたアリオス。そんなアリオスへと、フェイトは巨大化した剛剣を、雷電と共に振

り落とそうとした……が。

『な……これは、Ａ・Ｍ・Ｆ（アンチ・マギリンク・フィールド）！？』

『リッターッ！？』

その刹那に、中央都市「オレンジ」を覆うように、巨大な「Ａ・Ｍ・Ｆ」が展開された。その結界はアリオスの拘束を、フェイトの剛剣を一気に弱体化させる……も。

「いっけぇえええええッ！」

それを完全に封じるまでにはいかなかった。

『がぁあああああッ！？』

『ま、マイス……！』

その衰えた筈のフェイト渾身の一撃は、アリオスの胸部を見事に抉り斬った。右胸部から左脇腹まで奔る、真っ赤に溶けた抉られた跡が、アリオスの胸部に刻まれる。それに痛みこそ感じなかったが、装甲を抉られた衝撃で、意識を朦朧（もうろう）とさせるアレルヤ。

「これで終わりです！」

『Ｊｅｔ　Ｚａｍｂｅｒ！』

そんな大打撃を受けたアリオスへと、フェイトは再び、雷刃の一撃を振り落とそうとする。それをぼんやりとする頭で見ていたアレルヤは――その視界に、捉えてしまった。

『……ぁ』

今にも崩れそうな、百七十六階建てのビルが横に倒れそうになっているのを。

『……ぁあ』

そして。

『あ……あぁ……！』

その下に縮こまる、足に絆創膏を張った小さな女の子を。

『……あ……』

彼は……その女の子に、失敗作の烙印を押され、何も知らされずに殺されかけた自分とハレルヤ、そして……彼がその手で傲慢にも殺してしまった、マリー・パーファシーという少女を、その眼で重ねて……見てしまった。

『……ぅうおぉおおおおッ』

叫び、一転、叫ぶ。

「トランザム！」

『と』

と。

「ＴＲＡＮＳ－ＡＭッ！？」

力強く、しかして、相棒は困惑気に、その絶対なる力の象徴を……唱えた。

『マイスター、どうして……！』

アリオスの困惑した声を聞いて尚、今にも死にそうな女の子を助けようと、自らの過ちを清算しようとせんアレルヤは、現状も任務も忘れて、ＴＲＡＮＳ－ＡＭを発動させた。アリオスの体が血よりも尚濃い紅に染まり、天使の権能を振るう体へと変わっていく。紅くなったＧＮ粒子が体中から吹き荒れ、フェイトの拘束を吹き飛ばし、その身に自由を獲得させる。

「え……しまった！」

そのフェイトの声すら後ろに置き去りにし、ＴＲＡＮＳ－ＡＭを発動させ、尖鋭的なフォルムに変形したアリオスは、そのまま一直線に飛翔した。紅い光跡が橙色の空に一線、真っ直ぐに引かれる。その挙動を見たフェイトは首を傾げた。どうして「羽付き」は私とは反対の方向に進むのか？　と。

『Ｓｉｒ！　「羽付き」が向かう先に、九歳ほどの女の子を発見しました！』

「うそッ！？」

しかし、その疑問も、バルディッシュから齎された情報により、吹き飛んでしまった。見れば、「羽付き」の向かう先には九歳ほどの少女が、その身を震えさせていた。しかも、その上からは巨大な

建築物が、今にも倒壊しようとしている――これを見たフェイトは、まず「羽付き」の意図を疑った。何をする気なのか、と？　しかし、それは彼女には分からない事だと斬って捨てる。今は一秒たりとも無駄にできないからだ。次にフェイトは、その女の子をどう救出するかに思考を張り巡らせた。出遅れた彼女には最早どうしようもなかったが、それでも彼女――フェイトには、その女の子の救出を諦める、などという選択肢は存在しなかった。助ける……絶対に。その想いが彼女を突き動かし、前に進ませる。

だが、それは決定的に遅かった。いや、気付いた時には、既に手遅れだったのだから、彼女には何の比もないのだ。寧ろ、比があるとすれば、緊急事態だというのに、こんな戦闘空域で縮こまっていた女の子にこそ比があるだろう。

最も。

手遅れなのはあくまでフェイトのみであって、もう一機の方は、ＴＲＡＮＳ－ＡＭまでをも発動したおかげで、間に合うかもしれない距離にいたが。

『間に……合え……！』

『しょ……正気ですか、マイスター！？　そんな事をすれば、あの温厚で寛大なマイスター・イオリアも黙ってはいませんよ！？』

『それでも……間に合えぇえええええッ！』

四年前に魔導師を戦慄させ、数々のオーバーＳランク魔導師を屠（と）殺（さつ）した紅き光を放ちつつ、アリオスが夜天に近くなった空を、全力で駆け抜ける。その禍々しい光を纏うアリオスを見た女の子は、自分の方に倒れ込んできそうなビルなどよりも、アリオスの方に怯えた。女の子には、自分の命を刈り取りに来た悪鬼に見えたのだ、ア

リオスが。

そして、そんな一人と一機を巻き添えにしつつ、オレンジ色に塗られた高層ビルが、遂に完全に重力に引かれ、地面に倒れ込んだ。

「クッ……！」

ドォオオオオオンッ！　という巨大な音が、途轍もない衝撃波と共に、周囲へと響き渡った。その衝撃波に押されるようにして、後ろに少し下がるフェイト。結局、彼女は間に合わなかったのだ、女の子がいた場所までに。それに悔しさを感じていると、盛大に撒き上がった砂煙の中から飛び出してくる機影を一つ、彼女は捉えた。

「なッ……！」

『そ、そんな……！』

だが、その機影を見たフェイトとソーマの二人は、信じられないとばかりに、驚きで目を見開く。有り得ない、嘘だ、信じられない……二人の表情が、そんな言葉を語っている。

「うぅ……う……ヒッ！？」

そんな二人の視線を釘付けにしている橙の機影に抱えられた女の子は、桃色の髪をポニーテール状に結んだお姉さんに貼られた絆創膏を、薄ぼんやりとする視界の中で眺めていた。またあの優しそうなお姉さんと会えないかな？　と思いつつ。しかし、次いで、自分がまだ生きていることを不思議に思った女の子は、視線を上に向け……喉から悲鳴を上げかけた。

『間に……合った……！』

『……マイスター』

その女の子の視線の先には、胸部をごっそりと抉られた橙の機影――ＴＲＡＮＳ－ＡＭが終了して、元の橙色に戻ったアリオス「ガンダム」がいた。その「ガンダム」は厳(いか)つい「ガンダム」フェイスを女の子の方に向けつつ、しっかりと、しかし優しげに、女の子を胸の前に抱き抱え、まるで揺り籠のように安定した飛翔を続けていた。だが、女の子の方からすれば、「ガンダム」が自分のすぐ近くにいるという事実に、恐怖を感じていた。何故なら、「ガンダム」は第３２管理世界……いや、次元世界中で有名だからだ。

老若男女構わずに、皆殺しをする「悪鬼」として。

「いや……まま……ぱぱ……たすけ……助けてぇえええええッ！？」
「その子を離せ、「羽付き」ッ！」
「その子を離さないか、「羽付き」ッ！」

女の子は叫んだ、自分を殺そうとしているであろう悪鬼から逃れる為に。それに応えるかのように、フェイトとソーマはアリオスのすぐ後ろを追いつつ、アリオスへとそう叫んだ。それを聞いたアレルヤは、頭の中を突く激痛に耐えながら、すでに自身が稀代の殺人者であることを、再び心中で確認し……アリオスを静かに、『００』ＧＳとの合流地点でもあるホテル「アレイスター」の屋上に着陸させた。

『『……』』
「「「……？」」」

その行動に、思わず眉を潜めるフェイト、ソーマ、女の子の三人。しかし、その三人のその態度を何処吹く風というように無視して、

アリオスは、その場にいる誰もが想像できない事をした。

「えッ！？」

「「なッ！？」」

『……これで、大丈夫』

『……マイスター、貴方と言う人は……！』

そう、彼に抱えられていた女の子を、その腕を持って屋上に優しく降ろし、そこから静かに飛び立つという事を……「ガンダム」であるアリオスが、したのだ。

そのあまりの予想外すぎる行動に、瞬時の対応が取れないフェイトとソーマ。そんな二人を脇目に、アリオスは夜天に墜ちそうな空から、悠々と飛び去っていこうとし……

『……ごめんよ、アｒ』

その場に発生した破壊の闇（ディアボリック・エミッション）に、呑み込まれた。

切っ掛けは何だったのか……今となっては、それすら思い出せない。

しかし、この身は確かに運命に惹かれるように、賛美を持って、この世界に産み落とされた。

他ならぬ、彼らの本体であった「闇の書」の原本たる存在により。

「……」

最も、原本とはいえ、其れは「闇の書」と比べれば、遥かに――比べることすらおこがましい程、弱い存在である。唯英知を収集し、蒐集し尽くすその存在は、幾ら盾の守護獣がいたとはいえ、よくぞ今まで現存できた物だと、彼女は思う。

「……ふん」

最も、何処とも知れぬ次元空間に数千、数万、数億？　年も、ずっと漂っていれば、確かにその存在を見つけることすら至難の業になるだろう。寧ろ、古代ベルカは、よくぞそんな存在を見つけ、模倣した物だと、彼女は関心した。……いや、語弊があるか。よくぞその存在を、ここまで戦闘用に改造できた物だと、思い直す。

「無様だな、マスタープログラム……」

そもそも、「夜天の魔導書」は各地の偉大な魔導師の技術を蒐集し、解析・研究する為のロストロギアだと云われているが、それだけの為に、果たして「守護騎士（ヴォルケンリッター）」や、当時のベルカでも最高クラスの性能を誇るユニゾンデバイスなどという過剰戦力を必要とするだろうか？　いや、そう思う方がおかしいのだ。これではまるで、戦

争すら仮想していたと考える方が自然だろう。古代ベルカは戦乱の時代だから、当たり前と言えば当たり前な話なのだが……

「その程度で、よくぞ主人(しゅじん)ッ……の隣に居座れる物だ……このうつけめがッ！」

そんな戦争すらこなせる異常戦力を保有していた「夜天の魔導書」。それを、当時の古代ベルカの魔導師と原本が協力し、幾星霜もの年月を掛けて、更なる戦闘用の改造を施した事で誕生したのが「闇の書」である。その戦闘能力は古代ベルカにおいてすら規格外とまで言わしめ、あの古代ベルカでも最強と名高い聖王ですら、ゆりかごを持ってしても迂闊には手出しができない程だった。

「うつけが、うつけが、この……うつけめがぁあああッ！」

まあ、その「聖王のゆりかご」ですら、原本の知識を基に、太古の時代の人々が造った遺失物(ロストロギア)だったので、原本を敵に回す愚を避けた結果が、「戦わない」という事だったのだから、迂闊には手出しができない、という表現もまた適切ではないのかもしれない。だが、その戦闘能力は、まさに「ベルカを象徴する二本柱」と称するに値する物である事は、周知の事実であろう。

「何故我を召喚せぬのだ、あのうつけめはッ！？　さっさと召喚すれば、万事解決するというのにッ！？　……こうなれば、主人にでも掛けあうしか……あう、主人……ポッ？」

そんな「夜天の魔導書」「闇の書」「聖王のゆりかご」という、古代ベルカでも最強クラスのロストロギアの制作に関わったその原本は、古代ベルカにおいて、こう書き記されていた。

「天使（セファー・ラジエル）の魔導書」……またの名を、「遺失せし秘術の聖地（アルハザード）」と。

【全ての大偉業は、
最初は不可能事
だと言われた。】

――つぁーる様から、トーマス・カーライルより

第４７話　贅美　ＶＳ　運命（後書き）

批判異論矛盾、バッチ来いやぁあああ！　返り討ちにして上げますよ！

シアがッ！！

正直な話、設定を捏造するのも程々にしろと、作者は自分にも言い聞かせたいです……なのはシリーズみたいに「アルハザード」を絡ませようとした結果がこれですよ！？　もう盛大に詰って下さいお願いします！　寧ろ、矛盾点を出してきて下さい速攻修正するので！　本音を語りますと、「夜天の魔導書」の設定資料が曖昧すぎて、作者にもどうしたらいいのか分からなかったんです本当です！

これで、いいんでしょうかと、今でも自問自答しています……ここまで読んで下さった皆様に感謝を！

最後に。

最後の人物は、一応某「王」です。分からなかった人は、感想で「分からんわこの駄目作者！」と罵って下さい！！

第４８話　主と王は未だ邂逅せず（前書き）

【偉大なる指揮官とは、火急の事態において、直感的にインスピレーションが働くものである……】

――鴨川秘様から、『イレブンソウル』のトーマス＝ロレンス英軍大佐より

第４８話　主と王は未だ邂逅せず

――新暦７５年１１月１４日――

巨大な船体を真っ暗な宇宙空間に浮かべているアースラの、その内部にある質素な艦長室で、二人はそれぞれ、これまた質素な椅子に腰かけながら話し合っていた。

「ふぅーん……難儀なもんやね、そっちも」

「ああ、全くだ」

そんな艦長室の奥の、またまた質素な机の向こう側には、セミロングの茶髪の左側を、×状の髪留めでまとめている残念なおぱ～いの持ち主、八神はやてが、リインフォース？が淹れてくれたコーヒー片手に、本局から先程送られてきた資料を熟読していた。その対面に位置する方には、草臥(くたび)れた灰色のコートを纏った、銀髪隻眼のひんぱ～い幼女が、ホットミルク片手に、はやての話に興じていた。

「そないにしても……二か月前までは敵同士やったのに、今では共に戦う仲間になっとるなんて……ホンマ、笑えへんな～」

「ああ、その通りだな。フフッ」

はやてのその言葉に、愛らしく苦笑を洩(も)らす幼女。だが、その表情はどこか楽しげで、どこか……満ち足りた表情でもあった。それをチラッと盗み見て、すぐさま手元の資料に視線を戻すはやて。

「……まあ、確かに笑えへんけど、私は感謝しとるで？　管理局に協力してくれてな」

「協力というよりも、贖罪だ。それと、Ｄｒ．や姉様方を止める為

だ」
「……そか」
その言葉を聞いて、暫し、押し黙るはやて。だが、それも一瞬で、次の瞬間には、部隊長としての仮面を被ったはやてが、そこにいた。その切り替えの速さに舌を巻きながら、長い銀髪を靡かせる幼女――「ナンバーズ（十二の最高傑作機）」がＮｏ．５、チンクは、その端正な顔をはやての方に向けた。その表情は既に引き締まっていて、戦士の顔をしている。
「なら、遠慮なしに命令するで？　ええな？」
「ああ、いいぞ。私達はその為に此処に来ているのだからな」
最終確認を取るはやて。それにすぐ頷くチンク。そして、その二人の了承から、作戦の立案が始まった。とある情報を元にした、「ＣＢ」に一泡吹かせる作戦を。
「……分かったで。せやったら、まずあんたらには、此処とここ、あとココを制圧して欲しいんやけど……できる？」
「守護機（ガーディアン）はＡＡＡ一が一機だけなのだろう？　だったら……」
はやては疑わしげな視線をチンクに向けた。だが、チンクはそれに、不敵な笑みを浮かべ、悠然（ゆうぜん）とした態度のまま、こう言い返す。
「楽勝だ。そもそも、此方の戦力は、そちらが一番良く知っているはずだろう？」
「……じゃあ信じとるで、チンクさん？」
「ああ、信じろ。八神はやて部隊長」
その言葉を最後にして、チンクが艦長室から出ていった。恐らく、

他の姉妹たちにこの作戦を伝えに行ったのだろう。そう思ったはやては、すぐさま視線をまた手元の資料に戻した。

フェイト・T・ハラオウンが追っているという「CB」のエージェントの可能性がある人物、「ラヴクラフト」。そして、彼女自身が追っている、管理局に潜むエージェント「アーカイブ」の詳細なデータが載っている、その分厚い資料を、はやては一文一語読み洩らさずに、読んでいった。

――新暦75年11月15日／アリオスがティエレンタオツーと開戦した頃――

煌(きら)びやかな装飾を施されつつも、各所にモニターを繋ぐコードが伸びている部屋に、全身を白の衣装で固めた、青年か少年かが曖昧な黒髪蒼眼仮面の男、アップルはいた。その隣には、純白のカーディガンを肩に羽織り、瑞々しいおぱ～いの上部が覗き見える、水色のTシャツを着たフェルト・グレイスが、おどろおどろしい雰囲気を出しながら、木製の椅子に座っていた。

「……」

「……」

その如何にも怒っています！　という空気を纏うフェルトの方を、できるだけ見ないようにしていたアップルは、それでも、目の前にある幾つものモニターから吐き出される情報だけは、しっかりと処理していた。

「……アップル」

「い、Ｙｅｓ，ｍａｉｄｅｎ！」

だが、そんな作業を無難にこなしていた彼へと、フェルトの御呼びがかかった。その恐ろしさに声を詰まらせながらも、アップルは大きな声で、必死に返事をした。そんな彼へと、フェルトは低い声で一言、

「……お茶」

と言った。その単語の意味を瞬時に理解したアップルは、その直後に、

「ラジャアアアッ！！」

と、不必要なまでの真摯（しんし）さで、了解の返事をした。ダッシュでその部屋に備え付けられているキッチンの方に向かうアップル。そんな彼の方をチラリとも見ずに、再び荒々しくキーを打つフェルト。……カオスだ、と思ったのは、恐らくアップルだけではあるまい。

「どうぞ、フェルト・グレイス嬢！」

「ん……」

そして、アップルから差し出された、僅か１３秒で淹れられた熱

々のお茶を、フェルトはそのまま一気に飲み始める。アップルがえッ！？　という驚きの表情になるが、フェルトはそれに構わずに、その沸騰すらしていた熱いお茶を、一瞬で飲み干した。

「……おかわり」

「Ｙｅｓ，ｍａｉｄｅｎッ！」

それを見ていたアップルから思わず冷や汗が流れたが、そんな彼へと、フェルトからさらなる要求が課された。再びキッチンに引っ込んでいくアップル。その背に哀愁が漂っていたのは、多分、気のせいではないだろう。

そんな二人がいる最高級ホテル「アレイスター」に近づく影が、一つ、あった。その影は四本ある足を二本にしながら、そのビルに向かって歩いていった。それに気付くモノは、誰も……そう、探査魔法を常時発動させているアップルですら、気付いてはいなかった。

「ここか、セファーの居る所は……」

その影は、そうぼそりと呟くと、ホテルの中に堂々と入っていった。その影を見た受付の人は顔を一瞬だけ引き攣らせたが、そこは

一流の受付嬢。すぐさま笑顔を取り戻し、その筋骨隆々な影の相手を務める。

「と、当ホテルに御用でしょうか、お客様？」

「ここにアップルと名乗る者が居る筈だが……どこにいる、「ＣＢ」のエージェント？」

「ッ！？」

だが、その笑顔を数秒も維持できぬまま、受付嬢は蒼いバインドに身柄を拘束された。それに目を見開く受付嬢の上を飛び越して、カウンターの机に置いてある「アレイスター」の部屋帳を手に取る影。パラパラとした声が、豪華なシャンデリラで飾られたホールに響く。そして守衛やオーナーがその影に近づく……よりも速く、その影は蒼い古代ベルカ式魔法陣を発動させると、その頭上を見上げた。

「あそこか……！」

「ま……クソッ、アップル殿に急ぎ連絡をしろ！」

「駄目です！　ＧＮ粒子が此方にまで拡大していて、連絡が取れません！」

影の周りにいる人間――その誰もが「ＣＢ」のエージェントである――が騒ぎ立てるのを無視して、その影は飛行魔法を発動させた。すぐ目の前に天上が迫る。だが、その天上を、その蒼い影は魔力付与が施された拳で、

「とおりゃあああああッ！！」

簡単に、粉砕した。

「……何か騒がしく、フェルト・グレイス嬢？」
「そう……ですね。何かあったのかな？」

フェルトとアップルは、断続的に聞こえてくる破砕音が、徐々に此方に近づいてきている事に気が付いた。それを互いに確認し合った二人は、すぐさまＰＣ内のデータをオールデリートし、撤収の準備を始めた。そして、あらかたの準備を終えた二人は、最後の段階に入ろうとする。

「アップル、準備は！？」
「完了！　いくぞフェルト・グレイス穣！　転送魔法「トランスポーター・ノヴァ」、発どポウッ！？」

だが、その撤収の要であったアップルの詠唱を、突然、床下から飛び出してきた銀色の拳が遮(さえぎ)った。その拳はアップルの直下の床を打ち砕くと、その白い仮面にも行がけの駄賃(だちん)とばかりに、一撃を喰らわした。それを喰らったアップルは、その身を部屋の天井近くまで浮き上がらせた。

「……アップル？」

フェルトは上に飛んでいくアップルに驚きながら、すぐに自分の目の前に立つ男に視線を向けた。その男は褐色の肌をしていて、体は筋肉という名の分厚い鎧に覆われている。頭には冗談みたいな犬耳が、ピコピコと動き、その存在を主張していた。フェルトはそれを見て、不意に、可愛いなと思ってしまった。

「……数百年、いや数千年振りか、セファー？」

「がふっ……ああ、そのぐらいに久しい、ザフィーラ」

血反吐を吐きながら、ザフィーラと呼ばれた獣人と普通に挨拶を交わすアップルを、先程の想いを振り払ったフェルトが疑わしげに見つめる。その疑念を感じ取ったのか、アップルはすぐさまフェルトに、ザフィーラとの関係を簡潔に説明した。

「元・守護獣」

「元……？　でも、ザフィーラは確か「夜天の魔導書」の……」

「それ以前の、数千年もの昔の話。まだ「夜天の魔導書」も、ベルカも誕生していなかった時代の話」

しかし、その説明はあまり要領を得た物ではなかった。首を傾げ続けるフェルト。だが、それに構う余裕など、今のアップルには存在しない。何故なら、目の前の守護獣は、自分の盾であったと同時に……天敵たる矛でもあるからだ。

その力の為に、外敵も多かったアップルを護るために創られた、最高の番犬。同時に、あらゆるモノを知っているが故に、万が一にも暴走するような事があれば、あまりにも恐ろしい事態が待っているがゆえに繋がれた、最高の番犬でもある。それが……今、アップルの目の前にいるザフィーラという存在なのだ。

アップルではザフィーラに、どんな事をしても勝てない。彼はそうプログラミングされているし、ザフィーラにも、必ずアップルに勝てるよう、そうプログラミングされている。それは最早、世界の摂理（せつり）の一つですらある。だからアップルは、この時点で腹を決めていた。フェルトだけでも逃がそうと。

「……久しぶりで悪いが、単刀直入に聞かせて貰おう。何故お前は「ＣＢ」に協力する？」

「それが我がロードの望み故に、我は「ＣＢ」に協力する」

「ロード？　……何を言っているのだ、セファー？　お前を扱える魔導師など、存在するわけが……」

「存在……というよりも、創らせた。お前のいる管理局、その最高評議会とやらに」

「なに……！」

そのアップルの言葉に驚いたのは、ザフィーラだけではなかった。フェルトもまた同様に、アップルから齎された情報に目を見開くほど驚いていた。アップルが管制人格（マスタープログラム）を兼ねるユニゾンデバイスであることは知っていたが、そのマスター（ロード？）　の情報までは、フェルト……どころか、あの刹那とティエリアでさえ、把握していないからだ。

「セファー、貴様……自分が何をしたのか、分かっているのか！？」

「我は常に言っていただろう？　『汝の意志するところを行なえ、これこそ法の全てとならん』と。お前達からすれば違法な物でも、我からすればそれは合法の内……」

「そんな事を言っているのではないッ！！」

激昂（げきこう）するザフィーラを、何を言っているのだ？　という風に呆れながら見詰めるアップル。フェルトはその二人を見て、どちらも意

思の疎通が取れていないように感じた。そして、その末路に何が待っているのか……考えるまでもない。

「お前は、してはならないことをしてしまったのだ！　その自覚すらないのか、我が元・主、セファーよッ！？」

「そんな物はない！　寧ろ、昔の我を……いや、吾輩（わがはい）を知っているお前なら、そんな事……」

「なら、俺がお前のその行いを止めてやる！　行くぞセファアアアアッ！」

「……聞く耳持たぬ、か。ならば……！」

そんなことを考えていたフェルトの周囲が、いきなり白い輝きに包まれた。その眩しさに目を瞑るが、次に目を開けると、そこは先程とは全く別の風景になっていた。

「アップル……？」

しかし、そこにアップルは……いなかった。

「とおりゃあああああッ！」

「舐めるなよ、ザフィーラ！　吾輩だって、今まで怠惰に過ごしてきたわけでは……そげぶッ！？」

ザフィーラはアップルの張った三重の防壁を一撃でぶち破ると、さらなる追撃をアップルに畳みかけていった。腹、腕、仮面にそれぞれ一撃ずつ、全力で拳を見舞う。その拳の全てを受けたアップルは、早くもグロッキー状態となり、意識を混濁させていた。

「（い、如何……！）ちぇ、チェーンバインドッ！」
「鋼の軛！」

その混濁した状態に、知らず焦ったアップルは、鎖状の拘束魔法を数十、ザフィーラに向けて放った。しかしその鎖は、ザフィーラが発動させた、床から突き出る突起状の拘束魔法により、その全てを粉々に破壊された。それに舌打ちをしたアップルだったが、そんな事をしている間にも、ザフィーラはその距離をゼロにまで縮めていた。

「ハァアアアッ！」
「んなッポォッ！？」

それに驚く暇すら無く、ザフィーラの正拳突きを顔面に喰らい、後ろに突き飛ばされるアップル。体がゴロゴロと勢い良く後方に転がっていく。そして、コードが抜き身となっている壁にぶつかることで、漸くその動きが止まった……と思ったら、距離を詰めてきたザフィーラの正拳突きを、再び正面から仮面に喰らった。それで後頭部がコードを壊しながら豪奢な壁にめりこむが、その時点ですでにアップルの意識は、半分以上無くなっており、最早痛みを感じることすらできなくなっていた。

「が、ぅお……さ、さすがザフィーラ、衰えなし……」
「まだまだぁあああッ！」

「ぶげそッ！？」

そんな限界に近いアップルを見ても、ザフィーラは気を緩めずに、拳を仮面に振るい続けた。アップルの実力と知力は、彼が一番よく知っているのだ。だから、この程度ではアップルが屈しないという事も……彼は、十二分以上に理解していた。

「これで……」

ザフィーラは拳を腰だめに構えると、自分のすぐ目の前で荒い息を吐くアップルへと、狙いを定めた。体内で練った魔力で筋力を増強し、拳撃の威力を非殺傷ギリギリに調整する。それを見たアップルは、今度こそ余裕のない、引き攣った笑みを、仮面の裏で浮かべた。さすがのアップルでも、その一撃には耐えられないようだ。それを分かって、尚（なお）、拳を硬く握るザフィーラ。今の彼には、唯、誤った道に進もうとしている元・主を、叩き直そうという思考しかない。

だからだろうか？　その時の彼が、夜天すら堕ちそうな黒き闇に気がつけなかったのは？

「終わりだぁあああああッ！」

だが、それに最後まで気付かずに、ザフィーラは万感の思いを込めた拳を、アップルに繰り出してしまった。拳圧で空気がうねり、アップルの仮面がビリビリと震える。それを見て目を瞑ったアップルは、諦めたのか、たった一言だけ、そっと呟いた。

「……否応ない故に、仕方が無い……深淵を支配する王！」

と。

はやては、中央都市「オレンジ」の暮(く)れた上空を、シグナム、ヴィータと共に飛翔していた。だが、その飛翔をしている最中に、彼女は得体のしれない感覚を、ちょうどホテル「アレイスター」がある方角から感じ取った。

「なんや、この感覚……？」

「主はやて？」

「どうしたんだよ、はやてー？」

「あ……いや、何でもあらへんから、気にせんでええで、二人とも？」

それは、まるでもう一人の自分がいるような……そんな訳の分からない感覚だった。知らず、秀逸(しゅういつ)な眉を眉間に寄せる。そんな彼女へと、「守護騎士(ヴォルケンリッター)」の二人が心配げに声をかけてきた。その声を聞いたはやては、心配させてしまった負い目を感じながらも、心配は要らないと返す。実際、彼女に害を成す物ではなかったからだ。

「……主はやて、まさか左腕の調子が……！」

「なッ!?　ホントかはやてッ!?」

「ちゃうちゃう、そんなんじゃないねん。だから、ホンマに気い使わんでええで、シグナム、ヴィータ？　ただ、ちょっとだけ武者震いをしただけや」
「……でしたら、何も言う事はありません」
「……はやてがそう言うんなら……」

明らかに不承不承ながらも、それ以上の追求をしてこない彼女の家族たちに、はやては深く感謝した。そして、あの得体のしれない感覚を感じとった方角に、顔を向けてみる。……はやての見える範囲には、これといった変化は見受けられなかったが、それでも、何かしらの事態は起きているのだろう。それを憂慮（ゆうりょ）しつつ、はやては呟いた。

「……ホンマ、なんやったんやろな、アレは？」

はやてのその疑念に満ちた呟きに答えられる者は、少なくても、この場にはいなかった……。

『ヴィータ、どう思う？』
『……はやてが大丈夫って言うんなら、大丈夫……だと思う』

先程から一心に、ある一定の方角を見つめるはやてを、シグナムとヴィータは前を向きながら、横目でその様子を窺っていた。彼女たちの主たるはやてが、何かに気を取られているのは分かるのだが、その何かが二人には分からない。

『……一体、何が起きているんだか……』

『……私たちには分かんなくて、はやてだけが気付くっていうのも変な話だよな？』

『ああ。主はやてが気付いたのならば、我らも気付くと思うが……』

念話で話し合うも、やはり何も分からないまま、時間だけが過ぎていった。そして、そうこうしている内にも、彼女達は事前に決められていた散開ポイントに到着してしまう。最後まで苦虫を噛み潰したような表情だった二人は、それでも、彼女たちの主が立案した作戦を遂行すべく、その身をそれぞれが行くべき場所へと向かわせる。

『それでは、私は向こうの、「世界清浄」の生き残りが密集しているという場所に行くぞ。……いいな、アギト？』

『ああ、良いぜシグナム！』

『こっちはあのビルの屋上か……叩き潰すぞ、アイゼン！』

『Ｊａｗｏｈｌ！』

シグナムとアギトは、はやてが推測した「世界清浄」の生き残りが密集している場所へと、ヴィータは数日前に、怪しげな運搬が行われたビルへと、その場にはやてを残して、飛行していった。それにさらなる心配を募らせる二人（アギトはあまりよく分かっていない）だったが、そんな二人へと、はやては優しげに微笑んだ。大丈夫、心配はいらないで？　というように。

『……全く。敵わんな、主はやてには』
『早く終わらせようぜ、シグナム！　はやての元に戻れるようにな！』
『言われなくとも、分かっている。……アギト、いきなりユニゾンに入るが、いいか？』
『ヘッ！　シグナムの調子が悪くない限り、こっちは大丈夫だぜ！』
『よし、なら……』

その笑みを見て、逸(はや)る気持ちが沈んだシグナムとヴィータは、安心した様子でそれぞれの作戦領域へと飛んでいった。

そしてシグナムは、その落ち着いた気持ちのまま、右肩に乗っていたアギトを正面に移させると、四年前とは明らかに異なる力であるユニゾンデバイスの力を解放する為の呪文を、力強く、烈火の如く唱えた。

「ユニゾン・ＩＮ(いん)！」

その呪文を唱えたシグナムに、変化が起きる。赤紫色のインナーと淡い桃色の外着で構成されていたＢ・Ｊ(バリアジャケット)は、青紫色のインナーと、前が開けた白青のロングスカートに変化し、シグナムの桃色の髪と水色の瞳も、彩度が低い桃色と薄紫色の瞳に変わり、さらには、手甲も銀から金に変わり、その背からは赤く燃える炎の翼が伸びた。

「やれるか、アギト？」
『おう、シグナム！』

背から生えた烈火如き翼を一度大きく羽ばたかせ、魔力が満ちる体を前に進ませるシグナム。大気が、空が、急速に後ろに流れていく。そんな中、彼女の視界の中に、煤(すす)けた何かがいきなり横合いか

ら現れた。その戦闘をしてきたような姿に怪訝な表情をしていたシグナムだったが、その正体に気付くと、今度は殺気に満ちた、獰猛な笑みを、その美しい顔に浮かべた。その笑みはアギトですら恐怖を感じるほど、恐ろしい物だった。

『……アギト。これから私は、恐らく殺傷魔法を使う修羅となるが、怖ければ何時でも離れて……』

『へ、へッ！　何言ってんだよシグナム！　このアギト様が、そんなことぐらいで、ロードであるアンタを……恐れるかってんだッ！？』

その恐怖を、持ち前の騎士の誇りで抑えつけるアギトの姿を見て、シグナムは観念したように息を吐き、そのアギトの誇りを無為にしない覚悟を決めた。

『……そうか。なら……一撃でペースを握るぞ！』

『うっしゃあああ！　任せろシグナム！　まずは、烈火刃！』

その覚悟を認めてくれた事に、アギトは、自分が認められたような気分になり、幾かの嬉しさを感じた。そして、高揚する気分のままに、炎熱魔法を強化するインクリースタイプの補助魔法を発動させた。その魔法により、レヴァンティンを纏う炎が、より一層その赤色を濃くし、周りに鮮やかな光を放つようになる。シグナムはそれに満足し、次いで、自分のもう一人の相棒へと、勇ましい声を掛けた。

「レヴァンティンッ！」

『カートリッジロード』ガコンガコンッ！

長年――本当に長年、彼女と共に戦い抜いてきた相棒は、その意

に従い、カートリッジを消費して、魔力を高め、これから放とうとする大技の威力を高めてくれた。それに感謝して、すぐ目の前の敵に焦点を戻す。敵はまだ此方には気付いておらず、今が絶好の好機であった。

『紫電……』
「紫電……」

その好機を逃すものかと、まず初めに、アギトがその魔法の前半部を唱えた。それに追従するように、同じ言葉を復唱するシグナム。その声には隠し切った静かな殺意が、どす黒く渦巻いていた。

『……一閃ッ！』
「……一閃ッ！」

そして、その殺意を爆発させるように、シグナムは思いっきり目の前の敵――巨剣と他二本を失くした「剣士」へと、烈火を纏う大剣を振り落とした。

中央に大穴が空いた、かつての豪華さが消え去った部屋。そこでアップルに止めを刺す筈のザフィーラの攻撃は、小さくて可憐な掌（てのひら）

に受け止められていた。

「なッ！？」

ザフィーラはその受け止められた事実に驚愕し、そして、その拳を受け止めた人物の顔を見て、息ができなくなるほど驚いた。何故なら、自分の拳を受け止めた人物は……彼の主人である八神はやて、その九歳時の姿に瓜二つだったからだ。

「この……大うつけがぁあああッ！」

「ほ、本当にすまん、王。助かっ」

「もし我があともう一秒でも到着するのが遅かったら、今頃うぬは気を失って、その暗黒物質でできた醜い姿を、さらに無様な物にしていたぞッ！？　それを分かっているのか、うぬッ！？」

「……ほ、本当にすまん、王」

だが、セミロングの髪はタヌ姫を思わせるような茶髪ではなく、どこまでも乾いた印象を受ける砂色で、その大きめの瞳も、はやての青い瞳とは違い、翡翠（ひすい）色に輝いていた。それに一見同じ様に見えるB・Jも、はやての白を基調とした物ではなく、黒を基調とした物であった。

「……貴様は、一体……」

「……ふん、まあいい。この追求はまた後でだ。覚悟しておけよ、管制人格（マスタープログラム）？　それと、盾の守護獣よ。我は敵と話す悪趣味など、持ち合わせてはいないぞ？」

ザフィーラの問いに答える事無く、王と呼ばれた少女は、ザフィーラの拳を受け止めていた右手から凄まじい魔力を放出させ、ザフィーラを向こう側の壁際まで後退させた。それに顔を顰めたザフィ

ーラであったが、次の瞬間、その顔をまたしても驚愕へと転じさせた。見れば、王と呼ばれた少女の左手には、途方もない魔力を内蔵する紫色の魔導書が、何時の間にか握られていた。その魔導書を見たザフィーラは、その形、装飾に身を総毛立たせ、考えたくもない嫌な予感から、身震いをした。アレはまさか……まさか……！

闇の書ッ！？

「……ほう？　存外聡いな。これの正体を一目見ただけで、大凡看破するとは……少なくとも、之などよりは余程有能だな、うぬは？」

「待て、王！　まさか之とは、即ち、吾輩ッ！？」

「ああ、そうだ。本当は之とすら言いたくは無いがな」

「……涙が、ちょちょ切れる……！」

「どういうことだ、セファーッ！？　貴様まさか、またあの悲劇を繰り返すつもりなのかッ！？　どうなのだ！？　答えろ……セファアアアアッ！？」

血を吐きそうなほどの大音量でそう叫んだザフィーラは、セファーに向かって全力で飛翔した。その拳はすでに硬く握られ、鋼鉄すら容易く打ち砕けるだろう。その形相を見たアップルは、生半可な物では止められないと思い、すぐさま脳内で数々の防御魔法を構築していくが……

「ハッ！　盾の守護獣が攻勢に回るなど……片腹が痛すぎて、殺してしまいそうだッ！」

アップルが構築していた、如何なる防御魔法よりも強固な白いシールドが、王と呼ばれた少女の、右手に持たれた先端が十字状の杖より展開された。それは絶大な魔力量によって実現させたとんでもない硬度で、ザフィーラが全力で放った攻撃を、小揺るぎもせずに

受け止めた。

「ハッハッハッハッ！　それで終わりか？　ならば今度は、此方の番だ。精々、楽しませてくれよな、守護獣よ？」

白い光に包まれた室内で、王と呼ばれた少女の嘲笑の声が響く中、少女の背から伸びる、闇のように黒い翼の周りから、白い魔力弾が数十も、壁の如く発射された。その雨霰と降り注ぐ魔力弾を、白いシールドから手を離したザフィーラが、瞬時に展開した蒼いシールドでもって防ぐ。だが、その魔力弾に籠められた魔力は尋常な量ではなく、さすがの守護獣ですら、その重圧に耐えきれずに、片膝を床に着かせてしまった。

「ふはははははッ！　いい様だぞ、守護獣！　いや駄犬よ！　お前にはその這い蹲っている姿がお似合いだ！」

その姿を見て、ゲラゲラと、心底愉快そうに、王と呼ばれた少女はザフィーラを哂った。その哂い方を見て、我が主とは違い、品が無いなと、ザフィーラは思考の片隅でそう思った。

「では、我直々に、もっと駄犬に相応しい姿にしてやろう！　光栄に思うがいい！　征けい、エルシニアダガー！」

「グッ……！」

ザフィーラが膝を屈したのに気を良くした王と呼ばれた少女は、ここが勝負所だと理解して、更なる手加減のない追撃をザフィーラに放った。白く光る一発の大きな魔力弾が、ザフィーラに発射される。それは正三角形の防御魔法に直撃……するよりも早く、その弾丸を無数に破裂させ、ザフィーラの障壁に襲いかかった。

その先程の比ではない重圧に、ザフィーラは仰け反りそうになった。あまりにも保有魔力が出鱈目すぎる。そして、何よりも……今だにシールドを張り続けているのに、詠唱もしないでこれほどの魔法を連発するとは……明らかに、異常としかいえない並列処理能力だ。

「グ、グゥ……だがッ！」

その圧倒的な戦力差を思い知ったザフィーラは、しかし、一歩も引かない。彼は盾の守護獣なのだ。その盾が引けばどうなるか……彼は直感ではなく確信でもって、その答えを得ていた。彼が今ここで引けば、間違いなくこの恐ろしい王は、彼の主にその闇の力を向ける……！

「俺は、盾の守護獣だぁあああッ！」

そう確信したザフィーラは、今にも砕けそうな盾を前方に展開しつつ、未だ止まない魔力弾の雨の中を、ゆっくりと前進していった。それを見た王と呼ばれる少女は、自身との圧倒的な差を思い知りつつも、決して屈しないその姿に酷い不快感を感じ、眉を数瞬だけ顰めた。

「チッ。駄犬如きが、我にそのような不快極まる物を見せてくれようとは……ククッ！」

不機嫌な表情……が、一転し、清々しさすら垣間見える残酷な笑みに取って代わった。それを見たザフィーラは肌が泡立つのを感じ、シールドに限界以上の魔力を込め、その強度を上昇させる。それをあくまでも傲慢しく見下す王と呼ばれた少女は、右手の十字杖の矛先をザフィーラに向け、その努力を……嘲笑った。

「……よかろう。ならば塵芥と化すがいい、駄犬よ！　アロンダイトッ！」

少女の声に導かれるようにして、アームドデバイスの十字杖――エルシニアクロイツの矛先から、馬鹿げた大きさの白き砲撃が放たれた。それはザフィーラと少女の間にあった全ての物を破壊し、蹂躙し、殲滅しながら、ザフィーラのシールドに轟音を立てながら衝突する。

「な……これは……！」

だが、ザフィーラのシールドはその負荷に一秒すら耐え切れずに、儚い音を立て、粉々に砕かれた……。

「ふん、他愛もない……この程度で盾の守護獣だとは、笑うことすらできんわ」

我はアロンダイトで抉られた床を踏み締めながら、久しぶりに破壊と混沌を齎した快楽を、胸中で存分に味わっていた。それは正に、どんな美酒でも及ばぬ美味と酩酊を、我に与えてくれる、素晴らし

き魔の美酒だ。一度味わってしまえば、二度とは這い上がれない、深い深い、どこまでも続く闇の深淵に堕ちてしまうだろう……それを我は、遠慮などというバカげた行為をせずに、一気に心中で煽った。

「ふふふふ……」

「……王よ、勘違い甚だしいぞ？」

「……何だと、塵芥？」

「ちょッ仮にも吾輩は管制人格！？　何故そんな……」

「王と釣り合えるのは、主人だけだ、この変態仮面」

だが、そんな至福の時を、後ろにいた管制人格が邪魔をしてきた。思わずこめかみに青筋がピキ狸と立つが、そこは王たる者の、大きな器で我慢をする。……命拾いしたな、変態仮面？

「へんた……ま、まあいい。今は目の前、集中」

と思っていたら、変態仮面が今度は我に向かって、そんな尊大な物言いを言ってきた。それに我は今度こそ苛立ちを隠せずに、半眼となって変態を睨む。

「……何だと？　うぬの目は節穴か？　かつてのうぬの守護獣は、先程の攻撃で……」

「故に、勘違い甚だしい」

だが、その我の眼光を受けても、変態は物怖じせずに、視線を我ではなく正面に向けていた。さすがの我も、その態度に含んだ物を感じ、視線を正面に戻すと……

「ザフィーラがあの程度でくたばるわけがない」

「なッ……！」

そこには、深く傷付き、重く片膝をついた状態になっているにも関わらず、駄犬……いや、守護獣が両手を突き出したまま、此方を鋭く睨んでいた。その眼光は殺意こそなかったが、我の背筋を寒くさせるほどの何かがあった。思わず一歩二歩と、後ろに下がってしまう。

「ハァ、ハァ……！」

「とはいえ、虫の息なのは変わらず。ここまで追い詰めれば、後は何もできまい」

「……そうか。ならば放っておいても問題はないのだな？」

「ない、と断定」

荒い息をする守護獣が、視線はそのままに、此方に歩み寄ろうと、足を前に動かした。だが、二歩歩いた所で、その動きが急に止まる。守護獣はそれでも此方に手を伸ばし、掴みかかろうとするが、その場からは後はもう一歩も動きそうにない。それを見た我は、本当に何もできないのだという事を確認し、思わず心の中で安堵の溜息を吐い……

「なん……だと？」

「……？」

「いや、まさか、そんな……あり得ぬ、有り得ぬぞッ！？」

安堵の溜息を吐く？　この我が？　王たる我が、安堵の溜息などという物を吐くだと？　信じられん……いや、信じたくなどないわ、そんな不快な行為をしようとしていたなどとは！

「……何のことかはさっぱり。だが、今はアレに移行」

「……分かっておるわ、変態」

「……心が、折れそう……！」

そうだ、信じたくなどない……我が、この闇統べる王が、あんなモノごときに、恐れを感じていたなどとは……！

ザフィーラを部屋に放置したまま、「アレイスター」の屋上まで来たアップルと王と呼ばれた少女――闇統べる王は、もうすぐ闇へと沈みそうな夕暮れ時の空を見上げて、思う。

ああ、何と素晴らしき、闇へ堕ちそうになっている空なのか、と。

「では、ここで発動。そして即時撤退」

「うむ。さっさと終わらせよ、変態仮面」

「だから、何故吾輩が変態ッ！？」

「何だと？　まさか、忘れたのか、うぬは？　我ら三人の裸を凝視

した、その死刑すら生温い深き罪業を……！」
「アレは不可抗力！　それに、それはロードも同じ！」
「主人はいいのだ、主人は。何せ主人は……我の」
「そんな寝言こそどうでもいい。何故なら、ロードには既に……」
「黙らぬかこの草食系童貞変態悪趣味仮面ッ！　それ以上言うなれば、うぬを塵芥に処するぞ、下郎がッ！」
「何この言い様。アレ？　吾輩、何故か目から汗が……汗らしき何かが……！」

その空を更なる闇色に染めるべく、まずアップルがベルカとミッドの紋様を併せた魔法陣を、足元に大きく展開させた。それに重ねる様にして、王も中空に古代ベルカ式とミッドチルダ式の魔法陣を、王々しく広げる。中心にアップルの魔法陣を、その両側には王の二つの魔法陣が、三つの円を組むように配置させられる。

それら三つの魔法陣が、循環するように大きな円を描き始めると、その白い輝きも次第に強くなっていった。辺り一面に、白い光が溢れていく。その絶景を眺めつつ、王とアップルは、発動のキーワードとなる詠唱を、唱え始めた。

「「アルハザード式ＡＭＦ、発動ッ！」」

静かに、しかれど、確固たる声で。二人はそう唱え、次いで、七つの白い輝きをパッと、「オレンジ」中に散りばめた。その様子はまるで花火のようで、もしくは、花の散り際のようだった。

アップルと王が散らした七つの白い輝きが、光跡を残しながら、それと同じ数のビルの屋上に吸い込まれていった。すると、その吸い込まれた所から、二メートルほどの青い機械人形がゆっくりとせり上がってきた。その青い機械人形は単眼を光らせながら、肩に搭載されている四つの砲塔を天に向けると、そこから赤橙色の粒子の帯を二本発射し、各々を繋げていった。上から見れば、ちょうど正四角形と正三角形が出来上がっているだろう。

そして、その正四角形と正三角形が重なると、それらはまさにアップルの魔法陣を成していた。

「オレンジ」を囲い込むように展開された、巨大なアップルの魔法陣。それを作った青い機械人形――七機のＧＮキャノン？は、一際ＧＮコンデンサーから大量の粒子を噴き出すと、その魔法陣をさらに赤橙色に輝かせ、巨大で固い大結界を無理やり展開させた。意思の疎通を阻害しない事で、ＧＮ粒子の妨げを受けない、ジェイル・スカリエッティの技術により実現した大結界、ＡＭＦを。

だが、そのＡＭＦが夜天になりそうな空を囲んでいく情景を、ＧＮキャノン？を視界に入れながら眺めている者達がいた事に、アップルと王は気付いていなかった。

その九人にして五人と四機たる集団は、ＡＭＦ下に身を置きながら、ＧＮキャノン？へと迫っていった。鉄槌（てっつい）の騎士は大気を飛翔しながら、橙の射撃者と青い流星は翼の道を疾駆（しっく）して、優しき竜召喚士と雷光の騎士は白き翼で空を駆け、破壊する突撃者は守護する滑空者（かっくうしゃ）と共に走り、狙撃する砲手は眺めのいいビルの屋上にどっしりと構え、刃舞う爆撃手はとあるビルの階段を一段一段、余裕を持って上がっていく。

それぞれがそれぞれの方法で、ＧＮキャノン？に向かっていく中。その事実にアップルが気付いたのは、オーバーＳクラスの砲撃で、一機のＧＮキャノン？を破壊された後だった。

【正義か悪か、賢者か愚者か……それらは全て、結果論でしかない】

――ＥＸＡＭ様から

第４９話　Ｃｏｕｎｔｅｒ　ａｔｔａｃｋ（前書き）

【武器を持って好き勝手に他国を攻撃し殺戮するつもりなら、同量のリスクを負わねばならん事を相手に教えてやろうじゃねーか！それが『防衛力』の意味だ！！】

――ダイモン様から、『沈黙の艦隊』の海上自衛隊ディーゼル潜水艦「たつなみ」艦長　深町洋二等海佐より

第49話　Counter attack

――新暦75年11月14日――

機動六課が保有するずんぐりな外見をしたJF704式ヘリコプターが、けたたましい騒音をローターから発しながら、空へと飛び立った。空は目を細めるほどの青水晶色で、今日も下にいる人達に安らぎを、儚(はかな)い希望を与えている。

「「「……」」」

「……なんすか、この空気？」

「……さあ？」

「さすがの俺も、この空気はキツイぜ……！」

そんな明るい外とは裏腹に、ヘリの内部では窒息(ちっそく)しそうなほど重たい空気が、その場を席巻していた。ある者は口を一文字に締め、常時貧乏揺すりを絶やさず、ある者は睨んだり眉を顰(しか)めたりデバイスに手をかけたりしながら、正面にいる四機を睨む。その隣では、引っ切り無しに指を動かし、目の前の四機を警戒する者もいれば、落ち着いた様子で目を瞑り、目的地まで無言を通そうとする者がいた。

その空気に耐えかねたのか、一機と一人（？）が声を交わした。それに渡りに船とばかりに、ヘリの操縦士である青年、ヴァイス・グランセニックが反応した……が。

「……」

その一人（？）とヴァイスの反応が気に入らなかったのか、髪の

両端を三つ編みに編み込んだ副隊長が、不機嫌そうな眼光を一人（？）とヴァイスに向けた。お前らは喋るな、石に生れ、ということらしい。そのメッセージを瞬時に読み取った二人は、一瞬で正面の方に視線を戻すと、それから先は一度も口を開かなかった。いや、開けなかったが正しいのか？

「「「……」」」

その空気を保持したまま、ヘリは視察するビル群の上を、自然を装いながら、数回ほど旋回（せんかい）した。

――新暦７５年１１月１５日／アリオスがフェイトに捉まった頃――

オレンジ色に映えるビルの屋上から、人の丈程も有りそうな巨大な砲身が伸びてくる。

「実弾装填（そうてん）」

その砲身は、ガコッと重たい音を鳴らすと、その内側に実弾を籠（こ）め、発射の時を今か今かと待つ。

「照準合わせ……良し。風向き、温度、湿度……問題無し」

砲身を持つ射手の黄色い瞳に、複数の円が現れる。それらは一キロ先の標的――一機のＧＮキャノン？に狙いを定め、距離、角度等の、射撃に必要な情報の精度を高めていく。

「ライフリング正常。砲身、問題無し。……砲撃の支障となるモノ、なし」

狙いが定まり、照準が合わさる。実弾はすでに砲身に込められている。それらの情報を得た「ナンバーズ（十二の最高傑作機）」がＮｏ．１０、ディエチは、その砲身の横に備え付けられている取っ手を左手で握りしめながら、砲身の下に付いている軽い引き金を、

「……発射！」

くいっと、右の細い人差し指で引いた。

ＧＮキャノン？の視界を通して、現在の状況を確認していたアップルは、ふと、最西部に配置させていたＧＮキャノン？の視界が、

異様に明るくなった事に気付いた。だが、その明るくなった原因である光源にＧＮキャノン?を振り向かせようとしたアップルは、次の瞬間、ＧＮキャノン?とのリンクを、強制的に切られてしまった。それに何事かと思っていると……

ドォオオンッ！

「な、何事ッ！?」

「……おい、変態。あの煙が上がっている所は、確かＧＮキャノン?の配置場所ではなかったか?」

「煙?　……確かに、黒煙が立ち昇って……いや、だが、しかし……」

「ああ、そうだ。あまりにも、行動が早い。早過ぎる……な」

腹に響く重たげな音が、アップルと闇統べる王の所にまで轟(とどろ)いてきた。それに驚いたアップルが、先程リンクが切れたＧＮキャノン?の配置場所を見れば、そこからは遠目からもはっきり見える不吉な黒煙が、悠々と立ち昇っていた。それにある可能性を想い浮かべた二人は、しかれど、その可能性を断言することができない。何故ならば、これが本当なら、「ＣＢ」の作戦は筒抜(つつぬ)けだった可能性が浮上するからだ。

「だが、最早それしか考えられぬ。……撤退の準備はまだ終わらぬのか、管制人格(マスタープログラム)?」

「いま終わる所。だが……アリオスと『００』がまだ」

「どちらにしろ、ＧＮ粒子が充満しているアルハザード式ＡＭＦの支配下では念話すら届かん。うぬも、いくら一機減って、その分だけ出力が弱まったとはいえ、未だ濃度が濃いこのＡＭＦの下では、念話すら使用できまい?　ならば、我らのする事は……できるだけ早く、ここから脱出する事だ」

「……了解。しかれば、「トランスポーター・ノヴァ」を準備しておくが、それでよろし？」
「王が良いといっておるのだぞ？　早くせんか、この変態仮面もどき」
「……何故だ、何故こうも……理不尽ッ！」

その可能性に思考を割きつつ、アップルと王は、その場から同時に飛び立った。「ゆりかご」内部よりは弱く、ガジェット？型よりは強いＡＭＦが展開されている今、彼ら二人には転送魔法を発動させることができないので、空を飛ぶしかないのだ。そんな二人を、夜天に浮かぶ満月が冷たく、どこまでも冷たく見下ろす。

「……ムッ！？　こ、これは……！」
「どうした？」
「……どうやら、懸念は大当たり。五機のＧＮキャノン？に近づく敵影を発見」
「……そうか。どうやら、今回は読まれていたようだな」
「Ｙｅｓ」

空を飛んでいる最中にも、アップルは残り六機となったＧＮキャノン？とのリンクを切らずに、接近してくる魔導師と戦闘機人へと、それぞれのＧＮキャノン？の砲門を向けさせた。七つの視点がアップルの前に開けるが、彼はそれに何ら不自由を感じずに、五つの戦場で、五つの異なった指示を出す。

その所業に王が密かに感嘆していたことに、アップルは気付かなかった。

六つの戦場の内の一つ、最北端に位置するＧＮキャノン?から、四つの砲塔からなる赤橙色の砲撃の嵐が、大気を蒸発させながら放たれていた。それらは収束こそされていないが、「オレンジ」の都市群を軽々と打ち砕いて、「鉄槌（てっつい）の騎士」ヴィータへと、その暴力を叩き付けようとしていた。

「行くぜ、アイゼンッ！」
『Ｊａｗｏｈｌ（了解）！』

その暴力の嵐を、ヴィータは空を軽やかに舞う事で、次々と避けていった。例え右に三発、左からは五発が迫ってこようとも、ヴィータはそこで敢えて右に突っ込み、シールドを展開させると、持ち前の防御力でその三発をやり過ごし、そのままＧＮキャノン?との距離を縮めて、自分の距離に持ち込もうとする。

「アイゼン！」
『Ｒａｋｅｔｅｎ　ｆｏｒｍ』

そして、それらを繰り返して、ある程度の距離が詰まると、ヴィータは自身の鉄槌（てっつい）を、片側は噴射口に、もう片側はスパイク状に瞬時に変形させた。鋭いスパイクが街灯に照らされ、鈍（にぶ）く光る。その光を頼もしく思いながら、ヴィータは噴射口から赤い光を噴射させて、凄い勢いで回転を始めた。

「いっけぇえええええッ！」

ぐるぐるぐるぐる、と、鉄槌の騎士が赤い円を描きながら、赤橙色の砲撃を掻き分け、もしくは打ち消し、ＧＮキャノン？へと、その鉄槌をグングンと迫らせていく。ＧＮキャノン？は必死にヴィータを遠ざけようと、撃ち落とそうとするも、その砲撃の殆どをかわされ、または掻き消され、回転を止める事ができない。

「ラケーテン……ハンマァアアアアッ！」

ヴィータの叫びで、回転がさらに一段と激しくなった。すでにヴィータとＧＮキャノン？の距離は十メートルほどしかなく、そこはすでにヴィータの距離でもある。得意のクロスレンジに入ったヴィータは、最後の加速をつけると、スパイクがついたハンマーヘッドをＧＮキャノン？の頭に叩き込むべく、その両手にさらなる力を込める。

自身のすぐ近くまで迫ってきたヴィータに若干怯みながら、ＧＮキャノン？は回るグラーフアイゼンを受け止めようと、重厚な装甲で覆われた両腕を、頭上でクロスさせた。それで受け止めるつもりなのだろう、アップルは。だが、ヴィータの一撃は、アップルの予想に反し、その両手を易々と砕いて、さらには、ＧＮキャノン？の頭部までをも、完膚なきまでにブッ潰してしまった。砕かれた頭部の破片が辺りに飛び散る中、ヴィータは一度、グラーフアイゼンを円状に振るうと、もう一撃、ＧＮキャノン？の頭部にグラーフアイゼンを叩き込んだ。それが止めになったのか、ＧＮキャノン？はその動きを完璧に止めると、次いで、内側から盛大に、ビルを丸々巻き込むほどの規模で爆発した。

「へっ、なんてことは無かったな、アイゼン？」
『Ｊａ（はい）』
その爆発の炎の中から、赤い全方位シールドを張った紅の鉄騎はゆっくりと歩み出てきた。ヴィータはそんな、かつての高町なのはを思わせる様なシチュエーションの中で、もう一度、グラーフアイゼンを振るう。それはヴィータなりの、アイツの分まで頑張る、という意思表示だったのだが、それを見る者は、そこには誰も居なかった。

青い翼の道が伸びる、伸びる、伸びる。弱体化されたＡＭＦの影響を受けても、その強度を少しも落とさずに、最西部と最北部の間に配置させられたＧＮキャノン？の元に、その翼の道――ウィングロードは縦横無尽に伸びていき、立体的な道程をそこに築き上げていく。

「ティア！」
「アレはこっちに任せて、あんたは真っ直ぐ、突き進みなさい！」

その空の道を、白いハチマキを頭に巻いたスバル・ナカジマは、銃を両手に握るティアナ・ランスターを片手で背負いながら、足裏

のローラーでその道を爆走していく。あまりの速度と急激なチェンジオブペースに、マッハキャリバーのローラー部から火花が散るが、それに構わず、スバルは全速を維持したまま、空の道を駆け抜けていく。

「スバル、右から来るわよ！」
「了解、ティア！」

自分達のすぐ傍を貫いていく、ＡＡ～ＡＡＡクラスの砲撃に背筋が凍った。だが、スバルは、そしてティアナも、それに恐れを感じても、決して前進する事を止めないでいた。一撃でも喰らえば、消滅は必至。その考えたくもない恐怖を何度も何度も経験しながら、それでもスバルとティアナは、空の道を駆け続ける。

恐怖がないわけではない。寧ろ、二人は飛んでくる砲撃に、恐ろしさすら感じていた。ＡＡ～ＡＡＡクラスの砲撃が間断無く彼女たちに襲いかかってくるのだ。それも、殺傷を目的としたモノが。それに恐怖を抱かないわけがない。だが、それでも……それでも、彼女たちにだって、譲れないモノがあるのだ。

「次、左四十五度！」
「相棒！」
『Ｙｅｓ，Ｂａｄｙ！』

彼女達は、テロや事件から次元世界の人々を護る、正義の組織とされている時空管理局の一員なのだ。ならば、彼女達がここで引けば、一体誰がその割りを食うのか？　それを分かっているからこそ、二人は恐怖に屈せずに、前に進む事が出来る。破壊しかできない「ＣＢ」とは違って、人々から力を貰う事が出来る。

「距離１２０……いいわね、スバル？　一撃で片を付けなさいよ！」
「分かってるって！」

その貰った力を大いに活用しながら、ＧＮキャノン？の姿を目視できる所にまで接近したスバルとティアナは、そこで二手に分かれた。スバルはウィングロードの上をそのまま駆けるが、ティアナはスバルから降りて、手近にあったビルの屋上に、アンカーを刺して降り立つ。この時、初めてＧＮキャノン？の砲撃が一瞬だけ止んだ。それは、ただアップルがどちらを狙うかを逡巡（しゅんじゅん）した為の物だったが、それこそを狙っていた二人には、またとない好機――チャンスであった。

「行きなさい、スバル！」
「うおぉおおお、マッハキャリバー！」
『Ｄｉｖｉｎｅ……』

スバルが左手に、拳大の魔力弾を浮き上がらせた。それを左手で保持しながら、右手の歯車状のパーツ、ナックルスピナーを高速で回転させる。グィイイイン、という聞き慣れた金属音が、スバルの耳を打ち、その心に勇気を灯した。そして、そうなったスバルを止められる者は、

『Ｂｕｓｔｅｒ！』

誰も、いないッ！

「喰らえェエエエエッ！！」

赤橙の砲撃が自分のすぐ下を通っていくのを感じながら、スバルは左手に保持していた魔力弾を、ＧＮキャノン？の胸にぶつけた。

その圧力にＧＮキャノン？が一歩、後退するが、その後退した分だけ、左足を力強く踏み込む。右手のリボルバーナックルがグィングィンと唸る中、スバルは右手を思いっきり後ろに引き……そして、そのまま一気に、魔力弾の中心を撃ち抜く様に、拳を前に突き出した。

　すると、まず、青の閃光が周囲一帯を照らした。それは目を焼く様な光量でもって、数秒、あるいはコンマ何秒か、辺り一面を照らし続ける。その明る過ぎる閃光に目を瞑っていたティアナは、明るさが元に戻ると、すぐさまスバルがいた所を凝視し……同時に、喜びを隠し切れずに破顔した。その成果、及び親友であるスバルが無事だった事に。

「……よし！」

　そして、スバルもまたティアナと同じく破顔しながら、ただの木偶の坊と化したＧＮキャノン？を前にして、喜びのあまり、ガッツポーズをした。戦闘機人モードの証である金色の瞳が、キラキラと、幾学模様に輝く。この戦果はただ「砲台」を倒しただけではない。彼女はトラウマとなっていた「ガンダム」を自らの手で倒した事で、自身の恐れていた心を克服できたと、そう思ったのだ。だからこそ、その喜びのポーズには、何時もよりも覇気が漲っていた。撃破と克服、その二つを成したが為に。

　だが、彼女は気付かない。自分が倒した「砲台」を、彼女自身が「ガンダム」だと認識していなかったことに。彼女にとっての「ガンダム」とは、あくまでも「蒼い流星」と恐れられる「剣士」のみである事に、彼女は終始、気付かなかった。

「キュケーー！」

白い巨竜たるフリードリヒが、その手の様な翼を羽ばたかせながら、空を滑空していく。その先には、先程から何かに気を取られている様子を無様にも晒しているＧＮキャノン？がいた。

「フリード、行って！」
「キュケルルーー！」

ＧＮキャノン？は北西を眺めていた。その向こうには、三つの爆炎が暗くなった空に昇っていた。キャロはそのＧＮキャノン？が向いている方向とは逆の南東方面から、フリードリヒをＧＮキャノン？のいるビルの屋上にまで近づけさせた。

だが、肉眼でも砲塔の数が数えられるぐらいにまで近づくと、さすがにＧＮキャノン？も、此方に気付いてしまう。単眼が紫色にギラリッと光る。砲塔が此方に向けられ、フリードリヒとキャロを消すのに十分な熱量が、その砲口に集まっていく。それを冷や汗と共に見詰めていたキャロは、しかし、その顔に笑みを湛（たた）えた。

「私達の勝ちだね、エリオ君！　ツインブースト！」
『Ｔｗｉｎ　ｂｏｏｓｔ』

キャロがブーストを唱えると、ＧＮキャノン？の居る屋上から、破砕音が轟いた。それに何事かと、アップルがＧＮキャノン？の視線を下に向けると、そこからは一本の槍が床を貫き、ＧＮキャノン？の真下から、その白い刃を生やしていた。

「スタールメッサーッ！」

『Ｓｔａｈｌ　ｍｅｓｓｅｒ』

少年の様な高い音程の声が、アップルの耳に届く。その意味を考える前に、ＧＮキャノン？の下に向けていた単眼を、金色の魔力刃が斬り裂いた。視界を失い、右往左往するＧＮキャノン？。そんな機体へと、屋上の床下から現れたエリオが、追撃を加える。

「一閃必中！」

『Ｍｅｓｓｅｒ　ａｎｇｒｉｆｆ』ガコンガコンッ！

スタールメッサーを発動した状態のまま、ストラーダの側面に付いてる噴射口が、白い余剰魔力を噴き出し始めた。エリオはその前に進もうというベクトルをうまく操る為に、ストラーダの柄をさらに強く握りしめる。そして、十分以上の加速を得られるとエリオが判断した、瞬間。

ドンッ！

金色――そう、正に金色の閃光たる一撃が、ＧＮキャノン？の胸部装甲を、刹那の間に貫いた。余剰魔力を噴き出すストラーダの先端が、ＧＮキャノン？に深く突き刺さる。

「ストラーダ！」

『Ｙｅｓ，ｍａｓｔｅｒ』

しかも、ストラーダを突き刺した後も、エリオは噴射を止めずに、ＧＮキャノン？を前に押し、その背中を、屋上の出入り口の壁に衝突させた。その衝突の衝撃により、壁が数十センチもめり込んだが、それを受けてもなお、ＧＮキャノン？はエリオに手を伸ばし、エリオを掴まえようとしていた。それを見たエリオは、その手をダッキングですり抜けると、ＧＮキャノン？からストラーダを引き抜き、後ろにバックした。

「フリード、ブラストレイ！」

「キュクルー！」

それを見計らったかのようなタイミングで、エリオの背後から巨大な火球がＧＮキャノン？に向かって放たれた。あまりのタイミングの良さに、アップルは思わず息をのんだ。その火球はちょうどエリオが刳り抜いた穴に吸い込まれていき、ＧＮキャノン？の内部を火炎で蹂躙すると、その首元から、腕関節から、足関節から炎を噴き出させ、何度も小規模な爆発を誘発させていく。

「エリオ君！」

「キャロ！」

小さな騎士と竜の巫女が、翼を広げた白銀の飛竜の背に乗り、そこから離れていく。その後ろ姿を眺めるしかないＧＮキャノン？は、そのすぐ後に、一際大きな爆発を起こして、機体を爆散させた。

『こ、これ以上はやらせんし、やらせられんッ！』

七機の内の四機を破壊された。それに冷や汗を浮かべたアップルは、南西に位置するＧＮキャノン？に、分割していた意識を集中させた。さすがに、これ以上の損害は想定されていないのだ。これ以上の損害を出せば、まず間違いなく、魔謀（マム）からのありがたくない説教を喰らうだろう……！　そう思ったアップルは、これまでにないほど真剣に、ＧＮキャノン？の操作に意識を払う。

「おおっ！？　何だかさっきよりも、弾幕が厚くなった気がするッすーー！？」

すると、ＧＮキャノン？の四つの砲門から発射される赤橙色の砲撃が、これまでにないほど、その密度を濃くした。一発一発の精度も、先程とは段違いに上がっている。それに驚きを抱きながら、守護する滑空者（かっくうしゃ）――Ｎｏ．１１のウェンディが、破壊する突撃者――Ｎｏ．９のノーヴェを大型プレート「ライディングボード」の上に乗せつつ、赤橙の砲撃が降ってくる低空を滑空していった。

「おい、ウェンディ！　大丈夫なんだろうなッ！？」

「大丈夫ッす大丈夫ッす！　こんな弾幕、アタシからすれば楽勝ッすよ！」

地面すれすれを滑空するウェンディのすぐ後ろに、砲撃が着弾す

る。凄まじい熱風と衝撃波がライディングボードを揺らした。その揺れに、赤髪のノーヴェはバランスを崩しそうになり、咄嗟にボードの端を両手で掴んだ。戦闘機人であるノーヴェですらバランスが取れないほど、その揺れは酷い物だった。だが、それだけの揺れを起こしているボードの上にいながら、操縦士であるウェンディは、腰に手をあてて、全く問題なしに立っていた。

「ノーヴェ、もう少し荒く操縦するんで、しっかり掴まってて欲しいッす！」

その腰に手を当てた姿勢のまま、ウェンディがそう、ノーヴェに死刑を宣告してきた。ノーヴェの顔色が、みるみるうちに青褪めていく。その顔に噴き出しそうになるのを必死に堪えながら、ウェンディは腰に当てていた手をボードの上辺に置き、自身が振り落とされないようにした。ノーヴェはその仕草を見て、さらに顔色を青くした。

「なッ、これ以上荒くだってッ！？　やめ……」

「行くッすよー、おりゃあああああッ！」

「うぎゃあああああッ！？」

ボードが縦に一回転する中、ノーヴェからはしたない悲鳴が上がった。その常ならば聞けない声に、内心で笑い転げたウェンディは、自分達に放たれた砲撃のすぐ上を滑空しながら、ＧＮキャノン？へと急速に接近していった。

『何故だ！？　何故当たらんッ！？』

「ここぐらいでどうッすか、ノーヴェ？」

「十分過ぎる！　だから今すぐアタシを降ろしやがれ、ウェンディッ！」

「了解ッす！」

アップルの声に、当惑の調子が混じり始めた。一発でも当たれば勝負が決まるのに、その一発が先程から全然当たっていないのだ。アップルでなくとも、焦るだろう。

最も、ウェンディとノーヴェはそんなアップルの焦燥に構う事無く、さっきのティアナとスバルと同じように、上と下とで二手に別れた。ノーヴェはボードから直接飛び降りると、その落下先に空の道――スバルのウィングロードに酷似したエアライナーを構築し、それをＧＮキャノン？の元にまで弧を描かせつつ伸ばして、その上を「ジェットエッジ」というローラーブレードで走行する。アップルはさきほどと同じ状況に陥り、未だどちらに狙いを定めるかで迷っていて、砲塔が宙ぶらりんのままであった。

「うおぉおおおおッ！　これで……」

その砲撃が止んでいる間に、ノーヴェはエアライナーの上を疾駆し、ＧＮキャノン？の元にまで辿り着いた。手を伸ばせば、機体に触ることすらできるような距離。その距離で、

『もらッ……！』

ＧＮキャノン？はノーヴェの方に向けた砲塔から砲撃を放つも、

「終わりだぁあああああッ！」

ノーヴェは、その砲撃を真上に飛び上がる事で避け、さらには、真上から落ちてくる勢いをも味方に付けたオーバーヘッドキックを、ＧＮキャノン？の頭部に決めた。それによって、ベコリッという音

が聞こえそうなほど見事に頭部を凹ませたＧＮキャノン？は、砂嵐が舞う視界の中、どうにか相手を視認しようとして……体を捻って繰り出されたノーヴェの二撃目によって、頭部を根元から蹴り飛ばされ、視界を完全に失った。

「止めは任せてくれッす！」

視界を失った事で棒立ちとなるＧＮキャノン？。ウェンディはその真上から降下していくと、右手に固定させたボードの先の、二又になっている所から、一発の魔力弾を放った。それは寸分違わずにＧＮキャノン？の露出した内部構造に当たると、その体の随所から炎の手を上げさせ、内部を何回か爆発させていく。

「ノーヴェ！」
「ウェンディ！」

その何回かの小さな爆発が起こっている間に、ＧＮキャノン？のすぐ傍にいたノーヴェは、ボードの上に乗っているウェンディの手を掴み、その場から離れていく。そして、二機が完全にその場から離れると、次いで、ビルを丸ごと呑みこむ様な大爆発が、彼女達の後ろで起こった。

『ぬ、ぬぅ……！』

最東部に位置するＧＮキャノン？の視界から、その大爆発を見たアップルは、思わず唸ってしまった。七機もいたＧＮキャノン？は、残ったのが僅かに二機のみ。しかも、まだ襲撃を受けていないとはいえ、ここまでＧＮキャノン？の配置場所を予測されたのだ。何時襲撃されてもおかしくはないと、そう判断せざるを得ない。そう思ったアップルは、まずＥセンサーで周囲の索敵を行い……ビルの階段を昇ってくる存在に、気付く。

『やはり、ここにも……！』

それは一段一段を、非常にゆったりとした調子で昇りながら、ＧＮキャノン？の居る屋上に、底が固いブーツを鳴らして近づいてくる。まるで、アップルに余裕を、力の差を見せつけるかの様に。

『だが、これは好機にして勝機！　故に、この殺し合い、貰わせて頂こうぞ、何処かの魔導師よッ！』

その音に焦らされたのか、アップルは姿すら未だ現していない敵へと、赤外線による映像を頼りに、その砲塔の照準を合わせた。壁の向こう側にいる敵は、いまだ階段を昇っている最中であり、この奇襲には気付いていないそうだった。その事実に勝利の笑みを零したアップルは、その笑みを浮かべたまま、ＧＮキャノン？の砲撃を、目の前の壁、その奥にいる敵へと発射させた。

『うぅうううううてててててててぇえええええッ！！』

赤橙色に光る無数の光線が、ＧＮキャノン？の目の前にある壁を

粉々にしていった。破片よりも、粉よりも細かく、小さく、滞りなく破砕していく。オレンジ色の粉塵が辺りに舞い散り、視界を大幅に狭めていくが、それにすら気付かない程、アップルは夢中で目の前の敵に砲撃を撃ち込む。二機に減った事で結界の負担が増え、さらに、全力の砲撃を連発した事で、ＧＮコンデンサー内の疑似ＧＮ粒子の残量がレッドゾーンに突入していようとも、アップルはそれを無視して、砲撃を放ち続ける。

『これで、どうだ……！』

オレンジ色の粉塵が視界をかなり深刻に遮るので、頼りになるのはＥセンサーのみ。そんな状況下の中で、アップルは満足げに、けれど、まだどこかに不安が燻っている心境で、目の前を睨んだ。階段を昇る靴音はすでに途切れて久しいが、それでも決して油断はできない。もしアップルの予想に間違いがなければ、こちらに来るのは恐らく、あの「アレクト社」の本社を一人で壊滅させ、また、オーバーＳランク魔導師までをも討ち取った事のある「ナンバーズ」なは……

「けほっけほっ……ここは随分と粉っぽいな。帰ったらシャワーを浴びなければ……」

『ッ！？』

そんな事を考えていた矢先に、粉塵の中から、一人の少女が突然現れた。その少女は、身を隠す様な草臥れたコートを纏いつつ、長い銀髪を、もうすっかり夜空と化した空に踊らせながら、口に手を当て、軽く咳込んでいる。その姿を視認したアップルは、やはり吾輩の予想は当たっていた……！　と思い、同時に、こんな化物と戦わなければならない事に、絶望すら感じた。

「しかし、いきなり砲撃を放ってくるとは……少々、品が無いとは思わないか、「砲台」よ？」

『や、やはり、チンク……！　だが、吾輩はそれでも……！』

口に当てていた手を、少女――Ｎｏ．５、チンクが、気品すら感じられる優雅（ゆうが）な仕草で、ゆっくりと降ろしていく。その目の前で繰り広げられている幻想的な光景を目にして、しかし、アップルはその身をさらに酷く緊張させた。

「まあ、お前達には言葉が通じんから、話しかけるだけ無駄なのだろうがな。……もっとも、お前達がもし仮にデバイスだとしたら、話が変わってくるんだが……」

『……』

「無言を貫く……かッ！」

チンクが立っていた所に、いきなり砲撃が撃ち込まれる。チンクは前に転がり込んでその砲撃をかわしたが、そのかわした先へも、砲撃が撃ち込まれた。如何に戦闘機人の身体能力が高いといっても、これはかわせず！　と思ったアップルは、しかし、やはりというか常の様にというか、その想いを綺麗さっぱりと裏切られる。

「なら……」

チンクは自身に迫る砲撃を前にして、肩から掛けた灰色のコートを左手で広げた。それで体全体をすっぽりと覆（おお）ったチンクは、その姿のまま、目の前に迫る砲撃に対して臆（おく）せずに、前に一歩、足を踏み出した。

その行動に一番驚いたのは、何を隠そう、ＧＮキャノン？を遠隔（えんか）操作（くそうさ）するアップルであった。彼にはチンクが自殺しようとしている

ようにしか見えなかったのだ。何故なら、ＧＮキャノン？の砲撃は、たった一門だけとはいえ、それだけでもビルを崩壊させるのに十分お釣りが来るほどなのだ。そんな砲撃に自分から飛びこむなどとは、もはや正気を疑ってしまう。

だが、彼は忘れてはいやしないだろうか？　彼女がオーバーＳランク魔導師と同格な戦闘機人であったことを。そして、オーバーＳランク魔導師が人類最強の戦力であるという事実を……彼は、忘れていたのではないか？

そうだ、彼は思い出さなければならない。イオリア・シュヘンベルグとヴェーダをして、『不確定要素（イレギュラー）』と評された彼らの、その真の実力を。

『な、なんだとぉおおおおッ！？』
「私はここで、お前を爆撃する！」

ＧＮキャノン？の砲撃は、確かにチンクに当たっていた。しかし、肝心のチンクは、コートを半分ほど失っただけで、何のダメージも受けてはいなかった。しかも、その右手には銀色に光るナイフがすでに握られて……！

「ハッ！」
『ふ、不覚ッ！？』

チンクの右手から四本のナイフが投げられた。それはＧＮキャノン？の四つの砲塔にそれぞれ一本ずつ突き刺さると、その刀身の大きさに見合わない大爆発を起こし、砲塔を根元から爆砕した。

「ふっ！」

濛々（もうもう）とした黒煙がＧＮキャノン？の肩部から立ち込める中で、チンクが再び身を翻（ひるがえ）せば、今度は左手から新たな四本が投擲（とうてき）された。それはＧＮキャノン？の首関節にトスっと刺さると、これまたその刀身を先程と同じように爆散させ、単眼の頭を吹き飛ばす。

「うおぉおおおおッ！」

だが、チンクはそれだけでは飽き足らずに、次々と金属製のナイフを手から放った。チンクの体が回る度に、冷たく光るナイフがＧＮキャノン？の元へと飛んでいき、その身に重爆を浴びせていく。並みの施設なら十回以上は爆破してもなお余りが出るほどの爆発が、ＧＮキャノン？の全身を包み込み、爆破していく。

「……ふむ、こんなものか。少しばかりブランクを心配していたが、問題はなかったな」

数十本以上ものナイフを投げ終えたチンクはそう言いながら、自身の視線を、最後の一機となったアンノウンがいる方に向けた。戦闘機人の目を持ってすれば、数キロ先に立っているＧＮキャノン？の姿も鮮明に捉える事ができた。その青い巨体を見詰めながら、チンクは独り言を呟く。

「……姉様たちは来てない……か」

ただ、その決意に満ちた独り言を聞けたのは、全身をガラクタへと変えた、アップルとのリンクすら事切れたＧＮキャノン？一機だけであったが。

「ば……そんな、事が……！」

都市部の北東を、最後に残されたＧＮキャノン？に向かって低空で飛ぶアップルは、王の後ろで一人、戦慄していた。彼がここから操っていたＧＮキャノン？は、確かに「ＣＢ」の機体の中では最弱といってもいい性能だが、それでも、その性能はＡＡＡ一という破格の代物で、それが七機中六機も破壊されたのだ。嫌でも動揺（どうよう）したくもなる。

「……どうやら、あの一機以外、全てを破壊されたようだな、変態？」

「全くもってその通り……！　だが変態は止めて欲しいッ！」

「……ふむ。しかし、残りの一機には我らが護衛につく。ＡＭＦは一機だけでも維持可能だろう？　ならば、問題は何もない。そうだろう、変態仮面？」

「グフッ、吾輩のライフはもう……！」

背中から六羽の翼を生やす王は、右手に持つエルシニアクロイツで、最後の一機となったＧＮキャノンを指した。それに血の涙を流しながら、首をこくんと縦に頷かせるアップル。いやみに、血の涙は仮面の縁（ふち）から洩（も）れている。

「……うぬの言う事が確かならば、恐らくはシグナムか、フェイトか、そのどちらかであろう。シグナムならばロングレンジ、フェイトならばアウトレンジで戦おうぞ」
「しかり、確かり、分かりたし」
「だが……解せん。いまだその二人の魔力を感じ取れないのは、どういう事だ？　いや、そもそも……この周辺に民間人が一人もいないのは、一体……？」

王は自分の言葉に、首を傾げた。何かが王の中で引っかかったらしい。空を飛びながらブツブツと何事かを呟き、時折首を横に振っては縦に振る。そんなことを何度かして、不意に、王は中空に止まった。そう、彼女は思い付いてしまったのだ。この状況下で機動六課が取るであろう、その戦術……いや、戦略を。自身のオリジナルである彼女が取るべき、その驚くべき行動を。

「まさか……！」
「……何事、王？」
「まさかぁあああッ！？」

王はアップルの訝しむ声にすら取り合わずに、その身をさらなる高空へと飛び立たせた。焦りが彼女の感情を乱し、身を震わせる。仮に、王の予想が当たっていれば、……！

もはや、彼らにはどうすることもできないだろう……現実は、何時だって残酷なのだから。

「……やはり、やはりやはりッ！」

王は感じた。自分と同じ魔力波長を持つ者の、その魔法の胎動を。それは王ですら持ち得ない絶対の魔力量でもって、空に脈動を打つ。

あまりの魔力に大気が怯えるように震えた。かくいう王自身も、その魔力量を前にして、その柔和で白い餅肌を総毛立たせていた。

「やはり、うぬか……小鳥ぃいいいいッ！」

王はそう叫びながら、頭上を仰ぎ見た。そして、彼女は見ることとなる。本当の夜天の主、その真の力を。次元世界でただ一人、ＳＳ＋ランクに到達した大魔導師の、その真価を……

「ディアボリック・エミッション！」

彼女は、その身で持って知る事となった。

簡潔に述べよう。八神はやてが齎した、その戦果を。

「う～ん……久しぶりに魔力を解放したせいか、狙いがすこ～し甘いな、リイン？」

『でも、十分誤差の範囲ですよ、マイスター・はやて？』

まず、最後に残っていたＧＮキャノン？は、上空数キロメートルで発動されたディアボリック・エミッションの最端に呑まれ、その

全身を塵も破片も残さずに消滅させた。残ったのは、抉り取られたような外観になった、数十メートルから数メートルにまで縮んだビルだけだった。そして、最後のＧＮキャノン?を破壊されたことにより、ＡＭＦも解除されてしまった。

「でも、さすがに数十メートルの誤差は認めたくないわ。見てみい、リイン？　その誤差だけで、ビルを幾つか破壊してしまったやろ？」

『確かに、そうですが……マイスター・はやての魔力量でこれ以上の精密さを求めるのは難しいですよ?』

はやてよりも低空にいた王は、はやての視界に入る事すらできずに、ディアボリック・エミッションの余波に当てられ、付近のビルを幾つも破壊しながら、その身を遥か遠方へと吹き飛ばされた。最後まではやてを憎々しげに睨み、恨みありげに小鳥と罵倒（ばとう）していた王は、しかし、その存在を憎悪するはやてに知らせることすらできずに、退場する事となった。それに彼女がどれほどの屈辱を味わったか……想像することすらできない。

「それでも、何とかせなアカン。……手伝ってくれるか、リイン？」

『マイスター・はやてがそう言うのでしたら、リインはお手伝い致します～！』

その苛立つ王の吹き飛びに巻き込まれたアップルは、同じく背中からビルに突っ込む羽目となり、彼のマイスター（ロード）たる「アーカイブ」とのリンクを維持できないほどのダメージを受け、完全に意識を失った。だが、その意識も、上に乗っかっていた傷だらけの王が、八つ当たりでアップルの顔面を蹴っ飛ばした事で急速に戻らされた。それにアップルが抗議しようと、王の顔を見ると……彼はすぐさま姿勢を土下座に移行させた。そのぐらい恐ろしい形相だったのだ、王の表情は。

「帰ったら速攻で魔法の練習をするで！　あと、結界班に私らの魔法を受け止められる結界を張るよう、頼み込むで、リイン！」

『了解です、マイスター・はやて！』

そして、誰よりもディアボリック・エミッションの中心近くにいたアリオスは、「ガンダム」とは思えぬ無様な姿を、変革すると決めた世界に晒す事となった。

『……』

『マイ……スター……！』

果てのない天上から、縛りのある地上へと真っ逆さまに堕ち行くアリオスは、先程から指一本すら微動させていなかった。突然の広範囲殲滅魔法に呑み込まれたアリオスは、両肩のシールドを消失し、左腕も根元から失って、体中に罅が奔り、飛行することさえ儘ならなくなっていた。

『……』

『意識を、取り戻して……くださ……』

火花を全身から飛び散らせるアリオス。その管制人格である「ＡＲＩＯＳ」は、いきなりの衝撃で意識を失ったガンダムマイスター、アレルヤ・ハプティズムへと、必死に目を覚ますように呼びかけた。しかし、幾ら声をかけても、アレルヤは意識を取り戻さず、声すら洩らさない。こうしている合間にも刻一刻と固い地面が迫り、タイムオーバーが近づいてきているのに。

『Ｍｅｉｓｔｅｒッ！』

オレンジ色に塗装（とそう）された路面が、アリオスの視界一杯に映る。だが、それでもまだ、アレルヤは意識を一向に取り戻さない。その状況に、アリオスは知らず覚悟を決めた。彼が好意を抱くマイスターだけでも護るという、その覚悟を。

しかれど。

『……チ。何やってんだよアレルヤァアアアアッ！？』

そんなアリオスへと、賛美（アレルヤ）ではない者の声が届いた。その声を聞いたアリオスは、信じられないと思いつつも、その声の持ち主に声をかける。

『まさか、その口調は……ハレルヤ！？』

『おお、久しぶりだなキュリオス。いや……今はアリオスだったか？　にしても、お前がいて何なんだよこの様はッ！？　アレルヤが気を失うほどの損害なんて、普通、有り得ないだろうがッ！？』

アレルヤ――いや、ハレルヤは苛立たしげにそう言いつつ、アリオスの体を簡単に地面に対して垂直にさせ、荒々しく強引にＧＮ粒子を噴出させ、その傷だらけの機体を浮遊させた。それによって徐

々にだが確実に、降下の速度が遅くなっていく。アリオスはそれに安堵しながら、ハレルヤへと疑問をぶつけた。答えが返ってくるとは思わずに。

『それで……どうして今まで出てこなかったんですか、ハレルヤ？』

『おっともう時間切れか。じゃあなアリオス、アレルヤを頼んだぜ！』

『……Ｙｅｓ，ハレルヤ』

ズズゥン……という低音を発しながら、アリオスがオレンジ色の路面に降り立った。全身にダメージがあるとはいえ、直立するのにはさほど支障がないらしい。

『……ん。アレ？　ここは……』

その振動と音で目を覚ましたアレルヤは、夢現（ゆめうつつ）の心境で言う。アリオスはそれに溜息を吐きたくなったが、今はマイスターが助かった事に対して、喜びたかった。

『気が付きましたか、マイスター？』

『アリオス、ここは一体……？』

『ここは超高層ビル「マウンテン」、その玄関付近です。ちなみに、６６階のあの穴には、アップルと王……という説明をされていない人物がいます』

『……ありがとう、アリオス。それで、僕はどうやってここまで来たんだい？』

『……マイスター。貴方は覚えていないのですか？　……でしたら、ここから撤退ができ次第、お話しますので、今は……』

『分かっているよ、アリオス……今は、目の前の事に集中しよう』

王（恐らくはアーカイブの差し金だと、アリオスとアレルヤはそう推測した）とアップルが隣りに降り立つのを待つ間に、撤退する意向を固めたアリオスは、早速その意を『００』に伝えようと、通信を繋げようとした……が。

『……？　繋がらない？』

その通信は不吉な雑音をアレルヤとアリオスに聞かせるだけで、他は何も届かせてはくれなかった……。

【逃げられるはずがありません。そういう風にできちまってんです、このくそったれな世界は】

――キラー様から、『とある魔術の禁書目録』のアニェーゼ＝サンクティスより

第４９話　Ｃｏｕｎｔｅｒ　ａｔｔａｃｋ（後書き）

ああ、
しかしまあ、
ただただ、
とても、
うつになるほど、
これに悪戦苦闘して、
うっ……となった。

第５０話　炎熱剣戟（前書き）

【天敵はいつも『同類』】

――ダイモン様から、【魔法少女プリティ☆ベル】より

第５０話　炎熱剣戟

――新暦７５年１１月１５日／ＡＭＦが展開された時刻――

『……一閃ッ！』

「……一閃ッ！」

『な、何だとぉおおおおおッ！？』

月が映える夜天に広がる無色のＡＭＦ。その支配下の中で今、烈火の将が振るう炎熱の斬撃が『００』ＧＳに向かって振り抜かれた。その斬撃は周囲を焔色に照らしながら、『００』ＧＳへと袈裟切りの要領で迫る。「灰色の福音」壊滅作戦を失敗した事で苛立っていた『００』ＧＳはそれに気付くのが遅れ、態勢を崩したまま、それを受けなければならない。刹那の体に悪寒が奔り、Ｏガンダムの思考に焦りが生じる。

ギィイインッ！

「チィッ、ＡＭＦか！」

『クッ……「ＧＮ」、反応が遅れているぞッ！？』

『……』

『……「ＧＮ」？』

だが、足首を地面に埋もれさせながらも、『００』ＧＳは燃える魔剣を交叉した二本のＧＮビームサーベルで受け止める事に成功した。最も、もしあの瞬間にＡＭＦが展開されないで、元々の威力・速度で振られていたら、間違いなく『００』ＧＳはシグナムに真っ二つにされていただろう。

しかも、防御が遅れたのは、不意を突かれただけではなかった。明らかに、右肩のＧＮドライヴの管制人格である「ＧＮ」の反応が、先程よりも鈍くなっている。それに気付いた刹那は「ＧＮ」へとその事を問い掛けるが、「ＧＮ」からの返答はない。先程までは確かに不調ではなかったはずなのに。

『「ＧＮ」ッ！？』

『マイスター、来ます！』

『……Ｏガンダム、頼む！』

『Ｙｅｓ，ｍｅｉｓｔｅｒ！』

だが、そればかりに構っていられないのが、『００』ＧＳの今置かれている苦しい戦況だ。「ＧＮ」へと問い詰めている間にも、シグナムは烈火を纏わせていないレヴァンティンで、再び斬撃を放とうとしていた。刀と剣の中間にあるような大剣が、シグナムの頭の後ろにまで引かれる。その動作を見た『００』は、急いでＧＮビームサーベルを再び十字に構え、防御の姿勢を取るが……

「うおぉおおおおッ！！」

その防御に構わず、シグナムは『００』ＧＳへとレヴァンティンを唐竹割りに叩き付けた。凄まじい轟音が辺りに響く。そして、その重過ぎる一撃を受け止めた『００』ＧＳに、途轍もない衝撃が両腕に奔った。

『グッ……Ｏガンダム！』

『ＧＮカタール、ＯＫです！』

『００』になってからは感じたことがなかった手の痺れが、刹那のデータ上の意識にその存在を殊更主張してきた。それに顔を歪ま

せる……事も無く、刹那は無表情の、しかれど、少々の焦りを内包した顔で、ＧＮビームサーベルよりもさらに刀身が短いＧＮカタールを膝のホルダーから二本、抜き取る。

『……フッ！』

ＧＮカタールはＧＮ粒子を熱量に変換して、その刀身を覆う透明なクリスタル部の温度を、超高温にまで引き上げた。刀身の周囲の大気が、その高温によって歪むのがシグナムにも分かる。それに対抗するように、シグナムもまた、レヴァンティンに炎熱を纏わせ、大気を歪ませた。

「おおおおッ！」
『おおおおッ！』

それら高温の三剣をそれぞれ力一杯握り、『００』ＧＳとシグナムがほぼ同時に、各々の過熱する熱剣を超至近距離でぶつけ合った。『００』ＧＳの二振りがシグナムの一振りに止められると、今度はその一振りを二振りが防ぐ。一合でも二合でも三戟でも四戟でも、その振り合いは終わりを見せず、その剣戟の速度をさらに驚異的な勢いで増していく。例え周囲が高温に熱されようとも、その熱すら利用して、相手の不意を突こうとする一人と一機。大気が歪んで地面が陥没していき、打ち合いで生じた衝撃波でビルが簡単に崩壊していく。そんな世界の終末を連想させるような、均衡する死合いの最中で、不意に、『００』ＧＳが不自然なまでに……ガクッと、肩を落とした。

『そんな……太陽炉のシンクロ率が７９％に落ちるなんて、どうしてですかッ！？　有り得ませんッ！？』
『……まさか、「ＧＮ」はあの時の砲撃で……！』

それを目にしたシグナムは、炎熱の翼を羽ばたかせて、勢い良く後方に飛び退ると、アギトに一声かけ、

『アギト！』

『おおよ、シグナム！　剣閃烈火（けんせんれっか）……』

アギトの炎熱加速とシグナム・レヴァンティンの炎熱変換が合わさる事で、初めて使用する事が可能となる、大威力火炎斬撃による空間殲滅（せんめつ）魔法を、

「『火龍……一閃ッ！』」

同じくらいの大威力を誇る魔人級のおぱ～いを一緒にプルンプルンと揺らしながら、詠唱なしで発動させた。

『Ｏガンダム、ＧＮジェットだ！』

『駄目です！　シンクロ率低下によってツインドライヴシステムが停止してしまった今、『００』の性能は１９％にまで落ち込んでいます！　なので、今の『００』では、ＧＮジェットすら使用できま……！』

シグナムの蛇腹剣から放たれた烈火が、進路上にある全ての物質を焼き尽くしながら、ＧＮカタールを握る『００』ＧＳへと猛進していく。それは『００』ＧＳですら無事では済まない熱量をその焔（ほむら）に宿らせており、刹那とＯガンダムですら思わず生唾を飲み込んでしまう（データ上でだが）ほどの破壊力を備えていた。

『かくなる上は……！』

そして、シグナムの剣閃から放たれたその一閃は、先程のアルヴァトーレの砲撃と同じように、『００』ＧＳをその炎熱の中に丸々、呑み込んでいった……

……静謐（せいひつ）で神聖な世界の真ん中で、少女は独り、湖面の上に寝転がっていた。長い茶髪が湖面の上に広がり、湖に幾重もの波紋を生じさせる。だが、少女がそれに気をかける様子はなく、まるで己の事に関心がないみたいだった。本来なら黒曜（こくよう）に輝く美しい瞳も、今は頑（かたく）なに閉じられたまま、開く様子を見せない。

「……」

細い顎（あご）のすぐ上にある薄く引かれた薄桃の唇も、ただ固く結ばれ、一声すら漏らそうとはしない。もしこの光景を見れば、人によっては少女が死んでいるように見えるかもしれない。例え少女の年相応な紳士的おぱ～いが微か――目を凝らしてもよくは分からない程度だが――に動いていたとしても、周囲の雰囲気があまりにも静かで聖なるモノのため、そう見えてしまうかもしれないのだ。

「……」

「……ここが、貴女の……ふふっ、可愛い寝顔ね。もしこの寝顔をＭｅｉｓｔｅｒが見れば、きっとその御心（みこころ）を開いて下さる事でしょう」

美し過ぎる少女と底が見えない湖、そして、彩（いろど）り豊かな花が咲く世界に、ふわりと。『――』は何重もの波紋を湖面の上に描きながら、柔らかく、その少女の頭の先に降り立った。『――』は少女の寝顔を優しげな笑みで見詰めながら、しゃがんで、その頬を両手で撫でる。とても優しく、慈悲深く。天使のように、聖母のように……それは何度も何度も、少女を撫でる。

「……」

「Ｍｅｉｓｔｅｒの御心は、今も昔も、あの時からずっと閉じられたままです。それを開けることができるは、恐らく、貴女とフェルト、そして……フェイト・Ｔ・ハラオウンだけでしょう。『――』では不可能な事は、すでにヴェーダと「ラジエル」……いえ、今は「ラヴクラフト」か「アーカイブ」と言えばいいのでしょうか？……によって割り出されていますので」

その言葉を言い終えると同時に、『――』の手がピタッと止まった。『――』は名残惜しげに少女から手を離しつつ、最後に、その

少女の額にキスをして、長い黒髪と蒼い瞳を持つ体を、この世界から消失させていった。貴女に「ガンダム」の加護がありますように、と囁く声が、その世界に浸透し、反響して、消えていったのを、少女は最後まで知る事はなかった。

「う～ん、うへへへぇ、マイスター？　チューしましょうチューしますチューするべきです、うっへっへっへぇ……ん？　ここはぁ～……まいすたあはぁ～……マイスター？」

ゆっくりと消えていた『――』が完全に消えたのと時同じくして、湖の上で眠っていた少女がゆっくりと黒曜に輝く瞳を開き始めた。ゴシゴシと、寝惚け眼を何度か高速で擦りつつ、何事かを呟きながら、ちょっぴりだけ暗い周囲を見回す少女。

「……あ、そうでした。確かあの時……って、それじゃあまさか、今マイスターとＯガンダムは二人っきぃりぃいいだとぉおおおおッ!?」

だが、何かに気が付いた少女は、いきなり女を捨てたとしか思えない雄叫びをその小さな口から大きく発すると、そのまま垂直に先程まで浸かっていた湖から飛び上がって、その身を急速に透明な物にしていった。凄まじい行動力と妄想力である。とてもさっきまでの御淑やかそうな少女だとは思えない。

「させませんよ、Ｏガンダム！　マイスターは、マイスターは……エクシアの夫なんですからぁあああああッ！」

お姫様がＫＩＬＬ様な白いドレスの端までをも透明にした可憐で変態的な少女――エクシアは、そう世界に対して絶叫しつつ、そこから急いで去っていった。それを最後まで見ていたのは、漆黒の天

上に浮かぶ、蒼い惑星のみであったのを、『――』だけが知っていた……

世界を赤く染める焔が、『００』ＧＳのいたところを舐めるように燃やし尽くしていく。高熱が産む火傷しそうなほど熱い熱風が肌を、髪を荒々しく撫で、汗を強制的に滴らせる。そして、ガジェットを一度に五十機も破壊したその烈火は、次元世界に巣くう最強の悪鬼すら焼き尽くそうと、さらに勢い良く燃え上がる。

「トランザム！」

『ＴＲＡＮＳ－ＡＭ！』

だが、その業火の中から、ありえないことに、炎にも負けない力を内包した声が聞こえてきた。誰もが思うだろう、空耳だと。気のせいだと。それほどまでに目の前の烈火は圧倒的な威力でもって燃え上がっているのだから。しかし、シグナムだけは鋭い目付きのままで、炎の中を見つめ続ける。まるで、この炎を耐え切るのは当たり前だ、とでも言う様に。

「来たか、トランザムがッ！」

『アレが「ガンダム」の切り札なのか……シグナム、大丈夫なのか？』

『大丈夫だ、アギト。問題は何もない』

そんな悠長な念話をしていた彼らの目の前で、突然、世界を赤く染めていた烈火が二つに割れた。縦にスパッと、どこまでも鋭利に、美しく。それを見たシグナムは冷たくなった汗を背筋にツツゥ……と艶めかしく垂らし、ゴクリと、無意識に唾を呑み込んだ。レヴァンティンを握る力が、否応なく強くなる。やはり最強の悪鬼は、あのぐらいではくたばらんか……！　その事実をシグナムは、酷く歪めた笑い顔で受け止める。

『トランザムで強制的に両ドライヴのシンクロ率を上げて、何とかシステムを発動させる事に成功したが、ドライヴに負荷が掛かり過ぎて、あまり保たないか……速攻で駆逐するぞ、Ｏガンダム！』

『Ｙｅｓ，ｍｅｉｓｔｅｒ！』

炎の裂け目から、世界を赤ではなく紅に上塗りする紅い粒子が溢れだしてくる。そして、その溢れだす中心で、桃色に輝くＧＮビームサーベルを振り上げた格好の『００』ＧＳが、血飛沫にも似た紅い粒子を周囲に拡散させつつ、シグナムに悪鬼の如き相貌を向けた。

肩に搭載されている太陽炉が後方に回り、その噴射口から紅い粒子が爆発するかのように噴き出す。その噴き出す勢いを前に飛ぶ推進力に変換させた『００』ＧＳが、紅蓮（ぐれん）に燃える世界をシグナムに向かって、流星の如く飛翔した。

その爆進を目を逸らさずに見詰めながら、シグナムもまた紅蓮に燃ゆる翼を上下に動かして、『００』ＧＳへと剣閃の如く飛んだ。それらの行動によって、シグナムと『００』ＧＳの距離が加速度的に縮まっていった。一秒が十秒に、一瞬が数瞬に変わるほどに時間が凝縮され、スローモーションになっていく。そんな遅くなった世界の中で、彩度の低い桃色の髪を激しく揺らすおぱ～い魔人のシグナムは、レヴァンティンを右中段に構えた。対して、『００』ＧＳは先程の攻撃を受け止めた事で完全に使えなくなったＧＮカタールには見向きもせずに、二本のＧＮビームサーベルを、左右それぞれの手に握って、無形のままシグナムへと迫る。

「ハァアアアッ！」
『ハァアアアッ！』

紅い粒子と赤い魔力が、正面から衝突した。周りの炎よりも明るい光がパッと弾ける。それに目を眩（くら）ます愚を起こす筈もないシグナムは、自身の後ろへと流れていった『００』ＧＳを視界の内に捉えようと、地面すれすれを飛びながら首を少し後方によじると……

桃色の光剣が熱せられた大気を斬り裂いて、シグナムの脳天へとその輝く刀身を接近させてきた。

「うぉッ！？」

いきなり自身の後方に現れた桃色の光剣を、半ば反射的にレヴァ

ンティンを頭上に掲げる事で防いだシグナムは、次に、自身のすぐ近くにまで迫っていた『００』ＧＳに目を見開いた。シグナムはトランザムを発動した「ガンダム」の強さを四年前の戦争で身を持って知っていた筈だが、これは余りにも……そう、あまりにも、予想の上を行き過ぎていた。

『まだ太陽炉は保つか、Ｏガンダム！？』

『あと３２秒は保つはずです、マイスター！』

『なら十分だ！　今の『００』なら、３２秒もあれば……』

残像だとか早いだとか、そんなチャチな物とは断じて違う。もっと恐ろしい物――瞬間移動のような物の片鱗を味わったような物である。勿論、『００』ＧＳはアップルみたく瞬間転移ができるわけではない。それはただの超スピードでもって、瞬間転移の如き機動を成しているのだ。だからこそ、シグナムは戦慄した。そんなことができるのは、リミット・ブレイクをしたフェイトだけだと、そう思っていたからに。

『オーバーＳランクの一人や二人ッ！』

刹那の力んだ叫びが、『００』ＧＳの内部に木霊した。その力強さに引かれるようにして、『００』ＧＳの剣戟もまた、その苛烈さを増していく。左右のＧＮビームサーベルは実体剣でないのにも関わらず、その一撃の重さ、強烈さで、咄嗟の行動で態勢を崩したシグナムを追い詰め、後退させていく。シグナムは炎熱を纏わせたレヴァンティンを必死に振るって『００』ＧＳの剣戟を凌ぎ、『００』

ＧＳの隙を突こうとするも、そんな隙はさっきから微塵も見当たらなかった。いや、見当たるわけがないのだ。そんな余裕など、とうの昔に失くしているのだから。

『シグナム、駄目だ！　このままじゃあ押し切られちまうぞッ！？』
『分かっている！　分かってはいるが……あぁッ！？』

超低空で互いの剣を打ち合うシグナムと『００』ＧＳ。だが、形勢は明らかに『００』ＧＳが有利であり、シグナムが斬り殺されるのも時間の問題であった。現に、『００』ＧＳは、一瞬だけ『００』ＧＳから意識を逸らしてしまったシグナムの隙を逆に突いて、左腕を肩の付け根からすっぱりと、ゾッとするほど抵抗なく跳ね飛ばしていた。

クルクルと空に舞いながら、数メートル先の地面に落ちていくシグナムの左腕。だが、それに気を取られれば、今度はシグナムの頭が左腕と同じ末路を辿るだろう。そうさせない為にも、シグナムは片腕となった今でも、意識を『００』ＧＳの動作に集中させつつ、レヴァンティンを懸命になって振るった。残像に、見えない一撃に、何も無い所に、炎を纏う魔剣が振られる。だが、読んで字の如く、『００』ＧＳはその攻撃を尽く跳ね除け、シグナムをさらに後退させていく。

「しま……！」
『シグナムッ！？』
『貰った！』
『終わりですよ！』

そんな状況が数秒も続いた時、後退していたシグナムの背が、遂に倒壊したビルにぶつかってしまった。これでシグナムは後退する

ことができず、『００』ＧＳの激烈な攻撃を、そのままの威力で受け止めなくてはならない。今でも右手からレヴァンティンを取り落としそうになっているのに、そんな状態で凄まじく重い『００』ＧＳの剣戟を受け止めなくてはならないのは……幾らなんでも、それは無理を通り越して、無茶の領分である。シグナムはそれを分かっているからこそ、その時、瞬間的に諦めてしまった。生きる事を、「剣士」に勝つことを。

「……！（主はやて……！）」

シグナムの脳裏に、彼女が死んで一番悲しむであろう人が浮かんだ。右腕のレヴァンティンが僅かに下がる。力が、烈火が、その強さを少しだけ弱める。それを見た刹那は『００』ＧＳの右腕を後ろに引き、次いで、右手に握られたＧＮビームサーベルをシグナムの顔面に神速で突き出した。それは確実にシグナムの眉間（みけん）に向かって伸び、その肉と骨と脳を貫こうと……

ボンッ！

その爆発音は、『００』ＧＳの両肩から聞こえてきた。それは刹那にとっては酷く不吉で、背筋が凍る音だった。それはちょうど……ちょうど、『００』ＧＳの、ＧＮドライヴがある所から聞こえてきていたからだ。

そして、その音がシグナムに届くよりも早く、『００』ＧＳからＴＲＡＮＳ－ＡＭの輝きが消えた。ＧＮビームサーベルも、そのビ

ームの刀身をシグナムに届かせる前に、虚空へと消え去っていく。

「なッ！？」

この異常に驚く刹那の声が、シグナムにまで届いた。そして、誰の声だと思ったシグナムが怪訝そうに眉を顰めている間にも、『００』ＧＳのデュアルアイから、光りが消えた。それと同時に、微動だにしなくなる『００』ＧＳ。その両肩のＧＮドライヴからは、先程の爆発音の元であろう黒煙が、天上を目指して緩やかに昇っていった。それを一秒、二秒、三秒ほど、ジッと穴が空くほど凝視していたシグナムは、

「く……は……ははッ、ははははッ！！」

突如、盛大に嗤い始めた。将らしくない、彼女らしくもない、他者を侮蔑する嗤いを、シグナムは、次元世界中で怖れられる「ガンダム」の象徴機である「剣士」へと向ける。先程まで彼女を圧倒していた「ガンダム」、その無様な姿を、彼女は嗤い、哂って……最後に、そんな惨めなモノに圧倒され、生きる事を、主の元に戻ることを諦めようとしていた、先程までの一番無様な自分を、大いに嗤う。

「まさか、万全でなかったとは……それで戦場に出てくるとは、一体どういうつもりだ、「剣士」？」

「くッ……！」

「……！　そうか、さっきのもお前の声なのか。初めて聞いたが……案外、若い感じを受けるな」

ひとしきり笑ったシグナムは、動かぬ人形となった「剣士」を見下す様に見ながら、右腕を頭上に掲げた。レヴァンティンにカート

リッジがロードされ、纏う炎熱が勢いを増す。

「だが」

そんなシグナムを他所にして、『００』ＧＳに異変が起きた。装甲が、装備が、どんどん光の粒になっていくのだ。それに少し驚きはしたものの、はやてが推す「ガンダム」デバイス説を信じ切っていたシグナムは、それがＢ・Ｊ解除の時の現象ではないかと推測し、大人しく光りが収まるのを待った。そして、その蒼碧色の発光が収まると、そこには……

蒼と白の、体に張り付くようなパイロットスーツを着た男が一人、膝を着いた状態で、シグナムの目の前に忽然（こつぜん）と現れた。

「なッ……インストールが解除されただとッ！？　Ｏガンダム、一体何が……Ｏガンダム？　返事をしろ、Ｏガンダムッ！？」

その男――刹那・Ｆ・セイエイは、酷く焦った様子を隠しもせずに、今の彼にとって唯一の相棒であるＯガンダムへと、何度も何度も声をかけた。だが、返答は一度もされず、ただ虚しい響きを辺りに鳴らすだけであった。フェイスガードのヘルメットの内側で、額から脂汗がドッと滲（みじ）み出てくる。しかし、状況は予断を許さないどころか、今にも彼の命を散らそうとしていた。

「私の戦友であったバスターナとヴォクシーを斬殺したお前に、私は慈悲をかけるつもりなどない。だから、今ここで！」

シグナムの頭上に掲げられていたレヴァンティンが、カシャッという乾いた音を立てて、刹那の方に赤く光る刃を向けた。その熱された魔剣は、容易く刹那の体を両断し、蒸発させる事だろう。これがフェイトや六課の新人たちならば、まだ魔力ダメージで気絶するだけで済んだかもしれない。だが、今回ばかりは相手が悪く、シグナムにはそんな気など毛頭なくて、殺す気の殺傷魔法で刹那を斬り殺そうとしていた。

元々、シグナムにとって人殺しという悪行は、なんら珍しくもない行為であった。例え、嫌悪感を抱いていたとしてもだ。かつて、まだ闇の書と呼ばれていた頃は、寧ろ人を殺すことなど日常茶飯事の事であり、彼女が殺した人の数だけで一山を築けるだろう。故に、シグナムは躊躇(ちゅうちょ)もせずに、刹那を殺す。後悔も懺悔(ざんげ)もなく、どこまでも冷酷に、無慈悲に、シグナムは刹那を殺そうとする。

それがまるで「ガンダム」のようであると思ったのは、恐らく、相対する両者双方だろう。

「地獄に逝け、「剣士」よ！」

「ガンダム」のお株を奪う様な悪鬼の形相をするシグナムの凶刃(きょうじん)が、大気を熱し、空気を斬り裂きながら刹那へと振り落とされようとしていた。それをただ見ることしかできない刹那は、しかし、

「まだだ……まだオレ達は、「ガンダム」になっていない……！」

「……なんだと？　貴様、何を……」

「戦いを、争いを、戦争止める存在である「ガンダム」に、オレは、オレ達はまだ……なってなどいない！！」

「……いや、考えるな。今はただこいつを殺すだけに集中する」

まだ高みを目指す事を諦めていない瞳で、シグナムを鋭く睨んだ。どこまでも強く、恐ろしく、狂気を孕み、純粋を含んで、刹那はシグナムを睨み上げた。それにシグナムは怯えかかったが、すぐに正気を取り戻すと、レヴァンティンに込めていた力をより強くして、その人殺しの作業を再開させた。魔剣の名を与えられたデバイスが、刹那へと真っ直ぐに振り落とされる。刹那は自身の命を燃やし尽くそうとするその炎剣から決して目を逸らさずに、

「あの時に誓った事をここで反故するなど、オレが、オレ達が許さない！　許せない！」

「この剣を振り落とす。それだけだ、それだけを考えろ……」

宙のような穹へと、手を伸ばしながら、

「だから、もしオレの言葉が届いているのならば、力を貸してくれ……」

「……さらばだ、「剣士」よ」

その名を、叫んだ。

「エクシアッ！」

【死んでしまった人間は、もうこの世のどこにもいない。どんなに

泣いても、いないものはいないのだ。どんなに求めても会えないのだ。でもな、お前は私に会えた。私はお前に会えた。私は一人でお前も一人。でも一緒にいれば、ほら二人だぞ？　もう寂しくはないじゃないか。

大丈夫だ、お前は一人じゃない】

――鴨川秘様から、『紅　ｋｕｒｅ－ｎａｉ』の九鳳院　紫より

第５０話　炎熱剣戟（後書き）

ああ、
しかしまあ、
ただただ、
とても、
うつになるほど、
これに悪戦苦闘して、
うっ……となった。

の宣言通り、記念すべき第５０話を投稿しました。ちなみに、？？？ＶＳ　？？？はまだもう一話続きます。そして、今年中には第５１話を投稿する予定です。それさえ投稿できれば、後はエピローグ二話と幕間二話で５．が終われるはず……ＴＲＡＮＳ－ＡＭッ！！

第５１話　叫んで求めて憤る天雷たち（前書き）

【実は俺、守護天使が付いているんだよ】

――鴨川秘様から、『紅』の紅真九郎より

第５１話　叫んで求めて憤る天雷たち

――新暦７５年１１月１５日――

「エクシアッ！」

刹那の命を焼き尽くす炎の魔剣が、スローモーションとなった世界の中で、ゆっくりと刹那に向かって振り落ちていく。その一撃は最強の悪鬼を殲滅するに足る熱量でもって、程無く刹那をドロドロに溶解させるだろう。刹那は頭の片隅でその末路を鮮明に描きつつ、己の全てを込めて、彼が最も信頼するモノの名を叫んだ。答えが返ってくるかどうかは問わずに、ただ……力一杯に叫ぶ。共に真の「ガンダム」になると誓った、最高のパートナーであるモノの名を。

それに対して、天使の名を冠する悪鬼は、

『Ｙｅｓ，ｍｅｉｓｔｅｒ！！』

刹那と同じ以上の心で……それに叫び返したのであった。

ガキィイイインッ！

「くあッ！？」

『んな……！』

甲高い金属音が辺りに響き渡る中、目の前にいた「剣士」との戦いで左腕を斬り落とされたシグナムの魔剣、レヴァンティンが、シグナムの右手に握られたまま、空高く弾き飛ばされた。シグナムの体も、それに追従するかのように、数メートルほど後退する。たたらを踏む足で地面を強く踏み砕き、態勢を整えようとするシグナム。そんな彼女の目の前で、何の前振りもなしに現れた蒼碧色の繭（まゆ）がピキッと、音を立てて罅割（ひびわ）れた。その乾いた音に、シグナムは全身を鳥肌立たせ、唇を強く噛（か）み締め、次いで、力を入れるあまり、噛み千切った。千載一遇（せんざいいちぐう）の好機をふいにされた事、そして……また悪夢が繰り返されようとしている事に対して、彼女は大きな憤りを感じたのだ。

「クソッ……アギト！」

『駄目だ、シグナム！　一旦退くんだ！　もうお前の魔力は枯渇（こかつ）寸前なんだぞッ！？』

「……だが、それでも！　私は……退くことなど、できん！！」

『～～！　ああもう、分かった、分かったよシグナム！　なら、とっとと勝手に決めやがれ！　烈火刃（れっかじん）！』

「……すまん、恩に着る！」

『謝るなら、さっさとソイツを斬り焼いちまえってんだ！』

目の前の繭がパキバキッという音と共に、完全に罅割れる。それと同時に、蒼碧色の粒子がごうごうと吹き荒び、ありとあらゆるものを吹き飛ばそうとする。そのＧＮ粒子の嵐に抵抗しつつ、シグナムは蒼碧色に染まった視界の中で……それを見た。

それは、「ＣＢ」が保有する悪鬼共の中でも、格別の戦果を上げていた事から、何時しか関係者たちの間で「ガンダム」の象徴機として扱われた悪鬼であった。

それは、四年前に四人ものオーバーＳランク魔導師を倒した、管理局が最も憎み、「世界清浄」が最も警戒した「Ｏ・Ｓ・Ｋ」であった。

それは蒼と白で構成されたスタイリッシュな機体を静かに地面に降ろした。右手に大剣を、腋の後ろには二対の光剣を、腰部にも二本の投擲剣を搭載し、さらには、腰の両側を長剣と短剣とで固めたそれは、計七本もの剣を使う事から、セブンソード――あるいは、その戦闘スタイルから「蒼い流星」として恐れられた「ガンダム」

……

……「ガンダム」エクシアであった！！！！

『エ……エクシア、なのか？』

『そうですそうですよそうなのですマイスタァアアッ！！　カァア

アムバックしてきましたとも何処とも知れない世界からぁああ！
それもこれも、全てエクシアのマイスターに対する……』
『早速で悪いが、敵が来るぞ！　エクシア、ＧＮソード！』
『……最後まで言わせろや、おぽ～い魔人さんよぉおおおおッ！！』

エクシアの右手の大剣が重たい音を立てつつ展開された。その銀色の大剣は冷たい光を放ちながら、正面から振り落ちてくる炎熱の大剣を易々と受け止めた。冷たい光を放つ大剣と炎熱を纏う大剣が火花を散らしながら、ギリギリとせめぎ合う。

「堕ちろ、「剣士」！」
『させるかッ！』

せめぎ合いをしていた両者はそう叫び合うと同時に、後ろに飛んだ。そして互いの獲物を瞬時に蛇腹剣とライフルモードへと変形させる。蛇腹剣が唸りを上げながらエクシアへと迫り、幾条もの桃色の光線が大気を貫きながらシグナムの元へと向かう。その二つは両者がいた所に盛大な土埃を上げ、辺り一帯の視界をオレンジ色の粉塵で覆い尽くした。

「うぉおおお、まだまだぁあああああッ！」

その粉塵の中から、炎の翼を羽ばたかせるシグナムが、赤い魔力を放出しながら飛び出してきた。隻腕に握られしレヴァンティンはその形状を既に大剣に戻しており、その刀身には烈火が渦を巻いて、何もかもをも焼き尽くそうとしていた。

だが、シグナムを迎え撃つエクシアもまた、右手の大剣をライフルモードからソードに変えており、冷たさを内包する銀の閃光を刀身から放っていた。何もかもをも断罪し、駆逐する閃光。それはレ

ヴァンティンの赤い輝きを受けてなお、陰(かげ)りを見せることはない。

『エクシア、さっき言った事は本当かッ！？』

『Ｙｅｓ，ｍｅｉｓｔｅｒ！　ドライヴ本体に損傷があるせいか、今のエクシアは、何時ものエクシアの７９％ほどです！　しかも、時間が経てば経つほど性能が低下しているので、恐らくは自己修復機能にも何かしらの損傷があるかと！　なので、この一撃で決めて下さい、マイスター！』

『……了解した！　刹那・Ｆ・セイエイ、エクシア……』

烈火のように勢い良く飛ぶシグナムと同じく、エクシアもまた炎に燃える世界を流星の如く飛翔した。赤い烈火と蒼い流星が互いの距離を凄まじい勢いでゼロに縮めていく。両者が噴射する莫大な魔力と多量のＧＮ粒子が、周りの破壊が一段と進ませてゆき、周囲のビル群を一挙に瓦礫(がれき)の山へと変えていった。その炎熱と破壊が織り交ぜとなった世界の中で、シグナムは魔剣を頭上近くにまで振り上げ、エクシアは大剣を前に突き出した。二人の持つ剣の刀身が炎に照らされ、その光を眩(まぶ)しく反射させる。

『目標を駆逐するッ！！』

そんな赤と銀の光が混ざり合う中で、剣を振り上げ、突き出す二人の交叉(こうさ)は瞬(まばた)きの内に終わりを迎えた。瞬き。本当に刹那の間に、二人の戦いに決着が着いたのだ。そして、その刹那の決闘を終えて、立つことができたのは……

『一先ずアリオスとの合流を目指すぞ、エクシア！　撤退はそれからだ！』

『Ｙｅｓ，ｍｅｉｓｔｅｒ！　エクシアは何処まで逝(い)ってもマイスターに憑(つ)き従いますとも！』

V字アンテナの片方を斬り落とされたエクシア、ただ一機のみであった……。

地面が目の前に広がっていく。オレンジ色の塗装がなされた路面が視界一杯に広がっていく。砕かれた小石が目に映り、自分から垂れた鮮やかな血がそこにさらなる彩りを与える。私はそれを静かな面持ちで眺めながら、地面にボスンッとうつ伏せに倒れ込んだ。

「ヒュー、ヒュー……ゴボッ」

呼吸が苦しい。「剣士」の一撃はどうやら右の肺を少しばかり抉り取っていったみたいだ。呼吸する合間にもどす黒い血を大量に噴き出してしまう。その血の量を見て、私は知らず知らずの内に覚悟を決めてしまっていた。

即ち、死ぬ覚悟を。

「し、シグナム!?　大丈夫かよ、おいッ!?　待ってろよ、今すぐ回復魔法を……ちくしょうッ、私の回復魔法じゃ全然回復しねえッ！　誰か、誰か他に回復魔法を使える奴は……！」

耳元で叫ぶ小さな相棒の声すら段々と聞こえなくなってきた。それに、視界もどんどん狭くなってきた。自分から噴き出る血が他人事のように思える。しかし、それは確かに私から噴き出ており、私の生命力を死神の鎌でこそぎ落としているのだ。そこまで考えた所で、私は自分の意識が朦朧(もうろう)となってきている事に気が付いた。そして……駄目だ、思考も……ぼんやりとなって……

「……おい、冗談だろ？　冗談だろなあおいッ！？　目を開けろ！　開けろよシグナム！　まだ私達は、私達は……～～！！」

……アギト、こんな不甲斐(ふがい)の無い騎士で、本当にすまなかった。お前の新たな主が素晴らしい騎士である事を、私は切に祈って……いの……て……

「ハアッ、ハアッ……！」

一本に纏めた桃色の髪を上下に激しく動かしながら、フェルト・グレイスは半壊したビルの中を、独りで走っていた。タプタプと、慎(つつ)ましやかなおぱ～いが縦に揺れると、今度は激しい運動により呼吸が乱れる。しかし、立ち止まっているわけにはいかない。何故な

ら、彼女が今いる所は……！

「ハアッ、ハァッ……アップル、覚えておいて……！」

魔導師たちがあちこちに徘徊（はいかい）している場所だったからだ。しかも、よりにもよってその中には、機動六課所属の魔導師までもがいた。推定Ａ～ＡＡランクの魔導師が二人に、ＡＡ～ＡＡＡランク相当の飛竜が一体。その戦力は、リンカーコアを持たないフェルトにとっては、絶望すら感じる物だ。一体何時まで彼らの目を誤魔化（ごまか）し切れるのか……「ＣＢ」で一応の訓練を受けたフェルト自身ですら、自信が全くない。

「ハアッ、ハァッ……ちょっと、休憩しないと……ハァッ、ハァッ……」

半壊したビルの四階にいるフェルトは、砕けた窓ガラスが散らばっている窓際にすり寄ると、そこから階下にいる魔導師たちを注意深く見下ろした。どの魔導師達も各々のデバイスを起動させており、隙を垣間（かいま）も見せていなかった。緑色の鈍重そうな、機械人形風に構成された珍しいＭ・Ｓ（モビルスーツ）を展開している警備員達が、白と赤のＢ・Ｊを纏う少年に敬礼をしながら何事かを伝えている。少年の隣りにいる白とピンクのＢ・Ｊを展開している少女は、先程からずっと白い巨竜――名前は確かフリードリヒ――を撫でている。その眼下の光景を見ながら、フェルトは少しだけ溜息を吐いた。疲れを吐き出す様に、苛立ちを無くそうとするかのように。しかし、それがいけなかった。

「時空管理局です！　大人しく……」

「……って、フェルトさん!?　一体どうしてこんな所に……？」

「……ッ!?」

その溜息を吐いた時に僅かばかり飛んだガラスの破片。その破片が反射した光を、二人――エリオ・モンディアルとキャロ・ル・ルシエ――はしっかりと目視していたのだ。そしてキャロは一瞬の内に破片が飛んできた方角を魔法でサーチし、その方角に人がいることを察知して、エリオをそこに向かわせた。エリオはそこ――フェルトが休んでいる所にソニックムーブで飛ぶように移動して、フェルトの元へと一秒ほどで辿り着く。だが、そこにいたフェルトに、二人は驚いた。当たり前だ、この区域は既に民間人の避難を完了させていたはずだったからだ。故に、ここにいるのは……

「……フェルトさん。少し、僕達と同行、お願いできますか？」

「……」

「フェルトさん！」

「……クッ！」

「あ、待って……エリオ君！」

逃げ遅れた民間人か……あるいは「灰色の福音（シンデレラ）」、もしくは「CB」の関係者である可能性が……！

「フェルトさん、貴女はもしかして……もしかして……！」

「うっ……！」

エリオ達から逃げようとしたフェルトに一瞬で追い付き、後ろから腕を取り押さえるエリオ。フェルトから苦痛の呻き声（うめ）が漏（も）れたが、今はそれに構うほどの余裕など、エリオにはなかった。管理局が全力で調査しても、未だ全貌（ぜんぼう）……どころか、氷山の一角ですら把握できないでいる謎めいた組織、「CB」。その正体を知る、またとないチャンスなのかもしれないのだ。知らず、力が入ってしまうのも無理からぬことである。

「……「灰色の福音（シンデレラ）」、いえ、「ＣＢ」の……」
「……ッ！」
「「！！」」

エリオが発した「ＣＢ」という単語にビクンッと反応するフェルト。その反応を見て、エリオとキャロは確信した。フェルトが「ＣＢ」の関係者であることを。

「……フェルトさん。本部まで同行して貰います」
「……う」
「……優しく降ろすので、大丈夫ですよ？」

フリードリヒの背にフェルトを乗せ、ゆっくりと地面に降りていく。そして地面に降り立つと、フェルトをフリードリヒの背から降ろして、バインドと魔法を封じる手錠（てじょう）をかける。ジャラジャラと鳴る手錠が、締め付けるような桃色のバインドが酷く窮屈（きゅうくつ）そうに見え、二人の子供に罪悪感を感じさせる。

「……取り敢えず、フェイトさんが来るまで、ここで待機していよう、キャロ？」
「そうだね、エリオく……」

絶対絶命のフェルト。逃げる事はできず、かといって自害する勇気など、彼女は持ち合わせていなかった。この「想い」を刹那に告げずに死ぬのは……とても嫌だったからだ。だから彼女は咄嗟（とっさ）に叫んでしまった。彼女が愛するモノの名を。無意識下で、されど必死に、縋（すが）るように。

「刹那ッ！！」

彼が現れるかどうかなど、フェルトには分からない。寧ろ、以前のように現れてはくれない可能性の方が高いだろう。けれど、それでも彼女は叫ばずには居られなかったのだ。想いの為、信じているが故に。そして、その叫びは……

『フェルトッ！』

今度こそ確かに、彼に届いたのであった……。

「皆さんは援護をお願いします！　キャロッ！」

「うんッ！　ケリュケイオンッ！」

『Ｂｏｏｓｔ　ｕｐ，Ｓｔｒｉｋｅ　ｐｏｗｅｒ』

正面からエリオたちに近づいてくる「剣士」へと、雨のような射撃魔法・魔力弾・魔力弾丸が、間断無く飛んでいく。総勢二十五人もの「ティエレン」（Ｄ～Ｃランク魔導師たち）から放たれるそれは、一直線に飛んでくる「剣士」へと次々に着弾し、周囲のビル群をも削り取っていった。一本道の真向（まむ）かいから向かってくる「剣士」は、どれだけ速くとも、彼らにとっては格好（かっこう）の的でしかないのだ。最も……

「ち、ちくしょう！　止まらねえぇえええええッ！？」「当たっているのに……なのに……止まらない！？」「止まれよこんちくしょおおおおッ！？」

幾ら的に当てようとも、ダメージを負わせられないのであれば、何の意味もなかったが。

『性能が７３％にまで落ち込みました！　急いで下さい、マイスター！』

『大丈夫だ、問題……』

エクシアは三次元的な機動で狙いをぶれさせ、目前に迫った魔力弾丸を右手のＧＮソードで切り裂きながらフェルトに向かって跳ぶように飛んだ。そしてある程度の距離を詰めると、左手で腰部にあるＧＮビームダガーを掴み、それを二人のティエレン目掛け、凄まじい力で投擲した。

「がッ！？」「きゃッ！？」

一本はティエレンの、Ｂ・Ｊよりも強固に構成されているはずのＭ・Ｓをいとも容易く貫いて、胴部に風穴を開けた。もう一本は別のティエレンのピンク色のモノアイを抉って、その後方にいたティエレンの右肩に突き刺さる。重厚な装甲の中から、血が冗談のように溢れ出てきて、二人のティエレンが地面に倒れこむ。

『ないッ！！』

その惨劇を引き起こしたエクシアが、右手の大剣をバックラーに収納して、黒光りする銃口を二十三人に減ったティエレンへと向け

た。そして、連続して三射、桃色の光線を放つ。その三射はティエレンの頭部を正確に撃ち抜き、「ティエレン」というM・Sを纏っていた三人の魔導師までをも絶命させた。

「フリード、ブラストレイ！」
「キュケー！」

先程よりも大分薄くなった弾幕を、エクシアは縫うようにして掻い潜り、フェルトがいる所まで一気に接近を図った。だが、その眼前に、巨大な火球が撃ち込まれ、停止を余儀なくされる。それに舌打ちをし、頭上の白い飛竜へとデュアルアイの焦点を移したエクシア、その正面から、

『カートリッジロード』ガコンガコンッ！
「一閃必中……！」

槍の騎士が、金色の魔力刃を生成したストラーダ片手に、エクシアへと突貫した！

『「メッサー・アングリフッ！」』

閃光のような一撃が、フリードリヒを見上げているエクシアへと、その矛先を急速に近づける。雷電がバチバチと爆ぜる槍が、その破壊力でもってエクシアを突き刺そうと、黄色い魔力刃を胴部へと接近させる。速い、と思った刹那は、同時に、フェイト・T・ハラオウンの面影をその騎士に見た気がした。金色の閃光、その面影を。

『エクシア！』
『ハイでイエスでスキですマイスタァアアアアッ！！』

だが、だからこそ刹那はその一撃に反応することができた。閃光の一撃、しかれど、未だ未熟なその一撃は、何度も何度もフェイトと死闘を繰り広げた刹那にとっては、十分以上に対処することができる一撃でもあったのだ。顔を上げたまま膝を落とし、バックラーを斜めに構えるエクシア。ストラーダの矛先がバックラーに当たるのと同時に、その力の流れをずらし、ストラーダの直進する力を斜めに動く力へと変換させ、エクシアの真横を通る結果にさせてしまう。その流れるような一連の動作にエリオは信じられない！　という表情を作り、そのまま数瞬ばかし、何も無い虚空を虚しく直進していった。

その騎士がいなくなった間隙（かんげき）を突かない手はないとばかりに、エクシアが、キャロを背に乗せたフリードリヒのいる空域にまで浮かび上がっていった。そして右手のＧＮソードを展開し、それを右中段に構えながら、フリードリヒへと斬りかかった。剣身を横に伏せたエクシアが白い巨竜に向かって飛ぶその光景は、どこか神秘なるモノを感じる。だが、相手となるフリードリヒとキャロにとっては冗談ではない光景だ。彼女たちにはクロスレンジの能力がないのだから、「剣士」に接近を許せば、それだけで……ゲームオーバーとなるのだから。

「ふ、フリード！」
「きゅ、キュケルルーッ！」

手綱を握るキャロの必死さを感じたのか、フリードリヒは白い翼を急いで羽ばたかせ、さらなる上空へと舞い上がろうとした。しかし、その頭上に、何故か影がスッ……と落ちてきた。それを不思議に思ったキャロは頭を上げ……それを見た。見てしまう。

「……え？」

「O．S．K」として怖れられ、

「……あ」

「CB」の象徴機として恐れられ、

「あ……あぁ……！」

そして、

「フリードッ！？」

「蒼い流星」として畏れられた「ガンダム」の姿を。

「きゅ……けぇ……」

フリードリヒの頭上へといつの間にか先回りしていたエクシアの一撃が、フリードリヒの片翼を斬り裂いた。真っ白な翼が鮮血の赤に染まりながら、地面へとゆっくり落ちていく。片翼を失くしたフリードリヒは、それでも翼を羽ばたかせ、空に滞空しようとするが、

『ハアッ！』

それを許すほど、「ガンダム」は甘くない。

「……けぇ！？」

「フリード！？　しっかりして、フリードッ！」

フリードリヒの左翼を斬り裂いた右の大剣を下に振り抜いたまま、

エクシアはフリードリヒの脳天に左のストレートを喰らわせ、平衡感覚を著しく損なわせると、左のストレートを突きだした勢いを利用して体を半回転させ、返す刃で右の大剣をフリードリヒの腹部にも叩き込んだ。

それら二撃により、左翼、及び腹部から夥(おびただ)しい量の血を噴き出すこととなったフリードリヒから、羽ばたきの力がどんどんと消えていった。先程まで飛んでいた高度も徐々に下がっていき、地面にその体を落とそうとするフリードリヒ。キャロが必死にフリードリヒに声をかけるが、フリードリヒは目を閉じたまま、一向に羽ばたこうとしない。このままでは地面に墜落(ついらく)するだけだというのに。

「フリード！」

『これで、邪魔者はいなくなった！』

『さあ、フェルトこと女狐(めぎつね)を助けに行きましょう、マイスター！』

キャロの涙声が夜天の空に反響する。その声をＢＧＭにして、エクシアは二十人にまで減ったティエレンの中隊へと飛んだ。背後から噴き出すＧＮ粒子が、その勢いを増していく。その後ろ姿を見ることしかできないキャロは、思う。このままではフリードどころか、ティエレンの人達までやられてしまうと。その事実は心優しいキャロにとっては、耐え難い物であった。だからだろうか？　常にない大声で、彼女の騎士の名を叫んでしまったのは？

「エリオ君ッ！」

「ストラーダ！」

『ソニックムーブ』

対象に浮遊の効果を与える補助魔法「フローター」をフリードリヒにかけ、何とか地面との衝突を回避したキャロの横を、一筋の閃

光が奔っていく。その閃光は紫電を纏って、エクシアへと二度目となる突貫を行おうとしていた。その突貫は彼にとっての主たる少女の声を受けたせいか、先ほどよりも威力や速度が上がっているように思える。

『マイスター、性能が７０％になりました！　それと、後方からも来ます！』

『ああ、分かっている。だが、今は後ろよりも前の方が重要だ。フェルトを助けたら、この場から即時撤退するぞ、エクシア！』

『Ｙｅｓ，ｍｅｉｓｔｅｒ！　……って、回り込まれた！？　このエクシアを抜いて！？』

『ソニックムーブか、厄介だな……エクシア、作戦変更。まずはアレを叩く！』

一筋の閃光となったエリオは、まずエクシアを追い越した。ティエレンの人たちを守るために、その前面に出なければならなかったからだ。それに、後方からの奇襲などでは、恐らく先程のようにいなされて終わりだと、彼の勘がそう告げていたのも回り込んだ要因の一つであった。故の真っ向勝負、流星と閃光による、刹那の決闘。それを彼は、一秒にも満たない時間の中で選択していた。

「……カートリッジ！」

『ロード』ガコンガコンッ！

ティエレンからの援護射撃がエクシアへと雨霰と降り注ぐ中、エリオは自身から発する放電を一段と強くする為、自身の魔力をさらに電気へと変換させた。バチバチバチィイイッ！　凄まじい放電の音が、エリオよりも後方にいるティエレンたちのところにまで轟く。だが、エクシアはその聞き慣れた音に何の想いを抱くこともなく、右手の大剣を後ろに振り被った。７割にまで減ったとはいえ、

その力は未だSとAAAの境を彷徨うほどには残っているのだ。なのに、何故目の前のAAランクの騎士を恐れる？　否、恐れる必要など、皆無である！

『目標の魔力増大！　でもまだAAランク相当なので、恐れる必要はありませんとも、マイスター！』

『了解！　刹那・F・セイエイ、エクシア……』

放電を溜めるエリオへと、片方のV字アンテナを失くしたエクシアが飛んでいく。右手に大剣を構えて、エリオという幼い命を駆逐するべく、悪鬼の行進を止めないエクシア。その怖気が走る姿を終始、つぶらな瞳で捉えながら、エリオは呟いた。

「……紫電ッ」

自身の中に溜めこんでいた電気が、ストラーダに向かって流れていくのが分かる。だが、未だ未熟な騎士であるエリオには、その膨大な電力を完全に操る術がないため、幾らかは放電現象として周囲に散らしてしまう。しかし、それでもストラーダには十分以上の電力が補われ、矛先の切れ味が常よりも数段上となった。その雷の槍を両手で握り締めながら、エリオは最後のトリガーを引く言葉を、力の限り……叫んだ！

「一閃ッ！！」

『目標を駆逐す……ッ！』

放電迸る両者の間で、一際大きな雷が轟音と共に閃いた。あまりにも速く、そして、目視することができないその一撃は、幻想的な跡を中空に引きながら、大剣を振り被ったままのエクシアへと真っ直ぐに伸びていく。

エクシアを操る刹那は、たかがＡＡランクの魔導師が成したとは到底思えないこの閃光の一撃に、半ば目を奪われた。がしかし、それでもその身は反射的に迎撃の態勢を取っており、刹那が我に返った頃には、すでにエリオが持つストラーダの矛先へと、ＧＮソードを振り抜いていた。

だがここで、両者が企図していなかった事態が起きてしまう。いや、両者だけではない。その場にいる誰もが想定すらし得なかった事態が、ストラーダとＧＮソードがぶつかり合った時に起きてしまったのだ。

バキンッ！

『ほえ？』

その事態を受けて、まず、エクシアが呆けた。何が起こったのか分かりませんと、そう言うように。

『なッ……！』

次いで、刹那の驚愕した声が、エクシアにまで蠱惑的に聞こえてきた。エクシアはその、彼女だけに聞こえる悩ましい声をデータ内に永久保存しながら、未だフワフワする気持ちの中で、現状を確認しようとする。ヴェーダを介して、機体状況を確かめるエクシア。すると、有り得ないことに……

『じ、ＧＮソードが、折れ……てッ！？』

「ストラーダァアアアッ！！」

『カートリッジロード！』ガコンガコンッ！

『うおぉおおおおッ！？』

エクシアの右手にあったＧＮソードの刀身が、半ばから無数に砕け散っていた。それも、エリオのストラーダと接触した際に。その事態を受け、エクシアと刹那は大いに動揺した。刹那とエクシアが今も昔も変わらずに、最も信頼する武器であるＧＮソード。その彼らの力の証でもある刀身を砕かれたのだ、その動揺は衝撃となるほどに大きかった。

そして、その動揺――衝撃に付け込んで、エリオのカートリッジを四発も込めた一撃が、エクシアの胴体に迅雷の如く、目視できない速度で突き刺さった。切れ味を何段も高めた矛先が、エクシアの装甲を少しずつ削っていく。性能が落ちたエクシアでは、エリオの全てが込められた一撃に無傷で耐えることができないのだ。

「クッ……うおぉおおおおッ！！」

『エクシア！』

『Ｙｅｓ，ｍｅｉｓｔｅｒ！　全力、全開！　ＧＮドライヴ、フルドライブ・イグニッションッ！！』

しかし、衝撃になるほどの動揺に付け込まれ、さらには、雷で強化された突貫を受けても、それでも……エクシアはその場に踏み止まる。背のＧＮドライヴからＧＮ粒子を、文字通り全力全開で噴射し、押されないよう驀進しようとするエクシア。両者の前進しようとする力が均衡し、盛大な音が鼓膜を叩く中で、進退が静止する。だが、ここで忘れてならないのは……ＧＮドライヴとリンカーコアの、その特性の違いだ。

「あ……がッ……！」

仮に、リンカーコアとＧＮドライヴの性能を陸上という種目で比べてみるとする。すると、リンカーコアは瞬間出力に恵まれているので短距離、ＧＮドライヴは継続性が優れているので長距離に向いているという結果になる。しかも、半永久機関たるＧＮドライヴの継続性は永久である為、エネルギー切れを起こすことは、ＴＲＡＮＳ－ＡＭという反則極まる権能を振るわない限り、絶対に有り得ない。

「ぐ……あぁ……！」

『マスターッ！？』

『まだＧＮソードは使えるな、エクシアッ！？』

『Ｙｅｓ，ｍｅｉｓｔｅｒ！　目の前の小僧を駆逐する程度は造作もありませんともそうですとも！　エクシアとマイスターの育んだ（愛の）結晶でもあるＧＮソードが、この程度で使えなくなるなんて、冗談ではありません！！』

『ああ、そうだな！　オレ達の（戦いの）結晶でもあるＧＮソードなら、この程度のことで……』

『（ま、マイスター……もしかして、やっとエクシアの心に気が付いて……ポッ？）』

その特性の違いによって、見る見るうちに勢いを失くしていくエリオとは反対に、先程から変わらない量のＧＮ粒子を噴射するエクシア。徐々にだがエリオが後退していき、放電が次第に収まっていく。エクシアはその弱っていく過程を見ながら、半ばから砕かれたＧＮソードを勢いよく真上に振り上げた。ギラリッと、冷たい光がエリオの顔色を青くさせた。そして、エリオは心の底から溢れてきた恐怖心に負け、突貫していた槍を我武者羅（がむしゃら）に自身の手前に振り上げ、エクシアから繰り出されるであろう振り落としの一撃に備えた。

だが、敗者を嘲笑（あざわら）うことが趣味の、この歪んだ世界で、その選択

は……

『敗れる筈が……ないッ！！』

……ザシュッ！！

フェイト・T・ハラオウンは、見失った「羽付き」の捜索をソーマ・ピーリス少尉に任せた後、そのまま休むことなく、真っ暗な空へと舞い上がった。彼女ははやての作戦で「砲台」と戦闘しなければならない二人の子供たちのことが、心配で心配で堪らなかったのだ。部隊の隊員としては信頼しているが、それでも早く無事な姿を、元気な姿を見たい……その親心一心で、下の炎により赤く照らされた夜空を飛ぶフェイト。途切れ途切れとなった街灯が、彼女を美しく照らしていた。

「エリオ、キャロ……！」

『……』

戦闘の炎が各所で燃え盛っていた。文明の高さを象徴するような数百メートル級のビル群も軒並み倒壊しており、中央都市「オレンジ」の都市機能を完全に麻痺させている。道路は所々を数メートル以上も陥没させており、そこかしこにはビルから降ってきた瓦礫に生き埋めとなった人々が、救いを求めるかのように、空へと手を伸ばしていた。その全員が、すでに事切れているというのに。

「……」

『……Ｓｉｒ』

「……うん、大丈夫、大丈夫だよバルディッシュ。こんな光景は、四年前にも沢山見たから……大丈夫だよ、心配しないで」

『……Ｙｅｓ，ｓｉｒ』

フェイトはその光景を見て抱いた怒りと後悔を表現するかのように、バルディッシュの柄を強く、強く握り締めた。ギュッと、ギュギュッと、どこまでも強く、どこまでも……悲しそうに。その悲痛そうな姿を見たバルディッシュは、ただ何も言わずに、彼の主の言葉に従いて、押し黙る。

「……」

『……』

重苦しい沈黙が、二人の間にドスンッと重たい音を立てて落ちてきた。言葉を発する機会が見当たらないその沈黙の中で、一人と一機は戦火に晒（さら）される夜空を飛び続ける。黒と赤が入り混じる空に立ち込めてきた暗雲が、今にも雨を降らしそうであったのがフェイトの中でやけに印象に残ったのは、何故か？　自問をするも、自答は見つからずに、その疑問も自然と立ち消えていった。

「……あと、どのくらい？」
『残り２００ヤードほどです、ｓｉｒ』
西洋人形なぞよりも遥かに美しい顔が、心配と心配と心配により、厳つい渋面となった。本当に心配なのだろう、エリオとキャロのことが。その内心を慮ったバルディッシュは、遠視の魔法でエリオとキャロがいるところをズームし、彼の主たるフェイトにその映像を見せた。そんなバルディッシュの気遣いに感謝しつつ、二人が無事であることを祈りながら映像を見上げたフェイトは……次の瞬間、顔を酷く歪つに強張らせた。
「……うそ」
その映像の中では、キャロの使役竜たるフリードリヒが、大量の血を噴出させていた。
「……うそ、でしょう？」
その映像の中では、彼女が討ち取ったと思っていた蒼い流星が、縦横無尽に暴れまわっていた。
「こ、こんな……こんなことって……！」
そして、その映像の中で、彼女の息子であるエリオが、蒼い流星――「剣士」の大剣を、その右肩に食い込ませ……！
「バルディッシュウウゥウウウウッ！！！！」
『フルドライヴ・イグニッション！　Ｒｉｏｔ　Ｂｌａｄｅ　Ｕｎｆｏｌｄ！』

その映像を最後まで見ることなく、「金色の閃光」となったフェイトが、夜空を真っ二つにする勢いで「剣士」目掛け飛んだ。フェイトの超速度により発生したソニックブームが、通り過ぎた建物に罅割れを起こし、脆い建築物を倒壊させていくが、それすら目に入らない程、彼女は怒り狂っていた。そして、その崩壊を何事かと思った警備員たちは、まず、雷光輝く空を気を引き締めながら見上げると、そこで金色の夜叉と化したフェイトの形相を見て、ヘナヘナと、腰を抜かした。それほどに恐ろしかったのだ、彼女の形相が。

「アアァアアアァアアアッ！！」

凄まじい速さで、エリオの肩に大剣を食い込ませる「剣士」へと迫るフェイト。今の彼女にとっては、おおよそ二百メートルほどの距離など、無きに等しい物である。一瞬、あるいは数瞬でエリオの横に並び立ったフェイトは、超高密度で形成された魔力刃――ライオットブレードを、背中に当たりそうになるぐらいまで振り被って、次いで、「剣士」へと、それを思いっきり横に振り抜いた。その振り方が世間で言うところの「ホームラン」に似ていたことは、誰も知らないことである。

『うおッ！？』
『キャアアァアアアッ！？』

ザンバーよりも細身なライオットブレードは見事「剣士」の右腕を捉え、その機体を真横にふっ飛ばした。オレンジ色のビル群が犇く中に突っ込まされた「剣士」が、盛大な音を立てて、衝突したビルの上から降ってきた瓦礫の中に、生き埋めとなった人々と同じく埋もれていく。それを尻目に、フェイトは右肩から血を噴出させているエリオへと優しく抱きついた。鎖骨まで斬られた右肩に、負担をかけないようにしながら。

「エリオ、大丈夫ッ!?」
「は、はい……フェイトさんは……？」
「私は大丈夫だから、自分の心配をして！　キャロ！　キャロも大丈夫ッ!?」
「は、はい、大丈夫です……フリードも、なんとか持ち直したので」
「きゅけるるー……」

エリオを抱っこの要領で抱え上げながら、キャロとフリードリヒのところにまで急ぎ足で近づくフェイト。その紅い瞳はすでに涙で溢れそうになっており、混乱の極みにあるせいか、何度も小石に躓きそうになった。それでも懸命にキャロのところにまで歩いていこうとするフェイトの姿を見て、不意に、キャロは涙を零しそうになった。自分のことを本当に心配してくれる家族がいる……その暖かさが、キャロの胸を嬉しさで満たしていくのだ。フェイトと同じように涙目となるキャロ。それを見て何を思ったのか、フェイトはキャロの横にゆっくりとエリオを下ろすと、子供たちに背を向け、「剣士」が埋まっているであろう瓦礫の山へと、射撃魔法を幾つも、無詠唱で放った。その無言の攻撃に、エリオとキャロ（フリードも）は背筋をゾッとさせた。

「ねえ、どうしてエリオの肩から血が出ているのかな?」

二人には分かったのだ、フェイトが本気で……本気の本気で、怒っていることを。

「ねえ、どうしてキャロが泣いているのかな?　フリードも、どうして息絶え絶えなのかな?」

フェイトがジェイル・スカリエッティと相対した時と同じくらい

に怒りを募らせていることを、二人は半ば本能的に悟ったのだ。あまりの恐さに、身を寄せ合って体を震え上がらせるエリオとキャロ。その二人の様子を見て、「剣士」に怯えている（本当は貴女に怯えています）という勘違いをさらに深めたフェイトは、

「ねえ、どうして……どうして二人は怯えているのかなぁあああああッ！？」

ズドンッ！

一瞬で構築した砲撃魔法を、何の躊躇（ためら）いもなく「剣士」にぶち込んだ。それによって「剣士」がめり込んでいたビルがガラガラと崩壊していったが、フェイトはそこから微動だにしなかった。フェイトはハイライトが消えた瞳で、ただ無言に粉塵が舞うビル跡を見つめ続けている。

『性能、６５％にまで低下……右手損傷、出力、７２％……マイスター』

『……一撃で奴を駆逐して、そのまま一気にフェルトのところまで飛ぶ。いいな、エクシア？』

『……Ｙｅｓ，ｍｅｉｓｔｅｒ』

そんな彼女の目の前に、全身を埃（ほこり）で汚したエクシアが、薄くなっていく粉塵の中から現れた。刀身が半分になったＧＮソードはすでにその右手に展開されており、未だ陰ることなく、寒々しい光を放ち続けている。その光を見ながら、フェイトはバルディッシュを右上段に構え、足元に金色の魔法陣を展開した。それと同時に、エクシアもＧＮソードを横に広げるようにして構える。上段の一撃と斬り払いの一撃。互いの手札を瞬時に読み取った二人は、まず踏み出しの力を溜（た）める為に、右足を左足よりも少し後方のところにまで動

かした。そしてその足裏が着くと同時に、

『ソニックムーブ！』

『ＧＮ粒子、解放！』

金色の魔力と蒼碧色の粒子を吹き散らしながら、互いの元へと一気に飛び出した！！

「あぁあぁあああぁあああッ！！」

『うおぉおおぉおおおおッ！！』

雄叫びをあげる二人。剣を振りかざす二人。一人は仲間を助ける為、一人は家族を傷つけられた怒りの為に、その強大な力を振るわんとする二人。一見似ているようで、その実、根本がまるで違うその二人の戦いは……

……ザンッ！

ただ一度の交叉（こうさ）で、終わりを迎えることとなった……

【剣は折れた。だが私は折れた剣の端を握って、あくまで戦うつもりだ】

――つぁーる様から、ド・ゴールより

第５１話　叫んで求めて憤る天雷たち（後書き）

今年最後の更新でしたが、何とかシアを出す所まで漕ぎ付けることができました。よかった……本当によかったです。これで何とか無事年を越せそうなので、作者はホッとしています。

あと、報告ですが、作者は諸事情により、来年の中旬ほどまでネットが使えなくなります。なので、恐らく感想の返信も作品の更新も、来年の中旬以降となります。本当に申し訳ございません。ですが、来年もこの作品を完結に向け邁進させてゆきますので、中旬まで何の動きが無くとも、心配しないで下さい。作品はキチンと完結させます故！

それでは、皆様方、良いお年を！

第５２話　誰が為に戦った？（前書き）

【敗北は骨を固く鍛える。
敗北は軟骨を筋肉に変える。
敗北は人を不敗にする】

――つぁーる様から、ヘンリー・ウォード・ビーチャーより

第５２話　誰が為に戦った？

――新暦７５年１１月１６日――

「う、うぅ……？」

真っ白な光が、天井から降り注いできた。そのあまりの光量に、私は目を細めずにはいられなかった。視界を白く塗り潰された目が、かなり強い光により痛みを訴え始める。それは私の呆けていた脳髄（のうずい）をズキズキと刺激し、意識を急速に浮上させた。

「こ、ここは……？」

痛みに促されるようにして、私はズキズキと痛む頭をゆっくりと白い枕から持ち上げた。その際に生じた頭痛がとても酷くて、思わず額に手を持っていくと、私はそこで、包帯の感触を確かめることができた。それで私は、自分の頭に包帯――恐らくは白――が巻き付けられていることに、初めて気が付く。そして、自分の右側に誰かがいることにも、遅まきながらにも、その時になって漸（ようや）く気付くことができた。

「……誰だ？」

「あら？　目が覚めたのね、シグナム」

のんびりな声が、私の耳を優しく打った。簡素な椅子に座る彼女は、膝下まである白衣をゆったりと着込んだまま、カルテに何事かを忙しそうに書き込んでいた。その大変そうな姿を見て、場違いにも、ドジを踏まなければいいが、と思った私は、家族でもある彼女へと、率直な疑問をぶつけた。

「……シャマル？　どうして……」
「どうしてもこうしても、私はアギトちゃんからの救援信号を受けて、ヴァイス君のヘリでアギトちゃんの所にまで急行していったら、そこで傷だらけのシグナムを発見して、急いでこのアースラの治療室にまで運んで、ここで治療したんです。……正直に言うと、かなり危ない状態だったわ」
「……礼を言う、シャマル」
「どういたしまして」

……そうか、アギトが……そう思った私の胸に、何かが込み上げてくる。その何かは私の目にジーン……とくる物であったが、今は流すべき時ではないと思い、私はそれをグッと、懸命に堪えた。家族である彼女に見られる恥ずかしさもあったが、それよりも、今はアギトにも礼を言うのが先決だと思ったからだ。……断じて恥ずかしかったからではない！

「それで、アギトは……」
「アギトちゃんなら、ほら。貴方の枕元にいるわよ？」

シャマルにそう言われた私は、自分が先程まで頭の下に敷いていた枕に目を移すと、確かに、枕の横側で涎を垂らしながら熟睡している小さな剣精を見つけることができた。３０センチほどしかない体が、静かに動いている。

「……寝ているな」
「仕方ないわ。だってアギトちゃん、さっきまでずっと起きていたもの。それこそ夜を通して、ね。……そのぐらい、貴方の事を心配していたのよ、シグナム？」
「……」

……そう、か。出会ってまだ二カ月少々だが、こいつが私をそこまで心配するとは……心配をかけてすまなかったな、アギト。それに……遺言のような物を残してしまった事も。

そう心中でアギトに対して謝った私は、すぐに副隊長としての頭に切り替え、「オレンジ」での戦闘について、シャマルに聞いた。

「……それで、戦闘はどうなったのだ？」

「ちょっと待って……今映像を再生するわ」

若干もたつきながらも様々な機器を用意して、映像を再生しようとするシャマルを見ながら、私は姿勢を正し、どんな結果が待ち受けていても構わない心構えを、ひっそりと構築した。仲間の中に戦死者がいようとも動じない為に。それに……主はやてを傷つけられていようとも、正気を保てるように。

「……」

ズズーー……。

「……」

ズズーー……。

「……ゴクッ」

ズズ……

「って、八神部隊長ッ！？　お茶を啜りながら戦闘映像を見るのもいいですが、報告書も同時に作成して貰わないと、僕が困りますッ！」

「そんなめんどくさいもん、グリフィス君に一任するわ。今は「ガンダム」デバイス説……そして、アップルとかいう男と、私そっくりな容姿を持つ「王」とかいうやっこさんのデータをまとめるのが先決や。せやろ、リイン？」

「そんなことはないです～！　はやてちゃんならきっと、映像を見ながら報告書を造れます！　ユーノさんやクロノさんは、いっつもそうやっているですよ？」

「そこは私の味方をしいやリインッ！？　あと、あの二人は完ッ全に規格外やから、私と比べんといて！？　比べられたら、私が死んでしまうわッ！？」

「はは、確かに、あの二人は異常なほど事務能力が高いですからね……って、話を逸らさないでください！　そろそろ怒りますよ！？　さあ、まずは一枚目です！　八神部隊長ならすぐに終わらせることができるはずです！　頑張ってください、八神部隊長！」

「せやから、グリフィス君に一任するって言うてるやろ！？　私はデータをまとめながら報告書なんて作成できへんもん！　ちゅうわけで……ほなさいなら！　ルキノ、グリフィス君を止められたら、グリフィス君と一緒に休暇を申請しとくから、後は任せたで！」

「了解です、八神部隊長！」

「って、どうしてそれに了解するんですか、ルキノッ！？」
「休暇が欲しいからです（貴方と一緒に出かけるチャンスだからよ！　気付きなさい、馬鹿！）」
「ふっふっふ……ほなお楽しみに～」

グリフィス・ロウランとルキノ・リリエの絡み合いを後ろ目で見ながら、はやてはアースラの艦橋（かんきょう）から急ぎ足で出て行った。最後まで未練たらしく聞こえてきたグリフィスの声が、いきなり途切れたのには首を傾げたが、恐らくは、はやての名を叫び続けるグリフィスに怒ったルキノが、その意識を刈り取ったのだろうと推測し、その疑問を勝手に解消させた。すっきりとした気分のまま、自分の部屋へと足を踏み入れるはやて。自分のパートナーであるリインフォース？（ツヴァイ）の顔色が真っ青だったのが少しばかり気になったが、無理やり気にしない事にする。気にしたら負けだ、と心の中で叫ぶ。

「さ～て……それじゃ、片っぱしから戦闘映像を見ていくで、リイン？」
「グリフィスさんの首が……首が……」
「……リイン、気にしたら負けや。グリフィス君なら大丈夫、大丈夫やって。確証はあんまないけどな！　……せやから、こっちに集中しよか？」
「は、はい、はやてちゃん！」
「それにしても……（ルキノ……一体グリフィス君に何をしたんや……？）」

真っ暗だった部屋の照明を付けながら、目の前の綺麗に整頓（せいとん）された机の所にまで歩く。部屋は定期的に掃除をされているらしく、埃が一つも見当たらない。その清潔感（せいけつかん）を心地良く思いながら、はやては手で操作可能な空間モニターを机の上に呼び出し、中空で戦闘映像を再生させる準備を完了させた。

「まずは、「剣士」とフェイトちゃんが戦ったところからやな……」

机の前まで歩くと、はやては無駄な装飾が一切ない椅子に座って、リインにも見ることができるようにと、モニターを自身の正面にまで移動させた。リインはすでに先程までのポヤポヤ顔をキリッとした凛々(りり)しい顔に変えており、再生される時を今か今かと待っている。

「フェルト・グレイスっつう「ＣＢ」のエージェントを確保できへんかったのは痛かったな～……でもまあ、しゃあない。割り切っていかなアカン。ＩＦ(もしも)なんてないんやからな……」

そして、はやての右人差し指がモニターの、映像を再生するスイッチに軽く触れた。

「あぁあぁあああぁああッ！！」
『うおぉおおおおおおおッ！！』

雄叫びをあげる二人。剣を振りかざす二人。一人は仲間を助ける為、一人は家族を傷つけられた怒りの為に、その強大な力を振るわんとする二人。一見似ているようで、その実、根本がまるで違うそ

の二人の戦いは……

……ザンッ！

ただ一度の交叉で、終わりを迎えることとなった……

『……え？』

エクシアは理解できなかった。何故自分の右腕が、空をクルクルと舞っているのかを。そして、何故自分の右腕が付け根からスパッと無くなっているのかを、彼女は……理解したくなかった。

『エクシア、このままフェルトの所まで、一気に飛ぶぞ！』

『い、Ｙｅｓ，ｍｅｉｓｔｅｒ！』

だが、そんな彼女に叱声を飛ばして、刹那はエクシアのＧＮ粒子を全て推進力の方に回すと、後ろにフェイトを残したまま、フェルトに向かって勢いよく飛んだ。例え後ろで金色の夜叉となったフェイトが此方に向かってターンをしていようとも、それに視線を向けることすらせずに、刹那はエクシアをフェルトの所にまで必死に飛ばす。

刹那には分かったのだ。今のエクシアの低下した性能では、フェイトには絶対に勝てないことを。それをあのたった一度の交叉で思い知った刹那は、本日二度目となる敗北の苦汁を心の中で何度も舐めつつ、２０機ものティエレンの間をすり抜け、その先にいたフェ

ルトを左手で抱え込む。そしてそのまま、脇目も振らずに地面のすぐ上を浮遊して、前に爆進する。

「刹那、後ろッ！」

『クソッ、振り切れない！』

『こんの……露出趣味を持つド変態ドMド女狐がぁああ！！　よくもエクシアの右手を！　許すまじ、ユルスマジですそうですよねマァアアイスタァアアアアッ！？』

『エクシアの言うとおりだが、今は撤退が最優先だ！　奴を振り切るぞ、エクシアッ！！』

『ィィイイエスッ、マァアアイスタァアアアアッて、あぁ、またっ！？』

蒼碧色の粒子を爆発させるように噴射し、超低空を今出せるトップスピードで飛行するエクシア。だが、その背後から迫る金色の片刃剣が、エクシアの左足を一瞬で？ぎ取った。その事実にエクシアは右手の件もあってか、我を忘れるほど怒り叫ぶ。だが、刹那だけは冷静さを保ったまま、右手と左足を失った状態のエクシアを慎重に操作しながら飛ばし続けた。立ち止まったら終わると、そう確信していたから。

「ねえどうしてねえどうしてねえどうしてねえどうしてねえどうしてねえどうしてどうしてどうしてどうしてどうして……」

『……カートリッジロード』ガコンッ！

片や、刹那とエクシアというかつての最強コンビを完膚なきまでに斬り落としたフェイト・T・ハラオウンは、そんな大それた事をしたとは露とも知らずに、ブツブツと、同じ事を何度も何度も、ハイライトが消えた瞳と共に呟きながら、金色の片刃剣へとカートリッジの魔力を送り込んだ。それにより雷光の輝きが増す魔力刃を、

フェイトはうっとりと、陶酔した様子で見つめ、その後すぐに「剣士」へと焦点を戻した。フェイトに見つめられた刹那は、その瞬間、背筋をゾクッと寒くさせた。

『このままでは……！』

再び振り抜かれた片刃剣の一撃を、体を右に回転させることで何とか回避した刹那は、しかし、焦りを感じずにはいられなかった。何故なら、刹那にとってこの状況は、限りなく詰んでいるからだ。救援を期待できない今、自分だけでこの場を切り抜けなければならないとなると、両手を使えないエクシアでは、どう足掻いたとしても……！

「どうして、エリオとキャロ、それにフリードが傷を負っているのかなぁあぁぁあああッ！？」

『プラズマランサー』

『クッ……！』

後ろから飛んでくる槍状の魔力弾を、低下した運動性能で避けようとする。だが、十三も放たれていた魔力弾全てを避けることは、今のエクシアには不可能な所業であり、数発ほど背中に貰ってしまう。しかも、その貰った場所は……

『ＧＮドライヴに直撃！　出力、６０％にまで低下！』

『……ッ！』

「刹那ッ！？」

よりにもよって、ＧＮドライヴ本体であった！！

「どうしてどうしてどうして……どうして、そんなに動きが鈍いの

？　そんなに斬られたいの？　貴方が今までに斬ってきた人たちと同じようにッ！　そして……プリウスやバスターナさん、ヴォクシーさんを殺した、あの時のようにぃいいいいッ！！」

　ＧＮドライヴから放出されるＧＮ粒子が、見た目にも明らかに少なくなった。それはエクシアの機動性の低下も意味しており、フェイトを易々と近づけさせしまうことに繋がってしまった。エクシアの背中――煙を上げるＧＮドライヴへと、ライオットブレードを展開するバルディッシュを振り落とそうとするフェイト。それに対して、エクシアは機動性の低下によって正面を向くことすら儘(ままま)ならずに、世界にたった五つしかない太陽炉を、むざむざと破壊されるしかない。

「刹那ッ、刹那ぁあああッ！！」
『マイスタァアアアアッ！！』
『う、うおぉおおおおッ！！』

　その断固回避すべき非常事態に、しかし、エクシアでは何もできなかった。それに歯痒(はがゆ)さを感じたエクシアと刹那は、同時に、自分たちへと落ちてくる片刃剣を見つめることしかできない無力な自分たちに、怒りを……

『ぬあっはぁあああぁぁあああぁぁあああッ！！！！』

「はっ！？」
『Ｗｈａｔッ！？』

「へ？」
『なん……』
『ですとッ！？』

怒り、を……？

『ふぅあああああっはっはっはっはぁあああああッ！！　油断大敵、隙だらけ！　某の存在を忘れるとは、正義の味方に有るまじき愚行しょぞ、ふぇいとなんちゃーらぁあああああッ！！』
「……」
『ＳＡＡＡＡＡＡＡＡＡッ！！　ライセンサー、インストールを！　今すぐ某を纏うのだぁあああああッ！！』
「ええい、少しは落ち着け！　それと、何でお前は音声を表に出して……」
『正義の味方を前にして、ヒソヒソと話し合うなぞ、悪鬼の敵方の姿としては相応しくなかろうがぁあああッ！？　そうだろう、ライセンサァアアアアッ！？』
「……そう、か。そこまで……お前は、馬鹿だったのか……！」

……静止した世界の中で、二人の声が場の凍った空気を震わせる。しかし、フェイトを真横にぶっ飛ばしたその人影は、誰がどう見ても、たった一つしかない。

『馬鹿だとッ！？　ふぅあっはっはっはっはぁあああああ！！　応とも、某は戦闘馬鹿だとも！！　強き正義を完膚なきまでにたたっ斬るのがだぁ～い好きな、悪を具現化せし武者！　それが某こと、益荒男という管制人格で・あ・るッ！！！！』
「……とりあえず、インストールを開始する。もう名前を名乗った事とかに関しては突っ込まんから、さっさとこの戦闘から離脱するぞ」

『……なん、だと？　離脱？　離脱するだと？　何故ッ！？』

「そういう命令がミス・スメラギから下されているからだ。ほら、さっさとインストールを始めろ」

『くぅうう……！　ミス・の命令ならば、致し方あるまい！　再び相見える時を心待ちにしておるぞ、ふぇいとなん……なん……なんたらぁあああああッ！！』

そして、人影の着地で発生した煙が晴れていくのに従い、人影の全貌が薄らと判明してきた。だが、フェイトがその全貌を見る前に、ピッチリと体に張り付くようなボディースーツ？　を着込んだその人影は、遠目からもはっきりと分かる、たわわに実ったおぱ～いへと手を伸ばして、そこに吊るされていた二つの白いコーン状のアクセリーみたいなモノを、優しげに握り込んだ。

ゾクッ！

その何気ない動作を見たフェイトの背筋に、さっきの刹那と同じような悪寒が奔った。冷たい汗が額から止めどなく噴き出てくる。だが、その人影はそんなフェイトの様子には一向もくれずに……ただ、熱い想いと共に唱えた。

「マスラオ、セットアップ！」

『スタンバイレディ、セットアップ！　ＧＮＸ－Ｕ０２Ｘ　益荒男、インストール、コンプリート！　ぬぅあっはぁあああああッ！！　悪を持って悪を生し、悪を為しては悪を成すモノ、いざ！　ここに参戦致す！！』

『と言っても、すぐに撤退するんだがな』

煙の中が赤橙色に輝いた。そして、その輝きの中心にいた人影が、その姿を異形なモノへと変じさせていく。がっしりとしつつも柔ら

かな曲線を描いていたはずの体格は、ゴツゴツとした無骨なモノへと転じ、体の所々からは、棘のようなモノが生えてきて、特に、頭からは二本の大きなＶ字型の角――触覚？　が伸びてきていた。その人型から異形となった姿を暫し、茫然と見つめていたフェイトは、ハッとして我に返ると、バルディッシュを強く握って、何時攻められてもいいように身構える。

だが、フェイトのそんな様子とは裏腹に、煙の中の異形は煙が晴れるよりも早く、「剣士」がいる方向へと飛んだ。その腰部からは赤橙色の粒子が途轍もない勢いで噴かれており、フェイトの視界を一瞬だけ遮る。しかし、その一瞬だけで十分なのだ、益荒男には。

『では、さらばだ！　ふぇいとなんちゃーーーらーーーーーー！！』

『……フェイトお嬢様、何れまた、何処かで会いましょう』

「あ、待っ……！」

フェイトの視界が回復した頃には、益荒男はすでに「剣士」をフェルト共々、片腕に抱き抱えたまま、真っ暗な夜空へと飛び立っていた。それも、かなりの速度でだ。もしかしたら、フェイトに並ぶかもしれない……そう思ったフェイトは、足を前に出すことを躊躇した。さすがの彼女も、「羽付き」や「剣士」と戦った後にそんな相手と戦うことなど、無謀にしか思えなかったのだ。それに、今の彼女の後ろには、ティエレンをコンストラクションしている魔導師たちに回復魔法をかけられている、傷だらけの子供たちがいる。それを放ってまで「ガンダム」らを追うのは、少なくとも、今のフェイトにはできなかった。

「……また、新しい「ガンダム」……でも」

『Ｙｅｓ，ｓｉｒ．私たちはもう四年前の過ちを犯しません。例え、

かつてのように新たな「ガンダム」が現れようとも』

「うん……そうだね、バルディッシュ。それに、マリーさんやヴォクシーさん、バスターナさん、そして……親友だったプリウス。彼女たちを殺した「ガンダム」を、私は……」

空に燦然と輝く赤橙の粒子を、下から見上げることしかできないフェイト。だが、その紅い瞳は弱った「剣士」を見逃したにも係わらず、確固たる意志で燃えていた。確固たる意志……即ち、拒絶の意思に。

「……絶対に、許せない」

その呟きは、何処とも知れぬ風に優しく運ばれ、そのまま、何処とも知れぬ世界へと消えていった……のを知るモノは、誰も……誰も……

「……そう、か。全員、無事か……」

「エリオ君とフリードリヒが結構重傷だったけど、今はもう峠も越えて、ぐっすりと眠っているわ。……寧ろ、エリオ君の隣でずっと目を潤ませているフェイトちゃんの方が心配よ……」

「……テスタロッサはもう少し子離れするべきだな。私の口からは

とても言えんが」
「そうよねえ……子離れすべきだなんてフェイトちゃんに言ったら……」
「良くて惚け、悪ければ……バルディッシュだな」
「「……ハア」」

シャマルから戦闘の詳細を映像つきで教えてもらった私は、シャマルから安静にするようにと言われ、再び横になった。横になる際にくっ付けてもらった左腕の付け根が少し痛んだが、その程度の痛みを顔に出すほど、私は我慢弱くはない。それに、そんな些細なことでシャマルに心配をかけたくはなかったのだ。

「……それで、話は変わるが……ザフィーラは、独自に動いていた事について、なんと言っていた？」
「……アースラはこれから一度ミッドに戻るそうよ。それで、そこでなのはちゃんと合流するみたい。……その時に全部言うって」
「……ふむ、そうか。ならば、その時に聞こう。あいつにはあいつなりの考えがあるんだろうからな」
「……えぇ、そうね」

……しかし、今思い出しても不可解だ。あのザフィーラが主はやての元を離れてまで動くとは……冷静になって思い出すと、本当に信じられん出来事だったな。もっとも、それは後で解明されるから良しとして……

「それで、何を言いたそうにしているのだ、シャマルよ？」
「……やっぱり、分かる？」
「ああ、それだけそわそわしていればな。……それで、何だ？」

……今は、此方の方を聞くべきだ。

「……シグナム、私たちははやてちゃんを護る守護騎士、ヴォルケンリッターよ？　その将である貴女が最初にいなくなる事は、絶対に有ってはならない事……そうよね？」
「……ああ、そうだ」
「なのに！　貴女は諦めていたわよね、生き延びることを！　はやてちゃんを護ることも忘れて、ただただ……死のうとしていたわよねッ！？　私はそれが……許せないのよ！！」
「……」

顔を手で覆って、涙を流しながら心からの言葉を紡いでいくシャマルを、私はただ黙って見るしかなかった。何故なら、私はシャマルがどれだけ悲しんでいるのかが分かってしまうからだ。私は将という立場を忘れ、主はやてを護る事すらも忘れて、ただそこで死のうとしていた……その事実は、今も私の胸に大きな傷跡を残している。だが、それだけではない。この事実が齎すモノは、それだけでは済まない。

「貴女は、はやてちゃんを護る騎士たちの将なんでしょう！？　だったら、最後の最後まで頑張りながら、しっかりと生き延びなければ駄目よ！　それが将のあるべき姿、古代ベルカの常識だったはずでしょう！？」
「……」

その事実が齎すモノ……それは、主はやてが死ぬ事を、将である私が認めてしまう事で生まれる「悲しみ」である。騎士たちの中核である将が死ねば、騎士たちは的確で細かな指示を得ることができない為、主を上手に護ることができない……なのに、その一番肝心な将が勝手に死のうとしていたのだ。それは外から見れば、主が死ぬ事を良しとしているようにも見え……それが騎士たちに「悲しみ」

を生んでしまう。

そして、それを分かっているからこそ、自分がした大きな過ちを認めてしまっているからこそ、私は何も言えないし、言う気が起きてこない。どんな言葉を言い繕うとも、騎士たちに一度芽生えてしまった不信感は、そう簡単には拭えな……

「だから、今ここで約束しなさい！　絶対にはやてちゃんと一緒に帰ってくるって！」

「……は？」

「だーかーらー！　約束しなさい！　ちゃんとここに帰ってくるって！　私に、それに家族の皆に！！」

……と思っていた矢先に提示された「約束」。私は自分の目がまん丸に見開かれている事を自覚しながら、シャマルに尋ねた。

「……いいのか？」

「いいも悪いも、まずは約束をしてからです！　さあ、小指を出して下さいシグナム！　指切りげんまんをしますよ！？」

「あ、ああ……」

シャマルの勢いに負けて右手の小指をおずおずと出すと、シャマルの右手の小指がズバッと絡んできた。そして上下に振りながら、シャマルは「指切りげんまん」と歌い始めた。

「……のーます、指切った！　はい、これからはちゃんと死のうなんて思わない事！　いいですね、シグナムッ！？」

「あぁ、分かった……約束だ。私は必ず生き延びる。主はやてを……護るために！」

そんなシャマルの真摯な態度を見ていたせいか、私は不思議と、その言葉を言う事ができた。何の躊躇いも迷いもなく、それでいて、断定するだけの強さを持たせながら。そんな自分に若干驚きながらも、私は心の中で、シャマルに何度めか分からない礼を言った。

「……それじゃ、私はこれで失礼します。くれぐれも安静にしていて下さいね！？」

「あぁ、分かったからさっさと仕事に行って来い」

「いいですね、絶対に絶対に、安静にしているんですよ～……」

「……行ったか。最後まで煩い奴だ」

シャマルの間延びした声が、次第に遠くなっていく。耳のすぐ側からは、アギトの寝言が幽かに聞こえ、後頭部からはアースラの駆動音が力強く伝わってきて、その大きな船体を前へ前へと進ませているのが、手に取るように分かる。

私はそれらの音を騒々しいとは思わない。それらの音は、生きる為に必要な音なのだから、それを無下にするということは、生への渇望を手放したという事と同義……つまりは、さっきまでの腑抜けた自分となんら変わらなくなる、ということだ。

「……だが、礼を言う。これで私は、まだ戦える。「ガンダム」と……そして、主はやてを傷つけようとするモノ達と」

あのような醜態は、もう二度と犯さない……そう決心した私は、もう一度眠る為、意識を深い深淵の中へと落としていった……。

――新暦７５年１１月２５日――

ガラスの向こう側には、暗色のマーブル模様が渦を巻く景色が、視界一杯に広がっていた。それは「ＣＢ」という世界の敵をも軽々と内側に包み込み、そのまま次元の狭間へと引きずり込んでしまいそうだ。

紫の髪を無重力空間に靡(なび)かせるアニュー・リターナーは、有り触れた次元空間の光景にそんな感想を抱きながら、隣に立っている赤髪の無愛想な男へと、疑惑の視線を向けた。

「……何だ、そんなに俺がここにいる事が不思議か、アニュー・リターナー？」

「不思議……そうね、不思議だわ。貴方のようなライセンサーが、ここにいるなんてね」

アニューの声は、やや鋭さを帯びていた。だが、無愛想な男はそれに何ら堪(こた)えずに、己が意志を独白し始める。

「……これは、俺(おれ)の意思だ。イオリア・シュヘンベルグの意志でも、ましてや、リボンズ・アルマークなどの意志でもない……俺個人の意思で、此処にやってきている。それは、お前も一緒なのだろう、アニュー・リターナー？」

無愛想な男が初めて視線をアニューの方へと寄こした。それに応えるかのようにして、アニューも自分の意思を口にし始める。

「……えぇ、そうね。普段無口な貴方がこんなにも饒舌になっているんだもの。それはきっと、本当に貴方自身の意志なのでしょうね。……もっとも、それは私も変わらない、変わらないわ。私も私自身の意思で、何年も迷いながら、この選択肢を選んだんだもの……例えお父様や仲間の皆、それに……ライルを」

「やあやあ、待たせてしまってすまなかったね、君たち」

つらつらと語られるアニューの言葉。その途中で、一人の人物が無愛想な男とアニューの前に、ニコニコとした笑顔を貼っつけてやってきた。自身の言葉を途中で切らされたアニューは、そのヘラヘラとした態度に少し眉を顰めたが、すぐに表情を切り替ると、いきなり現れた男と正面から相対する。勿論、隣にいる無愛想な男も、それに習うようにして正面を向く。その態度に満足したのか、ヘラヘラとしている男はご機嫌な調子を崩さぬまま、静かに、彼らにとっての最重要事項を話し始めた。

「……もう覚悟はできたかい、アニュー・リターナー……それに、ブリング・スタビティ？」

「……えぇ、勿論よ」

「……アニュー・リターナーの言う通りだ、リジェネ・レジェッタよ。此方の覚悟はすでにできている。……お前の方はどうなんだ？」

「僕？　僕ももう覚悟はできているよ？　……と、いうことは、覚悟云々はもう問題じゃないってことでいいとして、問題は、何時決行するか……なんだけど、今回はそれについて話そうと思って、二人を呼んだんだ」

「目当てでもついたの？」

「うん。しかも、これ以上ないってぐらい、最高のシチュエーショ

ンを」

ヘラヘラとしている男――リジェネ・レジェッタはそう言いながら、これからのミッションで割り振れられるであろうメンバーが書かれた紙を袖の中から取り出して、それを二人にそれぞれ一枚ずつ手渡した。アニューと無愛想な男――ブリング・スタビティは、渡された瞬間にその紙面を読み始め、次いで、途中まで読んだアニューが驚きで目を見開いた。

「も、もしかして、この日に？」
「うん、そうだよ。何か問題でもあったかい？」

アニューの声は、如何なる理由でか、大きく震えていた。だが、リジェネはそれに気付かぬ振りをし、逆にアニューを問い質した。何の問題もない、ということを再確認させる為に。アニューはその意図に気付き、冷静になるよう自分に言い聞かせると、リジェネの問いへと、震え続ける声のまま答えた。

「……いえ、ないわ。ないけど……これだけは約束して欲しいの。命までは取らないって」
「それは……うんまあ、約束はするけど、相手が相手だからね？こっちが命取られる可能性もなくはないってことだけは……理解して欲しいね？」

リジェネの冷徹な声が、アニューに現実を見させようとする。辛く、冷たく、そして残酷な現実。それを直視させようと、リジェネの冷え切った目がアニューの瞳を正面から射抜く。だが、アニューはその目を直視したまま、震えが収まった声でこう答えた。

「えぇ、分かっているわ。……それじゃあ、今回はこれで解散でし

ょう？　私は少し部屋で眠ってくるわ。お休みなさい、ブリング、リジェネ」

「……ふふん。お休み、アニュー」

「……」

軽い足取りで、リジェネとブリングがいる部屋から出ていくアニュー。その後ろ姿を、リジェネは不敵な笑みで、ブリングは無表情のまま見送った。彼女の内で荒れ狂う迷いを見抜きつつ……。

暗くはなく、明るくもなく、散らかりもせず、整頓されてもいない部屋で、刹那・Ｆ・セイエイはイオリア・シュヘンベルグと対面していた。

「それで……オレを呼んだのはどうしてだ、義父（ちち）よ？　『計画』に大幅な変更でもあったのか？」

「……「オレンジ」での戦闘は見聞きした。大変だったな、ソラン」

刹那の本名であるソラン・Ｉ（アイ）・シュヘンベルグの名を言いながら、イオリアはまず、彼の養子である刹那を労（ねぎら）った。イオリアはこう見えて、かなりの子煩悩（こぼんのう）なのだ。その労いの言葉に何とも言えぬ表情をしながら、刹那は本題の口火を切った。

「……やはり、『００』についてか？」
「うむ、そうだ。今までは『００』の圧倒的な性能に目を奪われ、シンクロについての問題から目を逸らし続けていたが、此度の戦闘での危機を顧みるに、もう猶予があまり残されていないことが、ソラン、お前にも分かったはずだ」
「……あぁ」
「例えエクシアではなく副管制たる「ＧＮ」だったとしても、『００』に負けは許されない。『００』こそが「ＣＢ」の象徴機であり、また、その理念を体現するモノだからだ」
「……分かっている」

刹那の重苦しい声が、部屋に木霊する。その余韻が収まらぬ内に、イオリアは再び口を動かし始めた。

「……ソラン、今回の戦闘で『００』が負った損傷は、かなり深刻だったのであろう？」
「あぁ。イアンが言うには、一度ラグランジュ１に戻さなければならないらしい。しかも、修復には一カ月以上かかると……」
「それを聞いて、私は決めた。ソラン、お前もエクシアやＯガンダムと共に、ラグランジュ１へと行け。そして、そこで『００』を、真に完成させるのだ」
「……ッ！」

その言葉に、刹那は息を詰まらせるほど驚いた。彼はてっきり『００』の修復が済み次第、何処かに介入させられるだろうと狙いを付けていたからだ。イオリアはその困惑を知りながら、話をさらに先へと進める。

「……『００』は恐らく、これから様々なオーバーＳランク魔導師と戦う事だろう。その中には、今回のような複数人と戦う場合もあ

るやも知れぬ」

イオリアは刹那の目を見上げながら、この先、「ＣＢ」に待っているであろう苦難を、言の葉にして紡いでいく。それを刹那は、真剣な眼差(まなざ)しをしたまま、頭に叩き込む。

「「斬り裂きＪＡＣＫ」に「二刀竜使いの剣客」、「元・世界清浄のトップエース」が参入した「Ａ－ＬＡＷＳ」……聖王復活を唱え始めた、「預言書」「騎士団長」等を有する聖王教会……」

そこまで言って、イオリアは一旦言葉を切った。震える手で近くにあった紅茶のカップの取っ手を掴む。

「そして、」

紅茶を口に運び、震える唇を濡らすイオリア。その顔は少しばかり青褪めており、かなり動揺しているようだ。だが、イオリアはその動揺を顔に出さないまま押し殺し、覚悟を決めて、最後の言葉を口にする。

「「エース・オブ・エース」、「金色の閃光」、「夜天の王」を始めとする、強力極まるオーバーＳランク魔導師を、未だ３０人以上も抱えている時空管理局ッ！」

その言葉を聞いて、刹那の表情が一気に引き締まった。そして、イオリアの怒声の如き叫びが、その先をさらに紡ぐ。

「私たち「ＣＢ」は、大々的にこれら三つの組織と戦わなければならん。だが、戦力差は歴然としており、最後がどうなるかなぞ、ヴェーダですら予測ができん。……それでも、」

「私たちは戦い抜かなければならない……世界の、そして人類の革新の為にも。……そうだろう、義父？　「ＣＢ」のその理念を理解していない者は、ここにはいない。いる筈もない。そして、義父が何時も口にしているのを、オレは絶対に忘れない」

険しい顔つきのまま、部屋から出ていこうとする刹那を、イオリアは眩しそうに見ながら、最後まで見送った。その逞しい背が背負うであろう苦難を思うと、胸が張り裂けそうになるが、刹那はそれを知りつつ、自らそれを背負いこもうとしているのだ。息子の成長した姿に、イオリアは思わず涙を零しそうになったが、すぐさま頭を切り替え、ある三つのデータを、ヴェーダのレベル７の領域から引き出した。

そのデータの冒頭には、こう掲げられていた。

「Ｇ」計画。

「Ｉ」計画。

そして、最後のデータには……

『Ｍｅｉｓｔｅｒ、コード、パスワード入力』

「……コード、『「ガンダム」を越えた「ガンダム」』。パスワード……」

「……『世界に革新を齎すモノ』」

【力への意思】

――フリードリヒ・ヴィルヘルム・ニーチェの『力への意思』より

第５３話　誰が為に鐘は鳴った？（前書き）

【共に行動するなら疑うな。疑うなら共に行動するな。】

――鴨川秘様から、『ラインの虜囚』のコリンヌ・ド・ブリクールより

第５３話　誰が為に鐘は鳴った？

――新暦７５年１１月１５日――

建築技術の粋を注ぎ込んで造られた超高層ビル「マウンテン」。その全壊となった豪奢な部屋の片隅で、瓦礫の一山がガラガラと音を立てて崩れた。その中から這い出るようにして現れたのは、白衣を着込んだ三十代の男性であった。

「いつつ……プロテクションを発動していなければ、危なかったかもね」

男はひび割れている床から立ち上がり、メガネをキュキュッと拭きながら、周りをグルリと一周、見渡した。男の白衣は至る所が破れ、瓦礫の粉塵（ふんじん）で灰色に汚れていたが、男は自身の格好などには構わずに、現状を把握しようと、その次元世界有数の優秀な頭脳を、フル回転させる。

「……四年前とは違って、随分と派手な作戦を起こしてきたね、「ＣＢ」は？　そこに不可解さを感じなくはないけど、今はここからの脱出が最優先……グフッ！？」

灰色に近くなった白衣を着た男――「十二の救世鐘（トゥエルブ・ベラー）」の『研究』ビリー・カタギリが、四年前と現在の「ＣＢ」の違いについて思考していると、その背後から、誰かがいきなりぶつかってきた。その痛みに悶（もだ）えるビリーだが、ビリーのそんな様子を無視して、少女は長身のビリーを乙女の小さな肩に担（かつ）ぎ上げ、この場から急ぎ撤退しようとした。

「い、一体何が……」
「局員や警備員に囲まれる前に、ここから撤退しますよ、ビリーさん！　いいですかッ！？」
「……アイシス？　君も無事だったんだね？」
「えぇ、まぁ何とか。……アサシンは死んでしまいましたが」
「僕もさっき確認したよ、ヒイラギとコーランの死体を」
「……そう、ですか」

ボブカットに揃えた金髪が、心なしかシュン……と元気を失ったように見える。彼女にとって「十二の救世鐘（トゥエルブ・ベラー）」とは、あくまでもデカブツへの復讐の為の道具なのだが、それでも、二年もの間、苦楽を共にしてきた仲間が死ぬのは、彼女の心情的に辛い物があった。
そんな彼女――「フォートレス」という名字を捨てたアイシスの、辛そうな様子には全く気付けずに、ビリーは真剣な表情で、再び「CB」の「今」と「昔」の違いについて、思考を張り巡らせ始めた。
「昔」は隠密（おんみつ）だったのに、「今」は大胆……果たして、この違いが生むモノは一体……何なのだろうか？

「ふ～ん……謎だねぇ～？」

だが、その答えはその場から逃げ果（おお）せた後も、結局、分からないままであった。

『００』ＧＳとの戦闘で、胸に重度の火傷と深刻な切傷を負ったザ・サムライは、自分のすぐ傍で泣きそうになるのを必死に堪えようとしているロベルト＝コーナーの様子を、その黒い瞳でじっと見つめながら、黙ってリッパーの回復魔法に身を委ねていた。

「Ｋｉｌｌ……キル……」

「ええい、「剣士」を逃したか……口惜しさを感じるが、次こそは、次こそは必ずや……！」

「えぐ……えっぐ……！」

リッパーとブシドーの苛立たしい声がその場の空気を震わせ、ロベルトの涙声が、その震えを静かに鎮(しず)めている……金色に輝くアルヴァトーレの装甲の上に横たわりながら、そんな感慨(かんがい)を抱いたサムライは、沈黙を貫きながら考える。果たして、「灰色の福音(シンデレラ)」は再興可能なのかと。

「……（……いや、）」

だが、それは考えるまでもなく、できるわけがなかった。ロベルトの話によれば、此方は少なくとも『情報』、『移送』、『暗殺』、『参謀』、『宰相』の五人――『研究』と『隊長』からは、先程念話が届いた。同時に、既に「ガンダム」は撤退したと判断――を失っているのだ。不幸中の幸いとして、『魔本』ラヴクラフトの資本が残ってはいるが、それら五人の穴を埋めるには、時間も人員も、何もかもが足りていな……

「……？　（待てよ、不幸中の幸いだと？　それにしては妙にタイミングが……いや、ラヴクラフトは極めて慎重な男と聞く。メディ

アどころか、その顔を知る者すら誰も居ない程、奴は慎重なのだ。ならば、矛盾はない……か？）」

頭に過ぎる、とある可能性。

「……（……駄目だ、今は「ＣＢ」と戦う準備を整えることが先決だ。仲間内を疑うのは、準備を終えたその後だ。となると……やはり、あそこらに頼るのがベスト……なのか？）」

その真実を秘めていた可能性を、サムライは、愚かにも自身で揉み潰してしまった。全ては「ＣＢ」と戦う為、その準備を優先させたいが故に、彼女はその可能性――ラヴクラフトが「ＣＢ」のエージェントであるという可能性を、自分で無かったことにしてしまった。他でもない、戦闘狂たる彼女の、「ガンダム」と戦いたいという想いが、彼女にそうさせたのだ。

だから、彼らはまだ気付かない。気付きかけたサムライが、類稀（たぐいまれ）な狂人であったが為に、彼らはその数少ないチャンスを、自ら捨ててしまった。そう……

『魔本』ラヴクラフトこそが、管理局が血眼（ちなまこ）になって捜している「ＣＢ」のエージェント、「アーカイブ」なる人物と同一である事に、彼らはまだ……気付けない。

「……主人(あるじびと)よ、一つ、提案がある。この没落した「灰色の福音(シンデレラ)」が、一発で浮上できる案だ。……語って、よいか？」

自分がしてしまった大きな過ちを自覚せずに、サムライは横になったまま、隣で彼女の手を握る涙目のロベルトへと、先程の思考で辿り着いた提案を説明しようとした。それに最初こそはビクッと、まるで小動物のような反応を示したロベルトであったが、その単語の意味する所を理解するなり、その可愛らしい童顔を、アホみたいに呆けさせた。

「……へ？　そんな凄い案があるのッ！？」

「あるにはある。だが、これは……もしかしたら、予想以上に戦火を広げるやもしれぬ案だ。だからこそ、『大使』たる主人自身に、決めてもらいたい。これを実行に移すかどうかを……！」

「それにしても、何故だ？　何故こうも叫びたくなるッ！？　うおぉおおお、分からん！　だが、敢えて言おう！　おはようございましたとッ！！」

隣りで何事かの電波を叫ぶブシドーを、どこまでも華麗に無視しながら、ロベルトとサムライは、二人だけの空間の中で互いの目を見つめ合い、その意思を疎通させようとする。ロベルトの未だ濁りが残る水色の瞳が、サムライのどこまでもドス黒い瞳を直視した。たったそれだけで、サムライは自身の奥底を快楽で濡(ぬ)らし、膝をガクガクと震えさせた。彼女には分かっていたのだ、彼がどんな答えを出すのかを。そして、その答えこそが、彼女の望むモノであるということも分かって、彼女は……

「……サムライさん。僕は、狂ってしまったのでしょうか？　あの時に殺し切れなかった「剣士」を討つ為に、周りを巻き込もうとする僕は……人としての大事な何かを、失くしてしまったのでしょう

か？」

「例え主人が人間としての何かを失くしていようとも、この私には些細な問題だ。要は、如何に今の自分を認識し、制御するかだろう？　自分に素直になるのか、それとも反逆するのか……それは全て、主人の自由だ。私は何も強制しないし、要望もしない。私はただ、主人の命を実行するだけの剣客なのだからな」

「……そう、ですか。なら、僕は……義父を殺した「ＣＢ」を、そして、ケスティを殺した「剣士」を同じ様に……いえ、モット痛く酷く惨く殺して……復讐を、果たしたいですッ！！」

最後の一歩を……人と狂人とを隔てる境界線を踏み超える問いを、ロベルトに発したのであった……！

「クックックック……そうか、そうか！　ならば、その提案を述べよう！　クックックック……クーックックックックッ！！」

あまりにも自身の思惑通りに行き過ぎていて、止まる事を知らないサムライの高笑いが、ロベルトの耳にガンガンと響いた。だが、ロベルトは濁った瞳を正面に向け、ただ前を見据え続けていた。それはまるで、その先に悲劇が待っていると、そう確信しているかのようだった。そしてそれは、絶対に間違ってなどいない。間違っていない筈が無い！

何故ならば、今この瞬間に、ロベルト＝コーナーは「悪」と成る事を良しとしたからだ。それも、よりにもよって、己が意思で。もしここに昔からロベルトに付き従っていた『宰相』ケスティ＝アーネットと『参謀』コーラン＝ダンヌがいれば、こんな悲しい事は起きなかった……かも、しれない。だが、その二人は既に先の戦いで亡くなっており、サムライの邪な思惑を、ロベルトの革新を止められるモノは、少なくとも、この場には誰もいなかった。それこそが

サムライの策であったということにすら、誰も知らないし、興味すら抱かない。

何故ならば、彼ら「十二の救世鐘（トゥエルブ・ベラー）」は、その殆どが己の思惑に従って動いているからだ。大儀よりも、まずは己がしたい事。そんな人物ばかりが揃う「十二の救世鐘（トゥエルブ・ベラー）」は、このような危機的状況に陥っても、未だその性質を変えていなかったのだ。

「キル……きる……るっるっる……」

「全力で！　全力で！！　ずぇえんりょおおおくで見逃さないぞ、ガンダァアアアムッ！！」

その証拠に、ロベルトとサムライの近くに陣取っているブシドーとリッパーは、もう説明すら不要なほど、己に素直になっていた。すぐ近くにいるロベルトとサムライのことには、一切関わらずに。それを見て、サムライは己が計画が順調に進んでいるのを再確認し、再び高笑いした。

「ククククク……クーックックックックッ！！」

その高笑いを遮るモノは何も……そう、何もなかった。今この時は。

――新暦７５年１１月２５日――

あの災厄の日から、早くも十日が過ぎた……でも、僕はまだ仲間やケスティを目の前で失った傷を癒せてはいなかった。世界がこんなにも流動しているというのに、僕は自分の心の傷一つすら、満足に癒すことができないでいる……それに惨めさと、情けなさを感じ……

「何だその鬱顔（うつがお）は？　我が主人に相応しくない顔だな。よし、一キロダッシュを久しぶりに１００本ほど……」

「それだけは止めて下さいサムライさんッ！　僕を殺す気ですかッ！？」

「だったらそのキモ顔を止めんか主人！　こっちまで鬱になるわ！」

危ないところだった。あともう少し沈んでいたら、強制的に百キロほどダッシュさせられる所だった。正直、昔よりは走れると言っても、さすがに百キロはきつい物が……

「何？　百キロがきついだと？　ふざけているのか主人よ？　普通は千キロを過ぎた辺りで……」

「一緒にしないでねッ！？　一緒にしないでねッ！？　大事な事だから二回言ったけど、念には念を押して、もう一回言うよ？　サムライさんとは一緒にしないでねッ！？　僕が死んじゃうからッ！」

「……あい分かった。そういうことなら、致し方あるまい……」

僕の必死の説得が通じたッ！？

「二百本に変更だ」

……と思っていた瞬間が、僕にもありました。えぇ、今はもう無いですけどね！　儚い幻想でしたよ、うぅ……！

「待ってッ！？　本当に死んじゃう、死んじゃうので思い留まって下さい、サムライさんッ！？」

「聞く耳持たん。さあ、さっさと走り出せ主人。先は長いぞ？」

「助けて村雨、村正ッ！？」

『諦めて下さい、主人様（あるじびとさま）。こうなった担（にな）い手は、梃子（てこ）でも動かないので』

『……南無阿弥陀仏。無事帰還できる事を、心から祈る』

「……お、鬼ぃいいいいいいッ！！」

「だから鬼ではなく竜だと……これで何回目の間違いなのだ、主人？」

「やれやれ、相変わらず騒がしいね、彼らは」

「全くもってその通りです。そして、此方にその暑苦しい顔を近づけないでください、ミスター・ブシドー！」

「ムッ、何故だ？　親友の危機を救ってくれた恩人に対して、礼を言うだけだが……」

「それなら、どうしてここまで近づく必要が……」

「遠くからの礼では、私の気持ちを十分に現わせないではないか！」

「ハッハッハ、君たちも十分面白いさ」

　コーナー家の総力を結集して造られた、Ｌ級、Ｍ級などの艦船よりも大型な、Ｎ級次元航行船・第６６番艦「フォルティッシモ」。

その広い訓練スペースの中で繰り広げられている何時もの光景に、包帯を頭に巻いているビリーは、声を出して笑った。彼の視線の先では、屍のように足をふらつかせる『大使』ロベルト＝コーナーが、『剣客』ザ・サムライの怒鳴り声を受け、必死に足を前に進ませようとしている。片や、ビリーのすぐ隣では、『武士』ミスター・ブシドーと『隊長』アイシスが、常日頃のスキンシップを行っていた。その二つを見ながら、カフェインが異常に多く含まれているコーヒーをゆっくりと飲むビリー。

「そうは思わないかい、リッパーさん？」

「伐（き）る切る斬るきるキル……」

コーヒーから口を離したビリーが、室内にも関わらず、黒のシルクハットを頭に被り続けるジャック・ザ・リッパーへと声をかけた。しかし、リッパーは「きる」という単語を発するだけで、会話らしい会話をしようともしなかった。それに肩を竦（すく）めたビリーは、再びコーヒーの入ったカップを、口にまで持っていく。

「む、感謝と言えば……リッパーよ、先の戦いでの助力、感謝する！　だが、私に助力は不要だ！　次からは私と「剣士」を、一対一で戦わせてはくれないだろうかッ！？」

狂人固有の雰囲気をどことなく漂わせるリッパー。ストレージデバイスである黒いステッキ「キリング」を、意味もなく床にコツコツと打ち鳴らす。しかし、そんな変人振りにも何ら気後れすることなく、ブシドーがリッパーへと、自身の要望を威勢よく言い切った。

「きる……ＯＫ、ミスター・ブシドー。私も、Ｙｏｕとは上手く連携を取れないことを、あの戦闘でＵｎｄｅｒｓｔａｎｄした。Ｎｅｘｔからは、各個「剣士」に挑もう。Ｏｂｊｅｃｔｉｏｎはないか

ね？」
「「「！？」」」
「無論だとも！　礼を言うぞ、リッパー！」

とある事情で、滅多に「きる」以外の言葉を使わないリッパー。そんな彼の、非常に珍しい長文の台詞に、ブシドー以外の誰もが目を見開いた。だが、リッパーはそれを気にせずに、ブシドーの返答が気に入ったのか、妙に上機嫌なまま、訓練室から出ていった。ちなみに、イカれ目の、白髪が目立ち始めた壮年の男がステッキ片手に、ウキウキなスキップで退室する様は、とても見れた物ではなかった。

「えっ、ブシドーさんッ！？　今どうやってリッパーさんとコミュニケーションをむぎゅッッッッ！？」

未だリッパーとまともに喋ったことがないロベルトは、その様子を見て、どうやってリッパーと意思疎通をしたのか、ブシドーに聞こうと、身を乗り出した。だが、その頭の上に、サムライの絶壁級まな板がぽすッと乗っかり、ロベルトを赤面へと追いやって、その言葉を途中で遮った。しかも、サムライはロベルトの様子に気付かないまま、ブシドーとの会話を、ロベルトの頭の上に身を乗り出しながらし始めた。

「まさかとは思うが、私にも「剣士」との戦いに手出しをするなとほざく気ではないだろうな、ブシドォオオッ！？」
「当たり前だ！　私と「剣士」の絆は、愛憎を超え、今や宿命にまで昇華しているのだ！　その絆を裂く事は、「剣士」にしかできないこと！　もし邪魔をするのであれば、サムライよ！　仲間とはいえ、許さんぞッ！！」
「ほおぉ……斬り捨てられる覚悟はできたか、ブシドォオオオッ

！？」

「よく言ったサムライィイイイッ！！」

「……もう、勘弁して下さい……！」

「ハッハッハ……さて、そろそろ研究室に戻らないといけないね。ロベルト、アイシス、一緒に来るかい？」

「えぇ、そうですねビリーさん！　ここが危なくなる前に、さっさと逃げましょう！！」

「……うぅ、結界は大丈夫かな？　あと、船体の修理費は……うぅ」

一言目に己が主張を、二言目には喧嘩腰の言葉を売買するサムライとブシドーは、互いのデバイスをいきなりセットアップさせると、訓練室の空へと舞い上がって、お互いの獲物を轟音と共にぶつけ合い始めた。その何時もの、茶番というにはあまりにも恐ろしい光景を見て、ロベルトは心底疲れた声を漏らし、ビリーとアイシスはそそくさとその場から逃げ出そうとした。オーバーSランク魔導師、それも、お互いの力量が限りなく均衡（きんこう）している者同士が戦うのだ。十五年前に勃発した「一年戦争」によれば、オーバーSランク魔導師の戦いは、一夜にして一つの国家を滅ぼせしめるほど、壮絶な物だったらしい。そんな戦いに巻き込まれては、確かに、堪ったものではないだろう。

「うぅ……折角「Ａ－ＬＷＡＳ」や「オルレアン・ナイツ」との協力も取り付けられたのに、この二人がこれじゃあ……胃が、胃が痛くなって……！」

ビリーとアイシスの後ろについていくロベルトの言葉は、アームドデバイス「サキガケ」「村雨」「村正」の四刀が衝突する音に紛れ、誰の耳にも入らないまま、何処かの世界へと消えていった……。

第一管理世界「ミッドチルダ」のベルカ自治領の中心部に建てられた聖王教会中央本部。その聖王教会の総本山とでも言うべき場所の、奥まった所にある小さな一室で、艶(あで)やかな金髪を真っ白い部屋に靡(なび)かせるカリム・グラシアは、「カリフ」と崇められる、若干２８歳の、聖王教会の最高指導者と対面していた。

聖王教会において、「カリフ」の地位に着く者は、正にその言葉通りに、聖王の代理人として認知される。そして、聖王を崇める彼らにとって、聖王の代理人たる「カリフ」は、最高指導者であり、同時に、聖王そのものでもある。「カリフ」に逆らうは、聖王に背くことと同義――それが聖王教会の常識であり、歪みの一つでもあった。

「騎士カリム、今一度お願いします。貴女の御力が必要なのです」
「……申し訳ございません、「カリフ」様。それでも私は、もう二度と、争いの為にこの力を振るいたくはないのです」

だが、その常識を打ち破れる数少ない人間の一人である、教会の「騎士」にして、管理局の「少将」でもあるカリム・グラシアは、「カリフ」からのお願いを、あくまでも優雅に、優しく拒否した。もしこの場面に教会の枢機卿(すうききょう)らがいたら、彼らは泡を吹きながら卒倒したかもしれない。それだけ、この場面は聖王

教会において、信じがたい光景なのである。

「どうしても……ですか？」

「はい。……本当に申し訳ございません、「カリフ」様」

「いえ、そんなに頭を下げないで下さい、騎士カリム。貴女が争いを嫌っているというのは、重々承知致しております……あの忌まわしき「一年戦争」で負った心の傷は、そう簡単には癒えないでしょう。加え、今はシスター・シャッハをも失ったばかり……無理強いは致しません」

「本当に……本当に申し訳ございません、「カリフ」様」

少し残念そうな顔で、何度も何度も頭を下げるカリムを見つめる「カリフ」。今回、赤と緑のオッドアイを持つ彼女がカリムと会談した理由は、教会が保有するたった五人のオーバーSランク魔導師の一人でもあるカリム・グラシアを、戦線に復帰させる事――同時に、カリムを非開戦派たる自身の勢力に引き込ませ、今勢力を急速に伸ばしつつある全面開戦派を牽制し、さらには抑え込むためでもあった。

今の聖王教会は、度重なる「ＣＢ」の介入行動により、夥しい数の戦死者、及びその遺族を、その組織下に抱え込んでしまっていた。百や二百ではない、数千数万もの数でだ。そして、それらの人々は、一概にしてこう叫ぶ。

「「ＣＢ」に鉄槌を！　悪鬼を殲滅せよ！　家族の、恋人の仇を！」

「ガンダム」を……破壊しろぉおおおおッ！！」

その声は、日毎に行われる「ＣＢ」の武力介入により、日を追う毎に増えていった。だが、「カリフ」はその大きくなり始めた声を頑なに聞き入れず、自衛の為の戦力を諸所の教会に派遣しても、決

して殲滅する為の戦力だけは編成しなかった。例え、そのせいで犠牲者が幾人も増えようとも、「カリフ」は「CB」との戦争を全て時空管理局に任せ、直近の「教会騎士団」にして最強の戦力たる「第一聖王近衛騎士団」を徹底してベルカ自治領の護衛に回し、絶対に、自ら討って出ようとはしなかった。

それは、戦争という愚かしい行為をこれ以上拡散させない為、そして、戦争という泥沼にこれ以上浸からない為の措置だったのだが、被害に遭った当事者たちは、これに納得することができないでいた。理屈では分かるし、理性でもそれが正しいことは理解できる。だが、それでもこの煮え滾る憎悪だけは、理屈や正論では決して鎮まらずに、ただひたすら、「ガンダム」への復讐を望んでいく。望んでしまう。純粋なまでに、愚かしいまでに。

そして、その復讐に取り憑かれた当事者たち――「ガンダム」を殲滅せんとする全面開戦派の中には、厄介極まりないことに、教会最強の戦力にして、第一聖王近衛騎士団の「騎士団長」でもあるノア＝アンダーソンと、もう一人のオーバーSランク魔導師がいた。この二人の存在により、下手をすれば武力によるクーデターすら起こしかねなくなった全面開戦派を何としても抑えようと、「カリフ」自身も含めた二人のオーバーSランク魔導師を有する非開戦派は、残った最後のオーバーSランク魔導師であるカリム・グラシアを此方側に引き寄せようと、「カリフ」直々に説得に出向いたのだが……その結果はあまり芳しい物ではなかった。

しかしながら、唯一の救いとしては、カリムが戦線に復帰はしないものの、非開戦派には属すると、そう宣言したことだ。これで少なくても暫くはクーデターの心配をしないで済みそうね……そう思った「カリフ」は、重大な肩コリを感じさせる爆おぱ～いを上下に大きく揺らしながら、安堵の吐息を静かに吐き出した。

暗闇の中に浮かぶ、十二のモノリス。それぞれに枢機卿、大司祭と銘打たれたそれらは、円を描く様に配置させられ、各々の意見を衝突させている。

「だから、まずは「ＣＢ」をだな……」

「「ＣＢ」の前に、腰抜けとなった「カリフ」をどうにかしなければ……」

「それよりもカリムだ、カリム！　あやつを此方側に寄せる算段は……」

しわがれた老人たちの声に、隠しようもない苛立ちが見て取れる。それはどのモノリスも同様であり、誰一人として、正常な判断を下せそうになかった。

彼らは今を戦時下と捉えていた。時空管理局だけでなく、聖王教会にも堂々と戦争を仕掛けてきた「ＣＢ」。向こうは此方を自由に攻撃してきているのに、此方側からは何の攻撃もできないそのもどかしさ。そして、攻撃をしないが為に溜まる、遺族たちのフラストレーション……それらが彼らをささくれ立たせ、正常な思考を奪っていた。

「そもそも、「CB」とは、「ガンダム」とは一体……」
「無限書庫は何をしているのだッ!?　こういう時の為に、書庫なんぞに金を……」
「……やはり、アレしか手段がないのかのう？」

一人が放った、一つの波紋。それはモノリスたちを一斉に静かにさせると、怒号のような声をヒソヒソ声にまで小さくさせた。

「……アレ、とは、つまり……アレ、か？　だがアレは……」
「しかし、カリムが動かない今、限られた手段の中では、それが最上……」
「管理局と手を切ることになるが、もしこれ以上「CB」の跋扈（ばっこ）を許すようならば、いっそのこと……」

ヒソヒソ。ヒソヒソ。

「……聖王様の力でもって、「CB」と戦うことも視野に入れよう」
「……枢機卿、では？」
「聖王様復活を何時でもできるよう、高町ヴィヴィオ様には常時監視の者を付かせろ。ただし、管理局に悟られることなくだ。我ら教会が聖王様を担ぎ出せば、管理局も黙ってはおるまい……奴らにとって、ベルカが台頭してくるのは、都合が悪いだろうからな」

異議なし、異議なし、異議なし!!

「さあ、これが吉と出るか凶と出るか……ゆりかごの鐘を、鳴らそうぞ」

【正義が形を成した瞬間（とき）、それは護る力が暴力へと進化した瞬間だった】

――ＥＸＡＭ様より

幕間―3（前書き）

【僕は君の背中を守るのが信念だからね】

――鴨川秘様から、『イレブンソウル』の長篠優作より

幕間―3

――新暦７５年１１月３０日――

強化ガラスを通して、僕は彼女を研究していた。彼女は鋭利な黒い機甲を身に纏ってはいたが、その美しさは少しも損なわれてはいなかった。まるで黒い弾丸のように、彼女は一個の完成された芸術品の如く、その場に凛と、細い二本の脚で立っている。

『……どう、ティーダ？』

「……」

『……ティーダ？』

右手を駆動させる彼女。機械特有の高い音が、強化ガラスの向こう側にいる僕の所にまで聞こえてきた。壁にはめ込まれた巨大なモニターに、彼女に関する様々な数字が現れる。その多数の数値を、目の前の複数ある情報端末に、一文字の誤差すら無いように打ち込んでいく。ピピピピ……指が僕の意識を反映し、平面上に羅列（らレつ）されたキーを高速で押していく。その速度に、周りの大人たちが息を呑むのが分かったが、僕としては、どうしてこんな事もできないのだろうかと、そう思わずにはいられなかった。これが管理世界と管理外世界の差なのかと思うと、本当にこの世界が管理局に戦争を仕掛けられるのか、不安になってしまう。

『……聞いている、ティーダ？』

「……え？　あ、ハイッ、ヒュドラさん！　どうしたんですかッ！？」

『……疲れているの？　……だったら、もう休憩にした方が……』

「いえ、大丈夫です！　もう少し、もう少しだけ続けましょう！」

『……そう、分かった』

彼女の声は、通信機器を通しても、常とは変わらずに冷たく、人を突き放す響きを含んでいた。でも、その声に一抹（いちまつ）の優しさを感じた僕は、単純ながらにも、その気遣いを嬉しく思った。……その場では、唯一の心許せる存在である彼女を心配させまいと、意地を張ってしまったが。

「……でも、良かったんですか？　「オルレアン・ナイツ」なら兎も角、「世界清浄」の生まれ変わりを自称する「灰被り（シンデレラ）の福音」なんていう組織と協力するなんて……」

『……確かに不確定要素は多いけど、あの『エース』や「剣客」、「切り裂き」を有しているから、断る理由は何処にもない。……それに、Ｍ・Ｓの最高傑作機とも言われる「フラッグ」開発の立役者とも言われたビリー・カタギリがいるのならば、どんなことをしてでも協力を仰ぐべきだと、私は思う』

新暦７５年１０月１０日に起きた、「Ｂ・Ｔ・Ｗ（世界が焉わる日）」。「ＣＢ」が第９７管理外世界に、初めて本格的な武力介入を行った事件であり、第９７管理外世界に治安維持部隊「Ａ－ＬＡＷＳ」を創設させる切っ掛けにもなった事件でもある。そして、その事件で僕は、一年だけとはいえ、魔法の師であり、また育ての親でもあったおじさん（ギル・グレアム）と、その使い魔であったリーゼさんたちを「ガンダム」に殺され、世界から本当の意味で孤立してしまった。そんな絶望の中、僕の心をコンコンと静かに、我慢強く叩き続けてくれたヒュドラ＝Ｔ＝Ｈさんは、僕にとっては救いの女神であり、同時に、唯一心を許せる人物でもあった。今となっては、僕を捨てた両親やおじさんよりも、心を許しているかもしれない。それだけ、僕はヒュドラさんに惹（ひ）かれていたのだ。その美しさと、強さに。

「……ヒュドラさん。僕が思うに、やっぱりこのカスタムでは、限界があると思います。確かに、大気中の魔力と太陽光による電力を併用するように改造したコレが、デバイスを失くしたヒュドラさんに合うスーツだとは思いますが、やっぱり出力が圧倒的に足りな過ぎて、この性能（AAAランク）が限界です」

『……それでも私は、「赤鬼」を壊す為に……！』

「……分かりました。ヒュドラさんがそう言うのでしたら、僕も、できる限りの改善をしていきたいと思います」

僕の癖っ毛がある金髪とは正反対な、この日本という国の「冬」を感じさせる長い銀髪。よく暖かいと言われる碧眼（へきがん）にはない感情を秘めた、冷徹な蒼眼……そして、専用のデバイスがあれば、若干十六歳にてＡＡＡ＋ランクにまで手が届く実力。その全てに、僕は魅了されてしまっていた。だから僕は、ヒュドラさんの復讐を手伝うし、それと並行して、自分の復讐も果たそうとする。僕の復讐相手は、ヒュドラさんの復讐相手と同じ機体だから、僕はＢ級デバイスマスターとしての全力を、気兼ねなくヒュドラさんの新しいデバイス――かつて「最強のＭ．Ｓ」と謳（うた）われた事もある「フラッグカスタム」――に注ぎ込もうと思う。

『……ありがとう、ティーダ』

……そして、復讐を終えたら、何時か無表情なヒュドラさんを、いっぱい笑わせて……それだけで僕は、僕は……

M級次元航行船第３番艦「マリアンヌ」。その白亜の巨船は、かの「世界清浄」で名を轟かせていた「オルレアン・ナイツ」、そして「四大使徒（クリーチャーズ）」の一人である『エンデ』をその広大な船内に内包しつつ、第９７管理外世界に程近い次元空間をゆっくりと航行していた。

「……ジャンヌ様、以上で報告は終わりです。……これで、よろしかったので？」
「……（コク）」
「……分かりました。では、私はこれで……」
「……（コク）」

無音で進む数百メートル級の巨船「マリアンヌ」。その三角形に尖った船頭の下部には、髪の短い女性がとても緻密（ちみつ）に彫（ほ）られており、その女性にそっくりな十四歳ほどの少女は、装甲と同じ色合いの白亜で囲まれた艦橋にて、オペレーターの女性から定時の報告を聞き、とある神託（しんたく）を下していた。その神託に、口を阻まずに了解の意を示し、オペレーターの女性は彼女の配置場所へと戻っていった。

「……」

少女は虚ろな隻眼（せきがん）で、目の前に無窮（むきゅう）の如く広がる次元空間を見詰めた。暗色のマーブル模様が、少女の瞳にささやかな色を付け加える。しかし、それでも少女の隻眼には、何の色も見出せなかった。感情がないというわけでも、意思が希薄（きはく）だというわけでもないのに、少女の隻眼には色がない……それが、小柄な少女に否応なく「神秘」

という幻想（勘違い）を付与させた。それが少女にとって、幸か不幸かなどを問わずに、である。

「……（……）」

そんな幸薄（さちうす）そうな雰囲気を持つ少女の名は、ジャンヌ。「世界清浄」の幹部であった「四大使徒（クリーチャーズ）」の一人、『エンデ』の称号を持つ、「オルレアン・ナイツ」の頂きに立つ聖女である。色素がない白髪と乙女の白肌は、少女の白いドレスと相まって、少女を何か神々しいモノとして奉（たてまつ）っているようですらある。だが、そんな白亜の少女に異質な点があるとすれば、

「……（……メ、痒（かゆ）い）」

それは、少女の右目を覆い隠す深紅の眼帯――ミッド式魔法陣が幾重にも中空に光っている――であった。その眼帯は右目を隠す為に、左の頬と右頭部を通って、後頭部で端と端を繋げられていた。所々からは糸が解（ほつ）れ、長い年月によりボロボロになっていたが、少女は余程それが大切なのか、時折右手で触っては、位置を調節していた。

「……（……ロベルト君は、元気、かな？）」

少女――いや、ジャンヌは眼帯を触りながら、手元の報告書から「マリアンヌ」の巨大なメインモニターへと視線を移した。それと同時に、「マリアンヌ」が次元空間を抜け出して、星が瞬く宇宙空間へと、僅かな振動を伴いながら躍（おど）り出た。ジャンヌは艦橋の上座で、目の前の移り変わりのない、なんら珍しくもない青い惑星を暫（しば）し、黙って眺め、次いで、横のサブモニターで、百隻近くもの大艦隊を、事前の打ち合わせ通りだと思いながら、隻眼で視認した。

「どうやら、「灰被り(シンデレラ)の福音」の艦隊のようです！　……予想以上に艦船の数が少ないですが、「フォルティッシモ」を確認したので、間違いありません！」
「……（コク）」
「では、早速連絡を……ジャンヌ様、お手数お掛け致しますが、どうか、お願いします」
「……（コク）」

上座でジャンヌの横に座っていた艦長からのお願いに、ジャンヌはただ頷いた。それに満足そうな笑みを浮かべながら、艦長は向こうの旗艦である「フォルティッシモ」へと、通信を繋げようとする。ジャンヌはその作業を黙って見詰めながら、再び眼帯へと手を伸ばした。そこに感じ取れる感情は何も……何も、見出せない。

第３２管理世界は、混沌としていた。「ＣＢ」の襲撃を受けたその世界は、今や何モノかによって暴かれた、反管理局組織「灰被り(シンデレラ)の福音(はくだつ)」との協力関係によって、管理世界の称号を一時的に剥奪されていた。

それによって、管理世界からは援助が届かず（管理世界から管理

外世界への接触は禁止されている）、また管理外世界などは自前の次元航行技術を持っていないが為に、繋がりを持つことすらできなかった。

今の第３２管理世界は、十五年前に起きた「一年戦争」の舞台となった第１０管理世界の置かれた状況と酷似していた。管理外世界というには技術が発達し過ぎていて、また法を犯したために、管理世界とは認められなくなった世界であった第１０管理世界。その世界もまた今の第３２管理世界のように、次元世界から孤立してしまい、その果てにあったのは暴動・内紛・戦争ｅｔｃ……（などなど）つまりは、文明の後退しか、許されていなかった。

しかし、そのような末路を望まぬ人々もまた、第３２管理世界には沢山いた。第１０管理世界の惨状を知っていたからこそ、彼らもまた形振（なりふ）り構わなくなったのだ。体裁やプライドなどを気にせずに、ただ生き残ることだけに焦点を絞った彼らは、生き残る為に、とある可能性を長い長い、本当に長い議論の末に、辛うじて導き出した。

とある可能性。それは本来、生き残るべくして導き出された一つの未来。

だが、その可能性は同時に、第３２管理世界を管理世界から追放した時空管理局への報復の意味合いも込められていた。他でもない、彼ら自身の失態を棚上げにしながら、彼らは自分を正義だと信じ、蝋（ろう）のような大義を振りかざしながら、狂気じみた復讐へと、その世界を奔らせたのだ。

「……一体、どうすればいいのだ……！」

「父さん……」

「大佐……」

最も、全員が全員、この流れに賛成な訳でもなかった。その一人として、セルゲイ・スミルノフ大佐などがいたが、そういった人物たちは常の如く、権力者たちの中では少数派であり、何をどう足掻(あが)こうとも、この流れを止めることはできなかった。

かくして、第３２管理世界は、「灰色の福音(シンデレラ)」、「オルレアン・ナイツ」などを傘下(さんか)に加えた「Ａ－ＬＡＷＳ」へと下った。自由にこの世界を使って構わないと、軍隊も戦力として数えていいと、そういう条約を締結(ていけつ)しながら、彼らは世界に対し、反逆の狼煙(のろし)を上げ始めた……。

余談だが、この決定を下すのに、他にも大きな要因があった。それは、かつて第３２管理世界を恐怖のどん底に追いやった第一級捜索指定遺物(ロストロギア)――「闇の書」の力を、民衆が再び目の当たりにしたこともまた、彼らが管理局から離れる要因となっていた。彼らは夜空を喰らうかのようなディアボリック・エミッションの威容を見て、忘却(ぼうきゃく)の彼方(かなた)に追いやっていた筈の恐怖を思い出してしまったのだ。

四騎の守護騎士(ヴォルケン・リッター)を従えし、翼広げる夜の王(闇の書)。其は滅びの書にして、ベルカ最高の魔導書である。数十年前に第３２管理世界に出現した「闇の書」は、新暦以降、未だ両手両足で数えられる程度にしか発見できていない第一級捜索指定遺物としての力を、思う存分に発揮した。数人ものオーバーＳランク魔導師とすら互角以上に戦える「闇の書」は、「壊滅」の文字通りに、世界を、社会を、人類を破壊し、殺し尽くした。当時の第３２管理世界の上層部たちが、断腸の思いで大気圏内でのアルカンシェル使用を管理局に求めた時には、すでに世界の三分の一近くが業火に包まれていた。その時の事を覚

えていた識者たちは、「夜天の書」という、「闇の書」から名前を変えただけだと思っている戦略兵器に、一斉に反発を露わにした。それほど、「闇の書」は彼らにとって禁忌の存在だったのだ。

未だ「闇の書」の闇は、十年という月日が経った今でも、人々に深い傷痕（きずあと）を残したままであった……。

遺跡発掘を生業（なりわい）とし、次元世界各地を流浪（るろう）するスクライア一族。彼らは遺失せし英知を求め、現存する古代遺跡を発掘する者達だが、今回ばかりは何時もと勝手が違っていた。彼らが今回発掘したのは、第６管理世界にある、古代ベルカ時代から少数民族「ル・ルシエ」に「ヴォルテールの祠（ほこら）」と奉（たてまつ）られていた聖域だったのだ。しかも、この遺跡を発掘していたスクライア一族の者は、事前の情報収集を怠り、そこが「ル・ルシエ」の聖域だとは知らずに、盗掘の如き振る舞いをしてしまっていたのも、事を大きくさせた要因であった。

「ル・ルシエ」は聖域を汚されたと、そう管理局に主張し、聖域で発掘された物全てを祠に戻すよう要求したが、スクライア一族は既に発掘された物品の半分は管理局に、四分の一は自分たちに、そして、残りの四分の一をブラックマーケット――闇市場に売却していた為、全ての物品を返却することは、実質不可能であった。

「――！」
「――！？　――！　――！」
「……――？　――！！」

何とか和解しようと、管理局に明け渡した分も含めた四分の三の物品を携えながら、スクライア一族の族長が「ル・ルシエ」の族長へと和解の話を掛けあっても、「ル・ルシエ」の族長は「全ての物品の返却」を頑なに和解の条件とし、もしそれが不可能であれば、民族紛争も辞さないと、そうスクライア一族に脅しをかけた。

しかし、ここで予想外だったのが、スクライア一族の習性とも言うべき性（さが）であった。彼らはこの問題を解決する前に、第９７管理外世界の「日本」という、かつてユーノ・スクライアが生活していたと聞く地域の遺跡に興味を持ってしまったのだ。

その後の対応は、まさに「ル・ルシエ」の神経を逆撫でする物であった。スクライア一族はほぼ全員、最近トランスポーターが使えるようになった第９７管理外世界に出向くわ、「ヴォルテールの祠」の物品がもう一度闇市場に出回っても、第９７管理外世界の遺跡発掘のせいで「かねがね金がねえ」などとほざき、買い戻す努力すらしないわで、「ル・ルシエ」の不満は過ぎる時間に比例して積み重なっていった。ましてや、二ヶ月もの間、物品を取り戻す努力を何もしていないとなれば、尚更である。

その不満がいつ爆発して、民族紛争にまで発展するのか。それはもしかしたら、近い未来……なのかもしれない。

そして、もしそうなれば、彼らは必ずやその紛争に介入するであろう。

嘘だと、そう思いたかった。嘘だと、その現実を拒絶したかった。嘘だと、大声で泣き叫びたかった。嘘だと、嘘だと、嘘だと、嘘だと……そう、信じたかった。

「……は、はは……なあおい、どういうことだよ、これは？」

しかし、現実は残酷だった。しかし、事実は冷酷だった。しかし、世界は……誰にとっても平等で、優しくなど……ない。

「……なんて言やぁ良いんだよ、アイツに……スバルに、オレは……」

目の前の冷たくなった左腕は、すでに鼓動を止め、肌を真っ白くさせていた。もう二度と動くことはないだろう。この現象を人は、たった一言で表してきた。即ち……「死」と。

「オレは……」

あぁ、後生です神様。何でも致しますので、どうか彼女を、娘を蘇らせて下さい――無論、そんな戯言（たわごと）が通じるのは、「奇跡」が横行する、理不尽なまでに主人公（ヒーロー）に甘い世界だけだ。そして、この世

界はひたすらに「残酷」だった。そんな甘い世界とは異なり、死者が生き返る余地など、全くもって……持ち合わせてなどいない。

「……」

人は甘い世界を望むだろう。だが、この世界は悲劇を求める。だから、人は蘇らない。

「……ゲンヤ部隊長。そろそろアースラが入港する時間ですが……」
「……分かった。カルタス、すまねぇが……」
「分かっています。仕事はオレが引き受けます」

そんな有り触れた事実を、今この時にもう一度確認した、陸士108部隊の部隊長であるゲンヤ・ナカジマは、己の部下であるラッド・カルタスに仕事を任せると、自身は、今日判明したとある事実を、もう一人の娘――スバル・ナカジマに伝える為に、アースラが入港するドッグへと、向かっていった。

ティアナは、目の前で泣き崩れた親友を前にして、どんな言葉をかければいいのか、暫し、逡巡（しゅんじゅん）してしまった。親友は涙を止め処なく流しながら、力が入らないのか、床にへたり込んでしまっていた。

そんな弱々しい姿を前にして、ティアナも、涙を流しそうになった。
先程伝えられたとある事実は、彼女自身にも衝撃を与えていたのだ。
短い間とはいえ、行動を共にして来た人物の死を伝えられたのは、これが初めてでないにしろ、一向に慣れた物ではなかった。

「うわぁあああ、あ、あああああああああッ！」

ティアナの親友――スバル・ナカジマの悲痛な叫び声が、アースラを収容したドッグに響き渡った。機動六課の面々はその声を、ゲンヤと相対しながら悲痛な表情で見詰める他なかった。もちろん、その面々の中にはティアナ自身も含まれていた。

「あ、あぁあああぁあああああああああッ！　ギン姉（ねえ）、ギン姉ェエエエエッ！！」

止まない泣き声は、まだまだ続く。スバルの悲しみは、それほど深い物だった。そしてそのことを知っていたからこそ、ゲンヤも機動六課の面々も、スバルに声をかけられなかったし、泣き止ませようともしなかった。

「……（……ギンガさん）」

悲しみを振り撒く、とある事実――ゲンヤの娘で、スバルの姉であった彼女、ギンガ・ナカジマの、唐突過ぎる死を、ティアナは静かに、独りで呑み込んだ。それが彼女にできる、精一杯の……弔（とむら）いであった。

【消えない幻は、全て現実】

――つぁーる様から、『ＳＴＡＲ　ＤＲＩＶＥＲ　輝きのタクト』より

幕間―3（後書き）

次の投稿日は、1月31日か2月1日、2月2日の何れかの日にする予定です！

1月31日でしたら、「TRANS－AM　BURST！！」
2月1日でしたら、「TRANS－AM！」
2月2日でしたら、「サボんな駄目作者！！！！」

と、叫んでいただけましたら幸いです。

幕間―4（前書き）

【時には間違ったものを守らねばならないこともある。それが役割であるならば……】

――キラー様から、『ＤＩＳＳＩＤＩＡ　ＦＩＮＡＬ　ＦＡＮＴＡＳＹ』の素材アクセサリ「審判の門」の説明文より

幕間―4

――新暦７５年１２月１日――

重苦しい雰囲気がその場を席巻し、渦を巻いては撒き、巻いては撒いて……静けさすら感じさせる沈黙を、中央技術開発局・第１局長室に齎していた。

「そんで……ザフィーラ、本当に話してくれるん？　もし話すのが辛かったりしたら、別に話さんでもええよ？」

「いえ、大丈夫です主。私なりのケジメを着ける為にも、私は「アップル」と呼ばれる人物について、思い出した範囲内で話したいと思います」

そんな第１局長室で、白いクロスがかけられた丸テーブルを中心にして、スバル・ナカジマとティアナ・ランスターを除いた機動六課の面々と、中央技術開発局の最高権力者である第１局長のイリス・ラビリンスが、高級そうなアンティーク調の椅子に座っていた。丸テーブルの上には幾つもの重要な資料が散りばめられており、ここに通い慣れた高町なのは以外の人達は、それの扱いに困っている風であった。しかし、「天才」イリス・ラビリンスはそんな様子の人達には目もくれずに、自身の隣に狭そうに座る守護獣――ザフィーラへと、期待に満ち満ちた目を向けた。ちゃっかりとその腕に自身の腕を絡ませ、豊満なおぱ～いを押し付けているように見えるのは気のせいだと、機動六課の面々はそう思い込む事にした。

「それで、ザフィーラ様が言うに、「アップル」という者はユニゾンデバイス……それも、はやてさんの「夜天の魔導書」の原典ともいうべき存在であると……詰まる所、「天使の魔導書（セファー・ラジエル）」というロス

トロギアで間違いない、と？」

五十代であるイリスの声には幾分かの喜色が含まれており、やや興奮気味であることがはやてには手に取るように分かる。だが、それを仕方がないとも、はやては思う。何故ならば、今から話されることは、まさに青天の霹靂（へきれき）である事実……聞いた事すらないほど昔の、遠の刻（とき）に埋もれた史実の一つなのだから。それに、はやて自身も興奮を抑えきれずにいた。埋もれていた事実を知る、というよりは、謎の人物であった敵の「アップル」について、何らかの情報を得ることができる、という意味ではあったが。

「あぁ、間違いない。それだけは確信をもって言える。間違いなくアップルとは、「天使の魔導書」の管制人格（マスタープログラム）である「セファー」であった」

ザフィーラはイリスやはやて、それに他の人々の様々な思惑を知りながら、その口を何時もと同じ調子で開いた。スラスラと、淀（よど）みなく言葉が並べ立てられた。

「……まさか、「夜天の魔導書」の原典なんてものがあるなんて……シグナムは知っていましたか？」

「いや、私は知らなかったぞ、ハラオウン？」

「ヴィータちゃんは？」

「……聞いた事もねえ」

「えと、シャマルさんは……」

「……私も知らなかったわ。「夜天の魔導書」に原典なんて物があったなんて……」

「リイン曹長は……」

「私も知らなかったです～！　でも、どうしてザフィーラだけが知っているんですか？」

フェイト・T・ハラオウンはシグナムに、高町なのははヴィータに、エリオ・モンディアルはシャマルに、キャロ・ル・ルシエはリインフォース?(ツヴァイ)に、「夜天の魔導書」を知っていたかと問うた。ザフィーラと同じ守護騎士(ヴォルケンリッター)である三人と管制人格であるリインフォース?ならば知っていたのでないかと、そう思ったのだろう。が、その何れにも、彼女らは答えを「否」とした。それに首を傾げる一同を代表するかのようにして、リインフォース?がザフィーラへと問うた。その問いを受け取ったザフィーラは、やはり常の冷静さを保ちながら説明を続ける。

「それは、オレが「天使の魔導書」の守護獣であったからだ。オレは「夜天の魔導書」の守護騎士システムに組み込まれる以前は、セファーの番犬として存在していた」

「……どうして「夜天の書」に組み込まれたんですか、ザフィーラ?」

「古代ベルカの人々とセファーが共同で創った「夜天の書」、その守護騎士(ヴォルケンリッター)には、当初、防御特化型のモノがいなかった。古代ベルカの人々には「攻撃は最大の防御」という格言があり、しかも、当時は防御がおざなりにされていた風潮もあってか、防御特化型の騎士はいらないと判断したのだ。それに真っ向から反対したセファーは、古代ベルカの人々に気付かれないようにしながら、オレを守護騎士システムに組み込んだ。「防御特化ならば、お前が適任。それに、例え吾輩(わがはい)とザフィーラは離れていようとも、この関係に変わりなし」……それが、その時のセファーの台詞だ」

「そんなことがあったとは……」

「へっ、まあ確かに、ザフィーラがいなけりゃ、私達はここまで生き延びられなかったかもな」

「そうですねぇ～……でも、でしたら、私達にその事を言ってくれてもいいじゃないですか、ザフィーラ?」

「そうですよ～！　水臭いですよ、ザフィーラ！」
「……済まない。しかし、セファーは「夜天の書」にオレを組み込む際、オレの記憶を封印したのだ。「仕える主は一人だけ」と言ってな……まあ、セファーを見れば思いだすようにはなっていたみたいだが……オレがこの記憶に確信を持てなかったから、話すのを躊躇(ためら)っていたのだ」

ザフィーラにより語られる、「夜天の魔導書」誕生の秘話。シグナムとヴィータ、シャマル、リインフォース?はその一言一言に驚き、はやてなどは、さきほどからしきりに頷いていた。

また、機動六課の面々も、遥か太古の歴史に感嘆し、イリスでさえも、溜息を零さずにはいられなかった。恐らくは次元世界で最も古い「魔導書」の一冊であろう「夜天の書」。それが誕生した経緯を、当時を生きていたザフィーラから聞いたのだ。研究者であるイリスには門外漢な分野ではあるが、それでも感嘆してしまうほどの時の重さを、彼女はしっかりと感じていた。

「……じゃ、じゃあザフィーラさんは、私にかけられた魔法の術式も知っているんですかッ！?」

刻々と語られていたザフィーラの御伽噺(おとぎばなし)。それが終わりを迎えると、なのはが突然、ザフィーラに質問をぶつけた。しかし、ザフィーラはその問いが来るのを分かっていたかのように、落ち着いたまま答える。

「……あぁ、知っている。それに、オレはその術式を使うこともできる」
「「「えッ！?」」」
「高町……その術式とは、コレの事なのだろう?」

ザフィーラは右手を掲げると、その掌に魔法陣を煌(きらめ)かせた。青い蒼い、どこか穹を連想させる深い蒼色に輝くその魔法陣は、中空で循環(じゅんかん)するように回りながら、部屋を仄(ほの)かに青く照らした。だが、その魔法陣はベルカ式とミッド式、その両方を併せた様な模様をしていて、それがイリスでさえも解明できなかった謎の術式であることは、間違いなかった。

「こ、これは……た、確かにあの術式です！　詰まる所、私が名付けた謎の術式「ミッドベルカ式」です！！」

白衣を着たイリスが興奮を抑えきれなくなったのか、鼻息を荒くしながらザフィーラの右手へと体をさらに寄せた。ザフィーラはそれに少しだけ迷惑そうな顔をしたが、イリスの目には謎の術式しか映っていないのか、やや陶酔(とうすい)した表情のまま、謎の術式へと顔を近づけていく。そして、その整った顔が術式に触れると同時に、ザフィーラは魔法陣を右手から消した。それで正気を取り戻したイリスは、咳払いを一つしてから体を椅子の上に戻した。……周囲の視線が痛かったのは気のせいだと、イリスはそう信じ込む事にした。

「……高町のリンカーコアを封印している「エンドレス・コア・シール」という魔法に使われたこの魔法陣は、ある意味、ただの魔法陣だ。ミッド式やベルカ式などと比べ、性質に偏りがなく、汎用性と万能性、そして処理速度をとことんまで追求した魔法陣だからな。……セファーはこれを、こう名付けた」

イリスの奇行を力づくで無視し、説明を再開させたザフィーラは、その時、今までの落ち着いた態度を一瞬だけ揺らがした。何かに苦悩するような、迷いを断ち切れないような様子を見せるザフィーラ。しかし、やがて何かを決心したかのように、一拍を置いてから、言

葉を発した。

この言葉で起こるであろう混乱を、覚悟しながら。

「「Ａｌｌ　ｈａｓ　ｒｅａｄ」式魔法陣――即ち、言葉弄(いじ)りて、「アルハザード式魔法陣」……と」

――新暦７５年１２月２日――

ここは、第一管理世界「ミッドチルダ」の中央部、その一等地に建てられたレストラン「バンクーバー」の「インフォメーション」ＶＩＰルームという所である。ＶＩＰルームとは、レストラン側がそれぞれの分野でトップだと判断した人物のプライベートルームであり、どんな時、または場合でも、その人物にしか門戸を開かないことで知られる、「バンクーバー」が超高級レストランである由来の部屋である。

「……なあ、ユーノ君。どうして、ギンガは殺されたんやろうか？」

「……はやて、君らしくもないね？　君がそんな事も分からないな

んて、嘘でしょ？」

「……やっぱり、ユーノ君には分かってしまうんやな。そや、私はもう分かっとる。ギンガが殺された訳を。それは勿論、ゲンヤさんも分かっとるはずなんやけど……」

天上から光を放つ、天使を象った豪奢なシャンデリア。ムーンライトが至る所に散りばめられた、凸凹のある球状のオブジェ。結界によって切り取られた空間に浮遊する、メビウスの輪の形をした大きな本棚。その三つを周囲に配置し、中心に置かれた丸テーブルに座るは、際立った十九歳の男女の二人であった。

優男風な長い栗色の髪をした男性は、フレームが細い眼鏡を何度か人差し指で動かしながら、目の前に置かれた贅沢な料理の数々を、その胃袋に納めていく。少しぐらい「勿体ない」とは思わないのだろうか？　と思ってしまうほど、男性は無造作に、財布を一気に軽くする料理を食していった。その様子を見ていた茶髪の女性は、若干男性に呆れていたが、特に何も言うこと無く、彼女の目の前に置かれた料理を、少しずつ「タッパー」と呼ばれる透明なケースに詰めていった。その姿を見た男性が女性に家庭的な物、母性的な物を感じた事を、女性は知らないし、男性もそれを言うのが恥ずかしいのか、口にしなかった。

「はぁ～……スバルは塞ぎ込んでしまうし、エリオとフリード、シグナムはまだ怪我から復帰したばっかやし……なのはちゃんの治療はちょっとしか進まんしで、もう、嫌になってしまうわ」

「……言われてみれば、凄い状況だよね？　異常な戦力とまで言われた機動六課が、隊長陣も含めて、隊員が四人も戦闘不能になるなんて……本当、四年前と変わらずに、「ガンダム」は化物だよ」

男性は食べ物を口に入れながら喋る。それに女性は眉を寄せたが、

何度言っても直らない事は、これまでの「お付き合い」から分かっていることなので、特に何も言わずに、話しの路線を変更した。寧ろ、彼女にとっては、この話題こそが、男性との「デート」、その真の目的であった。先程までの鬱顔から真剣な表情に切り替え、男性を鋭く見抜く女性。しかし、当の男性はその視線を、何処吹く風と受け流した。踏んでいる場数が違うとでも、言外にそう諭すように。

「……ユーノ君。そろそろ四年前について、教えてくれてもええんちゃう？」

「あ、その事なんだけどね……12月12日に資料をまとめて発表するよう、臨時最高評議会からお達しがきたから、12月12日まで待ってくれない？」

飄々……いや、何時も通りの態度のまま、男性は女性が求める情報について、そうのたまった。それに女性の目が点となったが、女性はすぐに気を取り直して、そうなった理由を男性に聞いた。その時の女性は、拍子抜けでもしたのか、視線をふんわりと緩めていた。男性はそのコロコロと変わる女性の表情に、目元を笑わせる。もちろん、女性に気付かれない程度に。

「……えらい急な話やな？　どうしていきなりそんな話になったん？」

「さあ？　……でも、先日遺体が発見されたギンガ・ナカジマさんが無限書庫で、隠れて「CB」について探っていたのが原因かもね？　そんな事をしているのは、彼女だけじゃなく、他にも数千人以上いるから、これ以上の犠牲を出さない為にも、無限書庫で発掘された「CB」の情報を提示させようと、そう判断したのかもしれない……かな？」

「……そんなにおるん？」

「うん、いる。なんならリストでも見せる？　君の所のティアナ・ランスターさんも、そのリストの中に入っているしね」
「……」
男性は笑いながら、何でもないようなことの様に、日常茶飯事のことである様に話しているが、それがどれだけ難しい事なのかを分かってしまう女性には、薄ら寒い物以外の何物でもなかった。一般にも開放されている区画がある無限書庫で、隠れている局員を探し出すのも、また「ＣＢ」について調べている局員数千人をピンポイントで見つけ出す事も、並大抵のことではない。そして、それが男性の能力の高さ――「聖王のゆりかご」の内部構造の情報という、古代ベルカの最重要機密であっただろう物でさえ、たった数日で見つけ出すほど――を示していた。
「……まあ、それは置いといて。ユーノ君は確証された「ガンダム」デバイス説、それに私やフェイトちゃんそっくりな魔導師とか、どう考えとるん？」
背筋に奔る悪寒を無視して、女性が男性に問う。男性はその問いに、何やら難題を押し付けられたような表情をしつつ答える。
「う～ん……「ガンダム」デバイス説は、まあ、予想通りだった、としか言えないね。どういう原理で稼働しているのかとか、色々と問題は山積みだけど、それは研究者の領分だから、僕から何も言えないよ」
男性の答えに肩を落とす女性。だが、
「……それじゃあ、私やフェイトちゃんにそっくりな魔導師については……」

「……関係がありそうなのは、「天使の魔導書」だろうね、やっぱり。クロノの報告にあったフェイト似の魔導師によると、彼女たちはどうやら十年前の「闇の書」の闇の残滓から生まれた、彼女たちが言うには「深淵存在（マテリアルズ）」……多分、守護騎士システムと同じシステムで生まれた魔法生命体なんじゃないかな？」

今度は驚きで肩を跳ね上げた。男性の言葉が信じられないのだろうか、その星が輝きそうな目がクリクリと、大きく見開かれる。男性はその表情を見て、また苦笑しかけた。惚れた弱味だろうがなんだろうが、こう、女性の表情が変わる様は、彼にとってはとても趣向深いモノらしい。それを悪趣味と言うかどうかは人次第だろうが。

「……「夜天の書」でいう所の守護騎士（ヴォルケンリッター）が、「天使の書」の深淵存在（マテリアルズ）やと？　……まあ、確かにそれで辻褄（つじつま）は合う……わな」

目を見開いたまま、眉をギュッと寄せたまま、女性がそう呟く。男性は自身の推測を受け入れられたのに気分を良くしたまま、口を少しだけ滑らせた。

「でしょ？　あと、「ガンダム」デバイス説だけど、魔力を感知できないのは、これも推測だけど、魔力以外の動力を使用しているからじゃないのかな？」

「……その根拠は？」

「これもクロノの報告からなんだけど、「赤鬼」が戦闘中にこう言ったらしいんだ。「疑似ＧＮドライヴで稼働する」って。それはつまり……「ガンダム」というデバイスは、その疑似ＧＮドライヴで稼働する、既存のデバイスとは一線を画すモノだと考えられるんじゃないかな？」

既存のデバイスとは一線を画すデバイス……それは女性も考えて

いた「推測」であった。殆どの「ガンダム」がＡＡＡかオーバーＳランクに属しているのが、その最たる理由である。オーバーＳランク魔導師は管理局でさえ四十名ほどしかいないのだ。そんな貴重な人材を四人五人と保有する組織が管理局に知られずに、これまで存続することなど、管理局の威信をかけても「有り得ない」と断言できる。それを踏まえながら、女性は大きく溜息を吐き、次いで、体を机の上に突っ伏した。料理の皿はすでに脇に追いやっていたので、お皿とＫｉｓｓすることはなかった。

「……疑似ＧＮドライヴ、かぁ～……まあ、そんなよく分からん機関があるとして。「疑似」っつうことは、本物もある……というわけかいな？」

「多分ね。でも僕は、その本物のＧＮドライヴで稼働する「ガンダム」は、「剣士」、「三つ目」、「羽付き」、「デカブツ」なんじゃないかと睨んでいるよ？」

死んだ魚のような目していた女性が、その言葉を聞くと、突然目をキラキラと輝かせた。男性はそれを見て、何度目か分からない苦笑をしながら、女性の目をスッと覗き見た。しかし、女性はその動作に気付き、頬を赤く染めて、ソッポを向いてしまった。そしてそのまま、疑問を男性にぶつける。

「……なして？」

「だって、「赤鬼」が疑似ＧＮドライヴで動いていると仮定すれば、もしかしたら粒子の色が「疑似」か「本物」かの境目になるんじゃないかな？　「赤鬼」が疑似だとすれば、あの赤橙色の粒子を持つ機体が疑似ＧＮドライヴで動いていて、蒼碧色の粒子を放出する四機の「ガンダム」に搭載されているのが……オリジナルのＧＮドライヴ」

「……うぅん、確かにまあその通り……かもしれへんな」

女性の歯切りが悪いのは、恐らく、男性の推論が考えた事もない推論だったからなのだろう。先程まで赤に染まっていた頬が、常の色に戻り、女性の頭の中で様々な憶測が飛び交っていく。その様子を楽しげに眺めながら、デザートを食べ終えた男性は椅子から立ち上がって、女性の方に近づいていった。女性はその何時も通りの仕草を横目で見ながら、頭の中の憶測を……

「はやて、愛しているよ」

「……へ？」

チュッ。

「……へ？」

「さ、ホテルに行こうか。下に車を待たせているから、早く行こう」

「……へぇえええぇえええええええッ！？」

……憶測は、一瞬で吹っ飛んでしまった。それに気付かずに、女性――八神はやては、男性――ユーノ・スクライアにエスコートされながら、「バンクーバー」の前に止められた黒塗りの車へと乗り込み、そして、そのまま……朝方まで帰ってはこなかった。

二人に何があったのか。それを知るのは、ユーノとはやての、二人だけの秘密である。

【ごめん、話せないんだ。
でも、君が無事で帰ってきたこと。僕は本当に嬉しいんだよ。
それだけは、信じてほしい】

――鴨川秘様から、『＋C』のオルセリートより

幕間―4（後書き）

・・・・・・・

（そう言えば、ユーノ君には話すのを忘れていたわ）

（「アーカイブ」と「ラヴクラフト」が同じ人物だった……ちゅうことを）

（まあ、言った所でもう掴んでいるかもしれへんし……私だって、フェイトちゃんの調査書がなかったら気付けんかったし……）

（……それにしても、まさかこないな人物が「アーカイブ」やったなんて……ちょう、以外やったな）

（……まあ、えぇ。まずはしっかりと捕まえてからや。相手は管理局の上層部にも食い込む大物……策を講じんと、逃してしまうやもしれんしな！）

（ちゅうわけで、待っててな、トレディア・グラーゼ！　ここまで管理局を翻弄したアンタを、フェイトちゃんと協力して、しっかりと逮捕してみせるで！！）

――八神はやての心の中から抜粋

第５４話　Ｂｅｔｒａｙｅｒｓ　ｈａｓ　ａ　ｐａｉｎ（前書き）

【純粋な正義こそ純粋な悪であり、純粋な悪こそ純粋な正義である】

――アストレア様より

第54話　Betrayers has a pain

――新暦71年／作戦名「フォーリン・エンジェルス」発動中――

今からおおよそ二年後に開発されると、「ヴェーダ」にそう予測されているN級次元航行船。それと同程度の性能を持つ「プトレマイオス」の展望室から見る宙（そら）は、どこまでもどこまでも果てしなく、人間一人など、軽く呑み込んでしまいそうだった。

「お～お～、黄昏（たそがれ）てんな～」

「……いえ、少し見とれていただけです。この宇宙の広さ……いえ、世界の広さに」

この次元世界では極ありふれた光景であるのに、そんなおかしな感想を抱いてしまうのは何故だろうか？　……肩まで伸ばされた薄紫の髪と、宝玉の様な赤い瞳を持つアニュー・リターナーは感慨深げにそう思いながら、自身の後ろに立っていた隻眼（せきがん）の人物……彼女の思い人であるライル・ディランディの兄である「ロックオン・ストラトス」へと振り向いた。

「確かに、この世界は広いな……人類には広すぎるぐらいだ。……ま、そんなことは置いといてだな。ここに呼んだのは、頼みたいことがあったからだ」

「頼みたいこと……ですか？」

「あぁ」

ロックオンは緑のパイロットスーツを着用していた。かくいうアニュー自身も、紫色のヘルメットと黒いパイロットスーツを着用しており、何時でも戦闘可能な服装をしていた。

現在の「ＣＢ」は、時空管理局と世界清浄を相手に「戦争」をしており、しかも今は、向こうの作戦である「フォーリン・エンジェルス」が発動している最中なのだ。何時戦闘が始まってもおかしくはないほど、「ＣＢ」と管理局、世界清浄の間はピリピリと緊迫し、殺気だっていた。

そんな状況の中で、ロックオンはアニューをここに呼び出した。それに言い様のない不吉な何かを感じ取ったアニューは、ロックオンの言葉にさらなる不安を抱きながらも、言葉の続きを健気に待った。自虐的なロックオンの表情に、泣きそうになりながらも。

「……もしオレが死んだら、弟を……ライルを、頼む」

「……ッ！」

ロックオンの辛そうな言葉は、やはりというか、アニューが予想した通りの物であった。そうあっては欲しくない、嫌な未来。そう来ることは覚悟していた筈なのに、思わず下唇を噛み締めしめずにはいられなかったアニューの横へと、ロックオンは並び立った。その肩には何とも言えぬモノが乗っかっているようで、とても重たく見えた。

「アニューなら今の状況がどれだけ「ＣＢ」に不利か、分かるだろう？　当初の予定であった「ヴェーダ」による本局の掌握（しょうあく）が失敗した今、オレ達に残された道は、滅びの道のみ……それをさせない為にも、仲間は今、必死にその運命に抗おうとしているわけだが……オレは、オレだけは違う」

ロックオンの声色には、疑いようのない殺意が込もっていた。何時もはヘラヘラと、緊張感なく笑っていた表情も、今は禍々しく引

き締まったモノとなり、まさに管理局が言う所との「悪鬼」そのものとなっていた。その常にない表情に若干の恐れを感じたアニューは、しかし、ロックオンに何も言う事ができなかった。

「オレは、オレの家族を殺し、オレ達兄弟の運命を滅茶苦茶にしたアイツを、聖王教会の騎士である「傭兵王」アリー・アル・サーシェスを殺す為に……家族の仇を取る為に戦おうとしている」

アニューの彼氏であるライルは、ここまで家族への仇に固執(こしつ)していなかった。いや、彼はアニュー以外の何かに固執してなどはいなかった。それなのに、ライルの兄であるロックオン・ストラトスは、家族の仇に異常なほど執着していた。ライルはそれを「兄さんらしいや」などと軽く言っていたが、アニューにはその異常なまでの執着心を、逆に怖いとすら感じていた。

同じ血が流れている兄弟なのに、こんなにも違うライルとロックオン……その違いを理解し、区別しながら、アニューは再び、ロックオンの言葉を待つ。ライルと違う彼とは、分かり合えないことを知りながら。

「……オレは、次の戦闘で何が何でもサーシェスと一対一で戦うつもりだ。だが、サーシェスは聖王教会随一の戦闘能力を持つ男……正直言って、生きて帰ってこられるかどうか、自信がねぇ……アイツの戦闘技術は、あの刹那をも上回っているからな。だから、もしオレが次の戦闘でサーシェスと相打ちになったら、その時は……アイツを、オレの様な復讐者には……」

「……はい、分かりました」

その先の言葉は、言わずとも分かった。だから、途中で遮(さえぎ)った。それだけがアニューにできる、精一杯の「励まし」だと思ったから。

「……ありがとうな、アニュー」
「いえ、そんな……絶対に戻ってきて下さいね、ロックオンさん？」
「あぁ、そうだな……弟を天涯孤独にしない為にも、ここに戻ってくるさ……絶対に、な」

そう言ったロックオンの顔には、何時もの笑みが戻っていた。その笑みに安心したのか、アニューも笑みをクスクスと漏らした。和気藹々とした空気が、その場に流れる。……ロックオンとアニューはその後、敵の接近を伝えるアラートを聞き、出撃の最終準備をしに、各々の格納庫へと向かっていった。展望室から出た直後に左右に別れた二人は、それぞれの道を歩むかのように無重力の中を進んでいく。その途中で、アニューはロックオンの背中を一度、チラリと見て、強く願った。彼が戦場から帰ってきますように、ライルが悲しみませんようにと。

……しかし、彼はそのまま、戦場から戻ってはこなかった。そして、ライルの悲しい叫びが、今でもアニューの脳裏で虚しく鳴り響いている。決して消えること無く、ずっとずっと……それはアニューの耳の中で鳴り響く。

願いは、祈りは……神のいないこの世界では、あまりにも無力であることを、アニューはその時になって、初めて理解することができた。

――新暦７５年１２月１１日――

「……」
「……」

二人の男女は、身に何も纏わずに、一つのベッドの上で絡まり合っていた。それは世間で言う所のラヴ（情事）・アフェアを終えた後の光景であったが、二人はとても幸せそうに笑い合って、見つめ合っていた。それだけでこの二人が、どれだけお互いの事を想い合っているのかが分かるだろう。

「ねぇ、ライル……ケルディムの修理は終わったの？」
「あぁ、完璧さ。やっぱおっちゃんの整備は信頼できるぜ」
「……そう。良かったわね、ライル」
「……？　あ、あぁ……」

白い肌を布団から肌蹴（はだけ）させた女性が、男性の茶色い癖っ毛を優しく撫でた。男性の癖っ毛は相当癖が強いのか、何度撫でてもすぐに元に戻ってしまう。だが、女性はそれを厭（いと）わずに、寧ろ慈悲深げな表情で見つめたまま、何度も何度も、男性の髪を愛しそうに撫でつけた。その行為を何処となく――本当に何処となく、別れの仕草のように感じた男性、二代目の「ロックオン・ストラトス」であるライル・ディランディは、輝く赤を湛（たた）えた瞳を持つアニュー・リターナーを、その腕（かいな）で強く、強く抱きこんだ。誰にも渡さないと、何処

にも行かせまいと、そう主張するかのように。

「ら、ライル……苦しいわ」

「わ、わりぃ……だけど、何となくアニューがどっかに行っちまいそうな気がしたんだ。それに耐えられなくて、つい……」

「……大丈夫よ、ライル。私は何処にも行かないわ。だから、安心してちょうだい？」

「……あ、あぁ、そうだな。そうだよな……アニュー、愛してるぜ」

「私もよ、ライル」

腕を解いたライルは、アニューの微笑みを見て安心したのか、アニューの手を握ったまま、すぐに寝入ってしまった。その寝顔を微笑みながら見詰めていたアニューは……しかし、次の瞬間には、その眉を酷く、酷く苦しそうに歪めた。

「……ライル、本当に愛しているわ……例え、離れ離れになろうとも、私は……」

アニューはライルの腕に自身の両腕を絡ませながら、とても辛そうにその言葉を発した。美白で美形のおぱ～いがぷるる～んとマシュマロのように柔らかく形を崩す。そしてアニューはライルの腕に寄りかかり、彼を先代のロックオンのような復讐者にしてしまったことを悔いながら、自身もまた、眠りの底へと堕ちていった。

次に目を覚ませば、底（其処）は地獄になるのだと知りつつも……彼女は最後まで、ライルと分かり合っていたいと、そう願っていた。

ブリング・スタビティは無機質な自室の中で独り、目を閉じて黙想をしていた。その脳裏に思い浮かぶは、1年前の「マリアージュ」事件、その被害者にして犠牲者、そして元凶であった少女の姿……少女の顔は、何モノかを恐れているかのように歪み、その瞳も、恐怖という感情をブリングに訴えていた。

「……イクス、ヴェリア。古代ベルカの、冥王だった少女……だが、彼女は幼く、また、非力でもあり、そして、何よりも……」

ブリングが思い描く、イクスヴェリアという夕陽のような髪をした少女の濃緑の瞳には、透明な涙が溢れ返っていた。ぽろぽろぽろぽろと、美しい軌跡を描きながら、少女の涙がいくつも燃え落つる海底遺跡の床に零れ落ち、すぐさま蒸発していく。その綺麗な雫の一つ一つが、透明な結晶のようであり、同時に、ブリングの心を動かして止まない宝石でもあった。

「……何よりも、平和を望んでいた少女であった」

イクスヴェリア。其は古代ベルカ時代に実存していた邪知暴虐の王にして、「冥府の炎王」として畏れられた古代ベルカの王の一人であると、「アーカイブ」はそう語っていた。しかし、実際の彼女は平和を愛する、一人の少女……「マリアージュ」を生みだすとい

う能力以外は、普通の少女と何ら変わらない唯の少女であったことを、ブリングは知っている。……知ってしまった。

「……そんな少女を殺す必要が、あったのか？　……ここまで人を殺さなければならぬ道理など、存在するのだろうか？　……俺は、余計な殺戮（さつりく）など、したくはないというのに……！」

そう、知ってしまったのだ。少女の悲しみを、涙の意味を。だから、彼は止めようと考えた。ただの少女すら容赦なく殺す、本当の「悪鬼」へと成り下がった「ＣＢ」、その横暴的（おうぼうてき）な行いを。例え天上人から離反し、後ろ指を指されようとも構わずに、ブリングは彼自身の、彼だけの意思でそう思い、行動を起こそうとしていた。

「……行くか」

ブリングは黙想を止め、薄く目を見開くと、ひっそりと静まり返った暗闇の部屋をもう一度、もう一度だけ見渡した。もう二度と、ここに来ることはないだろうなと、そう思いながら……彼は一歩、足を前に踏み出した。

想いだけでも、力だけでも……世界は、変えられない。それを理解しつつブリングは、彼の愛機たるガラッゾを手にし、「ラグランジュ１」のブリーフィングルームへと、おもむろに歩いていった。その先に待つ地獄を、覚悟しながら……。

方々に伸びる濃い紫色の髪。その先端を弄り回しながら、リジェネ・レジェッタは鼻歌まじりに「ラグランジュ1」の通路を歩いていた。コツコツコツコツと、乾いた靴音が通路内に奏でられる。ノンフレームの眼鏡が照明の光を受けてキラキラと輝き、リジェネの楽しそうな表情を明るく照らす。例えその表情が、仄暗い欲望から成るモノだとしても。

「ふふふふ……そうだね。アニューには「アーカイブ」の正体を暴け出して欲しいから、管理局だとして……ブリングはやっぱり、「マリアージュ事件」の事を考えると、聖王教会かな？　だとすれば、僕は……「Ａ－ＬＡＷＳ」か」

リジェネは何かを呟いていたが、それを聞きとるモノは、誰もいなかった。イノベイドたる彼は、「ヴェーダ」によって監視されていないのだ。それを分かっているからこそ、リジェネはこうやって、気軽に独り言を呟くことができる。もし「ヴェーダ」による監視を受けていたら、普通の会話ですら気を遣わなくてはならなくなり、とてもではないが、彼による『計画』に甚大な支障をきたしていただろう。

「まあ、「灰被り（シンデレラ）の福音」や『エンデ』の「オルレアン・ナイツ」を傘下に加えたらしいから、戦力はかなり上がったみたいだけど……問題は、「ラヴクラフト」」

そう、彼の『計画』。イオリア・シュヘンベルグの『計画』ではなく、リジェネ・レジェッタによる『計画』。

「アニューがどれだけ早く「アーカイブ」を見つけ出せたとしても、最低一カ月か二ヶ月はかかるだろうね……その間、こっちの作戦が筒抜けっていうのはさすがに……」

リジェネは疑問に思っていた。本当にこのままでいいのかと。僕達はただ、人類を掃滅しているだけではないのかと……常々、笑顔という仮面を顔に張り付けながら、ずっとそう考えていた。それは四年前の戦争で、「ＣＢ」が管理局に敗北した時から思っていたことだった。

「でも、「ラヴクラフト」の資本だってバカにならないし……隠し財産とかも一切不明で、総額がどのくらいかなんて見当も付けられないみたいだし……でも、王留美（ワン・リューミン）ですら管理局に尻尾を掴まれて、そのまま捕まっちゃったんだから、何時かは捕まりそうなものだけど……さて、どうだろうね？」

かつての「ＣＢ」が多大な犠牲を払ったのにも関わらず、世界は結局、何も変わりなどはしなかった。それがリジェネに、「ＣＢ」の行いに対する正当性を見失わせてしまったのだ。「ＣＢ」の行いは無意味なのでは、世界を変革させるには、「ＣＢ」の行いでは駄目なのではないかと……リジェネはそう考え、確信するまでに至ってしまっていた。

「ふふふ……できればティエリアと一緒に僕の『計画』を行いたい所だけど、彼はイオリアの『計画』に心酔しているから、きっと無理だろうね。……でも、やっぱり一緒にやりたいなぁ……」

自分で造った『計画』に胸を躍らせながら、リジェネは独り、寂しげに笑った。自分の本当の兄弟とも言えるティエリア・アーデ。

しかし、彼はリジェネの『計画』などには絶対に賛成しないだろう。寧ろ、率先としてリジェネたちを討ちにやってくるはずだ。彼と刹那・F・セイエイは裏切り者を抹殺する役目も負っているのだから。

そして、その為の力も、機能も……彼らは備えている。実体剣、GNフィールド、トライアル・システム……どれもこれもが、対「ガンダム」戦を意識して開発された兵装ばかりである。そして、彼らはそのどれをも使いこなし、相手に対して容赦などという甘い事はしないだろう。

「……ふ～ふふ、ふ～ふふ……」

自分を討ちにやってくるであろうティエリアの事を想い、リジェネは、自分でも把握し切れない程の大きな喪失感を感じた。それを誤魔化そうと、抑えつけようとして鼻歌を口ずさんだが、その喪失感は一向に消えることなく、リジェネの心を真綿で締めつけてくる。

「ふ～ふふ……ふ～ふふ……」

しかし、その柔らかな痛みに耐えながら、リジェネは「ラグランジュ1」の通路の奥へと歩き続けた。鼻歌が刻むリズムだけが、通路内に響き渡る。そして、その残響が消えると同時に、白い衣装を着たリジェネの姿もまた、幻のように、霞みの様に消えていった……。

その事は、ヴェーダですら知り得ぬ事で……また、イオリアですら想定していなかった事態である事を、この時までは誰も、そう、誰も……知り得なかった。

「……おや？　珍しいね、ティエリア・アーデ。どうして君がこんな所にいるんだい？」
「……リボンズ・アルマークか。僕がここにいて、何か不都合なことでもあるのか？」

リジェネがいた「ラグランジュ１」、その奥の奥にある格納庫で、ティエリア・アーデは目の前に置かれているモノ――『００』を真の意味で完成させる為に必要な機構を組み込まれた、フルサイズアウトフレーム式ＧＮコンデンサー駆動型ＧＮデバイス「Ｏライザー」をジッと、ジィイイイイッと、穴が空きそうになるほど凝視していた。

その奇異な姿に声をかけずにはいられなかった、実は意外と仲間を大切にするリボンズ・アルマークは、ティエリアの不機嫌そうな視線を軽く受け流しながら、その横の手摺（てすり）へと体を預けた。そして、自身もまた「Ｏライザー」へと視線を向ける。

「……完成したのかい？　そんな報告は受け取ってないけど……」
「いや、まだ完成はしていないらしい。どうやら同調システムの方に不具合があるらしく……イアンが言うには、「何時爆発してもおかしくはない」らしい」
「……へ、へぇ、そうなんだ。……所で、ティエリア？　僕は急用

を思い出してしまったよ。だから、その手を離さないかッ！？」
「離すものかッ！　ミレイナに見張りを頼まれた僕が、一体どれだけの恐怖で「Ｏライザー」を見ていたと思う！？　貴様も味わうべきだ！　そうだろう、リボンズ・アルマークッ！？」

　目の前にある時計の形をした待機状態の「Ｏライザー」が、実は爆弾のような物だと知って、リボンズの目に明らかな怯えが浮かんだ。しかし、ティエリアはそんなリボンズの様子を知った上で、彼の腕を掴んで離さなかった。リボンズの腕から軋む音が聞こえてきたが、ティエリアはそれでも握る力を微塵たりとも緩めなかった。……ティエリアも相当、「Ｏライザー」の事が恐かったらしい。良く見ればその目には、涙が滲み始めていた。

「同類を道連れにしようだなんて……それでも最高のイノベイドかッ、ティエリア・アーデッ！？」
「目の前の爆弾一つに怯えるとは……それでも最強のイノベイドかッ、リボンズ・アルマークッ！？」

　互いが互いを罵り合いながらも、その目は「Ｏライザー」を捉えて離さなかった。今こうしている瞬間にも爆発しそうなソレは、異様な重圧を発しながら、二人を壁際へと追い込んでいく。ジリジリ、ジリジリ。嫌な汗が二人の顎を伝っていき、床下へと零れ落ちる。

　プシュウン。

「……一体何をしとるんだ、ティエリア、リボンズ？」
「きっとあなたの冗談を真に受けちゃったんですよ」
「いやいや、リンダ。さすがにそれは……どうした、リンダ？」
「……いえ、またシアが暴れ始めたらしいの。ですので、私は一端戻ります。……あなた、くれぐれもバランサーとシステムのプログ

ラムには……」
「分かっとる分かっとる。細心の注意を払うから、安心せい。……それで？　二人は何をしとるんだ？」
「「……」」

Oライザーを挟んだ向こう側のドアが横にスライドし、イアン・ヴァスティとその妻、リンダ・ヴァスティが格納庫に足を踏み入れると（リンダはすぐに引き返したが）、重い沈黙がその場にストンと落ちてきた……そして、その後の喧騒（けんそう）はまるで地獄のようであったと、イアンは後に語る。

ちなみに。シアの暴走はリンダが強制シャットダウンで抑え込んだ。リンダが言うには、今日も今日とて、シアはヤンドルだった……らしい。

【いつだって、私達は本当に自分がやりたい事なんて分からない。
いつだって、私達は自分がやっている事が正しいかなんて分からない。

だけど、神様が来てくれた】

――鴨川秘様から、『イスカリオテ』の獣より

第５４話　Ｂｅｔｒａｙｅｒｓ　ｈａｓ　ａ　ｐａｉｎ（後書き）

『女狐を駆逐します女狐を駆逐します女狐を駆逐します女狐を駆逐します女狐を駆逐します女狐を駆逐します女狐を駆逐します女狐を駆逐します……エクシア、女狐を駆逐しまぁあああああすッ！！』

『どういうことですか、これはッ！？　Ｏガンダムのみならず、Ｏライザーとかいう新たなＧＮデバイスまでもが女性型の管制人格として『００』に組み込まれるなんて……エクシアは、エクシアは聞いていませんよッ！？』

『これでは、マイスターとエクシアの、うふふできゃっきゃな未来を切り開けないじゃありませんかッ！？　Ｏガンダムを無きものにしようと、十一ものプランを熟考の上に熟考し、練りに練ったというのに……これでは台無しです！』

『一体、この鬱憤を誰にぶつければ……さすがにリンダにはぶつけられないですし、イアンは……確か最近、Ｏライザーのおかげで六徹ぐらいしていると言っていましたね？　……イィイイアァアアアアンッ！？』

『……しかし、冷静に考えましたら、イアンはリンダの旦那様……つまりは夫ということになりますね分かります。駆逐などしたら、リンダが悲しむでしょう。……命拾いしましたね、イアン？』

『……それはそうと。ミス・スメラギとリンダ、それにミレイナが、何だか凄く興奮した様子で雑談をしていましたが、アレは一体、何だったのでしょうか？　……マイスターの為を思って憶えた読唇術なら、先程までの映像を見ながら、会話の内容を読み取れるでしょ

うか？』

『……』

『……なん、だと？』

『……12月24日に行われるトレディア・グラーゼ主催の「イブ・パーティー」に、マイスターとティエリア・アーデが二人っきりで参加？』

『……し、しかもッ！？　ティエリア・アーデは女装をしてだくぁwせｄｒｆｔｇｙふじこｌｐッ！？』

『……そ、そうですか。ティエリアが、じょせいとしてまいすたーと……うふふふ、あははは！　そう、ですか……そう、なんですかッ……！』

『……どうしてやりましょうかこんちくしょうめがぁあああああああああッ！！！！』

『こうなれば、形振（なりふ）りは構っていられません！　今すぐにでもインストールで実体化し、ティエリア・アーデを亡きモノに……って、リンダ？　どうしてここはほけきょッ！？』

――強制シャットダウンされたシアの心の内より、抜粋

第55話　The world is excited（前書き）

【貴方は私が裏切ったと言う、なら貴方は私を裏切っていないのか？】

――ココロンK様より

第５５話　Ｔｈｅ　ｗｏｒｌｄ　ｉｓ　ｅｘｃｉｔｅｄ

――新暦７５年１２月１２日――

この日、世界は激動した。

その波から――変革の兆しから逃れることは、時空管理局や聖王教会、そして「Ａ－ＬＡＷＳ」でさえも不可能な事であった。

管理局が誇る次元世界最大のデータベース、「無限書庫」から発表された、「ＣＢ」についての機密情報。四年前の事件の真相と、「ガンダム」が実はロストロギアではなく、デバイスであり、またその動力源には「Ｇドライヴ」という未知の技術が使われているということが、この日、次元世界中に知れ渡った。

また、聖王教会の一部の枢機卿（すうききょう）や大司祭らが「カリフ」にかけ合うこと無く宣布（せんぷ）した、「聖王復活」の号令。それは最高指導者たる「カリフ」の反対により沈静されたとはいえ、人々の脳裏に聖王の存在を刻む事に成功する。

最後に、世界清浄の生まれ変わりとされる「灰被（シンデレラ）りの福音」と、世界清浄の大幹部であった『エンデ』率いる「オルレアン・ナイツ」を傘下に加えた「Ａ－ＬＡＷＳ」は、自分達を「管理世界や「ＣＢ」から管理外世界を護る独立治安維持部隊」だと宣言し、明確に管理局や聖王教会、「ＣＢ」に敵対する意思を、再び世界に示した。

これら三つの情報が世界中に駆け巡ると、まず勢い付いたのが反管理局組織であった。彼らはかつての世界清浄が復活したのだと勘違いし、次々に「Ａ－ＬＡＷＳ」へ加入していったのだ。無論、管理局や聖王教会がそれを看過できるはずもなく、逐次(ちくじ)戦力を反管理局組織へと送り込んでいった。幾ら集まろうが、所詮は烏合(うごう)の衆で、質も量も揃えられない組織ばかり……殲滅(せんめつ)することなど容易いと、そう信じて疑わず。

だが、その予想は裏切られることとなる。……いや、ある意味では予想通りなのだが。その殲滅戦にも「ＣＢ」お得意の武力介入が行われたのだ。それも、「Ａ－ＬＡＷＳ」と「聖王教会」、「時空管理局」の三大組織が集まったその戦闘に。

そして、その戦闘では常の如く、予期せぬこと……誰もが本当に予期できない事が起きるのであった……。

――新暦７５年１２月１４日――

「このぉおおおおッ！！」「死ね死ね死ね死ねぇえええええッ！！」
「くたばりやがれぇえええええッ！！」

「うぉおおおおおッ！！」「おらおらおらおらぁあああああッ！！」
「早く終われやぁあああああッ！！」

第３２管理世界のとある荒原は、十色の魔力弾が飛び交う凄惨（せいさん）な戦場と化していた。ＡＡＡランク以上のランク保有者を五人も投入した管理局と聖王教会の混成部隊は、第３２管理世界に集結したテロ組織――今や一大勢力となった「Ａ－ＬＡＷＳ」を殲滅する為に、各々の魔力光に輝く非殺傷魔法を次から次へと放っていた。対して、「Ａ－ＬＡＷＳ」もまたやれれっぱなしではなく、こちらは質量兵器や太陽光をもエネルギーとする改良型のＭ．Ｓまでをも使いながら、管理局と聖王教会の混成部隊に抗戦していた。

そして、「Ａ－ＬＡＷＳ」の部隊の中には、世界清浄の四大幹部の一人であった『エンデ』率いる「オルレアン・ナイツ」。また、「灰被り（シンデレラ）の福音」の幹部であった『剣客』ザ・サムライ。それに、最強のＭ．Ｓとして名高いフラッグカスタムのプラズマソードの柄部（ド）を握るヒュドラ＝Ｔ＝Ｈの姿があった。

「……」
「ふむ、此方が劣勢か……無理もない。此方には優秀な戦術予報士が一人もいないのだからな」
「……それに、向こうにはＡＡＡランク以上の魔導師が五人もいる。……こちらは私とジャンヌ、そして貴女だけ」
「……（コク）」
「むうぅ……まだ戦ってはならんのか、ヒュドラよ？　そろそろ我慢の限界なのだが……」
「……そこは我慢して、サムライさん。……向こうの主力が出てくるまで」

うっす～いおぱ～い部、袖口（そでぐち）、腰回りに大量のフリルが付いた白いドレスを見事なまでに着こなす真っ白な美少女、『エンデ』ことジャンヌ。本来あるべき双丘が見当たらない、桜の花びらがあしらわれた巫女衣装を着、腰には二刀のアームドデバイス「村雨」「村正」を差し入れたバトルジャンキーのザ・サムライ。どこまでも黒い特殊なピッチピチスーツを着て、起伏がないスリム&流麗な肢体（したい）を惜しげもなく露わにしているヒュドラ＝Ｔ＝Ｈ。その「のぱ～い（ノー・オパ～）ズ（イズ）」たちは戦場から遠く離れた作戦本部にて、戦闘の推移を逐一（ちくいち）確認し、新たな指示を矢継ぎ早に出していた。

しかし、彼らの本分は戦闘にこそあるのであって、作戦を出す司令官的な戦術予報など、彼らには到底、務まるはずもなかった。現に、「Ａ－ＬＡＷＳ」の部隊は混成部隊に何度も裏をかかれ、少なくない戦力をごっそりと削られている。

本来ならば、この時点で作戦立案者を変えるべきなのだろう。しかし、そうはできない事情が彼らにはあった。

畢竟（ひっきょう）、まだ烏合の衆にしか過ぎない彼らをまとめるには、「オルレアン・ナイツ」、「灰被り（シンデレラ）の福音」、元々の「Ａ－ＬＡＷＳ」、それぞれを代表するような人物たちを上に据（す）えるしかなかったのである。そして、それだけの人物であるこの三人以外では、部隊をまとめることすらできなかったのだ。

「……」

「しかしだな、ヒュドラ？　もうこちらの戦力は予備も含めて、全て動員されているぞ？　これ以上はさすがに我慢し切れないと思うのだが……」

「……それも一理ありますが、しかし、まだ彼らも現れていないのに、貴重なオーバーＳである貴方を動かす事は……」

「……（コク）」
「……あい分かった。もう少しだけ我慢しよう。奴らと、「ガンダム」らと戦う為にもな……！」
「……お願い」

最も、この現状はそう長くは続かないだろう。何故なら、彼らは今、「戦争」をしているのだ。さすれば当然、彼らがやってくるはずだ。ジャンヌもサムライも、そしてヒュドラまでもが、必ずやってくるであろう彼らの到来を心待ちにし、虎視眈々（こしたんたん）とその時を待っていた。

彼ら――武力を掲げる天使が集まりし「ＣＢ」が介入するのは何時か。それはまだ、誰にも分からない。

所変わり、管理局と聖王教会による混成部隊と、「Ａ－ＬＡＷＳ」の部隊が戦闘している場所から未だ遠く離れた空。その蒼々（そうそう）たる空域には、赤っぽい粒子と蒼碧の粒子を噴き出す何モノかが三つほど飛翔していた。

『お～お～、壮観だね～。これだけの勢力がぶつかるなんざ、初めてじゃないのか？』

『……俺（オレ）には分からんぞ、ロックオン・ストラトス』
『管理局に教会、それに「Ａ－ＬＡＷＳ」、「オルレアン・ナイツ」、「灰被り（シンデレラ）の福音」……二つに別れてはいるけど、コレ、実質は五つつの勢力ね。それだけの勢力がこれだけ大規模な戦闘を行うなんて……新暦になってからは初めてな筈よ、ライル』
『おっと。アニュー、今は戦闘中だぜ？　オレも本名で呼ばれたいところだが、今はコードネームで呼んでくれ』
『……それがいい』
『……分かったわ。ごめんなさい、ロックオン』
『ハハッ、いいってことよ』
『『……』』

その三つ――「ＣＢ」が誇る「ガンダム」たちは、並列に飛びながら雲を切り裂き、そろそろ目下に迫ってきた戦場へと介入する為に、降下を始めた。緑色の「ガンダム」、通称「三つ目」のケルディムは、頭部の額部にあるガンカメラを開眼させ、右肩のＧＮスナイパーライフルを両手で構えた。紫を基調とする「角持ち」ことガラッゾもそれに倣（なら）い、ＧＮビームクローを両指十本、その全てに発生させる。水色の「牙持ち」ガッデスも傍の両機と同じようにして、銀色に輝くＧＮヒートサーベルを右手に力強く握り締めた。……まるで、何かに耐えるように。

『そんじゃあ、行きますか！』
『……あぁ！』
『……ええ！』

そして、ケルディムの掛け声を合図にして、「ガンダム」たちが眼下の戦争へと……

『ッ！？　高エネルギー体、急速接近！　直撃するぞ、マイスター

！』

『何ッ！？　ＨＡＲＯ！』

『シールドビットテンカイ、シールドビットテンカイ！』

それはあまりにも唐突に現れた。黒い長銃を構えたケルディムへと迫る、数メートルもの太さの赤橙色の極光。その禍々しい光の奔流は、ケルディムの眼前に構築された緑の盾――フロントアーマーや膝部、左肩などに装着されていた縦長のシールドビットの集合体――によってその進撃を阻まれるが、シールドビットの枚数を九枚から五枚にまで減らすことには成功した。

シールドビットをも溶解させた赤橙色の極光は、それはもう、凄まじい威力であった。四枚もあれば、ＡＡＡランクの砲撃ですら完璧に防げると云われるケルディムのシールドビット。それを僅か数秒で溶かし、貫通するまでに至ったのだから。

だが、ここで特筆すべきは砲撃の色、赤橙色についてである。少なくとも、ＡＩの「ＣＨＥＲＵＤＩＭ」やガンダムマイスターであるロックオン・ストラトスには、その色に見覚えがあった。

『なっ、これは……ガデッサのＧＮメガランチャーだとッ！？　一体、どうして此方に砲撃をッ！？』

『クッ……どういうことだ、ケルディム！　まさかこれもミッションの一つじゃねえだろうなッ！？』

『私にも分からない！　分からないのだ、マイスター！』

赤橙色。その色は確かに疑似ＧＮドライヴから生成される疑似ＧＮ粒子の色であった。そして、ケルディムが砲撃元を索敵した結果、砲撃を放ったであろう位置には黒銀のガデッサが、ガデッサの体ほどもありそうなＧＮメガランチャーを構え、そこに滞空していた。

また、ＧＮメガランチャーの照準は間違いようもなくケルディムをロックしており、未だ余熱冷め切らぬ砲口を、ケルディムへと向けていた。

黒銀のガデッサ。それはリジェネ・レジェッタの機体であり、彼の専用機でもある。それがケルディムへと砲撃を敢行（かんこう）した……その事実に、ロックオンも、ケルディムも思考が追い付かず、ポッカリと、意識の中に空白を生みだしてしまった。普段ならば絶対に見せない様な隙を、その時、ケルディムはつい、晒してしまったのだ。

そして、その隙を付かないライセンサーは、その場にはいなかった。

『クソッ！　……アニュー、ブリング！　お前達は何か知って……！？』

『……すまん、ロックオン・ストラトス』

『……ごめんね、ライル』

ガギャギャギャアアアンッ！！

いくつもの打楽器を同時に打ち鳴らしたような金属音を、ケルディムのセンサーが現実感なく捉えた。その音は、ガラッゾのＧＮビームクローがケルディムの左腕、左足を？ぎ取（も）った音であり、また、ガッデスのＧＮヒートサーベルによって、バックパックを斬り裂かれた音でもあった。ロックオンとケルディムは自身が中破させられた光景を、何処か夢現のように思いながら、ただ黙って見ることしかできない。できなかった。ＧＮスナイパーライフル？のトリガーを引く暇もなく、思考もまだ現実に追い付いていない二人は、ただ……困惑することしかできない。できなかった。

『『……は？』』

茫然と、ただ茫然と。ケルディムが蒼々たる空から黒々とした地表へと墜ちていった。ズズン……上空数百メートルから地表へと落下した衝撃で、ケルディムの機体がさらに大破する。弾け飛ぶ装甲、ひび割れるガンカメラ、砲身が折れ曲がるＧＮスナイパーライフル？……結果を見るまでもなく、ケルディムは戦闘不能へと追いやられてしまう。

しかし、そんな事は……今のロックオンとケルディムには、些細な問題である。些細な問題でしかない。目下の最優先事項は、自身を無窮の空から見降ろす三機の「ガンダム」――リジェネとブリング、そしてアニューの真意を問う事なのだから。

『……どういうつもりだッ！？　リジェネッ、ブリングッ！？　それに……アニューッ！？』

『まさか……裏切ると言うのですか、「ＣＢ」をッ！？』

地に堕ちたケルディムが、天に浮かぶ三機へと、火花を散らす右手を伸ばした。すぐ傍にあるＧＮスナイパーライフル？には目もくれず、ケルディムはひたすらに救いを、無実を希う。だが、それに返されるは、右手を斬り落とすガッデスのＧＮビームサーベルファング。

『そうだよ。僕達はもう、「ＣＢ」の悪行には耐えられない』

『……「ＣＢ」を止める為に、オレ達はそれぞれの道を往く』

『それが、私達の出した答え……「ＣＢ」は世界に憎しみを振り撒き過ぎたのよ、ライル』

リジェネは苦笑し、ブリングは苦悶し、アニューは苦悩する。だ

が、その感情は鋼鉄の仮面――ガンダムフェイスに遮(さえぎ)られ、ロックオンの目に映ることはなかった。何処まで行っても平行線な、盛大な擦(す)れ違い。それにすら気付けずに、ケルディムはほぼ達磨(だるま)となった機体で、黒い土の上を這(は)い、その蒼碧色のデュアル・アイで、三機を射抜いた。これが何を齎すのか、これで何が起こるのか……それを分からせるかのように、ケルディムはモゾモゾと、蚕(かいこ)のように土の上を這いずった。それが裏切りの代償だと、何時かはこうなるのだと……そうとでも言う様に。

『……アニュー、どうしてお前まで……！』

『……ライル。私は例え「ＣＢ」の一員じゃなくなったとしても、貴方の事をずっとずっと……』

……愛しています。

ジャンヌ、サムライ、ヒュドラのいる作戦本部は、先程までの敗色濃厚な雰囲気とは打って変わって、けたたましい喧騒に包みこまれていた。それもその筈。ある意味管理局以上の仇敵・憎敵たる「ＣＢ」、その一員が組織を「裏切り(Betrayer)」、この「Ａ－ＬＡＷＳ」へと協力を申し出たのだから、その喧騒は当然の反応だった。

「……」

「……なんだ、これは？　これは本当に……現実、なのか？」

「……現実、なのでしょう。……信じられませんが」

「……（コク）」

三人の目の前には、この喧騒の元凶ともいえる存在――黒銀のガラッゾをインストールしたままのリジェネ・レジェッタが、差し出された椅子にガラッゾのまま座っていた。そして器用に鳥の足みたいな脚を組んで、生の音声を周囲に発していた。……もし二日前の無限書庫からの発表がなければ、これだけの仕草で、これ以上の混乱が沸き起こった事だろう。そういう点では、無限書庫からの発表はタイミングが良かったと言える。

「ふふ～ふ……さてっと、何から話せばいいのかな？」

言葉の途中途中に鼻歌を挟む、上機嫌そうなガラッゾ。その黒銀の装甲がリズムを取る為に上下に揺れるだけで、周囲の警戒度は急上昇するが、そんなこと、ガラッゾには何の関係もないことである。ちなみに、さらに言えば、例え周りをデバイス、質量兵器、Ｍ・Ｓで武装した「Ａ－ＬＡＷＳ」の集団に囲まれていようとも、そんな小さなこと、このガラッゾには関係のないことである。そんな物で傷付くモノでないことは、ガラッゾ、のみならず、周囲の人間たちも分かっているのだから。

いや、傷を付けられるモノは、この場に三人ほどはいた。ＡＡＡランクにまで力を取り戻したヒュドラ、レアスキル『竜殺』により、竜種にも負けない超魔力（Ｓ＋クラス）を手に入れたサムライ、そして……四年前の悪夢（せんそう）で、二機もの「エックス」を独力のみで退けた実力者、ジャンヌ。

ジャンヌはランクこそ持っていないものの、その強力なレアスキルにより、管理局からはオーバーSランク魔導師と同等に扱われている重罪人であった。起こした罪の数は数え切ることができず、また刑を執行しようとしたら、あまりにも莫大な罪の数々により、計算することが……そういった類の「噂」が執務官や捜査官たちの間に消えること無く蔓延するほど、その13、4ほどの少女は、何もかもが一切、情報が不明なのであった。

その三人の、敵意漲る目を正面から見つめ返しながら、リジェネはまず、ガラッゾのインストールを解いた。ガラッゾを構成する疑似GN粒子と、リジェネの生体情報を含んだ疑似GN粒子とが、疑似GNドライヴを介して交換され、鋼鉄の体が生身の体に入れ替わっていく。そのインストールの過程を見ていた人々は、その奇怪な――デバイスでもM・Sでも起きえない――現象を、半ば放心したまま、見つめる他ない。

「まずは自己紹介をするよ。僕の名前はリジェネ・レジェッタ……「CB」のライセンサーさ」

完全に生身へと戻ったリジェネは、薄暗い照明の中でも分かるほど妖艶に微笑みながら、「ヴェーダ」のレベル7領域の情報――ライセンサーたる彼自身の名前を、あっけらかんと惜しみなく公開した。

『クソッ、一体何がどうなっているんだい、これはッ！？』
『……分からない、分からないが……途轍（とてつ）もなく嫌な予感がする！急ぐぞ、リボンズ・アルマーク！』
『君に言われなくても！』

第３２管理世界の衛星軌道上を航行していたプトレマイオス？。その折り畳み式のカタパルト・デッキから、純白の１（アイ）ガンダムと白亜のセラヴィーが勢いよく飛び出した。その二機は各々のＧＮ粒子を前面に集中させると、第３２管理世界の大気圏へと突入していった。

『……しかし、ロックオンが救援信号を発したかと思えば、今度はリジェネ、ブリング、アニューの信号が途絶えるなんて……一体、何が起こったんだ？』
『……それに、ガデッサ、ガラッゾ、ガッデスが「ヴェーダ」とのリンクを切ったのも気になるね。何が起これればそんな事態が起こるんだか……僕には想像できないよ』

異変が起きたのは、つい先程の事である。第３２管理世界で起こった三大組織による大規模な戦闘に介入するため、ロックオン、アニュー、ブリング、リジェネを第３２管理世界へと送り届けたプトレマイオス？に、突如、ロックオンからの救援信号が届いたのだ。しかも、異変はそれだけでなく、映像モニターの故障、通信の遮断、機体の反応ロストｅｔｃ……他にも様々な事が起こっていた。

それらの異変によって、第３２管理世界に送り込んだ四機と全く連絡が取れなくなったプトレマイオス？。だが、その時はまだ慌て

てはいなかった。それは「ヴェーダ」とのリンクが繋がっていた事で、機体がまだ存続していたことだけは確かだったからだ。しかし、そのリンクも切れた今……プトレマイオス？に乗るクルー達は、とある可能性を考慮しなくてはならなくなった。

即ち……撃墜の可能性を。

『……ケルディムを発見した！　かなり大破しているようだが、撃破はされていないようだ！』

『でも……他の三機は見当たらないね？　ここにはいないのかな？』

『そうのようだ。……どうやらロックオンは気絶しているらしい。ＨＡＲＯもケルディムも、機体の損傷が激しいせいか、応答がない。……ここは一度、トレミーに戻るべきか？』

『……そうした方がいいみたいだね。此方に向かってくる大軍もいることだし』

大破し、反応がないケルディムを脇に抱きかかえながら、セラヴィーはセファーが展開した転送ポートへと乗り込み、一路トレミーへと戻っていった。そして、１ガンダムもセラヴィーと同じように転送ポートへと乗り込み、その世界から去っていった。

……後に残ったのは、ケルディムが落下した時にできたクレーターだけであった。他の三機の痕跡（こんせき）は何も……何もありはしなかった。

第３２管理世界で起こった、未曾有の事態。だが、対応に追われるジャンヌ、サムライ、ヒュドラの苦労を知りもせずに、ロベルトとアイシスはジャック＝ザ・リッパーを護衛に付けながら、ちょうど「日本」にやってきているスクライア一族の集落へと赴いていた。集落の人間の一人に族長に会いたい旨を伝えると、すぐに会ってくれるというので、デバイスや質量兵器を一族の人間に預けながら、族長の居る一番大きなテントへと入っていくロベルトとアイシス。……リッパーは見た目がイカれ目な為、族長に会う事を拒絶されたので、仕方なくテントの外で待つ。

「初めまして、スクライア一族の長老殿。私の名前はロベルト＝コーナーと申します」
「私はアイシス……と申します。お見知りおきを」
「うむ……して、今日は何用で来たのかえ、客人達よ？」

テントの中央に坐していたのは、齢１００を超えようかという翁であった。その老人は長い白髪を後ろで一本に縛りながら、床に置いてある水煙草を深く吸い、そしてゆっくりと吐く。その吐かれた白っぽい煙を吸った、まだ１４か５ほどの少年少女であるロベルトとアイシスは、ゴホゴホと激しく咳込んでしまう。しかし、翁はその苦しそうな様子を見ても、水煙草を止めようとはしなかった。

「ゴホッゴホッ……ほ、本日は「Ａ－ＬＡＷＳ」の『大使』として、あなた方一族と契約を結ぶためにやってきました」
「これは、「Ａ－ＬＡＷＳ」の意思そのものであると考えてもらっても構いません」
「……契約とな？　まさか、ここの遺跡を調べるなとでも言うのか

？」

翁の目に警戒の色が浮かぶ。だが、ロベルトとアイシスは今までの修羅場で培ってきた営業スマイルを崩さぬまま、ニコニコと、言葉を続ける。

「いえ、そうではありません。寧ろ、ここの遺跡は好き勝手に採掘して貰って構いません。その代わりと言っては何ですが……採掘したモノの何割かを、私達にも提供して頂きませんか？」

「一割か、二割か……その程度でよろしいので」

「ほぉ……闇市場でも開くのかね？　確かに金は手に入るだろうが……それだけかえ？」

いきなり核心を突かれても、営業スマイルを崩さない二人。その顔には何の焦りもない。ロベルトは赤茶色のスーツを一回整え、アイシスも、令嬢が着るような紫のドレスを一度自分の体に合わせ直した。ついでに、肩まで伸びた茶色い髪と金髪も揃え直した。それが二人にとっての、平常心を取り戻す為の行為なのである。

「いえいえ、まさか……私達の目的は、あくまでも管理世界から管理外世界を護ることにあります。しかしながら、未だ「魔法」という力を認めようとはしない世界も少なくはなく……そんな世界の上流階層とのパイプを繋ぐ為にも、言わば貢物の様なモノが必要でして……」

「その為に、こうして交渉にやってきたのです」

「ふむ……採掘された価値あるモノを手土産にしようというのじゃな？　……まあ、別に良かろう。我らに十分な生活金を支払ってくれるのならばな」

翁のその言葉を聞いたロベルトは、顔を輝かせた。交渉が成立し

たからなのだろうが、その笑みはやはり何処か……機械的な物を感じる。それは隣りにいるアイシスも同様だったが、翁はこの少年少女が如何様な人生を送ってこうなったのか……それを想い、背筋を寒くさせた。

きっとまともな人生でないと……分かり切っていたからに。

「それは勿論、十分以上の資金を用意致しますとも。なにせ、スクライア一族と言えば、遺跡発掘においては右に出るモノはいないとまで言われる一族です。そんなスクライア一族が発掘したという事実こそが、私どもには重要なのです」

ロベルトの嬉々とした声――14ほどの少年が出せる様な声ではない――が、テントの中に朗々と響く。

「私ども「A－LAWS」は、例え以前からの「お付き合い」があるとしても、組織としてみれば若輩者（じゃくはいもの）に過ぎません。……そんな若輩者が闇市場の中で信頼を得るには、やはり、信頼のできる提供元が必要でして……」

アイシスの冷たいようでいて、その実、偽りの暖かさを含んだ艶やかな声が、テントの中にロベルトの声とともに反響する。常人ならクラッときそうな、麻薬の様な声。それを右から左へと聞き流しながら、翁は平然と、彼らの望んでいるモノを答えた。

「言わなくとも分かる。……管理局ができる遥か以前からずっと闇市場と関係があるスクライア一族のブランド力を借りようと言うのだな？　……なれば、利害は一致する。此方は其方に信頼を売り、其方は此方に資金を渡す……それでよいのだろう？」

「「はい、その通りです」」

異口同音に答えを返す二人を冷たく見下ろしながら、翁は思う。実際はそれだけでないのは明白だが、それ以上の野暮な追求はしない。これ以上は翁の領分を越えてしまうからだ。

「……（スクライア一族を通して、無限書庫……いや、司書長であるユーノともパイプを繋げようという腹か……存外、喰えん組織じゃな、「ＡＩＬＡＷＳ」は）」

次元世界に名を知られるスクライア一族。その歴史上でも類を見ない神童であったユーノ・スクライア無限書庫司書長。その能力は情報の墓場とまで言われた無限書庫を実用レベルにまで伸し上げた事からも、相当な物であることが窺える。そんな彼とのパイプを結ぶ為なら、成程、これほどの好条件を用意したことにも納得がいく。

それに、彼らも使いたくてたまらないのだろう。無限書庫という名の、次元世界最大のデータベースを。

「……ふむ、まあアイツなら何とかするだろうから、心配はいらんじゃろう」

「「……？」」

翁は一人で勝手に納得し、問題をちゃっかりとユーノになすり付けながら、水煙草をもう一度、深く深く吸った。心地良い快感が、翁の脳内にじんわりと広がっていく。

最も、目の前の少年少女は、ゴホゴホとまた咳込んでいたが。

【戦争は政治に始まり、政治で終わる】

――ＥＸＡＭ様より

第55話　The world is excited（後書き）

（これは、夢……なのか？）

（いや、きっと夢じゃねえ……現実だ）

（だが、現実だとすれば……何故だ、何故なんだ、アニューッ！？）

（どうしてお前が……「CB」を裏切るんだよ！？　オレ達は、分かり合えていたんじゃないのかよッ！？）

（それとも……それすら、オレの勘違いだったのかよッ！？）

（……どうなんだよ、アニュー？　答えてくれよ、アニュー……）

（……最後の言葉、聞き取れなかったが……アニューは何て言おうとしたんだ？　それがすげぇ気になるが……駄目だ、分からねえ）

（……教えてくれ、アニュー。オレとお前は、イノベイドと人間っつう違いを超えて、分かり合えていたのか？　それを、それだけでも……オレに教えてくれ、アニューッ！）

――ロックオン・ストラトスの、意識を失う直前の思考より、抜粋

第５６話　Ｔｈｅ　ｗｏｒｌｄ　ｔｈａｔ　ｆｌｏｗｓ（前書き）

【もはや手のほどこしようのない事態になったら、事態の成り行きにまかせるだけだ】

――つぁーる様から、ヘンリー・フォードより

第５６話　Ｔｈｅ　ｗｏｒｌｄ　ｔｈａｔ　ｆｌｏｗｓ

――新暦７５年１２月１５日――

その日、世界は流動した。

このうねりから――変革の兆しから逃れる事は、時空管理局や聖王教会、そして「Ａ－ＬＡＷＳ」、「ＣＢ」でさえも不可能な事であった。

独立治安維持部隊「Ａ－ＬＡＷＳ」へと渡った「ＣＢ」のライセンサー、リジェネ・レジェッタ。

聖王教会へと忠誠を誓う事になるライセンサー、ブリング・スタビティ。

時空管理局へと協力を約束するであろうライセンサー、アニュー・リターナー。

これら三人によって齎された「ＣＢ」の情報は、まさに驚天動地――驚く他ないモノばかりであった。既存のデバイスとはまるで異なる技術体系によって制作された「ＧＮデバイス」を始めとし、彼ら自身が人類とは異なるモノ――コールドスリープにより２００年もの時を生き延びてきたイオリア・シュヘンベルグにより創作された、人造生命体「イノベイド」――であること。その他にも、量子

演算処理システム「ヴェーダ」、ＸＶ級よりもさらに一世代上の性能を持つ汎用次元航行戦艦「プトレマイオス？」、オリジナルの太陽炉を搭載したＧＮデバイスを扱う四人のガンダムマイスター、疑似ＧＮドライヴで稼働する疑似ＧＮデバイスを扱う七人のライセンサーｅｔｃ……

それらの事実は、今や世界を三つに別ける三大組織――「ＡＷＳ」、聖王教会、時空管理局に途轍（とてつ）もない激震を齎し、世界をひっくるめての大騒ぎとなった。もし事前に無限書庫の発表がなければ、さらなる混沌が巻き起こっていた事だろう。それが世界にとって良い事なのか悪い事なのか……それを知るモノは、誰もいない。

今からおおよそ一か月前に、「ＣＢ」と激戦を繰り広げた第３２管理世界へと再び発ち、到着すると同時に本局へと逆戻りしようとする船――Ｌ級次元航行船の８番艦「アースラ」の船内では、常にない緊迫感が漂っていた。あの丸っこくなってきたと噂の、残念なおぱ～いの持ち主である我らの八神はやてですら、そのふっくらとした顔を固く引き締めたまま、目の前で拘束されている人物をただじっと、見つめる他なかった。

そんな緊迫した空気のせいか、はやての瑞々（みずみず）しい肌が露出する額

から、汗がツツゥ……と一筋、流れ落ちた。それを敢えて無視して、はやては幾重にもバインドで拘束されている女性――アニュー・リターナーへと質問を投げかけてみた。

「……とりあえず、アンタが「ＣＢ」の一員――ライセンサーとかいうイノベイド？　だっちゅうことは理解したわ」

「ありがとうございます」

アニューを警戒して、自然と体が硬くなっているはやてとは正反対に、アニューは涼しげな様子で答える。それを余裕だと思ったはやては、声にドスを利かせながら、さらに問うてみた。

「……で？　なして「ＣＢ」を裏切ったん？　アンタの話やと、向こうには恋人もおるんやろ？」

「……理由は、先程言った通りです。私はもう、「ＣＢ」の悪行にはついていけなくて、恋人であるガンダムマイスターにも、そんな行為をして欲しくなかったのです。ですから、「ＣＢ」の悪行を止める為にも、私は……」

「「ＣＢ」を裏切った……っちゅうわけやな？　ガンダムマイスターの情報だけは言えないみたいやけど……うんまあ、それがホンマやとして……なしてアンタら三人は別々の組織に渡ったん？」

はやての質問は、中々に鋭いモノであった。それは、常にユーノ・スクライアと腹の探り合いをしていたせいか、以前よりも遥かに捜査官として――同時に、部隊長としての質を上げていた。

だが、そんな質問にも、アニューは涼しげな様子を崩さぬままに答える。

「別々の組織に渡ったのは、それぞれにやるべきことがあったから

です。聖王教会へと渡ったブリング・スタビティは聖王復活を早め、「Ａ－ＬＡＷＳ」に行ったリジェネ・レジェッタは「Ａ－ＬＡＷＳ」の戦力を底上げし、そして私が……この時空管理局に潜む「アーカイブ」を探し出す。それが、私達が三つの組織に渡った理由です」

「……聖王復活を早めるっつうことは、ヴィヴィオをまた戦場に駆り出すっちゅうことかいな？　そないなこと、うちらが許すとでも……」

アニューを見据えながら、はやては自身の憶測が当たったことを、残念な気持ちで受け止めた。しかし、予想が当たっていたとはいえ、どうしてそんなことをしなければならないのか……それだけが唯一、はやてにも分からなかった。

その理解できない所を説明しようとしたその時、アニューは初めて秀麗（しゅうれい）な眉を苦しそうに歪めた。まるで、これから語ることは、悲痛な事以外の何物でもないと……そう言いたげに。

「……では、はっきり言います。すでに事態は、そのようなことを言っていられるような状況ではないことを」

第３２管理世界から次元空間へと飛び立った純白のＸＶ級次元航

行艦「アーク」の船内、その艦長室にて、「ＣＢ」のライセンサー、ブリング・スタビティと、聖王教会の騎士カリム・グラシアは正面から相対していた。ただし、ブリングには夥(おびただ)しい数のバインドと鎖が巻かれており、艦長室にも、カリムの護衛として「ナンバーズ」のＮｏ．８、オットーと、Ｎｏ．１２のディードが配置させられていた。

「……では、現在の状況がどうなっているのか、詳しく教えて下さらないかしら、ライセンサー？」

「……ブリングでいい、カリム・グラシア」

「では、ブリングと……それで、どうしてなのですか？　「Ａ－ＬＡＷＳ」は分かりませんが、少なくても、管理局も聖王教会も、未だ十分以上の余力を残しているのに、どうして猶予(ゆうよ)が無いと言えるのでしょうか？」

なぜここにカリムたちがいるのか。それは、ブリングをミッドチルダのベルカ自治領にまで護送することを、聖王教会の最高指導者たる「カリフ」から直々に命じられたからだ。いくら聖王教会でたった五人しかいないオーバーＳランクだとしても、カリムはあくまでも騎士に過ぎず、そう何度も「カリフ」の命令には背けないのだ。

……いや、背くかどうかというよりも、恐らく「カリフ」はオーバーＳランクたるカリムを護送する戦力に入れることで、「ＣＢ」の動きを少しでも牽制(けんせい)しようとしたのだろう。彼らは自分たちの情報を秘匿(ひとく)する為に、絶対にＢｅｔｒａｙｅｒ(裏切りモノ)を抹殺しに、この護送部隊へと襲撃をしかけてくるのだろうから。

そして、戦うことができないカリムとて、その戦況を仮想して、すでにそれ相応の準備をしてきている。あとはただ……十五年前の戦争を超越する、その覚悟のみ。

「……「CB」はすでに、『世界に革新を齎すモノ』の完成に着手した。……もし『世界に革新を齎すモノ』が完成すれば、それがどんな事態を招くのか……俺（オレ）には想像することすらできん」

そんな悲壮な決意を豊かなおぱ～いの内側にしまうカリムを、ブリングはただ純粋に、美しいと思った。だがその感動も、自身が口にした言葉により、霧散してしまう。それほどまでに、「CB」を抜けた彼にとって、『世界に革新を齎すモノ』は恐ろしい存在なのだ。

ブリングの能面のような顔に現れた、一抹（いちまつ）の恐怖。それを目敏く見抜いたカリムは、オーバーSランクと同等の「角持ち」である彼ですら畏（おそ）れる存在――『世界に革新を齎すモノ』に、同じくらいゾッと恐怖……もしくは、畏れを抱いた。しかし、それを一歩踏み越えて、カリムは強張る顔を、ブリングと同じような無表情にしながら、それを問うてみた。

「……その、『世界に革新を齎すモノ』とは、一体なんなのですか？」

と。勇気を、覚悟を振り絞って。それに対し、ブリングは……

「……」

『……完全なる真の「剣士」、マイスター・イオリアの計画を体現する「ガンダム」、そして……「ガンダムを超えた存在」。それが……『世界に革新を齎すモノ』』

……いや、ブリングの「ガンダム」である白いコーン状の疑似GNデバイス、「ガラッゾ」がそう答えた。そして、その無性（むせい）で静か

な声が、その場に長く長く……本当に長く反響した。

「「「……え？」」」

その場にいる聖王教会の誰もが、その言葉になんら……何ら、反応を示すことができなかった。それはまるで、それを理解することを拒みたいようであり……もしかしたら、現実逃避をしていたのかもしれない。ほんの数十秒だけとはいえ。

「じゃ、じゃあ……今の「剣士」は、本当は不完全なのかいッ！？」

「あ、あの「歩くロストロギア」しか到達し得なかったＳＳランクに相当していても……ですかッ！？」

「そうだよ、ビリー・カタギリ、それにティーダ。「剣士」は実の所、不完全かつ不透明でね……僕どころか、もしかしたらイオリア・シュヘンベルグでさえも、その性能の全てを把握し切ってはいないのかもしれない。つまりはそれだけ……未知数ってことさ」

第９７管理外世界の南極という極寒の地、そのさらに酷寒なる地底にて、その三人とミスター・ブシドー、他の管理外世界の将校たちは、近代的な高速エレベーターを使って、地獄へと通じていそうな地下へと、さらに降りていった。周りはすべて見た事もない素材

で作られた壁で囲まれており（最も、ビリーとティーダだけは、これが最近になって開発Ｅカーボンだと気付いたが）、ナイトブルーの照明がエレベーター内を薄気味悪く照らしていた。

　そのナイトブルーの照明よりも、さらに薄気味悪い笑みを浮かべていたリジェネ・レジェッタは、口を三日月に開きながら、「ＣＢ」にとって致命的ともいえる情報を漏らし続けた。まるで滅びろと、滅びてくれと言わんばかりに。

「だから、これから渡すモノの性能実験と、それを扱う人材をある程度育成したら、まずは「ＣＢ」の衛星基地である「ラグランジュ」を幾つか落とす。そして、ある程度落としたら、『世界に革新を齎すモノ』が開発されているであろうラグランジュ１に、奇襲をかける」

「……？　どうしてすぐ奇襲をかけないんだい？」

「今は駄目さ。だって、今のラグランジュ１には「デカブツ」と「白鬼（しろおに）」がいるかもしれないんだよ？　そんな所に半端な戦力を派遣したって、戦力を無駄に消耗（しょうもう）させるだけさ」

　リジェネは薄気味悪い笑みを一瞬だけ引っ込めると、今度は暗い……暗い表情を顔に現した。嫉妬や羨望、後悔、悔恨……そういった物を一体どれだけ積らせれば、そんな表情ができるのだろうか？

　それは、少なくとも、その場にいる誰にも分からなかった。

「……それに、あの二人の強さは、僕が一番よく知っている。だからこそ、断言するよ。奇襲は絶対に成功しないってね。だからこそ、僕達は「ガンダム」を戦場に誘き出し、手薄となったラグランジュ１に奇襲をかけ、『世界に革新を齎すモノ』を破壊しないと……おや？　やっと到着したみたいだ」

エレベーターの下降が止まると同時に、リジェネの表情がまた何かを企んでいそうな笑みに戻った。エレベーターのドアが横に開き、ナイトブルーに照らされた部屋への入り口を開く。それに少し遅れて、その薄暗い部屋に一歩、足を踏み入れた瞬間、エレベーターにいる誰も彼もが、目の前の尋常ならざる光景を目の当たりにして、膝をガクガクと震わせ、立ち竦(すく)んでしまった。

部屋の中央には、大きな丸テーブルがドンッ！　と置かれていた。また、その卓上には、三十個もの白いコーン状の何かが整然と並べられていた。そして、遠目から見ても分かる、あの十センチほどの白いコーン状の物体は、間違いなく……！

「そうさ。これが、疑似ＧＮドライヴ……「ガンダム」へなるのに必要な、疑似ＧＮデバイスだよ」

それは、無数に乱立するモニターをじっと眺めていた。モニターの画面は目まぐるしく変わって、一秒後には違う情報を表示していたが、それでもそれは、ただただじっと、モニターを見つめ続けている。

「……見つけた」

少年のような、青年のような高い声。それが本当にそれの声なのかどうか、検証することはできないが、少なくとも、それはこの部屋で初めて口を動かし、音を発したことは確かである。

「じゃ、早速イオリアさんに報告して……あ、コーヒーありがとう」

「いえ、これも私のお勤めですから」

かちゃり、と音を立てて、それの前の置かれた一杯のコーヒー。それをそれは、ズズー……と、これまた音を立てて飲み干しながら、先程見つけた情報を編集し、それをＴｏ．イオリアさんへと転送した。そして、転送すると同時に、それは無数に乱立するモニター群を閉じ、部屋のやや明るめの照明をつけ、それにコーヒーを持ってきた少女を視界の内に収めた。

「……そうだ！　もしかしたら、君にも働いてもらうかもしれないから、今はゆっくりと休んでくれても構わないよ？」

「ご心配には及びません。ヴェーダとのリンクが切れた「ガッデス」など、私の敵ではありませんので」

９才程の少女が無表情のままそう断言する様は、それに悪寒を感じさせるほどの迫力が……怖さがあった。だがそれは、その悪寒を無理やり抑えつけ、次いで、少女の体を両手で優しく……とてもとても優しく、抱き締めた。それのその行為に、少女は思わず赤面したが、この行為をもっと満喫（まんきつ）したかったのか、少女はそれから暫（しばら）くの間、微動だにしなかった。

「……でも、相手は仮にも「ガンダム」の一機だから、慢心（まんしん）しちゃ駄目だよ？」

「……胆に銘じましょう。しかし、私とて「深淵存在（マテリアルズ）」の一人なの

です。例えレヴィ（雷刃）に速さで、ディアーチェ（王）に魔力量で負けていようとも、この心、そして砲撃は……私が勝ちます」

少女はそれの胸にショートカットの茶色い髪をスリスリと擦（こす）り付けながら、半眼の上目遣いでそれを睨んだ。その迫力（威力）たるや、世のロリコンどもを一発で陥落せしめるほどである。だが、それはロリコンでもなければ、人間でもない。故に、それは寧ろ、睨まれる原因について、思考を張り巡らせた。

そして、今思い返せば、先程の言葉には、漲（みなぎ）る自信と共に、若干の怒気も込められていたような……

「……もしかしなくても、怒ってる？」

「えぇ、怒っています。私の力が過小評価されたので」

少女はコクリと小さく頷きながら、それの胸に顔をさらに埋（うず）める。スリスリ、スリスリ……不機嫌そうな目付きでいながら、その口元は実に幸せそうに緩んでいた。それほど、その行為は少女にとって、気持ちのいい事なのだろう。

最も、その幸せそうな表情は、それの視界には入っていなかったが。

「……えっと、その……ごめ」

「謝っても許しません。なので、何時ものアレを要求します」

それの申し訳なさそうな声を容赦なくぶった切り、さらには、それの優しい抱擁（ほうよう）を（かなり名残惜しげに）解いた少女は、そう言って、いきなり自身の短い前髪をかきあげると、9歳児のぷにぷにな御凸様（おでこさま）を、それに向かって惜しげもなく披露（ひろう）した。

無表情のまま、しかれど、頬は桃色に染めて。

「……どうしても？」

「どうしても、です」

「……じゃ、いくよ」

……ちゅっ。

『……「ＣＢ」の全メンバーに告ぐ。先程、アーカイブからアニュー、ブリング、リジェネの居場所を特定したとの報告があった』

イオリア・シュヘンベルグが「ＣＢ」の秘匿通信を使って流すこの放送は、プトレマイオス？、エウクレイデス、ラグランジュ１～５、ラグランジュ７～１２と……「ＣＢ」の艦船、及び基地のほぼ全てに流されていた。それはつまり、「ＣＢ」に所属するメンバー全てに行き渡る、ということでもある。

『現在、アニューは第３２管理世界で、機動六課に保護されている。また、ブリングも、ミッドチルダと第３２管理世界の間の次元空間で、聖王教会と行動を共にしている。そして、リジェネだが……奴

はあろうことか、第９７管理外世界の南極、つまりは、私達の予備基地に、「Ａ－ＬＡＷＳ」と一緒にいるのだという！』

イオリアはこの三人の裏切りを、かなり重く受け止めていた。だから、彼は第二、第三の裏切り者がでないよう、「ＣＢ」のメンバーに釘を刺さなければならないと、そう思っていた。幾らオーバーＳクラスの戦力を複数所持する「ＣＢ」とはいえ、組織力と総戦力では、管理局の足元にも及ばないのだ。そんな組織がこれまで管理局を相手に大々的に振る舞えてこれたのは、単に、「ヴェーダ」と「アーカイブ」による情報戦の完勝のおかげである。

しかし、もしその肝心要の情報戦ですら、管理局に先手を許す様なことになれば、「ＣＢ」に待ち受けているのは間違いなく……破滅だ。４年前の計画外の戦争でも、最後は結局、無限書庫や本局のマザーに先手を打たれ続け、そのままズルズルと壊滅へと直走ってしまったのだ。その過ちを二度と繰り返さない為にも、今やるべきことは、情報の漏洩を防ぐことであった。

『よって、私達はこれから、この裏切り者たちがいる位置へと、「ガンダム」を派遣する！そして、この三人の裏切り者を……これ以上の情報漏洩を防ぐためにも、抹殺しなければならない！！』

その為に、イオリアは断腸の思いで、苦汁の想いで……三人のライセンサーを抹殺する決断を下した。例えこの決定に異を唱える者が現れようとも、一向に構わない。そんな覚悟すら決めて、イオリアは「ＣＢ」の全メンバーへと、その決定を伝えたのだ。

『だが、もしかしたらアニュー達の情報で、ラグランジュに奇襲をかけられるやもしれん。故に、戦力は防衛と討伐に割く。これは、スメラギ・李・ノリエガの提案でもある』

その放送を聞いたアレルヤ・ハプティズムは、酷く憂鬱（ゆううつ）げな溜息を吐いた。そして、治療ポッドの中で眠るロックオンを、複雑そうな思いと共に見詰めた。

『では……アニューにはリヴァイヴとレヴィ、セッテ、それと疑似ＧＮドライヴを搭載した３０機のＧＮキャノン？（ガジェット？）を』

ティエリア・アーデは放送を聞きながら、不機嫌そうな表情で、セラヴィーの太陽炉を隅から隅までチェックし直した。これから戦闘になるかもしれないと、そう思ったからだ。また、相手が彼と同じ「ガンダム」であるというのも、気を引き締めた要因だったのかもしれない。

『ブリングにはデヴァイン、ヒリング、ディアーチェ、それに２０機のＧＮキャノン？を』

スメラギもまた、酒を飲むのを中断して、イオリアの放送を聞いていた。その心中にあるのは、かつて犯した自身の罪……自分の戦術で仲間を殺してしまった、あの忌まわしい事故であった。しかし、その苦さを酒で飲み下して、スメラギは再び戦術を練り直し始めた。もう過ちは犯さないと、そう決心していたからに。

『リジェネには……リボンズ、トーレ、クワットロ、セファーを刺し向ける』

未だ完成しない「Ｏライザー」に焦燥感（しょうそうかん）を感じながら、刹那・Ｆ・セイエイはリンダ・ヴァスティと共に、『００』と「Ｏライザー」の調整に力を降り注ぎ続けた。たまに「ＥＸＩＡ」と「ＯＧ（オーガンダム）」の言い争う声が扉の向こうから聞こえてきたが、今はそれに構っていら

れるほど、彼も余裕があるわけではないのだ。

『なお、ケルディムはラグランジュ１０で修理中、ティエリアはラグランジュ１～５の護衛、アレルヤはラグランジュ７～１２の護衛だ。アルケーは新装備のテストで、今回の作戦には参加しない。……以上で放送を終える。各員、速やかに作戦へと移られよ』

果たして、これから「ＣＢ」はどうなるのか……そんな漠然（ばくぜん）とした不安を抱えながら、天上人を称する組織、「ＣＢ」は、それでもただ愚直に前進し続けるしかなかった……。

「随分と旗色が悪くなったモノだ……やはり、時空管理局は強いね、ウーノ？」

「えぇ、そうですねＤｒ．。このままですと、まず間違いなく……」

「まあ、負けるだろうね、「ＣＢ」は」

カチャカチャ、カチャカチャと。キーを打つ音を絶え間なく奏でながら、史上類を見ない大犯罪者であるジェイル・スカリエッティは、自身の秘書であるＮｏ．１，ウーノとしっとり話し込んでいた。話題はここ最近の「ＣＢ」についてだ。

「全く……こちらには開発の「欲望」と発明の「才悪」という、二つの無限があるというのにね？」
「しかし、向こうにも「無限」を冠するモノはあります」

これまで、「ＣＢ」は３０にも達しようかという多くの介入行為を、無傷とは言わなくても、全て成功させてきた。だが、今はそのつけが回ってきたかのように、劣勢に立たされていた。こちらには「無限の欲望」と「無限の才悪」がいるというのにである！

スカリエッティからすれば、それはもう理不尽な事である。次元世界広しといえど、ここまでの天才、狂人は、スカリエッティとイオリア以外、いるはずもないのだ。才能と狂気を併せ持つ存在は、恐ろしさと共に危うさをも伴い、真っ当に生きていける筈もないのだから。

「……無限書庫、か。成程成程……無限とも言われるその知識。確かに、真正面から管理局とやり合って、勝てるわけがなかったわけだ……戦力差は言わずもがな、情報戦でも負けていたのだからな」
「……Ｄｒ．」
「……分かっているさ、これがただの負け惜しみだということは。ただ、私が言いたいのは……もし無限書庫さえなければ、私たちが勝っていたかもしれないということさ……ところで、話題を変えるけど、セッテとトーレの調子はどうだい？」

過去の敗戦と、今の劣勢。そのどちらにも負け惜しみを言ったスカリエッティは、しかし、この話題がウーノとの話に相応しくないと思ったのか、いきなり違う話題をウーノに振ってきた。ウーノも、その心遣いに気付いて、スカリエッティに話を合わせる。

「トーレの調子は万全ですが、セッテの方は……」

「……やっぱり、あの力が原因かい？」
「……はい」

だが、その話題も相応しいモノとは言えない物であった。ウーノの声からまた一段と元気が無くなっていき、スカリエッティからも狂気が抜けていく。そこにいるのは、娘の事を心配するただの長女と父親の姿しかなかった。

「……仕方ないさ。誰だって、新しい力を使う時は、酷く臆病になるものだろう？　確証も信頼もない謎の力が、自分に一体何を齎すのか……セッテはそれを知らずに、いきなり実戦に出なければならない。それが私にはとてもとても……残念なことで、悲しいことだ」

スカリエッティの声には、悲しみが宿っていた。

「……セッテは大丈夫なのでしょうか、Ｄｒ．？　これからセッテはあの機動六課、そして他の四人の姉妹たちと戦わなければならないというのに……！」

ウーノの声は、悲嘆に暮れていた。悲鳴と言ってもいい。

「……セッテは強い子だよ。だから、私は信じる。彼女が無事に帰ってきてくれることを……それしかできないのだから……」

管理局史上類を見ない大犯罪者であったジェイル・スカリエッティと、その力の象徴であった「ナンバーズ」のＮｏ．１（長女）、ウーノ。彼らが今までに犯してきた罪の数々は、贖っても贖っても、贖い切れぬものだろう。しかし、この一時……この一時だけは、彼らもまた普通の親と姉であった……

「……「イオリア・シュヘンベルグという男は、確かに二百年前に実在していた人物だ。それは事実である。だが、どうしてイオリアが二百年もの時を生きてこられたのか。また、どうして今になって行動を起こしたのか。それは管理局ですら分かっていないことである」……最初の見出しはこんなものかしらね？」

私は資料が散らばる作業机の上で、自分の記事の下書きを書いていた。題名は「イオリア・シュヘンベルグについて」。正直、最初の数カ月は何の手がかりも得られなかったけど、今ではイオリアの親戚筋から得られた手掛かりで、何とかまともそうな記事を書けるところまで漕ぎ着けることができた。そう、漕ぎ着けることはできたのだ。

「……でも、これ以上は書けないのよねぇ～……親戚って言ったって、今から二百年前の人物のことはそんなに知らなかったし……イオリアの出身世界である第９７管理外世界はもう「Ａ－ＬＡＷＳ」の拠点世界の一つで、調べようにも調べられなくなっちゃったし……あ～もう、どうすればいいのよッ！？」

イオリア・シュヘンベルグ。最悪のテロ組織「ＣＢ」の創設者にして、かつては「無限の才悪」と畏れられた稀代（きたい）の発明王でもある

彼は、やはり自身に繋がるあらゆる線を消していた。その念の入れ具合は、私ですら舌を巻いてしまうほどだ。それほどまでに、彼に繋がる情報は少なかった。

普段ならば、ここで無限書庫の出番となるのだが、今回ばかりは如何な無限書庫といえども、役に立ちそうにはなかった。管理局ですら彼の詳細を掴んでいないのだから、無限書庫も当然、彼に繋がる情報を掴んではいないのだろう。そもそも、あのユーノ・スクライアですら探し出せない情報を、私が探し出せるとは思えない。

「……八方ふさがり、ね。管理局と密接に関係しているCW社の宇宙開発局にいる沙慈からの情報も、最近はぱったり途絶えたちゃったから、ホント、これからどうしようかしら……？　これは……沙慈？」

鬱屈（うっくつ）した気分で、目の前の作業机から目を逸らし、天井を眺めていた私は、不意に、自分の携帯にメールが届いていることに気が付いた。送信者は弟の沙慈・クロスロードからだ。私はそのメールを藁にも縋る思いで開くと、そのメールには、とんでもないことが書かれていた。……というか、こんな情報を沙慈はどこから持ってきたのッ！？

「……でも、今はこれに賭けるしかないわ！　沙慈、ありがとう！」

さあ、そうと決まれば、こんなところで記事を書いている場合じゃないわ！　今すぐにでも「アースラ」が着艦するドッグを調べないと！

それにしても、「CB」を裏切った人は、一体どんな人なのかし

ら……？

【私がこの世界に誕生したその日、私は一つの命令を受けた。
いかなる犠牲を伴おうとも、なさねばならぬその使命を……】

――鴨川秘様より、『イレブンソウル』のレワノフより

第５６話　Ｔｈｅ　ｗｏｒｌｄ　ｔｈａｔ　ｆｌｏｗｓ（後書き）

（ふん、「ＣＢ」から裏切り者が出たか……）

（しかし、彼奴はどうやら「剣士」ではなく、黒銀の方の「砲持ち」のようだ）

（然れば、問題は何も無い！）

（私が求めるのは、「剣士」との死合いのみ！　ただそれだけを成す為に、私は今も生き恥を晒しているのだ！）

（もうじき、我が盟友によって、サキガケに代わるＭ．Ｓ、磨修羅生が完成する……それさえ完成すれば、「剣士」とも互角以上に戦える筈……！）

（会いたい……会いたいぞ「ガンダム」ゥウーー！　そして、今度こそ……決着を着けようぞ！）

――ミスター・ブシドーの、現在の思考より、抜粋

第57話　Ｃｒｏｓｓ　ｏｕｔ　ｂｅｔｒａｙｅｒｓ（前書き）

【井戸の中の蛙は幸せでした。
井戸の外に何も興味が無かったから。
井戸の中の蛙は幸せでした。
井戸の外で何があっても関係なかったから。
そしてあなたも幸せでした。
井戸の外で何があったか知らなかったから】

――鴨川秘様から、『ひぐらしのなく頃に』のフルデリカ・ベルンカステルより

第57話　Ｃｒｏｓｓ　ｏｕｔ　ｂｅｔｒａｙｅｒｓ

――新暦７５年１２月１５日――

ＣＢＳ－６８「エウクレイデス」の船内は、とても慌ただしかった。エウクレイデスのクルーたちは急遽決まった「討伐任務」にやや困惑しながらも、急ぎ出航の準備を終わらせて、エウクレイデスをラグランジュ８から何とか第３２管理世界の宇宙空間へと転送させたが、あまりにも急に決まった出航は、エウクレイデスに完璧な整備を施す時間を与えなかった。その為、宇宙空間にその船体を浮かばせながらも、エウクレイデスは未だにハロによる整備を受けていた。

「……アニュー、私と同じ遺伝子配列を持つお前がどうして……！」

あちこちから整備の音が聞こえてくる船内。その煩い通路を力無く歩きながら、左に流れる薄紫の髪を持つ「ガデッサ」のライセンサー、リヴァイヴ・リバイバルは、どうしてアニュー・リターナーが「ＣＢ」を裏切ったのかを、昨日からずっと、考え続けていた。

アニューの恋人であったロックオン・ストラトスがそうだったように、アニューと同じ遺伝子配列を持つリヴァイヴもまた、アニューがどうして「ＣＢ」を裏切ったのか、全く思い至らなかったのだ。その分かり合えないことで生じた苛立ちは、リヴァイヴの趣味でもあるクラシック音楽を聞いても解消されず、ただただ、胸の内に黒い淀みを溜めこませていく。

「……クソッ！」

黒い淀みは、リヴァイヴの精神をかなり消耗させていた。イノベイドの優越性を信じているリヴァイヴからすれば、同胞（どうほう）が裏切ったことは、余程ショックな出来事であり、また、最近まで共に戦ってきたイノベイドを討つというのも、リヴァイヴに想像以上の苦痛を感じさせていた。

「……私は、どうすれば……！」

懊悩（おうのう）するイノベイド、リヴァイヴ・リバイバル。そんなモノに訪れる運命（Ｆａｔｅ）は、果たして……？

ＸＶ級次元航行艦「アーク」がいる次元空間へと急行するプトレマイオス？は、ＧＮコンデンサーに蓄えられた、補給が効かない蒼碧色のＧＮ粒子を全力で噴射しながら、次元空間内を一直線に爆進していた。そして、短く切った赤髪のデヴァイン・ノヴァは、トレミーの展望室にて一人、延々と苦悩していた。

「……ブリング、貴様に一体何があったのだ？　……オレ達を、同胞を討つ気なのか、お前は……？」

デヴァインと同じ遺伝子配列を持つイノベイド、ブリング・スタ

ビティ。その裏切りは、本来寡黙であるはずのデヴァインを饒舌にさせるほど、衝撃的な出来事であった。もしこれを他のイノベイドたちが見ていたら、かなり驚いたことだろう。最も、今のトレミーには、デヴァインともう一人のイノベイドしか乗っていなかったが。

それもそのはず。「CB」の貴重な戦力でもあるイノベイド、もしくはライセンサーは、三人の裏切りにより、その数を7から4にまで減らしていた。それによって、今回のように戦力を三つに分散させると、ライセンサーはそれぞれに一人か二人しか行き渡らなくなってしまう。

「……クロノの仇を取るのではなかったのか、ブリングよ？」

あまりにも分散された戦力で、どこまで戦れるのか……そんな不安が、デヴァインの胸中に広がる。だが、それでもデヴァインは戦わなければならない。例え相手が、自分と同じイノベイドであろうとも。

混乱から抜け出せずにいるデヴァインが、これから戦うであろうブリングとどう相対するのか……それはまだ、誰も知らない未来の事である。

トレミーの格納庫に程近い自室で、ヒリング・ケアは暖かいシャワーを浴びていた。水滴滴る若草色の髪が、ヒリングの額に妖しく垂れる。また、シャワーの白い湯気がヒリングの無いぱ～いなどを覆い隠し、その姿をさらに扇情的なモノへとしていた……が、こう

見えても彼女――いや、彼は中性型であり、性別はないのである。ただ、その仕草と言動から、彼を女性だと勘違いする者も少なからずいたが。

「……イノベイドは普通の人間よりも遥かに優秀なのよ？　なのに、どうして人間の肩を持つのよ、アニュー、ブリング、リジェネ？　あなた達は、私達のしていることが間違っているとでも、そう言いたいの？」

ヒリングは女性にしか見えないその端整な顔を、僅かばかり苦しそうに歪めていた。戦場では嬉々として敵を斬り殺すヒリングといえど、彼と同じイノベイドである三人の裏切りは、相当に応えたようだ。良く見れば、その顔は赤ん坊のように助けを求めているようでもある。何が正しくて、何を信じればいいのか……その答えをヒリングは今、切実に求めていた。

「……これから私達イノベイドは、どうすればいいのよ。ねえ、教えてよリボンズ……」

求める相手は、今、ここにはいない。それがとても歯痒くて、歯痒くて……ヒリングは目から流れてきた涙を、シャワー室の床にポツリ……と、一滴だけ落とした。

悩みを抱えた込んだまま、戦場へと赴いていくヒリング。その悩ましい後ろ姿が酷く悩ましげだったのは、誰も気付いていないことであった……

第９７管理外世界の南極。そこには「ＣＢ」の予備基地が存在していたが、そこは今や、「Ａ－ＬＡＷＳ」によって占拠されていた。今回の作戦はその占拠された予備基地の奪還、及び裏切り者「リジェネ・レジェッタ」の抹殺である。

「……リジェネ。僕は君の事をとても高く評価していたけれど、それはどうやら僕の思い違いだったようだ。本当なら、君と同じ遺伝子配列を持つティエリアが君を討つべきなんだろうけど、今回は特別に、僕自らが君を討ってあげるよ」

太陽が沈んだ事で、辺り一面が異様に暗くなった、氷と雪しかない極限の世界。その凍った大地へと、リボンズ・アルマークが駆る１ガンダムはふわりっと、月光しかない天上から降り立ってきた。その純白と青紫からなる機体は降り注ぐ月光を受け、神々しい雰囲気を儚げに醸し出していた。

「最強のイノベイドたるこの僕が、ね」

１ガンダムのデュアル・アイが、凶悪そうに赤く光る。それは駆り手の心を表しているようであり、また、裏切り者を絶対に殺すことを誓っているようでもあった。

『……そろそろ作戦開始時刻だ、アルマーク。これから私達二人で予備基地に奇襲をかけるが……』

『僕の心配はいらないよ、トーレ。僕は寧ろ、君が足手纏いにならないかどうかが不安さ』
『……分かった。なら、足手纏いにならないように気を付けよう』
『あぁ、そうだね。それがいい』

1ガンダムの少し手前に仁王立ちする、1ガンダムとは正反対な色を施された黒と赤の機体――益荒男（マスラオ）からの通信にそう答えたリボンズは、今にも飛び出さんとする益荒男の横に1ガンダムを動かしながら、「ナンバーズ」No.4のクワットロが発動させたIS（インヒューレントスキル）「シルバーカーテン」が織りなすGNキャノン?とガジェット?~?の幻を、暫し、黙って見詰めた。その幻惑はアップルの幻術魔法と相俟（あいま）って、常よりもさらに大軍で壮大な物となっており、見るだけでもリボンズの心を楽しませた。

『魔謀（マム）より通信！　ミッション「C.O.B」を開始せよとのこと！　故に、後は全て任す、リボンズ・アルマークとトーレ！』
『益荒男！』
『応とも、Licenser！』
『1（アイ）！』
『Yes，Licenser！』
『『行くぞッ！！』』

アップル……いや、セファー（本）からの通信で、ミッション「C.O.B」――Cross Out Betrayers――の開始が告げられると同時に、益荒男と1ガンダムは足元の雪原を爆発させる勢いで、その場から飛び立った。その後ろに追随する形で、クワットロとセファーの幻惑も、その場から飛び立つ。たったニ機の「ガンダム」を、大軍だと勘違いさせる為に。

トーレはまだ「CB」に入って日が浅く、また、イノベイドたち

ともそれほど交流があるわけでもなかったので、同じ「ＣＢ」のメンバーとして活動していたイノベイドを討つことに、特に何も思うことはなかった。

だが、リボンズは三人の裏切りを、表にこそ出していなかったが、かなりの憤激で持って受け止めていた。それこそ、三人とも自身で討ちたいと思うほどまでに。それは恐らく、プライド高い彼が生まれて初めて経験した、「仲間の裏切り」だったからか……少なくても、リボンズだけは他の三人のイノベイドとは違い、明確な殺意を持って、自身と同じイノベイドたるリジェネを殺そうとしていた。彼の優越性を象徴する、彼だけの「ガンダム」……１ガンダムでもって。

最強に相応しき能力を持つリボンズと、「ガンダム」の名を冠することを許されし疑似ＧＮデバイス「１ガンダム」。その誇り高く、そして酷く傲慢な二つは、「仲間を討つ」ことに何の疑問も抱かずに、その機械でできた美しい体を、漆黒の天上へと舞い上がらせた。隣りに益荒男を、周りにはガジェットたちの幻惑を引き連らせ、またその背面からは、赤と橙の中間色みたいな色をした疑似ＧＮ粒子を放出しつつ……イノベイドを超えたイノベイドは、宙のような黒い空を飛ぶ。

その先に待つ運命は、自分の為にあるモノだと、そう信じて疑わずに。

それは突如、観測できない別の次元から、何も無かったはずの宇宙空間に出現した。その数百メートル級の巨大な船体は、Ｌ級次元航行船「アースラ」に何ら見劣りすることなく、星が輝く無重力空間にその船体を横たわらせていた。

アースラの目の前に現れたこのオレンジ色のファクトリー艦。その船名はＣＢＳ－６８「エウクレイデス」といい、「ＣＢ」が保有する数少ない「ＧＮ粒子を用いることが可能な艦船」である。

「……随分と遅めなおでましやな。やっぱり、向こうでも色々あったんやな。……総員、戦闘配置！　これより機動六課は、「ＣＢ」との戦闘に移るで！」

『「アースラ」、機動六課確認。ガデッサ、ＧＮキャノン？×３０、発艦。かてて加え、Ａ・Ｆ（アトモスフィア・フィールド）発動確認。レヴィ・ザ・スラッシャー、セッテ、発艦』

船体を取り囲むようにして配置された八基の巨大アームが特徴的なエウクレイデスから、３１の光の筋、そして一人の高ランク魔導師と、一機の戦闘機人が出撃してきた。対して、白い船体のアースラからは、ライトニング隊の隊長と副隊長、あとは隊員が二名と、スターズ隊の副隊長、隊員が一名ずつ。そして四機の戦闘機人と高ランク魔導師二名に、狙撃手が一名、出撃する。

「ティアナ、キャロ、エリオ、ヴァイス、シャマル、ザフィーラは基本アースラの防衛！　チンクたちは主に「砲台」の撃破！　シグナムとヴィータ、フェイトちゃんは、「砲持ち」と残り二人の迎撃を！」

『スメラギ・李・ノリエガ、ミッションプラン。ＧＮキャノン？×３０、アースラ。ガデッサ、レヴィ・ザ・スラッシャー、セッテ、隊長陣』

アースラから発動された無色の大結界が、ＧＮ粒子の妨害を受けずに、その宙域に展開された。Ａ・Ｆとは、そこが宇宙空間だろうが次元空間だろうが、その効果の及ぶ範囲内を大気圏内と同じ成分に作り変える、ＡＡＡランクの大結界である。そして、その大気圏内と等しくなった無重力の宙域を、機動六課の隊長陣――フェイト・Ｔ・ハラオウンとシグナム、ヴィータが、エウクレイデス目掛け飛んでいく。

『させるか！』

「……ここは、通さない！」

「通りたければ、僕を倒してみろーーッ！！」

だが、「ＣＢ」のファクトリー艦に近づくことは、容易なことではなかった。何故なら、隊長陣とエウクレイデスの間には、オーバ

ーSクラスのガデッサとセッテ、そして、ＡＡＡクラスの構成素体、レヴィ・ザ・スラッシャーがいるのだ。それらを突破し、また、『ヴェーダ』が操舵するエウクレイデスを破壊する事は……並大抵のことでない。

「行くぞ、ハラオウン、ヴィータ！　レヴァンティン！」
「えぇ、行きましょう！　バルディッシュ！」
「おうッ！　行くぜアイゼンッ、テートリヒ・シュラーク！」
『テートリヒ・シュラーク！』

しかし、そんなことは百も承知なのだろう。六課の隊長陣たちは、「ＣＢ」側のその布陣を見ても、何ら怖気づくことなく、各々の魔法を発動させた。そして、それを合図に、機動六課とリヴァイヴ率いるアニュー討伐隊は、本格的な戦闘へと移っていった……！

制服と野戦服を合わせて二で割ったようなＢ・Ｊ（バリア・ジャケット）を着込んだヴァイス・グランセニック陸曹は、狙撃銃型のインテリジェントデバイス「ストームレイダー」を構え、アースラの周囲に展開された幾つものフローターフィールドの上から、近づいてくるＧＮキャノン？を正確に狙い撃っていた。しかし、薄い藍色の弾丸はＧＮキャノン？の頭部に直撃しても、その重厚な装甲に阻まれ、精々がその動きを一瞬だけ止める程度であり、ダメージを与えるまでには至れない。

「へっ、だが、それで十分ってな！　いけ、ディエチ！！」
「了解。イノーメスキャノン、エネルギー充填完了。直射砲、発射ッ！」

が、それで十分なのだ、ヴァイスには。最後の止めは、物理破壊でＳランク以上を叩き出す砲撃を放てるかつての敵――「ナンバーズ」がＮｏ．１０、ディエチが刺してくれるのだから、彼はただ、相手の動きを数瞬止めるだけでいいのだ。

「次に行くぞ、穣ちゃん！　気を抜くなよ！」

「了解。イノーメスキャノン、エネルギーチャージ開始。充填率、３８％」

ディエチの身体より大きな砲身を持つイノーメスキャノンから放たれた極光は、ヴァイスの狙撃により動きを止められていたＧＮキャノン？を丸々と呑み込み、機体その物をこの世から消し去っていった。灰塵（かいじん）という言葉すら生温く思えるほど、綺麗さっぱりにだ。

「此方に接近する三機の「砲台」を牽制します。イノーメスキャノン、エネルギーを充填したまま、実弾を装填（そうてん）。距離４００、３９０……喰らえ！」

濃い藍色をした単眼の機体が、此方に四門もの砲門を向けながら、その図体からは想像できない速度でアースラに接近してくる。数は三つで、その何れの砲口にも、既に赤橙色の光りが宿っていた。ディエチはその三機へと何発かの実弾を轟音と共に放ち、その動きを牽制するも、その計１２門の砲口からはすでに破壊を招き寄せる光線が溢れ出て……

「オーバーデトネイション！」

……出て来るよりも先に、幾つもの銀色の閃光が中空に閃（ひらめ）きて、三機のＧＮキャノン？に爆撃を降らせると、機体そのものをもつい

でとばかりに爆破させた。それによって、ディエチの目の前が爆炎の赤と爆煙の黒、そして、疑似ＧＮ粒子の赤橙色に染まるも、砲台からの砲撃は……終ぞ、放たれなかった。

「チンク姉！」

「油断するなよ、ディエチ！　敵はまだまだいるぞ！」

ディエチの視界を塞ぐ、その地獄のような光景を作りだした、「ナンバーズ」Ｎｏ．５がチンクのＩＳ、ランブルデトネイター。その能力は、一定時間手で触れた金属を爆発物に変えると言うモノ。その能力でもって、チンクは今も手に握るナイフや、中空に幾つも浮かばせているナイフを爆発物に変え、それでもって、彼女はＧＮキャノン？に信じられない密度の爆撃を、雨霰と浴びせていた。

ヴァイスの精密射撃と、ディエチの砲撃。そして、チンクの桁違いの火力からなる爆幕により、アースラの右舷は１５機近くのＧＮキャノン？が相手にも関わらず、ロング～ミドルレンジを完全に制圧していた。

では、反対の左舷はどうかというと……

「はぁあああああッ！！」

「うらぁあああああッ！！」

「……随分と息が合っているわね、あの二人？　おかげで、キャロが凄く不機嫌になっちゃったわ」

「アタシも驚いているッスよ。まさかあのノーヴェとここまで動きを合わせられるなんて……やっぱ、スバルと似ているんでスかね？」

「……えりおくん、なんだかうれしそう……」

「きゅるッ！？　きゅくるるーーッ！？」

……一言で言えば、修羅場っていた。二言で言えば、勝っているのに、何故か勝てる気がしなかった。ライトニング隊のエリオ・モンディアルとＮｏ．９のノーヴェは、これが初めての共闘とは思えない程、息の合ったコンビ振りを周りに披露していたが、それをただ指を咥(くわ)えて見ることしかできないキャロは、何だか自分の居場所(パートナー)を取られたような気がして……無意識にヴォルテールを召喚しそうになったのは、彼女だけの秘密である。

あの親にして、この子ありと……そういうこと、なのだろうか？

それはともかくとして、アースラの左舷は、エリオとノーヴェが抜群のコンビネーションでクロスレンジを制し、ミドルレンジも、ウェンディの機動力とティアナの射撃が合わさって、ＧＮキャノン？はアースラに中々近づけなかった。加え、キャロの補助魔法が合わせれば、尚更のことである。

だが、ここで疑問が一つ生じる。なぜＧＮキャノン？は、いや、それを遠隔操作する『ヴェーダ』は、本来アウト～ロングレンジで本領を発揮するはずのＧＮキャノン？を、アースラに近づけさせようとしているのだろうか？　疑似太陽炉を搭載した事により、稼働時間が延びたＧＮキャノン？ならば、例え距離が１０００あろうとも、その馬鹿げた火力による一斉射でもって、アースラを轟沈せしめることなど、他愛もない筈……なのに、どうしてミドル～クロスレンジに固執(こしつ)するのか？

『……此方側劣勢、仕方無(しかたなし)。ＧＮキャノン？、ロングレンジ、一斉射』

その答えは、アースラの正面に立ち並ぶ、二人の魔導師にあった。

「断て、障壁！」

「皆を守って、クラールヴィント！」
『Ｊａ。風の御盾』

アースラの正面に展開された、蒼い粒子が渦を巻くシールドと、緑色の楯状のシールドが、１０機ものＧＮキャノン?から放たれた極大の砲撃を、盾その物を斜めにする事で、その全てをアースラの左右へと受け流した。これまでの経緯と何ら変わりなく、「盾の守護獣」ザフィーラと、「湖の騎士」シャマルによって、ロングレンジ以遠からの砲撃は、アースラに掠ることさえ叶わなかった。その事実を、『ヴェーダ』は感情を表すこと無く、再確認する。

『……アースラ沈没、不可能。リヴァイヴ達、均衡。撤退案構築……完成。撤退可能、判断待機』

そして、『ヴェーダ』はあまりの劣勢に、ついには撤退案までをも構築し始めた。このままでは作戦を遂行できないと、そう機械的に判断して……。

機動六課の優勢で進められるアースラの防衛戦。それとは逆に、リヴァイヴたちと隊長陣による戦いは、終始一進一退を繰り返しては、延々と拮抗していた。

「おらぁあああああッ！」
「……！」

ドカンッ！

「この……！」
「……クッ！」

ヴィータのグラーフアイゼンによる攻撃が、セッテの固有武装「ブーメランブレード」によって受け止められた。ヴィータの攻撃はとても重いはずだが、セッテは表情を崩さぬまま、そのまま数瞬、ヴィータと力で拮抗する。

「ヴィータ、避けろ！　紫電……一閃！」
「そんなことは僕がさせないぞ、シグナム！　バルニフィカス、光鎌斬！」

ヴィータとセッテが互角に競り合っていると、その頭上からアギトとユニゾンＩＮをしたシグナムが、ヴィータに気を取られているセッテへと、炎を纏ったレヴァンティンを振り落としてきた。しかし、それはレヴィの鎌状のデバイス、「バルニフィカス」から発生した光の刃により防がれ、鍔迫り合いにまで持ち込まれてしまう。その間にセッテは後方へと下がり、ヴィータもまた、それを深追いせずに、黙って後ろへ下がる。

「……お兄ちゃんからの報告で聞いてはいたけど、本当に私そっくりだ……！」
『……Ｓｉｒ？』

炎のレヴァンティンと、雷のバルフィニカスが、ギチギチと不協和音を鳴らしながらぶつかり合うのを横目に、フェイトは金色のミッド式魔法陣を足元に発動させ、自身の目の前に二重の加速・増幅用の環状魔法陣を構築した。その左手には、雷光を放つ魔力球が浮かんでいた。

「……うん、分かってるよ。もし彼女が昔の私だとしたら……力も当然、９歳の時の私と同じ、だよね？　だったら……」

フェイトが左手を前に突き出すと、魔力球がゆっくりと前方へと押し出された。それと同時に、バルディッシュはその砲撃魔法の名を唱える。フェイトが愛用する、その砲撃魔法の名を。

「油断なんて……できないよ！」

『プラズマスマッシャー』

金色の魔力球が環状魔法陣を通過すると、その魔力球は魔力の濁流と化した。そして、レヴィをその膨大な魔力流に呑み込むべく、漆黒の宙域を凄まじい速度で驀進（ばくしん）していく。

「退くぞ、レヴァンティン！」

『Ｊａ！』

迫りくる金色の濁流に気付いたシグナムは、レヴィとの鍔迫り合いを中断して、そのはち切れんばかりの魔人級おぱ～いが揺れる体を後ろに退かせた。それによって、レヴィはバルニフィカスを思いっきり前で空振りしてしまい、その場で一回転してしまう。すぐそこにまでフェイトのプラズマスマッシャーが近づいてきているというのに、だ。

「って、ヤバッ！？」

『Ｓｉｒッ！？』

レヴィが金色の砲撃に気が付いた時には、フェイトの砲撃はすでに回避不可能な所にまで来ていた。レヴィの視界が、濁流の輝きに

よって埋め尽くされる。その圧倒的な光景に、知らず、諦観を抱いてしまうレヴィ……

『ガデッサ！』

『Ｙｅｓ，　Ｌｉｃｅｎｓｅｒ！　ＧＮメガランチャーを発射します！』

……だったが、その黄金の濁流は、レヴィの真上から降ってきた赤橙の濁流によって堰き止められた。黄金に勝るとも劣らない赤橙の輝きが、レヴィの視界の中で黄金を押し流し、遂には、相殺してしまった。その光景を、レヴィは胸を撫で下ろしながら見詰めていた。

『あのフェイト・Ｔ・ハラオウンの砲撃とはいえ、相殺することなど、このガデッサには容易いこと！』

「クッ、「砲持ち」……！」

砲撃の余熱を吐き出すＧＮメガランチャー。その冷却を行いながら、ガデッサは砲撃を放った反動で動けないフェイトへと、左腕のＧＮバルカンを連射した。ビームでできた丸い弾丸が、無数、フェイトへと迫る。

「んなことさせっかよ！　アイゼン、パンツァーシルト！」

『パンツァーシルト』

だが、ガデッサのビーム弾が迫りくる中で、その狙いであるフェイトの眼前へと、赤い騎士服を着たヴィータが立ち塞がった。ヴィータは今も吐き出される赤橙色の弾幕に怯えることなく、自身の鎚型アームドデバイス「グラーフアイゼン」へ、ベルカ式魔法陣を前面に展開する防御魔法を発動するよう、命じる。その命令に、鉄槌

のデバイスは瞬時に応え、ヴィータの前面に赤い盾を形成した。

ガガガガガガガガガガ……！

『……チッ、随分と硬いな！』

「へっ、そんな攻撃……なのはのアクセルシュ―ターと比べたら！」

ビーム弾が赤い防壁に数え切れないほど着弾する……も、ヴィータの防壁は一ミリたりとも揺らがなかった。総合はともかく、硬さだけならば、あのザフィーラをも超える彼女の防壁は、そんな牽制目的の武装では、震わせることさえできないようだ。それを知って、「ガンダム」を侮辱されたように思えたリヴァイヴは、知らず、舌打ちをする。

『……（シグナムの攻撃力に、フェイトの機動力。おまけに、ヴィータのこの防御力が合わさっては、今の戦力ではどうやったって……！）』

「……（むぅ～……さっきからずっと互角のままだよ！　こんな時に、シュテルかディアーチェがいてくれれば、何か考えてくれるんだけど……）」

「……（……どうしよう？　やっぱり、アレを使うべきなのかな？　でも……新しい力を使うのは、とても怖い）」

ヴィータとガデッサの攻防が終わると、奇しくも、両方ともが最初に対峙した時と同じ布陣――ガデッサ、レヴィ、セッテが横一列に並び、その対面にヴィータ、シグナム、フェイトが並ぶ――となった。対峙したまま、互いを睨み合って、隙を窺う両陣営。

「……（向こうはこっちが有利だけど、こっちはこの拮抗が崩せねえ！　どうにかして戦況を動かして、こっちの有利にしねぇと……

このままじゃ、ジリ貧だ！）」

「……（フェイト似の魔導師のスピードに、セッテとやらのパワー。そこに「砲持ち」の火力が合わせると、これほどまでに厄介な物となるのか……！）」

「……（……リミットブレイクをするべき、かな？　でも、それを使っちゃうと、本当に後が無くなるから……今はまだ、様子を見よう）」

ピクリとも動かなくなった、高ランク者同士の戦場。それは絶妙なバランスを維持したまま、そのまま数分ほど、その状態を保持した。互いが互いを認め、互いが互いを同等と見做しているため、どうしても……切っ掛けが作れないでいた。そして、そのまま何も起こらずに、ただ無為に時間だけが過ぎていく……。

「……向こうは硬直したまま、動かへんな？」

「……何か、考えがあるんでしょうか？」

「……いや、多分無い。ここまで互角やと、向こうさんも何もできへんやろ。ヘタに援軍を送っても、貴重な戦力を擦り減らすだけやろうし……さあて、どないしようか？」

アースラのブリッジの中央に位置する艦長椅子に座りながら、八神はやては考える。幸い、アースラの防衛は此方側の有利に推移しており、このまま何事もなく終わりそうではあったが、アースラから離れた所で行われているもう一つの戦闘の方は、今や余りの互角故に、動くことさえ儘（まま）ならなくなっていた。

「……まあ、ホンマは私が広範囲魔法をぶっ放せれば、それがええんやけど……」

「第３２管理世界のお偉いさん方が、それを許可しませんからね……」

「まあ、気持ちは分からなくもないけど、正直、それのお陰で手詰まりなんやな～……」

艦長室で戦況の推移を見守っているはやてが戦場に出れないのは、簡単に言ってしまえば、第３２管理世界の政府が、この世界ではやてが戦うことを禁止した為だ。彼らは何十年前も前に起こった「闇の書」事件の再来を恐れ、管理局に八神はやてがこの世界で戦う事を禁止するように交渉したのだ。彼らにとっては何よりも大切な物であったはずの、莫大な富と賄賂を犠牲にしてまで。

幾ら「Ｊ・Ｓ事件」の余波で、超組織たる管理局の風通しがかなり改善されたとはいえ、たった数カ月で劇的に変われるのであれば、管理局はとうの昔に健全な組織になっていただろう。臨時から正式に、伝説の三提督が最高評議会になったとしても、今までの腐敗は、「闇」は、そう簡単に取り除くことなど……できはしない。

そして、その「闇」により、この戦場は今やどちらからも動き出せないほど、見事に膠着してしまった。気付けば、残り１８機にまで減った「砲台」も、その攻勢を僅かばかり緩めていた。向こうも、このままでは決着が着かないと判断して、損害を少しでも抑えようとしているのだろう。そして、その判断は実に正しかった。

「……よし。一か八かやけど、頼んでみようか？　どうせこのままじゃアカンのやし」

「……一応聞きますけれど、どうするんですか？　まさかといいますかもしかしなくとも……」

「せや、グリフィス君」

と、同時に。その判断は誤りでもあった。何故なら、機動六課にはまだ切られていないカードが一枚だけ存在していたからだ。しかも、そのカードは間違いなく……「ＣＢ」側にとって、「鬼札（ジョーカー）」たるモノであった。

「こっちにも折角「ガンダム」があるんやから、これを使わん手はないで！」

はやてが切ろうとしているカードの名は……ライセンサー。つまりは、疑似ＧＮデバイス「ガッデス」を扱うイノベイド、アニュー・リターナーを、戦場に投入しようというモノであった。アニューには未だ嫌疑がかけられているというのに、である。

だが、それで戦場が動く事は間違いないだろう。例え『ヴェーダ』のバックアップがなくとも、それが「ガンダム」だという事には変わりないのだから……

【ねだるな、勝ち取れ。さすれば与えられん】

――零夢様から、『交響詩篇エウレカセブン』より

第57話　Ｃｒｏｓｓ　ｏｕｔ　ｂｅｔｒａｙｅｒｓ（後書き）

（……振動が、さっきからずっと起きている）

（ということは……やっぱり、戦闘が起きているのね）

（多分、私を討ちに来るのは……ロックオンはまだ回復していないはずだから、私と同じ遺伝子配列のリヴァイヴが来る……はず）

（……ごめんなさい、リヴァイヴ。貴方にこんな辛い任務をさせてしまって……）

（でも、私ももう止まれない……止まれないところまで来てしまったの。だから、私は……貴方を、退けます）

（……もう、「ＣＢ」は止まらなければならないのよ。だから、こんな虐殺は……もう、止めさせないと！）

――アニュー・リターナーの、現在の思考より、抜粋

第58話　Ｉｎｆｌｕｅｎｃｅ　ｏｆ　ｐｏｗｅｒ（前書き）

【良心と善意と信念に従って、犠牲を生み続ける存在も居る】

――ココロンＫ様より

第58話　Influence of power

――新暦75年12月15日――

膠着（こうちゃく）したまま動かない戦局を、どうにかして此方側の有利になるよう動かそうとしたはやては、その為に、敵の目標でもある裏切り者――ライセンサーであるアニュー・リターナーを、戦場に投入しようとした。

「……つうわけで、今戦局を動かせられるのは、アンタしかおらんっちゅうわけや。せやから、その力……「ガンダム」の力を、うちらに貸してくれへんか？」

「……「ガンダム」の力を貸すことには、特に抵抗はしません。しかし、いいんですか？　私がまだ「CB」を裏切っていない可能性も、まだ十分ありますよね？」

強固に構成された緑色のバインド、それによって動きを封じられた体を見せつけながら、アニューは意識をすでに戦闘のソレへと切り替えていた。ここで何を言おうとも、どの道、戦場に投入されるということを、アニューはイノベイドの直感でもって知ったつもりだった。何故なら、目の前の人間は……

「確かに、その可能性もある。でも、今動かんと、このままじゃジリ貧や。長期戦は向こうの方が有利やしな！」

「……まだ「CB」を裏切って一日くらいしか経っていない私を、どうしてそこまで信じられるんですか？」

「それは……」

彼女の知る女傑、スメラギ・李・ノリエガと同じ強さを……豪胆

さを……

「……女の勘や！」

……持っていたからだ。

『さて……本当に裏切ったのかどうか、見せてもらうで、Ｂｅｔａｙｅｒ？』

アースラのブリッジに戻ったはやてが、落ち着いた様子でそうアニューに囁いた。その言葉の先、はやての視線の先にはブリッジの正面モニターがあり、そこには白いコーン状の疑似ＧＮデバイスを握っているアニューが独りでポツン……と、映っていた。

「……行くわよ、ガッデス」

『Ｙｅｓ，Ｌｉｃｅｎｓｅｒ。スタンバイレディ、セットアップ。ＧＮＺ－００７　ＧＡＤＤＥＳＳ　インストール、コンプリート』

はやてが見ている先で、アニューの体が赤橙の粒子に包まれ、その繭の中で、生身から「ガンダム」の機構へと入れ替わっていった。

それは人の意思と鋼鉄の体を共存させる、異端の所業である。いまだかつて、イオリア・シュヘンベルグにしか造れない、フルサイズアウトフレーム式疑似太陽炉搭載型ＧＮデバイス――その機能の一部を解放させ、「イノベイド」から「ガンダム」になったアニューは、その水色の機体を、アースラから目の前に広がる宙へと飛び

立たせた。一瞬の浮遊感と共に、大気が身を圧迫（あっぱく）してくる。

『うっ……『ヴェーダ』のバックアップがないと、大気中を飛ぶことすら難しくなるわね……！』

『リジェネが数か月もかけて開発した独自のシステムとはいえ、ヴェーダのバックアップを受けられなくなったガッデスでは、以前と性能がかなり違っています。戦闘の際には、その点にお気を付けを、ライセンサー』

『分かったわ。……ガッデス、ありがとう』

『Ｙｏｕ‘ｒｅ　ｗｅｌｃｏｍｅ、ライセンサー』

あちらこちらで魔力光とＧＮ粒子が激しく衝突しては、その度に眩い光が生じている宙域。その白光輝く宙域の直中（ただなか）を、ガッデスは一路、膠着し続ける戦場に向かって飛ぶ。

『アレは……ガッデスだと！？　『ヴェーダ』のバックアップ無しに戦場に出てくるなんて、正気ですか、アニューッ！？』

『……緑のガデッサ、やっぱりリヴァイヴだったのね。……悪いけど、ここは一旦、退いて貰うわよ！　行って、ファング！』

『ＧＮビームサーベルファング、展開！』

途中で何機かのＧＮキャノン？を破壊しながら、幾時もせずに「ガンダム」が待つ戦場へと到着したガッデスは、まず初めに、最も近くにいた機体、リヴァイヴのガデッサへと、両肩と腰部から計７基ものファングを一斉に飛ばした。ファングを飛ばした時にアニューの表情が若干歪むが、それはガンダムフェイスの下に隠れ、ブリングはその表情を見ることがなかった。

『クッ……アニュー・リタァアアナァアアアア！』

かつての仲間にファングを向けられたガデッサは、今更ながらに、本気で仲間から裏切られたのだと考えさせられ、それに対し、激しい怒りを覚えた。そして、その怒りのままに、三連装ＧＮビームライフルを振り回し、七基のファングを次々と撃ち落としていった。それによって、七基の内の三基が撃墜され、ガッデスとガデッサの間に、ファングの爆煙が広がる。

『この程度の煙で！　ガデッサ、ＧＮメガランチャーを！』

『Ｙｅｓ，ｌｉｃｅｎ……ｓｅｒッ！？』

額のラインセンサーを光らせながら、怒りのまま煙幕の向こう側にいるであろう裏切り者を射殺す為に、ガデッサが３連装ＧＮビームライフルの砲身を三つに分裂させ、連射のビームライフルから砲撃のランチャーに躊躇なく切り替える……のとほぼ同時に、白い煙を裂いて、炎の翼を羽ばたかせるシグナムがガデッサへと急接近してきた。

『なっ……まさか、この為にッ！？　この為に、ファングを犠牲にして……！』

いきなり現れたシグナムの翼で、ガデッサのサブを含む全てのカメラが真っ赤に染まる。その赤い劫火（ごうか）は、イノベイドたるリヴァイヴにすら怖気を感じさせた。ガデッサが急いでＧＮメガランチャーの砲口をシグナムに向けるが、その時にはすでにシグナムはその砲身の内側――ガデッサの懐へと、その青紫基調の騎士甲冑に包まれた体躯（たいく）を飛びこませていた。

「ふん、気に食わんが……アギトッ！」

『応さ！　紫電……』

「……一閃！」

ガデッサが自身の目の前にまで迫ったシグナムに驚愕していると、、シグナムの大剣「レヴァンティン」が、未だ状況に追い付いていないガデッサの左肩から右腰を、その馬鹿げた熱量でもって容易く斬り裂いた。また、そのついでとばかりに、右腰に構えられていたＧＮメガランチャーまでをも、その炎刃の余波で溶解させた。

『ガッ……こ、このぉおおおおッ！？』

熱波と衝撃で視界が定まらない中、使えなくなったＧＮメガランチャーを瞬時に捨て去り、替わりに、右手にＧＮビームサーベルを握ったガデッサが、鬼気迫る勢いでシグナムへと襲いかかった。シグナムは大剣を振り終えた直後の硬直で、この攻撃には反応できない。そう思っての一撃だったが……それがシグナムの胸を突き刺す寸前で、ガデッサの右腕が二基のファングによって、その宙域に縫い止められてしまう。

『し、しまッ……！』

そして、それによってガデッサの動きが一瞬だけ止まった。ピタリッと、時でも止められたように。

「これで決めろ、ヴィータッ！」
「ああ、分かってる！　アイゼン、ギガントフォーム！」
『ギガントフォーム』ガコンッ！

そして、その瞬間を逃さずに、深紅のＢ・Ｊを纏ったヴィータが、自身のデバイスを数倍以上に巨大化させ、カートリッジをロードしながら、それを真上に振り上げる。

「ちょ……アレはさすがにヤバいよね！？」
「……危ない！」

それを見て、ガデッサの救援に向かおうとしたレヴィとセッテは、しかし、

「ここは、通させない！」
『……悪いけど、行き止まりよ！』

フェイトとガッデスの妨害に阻まれ、ガデッサに近づくことさえできなかった。

「ギガント……ハンマァアアアッ！！」
『う……うおぉおおおおッ！？』
『Ｌｉｃｅｎｓｅｒッ！？』

ドゴォオォオオオンッ！！　と、何もかもを破壊するような轟音が、戦場に響き渡った。それと共に、ヴィータのギガントハンマーを防御することなく受けたガデッサが、無数の破片を辺りに散らしながら、遥か彼方へと吹き飛んでいった。その時のガデッサは、ピクリッと、指先を僅かに動かすことさえできないほどの大ダメージを喰らっており、ライセンサーであるリヴァイヴでさえも、意識をグワァングワァンと混濁させていた。

「バルディッシュ、行くよ！　撃ち抜け、雷刃！」
『Ｙｅｓ，ｓｉｒ！』ガコンガコンッ！

そんな中破したガデッサへと、本当の終わりを与える為に、フェイトが二回り以上も大きくなった金色の大剣を、右肩に乗せるようにして構えた。弾ける雷光が、フェイトの周りを黄金色に照らす。

さながら、絶世の美しさを持つ死神をさらに惹き立てるかのように、雷光は目の前の敵をも、その目を覆わんばかりの輝きでもって照らす。

「フェイト、止めを刺せッ！」
「行け、ハラオウン！」

シグナムとヴィータの声が、雷の唸る音にも負けずに、フェイトの耳に届く。

「……リヴァイヴ」
「リヴァイヴさん！？」

何かを憂うようなアニューの声と、焦燥を隠せないレヴィの声が、フェイトの所にまで聞こえてくる。

「ジェット……ザンバァアアアアッ！」
『ジェットザンバー』
『まっ……！』
『……ッ！』

それらの声を、雷が踊る背に受けつつ、遂に雷神による巨大な斬撃が、甚大な損傷で動けないガデッサへと、一片の慈悲すら与えずに、放たれた……！

セッテは思う。心とは何かと。

「ジェット……ザンバァアアアッ！」

まだ生まれて間もない彼女には、「心」というモノは理解できなかった。泣いて、笑って、憎んで、恨んで……そういった感情を、彼女は未だに経験さえもしていない。当たり前のことなのに、普通なことなのに、そういった常識を、彼女は尽く欠落させていた。

『プラズマザンバー』

だから、例え仲間が今にも討たれそうになっていても、彼女はその無表情を崩さない。いや、崩せなかった。精々が眉を動かす程度、冷や汗を一筋流す程度で、それ以上の感情表現を、彼女は知らない。知らなかった。

『まっ……！』

『……ッ！』

そう……知らなかっただけなのだ。彼女にとってそれは、最大級の感情表現だというのに。例え眉を動かす程度で、冷や汗を流す程度だとしても……それは彼女にとって、とても大きな感情の表れだ。

「……リヴァイヴッ！」

あの「ルイェビト」攻防戦の折に、リヴァイヴと交わした短い会

話……それを、セッテはまだ忘れていなかった。この戦闘しかできない、半分機械でできた体を褒めてくれた、あの会話を……セッテは今も後生大事に、胸の内にしまっていたのだ。

それが人のいう「心」だとは、少しも疑わずに……彼女は無表情さの裏に隠れた激情のままに、スカリエッティですら解析だけで二週間も要したあの新たな力を……今こそ、振るう。

「……「アルハザード」式ＩＳ、稼働（かどう）！」

アーカイブとスカリエッティによって創造された、異業か偉業かの力を……セッテは覚悟を決めて、振るうのだった。

『……ここではラヴクラフトとは呼ばずに、アーカイブと呼ばせてもらうけど、構わないかい？』

『えぇ、構いませんよ、スカリエッティさん。何せ、僕と貴方の仲ですから』

二つの空中投影モニターが向かい合う中、そのスクリーンに映る人物たちは、まずはそう言葉を交わし合った。

『君とそんな関係を築いた覚えは無いけど……今はそんなことよりも、セッテに搭載されたあのシステムについて、もう一度、詳しく説明してくれないかい？』

『……？　何か不審な点でも？』

暗室に浮かぶ、二つのスクリーン。その一方が発した言葉に、もう一方は不思議そうに尋ね返した。彼？　は自分が施した技術に、絶対の自信でも持っていたのだろうか？

『いや、そんなモノは無かったけれど……ただ、娘のことを案じて、もう一度くらいは詳細を聞いておこうと、そう気紛れに思っただけさ』

『気紛れ……ですか？』

『そう、気紛れさ。狂気の科学者という殻に包まれた、親馬鹿な父親の、ね……』

一方の人物――スカリエッティの声は、最後の方になればなるほど、小さくなっていった。それは彼が自分に罪悪感――何かしらの罪の意識を持っていたからだろうか？　無論、そんなことをもう一方の人物――アーカイブが、知る由も……いや、知っていたかもしれないが。

『……まあ、今は暇なんで、別に構いませんが……』

『君の寛大な応対に感謝を、アーカイブ』

『どう致しまして、Ｆａｔｈｅｒ』

アーカイブは一つの揶揄（やゆ）として、スカリエッティをそう呼んだ。その時のスカリエッティの歪んだ顔は、敢えて無視する。深い詮索（せんさく）など、とうの昔に終わっているのだ。今更そんなことをするメリットなど、ありはしない。

『……セッテに搭載されたシステムは、「アルハザード」式ＩＳと言います』

アーカイブは今までのやり取りをいきなり中断すると、まず、セッテに搭載されたシステムの名称の説明から入った。まるで講演会でも始めようとしているかのようにだ。

『これは、戦闘機人のＩＳに「アルハザード」式の長所を付与するシステムで、ＩＳの高速発動、複数同時展開、エネルギーの効率化を、搭載した戦闘機人に齎します』

アーカイブの口調には淀みがなく、既に何回も説明したことがあるようだった。それとも、ただ単に、アーカイブがこういった事に慣れているからか……

『また、情報の処理速度も上がるため、学習能力も向上します。それによるデータ蓄積量の増加も、恩恵の一つと言えるでしょう』

アーカイブが説明する「アルハザード」式ＩＳとは、魔力を用いない先天固有技能に、アルハザード式魔法陣の構築をぶち込むという無茶苦茶な理論を、実際に現実のモノとした、本来なら有り得ない技能である。もし戦闘機人の生みの親とも言うべきスカリエッティと、セファーというアルハザード式の使い手がいなければ、この技能は決して実現しなかったであろう。

また、その有り得ない技能は、無論、空の殲滅者へも多大な影響を与える。だからこそ、セッテは使いたくなかったのかもしれない。自分の何かが変わると、そう感じていたからに。

『まあ、それに伴って感受性や情報の解析量も上がるので、一概にいい面ばかりではないのですが……もし限界以上に使い過ぎれば、脳が焼き切れて、感情を無くしてしまう可能性もありますので、そこは気を付けなければなりません』

アーカイブが何気なく言うそのデメリット。それは事前に分かっていた事とはいえ、スカリエッティに衝撃を与えるには十分以上の「事実」であった。例えそのデメリットを無視して、アルハザード式ＩＳを望んだのがセッテだったとしても、その事実は……あまりにも残酷だと、そう思わざるを得なかった。

『……そうか。ありがとう、アーカイブ。わざわざもう一度説明してくれてね』

『いいですよ、僕と貴方の仲ですから』

『……ああ、そうだね。これが君と私の仲だ』

そう……今でも異常なぐらい無感情で無表情なセッテから、これ以上の「心」を奪うかもしれないのだ。もしかしたら、戦闘機人から本当の意味での「人形」になるかもしれない。それを思えば、アルハザード式ＩＳをセッテに載せるべきではなかったのかもしれない……

しかし、その全てはＩＦ……「もしも」のことで、現実はもう前に歩きだしていた。

額のヘッドギアから白を基調とする単眼のバイザーが降りてきた。それによって、セッテの視界がより精密なモニターに覆われるが、セッテはそのバイザー越しの景色を楽しむことなく、自らが取るべき行動をすぐさま計測・予測し、それを実行に移した。

「……行きます」

アルハザード式ＩＳを稼働させたことで、より多くの情報を処理することができるようになったセッテは、まず、ブーメランブレードを制御するＩＳ「スローターアームズ」を発動させながら、自分の手に握られた二つのブーメランブレードを、フェイトのジェットザンバーめがけ投擲（とうてき）すると、今度は四つものブーメランブレードを強化されたアルハザード式ＩＳで手元に転送し、それをフェイト本人に向かって、力一杯ぶん投げた。

二つのブーメランブレードは軌道を微調整されながらジェットザンバーに直撃すると、その刀身を横に人一人分ほどずらした。「第一線のベルカ騎士の一撃」とも称されたその一撃は、さすがに超高密度で構築された魔力刃を砕くまではいかなくとも、その剣先をずらすことぐらいは可能だった。

「あッ！？」

そして、軌道を人一人分ほどずらされたジェットザンバーの刀身が、動けないガデッサの横を、何も斬ること無く通過した。それに驚きの声を上げたフェイトだったが、そのすぐ横には四つのブーメランブレードが、その長い刃をフェイトへと迫らせていた。

「くッ！」
『ディフェンサープラス！』

バルディッシュがオートガードで咄嗟にバリアを張るが、それも一瞬のこと。四つのブーメランブレードがほぼ同じタイミングで金色のバリアに衝突すると、そのバリアは瞬きの内に破砕された。

「ッ！？」
『Ｓｉｒッ！』

バリアが砕ける音を聞くよりも早く、高速で回転するブレードがフェイトへと肉薄してきた。未だ長大な魔力刃を形成するバルディッシュを、この距離で振るう事はできない為、必然……あとは最終手段であるＢ・Ｊのパージしか、フェイトには残されていない。

「……行って」

だが、それを予測した上で、セッテはフェイトへと波状攻撃を喰らわそうとした。最初の一つでＢ・Ｊをパージさせ、あとは薄くなったＢ・Ｊしかないフェイトへと、三つのブーメランブレードによる同時攻撃を直撃させる……その必殺の手を、セッテは刹那的に導き出すと、それを実行する為に、四つのブーメランブレードの動きをまた微調整した。

「あぐっ！？」
「まずは一つ」

一つ目のブーメランブレードが、セッテの予測通りにフェイトのＢ・Ｊをパージさせた。それに笑みを零す……ことなく、ただ淡々

と、セッテは三つのブーメランブレードをフェイトにぶつけようとした。

「そして、これで……終わ」

『させない！』

しかし、Ｂ・Ｊをパージした際の衝撃で未だふらつくフェイトと三つのブーメランブレードの間に、ガッデスの二基のファングがギリギリのタイミングで割りこんできた。ファングはその矛先にビームサーベルを生じさせると、それでもって二つのブーメランブレードを破壊するが……残りの一つだけは、どうしようもなかった。

正に、セッテの予測した通りに。

「……り」

セッテの静かな呟きが終わりを迎えるのと同時に、最後のブーメランブレードがフェイトに直撃した。その一撃はフェイトに二の次を告げなくさせるほどの威力でもって、フェイトの体を枯れ葉のように吹き飛ばした。

「フェイトーーッ！？」

「ハラオウンッ！？」

先刻のガデッサと同じように吹き飛んでいくフェイト。幾つかの内蔵とアバラ骨をやられたのか、その麗しい唇からは深紅の血が零れていた。美しい顔は苦痛で歪み、黒いＢ・Ｊもただのボロ布と化していて、たった一撃で彼女が満身創痍（まんしんそうい）になったことが分かる。

「……レヴィ、撤退」

「分かった、てったいだね！　いっくよバルニフィカス！　雷剣・舞の太刀！」

『Ｙｅｓ，ｓｉｒ。雷剣・舞の太刀』

シグナムとヴィータがフェイトに気を取られている間に、レヴィはかつてフェイトも使ったことのある魔法――サンダーブレイドを、フェイトとは違う水色の魔力光で発動させた。しかし、水色とはいえ、その雷剣の周りを飛び交う電雷に一切の衰えはなく、百に届こうかという水色の雷剣が、世界を淡い色に染める。

「とりゃあぁぁあああッ！」

『ファイア』

百近い雷剣が、レヴィの声を受け、一斉に発射された。それは淡い光芒の弾幕でもって、シグナムとヴィータ、そしてガッデスへと襲いかかる。シグナムは先程からピクリとも動かないフェイトを気にしながら、その水色の弾幕へと、火竜の如き一閃を放った。

「クッ……火竜一閃！」

淡い水色の剣幕へと迫る、赤き烈火の一閃。一閃は迫りくる百近い雷剣を次々と爆発させ、その殆どを消滅させた。残るは、百近い雷剣が爆発した際に生じた煙りだけ……

そう、白い煙りだけだ。撤退するのにちょうどいい塩梅（あんばい）の目眩（めくら）ましだけが、その場に残されたのだ。

「リヴァイヴ、大丈夫？」

『……え、えぇ。生体情報にダメージはありませんから、私は大丈夫ですよ、セッテ』

「そう……よかった」
『……』

レヴィの魔法により、白い煙幕が戦場の展望を遮ると、セッテは損傷で動けないリヴァイヴへと近づき、その体を抱え上げ（お姫様だっこ）、そのままエウクレイデスへと一直線に帰還した。それに倣（なら）って、レヴィもまたエウクレイデスへと着艦し、何時の間にかＧＮガンキャノン？も、残った１８機全ての撤退を完了させた。

『撤退準備、完了。疑似ＧＮドライヴ、出力９７．５％。エウクレイデス、座標固定。転送先、座標固定。演算終了、ＧＮ転送、開始』

撤退の準備が完了したことを確認すると、『ヴェーダ』は持ち前の絶対的な演算処理能力でもって、エウクレイデスの次元転送に必要な演算を一瞬で終わらし、その戦域からすぐさま違う次元空間へと飛び去った。転送と同時に煙幕が晴れるが、その時にはもう、六課の魔導師たちにできることは何も無かった。

「……逆探知、できた？」
「……い、いいえ。あの粒子のせいで、全く……」
「……そか」

急に静かになった戦場を見渡しつつ、アースラの艦橋でそう呟いたはやての声には、勝利とは程遠い重さが……苦さが含まれていた。それは逃した獲物の大きさか、それとも新たな力を見せつけられた故か……それとも、そのどちらもか？　それははやてにしか分かり得ぬことであったが、少なくともこの時、はやては自分達が勝ったとは一ミリたりとも思っていなかったは、それだけは……確かな事である。

エウクレイデスの艦内は、出発した時と同じ重苦しさに包まれていた。

「……まずはお礼を、セッテ。貴方のお陰で助かりました」

イオリアが断腸の思いで提案し、スメラギが圧倒的な時間不足と準備不足、そして戦力不足の上で、それでも何とか成功できそうなぐらいにまで纏め上げたこの「C．O．B」作戦。だが、それの一環であった「アーニュー・リターナー抹殺」は、アニュー参戦というイレギュラーが起こり、失敗してしまった。

「……いいえ、私達もあなた達に助けられた身ですので、お礼は要りません」

アニューさえ参戦しなければ、良くて五分五分、悪くても6：4で「CB」側が勝利したことだろう。長期戦になれば、疲れを知らない機械の体を持つ此方の方が有利だからだ。それを狙っての作戦だったのだが……幾ら弱体化したとはいえ、オーバーSに名を連ねるガッデスが、裏切ったその次の日で戦場に投入されるとは、さすがのスメラギでさえも予想することはできなかった。

「そうですか。……もしよろしければ、今度、クラシック音楽を一緒に鑑賞してみませんか？　あの壮大で優雅な音は、聞いていると、とても心が癒されますよ？」

幸いにして、此方の損害は替えのきくＧＮキャノン？が１２機撃墜され、また、ガデッサが中破しただけだったが、それでも、「ＣＢ」が管理局を相手に、正面から挑んで負けた事に変わりはない。そして、この負けが連鎖的に起きて、最終的に磨り潰されていった四年前の敗北の経緯を思い返せば、「ＣＢ」側にとって、これ以上に不吉なことはないだろう。

「……心が癒される、ですか？　それは一体、どういった感覚なのでしょうか？」

だが、それでもリヴァイヴは、アニューが本気で「ＣＢ」を裏切ったとしても、彼自身は「ＣＢ」で活動しようと、そう思っていた。アニューがどうして「ＣＢ」を裏切ったのかは未だに分からなかったが、それでも彼は「ＣＢ」の行いが世界を変えると、そう信じて行動しようと思っていた。

また、リヴァイヴを助けたセッテも、自身の中に生まれ始めた様々な感情を持て余しつつ、戦場で見かけた彼女の姉妹と戦う覚悟を決めた。元々人間味が薄かったセッテだが、彼女は自身の姉妹と戦うことに、多少のやりづらさは感じても、それを拒否したいとまでは思えなかったのだ。その機械的過ぎるとまで言われた、彼女の性格によって。

「それは聞けば分かりますよ。……きっと、ですが」

「……きっと、ですか？　でも、私は聞いてみたい……です」

リヴァイヴとセッテ。共に姉妹みたいな存在が敵対勢力にいる二人。その二人が、これから起こるであろう物事――事態をどう捉え、どう判断し、どう乗り切るのか……それはまだ、先の話のことである……。

【運命の人を見つけなさい。それで、あなたは幸福になれます】

――鴨川秘様から、『電波的な彼女』の堕花雨より

第58話　Ｉｎｆｌｕｅｎｃｅ　ｏｆ　ｐｏｗｅｒ（後書き）

（……これは、何？）

（この暖かい感情は……何？）

（……分からない。でも、この感情は……不思議と、暖かい）

（そう……とても、暖かい。何だか、ポカポカする……）

（……Ｄｒ．に聞いてみよう。故障かもしれない）

（……でも、このポカポカは……心地いい……な）

第59話　People bound by a past（前書き）

【進み続ければ犠牲は増え続ける。
しかし歩みを止めてしまえば既に積み重ねてきた犠牲が無駄になる。
これから増えるはずの犠牲と、無駄になる犠牲。果たしてどちらが重いのか】

――ココロンK様より

第59話　People bound by a past

――新暦75年11月15日――

今から一年前――新暦にすれば74年――に、「CB」はある事件と遭遇した。それは後に「マリアージュ」事件と呼ばれることになる事件だったが、その事件でブリングは、古代ベルカ時代の王の一人と出会った。

その王の名は、「イクスヴェリア」。古代ベルカ時代に非道の限りを尽くした、邪知暴虐の王……だったのだが、その王はアーカイブが見つけてきた資料とは異なり、皆が平和に暮らせる世界を心の底から望む、ただ一人の幼い少女であった。

その幼い少女を追っていたのが、「マリアージュ」という、古代ベルカ時代に造られた自立増殖兵器である。「CB」は切羽詰まるアーカイブからの要請を受け、この「マリアージュ」という恐ろしき生体兵器の尽くを駆逐し、最後の決戦にてイクスヴェリアと出会うのだが……

思えば、この時にも『計画』の歯車は狂ったのかもしれない。その時にただの歯車から思考するヒトへと、その歯車――ブリング・スタビティは変わったのかもしれない。目の前で消し飛ばされたイクスヴェリアを見た彼が何を思い、何を考えたのか……それは今となっては、誰にも分からなぬ事。

だが、少なくても……少女との出会いがブリングにとっての変革だったことは、覆しようのない事実だ。でなければ、ブリングは今でも「ＣＢ」の活動に疑問を感じずに、ただ黙々と、『計画』の歯車として活動していたはずなのだから……

聖王教会と「ＣＢ」の戦争は、蒼いプトレマイオス？が白いアークと相対した時から始まった。プトレマイオス？――トレミーから発射される大量のミサイルが戦場に爆発の華を咲かせると、今度は聖王教会虎の子のＸＶ級次元航行艦――アークから主砲が放たれ、戦場に一条の光を奔らす。また、その攻防の合間で行われているのは、人と機械による、生死をかけた死闘……

『この……邪魔よッ！』

灰色のガラッゾが、いきり立つ心のままに、五本のビームクローを生やした右手を振るった。そのたった一振りで、目の前にいた三人のＢランク魔導師が、シールドもＢ・Ｊもお構いなしに、六等分に切り分けられる。さらに、それに悲鳴を上げかけた魔導師の一人も、左手のビームクローによる貫手で、その命を絶たされる。

『あんた達とは性能がダンチなのよ！　だから、私の邪魔を……するなぁあああああッ！！』

ヒリングの駆るガラッゾは、その圧倒的な性能で数の不利を覆し、聖王教会でも精鋭中の精鋭である聖王第三近衛騎士団を、その絶対的な力でもって蹂躙していた。第三近衛騎士団にいる魔導師は、その誰もが並みではない魔導師であったが、今の荒ぶるヒリングが相手では、少々以上に分が悪かった。

「……当初の予想通りに此方側の劣勢ですので、僕もこれからあそこに参戦致します。……僕の後ろと船の指揮は、貴方に任せます、騎士カリム」

「……えぇ、分かりました騎士ムーヴ。貴方に聖王様の御加護があらんことを……」

暴虐の限りを尽くすヒリングのガラッゾ。その悪鬼の奮迅ぶりは、「アーク」の艦橋までをも冷たくさせるほど恐ろしかった。しかし、それを前にしてなお、第三近衛騎士団の団長である騎士ムーヴ・スラスターは、静かな様子で「アーク」の転送ポーターから戦場に跳んでいった。そこに迷いなどは見受けられない。

その落ち着いた後ろ姿を見送ったカリムは、長い金髪をサラサラと流しながら、自身に出来る事をする為に、彼女もまた転送ポーターに乗り、「アーク」の船頭にまで跳んだ。彼女の見る風景が、モニターに囲まれた艦橋から光が煌く次元空間へと変わるが、それを楽しむ猶予はない。

「……ＡＣＯ、セットアップ」

『Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ。セットアップ・レディ』

「……ムーヴ」

カリムが見ている先で、ムーヴがデバイスをセットアップし、その身に青いＢ・Ｊを纏って、大きな肩を怒らせるガラッゾへと吶喊（とっかん）していった。カリムとは正反対な銀色の髪が風を受けて後ろになびくが、ムーヴはそれに構うこと無く、自身のデバイスでガラッゾを思いっきり串刺しにするべく、さらに速度を上げる。

「私は戦う事はできないけれど、支援するだけなら……」

ガラッゾがムーヴに気付いた頃には、既にそこはムーヴにとっての必殺距離であった。ムーヴは目の前の機械人形が人であることを知っていたが、それでも、速度は決して緩めなかった。目の前の悪鬼がこれまでにしてきた悪行の数々を思えば、ここで手を緩めることはできない。できなかった。

「……ムーヴに小アルカナのコイン7を、騎士団には大アルカナの力と正義を組み合わせた「正義は力」を」

それに、ムーヴ自身にも、速度を緩められない事情があった。「ガンダム」の悪行によって生み出された犠牲者の中には、当然のように、彼の友人隣人、果ては家族までもが含まれていた。だから彼は「ガンダム」を操るイノベイドに対し、一欠片の慈悲すら与えようとはしなかった。若干１８歳にしてＡＡＡ＋ランクにまで到達した「天才」である彼――の幼い妹は、僅か９歳でこの世から抹消（まっしょう）されてしまったのだから。目の前の、「ガンダム」たちによってッ！！

「あと、魔術師と教皇、それに運命の輪で「恵みの雨」を。これで皆さんの怪我を治します」

だが、それで我を忘れるほど怒り狂うのであれば、彼は精鋭であ

る第三近衛騎士団の団長を任されなかっただろう。彼が幼くして騎士団の団長になれたのには、その年不相応な冷静さがあったからだ。どんな時、どんな場面でも冷静沈着でいられる彼は、その実力も相(あ)俟(いま)って、現在の教会で最強の魔導師であるノア・アンダーソンに推され、第三近衛騎士団の団長にまで昇りつめたのだ。

しかし、その冷静さが時に仇となることを、この時の彼は知らなかった。

『そんなんで私を……イノベイドを殺(や)れると思ってんのッ！？　ふざけないで頂戴ッ！』

ムーヴの存在に気付いたヒリングは、無謀にも自分に近づいてきたムーヴを見て、さらに憤りを積もらせながらも、ガラッゾの左肩に付いている赤い板を上に動かした。すると、ガラッゾの左肩の内部が露出し、中の黄色い機構がムーヴにも見えるようになった。

『ＧＮフィールド、展開！』

その黄色い機構から赤橙の粒子が一気に吐き出されると、ガラッゾの周囲に赤橙色の膜が張られた。膜はガラッゾを丸く包み込むと、ムーヴのデバイスの矛先を、その表面で受け止める。

瞬間、ガギャンッという凄まじい音が聞こえてきたが、膜はムーヴの奇襲攻撃を完全に防ぎ切っていた。ムーヴのデバイスは膜の表面から数ミリほどしか進んでいない。その事実に、ムーヴはここで初めて驚愕の表情を浮かべた。

「これが、例のバリアですか……成程、硬いッ！」

『あらぁああ？　ボサッとしていると、死んじゃうわよぉおおおお

ッ！？』

ムーヴ渾身の一撃を、動かずとも受け切ったガラッゾが、今度は此方の番とばかりに、ＧＮフィールドを消して、左手のビームクローでムーヴへと斬りかかった。五本のビームクローが熊手でムーヴの右から迫る。ムーヴは攻撃直後の硬直で、その一撃を避けれそうにはない。

勝った！　と、ヒリングは思った。……金色の障壁を見るまでは。

ギィイイィイイインッ！

『な……パンツァーシルトですってッ！？　しかも、この色……こいつの魔法じゃないッ！？』

『……Ｌｉｃｅｎｓｅｒ！　これは、アークの船頭にいるカリム・グラシアの……！』

突如現れた金色のベルカ式魔法陣は、甲高い高音を出しながら、ヒリングの一撃、その威力の全てを受け止めた。シールド自体にひび割れが起こり、今にも瓦解しそうでありながらも、その障壁は決して砕けること無く、騎士に次の攻撃に移るための時間をも稼ぐ。

「騎士カリム、感謝します。……この身は烈風にて、敵を切り裂く一迅の刃！　烈風一迅（れっぷういちじん）！」

刹那、ムーヴがガラッゾの視界の内から消え去った。恐らくはソニックムーヴか何かでも使ったのだろうと、ガラッゾはそう推測し、次いで、ヴェーダの演算によって弾き出されたムーヴの出現予想場所へと、右手のビームクローを水平に薙（な）いだ。

「なっ……僕の烈風一迅をッ！？」

ビームクローがムーヴのデバイスと接触し、眩い火花を散らす。ムーヴはこの一撃にかなりの自信を抱いていたのだが、その一撃を簡単に防がれたことには、さしものムーヴですら動揺を隠し切れなかった。

『これで終わりってねッ！　「ガンダム」を舐めるんじゃないわよッ！』

動揺してできたその微かな間隙を、ヒリングは容赦なく突く。一向に収まらない苛立ちをぶつけるかのように、ガラッゾは大きく開かれた熊手を、思いっきり胸の前で交叉させた。

今度こそ殺った！　そう思ったヒリングであったが、熊手は何も無い空間で交叉しただけで、何も斬り裂くことはない。

『転送魔法!?　あの女、一体幾つの魔法を同時に使えるのよッ!?』

『回復魔法とブーストを常時展開しながら、要所要所で防御魔法や転送を行っていますので、少なく見積もっても四つか五つか……それぐらいだと推測できます』

『何よ、その異常な並列思考はッ!?　演算に特化したデバイスを使ったって、そこまで多くの魔法は使えないわよッ!?　……って、あら？』

ヒリングがガラッゾの考察に驚いていると、周囲の戦局に変化が起き始めた。ヒリングと共に第三近衛騎士団を攻め立てていた全２０機ものＧＮキャノン？が、気付けばその数を半分近くにまで減らしていたのだ。見れば、第三近衛騎士団のほぼ全員にブーストがか

けられ、スリーマンセルで一機のＧＮキャノン？に当たり、見事な連携で次々とＧＮキャノン？を撃墜していくではないか。

さすがのヒリングも、この状況には危機感を抱いた。彼女が負う任務はあくまでも囮……可能ならばアークに取りつくことが、彼女に課せられた役割なのだが、ＧＮキャノン？の支援砲撃なしにこのまま戦闘を続行すれば、たちまちの内に攻撃を集中され、ガラッゾでも無事には済まないだろう。

『……ああもう、面倒ねぇ！』

苛立ちがさらに募り、そうぼやくが、その間にもＧＮキャノン？の一機が、青を基調とするボディースーツを着た女性に撃墜された。赤く伸びる光の双剣が、爆発の中でもその鋭さを強調するかのように光る。女性は長い茶髪を次元の宙に広げながら、その滑らかな肢体で戦場を自由に駆け回っていた。

『まずは、アンタからよ！　死になさい！』

その騎士団の中でも別格な働きをする女性に、ヒリングはガラッゾを突っ込ませた。他の魔導師と違い、たった一人でもＧＮキャノン？を撃墜する彼女を、ヒリングは危険と見たのだ。バイザーの奥の目が怪しく光り、背中の疑似ＧＮドライヴからこれまでにない勢いでＧＮ粒子が放出される。両指を閉じ、ＧＮビームクローを収束させ、二本の巨大なビームサーベルを作るガラッゾ。

「……オットー」

「了解。……準備はできてる」

迫りくるガラッゾを紅い瞳に映しながら、女性――ナンバーズの

ディードが、隣りにいる片割れへと、向こうに聞こえないよう、静かに準備の程を聞いた。それに短い茶髪のオットーは、すでに終わったと答えた。その答えに頷きで答えながら、ディードはオットーの手を掴み、ＩＳ「ツインブレイド」で、一気にその場から後退した。その姿に怒りが沸騰しそうになったのは、彼女を狙っていたガラッゾ――ヒリングだ。

『逃げるんじゃないわよ、このッ！』

怒り狂うガラッゾは、ディードへと馬鹿正直に突っ込んでしまった。周りへの警戒も、常よりも怠ってしまった。そんなモノに世界が、女神が微笑むわけがない。

「オットー、今よッ！」
「レイストーム、プリズナーボックス！」
『んな……何よこれッ！？』
『ＩＳ「レイストーム」のプリズナーボックスッ！？　ガラッゾを閉じ込める気ですかッ！？』

愚直にディードへ接近していたガラッゾの周囲を、突然、半透明なケージが囲う。気付けば、オットーの指からは緑色の線が幾条も伸び、それがケージにまで繋がっていた。ヒリングは自分が罠に嵌められたことに気付くと、より怒りを増して、ケージを何度も何度も、スパイクのついたメリケンサックで殴り付ける。

ガンッガンッガンッ！　ケージから鈍い音が何度も響く。拳の一打一打にケージが軋みを上げ、今にも砕け散りそうになるが、オットーは歯を食い縛って、ケージの維持に全力を挙げた。

オットーの結界はＢクラスの攻撃ですらビクともしない強度を誇

っているが、相手は「ガンダム」、規格外のオーバーSに居座る悪鬼である。だから、オットー自身も、結界が何時まで保つのか、はっきりとは分からなかった。

しかし、それでも十分、目的は達成されていた。

『ガラッゾがオットーにより閉じ込められました！　また、ムーヴ・スラスターが左舷方向、距離１０６の所に転送され、此方に急接近してきます！』

『ＧＮキャノン？はッ！？』

『ＧＮキャノン？も第三近衛騎士団に足止めされ、此方の護衛につけるのは3機だけですぅ～！』

『クソッたれッ！　三機だけかよ！？』

『文句は言わない！　フェルト、ミレイナ。砲火を左舷に集中！　ラッセ、出来るだけムーヴと距離を取るように動かして！』

『『はい（ですぅ～）！』』

『ったく。無茶言うぜうちの戦術予報士さんはッ！』

ガラッゾがオットーのプリズナーボックスに閉じ込められている間に、カリムによってトレミーの近くへと転送されたムーヴが、気を立て直して、トレミーへと一直線に吶喊する。その進攻を止める為に、トレミーと三機のＧＮキャノン？から面の如き弾幕が張られるが、ムーヴはそれを意に介さずに、先程から単調な動きしかしないＧＮキャノン？の一機を、デバイスの矛先で刺し貫いた。盛大な爆発により、爆煙が派手に上がるが、ムーヴはそれを隠れ蓑（みの）に、もう一機のＧＮキャノン？に近づき、同じ様に胸部の中心をデバイスで貫く。

『ＧＮキャノン？、二機撃墜されました！』

フェルトの焦った声が、トレミーのブリッジに反響する。その間にも、最後のGNキャノン?が、ムーヴの烈風一迅により撃墜されてしまった。障害がなくなったムーヴは、改めて此方に砲火を集中させる「箱付き」へと向き直り、その体を前に進ませようと……

『ここまでは、私の予想通りね。後はデヴァインとディアーチェ、あなた達次第よ』

それに気が付いたのは、白い巨船であるアークの右舷を護衛していた魔導師たちが最初であった。それは2~3メートルほどの岩の塊であり、表面が凸凹していた。それがアークにどんどん近づいてきているのに、アークがこのデブリに対して何のリアクションも取らないことが、護衛の魔導師たちには疑問だった。

「どうする?」

「どうするってもなぁ~……しかたねえ、火力を集中してデブリを破壊すっか」

だがしかし。彼らはもっと違うモノに疑問を感じるべきであった。

『何故何も無いはずの次元空間にデブリがあり、また、それが出来過ぎなぐらいアークに接近してきているのか』。それを疑問に思うべきであった。Ａ・Ｆにより、ここが次元空間だと思えないとしても、せめてその岩塊から１００メートル以上は離れるべきであった。

でなければ、彼らに待つのは死、あるのみ。

『デヴァインとやら、ミス・ノリエガからだ。「作戦を開始せよ」！』

『……了解した。デヴァイン・ノヴァ、レグナント、出るッ！』

『ふん……ロード・ディアーチェ、征くぞ！』

魔導師たちがデバイスをデブリに向けた瞬間、デヴァインのレグナントとディアーチェが、デブリの光学迷彩を施されたマントを脱ぎ捨てて、戦場にその姿を現した。魔導師達はいきなり現れた一機と一人に驚き、動きを止めてしまう。

「戦場に降る地獄を、絶望と共に眺めるがいい！　インフェルノッ！」

『インフェルノ』

魔導師たちが呆気に取られている間に、ディアーチェが詠唱を唱え終える。右手に持つ先端が十字型のエルシニアクロイツが黒紫色に輝き、左手に持った魔導書からも、ディアーチェの魔力光が溢れだす。その不気味な色に腰を引きかけた魔導師たちは、しかし、そのすぐ後に、さらなる恐怖に襲われる。

「え……あ」

魔導師たちが上を見れば、そこには黒紫色の球体が――しかも、

そのどれもが数メートルか十メートル近くもある――群れをなして、魔導師たちに殺到してきたのだ。球体はただの魔力弾であるが、その威力はＢランクの魔導師すら一発で消し飛ばしてしまうほどで、それが１０も２０も３０も、頭上から降ってくるのだ。当然、魔導師たちはパニックに襲われた。

「ッ……吊るし人、「水の宮殿」！」

アークの船頭にいるカリムも、その悪夢のような光景に恐れを抱きながら、頭上から降ってくる地獄の雨に対し、彼女が発動できる最硬の防御魔法を発動させた。ディアーチェが発動させた魔法はかなり広範囲に及び、未だ距離があるアークまでをも範囲内に収めていたのだ。

そして、アークの真上から落ちてくる黒紫の魔力弾が、カリムの黄金に輝く光の奔流と衝突した。光の奔流は障壁となって巨大な魔力弾を押し止めるが、その圧力たるや、カリムの周囲に浮かぶ札型ストレージデバイス「トライアンフ」が軋みを上げるほどである。大出力での魔力行使を可能とした代わりに、他の札との組み合わせができなくなった「大アルカナ」の１２番以降の札が軋みを上げるなど、一年戦争で「闇の書」の一撃を受けた時以来だった。

『さあ、これでムーヴ・スラスターの足止めも、ナンバーズの足止めも、カリム・グラシアの足止めも完了だ！　ここまでお膳立てしたのだ、しくじるでないぞ、デヴァインとやら？』

『……分かっている。必ずブリングと話しを……決着を、つけてくる』

カリムが次々と降ってくる黒紫の魔力弾に釘付けとなっている間に、平べったい飛行形態のレグナントがアークへ近づく。それをさ

せじと、アークからの砲火がレグナントに集中するが、その全てをレグナントは回避し、遂にはアークの艦橋へと、ＧＮファングの指を突き付けた。

『……ブリングを出せ。さもなくば、いまここで船を落と……ッ！？』

アークのクルーへそう宣告すると同時に、レグナントのＥセンサーが、新たな生体反応を捉えた。カリムの転送魔法によって転送されたか……しかし、戦力となる人物はもういないはず……？　と、デヴァインが僅かに眉を寄せると、その生体反応は一転し、「ガラッゾ」の機体反応に変わった。

『……まさかッ！？』

それにデヴァインが驚いている間にも、船頭の方、レグナントの後ろから「ガラッゾ」の機体反応がとんでもないスピードで近づいてくる。デヴァインには最早思考するだけの時間はなく、瞬時に後ろへと振り向き、右手のＧＮマイクロミサイルを何発か放つ。

『……うぉおおぉおおおおッ！！』

ミサイルが爆発し、衝撃がレグナントの機体を強かに打つが、レグナントは飛行形態のまま垂直に飛んで、その場から急ぎ退避した。その一秒後に、レグナントがいた場所を、赤橙の双剣が斬り裂く。それを見て、デヴァインは我知らず歯軋(はぎし)りをした。ここまで苛立だし気な彼は、とても珍しい。

『ブリングかッ！』

『……デヴァイン、退け！　俺はお前達とは戦いたくないッ！』

『何をッ！　お前が「ＣＢ」を裏切った時から、こうなるのは自明の理だったはず！　今更ッ！』

高まる苛立ちをぶつけるかのように、レグナントの手から十本のＧＮファングが切り離され、その全てがガラッゾに向け発射された。ファングは複雑な軌道を描きながらガラッゾへと迫り、その凶爪でもってガラッゾを串刺しにしようとしていた。

『チィッ！　……俺は今の「ＣＢ」では、世界を変えられないと、そう考えた！　ただ虐殺を行うだけで、世界を破壊することしかできない「ＣＢ」が、変革された世界を再生させるなど、世迷言でしかない！』

『世界を再生させるのは、第三段階の「統一」以降のこと！　世界はまだ第二段階の「分裂」すら終わっていない！』

『それが傲慢（ごうまん）だということに、何故気付かん！？　そして、そこに至るまでに出た数多の犠牲者に、デヴァイン、お前は何も感じないのかッ！？』

『犠牲となった者を犬死にさせない為にも、オレ達は前に進むしかない！』

『……ッ！　それもまた独り善がりな考えだ！　俺達「ＣＢ」は、『神』ではないのだぞッ！？』

四方八方から襲いかかってくるファングの嵐をＧＮフィールドで防ぎ、ビームクローで何基か斬り落とすが、十本ものファングは『ヴェーダ』のバックアップがないガラッゾには防ぎ切れるものではなかった。程なくして、ガラッゾの左足がファングのビームサーベルにより斬り飛ばされる。

『グゥッ！　……そうだ、それはイノベイドも同じこと！　俺達は人類より優れていても、『神』などでは断じてない！　ただの……

ただの一個の生命体に過ぎん！』

左足を斬り飛ばされ、バランスを崩したガラッゾへと、レグナントのエグナーウィップが発射された。先端が白い球体になっているこのエグナーウィップにはＧＮフィールド突破能力があるので、ガラッゾは回避するしかなかった。思いっきり上方に飛んで、エグナーウィップを躱わそうとするガラッゾ。だが、それを読んで、四基のファングが頭上からガラッゾに襲いかかってきた。

『では、ブリングよ！　ヨハンの仇は、クロノ・ハラオウンはどうするのだ!?　まさか、貴様……仲間を討った者を許すなどと、そう考えて……！』

『クロノ・ハラオウンとは、何れ決着をつける！　だが、今は……お前達を止めることが先決だ！　これ以上の破壊は、世界には不要なのだッ！！』

一基目のファングを、ビームクローで斬り裂く。だが、二基目のファングはガラッゾの右肩に突き刺さった。三基目のファングを右肘のＧＮカッターで防ぐも、四基目のファングはその爆煙を裂いて、ガラッゾのラインセンサーを掠（かす）っていった。それにより、ガラッゾのデュアル・アイが露わとなるが、その視線の先で、レグナントは機首部の大型ＧＮキャノン?を発射しようとしていた。

それに気が付いたガラッゾは、瞬時に機体を下に動かした。それと同時にレグナントの大型ＧＮキャノンが、巨大な線条として放たれ、ガラッゾの後頭部を掠り、後方にあったアークの側面をも削っていった。その大威力に胆を冷やしながら、ガラッゾは左足と右腕が使えない状態で、レグナントとの距離を必死に縮める。

ブリングはレグナントには近接用の武装がないことを知っていた。

対艦用大型ＧＮソードもあるにはあるが、それはあくまでも対艦用であり、対人戦では無用の長物だ。だからこそクロスレンジにまで距離を詰めれば、この弱体化したガラッゾでも、勝機は十分にあるはず……！

そう甘く、甘く……どこまでも甘く、ブリングは考えていた。

『……そうか。もう「ＣＢ」に戻る気はないのだな、ブリングよ。ならば、せめて……』

『レグナントを人型形態に移行させます、Ｍｅｉｓｔｅｒ』

ガラッゾが残された左腕で、レグナントへと斬りかかる。だが、その腕は、レグナントから伸びてきた右腕に捕らえられてしまった。それに目を見張ること、一瞬。その一瞬の間に、ブリングの目の前で、レグナントが平べったい形状から異形の人型へと変形する。

『……せめて、オレの手でッ！！』

ガラッゾの左腕を容易く握り潰しながら、胴部の大型ＧＮキャノンを光らせるレグナント。ガラッゾは拘束から何とか逃れようとするも、左腕も右腕も使えないのでは、どうしようもなかった。刹那、ブリングの顔に絶望が過ぎる。

『……ッ！』

『Ｍｅｉｓｔｅｒッ！』

……

『『……？』』

……だが、何時まで経っても、予想された衝撃はやってこなかった。それを訝しんだブリングがレグナントに目を向けると、そこには、大型ＧＮキャノンを発射するかどうかで迷っているレグナントがいた。

『……ブリングよ、まだ遅くはない。「ＣＢ」に戻るのだ！　オレは、同胞を討ちたくはない！』

『……デヴァイン』

『今ならばまだ間に合う！　「ＣＢ」のライセンサーとして、イノベイドの一員として、その役割を全うするのだ、ブリング・スタビティッ！』

『……』

恐らくそれは、デヴァインからの最後の警告だったのだろう。同じ遺伝子配列を持つブリングの裏切りは、彼にはまだ信じられない出来事だったのだ。今まで一緒に過ごし、戦ってきた仲間が裏切るなどと……同胞がそんなことをするとは、到底、思えなかったのだろう。

だから、彼はブリングを説得しようとした。これが最後のチャンスだと、これを逃したら戻れなくなるぞと、そう強調しつつ。同胞を討ちたくないと、自分の意見も主張しつつ。

『……（ガラッゾ）』

『……（Ｙｅｓ，ｍｅｉｓｔｅｒ）』

しかし、ブリングの決意は固かった。それこそ、デヴァインが思うよりも、ずっとずっと……固かった。

『……デヴァイン、お前の気持ちは分かる。だが、俺は……それで

も、「ＣＢ」には戻らん！』
『デヴァインッ！』
『ガラッゾ、脱出！』
『Ｙｅｓ，ｍｅｉｓｔｅｒ！　コアファイターシステムを起動させます！』

デヴァインの必死さが、ブリングの心に細波を広げ、彼の心を少しだけ揺り動かす。だが、ブリングはその心を「決意」で無理やり捻じ伏せると、デヴァインに「ＣＢ」から離反した事実を見せつける為、今のガラッゾに残された最後の手段を行使しようとした。

『な……まさかッ！？』
『分離、行きます！』

ガラッゾの背中にある細長い円形状の物体が、静かにガラッゾの背面から分離した。物体は両面の翼のような部位を広げると、そのままガラッゾとレグナントから飛び去っていった。それにデヴァインが瞠目していると、突然、ガラッゾから眩い光が……

『し、しま……ッ！』
『じ、じば……ッ！』

そして、戦場に赤橙色の華が一輪、パッと咲く。それはとても綺麗で綺麗で、何処まで行っても綺麗で……人心を惑わしそうなほど、綺麗なモノであった。

また、この爆発を機に、「ＣＢ」はその戦場から撤退。聖王教会はこれに追撃をかける余力が無かった為、追撃戦も行われなかった。それに安堵したのは、一体どちらか……最も、スメラギはこの撤退すら見越して戦術プランを練っていただろうから、この結果もあるいは、彼女の予想通りだったのか……。

「……あの時、どうして俺を戦場に出した？　確かに、それが最良の手で、俺にもメリットのある判断ではあるが……」

「……直感、といったら駄目でしょうか？　少なくても、私はあの時、そうするしかないと思いましたから、そうしたまでです」

……結局、「ＣＢ」はＢｅｔｒａｙｅｒのブリング・スタビティを討つことができなかった。それどころか、レグナントの中破という損害を被ってしまい、痛手を負ってしまう結果となってしまった。それでも、自爆したことで機体を一から再構築し直さなければならないガラッゾよりは軽傷であったが。

「……直感だと？」

「私の直感はよく当たるのです。それがレアスキルのせいかは分かりませんが。……では、改めまして。聖王教会へようこそ、元「ＣＢ」のライセンサー、ブリング・スタビティさん？」

長くかかりそうなガラッゾの修復と、デヴァインにしてしまった仕打ちに、思わず気持ちが重くなる。しかし、その顔は能面のままで、何の感情も見て取れなかった。そんなブリングへと、カリムはニコリッと、あくまでも優しい風を装って、ブリングを教会に受け入れることを明らかにした。例えその内で激情が暴れ回っていようとも、それを一片たりとも外に出さず、カリムはブリングに冷たく笑いかける。

ブリングはその笑みの裏側でのたうち回る激情に気付かずに、やや気落ちした声で、こう答えた。

「……最初にも言ったが、俺のことはブリングでいい」

【『悪』の反対は『善』である。しかし、『真の悪』とは他人を顧みない『独善』である】

――ダイモン様より

第59話　People bound by a past（後書き）

（シャッハを殺したのは、「三つ目」……）

（そして、目の前にいる男は、「三つ目」と同じ「CB」に所属していた男……）

（正直にいいますと、憎しみがないわけではありません。……私が今もこの男に冷たく接しているのが、その証拠です）

（しかし、憎しみの連鎖はここで断ち切らねばなりません。例え目の前の男の仲間がシャッハを殺したとしても、私は彼に憎しみを向けてはならないのです）

（……あとどのくらい時が経てば、この胸の痛みは収まるのでしょうか？）

（どうか、この私に教えて下さい、聖王様……）

第60話　Ｓｔｒｏｎｇｅｓｔ　Ｘ　Ｓｔｒｏｎｇｅｓｔ（前書き）

【人が前に進むことをやめてしまうのは、絶望するからじゃない、
絶望から這い上がろうと努力することを諦めてしまうからだ！
そして、人が前に進むのは、そこに希望があるからじゃないく、
希望を探す意思があるからだ！】

――白李様より

第60話　Ｓｔｒｏｎｇｅｓｔ　Ｘ　Ｓｔｒｏｎｇｅｓｔ

――新暦７５年１２月１５日――

リジェネ・レジェッタとリボンズ・アルマークは、間違っても仲がいいとは言えなかった。リボンズはリジェネのことを高評価していたが、その上から目線が、リジェネには到底許せるものではなかった。

リジェネには自尊心もあれば、当然、野心もある。だから彼はリボンズの独裁者然とした態度が、最初から気に食わなかった。例え高評価されていようとも、それはあくまでもリボンズの下、格下相手を見る風体が前提であり、リジェネのことなど、実際にはまるで眼中にも……相手にすらされていなかった。彼と同異体であるティエリア・アーデは同格の相手だと認められているのに、である。

だが、それも致し方ないこと。ティエリアは『ヴェーダ』とのシンクロ率が、同胞の中で最も高い「最高」のイノベイドで、リボンズは戦闘能力が同胞中、最も高かった「最強」のイノベイドなのだから、その二人が七人いるイノベイドの中でも別格となるのに、然程、不思議はなかった。リジェネもそれについては、頭で理解したつもりだった。

しかし、頭で理解していても、心の方では納得ができなかった。彼と自分は遺伝子配列が違うとはいえ、育った環境は同じなはず――なのに、何故こうも差が付くのか――それがリジェネには、何にも増して理不尽なモノに思えた。

それからだ、リジェネがリボンズに反意を抱き始めたのは。彼の

あの傲慢な性格を嫌い始めたのも、その理不尽を意識し始めた頃だった。リジェネは「ＣＢ」の『計画』に差支えがない程度にリボンズと協力しながら、その笑顔の裏で、リボンズを避けていたのだ。

それもこれも、生まれてまだ間もない彼の幼い精神を、嫉妬を始めとする精神的なストレスから護る為に……。

だが、そんな彼を大いに揺さぶる出来事があった。それが四年前の戦争における、「ＣＢ」側の完全敗北だ。当時の二大超組織であった時空管理局や世界清浄と戦った「ＣＢ」は、その戦争において、これでもかというほどの完膚無き敗退を経験してしまう。世界清浄を壊滅にまで追い込んだ「ＣＢ」だったが、それすらも全て、時空管理局の手の平の上で転がされた事だったのだ。

しかし、これだけだったら彼もまだ「ＣＢ」を見限りはしなかっただろう。問題はその後だ。その後に訪れた平和な世界にこそ、彼の理念は砕かれたのだ。

第９７管理外世界・南極の地下に造られた「ＣＢ」の予備基地。その内部にいたリジェネは、ついっと、頭上を見上げた。彼の見上げる先では、パラパラ、パラパラと、長年に渡って降り積もった埃（ほこり）

が落ちていたが、リジェネはそれを見て、遂に来るべき時が来たのだと、そう悟った。

「いや～、それにしても……この疑似ＧＮデバイスは研究のし甲斐があるねぇ～」

「そうですね、ビリーさん！　こんなオーバーテクノロジー、ロストロギア以外ではお目にかかれませんもの！」

「随分と興奮しているね、ティーダ君。でもその気持ち、僕も分かるよ」

リジェネが視線を戻すと、そこには白衣を着た二人が、目の前に置かれた３０個もの疑似ＧＮデバイスに、涎を垂らしそうになるほど見入った姿があった。その脇でも、ミッド製ＰＣを操作する解析班の数十人が、酷く興奮した様子でスクリーンに喰いついていた。その純粋な科学者然とした姿勢に、クスクスと微笑を漏らしながら、彼は自分の疑似ＧＮデバイス「ガデッサ」を握りしめ、地下から地表に上がる高速エレベーターに乗り込んだ。

「ふふ……予想よりも随分と早いね。やっぱり「ＣＢ」は本気みたいだ」

エレベーターが地上へと上がる間、リジェネは自分の精神を落ち着かせることに全力を注いだ。これから自分が戦うであろう「ガンダム」――セラヴィー「ガンダム」を思い浮かべると、足が自然と震えてしまう。あの圧倒的な火力と防御力を持つセラヴィーと戦う……それを考えただけで、体中に怖気が奔る。

「……ティエリアとだけは、殺し合いたくなかったね……」

それに、セラヴィーのガンダムマイスターは、自分と同じ遺伝子

配列のティエリアなのだ。本当の意味で兄弟のような彼とだけは、さしものリジェネも戦いたいとは思わなかった。リボンズならともかく……その呟きが静かに虚空に消えるのと同時に、戦端へと繋がるエレベーターのドアが、プシュッと音を出して、左右に開いた。

リジェネの眼前に広がった光景は、凄惨さを極めていた。彼の見ている先で、「ＡＬＡＷＳ」から魔法で耐寒使用にされた地対空ミサイルや対戦車ロケット砲、８４ｍｍ無反動砲などが放たれ、何人かの魔導師からも、様々な魔法が発動され、南極の大地に氷の粉塵を巻き上げていた……が、その先にいる敵機は……

「だ、駄目だッ、まるで効いてねえッ!?」「何なんだ、こいつらはッ!?」「うわぁあああッ!?」「アポロォオオオッ!?」

まるでその砲火が存在しないかの如く、戦場を横断し続けていた。時たま放たれる赤橙の砲撃で、此方は甚大な被害が出るというのに、敵機の集団はその数を減らす気配すら見せずに、ただ黙々と、前進し続ける。

「これは……ガジェット？　まさか、そんな物まで投入してくるなんて……そんなに「ＣＢ」は僕を殺したいのかな？」

リジェネが「ガジェット」と呼んだ機械兵器は、「Ｊ・Ｓ」事件で猛威を振るったＡＭＦを搭載する兵器群・「ガジェットドローン」のことで、ジェイル・スカリエッティの創作物としても有名な兵器である。ミッドチルダに住む者ならば、一度くらいは名を聞いたことがあるだろう。そして、その厄介さも。

リジェネの見ている先で、ガジェットに普通の射撃魔法を撃ち込んだ魔導師が、赤橙の光に呑まれていった。リジェネはそれを冷静に見据えつつ、内心で先程の魔導師を馬鹿な奴、だと罵った。ガジェットに普通の魔法が効かないことは、すでに先の大事件で証明されているのだ。にも拘らず、そんな無駄なことをするなんて……

「全く。もしリボンズが見ていたら、きっと彼は不機嫌そうに「この劣等者がッ！」なんて言うかもね。ティエリアは「万死に値する！」かな？　まあ、今の僕には関係のないことなんだけど……ん？」

目の前でまた数人、敵機から放たれた一条の光に消し飛ばされた。だが、向こうからの攻撃はその一条のみで、決して他の攻撃はやってこない……リジェネはそれに何かひっかかる物を感じたが、それを深くは考えなかった。今は目の前の敵機を殲滅する、それだけが大事な事だと思っていたからに。

「ガデッサ、セットアップ！」

『Ｙｅｓ，Ｌｉｃｅｎｓｅｒ。セットアップ、レディ。ＧＮＺ－００３　ＧＡＤＥＳＳＡ　インストール、コンプリート』

リジェネという一個の存在が、一機のガデッサに変換されると、リジェネはまず試しに一射、ＧＮメガランチャーによる砲撃を敵機へと放ってみた。その光りの奔流はリジェネが見ている先で大爆発

を起こし、敵機諸共、氷の大地を抉った……はずだった。

『……何かおかしいとは思わないかい、ガデッサ？　少なくても僕は、このガデッサの砲撃を受けても無傷なのはあり得ないと思うんだけど……』

しかし、敵機はそれでも見る限り無傷で行進をし続ける。それにはっきりとした違和感を感じたリジェネは、Ａ．Ｉの「ＧＡＤＥＳＳＡ」へと聞いてみた。あれが本当に存在する物なのかどうかを。

『Ｙｅｓ，ｌｉｃｅｎｓｅｒ。私も同じことを考えていました。しかし、光学カメラでもＥセンサーでも、敵機の存在は確かに確認され……』

『……幻術魔法やクワットロのシルバーカーテンの可能性は？』

Ａ．Ｉの考えが自身と同じであったことに頷きつつ、考え得る可能性を提示してみるリジェネ。ガデッサは数秒ほど考えてから、それに答えた。

『ゼロではありませんが、それでも、ここまでの幻影は……いえ、もしかしたらクワットロとセファーの……それならば、あるいは可能かもしれません』

『……つまり、目の前の敵機は幻影に過ぎないんだね？　それじゃあ、本命は……！』

目の前にいる数百機近い敵機の全てが幻影なのは、さしものリジェネとて中々に信じられる物ではなかったが、リジェネはそれを現に存在する物として割り切った。それに、今の彼には信じる信じないで悩む余裕など、ありはしないのだ。

何故ならば、リジェネの視線の先に、『神』の如き純白の機体が唐突に現れたからだ。その純白の機体の名は「1(アイ)ガンダム」……最強のイノベイドたるリボンズ・アルマークの為に造られた機体で、「ガンダム」の名を冠することを許されし機体……！

『ティエリアじゃなくて、リボンズが僕を討ちにやってきたのかッ！』

『見つけたよ、リジェネ・レジェッタッ！』

無論、このガデッサよりも高性能なのは言うまでもない。しかも、向こうには『ヴェーダ』のバックアップもあるのだ。それを考え、リジェネは人知れず、データと化した体で冷や汗を流した。

『同じ疑似ＧＮデバイスのよしみで、私があなたを討ってあげますよ、ガデッサ！』

『Ｌｉｃｅｎｓｅｒに従うのが私の使命です、1(アイ)』

その冷や汗を拭(ぬぐ)うよりも早く、1ガンダムがガデッサの方へと、まるで弾丸のような勢いで飛翔してきた。その左手には一本のＧＮビームサーベルが握られおり、砲戦仕様のガデッサの弱点となっている近接戦を行おうとしているのが分かる。

リジェネもその思惑に気付くが、彼は敢えてＧＮメガランチャーを腰に戻し、1ガンダムとの近接戦を望んだ。右手と左手にそれぞれＧＮビームサーベルを握る。

それに驚いたのは、1ガンダムの方であった。1ガンダムは万能機で、クロスでもミドルでも問題なく戦えるが、ガデッサの本領を発揮するには、どうしてもロングかアウトの距離が欲しいのだ。それなのに、目の前の裏切り者はクロスレンジで挑もうとする……

リボンズはこの時、リジェネに自分を侮られたと思った。だから、怒りも手伝って、その剣筋も自然、激しい物となる。

『僕と1ガンダムに近接戦を挑むなんて、僕達を舐めているのかい、リジェネッ!?』

『まさか！　これは確認だよ。今の僕がどれだけ君達と戦えるかの、ね！』

ガデッサは1ガンダムから放たれた斬撃を片手で受け止めつつ、もう一方のビームサーベルで1ガンダムの胴部を薙ごうとした。しかし、1ガンダムはそれを察して、素早く後方へと下がる。何もない所を通り過ぎるビームサーベル。1ガンダムはそれが戻らない内に、再びガデッサへと突撃する。

『僕達とどれだけ戦えるか、だって？　あははは、笑える冗談だね、リジェネ？』

1ガンダムのGNビームライフルから赤橙の光条が一線、放たれる。ガデッサはギリギリのタイミングで首を傾げ、それを何とか回避するが、その間に1ガンダムはガデッサとの距離を詰め、左手のビーサーベルを下から切り上げる。

『グゥッ!?』

苦しげな声を出しながら、その下から迫る一閃を、十字に交叉させたサーベルで防ぐガデッサ。その瞬間、無防備となったガデッサの腹部に、1ガンダムの足裏が轟音と共にめり込む。それにまた苦しげな声を漏らすガデッサ。

『君如きがこの僕と、一体どれだけ戦えるんだと言うんだい？　今の様な、無様な姿を晒している君が！』

氷の大地を削り、二本のサーベルを取りこぼしながら、５０メートル以上も蹴り飛ばされていくガデッサ。その姿を、リボンズは無様だと評す。それに怒りを、屈辱を感じながら、ガデッサがすぐさま姿勢を立て直す……と、ガデッサのモニターに１ガンダムの赤いデュアルアイが、視界一杯に広がった。

『なッ！？』

『はっきり言って、君には失望したよ、リジェネ』

『ガハァアアアッ！？』

再び繰り出された前蹴りを、ガデッサは空いた両腕で受け止める。だが、１ガンダムはその両腕を基点に飛び上がり、基点にした脚の逆脚でハイキックをガデッサの側頭部へと打ち込んだ。１ガンダムの脹脛（ふくらはぎ）の青紫色が、何故かリジェネの脳裏に色濃く焼き付く。

『僕は君の事を、とても高く評価していたんだけどね？』

ハイキックをまともに喰らったガデッサは、左膝を氷の地表へとついた。１ガンダムはその敗者同然の姿を冷たく見下ろしながら、ＧＮビームライフルの銃口をガデッサの後頭部に押し付けた。これでジ・エンドだと、リジェネにそう思い知らせるように。

『けど、君は「ＣＢ」を裏切った。してはいけない事をしてしまったんだ。あのアレハンドロ・コーナーのように、君はもう死ぬ運命にあるんだよ』

これが「ＣＢ」を裏切った者の末路だと、そう世界に見せつける

ように、

『この上位者たる僕の手で、ね』

1ガンダムの人差し指が、何の躊躇(ためら)いもなくライフルの引き金を引いた。

ミスター・ブシドーは黒いボディースーツ状のB・Jを纏いながら、幻影に過ぎない敵機の間を掻い潜って、この幻影を生み出す術者本人を叩こうとしていた。黒い空に白い雪が粉末状に飛び散るが、その美しさに目を奪われるよりも早く、ブシドーはその場を後にする。

ブシドーは「CB」が攻めてきたと聞いた時、誰よりも早く戦場へと駆け出したが、その時に目にしたのは砲台とガジェットのみで、お目当ての「ガンダム」は一機も見つけることができなかった。そして、「ガンダム」のいない戦闘にブシドーが興味を抱くはずもなく、彼はすぐさま敵機を謎の力で幻影だと見抜くと、この戦闘を速攻で終わらすために、術者本人を叩こうとしていた。

ちなみに。その時の「なぜ私を抱き締めに来ない、ガンダァアア

アアムッ！？」という叫びは、数多くの「Ａ－ＬＡＷＳ」の将校をガタガタと震えさせたという。無論、恐怖やドン引きという意味で、だ。

「……む？　これは……「ガンダム」の気配かッ！」

延々と続く幻影の列を、猛スピードで飛び越していたグラハムだが、彼は突然、とある気配を肌で感じ、その場に踏み止まった。その気配は四年前にはよく経験した物で、最近でも経験したことのある物だった。殺気立つ肌、死闘の気配、威圧感……この圧倒的な存在感を、グラハムは刹那たりとも忘れた事はない。

「来るか、ガンダ……ム？」

しかし、グラハムの目の前に現れたのは、彼の予想に反して、赤いバイザーと一対の長い角が特徴的な、真っ黒い機械人形であった。その機械人形は手にした二本の刀をだらんと下げ、こちらの反応を窺っているかのように、ブシドーの正面でただ立ち尽くしていた。

「ば、馬鹿な……それは、そのＭ．Ｓは……！」

ブシドーがわなわなと双剣のサキガケを震わせる。彼の目は「ガンダム」でもないのに、目の前の機体に釘付けであった。信じられない。その単語を、ブシドーの気配から察することができた。

『……グラハム・エーカー。かつてありし「世界清浄」最強のトップエースとして、その名を世界に轟かせた軍人……世間に疎い私ですらも、彼の武勇は聞いたことがある。最も、今は何故かミスター・ブシドーと呼ばれているらしいが……』

『ほっほう！　それほどの軍人ならば、必ずや強者（つわもの）に違いあるまい

！　さあ、さあああ、ＳＡＡＡＡッ！！　戦の……始まりだァアアアッ！！』

カチャリっ。黒い機体――益荒男（ますらお）が、両手の長刀と短刀を構える。それを見て、ブシドーも一拍遅れでサキガケを構えた。それと同時に、益荒男が雪原を踏み台にして、ブシドーへと飛ぶ。その速度は、「黒い流星」と讃えられたブシドーの目を剥かせるほど、速かった。

ガギィイイインッ！！

「何故、何故そのＭ・Ｓをッ！？　それは我が盟友……」

『これを防ぐか！』

『ぬおぉおおおおッ！！　これはイイ死闘になりそうな予感ッ！　イイ、いいぞミスター・ブシドォオオオオオッ！　もっとだ、もっともっともっと……某（それがし）と死合おうぞォオオオオオッ！！』

それぞれの持つ双剣が、鈍い金属音を発しながらぶつかり合った。ぶつかった時に生じた衝撃波が、空から降ってくる雪を吹き飛ばす。単眼の幻影も僅かばかり揺らめいて、その存在をあやふやな物とする。

「……カタギリが造ろうとしている「磨修羅生（ますらお）」ではないかッ！？」

ブシドーの驚く声が雪原に響く中、白い雪を吹き飛ばしながら、益荒男の刀が一閃された。長刀はサキガケを持ったブシドーごと、その体を簡単に押し弾いた。ブシドーの両手がジーンと痺れるが、彼はそれでもサキガケを取りこぼさずに、正面の益荒男をフェイスガード越しに睨みつける。

「貴様、一体どうやってそれを……！」

『ふん……益荒男、残念ながら時間切れだ。どうやら目的は達成されたようだ。引き上げるぞ』

『し、しかしだな、Ｌｉｃｅｎｓｅｒ！　折角楽しくなってきたというのに、このまま引き下がるなぞ……！』

『お前の言いたい事は分かる。だから……』

ブシドーがフェイスガードとマスクの下で、どんな顔をしているのか。きっとそれは阿修羅よりも恐ろしい物だろう……益荒男のライセンサーであるトーレはそう推測付けながら、二度目の猛進を行った。白雪が足元から盛大に舞い上がるが、トーレはそれを無視してブシドーに迫る。

『……デバイスの一つでも、土産にしよう』

トーレが駆る益荒男の、二メートルを超えようかという体躯から繰り出された恐ろしき一撃は、威力もさることながら、その速度も尋常な物ではない。ブシドーが思わず刀身を見失ってしまうほど、その一撃は速い。ブシドーは咄嗟の判断でサキガケを正面で交叉させるが、その防御の上からもお構いなしに、益荒男は刀を叩き付けた。

その際にブシドーの足裏が十センチ以上も大地に沈むが、ブシドーは気合でそれに耐えきろうとした。腕が限界を超えた行使に悲鳴を上げ、足が陥没する地面に埋まっていこうとも、この一撃に屈しない為に、ブシドーは己の全力でもって、益荒男に対抗する。

だが、力量の差は歴然としていた。いや、そもそも……サキガケに代わるＭ．Ｓとして、いまだ開発途中であったはずの益荒男相手に、今のブシドーが敵うはずがなかった。

バキンッ！

「なっ、なんだとッ！？」

その音は無情にもサキガケの刀身から聞こえてきた。長刀短刀、そのどちらにもヒビが入り、破片がブシドーの後ろへと流れていく。益荒男による人外の斬撃は、人が使うことを前提とするデバイスの限界を超え、その耐久を大きく上回ったのだ。

『……では、これにて』
『一戟（いちげき）終了なりッ！！』

益荒男の二撃目により、先程よりもさらに大きな音を出すサキガケ。直後、サキガケは無数の破片を散らして、益荒男により粉砕された。どこまでも細かく、力量の差を表すかのように。それに目を大きく見開いて食い入るブシドー。

「き、貴様ッ！」

サキガケを砕かれた事で、一気に戦闘能力を下げたブシドーに、益荒男は見向きもせずに去っていった。その後ろ姿を、ブシドーはただ見詰めるしかなかった。言葉にし難い屈辱に、ブシドーは思わず地面を蹴る。だが、地面はブシドーに痛みを与えるだけで、他にも与えてくれない。くれなかった。

そして、そのブシドーの蹴りでもって、その死合いは、剣戟は……呆気ないほど静かに、その重たい幕を下した。ブシドーの心に、新たな傷痕（きずあと）を残したまま……。

ブシドーが憤然としながら予備基地の方に戻ると、そこは凄絶な様子となっていた。地下を往来するエレベーターは入り口が何処にあるのか分からないほど破壊され、その周辺地域も、白い世界には不似合いな焼け野原となっていた。ブシドーが焼け野原の土をすくってみると、それはサラサラと風に飛ばされていった。夜闇の中で目を凝らしてみると、所々が超高温にでもさらされたのか、月光を反射するガラスにもなっている。

「やはり、「ＣＢ」はここを狙って……」
「襲撃をしかけてきたんだよ、ミスター・ブシドー」

破壊された痕がはっきりと残るエレベーターを見詰めていたブシドーの言葉に、リジェネは確信の言葉を被せた。リジェネの顔はさっきまでの自信ありげな表情から一変し、かなりの疲労が見て取れる表情になっていた。リジェネの方もかなりの激戦だったのだろう……ブシドーはそう思いながら、口を開く。

「……貴公がそう言うのであれば、そうなのだろうな。さて、リジェネとやら。お主にも地下にいる研究者たちの救助を手伝ってもらうぞ。反論は聞かんからな」
「勿論それぐらいは手伝……ん？」
「何だ、どうし……おぉ！」

わらわらと集まってきた「Ａ－ＬＡＷＳ」の残存部隊の中心で、ブシドーとリジェネが喋っていると、突然、彼らの見ている先で、ミッド式の魔法陣が展開された。その色は澄み渡る水色と翡翠色で、リジェネはともかく、ブシドーには見慣れた色であった。

魔法陣が展開されると、すぐにその上に人が現れた。転送魔法……それも、何十人もの人を一度に転送させる高位のトランスポーター・ハイ。ブシドーはこういった魔法を全くといっていいほど使えないが、彼の盟友は逆にこういった魔法が得意であった。

「いや、危うく生き埋めになるところだったよ。こんなこともあろうかと、シェルターを作っておいてよかったよ。誰も怪我はないよね？」

「でも、ビリーさんは凄いですよ！　これだけの人数を一度に転送できるんですから！」

「僕なんてまだまださ、ティーダ君。それよりも、現状がどうなっているのかを知りたいんだけど……ブシドーはどこにいるんだろうねぇ？」

何時ものと変わらない穏やかさ。その普段と変わらぬ姿を見て、本当に危機があったのかついつい疑ってしまうが、今はそれを押さえて、盟友の無事を純粋に喜ぶブシドー。リジェネも、彼が一目置く研究者が無事だったことに安堵の吐息を漏らした。疑似ＧＮデバイスを解析し、その性能の全てを明らかにするには、優秀な研究者は幾らいても足りないのだ。

「おい、アルマーク。セファーから聞いたぞ。どうしてあんな行動をとったりしたんだ？」
「……君には関係のないことさ、トーレ」
「いや、関係はある。同じ任務に就いた関係がな。……貴様はどうして裏切り者であるレジェッタを見逃したりしたんだ？　答えろ、アルマーク」
「この件については、僕がけじめをつける。だから、君は黙っててくれないかな？」

無事にラグランジュ４に帰還したはずのトーレとリボンズは、今や一触即発な空気を醸し出しつつ相対していた。両者とも、すぐにデバイスを持ちだしそうな雰囲気である。それを遠目から見ていたセファーとクワットロは、決して向こうに聞こえないよう、防音の結界を張りながら喋り始めた。

「むぅ……あれが世に言う「夫婦喧嘩」？」
「それは使い方を間違っていますわよ、セファー。……それにしても、リボンズ・アルマークはどうしてあんな行動をとったんでしょうかねぇ？　プライド高い彼が見逃すとは思えませんし……」
「それは吾輩にも謎、理解できず」

彼らは今にも激突しそうな二人から、優に百メートルほど距離を取りながら、先程のリボンズの行動について話し合い始めた。出撃する前は、あれほど殺気を昂ぶらせていたリボンズが、どうしてリジェネを見逃したのか……その結論はどれだけ議論をしても、結局、最後まで出ることはなかった。

「……そうか。なら、あとはお前の勝手にしろ！　私はもう知らん！」

「ああ、そうしてもらったほうがありがたいね。僕にとっても、ね！」

「「ふんっ！」」

トーレとリボンズの衝突は、実に３０分以上も続いた。二人は最後にそう言い捨てると、互いに反対の方へと歩き出し、そのまま格納庫から出ていった。ラグランジュ４のメンバーたちは触らぬ神に祟りなし、とでもいうように、二人のことには関わらなかった。かくいうクワットロとセファーもその口である。

「あら、困りましたわねぇ～。裏切りだけでなく、こんな問題も起きるなんて……Ｄｒ．はどうするんでしょうか？　もう「ＣＢ」は泥舟になっているんじゃなくて？　あなたはどう思いますか、セファー？」

「……まあ、まだ保つはする。だが、長くないことは確実」

「私も同意見ですわ」

トーレとリボンズ。互いにナンバーズとイノベイドで最強に位置する二人。そんな二人が不仲となる原因となった今作戦。これにまたイオリアは頭を抱え、苦い顔をするのだが、世界はそれすらも内包し、時を進める……

「……（今度、リボンズとトーレが付き合いだしたと、ジェイルに嘘の情報を流してみよう。それでどうなるか、甚だ楽しみ）」

そして、時は新暦７５年１２月２４日。この日はトレディア・グ

ラーゼ主催の「イヴ・パーティー」が開催される日である。その日に何が起きるのか……それを知って、「アーカイブ」は一人、ほくそ笑んだ。

「マスター、向こうの準備は整ったそうです。程無く招待状が来ると思いますが……」

「そう？　なら、あとは僕達次第だね、シュテル。一緒に頑張ろうか？」

「はい、マスター。一緒に頑張りましょう」

笑みを湛えながら、アーカイブは正装用のスーツを着た。この緑色のスーツは、彼のお気に入りだ。鼻歌交じりにそれを着ていると、空中に浮かぶモニターに招待状を兼ねるメールが届く。それを手持ちの端末にコピーしながら、アーカイブは外に繋がるドアへと歩き出す。彼の秘書である彼女も、当然のようにその後ろについていく。

「楽しいパーティーになりそうだね、シュテル」

「はい、マスター。とても楽しくなるかと……」

彼らがこれから向かう先には、美しい森に囲まれていることで知られるトレディア・グラーゼの別宅があり、そこでは今宵、沢山の著名人が集まるパーティー、「イヴ・パーティー」が行われる予定であった。アーカイブはそのパーティーに参加するために、今からそこに向かって出発しようとしていた。

高級そうな車のエンジンが、誰もいない駐車場に響く。その音の余韻が終わらない内に、アーカイブとその秘書を乗せた車は、駐車場からトレディアの別宅へと発進した。アーカイブは秘書が運転する車に身をゆったりと預けながら、このパーティーの参加者名簿を隅から隅まで閲覧する。

参加者名簿の中には、機動六課のメンバーもいた。八神はやて、フェイト・T・ハラオウン、チンク……どうやら他のメンバーは順調に護衛任務の方に駆り出されるらしい。あの機動六課すら護衛に回せると、周囲にそうアピールするのも、このパーティーの目的の一つだった。それが成功したことに、アーカイブは自然と笑みを零した。

別のページを見ると、今度は聖王教会や「Ａ－ＬＡＷＳ」からの参加者だ。聖王教会からはカリム・グラシアとヴェロッサ・アコース、それに「ナンバーズ」のセインが参加している。また「Ａ－ＬＡＷＳ」からはアイシスとジャック・ザ・リッパー、それと……あの「裏切り者」リジェネ・レジェッタが参加するらしい。最も、リジェネに関してはどこまで本当か分からなかったが……もし本当に参加するのであれば、一波乱起きそうだ。

錚々（そうそう）たる面子が揃っている……アーカイブはそう思いながら、最後のページを捲（めく）った。そこには、このパーティーで最も騒ぎを起こしそうな顔ぶれが載っていた。

その最後のページに乗っていた三人の人物が起こすであろう混沌に、アーカイブはまた笑みを零す。ふふ……主の笑い声に、隣りで運転していた秘書も笑う。アーカイブは秘書の笑い声をＢＧＭに、三人の名前を目で追った。

刹那・Ｆ・セイエイ

ティエリア・アーデ

ミズキ・ドライ

それら三人の名前は、二人の「ガンダムマイスター」と一機の「ナンバーズ」を示すものだった。そして、それを知っていたアーカイブは、再びこれから起こるであろう出来事に胸を躍らせ、独りで笑う……

【歴史はスタジオで造られる】

――ＥＸＡＭ様から、アニメ版『星のカービィ』のデデデ大王より

第60話　Ｓｔｒｏｎｇｅｓｔ　Ｘ　Ｓｔｒｏｎｇｅｓｔ（後書き）

（多分、はやてたちは「アーカイブ」と「ラヴクラフト」が同一の人物だということを見抜いている……）

（なら、僕は……それを利用させてもらおう。最近、あまりにも「ＣＢ」関連の情報が上がってこないって、僕を疑っている人もいるみたいだし……）

（……あの二人も、薄々気付き始めていることだしね。疑いの芽はなるべく早めに摘んだ方がいい）

（でも、まさかこれが三カ月も持たないなんてね……やっぱり、彼女たちは優秀だよ。捜査官と執務官のトップエリート……彼には気の毒だけど、寧ろよく三カ月も保ったというべきかな？）

（でも、三年間の仕込みをたった三カ月で解明されたのは、ちょっと悔しいね。結構自信あったんだけど……やっぱり、執務官と捜査官が協力するのも想定に入れておくべきだったかな？）

（まあ、今となっては過ぎたことだし、別にいいか。……さようなら、アーカイブ。もしくは、ラヴクラフト。何、心配しなくても大丈夫さ。だって……）

（……だって、もう三番目は準備できているんだから）

幕間―5　（前書き）

【偽善者（ピエロ）は硝子（ガラス）の心で泣きながら笑顔を浮かべる】

――ＥＸＡＭ様より

幕間―5

――新暦７５年１２月２２日――

中央技術開発局の第一局長室。そこでは今日も、他の研究を中断してまで、セファーの魔法を研究していた。

部屋の中央にある、巨大な四角のテーブルは相変わらずゴチャゴチャしていた。どう見ても機密情報にしか思えないような資料も、そこらへんに無造作に捨て置かれている。そのテーブルの奥には、さらに多くの資料を積み重ねている白っぽい机が、その上に一台のモニターを置いて設置してある。

薄汚いと間違いなく断言できる部屋の惨状。その中で、茶色の髪を左サイドで一つにまとめる高町なのはは、六課の白と青の制服を着たまま、既に飲み慣れた独特の味のコーヒーを静かに啜った。その視線の先には、分厚い資料と睨めっこをしている白衣姿のイリス＝ラビリンスがいる。イリスは五十という齢にしては若々しく見えたが、今は最初に出会った頃よりも老けているような気がする。手に持つ資料は日に日に厚くなるが、それでも解決口は一向に……見えてこなかった。

「「……」」

いや、当初よりは解決口に近づいてはいるのだ。その証拠に、ザフィーラから齎されたアルハザード式の情報によって、なのはにかけられた「エンドレス・コア・シール」は、その構成の全てをイリスの前にさらけ出していた。当初の取っ掛かりすら掴めなかった状況から考えれば、大きな進歩と言えるだろう。

だが、問題はその進んだ先にもあった。それも、最初のとは違って純粋な問題が。

「詰まる所……演算能力が圧倒的に不足しているということ。このまま計算を続けていたら、どう少なく見積もっても全てを解除するのに数年か十年以上はかかるでしょう」

「……え？」

イリスの疲れきった声は、事態がかなり深刻であることを告げていた。

「はっきり言って、この魔法を構成しているプログラムの量は異常です。それに加え、プログラム一つとっても、莫大なプログラミングから成り立っているので、解析・解除をするだけで一日以上はかかります。仮に、私が不眠不休でこれに取り掛かったとしても、恐らく解除するのに5年以上はかかるでしょう」

「そ、そんな……」

「詰まる所、出口が見えているにも関わらず、そこに至るまでの道筋があまりにも遠いが為に、出口から出られないということ……現状を表すとしたら、そんな感じでしょう」

中央技術開発局のトップであるイリスでさえ匙（さじ）を投げだすほど、その魔法には「数字」が詰め込まれていた。並みの数学者なら、これを解くだけで一生を費やすのでは？　とイリスが思ってしまうほどだった。

しかも、イリスが言った5年以上とは、あくまでも本局のマザーを使用した場合だ。次元世界でも最高峰のスーパーコンピュータであるマザーを使ってもそれぐらいの年月が必要なことに、なのはは

冷や汗をかかずにはいられなかった。自分にかけられた魔法がそれほどのプログラミングから成り立っているとは、微塵も考えたことがなかった。

問題を解決する方法は簡単だ。後はただひたすらに計算をし、プログラムを解析・解除するだけだ。しかし、解決する方法が簡単なだけに、方法に関わる問題を解決するのは難しかった。次元世界でも最高峰のスパコンを使っても足りない演算能力……それを解決することは、イリスには不可能としか思えない。

「「……」」

重い沈黙が二人の間に落ちる。どうしようもない難問にぶち当たり、肩を落とすしかない二人。

「なのはさん、魔法の方はどうなりましたか～？」

そんな二人の頭上から、明るい声が聞こえてきた。上を見れば、そこには水色の髪をふわふわさせる小さな妖精――否、ユニゾンデバイスであるリインフォース？がプカプカと空中に浮かんでいた。リインはなのはと同じ機動六課の制服を着ていたが、なのはとは違ってそれの色は茶色だった。スカートは転んだらパンツが見えそうなほど短い。

「それがね……」

魔法が使えなくなって、早二ヶ月ちょっと。その間にも世界は大きく変わろうとし、さらなる犠牲者を生み出そうとしている。それを食い止めたいのに、無力化された自分では、変革の潮流に抗うことができず、ただ黙って観ることしかできない……

そんな無力な自分に苛まれてきたなのはだが、それでも彼女は今までずっと、いつか魔法が使えるようになると信じて、友人にも家族にも、弱音を吐いたりはしなかった。友人が傷付き、知人が殺されてしまっても、彼女はいつも気丈に振る舞い、不屈の姿を仲間に見せ続けてきた。

しかし、それも最早限界だった。今回判明した事実は、なのはの気力を根こそぎ薙ぎ倒していったのだ。薙ぎ倒された後に残った彼女には、もう気丈に振る舞うだけの余裕はなく、ただただ弱々しい姿で、リインに判明した事実を説明するしかない。

リインは時々相槌を打ちながら、なのはの話を真剣に聞いていった。リインにすら今のなのはがとても弱っていることは分かるが、彼女にできることなど何もないこともまた、リインには分かっていた。

説明が終わると同時に、再び肩を落とすなのは。乾いた笑い声が、彼女が如何に追い詰められていたのかを物語る。リインはその常軌を逸するというプログラムのデータを見ながら、なのはの様子を気遣って声をかけようと……

「……あれ？　これって……」

……して、気が付いた。このデータを一度、何処かで見たことがあるのを。

「……リインさん？　それがどうかして……」

「あの、ラビリンス局長！　これらのデータを一度、わ、私にも見せて下さい！」

「……？　別に構いませんが……どうしてですが？」
「えっと、私にもまだよく分かりませんが、一度でいいので、今あるデータを全て見せてもらえませんかッ！？」
「「……？」」

切羽詰まった様子のリインに呑まれたイリスは、リインに言われるままに、今あるデータの全てをリインに見せた。どうせミッド式とベルカ式、それとアルハザード式が入り混じっているこの魔法を解析・解除することは、既存の技術ではあまりにも時間が掛かり過ぎ……

……既存の技術？　では、それ以外の……詰まる所、ミッドの技術水準を上回るモノならばどうか？　ということ。それこそ、ロストロギアや今のミッドでは製造することができないユニゾンデバイス……ならば？

希望が見えた。少なくとも、イリスにはそう思えた。なのはは未だにこの可能性に気付いていないようだが、それでも一縷（いちる）の望みが生まれたことに違いはない。興奮した様子でリインが資料を読み込んでいくのを凝視するイリス。心なしか、鼻息までも荒くなっている。

迫りくる身の危険に気付いていないリインが、最後の資料を読み終えた。机の上に立つ３０ｃｍほどのリインは飽和しそうな数字の海を必死に整理し、掻き分けようと、頭を抱えて蹲（うずくま）った。その顔からは脂汗が噴き出し、小さな手は小刻みに震えている。

そんな尋常ではない様子のリインを心配したなのはは、リインに手を伸ばそうとした。だが、その手はイリスによって掴み取られる。何故……それを視線で問うてきたなのはへと、イリスは念話で答え

る。

『もう少しだけ待って欲しい……詰まる所、もしかしたら彼女こそが鍵になるかもしれないということ』

『鍵……ですか？　……まさか！？』

『ありえなくはないです。むしろその可能性に、私達は気付くべきでした。ストレージ、インテリジェント、アームド、ブーストという枠組みを超えたデバイス、ユニゾンデバイス。その性能は、なのはさん。貴女自身が身を持って知っているはずです』

『……ッ』

そう言われて、なのはの脳裏に思い浮かんだのは、十年前の「闇の書」事件での決戦。その決戦で戦ったユニゾンデバイスは、二人のＡＡＡランク魔導師を歯牙にもかけない強さを持ち、まさに闇の「王」と言える存在だった。なのはが一人となった後も、なのははその存在と死闘を繰り広げたが、結局は傷一つすら付けられずに、その決戦は終わってしまった。

なのはが今まで戦ってきた中で、もしかしたら最も強かったかもしれない存在……その存在の名は、祝福の風「リインフォース」。目の前にいるこの小さなユニゾンデバイスの前身ともいうべき存在で、恐らくは最高位のユニゾンデバイスであったろう存在……

そんなデバイスの後継であるリインなら、あるいは……？　なのはの鼓動が、どんどん激しくなる。期待が膨らみ、あやふやだった希望がくっきりと見えてくる。もしかしたら、もしかしたら……その単語がぐるぐると頭の中を回る。

「……このプログラムを解除するんでしたら、多分この数式を打ち込めば解除できるはずです。あと、このプログラミングにはこの数

式と単語を入れれば、自然と瓦解するはずです～」
「……早速打ち込んでみます！」

顔を上げたリインが、突然あるプログラムを指差すと、計１０９つもの文字列と数字列を足元の資料に書き込んでいった。それをもらったイリスは、すぐさまモニターに映されたプログラムにそれらを打ち込む。すると、呆気ない程簡単に、そのプログラムは完全に消去された。

その結果を見てなのはは、自分でも知らない内に涙を零してしまっていた……

「……でも、どうしてあんなに早く答えが分かるの？」
「それはですね、リインが優秀だから……じゃなくて、実は一度、あのプログラミングの構成を見たことがあるからなんです！」
「……構成を？」
「はい！　リインも何処で見たかは覚えていないんですが、あの独特の癖がある構成は、どれだけアプローチを変えて問題に当たれるかで早さが……」
「あ、あはは……」

大興奮するイリスを押さえ、開発局の食堂でお昼を一緒にするなのはとリイン。その話題は、やはり先程のプログラムについてだった。先程までずっとプログラムの数字と格闘していたリインは、やはりかなり消耗していて、それが食事にも現れていた。リインの皿には、沢山のお菓子やケーキがこれでもかと並んでいる。それを見

たなのはは、自然と頬が引き攣るのを止められなかった。

「……でも、本当にどこで見たんでしょう？　あんなに凄いプログラミングをする人なら、絶対に覚えていると思うんですが……」

プログラムの解き方を説明していたリインが、ふいにそう言って眉を寄せる。当人は本当に思いだせないらしく、う～んう～んと唸っては体を捩じる。その可愛らしい様子にクスクスと笑いを零すなのは。

先程までの屈した姿は、すでに欠片も見えなくなっていた。

「でも、本当にありがとう。これで私も何とか復帰できそうだよ」

「なのはさんが復帰すれば、百人力ですぅ！」

小さな妖精の働きにより、なのはの胸に再び宿った不屈の心。それが再び戦場で見れるのは何時か……その時は、案外近いのかもしれない。

「私の計算では、あれを解き切るのに2～6カ月はかかると思います。でも、向こうが他にも仕掛けている可能性がないとも言えないので、実際にはもっと掛かるかもしれません」

「……それでも、たった3～6カ月で終わるなら、私はリインに全てを任せるよ。レイジングハートもそれでいいよね？」

『Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ，ｍａｓｔｅｒ。リイン、マスターのことをよろしくお願いします』

「はい！　リインに任せて下さいですぅ！」

（だが、同時に。その頃にはきっと……）

……ミスター・ブシドーとビリー・カタギリは、南極での戦闘で対峙した益荒男（マスラオ）について、粉々となった「サキガケ」に辛うじて残っていた戦闘映像を見ながら議論していた。それぞれの手元には、熱いブラックコーヒーが置いてある。

「……確かに、これは磨修羅生（ますらお）だね。所々の違いはあるけど、ほぼ間違いない……」

ビリーは真剣な眼差しで映像を細かく分析する。しかし、分析をすればするほど、この黒い機体がブシドー専用に造られていた磨修羅生であることを理解していく。だからこそ……解せなかった。

「……でも、これはまだ設計段階で、ロールアウトすらされていないんだ。それに、これに関するデータは僕のメモリー内にしかないはずなのに……どうやってこれを「ＣＢ」は開発したんだろうね？」

そう、この「益荒男」はビリーが現在開発している「磨修羅生」

に瓜二つ……いや、それそのものといっても過言ではなかった。「最高のスピードと最強の剣（つるぎ）」を所望するブシドーに、親友であるビリーが贈る最高最強のM・Sとして開発されていた「磨修羅生」……だが、それだけの性能を叩き出す動力機関を中々造れずに、開発が難航していたはずの機体でもあったわけだが、映像の中の益荒男はその「動力」を疑似太陽炉というオーバーSクラスの出力を誇る動力機関で補っており、想定されていた性能よりもさらに上の性能を獲得するまでに至っていた。

しかし、そもそもこの磨修羅生はビリーとブシドーしか知らないはずのM・Sである。なのに、どうしてそれを「CB」が開発できたのか……ビリーには全く分からなかった。

「カタギリ、その設計データを誰かに見せたりはしなかったか？」
「いや、さすがにそんなことはしていないけど……」

まるでビリーの頭の中でも覗いたかのように、映像の中の益荒男はこれから造られるはずであった磨修羅生に、デザインも性能もそっくりであった。ビリーの背筋に寒気がはしる。それは異次元の存在とでも相対したかのような感覚である。脳の中身を覗かれる……常人もそうだが、科学者であるビリーにもその恐怖は通用した。

「……話を変えてしまうけど、これからどうするつもりだい？」
「どうするつもり……とは？」
「「CB」が磨修羅生を使った以上、僕達はもう磨修羅生を使えないよ。僕達が「CB」の一員に間違えられてしまうからね。だから、磨修羅生の設計は……」
「設計は続けるし、開発も続けてくれ。何、磨修羅生と多少デザインが異なれば、それで大丈夫だろう」
「……分かった、続けるよ。君が「CB」と戦えるようにね」

ブシドーは何事もなくそう言ったが、その顔は依然、不機嫌なままに歪められていた。見ているビリーの方が参りそうである。「ガンダム」ではなく「益荒男」にやられたことが、そんなに癇に障ったのか……それはビリーには分からなかった。

「多分、できあがるのは二カ月後か三カ月後か……おそくとも、三月か四月までには仕上げるよ。……そうだ、名前。名前はどうしようか？　さすがにそのままじゃあいけないから、新しい名前を……」

「それについては、一考ある」

ブシドーの眼光は鋭いままだ。そして、有無を言わせぬ迫力が、そこにはあった。

「……素戔男（すさのお）。それをM・Sの名前にしてもらいたい」

（素戔男が参戦しているかもしれない）

第一管理世界「ミッドチルダ」の宇宙空間、そのどこかにあるデブリの只中。その中の一つに、「ＣＢ」のラグランジュ１は存在していた。

ラグランジュ１は「ＣＢ」が保有する拠点の中で、最大級の大きさを誇っていた。時空管理局のＸＶ級次元航行艦を五隻は収容できるドッグ、疑似太陽炉を生成するファクトリー、一辺が百メートル以上もある模擬戦室などを内包していることから、その大きさを窺う事が出来る。

そんなラグランジュ１の最も奥――中心に近い部屋には、「ＣＢ」のメンバーですら滅多に入ることができない。何故なら、そこには「ＣＢ」が所有する「ガンダム」の詳細なデータ、及び新装備に関する情報が秘匿されているからだ。そこに入ることができるのは、基本、マイスターかライセンサー、それとイオリアの許可を得た技術者――研究者だけだった。

『こちらの準備は完了した。いつ初めても構わない』
『よろしくお願いします、イアン・ヴァスティ』
『実験を見事に失敗させて下さいね、イアン？』

一辺が百メートル近くもある、白い壁に囲まれた模擬戦室。そこでは今、『００』を使った実験が行われようとしていた。模擬戦室の壁の中に埋め込めるようにして設置されたモニタリング室では、イアンを中心とする技術者の集団が各々の計器を弄り回しながら、実験が始まるのを今か今かと待ち望んでいる。かくいうイアンも、その一人であった。

『……エクシアの言葉は聞かなかったことにするぞい、刹那。それ

で、背中と両肩のバランスはどうだ？』

『あぁ。本当に付いているのかどうか不安になるぐらい良好だ』

『そうか、そいつは良かった。このバランス一つをとっても、一体儂がどれだけの時間と労力を犠牲にしたことか……！』

模擬戦室の中心にポツリと立つ『００』。しかし、その背中と両肩には、常にない装備――Ｏライザーが取り付けられていた。本来ならドッキングをするはずだが、刹那はすでにドッキングを完璧にマスターしているので、練習する必要がなかった。

両肩にＯライザーの平べったい翼部を、背部にセンサー部が突き出た本体を載せる『００』は、機体がかなりかさばっているように見える。しかし、実際に動かしてみると、全く気にならなかった。それも技術者たちが刹那の戦闘パターンを丹念に調べ上げ、動作の邪魔にならないよう工夫してくれたからだった。

刹那は自分の目となった『００』のカメラで、その右手を見てみた。そこには、今回の実験の内容の一つでもある新武装が、『００』の右手にしっかりと握られていた。

ＧＮソード？――かつてエクシアの主武装であったＧＮソードをモチーフに、「ＣＢ」の新技術を惜しみなく投入して造られた、『００』を象徴する最強の『剣』――となるはずの物。それは刹那の右手にしっくりときて、まるで違和感を感じさせなかった。

『これが、ＧＮソード？……オレの、オレ達の、新しい剣……！』

『決して折れずに、全てを断つ剣……これならば、いつぞやのような失態を見せる事はないでしょう……！』

『……（マイスターとの新しい絆……はぅあッ！？　だ、駄目ですよマイスター！　気が、気が早過ぎますよもう！　エクシアは、エ

クシアはまだ心の準備が……あぁん？　もう襲っちゃいますよマイスタァアア！！）』

ゾクッ！

『……！　（な、何だこの悪寒は！？　しかも、何故か冷や汗が止まらないなんて……！）』

自身の物になる予定の剣に頼もしさと懐かしさを感じる刹那。悪寒や冷や汗の方は、必死に無視することにした。何処となく右肩の、ＧＮ－００１（エクシア）から出ているような気がしなくもなかったが、彼はこの時、実験の方にだけ集中することにした。

これは決して現実逃避ではないと、そう思い込みながら。

「……刹那」

もうじき始まるであろう実験を、モニタリング室から心配げに眺める女性がいた。女性は桃色の髪をポニーテールにし、「ＣＢ」の角ばった制服を着ていた。その瞳は不安で揺らいでおり、女性――フェルト・グレイスにか弱い儚さを与えている。

「大丈夫だ、フェルト。理論上なら今回の模擬戦に危険はない。何せ、ただＴＲＡＮＳ－ＡＭをしてＯライザーがどう出るのかと、ＧＮソード？の耐久を確かめるだけだからな」

強化ガラスの向こう側にいる刹那から目を逸らさないフェルトを心配して、イアンがそう実験の主旨を説明する。しかし、フェルト

は危険がないとは知りつつも、やはり彼のことが心配で堪らなかった。

何時だってそうだ。彼は戦い、戦って……戦い貫くことしかできない人なのだ。その為に、今もまた彼は新たな力を手に入れようとしている。「ＣＢ」の理念を、私達の『計画』を遂行する為に、彼はまた戦いへと出向いていく。それがフェルトには堪らないほど……心配だった。

何時か自分を置いていってしまいそうな……そんな予感を抱いてしまうから。

「『００』とＯライザーのシンクロ率、同調しました。誤差は±０．１１……十分許容範囲です」

「よし、では実験を始めるぞ。今回の実験では『００』がトランザムシステムを発動した場合、Ｏライザーがどう出るか……それの測定ともう一つ、ＧＮソード?の耐久力を調べることが目的だ。どんな小さなデータも見逃すなよ！　それじゃ、刹那！　やってくれ！」

『了解した。トランザム！』

『『ＴＲＡＮＳ－ＡＭ』』

フェルトが見ている先で、刹那がＴＲＡＮＳ－ＡＭを唱えた。急速に紅く染まっていく『００』とＯライザー。噴き出す紅い粒子が目に見えて増加する。そして、出力が三倍となった『００』が、ＧＮソード?を振り上げ、模擬戦室に置かれていたＧＮキャノン?の重装甲をバターのように斬るその切れ味は、フェルトのような素人目から見ても、はっきりと理解することができる。

『はぁあああああッ！』

残像を残しながら、次の目標に向かう『００』。ＧＮソード？の方はさっきＧＮキャノン？を斬り裂いたというのに、刃毀(はこぼ)れの一つもしていない。それに満足げな笑みを浮かべていたイアンたち技術者一同――だが、それは唐突にやってきた。

……パキンッ！

『……なッ！？』

『『『なんじゃとぉおおおおッ！？』』』

三体目のＧＮキャノン？を斬り裂いた時だった。ＧＮソード？はＧＮキャノン？の胴部に刃を食いこませたまま、ＴＲＡＮＳ－ＡＭの負荷に耐えかねたのか、そのままポッキリと半ばから折れてしまった。その場にいる誰もがそれに驚く中、さらに驚愕すべき事態が『００』の背部に起きる。

『Ｏ、Ｏライザーが……Ｏライザーがドッキングを解除していきます！』

『ば、馬鹿なッ！？　そんなこと、あるわけが……！』

背部と肩部にあったＯライザーが、何を思ったのか、ＴＲＡＮＳ－ＡＭ中の『００』から分離し、『００』から離れていった。この事態に対し、イアンは頭を抱えたまま、魂のような白っぽい何かを口から出した。そして、それはこのモニタリング室にいる技術者全員がそうであった。

『何だ……一体何が起きているんだ！？』

『わ、分かりません！　しかし、これは……拒絶？　その意思をＯライザーから感じます！何故そのような意思を表すのかは分かりま

せんが、彼女は私達を受け入れないと、そう言っているようです！』
『……そうだとしたら、何故だ？　何故オレ達を受け入れないのだ、Ｏライザーよ！？　一体オレ達の何を認めたくないというのだ！？』

完全に『００』から分離したＯライザーは、翼部と本体をドッキングさせると、刹那の問いに答えること無く、沈黙を貫いたまま模擬戦室の床に着陸した。センサー部でもある先端のクリアパーツは、刹那を、いや彼らたちを拒絶するかのように、何も語らない。語ってはくれなかった。

その後、実験は一時中断された。ＧＮソード？が折れ、Ｏライザーも『００』を拒絶したのでは、実験を続けることが不可能だったからだ。そして、イアンたちが心血を注いで完成させたＯライザーは、その性能の一部をも垣間見せることがなかった。

また、ＧＮソード？に関しても、新素材が未だ完成に至ってないことが、今回の実験で証明された。それを受け、また徹夜かと嘆く研究者たちは数多くいたが、その誰もが実験から降りようとはしない。

あの世紀の大天才――「無限の才悪」とまで恐れられたイオリア・シュヘンベルグが設計し『計画』した『００』を完成させたい――そして、この矛盾に満ちた世界に変革を――その思いが、研究者たちを前へと突き動かしていた。研究者の誰も彼もが、皆一様にこの世界を変えたいと、そう願っていたのだ。

「……」

だが、その中で……刹那は一人、苦悩していた。Oガンダムが感じたというOライザーの拒絶の意思……それはどう考えても、刹那を拒絶するということだ。ならば、原因は自分にあるのでは？　……しかし、どれだけ考えても考えても、答えは一向に出なかった。

Oライザーが自分の何を気に入らないのか……何を拒絶したいのか。ヒントの一つすらない現状では、それを知る術はない。それを分かっていてなお、刹那は苦悩する。苦悩し続ける。

ただ一人の人間として……

（……また、『世界に革新を齎すモノ』も、完成しているかもしれない）

【私が求めるものは何？
遠い異郷からやって来る騎士かもしれない。

私が求めるものは何？
永遠の沼から這い出せる岸かもしれない。

私が求めるものはたったひとつ。
得るものはキシか、それともシキ（死期）か】

――鴨川秘様から、『ひぐらしのなく頃に』のフルデリカ・ベルンカステルより

幕間―5　（後書き）

（キターーーーーーーーーッ！！！！）

（ふふふふ……ふひゃひゃひゃひゃひゃあああああああッ！！）

（マイスターのことはこのエクシアに任せて、あなたはずっと永遠にずっと眠ったままでいて下さい、Ｏライザー！）

（例えストレージに近いＡ．Ｉしか持たないあなたとはいえ、エクシアは油断なんてしませんとも！　いつ女狐に化けるのか、油断なりませんのでね！）

（しかし、こんな上手い話だけならよかったのに……どうしてマイスターは私達……いえ、私の替わりにフラッグを選んだのでしょうか？）

（フラッグは確かに優秀ですが、何もあんな因縁のある機体を選ばなくとも……ただでさえ、ガチホモが使っていたイメージがあって生理的に嫌なのに……）

（しかし、マイスターが選んだモノにあれこれ言っても仕方がありません。それに、私にはそれよりももっと重大な事があります）

（……マイスターと一緒に「イヴ・パーティー」に出席するティエリア・アーデをマイスターを狙う女狐だと断定し、武力による介入を行います！　エクシア、目標を駆逐しま……邪魔をしないでください、Ｏガンダム！　それと……セラヴィー！！）

第61話　Ｅｖｅ　ｐａｒｔｙ　ｔｏ　ｈｏｌｄ（前書き）

【たとえ真実でなくとも信じることを選んだ……それだけのことだ】

――キラー様から、『ＤＩＳＳＩＤＩＡ　ＦＩＮＡＬ　ＦＡＮＴＡＳＹ』の素材アクセサリ「星の生命」の説明文より

第61話　Eve party to hold

――新暦75年12月24日――

――「アーカイブ」に関する報告書　提出者：八神はやて

当初、私は「アーカイブ」という人物について、あらゆる手を尽くして捜査したものの、これに関する情報を全く手に入れることができなかった。人事部のトップであった人物の家宅を捜索するという強硬手段に打って出ても、手がかり一つすら掴めなかった。また、人事部だけでなく、経理部や他の上層部を洗いざらい探ってみても、これといった足掛かりを発見することができず、最初の一カ月ほどは全く進展がなかった。

しかし、「アーカイブ」に関する情報は、意外な方面から発見された。それはフェイト・T・ハラオウンを初め、何人もの優秀な執務官相手に、なお無実を手に入れてきたミッドでも有数のブラックインベスター「ラヴクラフト」に関する報告書に記載されていた。その報告書を入念に調査してみると、ある日「ラヴクラフト」名義の口座に一億ほどの金が入金されているわけだが、その日はなんと、人事部のトップが「アーカイブ」に一億を送金した日でもあった。

これを怪しいと思った私は、即座に何人かの執務官を利用し、「ラヴクラフト」に関係のあった会社を「CB」の関係社として、片っ端から検挙させてみた。これに関しては、ミゼット・クローベル最高評議会議員のお力もお借りしたが、その甲斐あって、「アーカイブ」と「ラヴクラフト」が実は同一人物だという証拠を手にする事が出来た。

また、その証拠から「アーカイブ」だと思しき人物も何十人か浮上してきた。時空管理局の経理部副部長や中央技術開発局の第二局長、C・W社のトップエリートなど、その殆どが相応の地位と権力を持っていたが、より調査を深めていくと、私はその中から遂に「アーカイブ」だと思われる人物を一名、探し当てることに成功した。

それが「トレディア・グラーゼ」という投資家――インベスターである。彼は三年前に急激に台頭し始めた投資家だが、それ以前は地方世界「オルセア」に住んでおり、そこでも投資家として生計を立てていたらしい（このらしいというのは、その世界で彼が投資家であった確たる証拠を見つけられなかったためである）。

では、どうしてトレディア・グラーゼが「アーカイブ」「ラヴクラフト」なのか。それは……

夜空に輝く数多の星々が、人々を魅了して止まない光りを地上に降り注ぐ。鬱蒼（うっそう）と生い茂る森の木々は、夜行性の生物と一緒になってさんざめいている。真っ暗な森の中にぽつんと立つ大きな豪邸は、場違いな室内灯でもってその周囲を明るく照らす。

「……で、あるからして。私どもは……」

三階建ての豪邸は、ライトアップされた外観も立派だが、内装も、外観に負けず劣らずの金を使用され、一般人には眩しいほど豪華な物だった。八神はやて、フェイト・T・ハラオウン、チンクの三名が見ている先で、透明な貴金属でできた、一体いくらかかったのか見当もつかないような高価なシャンデリアが、玄関に通じる小ホールを明るくしていた。他にも、雑誌か何かでしか見たことのない有名な壺や絵画、芸術作品が大ホールに続く廊下に所狭しと置かれ、トレディアが「金持ち」であることをいやがおうにも理解させられる。

「……という次第でございまして、今宵は……」

三名は執事服を着たボーイに案内されながら、2～300メートルほどはありそうな大ホールに到着した。大ホールでは、宴が始まる前の主催者による演説が行われており、目を向ければ豪勢な壇上の上で、壮年の男が力強く演説を行っている。あの壮年の男がトレディア・グラーゼやな……はやては微笑みながら、その顔を脳裏に刻む。その隣で、フェイトとチンクは、今までに経験したことのない大規模な「大人の社交場」という名のパーティーに、目を白黒させていた。

「……では、演説はここまでにして、今夜はこのパーティーを楽しみましょう。……乾杯ッ！」

トレディアの演説が終わると、このパーティーに招待された著名人たちが、各々のグラスを傾け始めた。高級料理店でしかお目にかかれないような料理も次々と運び込まれ、パーティーが少しずつ賑やかになっていく。はやてたち機動六課の面々は、その料理に舌鼓を打ちながら、大ホールを一周ほどぐるりとまわり、どんな人物が

招かれているのかを確認していった。このパーティーに参加する著名人たちの名簿は、主催者であるトレディアしか持っていないのだ。

「うわぁ……あの人とかそこの人とか、この前モニターに映っていたよね？　たしか長者番付とかの番組で……」

「む、あそこにいるのは確かC．W社の……あの人は確か中央技術開発局の……って、セイン！？　どうしてセインがこんなところに……」

「お、カリムやヴェロッサもおるな。セインは多分護衛で来たんやないかな？　といっても、カリムほどの魔導師に護衛がいるとは思えへんけど……」

「す、すまんが、少しだけセインと話をしてきてもいいか？　アイツの様子が少しおかしいんだ」

「別に、うちらの護衛は要らへんから、好きな所に行ってええんやで？　うちの護衛はフェイトちゃんだけでも十分やし」

「うん、そうだよ。姉妹のことは大切にしないと！」

「ほ、本当にすまん……」

しかし、一通り目をやった所で気付いたのは、この場に招かれている人物たちが、自分達とは違う「やんごとなき身分」だということだった。この場にいる誰も彼もが一度は目にした事のある著名人ばかりなのだ。そのような人物を数百人も招待するなんて……改めて、トレディアの凄さを思い知る。

チンクがセインを引っ張ってバルコニーの方に消えていくのを見ながら、二人は舞踏の音楽が流れ始めた室内をもう一度見渡してみた。ちなみに、この時点で見目麗しい彼女たちをダンスに誘おうとした幾人もの男がいたわけだが、二人はその誘いの尽くをすっぱりと一刀両断していた。それに涙を飲んだ男たちは、しかし瞬時に頭を切り替え、今度は別の女性をダンスに誘っていた。その無駄なま

での逞しさに、二人は暫し呆れる。

「な、何という美しさだ！」「神はこの世に天使を遣わされた！」

「今なら彼女に全財産を投じられる！」「こ、今度は私とダンスを踊って下さりませんか、エンジェル！？」

口説き文句で迫ってくる男たちに二人が呆れていると、舞踏を行っていたあるグループが突然騒がしくなった。はやてとフェイトが互いに顔を見合わせ、そのグループを訝しんでいると、その騒ぎの元となった美しい女性が、男泣きをしているグループに手を振りながらこちらに近づいてきた。

女性は背部と肩を露出する濃い紫のドレスを着ていた。ドレスの色と似た紫の髪は腰に届くほど長く、スリットから伸びる艶めかしい生足は、男たちの視線を釘付けにして止まず、つり上がった目と高い鼻は、一種の芸術を思わせる端整な顔立ちを、さらに至高の物へと押し上げていた。

その人外の美しさを周囲に魅せ付けていた女性は、ハイヒールで床を鳴らしながら、はやてとフェイトがいるテーブルに向かってきた。それにポカンとしていると、女性ははやてとフェイトの目の前で人離れした美しさを持つ顔を破顔させた。ニコリっ。そんな擬音がはやてたちの耳に聞こえてきた。

「初めまして、八神はやてさんにフェイト・Ｔ・ハラオウンさん。私は、ティエリア・アーデというモノです。以後、お見知りおきを……」

女性――ティエリア・アーデが胸に手をやりながら、そう自己紹介をした。自己紹介をされたはやてとフェイトは、何が何だか分か

らない中で、慌てて席を立つと、ティエリアと同じように自己紹介をした。

この時、はやてとフェイトは知らなかった。これが「ＣＢ」側の白い悪魔との、初めての邂逅であったことを。

この「イヴ・パーティー」の護衛に就かされた機動六課の面々は、豪邸の外周部で任務に当たっていた。機動六課にとって護衛任務は「アウグスタ」での任務以来で、久しぶりの任務に、それぞれが程度の差こそあれ、緊張を抱かずにはいられなかった。

だが、今回の護衛任務では、明確な襲撃者がいるわけでもなかったので、以前よりは気を楽に持つことができた。管理局にとっての仇敵である「ＣＢ」も、さすがにパーティーにまで手を出すことはない。それが分かっているからこそ、任務に当たっている者たちは、以前とは違い、余裕を持って任務に当たることができた。

しかし、余裕があるにしろ、不安の種があるのもまた事実である。このパーティーを護衛しているのは彼ら以外にもいて、それがなんと、あの管理局と敵対することを宣言した「Ａ－ＬＡＷＳ」の魔導師部隊なのだ。魔導師部隊は最近になって新たに設計し直された新

規格のM・S（モビルスーツ）「フラッグ」「イナクト」「ティエレン」でもって武装しており、その黒い銃口がいつこちらに向くのか、機動六課のメンバーには気が気でなかった。

青を主体とするカラーの、世界で最も有名なM・S「フラッグ」。かつて管理局によって開発されながらも、四年前に急遽（きゅうきょ）正式採用を見送られた不遇の名M・S「イナクト」。第３２管理世界を代表する、重装甲故に信頼性の高いM・S「ティエレン」。

その三機が一同に揃う光景は、少し前までは考えられぬことである。世界清浄のシンボルでもあったフラッグと、管理局で小数だけ生産されたイナクト。さらには、第３２管理世界で７３年ごろに独自開発されたティエレンが百の単位で揃うのは、恐らく四年前と現在を知る者達にとっては信じ難いことだろう。それだけ、各々の陣営の対立は激しい物だったのだ。

そして、その対立を乗り越えて揃えられたのは、管理外世界が管理世界に抵抗するためであり、同時に、その切っ掛けともなった「Ｂ・Ｔ・Ｗ」事件を引き起こしたテロ組織「ＣＢ」に対抗するためでもあった。つまり、世界は徐々にだが確実に、「ＣＢ」が望む世界へと変貌（へんぼう）しつつあるということ……！

「……世界は確かに変革の道を歩んでいる。あとは「分裂」させたこの次元世界を「統一」させ、「ＣＢ」がそれに対する抑止力となれば、イオリアの『計画』は……」

令嬢の運転手としてここにやってきた刹那・Ｆ・セイエイは、そう呟きながら目の前の邸宅に目をやった。刹那は黒い縦長の帽子を被り、誰かが発狂しそうな執事服をピシッと着こなしながら、「アーカイブ」が用意した黒い高級車の傍に立っていた。彼の左手は常

に耳に付けられた通信機に当てられており、パーティーに参加しているティエリア・アーデと、それで密に連絡を取り合っていた。

『刹那、八神はやてとフェイト・T・ハラオウンを発見した。これから接触を試みてみるが、構わないか？』

「待っていろ、今向こうに聞いて……「アーカイブ」のことについて、どれだけ情報を集めたのかを探ってこいだそうだ。それと、高町なのはの容体についても、できるだけ情報を集めるようにとのこと」

『了解した。これより接触を行う。録音は任せたぞ、刹那』

「分かっている、心配するな」

通信機から聞こえてくる、刹那の知らないティエリアの女声に新鮮味を覚えながら、刹那は自身のすぐ手前にある噴水を何とはなしにジッと見つめた。刹那が見つめる先で、噴水の水はスンスンと中央の柱から噴き出し、そこから飛沫（ひまつ）した水が、すぐ手前の黄色い花に降りかかった。それを見て、刹那の脳裏に何かが過ぎる。それはとても大切で、大事なことだったはずのモノで……

――今の刹那に欠けていたモノのはず――

「……はっ！？　オレは今、何を……考えていたんだ？」

我に返った刹那は、自分が何を考えていたのか、全く覚えていなかった。それがとても大切で、大事なモノだったことは分かるが、それが何なのかは、まるで思いだせなかった。

この時の感覚を、刹那は以前、一度だけ経験していた。それは、フォーリンエンジェルズでの最終決戦にて、戦う直前に感じたモノと酷似していた。あの時の刹那は今とは違い、戦うことに疑問を抱

き、本当は戦いたくないのでは？　と自問したりしていたが、その時と今回のはやけに似通っていた。それに首を傾げること、十分。刹那は近くに誰かが来たのを知り、すぐさま背後を振り返った。そして、その姿勢のまま、愕然（がくぜん）とした。

「お、お前は……！」

「くす……八年振りだね、ソラン。元気だった？」

目を見開く刹那の前で、ティエリアと話をしていたはずの人物――フェイト・T・ハラオウンが、聖母のような微笑みを浮かべながら、刹那を優しげに見詰めていた。

その視線が刹那にとってとても暖かく、また心地良いモノであったことは、彼だけが知る事実である。

「一体どうしたんだ、セイン？　何時ものお前らしくないぞ？　あの元気はどこにいったんだ？」

「チンク姉……実はね」

白いフリフリのドレスを着ていたチンクの傍で、バルコニーに備え付けられた手摺（てすり）に体を預けながら、青色のドレスを着たセインは

自分がこうなった事の次第を、チンクに全て打ち明けていた。セインが言うには、彼女は顔見知りの人が目の前で殺されたことに衝撃を受けたらしい。成程、そういうことか……チンクはぽつぽつと喋るセインの話に耳を傾けながら、得心がいったように首を縦に動かした。

「つまりは、身近な者の死に初めて触れて、そのショックで元気がなくなったと……そういうことか、セイン？」

「……うん。大まかにはそんな感じかな？　正直、この相談をディエチやオットーにするわけにもいかなかったから、チンク姉と会えて本当に……よかった」

普段の彼女からは想像できないほど消沈（しょうちん）とした様子に、チンクは我が目を疑った。ドレスの彩色と似た青色の髪も、心なしかしゅんっと垂れ下がっている様な気がする。そんな様子のセインへと、チンクは覚悟を決めた表情で語りかける。

「セイン。私はウーノ姉様みたいに言葉が上手ではないから、単刀直入に言わせてもらうぞ。……人の死には、慣れるしかない」

「……え？」

「これから先、お前は……私達は、数え切れないほどの死と相対する。それは、今が戦争時であるからだ。普通なら非殺傷魔法などで人の死に触れることは滅多にないが、相手は非殺傷が使えないデバイスで武装する「ＣＢ」……どうしたって、死人がでることは避けえない」

よく磨かれた手摺に肘を置き、遠くの風景に目を向けながら、チンクはセインへと優しく語りかける。覚悟を決めたその表情は穏やかで、どこか達観した様子も見受けられる。そのいつもとは違う姉の様子に、セインは目を逸らすことができなかった。チンクはそん

なセインの様子を知らずに、言葉を続ける。

「人はどんなことにも慣れる。いや、順応できる生き物だ。そうしなければ生き残れないことを、私達は本能でもって知っているのだ。この世界は刻々と変化し、その変化に追いつけなかったモノを、次々と淘汰していく。そういう仕組みになっている……そんな残酷な世界を生き延びていくためにも、お前は人の「死」に慣れていかなければならない」

「……チンク姉は、もう慣れた？」

「……他人の死にはもう慣れたが、身内の死にはどうしても慣れないな、私は」

「……そっか」

セインはチンクの背にしがみ付きながら、ぽろぽろポロポロと涙を一滴二滴、三滴と、次々に零していった。その胸中に渦巻く思いを背に受けたチンクは、今は黙ってその小さな背中をセインに貸した。セインがやがて嗚咽を堪えながら涙を流すようになると、チンクも顔を下に俯かせて、自分のすぐ下の妹の想いを噛み締めた。

これもまた、お前達が通らなければならない試練だ……その呟きは、セインの耳に入る前に風に運ばれて、どこかへと消えていった。

どれだけ泣いたのか、セインには分からなかったが、少なくてもチンクの背中を水浸しにするほど泣いたのは確かだ。セインは懸命にチンクの背に流してしまった涙をタオルで拭こうとしたが、チンクは「お前の涙を無駄にしたくはない」と言い張って、セインの涙

でビチョビチョとなったドレスのままパーティーに戻ろうとする。セインにしてみれば、自分のせいでこの小さな姉が恥をかくことに耐えられなかったわけだが、当のチンクはその思いに気付くことなく、堂々とした姿勢でパーティーに戻ろうとしていた。

「だから、このままでいいと言っているだろう！　しつこいぞセイン！」

「お願いだから、せめてタオルで拭き取ってからパーティーに戻ってよ、チンク姉！」

そんな「乙女の涙拭き取り合戦」が行われている最中、それを遠くのパーティー会場から見守っていた背の高い女性は、妹たちのやりとりに深く嘆息（たんそく）しながら、十人前はあったステーキ皿を一人で空にした。周囲の人々がその大食に驚いていたが、青い髪の女性はそれに構わず、今度は二十人前はあるパスタへとフォークを突き刺し、それを優雅な動作で口に運んでいった。そのパスタは普通なら半年前に予約をしないと食べられないような料理なのだが、女性はそんなことは知らないとばかりに、銀でできたフォークでパスタをドンドン口に運んでいく。

そのパスタが空になるのに、十分もかからなかった。胸元が大胆に開かれた菫色（すみれ）のドレスを着る女性は、その空になった巨大な皿を少しの間見下ろすと、今度は隣りにあった別の料理へと、右手に持ったフォークを突き刺した。それにまた周囲の人々は驚くが、彼女――ミズキ＝ドライはそんなことはお構いなしに、料理を胃袋の中に収めていく。

肩までの金髪を後ろで一つに結い上げ、年相応に派手な装飾が施されていない群青のドレスを着たアイシスは、ちょっぴりだけ自己主張をするおぱ～いの手前でワインが入ったグラスを力一杯握りしめていた。その顔は酷く興奮した様相で、頬も、酒を飲んだ時のように紅潮していた。また、アイシスの隣に立つボーイ風の燕尾服を着たリジェネ・レジェッタも、アイシスの視線の先にいる人物を見て、うっすらと微笑みを浮かべた。こちらの笑みは、喜びの笑みだったが。

「そう……彼女がティエリア・アーデ。貴方が言っていた、「デカブツ」のパイロット……！」

「そして、君の仇である人物さ、アイシス。それで、君はどうするの？　仇である人物を前にして、君は……」

「勿論、決まっているでしょう？」

リジェネにどうするかと問われた彼女は、一も二もなく獰猛な笑みをリジェネに向けた。それが答えだと言わんばかりに、本来なら優しげな垂れ目を持つ彼女は、しかし、その時ばかりは狂暴な笑みを浮かべる。それを見て、リジェネは満足げに頷きながら、その背中をぽんっと軽く押し出した。後押しでもするかのように、その復讐を手伝うかのように。

「それじゃあ行きなよ、アイシス。あの家族を、姉であるアイを殺された時からずっと抱えてきた憎しみに決着をつける為にも」

「貴方に言われるまでもないです。私はこれで……姉の敵討ちを……！」

懐に仕舞ってあるデバイスを手で掴みながら、一歩一歩、ゆっくりと。はやてと談笑するティエリアに近づいていくアイシス。その肌が露出した後ろ姿を見送りながら、リジェネは己の作戦がまた一歩進んだことに、満足げな笑みを浮かべた。

「ふふ……残念だけど、君の敵討ちは永遠に叶わないんだよ、アイシス。残念だけどね」

そもそも、リジェネはティエリアがアイシスに討たれるとは、全く思っていなかった。外面では復讐を手伝っているように見えても、彼は自分が提案した「作戦」を実行させるために、アイシスを利用しているのだ。

リジェネからすれば、あの「管理局の白い悪魔」と互角の死闘を演じた同胞が、たかがＡＡランクの魔導師に敗れるなど、どう考えてもありえないのだ。それは「Ａ－ＬＡＷＳ」の将校や幹部たちも同じで、だからこそ彼らはアイシスを利用する格好となるこの作戦を受け入れた。特に第９７管理外世界の人々は、日本という平和国家を蹂躙していった「デカブツ」を酷く警戒しており、この作戦には諸手を挙げて賛成し、協力を惜しまなかった。

「ティエリアを此方側に引き寄せることができれば……できなくとも、この作戦で……ふふふふ……」

以前リボンズにつけられた損傷を修復し終えたガデッサを触りながら、ティエリアとアイシスが接触したのを見届けるリジェネ。アイシスがティエリアを伴って、パーティーの外に出ていくのを見計

らい、彼もまたパーティーから抜け出して、二人の後を追った。その顔にはこれから起こるであろう事を思ってか、酷く興奮した笑みが浮かんでいる。最も、それを見ることができた人物は、誰もいなかったが……。

……それは、「ラヴクラフト」と関係のあった会社全てに、彼は多額の金を投資していたからだ。その額はどんなに少なくても百万単位で投資され、多い時には数千万、数億単位で投資されていた。そして、「ラヴクラフト」関連の会社に投資をした投資家は数多くいたが、その全てに投資を行っていたのは、彼だけだった。

また、彼は時空管理局本局にもよく出入りをし、例の人事部のトップとも何回か面会していた。その他にも、「ＣＢ」と繋がっていたことが明るみとなった高官たち全員にも面識があった。これはその高官たちの証言でもあるので、確かな情報だと私は考える。

これら二つの証拠でもって、私は「トレディア・グラーゼ」が「アーカイブ」＝「ラヴクラフト」なのではないかと推測した。よって、私はあまり表立たない彼を確実に捕縛し、「ＣＢ」の情報を引き出すため、１２月２４日に行われるトレディア主催の「イヴ・パーティー」に招待客として参加し、「トレディア・グラーゼ」をス

パイ容疑者として拘束したいと考える。その為の許可を認可されたし。

【――人間は、間違い続けることしかできないのだ】

――のりちゃずけ様から、『デッドライジング』のブロック・メイソンより

第61話　Ｅｖｅ　ｐａｒｔｙ　ｔｏ　ｈｏｌｄ（後書き）

（……ふう。全く、あの子にも困ったものね）

（でも、そのおかげで尻尾を捕まえることができたのなら、僥倖かしら？）

（裏切り者も順調に探し出せていることだし……あとはトレディアを実際に捕らえるだけで、情報の流出を何とか防げるはず）

（でも……やけに呆気なくないかしら？　まるで、どうぞ見つけて下さいとでもいうような気が……）

（……気のせいよね？）

（まあ、それはそれとして……キール。貴方は一体、どうして無限書庫を疑っているのかしら？）

（キールはあの子を疑っているみたいだけど……私には分からないわ）

――報告書を読み終えたミゼット・クローベルの独白

第62話　Ａ　ｂａｔｔｌｅｆｉｅｌｄ　ｐａｒｔｙ（前書き）

【革命の基本的な動機は、天国を建設することではなくて、地獄を破壊することである】

――ダイモン様から、Ｃ・オグルズビーより

第62話　A battlefield party

――新暦75年12月24日――

「……あんな綺麗な人もおるんやな。やっぱ世界は広いわ。それにしても……」

群青のドレスを着たアイシスに手を引かれ、パーティー会場を後にしていくティエリア・アーデを、手を振りながら見送ったはやては、ティエリアの運転手の名前を聞いて飛ぶように会場を後にしていったフェイトのことを、不思議に思っていた。

（運転手の名前は「刹那・F・セイエイ」……私は聞いたことないけど、フェイトちゃんとどんな関係があるんやか……）

しかし、悩んでばかりではいられないと割り切り、はやては白を基調としたドレスを一度柔らかく翻(ひるがえ)すと、トレディアの姿を両目で追った。これから確保する予定の人物を常に視界に入れておこうと、そう思ってのことだ。

「お、あそこか……って、えぇッ！？」

彼はすぐに見つかった。あの特徴的なグレースーツは、数百人ほどもいるこの会場の中でもとても目立ち、見つけ易かった。しかし、はやてが驚いたのは……今トレディアと握手をしている人物に見覚えがあったからだ。

「お久しぶりです、グラーゼさん。このパーティーに招待して下さり、ありがとうございます」

「いえいえ、当然のことですよ、スクライア先生。先生のロストロギア鑑定には、何度も助けられましたから」

トレディアと握手をしている男性は、緑色のスーツを着ていた。顔はかなりの童顔で、長い金髪と合わせれば、女性だといっても通じてしまいそうだった。隣りには黒髪に黒スーツで決めた彼の秘書――名前は確かブック・ロジック――が立っており、何かしらの書類が入っているであろう鞄を、大事そうに持っている。

「な、なしてユーノ君がここに……？」

その男性の名は、ユーノ・スクライア……本局に存在する無限書庫の司書長にして、はやての恋人である男性だ。そんな男性がこれから確保しようとする相手と親しげに握手を交わしていることに、はやては頭を殴られたようなショックに襲われる。

「……では、僕はこれぐらいで失礼させてもらいます。あそこにいる彼女の方にも行かなければならないので」

「ほう……先生にも遂に彼女ができたのですか。もし結婚した際には、その結婚式に是非とも私を呼んで欲しいものですな」

「勿論、呼びますとも。まあ、まだ結婚などは考えていないので、何時になるかは分かりませんが……」

はやてが茫然としている合間に、ユーノはトレディアと別れ、はやての方へと歩き出していた。秘書であるブックはその後ろにぴたりと張り付き、主に付き従う姿勢を崩さない。そして、はやてが漸く正気に戻った頃には、ユーノもブックも、すでにはやての目の前に立っていた。

「やあ、はやて。どうしたの？　そんな豆鉄砲を喰らった鳩のよう

な顔をして？」
「……ホンマに、ユーノ君なん？」
「勿論、僕は僕だよ？　……一体どうしたのさ、はやて。君は恋人の顔も忘れてしまったの？」
「……ホンマにユーノ君やわ。はぁ……まあええ。きっちりと話を聞かせてもらうで？」

ユーノは優雅に微笑みながら、手に持ったワインを一口ほど口に含む。はやてもそれにつられ、手元の水を一気に煽るが、気分は一向に冴えなかった。胸が何だかむかむかする。

「……話って？」
「とぼけるのは許さんで、ユーノ君。ユーノ君なら、うちが「アーカイブ」の捜索で誰を疑っていたのか、知っとるはずやろ？　なのに、どうして……！」
「……あぁ、そっちのことね？　うんとね、はやて。これには一応理由があってね……」

はやては自分の目付きが自然とキツくなるのを自覚しつつ、追及の手を緩めない。ユーノは曖昧な態度と答えでこういった追及をすり抜けるのが変に上手いのだ。はやても、一体どれだけその手に引っ掛かり、地団駄を踏んだことか……！

「理由？　それはどんな理由なん？」
「えっとね……まあ簡単に言うと、僕とグラーゼさんはね……」
「……司書長。そういう曖昧な態度は、八神部隊長に自分が怪しいと言っているような物です。こういった時にははっきりと言ったらいいのでは？」

司書長の専属秘書であるブックからのまさかの攻撃に、さしもの

ユーノも渋い顔をせずにはいられなかった。はやてからすればどうしてそんなに教えたくないのかが疑問だったが、あと少しでそれが聞けるのだと自分に言い聞かせ、どんな理由であっても納得できるよう、心の準備を……

「でもねぇ……ほら、はやてって可愛いから虐めたくなるでしょ？」

「「……は？」」

その瞬間、はやてとブックの心は完全にシンクロした。（何言ってんだコイツ？）と、はやてとブックは心の中で同時に叫ぶ。叫ばずにはいられなかった。

「……つまり、司書長は八神部隊長の怒った顔に劣情を催していた、と。そうですかそうですか……司書長はMだったのですね、知りませんでした軽蔑します」

「やだなぁ、僕は寧ろSに近いよ？　それはそれとして、僕がグラーゼさんと知り合っている理由なんだけど……簡単な事だよ。僕とグラーゼさんは、グラーゼさんが「アーカイブ」だと疑われる以前からお付き合いがあった。ただそれだけさ」

「……だったら最初っからそう言っときぃいいッ！！」

どんなことを言われるのかと覚悟していたはやては、そんな理由で焦らされたことに怒りを覚え、そのまま沸点を超えてユーノに怒声を浴びせた。パーティー会場にいた人々が何事かと思い、はやてたちの方を見る。すると、そこには司書長に罵声を浴びせる部隊長という、何とも奇妙な光景が広がっていた。

この時、ブックは一人で退避を完了させ、大衆の中に混ざって司書長と部隊長の夫婦喧嘩を無表情な顔で眺めていたが、それに気付けたのは、恐らく怒られているユーノのみ……

「私の話、聞いとるん、ユーノ君ッ！？　そもそもや。そもそも、ユーノ君は私に対して隠し事が多過ぎるんねん。もっと私を頼ってもええのに、一人で背負いこんで何でも解決しようと無茶して、それで皆に心配をかけるんやから、もっと皆に頼るためにも、もっと情報を解放させてな……」

「……はやて、何だか本題からずれてない？」

「ずれてへん！　ずれてるとしたら、それはユーノ君の頭の中や！」

「……（まあ、あながち間違ってはいない、かな？）」

周囲の人々の生温かい視線に見守られつつ、その夫婦喧嘩という説教は、ダンスタイムが終わりを告げる頃まで続けられた。一通り怒声を上げたはやては、自分たちを見つめる生温かい視線に気付くと、顔を真っ赤にさせ、そそくさとその場から逃げ出そうとした。

だが、その行動を読んでいたユーノは、はやてに説教のお返しとばかりに、衆人観衆の面前で抱擁↓キスのコンボをする。それによってさらに顔を赤くさせたはやては……きっと穴があったら入っていたに違いない。

ユーノと別れたトレディアは、自分の秘書が控えている彼の自室

に一旦戻った。トレディアの姿を見て、秘書の顔が一瞬だけ綻(ほころ)ぶが、それを瞬時に引っ込めて、彼女はこのパーティーの不穏分子(ふおんぶんし)である彼らのことを伝えようと、トレディアの傍に駆けよる。

「……トレディア様、よろしかったので？」

「スクライア先生のことか？　それとも、機動六課をここの護衛に回したことか？」

「いえ、その両方です、トレディア様。正直に言いますと、私はここに管理局の局員を招くこと自体に反対なのですが……」

目付きが鋭い秘書は、そう言いながらトレディアに、はやてが彼の周囲を嗅ぎ回っていることを証明する書類を手渡した。トレディアはそれを受け取り、パラパラとページを捲(めく)りながら、それでも楽観の体を崩さなかった。

「確かに、管理局は私が「アーカイブ」で「ラヴクラフト」だということに気付き始めているな。しかし、このパーティーが開催されている期間中は大丈夫だろう。何せ、こちらにはあの「ガンダム」を操るガンダムマイスターが三人もいるのだからな」

「確かにそうですが……しかし！」

なおも食い下がる秘書に、トレディアは肩を竦めた。彼には秘書がどうしてそこまで強固に反対するのか、分からなかった。彼は秘書の肩を掴むと、子どもに言い聞かせるように強く言う。

「……ルネッサ、お前の言いたいことも分かる。分かるが……大丈夫だ。何があっても「ガンダム」がきっと私達を護ってくれる。護ってくれるさ……私はあの王家の替(ワン)わりとして抜擢(ばってき)された「助成者(インベスター)」なのだから」

「……分かりました。でしたら、私はこれ以上何も言いません。言

いませんが、くれぐれも用心は……」
「……うむ、分かった。気を付けよう」

慎重な性格であるルネッサも、彼女にとって父のような存在であるトレディアにそこまで強く言われてしまえば前に出ることができなかった。最後に気休め程度の忠告をしたが、それが果たしてどこまで有効なのか……ルネッサは自身の内に渦巻く嫌な予感が近づいてくるのを感じた。

「……（……やれることは、やっておこう）」

部屋から出ていくトレディアの後ろ姿を見送ったルネッサは、その後すぐに会場内の至る所に設置してある監視カメラをチェックしていった。不審な動きが僅かでも見えれば、彼女は警報を鳴らし、管理局に助けを求めようと思っていた。勿論、トレディアと懇意の仲である高官を通じて、だったが……。

彼女の予感が事実となるのに、そう時間はかからなかった。

噴水から噴き出す水の音が、二人の間を優しく包む。忘れていた年月を思い出させるかのように、周囲の暗闇は様々な音色を発しな

がら二人を取り囲む。刹那は噴水の前にあるベンチに腰掛けながら、隣りに座るフェイトへと視線を向けた。

「……八年前より大きくなったね、ソラン」

「……お前は綺麗になったな、フェイト」

フェイトは豊満なおぱ～いの上部を肌蹴（はだけ）させたデザインの黒いドレスを着ていた。手には黒い手袋がはめられ、耳には瞳と同じ深紅のイヤリングをつけている。唇もまた深紅の口紅で彩られ、簡単な化粧が彼女の魅力を逆に惹き立てる。全体的に黒っぽい衣装でありながら、彼女の美貌と黄金のロングストレートは、彼女に眩いばかりの輝きを与え、光輝く女神のような印象を相手に持たせる。光輝く女神……

――そう、あの時の「ガンダム」のような――

「ふふ。お世辞でもありがとう、ソラン」

「……それで、どうしてここに所にいるんだ？　ここはトレディア・グラーゼ主催の「イヴ・パーティー」だぞ？　執務官であるお前には関係のない場所だと思うが……」

「ソランこそ、どうして運転手なんかになっているの？　私はてっきり、どこかで戦い続けているとばかり思っていたんだけど……」

フェイトの不思議そうな問いに対し、刹那は事前に用意していた経歴を話した。フェイトはそれに納得したのか、ニコニコと再び笑顔を浮かべる。しかし、刹那はその笑顔に戸惑いの色が混じっていることに気付いた。ここ最近、よくフェルトと一緒に過ごしていたせいか、刹那は乙女の気持ちについて、前よりは理解できるようになっている。そのおかげでフェイトの表情の裏に隠された気持ちを察することができたのだが……どうしてそんな表情を浮かべるのか

までは分からなかった。

その後、二人は様々なことについて話し合った。この八年間、どう過ごしていたのか。恋人は、愛しい人はできたのかどうか。最近の世界情勢について、どう思うか……。

刹那は言葉を慎重に選びながら、フェイトの問いに答えていく。フェイトは質問をしながら、バルディッシュにその答えを録音させる。フェイトは刹那に対してある疑いを抱いていた。八年振りに出会った友人を疑うことにフェイトは罪悪感のような物を感じるが、それでも彼女は聞き込みを止めはしなかった。

そして、フェイトが刹那に「CB」のことについてどう思うのか、質問した時。パーティーが行われている豪邸の中から、周囲の静けさを破って、甲高い銃声が幾つも聞こえてきた。二人はその音に瞬時に反応すると、今度は我が目を疑うような光景を前にして、唖然とした。

「うそ、あれは……「デカブツ」!?」

「……ッ!　（セラヴィーだと!?　ティエリア、何が起きたんだ!?）」

唖然としている彼らが見ている先で、白い巨躯が特徴的な「CB」の白い悪魔は、豪邸の屋上にまで浮遊した。背中から噴き出す緑の粒子が、それが贋物（にせもの）などではなく本物であることを証明している。フェイトは突然現れた「ガンダム」に一瞬呆けたが、それでも彼女は白い太股（ふともも）に巻き付けていたポケットからバルディッシュを取り出し、ドレスを着た姿からB・Jを纏う姿へと変身する。溢れる魔力が、雷光となって彼女の周囲を奔る。しかし、以前の負傷がまだ治り切っていないのか、フェイトはバルディッシュをフルドライブの

ザンバー形態にはしなかった。

「バルディッシュ、いける？」

『Ｙｅｓ，ｓｉｒ』

ハーケンフォームのバルディッシュが、鎌と柄の結合部にある黄金色の宝玉を光らせ、主の問いにそう答えた。フェイトはその答えに感謝をしつつ、その鎌を一度振り被ると……

その鎌先を刹那の首に突き付けた。

「なッ！？」

刹那の驚く声を、フェイトは複雑な心境の中で聞く。バルディッシュから伸びる雷の鎌は、刹那の首とまさに首の皮一枚の距離で止められていた。刹那の額から冷や汗が落ちるが、それを見ても、フェイトはバルディッシュに込める力を微塵たりとも緩めない。刹那の生殺与奪権を握ったフェイトは、そのままの状態で、あくまでも「執務官」として刹那に質問をした。

「ソラン・Ｉ・シュヘンベルグ……いえ、「剣士」のガンダムマイスターである刹那・Ｆ・セイエイ、貴方に問います」

「……ッ！」

「貴方は、どうして「ＣＢ」に加担するのですか？」

自分のプロフィールをいきなり暴かれた刹那は、どうして自分が「剣士」のガンダムマイスターだとバレたのかを考えた。裏切ったアニューたちから漏れたのかと思ったが、その考えはもうありえないのだ。『ヴェーダ』から離れたイノベイドは、離れた時点で本能にあるロックが架せられる。例えば、レベル７に値する極秘情報―

（マイスターの情報、他のライセンサーの情報、「ガンダム」や『ヴェーダ』の設計図など）は決して口外しない。他のイノベイドの気配を感じることができない等々……多くの制約が彼らには架せられるはずなのだ。だから、イノベイドたちからは漏れるはずがない……のだが。

ならば、フェイトはどうやって自分の正体に辿り着いたのか？

「……一つ、質問をしたい」

「……」

無言を肯定だと捉えた刹那は、さらに言葉を紡ぐ。

「どうやって、オレの正体に気付いた？」

「……ッ」

だが、次の肯定は……酷く苦しそうな無言であった。まるで、こうであっては欲しくなかったと、そう訴えるかのように。

「……第３２管理世界で、私が「剣士」を斬ろうとした時、フェルトが「剣士」に向かってこう叫んでいました。「刹那ッ！」と」

「……」

「そして、貴方の今の名前が刹那・Ｆ・セイエイ……しかも、第９７管理外世界の記録では、貴方はソラン・Ｉ・シュヘンベルグと記載されています」

「……？」

「刹那とシュヘンベルグ……この二つの名が揃っているのは、果たして偶然かな？　……いえ、偶然だとしたら出来過ぎです。それで私は貴方に疑いを持ったのです。……友人を疑いたくはありませんでしたが」

「……そう、か」

フェイトの推理を聞いた刹那は、まず、どうして第９７管理外世界にかつての自分に関する資料が残っていたのか疑問に思ったが、今はこの状況を脱することこそが重要だと思いなおすと、周囲の状況を改めて確認してみた。辺りには人っ子一人すら見当たらなかったが、それでも打開できる材料がないか、懸命に探してみる。

「それに、今思えば「剣士」の太刀筋は……あまりにも、貴方の物と似ていました。それも貴方を「剣士」だと断定した材料です」

フェイトは刹那が周囲を見渡していることに気付いていたが、敢えてそれを無視した。いざとなれば手足にバインドをかけて拘束すればいい……そう考えてもいた。実際、この状況下で刹那が取れる選択肢は限りなく限定されており、現在の刹那は手も足も出ない状態に近い物があった。頼みの綱であるＧＮデバイスは、今やラグランジュ１で調整と整備に追われ、格納庫や整備室から出ることすら叶わずにいる。護衛用のデバイスとして、一応Ｍ・Ｓを持ってきているが、そんな付け焼刃的なモノでフェイトから逃れられるなどとは、彼自身、全く思っていなかった。

「それで？　お前はオレをどうするんだ？」

「……貴方を拘束し、その身柄を確保します。抵抗の意思を見せれば、その場でブラックアウトさせます」

「……」

時間が無くなってきたことを、刹那は肌で感じる。目の前で彼を睨むフェイトは、既にバインドの構成に入っているのか、言葉少なくなってきた。焦りが彼をじんわりと焦がすが、それでどうにかなるほど、この状況は甘くない。

「もう一つ、聞きたいことがあるんだが……」
「……何？」
「オレの名前が記載されていたという第９７管理外世界の情報を、お前はどうやって見たんだ？　そういった情報は、全て消去したはずだが……」

純粋な疑問をぶつける刹那。「ＣＢ」のメンバーに関わる情報は、全て『ヴェーダ』を通じて消去したはずだった。なのに、どうやってそれを閲覧することができたのか……彼には甚だ疑問であった。フェイトはその困惑に逆に戸惑いながらも、その答えを口にする。

「え？　でも……無限書庫で普通に見れたよ？」
「……分かった。やはり、無限書庫か……！」

フェイトの疑わしげな視線を受けながら、刹那はその名を苦々しい気持ちで復唱した。無限書庫……またの名を「情報の墓場」とするその施設には、さすがの『ヴェーダ』もおいそれとは立ち入ることができなかった。あそこには『ヴェーダ』を持ってしても受け止めきれない情報量が眠っており、その情報を受け止めるだけのソフトもまた、そこには搭載されているのだ。迂闊（うかつ）には踏み込めない禁断の領域……それが「ＣＢ」の抱く、無限書庫に対するイメージだった。

刹那は納得する反面、またしてもあの書庫が立ち塞がったのかと憤ったが、今はそれについて思考する時ではない。セラヴィーが多数の魔導師や質量兵器―（「Ａ－ＬＡＷＳ」側から転送された）を相手に孤軍奮闘する中、彼自身もまたその戦いに身を投じ、仲間を助けなければならないのだ。その為にも、先程からフェイトの隙を探っているのだが……如何せん、隙が見当たらない。

やはり、現役のエリート執務官がそう簡単に隙を見せるわけがないか……刹那は心中でそう呟きながら、フェイトの目を真っ直ぐに見返した。フェイトの深紅の瞳からは何の表情も窺えなかったが、それがどこか悲しげだったことに、刹那は何故か気付くことができた。人の心情に疎かった彼が、である。

「……ねえ、ソラン。最後にもう一回聞くけど……貴方はどうして「ＣＢ」に加担するの？　どういう理由で貴方は、貴方達「ＣＢ」はこんな、こんな行いをしているのッ！？」

「……」

「答えてよ、ソランッ！」

フェイトの辛そうな声が、刹那の耳に聞こえてくる。だが、なぜ辛そうだと分かるのか……刹那にはよく分からない。戦争を経験し、その時に親を殺したせいか、幼少の頃より感情面が希薄だった彼がどうしてこんなに事細かにフェイトの心が分かるのか……今の彼に、その答えは得られなかった。

「オレは……オレが「ＣＢ」に加担する理由は……人間を、人類を信じているからだ」

「……？」

「人類は分かり合えると……そう信じているからこそ、オレは、オレ達は……！」

フェイトが刹那の言葉に全神経を集中させる。刹那も、これを言ってよかったのかを悩みながら、しかし、フェイトにこれだけは知ってもらいと思い、口を閉ざしはしない。「ＣＢ」で戦うモノ、「管理局」で戦うモノ。そのどちらもが「戦い」という手段で「平和」を目指すモノ同士だからこそ、刹那は……

――ドンッ！

「「ッ！？」」

それは、唐突にやってきた。刹那とフェイトが互いに集中し合い、外へと注意が甘くなった瞬間に、天上という名の空から堕ちてきた。

『間に合ったかッ！？』

『ああ、間に合っているぞライセンサー！　そして、再び相見えることができたな、フェイト・テスタロッサァアアアアッ！！』

黒い二本角を天高く聳えさせた、赤いバイザーを付ける漆黒の鎧武者。その威風堂々たる佇まいは、敵味方に関係なく畏怖を与え、芯から怯えさせることだろう。手に握られた二本の刀は、今宵も誰かの血が欲しいのか、鈍い光を放っている。

「これは……益荒男ッ！？」

「あれは……あの時の！？」

『では、往くぞ益荒男！！』

『応とも、ライセンサー！』

未だに鎌を刹那へと突き付けていたフェイトへと、益荒男が二本の刀でもって襲いかかる。フェイトが発動した魔法陣がその一撃にして二撃たる攻撃を防ぐが、それを益荒男は信じ難い剛力と切れ味でもって一刀の元に斬り伏せる。だが、フェイトはその刹那の時間で後退し、自らの態勢を整えた。一時、互いを睨み合うフェイトと益荒男。

「トーレ、ここは任せた！　オレはセラヴィーの援護に向かう！」

『了解だ、セイエイ。ここは私とこの馬鹿に任せて、お前はアーデの方に行ってこい！』
「ああ！　フラッグ、セットアップ！」

益荒男の背後で「フラッグ」の青い装甲を身に纏わせた刹那は、そのままセラヴィーが戦っている戦場へと飛び立っていった。フェイトはそれを阻止すべく、フラッグの眼前にまで飛ぼうとするが、目の前の益荒男がそれをさせない。させてはくれない。

『今回は最後まで付き合ってもらうぞ、フェイト・テスタロッサァアアアアッ！！』

Ａ．Ｉである益荒男の野太い声が、黄金と漆黒の戦場に響き渡る。ハーケンフォームのバルディッシュを構え直すフェイトと同様に、益荒男もまた二本の刀を握り直した。パーティー会場の狂騒が、ここでは嘘のように静まり返り、梟などの夜行生物ですら、この決闘を前にして息を潜めていた。聞こえるのはただ、他の戦場から轟く戦火の爆音のみ……

刹那とフェイトが噴水の前で邂逅した頃。アイシスに連れられ、パーティー会場とは別の部屋に連れられたティエリアは、訝しげな顔でアイシスの幼さが残る顔を睨みつけていた。部屋には高価な家具が揃い踏みで、ここにもトレディアの富裕さを垣間見ることができる。

「……それで？　貴方はあの没落したフォートレス家とどんな関係があるのですか、アイシスさん？」

「ここでは貴方本来の話し方をしても結構ですよ、「デカブツ」のマイスターさん？」

「……！」

ティエリアがこの少女の言に従ったのは、彼女がティエリアの耳元で「アイ・フォートレス」の名を出したからだった。「アイ＝フォートレス」……ティエリアと同様に、人間によって創られた、純粋な人ではないヒト――「プロジェクトL」の成功体であったモノ。彼女は今から六年ほど前に、「CB」側の襲撃を受け、ティエリアに彼女自身の望みを託して死んでいったが、その少女は今もティエリアに大きな影響を及ぼしている。

そんな少女の名を出されては、ティエリアは従うしかなかった。目の前にいるこの少女とアイがどんな関係なのか、それも気にかかった。フォートレス家という家柄は没落して久しく、その存在を知っている者自体、かなり少なくなってきている。その中で、どうしてティエリアとフォートレス家を結び付けることができたのか……疑問は尽きない。

また、自分をガンダムマイスターだと看破したからには、恐らくこの少女は自分と同じ顔を持つリジェネと関係がある――つまりは、「A－LAWS」に所属する者だろうと、ティエリアは当たりを付

けていた。だとすれば、言い逃れることはできないだろう。そう覚悟を決めて、ティエリアは口を開く。

「……貴様とフォートレス家にどんな関係があるんだ、アイシスとやら？」

「あら？　聞いていたのと違って、以外と粗野な喋り方をするんですね。それに、絶世の美女が男口調で喋るのは、やっぱり違和感を拭えませんね。……元の話し方に戻ってもいいですよ、「デカブツ」」

二回目の会話で、ティエリアはこの少女が自分に憎しみを抱いていることに気付いた。また、アイシスも、この時点でティエリアが自分の正体に気付いていないことに勘付き、それを利用して、ティエリアへ婉曲に憎しみを吐き出す。

「……あの時の襲撃事件で、生き残りはいないはずだが？」

ティエリアは自分に憎しみを抱くこの少女と「フォートレス家」を結び付け、今口にした推論を思いついたが、確証はなく、彼自身も自信なさげだった。しかし、アイシスはその言葉こそを待っていたのだ。アイシスは自身の青い瞳を爛々と輝かせ、ティエリアの推論を補強する。

「もしいたとすれば、それは誰だと思いますか？」

この返しに、ティエリアは言葉を無くした。それはこの少女が「フォートレス家」の生き残りであることを示唆していたからだ。最も、まだ確証となるモノがない為、彼もそれほど慌てることはない。

「あの時、生き残っている可能性があるとすれば、それは……」

ティエリアは「フォートレス家」の家族構成を思い出すと、それと目の前の少女とを照らし合わせた。この年齢であり得るのはアイとその妹の……アイシスッ！？

「……そうか。君はアイ＝フォートレスの妹であるアイシス＝フォートレスか！」

「ええ、そうです。最も、フォートレスの名は、貴方達の襲撃事件があった日から捨てています……が」

ティエリアが目に見えて狼狽（ろうばい）したのを満足げに眺めるアイシス。彼女はティエリアが狼狽した事に、一種の達成感を感じながら、自身のデバイスを膨らみかけのおぱ～いから取り出し、それを掛け声なしにセットアップした。

アイシスのデバイスは、狙撃銃型のストレージデバイスだった。特に珍しくもない、至って普通の狙撃銃……だが、それは人を殺すには十分以上の凶器である。それを、アイシスはティエリアの眉間に突き付けた。その際の、彼女の腕ほどもある長い銃身を慣れた動作で振り回す様子は、伊達や酔狂でＡＡランクを取ったのではないことをティエリアに窺わせた。

「それも今日までです。私は姉の仇である貴方を討つことで、「フォートレス」の名字を取り返すのですから」

銃口を突き付けられたティエリアは、突き付けられたことで逆に冷静さを取り戻すと、アイシスの顔をもう一度見直してみた。アイシスの顔はアイの顔とはかなり違うが、何処となく雰囲気だけは似通った物を感じ取れる。やはり、同じ境遇で育ったからには、例え本当の姉妹でなくとも、どこかが似通るのだろう。

しかし、もし仮にそうだとすれば、ティエリア・アーデはアイシスを殺せなくなる。彼はもう二度と、アイを殺したくはないのだ。そうなれば、必然。彼の取る道は……

「……君には悪いが、僕は「ＣＢ」の使命を、そしてアイとの約束を果たすためにも、君に討たれるわけにはいかない！」

「ええまあ普通はそうでしょうね。ですから、ここで死んでください！」

「セラヴィー！」

『Ｙｅｓ，ｍｅｉｓｔｅｒ！　スタンバイレディ、セットアップ！』

……アイシスを殺さずに撃退する、という物になる。それが甘いことは分かっていたが、それでも彼は、自身の意思で不殺の戦いを選択した。

アイシスの狙撃銃型ストレージデバイス「アイ」から放たれた銃弾は、セラヴィーとなったティエリアの白い装甲に阻まれ、呆気なく弾け飛んでしまう。アイシスはそれを見て舌打ちをするが、その合間にも、セラヴィーの巨腕がアイシスの腕を掴むべく、ゆるりと伸びてきた。アイシスはもう一発、質量兵器に指定されている５０口径のマグナム弾をセラヴィーの額に放つが、セラヴィーは小揺るぎすらしない。

「ッ！」

分かっていた事だった。「デカブツ」に殆どの質量兵器が効かない事は、第９７管理外世界の戦闘でも証明されているのだ。だが、こうまでも効かないとなると、さすがにショックを感じずにはいられない。アイシスの持つ種種の弾丸の中でも、二番目に強力な弾丸が何もせずとも防がれるのだ。悪態の一つや二つ、付きたくもなるだろう。

『くそ、すばしっこい！』

セラヴィーの手をすり抜けながら、今度は零距離から撃ってみるアイシス。しかし、結果は変わらずに、掠り傷すら与えられなかった。けれど、アイシスはめげる事なくそのやりとりをし続ける。ドンッドンッドンッドンッ……されど、その努力を嘲笑うかのように、セラヴィーは傷一つすら付かない。

『このままでは、護衛の魔導師がやってくるか……セラヴィー！』
『シックスアームズ、起動！　目標を確保します、マイスター！』

時間にして五秒。その間に、１０発以上もセラヴィーに弾丸を撃ち込んだアイシスだが、そんな彼女へと、終わりは唐突にやってきた。勝負を早く決めようとしたセラヴィーが、その両肩両膝に搭載されているＧＮキャノン？から四つの手を生やし、その全てでアイシスを捕らえようとしてきたのだ。両腕から逃れることは容易かったが、さすがに六本もの手を避ける事はできずに、アイシスはセラヴィーに軽々と持ち上げられながら、セラヴィーに捕らえられてしまう。

「くっ……離して！　離して下さい！」
『漸く捕まえることができたか……さて、どうッ！？』

アイシスのデバイスを右肩の手で、アイシスの手首を両腕で掴まえていたセラヴィーだったが、そんなセラヴィーへと、何処からともなく現れたＧＮビームサーベルが突然襲いかかってきた。セラヴィーは左膝から急ぎサーベルを取り出し、その赤橙のサーベルをすれすれで受け止めるが、それに気を取られてしまい、腹部に硬い拳を貰ってしまう。

後退すると同時にアイシスと「アイ」を地面に落としたセラヴィーへと、アイを両腕で構えたアイシスが、セラヴィーの真下から拳を受けた腹部へと、自身の魔力全てを込めた一発を放った。その一撃は十字の紋と共にセラヴィーへと着弾し、その巨体を天上ならぬ天井へと押し上げていく。いや、それはもはや天井すら超え、星しか瞬かない空へと押し出していった。

空へと消えていくセラヴィーを見上げながら、床に転がり続けるアイシス。その視線はセラヴィーをとらえ続けていた。

「これすらも、全く効かないなんて……なんて、卑怯なのかしら……！」

『全くさ。さっきの君の一撃は僕から見ても相当な威力があったのに、それすらもセラヴィーの装甲を凹ませることしかできないなんてね……やっぱり強いね、彼は』

「……それで？　貴方はどうするんですか、リジェネ・レジェッタ？」

『僕？　僕はこれから「Ａ－ＬＡＷＳ」の部隊と一緒に彼を追い詰めに行くよ。それよりも、君こそどうするんだい？　利用された君は？』

アイシスには、リジェネが笑っているように思えた。『計画』通りに事が運び、無邪気に喜ぶ子どもの姿が、なぜかガデッサと被っ

て見える。

その姿を見て、アイシスは漠然とした不安を感じた。何故かは分からないが、こうなること自体、すでに手遅れな気がしたのだ。まるで、どう足掻いても落ちていくアリ地獄に入り込んでしまったような……そんな不安を、彼女は感じていた。

「……私は、とりあえず部隊を指揮しに行きます。例え利用されていようとも、私は私の責務を果たすだけです。元『隊長』のアイシスとして」

不安を打ち消すかのように、ボロボロとなった床から立ち上がってリジェネにそう告げるアイシス。その瞳には、自らの復讐を果たせなかったことに対し、何の感傷も感じていないように見て取れる。実際、アイシスの心の内は不気味なほど静まり返っていた。本人すら戸惑うほど。

『それじゃ、僕は君を作戦本部にまで連れていくよ。深夜に輝く戦の焔を見ながら、二人で空の散歩を楽しもうか？』

「……デートの誘いは、せめて「ガンダム」になっていない時にしてくれませんか？」

互いに軽口を言い合いながら、ガデッサがアイシスを腋に抱え、空へと飛び立っていく。セラヴィーと魔導師部隊の戦いはすでにここから離れ、暗い森の中で行われているようだ。

二人が作戦本部に到着した頃には、こちらの損害はすでに1割を超えようとしていた。機動六課の魔導師たちは、パーティーの警護と「ガンダム」の追跡、そのどちらを優先するかで迷い、未だ参戦するまでには至っていない。

『……好機だ』

「ええ、そうですね。これで「デカブツ」を捕らえるのに邪魔が入りません」

ここに来るまでに、リジェネから今作戦――「Ｏｐ－ビッグ」の概要を聞いたアイシスは、様々な計器やケーブルが置かれている五つの長机の間を通り抜けながら、テントの中央にある彼女ほどの大きさのモニターの前に立つ。そのモニターでは、「Ａ－ＬＡＷＳ」側の損害とセラヴィーとの戦闘がリアルタイムで流れていた。

映像の中のセラヴィーは森林の上空を飛び回り、目に付いた魔導師を片っ端から消し飛ばしていた。たった一発でＢ・Ｊよりも強固なはずのＭ・Ｓを消滅させる様は、まさに悪魔――あるいは魔王――と言える。

だが、アイシスは本来部隊を指揮することで本領を発揮するタイプだ。逐次送られてくる情報をマルチタスクで処理しながら、アイシスは最近開発されたＧＮ粒子の影響を受けない「ＣＢ」の通信で、部隊に的確な指示を出していく。その指示が功を成したのはすぐだった。リジェネの見ている先で見る見るうちに部隊の損傷率は減少していき、逆にセラヴィーへの砲火は見るまでもなく激しくなっていく。

『六番隊、あと五十秒後に「デカブツ」がそこを通過します。一斉射した後、すぐにその場から退避を。十一番～十二番隊はそこで待機、追い込んだ「デカブツ」を待ち伏せして下さい。一番～三番は、十一番隊たちの待ち伏せが終了したと同時に、「デカブツ」に近接戦を挑んで下さい。シックスアームズを起動させたら、急ぎ退避をお願いします』

画面の中のセラヴィーが、自身にちょくちょく手出ししてくる魔導師たちを振り払うべく、その劫火を豊かな森へとはき出した。しかし、そんな闇雲な攻撃が森の中に隠れた魔導師たちに当たるわけもなく、ただ空振っただけで終わってしまう。

セラヴィーの攻撃が終わると、今度は此方の番だと言うように、木々の間から一斉に砲火が放たれた。色とりどりの砲火がセラヴィーに爆炎の華を咲かせる。セラヴィーはそれを嫌ったのか、それとも態勢の立て直しを図ったのか、その場から急いで飛び去ると、そのままアイシスが待ち伏せを指示した場所にまでやってきた。それを逃すアイシスではない。

『ファイアッ！』

アイシスの号令と共に、先程の比ではない密度の弾幕がセラヴィーへと覆い被る。突然の奇襲を受けたセラヴィーは空中で態勢を崩し、そのまま地面へと押しやられていった。火力の暴力がセラヴィーの機制を制し、地面へと抑え込む……かのように思われた。

しかし、悪魔はその程度で屈するほど……弱くはなかった。

セラヴィーは降り注ぐ砲火を受けながらも、上体を起こし、両肩と両膝の大砲を動かして、そこから極太の熱線を慈悲なく放った。その熱線は射線上の大地を融かしながら待ち伏せ部隊がいた所に直撃し、魔導師諸共、その丘陵（きゅうりょう）をこの世から消し去った。火力の違いを、暴力の上をいく暴虐を見せつけるかのように。

『……』

そのとんでもない火力を見せつけられた作戦本部と一番～三番隊は、動きも思考も凍ってしまっていた。先程までアイシスが戦術で追い詰めていたはずなのに、その戦術を覆す戦略級の大火力に、誰も言葉を発せなかったのだ。それは無論、アイシスとて例外ではない。

しかし、ただ一人。暴虐を見せられても行動を起こせるモノがそこにはいた。それは黒銀のボディを持ち、大きな肩と鳥の足みたいな脚を持っていた。両手には二メートル近い大砲が構えられ、その照準はセラヴィーに固定されている。また腰部の後ろからは一本のエネルギーパックが伸びており、それは大砲の付け根と繋がっていた。

『やあ、ティエリア。久しぶりだね』

『……ああ、久しぶりだなリジェネ。元気そうで残念だ』

黒銀色のガデッサ――リジェネのガデッサが地面に降りる。ＧＮ粒子により重量を軽減されたガデッサは、特に音を立てる事もなく地面に降り立ち、そのまま直立の格好をとった。セラヴィーは目の前に降り立ったガデッサから視線を外さずに大砲の照準を合わせると、ガデッサの正面に向かい合うように動く。嵐の前の静けさ……それが両者の間にはあった。

『いきなり本題に入るけど、「Ａ－ＬＡＷＳ」に入らないかい？今ならかなりの高官処遇で受け入れてもらえるよ？』

『それは魅力的だが、断る。僕は「ＣＢ」のガンダムマイスター、ティエリア・アーデだ。仲間を裏切るような真似は、絶対にしない！』

『なら、意地でも君を引きいれるけど……勿論、構わないだろう？』

『やれるものならな、リジェネ！』

そして、その静けさを打ち消す砲撃音が両者の間に轟くと、森中の動物たちが一斉に森から逃走していった。ゴォオオオンッ……大きな鐘を鳴らしたような音が、再び森中に響き渡る。それをゴングにして、上空へと飛び立つガデッサとセラヴィー。

戦いは……まだ終わりを見せない。

【先の事は分からない。
しっかりと目を開けていても、本の一歩先の出来事さえ見えないけれど、それでもいつか、二人手をつなぎ、風を感じながら行こう】

――鴨川秘様から、『送電塔のミメイ』の夜刀より

第62話　Ａ　ｂａｔｔｌｅｆｉｅｌｄ　ｐａｒｔｙ（後書き）

（……ハッ!?　女狐めがマイスターに色仕掛けを!?　そんなこと、このエクシアがいる限り、絶対にさせません!）

「……気のせいか、Ｏガンダム?　何やらエクシアからドス黒いオーラが立ち昇っているように見えるんだが……」

『……絶対に気のせいですね、イアン・ヴァスティ。さっきから「女狐殺女狐殺女狐殺……」と呟いているようですが、それもこれも、全て気のせいですよ』

（あああぁああああああぁああああああああああああッ!?　どうしてこんな時に限ってＯライザーとの調整でラグランジュ１から出られないのでしょうか!?　こうしている今も、女狐の毒牙がマイスターに……させるかぁあああッ!!!!）

――ラグランジュ１でのエクシア、Ｏガンダム、イアン・ヴァスティの一コマ

第６３話　Ｉ　ｒｅｇｒｅｔ　ｔｈａｔ　Ｉ　ｗａｓ　ｓｏｒｒｙ（前書き）

【戦争の前は憤怒なり、戦争の中は悲惨なり、戦争の後は滑稽なり】
――ダイモン様から、長瀬川如是閑より

第63話　I regret that I was sorry

――新暦75年12月24日――

「イオリア・シュヘンベルグ！　これは一体どういうことなのだ！？　セラヴィーが「A－LAWS」と戦闘を行っているのは、そちらの作戦なのか！？」

目立つグレースーツを着たトレディア・グラーゼは、超長距離用の通信機器を使って、イオリアへとこの状況の説明を求めた。森の向こう側からは砲撃の音が轟き、パーティーを行っていた豪邸を激しく揺さぶってくる。窓の外を見れば、森の木々が戦火に焼かれ、夜闇に真っ赤な明かりを照らしていた。

『あいにくイオリアさんはコールドスリープで眠っておりますので、私が説明を致しますが、それでもよろしいですか、アーカイブ？』

「……うむ、頼む」

通信の向こう側に現れたのは、イオリアではなく、長い茶髪が特徴的な女性だった。女性――スメラギ・李・ノリエガは、助成者――インベスターたるトレディアへと、現況を説明する。

『では……まず、今回のセラヴィーの行動は、此方にとってもイレギュラーな事態です。まさかリジェネがこのパーティーに参加しようとは、夢にも思っていなかったので』

「……あの裏切り者のイノベイドが参加していたのか？　このパーティーに？」

『……？　えぇ、そうです。彼は恐らく、ティエリアと自分がそっくりだと言うことを向こうに漏らしていたのでしょう。それを考慮

して女装をさせたのですが……効果はなかったみたいですね』

スメラギはトレディアの反応に首を傾げた。なぜ参加者名簿を持っているはずの彼がその事を知らないのか？　それが不思議でならなかったのだ。しかし、今は一刻を争う時だと思い直し、そのことには触れないで説明を続けた。

イノベイドが『ヴェーダ』とのリンクを切った際に架せられる「ロック」は、裏切りのイノベイドに対し、ある程度の情報漏洩を防止することができる。されど、それは万能とは言い難いものだ。さすがに「このマイスターと僕の顔はそっくりなんだ」と言われれば、それで終わりだ。素性はバレないだろうが、面は割れてしまう。

だからこそ、このパーティーに参加できるティエリアへと女装を強制させたのだが……やはり無理があって、早くも戦闘に突入してしまった。それに反省の念を覚えながら、スメラギはこれからの展望を予測する。

『恐らく、セラヴィーは今リジェネと戦っています。でなければ、すでに「ＡＩＬＡＷＳ」の部隊を全滅させ、撤退しているでしょうから。……刹那はフラッグでセラヴィーと共闘するでしょうし、トーレさんは……まあ、どこかで戦ってはいるでしょう。しかし、機動六課が参戦すれば面倒な事になるでしょうから、できるだけ参戦する前に撤退するのが望ましいですね』

望ましい。その言葉を聞いて、トレディアの額に青い血管が浮かび上がった。

「望ましい？　望ましいだと！？　この状況自体、私には望ましくないものなんだぞ！？　これで流れ弾の一つでもここに撃ち込まれ

てみろ！　たったそれだけで、私はお前達「ＣＢ」のインベスターから一気に……」

『ですので、早めの撤退を此方も望んでいるのです！　では、要件はそれだけですね！？　こちらも忙しいので、通信を切らせて貰います！』

「あ、おい待て！　まだ……！」

無情にも切られた通信が、虚しい音をトレディアに聞かせる。だが、彼だって分かっているのだ。今の「ＣＢ」が突然の戦闘でてんやわんやになっていることは。しかし、それでも、彼にはこの怒りのはけ口が必要だった。三年前から築き上げてきた地位と財産を失う……その恐怖を誤魔化す為にも。

「くそっ！　……ルネッサ、すぐにここからパーティーの参加者を避難させろ！　すぐにだ、すぐに！」

「もうやっています！　それで、「ＣＢ」側は何と言っていましたか！？」

黄色がかったオレンジ色の髪を右側に寄せるトレディアの秘書、ルネッサ・マグナスが悲痛な声を出してトレディアへと駆けよる。ルネッサは突然起こった戦闘を警戒し、拳銃の形をしたデバイスを右手に構えていた。

「奴らにとってもイレギュラーな事態だそうだ！　だから、一旦ここから退くぞ！」

「……分かりました。では、早速車を用意してきます！」

「あぁ、たの……」

「その必要はないで、トレディア・グラーゼさん？　いや……「アーカイブ」」

「「ッ！？」」」

通路の奥から聞こえてきた声に、二人は驚いた。そして同時に、声が聞こえてきた方へと目を向ける。

「いやいや～……さっきの通信、聞かせてもらったで？　やっぱりあんたが「アーカイブ」、もしくは「ラヴクラフト」なんやな」

トレディアとルネッサが見ている先で、茶色い髪を×状の髪飾りで縛った八神はやてが、長い銀髪を下すチンクと共に歩み出てきた。肩にかけた薄いカーディガンがその歩調に合わせて揺れ動き、トレディアに何とも言えない重圧をかけてくる。コツコツと音を鳴らす純白のハイヒールも、トレディアを追い詰めるかのように音を大きくしていく。

体に白いドレスを巻き付けた格好のはやてが近づくたびに、トレディアの顔からは血の気が引いていった。一体どこから聞かれていたのかはまだ定かではなかったが、それでも本能がもう終わりだと、そう告げてくる。

トレディアの隣りにいたルネッサも、トレディアと同じくらい真っ青になっていた。そして、後悔する。あの時、もっと強く言って対策を講じていればと……遅すぎる後悔を、彼女は胸の内でする。すでに手遅れだと、そう思っていたからに。

「さっきの通信を手土産にすれば、さすがの上層部も黙るしかないやろ。……つうわけで、あんたの身柄を拘束させて貰うで。チンク！」

「はい、八神部隊長！」

主の危機に反応し、咄嗟に構えられたルネッサの銃は、しかし、一振りのナイフによって爆散させられてしまう。トレディアが近くで起こった爆発に怯える。その間に、チンクはトレディアの体を制して、犯罪者用の頑丈なバインドをトレディアにかけた。

トレディアを拘束したチンクは、次にルネッサへと向かう。爆発によって未だ視界が回復していないルネッサは、チンクの動きに対応する時間すら与えられずに、易々と拘束されてしまった。もし視界が万全であれば、とてもこうすんなりとは行かなかったであろう。

「クッ……！」

「詳しい事情聴取……いや、情報の搾取は本局か地上本部に戻ってからや。せやから、それまでの間、己らのしてきたことを後悔しい。搾取が始まれば、人権なんて無くなるんやから、それまでの間はひたすらに……後悔しておくんや。自分達が殺してしまった人達一人一人に謝りながらな」

はやては芋虫のように動く二人を冷たく見下ろしながら、後の始末をチンクに任せ、自身は機動六課の作戦本部がある所へと戻っていった。その道中に、はやてに声をかける人物がいた。その名は……カリム。

「さすがね、はやてさん。聖王教会でも正体が不明だったアーカイブを、こうも容易く突きとめて捕らえるなんてね」

「褒めても何も出えへんで、カリム？　……それで、そっちは助け

てくれるんかい？」

パーティーなのに、相変わらずのシスター服を着ているカリム・グラシア。だが、シスター服といえど馬鹿にしてはならない。寧ろ尊敬すべきだ。シスター服という清楚な服装、それを内側から膨らませる柔らかな双丘――おぱ～いは、もはや言葉で言い尽せないほどの破壊力を備えているのだ。だから、侮ってはならない。寧ろ敬意を表すべきだ。

「……いえ、聖王教会は今回の戦闘を静観させてもらいます。相手は「デカブツ」、あのなのはさんと互角の一騎打ちをする化物です。そんな怪物相手では、今の聖王教会に荷が重すぎて対処できないでしょう」

「……カリムだけでも参加してくれると嬉しいんやけど？」

「ふふ……ご冗談を。幾ら私でも、「デカブツ」と戦って生き残れる自信はありませんよ」

カリムは微笑と共に、小さな笑い声を出した。その表情からは分からないが、彼女もまた、近くに「デカブツ」がいるということで、体を酷く固くさせていた。あの馬鹿げた砲撃がいつこちらに向けられるのか……その恐怖が、カリムの心身を締めつけてくる。

それに、

「今の聖王教会はとても不安定です。幸いにも、今の私と「カリフ」、それにもう一人のオーバーSが歯止めとなっていますが、誰か一人でも欠けたら、聖王教会は一気に管理局とも敵対し、聖王様復活を唱え始めるでしょう。そうならない為にも、私は今回の戦闘を辞退させてもらいます。……ごめんなさい、はやて。力になれなくて……」

「あーあー、気にせんでええよカリム？　どうせうちらが駆け付ける頃には、もう戦闘は終わっとるはずやし」

はやては手をパタパタと動かし、カリムに「気にするな」とジェスチャーした。それを見て、カリムはニコリと微笑むと、パーティー会場に通じる通路へと戻っていった。

もう心配する事は何も無いと……その信頼を、友人であるはやてに見せるように。

「……ほんで、何時までそこに隠れとるんや、ユーノ君？」
「あちゃ、バレてた？」
「バレるも何も、チンクが教えてくれたんや。そこに隠れておる人がいるっつうてな。それで、チンクですら発見に手間取るレベルの幻術魔法を使える人は、私の中ではユーノ君しか思いつかなかったわけや」
「う～ん、結構自信あったんだけど……やっぱり、戦闘機人の目のことも想定に入れておくべきだったかな？」

カリムの背を見送ったはやて、その隣の空間が突如屈折する。その屈折した空間から、空間の認識をずらす幻術魔法を解いたユーノ・スクライアが、緑のスーツ姿で現れる。はやては悪びれた様子のないユーノをジトーー……という擬音と共に見詰めた。その視線に耐えかねて、ユーノが口を開いた。

「それで、はやては「アーカイブ」を捕まえたみたいだけど……これからどうするんだい？　アーカイブの護送か「デカブツ」の殲滅か……道は二つあるけど？」
「そんなん決まっとるで。勿論……」

「アーカイブの護送や。「Ａ－ＬＡＷＳ」の皆さんには悪いけど、こっちの方が重要なんで、うちらはさっさと本局に戻らせてもらうわ」

もしも世界が終わるとしたら、きっとこんな光景に違いない。

『うおぉおおおおッ！！』
『ハアァアアアアッ！！』

黒銀のガデッサから赤橙の極光が放たれる。それを白亜のセラヴィーは桃色の熱線でもって迎撃する。衝突する極光と熱線。大気が怯えるように震え、大地からは地鳴りが止まない。轟音と一緒くたになって発生する衝撃波は、もはやそれだけで人を殺せるだろう。

セラヴィーとガデッサは、互いに話をしない。もうお前の事は分かっていると、そう主張するかのように、彼らは互いに声をかけないで、ただただ一途に……戦っていた。

ガデッサが主砲であるＧＮメガランチャーを構え、その砲口から

迸る光線を放った。それは射線軸上の全てを消し飛ばしながらセラヴィーへと直進し、その身を骨の髄まで焼こうとする。対して、セラヴィーは両肩両膝の計四門ものＧＮキャノンを斉射するクアッドキャノンでもって、それに対抗する。何度目か分からない衝突を繰り返す赤橙と桜色の砲撃。それを「Ａ－ＬＡＷＳ」の魔導師たちは、ただ呆けて見るしかない。見ているしかなかった。

なぜなら、それはあまりにも戦いのレベルが違い過ぎるからだ。「ガンダム」と「ガンダム」の戦闘は、言わばオーバーＳとオーバーＳの争いである。昨今でも言われている通りに、オーバーＳに勝てるのはオーバーＳのみという風潮があるのは、ひとえにオーバーＳでなければオーバーＳに対抗できないためだ。それほど、オーバーＳとその他の魔導師には実力の差があるのだ。

ドズゥーーーーン……幾度目か分からない低い砲撃音が、戦場に轟いた。セラヴィーもガデッサも、まだ余裕がある風な態度をとって、お互いの出足を見極めようとする……かのように見える。

だが、突然、ガデッサがセラヴィーとの距離を詰め始めた。それは傍目から見れば勝負を決めようとしたように見えただろう。だが、同じ「ガンダム」であるセラヴィーはその行動に別の意味を見た。

『セラヴィー、ガデッサの粒子残量はあとどのくらいだ？』

『多く見積もっても３５％、少なくても３０％ほどだと思われます、マイスター』

そう、彼らが目を付けたのは粒子残量だ。ガデッサはセラヴィーと違って疑似太陽炉で動いている。つまり、粒子は無限ではなく有限で、こんなに後先考えずにランチャーを放っていれば、自然、粒子の消費も激しい物となる。結果、ガデッサは早くも量子残量に危

険信号が灯り、勝負を早めに決着させなければならなくなった。

ガデッサの右手から光の剣が伸びた。ＧＮビームサーベル……さしものセラヴィーといえど、それをまともに喰らえば易々と斬り伏せられるだろう。いくら接近戦に向いていない設計とはいえ、それでもガデッサは「ガンダム」なのだ。多少の得手不得手を覆す程度の力量はある。もっとも、それを言ってしまえば……セラヴィーも同じだったが。

ガデッサから一本の光剣が伸びると、セラヴィーからは四本もの光剣が伸びた。両肩両膝……つまりは、四門あったＧＮキャノン？が手と化して、それぞれに一本ずつ光剣を握ったのだ。四本の光剣とまだ二門もあるＧＮバズーカ？。その威容はまさに……難攻不落の要塞だ。

『ッ！』

ガデッサが一瞬だけたたらを踏む。セラヴィーから発せられた重圧に、その一瞬だけ圧し負けてしまったのだ。そして、その一瞬こそが勝負を別つターニングポイントであった。

『リジェネ・レジェッタ！　君は万死に値する！』

肉薄していたガデッサに、セラヴィーの方から突進する。セラヴィーは右手を振り被り、ＧＮビームサーベルをガデッサへと振り下ろす。ガデッサはそれを防ぐために、左手に持っていたサーベルを上に掲げるも、防げたのはその一本だけだった。

セラヴィーはガデッサにサーベルが受け止められたのを見ると、刹那の間に他三本のサーベルを動かして、ガデッサの右手と両足を

切断した。両足と右手、それにＧＮメガランチャーを一瞬で失ったガデッサは、ガンダムフェイスの下で驚愕の表情を浮かべたことだろう。それを知る術はなかったが。

『そ、そんな……！』

『ライセンサー、落下します！　衝撃に気をつ……うッ！』

ドォオオン……ガデッサが空から地へと落下した。凄まじい落下音が周囲に響いた。「Ａ－ＬＡＷＳ」の魔導師たちがその音に耳を塞いでいると、セラヴィーは落下した際にできたクレーターの中央にいるガデッサへと、二挺のＧＮバズーカ?を連結させたダブルバズーカを向けた。ダブルバズーカの砲口は上下に開いたバーストモードになっており、セラヴィーの背中もそれも倣うようにフェイスバーストモードを展開し、「ＣＢ」復活を意味する巨大なガンダムフェイスを周囲に見せつけた。

『クゥッ……ティエリアァアアアッ！！』

『……さようならだ、リジェネ・レジェッタ！』

ダブルバズーカの砲口が光を帯びる。破滅を招く桜色へと、その砲口は色を変える。リジェネは絶望に支配されそうな心境の中で、ふと、思う。

ティエリアに討たれるのも悪くないのでは……と。少しだけ……そう思ってしまった。

……ドオォオオオオオオオンッ！！！！

黄金と漆黒の戦いは、当初、微動だにしなかった。

片やハーケンフォームのバルディッシュを横に構え、いつでも飛び出せるよう姿勢を低くしているフェイト・Ｔ・ハラオウン。

片やＧＮロングビームサーベルとＧＮショートビームサーベルを交叉させ、右足を一歩前に出している益荒男（ますらお）。

どちらも破格のスピードと攻撃力を誇る魔導師にして疑似太陽炉搭載機だ。恐らく、勝負が長引くことはないだろう。この最初の一戟（いちげき）で勝敗が決するはずだ。

「……」

『……』

睨み合う両者。噴水から噴き出す水の音が、やけに大きく聞こえてくる。暗き森は静まり返り、黙って両者の対峙を見守っていた。

静寂の一瞬。嵐の前の静けさが、そこに漂っていた。

「ハラオウン隊長、トレディアの搬送を手伝って……」

そして、トレディアを両肩に担いで運んでいるチンクによって、始まりの契機もすぐにやってきた。

「ハァアアアアアアッ！！」

『うぉおおおおおおおっ！！』

ドンッ！　互いが下の煉瓦（れんが）を踏み砕いて、足を一歩、前に踏み出す。たったそれだけの動作で空気は乱れ、前までの静かな世界が崩壊する。チンクは何事だ！？　と思いながら、突如起こった突風から目を守るために、両手を前に掲げた。その際にトレディアが地面に落ち、転がっていくが、それを気にする余裕など、今のチンクにはなかった。

閃光、次いで、激突音。チンクには何が起こったのか、まるで分からない。分からないが……これだけは言える。決着がついたのだと。それも……

刹那は蒼穹を思わせるような色合いのフラッグ（ＣＢ仕様）で、闇に染まった空を一直線に飛んでいた。世界にはいまだ闇が深く蔓延（はびこ）り、日が昇る気配を見せないでいる。目下の森林は所々が戦火に

よって燃え盛り、それが明かりとなって周囲を赤く照らしていた。

『……』

刹那が駆るフラッグ、その右手にはＧＮソード?に酷似した幅広の剣、ＧＮソード?改が握られていた。その他にも、足は作業用アームでリニアスピアを備えており、普通のフラッグには見られない改良がそこかしこになされていた。

いくら「ガンダム」とはいえ、不慮の事態で使えなくなることは多々ある。もしくは、ミッションまでに整備が間に合わなかったり、調整が間に合わなくなったりすることもある。その時の為の予備機として刹那に用意されていたのが、このＣＢＮＧＮ－００３「ユニオンフラッグ・ＣＢ仕様」だ。もしくは「フラッグ改」ともいう。

『先程の会話……まさか、オレは話し合うことでフェイトと分かり合おうとしたのか？　だとしたら、この「話し合う」という行為を今までしてこなかったから、Ｏライザーは……』

背中の大きなブースターから白い水素が吐き出され、フラッグ改に前に進む推進力を与える。だが、フラッグ改を纏った刹那は先程の会話――フェイトと話し合ったことに気を取られていた。もしかしたら、これこそが今までのオレに足りなかったものではないのか……？　そう思いつつ。

『……なら、まずはＯライザーと話し合ってみるか。さっきのように、まずはお互いのことを知ろうと……』

刹那が決心を固めると、フラッグ改の視界にセラヴィーの巨体が見えてきた。セラヴィーは仰向けに倒れているガデッサにダブルバ

ズーカを向けており、遠目からは勝負がすでに決まっているように見える。

だから刹那は一瞬だけ気を抜いてしまった。仲間が無事だったという事実に安堵してしまったがために。

『……ッ！？』

「ＫＩ――――ＬＬッ！！」

そんな折に突然、フラッグ改に衝撃が奔った。何事かと思い、視界を横にずらすと、そこには老紳士の狂人――「切り裂きＪＡＣＫ」のジャック・ザ・リッパーが、イカれ目を血走らせながら、フラッグ改に黒いステッキ状のストレージデバイスを突き付けていた。そして、反応する暇を与えずに、浅葱色の魔力弾を一つ、フラッグ改へと放った。

刹那は突如迫ってきたリッパーの魔力弾に驚きながらも、その魔力弾を驚異的な反射速度で、右手のＧＮソード？改で切り裂いた。だが、その次にやってきたブラッディダガーまでは防げずに、魔力の短剣がフラッグ改のフェイスを掠める。その「ガンダム」では感じない痛みに、刹那は思わず顔を顰めた。

『くそっ……今は貴様と戦っている場合じゃない！』

「キリング、キールキールキールキール！」

『フォー・セイバー』

狂乱染みた表情で黒マントを風にはためかせ、黒シルクハットに手をやるリッパー。狂っている割には動作に隙はなく、それが歴戦の強者であることを示していた。まさかの強敵の出現に、刹那は唇を噛み締める。今の彼は精々ＣランクかＢランク魔導師が関の山で、

とてもこんなオーバーSランク魔導師を相手にすることなどはできない。無謀すぎる。

そう刹那が戦うか否かで悩んでいると、その間にもリッパーから四つの魔力刃が飛んできた。それらは誘導制御を受け、刹那を巧みに追い詰めていく。刹那はGNコンデンサーに貯蔵されていたなけなしのGN粒子を使い、それらをビーム射撃で射ち落とそうとするも、魔力刃に籠められた魔力はなけなしのGN粒子ではとても射ち落とせなかった。

『グアッ!?』

「キリング、キリング！　ブラッディダガー・ジェノサイドシフト!!」

『ブラッディダガー・ジェノサイドシフト』

魔力刃の一つが、フラッグ改の胴部を削っていく。もう一つはプラズマソードで掻き消すも、その間に近づいてきたもう一つの縦長の魔力刃に、GNソード?改を弾き飛ばされてしまう。

しかも、リッパーの攻勢はまだ終わっていなかった。リッパーはステッキでコツコツと足元の魔法陣を叩くと、自身の背後に浅葱色のブラッディダガーをずらりと展開した。その数はざっと見て……百は存在する!!

『なッ!?』

刹那が思わず声を出すほどの威圧感が、一面に浮かぶブラッディダガーから発せられる。それは凶悪な光を放ちながら、刹那の視界を支配した。

世界は短剣によって覆われ、短剣によって終わりを迎える。

そして、それは刹那といえど、例外ではない！

「キィイイルッファイアァアア！！」

『う……うおぉおおおおッ！？』

百ものブラッディダガーが、キールの声を受け、一斉に発射された。さながら土石流のように、それは刹那のフラッグ改を呑み込もうとする。必死に避けようとするも、すでに時遅く、絶体絶命からは逃れ得ない。もう何度も味わったことがある絶望が、刹那の心身を凍らせていく。

しかし、忘れてはならない。ここには、彼の仲間がいるということを。仲間――そう、あの白い悪魔がここにいることを、絶対に忘れては……ならない！

……ドオォオオオオオオンッ！！！！

突如戦場に轟く砲声。それはセラヴィーから桃色の極光が放たれた爆音だった。刹那の視界を埋め尽くしていた短剣の面は、そのたった一発の砲撃により、その全てが消し飛ばされてしまう。それを見たリッパーは、自分の魔法を消し飛ばされたことに驚く……かと思いきや、寧ろ嬉しそうな笑みを狂った表情の上に浮かべた。左右にピンッと跳ねるカイゼル髭が、つり上がる口角とともに上へ動く。

「……ふむ、やはり私のＤｅａｔｈ（死）はＮｏｗ（今）か？　それとも……Ｆｕｔｕｒｅ（未来）かぁああ！？」

ストレージデバイス「キリング」を握り締め、新たな魔法を発動させるリッパー。浅葱色のミッド式魔法陣が光を放ち、補助魔法でもってリッパーの体を隅々まで強化する。また、それと並行して、リッパーは１２個の魔力弾を直線上に撃ち出した。その魔力弾はセラヴィーに当たる直前で爆発し、浅葱色の爆炎でもってセラヴィーの周囲を超高温にした。

『刹那、こいつの相手は僕が引き受ける！　刹那はそこにいる「Ａ－ＬＡＷＳ」の魔導師部隊を牽制していてくれ！』

『あぁ、了解した』

だが、その程度の炎など、セラヴィーには物の数ではなかった。浅葱色の炎の中から何事もなかったように進み出てくるセラヴィー。それを見て、リッパーの表情はさらに満面の笑みへと近づく。

「Ｐａｓｔ（過去）、私は罪を犯した！　大罪だ、Ｄｅａｔｈを持ってもしても贖い切れぬＧｕｉｌｔｙ（罪）だ！　十五年前のあのＷａｒ（戦争）で、私は「私」という一個人をＵｐｓｅｔ（狂わ）せなければ、私をＫｅｅｐ（維持）できなかった！！」

笑みを浮かべながら語る、語る、語る。自分の過去を、犯してしまった過ちを、狂気の源泉を、リッパーは語る。語り続ける。目の前にいるセラヴィーへと、自分を殺すであろう断罪者へと、リッパーは罪を告白するように、己のしてしまったことを……語る。

「私の犯したＧｕｉｌｔｙ！　それは第１０管理世界をｄｅｓｔｒｏｙ（ぼ）してしまったこと！　Ｄｅｓｔｒｏｙの要因となった大規模儀

式魔法を発動させた五人のオーバーSの中には、私というI(私)もいたのだ！　しかも、突然のｂｅｔｒａｙ(裏切り)や「闇の書」による妨害もあって、半ば暴走してしまった大規模儀式魔法「ヴァルプルギスナハト」を前に、私というM(私)ｅは逃げ出してしまった！　逃げ出すしかなかった！　自分たちの作った魔法、そのあまりの桁違いさにｔｅｒｒｏｒ(恐怖)してッ！！」

『貴様、一体なにを言って……？』

『恐らく一年戦争のことかと……リッパーが狂ったのはあの戦争からだという確定情報があるので』

『だったら、なぜそれを僕に言うんだ？　一体彼は何をしようとしているんだ、セラヴィー？』

『……私にも分かりません、マイスター』

ステッキを一振りし、魔力でできたダガーを数十発も生み出すリッパー。それをリッパーは全て、セラヴィーへと一斉に飛ばした。水色に近い色をしたダガーが、一直線にセラヴィーへと飛んでいく。

セラヴィーはそれを見て、冷静にＧＮバズーカ?とＧＮキャノン?を連結させると、そこからＧＮツインバスターキャノンの砲撃を放ち、ダガーの群れを右から左に薙ぎ払った。また、セラヴィーはダガーの爆煙を利用して、膝のＧＮキャノン?による奇襲を行おうとした。

例え爆煙で見えなくても、リッパーの位置は『ヴェーダ』が教えてくれる。それだけでティエリアには十分だった。心おきなくＧＮキャノン?を発射する。そして、爆煙に阻まれているのにも関わらず、リッパーの脇腹は桜色の光線によって抉られた。

痛みがリッパーの脳髄に駆け巡る。だが、その痛みにこそ愉悦(ゆえつ)の表情を浮かべたリッパーは、爆煙の反対側にちらりと一瞬だけ見え

たセラヴィーの方へと突撃した。今度はリッパー本人が爆煙を切り裂いて、セラヴィーへと奇襲を敢行する。

「そもそも、「ヴァルプルギスナハト」自体がＭｉｓｔａｋｅだったのだ！　あれは知恵なきモノを罰するためのＴｒａｐ！　無限書庫から発掘されたあの恐ろしき魔法は、天候操作魔法という生易しいＭａｇｉｃなどではない！　もっとＴｅｒｒｏｒ魔法だったのだ！！」

『コイツッ！？』

『マイスター！』

セラヴィーが再びＧＮツインバスターキャノンを放つ。しかし、それはリッパーが展開した六つの固いシールドに阻まれ、届くことはなかった。その隙にセラヴィーのすぐ目の前にまで潜り込んだリッパーは、Ｔ字型のステッキに魔力刃を纏わせ、それで擦れ違い様にセラヴィーの胸部を斬り付けた。

それによって、セラヴィーのバランスが僅かに崩れた。そこにリッパーはさらなる追い打ちをかける。Ｏｎｅ、Ｔｗｏとステップを踏みながら、円を描くようにセラヴィーの左側面へと移動したリッパーは、さらに足を大きく一歩動かして、セラヴィーの左肩を深く切り裂いた。セラヴィーの左肩から火花がバチバチと跳ねる。

「恐ろしい、恐ろしい、恐ろしいぃいいいい！！　Ｂｕｔ、最も恐ろしかったのは……あの大規模儀式魔法で不完全ながらも召喚されてしまった魔女を、さらなる暴力でｄｅｓｔｒｏｙした「闇の書」こそが、最も恐ろしかった！！」

『この……ちょろちょろとこざかしく！』

『私達は、あなたの告白などに付き合っている暇はないのです！』

笑みを湛え、後悔を吐露しながら、白い悪魔をロンドでも踊るように切り刻んでいくリッパー。その姿は狂気を孕んでいるとはいえ、とても美しいものだった。それはきっと、命果てる最後の輝きを放っているようにも見えたからだろう。実際、彼はこのリジェネを逃がすための囮役で死ぬつもりだった。否……死にたかったのだ、彼は、リッパーは。狂ってしまった己をｒｅｗｒｉｔｅしたいがために、彼は……死を望む。渇望する。死にたいが為に、ｒｅｗｒｉｔｅしたいが為に。

「私はｃｏｗａｒｄだった！　私はｃｏｗａｒｄだった！　故に、私はｒｅｇｒｅｔした！　己の犯した罪の大きさ、それにｓｃａｒｅｄながら、私というＩはｒｅｇｒｅｔ、ｒｅｇｒｅｔ、ｒｅｇｒｅｔ！　Ｒｅｇｒｅｔし続ける！　永遠に贖えないと分かってなお、なお、なお！　私というＭｅはｒｅｇｒｅｔし続ける！　し続けよう！　し続けるしかない！」

セラヴィーの巨腕が、先程までリッパーがいた空間を通り過ぎる。その時にはもう、リッパーは補助魔法で強化された肉体を駆使し、セラヴィーの背後に回っていた。そして、ステッキを一振り、二振り、三振りし、巨大な短剣を一つ、二つ、三つ作り出すと、それをセラヴィーの背面に勢いよくぶつけた。

巨大な短剣がセラヴィーの装甲にぶつかった。ガガガガガガガガガ……と、不快な金属音が両者の間に響き渡る。その音は周囲にいた人間の耳をおかしくしそうで、まるでリッパーとセラヴィーの妄念を、狂想を聞かすように、長時間、真夜中の戦場に鳴り響く。

『……セラヴィー、このままでは埒が明かない！　アレを使って一気に勝負を決めるぞ、いいな！？』

『Ｙｅｓ，ｍｅｉｓｔｅｒ！　相手はジャック・ザ・リッパー、

「ＡＩＬＡＷＳ」の数少ないオーバーＳランク魔導師です！　思う存分、私達の権能をお振り下さい！！』

『了解した』

「トランザム！！」

不快な金属音が未だ鳴り止まない中、ティエリアの肉声が終焉を知らせる天使のラッパのように、周囲へと浸透していった。それと同時に、セラヴィーから噴き出る紅い粒子がリッパーの視界を覆う。思わず後退するリッパー。そして、彼は……見た。

紅い粒子の中心に佇(たたず)む悪魔……否、魔王を。

【『戦争』はどんなに技術の進歩に欠かせなくとも、生命(いのち)を灰塵に帰すという罪を生み出し、言い様の無い虚無と喪失だけを生む事に変わりは無い。例えどんな”大義”を並べても、結局それはただの【綺麗事】……ホント……ままならないよな……】

――月光閃火様より

第６３話　Ｉ　ｒｅｇｒｅｔ　ｔｈａｔ　Ｉ　ｗａｓ　ｓｏｒｒｙ（後書き）

（ああ、いい。これでいいのだ）

（これで私もようやく……お前達の所に逝けるな）

（私は狂い、カリムは戦わないこと誓ったわけだが、それで贖罪は足りたのであろうか……？）

（願わくば、私の死によって贖罪が完了し、あの未熟だった騎士に幸福が訪れることを願おう……それが私に残された、最後の良心……正気だ）

（……あぁ、当時は最強だと思っていたあの五人も、これでカリム一人になってしまったな。あの時、クラウンの持ってきた資料をもっと詳しく精査していれば……）

（いや、後悔はよそう。今は祈りの時間だ。我らが騎士――いや、女王カリムに、最上の幸福が訪れることを願う）

（それが私ができる、最後の……贖罪だ）

――「切り裂きＪＡＣＫ」のジャック・ザ・リッパーより

第６４話　Ｔｈｅ　ｂａｄ　ｐａｒｔｙ　ｅｎｄ（前書き）

【弱い者から奪ってはいけない。
貧しい者から盗んではいけない。
武器を持たない者は殺してはいけない。
それが悪党の美学というものだ。
だが君達ときたら、見境なしだからな。

まことにもって醜いかぎりで、私はとても我慢できないのだよ】

――鴨川秘様から、『ラインの虜囚』のジャン・ラフィットより

第６４話　Ｔｈｅ　ｂａｄ　ｐａｒｔｙ　ｅｎｄ

――新暦７５年１２月２４日――

『く……リッパー！』

リジェネ・レジェッタが見ている先で、粒子の色を緑から紅に変えたセラヴィーが、先程までの砲撃とは比べ物にならない砲撃を、リッパーへと発射した。その砲撃は大地を融かし、森の木々を消失させながら、真夜中に一条の線を引き、リッパーへと直進していく。

「Ｋｉｌｌッ！？」

『ラウンドシールド・ナインオーバー』

迫りくる光の奔流、その進撃先に９枚の浅葱色の盾を、リッパーは刹那の時間で展開した。通常時のセラヴィーのＧＮツインバスターキャノンを６枚で防いだ魔法陣が、リッパーの正面を完璧に固める……かに見えた。

『甘い！』

しかし、ＴＲＡＮＳ－ＡＭを発動して、魔王と化したセラヴィーの前では、それすら無力に等しかった。

「き……るぅうううッ！？」

桃色の極光が浅葱の盾と接触した。すると、浅葱の盾は瞬時に９枚から３枚へと、その数を三分の一にまで減らした。想定以上の威力に、リッパーが思わずたじろいだ。足が自然と後退し、極光の圧

力によって膝を地面につけてしまう。

『フェイスバースト、展開！』

『Ｙｅｓ，ｍｅｉｓｔｅｒ！　フェイスバースト、展開！』

化物染みた砲撃に屈しかけるリッパー。そんな彼へと、紅い魔王は無慈悲にも、更なる追撃をしかける。セラヴィーの背後に巨大なガンダムフェイスが展開され、ドッ！　と、極光がその威力をさらに強めた。三枚しか残っていないシールドがギシギシと軋(きし)みを上げ、崩壊寸前の悲鳴を上げる。

「きぃぃぃぃーーーーるぅぅぅぅーーーーー！？」

魔法陣が一際、大きな軋みを上げる。魔法陣にかざした手から血が吹き出る。リッパーは魔力を限界まで注ぐも、それはスズメの涙……焼け石に水程度にしかならない。

『くそ、このままだとリッパーは……！』

リジェネの声に焦りが混じる。それは恐らく、貴重なオーバーＳを失いたくなかったからだろう。このままむざむざと失うには、あまりにも惜しい戦力なのだ、リッパーは。

だが、そんなリジェネへと、作戦本部からの通信が入った。幼い女子の声が、リジェネの行動を制止させた。

『いえ、これでいいのです、リジェネ。これは彼が望んだ結末……それを無駄にしないためにも、貴方はそこから早く撤退して下さい』

『アイシス？　それは一体……そうか、僕を逃がすための囮を彼は……』

アイシスの声で正常な判断力を取り戻したリジェネは、すぐにリッパーがリジェネを逃がす為に囮になっていることに気付いた。また、こうしている今も、リッパーは泣いているのか笑っているのか分からない表情で、セラヴィーの砲撃を食い止めている。

『ええ、そうです。ですから、貴方が今すべきことはそこからの撤退です。幸い、機動六課はすでに撤収を始めていて、衝突することはありません。こちらは貴方が戻り次第、すぐにでも撤退を始めます』

『……了解。すぐそっちに戻るよ』

リジェネの目の前で桃色が浅葱色を猛烈な勢いで浸食していく。そう長くは持たないだろう。リジェネはこの攻防に早々と見切りを付けると、そのまま実にあっさりとリッパーを見捨てて、夜闇の彼方、「ＡＬＡＷＳ」の作戦本部へと後退していった。

元々、仲間意識が薄かった二人だ。感傷に浸れるほど、仲が良かったわけでもない。

『な……リジェネ、貴様！』

しかし、その行為はティエリアの逆鱗を逆撫でする行為だった。セラヴィーの輝きがさらに強まり、極光の光芒（こうぼう）がもっともっとと光り輝いた。その先にいるリッパーの表情が、苦痛と愉悦（ゆえつ）によって酷く苦しそうに嬉しそうに……歪む。

『こいつは貴様の仲間だろう！？　なのに、その仲間をこうも簡単に見捨てるのか、貴様はぁあああッ！！』

ティエリアの脳裏に先代のロックオンが思い起こされた。先代のロックオンはかつて身を挺してティエリアを守ってくれたことがあった。仲間だという、ただそれだけの理由で。なのに、その仲間をリジェネはあっさりと見捨てた。それがティエリアには我慢ならなかった。

『……さようなら、リッパー。君がＲｅｗｒｉｔｅされることを、僕は願っているよ』

『Ｇｏｏｄ　ｎｉｇｈｔ，　リジェネ・レジェッタ。貴方達に最上の幸福があらんことを……』

『答えろ、リジェネ・レジェッタ！　お前にとって仲間とは、その程度のモノでしかないのかぁあああああああッ！？』

叫ぶティエリアを無視して、帰還するリジェネ。ティエリアの雄叫びだけが、戦場に虚しく木霊する。

そして、その頃にはもう、砲撃は止んでいた。極光が放たれた所は、唯一リッパーがいた場所を除いて、その全てが溶解していた。マグマのような土が、大地を流れていく。

ティエリアがリッパーのいた場所を見た。そこには砲撃の余熱で肌を炭化させたリッパーが、微笑を浮かべて膝立ちで立っていた。その顔は実に満足そうで、普通の優しげな老紳士のようにしか見えなかった。

少なくとも、ティエリアには。

『……ティエリア』

『……すまない、刹那。取り乱してしまって』

『いや……構わない』

セラヴィーの横に、ずっと「Ａ－ＬＡＷＳ」の魔導師部隊を牽制し続けていたフラッグ改が降り立つ。魔導師部隊もガデッサの撤退と一緒に撤収したのだろう。ティエリアは未だにはやる心を落ち着かせながら、冷静に撤退の手順を踏もうとした。

『では、僕達もここから撤退しよう。機動六課が来ない内に』

『……了解』

紅から翠に戻った粒子が、セラヴィーとフラッグ改を包み込んでいく。そして、シュイン……と音がして、その二機にして二人でもある機体は、この場――「イヴ・パーティー」の会場兼戦場から撤退していった。

後に残ったのは、翠色の粒子と荒れ荒んだ土地、それと……辛うじて人型を保つリッパーの死体だけだった。

チンクの目の前で、黒い機体が片膝をついた。胸からは火花が飛び散り、バチバチと煩く音を鳴らしている。

『グッ……不覚！　まさか万全でないのに、これほどとは……！』

『ほぉおおおむほむ！　そうだ、その通りだライセンサー！　これは不覚だ、不覚だったな！　某すらも、まさかこの身に一撃を入れられるとは、まっこと、思っとらんかったわ！！』

ショートビームサーベルを地面に深々と突き刺す益荒男。胸の損傷が周囲の暗闇の中で華やかに輝く。チンクは益荒男から発せられた女性の声と男性の声に驚きながらも、今度は向こう側に飛んでいったフェイトの方へと視線を移した。

「……ぁ」

そして……彼女は愕然とする。

「……ぅ」

フェイトは地面に倒れ込んでいた。バルディッシュを手放し、白いマントを血の色に染めて。遠くから見ても、それが致命傷に近い傷だということがチンクには分かった。思わずといった風に駆けだすチンク。だが、その眼前に益荒男が立ちはだかる。

『……最も、勝利を掴んだのは私だったがな。それで、お前はどうするんだ、チンク？　お前はＤｒ．の意思に逆らってまで、Ｄｒ．を捕まえたフェイトお嬢様を助けるのか？』

「な……その声はまさか、トーレ姉様！？　その姿は一体、どういうことですか！？」

『敵かもしれぬお前にそれを答える義務はない。……それで、どうするのだ、チンクよ？　フェイトお嬢様を助けるか否か……管理局につくのか「ＣＢ」のＤｒ．の元につくのか、ここで今すぐ答えろ！』

「……！」

目の前の黒い機体がトーレだということを知り、茫然とするチンク。トーレの声は耳に入らず、故にトーレの問いに答えることができなかった。それをトーレは拒否――つまりは、敵対する道を選んだのだと……そう解釈した。してしまった。

ならば、あとは言葉はいらないとばかりに二刀を握りしめる益荒男。チンクがハッとして気を取り戻した頃には、握り締められた二刀がチンクの頭上に迫ってきていた。チンクは「防御外套」シェルコートのハードシェルを発動させ、甲羅状のシールドを前方に展開するも、それ諸共、軽々と益荒男に斬り飛ばされてしまう。

「あぐッ……と、トーレ姉様ぁあああ!?」

『……お前たちはお前達の信じる道をゆけ。それがＤｒ．の願いでもある。……益荒男！』

『応とも、ライセンサー！　セファーに頼まれし我らが標的は、怯え苦しみながらもそこに丸まっておるぞぉおおおお!!』

「ひっ!?　た、たすけ……」

噴水を背中で粉砕し、その透明な水を被ったまま、さらに数十メートル以上も吹き飛んでいくチンク。その視界の先では、涙ぐみながら助けを請う「ＣＢ」のエージェント、トレディア・グラーゼが、益荒男に刃を突き付けられていた。

『これにて一戟』

『終了なり!!』

ザンッ！

「……は?」

そして、益荒男の刃がトレディアの脳髄を真っ二つにしたのは、そのすぐ後であった。

『ほぉおおおむほむ！　久しぶりの血応え、中々に良好也！　やはり世界には絶対なる『悪』が必要だな、ライセンサー！』

『その意見には同意しかねるし理解も出来ないが、成程、これが「殺す」という感覚か……強者ならばともかく、弱者をただ一方的に殺すのは……虫唾（むしず）が奔るものだな』

『なればこそ某は！　某たちは強者（つわもの）を求むのだ！　先程のフェイト・テスタロッサといいチンクといい……彼女らは中々に強者であった！　故に、ライセンサーも此度は彼女らを見逃し、再び相見える時を楽しみにするのだろうが！？』

『……あぁ、そうだな。そういうことにしておこう。馬鹿なお前にも分かるようにな』

トレディア――「アーカイブ」または「ラヴクラフト」と呼ばれていた人間の頭部から、先程までの噴水の水のように、血が噴き出した。人間の体にはこれほどの血が入っているのかと驚嘆するほどの量だった。

この光景に、チンクは再び思考を凍らせた。彼女の知るトーレとは、誇り高い武人だった。そんな彼女がこんな一方的な殺人を行うとは、チンクには信じられなかった。驚きで目が見開き、その光景をより鮮明に脳裏に刻んでしまうチンク。

『では、アーデもセイエイも撤退した今、私達も撤退すべきだろう。往くぞ、益荒男！』

『応とも、ライセンサー！　某とライセンサーは一心同体！　故に、ライセンサーが撤退するというのならば、某も撤退しよう！』

かつてトレディア・グラーゼだった肉塊が、ぐじゅ……と嫌な音を立てて、地面に崩れ落ちた。黒い装甲に血を滴らせた益荒男は、その「弱者」には見向きもせずに、その場から飛び去っていった。ちらりっとチンクの方を見たのは、果たしてチンクの気のせいなのか……それはチンクには分からなかった。

「……」

チンクは自分の小さな体に落ちてくる噴水の雫を見つめながら、夜天に広がる星の海を見渡してみた。星の海は大きく、限りがないので、今の自分を丸々と呑み込んでしまいそうだと、チンクはそんな感想を星の海に抱いた。願わくは、その通りに自分を呑み込んで欲しいと、そう願って……

そして、意識を閉じた。

……「ＡＩＬＡＷＳ」の作戦本部は、不気味なまでに静まり返っていた。誰もが口を開くのも億劫（おっくう）だと、そう空気で主張している。

「……皆さん、作戦は失敗です。直ちにここから撤退しましょう。

データは全て消去し、大事な荷物以外はここに捨てて、できる限り早くここから撤退します」

「「「りょ、了解……です……」」」

そんな静寂の中で、隊長であるアイシスの麗しい声だけが響く。その声に突き動かされるようにして、「Ａ－ＬＡＷＳ」の隊員たちが動き始めた。撤退の準備に取り掛かる動きはどこか緩慢（かんまん）だったが、その気持ちが分からないアイシスではなかった。

いや、もしかしたら彼女こそが最もその気持ち――「敗者」の気持ちを感じていたのかもしれない。

（これが、「デカブツ」……ふふ、一体どうすれば、こんな化け物を討てるというのよッ！？）

ＴＲＡＮＳ－ＡＭを発動して、魔王と化したセラヴィーの強さは、ここにいる「Ａ－ＬＡＷＳ」のメンバー全員の心を折ってなお、お釣りがくるほどの強さだった。戦闘映像を見た隊員たちは、皆一様に顔色を青白くさせ、かくいうアイシスも、その一人であった。

（リジェネと戦った後なのに、あのサムライやブシドーとタメを張れるリッパーを、こうも簡単に捻り殺すなんて……信じたくはないけど、これが現実……逃げていては、駄目なのよ）

アイシスのボブカットの金髪が揺れる。今のアイシスの心境を表すように、美しき金の髪は右に左にと揺れ動く。１４歳に見られない童顔は今や深い苦悩により皺が刻まれ、寧ろ１４歳には見えない表情をしていた。

（……そうよ。手がないわけじゃないんだから、そう悲観しなくて

もいいのよ。……要するに、「ガンダム」になるのを阻止して、生身での戦いに持ち込めば、勝機はある……はず。リジェネの体と言葉を信じれば、イノベイドにはリンカーコアがないはずなんだから！）

アイシスが折れかけた心のまま、藁にも縋る気持ちで希望を見出そうとした。それによって折れかけていたアイシスの心が、再び組み合わさり、立ち上がるまでに至る。顔に覇気が戻り、以前のような強い意志を瞳に宿すようにもなった。

（そのチャンスが来ることを、今はただじっと待ちましょう）

広大な砂漠から一針を探し当てるような、そんな小さくて儚い希望。しかし、その希望だけで人は生きていけるし、目的を持って行動することができる。

アイシスにとっての目的は、「デカブツ」を斃すこと。それがどれだけ困難なことなのかを、アイシスは今回の作戦で改めて思い知った。そして、部隊指揮や狙撃で真価を発揮する彼女がこれから先「デカブツ」と正面衝突することは、滅多にないだろう。

その数少ないチャンス――それも、生身の戦いに引きずり込むという条件付き――を狙って、アイシスはこれからも戦っていく。戦い貫いていく。死を厭わぬ覚悟を、アイシスはその時決めたのであった。

そこに分かり合う意思は……微塵も垣間見えなかった。

カリム・グラシアは燃え上がる森の中心に座する豪邸を見詰めながら、黒い高級そうな車で帰還の途についていた。車の運転は隣りの運転席に座るヴェロッサ・アコースに一任しており、余所見をしても事故になることはない。

「……ヴェロッサ、貴方もアーカイブは彼だと？」

「はやてがそう言うんでしたら、きっとそうなのだと僕は思いますよ？　まあ何れにしろ、僕にはアーカイブの尻尾すら掴めませんでしたが……」

自嘲気味に呟きながら、車を軽快に走らすヴェロッサ。そこへ、後部座席に座っていたセインの声がかけられた。その来る時とは１８０度違う能天気な声に、カリムとヴェロッサは知らず、驚く。

「ふ～ん、ウーノ姉を捕まえたあんたがねぇ……そんな奴がこんな簡単に捕まったことが、カリムには信じられないの？」

「……いえ、私も彼が、トレディア・グラーゼさんがアーカイブだとは思いますが……何だかとても嫌な予感がするのです」

そう言って胸に手をあてるカリム。白い指が魅惑のおぱ～いをぷるるんと震わせた。プリンよりも柔らかく、しかして完全には弾力を失っていない理想の双丘は、同性であるセインが羨むほどの見事なおぱ～い……おぱ～いであった。

「……カリムの予感は当たるからね」
「でも、アーカイブは捕まったはずだよね？　なら、そんなに心配しなくても……」
カリムの悪い予感に、ヴェロッサは苦笑し、セインはそう指摘した。カリムもまた自分の嫌な予感に確信がないのか、深く語ろうとはしない。
「……そうね。気のせいよね、きっと……」
いまだ胸中に居座る嫌な予感。それを無理やり抑えつけ、カリムはフロントガラスの向こう側にある風景へと目を向けた。そこでは雨がちょうど降り始め、戦火を鎮火させようとしていた。
風景は雨に遮られて、殆ど見ることができなかった。
……ピピッ！　ピピッ！　ピピッ！
「……通信？　「カリフ」様から？」
ポチ。
「はい、騎士カリムです、「カリフ」様。それで、今回はどのようなご用件が……え？　周りに誰かいますか……ですか？　一応、義弟のヴェロッサと護衛のセインがいますが……」
……

「それで、どうしてこちらにまで通信を……えッ！？」

……？

「そんな……彼女が、「聖騎士」セレナが、「赤鬼」に殺されたというのですか！？」

……！

「それでは、枢機卿や大司祭たちはまさか……まさか……！」

……

「……分かりました。私も今すぐそちらに戻ります！」

プチ。

「ヴェロッサ、できるだけ急いでくれないかしら？　かなりまずい事態になったわ」

「……「聖騎士」セレナって人は、確か「カリフ」様や義姉さんと同じ穏健派のオーバーSランク魔導師だったよね？」

「ええ、そうよ。ですから急いで聖王教会本部にまで戻らなければなりません」

「……どうしてさ？」

「それは……」

すぅ。

「……戦争が始まってしまうかもしれないからです」

――新暦７５年１２月２５日――

「……」

はやては秀麗な眉毛を目一杯、への字に曲げていた。正面には山のように積み重なる報告書が佇んでいたが、はやてはそれらに手を付けることなく、朝からずっと同じことを考え続けていた。

（トレディア・グラーゼが「黒鬼（くろおに）」に殺されたことは、彼が「ＣＢ」と関係していた人物であったことを証明した……せやけど、幾ら正体がバレたからゆうても、こないに簡単に殺されるもんやろうか？仮にも、「ＣＢ」の「助成者（インベスター）」であった「アーカイブ」なのに？）

はやてがずっと考え続けていることは、先日、「黒鬼」と名付けられた新型の疑似ＧＮデバイスによって殺されたトレディアについてだった。今まで管理局の情報を筒抜けにさせてくれた重要人物がこうもあっさりと殺されたことに、はやては疑問を抱いたのだ。

（人事部のトップの時もそうや。どう考えても替えが効かなそうな重要人物を、「ＣＢ」はどうしてか、正体がバレるや否や、すぐに

切り捨ててしまった……あないな貴重な人材（エージェント）、そう簡単に用意できるとは思えへんけど……）

人事部のトップ、高町なのはを見事敵の策略に嵌めてくれた人物の顔を思い出し、はやては思わず唸（うな）った。人事部のトップという肩書は、決して軽いものではない。それこそ、このような緊急事態に、あのエース・オブ・エースを休暇に行かせるだけの権力はあるのだ。それをすぱっと、本当に躊躇なく切り捨てる「ＣＢ」は、どう考えてもおかしい。おかし過ぎる。

まるで人材は他にもいるぞと……そう言ってきているようだった。

（けど、その人事部のトップの替わりが「アーカイブ」……「ラヴクラフト」ちゃうんか？　トレディアには人事部のトップを脅すだけの力があったわけやし……矛盾はない、ないんやけど……どうも……）

いや、本当ははやてだって気付いている。その事実に、恐ろしき現実に。

（……腑（ふ）に落ちへんな）

はやてはただ信じたくなかっただけだ。もしかしたら『人事部のトップ』、『「アーカイブ」「ラヴクラフト」』に次ぐ三番目――サード・エージェントが、この管理局にいるかもしれないという事実――現実を。

（……腑に落ちへん、腑に落ちへん……せやったら一体、誰が三番目なん？　手掛かりは何も……何も、）

しかも、その三番目は恐ろしいことに、もしかしたらこれまでのエージェントとは様々な意味で異なる可能性があった。あれほどの「権力」と「財力」を持つ二人のエージェントを「ただの囮」として極限まで使い潰した三番目は、恐らく今までのエージェントの中で、最も厄介なエージェントかもしれなかったのだ。

何故あれだけのエージェントを、ただ使い潰したのか？　それはきっと、自分に矛先が向けられないようにするためと、もう一つ……

その二人を使い潰しても、何ら問題が起きなかったからだ。それだけの力がきっと、その三番目にはあるのだろう。

一番目の「権力」も、二番目の「財力」も持ち、かつ他の「何か」をも手札として持っているかもしれないサード・エージェント……

「……あらへんわ」

それだけのエージェントを捕まえられる自信が、今のはやてにはからっきし……なかった。

魔法によって、肉体を傷つけることなくコールドスリープから目

覚めたイオリア・シュヘンベルグは、転送魔法でいきなりやってきた仮面の管制人格（マスタープログラム）を見ても、微塵たりとも動じなかった。イオリアは落ち着いた様子で愛用しているモノクルをかけ、青年か少年か分かりかねる体格の「アップル」――もとい、セファーへと視線を向ける。

「ふむ、珍しいな。そちらからこちらに接触してくるとは……」

「何、報告のついで。故に問題ない」

少年のようで青年のようでもあるセファーの声が、白い部屋に反響する。そして、部屋の中央に置かれているソファーに座っているイオリアへと、セファーが近寄ってきた。

と、そこでイオリアは気付く。セファーの後ろに、もう一人……別の誰かがいることに。

「……後ろの人物が誰だ？」

「吾輩（わがはい）の『ロード』」

簡潔に即答するセファー。その返答に続き、後ろの青年が言葉を発した。

「初めまして、と言っていいのかは分かりませんが……僕がセファーのロードです、イオリア・シュヘンベルグさん」

青年の声はセファーと同じく、青年か少年かが分からなかった。ただ、イオリアは青年の口調に聞き覚えがあった。

「その口調……そうか、お前が本当の「アーカイブ」……か？」

「いえ、本当の「アーカイブ」……「ラヴクラフト」は先日死にま

した。僕がスカリエッティさんにそう頼みましたからね」

他人に人殺しを依頼したにも関わらず、青年の声に動揺は見られなかった。何てことはなかったように、青年の声が続けられる。

「ですので、僕は寧ろ、「アーカイブ」の贋物ですよ。あるいは、彼の正体を借りていた……というのが適切かもしれません」

あはは、と笑いながら、青年が言う。その姿、雰囲気にイオリアは何処か……狂気にも似た物を感じた。だが、それはイオリア自身にもある狂気……ある程度の知識を溜めこんだモノには付き物の狂気だった。故に、童顔の青年が見た目以上の知識を溜めこんでいると、イオリアはそう推測した。

「……では、儂はお前を何と呼べばいい？」

「そう……ですね。僕のことは……」

青年が眼鏡をかちゃりっと動かした。白い光がレンズに反射して、青年の表情を見えなくする。

「――「ラジエル」、と呼んで下さい」

ニタリ、と。青年――「ラジエル」が、口を三日月にして……嗤った。

【世界が平和にならないのは何故か？　それは誰も『悪』というものを真に知らないからだ】

――零夢様より

第６４話　Ｔｈｅ　ｂａｄ　ｐａｒｔｙ　ｅｎｄ（後書き）

（……駄目だ駄目だ駄目だ駄目だ駄目だ駄目だ駄目だ駄目だ！）

（もう……打つ手がない……！）

（トレディア・グラーゼが死んでしまった今、この民族紛争を止めることはもう……不可能だ！）

（スクライア一族にも多大な投資をしていた彼が死んでしまっては、スクライア一族にはル・ルシエの発掘品を取り戻す余裕など……日常の生活金だけでも一杯一杯なのに……！）

（しかも、ここ最近、族長は「Ａ－ＬＡＷＳ」との関係を深めている。……管理局が向こう側、ル・ルシエにつくかもしれないからなのは分かるが、それだと本当に民族紛争ではなく、次元世界全土を巻き込む『大戦』になってしまう！）

（それだけは避けたい……避けたいが……クッ！）

（思えば、アイツの口車に乗ったのがそもそもの元凶だったんだ……！　何がいい発掘ポイントだ！　あそこがル・ルシエの聖域だと知っていたら、オレは絶対に発掘しなかったぞ！）

（……ちくしょうちくしょうちくしょう！　どうしたらこの紛争を止めれるっていうんだよッ！？）

――スクライア一族のとある青年の独白

幕間―6（前書き）

【善人と悪人、生きるならどっちが楽というなら度合いによります。
真の悪人、全ての行動に悪を貫く者。
そういった人間になるのは大変に困難です。
ほぼ不可能と言ってもいいでしょう。
真の善人も同じくほぼ不可能です。

理由としてはすべてに徹底するというのは、とても苦痛だからです。
例えば悪に徹するというのは、誰も救わないという事。
これは苦痛です。
自分以外の全ての存在を敵とみなし、苦しめ続けなければいけないのですから。
正義を貫くのも同様の理由で困難です。
我欲を捨て、正義にのみ尽す、とてつもない自己犠牲精神が必要になります。
待っているのは死、ある種の自滅と言えるでしょう。
善にせよ、悪にせよ、そうあり続けるのは難しいということですね。

では、どういう生き方が楽なのか？
それはどちらにもならない事です。
ある時には善に、ある時は悪に、その場の状況と衝動に応じて両方を好きなように使い分ける。
そうすることが一番楽です。

これは一つの余談になりますが、人間が悪魔になるには連続した千の悪行が必要なのだそうです。

ひとつでも善行があれば即リセット。
これは簡単なように思えても、悟りを開くのと同じくらい困難でしょうね】

――鴨川秘様から、『電波的な彼女』の堕花雨より

幕間―6

――新暦７５年１２月２５日――

『あははははッはははッあははははははッはははッはあ！！』

ぽっかりと、忽然（こつぜん）と。

『ギッチョンギッチョンギッチョンチョンチョンッ！！』

夕暮れ空に、翼顕（あら）わる。

『死ねッ死ねッ死ねッ死ねッ死ねェエエエエッ！！』

赤い、赤い……真っ赤な、翼だ。

『首チョン胴チョン腕チョン足チョンッ！！』

それが光を放ちて、夕暮れ空を覆う。

『さあぁ……往くわよ、アルケェエエエエッ！！』

不吉を匂わせる、赤い粒子で……

『イィエスゥッマァアイィスタァアアアアッ！！』

今、深紅の悪鬼が飛び立つ。

信じられない光景が、「聖騎士」セレナの前に広がっていた。

「な……何だ、これは？」

若緑色の髪を、重厚な騎士鎧の胸元にまで下ろしたセレナが、茫然とした様子でそう呟く。だが、それはセレナの直近にいた騎士たちも同じであった。皆が皆、その光景に釘付けとなっていた。

突如、夕暮れに広がった、不吉を予感させし「赤き翼」。

その威容はSランク魔導師たる「聖騎士」セレナに悪寒を感じさせながら、第４管理世界「カルナログ」の聖王教会中央教堂を静かに包み込んでいた。静かに、静かに……嵐の前触れのように。

「一体、何がどうなって……」

森林や丘に恵まれた外は静寂そのもので、空に異変が起きようとも、何の変化も見られなかった。草花を食べる草食動物、水を飲む鳥、いびきを掻く人型生物……まさに平和そのもの。危機が迫っているようには見えないし、思えない。

（この赤い翼は……赤い、翼？）

ふと、セレナの脳裏に何かが引っ掛かる。どこかで聞いたことのある単語……だが、それが示す意味を、セレナは思い出せなかった。それはとてもとても……

大事なことであったはずなのに。

（待て、私は一体何を……何を、忘れ）

……ドォオオンッ！

「「「ッ！？」」」

セレナの思考を掻き消す爆発音が、中央教堂の中庭から聞こえてきた。白い騎士鎧風のＢ・Ｊに身を包むセレナたちは中庭から最も遠い大聖堂にいたのにも関わらず、その爆発音は大聖堂を揺るがす音量でもって、セレナ達にも聞こえてきた。相当な規模の爆発だったのだろう。思わず体を竦める騎士たち。

「な、何だ！？　何事だッ！？」

「敵襲！？　敵襲なのか！？」

「だが、一体どこの誰がオーバーＳのいる聖王教会の中央教堂に……」

「……「ＣＢ」」

「「「ッ！？」」」

一時的なパニックに陥りかけた騎士たちだが、セレナが放ったたった一言で、一気に顔を青くさせた。重苦しい沈黙のおまけの付きで。

「ここに攻め込むバカをするのは、音に聞く悪鬼共ぐらいだろう。

……そうか、遂に奴らはここにまで……！」

自身のアーチェリー型のデバイスを強く握りしめ、ギリギリと、セレナは歯軋りをした。その合間にもセレナは中庭へと急行していた。長い若緑色の髪が無造作に跳ねるが、今のセレナにはそれに気を使う余裕さえない。

……中庭には礼拝で来ている民間人――それも非武装の――がいるからだッ！

「……悪名轟く「ＣＢ」、まさか、本当に民間人を狙って……？」

Ｆは固いおぱ～いがポヨンポヨンと弾む。キツイと言われる目付きがさらに鋭くなる。大聖堂を出て中庭に通じる廊下に出ても、爆発の音は絶え間なく聞こえてきて、未だに誰かの悲鳴が聞こえて止まない。

「……クソッ！」

己の無力を噛み締めるセレナ。だが、それは周りにいる騎士たちも同じこと。一丸となっている彼らは皆デバイスを強く握って、その無力感に耐えていた。

セレナたちは廊下を全力で曲がり、中庭へと繋がる扉の前に到着した。爆発音はもう聞こえてこなかったが、悲鳴は変わらずに向こう側から聞こえてくる。この扉を開けば、そこには惨憺（さんたん）たる光景が広がっているはずだ。常人なら開くのも億劫になるだろう。

しかし、それはセレナや騎士たちにとって、扉を開けることを躊躇させる理由足り得なかった。

「全員、突撃用意！」
「「「はッ！」」」
「……突撃ィイイイイッ！！」
「「「うぉおおおおおおッ！！」」」

セレナの掛け声を受け、各々のＢ・Ｊを構成した聖王教会精鋭の騎士たちが、扉を蹴破り、中庭へとなだれ込んだ。拳、剣、槍、銃、棒といったデバイスを構えた騎士たちが、一斉に百人近くもだ。ドドドドッと中庭に地鳴りが鳴り響く。

『獲物が誘いに掛かったわ！　アルケー……』

その騎士たちがなだれ込んだ先、中庭の真ん中に、その深紅の悪鬼はいた。通称「赤鬼」と呼ばれるその悪鬼――アルケー「ガンダム」は、殲滅用の武装を搭載したヤークトアルケー「ガンダム」でもって、騎士たちを迎え撃とうとしていた。

「ＴＲＡＮＳ－ＡＭ！！」
『ＴＲＡＮＳ－ＳＭ！！』
「「「な……ッ！？」」」

ネーナの声が騎士たちの耳に届き、突如、血のような紅に染まるＪアルケーＧ（ヤークト）。赤から紅へと、疑似ＧＮ粒子の色が変わっていく。また、背部右側に装備されている一門のビーム砲、かつてのスローネアインに搭載されていた物の改良型であるＧＮランチャーの砲口にも光が集まり、尋常ならざる破壊を齎そうとする。

「薙ぎ払って、ＧＮハイメガランチャーッ！！」
『ハイメガランチャー、掃射するぜぇえええええッ！！』

「クッ……！」

そして、ＪアルケーＧのランチャーから、紅の粒子による光りが放出された。あの白い悪魔、セラヴィーの砲撃を連想する、途轍もない砲撃だ。騎士たちの地鳴りを掻き消す轟音が中庭に轟き、中庭の自然を光りが我が物顔で蹂躙していく。

「あ……はは……アハハハハハハハッ！！」

その光景を見たネーナは、笑った。ただひたすらに……騎士たちを嘲笑った。

「うぅ……」「あ……あぁ……！」「……ぁ」

ネーナがＪアルケーＧのＴＲＡＮＳ－ＡＭを中途で終了させる。Ｊアルケーから放たれたハイメガランチャーは、百近い騎士たち、その半数以上を一掃した。しかも、光りの奔流が止んだ時に立っていた騎士たちは、そのさらに半分近くが何かしら負傷していた。滴る血、折れた手足、頬に流れる涙……

「……まだだ」

全滅にも等しい損害を受けた騎士団。だが、その中央に立つ「聖騎士」セレナは、未だ心折れぬ様子で大地に立っていた。セレナも肩や頬を負傷し、血を滴らせていたが、その痛みをセレナは怒りでもって抑え込む。

「まだ、終わりじゃない！！」

『ライトボウ』

セレナが近未来的な形のアーチェリーの中心に指を当てた。左手はアーチェリーの本体を支え、狙いを付ける人差し指はアルケーに差し向ける。アーチェリーの真ん中に明るい青が集束していき、それがやがて青い光の矢を形作る。

セレナはその光りの矢を掴んで、弦の限界まで引き絞ると、右手の力を抜き、光りの矢を前に射た。光りの矢は魔力の弦による超加速を得て、ＪアルケーＧへと姿が霞むほどの速さで向かう。

「がッ！？」
『オゥッ！？』

光りの矢がＪアルケーＧに直撃し、轟音を立てて爆発した。青い爆煙がＪアルケーＧの赤を上塗りする。しかし……

「……きっかないわよー！」

ＪアルケーＧには何のダメージも与えていなかった。ＪアルケーＧの装甲にはひび割れ一つない。だが、それを見てもセレナは落胆することなく、次の矢を射た。

「だから、効かないって……」

射た。

「言って……！」

射た、射た、射た！

「グッ……！」

「ハァアアアッ！！」

高速で射たれる矢はＪアルケーＧに反撃の余地を与えない。青い矢の大軍が、まるでガトリングのように次々と放たれ、ＪアルケーＧの態勢を崩し、その機体に徐々にダメージを蓄積させていく。避けようにも、今のＪアルケーＧの機動性では、その矢の大軍からは逃れらない。

「ちっ……アルケー、ヤークトをパージしなさい！　接近して一気に蹴りを着けるわよ！」

『ギッチョンタイムの到来ですね分かります、ヒャッハーー！！』

モニターを埋め尽くす矢の大軍に嫌気が差したネーナは、「ＡＲＣＨＥ」にヤークトを破棄するよう命令し、脚部や背部に搭載されている重武装の数々をパージすると、背中にあった一本のＧＮバスターソードを掴み、身軽になった機体でセレナへと斬りかかった。

「舐めるなよ、「ＣＢ」！」

『ライトボウ・ファランクスシフト』

「……んなッ！？」

飛び込んでくるアルケーの目前が、突如閃いた。アルケーの目の前には百に届こうかという環状のフォトンスフィアが並び配されている。その中心で光輝く青い矢がセレナの周囲にも生成され、その全てが全て、アルケーへと鋭い矢先を向けていた。

「何よこれッ！？　ふざけるのも……」

「射て！！」

セレナが一本の矢を放った。それを切っ掛けとし、数百、数千近

い光の矢が、アルケーの装甲にダメージを負わせていく。塵も積もれば山になる、その格言の通りに。

「いい加減にし」

「射て、射て、射て！！」

「……きゃあああああッ！？」

嵐のような掃射が、アルケーの巨体を吹き飛ばした。真っ白な壁に衝突し、数十センチもめり込むアルケー。だが、矢の勢いは止まらない、止まるわけがないのだ。騎士たちの無念や死を背負うセレナがアルケーに温情を施すなど、有り得ないし、あってはならない。

「射て、射て、射てェエエエエッ！！」

心からの怒りを込められた怒声が、セレナの喉から絞り出される。青い光りの矢は途切れることなくアルケーの本体に突き刺さっては爆発し、青い爆炎を辺り一面に散らしていく。

突然、聖王教会中央教堂が大きく傾いた。セレナの魔法に耐え切れなかったのだ。アルケーはすでに中央教堂の中庭から外周部へと弾き出されていたが、それでもまだセレナの攻勢は終わる所を知らない。

一本一本に己が想いを乗せながら、セレナは矢を放つ。中庭に散らばる騎士とシスター、それに信者の死体一つ一つに涙を零しながら、セレナは光りの矢を放ち続ける。

「……あんた、調子に乗って……えッ！？」

「どうやらその装甲はかなり頑丈のようだな。ならば、これを喰らっても無事でいられるかどうか……」

距離が空いて、その分だけ密度が薄くなった矢の弾幕を押しのけ、アルケーがようやく大地にしっかりと立った。装甲には細かい傷が多数あったが、どれも致命傷には程遠いものである。

しかし、そんな些細なこと、今のネーナにはどうでも良かった。

「青き光よ、我が手に集え！」

「！？　そ、それは、まさか……まさか！」

「罪深き罪人を罰する光の矢を今、ここにッ！」

セレナの右手に青い光りが集中していく。セレナは今、罪人を罰するための魔力を集束していた。それは集束砲に代表される「Ｓ．Ｌ．Ｂ」とは形こそ違えど、間違いなく大威力集束砲撃の一つであった。

あまりの難度と負担の大きさ、それに消費する魔力量の多さから、使う者によっては最強の魔法として君臨し、それでなくとも最後の切り札として使われることが多い集束砲……その威力は最強の魔法の一つと称されるに相応しく、並みの魔導師ですらこの技術を使いこなせば、「ガンダム」の装甲すら貫けるかもしれないほどだ。

しかも、今回使う相手はオーバーＳ……直撃を喰らえば、幾らアルケーといえど、墜ちない道理はない。

「この私が試してやるッ！　Ｌ．Ｂ．Ｂ（ライトボウブレーカー）！！」

「……アルケー！」

『Ｙｅｓ，ｍｅｉｓｔｅｒ！！』

セレナの右手に集まりし、極大の魔力。そこには今までに使った

魔力も全て含まれていた。それを一本の矢に集束させたセレナは、アルケーに狙いを付けると、すぐにその矢を手から離した。

ゴッ！　極大の魔力で構成された、長さ三メートルもの巨大な矢が、轟音を立てて大気を切り裂いた。ただ飛ぶだけで周囲に破壊を齎していくその光りの矢は、真っ直ぐにアルケーへと迫りゆく。だが、アルケーは何か策でもあるのか、その場から微動だにしない。

「準備はいいわね！？」

『いつでもＯＫでーすーよ、マイスタァアアアアッ！！』

「なら……往くわよ！！」

光りの矢が突き進む中、不意に、セレナの背筋に寒気が奔った。アルケーはまだ身動ぎ一つすら起こしていないが、セレナには何かとんでもないことを起こそうとしているように見えた。焦燥が胸を過ぎるが、すでに放たれたＬ．Ｂ．Ｂは止めることができない所まで進んでいた。

「このまま……いけェエエエッ！！」

セレナは意を決して叫んだ。その叫び声からは覚悟が滲み出ている。それとは対照的に、ネーナは暗い笑みを浮かべて、裁きの矢をただじっと……見詰めた。

「アルケー、セットアップ！」

裁きの矢がネーナの目前にまで近づく。しかし、その声に恐れはない。

『セットアップ・レディ。ＧＮＷ－２０００３　ＡＲＣＨＥ　ＧＵ

ＮＤＡＭ　ＤＲＥＩ　インストール、コンプリート！』

青い光に満たされるモニター。その時、突如深紅から深緑へと、アルケーの機体の色が移り替わった。大剣はＧＮ粒子に還元され、アルケーの疑似太陽炉へと戻っていく。巨大なバックパックがアルケーの背後に出現し、頭部がうっすらと丸みを帯びる。

「ＧＮステルスフィールド、展開！」

それは、アルケー「ガンダム」ドライという、対魔導師戦――対クロノ・ハラオウン用――を想定して造られた機体であった。ただひたすらに復讐の為だけに造られた機体……それが、この悪鬼である。

「あはは！　出力全ッ開！！」

アルケーＧＤ（ドライ）は体を一度翻すと、背後の巨大なバックパックの下部にあった排出口を開き、セレナが夕暮れ空に見た赤い翼をそこから排出した。

その翼の大きさは夕暮れの時よりも遥かに大きく、数百メートル以上も離れていたセレナの元にまで届いてきた。

「これは、あの時の……何ぃッ！？」

やや茫然と、紫がかった瞳でその赤い翼を見つめていたセレナは、次の瞬間、驚きで目を見開いた。セレナの見ている先で、セレナの最強魔法でもある「Ｌ・Ｂ・Ｂ」が、その勢いを急速に弱めていたのだ。その不可思議かつあり得ない光景を前に、セレナはあり得ないと連呼し、アルケーは嗤い声を絶やさない。

「このＧＮステルスフィールドにはねぇーー！　あんた達の魔法を阻害する働きがあんのよ！　高濃度に散布された疑似ＧＮ粒子は、ある一定の密度で構成された魔力を拡散させる！　だから、あんたが今使った「Ｌ．Ｂ．Ｂ」なんてのは、このフィールドの中じゃあ……」

アルケーＧＤの説明すら、今のセレナの耳には届いていなかった。そして、意気消沈しているセレナの目の前で、「Ｌ．Ｂ．Ｂ」の青い輝きが、高濃度疑似ＧＮ粒子の赤に呑まれ、その美しい輝きを消失させた。

「無力なのよッ！！」

アルケーＧＤの巨体が、セレナに向かって跳んだ。自分の意思で、相手を殺す為に。それにセレナは一拍遅れで矢を番え、一瞬で放つが、どれだけ矢を放っても、それは一センチすら進まずに消えてしまう。

「そ、そんな……！」
「さようなら、「聖騎士」！」
『残念無念のギッチョンだぁあああああッ！！』

アルケーＧＤの右腕部から、先端が二又に別れた銃身が展開された。セレナは何とか急場のシールドを張るが、アルケーＧＤのＧＮハンドガンから伸びてきたＧＮビームサーベルが、それを横に斬り消した。そして、アルケーＧＤは目の前にぶら下がった獲物へと噛みつくように、サーベルを展開したまま、鋭い刺突をセレナに放った。

セレナはその一撃をデバイスを犠牲にして防ぐが、それはアルケーGDの想定内だった。

「がふっふふぁ……！」

セレナの口から、どす黒い血が噴き出た。セレナは何が起こったのか分からない顔で、アルケーGDの四つ目を凝視する。だが、アルケーGDは種明かしをするよりも早く、引き戻した右腕のハンドガンでもって、セレナの頭部を正面から貫いた。それによってセレナの後頭部からは、刺突にも使える紫色の鋭いクリアパーツが抜き出てきた。

「ふふ……敗因はファングを忘れていたことよ、「聖騎士」さん」

セレナから血濡れのハンドガンを抜いたアルケーGDは、セレナの体に刺さっていた4基のファングを腰の収納庫へと戻した。セレナが血を吐いた原因は、これが体に突き刺さったからだった。アルケーGDはセレナに近づく直前に、4基ファングをすでに射出していたのだ。

「さて……アルケー、後は目撃者を消す掃討戦だけよ。気楽に行きましょう？」

『オゥ、イエス！　さっさとギッチョンギッチョンギッチョンチョンーー！！』

機体を空に浮上させ、再び体を翻してはGNステルスフィールドを展開するアルケーGD。

その深緑の悪鬼を止められるモノは、もう誰も……いない。

「……では、イオリアさんの『計画』には三つの段階があります。最初は「宣言」で、まずは「ＣＢ」という組織を次元世界中に知らしめることが第一段階でした。……四年前の大戦では、それすら管理局に阻まれて成し得ませんでしたが」

「では、第二段階は何ですか？　世界に存在を知らしめた貴方がたは、次に何を行おうとしたのですか？」

「『計画』の第二段階は「分裂」です」

「「分裂」？」

「えぇ。……クロスロードさんは、この次元世界に幾つの組織があると思いますか？」

「……私には分からないけれど、数え切れないほどあるのではないでしょうか、リターナーさん？」

「はい、そうです。数え切れないほどあるのです。その為、この次元世界には無数の勢力が存在します。そこで私達はまず、次元世界を大まかに三つか四つかの勢力に「分裂」させようとしました。それが今の世界で言う……」

「時空管理局、聖王教会、それに……反管理世界を謳う「Ａ－ＬＡＷＳ」、というわけですね？　……だとすれば、まさか、反管理局

組織であった世界清浄の残党が「Ａ－ＬＡＷＳ」に渡ったのも……！」

「それもまた此方のシナリオ通りでした。いえ、そうなるよう、私達が仕組みました」

「……まさか、この数ヶ月間の世界の動きが、「ＣＢ」の『計画』通りだったなんて……！」

「信じられない気持ちは分かります。しかし、事実、世界は「ＣＢ」の思う通りに動いていたのです。……話を戻しましょう。第三段階の「統一」についてですが……これは言わなくてもクロスロードさんには分かる筈です」

「……管理局と聖王教会、そこに「Ａ－ＬＡＷＳ」を加えた超組織――いえ、人類の「統一」と言っても過言じゃないわね。それこそを貴方達は望んでいたの？」

「……いえ、私達が望むのはそのさらに先……『計画』の第四段階である「抑止」こそが、私達の最終到達地点です」

「……「統一」の次が「抑止」、ですか？」

「つまり、「ＣＢ」は「統一」後の世界で「抑止」の存在となり、世界の暴走を抑え込む役割を担おうとしたのです」

「……それでは、今起きている虐殺行為の数々と『計画』には、何らかの関係があるのですか？」

「あります。いえ、あったと思っていました。イオリアさん――つまりは、私たちの父親に当たる人物――がそう言うのですから、私たちはそれを信じて、今まで活動してきました。イオリアさんの理念、引いては、「ＣＢ」の理念は世界から戦争を根絶すること……武力介入も悪逆行為も、全てはその為の布石だと、少なくても私はそう……信じていました」

「……信じていた？　では、今は違うと？」

「私達が虐殺を行ってきたのは、「ＣＢ」の名をさらに知らしめるためと、「統一」後の世界で唯一の悪役になるためです。……正義が存在するには、どうしたって悪役が必要なのです。そして、「統一」された世界に生まれる統一組織は、絶対に正義でなければなりません。そうしなければ、近いうちに再び「分裂」した世界に遡ってしまいますからね」

「……しかし」

「……えぇ、そうです。幾ら世界にただ一つの『悪』たろうとしても、これだけの罪科を重ねる必要があったのか、私には甚だ疑問でした。……それに、これ以上の罪を恋人であるマイスターの一人に背負わせたくなかったのも、私の偽りざる本心でした」

「……だから、貴方は裏切ったのですね、「ＣＢ」を？」

「はい。私はその為に「ＣＢ」を裏切りました。「ＣＢ」の暴走にこれ以上誰かが巻き込まれない為にも。そして……恋人を憎しみの連鎖から救いだすためにも……！」

「……」

絹江・クロスロードはそこまでのことを思い出して、思考をストップさせた。あの時のアニュー・リターナーの顔は、鬼気迫るものがあった。嘘は言ってないと、そう記者の勘が告げる。

「「宣言」、「分裂」、「統一」、「抑止」……「ＣＢ」は余程綿密な『計画』を立てて、この世界に武力介入を行っていたのね。それに比べて、管理局ときたら……」

明るい緑色の上着と脛の半ばまでしかないズボンを履いた絹江は、

そう言いながら居間のモニターを点けた。チャンネルは絹江が勤めているＪＮＮ社の物だ。四角いモニターの中で見目麗しい女性が、手元の資料を見ながら今日のニュースを伝えている。緑色の長いツインテールに、常時傍らにネギを置く特徴的な彼女は、歌手でもニュースキャスターでも絶大な人気を誇っているらしい。

噂では、彼女がこのニュース番組の司会をやってから、７％の視聴率が３９％にまで跳ね上がったとか……

『えっと、本日の主なニュースですが……』

「内部の混乱すら回復させてないじゃない」

歌姫のような華やかな声をＢＧＭにして、絹江がそう毒づいた。一昨日も昨日も今日もまた、トップニュースは管理局の汚職事件だった。頭が禿げ上がっている老人の、護送車に乗っていく姿が大画面でモニターに映る。

「……管理局に管理される世界と、「ＣＢ」が「抑止」の存在となる統一世界……私にはどちらがいいのか分からないけれど、これだけは言えるわね」

汚職を暴いた資料――今回もまた無限書庫からの資料が決めてになった――がモニター一杯に広がる。それを何とはなしにぼぅ……と眺めながら、絹江は一言、漏らした。

「世界は間違いなく革新される……てね」

確かな予感が、絹江の胸に疼（うず）いていた。中々のおぱ～い、その内側に。

「……それにしても、こんな時だっていうのに、あの子たちは……」

絹江はごろんと横になりながら（ついでにおぱ～いがぺにゃりと形を崩した）、手元の端末を開き、一通のメールにカーソルを当てた。このメールの送り主は絹江の弟である沙慈・クロスロードだった。内容は、沙慈が恋人であるルイス・ハレヴィと一緒に婚前旅行に出かける……というもので、幸せそうに笑う二人の画像が、メールに添付（てんぷ）されていた。

「……随分と幸せそうね、ふふ」

その画像を見て、絹江の顔に笑みが広がった。幼い時に両親を亡くした絹江にとって、ただ一人の肉親である弟の幸せは、絹江の幸せでもあるのだ。しかし、そんな絹江にどうしても理解できないことがあった。それは……

「……沙慈、やっぱりアンタはこの子と合わないわ」

照れた笑いを浮かべる弟の隣りにいる、生粋のお金持ちでもあるルイス・ハレヴィがどうして沙慈と今までずっと付き合え、挙句の果てに結婚まで至れたのか……それが絹江には不思議でしょうがなかった。

ハレヴィ家といえば、かつて存在したフォートレス家と並ぶ有名な資産家だ。その一人娘でもあるルイスがどうして平凡な男である弟に惹かれたのか……絹江には全く分からない。

「そう言えば……ハレヴィ家はあのブラックインベスターとして名が立つ「ラヴクラフト」とも関係があったっていうけど……でまかせよね？」

ごろり、と、もう一回転寝転がる絹江。居間のテーブルに広がる
記事の草案は、まだちっとも埋まっていなかった。
テーブルの上に置かれた紅茶は、すでに冷め切っていた。

世界が周る、ぐるぐると。
視界が廻る、ぎょろぎょろと。
脳の中身はぐちゃぐちゃに、
尊厳改め人権は大凡剥ぎ取られ、
オレはオレを維持できなく、
オレは「僕」となりて操り人に。
名前忘れてコードネームへ、
コードネームはピエロさんにと。

初めて思う、魔法が恐いと。

初めて思う、頭が狂っていると。

頭を弄り回された僕よりも、

――――はさらにより狂っていた。

怖い、怖い、怖い、怖い、怖いよ。

誰よりも何よりも……君の方が、

よっぽど……恐ろしいんだ。

嗚呼、僕は何処に行こうとして、

……イタノカナ？

【はたして人は、
不徳なくして徳を、
憎しみなくして愛を、
醜なくして美を考えることが
できるだろうか？

実に悪と悩みのおかげで
地球は住むにたえ、
人生は生きるに値するのである】

――つぁーる様から、アナトール・フランスより

幕間―6（後書き）

（ピエロさんの仕込みは上手くいった……）

（後は、スクライア一族とル・ルシエ族の会合に、ピエロさんを出席させるだけ……）

（やれやれ……民族紛争を起こすことのは、やっぱり大変だね）

（でも、これもまた『計画』の一環……ジェイルの「死を想え」も完成に近づいているらしいし、僕も気合いを入れないとね）

（……ジュエルシードを制御するデバイスの方も順調っと。さてと……通常業務に戻りますか）

（……ディアーチェ、僕がいなくて荒れてないかな？　彼女、僕にとても懐いていたから、心配だなぁ……）

――サードエージェント「ラジエル」の独白

第65話　Ethnic battle to begin（前書き）

【戦争は戦争のために戦われるのでありまして、平和のための戦争などとはかつて一度もあったことはありません】

――ダイモン様から、内村鑑三より

第65話　Ethnic battle to begin

――新暦75年2月12日――

あの様々なことが起きた「イヴ・パーティー」から、すでに一ヶ月半近くが経っていた。その長いようで短い期間にも、機動六課にアニュー・リターナーが配属されたり、次元世界の経済が一気に恐慌に陥ったりなど、色々と重大な出来事が起こったりしていた。

「……」

そんな変化し続ける世界の中で、桃色の髪に白い帽子を被ったキャロ・ル・ルシエは、真剣な表情で……

リンゴの皮を剥(む)いていた。

「……」

黙々と、手元の作業に集中するキャロ。ぷるぷると手が震えていて、それがこの作業に慣れていない事を如実に表していた。

「……できたー！」

時間にして、五分近くはかかったであろうか？　やっとの思いでリンゴを剥き終えたキャロだったが、お世辞にもその形はいいとは言えない。凸凹ならまだしも、キャロが剥いたリンゴは皮の方が厚みをもっており、皮の方が食べれそうだった。

しかし、それでも彼女――フェイト・T・ハラオウンには、それ

は何にも増しておいしい御馳走であった。

「上手にできたね」

「えへへ～」

撫で撫で。白い帽子の上から、フェイトはキャロの頭を何度も撫でた。それにキャロは嬉しそうな顔をして、皮を剥いただけのリンゴを、白いベッドの上にいるフェイトに差し出した。フェイトは身を起こしてそのリンゴを受け取り、涙を零しながらシャリシャリと、そのリンゴを食べた。シャリシャリ、シャリシャリ……顔は終始、笑顔で固定されている。

「「黒鬼」にやられた所……やっぱり、まだ痛いですか？」

「痛いことは痛いけど……今ではもう大分楽になってきているよ」

フェイトは食べ残ったリンゴの芯を、ベッドのサイドに備え付けられたゴミ箱に捨てながら、自身の包帯が巻かれた脇腹を摩った。その痛々しい傷は、「イヴ・パーティー」にて「黒鬼」につけられた物だった。

一騎打ちにて「黒鬼」に敗北を喫したフェイトは、その際に致命傷に近い傷を負ってしまった。幸いにも、近くにキャロたちがいたため大事には至らなかったが、それでも一カ月以上もの入院を必要とした。

いや、「黒鬼」だけではない。その前のセッテに付けられた傷も完治していなかったのだ。それも含めて、フェイトはこの一ヶ月半の間、ずっと治療に専念していた。もう二度と不覚をとることのないように。

「それで……皆の調子はどう？」
「……決して良いとは言えません。なのはさんもフェイトさんも抜けて、スバルさんも未だ立ち直っていないので……六課の戦力は通常の半分以下だと、八神部隊長はそう言っています」
「半分……か。でも、スバルにはティアナが、なのはにはイリスさんとリインがついているから、大丈夫だと思うけど……」
「……私も、大丈夫だと信じています」

スカートの裾をギュッと握るキャロ。異常な戦力と言われた機動六課が、この数ヶ月で戦力を半分以下にされた驚きもあるのだろうが、その姿は寧ろ、次々と離脱していく仲間に怯えているようでもあった。

もしかしたら、スバル・ナカジマの姉であったギンガ・ナカジマのように、いつかこのメンバーの中からも死者が出るかもしれない……それを危惧してのことか。

「うん、きっと大丈夫だよ、キャロ」

未だ幼いキャロにも、トラウマと言うべきモノがある。僅か六歳で白銀の飛竜を従えた、「召喚士」として桁外れな才能のせいで部族から追放された彼女は、一時期、エリオと同じように酷い人間不信に陥ったことがあった。そんな彼女を救ってくれた「姉」のようなフェイトが、漸くできた仲間のスバルが、自分を教導してくれたなのはが、順を追ってリタイアしていくのが、彼女にはとても辛い出来事であった。

しかし、その辛さを包み込む優しい音色が、キャロの今にも泣きそうな顔に向かって放たれた。

フェイトは続けて言う。

「なのはは不屈のエース・オブ・エースで、スバルはその元で教導を受けていたんだ。だったら、いつかきっと立ち直って、キャロに元気な姿を見せてくれるはずだよ」

「……はい！」

自分にも言い聞かせるようなフェイトの言葉。しかし、キャロはそれに気付かず、元気よく返事をしては訓練へと戻っていった。その背を見送りながら、フェイトは思う。

「そうだよ……大丈夫、だよね？　スバル、なのは……」

「ガンダム」によって傷つけられた友人の身のことを。

訓練を終えたキャロは、寝巻に着替えた後、寝床であるベッドへと静かに乗り込んだ。ギシッと音が鳴るが、ベッドは質のいいスプリングでキャロの全体重を軽々と受け止め、彼女を易々と支えてくれる。

「……」

部屋の明かりはすでに落とされていた。真っ暗だ。すぐそこにいるはずのフリードリヒすら見えない。

「……エリオ君、寝てるよね？」

「すぅー……すぅー……」

「……うん、寝てる。じゃあ……いいよね？」

何も見えない中、キャロは人肌のぬくもりを手掛かりに、寝息を立てるエリオへと、両手で抱き付いた。心を安らげる温もりが、キャロの肌にしみ込んでくる。その心地良さにまどろみながら、キャロはころんっと、エリオの胸に頭を寄せた。

何故同じベッドにエリオがいるのか？　それは、キャロが乗り込んだベッドこそが、彼の正式な寝床だったからだ。つまりは、キャロがエリオの寝ている所に入ってきたわけだが……生憎、エリオは熟睡して、自分のすぐ隣にキャロがいることに、全く気が付けなかった。

もし気が付いていたら、真っ赤になって飛び上がったであろうに。

「……エリオ君、私ね……」

エリオの胸に頭を埋めながら、キャロはぽつぽつと言葉を紡ぐ。静かに、たおやかに。

「エリオ君にも、フェイトさんにも……秘密にしていることがあるの」

エリオの寝息よりも静かな……本当に蚊の鳴くような声。されど、

その声にはどこか決心を垣間見せる何かが――強さが込められていた。

「私ね、実はね……」

一拍の間。

「四年前に一度だけ……「ガンダム」を見たことがあるの」

これは、キャロ・ル・ルシエの夢の中。そして、四年前に実際に起こった「悪夢」でもある。

その日、第6管理世界に住むル・ルシエ族は、今日も今日とて、普通の生活を営んでいた。それはキャロとて例外ではなく、彼女もまた両親の庇護の元で生活していた。

その生活が脅かされたのは、管理局の人間が来た時だった。彼らはこの世界に現れた強力なテロリストを捕らえるために、偶々近くにいたル・ルシエ族に協力を求めてきた。

最初、ル・ルシエの族長は管理局でも手こずる相手だと知って及び腰であったが、結局、管理局の要請を無下にすることはできなかった。

その結果……ル・ルシエ族は百名近い同胞の命を散らせてしまった。それも、優秀な魔導師ばかりを、だ。

キャロはその時の出来事をよく覚えている。だから、今でもこうして夢見ていた。

大地を駆け、大剣を滑らす青い機体。

長銃で空から狙撃を行う、緑の機体。

その二機がル・ルシエ族と管理局員の命を奪い去っていく光景を、キャロは今でも鮮明に思いだせる。綺麗な青空に舞う血飛沫（ちしぶき）……絶叫とともに唱えられる詠唱……その全てを、キャロは四年経った今でも覚えている。

だから、今でもこうして……人肌が恋しい時がある。

あの時の恐怖は、今でも薄れずにキャロの内部に留まっている。機動六課が「ＣＢ」と戦う際、彼女はいつも一人で襲いかかってくる恐怖と対峙し、毎回それに打ち勝ってきた。彼女の「姉」であるフェイトに、「パートナー」たるエリオに心配をかけたくない一心で、彼女はこれまでずっと……頑張ってきたのだ。

しかし、それでも限界はあるし、時には癒しが必要となるものだ。

キャロはまだ十歳の子どもだ。身体的にも精神的にも、まだまだ子どもの域を超えない、未熟な十歳だ。なのに、大人ですら尻込む戦場に身を投げる彼女は……その精神を酷く疲れさせていた。

なのに、それに重荷を付けるようにやってくる幼き日の恐怖は、彼女から安寧を奪い、安息をも取り去った。後に残るは、尋常ではない疲労とストレス、それと……精神的磨耗。

もしかしたら、キャロこそが機動六課でもっとも追い詰められていたかもしれない。そう思えるほど、キャロはキャロで「ガンダム」に追い詰められていた。

だが、そんな彼女の傍にはいつも騎士がいた。同い年の、強い騎士が。

騎士はこれまでに何度もキャロを窮地から救ってくれた。恩人ともいえよう。しかし、騎士は騎士であり、それ以外の言葉は似合わないし、何よりも、彼がそう呼ばれることを望んでいるから、キャロは彼のことを騎士と認識していた。

もう一度だけ言おう、これは夢だと。キャロの幼き日を映した「悪夢」であると、もう一度宣告しよう。

その悪夢の中で、彼女の騎士――エリオ・モンディアルが、青い機体――「剣士」と、最も恐ろしかった緑の機体――「三つ目」を撃破した。手にした槍で、貫くように、エリオは「三つ目」と呼ばれる「ガンダム」を空から大地に引きずり下ろし、遂には撃墜を成し得る。

その後ろ姿を見て、キャロは知らず、涙を両目から流した……。

「……ん？　もう朝だ。何だかとっても良い夢を見た気がするけど……って、あれ？　隣りがやけに暖かいような……へ？」

ぷにゅっと。エリオの手に柔らかい何かが握られた。寝起きのエリオはそれが何なのか、最初は理解できなかったが、時間が経つにつれ、それが何なのかを理解していった。

それは少年が触るにはあまりにも……酷な物だった。

「……ん」
「……」
「ふわぁ～……エリオ君、おはよう」

唇と唇が触れ合えそうな距離。エリオの頭が真っ白になる。同時に、今自分が掴んでいるモノの正体を、彼は完全に把握した。

「……」
「……エリオ君、どうしたの？　顔、真っ赤だよ？」
「……うわぁぁあああああああぁあああああッ！？」

朝、エリオの絶叫が宿舎に響いた。それと同時に、真っ赤になったエリオが廊下をダッシュする様を、何人かの人々が目撃した。その目は皆「あぁ、キャロ絡みだな」と、そう語っていた。

そして、エリオが偶々近くを通りかかったシグナムに止められる

まで、後……僅か。

六課の食堂。そこでフォワード陣は昼飯を食べていた。そこにスバルの姿は……ない。

「……ティアナさん、スバルさんは……」

「あの馬鹿はまだ引き篭もっているわ。私の言葉もまだ全然届いていないわね、あれは」

「そう……ですか」

モリモリとパスタを食べるエリオ。粛々と料理を平らげるティアナ。パクパクと食物を胃に収めるキャロ。その姿に元気はあまりなく、疲れた雰囲気だけが見て取れる。

「……」

「……」

「……」

無言。空気が重い。誰もが口を開けない。

「……あ、モニターでも付けますか、ティアナさん？」

「……そうね、お願いするわエリオ」
「はい」

そんな中、エリオがこの空気を打開すべく、モニターの電源へと手を伸ばした。独特の起動音が食堂に反響する。

『……でした。それでは、次のニュースに行きたいと思います！』

モニターの画面には、最近人気が出てきたと評判のアナウンサー兼歌手の女性が、ニュースを読み上げていた。傍らには何故かネギが置いてある。エリオとキャロの目がそれに釘付けとなっていたが、ティアナだけは画面の下を流れるテロップを見つめていた。

テロップには、またもや湧いて出てきた管理局のお偉いさんの名前が刻まれており、溜息をつかずにはいられなかった。

『……今回、無限書庫から発掘された資料で発覚したこの不祥事に対して、最高評議会は……』

また無限書庫、か……ティアナは最近よく耳にするその名前を聞き、またもや溜息をついた。

今やミッドの市民にとって、汚職を暴く資料を出す無限書庫は、正義の味方のような部署と認識されていた。そこには何の疑問も、ましてや疑惑もない。彼らは管理局という絶対の正義から出てくる膿（うみ）を次々と摘み取る無限書庫に、盲信にも近い信頼を寄せていた。

しかし、ティアナは知っている。あそこがどれだけ恐ろしく、また油断ならない部署なのかを……彼女はここ数ヶ月で思い知った。

親友の姉であった人物の命を代償にして。

「……ティアナさん、どうしたんですか？」

「……いえ、何でもないわ。心配しなくても大丈夫よ、キャロ」

「……あっ！　そう言えば、この事件も無限書庫から出た資料が決めてだったんですね。無限書庫って確か、フェイトさんやなのはさんと幼馴染みの人がトップを務めているって聞いたんですけど……」

「……幼馴染み？　無限書庫のトップの人と？　……キャロ、それは本当なの？」

「え？　あ、はい。フェイトさんに聞いたので、間違いないかと……」

「……」

無限書庫はここ最近になってできた部署だ。だから、その知名度も決して高い物とはいえない。ましてや、裏方を主とする部署のトップなど、一々覚えていたらきりがない。だから、ティアナが無限書庫の司書長であるユーノのことを詳しく知らなくても、それは仕方のないことだった。

（……無限書庫のトップが、なのはさんたちと？）

それゆえに、ティアナはまだ顔も知らぬユーノに対し、懐疑を抱くことができた。ヘタな先入観や事前情報に踊らされることなく、ティアナはユーノへ疑いの眼差しを向けた。

ギンガの死は無限書庫のトップと何か関係があるのではないか……もしくは、何かを知っているのではないか。

ティアナは目をモニターに向けたまま、思考の渦へと浸っていった。彼女の中では、幾つものピースが嵌っては抜け、嵌っては抜け

……るが、朧げな形すら形成しなかった。

（深読みのし過ぎ……かしら？）

自身の推測が全くの的外れとしか言えなくて、ティアナはこっそりとまた深い溜息をついた。モニターに焦点を合わせ、左右に動くアナウンサーのツインテールをじっと眺める。

『……では、これで本日のニュースは終了です！　皆さん、またあし……ディレクター？　どうしたんですか、一体？』

今まさにニュースが終わろうとしていた時、突然モニターの向こうが慌ただしくなった。キャロとエリオはご飯もそっちのけでその混乱ぶりを見ていた。ティアナは昼飯を食べ終えてから、もう一度モニターに焦点を合わす。

『え、えっと、ききき、緊急速報です！』

アナウンサーの噛み噛み台詞。だが、その表情から滲み出る緊迫感は本物だった。

思わず態勢を整えるエリオとキャロ。その後ろから、ティアナが鋭い目付きのまま、モニターに集中する。画面のスタッフたちは先程から忙しなく動いており、これから流されるニュースがそれだけとんでもない物だということを如実に表していた。

『ほ、本日の１０：１５に、第６管理世界にて行われていたスクライア族とル・ルシエ族の会合ですが……現地の人からの情報ですと、どうやら決裂に終わった模様です！』

「……え？」

『また、今回の会合にてル・ルシエ族の族長と他数名、それにスクライア族の何人かが、衝突の末、お亡くなりになったようです！』
「え？」
『ル・ルシエ族は今回の会合の結果を受け、正式にスクライア族へと宣戦を布告！　スクライア族もそれを受理した模様で、両民族の争いは民族紛争に発展する可能性があります！』
「え？」
『管理局はこれに関して、非が全くないル・ルシエ族に全面的な協力を約束しました！　そして、遺跡発掘と言ってル・ルシエ族の聖域から遺物品を奪っていったスクライア族は、管理局がル・ルシエ族を擁護することを受け、「ＡＬＡＷＳ」と連携することを公表しました！』
「……そ、そんな！？」
『これらの事態を受け、第６管理世界の政府は、間違っても都市に被害が出ぬようにと、現地の聖王教会に護衛を要請！　聖王教会はそれを快諾したとのことです！』
「どうしてル・ルシエが……」
『なお、この民族紛争に「ＣＢ」が介入するのかは、未だ不明です！　以上、速報でし……え？　拘束？　誰がですか？　……無限書庫の司書長である、あのユーノ・スクライアがッ！？』
「は、はいぃいいいいッ！？」

事実、そのニュースはとんでもない物だった。ティアナとエリオ、キャロの困惑した声が食堂に響き渡る。だが、彼らだけではない。六課の局員、引いては時空管理局に勤める者の半数以上が、このニュースを聞いて驚愕の声を上げていた。

それと同時に、機動六課の新設された建物内全てに警報が鳴り響いた。何処までも嫌な予感を燻る、甲高い音。それがけたたましい音量で六課の隊舎を震えさせた。

一人が欠けているフォワード陣は、その警報を聞くと、すぐさま行動を起こした。そしてその一分後にはブリーフィングルームへと集合を果たし、部隊長である八神はやてからこの警報の意味を知ることとなる。

驚愕の……事実と共に。

「随分とお早いことで」

「そうでなければ貴様を確保できないと、そう思っていたからな」

無限書庫は今、その空気を極度に強張らせていた。そして、無限書庫に努める司書たちの誰一人として、目の前の光景から目が離せないでいた。

彼らの視線の先では、通常業務として資料を検索していた司書長がいた。また、その対面には、あの最高評議会の一員である「伝説の三提督」の一人、ラルゴ・キールが、武装した局員を伴って、司書長に向かい合っていた。

その間に流れる空気は……司書たちから見ても明らかに険悪な物

だった。

「一応要件をお窺いしますが、ラルゴ・キール最高評議会議員がこの僕に何のようでしょうか？」

「決まっている。ユーノ・スクライア無限書庫司書長、貴様を拘束するためだ」

キールの言葉が終わると同時に、傍に付き添っていた局員がユーノへとバインドを発動させた。鮮やかな黄緑と濁った灰白色（かいはいしょく）のリングが、ユーノの手足を縛る。ユーノはそれに……一切、抵抗しなかった。

「僕を拘束するということは、無限書庫の司書長を拘束するということ……これからどうするつもりで？」

「貴様の替わりに、優秀なデスクワークを何人か配置させる。資料請求も今までより抑えるつもりだ」

「そうですか……なら、部下には何の罰もないのですね？」

「あぁ。あくまでも貴様一人を拘束するだけだ」

ユーノは自分が拘束されるにも関わらず、冷静さを失ってはいなかった。その瞳に宿る知性の光りは、鋭利な刃物となってキールの内心に突き刺さってくる。解剖、観察、推察……キールはそれらの行程を、何の表情も浮かべずに耐え切った。

そして、同時に思った。やはり、コイツは人の皮を被った何かだと、そう確信するに至った。それほどユーノの瞳には、凍えるような冷たい光りが宿っていたのだ。

「……それで、何時になったら解放してくれるのでしょうか？」

「それは分からん。ル・ルシエとスクライア、その民族紛争が終わ

るまでは解放できんのだ。だから、少々……長引くかもしれん」

ユーノの瞳は何も映さない。ただ現実をしっかりと受け止めているだけで、何の感情も窺うことができない。その無表情さは、武装した局員の方が怖気づくほどだ。その尻込む局員を視界に入れつつ、キールも内心では冷や汗を掻いていた。

その達観した様子は、キールが海千山千を経験して漸く手に入れた境地……をも、既に超えていて、キールには目の前の青年が怪物か化け物にしか見えなかった。

「では、連れて行け。貴様の独房は本局内部にある。ここから移動して一時間ほどだ」

「それは……随分と近いですが、大丈夫なのですか？　僕がスクライアに情報を流す可能性を潰したいのでしょう？」

「そのためにも、本局で最も強固な独房を貴様に与えるつもりだ。ヘタに遠ざけても此方にメリットは何も無い」

ざわざわ、ザワザワ。無限書庫の空気がさらに張り詰める。司書たちはいきなり司書長を拘束したキールたちを不審げに見つめていた。中には、護衛用のデバイスを担いできた司書も何人か見受けられる。

キールはその上司としての愛されぶりに、脱帽に近い感情を抱くが、それも束の間のこと。怒声のような大声で、今回の拘束劇を司書たちにも説明したキールは、未だ納得していない顔をする司書たちを置いて、ユーノを独房へと案内していった。

独房は真っ白な壁で囲まれており、少なくてもユーノの目には清潔そうに映った。最も、ここが罪人を拘束する最硬の場所だということで、結界魔法がこれでもかとふんだんに使われていたが、それを気にするユーノではない。

ユーノはもう自分が拘束された理由を理解していたのだから。

「……民族紛争、か」

ユーノの呟きは、独房に備え付けられた盗聴器に拾われ、何か不審な言葉を発していないか、その言動の全てをチェックされていた。また、真上にあるモニターも、不審な行動があるようならすぐさま警報を鳴らすことだろう。

「……徹底しているね」

重犯罪人でもここまで厳重に拘束されはしないだろう。裏返せば、それだけキールはユーノのことを疑っているということだ。スクライアに情報を流すのと、もう一つ……

あの「ＣＢ」のサード・エージェントなのではないか、と。

「……」

ユーノは虚空を見つめながら、懐から一枚の写真を取り出した。その写真はリインフォース?が誕生した時の記念写真である。真ん中にリインを置いて、左右にはやてとユーノが映っている。

それをじっと見つめること、数分。ユーノは一つの吐息を漏らしながら、それを懐に戻した。白っぽいツナギのような囚人服の、懐へと。

「……はやて」

ぽつりと呟かれたその言葉も、盗聴器に拾われ、やがて霧散していった。余韻は……少ししか残らなかった。

だが、ユーノの口は、歪な三日月に裂けていた。まるでこれから起こる出来事に期待している子どものように、ユーノの口は……笑いの形をずっと崩さなかった。

「君は、真実に辿り着けるかな？」

そして、最後の呟きが……盗聴器にさえ捉えられずに消えていった。

【目を逸らすな。どのような真実があろうと、人はそれを知る義務がある】

――キラー様より

第65話　Ethnic battle to begin（後書き）

（……ユーノ君が、拘束された？）

（んな……一体、どうして……！）

（いや、それよりも……無限書庫はどうなるんやろ？　最高責任者であるユーノ君がいなくて、無限書庫は稼働するんかい？）

（……多分、それも折り込み済みなんやろうけど、人事異動をしたぐらいで、ユーノ君の穴を埋めれるんやろうか？　ユーノ君は半ば放棄されていた無限書庫を一から立ち上げた人物……それこそ、グレアムおじさんが年単位で捜し出した資料をたった数時間で見つけるほどや）

（しかも、当時は9歳……今はそれ以上の能力を……）

（……無限書庫が機能せえへんかったら、管理局の能率がどうなるのか。……考えるだに恐ろしいことや）

「……ユーノ君、私は信じ取るで」

――八神はやての独白より

第66話　Coup d'etat and a meeting（前書き）

【運命に泣かず、挫けることを知らない。
そんな彼女は美しかった。
誰にも媚びず、最後まで一人で戦った。
そんな彼女は気高かった。
彼女は眩しくて、ただただ神々しくて。
私には、そんな彼女が必要だった】

――鴨川秘様から、『ひぐらしの鳴くころに』のフルデリカ・ベルンカステルより

第66話　Coup d' etat and a meeting

――新暦75年2月12日――

「やはり……そう来ますか」

「……はい、「カリフ」様。恐らくは今日決行されるかと……」

第1管理世界「ミッドチルダ」のベルカ自治領。そこに建てられた聖王教会総本部は、不気味なまでに静まり返っていた。空には暗雲が立ち込め、今にも雨が降ってきそうだった。そして、その暗雲に似た重たい空気が、「カリフ」の自室にも立ち入っていた。

「では……貴方は今すぐここから避難を。ここに残るのは私だけで十分です」

「で、ですが、それでは「カリフ」様が……！」

白いワンピース状のドレスを着た聖王の代理人「カリフ」は、体のラインがはっきりと分かるドレスを優雅に着こなしながら、従者にそう命じた。手元にある杖型のデバイスが力強く点滅する。従者は主人のその思いやりに涙を零しそうになりながら、必死に「カリフ」をここから逃がそうとしていた。

「私は大丈夫です。仮にもオーバーSで、聖王様の代理人でもあるこの私が、クーデターを起こそうとする無信者共に負けるなどと、貴方は本気で思っているのですか？」

「で、ですがですが！　相手にはあの教会最強の騎士、ノア＝アンダーソンや、「角持ち」のブリング・スタビティなどがいます！　いくら「カリフ」様がお強いとはいえ、「聖王の右腕」と「ガンダム」が相手では、分が悪過ぎます！」

「……」

従者の涙ぐむ顔は、これから起こるであろう出来事をありのままに語っていた。いくら「カリフ」が教会内で五人といないオーバーSランク魔導師とはいえ、相手はそれと同格以上の化け物たちなのだ。普通に考えれば、まず「カリフ」に勝ち目はない。

にも関わらず、「カリフ」は穏やかな顔を崩さぬまま、暖かな光を宿す碧眼（へきがん）を従者に向ける。自身に死が迫っていることは承知のはずなのに、「カリフ」はそれでも……何時もの柔らかな雰囲気を崩さなかった。

その柔和な雰囲気は、まさに聖王……聖母のものであり、従者は目の前にいる主が本当の「カリフ」――代理人となったことを、言葉ではなく脳で理解した。

「どうやら突入してきたみたいですね。もうあまり時間がありません。……今から私は貴方をある所に転送します。そこには私の友人であるカリムがいるので、貴方は転送が済み次第、彼女に保護を求めて下さい。カリムは私と最後まで友人でいてくれた人物です。……決して悪いようにはしないでしょう」

「あ、あぁ……「カリフ」様ぁあああッ！！」

真ん中に置かれたテーブル。その窓側の方に座る「カリフ」へと、従者は涙を流しながら懇願する。一緒に逃げましょう、ここから脱出しましょうと。

その懇願を……「カリフ」は首を横に振るだけで断った。

「もしカリムと無事に合流できましたら、彼女にこう伝えて下さい。

「カリフ」は……アオリは最後まで聖王様を信じることができました、と。……貴方と一緒にいたこの２０年間は、とても幸せでした。願わくば、貴方に聖王様の御加護がありますよう……」
「アオリ様ぁあああッ！！」
「……トランスポーターッ！」
『トランスポーター』

ストレージデバイスの無機質な声。それが発せられると同時に、「カリフ」の目の前にいた従者がこの場から消えた。「カリフ」は一人となった部屋で安堵の溜息を吐く。

バンッ！

その直後だった。「カリフ」の部屋のドアが勢いよく開かれたのは。

「……「カリフ」様でおられますか？」
「私を見間違えるのなら、貴方はもう聖王教会の騎士などではありません」

デバイスを握る「カリフ」の眼前、ドアが開いた先にいたのは、一人の屈強な男だった。右手には剣型のデバイスが、左手には厚い盾が握られ、白銀の重厚な鎧が耳障りな金属音を奏でている。顔はかなり整端な部類に入り、もし「カリフ」と横に並べば、必ずや絵になったことだろう。

もっとも、それはもう無理な相談であったが。

「では、要件を手短に言います。……教会の害敵たる偽善者は、ここで滅びろッ！！」

「……カリム」

１８０ｃｍ越えの屈強な男――ノア＝アンダーソンが、デバイスたる剣を最上段に構える。対し、「カリフ」はそれを見つめたまま、微動すらしない。

「紫電……一閃ッ！！」

「私の従者と聖王様の生まれ変わりであるあの子――高町ヴィヴィオを、頼みます……」

そして、「カリフ」が微笑みながら紡いだ言葉を、ノアの唐竹割りが体諸共……真っ二つに切り裂いた。噴水のように「カリフ」の体から撒き上がる大量の血。それを体中に浴びながら、ノアはデバイスを待機状態に戻し、その場から自分の足で……去っていった。

その後ろ姿は、どこか深い悲しみを負っているようにも見えた。

スクライア族とル・ルシエ族の民族紛争が勃発したこの日。

奇しくも、聖王教会でもまた「クーデター」という名の変革が巻き起こった。

その変革は成功の内に終わり、新生の聖王教会はある一報を次元世界全土に発した。

『……我々聖王教会は、これより「ＣＢ」を聖王様に仇なす天敵と

して認識し、殺傷魔法を使用してでもその殲滅を図るものとする！！』

この一報は大半の信者の賛同を得ていた。それも当然で、その大半の信者というのが……「ＣＢ」により近しい者たちを殺された人々だったからだ。

だが、小数の信者からは、これを不安視する意見が出ていた。この一報で憎しみの連鎖がさらに我が聖王教会へと食い込むのではないかと……そう危惧して。

『また、我々聖王教会は、時空管理局に対して、聖王様の身柄をこちらに戻すことを要求する！　これが飲まれない場合は、我々聖王教会は時空管理局と事を構えることすら辞さないつもりだッ！！』

また、聖王教会が聖王の身柄返却を求めたことで、管理局内にも混乱が起きた。元々、聖王という柱が実存していないからこそ存続が許されていた聖王教会。もしそこに復活した聖王、高町ヴィヴィオが戻れば、かつてのベルカを復興するのは間違いようのない流れだ。

そして、ミッドチルダを拠点とする管理局にとって、ベルカの復興ほど面白くないことはない。かつて栄華を極めた文明が蘇る……それは、もしかしたら今のミッド文明を覆す要素になりかねないからだ。だから、管理局内には教会との良好な関係を維持する為に、速やかに聖王を返却すべきという意見と、断じて返却すべきではないという二極の意見が真っ向から対立していた。結論は数時間経った今でも、未だに出ていない。

そこに個人の――当事者たちの事情が食い込む余地は……微塵もなかった。

高町なのはは今日、久しぶりの休暇で娘であるヴィヴィオと一緒に遊んでいた。しかし、その表情はニュースを見た途端に愕然となり、なのはは無意識の内にヴィヴィオをギュッと、懐に抱きしめた。

「……なのはママ？」

「大丈夫、大丈夫だよ、ヴィヴィオ。貴方は私が……絶対に護るよ……！」

小さく呟かれた声には、もう二度と「Ｊ・Ｓ事件」の失敗を繰り返さないという覚悟が滲み出ていた。

なのはとヴィヴィオは、機動六課の宿舎が近くにある公園に来ていた。公園には他にも子連れの奥さまが談笑をし、和やかな雰囲気を形成していた。なのはは懐にヴィヴィオを抱きつつ、その頭を数度、軽く撫でた。慈しむように、愛しむように……何度も何度も撫でて……

「……高町ヴィヴィオを渡してもらおうか、高町なのは」

「!?」

ピタッと、止まった。

それが、高町なのはと高町ヴィヴィオの……離別、だった。

「……こちらブリング。聖王を確保した」

『さすがです、ブリングさん！　撤退ルートは事前に示した通りです。六課に気付かれないよう、気を付けて下さい！』

「……了解。これより撤退する」

ブリングはミッドの地下水路に逃げ込んでいた。傍らにはぐったりとしたヴィヴィオが抱き抱えられている。ブリングは若い女性との通信を終えると、そのまますぐに待機モードの疑似太陽炉から疑似ＧＮ粒子を散布させ、地下水路の暗闇の中を移動し始めた。

「……」

「……」

ブリングの動きに余裕はなかった。あの時、なのはからヴィヴィオを奪う際に、思った以上に抵抗され、時間を一分ほども余計に消費してしまったのがその原因であった。ここは六課の宿舎とも近く、迅速な撤退が当初から求められている。それを成す為に、心なしか速足で歩くブリング。足音は一切立てずに、あくまでも静かに行動する。

「……」
「……」

ブリングに気絶させられたヴィヴィオは、一向に意識を取り戻す気配を見せなかった。ブリングはただ黙々と、自身の目的である「聖王復活」を果たすべく、歩みを進ませる。足音すら無音のこの空間には、ヴィヴィオの寝息と流れる汚水の音だけが聞こえてくる。

「……やはり、あの一分が余計だったか」
『Ｙｅｓ，ｌｉｃｅｎｓｅｒ』

突然、ブリングが沈黙の行進を止めた。そして視線の先、水路の暗闇を鋭く見抜く。それに指し示したタイミングで飛んできたのは、橙と桃色の魔力弾であった。

「……ガラッゾッ！」
『Ｙｅｓ，ｌｉｃｅｎｓｅｒ！　セットアップ、レディ！』

ブリングが鋼の機械人形そのものとなり、紫基調の体を駆る。振り抜かれた右腕にはＧＮビームクローが生えていて、それが二つの魔力を切り裂いた。二つに分かれた魔力弾は左右へと弾かれ、地下水路の壁面を粉々に砕く。

『……魔力光から判断して、ティアナ・ランスターとキャロ・ル・ルシエか。……当然、エリオ・モンディアルもいるだろう。……ガラッゾ、どう思う？』
『三人が時間稼ぎをして、機動六課の副隊長たちに囲まれる可能性があります。ここはすぐに撤退すべきかと……』
『……では、そうしよう』

未だ爆発音が途絶えぬ中、ガラッゾが唐突に超低空を翔けた。床からガラッゾの体まで、一メートルもない。赤橙色の粒子が美しく舞う。

「しまった、逃げる気だわ！　エリオ！」

「クッ……！」

ガラッゾが２０メートルほど飛翔すると、その先で白いコートを羽織った赤毛の少年――エリオが、水路の陰から飛び出してきた。手に持つ槍型のデバイスから電気が迸る。ガラッゾは自分に矛先を向けてきた小さな男を前にして……無造作に、また右腕を振るった。

『……どけッ！』

「あぅ……！」

「エリオ君ッ！？」

幸いにも、エリオはビームクローを柄で受け止めることに成功するが、その衝撃までは未だ成熟していないエリオの肉体では受け切れなかった。なす術もなく水路の壁に叩きつけられるエリオ。叩きつけられた壁が陥没し、キャロが悲鳴を上げた。

それを振り返ることなく置き去りにし、ガラッゾは左腕に抱くヴィヴィオを抱き直した。エリオとの衝突で水の飛沫が盛大に噴き上がるが、それが水面に落ちるより早く、ガラッゾはそこから飛び出す。

それを狙っていた者がいたとは、露とも知らずに。

「クロスファイア、シュート……」

『……なッ！？』
『この閉所でそれをッ！？』

滞空する橙色の、魔力でできた丸い弾丸。それがガラッゾのモニターに数十も映っていた。それを操るティアナは、エリオを突破したガラッゾへと、それら全てを同時に……済射する！

「ファイア！」

無論、ヴィヴィオに被害が及ばぬよう、最大限に考慮してだが。

「これで、数分は保つ……かしら？」

ティアナの視線の先で、橙色の魔力弾が水路の壁を穿ち、易々と壁を崩壊させていた。崩された壁の欠片が、水面と並行して飛ぶガラッゾ、その眼前へと押しかけ、進路を塞ごうとする。

『……ガラッゾッ！』
『ＧＮフィールド、展開！』

だが、ガラッゾはそれを見てもなお、速度を緩めなかった。それどころか、先程よりも速度を上げた。それに怪訝な表情を浮かべ……る暇もなく、ガラッゾの周囲を、赤橙色の粒子が円形に包んだ。

それはＧＮフィールドと呼ばれる防御機能で、ティアナはこの機能の性能を、「ＣＢ」から離脱したアニュー・リターナーから聞き及んでいた。だから、彼女はすぐに水路の陰へとその身を飛びこませた。これから起こることを予測して。

『……うおぉおおおおッ！！』

ガラッゾが声なき雄叫びを発しながら、進路を塞ぐ瓦礫の山へと突っ込んだ。そして、ティアナの予測通りに、ＧＮフィールドという強固な殻に包まれたガラッゾが、瓦礫の山を吹き飛ばした。

「きゃあッ！？」

その一つが、ティアナの傍にまで飛んできた。ティアナは思わず、絹を裂くような悲鳴を上げた。

『……このまま一気にいくぞ、ガラッゾ！』

『Ｙｅｓ，ｌｉｃｅｎｓｅｒ！』

その悲鳴を後にして、左腕にヴィヴィオを抱えながら、ガラッゾが水路の奥へと消えていった。その後ろ姿を、三人のフォワード陣はただ茫然と見送ることしかできなかった。

――新暦７５年２月１２日：ユーノ・スクライアの拘束、及び聖王教会のクーデターと「高町ヴィヴィオの拉致」より以前の時間帯――

第6管理世界に住む、少数民族「ル・ルシエ」。ここはその族長が住むテント内であった。大きなテントの中には最低限の家具と布団があり、空間に僅かながらの生活感を持たせている。

「では、もう聖域から盗まれた物は返ってこん……と？」

「返そうにも、何分資金がなくてな……本当に、そちらには済まないことをしたと思う」

そのテントの元で、今、ル・ルシエの族長とスクライア族の族長――翁が、テーブルを境にして向かい合っていた。両者の両隣りには何人かの同族の人々がおり、各々がこの会談の行く末に神経を尖らしているようであった。

「謝って済む問題だと、そちらは本当にそう思っとるのか？」

「そうは思っとらん。これからも出来る限り回収するつもりだ」

テーブルの上に置かれたお茶は、既に湯気が立ち昇っていなかった。それがこの会合の長さを表している。そして、和睦の意味もあったはずのこの会合は……明らかに危ないバランスのまま、難航していた。

「そちらは全てを返却するのに、一体何年を費やすつもりなのだ！？」

「無論、早いにこしたことがないとは思っとる。だが、現状、今のスクライアは主だったスポンサーに死なれ、早くも食う物に困ってきとる。だから、もう少し待って……」

「待てないのだ、そんなに長くは！」

ドンッ！　族長の拳が、長机を叩く。その衝撃でお茶が零れるが、今の族長にはそれに構う余裕がなかった。足にお茶を滴らせたまま、

族長が続ける。

「あれは儂らにとって、聖王教会にとっての聖遺物のような物！
こうしている今もル・ルシエの者たちが、盗まれた物を奪い返す為にそちらに戦をしかけようとしているのだぞ！？」

「しかしですな……」

「とてもではないが、今月……遅くとも来月までには、耳を揃えて全てを返して貰わねば困る！　いくらなんでも、これ以上は族長である儂でさえ抑えられん！」

「……」

一気に捲し立てた族長は、息を荒くしていた。対して、翁は真っ白な髭を触りつつ、落ち着いた様子を崩さなかった。

「今回のことは、こちらのほうに非がありました」

翁が静かに口を開く。目の前の、族長の目を見たまま。

「ですので、今回のことはこれで勘弁を願いたい物ですな」

「……何？」

翁は族長の目を見えたまま、手を二回ほどパンッパンッと叩いた。それが合図だったのか、スクライアと思しき一人の青年がバインドで拘束されたまま、テントの中へと投げ入れられてきた。

「……これは？」

「此度の件の原因を作った者だ」

「そうか、こ奴が聖域から……！」

青年は見るからに怯えていた。ガチガチと噛み合わさる歯、ブル

ブルと震える体……しかし、それを見ても、族長は目に冷たい光りを宿し続けていた。

「ひっ……ひぃッ！？」

「なるほど、そういうことか。これで溜飲を下げろと、そういう事なのだな？」

「そう捉えてもらっても構わん。こやつの処分はそちらに任せるのでな」

「んなッ……お、オレは、ただアイツに言われて……」

青年の悲痛な言い訳。それを族長と翁は無視しながら、今回の会合の最終手続きを済ませていく。例え青年の声に泣きが入ろうとも、二人の手の進みは緩まない。ただ淡々と、決められたレールをなぞっていくだけ。

「今回はこれで何とかできるかもしれん。だが、そう長くは続かんだろう。即急たる返還をこれからも望むぞ、スクライアの族長よ」

「ふむ……できるだけのことはする所存だ。少なくとも、聖域から出土した物は全てそちらに返還する」

「ならば、今回の会合はこれにて……」

「うむ、終了じゃな」

「……お、オレは悪く、悪くな……」

壊れたテープのように、「悪くない、悪くない」と繰り返す青年。その両腕を、族長の付き人が掴んだ。全力を、憎しみを込めて。

「ぎゃあああああッ！？」

青年の口から洩れる悲鳴。だが、ル・ルシエの人もスクライアの人も、その悲鳴を聞き流した。ル・ルシエの聖域を荒らし、スクラ

イアに入らぬ問題を持ち込んだ青年は、もう両民族から見放されていたのだ。その現状を改めて思い知り、青年は深い、深い絶望を感じた。我知らず、目から涙が溢れてくる。それが滴り落ちて、足元の土に黒い染みを作る。

「た、助け……誰か、助けてくれッ！」

無我夢中に助けを求める青年。だが、誰もそれに耳を貸そうとしない。聞こうともしない。すでにレールは定められたと、そう言いたげに。

青年に助けは来ない。誰も青年の主張など聞いていないのだから、当然と言えば当然のことだ。

「誰か、誰か、誰か助け……て？」

不意に、青年の声に不可思議な声が混じる。それは少年のようでいて青年のような……そんな曖昧さを持つ声だった。それに一番驚いたのは、他ならぬ青年で……その変化に気付けた者は、まだ青年以外には誰もいない。

「な、なんだこの声……はははッ！？」

変化はそれだけに留まらない。言葉自体がおかしくなってきた。視界も心なしか歪んできている。心臓は先程と変わらずに鼓動を打つが、リンカーコアが活性化してきているような気がした。

そして、それは決して気のせいなどではなかった。

「ははは……ふふ」

「……うん？」

ここに至って、翁が漸く青年の変化に気が付いた。すでに変化を止める機を失っていたが。

「僕は、僕は……嗚呼（ああ）」

族長も青年の変化に気付いた。両脇を固める付き人も気付く。その時にはもう、青年の口元は三日月に裂け、目は虚ろになっていた。

「何処に行こうとして……イタノカナ？」

さっきまでの青年とは思えないほど、寒々しい声。それが言葉を紡ぐと同時に……一瞬でバインドを解除した青年が、すぐ近くにいたル・ルシエの族長へと、非殺傷設定を解いた魔法を放った。

「……ぐぅおおおおッ！？」

「族長ッ！？」

「き、さまぁあああああッ！！」

青年が放った射撃魔法は、族長の腹を大きく抉って、そのままテントの側面にぶつかった。眩しい翡翠の輝きが、視界を占める。

「嗚呼、嗚呼、嗚呼、嗚呼ッ！？　僕は、僕は僕は僕はッ！？」

族長が連れていた三人の付き人の内、一人は族長に回復魔法をか

け、二人が正気を失った青年へと襲いかかった。付き人たちは瞬時にデバイスをセットアップし、魔力を循環させ、魔法を発動しようとする。

しかし、その一連の動作は、今の青年にはあまりにも遅すぎた。青年は指をパチンッと打ち鳴らすだけで、魔力の循環と魔法の構成、発現を終わらせると、それをデバイスをセットアップし終えたばかりの二人の付き人へと放った。

それは何てことはない、ただの魔力弾だった。普通の魔力量で構成された、かなり基礎的な物だった。しかし、B・Jの構成すら終えていない二人に対しては、それは十分過ぎるほどの殺傷力を発揮する。

「ぐわッ!?」
「うお……あぁあああああッ!?」

魔力弾は二人の付き人の頭部を消し去った。いとも容易く、あっさりと。それを見て青年は紡ぐ。発する。疑問の声を、疑念の想いを。

自分が何モノなのか、それを唯知りたくて。

「一体何処に行こうと……何モノなんだろうかッ!?　ふふ、ふ、ふふふふふッ!!」

狂った声が、テント内に反響する。青年は付き人の返り血を浴びながら、ただただ嗤う、狂笑する。おかしくて、おかしくて、おかしくて……堪らないから。

（これは、一体……どういうことなのだ？）

青年がテーブルの上に陣取りながら、笑い声を上げている。その狂った姿を見ながら、翁は茫然としていた。

（気が触れたのか？　しかし、そんな前兆など……）

床にのたうち回っていた族長へ、青年が再び魔力弾を放った。その一撃でル・ルシエの族長は完全に絶命する。

（……これで、我らとル・ルシエの間に確執が生まれたな。……民族紛争、か）

テーブルにのり上がっている青年へと、翁の付き人の射撃魔法が突き刺さる。此方は非殺傷設定だった。直撃の衝撃で、青年の首がかくんっと傾く。

「ふふふふふふふふふッ！！」

パチンッ！　パチンッ！　……パパチンッ！！

「うおぉおおッ！？」

「ぎゃあああッ！？」

首を傾けたまま、青年が右、左、両方と指を鳴らす。音が鳴る度にバインドが、射撃魔法が、転送魔法が発動された。それによって、翁の付き人が最後の一人を残し、この場から消え去ってしまう。

「この……！」

「ふふふふふふふふふッ！！」

嗤い続ける青年、その後ろから、族長最後の付き人が青年に抱き付いた。体にはＢ・Ｊが構成され、殆ど空となっている青年の魔力では、それを突破することはできないだろう……

かに思えた。

「ふふふふふふふふふふふふーふぅーーッ！！　嗚呼、僕は何処に行こうとして……イタノカナァアアアアッ！！」

「ふおぉおおおおッ！？」

「族長、こちらに！」

突如、けたたましい嗤い声を中断させた青年は、自身の体を中心にしてテントの内を明るく照らした。青年のリンカーコアが体内で暴走気味となっているのが、その場にいる誰にも理解できた。だが、そこから先、これから起きることに関しては、まるで想像できなかった。

そして、次の瞬間には、ル・ルシエの族長のテントが内側から爆ぜていた。

……あの会合から数時間ほど経った今。スクライアの族長である翁は、全身に包帯を巻き付けた姿で、ル・ルシエ族からの使者を出迎えていた。使者は今にも掴みかかりそうな様子で、翁へと、ル・

ルシエの意思を伝えた。

「……これが、わが民族の意思です。決して覆ることのない、鉄の意思です！」

「……了承した。恐らくは、もうどんな謝罪も意味を成さんだろう。……スクライア族は、この宣戦布告を確かに承った」

「……ふんッ！　族長の仇、討たせてもらうぞスクライアァアアッ！」

「……」

翁に宣戦布告を伝えにきた使者は、肩を怒らせながら翁の病室から出ていった。その後ろ姿を見送ってから、翁は深い溜息を吐いた。重い重い……溜息を。

（青年が何モノかに操られ、自爆させられたと仮定すれば、全ての辻褄（つじつま）が合うが……そんな魔法を、儂は耳にしたことがない。……これは、ユーノの奴に任せるべきじゃな）

遠い目を病室の外に広がる砂漠へと向ける。スクライア族は今、第６管理世界の砂漠地帯に来ていた。そして、此処こそが戦いのステージであり、これから血生臭くなる場でもある。

（……もし、これが誰かの描いたシナリオ通りだったとすれば、儂らはただその手の上で踊らされていたわけじゃな。……恐ろしきかな、恐ろしきかな）

手元の机に置かれた貴重な水を口に含む。口の中の乾きが癒える。しかし、それは心の渇きまでは決して癒してはくれなかった。

（……さて、管理局はル・ルシエにつくじゃろうから、儂らは「A

―ＬＡＷＳ」にでも協力を要請するか。「ＣＢ」も現れるであろう戦場で、儂らスクライア族が生き残るには、最早それしかないのじゃからな）

遠い、遠い、遠い地を見つめる翁。その眼光は、力を失う寸前だった。翁自身も、すでに自分が限界に近いことは分かっていた。だからこそ、今の翁はこの紛争を終わらせた際には、自身の後釜に最も相応しい人物を、管理局からどんな手段を使ってでも呼び戻そうと、そう考えいた。

その人物の大きな背中を夢想しつつ、翁はしっかりと養生するために、瞼（まぶた）をゆっくりと閉じた。

その人物の顔は、終始、子どもの頃と変わらない笑顔であった。

【ハハハ……世界は全てお前の言う『そんなもの』で出来ているんじゃないか？

みな、気づかないふりをしているだけだ。『正義』も『理想』も所詮、誰かの思惑に過ぎない】

――のりちゃずけ様から、メタルギア・ゴーストバベルの将軍より

第66話　Coup d' etat and a meeting（後書き）

（……聖王教会のクーデターが起きた）

（ブリングは、ヴィヴィオを攫っていった）

（全ては、今のところ順調みたい……でも、想定外のことも起き始めている）

（スクライアとル・ルシエの民族紛争……まさか、これも「CB」が？）

（……いえ、あり得ないわ。そんなことをするメリットが、彼らには無いのだから）

（……もうライルの傷も癒えた筈。なら、この紛争にも彼は介入を……）

「……ライル、私は貴方とは戦いたくない。だから、せめて戦場で合わない事を、私は祈ります」

――アニュー・リターナーの独白より

第67話　Saved if I think of death（前書き）

【いつか法を正すから、今は我慢して死ねって言うのか！】

――EXAM様から、『テイルズオブヴェスペリア』のユーリ・ローウェルより

第67話　Saved if I think of death

――新暦75年2月14日――

同年2月12日に勃発した「ル・ルシエ族とスクライア族による民族紛争」は、その日の内に次元世界中に知れ渡り、その次の日には、管理外世界から成る「A－LAWS」の耳にも届いていた。現に、ここ第97管理外世界の「日本」東京におけるあらゆるマスメディアのトップニュースは、その話題で独占されていた。

「ル・ルシエ族とスクライア族？　どうしてこんな少数民族の紛争が、ここまで大きく取り上げられるんだ？」

この広い次元世界でも希少な召喚士一族で、第一種希少個体の「真竜」ヴォルテールを守護竜として信仰する小数民族「ル・ルシエ」。

遺跡発掘を生業とし、古より表裏を含めた次元世界に、その名を知らしめる放浪の民「スクライア」。

この全く異なる二つの民族が、よりにもよってこの「CB」が存在する時代に紛争を起こすなどとは、管理世界のどんな知識人にも予測することができなかった事態であった。また、それがこのニュースの大々的に報じられる原因の一端をも担っていたのは、言うまでもない。

『……管理局は「ル・ルシエ」側につくことを表明しました。また、「A－LAWS」は「スクライア」側につくと、公式に発表して……』

『引き続き、この二つの民族が衝突するに至ったドキュメンタリーを……』

『……で、あるからして、この「スクライア」族というのは……で、「ル・ルシエ」族というのはですな……』

しかし、この二つの民族が衝突――いや、訂正しよう。正しくはスクライア族が何れかの民族と紛争を起こすことは、以前より確実視されていたことだった。

スクライア族は基本的に数世紀を経た古代文明を発掘するが、この発掘作業こそが今回のような問題を度々起こしていたのだ。今回のように、他の民族の聖地を荒らす事も、彼らにとっては初めてのことではなく、すでに何回か経験したことのある事態であったのだ。

にも関わらず、何故今回は「紛争」という行き過ぎた対立にまで発展したのか？　それは単に、和解目的の会合で起こった事件が、「紛争」という行為を行わせるほどに、両民族の溝を深めたからだ。

会合で起きた事件――それは、今回の事態を招いた根源でもある「聖域荒らし」を行ったスクライアの青年による「自爆事件」のことである。それによる被害者は、ル・ルシエ族側は族長とその付き人三人だったが、対して、スクライア一族は付き人二名が犠牲となっただけだった。

当然、そこに疑惑が生まれるのは避けようのないことだ。特に、族長を殺されたと思い込んでいるル・ルシエ族は。

「……で、もう一度聞くけど、ユーノ・スクライアがどんな人物か……さっさと口を開いた方が賢明だと思うけど、君たちはどう思う？」

「「……」」
「黙して語らず……ね。それが答えなんだね？　……ヒュドラ」
「……はい」

世界の潮流が、民族紛争一色に染まっている。それは、「日本」東京のスカイツリー、その最上階に当たる部屋にいるイノベイド、リジェネ・レジェッタすら例外ではない。人間より優れているイノベイドさえ、世界の潮流には抗えない。

しかし、同時に。彼はこの紛争をチャンスだと思っていた。あの「どんな情報も存在する」次元世界最大のデータベース、「無限書庫」を、たった一人で実用レベルにまで伸し上げた無限書庫司書長「ユーノ・スクライア」……彼を「ＡＩＬＡＷＳ」に引き込むチャンスだと、そうリジェネは思っていたのだ。

その為にも、リジェネはユーノ・スクライアについての情報を掻き集めようとした。いわゆる下調べ。管理局や聖王教会にいるスパイにユーノについて調べさせ、可能な限り、その人物像を把握しようとした。

そして、その際に。リジェネはユーノについてのある情報を得た。リジェネはユーノがこの第９７管理外世界に滞在していたという情報を、三日も経たぬ内に知ったのであった。

ユーノ・スクライアは「Ｐ・Ｔ」事件、及び「闇の書」事件において、この第９７管理外世界に短い間ながらも滞在していた経歴があった。その時に関係を持っていた一般人を、彼は今、容赦なく尋問していた。それは拷問にも等しい尋問で、軍人ですら音を上げるだろう。

「……痛かったら、声を上げるべき」

ゴキッ！　不快な音が、一般人の一人、アリサ・バニングスの腕部から聞こえてきた。それはヒュドラ＝T＝Hがアリサの右腕を骨ごとへし折った音であった。魔力で強化されたヒュドラの肉体は、生身の人間を簡単に破壊することができる。それは、リンカーコアを持つ者全てに言えることでもある。

「――ッ！？」
「アリサちゃんッ！？」
「……へ、平気、平気よ、このぐらいはね」
「なら、次はご友人の腕を折ってあげるよ。……アイシス」
「はい」

ゴキッ！　今度はアリサの隣りにいた月村すずかの左腕が折られた。ぷらぷらと、腕が力無く垂れ下がる。

「――ッ！？」
「すずかッ！？」
「どうだい？　これでも話してはくれないのかい？　だとしたら……残念だけど」

アリサの悲痛な声を聞いても、リジェネは薄ら寒い笑みを浮かべたままだった。アリサはそんなリジェネの精神に怖気を感じ、知らず、足を震わせた。

「君たちには死んでもらうしかないよ？」

リジェネの赤い瞳が、アリサとすずかの目を冷たく射抜く。顔は絶えず微笑みを浮かべているが、目は素人目にも笑っていないこと

が分かる。冷たい汗が額から顎に流れ落ちる。思考が恐怖で凍りつく。

「……友達を売るような下種な真似を、この私がするとでも思ってんのッ！？」

それでも、アリサは吠えた。命が危ないというのに、彼女はまるで獅子の如く……リジェネへと噛みつく。がぶりっと、その首元へ。

「……」

噛み付かれたリジェネは、眉毛を眉間に寄せ、傍目からも分かる不快感を抱いていた。自然、目が不機嫌そうに細くなる。

「……じゃあ、死んでくれるかい？　……ご友人」

「「……え？」」

リジェネがすずかの腕を抑えているアイシスへと、視線を向けた。それは合図だった。アイシスはそれに頷くと、手に持った拳銃で……

パンッ！

すずかの頭部を撃ち抜いた。何の躊躇も、躊躇いもなく。

「……は？」

すずかの後頭部から飛び散る脳漿。それをアリサはただ呆けて見るしかなかった。親友であったすずかの顔は、うつ伏せで見えない。されど、後頭部に空いた細い穴からは、灰色の物体が這い出て来て……

「……う、ぇえええええッ！」

あまりにもグロテスクな光景に、思わず嘔吐してしまうアリサ。床に敷かれた高級そうな絨毯に嘔吐物をぶちまける。それを冷ややかに見つつ、リジェネは静かに……有無を言わせない声で、アリサに聞いた。

「これでもまだ君の意思は変わらないのかい？」

と。天使のように優しく、悪魔のように冷たく。

「変わらないんなら……君の執事も家族も知り合いも、皆……そこにいるご友人の後を追うことになるよ？」

リジェネは、笑みを湛えたまま、嘔吐し続けるアリサへとそう尋ねた。

今の「Ａ－ＬＡＷＳ」には「敗北」以外の全てが許されていると言っても過言ではない。だから、人を一人殺したところで、彼らには何の影響もなかった。寧ろ、それぐらいの犠牲で有益な情報が一つ手に入るのならば安い物だと、そう思っている節があるぐらいだ。

そもそも、管理局・聖王教会・「ＣＢ」・「Ａ－ＬＡＷＳ」の中で、「Ａ－ＬＡＷＳ」は圧倒的に不利な立場にいるのだ。管理局や聖王教会との技術差は言わずもがな、「ＣＢ」に関しては量子演算

処理システムがあり、情報戦に限れば「Ａ－ＬＡＷＳ」は他の三組織と比べ、果てが見えないほど出遅れていた。

その穴を埋めるために、今は技術部を総動員して、「Ｍａｒｋ－Ｘ」という「灰色の福音」秘蔵の量子演算処理システムを再構築しているのだが……如何せん、『ヴェーダ』との性能差を一向に埋めることができず、完成には時間がかかりそうであった。

それまでの穴をさらに埋めるために、管理局の情報戦の要であるユーノ・スクライアを、スクライア族への援助を手札にして、何とか協力を取り付けようとした。無限書庫の司書長たるユーノが協力してくれれば、それだけでも大分状況が違くなる。

……はずであった。

「……ユーノ・スクライアが拘束された、ね。どうやらラルゴ・キールはこちらの手札を摘みにきたみたいだ」

ただっ広い会議室。その中央を陣取るようにして、その三人はいた。リジェネは革張りの椅子に腰かけながら、目の前の少年少女へと、先程判明したばかりの事実を報告した。その顔には疲れが見え、心なしか眼鏡がずれ落ちているような気がする。

「でしたら、どうします？　今のところ、『ヴェーダ』に対抗できるのは無限書庫だけですよ？」

その隣りにいる少年――ロベルト＝コーナーは、父譲りの赤茶色のスーツを着て、この会議に参加していた。後ろの方には護衛としてザ・サムライが控えている。

「……（コク）」

また、そのさらに隣り、リジェネとロベルトのちょうど中間の向かい側には、「オルレアン・ナイツ」という強力な戦力を有する『エンデ』ジャンヌが、首だけを動かして意見を主張していた。こくっ。首が傾げる度に、右目の封印帯が僅かばかりずれる。それをジャンヌは手慣れた様子で元の場所にまで戻した。

「……悪いけど、こっちから打つ手はないね。精々、「Ｍａｒｋ－Ｘ－Ｚ」の開発を急がせるくらいかな、できるのは？」

「……あの、「Ｍａｒｋ－Ｘ－Ｚ」の完成は何時頃になる予定ですか？」

「……（？）」

ロベルトの遠慮がちな声。首を横に傾げるジャンヌ。リジェネは息がぴったりな二人を視界に収めつつ、ありのままの現状を伝えた。

「……いくら「Ｍａｒｋ－Ｘ」を造った基礎技術と僕の知識があっても、完成するのは……そうだね、どんなに早くても、あと一ヶ月以上はかかると思う」

「……最速で一ヶ月ですか。微妙ですね。それまでの間に、民族紛争は終結しているんじゃないですか？」

「……（コク）」

ロベルトとジャンヌの懸念。それは常識的に考えれば、入らぬ心配であった。民族紛争とは即ち戦争であり、それが一ヶ月以内に片付くなど、本来ならば「ありえない」と断言できる。

しかし、幸か不幸か、この世界には紛争を根絶すると主張する組織があり、ヘタをすれば一夜の内に戦争が終息してしまう可能性す

らあった。オーバーSを何体も保有する「CB」。その戦力たるや、まさに一騎当千の悪鬼ばかりで構成され、たった一機だけでも戦局を覆せるGNデバイス「ガンダム」は、今では次元世界中で恐れられている。

この世の「悪」そのものの化身として。

「……それは僕にも分からない。分からないけれど……長引く可能性は高い。何て言ったって、初めて僕達と管理局、それに教会が同時に参戦するんだ。これだけの大規模な戦闘は、いくら「ガンダム」とはいえ、そうそう簡単には鎮圧できやしない」

「……次元世界三大勢力に、最悪のテロ集団。これだけの役者が揃っての戦争なんて、正直、今でも信じられません。四年前の悪夢でさえ二大勢力と「CB」だけだったのに……」

「……（……おなじく、信じられない）」

「でも、これは現実だ。現実に起こっていることなんだ。ここで尻込みをされても困るよ、お二方？」

「それは絶対に」

「……（……ありえません）」

ロベルトの覚悟に満ちた声。ジャンヌの声なき声。広い会議室に、両者の声が響き渡る。その返事に満足したリジェネは、会議を終了させると、そのまま開発室へと急いでいった。足取りは軽く、今にもスキップしそうな勢いで、会議室から出ていくリジェネ。それを見てない事にしたロベルトとジャンヌは、久しぶりに会った懐かしい知り合い通し、互いの視線を絡ませ……

「よし、では私たちも訓練室に出向くぞ、主人（あるじびと）よ。……何、そんなに怯えなくとも、今日の訓練は軽めの物だ。だから、安心して訓練を……」

「嘘だッ！」
「よし、準備はできたな？　では行こうか」
「アレ？　もしかして無視された？　無視されたんでしょうか、これは？　……そこを引っ張っちゃらめぇえええええッ！？」

……ることなく、サムライによってあっさりとロベルトは訓練室という名の地獄の果てに連れて行かれてしまった。その姿はさながらドナドナの子牛のようであり、涙を拭わずにはいられなかった。

「……（……）」
「……ジャンヌ様？　会議はもう終わりになって……ヒッ！？」

さて、もう一方の置いて行かれたジャンヌといえば……感動的になるはずだった再会をぶち壊しにしてくれたサムライに対し、殺意にも等しい感情を抱いていた。麗しき童顔が修羅顔へと変貌する。それを目撃した「オルレアン・ナイツ」の騎士団長は、恐ろしさのあまり、腰が砕けそうになった。

漆黒の宇宙空間に浮かぶ、巨大なラグランジュ3。そこで今、スメラギ・李・ノリエガとアレルヤ・ハプティズムがスメラギの自室で酒を酌み交わしていた。ちなみに、この時点でアレルヤの顔には

朱が差していた。

「……スメラギさんはこの紛争をどう思いますか？」

「どう思うも何も、これは明らかに誰かが作為的に起こした紛争よ。じゃなきゃ、スクライア族とル・ルシエ族が戦争するなんて、ありえないもの」

アレルヤのコップにも注がれている琥珀色のアルコール。それを一気に煽りながら、スメラギは赤くなった顔でモニターを見る。モニターではツインテールのアナウンサーが健気な様子で今日のニュースを伝えていた。傍らには一本の長ネギがある。

「そもそも、あの自爆事件がおかしいのよ。どうして『ヴェーダ』はあんな幇助行為を見逃したのかしら？　噂では、「ラジエル」とかいうエージェントが絡んでいるらしいけど……」

「それは……僕にも分かりません。イオリア・シュヘンベルグは何て言っていたんですか？」

「イオリアさんは今コールドスリープ中よ……多分、あと何週間かは目覚めないわ」

「……二百年もの時を生きた反動、ですか？　でも、よりにもよってこんな時に……」

「ええ、そうね。でも、弱音は吐いていられないわ」

もう一度、手の中のコップを空にするスメラギ。その動作にはどこか苛立ちが見て取れる。しかし、それを飲み下すように、スメラギはさらにもう一杯、酒を煽いだ。

「私達は、「ＣＢ」。世界から紛争を根絶する組織。……ここで立ち止まっているわけにはいかないんですもの」

「……ですね」

アレルヤが静かに苦笑する。そして、彼もまた覚悟を決めたように、手元のグラスの酒を一気に飲み切った。からんっと、グラスの氷がぶつかり合って音を出す。アレルヤはグラスをテーブルに置くと、そのまま真剣な表情でスメラギの顔を見た。

「……この紛争は、恐らく四年前の悪夢よりもさらに過酷な物になります」

「えぇ」

「もしかしたら、これ以上の悪についていけなくなるかもしれません。無論……この僕も含めて」

「……えぇ、その可能性は高いわね。それも、かなり」

「それでも、僕達はこの戦争でも「悪」を振る舞わなければならないのですか？　世界の為、人類の為に？」

「無論よ。それが戦争根絶へと至る道なんですもの。それを成し遂げようとする意思がないのなら……アレルヤ、私は例え貴方でも、引き止めはしないわ」

「……そこは、せめて引き止めると言って欲しかったですね」

先程までの真剣な表情から一転、苦笑いを浮かべたアレルヤは、その質疑応答に満足した様子で、体を翻し、スメラギの自室からすたすたと出ていった。足取りはふらふらのスメラギとは違い、しっかりとした物だった。

「……引きとめたいに決まっているでしょう」

扉が閉まり、アレルヤの背面が見えなくなってから呟かれたスメラギの独り言は、アレルヤの耳に届くことはなかった。分かっていたことだったが。

「……それで、貴方は何の用なの、「ラジエル」？　何か話し合わないことでもあったのかしら？」

スメラギが酒瓶の転がるテーブルへと体を向け直した。その際に、「ＣＢ」の制服の上からも分かるおぱ～いがぷるッと揺れ動いた。モニターでは未だに美しいアナウンサーがニュースを読み上げていたが、その隅には、「Ｓｏｕｎｄ　ｏｎｌｙ」の文字が画面上に綴られていた。

『うむ、ある』

青年のようで少年のような声。それがアナウンサーの美声を遮って、モニターから発せられた。その高いようでいて低い声に、スメラギは思わず眉を寄せた。

スメラギはその声に聞き覚えがあった。そして、この声は明らかに「ラジエル」の物ではなく、そのユニゾンデバイスの物であった。

「……って、どうして「ラジエル」の回線でセファーが連絡を寄こすのよ？　貴方には貴方の回線があるんだから、そっちを使いなさい」

『そうはいかん。これは吾輩のロードたる「ラジエル」の伝言。吾輩の回線などでは、誤解を招く可能性』

何時も通りの、変な喋り方。スメラギは溜息を零しながら、赤い顔でセファーに言う。

「……じゃあ何？　それは「ラジエル」からの伝言ってこと？」

『然り』

「……で、その内容は？」

『うむ……ロード曰く、「今は身動きが取れない」とのこと。故に、情報提供は吾輩が行う。また、「マテリアルズ」はスメラギ・李・ノリエガの指揮下に入る、という』

「……それで全部？」

『うむ、然り』

スメラギはそれを聞き、深い溜息をついた。伝言の内容は彼女にとって望ましくない物だった。「マテリアルズ」という優秀な戦力を自由に動かせるのは幸いだが、それよりも、『ヴェーダ』ですら入手できない情報を持ってくる「ラジエル」が、今この重大な時に動けないのは、スメラギにとっては途轍もない痛手であった。

戦術予報というのは、如何に戦場の情報を収拾できるかによって、その精度を著しく変化させるものだ。そして、「ラジエル」が持ってくる情報は、スメラギの情報請求に完璧に答える代物ばかりであった。故に、落胆は大きい。

「……一難も去らぬうちに、また一難がやってきたわね。正直、お酒がなかったらやってられないわ。刹那もまだ戦線に復帰できないし……セファー、ちょっと愚痴に付き合ってくれ……」

『吾輩もそう思う。では、さらばッ！』

「……相変わらず、逃げ足だけは速いのね。いいわ、それならいつぞやみたいに、ボロ雑巾になるまで使い倒してあげるわ、セファー」

セファーとの通信が切れたモニターを恨めしげに眺めるスメラギ。セファーは自分に死刑宣告が出されたことを、知る由もなかった。

……哀れにも。

スメラギは一杯のお酒を飲んだ。そして、また別の人物の通信を開く。

「……で、今度は貴方ですか、Ｄｒ．スカリエッティ？」
『おや？　その反応だと私以外の何者かの通信を、さっきまで受けていたような印象を受けるが……ちなみに、誰と通信していたのかね、Ｍｉｓｓ．スメラギ？』
「セファーからです。内容は「ラジエル」が動けないことと、「マテリアルズ」が私の指揮下に入ったことでした」
『ふむ、あの「アーカイブ」よりも詳細不明な「ラジエル」がか……にわかには信じられないね。裏でコソコソしているのでは？』
「その可能性も勿論ありますが、今回に限っては恐らく懸念しなくても大丈夫でしょう。「ラジエル」の私兵たる「マテリアルズ」を、一時的とはいえ、私に預けるんですもの。やはり、「ラジエル」は本当に動けない状況にあると推測できます」
『ふむふむ……一理あるね、それは』

モニター一杯に顔を映すジェイル・スカリエッティを、スメラギは半分呆れがちに眺めていた。酒が入っていても、スメラギは彼のテンションにはついていけなかった。

『ま、それは置いといて、私の成果を発表したいのだが……時間は大丈夫かね？』
「えぇ、大丈夫です。しかし、早めに終わらせてくれることを望みます」
『では、簡潔に述べるとしよう。……完成したぞ、「メメント・モリ」が』
「……ッ！？」

その報告を聞いた瞬間、スメラギが驚きで椅子から飛び上がった。その目は大きく見開かれている。信じられない、という心の声が、スカリエッティの耳に幻聴として聞こえてきた。

「……そう。遂に完成したのね、「メメント・モリ」が」
『ああ！　それでだな、設置場所についてだが……』

嬉々として語り出そうとするスカリエッティを抑え、スメラギは予め決められていた設置場所のデータを表示した。

「第６管理世界のこのポイントにお願いします。勿論、光学迷彩を施した状態で」
『……了解した、Ｍｉｓｓ．スメラギ。願わくば、この兵器が使われぬことを私は願うが……使う時には、最大の効果を発揮する場面で使用してくれたまえ』
「分かっているわ。何と言っても、この「メメント・モリ」で私達「ＣＢ」は、本当の意味で人類共通の敵になり、世界から人類同士の争いを無くすんですもの」

これからだという語りを邪魔され、不愉快そうにしているスカリエッティを、スメラギはスルーした。今はもう彼に構う暇すら惜しいのだ。「メメント・モリ」が開発された今、世界から戦争を根絶するために行うべき行動は、飛躍的に増えてしまったのだから。

到来する忙しさ、それに比例して見えてきた「統一」への道程。自然、お酒を口に含む。期待と緊張で乾き始めた口内を潤わせる為に。

「死を想え」、その言葉の通りに……ね」

そして、夜は明けてゆく……

【一人を殺して千人を恐怖させよ。
”力”を抑制する”力”……それが我々です】

――鴨川秘様から、『Ｒｅｄ　Ｒａｖｅｎ』のカルロ・スカルラッティより

第67話　Saved if I think of death（後書き）

（……Ｄｒ．、本当にこれでよかったのでしょうか？）

（太陽光と魔力を複合させて稼働する新規のＭ．Ｓ……それを参考に、太陽光とＧＮ粒子を複合して使用できるよう設計された「メメント・モリ」）

（その威力は、たった一発で艦隊を壊滅させるほど）

（しかも、飛距離は衛星軌道上から地表に撃てるほど長い）

（……こんな大量破壊兵器を作って、本当に良かったのでしょうか、Ｄｒ．？）

（私は……とても不安です。それに、妹たちのことも……）

「……Ｄｒ．」

――ウーノの独白より

幕間―7（前書き）

【正義とは勝者の大義のことでしかない。
たとえそれがどんなに歪んでいても、だ】

――零夢様より

幕間―7

――新暦75年2月22日――

『調子はどうだい、ブシドー？』

『絶ッ好ッ調であるッ！！』

ここは、第6管理世界の「アルザス」という土地、その中でも滅多に人が寄り付かないことで知られる、山岳地帯の一画である。そこには今、倒れ伏した多数の人々と、尊大な態度で直立する黒き武士がいた。体の所々のパーツが照りつける日光を白く反射させている。

「なん……だ、これは？」「黒……鬼？」「馬鹿な、まだ戦争は始まっても……！」

多数の人々の、命弱々し虫の声。それらは一様に現状を否定しようとしていた。彼らの目の前に聳え立つ、漆黒の武士があまりにも信じられないから。

『素晴らしいスピードと剣だ！　さすがは我が親友、私の所望にここまで応えてくれるとは……！』

『喜んでくれて何よりだよ。それで、まだ何人か生き残っているけど、模擬実戦、まだ続けるのかい？』

『無論のことッ！　この程度の戦闘では、未だこの「素戔男（スサノオ）」の真価を見ることができんッ！！』

『それには同意しますよ、ライセンサー。少なくとも、私の「力」をこの程度だと思われたら心外です』

『よく言った、よく言ったぞ素戔男ぉおおおおッ！　それでこそ、

我が相棒なりッ！！』

いきなり、漆黒の武士――素戔男が態勢を低くした。腰部から突き出たサイドバインダーから赤橙の粒子が吹き荒れ、手に持つ短刀と長刀とが重なりあっては、耳障りな金属音を奏でた。

そして、飛翔――するのとほぼ同時に、援軍として到着した魔導師部隊、その何人かを斬り裂く。視認させるのも不可能な、超速度でもって。

『切り捨て、御免ッ！』

超速度のまま、旋回。次いで、双剣を一閃させる素戔男。Bランク魔導師がまた一人、地面に倒れ伏した。命までは取っていないものの、早急な手当てが必要なのは一見して分かることだった。

「くそ……撤退！　撤退ぃいいいいッ！！」

援軍に着たはずの管理局の部隊が、ものの一分も経たぬ内に撤退しようとする。だが、彼らにはそれ以外の選択肢がなかった。何故なら、その僅か一分の間に、素戔男によって、部隊の半数近くが戦闘不能に追い込まれていたのだから。

『ふん……撤退か』

『どうします、ライセンサー？』

『背中を見せる敵を斬るのは、性に合わん。今日はこのぐらいにしよう』

『……ライセンサーがそう言うのでしたら、私も異論はありません。もう十分「力」も魅せ付けたでしょうし』

『それじゃあ、こっちに帰投してくれ。あと、今回の実戦データを

こっちに送ってくれないかい、スサノオ？』
『了解です、マイスター・ビリー。データを編集してからそちらに回します』
『頼むよ』

魔導師たちが、よろめきながらその場から立ち去って行くのを黙って見る。情けない姿だとは思わない。それは確かに敗者の姿だが、それを言えばブシドーもまた……

『無様ですね、力無き物が逃げ出す姿は』
『……ノーコメントだ』

ドンッ！　素戔男が地面を砕く勢いで垂直に飛び上がる。轟く破砕音に魔導師たちは怯えた表情をし、それを素戔男は「惨め」の一言で評した。ブシドーの複雑な心境を理解しないまま。

『……だが、この力があれば、私は「ガンダム」とも、「剣士」とも戦える！　ふ、ふふ……ハーッハッハッハッハッ！　首を洗って待っているがいい、「剣士」！！　我が宿敵よッ！！』
『そうです、この私の力なら「剣士」とだって互角以上に戦えます。攻撃力、スピード、奥義……私の力は、すでに「剣士」すら凌駕していますので』
『うむ、その通りッ！　その通りだ、素戔男ッ！　我が相棒よッ！！』
『Ｙｅｓ，ｌｉｃｅｎｓｅｒ』

ブシドーの高笑い。素戔男の冷静な声。腰のサイドバインダーから放出される粒子――疑似ＧＮ粒子は、その勢いを減衰させずに、素戔男へと推進力を与える。

それによって、昼間の空に描かれる一条の赤橙の線。その先頭に位置取る素戔男は、「剣士」と戦う未来だけを見ながら、空を飛んでいく。忌まわしき過去を、忘れることのできない侮蔑を突き離そうとでもするかのように、素戔男は真っ直ぐに、超速度で飛んでいく。

自分は戦うことしかできぬ武士だと、そう思い込みつつ。

刹那・Ｆ・セイエイは落ち着くために、深呼吸をした。すぅー、はぁー。すぅー、はぁー……緊張で狭くなっていた視界が、一気に開ける。その状態を維持したまま、刹那は覚悟を決めて頼み込んだ。自身が最も信頼するＧＮデバイス……Ａ．Ｉ「ＥＸＩＡ」に。

「……頼む、エクシア。ここはオレとＯライザーだけで話させて……」

『Ｉｔ’ｓ　ａｎ　ｉｍｐｏｓｓｉｂｌｅ　ｔｈｉｎｇゥーーッ！！』

だが、その願いは言い終わるよりも前に断られた。それも、鬼気迫る様子で。それでも刹那はしつこく頼み込んだ。話せば分かってくれると、そう信じて。

「分か」
『りません、マイスターと女狐臭がするＯライザーを二人っきりにするなんてッ！　そんなことは、このエクシアには、エクシアには……理解不能なのですッ！』

エクシアはまず話から聞いてくれなかった。一考することさえなく、マイスターたる刹那の要望を却下する。その声色からは、刹那よりもさらに必死な様子を見て取ることができる。余程刹那とＯライザーを二人っきりにしたくないらしい。

「……Ｏガンダム、お前からも何か言ってくれないか？　とてもではないが、これでは……」
『Ｙｅｓ，ｍｅｉｓｔｅｒ。……エクシア、貴方はマイスターを困らせているという自覚を……』
『クーデレのＯガンダムは黙っていて下さい！　あの気配を感じ取れない程度にしかマイスターを慕っていない貴方に、エクシアの気持ちが分かるわけがありませんッ！！』
「……Ｏガンダム、あの気配とは一体……いや、それよりも、クーデレとは……」
『え、え、……エクシアぁあああッ！？　あ、貴方は一体何を口走っているのでしょうかッ！？　私が、この私がクーデレですってッ！？　そんなこと、奇跡や魔法でもない限り、あるわけが……』
『あるからエクシアはＯガンダムも女狐だと思っているのですッ！　ユーアー女狐、イッツア確実なのですッ！！』
「……？」

刹那は割と本気で首を傾げた。「クーデレ」なる単語の意味に。その間にも、二機のＡ．Ｉによる言葉の応酬が激しくなっていくが、思考の渦に囚われた刹那はそれに気付かなかった。

『言っていいことと悪いこと……その分別すら、貴方は判別できないのですか！　私がクーデレなんて、そんな……それでは、私がま、ま……マイスターに想いをつ、つ……募らせているように聞こえるではありませんかッ！？』

『事実を言って何が悪いんですか、Ｏガンダム！　エクシアはマイスターに関することは何でもお見通しなのです！　ですので、断言できます！　Ｏライザーは恐らくツンデレのＡ．Ｉであり、また、意中の相手はマイスターであるとッ！！』

『……頭は大丈夫ですか、エクシア？　一旦『ヴェーダ』にシステムチェックをしてもらった方が……』

『心配は無用です！　寧ろ、いいのですかＯガンダムッ！？　ライバルたる女狐がまた一人増えるのですよッ！？　本当にそれでいいのですかッ！？』

『……い、い……良いに決まって……います』

『そんな苦々しげに言われても、説得力はありませんよ、Ｏガンダムッ！！』

（クーデレ……クーデターのことではないよな？　では、クーとデレという単語に分ければ……駄目だ、とてもではないが理解できない。一体何なのだ、クーデレとは……！）

一人百面相をしている刹那を置き去りにして、二人の口論はさらにヒートアップする。

『ですから……分かって下さい、エクシア。私はッ……！！』

『だから、……ですね、……なんですよ、Ｏガンダムッ！！』

終わりが見えない論争は、その後も長い間、続いた。そして今日もまた、刹那はＯライザーと話すことができなかった。そのことに気付いたのは、決死の覚悟で突入してきたイアン・ヴァスティに言

われてからだ。その頃にはもう、就寝時間が迫ってきていた。

ちなみに、閑話休題だが、二人が口論をしている間に、フェルト・グレイスはちゃっかりと刹那と二人っきりで話していた。その時のフェルトの幸せそうな顔を、刹那もまた笑顔で……見返していた。

中央技術開発局の第一局長室。リインフォース?はその見慣れた汚いテーブルの上で、普通の人間の大きさになりながら、手元のキーを高速連打していた。画面は隅から隅まで数式で埋め尽くされ、リインが数字を入力するごとに、その形を変えていく。冷たくも美しく……

「……なのはさんは大丈夫でしょうか?」

「それは、分かりません。詰まる所、あの様子を見るに、相当堪えた模様。……不屈の心は、再び折られたと見るのが妥当だということ」

「……」

リインは思いだす。あの日、2月12日に起こった拉致事件を。

「J・S事件」の時と同じように攫(さら)われたヴィヴィオ、それを防げなかったなのはの、あの絶望した顔を。

（……ッ！）

無意識に、キーを打つ力を強くする。タタン、タタンと音が奏でられ、途切れないキータッチの音が部屋にこもる。いつもは騒がしいほど元気なリインも、ここ数日はめっきりと疲れ果てていた。

現在の機動六課を覆う憂鬱な空気は、何もヴィヴィオを攫われただけではない。それだけなら、寧ろ取り返す勢いで聖王教会へと抗議を申し込んでいただろう。

……そう、スクライア族とル・ルシエ族による民族紛争さえ起こらなければ。

「……」
「……」

キャロ・ル・ルシエ。ユーノ・スクライア。そのどちらもが、リインにとっては大切な人達だ。キャロは機動六課の一員だし、ユーノは彼女を造った一人であり、リインにとっては父親みたいな存在である。

それに、隠してはいるが、ユーノははやての……

「どうして……こんなことになったのでしょうか？」
「それを私に問うた所で、リイン、貴方は何かを得るのでしょうか？　詰まる所、私にもこんなことになった原因は不明だということ」

リインの声は悲しみに満ちていた。いつ涙を流してもおかしくはないほどだ。大切な人達の民族同士が争うのは、リインに胸が張り

裂けそうな悲痛を齎す。

しかし、リインには分かっていた。この流れがもはや止められないということを。世界はまるでそうなるべくしてそうなるように変動していくということを、リインは頭の中で理解していた。あの時の、「J・S事件」の時みたいに。

「……」

「……」

タタン、タタン……キータッチの音だけが、部屋に木霊する。二人は黙々と、現実から逃れるように、高町なのはにかけられた封印魔法「エンドレス・コア・シール」を、データ上で解除していく。

……その部屋には、なのはがいなかった。

「……見知った天井、だね」

何度か見たことのある、白い天井。それを見たなのはは、一言、感想を漏らすと、上体をゆっくりと起き上がらせた。体には白いショーツや布団がかけられ、薄い入院服が着せられていた。

辺りを一周、見渡してみる。殆どが白色の家具で占められたこの個室。なのははここに入って、すでに十日近くが過ぎ去っていた。日時が過ぎ去るのは早いね……そう思うのと同時に、あの日、入院することとなった日のことを思い出してしまう。

「……ッ！！」

言い様のない感情が、後悔が、なのはの心中をグチャグチャに掻き回す。あの日、ヴィヴィオと共に出かけ、そしてその時を狙っていたかのように現れた、聖王教会に所属する「ガンダム」……魔法が使えないなのはの目の前で、鷹揚（おうよう）とヴィヴィオを攫っていった「ガンダム」……！

「ガン……ダム……ッ！」

紫基調の、バイザーをつけた「ガンダム」、「角持ち」。そのヴィヴィオを攫って行った張本人のことを想い、なのはは知らず、歯を軋ませた。その顔には紛れもない殺意に近い感情が表面化しており、手に握られたシーツに醜い皺が刻まれる。

「ガン、ダム……！」

必ず護ると決めたその瞬間に、なのはが護るべき対象――ヴィヴィオを、攫っていった「ガンダム」。そんな相手に憎しみを持つなと言う方が無理難題だ。しかも、相手は近頃クーデターを起こし、騎士団の武力蜂起を容認させた、戦争状態の聖王教会……そんな組織がヴィヴィオを攫っていった訳など、考えるまでもない。

彼らは復活させる気なのだろう。彼らにとって神にも近い存在……即ち、聖王を。

「……ッ！！」

聖王とは、三百年ほど前の古代ベルカ時代の王の一人であり、長

く続いた戦乱に終止符を打ったとされる、聖王教会に祀られる人物のことだ。そして、高町なのはの義理の娘である高町ヴィヴィオは、その聖王の遺伝子を元に造られた、言わばクローンだった。

なお、クローンを作る技術は、すでにジェイル・スカリエッティとプレシア・テスタロッサという、二人の天才によって完成するに至った「プロジェクト・F」が存在している。この技術は管理局によって禁止されているにも関わらず、未だ引く手数多で、今なお厳然と、この世界に胎動していた。それによって生まれる被害者――悲劇を、同じくらい数多に生み出しながら。

「……待っててね、ヴィヴィオ」

だが、クローンといえど、元の人物と同じとは限らない……そう思っていた時期が、次元世界にはあった。しかしながらその幻想は、狂気のマッドサイエンティストであるスカリエッティにより粉々にされた。

スカリエッティは高町ヴィヴィオという素体に「レリック」という莫大なエネルギーを秘めたロストロギアを埋め込み、「レリックウェポン」という聖王と同じ兵器にさせると、その力をも聖王と同等――あるいは、超えていた可能性も否定できない――にさせた。つまり、三百年前の聖王そのものをこの現代に復活させてしまったのだ、彼だ。

もっとも。その時の聖王ヴィヴィオは、「J・S事件」の最終決戦時に、管理局が誇る「エース・オブ・エース」高町なのはと一騎打ちにて戦い、撃破されているが……

「必ず、迎えに行くからね……！」

それでも、聖王は聖王教会の象徴であり続けた。寧ろ、聖王教会内部には「相手が悪すぎた」という風潮すら見られた。もしこれが一般の魔導師なら勝手が違っていただろうが……次元世界の人々は「不屈のエース」高町なのはの経歴を知り過ぎていた。……いや、なのはが有名すぎたのであった。

若干九歳、それも魔法を習得して間もない頃。彼女はわずか二ヶ月の練習のみで、ＡＡＡ＋ランク魔導師と同等の戦闘能力を得た。しかも、その後に起こった「闇の書」事件では、闇の書自体とも一対一で戦い、最後まで生き残ることができた。当時でも現在でも最高クラスの魔導書を相手に、僅か八ヶ月の期間、魔法に携わっていただけの少女が生き残ったのだ。それだけでも、どれだけ彼女が異端な存在なのか……言うまでもないことだろう。

さらに、彼女は若干１２歳という異例の若さでオーバーＳの仲間入りを果たす。最年少の記録は八神はやての１１歳だったため、惜しくもその座を逃しはしたが、「歩くロストロギア」と称され、次元世界唯一のオーバーＳＳたる「夜天の王」と一年違いでオーバーＳの仲間入りを果たすのは、尋常のことではない。

しかも、彼女はその一年前に、大怪我を負い、あわや魔導師生命そのものをも危ぶまれていた時期があった。にも関わらず、彼女は表舞台へと華やかに舞い戻った。オーバーＳ、その輝かしき舞台へと。その決して折れぬ心に人々は敬意を表し、彼女に「不屈」の称号を贈った。

そんななのはだからこそ、今もまたなのはは舞い上がろうとしていた。ヴィヴィオを己が無力で護れず、また泣かせてしまい、その幼い心に傷を負わせ、なのは自身も大きな心の傷を負ったというの

に、なのはは顔を上げ、前を見続ける。

二つ名の「不屈」。その称号に相応しき姿で。

そして、その為の力――護る為、救う為の力も、再びなのはの元に舞い戻ろうとしていた……！

「へ？　これは……もしかして……！」
「え？　どうかしましたか、リイン？」
「……！」
「……？」

いきなり声を上げたリインを不審げに見つめる第１局長イリス＝ラビリンス。だが、今のリインにはそれよりも気になることがあった。画面を食い入るように凝視し、手元のキーを先程よりもさらに早く押していく。タタタタタタ……キータッチの音が一度も途絶えることなく、画面上の莫大な数式に数値を入力していく。それを黙って見ていたイリスは、何をしているのか怪訝に思いながら、ふと、気付く。

突如現れた、一条の光りに。

「これは……リイン！」
「はい！　これで……」

画面の中の数式が、目まぐるしく変わっていく。その動きは流動

的でありながらも、一つ一つの動きのどれもが洗練され、とても美しかった。……人によっては冷たいと思われるかもしれないが。

「どうですか～ッ！？」

タンッ！　最後のキータッチの軽い音が、部屋に反響する。リインが最後に入力した数値が、画面の中の数式を変容させていく。その中で、リインは確かに聞いた。莫大な数式と数字で構成された、重厚な城壁（プロテクション）が崩れ去った音を……リインは確かに聞いた気がした。

「「……や」」

僅か数秒と経たぬ内に、画面の中の数式が綺麗さっぱりと消え去った。それは「エンドレス・コア・シール」、その全てを解除した結果を示していた。これを目にしたリインとイリスは、思わず顔を見合わせ、大きな声で叫んでしまった。

「「やったーーッ！！」」

喜びのあまり、抱き合う人間とデバイス。その見ている先で、画面の中に「Ｄｅｌｅｔｅ　Ｐｅｒｆｅｃｔ！」の文字が浮かぶ。それを目にし、イリスとリインは大きな声でお互いを讃え合い、笑いあった。

（……なのはさん、やりましたよ！）

それをなのはが知るのは、もう少し先のことであった。また、なのはが戦場に復帰するのも、そのもう少し……先のことである。

世界はいつだって主人公を求める。もしくは、救世主という名の英雄を求める。

その主人公が今、ここに……復活しようとしていた。

【白とは、美しさと、他と混ざることを許さない孤独さを併せ持つ色である】

――ＥＸＡＭ様より

幕間―7（後書き）

（それにしても……素戔男の性能は凄まじかったです。あれなら、もしかしたらオーバーSSに到達したのではないでしょうか？）

（疑似GNドライブ搭載機「ジンクス？」、「アヘッド」の開発も順調ですし……GNフラッグの製作もあと少し……）

（だけど、「Ｍａｒｋ－Ｘ－Ｚ」は……量子演算処理システムを構築するのは……）

（……いえ、弱気になっちゃだめだ。時間はまだあります。大丈夫、完成させることができる……はず）

（……この民族紛争で、「Ａ－ＬＡＷＳ」は初めて「ＣＢ」以外でGNデバイスを使う事になりますが……管理局などはどんな反応をするんでしょう？）

（……僕は、彼女を護ることができるのでしょうか？）

「……ヒュドラさん、僕は貴方の力になれましたか？」

――ティーダの独白より

第６８話　疑惑（前書き）

注意！

ここから先は、展開の都合上、沢山の登場人物が亡くなる予定です。
それは、オリキャラや原作キャラも関係ありません。どちらも死んでしまいます。
また、中には鬱展開といったものも出てきますので、もしそれが駄目な方はUターンを推奨します。
……
それでは、以上の注意を読んでもこの作品を読んでやるぜ！　という気概のある方のみ、開幕です。

第６８話　疑惑

――新暦７３年――

無限と錯覚するほどの情報を内包する無限書庫。幾多の本が舞い、数多の情報が交叉しては新たな依頼をこなしていくその部署は、今から9年前に、たった一人の少年によって設立された部署だった。

無限書庫自体は時空管理局の本局が建設される前からあった……らしい。しかし、その詳細を知る者は誰もいない。恐らくは前最高評議会のメンバーなら知っているだろうが……彼らがそれを話すことは、終ぞなかった。

そこには何か因果関係があるのかもしれないが、今は置いておこう。今問題にすべきことは、どうして無限書庫に関わる部署が今まで設立されなかったかだ。

ありとあらゆる情報を蒐集する無限の書庫。その利用価値は天文学的数字となる。敵対組織の機密情報や危険なロストロギアの情報、または新技術の詳細や埋もれた黒歴史など、その用途は千万に分かれ、それによって齎される利益は最早計ることすらできないだろう。

ならば、どうしてそんな有能極まる施設を今まで捨て置いていたのか？　その理由は、実に単純極まるものだった。

つまり、それだけの施設を扱い切れる者が、少なくとも、管理局ができたこの７３年の間、誰もいなかったのだ。無限書庫の膨大すぎる情報は、人が扱うにはあまりにも多過ぎ、かつ複雑過ぎた。もしかすると、７３年前よりも遥か以前から、誰にも扱い切れなかっ

たのかもしれない。それだけの情報量が、無限書庫には蓄積されていた。

そんな無限書庫から目的の情報を引き出すには、チームを組んで年単位の捜索をしなくてはならなかった。かの高名なギル・グレアムとその使い魔ですら、『闇の書』の情報を十年以上かけて探索したのにも関わらず、その全てを引き出すことはできなかったぐらいだ。

まさに情報の墓場、宝の持ち腐れである。だが、そんな無限書庫にも、とある転機がやってきた。それがユーノ・スクライアの配属である。

ユーノはグレアム達が十年近くもかけて探し出した以上の情報を僅か数時間足らずで探し出し、さらには『闇の書』事件の解決方法をも編み出してしまう。その功績から彼は後に無限書庫に配属されるのだが、当時9歳でしかなかったユーノがそれを成し得ることは、間違いなく『異業』に属する行為だった。

即ち、ユーノもまた同年代の仲間たちと同じぐらい――あるいはそれ以上の――才能……または『異能』とも呼ばれる能力を持っていたということだ。三提督の再来とまで呼ばれる彼女たち三人に勝るとも劣らない才能を、ユーノは持っていたのかもしれない。

最も、本人は決してそうは思っていないようだが、それは無限書庫の働きが一考に評価されなかったことが原因の一つだろう。

元々、時空管理局は無限書庫が無くとも機能していたのだ。無限書庫が本格的に実働したからといって、そこに大きな変化が起こることはなかった。強いて言えば、仕事の能率が上がっただけで、表

立っての功績などは一切ない。

故に、陰口を叩かれることも多々あった。資金喰らい、無能置き場、役立たずの部署……そう侮辱されたことは、数え切れないぐらいある。上官に使えないと詰(なじ)られ、同僚には下っ端だと蔑まれたことだって勿論ある。その度にユーノは頭を下げ、お茶を濁したりし、無限書庫の存続の為に奔走した。

全ては、彼女たちの背中を支えるために。その為の力として、ユーノは無限書庫を存続させるため、多忙極まる仕事をこなし、塵にも等しい実績を積み上げていった。

それは今でも変わっていない。いや、変わったと言えば変わっているが、根幹的な部位に変化はない。ユーノは今も昔も彼女のために働いている。それはきっと、最後まで変わることはないだろう。

「……って、ちゃんと聞いとるんかい、ユーノ君？」

「はいはい、ちゃんと聞いていますよ。だから話を続けてよ、はやて」

「……何っか嘘臭いんやけど、まぁええぇ。それで話の続きやけど……」

沈みそうな暗色で照らされる無限書庫内。そこで何時も通り仕事をしていたユーノは、暇やからと言って遊びにやってきた（らしい）八神はやての相手も、仕事と並列してやっていた。はやては管理局の茶色い制服を着ており、それがはやての茶髪とあいまって、とて

も似合っているように見えた。あくまでもユーノ主観であり、他の人が地味だとか思っているかは知らないが。

ユーノは依頼されたノルマの仕事をこなしつつ、はやての愚痴にも近い言葉に時折相槌を打ったりしていた。その顔は幸せそうに崩れており、いつもの穏やかな笑顔とはまた異なる表情をしていた。

ユーノにとって、はやてと話をする時間は至福の時間であり、癒される時間でもあるのだ。暗い書庫に長い時間独りでいるせいではないが、昔から色々と無限書庫に通っていたはやての存在は、気付けばユーノの心の大きな部位を占めていたのだ。今ではもうなのはよりも大きいかもしれない。それほどまでにはやての存在は、ユーノにとって大きなものになっていた。

はやてはよくユニゾンデバイスや部隊長に関わる本を無限書庫から借りていった。その度にユーノははやてと雑多なことを話し合った。もしかしたら、ユーノが一番よく話をした相手かもしれない。それぐらいの頻度ではやては無限書庫に顔を出していた。

なのはと直接話をしたのは、もう数ヶ月も前のこと。だが、はやてとはその数ヶ月の間に何度も何度も会っては話をし、アドバイスをしていたりしていた。そして、そんな状態が数年も続くと、ユーノの初恋は風化して消え去り、その代わりのように新たな恋がその心に芽生え始めた。それを自覚したのは、今から三年前のこと。

その新たな恋の相手は、今もユーノの目の前で可憐な口を大きくあげながら、ハキハキと喋り続けている。

「でな、リインが言うんよ。『そんなに食べたら太りますよ～』って。乙女に向かってそれは失礼やと思うんやけど、ユーノ君はどう

思うん？」
「僕は太ったはやてもいいと思うけど？」
「……え？」

ポカンとするはやて。その表情すら、恋に狂うユーノには愛おしいものにしか見えない。だからついつい意地悪をしてしまう。最終的に自分が負けてしまうと分かってはいても。

「だって、太ったら太ったでおいしそうじゃない？」
「……へぇ～、そうなん？　ユーノ君はデブ専やったんやな。後で皆に言いふらしておくから、覚悟しいッ！」

ポカンとした表情から一転、蔑むような表情になるはやて。そんなに気にすることだろうかと、不思議に思ってしまうユーノ。

「乙女の純情を貶（けな）した罪……その身で存分に味わってもらうで！！」

気合の入った叫び。だが、それすらも愛おしく感じてしまうユーノは、きっと心の芯から恋という病に侵されているのだろう。自分で自分を客観的に見てもそう思ってしまう。

「はいはい、僕はデブ専ですよっと……ふぅ、これで午前のノルマは達成できたかな？　はやて、昼食はどうするの？　もしよかったら僕と食べにいかない？」
「……なんやかなぁ。ここまで華麗にスルーされると、さすがに私もショックを感じてしまうわ。で、昼食やけど……ユーノ君、私が作ったお弁当、一緒に食べへんか？」
「え、いいの？」
「ええよええよ。今日は多めに作ってきたし、二人ぐらいで食べてちょうどいいぐらいなんや。せやから……」

「じゃあ、頂こうかな？」

はやての誘いに笑みが堪え切れないユーノ。だが、それに気付かれることはない。何故なら、はやてははやてで自分の誘いに赤面し、下を向いていたからだ。その様子を見て、ユーノは自分に縁がないわけではないと思う。きっとそうだと、願ってしまう。

例え自分が――……

――新暦７５年３月１５日――

ふと、人の気配を感じて目が覚める。どうやら長い夢を見ていたみたいだ。見慣れた白い天井が視界の内に入ってきた。上半身を起こして布団から立ち上がるも、ユーノのいる独房室には何の変化も起きなかった。

「……懐かしい夢を、見ていたような気がするね。それはそうと、そちらから接触してくるなんて、珍しいですね、ラルゴ・キール最高評議会議員？」

「……ユーノ・スクライア元無限書庫司書長。貴様に聞きたいことがある」

しかし、独房室を覗けるガラスの向こう側には変化が起きていた。ガラスで遮られた向こう側にいたのは、ユーノをここに拘束した本人でもある伝説の三提督の一人、ラルゴ・キールその人であった。

「僕をここに拘束しておいて聞きたいことがあるなんて……随分と虫が良すぎるとは思いませんか？」

「どうすれば、無限書庫を以前のように使えるようにできるのだ？」

ユーノは厚顔無恥な要求に呆れた顔をしたが、キールは切羽詰まった顔をしてユーノの言葉を無視し、本題を口にした。どちらが監禁されているのか分からないぐらい、二人の様子は対照的である。

「……？　優秀なデスクワークを配置するんじゃなかったんですか？」

「そうしたさ！　だが、その結果がこれだ！　無限書庫の能率は、貴様が抜けると同時にガタ落ちしたのだ！」

「あぁ……それは災難でしたね。というか、そのデスクワークの人は本当に優秀だったんですか？　何人もいて僕程度の穴も埋められないなんて、無能もいい所ですよ」

「私の秘書官と優秀なデスクワークを２０人以上も送ったのだ！　なのに、無限書庫の能率は下がる一方で、資料請求すらまともにこなせんようになってしまったわ！」

「と言われましても……僕としては、どうして僕程度の穴を埋められないのか、不思議で仕方ないのですが……」

「いや、貴様には何かあるはずだ！　無限書庫を今まで通りに動かす秘訣のようなものを、貴様は持っているのだろう！？　それを教えれば、ここから出す事も考えなくはないぞ？」

「生憎、ここでの生活もそう悪くはないので、お断りさせてもらいます。それと、秘訣なんてものはありませんよ。僕はただ普通に仕

事をしていただけですし」

交渉に全く応じないユーノに、キールは苛立ちを感じずにはいられなかった。しかし、無限書庫の能率が下がり、管理局全体の活動に様々な支障が起きている今、そんなことを言っていられる状況ではない。出かかった怒声を呑み込みつつ、キールはさらに交渉を続けようとした。

ユーノはその姿に哀れみにも似たものを感じながら、その交渉を足蹴にし続けた。そして考える。なぜこうも必死になって交渉し続けるのかと。

その答えは、ユーノの頭脳にかかればすぐに弾き出された。

「……そうですか。つまり、貴方は疑われ始めたのですね？　貴方こそが「ＣＢ」のサードエージェントなのではないかと」

「なッ！？」

「スクライアに情報を流す可能性があると言って、司書長たる僕を拘束し、無限書庫を使えなくしたのではないか……これだけでも疑われる理由としては十分ですよね？　そうじゃないんですか、キール元帥？　いえ……」

「わ、私ではない！　寧ろ、貴様こそが……」

「……まだ言いますか。でしたら、この監視されている場ではっきりと申し上げましょう。貴方はバンクーバーのＶＩＰルームを保有しており、時折そこで公表できない会合を開いていますね？」

「むっ……」

「さらに、貴方は管理局で最高の地位を築いていて、しかも、かなりの高級取りだ。一部門の長である僕でさえ霞むほどの給料を取っておられるのでしょう？　無限書庫でちゃんと確認しましたよ。そして、サードエージェントはかなりの富と人脈、そして地位がある

のは、はやての報告書の通りです。……ほら、貴方に該当しない条件が、一体何処にあるというのですか？」

「そ……それは、貴様にも言えることではないか！？　そうだろう、ユーノ・スクライア！！」

キールの声に、焦りが見え隠れする。それが墓穴を掘っているようにしか見えないことに、キールは気付けない。その余裕は、目の前の青年によって奪われていたのだから。

「……一応言っておきますけど、僕には人事部の人との接点はありませんよ？　それに、僕はトレディアさんが「ラヴクラフト」だということを知りませんでした」

「それが証拠になるとでも……」

「あと、こう見えても僕は四年前の戦争で死にかけた経験があります。勿論、「ＣＢ」によってです。……しかも、「ＣＢ」は僕の大事な人たちを何度も傷つけ、殺しかけている」

ユーノの声には、静かな迫力がこめられていた。それが老獪であるはずのキールをも圧倒し、後退させ、思考停止にまで追いやる。その時のユーノの顔は、殺された時か大事な人たちを傷つけられた時のことを思い出したのか、若干苦しそうに歪んでいた。それがまたキールに疑惑を抱かせる。

「そんな組織に僕が加担していると思われること自体、僕にとっては不愉快極まりないことです」

本当に不愉快そうに吐き捨てるその姿に、彼はサードエージェントではないのかもしれないと、キールはそう思わずにはいられなかった。

「……で、話を戻しますが、総合的かつ客観的に考えると、どうしたって貴方以外に該当者がいないのですよ。それに、「ＣＢ」側にとって鬼門ともいえる無限書庫を封じたいという理由も考慮しますと……」

そして、

「……貴方こそが、「ＣＢ」のサードエージェントなのでは？　ラルゴ・キール最高評議会議員」

ユーノが放ったその言葉に、キールは苦い顔をするしかなかった……。

――新暦７５年２月２８日――

キールがユーノと面会する１５日前。その日もまた世界には戦いが溢れ、悲劇が生み出されていた。

紛争が始まって、早二週間ちょっと。その間に起こった戦闘は十を超え、その全てに「ＣＢ」は介入していた。

時空管理局と聖王教会、そして「Ａ－ＬＡＷＳ」という次元世界三大勢力による戦いは凄惨を極める過酷な戦争になったが、その上さらに「ＣＢ」が介入して、戦争行為を根絶しようとするので、その民族紛争は早くも泥沼化の傾向を見せていた。

そして、こう説明している合間にも、彼らは巻き起こる紛争に介入しては、戦闘を混乱させていく。

『このッ……よくも私のガラッゾに傷を！』

『ふはははははッ！　動きが遅いぞ、ガンダム！　それで全力のつもりかぁあああ！？』

『これがガンダムですか……素戔男の力によれば、大したことないですね』

今回の戦闘は「Ａ－ＬＡＷＳ」側と管理局側で起きた戦闘だった。「Ａ－ＬＡＷＳ」側はオーバーＳの素戔男とザ・サムライを軍勢の左右前面に置き、立ち向かう魔導師たちを尽く返り討ちにしながら快進撃を続けていた。

動きの速いイナクトとフラッグで牽制をし、鈍重ながらも高火力で砲撃できるティエレンで止めを刺す。その戦法を頑なに維持し続ける「Ａ－ＬＡＷＳ」は、オーバーＳのいない管理局の軍勢を破竹の勢いで撃破していく。

それは、「ＣＢ」が何時も通りに介入してきても同じことだった。介入してきた二機のガンダムは、管理局、「Ａ－ＬＡＷＳ」を分け隔てなく襲い始めるが、その攻勢も素戔男とサムライが出てくるまでだった。

『固いな……それに、凄まじく強い！』

「クックックッ……さぁ、斬り捨てられる覚悟はできたか、ガンダム！」

二人のオーバーSとの戦いは、例え同数のガンダムがいようとも、楽観できるものではない。寧ろ、墜とされる危険性さえ伴っていた。

今回の戦闘に派遣されたヒリング・ケアとリヴァイヴ・リバイバルは、緊張感漂うその戦場を、お互いが相対するオーバーSと共に駆けまわる。

『斬り捨て、御免！』
『きゃあッ！？』
『ヒリング！？　貴様ぁあッ！？』
「余所見をしている場合ではなかろうに！　竜……殺！」

一瞬の隙を突いた素戔男が、灰色のガラッゾの右腕を、一刀の元に切り飛ばした。それに悲鳴を上げたヒリングに気を取られたリヴァイヴは、次の瞬間、サムライによってその左腕を切り裂かれる。

ガデッサの左腕が、ガラッゾの右腕と同じ空を舞う。雲と同じ高度での空戦だったので落ちるまでには時間がかかるが、それを回収することは殆ど不可能であった。

なので、腕を疑似ＧＮ粒子に分解し、粒子だけを回収する。……自己修復機能がない疑似ＧＮドライヴでは、その行為はあまり意味をなさないが。

『クソッ……撤退するぞ、ヒリング！』
『私たちイノベイドが撤退するなんて！　そもそも、何なのよあの素戔男って！？　トーレの益荒男にそっくりだけど、それと疑似Ｇ

Ｎドライヴも含めて、どういうことなのよーー！？』

『それを私に聞くな！　だが、どうやら「Ａ－ＬＡＷＳ」は疑似ＧＮドライヴをいくつか確保したらしいな。全く……リボンズは一体何を考えて奴らを見逃したんだか……』

同じイノベイドたるリボンズ・アルマークに疑惑を抱きつつ、ガラッゾとガデッサは未だ続く戦闘が続く戦場から撤退していった。既に粒子残量が２０％も残っていなかったことも、撤退する要因の一つであった。

その敗者の後ろ姿を、腕を組みながら俯瞰（ふかん）していた素戔男とサムライは、その後ろ姿が見えなくなるのを確認してから、再び戦場へとその身を投じていった。黒い鎧武士と鉄色の竜人が、混沌とする戦場を圧倒的な暴力でもって征圧していく。

その様相は、力こそが、強さこそが至上だと、そう言おうとしているようだった。

この日の戦闘は、終始「Ａ－ＬＡＷＳ」側の優勢で動き、「Ａ－ＬＡＷＳ」は計６つもの戦闘を経て、漸く初黒星を飾ることができた。しかも、「ＣＢ」を追い払うというおまけつきでだ。作戦本部はその日、お祭り騒ぎのように浮かれていたという。

一方の管理局は、戦力を整えてきた「Ａ－ＬＡＷＳ」に危機感を抱きながらも、何ら対策を練ることができなかった。何故ならば、今の彼らは目と耳を一挙に塞がれた状態であり、一体何をどうすれ

ばいいのかすら、皆目、見当もついていなかったためだ。

その原因は無限書庫――より正確に言えば、ユーノ・スクライアの拘束と関係がある。

ユーノは無限書庫の情報網を駆使して、管理局の情報部を裏から完全に掌握していた。それこそ、情報部長と同等かそれ以上に扱われるほどだ。それはありとあらゆる情報が集う無限書庫だからこそできた所業だが、これもユーノに言わせれば彼女たちの為を思ってしたことで、大したことではないのだろう。

もっとも、ユーノが情報部を裏から操り、彼女たちへの風評をコントロールしなければ、機動六課設立など、夢の内で終わっていた事だろう。新部隊の設立ははやてが思う以上に上層部には好ましく思われていなかったのだから。

……ともかく、重鎮ともいえる立場にいたユーノが問答無用で拘束されたことで、情報部内にはかなりの混乱が巻き起こった。情報部は情報を扱う部署であるため、無限書庫の、その司書長であるユーノの凄さを肌身でもって知っていた。それこそ、ユーノの幼馴染みや仲間などよりも、遥かに知っていたぐらいだ。

そんな情報部でも一目置かれる人物が何の抵抗も許されずに拘束され、投獄されたのだ。提督と同等の地位で、かつ一部門のトップであるユーノを、ラルゴ・キールは疑わしいという理由だけで独房送りにした。

その行為自体は正しいように見えなくもない。だが、それは情報部内に疑惑の芽を植え付けてしまった。相応の地位に就いていたユーノでも拘束され、投獄されるのだ。もしかしたら、今度は自分が

投獄されるのではないか？　次は自分がサードエージェントだと疑われ、拘束されるのではないか……？

そういった疑惑に囚われた情報部は、もうまともに動くことすら儘（まま）ならない。加え、ユーノを欠いた無限書庫は以前と比べ半分近くもその能率を落とし、とてもではないが機能しているとは言えない状態にある。

そうして、管理局の次元世界一広大な情報網は、その大部分の機能を停止せざるをえない状況に陥ってしまった。「J・S事件」にてスカリエッティ陣営の機密を暴いた情報部と無限書庫。そこが一連の騒動により機能停止にまで追いやられ、その影響はこのスクライア族とル・ルシエ族の民族紛争にまで飛び火することとなる。

情報部や無限書庫から一切の情報が第一線――戦場に回ってこないのだ。そして、戦争とは情報戦でもある。当初優勢だと見られていた管理局は殆ど情報を持たないまま戦闘を行わなければならず、結果として、多大なる犠牲を出してしまうことになる。

向こうの作戦の一端どころか、戦場となる地域の情報すらまともに回ってこないのだ。寧ろ、それでよく４回も勝てたと言える。しかし、戦没者の数はすでに三桁の後半、そろそろ四桁に突入しようとしていた。

誰もがこれ以上の続行は無理だと考え始めた。この結果の原因を結果的にとはいえ作ってしまった元帥のキールですらそう思い始めていた。あまりにも犠牲が多過ぎるが故に。

しかし、管理局がここで引けば、さらなる戦禍が管理世界に降りかかるのもまた事実。詰まる所、管理局はもう引くに引けない所に

まで足を踏み込んでしまっていたのである。

特に、テロ組織である「ＣＢ」が愚直なまでにこの紛争に介入し続ける限り、管理局としては絶対にこの紛争から退くことはできなかった。管理局がテロ組織に屈したとなれば、その事実だけで管理局はその威信を失い、時空の法と平和は犯罪者たちによって蹂躙されるだろう。

それだけは何としても阻止しなくてはならない。その想いを胸に、魔導師たちは今日も戦いに臨んでいく。生死を賭けた戦場へと、平和を求める戦いの場へと。

……いつか明けるだろう空は、未だ闇を湛えたままだった。

「……そう、ついに完成したんだ」

『はい。試験運転も終わって、もう実戦にも耐えられます』

「ふぅん……じゃ、今からそっちに取りに行くから、ちょっと待ってて」

通信を切ったリジェネ・レジェッタは、満面の笑みを隠そうともせずに、第９７管理外世界の日本に建設された「Ａ－ＬＡＷＳ」の

開発局へと急行しようとした。

今にも歌い出しそうなほど、ハイテンションなリジェネ。それを不気味に思ったアイシスは、肩口で揃えた金髪を手で梳かしながら、恐る恐る、リジェネに声をかけてみた。

「……随分気分が良さそうだけど、何かあったの？」

「……ん？　あ、そうだ！　聞いてよアイシス！　ついに、ついに僕のガンダムが完成したんだ！」

キラキラキラッ！　そんな擬音が聞こえてきそうな、眩しい笑顔を向けてくるリジェネ。アイシスはそれを見て、これが本当にリジェネなのかと、疑惑を抱かずにはいられなかった。

アイシスから見たリジェネは、陰険、捻くれ、以外に短気等々……とてもこんな表情を浮かべるような性格ではなかったはずだ。だからこそ、思いっきり今のリジェネに引いてしまう。

「そう、完成したんだよ！　僕の、僕だけのガンダムが……あのリボンズを倒すための力が、ようやく……！」

リジェネは熱に浮かされたように、同じ言葉を繰り返していた。よっぽど専用のガンダムが完成したことが嬉しかったのだろう。アイシスはリジェネの奇行の原因に見当を付けると、そのままリジェネを放置した。

一緒に住むようになって、気付けば一ヶ月半も過ぎていたが、アイシスは未だにリジェネのことを理解できない時があった。例えば、今みたいな時がちょうどその時である。

だから、放置する。触れないでおく。それが自分を傷つけない、面倒なことに巻き込まれない方法でもあるから。

「ああッ、早くリボンズと鉢合わないかな！？　あの時に言った、ほぼ完成の域に到達した「ＴＲＡＮＳ－ＡＭ　ｓｙｓｔｅｍ」を見せて、あの傲慢ちきな顔を崩してやりたいよ！」

リジェネの憎悪すらこもった声が、入口のドアの向こう側に消えていく。アイシスは我関せずの態度で、手元にあった櫛で髪を梳かす。ボブカットの長さとはいえ、艶の維持が大変なことに変わりはない。

「そして、彼のガンダムを……よりオリジナルのガンダムに近づいた僕のガンダムで、徹底的に……叩き潰してやる！」

消えていった最後の声には、歪な感情が乗せられていた。リジェネは冥府に引き摺られるようにして、先程までいた部屋のあるビルから抜け出し、転送ポーターに乗り込む。

彼のガンダムを、冥府の番犬を得るために。

【未来は常に変化していくもの。
予想外の事も、見方を変えることも当然あるさ。
だから未来が見えることが当然になると、逆に見えない事がとても恐ろしく感じるようになる】

――鴨川秘様から、『ブラッディ◆クロス』の和泉より

第６８話　疑惑（後書き）

さすがに一話で二つの格言は選ぶのも大変になってきましたので、誠に勝手ながらも、一つにさせてもらいました。

もし、疑問点やおかしな点、誤字脱字、批判批評がありましたら、どうぞこの駄目作者めにそれらをぶつけて下さい。作者は叩かれて伸びる子、もしくは褒められて伸びる子ですので、遠慮なくぶつけて下さい！　ハァハァ！

あと、作者本人でも分からない点（抜けている所、忘れているネタ）がありますので、言われて初めて気付くこともあります。その際には速攻で物語を修正致しますので、もしそういった物がありましたら、是非とも伝えて下さいお願いします。

感想の返信は絶対に行います。ですがもう少しばかりの猶予を！

次回の更新予定日：２０１１年６月２５日

第69話　困惑

――新暦75年3月1日――

2月12日にクーデターが起き、武力行使をも辞さなくなった聖王教会。教会の騎士であったカリム・グラシアはその現状に嘆きつつも、今は聖王教会の暴走を止めることと、ヴィヴィオの奪還を目指し、日夜奮闘していた。

「う……うぅ～ん……」

昼ごろからずっと働きづめで、筋張ってしまった肩を軽くほぐす。その際に胸を張るようなポーズをしてしまい、少々おぱ～いを強調するような格好を取ってしまうが、生憎、ここには女性しかいないため、特に気にするようなことでもない。

気分転換のため、紅茶を一口啜る。その時にふと、カリムは自身の予言を何故か思いだした。

「……『死せる王のかの翼が法の大地の穹に消え去りし時、天上人が蘇る。天上人は目的を果たすために全てを敵にするも、その全てを退け愚直する。三つの無限と17の力、幾つもの箱と人、超人、そしてたった1つの法典だけを頼りに天上人は全てを破壊する。その先に……の……があると信じ』」

今にして思えば、この天上人は「CB」を指していたのだろう。聖王のゆりかごが墜ちたのと同時に表舞台に現れた組織は、彼らしかいないのだから。

「いくらはやての入院で気が動転していたとはいえ、これを無限書庫に送らなかったのは失敗したわ」

蘇った天上人――「ＣＢ」によって、左腕を肩ごと切り飛ばされた八神はやて。その報告に気を取られ、カリムは無限書庫にこの予言を知らせることをすっかり失念していた。それは後悔の念となって、カリムの精神をジクジクと攻め立ててくる。

それに耐えながら、カリムは頭を働かす。そして、聖王教会に寝返り、今はクーデターに加担しているＬｉｃｅｎｓｅｒ、ブリング・スタビティの情報を予言と照らし合わせてみる。

「力とは、恐らく「ガンダム」を指す言葉。１７という数字は、その数を示しているのかしら？　だとしたら、超人はイノベイドということ……？」

箱は母艦や拠点を指し、人はメンバーかマイスターを指している。それは事前の調査で判明したことだ。なので、まだ解明できていない所は……

「……でしたら、ガンダムはあと何機、新型を残しているのでしょうか？　三つの無限もまだ一つ、空いたままですし……」

現在までに明らかとなっているガンダムの数は、全部で１１機。つまり、あと６機は新型を持っているということか、「ＣＢ」は？

また、三つの無限に関しても、「無限の才悪」イオリア・シュヘンベルグと「無限の欲望」ジェイル・スカリエッティがそれに該当すると思われるが、だとしたら、残りの一つは……？

予言はまだ解明し切れたとは言えない。だが、解明されていない部位にはなぜか不吉な予感を感じずにはいられなかった。無限と力……そのどちらもが、「ＣＢ」の中枢を担うものであるような気がする。

「……嫌な予感がします。こんなことになるなら、予言を無限書庫に送っておけばよかったですね。今とはなっては向こうとコンタクトを取ることすら至難の業ですが……」

ブリングは言っていた。自分にはあるロックが掛けられていると。それによって本当に重要な事は話せないと。

それを今さらながらに悔やむ。「ＣＢ」に関してはまだまだ謎が多く、解明されていない点も数多くあるのだ。特に、電子データに関しては全くと言っていいほど残されていないため、ブリングたち裏切り者か、物質的な実物でしか情報を取得できないのは痛かった。

それも法典――量子演算処理システム「ヴェーダ」による情報操作のせいであり、かの無限書庫ですら「ＣＢ」の詳細を掴んではいない。

「……ハァ」

カリムは今の聖王教会と袂（たもと）を分けた騎士だ。他にも数千ほど、カリムと志を同じにするものが集まっている。

だが、戦える戦力はカリムとＡＡＡランク魔導師が二人、その他数百名ほどだけで、パトロンや下部組織なども極少数であり、とてもではないが、三大組織とは比べ物にならないほど矮小（わいしょう）な集団である。

現に、今もカリムが付けている帳簿はかなり切羽詰まったものになっており、これでは数ヶ月を凌ぐのも難しく、戦闘など以ての外だろう。

デバイスの整備費、怪我の治療費、情報屋への出費、大量の食費など……一回戦闘をするだけで、金は盛大に吹っ飛んでいく。三大組織が何度も大戦をできるのは、ひとえに莫大な資金と潤沢な戦力があるからで、カリムたちにはそれがない。

「分かっていても、辛いものね。こんなこと、聖王教会にいた頃は考えたこともなかったわ」

恐らく、戦闘はできたとしても一回か二回。それ以上になると、ほぼ活動資金が枯渇し、全く動けなくなるだろう。

カリムの付けている帳簿は、その現実をシビアに見せてくる。……溜息はついてもついてもつき足りない。

「ねぇ、そうでしょうシャッ……」

シャッハ、と言おうとして、気付く。彼女はもういないことを。彼女――カリムの秘書でもあったシャッハ・ヌエラは、「三つ目」によって殺されたことを、今、鮮明に思い出す。思い出してしまう。

カリムにとって、シャッハはとても大切な人だった。それこそ、カリムの義弟であるヴェロッサ・アコースと結婚してくれないかな？　と思ったりしたほどだ。

そんなシャッハを殺されて、「三つ目」が憎くないかと言えば、

間違いなく憎いと言える。だが、カリムはかつて間違いを犯してしまった人間だ。そんな人間が憎しみで力を振る舞えば、それはきっと悲劇しか生まないだろう。

いや……悲劇を生むしかないのかもしれない。憎しみの連鎖は人類に永劫の戦いを強いさせるほど、強固なものなのだから。

それを分かっているからこそ、カリムは己のオーバーSたる力を封じる。もう二度と15年前の過ちを、「一年戦争」における罪を犯さないために。

例えこの憎しみが永遠に残ることになろうとも、カリムは……

「……セイン、オットー、ディード。ちょっと出掛けてくるわ。後のことはよろしくね」

「「はい」」

「って、なに普通に返事してんのよオットー、ディード!? 今騎士カリムに抜けられたら、一体誰が帳簿を付けるのかと……」

「「お願いします、セイン姉様」」

「やっぱり私かいっ！ って、あぁ!? 待って下さい騎士カリムぅ～!」

カリムと一緒に仕事をしていた三機の戦闘機人――6番、8番、12番――に仕事を任せたカリムは、後ろから聞こえてくる泣き声に耳を貸さず、そのまま周辺の散歩に出かけていった。

（……）

……もし戦闘になれば、自分がきっと戦闘の中核になるだろう。この集団でオーバーSはカリムのみ。必然、指揮官はカリムとなる。

一番の実力者が指揮権を持つのは当然のこと。だが、カリムは戦えない。自分にそう制限を、制約をしてしまったから。ならば、他に適当な人物がいるかというと、残念なことに、誰もいなかった。

三人のナンバーズを見ても、彼女らはどう見ても指揮官向きではなく、他のＡＡＡランク魔導師にしろ数百名の魔導師にしろ、現場指揮を担当した者は殆どと言っていいほど、誰もいなかった。

何故なら、部隊の指揮官や有能な人物ほど、今の教会の方針に賛成していたからだ。しかも、今の教会には教会最強の騎士であるノア＝アンダーソンがおり、それに反発の意を唱えること自体、彼らには躊躇われた。

ノアは敬虔（けいけん）なる教会の信徒としても有名で、もし異端審問官などがいたら、彼こそが適任であろうと誰もが思うほど信仰深い人物でもある。その屈強な身体と溢れる大魔力からなる攻撃には、全盛期のカリムを除けば、教会の誰にも止められない。

そんな異端審問官に近い人物に逆らうことは、彼をよく知る騎士団長や部隊長にとって、絶対に犯してはならないタブーであった。逆らえばどうなるか……それは、火を見るよりも明らかだ。絶対に殺されるか半殺しの目に遭う。

（……やっぱり、管理局と提携した方がいいのかしら？　でも、今の聖王教会を敵対組織として認識している管理局が、私達を受け入れてくれるかしら？）

今の聖王教会は管理局に保護されていた聖王のクローン、高町ヴィヴィオを武力でもって強奪していた。聖王復活は教会が唱える至

上目的だが、管理局からすれば絶対に阻止したい目的でもある。

すでに聖王を巡っての交渉も行われたが、平行線のまま決裂し、そのまま戦闘をするにまで発展してしまっている。そんな中、果たして管理局が教会の騎士たちを受け入れてくれるのか？

……可能性は、決して低くもないが高くもないと言った所。最も、管理局との通信が繋がるまでにはもう少し時間がかかるので、その間に考えておこう。

「色々と、困惑しそうになってしまいますね。……そうでしょう、ヴェロッサ？」

「……義姉、さん？」

カリムは口を開けて驚いているヴェロッサを見た。いつもの白スーツをだらしなく着崩しているヴェロッサは、シャッハが死んでからまるで抜け殻のようになっていた。そんな義弟の心境を知りつつ、カリムは次の言葉を発した。

「貴方はいつまでそうやって腑抜けているつもりですか？　そんな姿をシャッハが見たらどんなに悲しむことか……そんなことも、今の貴方には分からないのですか？」

「……」

「貴方の心がどれだけ傷付いたのか……それは私には分かりません。しかし、それでも私達は立ち上がるしかないのです」

「……戦うために、ですか？」

「いいえ。生きるために、です」

ヴェロッサは下を向いたままだ。けれど、言葉は届いている。そう信じたい。

「何も、貴方に戦えと言っているのではありません。ただ、立ち上がって欲しいのです。今のように何もしないで座り込んでいる貴方が、自分の意思で」

「……けど、僕はもう、憎しみに囚われそうなんだよ、義姉さん？　僕は、どうやら「三つ目」を許せそうにない……シャッハを殺したアイツを、僕は……！」

「……その気持ちを忘れろとも、私は言いません。寧ろ、自分が囚われそうだと気付いた貴方に、私はそんな酷いことを言ったりはしません」

「じゃあッ！　……僕はどうすれば……！」

ヴェロッサは途方に暮れているのだと、カリムは思った。無理もない、家族同然であったシャッハを殺されたのだ。今こうしてカリムが普通に話せているのは、昔に同じような経験をしたからで、ヴェロッサにとっては初めての喪失だったのだろう。

自分の半身が亡くなるという痛み……それは、狂おしいほどの痛みだ。カリムだって気を抜けば、いつ憎しみに呑まれるか分からない。分からないが……

それでも、ここで立ち止まっていては何もできやしない。それに、こんな腑抜けたヴェロッサを、天に召されたシャッハに見て欲しくはなかった。

「ここに、ある知り合いの連絡先があります」

「……？」

「教会の方は私の方で何とかします。貴方は、この知り合いと一緒に「ＣＢ」のことについて調べて来なさい」

「なっ……！」

カリムの言葉に、絶句するヴェロッサ。これは、戦力外通告をされたのにも等しかった。面と向かってそう言われるとは思っていなかったヴェロッサは、困惑した表情をカリムに見せながら、カリムにどういうことかと問おうとして……

「そして、もしも憎しみを忘れることができましたら……その時は、私に力を貸して下さいね、ヴェロッサ？」

カリムは問われる前にそう言って、ヴェロッサの前から去っていった。

眩い日光、照りつける太陽、吹き荒ぶ熱波、吹き荒れる熱砂……

視界を埋め尽くす一面の砂、おぼろげな蜃気楼、広がる青空……

そんなまさに「砂漠」といった環境が、そこには限りなく広がっていた。そして、そこで「Ａ－ＬＡＷＳ」の幹部であるロベルト＝コーナーは……

「ゼエ、ゼエ、ゼエ……お、おに……しぬる……！」

「なんだ、もうへばったのか？　まだあと百キロは残っているぞ、主人(あるじびと)よ」

汗だくで死にかけていた。冗談でも比喩でもなく、本気で死にかけていた。

「さ、さむらい……さん。きゅ、きゅ、きゅうけいを……みずを……！」

「ふむ、そうだな……あと五十キロ走れば、水と休憩を約束しないでもない」

サムライによる鍛錬は、ロベルトを死に追いやるメニューで盛り沢山だった。今もこうして死にかけているのに、これでもまだ二人の鍛錬では軽い方である。

本当にヤバいものになると、もう死すら生温くなるほどの辛苦を伴う。実際、ロベルトはもう何度も川の向こう岸で彼の死んだ義父であるアレハンドロ・コーナーを見ていた。その時は本当に駄目かと思ったが、何とか生還することができた。

その際に人工呼吸をしてくれたサムライと目が合い、問答無用でまた義父を見る羽目になったが、それでも何とかギリギリで生きて返ってこれた。あの時ほど生きることの素晴らしさを悟った時はない。

「……ほんっとう、ですっかッ！？」

「……あぁ、多分な」

ロベルトの真剣な問いに、すっ、と目を逸らすサムライ。誰がどう見ても嘘だった。休憩も水も、サラサラやる気などないのだろう。

「……お、おにぃ……！」
「だから私は竜だと何回言えばいいのだ？」

ロベルトと同じ距離を走っている筈なのに、サムライはあまり汗も掻かずに余裕綽々とロベルトと並走している。長く艶のある黒髪が一房にまとめられ、ロベルトの視界をちょくちょく横切っていく。

ロベルトは訓練のし易いスポーティーな服装をしていたが、サムライは動き辛そうな巫女姿で走っていた。なのに、この差は何なんだろうとロベルトは思う。明らかに基礎体力が違い過ぎて、泣けてすらくる。

「……もう、だ……め……」

不意に目の前が暗くなり、次いで熱い砂の上に倒れる自分を認識するロベルト。倒れた際に口を切ったのか、口の中には砂と血が混じっていた。

「ふむ……クックックッ……まだ、ねる……やいぞ……びと？」

遠くなるサムライの声。ロベルトはその声を聞きながら、意識を手放した。その際に何度目か分からない義父との再会も果たす。

（あぁ……また会ったね、義父さん）

一面には先程の砂漠とは似ても似つかない綺麗なお花畑が咲き乱れていた。その匂いに誘われるようにして、ロベルトは川の中へと足を……

「……」

「……ふむ、少々やりすぎたか？　まあ、気にするでも無し。軟弱な主人が悪い」

サムライはロベルトが生死の境を彷徨っているというのに、全くロベルトのことを心配していなかった。１４歳という年には不似合いな筋肉を付けるロベルトの体はさっきから不規則な痙攣（けいれん）を起こし、傍目から見ても死にかけているというのに、サムライは自分だけ水を飲み、ロベルトの傍に腰を下ろして休憩していた。

サムライに言わせれば、これぐらいもこなせないロベルトが悪いのだろうが……ロベルトから言わせてもらえば、それこそ理不尽なのだろう。オーバーＳであるサムライの鍛錬についていけるもの自体、広大な次元世界といえど、恐らく数十人もいない。

それはサムライにも分かってはいたが……サムライは何時死ぬとも分からぬ身である。オーバーＳとして破格の強さを持っていようとも、戦場では何が起きてもおかしくはない。もしかしたら、たかだかＤランク魔導師にサムライが討たれるようなことも、あり得なくはない。

それが戦場なのだから。

「……ＤからＣ、いや、身体能力だけならＢランクにでもいけるか？　魔力は疑似ＧＮドライヴでどうにかなるとして……あとは、実戦経験でも積ませるべきか？」

だから、今伝えられることを出来る限り伝えようとする。ロベルトは間違っても才能豊かな魔導師ではないが、それでもサムライの技術を吸収して、着々と実力を伸ばしている。

この身は明日死ぬとも知れぬ身であれど、だからこそ少しでも、ロベルトに戦闘技術を教え込む。そして何時の日にか、サムライをも超えるような魔導師となりて……

「……私と死合う日も、そう遠くはないか。クックックックッ……」

思う存分……狂人通し殺し合い、そのまま暴れて欲しい。そして世界に数多の狂人を、復讐者を生み出し、この世界をより素晴らしいものに……！

「クックックックッ……クックックックックックッ……！」

サムライは笑う。自分の描く未来像に興奮して。ロベルトと共に世界を廻す夢を見て、サムライは楽しげに笑う。

「そのためにも、今は邪魔者の排除に精を出すとしよう……「ＣＢ」の行いも素晴らしいが、やはり夢は自分で叶えなければ意味がないからな」

目の前で意識を取り戻しつつロベルトを見る。ロベルトの顔色は蒼白だが、今回も無事に戻ってこれたらしい。意識を取り戻したロベルトは自分が生きていることに気付くと、そのまま「今日も生きていられることに、感謝を……！」などと言い始めた。

その安心し切っている顔に、サムライは、

「よし、では後半のメニューに移るぞ。……なんだその絶望し切った顔は？　これからだぞ、本番はな」

容赦なく、その事実を伝えた。

「まずは私との模擬戦十回だ。一回勝てなかった毎に十キロダッシュ一本な」

ロベルトの顔が蒼白から死人のような土色に変わる。しかし、サムライはすでに模擬刀を構え、技を放とうとしていた。この待ったなしの絶体絶命の危機に、ロベルトが出来たことは、

「……お、おに……」
「では、始めるぞ！　鬼……」
「……鬼ぃいいいいッ！！」
「殺！！」

ただ、叫んで吹っ飛んでいくことだけだった……。

本名かどうか今一よく分からないヒュドラ＝Ｔ＝Ｈは、銀髪を腰まで伸ばし、漆黒のライダースーツで暗殺を専門とする元ＡＡＡ＋ランク魔導師である。ヒュドラは現在、第９７管理外世界で出逢った幼い技術者、ティーダと共に、疑似ＧＮドライヴの試験運転、及び試験実験を行っていた。

リジェネの協力もあって、「ＣＢ」の予備基地から強奪してきた三十基の疑似ＧＮドライヴ。その内、リジェネとヒュドラ、ロベルトが一基ずつ所有し、グラハムには実験的に二つの疑似ＧＮドライヴを譲渡していたので、開発局の中央近くにある開発棟には、残りの疑似ＧＮドライヴ２５基が安置されていた。

その開発局では、ティーダやビリー・カタギリといった技術者、科学者たちが、寝る間も惜しんで疑似ＧＮドライヴを実戦で使えるように開発していた。今のところ、性能が落ち着いてきているのは「ジンクス？」と「アヘッド」で、「アヘッド」の改造型であるソーマ・ピーリス専用の「スマルトロン」も、既にロールアウト間近である。

なお、「ジンクス」は四年前の大戦で「ＣＢ」側が使用していた機体でもある。その汎用性と応用性、そして操作性の高さは、その新型であるアヘッドをも上回り、ＧＮドライヴ関連の積み重ねがない「Ａ－ＬＡＷＳ」にとっては、まさに量産するのに打ってつけな機体であった。

なので、性能の高いアヘッドを隊長クラスか専用機にし、ジンクスをさらに扱い易くしたジンクス？は隊員に使わせることになった。ちなみに、ジンクス？はすでに「ＣＢ」によって開発され、アヘッドの登場と共にデータが処分されたため、リジェネでも再現はできないということなので、却下された。

他にも、「トリロバイト」という試験Ｍ．Ａ（Ｍｏｂｉｌｅ．Ａｒｍｏｒ）が開発当初の水中型ではなく万能型として設計されたが、今のところ、それを扱うＬｉｃｅｎｓｅｒがまだ見つかっていなかった。

M．Ａは人型とは違うため、どうしても人間がそれを操ろうとすると、感覚に誤差が生じてしまう。その誤差を認識しつつ、機体を自在に動かせる人物など、早々に見つかるわけがなかった。

また、同じM．Ａの分類として、コーナー家の家宝ともいえる第二級捜索指定遺物「アルヴァトーレ」があるが、アレは９つの動力機関が連動して初めて作動する代物であり、僅か３０基のドライヴしか保有していない「Ａ－ＬＡＷＳ」には、とてもそれをドライヴ仕様にするだけの余裕はなかった。

よって、アルヴァトーレは現状維持のまま、プレシア・テスタロッサが開発し、イリス・ラビリンスが完成させた次元航行エネルギー駆動炉「ヒュードラ」を動力炉とすることになる。

これら以外にも、ビリーが独自で開発した「素戔男」や、ロベルトの専用機となる「アルヴァアロン」、それにティーダが開発する「ＧＮフラッグ」がある。

ヒュドラは自分の手の平に乗る疑似太陽炉――ＧＮフラッグを見た。丸みを帯びるコーン状の太陽炉は、主の寡黙さに似たのか、殆どの時で沈黙を守り続けている。

しかし、今のヒュドラには、その冷たさがありがたかった。それも、これからヒュドラが行うかもしれない任務を想えばのこと。

「……冷たい」

『……』

ヒュドラの小さな呟き。ＧＮフラッグは沈黙を通す。

……二人の会話は、その後ティーダがやってくるまでずっと止まっていた。

ティーダがやってきて、ようやく凍った時間から解凍されたヒュドラとＧＮフラッグは、ティーダにつき従って、とある部屋にまでやってきた。中にはリジェネやビリー、ジャンヌ、サムライなど（なぜかロベルトはいない）、「Ａ－ＬＡＷＳ」の主要幹部のほぼ全員が揃っていた。

その部屋は「Ａ－ＬＡＷＳ」にとってとても重要な部屋だった。その理由を以前にヒュドラが知った時、冷徹であるヒュドラですら、その理由には憤った。冷静に振り返ってみれば、それも戦争の流れとして見れば当然のことであるが、感情がそれを許容できなかった。

そんな危険で重大な秘密が隠されたその部屋では、リジェネの専用機となる疑似太陽炉の開発が行われていた。コードネームは「ガルム」。冥府から蘇りし亡霊――「ＣＢ」を再び冥府へと送り返し、それを監視する意味が、それには込められている。

この「ガルム」開発の真に恐ろしい所は、禁忌に近いものを開発しているという点にある。今の次元世界で最も恐れられているモノを、「Ａ－ＬＡＷＳ」は開発しようとしていたのである。

「ふふ……ようやくできたんだね、僕の番犬が。いや、ガンダムが！」

ガンダム。その単語を聞いただけで、部屋にいる何人かが激情を表出しそうになる。だが、それに気付かずに、リジェネはその単語を嬉しそうに連呼する。

「ふふふ……南極でリボンズと取引をした甲斐があったよ。『完全に再現されたＴＲＡＮＳ－ＡＭシステムを僕らが開発すれば、君のガンダムにもそのシステムが搭載され、よりオリジナルのガンダムに近づけるかもしれない』なんて、本当……僕が君へそんな情報を渡すとでも思ったのかな、リボンズは？」

手の平に乗るアップデートされたばかりの疑似太陽炉を熱心に見詰めながら、リジェネは踊りだしそうな調子で喋り続ける。あの時、ガデッサで戦い、１ガンダムにあっさりと完敗を喫したあの惨めな戦いを思い出しつつ、今度は自分の番だとばかりに、凶悪に微笑む。

『Ｙｅｓ，ｌｉｃｅｎｓｅｒ！　今度こそあの傲慢魔人をとっちめましょう！　力を合わせて！』

手の平の疑似太陽炉――Ａ・Ｉ「ＧＡＲＭ」から場違いに明るい声が聞こえてきた。ガルムはその名に込められた意味とは裏腹に、かなり明るい性格をしていた。だが、リジェネにはそれぐらいがちょうどいいのだろう。

道化師たるリジェネに、暗い性格のＡ・Ｉなどは似合わないのだから。

「さて……そういえば、そろそろラグランジュ１への奇襲作戦が発動されると思うんだけど、状況は？」

「……今は選抜を終えて、実戦訓練をしている最中。作戦を実行するには、最低でもあと一週間は必要」

ヒュドラの小さく、冷たい声。ヒュドラは二つ掛け持つ任務の内、その一つの準備状況を説明した。ラグランジュ１への奇襲作戦……もとい、『世界に革新を齎すモノ』の略奪もしくは破壊任務を。

それを聞いたリジェネは、満足そうに笑って、

「じゃ、そっちは君に任せるよ、ヒュドラ。で、今度はいつ戦闘を行うんだい？」

「二日後の３月３日だ。しかし、その戦闘は小規模だから出なくともよい。寧ろ、３月１２日に行う大規模な作戦に参加してくれ。その戦闘にはスクライアの族長も参加するからな。……恐らく、その作戦はここ一ヶ月で一番の戦闘になるだろう。クックックックッ……私は主人の鍛錬で出られんがな！」

笑うリジェネに、同じく笑いを返すサムライ。大きな戦闘と聞いて、興奮しているのだろう。……自分が出られないのになぜ興奮するのかは分からないが。

「その戦闘に勝てれば、相当箔が付きそうだね！　だから、君には期待しているよ、ジャンヌ？」

「……（コクコク）」

サムライとは対照的に、ヒュドラ以上に無口なジャンヌはただ頷いただけだった。しかし、その仕草が彼女の意思を明確にしていた。

「それじゃ、僕はちょっとした肩慣らしをしてくるよ。あと、ロベルトを虐め過ぎて殺さないようにね、サムライ？」

「クックックックッ……大丈夫だ。今日も今日とて臨死体験をさせた程度。もうちょっとやそっとでは死なんぐらい丈夫になっている」

「……（あとでお見舞いにいこう……ロベルト君、大丈夫かな？）」

足早に部屋を去っていくリジェネ。その顔には喜色が満面に広がっていた。いてもたってもいられないとばかりに、ガルムを握りしめる。

『マイスター、肩慣らしって何をするんですか？』

「ん？　あぁ、ちょっとした掃除さ。「Ａ－ＬＡＷＳ」に忍び込んだネズミを掃除するだけの……ね」

『それはどちらかというと除去の方が正しいんじゃ……アイタタタッ！？　そんなに強く握らないで下さい！　後が残ったら大変なんですよ、プンプン！』

「あっはっは！　ごめんごめん。ちょっと力の加減を間違えちゃったよ」

ガルムの陽気な声とは裏腹に、リジェネの顔は凶悪に歪んでいる。その視線の先にいるリボンズ・アルマークを討つために、リジェネは足を一歩、前に踏み出す。

……決着は、間違いなく近づいてきている。

【俺は「納得」したいだけだ。「納得」は全てに優先するぜッ！！
でないと俺は「前」へ進めねぇッ！
「どこへ」も！　「未来」への道も！　捜す事は出来ねぇッ！！】

――連鎖様から、『ＳＢＲ』のジャイロ・ツェペリより

第６９話　困惑（後書き）

キャラを出し過ぎて、たまにキャラを見失う……

それが、駄目作者たる由縁……！

正直、感想で言われるまでアルフのことを忘れていました。ｓｔｓの貴重なロリ担当を忘れるとは……作者痛恨のミスです御免なさい。

もしかして、他にも忘れているキャラがいたり……はしないですよね？　話数が増えすぎて、作者もついに置いてけぼりにされてきましたけど、大丈夫ですよね？

……こんな至らない作者で、本当にすみません……！　感想にまで手が回らなくて、本当に申し訳ない……！　次の更新までには返したい……と、そう願います。

次回の更新予定日：２０１１年７月２日

第７０話　思惑

――新暦７５年３月３日――

第６管理世界の砂漠が広がる一帯にて、鼓膜が破れるような大音量が途切れなく轟いていた。それは人の声であったり砲声であったりしたが、共通点を一つだけ挙げれば、それらは皆、戦場から響いてきているということだった。

際立った岩壁も、障害物になりそうな建築物もない平らな砂漠地帯。そこで勃発した戦争は、まさにこの世の地獄と呼ぶに相応しい惨たらしさを人々に曝け出す。

今もまた、ミッド式の殺傷魔法で撃ち抜かれた一機のＭ・Ｓが爆散した。そのＭ・Ｓが最後に放った銃撃が、低ランク魔導師の頭蓋を撃ち抜く。飛び散る鮮血、弾け飛ぶ身体……その全てを踏み砕き、戦場の兵たちは愚直にも前進を続ける。

兵たちは人を殺すことに何の躊躇も抱かない。抱いた瞬間にやってくるのは自分の死、仲間の死だ。戦場では情深い兵たちから先に死んでいき、その周囲に集まった心優しき兵たちも一緒にいなくなっていく。それを直視した残りの兵たちは、心を無にしていき、やがては人の道を外れていった。

道から外れなければ、自分が死ぬだけだと、そう悟ってしまったからに。

……それは、戦場の狂気と言うべきものか。このスクライアとル・ルシエによる民族紛争は、数え切れないほどの兵たちに狂気を刻み

こんでいく。心の奥底、深淵と呼ぶに相応しき深層心理に。兵たちに気付かれぬまま、ゆっくりと、だが急速に。

――そんな狂った戦場の中央で、緑色の装甲が青天下の日光を反射した。黒い狙撃銃も、形容しがたい禍々しい光りを放っていた。全身に装甲板のようなモノを取ってつけ、左肩に細長い盾を装備した機体、ケルディムガンダムは、両手で持つスナイパーライフル？で敵魔導師と敵Ｍ．Ｓを正確に射抜く。

最初のアリオスの撹乱により、配置を崩され、バラバラとなった敵たち。ケルディムから見れば、そんな烏合の衆など、ただの的に過ぎない。機械的にトリガーを引き、機械的に命を飛び散らせていくケルディム。

そんなケルディムの様子を、アリオスは敵陣の真っ只中から注視していた。しかし、今はオーバーＳがいないとはいえ、戦闘中である。とてもではないが、通信を繋げて話をするほどの余裕はない。得意の飛行形態で敵の連携攻撃をかわしながら、逆に2連装式のＧＮビームライフルで反撃し、迎撃を行うアリオス。

機械的なケルディムと、それを心配するアリオス。セラヴィーはその2機を遠くから眺めつつ、後方から迫ってきた援軍を砲撃でまとめて薙ぎ払う。ＴＲＡＮＳ－ＡＭの必要すら無い、圧倒的な戦力差。それを見せつけるかのように。

セラヴィーの放った桃色の極光は、大気圏内で長時間の飛行を想定したＬＳ級次元航行船を物ともせずに、航行船を爆散させながら戦場を駆け抜けていった。それに動揺した管理局の部隊へと、追撃の狙撃が大判振る舞いに放たれる。

そして、また一人、二人と、戦死者が増えた。その倍に当たる家族も、その瞬間に遺族へと様変わりした。１００人の戦死者で、２００人の遺族が。２００人の戦死者で、４００人の遺族が家族から遺族へと変化する。まるでネズミ算式のように、爆発的に増えていく遺族たち。

その悲しみは、総量として示すことができたら、恐らく測定器を壊してしまうだろう。それだけの深い悲しみ、憎しみが、ガンダムによって遺族たちに植え付けられていく。それを遺族たちはただ黙って受け入れる他ない。

だって、彼らには戦う力も、抗う力もないのだ。彼らはただ黙って運命を受け入れることしかできない。そうする他ないし、そうするしかない。

……また一人、ケルディムによって撃ち落とされた。ケルディムはスコープから覗く視界から、敵機が煙りや血を噴いて砂漠に落ちていくのを見届けつつ、次弾を放つ姿勢を整え、ビームを放つ。

……照りつける太陽は、今日も厳しい暑さを全てのものに届けていた。

ミッションを終え、プトレマイオス２に帰還したロックオン・ストラトスは、ケルディムを整備に出してからシャワーを浴びた。程良い温度のシャワーが、火照った身体と冷たい思考を優しくほぐしていく。

その心地良さに包まれながら、ロックオンは右手でシャワー室の壁を殴った。鈍い音が狭いシャワー室に木霊する。それでもロックオンは何度も何度も壁を殴る。

「……ちくしょう」

悔しさを滲ませた声。ロックオンは顔を伏せながら、壁を殴り続ける。

「アニュー……アニュー……！」

そして、同じ単語を繰り返す。アニュー、アニューと……ロックオンの恋人であり、裏切り者でもあるアニュー・リターナーの名前を、繰り返し唱える。

そこに込められた感情は怒りか悲しみか……それとも、憎悪か？それはきっと、本人にも分からない。

「……オレは、どうすれば、どうすれば……答えてくれ、アニュー」

ロックオンの思惑は、シャワーが流れる音に隠れ、見えなくなっていった。自分でも自分の心が分からないロックオンは、何回目になるか分からない問いを、繰り返し繰り返し問い続ける。

答えは自分で出すしかないとは思いながら……それでも、己の取るべき選択を知るために。

ロックオンと同じように、アリオスを整備に出してからシャワー室に入ったアレルヤは、危うい様子を垣間見せるロックオンのことを心配していた。

「大丈夫かな、ロックオン……」

愛しい者を失くした気持ち。アレルヤにはその気持ちが痛いほど分かる。アレルヤもかつて、自らの手で愛しい者を失くし、自暴自棄になったことがあるからだ。

あの四年前の戦争で討ってしまった、最後の同胞……愛すら抱いていたかもしれぬ彼女を殺したアレルヤは、そのせいで自分を見失ってしまい、茫然としている間に管理局に捕まってしまった。

今でこそ、彼女を殺しても変わりのないこの世界を、絶対に変革するということで立ち直れたが、それでも危ういバランスにいることは、アレルヤ本人が一番よく分かっている。

もし今、第32管理世界で出逢った「超兵」ソーマ・ピーリスと戦えば、どうなるか……少なくても、本当の最後の同胞たるピーリスと戦闘ができるとは思えない。アレルヤはもう散々同胞を討っているのだ。その痛みに耐えるのも、そろそろ限界である。

「……ハレルヤのいない僕じゃ、やっぱり無理なのかな?」

ピーリスと戦った時、最後はディアボリック・エミッションに巻き込まれたとはいえ、殆どまともに戦うことはできなかった。あの頭痛も、そして危なくなった時も、もう一人の人格であるハレルヤ

に任せてきたアレルヤは、自分の力不足を今になって痛感した。

「……ハレルヤ、君はどうして表に出てこないんだ？　どうして僕だけにやらせようとするんだい？」

四年前の戦争で死んだと思われていたハレルヤだが、第３２管理世界の「クラッシュ・ベラー」にて、死に瀕していたアレルヤをその危機から助けている。それはアリオスの通信データからも明らかになっており、生きていることは明白であった。

しかし、どうしてその時だけ出てきたのか……また、どうして今までずっと眠りに就いていたのか。それはハレルヤの口からも説明されていないので、依然として謎のままである。

「……答えてくれ、ハレルヤ」

その問いに答えを返すものは、今でも眠りに就いたまま……

「せめて……アレが発動される前に」

静かに、アレルヤを見守っていた。

身体に流れる水を見つめながら、ティエリア・アーデは考え事をしていた。シャワーの湯気が、視界をぼんやりと曖昧にさせる。

「……」

ティエリアが考えていたことは、今の世界情勢について。三大勢力と「ＣＢ」の力関係を、ティエリアは脳内で整理していた。

力を伸ばし始めた「Ａ－ＬＡＷＳ」。ヴェーダとセファーが言うには、すでに疑似太陽炉を搭載したＧＮデバイスも完成間近だとか。もしそれらが戦場に投入されれば、「Ａ－ＬＡＷＳ」は前身であった世界清浄をも超える戦力を手にし、また一段と勢力を伸ばすだろう。

クーデター派と離反組に別れた聖王教会は、今のところ、何の行動も起こしていない。しかし、手札には最強のジョーカーたる聖王が伏せられているため、それを何時切ってくるのかという点では、一番油断ならない勢力とも言える。

そして、最も強大な戦力を保有し、勢力として見ても、他よりも頭十個分ほども抜きん出ている時空管理局は……今、その動きを異常なほど鈍化させていた。

その原因は判明している。しているのだが……正直、何をしているのかと思う。管理局にとって、無限書庫とは「ＣＢ」のヴェーダみたいなものだ。その最高責任者をこのタイミングで拘束とは……

「まさか、ラルゴ・キールがラジエル……なのか？」

謀ったかのようなこのタイミングでの拘束……なるほど、もしキールがラジエルならば、説明もつく。情報戦を制することは、「ＣＢ」にとって死活の問題だ。今までにも何度となく無限書庫に煮え湯を呑まされてきたこちらとしては、このタイミングでのユーノ・スクライアの拘束は正直、ありがたいの一言に尽きた。

ただでさえ裏切り者で戦力を減らし、刹那もまだ開発に時間がかかるという鬼気迫る状況で、不倶戴天の敵と言っても過言ではないユーノが拘束されたのは、「ＣＢ」にとっても久しぶりの吉報だった。

それに、もしかしたら、ラジエルが動けないのは、ユーノを監視することに専念しているからかもしれない。ユーノにどんな動きがあっても対応できるよう、今も準備を整えているのか……

「……まぁ、いずれ真相は明らかになる。今は焦らず、じっくりとヴェーダの推奨するプランをこなしていこう」

シャワーのスイッチを切り、水も滴るいいイノベイドになったティエリアは、目の前に置かれたタオルで悩ましい体を拭きながら、着替えを手に取る。

「……人類が「ＣＢ」によって試される日は、すぐそこにまで迫ってきていることだしな」

眼鏡を外し、上着から着替えるティエリア。二の腕のラインが実に艶めかしい。おぱ～いこそないが、そこには何か別のモノが、浪漫（ロマン）が詰まっているように思えてならない。

「ミッションプラン「Ｊｕｄｇｍｅｎｔ（審判の日）Ｄａｙ」……すでに配置も

チャージも完了し、あとは九日の時を待つだけ……か」

ほっそりとしつつも、肉つきのいい太股。ズボンを履き、着替えを完了させる。

「アイ。世界の変革は、もうすぐそこまで迫ってきている。これで、僕達の誓いは果たされる」

整ったパーツから成り立つ顔に眼鏡をかけ、シャワー室を後にする。髪は少しばかり湿っていたが、今は何よりも休息を欲していた。

「……誓いを果たした後は、ミレイナのお願いでも聞くことにしよう」

自室に戻ったティエリアは、まず、ベッドの中に潜り込んだ。着替えた寝巻はティエリアに心地良い眠気を与え、すぐに眠りに落ちることができた。寝息か寝言かがベッドの毛布の中から聞こえてくる。

「……アイ、ミレイナ……」

……そこに込められた意味に、ティエリアはまだ気付いていない。

「はぁ～……もう嫌や、デスクワークなんて」

機動六課の新宿舎で溜息をつく八神はやては、隊長室のデスクの上に山積もりとなった書類を見て、うんざりとしていた。もう3時間くらい書類仕事に拘束されているが、書類の山は一向に減る気配を見せないでいる。

それを見て、もう一度溜息をつくが、書類の山は一ミリも減らない。はやては半ば諦観しつつ、山の中から一枚の書類を取り出してみたが、その書類は無限書庫に対する苦情だった。

プチっと、頭の中の血管が軽く切れる。

「なんでうちらに無限書庫関連の書類が来るねん!?　いや、そもそも!　そもそもや!　なしてそういう間違った書類がこんなにやってくるねん!?　情報部や事務部は仕事してへんのとちゃうん!?」

「まあまあ、仕方ないですよ。今の管理局は無限書庫を満足に動かせないのでしょう?　でしたら、こういったことが起きることは、想定された範囲……ですよね?　でしたら、今は我慢するしかありませんよ」

怒髪天をついたように怒りまくるはやて。そんな彼女を、六課の茶色い制服を着たアニュー・リターナーが宥めようとした。アニューは「ＣＢ」を裏切った後、管理局に協力し、この機動六課に配属され、今ははやての補佐を担っていた。

それというのも、無限書庫が不調になる、つまりユーノが拘束さ

れた途端に、管理局内での情報の往来が鈍くなり、書類の不備やミスが多くなったためだ。どうやらユーノは、こういう事務関連の仕事にまで手を伸ばしていたらしい。

正直、ユーノがいなくなるだけでここまで管理局はガタガタになるのかと、はやては未だに信じられない心地で、六課に関係のある書類だけに判子を押していく。

「「ＣＢ」じゃあ、そんなに無限書庫は評価されとったん？」
「……？　えぇ、まぁ。「ＣＢ」では「ヴェーダ」並みに評価されていました」
「……そか。うちらはそんなに意識してへんかったけど、そうだったんやなぁ～……」

無限書庫がそれほど大事な部署だったとは、正直、はやては……いや、管理局の大半の人間が知らなかった。知っている人物は、それこそ極少数の人間であり、だからこそ、このような事態が起きるのを防げなかったのだ。

アニューが言うには、「ヴェーダ」とは「ＣＢ」の中枢を担う量子演算処理システムであり、「ＣＢ」にとって生命線とも言えるシステムであるという。それとほぼ同等に評価されていたとは、現場一筋であったはやてには、やはり信じられぬことであった。

「……ほんで、話は変わるけど、例のアレ……『世界に革新を齎すモノ』はどのくらいまで完成しとると思うん？」
「……恐らく、八割方は完成しているかと。もしもう完成していたら、すぐにでも実戦に投入されているはずなので、今の所は完成していないと言えるのですが……」
「時間はあまり、残されていない……か」

無限書庫がどれだけ凄かったのか。それをはやてはよく理解できない。ただ、その無限書庫も、今ではかつての影響力を失い、閉鎖されていた頃と変わらぬようになってしまっている。

それを解決する方法は、単純にして明快と、目の前に示されていた。十年前と同じ解決法を使えばいいのだ。つまり、現在ラルゴ・キールの権限で監禁されているユーノ・スクライア元無限書庫司書長を解放し、そのまま無限書庫の司書長として、無限書庫に戻せばいいのだ。

キールはユーノをサードエージェントだと疑っているようだが、はやてから見て、いや時空管理局から見れば、寧ろキールの方がサードエージェントのように見えた。管理局を低迷させるこの不調は、間違いなくユーノの拘束に端を発していたからだ。

それに、キールがサードエージェントかもしれない理由は、それだけではない。キールがバンクーバーのＶＩＰルームで秘密裏に行った会見、及び裏金とも言えるような用途不明の機密費を抱えていたことは、無限書庫から偶然にもデータとして掘り出され、公となっていた。

キール本人はユーノこそがサードエージェントだと主張するが、キールの方が余程サードエージェントに見える。それは本人も分かっていて、今ではそう主張することもなくなった。噂では、他の二人の最高評議会にも疑われているとか……

「にしても、世界に……『世界モノ』は本当にそんなに警戒しなきゃいけない代物なん？　データでは、「剣士」はＳＳクラスにされているけど……ＳＳ＋クラスなら、管理局のオーバーＳを集結させ

て……」

「そんなに甘い話じゃないんです。……今の「剣士」、いえ『００』は、実質６４％の性能で戦っていたのですから」

「……ちょい待ち？　６４％？　それであの性能なん！？」

「はい、事実です。「剣士」には「ツインドライヴシステム」というシステムが積んであります。このシステムはドライヴの出力を単純な「足し算」ではなく「二乗」するという特性があります」

アニューの説明では、「剣士」は８０％――８割の出力でシンクロしたドライヴを使用しているとのこと。その為、８×８＝６４の数式で、本来出せるはずの性能の６割ちょっとしか出ていないという。

しかし、それでも『００』は通常のドライヴを遥かに超える粒子量を保有していた。何故なら、ＧＮドライブの最大粒子生産量を５万［粒子量／ｈ］とすると、『００』　の現在の粒子生産量は最大時の０．６４倍の１６億［粒子量／ｈ］であり、擬似ＧＮドライブの性能がオリジナルと変わらないと仮定するならば、現在の『００』は擬似ＧＮドライブの最大粒子生産量の３．２万倍であり、その分性能で圧倒していたのだ。

「本当の意味で完成した『００』は、「ヴェーダ」ですら予測ができませんでした」

仮に１００％でのシンクロを可能にすれば、『００』は２５億［粒子量／ｈ］という途方もない粒子量を生産できるようになり、通常のと比較し、およそ５万倍もの粒子生産量を獲得することになる。それだけ莫大な粒子量を計算し、かつそれが齎す効果を予測することは、「ヴェーダ」の演算能力を持ってしても不可能であった。

「……そして、「ヴェーダ」はこうも言ってもいました。完成した『００』は、もしかしたら『魔導王』――ＳＳＳランクに到達した魔導師の『王』たる存在にまで到達するかもしれないと」

アニューの言う本来の「剣士」の強さに、全身の震えを抑えきれないはやて。しかし、アニューが言ったある単語に疑問を抱き、唇を震えさせたまま、それを聞いていみる。

「……ま、『魔導王』？　なんやそれ？　聞いたことな、ないんやけど？」

「私も詳しくは……ただ、アルハザードではそのような存在が研究されていたらしいです。『魔導師の頂きに座する魔導師の王』……それは、誰にも――聖王ですら到達し得なかったＳＳＳランク魔導師を指しているようですが……」

「アルハザード……嫌な名前やな」

嫌そうに眉を顰めるはやてを、何故かアニューは意外そうな顔で見つめてきた。

「そう……ですか？　イオリアさんはアルハザードの遺産もよく研究していたので、私たちはそれほど抵抗を感じませんが……」

「「Ｐ・Ｔ事件」然り「Ｊ・Ｓ事件」然り……うちらはどうしてこうもアルハザードと関係があるんやか……もう呪われとんのとちゃうんか、これ？」

はぁ～……と、大げさに溜息を吐きたくなるが、それで書類が散らばるのは面倒なので、何とか我慢する。アニューはその様子を見ながら、不思議そうに、

「……あれ？　「闇の書事件」は含まないのでしょうか？」

と、はやてに聞いてきた。

「……え、なして？」

アニューの問いに思いっきり面喰らって、目をキョトンとさせるはやて。アニューは言葉を選びつつ、その理由を慎重に話す。

「いえ、昔イオリアさんが言っていたのですが……『闇の書にはアルハザードの技術が沢山使われておる。何時か解析をしてみたいものだな』と言っていたので、私はてっきり……」

「……」

ボソボソと、自信なさげに喋るアニューだったが、今のはやてにはそれに構う余裕がなかった。自身の半身ともいえる夜天の書に、アルハザードの技術が使われている……？　頭が混乱し、視界までグルグルと回ってきた。

「……それを詳しく教えてくれ欲しいんやけど、ええか？」

「すみませんが、私もこれ以上は……」

動揺を抑えきれない。はやての部下であるフェイト・T・ハラオウンの顔が過ぎる。目眩が起き、視界が真っ白になっていく。

（アルハザード……なして、私にまで……！）

気付いた時には、はやては机の上に突っ伏していた。アニューの心配する声が、薄くなっていく意識の中でも聞こえてきた。アニューが「CB」の悪鬼に成り切れなかった理由をそこに見出しつつ、はやては意識を手放した。

アルハザード……その単語が一体何を齎すのか。その洗礼を浴びたはやては、それを憂いながら、真っ暗となった視界の中で、知らず、

（……ユーノ君なら、何か知っておる、ん……か……な？）

ユーノの顔を想い浮かべ、夢の中で笑みを浮かべた。

キャロ・ル・ルシエは、数十センチにまで小さくなっている相棒のフリードリヒを傍に置きながら、今回機動六課に下った辞令を読み上げているフェイトの姿を見つめていた。

そのフェイトは、スクリーンに映った辞令を指しながら、それを読みあげていた。

「今回、機動六課のすることは、第６管理世界で起こったスクライアとル・ルシエの民族紛争を鎮圧……もしくは休戦させることよ。殺傷魔法は基本禁止だけど、現場の判断に任せます」

殺傷魔法……その単語を聞いて、フォワード陣並び、六課のスタ

ッフたちが顔を歪めた。やはり殺傷魔法を使うことに抵抗を感じているらしい。

「あの、フェイト隊長？　質問をいいですか？　確か「Ａ－ＬＡＷＳ」は魔力と太陽光をエネルギーとする新規格のＭ．Ｓを使っているんですよね？　でしたら、非殺傷魔法はあまり効果がないのでは？」

「確かに新しくなったＭ．Ｓは、非殺傷魔法が効きにくくはなっています。でもね、私はそれで皆が人を殺すっていうのは、違うと思うの。出来る限りはブラックアウトさせて、血が流れないようにしたい……少なくとも、私はそう思っているよ、ティアナ」

フォワード陣の実質的なリーダーであるティアナ・ランスターの疑問に、フェイトは淀みなく答える。ティアナはそれで納得したのか、次の質問を投げかけた。

「……じゃあ、「ガンダム」に対してはどう対処すれば？　ＧＮデバイスに非殺傷魔法が通用しないことは、アニューさんによって実証されています。……もし「ガンダム」と出会った場合、私たちはどうすれば……」

「その時はとにかく、私達隊長陣を呼んで。……隊長陣は全員、殺傷魔法を使用することも覚悟しているから」

フェイトの言葉に、頷きを返す他の隊長たち。シグナム、ヴィータ、そして……高町なのはの三名は、どうやらガンダムに対して殺傷魔法を使うことを躊躇しないらしい。

それも当然か……とティアナは思う。シグナムは四年前からずっとガンダムを目の敵にしているし、ヴィータははやてやなのはを傷つけたガンダムにとてつもない怒りを抱いている。

それに、なのはに至っては、養子だった高町ヴィヴィオをガンダムによって奪われており、フェイトはガンダムに対して異常な執着を見せていた。隊長たちが殺傷魔法を使うと宣言しても、それは当然のことだと、六課の面々にはそう思えた。

「……エリオ、キャロのことをしっかり支えてね？　ちゃんと一緒にいるんだよ？　ご飯とか体調とか、色々と気を使ってね？　勿論、エリオもちゃんと気を付けるんだよ？」

「りょ、了解です、フェイトさん！」

そして、フェイトの親ばか――もとい、馬鹿親振りも、当然のように受け止められていた。

ブリーフィングが終わり、３月１３日頃に第６管理世界に向けて出発する予定となった機動六課。一方、ユーノが抜けてから効率が落ち続ける無限書庫では、数百名以上の司書全員が総動員されて、終わりの見えない依頼や仕事を次々とこなしていた。

「そこ、次Ａ－２２３の資料を探しといて！　あんたはこの請求に当たれ！　そっちは……あ～、クロノの依頼をしている奴らを手伝

ってやってくれ！　頼んだよ！」
「「「はいッ！」」」

後方支援に努める無限書庫は、前線とは違って戦闘になることはない。しかし、今その場を席巻している空気は、間違いなく戦場のそれだった。

かつてフェイトの使い魔として活躍し、今も無限書庫にて全体の指揮に当たっているアルフは、その空気の中、舌打ちをせずにはいられなかった。

ユーノの替わりにきた３０名を超える事務員と新しい司書長――ラルゴ・キールが選んだ優秀なスタッフたちは、確かに有能であった。事務員たちはこの数週間の内に古参の司書たちと同等の働きをするほどで、新司書長に関しては、すでに書庫で一番の読書・検索魔法の使い手だ。今も１５冊ほどの本を周囲に浮かべ、仕事をしている。

しかし、その程度の増援でどうにかなるほど、ユーノの穴は小さくはなかった。閉鎖されていたに等しい無限書庫を実働レベルにまで伸し上げたその実力は、事務員や新司書長と比べても、あまりにも桁外れだったのだ。

新司書長が仕事を一個終わらせている間に、ユーノならば3つか４つの仕事を終わらし、さらには部下たちのケア、他の部署への根回し、苦情の対応、書類の整理などを終わらせていただろう。それは、マルチタスクに優れているユーノだからこそできたのだ。今の有能なだけの新司書長では到底及ばない領域に、ユーノはいた。

それを新司書長も分かってきたのか、最近はあまりの激務に顔が

痩せ細り、顔色もかなり悪くなってきていた。見ているアルフたちの方が辛いほど、新司書長は無限書庫によって追い詰められていた。

それを見るに見かねたアルフは、何度も新司書長に辞めた方がいいと言うけれど、新司書長はキールから任された仕事だと言って、その忠告を聞かなかった。……その時、アルフには新司書長の目から正気がどんどん抜けているように見えたが、敢えてその事を告げはしなかった。さすがにこの短期間でここまで追い詰められるとは思えなかったから。

それが悲劇を生むとは知らずに。

「司書長、働き過ぎです！　もう休んで下さい！」
「いや、いや……このぐらいなら、まだ……まだ……」
「……？」

赴任して一ヶ月近く経ったこの日。アルフは新司書長の様子がおかしいことに、ようやく気付いた。目が虚ろで、正気を保っていないように見える。

「ちょ、あんた……誰か救護班を呼べ！　早く！」
「まだ……大丈夫、大丈夫……壊れない、壊れない……」

検索魔法か読書魔法の使い過ぎか……ユーノが赴任する前の無限書庫でこういった症状に陥った人間がいると聞いてはいたが、アルフ自身、まさか新司書長がその症状に陥るとは信じられなかった。

それは、きっとユーノがずっと何事もなく仕事をしていたからで……だからこそ司書達全員が、無限書庫が孕む危険性を忘れていた。

「こんな時に限ってクトゥルフ症状かよ……全く、もう少し頑張って欲しいもんだけどね」
「あの、アルフさん？　これから私達はどうしたら……」
「今日はもう閉じるよ。司書長がクトゥルフ症状を発症したんだ。今日はもう皆帰って、ゆっくり頭を休めておくれ」

小学生並みのロリボディを披露するアルフが、２０歳ほどの女性司書に指示を出す図絵は、何とも言えないシュールな感じを醸し出していた。しかし、司書たちにはそれが当たり前なのか、すぐさまその指示に従って帰途についていった。

その中で、狼の耳をピクピクさせながら、アルフは呟く。

「ユーノ……早く帰ってきてくれよ。こっちはもう限界だよ」

ザフィーラに夕陽のようだと言われた髪も、尻尾も。今は元気なく垂れ下がっていた。無限書庫はそんな彼女を、ただ冷酷に見下ろしてくる。

まるで一個の世界のように存在しながら……無限書庫は彼にとっての主の帰還を望んでいる。アルフにはそう思えてならなかった。

「……会いたいよ、フェイト……ザフィーラ」

アルフの主であったフェイトの顔を、そして同じ使い魔として惹かれ合っているザフィーラの顔を思い出しながら、アルフもまた宿舎へと帰っていった。

その日、この十年間ずっと明かりを絶やさなかった無限書庫は、初めてその業務を停止させた。

【ある青年が『想いだけでも…力だけでも…』って言ってたけど、案外それは的を得ている。その言葉の意味をよく理解しているのは、はてさて…どの勢力なのかな…】

――月光閃火様より

第７０話　思惑（後書き）

この作品も、気が付けば７０話に突入……これまでの道のりが長かったようにも、短かったようにも思えます。

まあ、そんな感傷は置いときまして。

現在、駄目作者代表選手権をぶっちぎりで優勝した「千葉久々」は、ある募集（？）を行っています。詳しくは活動報告に書いてありますので、閑でしたら其方の方も一読、お願い致します。

……次回の更新は、とりあえず「幕間―８」がすでに完成していますので、まずは感想の返信を終えてから更新したいと思います。スピンオフはまだ迷いが晴れませんので、更新は当分先になるかと……。

Ｐ．Ｓ　感想にて「％表示」より「単位がついた数値」で表した方がよいとのことでしたので、そのように編集し直しました。また、もののけ姫を見ていたせいで、色々と投稿するのがギリギリとなり、誤字脱字の確認を怠ってしまっていたので、指摘された部分を色々と修正しました。ご指摘、ありがとうございます。

次回の更新予定日：目標２０１１年７月９日

幕間―8

――新暦７５年３月６日――

目が覚めると、そこには高町ヴィヴィオの知らない天井が広がっていた。全体的に白く、そして何に使うか分からない機材が並ぶその天井は、白光をヴィヴィオに浴びせてくる。

ヴィヴィオはその眩しさに目を細めるが、それでも白光は容赦なくヴィヴィオの上を照らし続ける。あまりにも強く照らすので、視界が真っ白になり、辺りを見渡すことも儘ならない。

『……では、聖王様の素体に新たなレリックを埋め込む方針で？』

『……それしかあるまい。こちらにはジェイル・スカリエッティほどの科学者はいないのだから、その手段を踏襲する他ないだろう』

「……？」

ヴィヴィオのいる部屋の外側から、二人分の声が聞こえてきた。若い男の声と、年老いた男の声だ。ヴィヴィオは内容を聞き取るために、耳をすませた。

『しかし、それではあのエース・オブ・エースに負けた聖王様にしかなりませんが？』

『……安心しろ、強化案はすでにある。これがそうだ』

『……なるほど、これならば確かに、エース・オブ・エースといえど……分かりました。では、レリックを埋め込む作業に入りますので、ここで待っていて下さい、Ｍｒ．ブリング』

『……あぁ、ここで待たせてもらう』

耳から聞こえてくる単語は、ヴィヴィオにはあまり理解できないものばかりだった。しかし、それでも自分が危ない立場にいることに気付く。焦って逃げ出そうとしたが、その両手足には頑丈な拘束具が繋がれており、逃げ出すことができなかった。

「いや……いや……ママァアアア！！」

叫ぶヴィヴィオ。だが、天は彼女を見放していた。ヴィヴィオがいる部屋に、白い手術着を着た４０代の男が入ってきた。男は笑みが堪え切れないのか、気味の悪い笑顔を浮かべていた。そして濁った瞳が、ヴィヴィオを怪しく見つめてきた。ねっとりと、じっとりとした視線で。

「いや～、この年になってまさか聖王様のお身体を弄れるとは……Ｍｒ．ブリングには感謝してもし切れませんね」

「来ないで！　いや！　いやァアアア！」

「おやおや、もう麻酔が切れたのですか。少し煩わしいので、素体の方は黙っていて下さいねぇ～？」

「ひぐっ……う、ぐ……！」

男がヴィヴィオの首元に、薄紫色の薬品が入った注射を刺す。中に入っている薬品は睡眠薬と麻酔を複合したもので、ヴィヴィオはすぐさま眠りに就かされてしまった。

「さてさてさて！　では、これより聖王様復活の手術を始めちゃいましょうか！　いやいや、胸が高まり過ぎて射精してしまいそうですよ、聖王様～！！」

五月蝿くなくなったことを確認してから、手術着を着た男は手術へと取りかかった。メスを握り、縫合の用意を行い、心電図を見て

素体の状態を確認する。

「最初はまず、聖王教会が保管していたレリックを埋め込みましょうね～！」

手術着を着た男が、封印処理が施されていたスーツケースから、立方体の赤い水晶みたいな宝石を取り出す。その宝石は正式名称を「レリック」といい、かの「J・S事件」の発端ともなった、危険なロストロギアでもある。

本来ならば、管理局が全てを回収し、保管していたはずのレリック。だが、「J・S事件」にてレリックが聖王復活の要因になると分かった途端、聖王教会は管理局の捜索から逃れた一個のレリックを秘密裏に教会内に保管していた。

勿論、管理局はそんなことを全く知らないでいた。もしかしたら、ユーノならば知っていたかもしれないが、その彼は今拘束されている。なので、聖王が再びレリックウェポンとして復活することを知るのは、聖王教会の重鎮たちのみであった。

「おお、おお！　綺麗な肉色ですね、惚れ惚れしちゃいます！」

眠っているヴィヴィオの胸を嬉々としてメスで切り開き、鳩尾（みぞおち）よりも上の位置に教会のレリックを埋め込んでいく。ヴィヴィオが時折呻（うめ）くが、起きる気配は全くない。

そのまま手術は順調に続き、終わったのは9時間後のことであった。その間、ずっと待っていたイノベイドのブリング・スタビティは、隣りに座る彼専属のオペレーターと共に、手術室から出てきた中年男を出迎えた。

「結果は良好です。あと数日もすればレリックも身体に馴染んで、聖王化させることができるようになるでしょう」
「……了解した。では、数日中にまたそちらに伺うとしよう。……他に、何か気になる点はあったか？」
「気になる点……そう言えば、えげつないモノがありましたよ、あの素体の体内に」
「……それは何だ？」
「実は、過去にレリックを強引に取り除いたらしい痕がありまして……しかもそれが厄介なことに、表に出ない後遺症を患っておりまして。並みの施設じゃああの後遺症を見つけることはできないでしょう」
「……それが、どうかしたのか？」
「その後遺症が素体の身体をかなり蝕んでおりました。日常生活をする分には問題ないのですが……仮に、新たなレリックで聖王化させたら、戦えるのは恐らく一回だけです。しかも、その一回を使ったら、素体の方が聖王化の負担に耐え切れず、崩壊する可能性があります」
「……」

ヴィヴィオの聖王化は、スカリエッティほどの科学者が綿密に計画して実現させた「奇跡の偉業」だった。レリックを埋め込むだけでも、かなり高度な技術と知識が必要とされ、並みの科学者では再現することさえ不可能であり、聖王教会で一番の科学者と外科医が揃って、やっと再現可能なレベルだった。

それだけの科学から成り立っていた聖王を、元に戻すためとはいえ、魔力ダメージで強引に核となるレリックを取り除けばどうなるか？

レリックウェポンたる聖王にとって、レリックとはいわば第二のリンカーコアに近い。そして、リンカーコアは魔力を蒐集されただけでもかなりのダメージを負うほど、繊細な器官だ。それだけデリケートな器官を、専門の知識もなく強引に取り除けば、甚大な後遺症が残ることは避けえなかった。

もし、ヴィヴィオがこのまま普通に暮らしていけば、その後遺症も何時かは治ったのかもしれない。数年か、数十年後かに。しかし、それは今の時点ではありえないＩＦの話であり、最早夢見ることも叶わぬ未来でしかない。

ブリングの脳裏に、ヴィヴィオを救ったとされる高町なのはの姿が映った。長い目で見れば本当に救ったのかもしれないが、それもブリングと聖王の都合により、破滅させられることになる。それを知れば、恐らくなのははブリングを絶対に許さない。絶対に、ブリングを殺そうとするだろう。

「……それでも、続けますか？」

「……当たり前だ」

最も、それはブリングたちが考慮すべきことではない。ブリングたちに必要なのは、あくまでも『聖王』という絶対の指導者……古代ベルカを代表する、最強の王者だ。だから、その素体となる少女がどうなろうとも、彼らには関係ない。関係ないのだ。

「……では、我々はこれで失礼させてもらう。……いくぞ」

「あ、待って下さいよブリングさん～！　置いていかないで下さいよ、もぅ～！」

だが、だとしても。この後味の悪さは一体何なのだろうか？　こ

ういう犠牲を出さないために「ＣＢ」を抜けたというに、結局していることは変わらないというこの現実は……！

ブリングは静かに、唇を噛み締めた。それしか、他にできることがなかった。

司書長室を整理整頓していた司書長専属の秘書、ブック・ロジックは、長い黒髪のウィッグの位置を気にしながら、今日も今日とて仕事に精を出していた。黒縁眼鏡をクイっと上げ、垂れ目になりがちな目元を隠す。

「全く、あの新司書長は……来て一ヶ月もしない内にクトゥルフ症状なんて、信じられません」

ブチブチと愚痴を垂れ流すブック。けれど、仕事をするスピードは変わっていない。

「そう言えば、クトゥルフ症状は十年前までは当たり前のように無限書庫で起きていた症状らしいですが、実際に見たのは初めてですね」

司書長室の机を拭き、ピカピカに光るまで掃除をする。埃一つない机の上に、満足な気持ちを抱く。

「まるで脳内から知識でも奪われたかのようにおかしくなるとのことですが、成程、納得がいきます。あの新司書長はアルツハイマー症の末期のようになっていましたから、知識を奪われたという表現もまた的確であると、私は考えます」

休憩として買ってきたモンブランのケーキをパクつく。甘さがじんわりと脳内に広がり、疲れを取り除いていくように感じる。合わせのアールグレイも作法に則って飲み、一時の休みを謳歌する。

「クトゥルフの語源は、かなり昔にミッドで流行ったクトゥルフ神話から持ってきたモノらしいですが、アレは確かに素晴らしい作品でした。今でも思い出せば心踊り、読書に耽りたくなってしまいます」

そういって手近にあったクトゥルフ神話の本に手を伸ばす。背表紙は完璧な環境下での保存にあったためか、全く痛んでいなかった。一ページ一ページをゆっくりと捲りながら、本の中にのめり込んでいく。

「……ふぅ。やはりクトゥルフ神話は最高です。では、与えられた仕事も終わったことですし、今日はもう帰りましょうか」

司書長室の電気を消し、誰もいない無限書庫から退出する。司書長がクトゥルフ神話を発症したとのことで、無限書庫はこの数日間、完全に閉鎖されていた。今までにない静寂の中、ブックはふっと上を見て、そこに白い何かを見たような気がしたが、すぐに視線を元に戻した。

「……アルフさんも今はエイミィ・ハラオウンの育児に駆り出されているはずなので、私も久しぶりに羽を伸ばしましょう。……訓練室は空いているのでしょうか？」

誰もいない無限書庫の入口を魔法で閉じ、受付の人に挨拶をする。その際に受付のお姉さんからお菓子を貰い、無表情な顔に僅かな喜色が浮かぶ。９歳に見えるブックは時たまこうやってお菓子をもらうことがあり、密かな楽しみでもあった。

「では、まずは我がマスターに挨拶をしましょう。訓練はその後です」

貰ったお菓子をジッと見つめつつ、無限書庫に背を向け、独房室へと歩み始めるブック。熱い視線をお菓子に注ぐその姿は、普通の年相応な少女にしか見えなかった。

――新暦７５年３月１４日――

何日もかかって何とかエクシアを説き伏せた刹那・Ｆ・セイエイは、ようやく二人っきりになれたＯライザーと向かい合っていった。

待機状態である円錐の形をしたOライザーは、刹那から見てもそわそわしているように見えた。

「それで、いきなり本題に入るが、どうしてあの時、ドッキングを解除したんだ？」

『……』

「答えてくれ、Oライザー。どうしてお前は、オレ達を拒む？」

黙りこくるOライザーだったが、刹那は根強く回答を待った。それに根負けしたのか、Oライザーは妙に甲高い声で、やっと刹那の問いに答えを返した。

『……妃（わらわ）は、マイスターのことをひ、一目見た時から気に入っておりました。寧ろ、妾のマイスターは貴方以外には存在しないとすら思っている』

Oライザーの声は、恥ずかしさで震えていた。自身の素直な感情を吐露することは、Oライザーには耐え難い恥辱だったのか。刹那はその震えに気付いてはいたが、何故震えていたのかまでは分からなかった。

『こ、これは別に、マイスターのことがす、す、好きだからというわけではないが、それでも妾は、ドッキングをすることに、あの時まではあまり抵抗がなかった』

震えが先程までよりも強くなる。しかし、刹那は言葉をそのまま鵜呑みにし、Oライザーが自分のことを好きなのだとは全く思っていなかった。それに気付かずに、Oライザーは自身の内情を露呈し続ける。

『されど、あの時――マイスターとドッキングした時に、私は気付いた。気付いてしまった。もし『００』が、『世界に革新を齎すモノ』が真に完成すれば、私を含めたＡ・Ｉはその役目を終え、『００』へと主導権を渡すのだということを……！』

「……何？」

『『世界に革新を齎すモノ』――つまりは、『００Ｒ（ライザー）』となれば、『００』本来のＡ・Ｉが目覚め、私達三つのＡ・Ｉは統合されてしまうであろう！』

Ｏライザーが辛そうに――辛そうな声で、刹那に訴えてくる。もしＯライザーの言うことが本当なら、ドッキングをして１００％のシンクロを行えば、他のＡ・Ｉ――エクシア、Ｏガンダム、Ｏライザーの三つの人格が一つに統合され、『００』本来のＡ・Ｉが現れるということなのか？

（だが、言われてみれば……）

突飛な発想に思えがちなＯライザーの言葉だが、よくよく考えれば、十分ありうる話であった。太陽炉が二つ以上あるガンダムは、アルケー、益荒男の二機しかいないが、その二機とも、本来の疑似太陽炉のＡ・Ｉではなく、まるで異なったＡ・Ｉになっていた。しかも、Ａ・Ｉの数は一つである。

疑似太陽炉のＡ・Ｉは、無性別・無個性なものにしかならないはずだった。そして、当然二つ無ければおかしい。けれど、二つ以上の太陽炉を直列に繋ぐと、新たなＡ・Ｉが生まれ、Ａ・Ｉは一つになる。その原理はいまだに明らかにされていないが、少なくとも『００』もそうなるのではないかと、一時期、言われていた時があった。

しかし、結果としてエクシアとOガンダムは残り、新たなA・Iが浮上することはなかったため、オリジナルの太陽炉やツインドライヴシステムでは新たなA・I――『００』は生まれないのだと、そう思っていたが……どうやらそうではなかったようだ。

『『００』は１００％でのシンクロによって、初めて表出するA・Iであったのだ。そしてその性能は、三つものA・Iを統合しているためか、かなり高性能かつ安定していると、妾はそう予測しておる』

「……安定、か。それはもしかしなくても、エクシアのことを言っているのか？」

『……Ｙｅｓ，ｍｅｉｓｔｅｒ。エクシアのあの不安定ぶりでマイスターが一体何度危機に陥ったことか……忘れたとは言わせんぞ？』

「……あぁ、そうだな。忘れようにも忘れられないさ」

思い返せば、エクシア関連で死にかけた回数は思い出話で尽きないほどある。その全てを一笑に伏せる刹那はともかく、OライザーやOガンダムはそれをあまりよく思っていないようだ。

……では、どうしてドッキングを拒絶したりしたのだろうか、Oライザーは？

『……新しいA・Iが表出すれば、恐らくはそのA・Iに固定され、もしかすれば妾たちも消えるかもしれぬ。……永遠にな。されど、妾はまだマイスターとは別れたくなった』

「Oライザー……」

『か、勘違いするでないぞ！　こ、これは妾が貴方のことをす……好きだというわけではなくてだな、まだあまり話をしていないマイスターと離れるのがとても耐えきれなかったということでもなくて……か、勘違いも甚だしいぞ、マイスター！！』

「……あぁ、了解している」

いくら女心に昔よりは鋭くなったとはいえ、刹那にツンデレの本心を見抜くことはハードルが高すぎた。恐らく字面の通りに受け取っているだろう。刹那の表情に揺らぎや疑問といった色は、全くなかった。それを知らずに、Ｏライザーは言葉を続ける。

「だが、それでもすでに状況は逼迫（ひっぱく）し、「ＣＢ」は危機に陥っている。……オレ達にお前の力を貸してくれ、Ｏライザー」

『……妾も、すでに時間が残されていないことは分かっておる。駄々をこねる時間はとうの昔に終わったのだと。……了解したぞ、マイスター。このＯライザー、マイスターの一部になることを、ここに誓おうではないか』

「……ありがとう」

『……と、当然のことをしただけだ！　だから、そんな眩しい笑顔を妾に向けるでないぞ！』

眩しい笑顔と言われても、刹那からすればただ普通に笑っただけだった。もしコーンに感情の色が表出するとすれば、今のＯライザーはきっとＴＲＡＮＳ－ＡＭをした時のように真っ赤になっていただろう。

その時だった。

ブーッ、ブーッ、ブーッ！

「ッ！？」

『ッ！？』

――ラグランジュ１の施設全域に、不吉を匂わせる警報が鳴り響

いたのは。

「状況はッ！？」

「奴さんは恐らく「Ａ－ＬＡＷＳ」の精鋭部隊だ！　最近戦場で確認された疑似太陽炉搭載機が最低でも５機、確認できるぜ！」

「ジンクス？とアヘッドの編隊ね……さすがにオーバーＳはいないみたいだけど、こちらの戦力は『００』一機のみ。正直、厳しいわね」

ラグランジュ１に残っていたスメラギ・李・ノリエガとラッセ・グラッソは、モニターに映った大隊の軍勢を見て、苦しげに唸った。モニターには最近になって確認できたジンクス？とアヘッドが立ち並び、赤い壁のように包囲網を狭めながら、こちらに迫ってきていた。

「全く……二日前にアレが発射されたばかりだっていうのに、元気なこった」

「全くね。おかげでこっちはもうお肌かさかさよ」

「スメラギさん、あんたもうそういった年じゃ……いや、何でもねぇ」

Ｅセンサーで確認できるだけでも、５機の疑似ＧＮデバイスと百名以上の魔導師が確認できる。これだけの戦力で攻め込まれれば、いくら『００』が強力とはいえ、このラグランジュ１全域を守り切ることは不可能だろう。

他のガンダムが一機かニ機いるだけでもかなり違うのだが、他のガンダムは全てあちらの防衛に回され、此方側には一機すらも残されてはいなかった。それを今になって後悔しつつ、スメラギは頭の中で戦術を高速に練る。

「……いえ、駄目ね。恐らく『００』とはいえ、これだけの大軍を一人だけで相手にすれば、囲まれてやられてしまう危険性があるわ。かといって、こちらにはまともな武装なんてないし……」

何の策も思い付かず、八方の手が防がれていると感じたスメラギは、それでも考えることを止めなかった。ここから生き抜く手を考え続ける。『計画』のためにも、『仲間』のためにも、そして……

……あの時、四年前の戦争で「ＣＢ」の仲間を大勢犠牲にしてしまった自分の罪を、清算するためにも。

刻一刻と迫りくる敵の編軍を睨みつけ、考え続けるスメラギ。そんな彼女に運命の女神――いや、実存する女神、『神』に最も近しい存在は……

『……こちら刹那・Ｆ・セイエイ。聞こえるか、ブリッジ？　応答してくれ！』

「刹那、どうしたの？　Ｏライザーの説得中だったんじゃあ……」

『Ｏライザーの説得は成功した。今はイアンと一緒に調整を行っている！』

静かに、微笑みをもって応えた。

「……成功した？　そ、それじゃあ、まさか……！」

『あぁ……オレは『００Ｒ』で出るつもりだ』

その言葉を聞いて、スメラギは情けなくも、腰が抜けそうになった。殆ど不可能だと思われていたＯライザーの説得がこうもあっさり行ったことに疑問を抱くも、それを気にしても仕方がないと思い、割り切る。今はそれよりも、あの『００Ｒ』が出るということの方が重要であった。

あの『ヴェーダ』を持ってしても予測し切れなかった性能を秘める『００Ｒ』……それならばこの状況を切り抜けることは、十分に可能か……！

「刹那、相手は「Ａ－ＬＡＷＳ」の大隊並みの編隊よ。中には疑似太陽炉搭載機も5機、確認されているわ。とんだ初出撃でしょうが、今は貴方しかここを守れるガンダムがいないの」

『了解した。……イアン、『００Ｒ』は本当に大丈夫なのか？』

『俺にも分からん！　保障もできん！　テストを一回もやっていない機体を出すなんて、普通、考えられないんだぞ！？　だから、あまり無茶をするなよ、刹那！』

『……それは、恐らくできない。相手にはＡＡＡランク並みの機体が5機もいる。無茶をしなければ勝てない』

イアンと刹那が何やら言い争いをしている声が聞こえてくるが、その内容を聞いたスメラギは途端に恐ろしくなってきた。完全な状態では一回もテストをしていない『００Ｒ』。その信頼性ははっきりいって、限りなく底辺に近い。兵器としてみれば、間違いなく欠陥品だ。

戦場では信頼性のないものは使われない。それはどんな戦場にも言える、真理のようなもの。無論、本当ならスメラギだって『００Ｒ』ではなく、これまでの実績がある『００』で出てもらいたかっ

たが、それではこの危機的な状況を乗り越えられないということも、スメラギには分かっていた。

「ハッチを開けて！」

「了解！　刹那、頼むぞ！」

『了解した』

資源衛星が無数に存在するラグランジュ１の衛星の一つが上下に動き、出撃のためのハッチが開かれる。ハッチからはラインが伸び、オールグリーンの表示が『００』となった刹那のモニターに映った。

『それじゃあ、射出されてから三秒後にインストールとドッキングするんだぞ！　そのタイミングが一番ドッキングをし易いはずだ！』

インストールを終えた『００』が、その屈強な身を前かがみにする。後ろに回された二基の太陽炉からＧＮ粒子から絶え間なく噴射され、ハッチの内部を鮮やかな緑色で輝き照らす。

『行くぞＯガンダム、Ｏライザー。それに……エクシア！』

『『Ｙｅｓ，ｍｅｉｓｔｅｒ！』』

『Ｙｅｓ，ｍｅｉｓｔｅｒ！　マイスターの本妻、ほッんッさッい！！　であるエクシア、目標を駆逐します！！』

腰に二本のソードを、その後ろにも二本のサーベルを備え、計四本もの剣を携えた『００』は、目前の星が瞬く宙を睨む。

『『００Ｒ』、刹那・Ｆ・セイエイ、出る！』

刹那の声と共に射出されゆく蒼い流星。それを止められるモノは、果たして存在するのか……？

蒼い軌跡を描く流星は、今、漆黒の宙に解き放たれた。

――新暦７５年３月１５日――

最高評議会の一員であるラルゴ・キールは、不機嫌そうな雰囲気を隠さずに、同じ最高評議会議員であるミゼット・クローベルやレオーネ・フィルスと同じ席上についた。二人の顔はいつもと変わらないが、何を考えているのかまでは読み取れなかった。

「では、始めましょうか。まずはキール、サードエージェントの確保、ご苦労様でした」

「えぇ、えぇ。本当にお疲れさまでした、キール。まさかスクライア司書長がサードエージェントだったとは、思いもしませんでしたよ」

「……」

にこやかな顔で話しかけてくる同期の二人に、キールは嫌な予感を覚えずにはいられなかった。顔は笑顔を象っていたが、目は殆ど笑っていなかった。

「……こんな茶番を続ける気は、俺にはないぞ、ミゼット、レオール。貴様らが言いたいことは分かっている。ようは、俺の方がサードエージェントなのではないのかと、そう言いたいのだろう？」
「嫌だわ、キール。私達が貴方を疑うとでも？」
「それは心外だ。私達は仲間だろう、キール？」

齢にして８０近い二人は、キールに甘言を囁いてくるが、その裏には猛毒が潜んでいるように思える。キールは談笑をしているような二人の様子に、自身が疑われていることを確信した。

「……もう一度言うぞ、二人とも。俺はこの茶番に付き合うつもりは毛頭ない。早く要件を言え。俺は俺で忙しいのだ」
「そうですか……残念です。では、手短に要件を述べましょうか。ミゼット、貴方からお願いします」
「はい。……キール。貴方を私達の権限で拘束します。そしてユーノ・スクライアを解放して、無限書庫の司書長に復帰させます」

ミゼットから告げられたその言葉は、ある意味、キールの予想した範疇にあったものだった。しかし、実際に告げられた際の衝撃は、その範疇を容易く突き抜けていった。

キールはもう自身の退路がないことを覚悟しつつ、恐らくは最後の警告になるであろう言葉を、二人に残した。

「……アレによってガタガタとなった今の管理局を立て直すには、それしかあるまい。それは俺も理解している。だが、奴には気をつけろ。奴は近い将来、必ずや管理局を裏切るぞ！！」

両脇を武装隊によって抱えられたまま退室していったキールの言葉。だが、ミゼットにはキールがどうしてそこまでユーノを敵視す

るのかが、終始、分からなかった。

それもその筈。ユーノが疑わしいという証拠は、今までに一つだって出てきていないのだ。逆にキールは叩けば叩くほど、怪しい証拠が浮上してくる。これでは自分からサードエージェントだと告白しているようなものではないか。

それでも、ミゼットたちはまだキールを信じていた。拘束をしたのは、ユーノが復帰して、管理局を立て直すのを邪魔させないためだった。それに、管理局を瓦解寸前にまで追いやったキールの罪を贖わせるという側面もある。

キールが拘束される場所は、さっきまでユーノが押し込められていた独房室だ。入れ違いのように去っていく者と入っていく者が、視線を交えたかもしれない。そこに込められるであろう視線の強さを想いつつ、ミゼットはお茶を飲んで一息ついた。

「これで、ようやく管理局も本来の力を発揮できます」

「オーバーSの投入も、機動六課の投入も決まったことですし、これで民族紛争は沈静化に向かって動いていくと思います」

「キールには悪いことをしましたが、それも束の間のことです。頭を冷やして落ち着きを取り戻してさえくれれば、彼はきっと、「CB」だって退けてのけるでしょう」

伝説の三提督の名は伊達ではない。それを証明するかのように、力強くそれを宣言するミゼット。レオーネも同じなのか、その言葉に異論を挟まない。挟まないが……同時に、思うこともあった。

……どうして以前の最高評議会は、「CB」を見逃したりしたんだ？

喉に刺さった、小骨のような違和感。あまりにも小さすぎて、見逃しそうになりがちな疑問。それは何時までも何時までも、レオーネに疑念を抱かせ続けた……。

「そっちにはこの書類を運んで向こうにはこの資料を送って君にはこの請求をこなしてもらってこのグループはクロノの依頼を僕と一緒にこなしながら……」

「……さすがだね、ユーノは。もう無限書庫を立て直しちまったよ」

「当たり前です。あの方こそが、この書庫の唯一のマスターなのですから」

「あぁだからこれは向こうの隊に渡して……あ、次の作戦で「ＡＬＡＷＳ」はこういう作戦でくるのか。ならこれを利用して……えっと……これは次元航行隊と機動六課の方に回して……」

「にしても、いきなりで驚いたよ。あのラルゴ・キールがスパイの疑惑で投獄されたかと思えば、今度はユーノが解放されたからね。一体上は何を考えているんだか……」

「きっとドタバタドタバタと足を踏み鳴らしているのでしょう。足の乱れに巻き込まれる私達からすれば、堪らない話ですが」

「あぁあああの黒いのはまたこんな依頼を……もういい！　この面倒臭い依頼は僕が全部調べておくから、君たちは向こうのチームに

合流して……」
「そういえば、クロノはどうして第１０管理世界にずっと留まっているんだい？　ブック、あんた何か聞いてないかい、ユーノから？」
「……確か、「衛星砲」「ヴァルプルギスナハト」などを調べていると、司書長から以前、聞いたことがあります。それが何なのかは、私にも分かりませんが……」
「あの黒いの、今度会った時覚えていろよ……！　僕の権限で、また長期任務に晒して、エイミィさんとの仲を拗れさせてやる……！」
「「衛星砲」と「ヴァルプルギスナハト」ねぇ……それはアレかい？　ロストロギアか何かかい？」
「それは、私にも分かりません。ただ、時間がないとも言っていました」
「うがぁあああッ！　何この仕事の量!?　僕の後釜に入った司書長は仕事も何もしていなかったっていうの!?　こんなの絶対おかしいよ！　酷過ぎるよ！」
「……ユーノが悲鳴をあげてんぞ。逝かなくてもいいのかい？　アンタ、アイツの秘書だろう？」
「そんな肩書であそこの地獄に飛びこめるほど、私は勇敢な人物ではありません。例え不屈の精神を持っていたとしても無理です。死んでしまいます」
「ブックさん、ヘルプ！　本当に助けて！　お願い！」
「ほら、呼んでるよ？」
「いえ、聞こえません」
「え、ちょっと待って!?　ブックさんそれはどういう……あ、はいレティさん。えぇ、えぇ、お久しぶりです。それで、今日はどういったご用件……はい、はい、追加の資料請求を行いたいと。しかし、此方としてももう限界近く稼働していまして、これ以上の依頼は……え？　あれ？　何で通信が切れたんだろう？　故障かな？」
「さすがレティ。断られる前に通信を切るなんて、やるねぇ～」
「アルフさんも、ザフィーラさんに対してあれぐらいやれれば……

痛ッ！？　頭に拳骨はさすがに痛いのですが、アルフさん？」
「あんたがんなことを言ったからだろ！　少しは分かれ！」
「僕にはもう何が何だか……わけが分からないよ」

【私は貴方様の武器です。
貴方様の剣となり盾となり守護する為に存在するのが私です。
そういう存在こそが私だと、これだけは強く主張します。】

――鴨川秘様から、『イスカリオテ』のノウェムより

幕間―8（後書き）

『００Ｒ』が本当に活躍するのは、７．の破から。ちなみに、これで７．の序が終了、次からは急に入ります。

それは人類を裁く、死の星光か。発射された死星は大地を焼き払い、人々に死の概念を植え付ける。

一撃で国家を滅ぼす、脅威の大量破壊兵器。マッドサイエンティストにより造られし、死の凶星。

管理局とＡ－ＬＡＷＳ、そして聖王教会離反組はその破壊を試みようとする。それに相対するは、次元世界にその名を轟かせるガンダムたち。

番犬と１。羽と超光。目と騎士達。そして……星と星。

後に「メメント・モリ攻防戦」と呼ばれる戦争が、今、静かに開幕される……！

『世界に革新を齎すモノ』第７１話「死星」、投稿予定日は……

【未定】

第７１話　死星

――新暦７５年３月１２日――

世界はきっと、この日を忘れない。大きな戦と大きな災いが同時に降り注いだ、この新暦７５年３月１２日を。

その日、第６管理世界の砂漠地帯では、時空管理局とＡ－ＬＡＷＳが、これまでにない規模で戦争をしていた。また、戦争をしていた地域にはスィール王国という国があり、そこにはクーデター派の聖王教会が、国の護衛のために戦力を集結させていた。

万単位の戦力が血肉と共に衝突し、その戦争をこれまた万単位の軍勢が見守る中。両勢力の指揮官たちは、自軍の指揮を執りながら、しかし、ある懸念を抱いていた。

「……奴らはまだ現れていないのか？」

「は。今のところ、目撃した報告は一つも来ておりません」

戦闘を開始して、すでに６時間以上が経過していた。両軍とも、損耗率はまだ１０％もいっておらず、戦闘を続けるのに支障はない。

だからこそ、指揮官たちは困惑する。特に、この民族紛争で一度でも戦った者なら、誰もがその異常に気付いた。

「一体、どうしたというのだ……常ならば、すでに介入を行っているはず……」

戦争を武力でもって根絶させるテロ組織、ＣＢ。その手足にして

戦場の悪鬼たるガンダム。

その姿が、未だに確認されないこと……それが戦場にいる者たちの心を、酷く掻き乱す。

今までに一度たりとも戦場でその姿を見せなかったことはないガンダム。それが、どうしてこの大きな戦に限ってその姿を見せないのか……

「……嫌な予感がするな」

姿を見せない理由は両軍の誰にも分からない。分からないが……不吉な予感だけは、確かに感じ取ることができた。これはきっと、何かの前触れなのだと……指揮官たちは、そう思わずにはいられなかった。

第６管理世界の、戦争が行われている地表付近から高度１万ｋｍも離れた外気圏内。そこは宇宙空間に最も近い大気層で、雲すら遥か下にある。

『この放送を聞くＣＢの全クルーに告げます』

何も存在しない空間が、満天の星空の下に広がる。南天に差しかかった恒星が、第6管理世界の惑星を明るく照らす。

『これより、私たちCBはOp.Judgment Day（審判の日）を発動します。この作戦によって世界の悪意はCBに集約し、人類の統一を促すことでしょう』

何時もと変わらぬ、平和な天上。宙に近い空は、変わらぬ慈愛で人類の戦争をも優しく抱き止める。

まるで母のように、天使のように。

『しかし、それは私たちが世界の『悪』になるということです。私たちは正義を騙ってはいけません。大義だけを、戦争を根絶するという大義だけを、世界に見せつけるのです』

宙――空。青空――星空。星座――衛星。

『私たちはCB……世界から紛争を無くすモノ』

それは、確かに衛星だった。衛星であったモノだった。

『その為になら、私たちは人類に対し、未曾有の試練を与えることもできます』

しかし、今は死を司る星として、狂気のマッドサイエンティストたるジェイル・スカリエッティにより創造された、大量破壊兵器である。

『その為になら、私たちは人類をも裁きます』

その兵器の名は――メメント・モリ。

『世界の誰もが、私たちを『悪』だと断定し、断罪しようとするでしょう。絶対に許さないと、悪意を、憎悪を向けてくるでしょう』

その意味は、『死を想え』。

『それでも、私たちは……前に進みます。愚直だと言われようとも、前に進み続けます！』

そこに込められた想いは、果たして如何なるモノであったのか……それはきっと、儚い希望を信じる想いであったはず……。

その想いが成就することは……果たしてあるのだろうか？

『では……Ｏｐ．　ＪｕｄｇｍｅｎｔＤａｙ、発動！』

星座が煌いていた星空に、突如として巨大な物体が現れた。数百メートル近い大きさの、ひし形をしたその物体は、黒に近い灰色の外部装甲で太陽光を鈍く反射させながら、無音で青天に浮かんでいた。

その何ｔあるかも想像できないほど大きな物体は、周囲に外部装甲と同色のパネルを何十にも浮かばせながら、直径数十メートルはあろうアンテナのようなものを、地表と相対する平面から展開すると、そこに光りを――星の輝きのような光りを集束させていった。

それは、あたかもかのＳ．Ｌ．Ｂのような光りであり、それとは

全く異なる星光にも見える。

天上に輝く星となった巨大な物体――メメント・モリ。その光りは地表付近にいた魔導師からも確認することができた。何事かと思った魔導師たち、もしくは兵隊たちは、戦闘行為も止め、突然現れた星の光りに注目する。

それは、紛争地帯の付近に存在するスィール王国も同じであり、そこに住んでいた１００万人近い国民の全員も、例外ではない。

『メメント・モリ……発射ッ！！』

そして、数万もの軍隊と１００万人もの民間人に見上げられていた死を現す衛星は、その星の光りを直下の戦域へと発射した。莫大な熱量とエネルギーで構成された、死しか齎さない星光を。

……音は無かった。

時は一瞬で過ぎ去った。

……そして、後に残ったのは、巨大なキノコ雲とクレーターだけ。そこに在ったはずの軍隊とスィール王国は、もう二度と、史実に登場することはなかった……。

――新暦７５年３月１３日――

八神はやては、モニターに映る大量虐殺を前にして、何も考えることができなかった。何故なら１００万人単位の虐殺は彼女のキャパシティーを遥かに超えていて、脳が安全のために何も感じなくさせたからだった。

「こ、れは、一体……何が起こったんや……？」

目の前のモニターに映る映像は、ＣＢがありとあらゆる情報機関に流してきた映像のワンシーンだった。モニター越しに見る悲劇は、現実感が湧かないと相場が決まっているのに、この映像はそれを許さないだけのリアリティでもって、はやてに現実を叩きつけてくる。

現実――そう、これは現実だ。現実に１００万人もの人々が、ＣＢによって、確かに虐殺されたのだ。

「「「……」」」

映像を見ていたのははやてだけでなく、六課の主要メンバーもその映像を見ていたが、あまりの出来事に、口を閉じる思考さえ残っていなかった。

「あ、アニュー……アニューはこれを知ってたんか？」

「……」

「アニュー？」
「……はっ！？　い、いえ、すみません。ちょっと茫然としていました……」

そして、アニュー・リターナーもまた、その映像を信じられないものでも見たような表情で眺めていた。はやてはＣＢから抜け出してきたアニューにこの兵器について質問するが、アニューが大きく動揺していたので、まずは落ち着かせてから質問を行った。

「あ、あの兵器は「メメント・モリ」と言いまして、ＣＢが『計画』を遂行するために建造する予定だった大量破壊兵器です」
「……予定、だった？」
「は、はい、予定だったのです。しかし、エネルギーの供給や浮遊の問題で躓き、開発は中止されたはずです。なのに、どうして……！」

アニューが言うには、メメント・モリは開発されていなかったらしい。しかし、現にメメント・モリは誰かによって開発され、建造されている。イオリアはガンダムの開発で忙しかったため、メメント・モリの開発には関われなかったはず。ならば、一体誰がこれを……

「……そう。だからＣＢはジェイル・スカリエッティを求めたのね」
「「「……！？」」」

その答えにいち早く気付いたのは、フェイト・Ｔ・ハラオウンだった。その目にはもう我慢しきれそうにない怒りが見え隠れし、今にも画面の向こう側にいるであろうスカリエッティを捕らえにいきそうだった。

「いくらイオリア・シュヘンベルグでも、ガンダムの開発と並行して他の兵器を開発することはできなかった。でも、彼と同等の科学者は他にもいた。それこそメメント・モリすら開発できるような天才が」

「それが、ジェイル・スカリエッティですか？　でも、確証はありませんよね？」

「それでも、私はそうだと思います。少なくても私は、良い悪いを別にして、スカリエッティ以上の科学者は見たことがないし、聞いたこともないです。そして、彼だったらこれを造れると、そう思います」

フェイトの声には、些かの迷いもなかった。その拳は白くなるほど強く握りしめられている。

「……それで、私たちはこれからどうするの、はやてちゃん？」

「どうするもこうするもない。私らはこのメメント・モリを破壊しにいくで。こんな兵器、一分一秒たりとも野放しにはできへん！！」

高町なのはの顔色は、若干蒼ざめていた。それははやても一緒で、さらに言えば、ここにいるほぼ全員がそうであった。

しかし、彼らは時空管理局に所属する部隊だ。だとすれば、次元世界に危機を齎すモノの破壊も、任務の一環である。

だが、同時に彼らは気付いてもいた。メメント・モリを破壊しようとすれば、そこには必ずやガンダムがいるはず。それは即ち、ガンダムとの死闘が目前にまで迫ってきているということでもある。

いくら機動六課の戦力が異常といえど、六課だけでガンダムの守りを突破し、メメント・モリを破壊することは不可能である。六課

の母艦でもあるアースラには数百キロの範囲を消滅させる魔導砲「アルカンシェル」もあるが、さすがに高度１万ｋｍでそれを使うことはできなかった。

なのは達が当事者として解決した「闇の書事件」では、アルカンシェルはアースラが航行していた衛星軌道上――つまりは地球同期軌道上にて使用されたが、それはアルカンシェル使用の最低高度でもあった。

仮に、第６管理世界の惑星を地球とほぼ同じだと仮定すれば、地球同期軌道上――すなわち、アルカンシェル発射に必要な高度は３万６千ｋｍになる。

そして、メメント・モリが存在するのは高度１万ｋｍの外気圏内である。もしそこでアルカンシェルなどを使えば、第６管理世界はかつての第１０管理世界と同じように滅びの道程を歩むことになる。

恐らくはそれも分かっていて、ＣＢはその高度にメメント・モリを配置したのだろうが、だとしても、それで六課が出撃しないわけにはいかなかった。今もまた映像の中で、メメント・モリは次射の準備を行い、次の標的たるリチエラ王国に照準を合わせている。必死の避難行動も、恐らくは手遅れになるだろう。

例え六課が今から向かったとしても、恐らく次射には間に合わない。再び１００万人単位の虐殺を許すことになる。

それでも、メメント・モリに一番近い次元を飛んでいたのは、アースラで第６管理世界に向かっていた機動六課であり、加え、第６管理世界に駐在している戦力だけでは、メメント・モリは愚か、ガンダムの防壁を突破することさえ無理だ。

何故なら、第６管理世界に駐在していた第５次元航行艦隊および第１５次元航行艦隊は、すでにＣＢによって壊滅させられていたからだ。その映像も、はやて達は先程目にしている。

機動六課以外で近くにいる艦隊は、第４次元航行艦隊と第１２次元航行艦隊、それに第１４次元航行艦隊だけだった。三艦隊とも現在第６管理世界に向けて最大戦速で急行しているが、やはり六課と同じく、第６管理世界で合流するには３日ほどかかるらしい。

はやて達にとっては、永遠にも等しい３日間。メメント・モリはその間にも第３、第４の照射を行い、第６管理世界を焦土と化していくことだろう……。

はやて達と時同じくして、ＣＢの流した虐殺映像を食い入るように見つめていたカリム・グラシアは、すぐに管理局と連絡を取るように、周りのシスターたちに指示を飛ばした。そしてカリム自身は拠点としていたＸＶ級次元航行艦「ノスタルジア」の艦橋へと走っていった。

「艦長、今の映像をご覧になりましたか！？」

「えぇ、見ましたとも騎士カリム。あんなに胸糞悪い想いをしたのは久しぶりです」
「なら、私がこれから言うことも分かりますね？」
「はい。ノスタルジアは準備ができ次第、すぐにでも出航させます。……野郎ども、我らが騎士様たっての御希望だ！　命削る気で準備を早く終わらせろ！　いいなッ！？」
「「「おぉーーッ！！」」」
「……ありがとうございます。貴方たち全員に、聖王様の御加護があらんことを……」

腹周りの大きい中年男の罵声に、艦橋にいた男ばかりの船員たちは威勢よく答えた。中には興奮のし過ぎで鼻血を垂れ流している者もいた。心なしか、目も血走っているように見える。

その異様な雰囲気に若干以上に引きながら、艦橋を後にしたカリムは、そのまま戦闘部隊のいる作戦会議室へと足を動かした。一歩一歩、歩く時間さえ狂おしいほど長く感じる。

「……では、戦闘の総指揮官は私が、副指揮官はムーヴ＝スラスターでいいですね？」
「「「はい！」」」
「私たちの目的は、あくまでもあの巨大兵器の破壊にあります。それを忘れないように」
「「「了解です！」」」

会議室に到着したカリムは、すぐさま作戦の概要と指揮官を決めた。といっても、概要は管理局と共同して巨大兵器を破壊することを改めて定めただけであり、指揮官も半ば決まっていたようなものだったので、混乱は生じなかった。
「貴方たちに、聖王様の御加護があらんことを……」

「「「あらんことを……」」」

最後に聖王へ祈りを捧げ、思い思いの準備をしにいく数百名の騎士たち。カリムは最後の一人が退出するまで作戦会議室に残り、そこで深い溜息をついた。

「……『天上人は目的を果たすために全てを敵にするも、その全てを退け愚直する』ね。もし予言の通りだとしたら、私達の行動は意味のないことになるのかしら？」

それは、カリムの予言に記された一節。そこに込められている意味は、どう考えても此方側の敗北としか解釈できなかった。

全てを敵に回しかねない、ＣＢの大量虐殺。しかし、予言ではＣＢはその全てを退け、進み続けると記されている。それはつまり、ＣＢの行いは止めることができないということなのか……？

だとすれば、これからカリム達が行う行為は無駄になるのか？虐殺行為を見逃して、次の機会を待てとでも言うのか？

……そんなこと、カリムには到底できなかった。なれば、後は足掻くしかない。

例え無駄になろうとも、それで一人だけでも救えるのなら……カリムは喜んでその無駄を背負う。そういう人間なのだ、カリムは。

「聖王様……皆に、御加護を……」

作戦会議室にこもるカリムの声。その声には、並大抵じゃない覚悟が滲んでいるように思えた。傍らにある札型ストレージデバイス

「トライアンフ」を強く掴む。

「そして、貴方自身にも御加護がありますよう、私はお祈り致します……」

俯いて祈りを捧げていたカリムが顔を上げた時。その顔はシスターとしての顔ではなく、戦士の顔となっていた。１５年前の戦争以来、一度も現したことのない戦士の顔を形作ったカリムは、連絡を付けようとするシスターたちの手伝いをするために、最後、独りで作戦会議室から出ていった。

その小さくて可憐な背中に、離反組の聖王教会の命運を担いながら……カリムは独り、奮闘していた。

今や管理局と同じ超組織となったＡ－ＬＡＷＳも、管理局と同じく、メメント・モリの対応に追われていた。十数隻もの戦艦が、数ヶ月かかって造られたドッグに一列で並ぶ様は、まさに圧巻としか表現できなかった。

Ａ－ＬＡＷＳが急遽編成した、メメント・モリ破壊のための艦隊。その旗艦であるＭ級次元航行艦「マリアンヌ」の艦橋で、Ａ－ＬＡＷＳの幹部たちは作戦を練っていた。

艦橋にいたのは、ロベルト＝コーナー、ザ・サムライ。

リジェネ・レジェッタ、アイシス。

そして……ジャンヌと一部の将校である。

彼らは第６管理世界の地図を指差しながら、激論を交わしていた。それでも、有効な手立ては一向に見つからない。アルカンシェルは使えず、かといって遠距離では艦隊ごと消滅させられ、近づいたとしてもガンダムの障壁を突破できるだけの戦力を、Ａ－ＬＡＷＳは準備することができなかった。

それでも、Ａ－ＬＡＷＳもまた出撃しなければならない。彼らは管理外世界を守る、独立治安維持部隊。いつ管理外世界に向けられるか分からない兵器を破壊することも、彼らの立派な任務の一つである。

Ａ－ＬＡＷＳは今回の破壊任務に、残り三人（とガンダム一機）となったオーバーＳを、二人（と一機）も投入した。それがＡ－ＬＡＷＳのこの作戦に対する覚悟であり、意気込みでもある。

彼らはここで、ＣＢを一気に壊滅させようとしていた。今回ばかりは管理局もＣＢに集中せざるを得ないので、それに協力する形で、ガンダムを討とうと計画していた。

聖王教会がどう出るかが不明だったが、だからといって、こちら

の邪魔立てだけはしてこないだろう。あれほどの兵器を野放しにする理由は、聖王教会にもないはずだ。故に、Ａ－ＬＡＷＳはＣＢだけ相手取ればよい。

管理局とＡ－ＬＡＷＳという二つの超組織。それらが初めて手を組んで行う協同作戦……

……それが４年前の「フォーリンエンジェルス」を彷彿（ほうふつ）させるということに、一体誰が気付けたであろうか？

それをこそ狙っていたＣＢの思惑に、見事に踊らされていたと気付くのは、果たして何時になるのか？

少なくても、今のＡ－ＬＡＷＳにはその余裕はなかった。

「始まったな」

「えぇ。……これで僕達は、もう後には引けない」

「あとはただ、前に進むだけだ」

メメント・モリ。ＣＢが建造した、ロストロギア級の大量破壊兵器。その威力は一撃で大国をも蒸発させ、師団をも壊滅させるほど。

また防御力自体も相当に高く、周りに取り付けられた黒っぽい灰色の装甲板は、ＸＶ級次元航行艦の主砲にも耐えられる強度を持つ。それは周りに何枚も浮かんでいる、幾枚もの装甲板も同じ。メメント・モリ本体を守護する二つの装甲は、まさに鉄壁の防御壁としてメメント・モリを防衛していた。

三人のマイスターたちはそれを輸送艦の中から見ながら、遂に来るべき時が来たのだと、そう思った。第三段階「統一」のファーストフェイズ、「メメント・モリによる悪意の集束」……それは事前に覚悟をしていても、マイスターたちの内心に深い傷痕を刻みつけた。

「……アレルヤ、ティエリア。オレはアニューや聖王教会時の方を何とかする。だから、後は頼むぜ」
「……分かったよ、ロックオン。管理局とＡ－ＬＡＷＳはこっちで何とかするよ。そうでしょ、ティエリア？」
「あぁ。僕がリボンズやヒリングと一緒にＡ－ＬＡＷＳを、アレルヤがデヴァインとリヴァイヴと共に管理局を抑える。だからロックオン、君は聖王教会とアニューの方に集中してくれ」
「……ありがとう、恩に着るぜ」

刹那を除いたガンダムマイスターたちが、全員、メメント・モリの防衛に駆り出されていた。それはライセンサーも同じで、ＣＢが保有するガンダムのほぼ全機がここには揃っていた。

揃っていないのは、調整中の刹那と、他の任務に当たっているネーナのみ。その二人を除いた全戦力を、ＣＢはメメント・モリの防衛に注ぎ込んでいる。

「それにしても、これだけの戦力で作戦に当たるなんてね……四年前の時を思い出すよ」
「……そうだな。最も、四年前のように負ける気はさらさらないが」
アレルヤとティエリアの脳裏に、四年前の決戦が思い起こされた。世界清浄の四大幹部と裏切り者のアレハンドロ・コーナー、そして対ガンダム部隊として結成された、５番目の特務機動隊との死闘……
その時は敵陣にも多大な損害を与えたが、結果としてＣＢは敗北を喫した。だが、それを繰り返すつもりは、二人には毛頭なかった。
が……負ける気こそないが、メメント・モリを守る気も、同様にない。いくら『計画』に必要な手順とはいえ、こんな虐殺を行う兵器が在っていいとは絶対に思えない。
いっそのこと、自分達の手で破壊しようか……？　そういった考えを抱いたのも、すでに一度や二度どころではない。
「そういや、あの白仮面と二人の魔導師も、ここにいるんだろう？　あいつらは何処に配属されるんだ？」
「それは僕も知りたいね。さっきまでトリニティ艦にいたのは見たけど、彼らはどこに配属されるのかな？　ティエリア、君は何か知っているかい？」
「ミス・スメラギの作戦では、彼らはトリニティ艦を中心に動くらしい。ＧＮキャノン？とガガキャノンの半分はセファーが動かすと聞いている。……それ以上は僕も知らない」
それでも、彼らは世界に変革を、革新を齎すために、ここでメメント・モリを守らなければならない。絶対にだ。ＣＢの力を世界に知らしめ、存在するだけで意味のある組織――抑止としての存在に

なるためにも、ここは絶対に退いてはならない。

そのためになら、自分の尊厳をも溝（ドブ）に捨て去ろう。それだけの覚悟を持って、彼らはマイスターとなり、世界に対して変革の刃を突き付けているのだから。

「ティエリアが知らないとなると、誰も知らないんだろうな……しっかし、あんな胡散臭い奴らを信じてもいいのかよ？」

「今は信じるしかない。それに、彼らの戦力だって今は必要だよ。ロード、はいないみたいだけど」

「ユニゾンデバイス自体、過去に８騎しか確認されていないぐらい希少だからな……ロードなしで、果たしてどこまで戦えるのか。少なくても、信用できても信頼はできん」

四年前では、『宣言』することさえ叶わなかったＣＢ。しかし、今では第三段階に移行するほど、『計画』は順調に進んでいた。

その代償として、様々なモノを――裏切り者、人心など――を失ったが、彼らはそれでも愚直を続ける。

「……んじゃ、向こうさんが攻めてくる３月１６日まで、精々英気を養っているとしようか」

「そうだね。長い長い戦いになるだろうし、今の内に身体を休めた方がいいよ」

「あと３日……か。これから起こる防衛作戦を思えば、短く思えるな」

その果てにある変革を……革新を信じて。彼らはガンダムという天使の力を振るう。

ふむ、どうやら予定通りの性能のようだ。安心したよ、あんな兵器を造ったのは初めてだったからね。

「Ｄｒ．が造ったのですから、当たり前です。しかし、Ｄｒ．はこれでよかったので？」

……まぁ、これだけの生命を冒涜したのは、さすがに心が痛むね。それと並行して自分の造った兵器に興奮しているのだから、私はつくづく救えない人間だ。今も胸の鼓動が鳴りやまないよ、ウーノ。

「Ｄｒ．がそう仰るのでしたら、私たちからは何も言いません。それに、トーレと益荒男、それとセッテも、メメント・モリを守ることに異論はないようです」

ふむ、クワットロはメメント・モリの中にいることだしな。

「……あの子は、Ｄｒ．の因子を強く受け継いでおられますから」

まさかアレの発射を指揮したいとはな……さすがは私の娘、と言ったところか。私としては、娘に押して欲しくはないのだがな。

「しかし、これはあの子が決めた事です」

そうだ。だから私はあの子の意思を尊重し、メメント・モリの指揮系統を彼女に明け渡した。一発で大国をも消し飛ばす、あの兵器のな。それに罪悪感を覚えないとは言わないが、何、娘のしたいことを支持するのも、父親の役目さ。

「……」

うん？　どうしたんだねウーノ？

「父親……Ｄｒ．が父親でしたら、やはり母親役も必要なのでは？」

母親？　母親かい？　ふむ……しかし、私は人工的に生み出された人間だ。母の温もりなど知らないぞ？

「で、でしたら、私が母親役として、Ｄｒ．の側にいてもよいでしょうか！？」

ウーノがかい？　でも、君にも母親としてのデータはないはず……

「ありませんが、そこは勉強しますので問題ありません。それよりも、Ｄｒ．の負担を少なくするためにも、私が母親役として姉妹たちに接するべきです！」

ウーノの言葉にも一理あるが……ウーノはそれでいいのかい？一般的に夫婦とは、好き合った者同士がなるようだが……

「構いません。私はＤｒ．のことが好きです。愛しているといってもいいぐらいです！」

ふむ……ウーノには私の秘書と長女を担ってもらっていたから、これ以上の負担をかけたくはなかったのだが……確かに、教育には母親も必要だ。ではウーノ。私の妻として、これからも私も研究を支えてくれるかね？

「勿論です、Ｄｒ．。私はいつまでも貴方を支え続けます」

……ありがとう、ウーノ。では、早速研究を再開しようか。

「はい、Ｄｒ．」

今回の研究は、ラジエルが私に渡してきたこの設計についてだが……さてはて。この１．５ガンダムの疑似太陽炉とは一体何のことなのかね？　それに、疑似太陽炉でツインドライヴシステムを発動させることが可能だとは聞いていないが……何を考えているんだろうな、ラジエルは？

それに、この開発コードも、あの『世界に革新を齎すモノ』に類似しているが……まぁ、私の考える事ではないか。

『人類を救世に導くモノ』……それを完成させることが、今の私の仕事だな。

【誰もが天を仰いだ。
ある者は怯え、

ある者は哭き、
ある者は魂を奪われた。
その不可解でまた美しくも絶望的な光景を前にして……
それはさも死の香りに酷似していたという……】

――『ブレイブ・ストーリー　～新説～』の「アウラ黙示録　炎竜の章　第三節　イル・ダヤムロー」より

第７１話　死星（後書き）

アカン、あと２話でメメント・モリ攻防戦を書き切る気が全くしない……！

これはもう、戦闘シーンを大幅に削る、もしくは話数を増やすしかないのか……！

個人的には戦闘シーンを削って、ギリギリ２話で終わらせる予定です。ガンダムとオーバーＳの戦いも、ぎっちょんぎっちょん削ろうかと。

……まあ、話数を増やすこともできなくはないのですが……といいますか２万字で書き切れないって、どう考えてもおかしいでしょ……！

全く、わけが分からないよ。

次回の投稿予定日：２０１１年７月２３日……から、８月６日の何れかにする予定

第７２話　星々　【序】

――新暦７５年３月１６日――

『……』

アリオスとなったアレルヤ・ハプティズムは、眼前に広がる無数の艦隊を前にして、静かにオッドアイの目を閉じた。金と銀の両目はアレルヤともう一人のアレルヤ――別人格であるハレルヤを示すものだが、ハレルヤは眠ったかのように起きてこない。

それに不安を感じるが、その不安を振り切り、彼は一ガンダムマイスターとして任務をこなそうとしていた。任務の内容は、彼が後ろに背負った衛星兵器「メメント・モリ」の防衛である。

そして、眼前に広がる管理局の艦隊は、その破壊を目的としていた。

『……マイスター、時間です。メメント・モリの照射が行われる前に、カタパルトから出撃して下さい』

『了解。……アリオス。ハレルヤのいない僕で悪いけど』

『Ｎｏ，ｍｅｉｓｔｅｒ。私にとって、マイスターは貴方であり、ハレルヤではありません。ですから、自信を持って事に当たって下さい。マイスターの補助をするのも、私の役割です』

急造の艦隊とはいえ、戦力の中心にはあの因縁深き機動六課がおり、ガンダムといえど、決して油断はできなかった。しかも、ヴェーダの情報では、離反組の聖王教会も此方に向かって航行しているという。それも考慮しなければならない。

『電磁カタパルト、ＯＫです～！　ハプティズムさんにコントロールを譲渡しますです～！』
『了解……Ｉ　ｈａｖｅ　ｃｏｎｔｒｏｌ』

常ならば腰が非常に重たい管理局も、すでに９つもの都市を灰塵に帰し、犠牲者を５００万人以上も生み出したメメント・モリを危険視しているようだ。

それはＣＢの『計画』からすればまさにシナリオ通りなのだが……この胸のわだかまりだけは、どうしても取り除くことができなかった。

『アレルヤ・ハプティズム、アリオス、行きます！』

飛行形態でメメント・モリ内部から射出されるアリオス。股間部に搭載された太陽炉から緑色のＧＮ粒子が盛大に噴き出る。閃光と見紛うとスピードで、戦場の先端を駆け急ぎ、後方に数百機以上ものＧＮキャノン?とガガキャノンを引き連れ、管理局の艦隊との距離を無くしていく。

『戦うさ……僕は、戦う！』

艦隊からの砲撃が、アリオスのモニターを埋め尽くす。２メートルほどしかないアリオスを丸々と呑み込めそうな艦砲の雨。それを右に左にと掻い潜りながら、アリオスは最前線にいたＬ級次元航行船の艦橋にＧＮツインビームライフルの掃射を浴びせ、一隻を火だるまとした。

それと並行して、メメント・モリからも極太の光線が放たれ、艦

隊の数を大きく削った。アリオスは艦隊の中に飛び込み、その中から管理局の艦隊を翻弄する。

それらが合図となって、ＣＢと管理局、Ａ－ＬＡＷＳ、聖王教会による「メメント・モリ攻防戦」は始まった。

機動六課の母艦として機能するアースラの艦内から、キャロ・ル・ルシエは相棒である飛竜のフリードリヒと一緒に、瞬きの光りが散りゆく戦場を見つめていた。

「……」

「きゅるる～……」

キャロは目の前で起きている戦争が、怖くて怖くて堪らなかった。生死を賭けた戦いなど、９歳の少女が体験するようなものではない。しかも、その両肩には彼女の民族の命運までもが重く圧し掛かっていた。

「……」

追放されたとはいえ、キャロはル・ルシエ族を見捨てることはど

うしてもできなかった。メメント・モリによってその総数を半分以上も減らしてしまったル・ルシエ族は、すでに民族としての体すらも保てなくなっていたが、それでも彼女はル・ルシエの民を助けたかった。

例え追放されようとも、彼女にとってそこは、帰る場所の一つであったのだから。

「……行こう、フリード。皆を守りに」
「きゅけー！」

大丈夫、彼女の傍らには騎士がいる。騎士がいる限り、彼女は決して挫けない。

「……大丈夫、キャロ？」
「私は大丈夫だよ、エリオ君」

竜の巫女を守護せし雷の騎士、エリオ・モンディアル。彼がいる限り、キャロは絶対に大丈夫だと、そう言い切れる。

「キャロがそう言うなら、僕は信じるけど……無茶しそうだったら止めるからね？」
「うん」

キャロによって、フリードリヒが本来の飛竜としての姿を現した。白銀の飛竜の名に恥じない立派な体躯は、キャロとエリオの二人を乗せても、ビクともしない。

そして、翼を広げ、アースラから飛び出した二人と一匹は、傍らを飛ぶフェイト・T・ハラオウンと一緒に戦場へと駆けていった。

戦場は混戦としていた。しかし、ＣＢ側の火力が強すぎて、管理局の艦隊はメメント・モリに近づくことさえできなかった。砲台と呼ばれるＧＮキャノン？は、これまでのＧＮコンデンサー型から疑似太陽炉搭載型に改良され、以前よりも砲撃の威力が増しており、一発で魔導師を数名も消し去るどころか、４発も当たれば、航行艦すらも轟沈せしめた。

それに加え、同じく疑似太陽炉搭載型としてＡＡランク相当の性能を持つガガキャノンがＧＮキャノン？をサポートするように連携して動き、ＧＮキャノン？の弱点である接近戦の弱さを、ミドルレンジにおいてカバーしていた。

ＧＮキャノン？の砲撃と、ガガキャノンの射撃。砲撃は遠距離を、射撃は中距離を担当し、互いが互いを補助し合っていた。しかも、それら数百機は全て無人機であり、ある一人の人物によって操作されることで、完璧な連携を可能にしていた。

それらを操作している人物は、メメント・モリの近くに構えるトリニティ艦に乗船していたセファーであった。見た目が青年なのか少年なのかが分からないユニゾンデバイスは、並みのインテリジェントデバイスを遥かに超える演算能力と並列思考を持ち、数百機近い機体の全てを遠隔操作することさえ可能としていた。

ロード――本来の主がいないにも関わらず、セファーの性能は凄まじい物だった。だが、それよりも目に付くのは、やはりというか、

ガンダムたちの活躍であった。

メメント・モリの照射で隊列を崩した艦隊に突撃し、さらなる混乱を招いたアリオス。その後ろに陣取っていたレグナントは、アリオスよりも強力な火力で混乱をさらに広めた。そこに止めとして刺されるガデッサの砲撃。

この三段攻撃により、管理局の隊列は早々に瓦解。今はアースラと第４次元航行艦隊を中心にして立て直しを図っていたが、ＣＢ側の猛攻により、立て直しは遅々として進まない。

それに痺れを切らした管理局側――正確に言えば、第４次元航行艦隊の艦長兼総指揮官――は、機動六課にある命令を下した。

その命令とは、封印が解けて間もないオーバーＳの投入。そのオーバーＳの名は高町なのは。

つまりは、管理局が誇るエース・オブ・エースを、混沌とする戦場に投入して、形勢を逆転させようとしたのだ。八神はやてはそれに猛抗議をしたが、その抗議は考えることすらされずに一蹴されてしまい、従う他なかった。

「……久しぶりだね、レイジングハート。こうやって、戦場で空を飛ぶのは」

『Ｙｅｓ，ｍａｓｔｅｒ。大凡五ヶ月ぶりとなります』

しかし、なのはは笑う。緊張感に張り詰めながらも、どこか懐かしい空に嬉しさを覚え、頬を緩ませる。

「にゃははは……訓練で少しは勘を取り戻したつもりだけど、ブラ

ンク明けの初戦だから、サポートお願いね？」
『Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ，ｍａｓｔｅｒ。お任せを』
圧倒的な魔力で繕われた、とんでもなく強固な純白のＢＪ。
それを纏ってなお、平均的な魔導師よりも早く飛べる、羽の生えたブーツ。
そして、なのは専用のチューニングが施された、なのはを象徴するワンオフインテリジェントデバイス「レイジングハート・エクセリオン」。
その威容は、御姿は、五ヶ月前と何ら変わりなかった。戦闘用のエクシードモードを風にはためかせる彼女は、先端が二股に分かれ、その間から桃色のストライクフレームを覗かせるレイジングハートを正面に向けながら、本当に人間かと疑いたくなるような魔力を練る。
「それじゃ、最初から全力全開で行くよ！　ディバイィーン……」
なのはの言葉に合わせるようにして、莫大というのもおこがましい魔力が一点に集中していく。魔力の鼓動は大気を震わせ、これから放たれるであろう砲撃の序奏をビリビリと奏でる。
なのははその久方ぶりの感覚に、口角を柔らかく吊り上げながら、最後のスペルを唱えた。
「バスタァアアアアーー！」

視界を丸々と覆うほどの、馬鹿げた大きさの砲撃。直径数メートル以上もあるそれは、なのはの前にいたＣＢの軍勢にぶち当たると、そこをまるで、何も無かったかのように通過していき、ＣＢの防衛ラインにぽっかりと、大きな空白地帯を作った。

これまで頑なに魔導師の一人すらも通させなかった、ＣＢの堅牢なる防衛ライン。それをたった一撃で崩してしまったなのはの砲撃。

これではどちらが人間で、人間でないのか、全く分からない。それだけ、なのはの砲撃は規格外の代物だった。

『なんて、砲撃だ……！　クッ、これ以上はやらせんぞ、高町なのは！　ティエリアと互角に戦えたとしても、病み上がりの貴様程度に敗ける私ではない！』

脅威。それはＣＢにとって、正しく脅威だった。スメラギの戦術すら覆し得る、圧倒的なまでの戦略級魔導師。

リヴァイヴ・リバイバルはその危険性を、同じ砲手として、正しく理解していた。だから、緑基調のガデッサを、砲撃の反動で動けないなのはがいるアースラへと急行させた。

それはガデッサのできる、最善の手であった。しかし、相手は管理局のエース・オブ・エースとまで呼ばれた大魔導師である。なのはに限って言えば、それは最善の手になり得ない。

「レイジングハート、もう一発行くよ！」

『Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ，ｍａｓｔｅｒ。アクセルシューター』

「ディバイィーン……バスタァアアアーー！！」

桃色の砲撃が通り過ぎた空間を進むガデッサへ、同じ色をした誘導弾が全部で３０発も、一斉に飛んできた。リヴァイヴはその数に驚き、進行を中断してしまう。そしてＧＮメガランチャーを構え、誘導弾を迎え撃とうとする。

その間に、なのはは次射の準備を終え、発射のシークエンスへと移っていた。ガデッサが誘導弾を撃ち落とした頃には、すでにガデッサのモニターには目も眩むような白色が迫ってきていた。

『この……イノベイドを舐めるな！』

『高濃度圧縮粒子、解放！』

ガデッサは咄嗟の判断で、溜めていた粒子を解放し、目の前の砲撃へと吐きだすようにして粒子ビームを撃ち出した。それがなのはのディバインバスターと衝突して、昼間の空に新たな太陽を生み出す。

音量が大きすぎて、逆に無音となった世界。その中で、桃色と赤橙の砲撃は、互いに競い合うようにしてぶつかり合う。

一体どれだけの間、拮抗していたのか。時間の概念すらあやふやとなる中。ガデッサはアースラの甲板にいるのがなのはだけでないことに、今更ながら気付いた。

『アレは……まさか、ディエチ！？』

「ターゲットロックオン、照準良し」

彼女の身長ほどもある、巨大な砲身。それはナンバーズの砲手である「Ｎｏ．１０」ディエチの固有装備だ。その見た目通りに砲撃に特化したその装備は、オーバーＳに匹敵する砲撃を放つことがで

きる。

ということは、

「イノーメスカノン、発射！」

『グッ……グゥッ！？』

なのはの砲撃にディエチの砲撃が加われば、威力は単純計算でもほぼ2倍となる。

『お、おぉおおおおッ！？』

『ライセンサーッ！！』

それを、いくら「大魔砲」と呼ばれたオーバーSに撃ち勝ったこともあるガンダムヴァーチェのデータが利用されているガデッサとはいえ、真正面からそれを受け止めるなど、無謀もいいところ。

現に、砲撃をした反動で後方に猛烈な勢いで下がっているガデッサへと、桃色と橙色が混ざり合った砲撃が追い縋（すが）ってきた。その勢いはガデッサの砲撃を相殺して、なお衰えを見せない。

『……助太刀するぞ、リヴァイヴ！』

もしここでレグナントの大型GNキャノンが放たれなければ、ガデッサはこの一撃で大破していたかもしれない。それだけの威力が、あの砲撃にはあったのだ。

『感謝する、デヴァイン。それで、私達はどうすればいいんだ？』

『……このまま戦闘するしかあるまい。無限書庫が復活したとはいえ、昨日今日でメメント・モリの資料が出てくるとは思えんしな。

奴らはメメント・モリを正面から破壊するしかないはず』
『だったら、ここで戦力を消耗させて、その力を失くそうとでもいうのか？』
『……その通りだ。だから、オレ達はここで奴らを足止めできていればいい』

緑色の装甲を僅かに焦がしたガデッサへ近寄るレグナント。今のレグナントは人型だが、スカリエッティの技術により、以前よりもかなり稼働時間が伸びているので、その形態のまま戦うことができるようになっていた。

『それができれば苦労をしないんだが……な！』
『全く……な！』

正確な狙いで放たれた桜色の砲撃を、ガデッサは紙一重で回避する。レグナントは橙色の砲撃を、球状のＧＮフィールドで防ぐ。

『長い戦いになりそうだな』
『……あぁ』

レグナントがエイを思わせる飛行形態に変形し、アースラへと突っ込んでいく。それを援護するように、ガデッサから粒子ビームがばら撒かれる。

戦いは、まだまだ始まったばかりだった。

フェイトとエリオ、キャロ、それにフリードリヒは、大気を置き去りにする速度で、敵陣の真っ只中を飛び抜けていた。彼らが担う役割は、ＧＮキャノン？とガガキャノンを操作しているデバイス――つまりは、セファー――を、どうにかして止めることであった。

アニューが言うには、無人機を動かすのは基本的にセファーなのだという。それはヴェーダではできない有人機特有の動きを再現することができるから……らしいのだが、今必要な事実は、無人機を動かしているのがセファーなのだという事実のみ。

実際、無人機なのにも関わらず、ＧＮキャノン？とガガキャノンは妙に人間らしい動きをした。それを見て、アニューはこの戦場にはセファーがいると断定した。

はやてはそれを信じて、シグナムを除いたライトニング隊を、セファーを止めるための任務に就かせた。フェイトたちは現在、そのセファーに向かって飛行していたのだが……

「……やっぱり、そう簡単には行かない、か……！」

「フェイトさん、あれって……」

「やっぱり、そうですよね……？」

彼女の行く手を防ぐ敵は、そう簡単に道を譲ってくれそうになかった。

「強くて凄くてカッコいい僕、参上ーー！！」
「ふん、塵芥の群れ共が……我を誰と思うぞ？　頭が高いであろうが！」

９歳の頃のフェイトと瓜二つな容姿。だがその色は青で統一され、金色のフェイトとは全く異なる口調で喋る「深淵存在（マテリアルズ）」の一人、レヴィ・ザ・スラッシャー。

同じく9歳の頃のはやてにそっくりな、砂色と闇色の、尊大な態度を崩さない「深淵存在（マテリアルズ）」の王、ロード・ディアーチェ。

ＡＡＡ＋ランク魔導師とＳ＋ランク魔導師である彼女たちは、今、身に滾る魔力をフェイトたちにぶつけ、戦意を明確に示してきていた。手には既にデバイスが握られ、今にもフェイトたちに踊りかかってきそうだ。

「……そこを通してくれないかな？」
「それはできないね！　セファーさんからここは絶対に通すなって言われているんだから！」

フェイトの言葉に、レヴィは口を尖らせながら応えた。双方の魔力が高まっていくのが、キャロたちにも分かる。

「レヴィよ、そなたにはその塵芥を任せたぞ。此方はあそこの塵芥を掃除しよう」
「「……ッ！」」

魔力の高まりに当てられ、ディアーチェの魔力も徐々に高まっていった。それを直に受け、冷たい汗を流すキャロとエリオ。飛竜のフリードリヒですら、桁外れの魔力を前にして委縮している。

それを見て、フェイトは瞬時に戦術を決めた。

「キャロとエリオは私の方をお願い！　私ははやての方と戦うわ！」

「……何、だとぉッ!?」

フェイトはザンバーモードのバルディッシュで、ディアーチェに斬りかかった。ディアーチェはそれをエルシニアクロイツで受け止めるも、フェイトの勢いに押され、レヴィとの距離を離される。

それにポカンと見ていたレヴィは、すぐさまディアーチェの援護に行こうとし、そして放たれたフリードリヒの火球を大急ぎで避けた。

「あ、危ないじゃないか！　せいせいどうどうと勝負しろ、勝負ー！！」

「……えっと」

「あの……ごめんなさい？」

キャロたちの奇襲に抗議するレヴィに、思わず謝罪してしまうキャロたち。それに気を良くしたレヴィは満足げに頷きながら、

「うんうん、素直でよろ……」

「何をしておる、レヴィ！　早く戦わんか、うつけめ！」

「な、何さー！　僕だって今から真面目に戦おうと……」

ディアーチェに叱られる。そしてまたキャロたちから視線を外すも、キャロたちは攻撃をするかどうか迷ってしまった。

「プラズマランサー！」

「ぎゃあああぁあああああああッ！？」
「……たわけが！　敵から目を逸らすなど、貴様はアホかぁ！？」

しかし、レヴィの隙も窺っていたフェイトが、神速の魔導弾をレヴィに放った。それは油断していたレヴィに綺麗に直撃した。金色の煙りに包まれたレヴィだが、仲間であるディアーチェは呆れた様子でそれを見つめるだけだった。

「キャロ、エリオ！　二人は私に任せて、今の内に！」
「わ、分かりました！　行くよフリード！」
「きゅるるー！」
「フェイトさんも気を付けて下さい！」
「三人もね！」

その合間にレヴィとディアーチェの間を抜けたキャロたちは、そのまま一直線に飛んでいき、すぐに豆粒程度の大きさになるぐらいまで離れていった。それを見届けたフェイトは、自分の目の前に迫ってきた水色の大鎌を、ザンバーで防いだ。

「フェイト・テスタロッサー！　覚悟ー！」

見れば、所々を焦がしたレヴィが、憤怒の表情でフェイトに迫ってきていた。フェイトは冷えた頭のまま、ディアーチェの姿を探す。

「……」

ディアーチェはフェイトとレヴィの鍔迫り合いを見ながら、詠唱を唱えていた。どうやら大きな魔法を発動しようとしているらしい。

フェイトは何かを叫ぶレヴィを無視しながら、力の支点を動かし、

レヴィの攻撃を後ろに逸らす。レヴィが後ろに流れていくのを横目に、フェイトは呪文を唱え続けているディアーチェへと一気に近づいた。

「えぇい、時間稼ぎぐらいきちんとこなさんか、大たわけめが！」

悪態をつくディアーチェへ、フェイトの大剣が振り下ろされる。ディアーチェは当たる直前にシールドを張り、それを阻むと、そのまま距離を確保するために後退していった。

ディアーチェに接近戦の心得がないわけではないが、さすがにフェイトを相手に、クロスレンジで戦う気は、ディアーチェにはさらさらなかったのだ。

だからこそ、僅かでも距離を空けて、そこに大きな魔法を叩き込む！

「ドゥームブリンガー！」
『ドゥームブリンガー』

ディアーチェの唱えていた魔法が発動する。闇色の魔力光を放つ放射弾が、ザンバーを掲げていたフェイトに直進していき、その眼前で無数に爆ぜた。しかも、ディアーチェの莫大な魔力により、その無数の一発一発ですら無視できない威力で構成されている。

「バルディッシュ！」
『ソニックムーヴ』

瀑布のように向かってくる無数の魔力弾。それを回避することは、如何なる魔導師にも不可能に思えた。実際、ディアーチェはすでに

勝利を確信し、恍惚の表情を浮かべていた。

フェイトの弱点とは、即ち防御力である。速度を上げるために、彼女は防御力を犠牲にしていた。オーバーSランク魔導師なのにも関わらず、その防御力は一般と同等かそれ以下でしかない。

そして、ディアーチェのドゥームブリンガーは、一発でその防御力を突き破れるだけの攻撃力を有している。だからこその確信、余裕であった。

しかし、

「な……んだとッ！？」

「ハァアアアッ！！」

その確信を、フェイトは軽々と上回る。

「グッ……王に刃を向けるとは何事かぁああ！？」

防御力を削ってまで手に入れたスピードは、視界を埋め尽くす魔力弾の嵐ですら触れることを許さない。ディアーチェの確信は脆く崩れ去り、代わりに、フェイトのザンバーがエルシニアクロイツごと、ディアーチェを叩き伏せた。

それにより、高度を急激に落としていくディアーチェ。それを助けようとしたのはレヴィ。その二人に狙いを合わせ、フェイトはトライデントスマッシャーを放つために、金色の魔法陣を直下に展開した。

『カートリッジロード』

ガコンガコンッ！　と、２発のカートリッジがバルディッシュにロードされる。フェイトの魔力がカートリッジの分だけ上昇し、身体から雷が迸る。

「トラインデント！」

上昇した魔力を左手の先に集中させ、フェイトは三つ叉の雷光を放とうとして、

「すま……」

『させない！』

「ッ！？」

すぐ上にまで接近していた敵の存在に気付いた。

「クッ……！」

上段から近づく桃色の光刃。それを光りの大剣で迎え撃つフェイト。刹那の邂逅（かいこう）は火花とソニックウェーブを生み、フェイトの砲撃を直前で阻んだ。

フェイトは痺れる右手を庇（かば）いつつ、今しがた攻撃を行ってきたモノを睨む。

「羽付き……！」

橙色の尖鋭的なボディ。両肩に尖った盾を、背中に黒い機首を背負っているそれは、緑色に光るデュアルアイを、フェイトに向けた。

そのモノの名は羽付き――ガンダムアリオス。オリジナルの太陽炉を搭載した、最速のガンダムである。

『これ以上はやらせないぞ、フェイト・T・ハラオウン！』

『もう二度と貴方に速度で負けるわけにはいきません！』

互いに睨み合う中、アリオスが一息でフェイトとの距離を詰める。速い、と思う間もなく、再びアリオスのサーベルがフェイトに迫る。

「この！」

目の前で光りが散る。片手で支えられていた大剣は、切迫していたサーベルをギリギリで防いでいた。それに胸を撫で下ろす……ことをせずに、フェイトはやっと痺れが取れた右手で、雷光を纏う拳をアリオスへと突き出した。

『プラズマアーム！？　でも、そのぐらい！』

フェイトの拳が突き出される速度は、最早人のそれではない。多量の魔力で強化されたそれは、威力、速度共にロケットランチャーをも上回っている。にも拘わらず、アリオスはそれすら凌駕する速度でもって後退し、拳を避けた。

しかも、避けると同時に左腕のＧＮサブマシンガンを展開し、フェイトに向けてそれを勢いよく連射した。

「うッ……でも、それで！」

ほぼ零距離にも等しい所から放たれたサブマシンガンの斉射。フェイトは前面にシールドを張りながら、それを回避するために、身

体を無秩序に動かした。その動きに、サブマシンガンは追い付けず、掠らせることすらできない。

『速い……だけど、僕だって！』

「負けるわけにはいかない……絶対に！」

これ以上は無駄だと思ったアリオスは、サブマシンガンを装甲の内に戻すと、今度は右手にサーベルを持って、フェイトへと向かっていった。フェイトは漸く止まった斉射に汗を拭いながら、アリオスの攻撃を受け止めるために、両腕に力を込める。

そして、速度を追い求める一機と一人がぶつかり合った。その際に生じたソニックウェーブは周囲にいた敵味方を蹴散らして、彼らの戦いに近づけさせなかった。

最も、金色と橙色による音速を超えた戦いには、誰も付いていけなかっただろうが。

「キャロ、あれじゃないかな！？」

「……そうみたい！　フリード、お願い！　あともう少しだけ頑張って！」

「きゅけーー！！」

キャロとエリオとフリードリヒは、レヴィとディアーチェの防衛戦を抜けた後、執拗なＣＢ側の砲火を避けつつ、メメント・モリの方へと飛んでいた。そして彼らが飛び続けて８分ほども経った頃、漸くそれらしき船を発見した。

単独で浮遊するその船は、メメント・モリよりは小さかったが、それでもアースラと同程度のサイズはあった。３つに分かれた船体は赤い粒子を噴射しながらゆったりと浮遊し、キャロとエリオをフリードリヒごと呑み込みそうである。

「それじゃ、キャロ。作戦通り、僕が中に入るから、キャロは外からこの船を攻撃して」

「うん。エリオ君、気を付けて……」

「キャロこそ気をつけてね。外にはまだ砲台や足無しが沢山いるんだから。……フリード、キャロを頼んだよ」

「きゅるるー！！」

エリオがＣＢ側の船――トリニティ艦に乗り込む。キャロはその後ろ姿を最後まで見送りながら、船体の周囲をざっと眺めた。

（……あれ？）

その時に、ふと疑問が湧いた。どうしてこの船の周囲には砲台や足無しが存在しないのだろうか？　という素朴な疑問が。右を見ても左を見ても、此方に近づいてこようとする敵機の姿は見当たらない。一機たりともだ。

（これって、まさか……！）

なぜ、この船の守りは手薄だったのか？　なぜ、此方に近づいてくる敵機がいないのか？

その疑問の答えを、キャロはすぐに弾き出した。と同時に、寒気を感じた。

（エリオ君……！）

彼女の騎士に危機が迫っているのだと……彼女の直感はそう告げていたから。

「……！」

しかし、戻ろうとした彼女の行く手を阻んだのは、一本のブーメランであった。キャロも見たことがあるそれは、フリードリヒの眼前を横切り、その突進を中断させた。

フリードリヒを止めたブーメランは、投手の元へと戻っていった。戻ってきたブーメランをキャッチした投手は、静かな口調で、

「……行かせない」

と、たった一言だけ……呟いた。

トリニティ艦の内部に潜入したエリオは、腰に巻き付けた局員用の大きなポーチをしっかりと固定し直してから前に進んだ。トリニティ艦の艦内構造はすでにアニューからデバイスへと入力されていたので、迷うことなく進むことができた。

「……静か過ぎる」

一分ほど進んで、エリオはこの船の違和感に勘付いた。さきほどからどんなに歩いても、人っ子一人の気配すら感じないのだ。

普通、このサイズの船を動かすものなら、エキスパートを揃えたとしても、最低数十人は必要である。だが、この船にはその息遣いどころか、声の一つだって聞こえてこない。

それに、潜入した彼が普通に進めているのがおかしい。普通なら艦内戦力などで迎撃に来てもおかしくはないはず……なのに、どうしてこうまで静かなのか？

「もしかして、罠だったのかな？　でも、ここまで来たからには、前に進まないと……！」

もしかしてなどと言ったが、エリオはすでに十中八九、罠だと確信していた。デバイスを握る力が否応なく強まり、嫌な汗が噴き出るのを自覚してしまう。

（砲台の一機ぐらいなら、奇襲次第で何とかなるけど……）

エリオの魔導師ランクは、ＡＡである。管理局ではストライカー級のランクであるが、それはＣＢに限って言えば、ガガキャノンの最低ランクでしかない。

以前、エリオがＧＮキャノン？を破壊した時は、キャロとフリードリヒとの連携プレイ、それに奇襲が上手くいったから、ランクが上のＧＮキャノン？を破壊できたのだ。

とはいえ、エリオだって以前と比べれば強くなっている。戦争が始まってからずっとこなしてきた六課の特別教導は、彼を着実に強くさせていた。今ならばＧＮキャノン？と一対一になろうとも、あるいは勝てるかもしれない。

「ふむ、こういうのを何といったかな、益荒男（ますらお）？」
『飛んで火いる夏の草……ではなかったか、ライセンサーよ？』
「それを言うなら、夏の虫だったような気がするが、まあいい」
「……ッ！？」

そう、勝てるかもしれない、だ。

「あのフェイトお嬢様の教導を受けているエリオ・モンディアルだ。ＡＡランクといえど、侮るなよ？」
『応とも！　全力でお相手致そう、雷の騎士よ！』

だから、目の前の益荒男には……腰に二つの疑似ＧＮドライヴを搭載するＳＳクラスの怪物には、絶対に勝てない。

「セットアップ！」
『イィーエスッ、ｌｉｃｅｎｓｅｒ！　セットアップ、レディ！！』
「ストラーダ！」

『ソニックムーブ』

黒い鎧武者が、雷の騎士へ両刀を振りかざした。騎士は受けるのを諦め、それを避けようとする。益荒男の手が掻き消えるのと同時に、エリオの姿もまた、一瞬で消えた。

ドガシャアアンッ！　と、船内に破砕音が轟くのと同時に、益荒男の両刀が床を叩き切る。

そして、尋常ならざる膂力（りょりょく）によって叩き切られた床には、血が何滴も滴っていた。

【兵法に複雑な策略などはいらない。
最も単純なものが最良なのだ。
偉大な将軍達が間違いを犯してしまうのは、難しい戦略を立て、賢く振る舞おうとするからだ】

――鴨川秘様から、ナポレオン・ボナパルトより

第７２話　星々　【序】（後書き）

活動報告にて、長くなるよりも適度な長さの方がいいと指摘されましたので、第７２話を分割し、更新することにしました。

【序】は管理局、【破】はＡ－ＬＡＷＳ、【急】ではその二つの続きと聖王教会について書き、そして最後の【終】では……！

という構成で分割させてもらいます。なお、現在【破】まで書き終わっており、明日からは【急】を執筆したいと思います。

エリキャロに死亡フラグが立っているのは、きっと気のせい。作者は大のエリキャロ好き。特にキャロは貴重な「魔法少女」、「少女」です。

あとは分かってくれると信じています。

次回の更新予定日：２０１１年８月６日（土）

第７２話　星々　【破】

――新暦７５年３月１６日――

メメント・モリを大気圏内から攻める管理局とは違って、Ａ－ＬＡＷＳは大気圏外からの降下によって、メメント・モリを攻略しようとしていた。アトモスフィア・フィールドの張られた宇宙空間には、Ａ－ＬＡＷＳ側の艦隊が所狭しと並んでいた。

だが、その作戦も円滑には事を運べなかった。Ａ－ＬＡＷＳの艦隊が降下の準備に入った所で、奴らはやってきた。まるで此方の作戦を見透かしていたかのような、絶好のタイミングでだ。

『きゃははは！　行くわよガラッゾ！』

『やれやれ、裏切り者の次は、劣等者の掃除かい？　精が出るよ、全く！』

『ここから先には、通させないぞ！　かかってこい、Ａ－ＬＡＷＳ！』

灰色とクリーム色に塗りたくられたガラッゾ、純白と青紫色が混ざる１ガンダム、そして白亜の巨体を持つセラヴィーガンダム。

その３機を中心とする１００機以上のＧＮキャノン？とガガキャノンによる襲撃は、メメント・モリに向けて降下しようとしていたＡ－ＬＡＷＳの艦隊を、大きく削り取った。

既存のレーダーに映ることがないＧＮデバイスによる奇襲作戦。それは見事に功を成し、Ａ－ＬＡＷＳに大きな混乱を齎した。

「準備ＯＫだ。さっさと行くぞ、リジェネ・レジェッタ」
「やれやれ、人使いの荒いことで。……準備はいいかい、ジャンヌ？」
「……（コクコク）」

しかし、やられ続けるのは性に合わないとばかりに、Ａ－ＬＡＷＳはすぐにオーバーＳの投入を決め込んだ。デバイスの完成により、直前で飛び入り参加が決まったソーマ・ピーリス。幹部の一人にまでなったリジェネ・レジェッタ。そして世界清浄の大幹部であった『エンデ』ジャンヌ。

３人は旗艦「マリアンヌ」から飛び出すと、各々が相手取るガンダムの元へと急行していった。

ガンダムの攻撃は間断無く行われ、戦艦が何隻も爆散しては、大気圏内へと落ちていった。怒号や悲鳴、助けを求める声が耳を打つも、それに足を止めることなく、３人は前進していく。その顔にはリジェネを除いて、抑えきれない憤怒が見え隠れていた。

『あら？　まさか貴方が来るなんてね……アレルヤには申し訳ないけど、ここで倒させて貰うわよ、「超兵」！』
「行くぞ、スマルトロン。これが私たちの初陣だ」
『Ｙｅｓ，ｌｉｃｅｎｓｅｒ』

ピーリスは手に持った疑似ＧＮデバイス「ＧＮＸ－７０４Ｔ／ＳＰ　アヘッド脳量子波対応型」でアヘッド・スマルトロンをインストールした。野イチゴを意味するスマルトロンは、しかし、名前の意味とは正反対な色をしていた。

ずんぐりとしたボディは血のような赤で、特徴的な縦長のバック

パックは黒と金。両肩の肩当ても、バックパックと同色で、どう見ても相手に威圧感を与える色彩であった。

しかし、１４歳のピーリスはそれを気にせず、左手にＧＮビームサーベルを、右手にＧＮビームライフルを握ると、ガラッゾへと正面から突撃していった。

そんなピーリスを見て、ガラッゾは笑いが堪え切れないとばかりに肩を震わせながら、巨大なビームサーベルを生やす両手を振り被った。

『このガラッゾと接近戦をするなんて、いい度胸じゃない！』

「「超兵」を舐めるなよ、ガンダム！」

大気を切り裂いて接近するスマルトロン。それに合わせるようにして、ガラッゾのサーベルが振り抜かれる。

「かつてお前たちに殺された同胞と仲間の仇を、今！　ここで！！」

スマルトロンは頭上にサーベルを掲げ、それでガラッゾの一撃を防いだ。だが、それはあくまでも一瞬であり、次の瞬間にはガラッゾのサーベルがスマルトロンを斬り裂いていることだろう。スマルトロンのと集束されたソードでは、あまりにも出力が違い過ぎる。

ソーマはそれを反射的に理解して、自身の反射に身を委ねる。そして真っ白となった思考の赴くままに、左手のライフルをガラッゾへと向けた。

「取ってやる！」

ガガガガッ！　スマルトロンのライフルから、赤橙の光弾が連続して放たれた。ほぼ零距離からの射撃は、ガラッゾの虚を突き、その胴部に吸い込まれるようにして命中していった。

しかも、着弾の衝撃はガラッゾを後退させもした。好機とばかりに踏み込むスマルトロン。ガラッゾの態勢は崩れたままで、重心が後ろの方に傾いていた。

『イッタイわね！　でも、その程度の攻撃は効かないわよ！』

が、それを利用して、ガラッゾは素早く後方へ飛んだ。それでもスマルトロンの方が速かったので、ＧＮバルカンによる牽制も行う。さすがにバルカンによる掃射は避け切れなかったのか、スマルトロンの動きが一瞬だけ止まる。

その合間を使って、ガラッゾは距離を開け、時間を稼いでから立て直しを図った。損傷はないのか、動きには全く衰えがない。

『へぇ……このガラッゾに一撃を喰らわすなんて、顔に似合わずやるじゃない、貴方？』

「……直撃を受けても、何のダメージもなしか」

余裕を崩さないガラッゾを、ピーリスは冷たい目で観察する。些細な動作も見逃さないつもりなのだろう。ガラッゾはガラッゾで、楽しそうに肩を揺らし、ピーリスの隙を窺っていた。

『でもね……勝つのは私よ！』

「だが、それがどうした！　仲間の恨みを晴らさせてもらうぞ、ガンダム！」

互いがほぼ同時に飛び、中心点でサーベルとサーベルとをぶつけ合う。凄まじい衝撃が辺りに駆け抜けるが、2機はそれでも一歩も退かなかった。

それを遠目から見ていたリジェネは、ガルムガンダムをセットアップして、目の前で悠然と佇むリボンズ・アルマークの1ガンダムを、憎々しげに睨みつけた。最も、1ガンダムはその視線を受けても、傲慢を象徴するような腕組みを崩さなかったが。

「それが君のガンダムか……成程、ガルムガンダムとは言い得て妙だね。君にしてはいいネーミングセンスじゃないか」

「なら、その通りに冥土へ帰ってくれないかな、リボンズ？　後のことは僕が全部して上げるからさ」

「そんなモノは、お断りさ！」

ガデッサやガラッゾなどと同じく、大きな肩部が特徴的なトリコロールカラーのガルムは、振り下ろされた1ガンダムのサーベルを、同じようなサーベルで受け止めると、そのまま鍔迫り合いに持ち込んだ。

リボンズは力で押し切れると思ったが、ガルムの出力は1ガンダムのそれと拮抗……どころか、完全に上回っていた。

「あはは！　リボンズ、君はその程度なのかい！？」

「……何だって？」

ガルムが1ガンダムの腕を容易く弾いた。その事実に大きく目を見開くリボンズ。それを嘲笑うリジェネは、そのまま右手の二連装ビームライフルのトリガーを引いた。

「この……リジェネ風情が！」

「ほら、どうしたのさリボンズ！　何時ものご高説はしないのかい！」

二連装ライフルから吐き出された光線を、1ガンダムは何とかGNシールドで防いだが、熱量に耐え切れなかったのか、シールドは粉々に砕け散った。それに舌打ちをするよりも、リボンズは自分が馬鹿にされたことに憤った。

いつも見下していたはずのリジェネに優位に立たれたことは、彼の逆鱗を逆撫でするどころか、思いっきり叩いてしまったのだ。怒りに燃える1ガンダムの猛攻が、ガルムの装甲に僅かな傷を付けていく。

しかし、それすらもリジェネにとっては愉悦でしかない。あのリボンズが、自分を完膚無きまでに叩きのめしてきたあの1ガンダムが、本気の猛攻をしようとも、自分のガルムを僅かにしか傷つけられないという事実に……彼は酔っていた。

「ふふふふ……あーっはっはっはっはッ！！」

1ガンダムのサーベルを、粒子ビームを避ける、避ける、避ける！　怒りを増長させるように、ふわふわと1ガンダムの攻撃を避け続けるガルム。リボンズの血管は今にもはち切れそうだった。それを見て、リジェネはさらに嗤(わら)いを大きくする。

『まさか、ここまでやるとは……しかし、それでも勝つのは私たちです！　最強のイノベイドたるマイスターが負けるなど、有り得ません！』

『傲慢ちきなところはマイスターからの情報通りですね、1。けどね、いい加減認めた方がいいですよ？　君は、僕と比べて劣っているってことをね！！』

そもそも、ガルムは今までに取れた1ガンダムのデータを全て上回るようにして設計されたガンダムであるが、それ以前に、CBでガンダムプルトーネの発展機として開発されていた機体でもあった。

しかし、あの「プルトーネの惨劇」と呼ばれる事件が起きて、ガルムの開発は凍結されていた。それを引っ張り出し、再開発をさせたのがリジェネである。

幸いにも、A－LAWSには優秀な技術者が何人もいた。ビリー・カタギリやティーダなどがそれだ。それにより完成間近だったガルムは、僅か数ヶ月という短い期間で、1ガンダムをも上回る性能を持つように改修され、この世に再誕することができた。

「認めない……認めないぞ、こんなことは！　僕は上位者だ、最強のイノベイドだ！　それが、リジェネ如きに遅れをとるなんて……あるわけがっ！？」

「認めろよ、リボンズ！　君はもう、僕よりも下なんだって！　ガンダムがそれを証明しているじゃないか！！」

1ガンダムの狼狽（ろうばい）を突いて、ガルムの蹴りが1ガンダムに直撃した。吹き飛んでいく1ガンダムを、リジェネはほくそ笑みながら見ていた。それを感じ取ったリボンズは、血が上った頭で、ついにアレを使用する決意をした。

「トランザムッ！！」
『ＴＲＡＮＳ－ＡＭ』
即ち、天使（ガンダム）の権能にして力の象徴でもあるＴＲＡＮＳ－ＡＭシステムを。
「これで終わりにしてあげるよ、リジェネ・レジェッタ！　僕を愚弄した罪を、地獄で贖（あなが）うがいい！！」
『遊びの時間は終わったのですよ、ガルム。……地獄に逝きなさい！！』
勝利の宣言を行うリボンズと1。それも仕方のないことだ。ＴＲＡＮＳ－ＡＭは機体の出力を3倍にまで引き上げる、ガンダムにのみ許された反則技だ。これを使われては、幾ら性能が1ガンダムより優れているとはいえ、ガルムに勝ち目などはない。
「……ふ、ふふ。なら、見せ付けてあげようよ、ガルム。愚かな彼らに、力の差というモノをね！」
『Ｙｅｓ，ｌｉｃｅｎｓｅｒ！　此方の準備は万端ですとも！』
そうだ、勝ち目はない……のなら、それを使えばいいだけのこと。
「トランザム！」
『ＴＲＡＮＳ－ＡＭ』
「と……トランザムだと！？　馬鹿なッ！？」
『そ、そんな！？　あり得ません！』
1ガンダムと同じ、真紅の輝きに包まれるガルム。だが、その輝きは1ガンダムのモノよりも強く見える。

「言った筈だよ、リボンズ。あの時、君により完全となったＴＲＡＮＳ－ＡＭを見せてあげるってね！」
「グッ……まさか、本当に実現させるなんて……！」

ガルムの姿が残像のように霞むと同時に、１ガンダムの身体が何かによって突き飛ばされた。その何かはガルムの左拳であったが、動きを追えない１ガンダムには、何が起こったのか、まるで見えていなかった。

明らかに１ガンダムのＴＲＡＮＳ－ＡＭシステムよりも完成されている、ガルムのＴＲＡＮＳ－ＡＭシステム。それを前にして恐怖するかと思いきや、リボンズは興奮した様子で口早に喋り出した。

「だけど、好都合さ！　あの時、南極で君が言ったことに気紛れで乗ったことが、まさか本当に僕をガンダムへと近づけさせてくれるなんてね！」
「……やっぱり、そうだったんだ。あの時、僕を見逃したのは、僕を相手にしていなかったからか……！」

元々、１ガンダムの疑似太陽炉に搭載されていたＴＲＡＮＳ－ＡＭシステムは、不完全極まりないものだった。アーカイブ――ラジエルが開発したといっても、それは純正の太陽炉のものと比べれば、お粗末に過ぎるものだった。

しかも、改良をすると言ったラジエルは、開発に手間取っているなどといって、一向にリボンズの１ガンダムを改修しなかった。劣等や不完全といったものを嫌うリボンズは、それでも最初の頃は我慢していたが、数ヶ月も経った頃には、もう限界が来ていた。

自身のガンダムが不完全だということで、リボンズの心は苛立ちとささくれで満了となっていた。そこに南極でのリジェネの苦しい取引がやってきた。

曰く、「ここで見逃してくれれば、何時かより完全となったＴＲＡＮＳ－ＡＭを見せる」と。

普段のリボンズなら、一考だにせずに一笑に付すだろう取引。しかし、その時のリボンズは、普通とは言い難い精神状態にあった。リボンズはそこに自分のガンダムが完全になる可能性があるかもしれないと思い、すぐさまその取引に応じた。

その時の彼は、同時にこうも考えていた。万が一、それを成したとしても、恐らくリジェネはデータを渡すことを拒み、絶対に立てついてくるだろうと。ならば、その時はリジェネを倒してから、力づくでデータを奪えばいいと。

リボンズに一回も勝てた試しのないリジェネならば、組伏すことなど朝飯前。もし完成させることができなくても、その時は自分自らがリジェネを討てばいいだけのこと。

「やっぱり、僕は君が嫌いだ！　リボンズ・アルマァアアアアクッ！！」

だというのに、ガルムの性能はリボンズの予想を軽く凌駕（りょうが）していた。ＴＲＡＮＳ－ＡＭシステムにしても、その完成度は殆どオリジナルのソレと変わらないように思える。それがリボンズにとっては、何よりの誤算であった。

「どうして、この僕がリジェネ如きに遅れを……！」

『ライセンサー、敵が来ま……きゃあああああッ！？』

真紅となったガルムが、同じ真紅の１ガンダムの右腕を、ライフルごと切断した。その動きを、１ガンダムは捉えることができない。苦し紛れに左腕を振るうも、何もない空間を薙ぐだけであった。

突然、目の前にガルムのデュアルアイがアップで映った。それが真紅に光るのと、１ガンダムの左足がライフルの粒子ビームで破壊されるのはほぼ同時であった。

すかさず左腕を斬り込ませるが、手ごたえは無く、真紅の輝きはすでに遠くに離れていた。１ガンダムは身体から溢れる怒気を隠さぬまま、奥の手であったＧＮフェザーを展開してまで、ガルムを追おうとする。その哀れな姿に失笑しながら、ガルムは再び超高速で１ガンダムへと迫った。

ＧＮフェザーにより、姿勢制御能力を上げた１ガンダムだが、それでも今のガルムには手も足も出なかった。しかも、ＧＮフェザーは粒子を大きく消費する為、１ガンダムの粒子残量は刻一刻と０に近づいてきていた。

「ハァッハァッハァッ……！」

傷付いていない所を探す方が困難になるほど嬲（なぶ）られた１ガンダムは、すでに浮遊しているが精一杯なほど消耗（しょうもう）していた。ＴＲＡＮＳ－ＡＭはすでに粒子残量を考えられて切られていたが、ガルムは未だにＴＲＡＮＳ－ＡＭを維持したままだった。

さしものリボンズも、一瞬だけ絶望を感じた。しかし、それを相手に感じ取らせないために、怒気を放ったまま、なお交戦しようと

する姿勢を見せる。

リボンズを嬲ることに飽きてきたリジェネは、その姿勢を見て、次の一撃で決めることにした。二連装ライフルの銃身を二つに展開し、今まで以上のＧＮ粒子を充填させる。

「さて……それじゃあ、そろそろお別れの時間だよ、リボンズ。冥府に逝ったら、もう二度と戻ってこないで欲しいね」

「この屈辱は絶対にお返しするよ、リジェネ・レジェッタ」

もう何度目か分からない、ガルムの高速移動。だが、１ガンダムはそれを追わずに、ＧＮフェザーで全身を覆うと、そのまま微動だにしなくなった。

それを最後の悪あがきだと思ったリジェネは、構わず、ライフルのトリガーを引いた。ガデッサのＧＮメガランチャーのプロトタイプであったそれは、ガデッサのものより威力は劣っていたが、ＴＲＡＮＳ－ＡＭによって火力を飛躍的に向上させ、ガデッサよりも強力な砲撃を放つことができるようになっていた。

それを近距離で受けた１ガンダムは、光線の勢いに押され、見る見るうちに遠くの方へと流されていった。それを見て、リジェネは漸く、自身の勝利を確信した。

「勝った……勝ったんだ、僕は。あのリボンズに、最強のイノベイドに……！」

今までに経験したことのない歓喜が、リジェネを満たしていく。今までの鬱屈（うっくつ）とした気分が晴れていくのが分かる。それだけリボンズに勝てたことが、リジェネには嬉しかったのだ。

そして、この勝敗がこの戦局の大勢を決定づけたことすら、今のリジェネには全く興味のないことであった。天を仰ぐようにして喜びを体現するリジェネには今、何も見えてはいないのだから。

『まさか、あのリボンズ・アルマークがやられるとは……！』

ボロボロなイナクトの頭部を握り潰しながらリボンズの敗北を見ていたティエリア・アーデは、その事実に驚きながらも、奇襲の手を緩めなかった。セラヴィーは両膝と両肩に備え付けられている４つのＧＮキャノン?を斉射して、張り付いていた護衛ごと、Ｌ級の一隻を轟沈させた。

規格外の火力に、化物染みた防御力。それを存分に発揮して、セラヴィーは敵陣の真っ只中を悠々と横断していく。

まさに悪魔の所業、魔王の御業。だが、その眼前に無謀にも舞い降りるモノがいた。それは何処までも何処までも……真っ白な少女であった。

「……（これで、残るガンダムは貴方ともう一機だけです）」

その少女の名は、ジャンヌ。『エンデ（終わり）』と仇名された、１４歳のオーバーＳに匹敵する怪物。ジャンヌは右目に巻かれていた封印の眼帯に手を当てながら、セラヴィーの目を色素の薄い左目で強く睨み付ける。

『「聖女」ジャンヌか……セラヴィー、行けるな？』
『勿論です、マイスター』

セラヴィーは黙ったまま、２挺（ちょう）のＧＮバズーカ？をジャンヌにゆっくりと合わせた。それと同時に、ジャンヌは右目の封印を解き、眼帯を投げ捨てた。

それが、開戦の合図となった。

『先手は頂かせて貰う！』

セラヴィーのバズーカから、桃色の光線が発射された。光線といっても、それは並みの魔導師を消滅させるだけの威力を持つ。例え掠っただけでも、戦闘不能になるだろう。

それをジャンヌは、首の皮１枚という危うさで避ける。ジュ……と、白い髪が焦げる音と匂いがジャンヌにも伝わってくるが、ジャンヌは無表情のままセラヴィーの砲撃を避け続け、どんどん接近していく。

『チィイイッ！　やはり砲撃は当たらないか！』
「……（左、右、右、下……真ん中を避けて、攻撃）」

ジャンヌの右目が怪しく光る。セラヴィーが必死に攻撃しても、ジャンヌはそれを完璧に避け続けていた。魔力で全身を強化したとはいえ、ジャンヌの動きは決して速くはない。なのに、セラヴィーの攻撃は尽く空を切る。

『さすがは音に聞く「魔眼」の保持者！　厄介極まりないな！』

「……（どうしよう。私の攻撃じゃあ、デカブツの装甲を破れない……かも）」

ジャンヌの実力はオーバーSに匹敵する。が、正確にはオーバーSではない。彼女の魔力保有量は精々がＡＡＡ－クラスであり、正面からオーバーSと戦うだけの魔力を、彼女は保有していなかったからだ。

彼女の真髄は、その右目に宿るレアスキルにこそある。「魔眼」と呼ばれるソレは、古代ベルカ時代から知られたレアスキルの一種で、その能力は個人によって大きく異なっていることでも有名である。

ある者は、絶対遵守の能力を。

ある者は、思考を読む能力を。

ある者は、時間を止める能力を。

ある者は、記憶を変える能力を、それぞれ発現させたという。

そんな多種多様に別れる「魔眼」のスキルだが、一貫として、一人には一つの能力しか発現しなかった。どうしてなのかは依然として不明のままである。「魔眼」のスキルは極めて希少で、歴史上でもジャンヌを合わせて9人しか発現しておらず、しかも、そのどれもが奇妙かつ強力だったため、研究の仕様がなかったのだ。

そして、ジャンヌに発現した能力は、「極近未来を知る力」である。カリムの「預言者の著書」と似ているが、ジャンヌのそれは数秒、数十秒先の未来を知ることができた。

それが戦闘においてどれだけのアドバンテージとなるか……そんな分かり切ったことは、言わなくてもいいだろう。

『む……リボンズの抜けた穴から、何隻か突入したな。後はアレルヤたちに任せるしかないが、出来る限りの戦力は削らせてもらう！』

セラヴィーがジャンヌに手間取っている間に、ＡＥＵＳの艦隊の何隻かが大気圏内へと突入した。目指す先はメメント・モリ。恐らくは天敵たる管理局と共闘をしてでも、これを破壊するつもりなのだろう。

他にも何隻か、突入の準備を終えようとする艦船がいた。それらを優先的に落とそうとしたセラヴィーだが、その進路をジャンヌは阻んだ。

『邪魔をするな！』

「……（一応、リッパーの敵討ちでもあるから、簡単には行かせない……！）」

再び放たれる桜色の粒子ビームを、これまた紙一重で避けるジャンヌ。その顔には余裕が張り付いているかのように無表情で……汗が一滴だけ、流れていた。

メメント・モリを巡って争う管理局とＡ－ＬＡＷＳ、そしてＣＢの軍勢。それをメメント・モリ内部から眺める人物がいた。

「ふふ……あはははは！　踊りなさい、もっと踊りなさいよ、管理局！」

メメント・モリをコントロールする管制室。そこでその人物は高らかに管理局を嘲笑していた。人物は二つに縛った茶髪にメガネをかけた少女であり、今もまたチャージ中のメメント・モリのスイッチに指を置いていた。

「もっとよ、もっと！　もっと殺しなさい、ＧＮキャノン？！　ガガキャノン！　ガンダム！！　私達の野望を砕いた管理局の目的を、今度は私達が砕くのよ！！」

少女の名は４を意味するクアットロという名前だった。クアットロはナンバーズの一機にして、「Ｊ．Ｓ事件」でスカリエッティ陣営のブレーンとして活躍した参謀役である。その優秀な頭脳は並列処理にも優れ、ユニゾンデバイスであるセファーほどではないにしろ、数十機の無人機をこの管制室から操って、外の艦隊や魔導師を次々と殺していた。

少女のかけた丸いメガネが、戦闘を映すモニターの光りを反射させる。クアットロの顔は憎っくき管理局を蹂躙しているせいか、些(いささ)か以上の愉悦の表情を顔に浮かべていた。モニターの光りは、その恐ろしげな表情を不気味に浮き彫りとさせていた。

なぜクアットロがこれほどまでに管理局を憎んでいるかというと、彼女を捕まえたのは管理局――詳細を言えば、高町なのは――であり、それがＤｒ．の（彼女にとっては崇高な）野望を砕いたことと繋がっていたからだ。

それと、クアットロを捕まえた高町なのはが、あまりにも圧倒的だったこともある。「聖王のゆりかご」内部を「壁抜き」して、クアットロを一撃で沈めた彼女は、クアットロにとってはまさに「悪魔」、トラウマであり、クアットロの心に大きな闇を作り出した。

Ｄｒ．の遺伝子を強く受け継いでいるとはいえ、それを自身で拭うことは、精神的に追い込まれていたクアットロにはできなかった。いつあの桜色の砲撃が飛んでくるのかと、夢でも怯える日々。それは確実にクアットロの精神を病ませていき、この場面で遂に爆発させてしまう。

「あはははッハハッあ～ッはッはッはッはッ！！」

人を何人殺しても、何も思わなくなってしまったほど精神が病んだクアットロは、メメント・モリを撃つことにすら抵抗を感じない。すでに９回もメメント・モリを放ち、５００万人を超える犠牲者を出しても、クアットロの心には何も響かなかった。

壊れてしまった少女の病んでしまった心は、メメント・モリの名を貶（けな）すように、死を想うことなく、第１０管理世界の主要都市を次々と滅ぼそうとする。それに気付く者は、誰もいない。ＣＢも、Ｄｒ．ですら、クアットロの暴走を知らずに、安全装置（人の心）を無くしたメメント・モリを守ろうとしていた。

その先に待つのは、破滅か悲劇か……どちらにしろ、碌な物でな

いことだけは確かだった。

管理局と大気圏外から降下してきたＡ－ＬＡＷＳの艦隊が、互いに争うことなくメメント・モリを破壊しようとするのを、カリム・グラシア率いる教会離反組は、ＸＶ級次元航行艦「アーク」のモニターで眺めていた。

絶対に相容れることなど不可能だと思われた、管理局とＡ－ＬＡＷＳの共闘。それはカリムの胸に、何とも言い難い想いを飛来させた。今もカリムの胸はドキドキと高鳴り、中々収まらないでいる。

「これは……こんなことが、実際に起こるなんて……！」

目の前の光景は、カリムやはやてが目指した、ある意味理想の光景だった。管理世界も管理外世界も関係なく、争うことのない、平和な世界……その理想の一端が、そこには顕現しているように思えた。

理想の一端はあくまでも一端であり、現実には戦争はなくならず、今もこうして戦いに赴こうとしていたが、それでもカリムには気分の高揚を止めることはできなかった。

「嘘みたいだ……管理局とＡ－ＬＡＷＳが力を合わせるなんて……」
「夢でも見ているみたいです……こんなことが実現するなんて……」

ちらほら、ちらほらと、モニターに映る光景に心奪われた船員たちの声が、カリムの耳にも聞こえてきた。皆一様にモニターに釘付けとなる中、カリムは正面のモニターに何かが映るのを決して見逃さなかった。

最初は点にしか見えなかったそれは、しかし、数秒後にはその全容を明らかにした。そして緑色の装甲に覆われた、ガンカメラを展開するその機体のことを、カリムは一時たりとも忘れたことはない。

「あれは……まさか三つ目!?　私たちが来るのを知って待ち伏せをしていたとでも言うの!?」

モニターに映った三つ目――ケルディムガンダムは、高速で飛行しているアークを前にしても、なんら動じているようには見えなかった。右肩に下げていたライフルを構え、ゆっくりとその銃口をアークに合わせる。それを見て、カリムは反射的に叫んだ。

「皆、伏せ……！」

だが、それは一手遅かった。ケルディムの指がトリガーを引く方が速かった。

「う、うぅ……」

いきなり爆炎に包まれた艦橋で、カリムは小さな呻き声を上げた。咄嗟にデバイスのトライアンフでシールドとＢＪを作ったはいいが、

衝撃を完全に緩和させることはできなかった。そして、カリムにはアークの艦橋を守ることもできなかった。

「み、皆……！」

徐々に高度が低下していくのを感じながら、カリムは爆炎に焼かれた十人以上の焼死体を、茫然とした面持ちで見つめた。教会を抜けだした後も、カリムに付いて来てくれた艦橋の仲間たちは、すでに全員が黒焦げとなって死んでいた。

人肉の焦げた死臭がカリムの鼻を強烈に付いてくる。カリムはその吐き気を催す匂いを、絶対に忘れないために胸いっぱい吸い込んだ。それと同時に、低空を飛行していたアークが、コントロールを失って地面に不時着する。

その衝撃でカリムの身体が天井近くにまで跳ねたが、ＢＪを展開していたおかげで、怪我はしなかった。落下して床に叩きつけられても、騎士風の魔力の鎧は完全にダメージをシャットアウトする。

「い、急いで態勢の立て直しを……！？」

だが、身を起こそうとしたカリムは、再び冷たい床に叩き伏せられた。上から下に、踏み付けられるようにして。その力の何と強いことか。カリムが顔を上げようとしても、後頭部を押さえ付けてきた固い金属はビクともしない。

（まさか……三つ目！？）

ガシャ……銃を構える音が、カリムの元にまで聞こえた。そして、この状況でカリムに銃を突きつけるモノは、三つ目以外存在しない。

冷たい銃口を後頭部越しに感じる。

「騎士カリム！」

三つ目が引き金を引くだけで、簡単に命が弾け飛ぶ状況。それを救ったのは、二人のＡＡＡランク魔導師だった。二人は片方が近距離で、片方が中距離を得意とし、巧みなコンビネーションでケルディムに奇襲をしかけ、カリムからケルディムを引き剥がすことに成功した。

「あ、貴方たち……」

そしてカリムの前を守護するように、騎士として並び立つ数百の騎士たち。不時着で何十人か欠員が出ていたが、それが逆にガンダムを前にしても衰えない敵意を彼らに抱かせた。

……が。

「ぎゃあああッ！？」

「カペラァアアア！！」

それも、長くは続かなかった。ケルディムは二挺の拳銃でＡＡＡランク二人と戦っていた。そして一瞬の隙を突き、ミドルで撃ち合っていた魔導師の頭蓋（ずがい）を、ＢＪごと一発で撃ち抜いた。

それに気を取られたもう一人の魔導師――ムーヴ・スラスターの左膝にも、弾丸を撃ち込む。片膝をついたムーヴはデバイスを支えにして倒れるのを防ぐが、そのデバイスもケルディムのピストルの銃身部分でへし折られ、荒れた大地に倒れ伏してしまう。

開戦して、まだ一分と経っていないにも関わらず、二人のＡＡＡランクをほぼ無力化したケルディムの、圧倒的なまでの戦闘能力。
それを目の当たりにした騎士団は、足が竦むのを抑えきれなかった。
ケルディムの双眸から逃げ出したい想いに駆られる。

「……ここが覚悟を決める時なのですね」

不意に、騎士団の後方にいたカリムがそう呟く。ケルディムはそれに何かを感じたのか、騎士団に近づこうとした足を、ぴたりと止めた。

「ムーヴ、後のことは貴方に任せます。私がここで奴を引き止めますから、貴方たちは管理局の方々に加勢して下さい」

代わりに、カリムの足が一歩、騎士団の中から踏み出てきた。次いで身体が、長い金髪が、騎士団の魔導師たちの前に姿を現す。

「騎士カリム！　だったら私たちも……」
「ナンバーズの皆さんも、一緒に行って下さい。ここは、私一人で十分です。……では、貴方たちに聖王の加護があらんことを……ハァアアアアッ！！」

金色の魔法陣を足元に展開し、放たれた粒子ビームを防ぐ。カリムはすぐにトライアンフの札の中から、大アルカナ２１番目のカード「世界」を選び、それを発動させる。

「私と一緒に来て頂きますよ、三つ目！」

大アルカナ２１番目のカード「世界」は、世界に境界線を引く結界魔法である。その強度はオーバーＳクラスの攻撃でも壊れないほ

ど強固なものだ。例えケルディムがＴＲＡＮＳ－ＡＭを発動させようとも、この「世界」から逃れることはできない。

「二人っきりになれましたね、三つ目……いえ、ケルディムガンダムと言った方がよろしいのでしょうか？」

『……』

「やはり、私は心が弱いですね……今も貴方とこうして向かい合っているだけで、憎しみに支配されそうになります」

位相がズレた世界の中。先程までの荒れ地は何処にもなく、幾学模様の飛び交う歪な教会の内部にて相対するカリムとケルディム。長椅子と教壇を挟んで、カリムは札を、ケルディムは銃を互いに突き付ける。

「ですが……」

初めに仕掛けたのは、カリムだった。カリムは小アルカナの１から１０を全て展開させ、空中にハリネズミのような剣山を作り出すと、その１本を、１０本を、１００本を、ケルディムに向けて一斉に射出した。

それをケルディムはその場から動くこと無く撃ち落とす。自身に当たるものだけを優先的に狙い、正確な射撃で１００本の剣を破壊する。ガラスを壊した時のような音が、結界となった教会内に響き渡る。

「……今は、今だけは、この憎しみに身を委ねましょう。誰もいない、誰も見ていないこの結界の中で、私は憎しみのままに力を揮(ふる)いましょう」

魔力の剣を破壊し終えたケルディムが、一発の粒子弾をカリムに放った。それをコインのシールドで防ぐと、今度はワンドのバインドを発動させてケルディムの両足を拘束した。その上でカップの補助魔法で肉体を強化させ、カップの人物札――転送魔法を使い、ケルディムの正面に瞬間移動する。

「数多くの同志とシャッハを殺した罪を……贖いなさい、ケルディム！！」

ケルディムが反応した時には、すでにカリムの拳により、遠くへと突き飛ばされていた。モニターの片隅でカリムが足を踏み込むのを視認する。ゴパッ！　と床を蹴り砕いて接近するカリムの両手には、質素な剣が二振り、握られていた。

ケルディムは両手の銃身で振り下ろされる剣を防ぐも、その衝撃は機体の様々な所を軋ませた。カリムの顔は今や憎悪で塗り固められ、先程までの人物とは似ても似つかない顔になっていた。

「あぁあああああああああああッ！！！！」

『……』

銃と剣でせめぎ合うケルディムとカリムだが、その拮抗はケルディムの後退で破られた。距離を取ろうとしたケルディムの思惑に気付いたカリムは距離を詰めようとするも、ケルディムの牽制に手こずり、易々と距離を空けてしまう。

ケルディムが得意とする射撃が来ると思い、身構えるカリムだが、予想とは裏腹に、何時まで経ってもケルディムからの攻撃はやってこなかった。代わりにポツリと、ケルディムから音声が零れる。

「だったら、お前らも償えよ……オレの家族を殺した罪をなぁあああああッ！！！！」
「な……！」
「ケルディム、ＴＲＡＮＳ－ＡＭ！！」
『ＴＲＡＮＳ－ＡＭ』

そして、その零れた音声には滾る憎しみが込められていて、それがカリムの一瞬の硬直を招いた。やってくるのは真紅に輝く次元の悪鬼であり……憎しみに燃える悪鬼でもある。

これからが本当の始まりなのだと気付いた頃には、すでにカリムに向かって無数の弾丸が放たれていた。トライアンフのカードを取りだすが、無限に等しい弾丸を相手に何処まで防ぎ切れるか……カリムは自分の死の予感を感じたような気がした。

そして、それはきっと……気のせいではない。

【ヒトは常に自身が被害者であると信じている】

――ＥＸＡＭ様より

第７２話　星々　【破】（後書き）

ジャンヌの能力は『コードギアス　Ｒ２』のビスマルクを参考にしました。パクリだと言われないよう、キツめの制限等も設けるつもりです。やっぱり「魔眼」と聞いてはギアスを持ち込みざるをえませんでした。主に作者の趣味的に。

何気にリボンズ、クアットロ、カリムに死亡フラグが立っている件。この前のエリキャロといい、作者はこの７．で一体どれだけ死亡フラグを立てるのでしょうか？　作者が一番頭を捻っています。

なお、作者は５人（エリキャロ含め）とも大好きですｗ

次回の更新予定日：なんて、あるわけない。

第７２話　星々　【急】（前書き）

【引き金だ。オマエが引いた。末路も受け取れ】

――キラー様から、『とある魔術の禁書目録　新約１巻』の一方通行より

第７２話　星々　【急】

――新暦７５年３月１６日――

メメント・モリの周辺にて始まった攻防戦は、双方共に決め手を欠いた状態のまま推移し、メメント・モリは無傷のまま、次の犠牲となる砂漠の都市を焼き払おうとしていた。

あともう少し……数十分か一時間もすれば、メメント・モリにより、焼き払われる都市の数は１０に増える。そこが管理局とＡ－ＬＡＷＳにとっての臨界点であり、限界点であった。

「これが……争いをこの世界に持ち込んでしまった我々への裁きなのか？」

焼き払われる都市の避難は、まだ完了していない。生まれ育った街を捨てるぐらいなら、一緒に死んだ方がマシだという人間が沢山いたのだ。そして、その人数は実に１０万人にも昇り、それだけの人々が今もこうして家屋に引きこもったまま、避難していなかった。

かくいうスクライアの族長である翁も、その一人である。彼らスクライア族の張ったキャンプはその都市のすぐ近くにあり、メメント・モリの余波によって消滅するであろうことは、すでにＡ－ＬＡＷＳ側からも知らされていた。

しかし、知らされたのはつい３時間前のことであり、そんな短い時間では避難ができるはずもなかった。スクライア族は放浪の民とはいえ、その数は軽く万を超す。それだけの人数が避難を完了させるのに、３時間はあまりにも短かった。

翁は目を細めながら、遠くの空で瞬く戦禍の炎を見つめる。戦乱の轟きはここにまで届いて来て、今にも砲撃魔法などが飛んできそうである。ビリビリとした音の振動が窓を振動させ、それが翁の心中に巣くう不安を増長させた。

「だとすれば、スクライアが滅びるのは自業自得なのであろうか……？」

現在、スクライアの避難状況は遅々として進んでいなかった。皆が皆、生まれ育ったこのキャンプを離れたくないとだという。だが、このまま行けば待つのは滅びのみ。翁は全員を説得して避難をさせようとしたが、まだ完了するには時間がかかる。

もしこのままメメント・モリがやってくれれば、スクライアの総数のおよそ4割近くが巻き込まれ、命を散らすことになる。それだけは何としても阻止したい翁だが、すでに彼の身体は動きそうになかった。

翁の体は戦場で負った怪我により、かなり衰弱していた。もう立ち上がることもできないだろう。今彼に出来ることは指示することと、祈ることのみ。自分の一族の命運と……彼の一族の無事を。

「ル・ルシエもスクライアも、これからどうなるのであろうな……願わくば幸せが待っていると信じたいものだがの」

聖域荒らしの事件から民族紛争へと発展したル・ルシエとスクライア。どちらもすでにこの戦争で半数近くの同志を亡くし、民族の体を保てなくなってきた。そこに今回のこの騒動が起きて、すでにル・ルシエもスクライアも、戦争などをする気は無くなっていた。

そして、同時に気付いた。自分たちはただただ、超組織同士の戦争を起こす為の道具であったことを。大戦への引き金を引かせるためのきっかけに過ぎなかったということに、ようやく気付くことができた。もはや手遅れだとは知りつつも。

「しかし……あの青年を操っていたのは誰だったのであろうか？それを最後に知りたかったの」

翁がプハァ～……と、水タバコの煙を吐く。思い出すのは、あの時、ル・ルシエとの会合で突如正気を失った青年のことだった。あの自爆事件で民族紛争が始まったと言えるので、翁としては最後にその正体を暴こうとしたのだが……結局は何の手掛かりも得られなかった。

それが……それだけが悔いと言えば悔いだった。しかし、時間はもう少しも残されていない。後は運よく生き残った者たちに任せるしかない。

「まぁ……あとはユーノが何とかしてくれるだろう」

翁が死んだ後は、ユーノ・スクライアが次期族長としてスクライア一族を率いることになっていた。まだ本人からの返信は着ていないが、さすがのユーノもスクライアの危急を知っているだろうから、力を貸してくれるはず。そう見込んで、翁は早くもユーノを軸とした新体制をスクライアに築いた。

あとはユーノ本人の承認さえあれば、何時でもその新体制が始動できる。翁はそれを待つばかりだった。

「……む、客人か？」

不意に、翁のいるテントの前に、誰かが転送してきた。その魔力光は煌びやかな白色で、翁にはそれがとても美しいものに見えた。

「全く、こんな時に一体誰が……」

客人を出迎えるために、魔力を使って扉を開ける翁。しかし、その目に飛び込んできたのは、客人の姿ではなく、純粋な魔力で撃ち出された砲撃魔法であった。翁はそれに驚く間もなく、朱色の砲撃に呑まれ、この世から消え去ってしまった。

「これで任務完了です。では、戻ってお菓子を食べるとしましょうか」

そして、テントを族長ごと、丸々と消し去った砲撃の射手は、白色の転送魔法を再び発動させると、スクライアのキャンプから去っていった。

族長が寝ていたテントに、真っ赤な火柱が立つ。騒動に駆け付けたスクライアの民が見たのは、炎に包まれた族長のテントであった。あまりの出来ごとにパニックに陥ったスクライア族は、統率するものを失って、ただただ迷走するしかなかった。

それが避難をさらに遅らせ、一族存亡の危機に直結したということに、彼らは全く気付けない。ここに次期族長がいれば話が変わったに違いないが、その彼は――ユーノは、無限書庫の作業で手一杯であり、ここに来れる筈もなかった。

そして、メメント・モリがあと１０分で街を焼こうとした時。ス

クライアの民は、その総数の凡そ8割ほどが丸々、民族キャンプの中にいた。

メメント・モリがまだ砂漠の都市の上空に差し迫っていない頃。

キャロはブーメランを幾つも投げてくるセッテ相手に、全く戦うことができないでいた。相手がオーバーSクラスだということもあるが、何より、キャロは船の内部に突入したエリオのことが気がかりで、それに気を取られていた。

「エリオ君！　応答して、エリオ君！」

「……エリオ・モンディアルはトーレお姉様と戦っています。ですから、万が一にも彼に勝利はありえません」

猛回転して迫るブーメランブレードを、紙一重で躱わすキャロ。先程から念話でエリオに呼び掛けるが、GN粒子が充満するこの戦場では念話は無意味だということに、冷静さを失ったキャロは気付いていなかった。

セッテはセッテで、そんなキャロの姿を一つ目のバイザー越しに捉えながら、ブーメランを力一杯投げつけていた。先程から5つほ

ど、アルハザード式ＩＳを使用して投げつけているが、未だにクリーンヒットさせることはできていない。

しかし、それに気を落とすという感情を、セッテは持ち合わせていなかった。淡々と無表情のまま、ブーメランを投げ続ける。

「きゅ、きゅけーー！？」

「ふ、フリード！？」

複雑な軌道を描き、高速で動きまわるブーメラン５つを相手に、フリードリヒとキャロは善戦した方だった。しかし、フェイトですら避け切れなかったセッテのブーメランが相手では、最初から勝負は決まっていたようなものだった。

「……さようなら」

避け切れなかったブーメランの一つが、フリードリヒの左翼に強くぶつかってしまった。フリードリヒの左翼は骨ごと折れ、無残にも折れまがってしまう。それにより飛行を維持できなくなって、キャロを背に乗せたフリードリヒは徐々に高度を下げていった。

「フィジカルヒール！　フリード、大丈夫？」

「きゅ、きゅけるるー……」

キャロが必死に回復魔法をフリードリヒの左翼にかけるが、折れた翼を元通りにするには時間がかかり、とてもこの失墜中に完治させることはできなかった。セッテはそれを踏まえた上でキャロからトリニティ艦へと視線を移し、中で行われている死闘に心を寄せた。その時のセッテは、完全にキャロを戦力外と見做していた。

「エリオ君……エリオ君ーー！！」

キャロの悲痛な叫び――けれど、決して届かない叫びが、周囲に木霊する。そうして、キャロはその後も緩慢（かんまん）に落下して、メメント・モリの直下にある砂漠へと降り立った。降り立ってしまった。

「……な、なに、これ……？」

そこでキャロが見たのは、無数の死体――無数の残骸であった。上空からここに落ちてきたと思われる魔導師や機体が、所狭しとその無残な姿を並べていた。砂漠の色が黄色から赤黒いものへと変わるほどの沢山の人達が、ここで死肉の絨毯（じゅうたん）を作っていた。

その光景を見たキャロは、胃からせり上る吐き気を堪えることができずに、その場で嘔吐してしまった。贓物が、脳髄が、眼球が普通に転がり落ちているこの地獄絵図は、キャロにはあまりにも刺激が強すぎた。

何度も何度も吐き続け、胃液しか出なくなった頃になって、ようやく吐き気が収まった。キャロは口を拭いながら、改めて周辺を見渡してみた。何処を見ても死体と残骸しかない地獄に生存者はいないのか……懸命に探す。

それがいけなかったのだと知ったのは……とある一匹の飛竜の死体を見た時だった。

「え……これって、エーベルト？　どうしてル・ルシエの竜……が……」

フリードリヒにも劣らない体格を持った、キャロも周知な飛竜が、

全身を火傷で爛れさせて死んでいた。そのすぐ近くには、ル・ルシエ族の衣装をまとった男性が、仰向けで息絶えていた。

それを見た時、キャロは理解した。エーベルトはル・ルシエに古くから語り継がれる「紺青の飛竜」である。恐らくはル・ルシエ族が数人がかりでかの飛竜を召喚し、この攻防戦に挑み、そして……敗れ、ここまで落ちてきたのだろう。

見れば、すぐ近くにいた男性以外にも、何人か、ル・ルシエ族の衣装を着た人達がいた。しかし、その全員が息をしていないことは確かめるまでもなかった。キャロの心に、大きな虚構が生まれた気がした。

「……フリード、ど、どうしよう。わた、私、私、助けられな……助けれなかッ……！！」

男性も、何人かの人々も、皆、顔見知りだった。幼い時からずっと知っていた同族だった。助けられなかったという悔恨が、キャロの心中を席巻し、明るい心をぶ厚い暗雲で覆い隠していく。

「フリード、ふりーど、ふりいどぉ……私、わたし……助けたかッ助けたかったよ、フリードぉ……！」

「きゅるるる……」

キャロの心を覆い隠す、ぶ厚い暗雲。それを晴らすべき彼女の騎士は、今、ここにはいない。キャロは機動六課のメンバーとはいえ、たった9歳の少女である。そんな子どもにこの暗雲は……さすがに荷が重すぎた。

これはキャロの知る所ではないが、この攻防戦において、ル・ルシエ族は己が世界を守る為に、残っていた総力を結集させて、メメント・モリを撃破しようとしていた。その為に彼らは切り札でもあったエーベルトを召喚し、他にも１００匹以上の飛竜を召喚して、ＣＢの防衛ラインを突破しようとした。

しかしながら、管理局やＡ－ＬＡＷＳも含めた攻勢だったのにも関わらず、ＣＢ側の防衛ラインを突破することは叶わなかった。ＣＢ側が何よりも火力を重視して構成した防衛ラインは、近づく飛竜を、魔導師を、戦艦すらも全て跳ね退け、近づけさせなかったのだ。

さすがはスメラギ・李・ノリエガが考案した防衛ラインである。「攻撃は最大の防御」を体現するこの防衛ラインを突破するには、どう攻めようとも、かなりの犠牲と時間が必要となる。少数精鋭での突破も試みたが、何しろ相手にはオーバーＳクラスのガンダムが複数おり、それをどう引き付けるかが障害となって、採用には至らなかった。

機動六課単独での突撃も考えたが、例え母艦がＸＶ級で、オーバーＳクラスの障壁を複数展開しようとも、この火線の中をメメント・モリ付近にまで飛んでいくのは不可能であった。もしＸＶ級の艦船の速度がもっと上昇すれば不可能ではなかったが、ＸＶ級にそんな便利な機能は付いていない。付いているのは、ＣＢのプトレマイオス２ぐらいのものだ。

結局のところは、正面から攻める他ない。前線の消耗を省みずに攻めれば、何時かは防衛ラインを突破できるはず。そんな楽観的観測からなる戦術しか、彼らには残されていなかった。

そして、消耗率の高いその前線に、ル・ルシエ族は配属させられていた。飛竜の高い戦闘能力と旋回能力も考えられてのことだが、何よりも考慮されたのは、彼らが管理局員ではないという点だった。

例え彼らが全滅したところで、管理局には痛くも痒くもない。それが彼らが前線に配置された、最も大きな理由だった。八神はやてはその決定を聞いた時、血が滲むほど拳を握った後で、この決定をキャロに伝えないよう、六課のメンバーに釘を刺していた。

ル・ルシエ族は裏で行われたこのやり取りに気付かないまま、猛然とCBの防衛ラインに喰らい付いた。今までCBに殺された同胞の恨みも晴らすべく、彼らはアドレナリンが沸騰（ふっとう）する思考で果敢にも突撃していき、砲台を、二本足を、空から地へと叩き落としていった。

それでも、やがて一人、二人と脱落していき……最後には誰も、誰一人として残らなかった。砲台と二本足の弾幕は隙間があるのかどうかさえ定かではない密度で放たれ、それを潜（くぐ）るには犠牲無しでは済まされず、そして潜る際に支払う犠牲はあまりにも大きいものであった。

一機を墜とす間に、ル・ルシエの飛竜は十匹墜ちた。十機を倒す頃には、飛竜はエーベルトも含め、ほぼ全匹がメメント・モリ直下の大地へと墜ち、ル・ルシエの召喚士諸共、全滅してしまった。

キャロが降り立ったのは、偶然にも、ちょうどその死体が折り重なっていた地点であった。瞳孔が開いていき、正気が無くなっていくのを感じる。キャロにはもう、自身の中で暴れ回るこの言いようのない気持ちを内に抑えることはできなかった。

「皆……みんなぁ……うぅ、ううううぅ……！」

悔恨と言いようのない気持ちが、キャロの心をぐちゃぐちゃに掻き混ぜる。助けようとして戦っていたのに、すでに助けようとしていた一族は、ほぼ全員が死んでいたという事実。それがキャロの心を粉々に砕き、彼女の思考をまっさらなものとした。

「あ、あぁあああ……ヴぉ、ヴォル……ヴォル、テェエエエエルッ！！」

そのまっさらな思考の中で、キャロはもう一騎の竜騎を、アルザスの「大地の守護者」であり、「黒き火竜」としてル・ルシエ族で畏れられた真竜の名を思い描き、ここに呼び出した。

「グォオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！！！！」

大地を轟かし、天を震えさせる大咆哮が、辺り一面に轟き渡る。体長約１５メートルという黒き巨躯を持つ真竜「ヴォルテール」は、竜の巫女たるキャロの意を受け、上空の敵性存在――メメント・モリを、感情の読めない無機質な瞳で睨みあげた。

しかし、その瞳に映ったのは、メメント・モリの他にも、もう一つあった。それはヴォルテールと比べれば随分と小さな存在であるが……内包する魔力量は、ヴォルテールのソレにも届きそうであった。ヴォルテールはその事実に驚いたのか、少しの間だけ動きを止めた。

「くっくっくっ……何だ、メメント・モリとかいう兵器を殺しに来たというのに、まさかこんな大物と出会えようとは……私の「竜殺」が疼いて止まぬぞ！　なあ、真竜のヴォルテール！！」

その小さな存在は、竜すら殺せる魔力量を持つとされるレアスキル「竜殺」を保有する、Ａ－ＬＡＷＳのザ・サムライであった。その顔は感極まった表情で、今の彼女は敵味方の判断ができないほどに興奮してもいた。直下へ降下するサムライの両手には、すでに「村雨」「村正」が握られ、莫大な魔力がそこに込められていた。

「ヴォルテール！！」
「グオオオオオオオオオオッ！！」
「くっくっくっくっ……鬼殺！」

ヴォルテールの突き上げられた右手とサムライの一撃が衝突する。衝撃波が大地を駆け廻って、死体を次々と放り飛ばしていく。しかし、両者はそんなことを気にも留めずに、死を厭わぬ戦闘を加速させていく。

キャロはそれを下から覗きながら、茫然自失のまま、天を仰いだ。キャロの心に出来た虚構は、まだ埋まっていない……。

「ふむ……逃したか」
『何ともすばしっこい騎士だ！　正に雷！　フェイト・テスタロッ

サの指導を受けただけのことはある！』

「しかし、あの傷で遠くへは行けないだろう。……セファーのいる管制室には、ここを通る必要がある。ここで待ち伏せするぞ、益荒男（ますらお）」

『応とも、Ｌｉｃｅｎｓｅｒ！』

益荒男の奇襲を受けたエリオは、その声を聞いて絶望的な思いに駆られた。先程の奇襲で斬られた脇腹からは血が止め処なく流れていたが、その切傷がエリオと益荒男の力量の差を如実に表していた。

隠れていた物影から、そっと益荒男の様子を窺ってみる。益荒男は装甲を黒光りさせつつ、隙なく二刀を携えていた。溢れる闘志はエリオの目から見てもはっきりと分かるほど立ち昇っており、簡単にそこを通らせてくれそうにない。

そうやってエリオが様子見を続けていると、急に益荒男が闘志を高めた。見つかったのかと思い焦るが、どうやらそうではないようだ。

「ほう……降下してきたＡ－ＬＡＷＳの艦隊から、サムライが出てきたぞ。盟主であったロベルト＝コーナーも一緒だ。あの目立つ金ぴかのＭ．Ｓで出るのは、正気を疑うがな」

『某はサムライとも死合いたいぞ、ライセンサー！　雷の騎士もいいが、やはりここはオーバーＳランクに限るであろう！？』

「しかし、私たちはここの守りを任せている。それを投げ出すことはできん。駄々を言うな益荒男。これが終わってから存分に戦わせてやる」

『信じておるぞ、ライセンサー！　この某自慢の刀を質屋に入れるほど！！』

「絶対に取り扱ってくれそうにないがな」

エリオには分からない会話であったが、この時、Ａ－ＬＡＷＳの艦隊の何割かが大気圏内に突入していた。その内の一隻からロベルト率いる部隊とサムライが火勢の如く出陣し、防衛ラインに踊りかかっていたのだ。

最も、サムライは途中で何か別の獲物を見つけたのか、いきなりその部隊から離れ、一気に降下していったが。それに頭を抱えるロベルトのアルヴァアロンの姿は、傍から見て滑稽だったと、ここに記す。

（……もう、これしかないと思います。ですので、後は頼みます！）

高めた闘志を維持したまま、通路に仁王立ちする益荒男。エリオはこのままでは埒が明かないと思い、腹を括って、物陰から飛び出した。

「む、そこか！」
「ソニックムーブ！」

益荒男との間にあった距離を、残像が見えるほどの速度で駆け抜けようとする。常人の目には風としか認識できない速度を維持したまま、エリオは紫電を纏い、手に持つストラーダの矛先に魔力を込める。バチバチィ！　と、スパークの眩きが通路を明るく照らした。

「速い……が、それだけのこと！」

益荒男が大きく一歩を踏み込んだ。腰に備わる2基の疑似太陽炉からは溢れんばかりの粒子が噴き出る。右の一太刀を振り上げ、それをエリオの一撃に合わせて斬り下げようとする益荒男。エリオは

奥歯を噛み締め、来るべき衝撃に耐えようとした。

「この益荒男には通用しない！」

だが、その覚悟を嘲笑うかのように、益荒男の斬り下げの一撃はエリオの槍を易々と弾き飛ばした。何とか手に力を込め、槍を手放すことを防ぐが、すでに益荒男は二刀目を繰り出していた。

「終わりだ、エリオ・モンディアル！」

『正・即・斬！』

「……！」

左手の長刀がエリオに振り落とされる。圧迫感と絶望感が、一体となってエリオに押し寄せてきた。エリオは閉じようとする瞼（まぶた）を何とか見開きながら、その一撃から目を逸らさずに注視し、そして望んだタイミングがやってきたことを彼に知らせた。

「今です！」

ガキィンッ！！

「な、なに！？」

益荒男の刀が金属的な音とともに、空中で静止した。エリオと益荒男との間に突如として広がった蒼い障壁が、益荒男の一撃を完全に受け止めたのだ。障壁は益荒男の一撃で全体が歪んでいたが、それは確かに益荒男渾身の一撃を防いでいた。

「これは……一体？」

『エリオ・モンディアルの魔力光は明るい黄色のはず……いや、こ

の魔力光の色は、まさか……！』

益荒男のランクはＳＳ－とされている。その一撃を防ぐことは、凡百の魔導師では到底不可能だ。とてもではないが、防御魔法を専門とする高ランク魔導師でも連れてこない限り、エリオに益荒男の一撃が防げるはずがない。

そのはずだった。

「ストラーダ、ブリッツアクション！」
『ブリッツアクション』

困惑する益荒男を他所に、エリオはその場から疾走していった。後に残された益荒男は、湧き出る喜びを全身で表しつつ、その後ろ姿をじっと、ただじっと眺めていた。

「……ふふふふ。成程、そういうことか。管理局は余程セファーを仕留めたいようだな。それにしても、まさか主の守護を放棄してまでここに来るとは……私もセファーも、予想だにしていなかったぞ」
『だが、それによって某たちの楽しみは一つ増えたではないか！ふっはっはっは、血沸き肉躍るぞ、ライセンサー！　さあ、往こうではないか！　新たな戦いへ！！』
「まあ、待て。そう焦るな。ここはセファーに恩を着せるためにも、セファーが危なくなったところで参戦すべきだ。……Ｄｒ．のためにもな」

益荒男を躱わし、管制室の扉を突き破ったエリオは、多数のモニターを背に負ったセファーへ、紫電が唸るストラーダを突き付けた。セファーはそれを、白い仮面の奥に覗き見える蒼い瞳で唯見ていただけだった。その目に宿る感情は、エリオには理解ができないほど深く淀(よど)んでいるように見える。

「まさか、益荒男を抜けるとは……予想外」

「貴方がセファー……ですね？　機動六課のエリオ・モンディアルです。大人しく管理局に投降して下さい。投降しない場合は……」

「投降は不可。吾輩のロードがそれを望まず。故に、吾輩は時間を稼ぐ。益荒男がここに来るまでの時間を」

全身白尽くめのセファーが、指をパチンっと鳴らした。それだけの動作で彼は９つもの魔法陣を作り、白いチェーンバインドを生成すると、それを全部、エリオへと放った。

エリオは向かってくる拘束の鎖を時に槍で弾きながら、セファーに近づこうとした。セファーは新たな鎖を１０、２０も生成し、エリオに一斉に放つも、戦闘に慣れていないセファーではどれだけ鎖を増やしても、エリオの動きを捉えられなかった。

鎖をかわし切ったエリオが、セファーの目の前で力を溜め、轟ッ！　というべき勢いでセファーを槍で貫こうとした。しかし、その瞬間にセファーは転移魔法を発動し、槍は虚空を貫いただけで終わった。

悔しがる暇もなく後ろからやってきた鎖の束を、魔力強化された膂力で振るう槍で受け止め、後ろに逸らす。パチン、パチンと指が鳴る度に新たに作られる魔法の数々を、エリオはギリギリのラインで凌ぎ続ける。

時間にして、僅か３０秒ほどの攻防であったが、その時点で両者はすでにお互いの力量を推し量っていた。その結論として、短期決着はありえないという事も、彼らは予測していた。

もしそこに何らかの外的要因がなければだが。

「む……惜しかったが、シールドだ」

（……あと一歩、一歩だけ……！）

セファーのかざしたシールドに、エリオの槍が食い込む。しかし、セファーのシールドは予想以上に固く、エリオには貫くことができなかった。これを貫くには、相当な魔力と威力が必要だ。もしくは……

「我輩の盾、ロードの盾ほどでなくとも、並みよりいと固し。ＡＡ＋程度で貫くなど、努々思わず」

「……でしたら、この人の攻撃も防いで見せて下さい！」

……セファーには絶対的に勝てるザフィーラが必要である。だから、その準備は怠っていなかった。

「ザフィーラさん、お願いします！」

「了解した。エリオ、済まなかったな。ここまで運ばせてしまって」

「……は？」

エリオの腰に巻かれていた大きなポーチの中からひょっこりと、蒼い毛並みの子犬が姿を見せた。その愛くるしい瞳を見たセファーは、シールドをかざしまま、驚愕のあまり、言葉を詰まらせた。

「鋼の軛（くびき）！」

蒼い子犬が可愛い姿に似合わない大声で吼え、蒼い棘が下を突き破ってセファーの身体を床に縫い付けた。一瞬の出来事に、セファーはいまだにセカンドアクションを取れずにいる。そんな好機を逃さないとばかりに、エリオは乾坤一擲（けんこんいってき）の覚悟で槍を突き出した。

「一閃必中！」

『メッサー・アングリフ』

「ががががががぁあああああああッ！？」

ガコンガコンッ！　と、二発のカートリッジをロードして放たれたエリオのメッサー・アングリフがセファーの胸元に深く突き刺さった。非殺傷設定とはいえ、セファーの身体を床に沈みこませるほどの威力で放たれたそれは、セファーを一撃で戦闘不能にせしめた。

「ふ、不覚……！　まさかザフィーラを連れていたとは……吾輩の居場所が分かったのも、ザフィーラがいた故だったとは……！」

紫電で体中が痺れたセファーは、もうまともな戦闘能力が残っていないのか、苦しげに呻くだけだった。その姿を注意深く見詰めながら、ポーチから出て人型になったザフィーラはセファーを拘束しようと手を伸ばす……が、すぐにその手を引っ込めた。

「危ない危ない……危うく連れて行かれるところだった」

『大丈夫か、セファーよ！　厚かましくも恩着せがましい某のライセンサーが助けにきたからには心配無用、大船に乗った気持ちであられよ！　……いた、痛いぞライセンサー！？　何故（なにゆえ）、某を叩くのだ！？』

「それは、お前が救いようのない馬鹿だからだ。……さて、どうす

るエリオ・モンディアルにザフィーラ？　悪いがコイツはまだＣＢに必要な人材だ。もし連れて行こうとするなら……私を倒してからにしろ」

構えを取った益荒男が、心根すら折る重圧をエリオとザフィーラに放つ。守護獣と騎士は重圧に抗って益荒男と相対するも、実力差は歴然としており、この状況の打開策は全く思い付かなかった。

そんな折に、益荒男の方からありえない条件が提示された。

「だが、もしコイツを見逃すというのであれば、お前たちを見逃してやらなくもない。お前達の相手をするよりは、他のオーバーＳと益荒男が戦いたがっているのでな。……さて、どうする？　ここで果てるか、はたまた生き延びるか……選ぶ時間はあまりないぞ？」

益荒男が赤いバイザーの下で笑ったような気がした。勿論気のせいである。エリオとザフィーラは幾らか逡巡した後、互いに頷き合って構えを……解かなかった。

「そうか……では死合おうか、騎士と守護獣よ！」

待ったなしだと言わんばかりに踏み込む益荒男。それを迎え撃つザフィーラとエリオは、濃厚な死の気配を感じながらも、益荒男に対して突っ込んでいった。

メメント・モリの無骨な管制室にいるクアットロは、見えてきた標的を前にして笑いを堪えることができなかった。あと１０分も経てば、メメント・モリは１０番目の都市を焼き払い、また新たな生贄を生み出すことだろう。

「あは、はは、ははははッ！！」

チャージはすでに７割ほど完了している。だが、クアットロはフルパワーで都市を焼き払いたかった。ただ何となくそうしたかったという理由で。

今も管理局とＡ－ＬＡＷＳによる戦争は続いているが、メメント・モリに指一本も触れられない攻勢など怖くはないとばかりに、クアットロは大胆不敵にも、直下のアンテナを展開した。何処かで見たような星光が、衛星の先に集っていく。

「あと少し、あと少しで私の勝ちよ、管理局！　あと少しで私は貴方たちを屈服させるわ！　１０番目の都市を焼き払うことで！」

外の魔導師たちが、展開されたアンテナを見て一同に動揺するのがモニター越しにでも分かった。あまりの愉快さに、口を抑えることすらできなくなる。両手を大きく広げ、くるくるくると回って、楽しげに笑い始める。

「あははははははははは、ははははははは、あははははははははッ！！」

そして無情にも、時間は正確に、迅速に過ぎ去ってしまった。今の壊れたクアットロには、十分などあっという間だった。チャージはすでに１００％で、いつでも全力全開の一撃を直下の都市に放つことができる。愉快、愉快、愉快な気持ちが、クアットロを支配した。

「私の勝ちが、私の価値が決まったわよ、管理局！　いいの？　いいの？　いいのかしら？　撃っちゃってもいいのかしらねぇ、メメント・モリを！　都市にはまだ万単位の人間がいるのよ？　それでも私は構わずに撃ってしまいますわよ、あはははッ！！」

狂人の思考で、焦点が合っていない目で、直下の都市をモニターで見下ろすクアットロ。この１０カウントが終われば、後はスイッチを押すだけで、メメント・モリはどこかの神話のように都市を焼き払う。

クアットロの狂笑が、その到来を予期してさらに大きくなった。今の彼女に正常な思考などは存在しない。あるのはただ、復讐心のみ。管理局に復讐することだけが、今の彼女にとって重要なことであった。

「はははは、はははははははは……は？」

そして、もう一つ重要なことがある。それは、彼女をここまで狂わせた人物――高町なのはに仕返しをすること。

「う、嘘……これはまさか、Ｓ．Ｌ．Ｂ！？」

クアットロにトラウマを植え付けた彼女に仕返しをすることもまた、クアットロにとっては至上命題の一つであった。だから、その

肝心の彼女がメメント・モリの直下にいることは、クアットロにとってとても都合のいいことであった。

「あっはっはっはっ……馬鹿だ馬鹿だとは思いましたが、もしかしなくとも、このメメント・モリと撃ち合うつもりですか、エース・オブ・エースさん？　だとしたら、貴方は馬鹿を超えた馬鹿ですよ！　あはははは！！」

管理局に復讐できるだけでなく、高町なのはにも仕返しができる。一石二鳥とはまさにこのこととばかりに笑い転げるクアットロは、しかし、この時忘れていた。

そうやって嗤った相手が、「Ｊ．Ｓ事件」にてクアットロの予想を遥かに超えていたのだということに。……そういった意味で、彼女は全く学習していなかった。

「大きいね、レイジングハート」

『ＸＶ級１０隻分以上の質量ですから、当然です』

メメント・モリの直下、焼き払われようとしている都市の上空でレイジングハートを握りしめていた高町なのはは、青天の空にポツ

リと浮かぶメメント・モリを見て、極めて単直な感想を抱いた。

下から見るメメント・モリは、地面より１０００メートルほど浮かんでいるなのはから見ても、豆粒よりもさらに小さく見えた。もっとも、それはあくまでも肉眼の話であり、魔力で強化された目で見れば、装甲の溝まではっきりと見ることができた。

「それじゃ、そろそろ始める？」

『時間的にもちょうどいいかと思われます、マスター』

なのはがガデッサなどの相手をシグナムやアニューたちに任せてまでここに来た理由。それは、もしメメント・モリを次射までに破壊できなかった場合に備えての保険として、ここに配置させられていた。

「凄い魔力の密度……こんなに濃い中でやるのは初めてじゃないかな？」

『Ｙｅｓ，ｍａｓｔｅｒ。しかし、マスターなら楽勝でしょう』

「にゃはは……でも、お手柔らかにお願いしたいな」

メメント・モリの破壊力は、一国を一撃で滅ぼすほど。されど、高町なのはの砲撃も、かつて「闇の書」リインフォースが使った際、拡散を加えたとはいえ、一都市丸々を呑み込むほどの威力があった。ならば、メメント・モリの砲撃とも拮抗するのではないか？　それが上層部の意見であり、同時に決定でもあった。

無論、この決定には部隊長の八神はやてが何時ぞやと同じく猛抗議をしたが、聞き入れられるはずもなかった。上層部――引いてはこの攻防戦の総司令官は、自身の作戦が成功し、名誉を得られるためならば、例え自身よりも遥かに価値のあるオーバーＳを一人使い

潰したとしても構わなかったのだ。

そんな裏事情を漠然と分かりつつも、なのはは命令に素直に従った。反対するには、なのはの権力もはやての権力も、あまりにも弱過ぎた。

それに、メメント・モリの防御力は実際にとんでもなく堅牢であり、発射した時の無防御状態――それも発射口を狙っての――でも狙わない限り、とても破壊することは出来なかった。それも踏まえて、なのははここに配置されていたのだ。

そして、最悪の事態であるメメント・モリ到着が、ここに実現した。なのはは当初の配置場所から身動ぎせずに、獰猛に笑いながら砲撃の構えを取った。桜色の魔法陣が、まるで絨毯のように空中に敷かれる。その上に立つ彼女は、やはり何処か幻想的な空気を匂わせていた。

「あの時、途中で邪魔されたＳ．Ｌ．Ｂ……今度こそ成功させるよ、レイジングハート！」

『Ａｌｌ ｒｉｇｈｔ，ｍａｓｔｅｒ。私は貴方を全力で支えます』

メメント・モリの集光レンズに、鮮やかな光りが集っていく。だが、なのはが掲げたレイジングハートの矛先にも、桜色の魔力が集い、巨大な球体を形成して、辺り一面に燦々たる光りを放っていた。

『では、カウントを始めます。１０、９、８……』

死星と星光――二つの星々が互いに相反して向き合う中。レイジングハートは１０のカウントを唱え始めた。それは奇しくも、メメント・モリのカウントとほぼ同時のタイミングであった。クアット

ロが勝利の笑みを零したのも、この時である。

『7、6、5……』

反対に、なのはは凄みのある笑顔で周囲からの魔力をS．L．Bに集束させていた。管理局所属の魔導師の魔力も、A－LAWS側の魔力も隔たりなく集め、そこになのは自身の膨大な魔力も上乗せしたS．L．Bは、もはや計測するのも不可能なほどの魔力を内包していた。

『4、3、2……』

直視することができないほど煌々と輝く二つの星々。メメント・モリの周囲に展開していた魔導師たちは、いきなり動きを止めたGNキャノン？らのことより、そちらの方ばかりに気を取られていた。膨大な熱量を秘めた赤橙の死星と、桜色がさらに濃くなった撫子（なでしこ）色の星光が、この世界を2色に別ち、都市の命運を定めようとしている。

魔導師たちが固唾を呑んで見守るしかない状況の中で、クアットロは今までで一番壊れた笑みを浮かべて、スイッチを気軽に――なんてことはないように――押した。メメント・モリ内部に途轍もない振動が奔り、それがクアットロにメメント・モリが発射されたことを知らせた。

『1……Star．Lite．Breaker』

「全力！　全開！　スターライト……」

９０００メートルも下にいるなのはにも感じ取れる、圧迫感すら感じる衛星兵器の戦略級砲撃。それが見る見るうちに視界の内で大

きくなっていくのを終始見つめながら、なのはは、

「ブレイカァアアアアアア！！」

あの時言えなかった最後の詠唱を、絶叫するように唱えた。

大気圏外で戦っていたジャンヌとセラヴィーの戦いは、ジャンヌの私兵たるオルレアン・ナイツとセラヴィーとの戦いに変化していた。ジャンヌの先見を指示に仰ぎながら、一個の軍隊として戦う彼らに、セラヴィーは苦戦を強いられていた。

Ａ－ＬＡＷＳ側の大気圏外にいる戦力は、すでに当初の半分程度しか残っていない。今はアイシスのいる旗艦「マリアンヌ」を中心にして、残兵を集めつつ撤退している最中だ。その時間稼ぎをしているのが、ジャンヌとオルレアン・ナイツであった。

『……さすがはジャンヌだ。アイシスの戦術を剛とすれば、さしずめ、これは柔の戦術か……こちらの動きを予め知った上で動かれると、こうも厄介なものなのか……！』

ティエリアが苦言を零しながら、二挺のＧＮバズーカ?を発射し

た。しかし、ナイツの兵隊たちはそれを知っていたかのように事前に回避行動を取り、あまつさえ、セラヴィーの張ったＧＮフィールドに攻撃を加えてきた。

ナイツの攻撃力は生半可なものではなく、ＧＮフィールド越しでもその威力をおおよそ推察することができた。３６名からなるナイツは射撃魔法と魔力付与攻撃、そしてバインドを駆使して、ジャンヌの「お願い」を忠実に再現し、セラヴィーとすら拮抗し得た。

一人と一個が互いを活かして戦う彼ら相手に、セラヴィーはよく耐えているといっていいだろう。そして、それは彼らにも言えることだった。

如何に攻撃力重視で構成されているナイツとはいえ、セラヴィーの防御を突き崩すことは簡単にできることではない。しかも、相手の攻撃は殆どが一発でお陀仏の威力であり、百を一で返すことができるものだった。

今も実体剣で斬りかかるも、セラヴィーはフィールドに粒子を集中させているのか、全く歯が立たなかった。舌打ちをする合間にも放たれる砲火を、ギリギリの線でかわす。

「……（……撤退は、まだ？）」

「は、まだあと数十分ほどかかるそうです。如何なさいますか、聖女様？」

「……（なら、作戦続行……デカブツを足止めする）」

「了解です、聖女様」

周囲に漂うデブリに隠れ、時には盾として使いながら、セラヴィーの攻撃をいなすナイトたち。セラヴィーはデブリごとナイツを薙

ぎ払おうとするも、全方角を囲まれている現状、大きな攻撃をすることには躊躇いがあり、ナイツとジャンヌはそこを突き込む。

そうして、互いに有効打がないままに時間が過ぎていき、ジャンヌがもう時間稼ぎは十分だと判断したとき。セラヴィーにはもう戦う気がないのか、茫然と大気中に浮かんでいるのを確認しながら撤退したナイツの眼前に広がったのは……

「こ……これは、一体何が起きて……」

何故か壊滅的な被害を被っている艦隊の現状であった。

そして、彼女たちは見た。地球に伸びる、一条の軌跡を。その軌跡の色は鮮やかな緑色であり、それが意味することは、この世界ではたった一つしかない。

「デカブツ」のセラヴィー、「羽付き」のアリオス、そして「三つ目」のケルディムが戦場で確認されている今、その粒子を持つ機体は……あの一機のみ。

その意味に気付いたジャンヌの背筋が凍り付くのとほぼ同時刻に、メメント・モリとＳ．Ｌ．Ｂが、大気圏外からも分かるほど、盛大に衝突した。

第７２話　星々　【急】（後書き）

どうみても死亡フラグの建築ラッシュです。本当にありがとうございました。

さて、あと残す所は【終】のみです。これが終われば第７２話は終了して、第７３話、幕間と続くのみです。その後にもさらに６話ぐらいありますが……今は気にしないことにします。

終わりが見えているのに終わりが見えてこないって、アリなんですかね？

次話の投稿予定日：諸事情により不透明

第７３話　明星（前書き）

【目的は既に果たしたよ……彼女がな】

――Ｃｏｒｐｏｒａｌ様から、『ＡＣラストレイヴン』のジャック・Ｏより

第７３話　明星

――新暦７５年３月１６日――

その場にいた誰もがその時、天を仰がずにはいられなかった。

オーバーＳの化け物――サムライ、フェイト、カリム、アリオス、ケルディム、ガラッゾ、レグナント、セッテでも、この時ばかりは戦闘を止め、星と星の衝突に魅せられていた。

それはＳＳクラスの怪物――益荒男やヴォルテールも例外ではない。彼らすら軽く消し去れる「星の光」が頭上で争っているのだ。無視をするには、それはあまりにも……美し過ぎた。

「ツ……ウゥッ！！」

都市を葬らんとする死の星光が、守らんとする桜の星光と拮抗し、空と地を繋ぐ一筋の巨大な光の柱を作り出す。あまりにも壮大、あまりにも荘厳なその光景に、人々はただ畏怖を抱くのみで、自らの無事を祈るしかなかった。

「や……ぱり、キツイ……ね！」

空から墜ちる星光が、大地から昇る星光を僅かに押し潰した。なのはの身体により一層の負荷がかかり、レイジングハートを取りこぼしそうになる。体中が悲鳴を上げるが、なのはは悲鳴を上げずに、ずっと頭上を見上げ続ける。

「あと……もう少しの、魔力、さえ、あれば……！」

圧力すら伴う死星の光りが、星の光りの名を持つ砲撃をさらに押し潰した。なのはのグローブがはめられた手から、血が若干噴き出る。負荷と圧力に耐え切れなかったのだ。今のなのはの全開では、向こうの全力に勝てない。

「でも、負けるわけには……いかない！」

『カートリッジロード』

弾倉に入っていたカートリッジを全てロードし、魔力量を一気に増やすなのは。体中が軋みを上げるが、それを無視して無理矢理姿勢を維持する。

……が、それでもまだメメント・モリの砲撃に対抗し得なかった。高町なのはという個人の出せる限界を持ってしても、メメント・モリはそのさらなる高みから不屈を屈服させようとする。

土台が無理無謀であったのだ。セラヴィーと対抗できる高町なのはといえど、メメント・モリに撃ち勝つには、絶対的に魔力が足りなかった。Ｓ．Ｌ．Ｂで周囲から集束しても、それすら上回る圧倒的な出力で、メメント・モリはなのは諸共、都市を焼き尽くそうとする。

「う……あ……ッ！」

超過した魔力を集束している負荷で、なのはの身体から血が噴き出し始めた。純真そのままの白が、血生臭い赤に染まっていく。それでも状況は好転せずに、なのはの魔力を加速度的に削り取っていく。

そして、ついにメメント・モリの砲撃が、なのはのＳ．Ｌ．Ｂに大きく競り勝った。最初はほぼ中間にあった衝突点も、今ではなのは側に大きく片寄っていた。周囲の魔力はすでに枯渇寸前で、都市にいる敵味方の魔導師たちもなけなしの魔力を周囲に放っていたが、それでもまだ少し……ほんの少しだけ、足りなかった。

「あ……あぁあああああッ！！」

なのはが吼える。しかし、結果は変わらない。最低でもＡＡＡクラス以上の魔力が無ければ、なのはのＳ．Ｌ．Ｂはメメント・モリに押し負け、都市は灰燼と化すだろう。それが分かっているからこその咆哮であったが、メメント・モリは無情にも最後の時へと直走る。

だが、忘れてはならない。

「聖王教会です！　これから高町なのはさんに加勢しますので、周囲の魔導師でない皆さんは後ろに下がって下さい！」

彼女は、高町なのはは主人公であることを。

「せい、おう……きょう、かい？　ヴィヴィオを……攫った……！」

「いえ、違います！　私たちは離反組の方です！　今、私たちの全魔力を貴方に預けます！　ですので、この都市を、住民を守って下さい！　お願いします！」

そして、主人公には必ず助勢と勝利があることを……忘れてはならない。

「これは……これだけあれば！」

カリムが率いていた数百名の騎士団から、ＡＡＡクラスを超える魔力量がなのはに供給された。その全てをＳ．Ｌ．Ｂに回すと、Ｓ．Ｌ．Ｂの直径が一周り大きくなった。

当然、なのはにはさらなる負荷がかかる。体中の出血がさらに酷くなった。それでもなのはは砲撃を上に放ったまま、その場から一歩も退かずにメメント・モリと相対する。その姿は、さながら英雄――救世主――主人公のものであった。

「い……けぇーーッ！！」

騎士団からもらった魔力で、再び昇るＳ．Ｌ．Ｂ。しかし、メメント・モリとの拮抗を果たしたものの、中間より先にはこれ以上進めなかった。なのはも、騎士団も、そして管理局とＡ－ＬＡＷＳの魔導師たちも、すでに限界を絞り尽くしていた。あのメメント・モリと拮抗できただけでも奇跡というべきだが、勝つにはまだ……足りない。

「レイジングハート！」

『Ｙｅｓ，ｍａｓｔｅｒ。ブラスターモード起動、ブラスター１を発動させます』

だからこそ、彼女はここで切り札を切る。レイジングハートの最終形態にして、あの聖王をも屈服させたブラスターモードを、なのははここでついに発動させた。

「あああぁぁあああああああああッ！！！！」

なのはの雄叫びが轟く中、ブラスター１を解放したなのはの体中

から抑えきれない魔力が、大量の血と共に溢れだしてきた。自分で自分にブースターをかけることで、魔力を強化するブラスターモードは、強化にも自分の魔力を使うので効率のいいブースターではない。しかし、高町なのはという超絶的な魔力を持つ魔導師に限って言えば、その常識は当て嵌まらない。

なぜなら、ブースター程度に使う魔力など、彼女の途方もない魔力量からすれば、殆どないに等しいためだ。常時ブースターをかけても、長時間戦うのでない限りは、殆ど影響は受けない。それよりは寧ろ、デバイスや身体にかかる負荷の方が心配なぐらいである。

しかし、なのはのリンカーコアは、リンカーコアを封じる「エンドレス・コア・シール」という魔法により、長期間、活動停止を余儀なくされていた。しかも、「エンドレス・コア・シール」にはリンカーコアを回復する魔法が何故か――本当に何故か組み込まれていて、なのはのリンカーコアは今までの後遺症も含めて、全て完治されていた。

それだけでなく、「エンドレス・コア・シール」を解いた後も、なのはのリンカーコアにはその回復魔法がかけられ続けていた。セファーがなぜそんなことをしたのかは、ザフィーラにも分からなく、理由は一切不明だが、今のなのははブラスター1や2程度の負荷なら無理なく耐えられるようになっていたことは、厳然たる事実である。

「あぁあああああああああああッ！！！！」

『嘘……嘘よ、こんなの。何なのよ、何なのよ貴方はぁあああああッ！！』

メメント・モリを押し上げ始めたS．L．Bを見て、クアットロ

が絶望したような顔で絶叫した。もう何が起きているのかすら、今の彼女には理解できなかった。目の前にある非現実を忘れられるのならば、彼女は喜んで正気を捨てるだろう。

最も、その短い時すら与えられはしなかったが。

『ど、ドクタ……』

徐々に弱まるメメント・モリの砲撃を四散するように弾きながら進むＳ．Ｌ．Ｂ。クアットロはすでにその攻防を見てはいない。すでに勝敗は決していたからだ。

そして、ついに白い悪魔――否、白い魔王が放ちし究極の砲撃が、メメント・モリの本体をクアットロ諸共、一条に貫いた。クアットロの最後の言葉は、誰にも聞かれることなく、桜の魔力に包まれながら消えていった。

「ハァッハァッハァッハァッ……やり過ぎた、かな？」

『Ｄｏｎ，ｔ　ｗｏｒｒｙ』

Ｓ．Ｌ．Ｂに発射口と中心、それに管制室を貫かれたメメント・モリは、最後の輝きを放とうとでもするかのように、一際大きく爆発してから、無数に散逸していった。細かなパーツとなったメメント・モリが、落下の途中で流星のように燃え尽き、空を彩る様は、とても燦然（さんぜん）たる光景であったが、その直後に湧きあがった歓声が、その美しさを覆い隠してしまった。

メメント・モリが墜ちた。その事実は敵対していた両陣営の勢力図を一変させた。

砂漠の空に浮かんでいたメメント・モリを墜とそうと集結していた管理局・Ａ－ＬＡＷＳ・聖王教会（ただし離反組のみ）の勢力は勝鬨を上げ、敗者の残党狩りを行おうためにデバイスを掲げ、一気呵成と突撃していく。

反対に、メメント・モリを墜とされたことで敗者となったＣＢは、通信が繋がったスメラギの指示の元、迅速に撤退するための陣形を組んだ。しかし、彼我の勢いの差は明確で、とてもではないが攻勢を押しとどめることはできなかった。

強固な防衛ラインを築き上げていたＧＮキャノン?が、ガガキャノンが、死骸に群がる蟻のようにやってくる魔導師たちによって、次々と落とされていった。数百機もいた機体も、長い防衛戦とこの劣勢により、すでに１００半ばにまで減っていた。このままでは全滅すらありうるだろう。

しかし、そんな大きく変動する戦況を無視して戦うモノ共がいた。サムライとヴォルテールというオーバーＳクラスの化け物と怪物である。

「くっくっくっくっ……仏殺！」

「グオオォオオオオオオオッ！！」

サムライの魔力刃に包まれた二振りの太刀が、ヴォルテールの大きな胸に一筋の裂傷を与えた。ヴォルテールはその痛みに大きな咆哮を上げながら、その固く握った右拳でサムライを殴りつけ、遠くへと突き飛ばした。

「くくくく……くくっ、楽しい、私は楽しいぞ、真竜！　貴様のような怪物と戦えて、私は幸せモノだぁあああああッ！！」

竜の形を模（かたど）った鉄色の魔力鎧を太陽の下で鈍く光らせながら、開いた距離を瞬時に縮め、再び太刀を振るうサムライ。ヴォルテールはその一撃を、黒い竜鱗で覆われた左拳で迎え撃った。凄まじい振動と衝撃が、両者の間で激しく生じる。

「くくくく……くくくくくくくくっ！！」
「グオォオオオオ……オオオオオオオオッ！！」

力が拮抗し、弾かれる一人と一竜。だが、態勢の立て直しはヴォルテールのほうが速かった。背中に生えた巨大な翼を羽ばたかせ、サムライの上空を陣取ったヴォルテールは、そのまま空中から地上へと降下した。

「なッ……！」

当然、その下にいたサムライは、ヴォルテールの太い足に踏み潰されることとなった。巨木が空から落ちてきたかのような重い轟音と共に、サムライの姿がヴォルテールの足裏に消えた。

「……ほっ」

その攻防をずっと遠くから眺めていたキャロは、悄然とした様子ながらも、ヴォルテールがサムライに勝利したのだと思って、そっと胸を撫で下ろした。キャロから見ても、サムライは明らかに六課の隊長陣にも引けを取らないほど強かったので、ヴォルテールの安否を心配していたのだ。

しかし、レアスキル『竜殺』を持つ彼女は魔力もそうだが、その生命力もまた竜並であった。

「うおぉおおおおッ！！」

「……え？」

ヴォルテールの足が、僅かに地上から離れた。その光景をキャロは信じられないものでも見たかのような表情で見つめた。ヴォルテールも戸惑いを隠せずに、うろたえている。

「うおおおおぉ……らぁあああああああああああああッ！！」

「グォッ！？」

「ヴォルテール！？」

１５メートルという巨躯を持つヴォルテールの片足が、５メートルほど空に浮きあがった。ヴォルテールの足裏からは、鉄色の魔力光が存命を主張するかのように強く輝いていた。片足を取られたことでバランスを失ったヴォルテールの身体が、ゆっくりと後ろに倒れ込んでいくのを、キャロは終始、スローモーションとなった世界の中で見ていた。

「やはり、真竜ともなると、何時もの雑魚竜や雑魚賞金首を相手にするのとは根本から異なるな。笑いが堪え切れないぞ、くっくっく

っくっ……くーっくっくっくっ！」
「嘘……ヴォルテールの下敷きになったのに、まだ生きているの！？」

額から血を流しても、戦意が全く衰えていないサムライを見て、キャロは震えずにはいられなかった。人智を超えた存在であるヴォルテールと互角に戦うサムライは本当に「人間」なのだろうかと疑ってしまう。

ヴォルテールは圧倒的だが、サムライもまた圧倒的である。どちらが勝つのか、キャロには皆目見当もつかない。だから、祈るしかなかった。「竜の巫女」であるキャロには、ヴォルテールの勝利を祈ることしかできなかった。

「お願い！　勝って、ヴォルテール！！」
「グオオオオオオオオオオッ！！」

しかしながら、その祈りこそがヴォルテールに最も大きな力を与えるのだ。一際大きく咆哮したヴォルテールが、サムライをその無機質な瞳で威嚇するように睨む。常人ならばそれだけで死に至りそうな重圧を、しかし、サムライは笑ってやり過ごし、逆に魔力を体中から発散させ、殺気を前面に押し出してきた。

背中で十字を作るように太刀を構えたサムライは、自身の奥義たる「竜殺」を繰り出すべく、大量の魔力を太刀と身体に集めて、ヴォルテールを上目で睨んだ。

その殺気と魔力に当てられたようにして、ヴォルテールもまた眼前に魔力を集中させ始めた。それだけでなく、周辺の大地からも魔力を集める。それによりできた3つの巨大な魔力の塊は、砂漠の表

面を真っ赤に染めて、不快な唸りを周囲に響かせていた。

それは、ル・ルシエ族が「咆哮する炎」と名付けた、恐るべき「殲滅砲撃」であった。一度放たれれば、周囲数百メートルを焼け野原にする咆哮を、ヴォルテールは今にも解放しようとしていた。

……が。それが放たれることはなかった。何故なら、放つべき相手が急に後ろを見せて逃げていったからである。危機迫った表情をしてヴォルテールとの死闘を後にしたサムライを、キャロは消沈した様子で茫然と見送ったが、すぐにヴォルテールに後を追うように願い、その手の平に乗った。

ドスンッ！　という音で、意識を取り戻したエリオは、目の前で仰向けに倒れたザフィーラを見て、すぐに駆け付けようとしたが、自身の身体が思うように動かないことに気付いた。それでも何とか動かそうとしたが、その動きも上からの一声で止められてしまった。

「動かない方がいいぞ？　死にたかったら別だがな」

首を上に上げれば、そこには疑似太陽炉のインストールを解いたトーレが、腕組みをしながら此方を見下ろしていた。勝者の余裕か、

その精悍な顔からはすでに戦意が消えていた。

「うぅ……ど、どうして」

「ん？」

「どうして、僕達を殺さないのですか？」

トーレの忠告を無視して立ち上がったエリオは、まず一番に思った疑問をトーレに聞いてみた。自分が気を失ってから大分時間が経っていたのに、どうして殺さないのか……それがエリオには不思議だった。

「あぁ、そのことか。何、私がただ無益な殺生が嫌いなだけだ。それに、ザフィーラを殺すことはセファーの脅威が無くなることにも繋がるから、念の為に生かしておこうと思ってな」

「……それはつまり、吾輩を信じていない？」

「当たり前だ。例えＤｒ．に信じろと言われても、私は信じることができない。……ラジエルと裏でこそこそと小細工をしようとしているお前らを、どうして信じることができると？」

「それは……その通り。だが、この小細工は管理局に止めを刺すためのもの。故に極秘だった。許して欲しい」

「……管理局に止めを刺す？　それって……！」

「シークレット。それに、もう誰にも止めることはできない。……ロードがああなった以上、すでにこれは決定済み」

「……ふん。なら、ラジエルの正体もその後で分かるのか？」

「然り。ロードはそうお考え」

ぐったりとした様子で椅子に座るセファーは、そう言って沢山あるディスプレイの方に向き直り、エリオから視線を外した。エリオはその動きにつられ、ディスプレイをちらりと見て、そこで初めてメメント・モリが破壊されたことを知った。

そして、同時にキャロが悲しそうな顔でヴォルテールを召喚していたことも……この時にようやく知ることができた。

主戦場から5キロほど離れた山の中腹辺りに、西洋のものと思しき騎士甲冑で身を包んだ者達が集団を形成していた。荒廃した砂漠に周囲を囲まれた山には森林がなかったが、それでも身を隠す程度の洞穴は多数存在していた。

その一団は、メメント・モリの破壊をしっかりと確認してから行動を起こした。各々のデバイスを手に取り、今か今かと、号令の時を待つ。

「……諸君！　決戦の時は来た！　これより聖王教会は聖王様と共に、異教徒及び敵対する勢力の全てを殲滅する！！」
「おぉおおおおおおおおおおおッ！！」

屈強な体躯を白い西洋鎧で覆った教会最強の騎士、ノア＝アンダーソンが、刀身の白い長剣「ジャガーノート」をかざしながら、数千、いや万近い規模の騎士たちに、怒号のような声を張り上げた。それを受けた騎士たちは興奮した面持ちで、頭上にデバイスを構え

た。

「先陣を切る聖王様に続き、ここにある全ての異端を全滅させよ！　これは聖戦なり！　繰り返す！　これは聖戦なり！　聖王様に仇なすモノ全てをこの世から消滅させるのだ！！」

「おおおぉおおおおおおおおおおおおッ！！」

狂ったように叫び散らす騎士たち。その様子をブリング・スタディィは静かな心境で離れて見ていた。その心中には悔やんでも悔やみきれない後悔が居座っていたが、今は後悔するべき時ではないと割り切り、目の前で虚ろな目をしている聖王――高町ヴィヴィオの方に向き直った。

ヴィヴィオは本来の幼い姿ではなく、「ゆりかご」決戦時のような16~7歳ぐらいの背格好になっていた。身を包む白と金のスーツが神掛かったプロポーションを浮き彫りにさせ、女神のように整った顔立ちはイノベイドたるブリングから見ても美しいと思う。

……が、その目に覇気や正気がないのでは、その美しさも半減してしまっていた。

「……戦闘だ、聖王」

「……戦えば、いいの？」

「……あぁ」

「そう……だったら、戦うよ。敵を教えて、ブリング」

肩からかけたマントをひらりと翻しながら歩き出したヴィヴィオ。その後ろ姿には悲痛や辛苦などが見受けられず、ただ何もなかった。虚ろな……虚ろな後ろ姿である。

「Ｍｒ．ブリング、聖王様の護衛は任せた。こっちは同じ教会騎士のカリムを助けるために、「三つ目」と戦ってくる。くれぐれも、聖王様の御身を守って……」
「……言われなくとも守るとも」

それを見たブリングは、自身のしてしまった罪の重さを再認識しながらも、せめてもの償いとして彼女を守ることを決意した。かつてセラヴィーに殺されてしまったイクスヴェリアの二の舞にはさせないと、ヴィヴィオを見て覚悟を決めるブリング。

そんな彼の目の前で、聖王は疑似太陽炉を発動させた。そして、赤橙色と虹色の粒子が混ざり合う中で、ヴィヴィオは――聖王は、空へと飛び立った。

――かつて、母と飛ぶことを夢見た青天の空へと。

突如戦場に現れたクーデター派の聖王教会の騎士たちは、教会以外の勢力全てを敵と認識していた。つまり、ＣＢと時空管理局、それにＡ－ＬＡＷＳを敵に回したのであった。しかし、聖王教会の精鋭たちを殆ど持ち込んできたクーデター派には、その３つを全て敵に回しても互角以上に戦えるほどの戦力を持っていた。

特に先の防衛戦で消耗していたＣＢとＡ－ＬＡＷＳは、聖王教会の騎士たちからすれば、ネギを背負った鴨以外の何モノでもなかった。

「撤退！　撤退します！　ＣＢの追撃は一時中断！　Ａ－ＬＡＷＳはこれより、全力で戦線離脱します！」

地上に展開したＡ－ＬＡＷＳの部隊を取り仕切るロベルト＝コーナーが、召喚した金色の遺物、アルヴァトーレに乗りながら、全部隊へと忙しなく撤退の指示を出していた。ディスプレイに表示された情報は、全てがＡ－ＬＡＷＳの不利を示していた。

だが、待てども暮らせど、Ａ－ＬＡＷＳの撤退は遅々として進まなかった。そもそも、ロベルトの命令を無視してＣＢに攻め込む輩が大勢いすぎたのだ。ＣＢは管理外世界でも猛威を揮い、その武力の大半を狩りとってきた。それによって生まれた遺恨が、彼らにＣＢを逃させなかったのだ。

今もまた、Ａ－ＬＡＷＳに所属していた魔導師部隊が、ＣＢ側の砲撃で焼かれ、教会のデバイスで斬殺された。いくらロベルトが指揮を執っているとはいえ、すでに多くのＡ－ＬＡＷＳの部隊は正気を失い、目の前の仇敵――ガンダムしか目に入っていなかった。

「撤退です！　撤退です！　このままじゃ、皆死んでしまいます！　今はとにかく撤退するんです！　僕の言うことを聞いて下さい！　お願いします！！」

ロベルトの懸命な制止の声も、復讐者となった多くの魔導師や軍人には届かない。今の彼らには復讐のことしか頭になかった。組織

を壊したCBに。大切な人を、大事な人を殺したガンダムに報いを与えたい。その一心でA－LAWSの大半の戦力は邁進(まいしん)し続ける。

「……ッ！　……分かり、ました。残った部隊だけで撤退を始めます。……さようなら」

手綱が握れないことを悟ったロベルトは、正気を失って攻め続ける魔導師たちを見限ることにした。ロベルトの後ろには命令を聞いて、撤退しようとしている部隊もいる。その部隊までもこの狂騒とした戦場で死なせるわけにはいかないと、その想いが彼に冷酷な判断をさせたのだった。

しかし、事が簡単に運ばないことは、この世の条理である。それこそが不条理でもある。

「……見逃してはくれないか、やっぱり」

こちらに接近してくる敵影を、アルヴァトーレのセンサーは捉えていた。それは今の距離からでは稲光(いなびかり)のような反射光しか見えなかったが、ロベルトはその色を見ただけで全身を総毛立たせた。

稲光――つまりは金色――と言えば、死神とまで揶揄(やゆ)されたオーバーSランク魔導師、フェイト・T・ハラオウンが普通なら当て嵌まる。もし仮にフェイトが攻めてきたのならば、撤退中の部隊は自分も含めて全滅する可能性があった。

だが、よくよく考えてみれば、管理局がこの状況下でA－LAWSと事を構えるメリットがなかった。どちらの組織も今は教会とCBの対応に追われているはず。だからこそ、「金色の閃光」という強大な戦力を此方に回すほどの余裕が向こうにあるとも思えないの

だが……

そう考えている内に、光りの粒は次第に大きくなり、その姿を鮮明なものにしていった。そしてその御姿を見て、ロベルトは我知らず、生唾を呑み込んだ。

「ブリング。アレは……敵？」

「……敵だ」

稲光のような光りを放っていたのは、真ん中に金髪の女性を置く、強化アーマーのような機体の装甲であった。上品でありながら、煌びやかさを少しも損なわないその機体の配色に、ロベルトは同じ金色の機体を持つ者として、思わず見惚れてしまった。

「このＧＮアームズの初めての実戦……上手くいくかな？」

「……あの程度ならば楽勝だろう。その聖王用にカスタマイズされたＧＮアームズとアヴァランチダッシュならば」

聖王が装着したＧＮアームズＴＹＰＥ－Ｃは、周辺に粒子の膜を形成しながら、ロベルトのアルヴァトーレを目指し、一直線に突き進んでくる。周囲からの攻撃は完全にシャットアウトされ、進路を阻むことすらできていなかった。その防御力を見て、ロベルトは生半可な攻撃では意味がないと思い、アルヴァトーレの骸骨に似た頭首――主砲を開門させる。

「これで沈んで下さい！」

アルヴァトーレの骸骨に似た機首が口を開き、内蔵されていた大型魔導キャノン砲が火を噴いた。赤橙の熱線が聖王すら呑み込もうと直進していく。直線上にいた騎士たちが成す術もなく呑み込まれ

ていく中、聖王は一際眩くＧＮフィールドを輝かせると、背中から伸びる巨大なアームを左右に広げ、熱線の直線上に止まった。その顔には恐怖といったものは見えず、ただ淡々と作業をこなそうとしているようだった。

衝突音は一瞬だけだった。後は目を焼かん限りの閃光が瞬いたのみ。それを持ってロベルトは聖王に直撃したのだと思い、内心で勝利の美酒を味わった……が。

奇しくも４年前とは真逆の光景が、彼に接近してくるブリングのガラッゾのことを忘れさせた。

「そんな……直撃のはずッ！？」

「……貰った！」

アルヴァトーレに接近したガラッゾが、５本のビームクローを収束させた大きなサーベルでアルヴァトーレの機首を斬り落とした。火花を散らしながら落ちていくそれに、ロベルトは一視すら向けず、目の前で未だ健在の聖王に目の神経を集中させていた。

「しまった！　……紫の「角持ち」っていうことは、聖王教会に寝返った方のガンダムですか！　貴方が付いているということは、やはり、アレが聖王なのですね！？」

「……そうだとしても、今のお前にはどうすることもできない！

……そうだろう、ロベルト＝コーナー！」

「うっ……ず、図星ですけど、それでも僕は！」

ガラッゾの攻勢を周囲に展開した結界や障壁を使用して、寸での所で防ぎ続けるロベルト。ガラッゾのサーベルは殺傷力の高いビーム刃だが、その強固な守りを突破することが中々できなかった。

しかし、その均衡は聖王の一撃で崩された。

「インパクト……キャノン」

「ぐがぁッ！？」

聖王がＧＮアームズの左右から伸びた巨大な手甲付きのアームを、前に突き出すように動かすと、その先から巨大アームの拳大の大きさをした魔力の球体が、高速で発射された。それはアルヴァトーレの防御壁に命中すると、その内包された莫大な魔力で結界や障壁を破壊し、アルヴァトーレを丸裸にさせた。

「……ぬん！」

インパクトキャノンの衝撃でブリングから視線を逸らしてしまうロベルト。その間隙を抜け目なく突き、ガラッゾがアルヴァトーレの装甲にサーベルを突き立てた。ロベルトが自身の失態に後悔する中、ガラッゾは腕を×状に動かし、アルヴァトーレの左上――かつてエクシアにより深手を負わされた場所――に、クロス状の切り傷を刻みつけた。

その時、ロベルトがアルヴァトーレの鉤爪がついた前腕部で、ブリングを振り払う動作を行う。ブリングはその直前に飛び離れたが、今度は聖王が虹色の魔力光を後光としながら接近してきた。

そして、聖王の巨大な右アームが振り被られる。それに合わせるようにして、ロベルトもアルヴァトーレの左腕を振り被らせた。

「セイクリッド・セブン」

だが、アルヴァトーレの湾曲した左腕は、虹色の魔力を纏った聖王の虹の拳打により、呆気なく粉々にされた。しかも、勢いは止まらず、先程ブリングによって付けられた損傷に、その聖なる一撃を打ち込まれてしまう。

「うわぁあああッ!?　こ、こんなに簡単にアルヴァトーレがやられるなんて……！」

砲撃魔法でも喰らったかのような衝撃が、アルヴァトーレの内部で吹き荒れた。ロベルトの見ているディスプレイが、湧き出る損傷とエラーの警告欄で真っ赤となり、ついには本体自体が緩やかな墜落を始めてしまう。

「だ、脱出……脱出しないと！　……って、どうして脱出装置が起動しないの!?　まさかさっきの衝撃でシステムが……！」

アルヴァトーレという「強化パーツ」をパージすべく、ロベルトは傍らあるレバーを引いたが、レバーは引いてもうんともすんとも言わなかった。予想だにしていなかった事態に涙目となるロベルトだが、徐々に降下していく視界の中で、白い巫女服を着た人物の後ろ姿を見て、彼の顔は意識せずに笑顔となった。

「さ、サムライさん……！」

だって、その背中はロベルトの目標であり、憧れであり、そして……いつも苦しい時に助けてくれる、頼もしい背中なのだから……。

サムライは落ちいくアルヴァトーレのことを、彼女らしくもなく心の底から心配しつつも、目の前で虚ろな目をしている聖王と、戦意を漲らせているガラッゾから目を離すことができなかった。こういった点が師匠と弟子の差である。

「ふん……角持ちに聖王とは。随分と華やかな戦力ではないか？」
「……ブリング、アレは？」
「……アレも敵だ。それも、相当に強い……」
「しかし、よくも私の教え子をあそこまで痛めつけてくれたな？幸いにも、まだ生きているようだが……貴様らは生きて帰れるなどと思うなよ！！」
「そうなんだ……でも、戦えばいいんだよね？」
「……あぁ、そうだ。戦って……勝てばいいんだ」

抑えきれない殺気を全身から放つサムライを前にしても、二人は微塵も動揺していなかった。冷静に目の前の事態を処理しようとしている。その冷静さに当てられ、サムライもまた少しばかり頭が冷えた。胸中は怒りで煮え滾っていたが。

「……嘘。アレが、ヴィヴィオなの？　どうしてあんな姿に……！」
「グオォオオオオオオオオオッ！！」
「……ブリング？」
「……敵だ」

サムライの後ろからやってきたキャロが、ヴィヴィオの姿を見て手で口を覆った。ヴォルテールはサムライの姿と、それと比肩しうる二人を見て、高らかに嘶いた。

ヴィヴィオは以前会ったことのあるキャロの姿を見ても無反応で、ブリングに敵かどうかを尋ねていた。キャロは空洞の空いた心境ながらも、ヴィヴィオに必死で正気を戻すように言おうとした……が。

「くっくっくっくっ……華やかな昼食から豪勢な夕食になったな。これだけの戦力が集まるとは、神すら予想できまい」
「ＧＮアームズＴＹＰＥ－Ｃ、損傷個所なし。アヴァランチダッシュユニット、正常に稼働。戦闘に支障……なし」
「……どんなメンバーが揃おうとも、オレは聖王を守るだけだ」
「グオォオオォオオオオオオオオオオッ！！！！」
「……うっ」

サムライ、聖王、ガラッゾ、ヴォルテールが敵意を丸出しにし、濃密な殺気をぶつけ合っている状況では、キャロは言葉を呑み込むしかなかった。呼吸ができなくなるほどの密度でその面子は戦意を高め合い、今にも衝突しようとしていた。

ＡＩＬＡＷＳ、聖王教会、元ＣＢ、時空管理局。その四つの戦力に分類できるオーバーＳが入り混じったこの戦場は、恐らくこの世で最も恐ろしい戦場の一つだろう。これだけのオーバーＳが全力でぶつかれば、一国や二国など、余波だけで滅びてしまうかもしれない。

だが、そんな彼らですら、夢にも思わなかったことだろう。その戦場を天上から覗いていたモノがいたとは。そしてそのモノが近づいてきていることに、彼らはまだ、気付いていなかった……。

それは、天上から降りてきた天使のように、大気圏外から第6管理世界の惑星へと降下していた。途中、些細な障害もあったが、その全てを駆逐して、それは今、ここまで来ていた。

『機体状況には今のところ支障は見られない。大気圏突入もどうやら無事に終わりそうだ』

『そうか、ならいいが……刹那、もし何らかの支障があれば、すぐに撤退するんだぞ？　いいな？』
『了解した、イアン。それで、オレはどうすればいい？　スメラギ・李・ノリエガ』
『刹那は降下した後、できるだけ複数のオーバーＳを引き付けて頂戴。ただ、アレルヤは閃光に、デヴァインとリヴァイヴは烈火と鉄槌と戦っているから、貴方の援護には回せないことを頭に入れておいて』
『了解。出来る限りのオーバーＳを引き付け、撤退を援護する。……そろそろ戦闘に突入するので、通信を切る』
『いいな、刹那。少しでも不調があれば、すぐに撤退するんだぞ！　すぐにだ、すぐ！』
『……それじゃ、無事を祈っているわ。フェルトの為にもね』

肩部に付いているＯライザーの翼部を、正面から側面に移動させる。背中で合体しているＯライザーの暖かな重みが、『００Ｒ』のガンダムマイスターである刹那の心に静かな波紋を広げた。これほど透明な気持ちで戦闘に向かうのは初めてだと、刹那は自身の心のありように驚いた。

右手に持つＧＮソード?を握りしめてみる。馴染んだ感触を刹那に与えるソレは、刀身を一周する緑色のクリアパーツを光らせながら、刹那に頼もしさを感じさせた。

『……行けるな、００（ダブルオー）？』
『はい。……戦いに赴くのですね、Ｍｅｉｓｔｅｒ？』
『あぁ。……戦いは否か？』
『争いは嫌いです。話し合いで解決できれば、それが最善です。武力で解決するのは、新たな争いの元を生むだけです』
『……そう、だな。００の言うことにも一理はある。だが、オレ達

は今、世界の歪みを、争いの元を駆逐しにいくのだということは忘れないでくれ』

『Ｙｅｓ，ｍｅｉｓｔｅｒ。私は貴方に、その為の力を与えます』

摩擦熱で真っ赤だった全身が、元の白と青に戻った。眼下では四つのオーバーＳが、何故か都合よく一か所に集まっていた。その中央に降りられるように降下進路を微調整しつつ、刹那は最終チェックを行った。

この『００Ｒ』は、完成までに何度も躓（つまづ）いた、曰くつきのＧＮデバイスである。システム欄を何度もチェックしても、寧ろ足りないぐらいだ。けれど、刹那には機体の調子を心配する気持ちが全くなかった。

それは、彼が「００」というＡ．Ｉに全幅の信頼を置いていたからに他ならない。「ＥＸＩＡ」、「Ｏ－ＧＵＮＤＡＭ」、「Ｏ－ＲＡＩＳＥＲ」という三つのＡ．Ｉが統合して形成された「００」は、まさに人間並みかそれ以上の知能を持つスーパーＡ．Ｉとして完成されていた。

『刹那・Ｆ・セイエイ、『００Ｒ』。目標を駆逐する！』

『Ｙｅｓ，ｍｅｉｓｔｅｒ』

ＧＮデバイスで最高の性能を持つスーパーＡ．Ｉと、刹那の長年に渡って蓄積された戦闘技術、それにツインドライヴシステムを完全に起動させた『００Ｒ』の絶対的性能。その三つを伴った天使が、メメント・モリの消滅した空に今、降り立とうとしていた……。

第７３話　明星（後書き）

『００Ｒ』が登場すると思いましたか？　残念！　眼鏡をかけたさやかちゃ……登場寸前の一コマだけでした！　しかも、この後は幕間を挟むので、本編は最速でも２週間後あたりです。焦らしているわけではなく、プロットがそうなっていたのです。

なお、この作品は本当は昨日にも投稿しようと思ったのですが……インターネットが繋いである唯一のＰＣが占領されてしまっていたので、投稿できませんでした。申し訳ございません。

裏設定

・ＧＮアームズＴＹＰＥ－Ｃ

ブリングが隠し持っていた、ＧＮアームズとアヴァランチダッシュユニットの情報がインストールされたＧＮデバイスを、聖王専用にカスタマイズしたもの。

このＧＮアームズにはＴＹＰＥ－Ｅの大型ＧＮソードにあたる部分が巨大な手甲付アームとなっており、また下半身の鉤爪付きの脚部が、足の稼動域を阻害するとしてオミットされている。それにより低下した下半身の推進力は、ＧＮアームズと一緒にインストールされていたアヴァランチダッシュユニットのダッシュユニットが補う。また、アヴァランチユニットの背面部には、武装のアタッチメントではなく合体のための突起が存在する。両肩の砲門は健在。

なお、ＴＹＰＥ－ＣのＣは王や王冠の「ＣＲＯＷＮ」を意味している。

・セイクリッド・セブン

虹色の魔力を拳に集め、直撃と同時に魔力を内部へと浸透させるこ

とで相手を破壊する「聖なる一撃」。どこかで聞いたことがあるのはきっと気のせいなはず……？

Ｐ．Ｓ．プロットをよく見直しましたら、これが第７３話でした。そしてこれで幕間を挟めば破が終了します。次は急です。……なんとしても７．を急と終合わせて後６話で終わらせたいです。きっと無理でしょうが。

次回の更新予定日：２０１１年９月３日（土）

気が付けば、感想の総数が４００を超えていました。たくさんの感想、ありがとうございます。ここまで続けてこれたのも、皆様のご声援のおかげです。現在、自由にインターネットが使えない身ではありますが、出来る限り早めに返信を行いたいと思います。

幕間―9（前書き）

【世の中にはこんな言葉がある……『戦場において、一人殺せば罪人で……百人殺せば英雄だ』と。だが、そんなモノはまやかしだ。いくら綺麗事を並べても、生命（いのち）を奪う行為に”罪人”も”英雄”も関係ない……生命（いのち）を奪う事全てが『咎（とが）』なのだから…。】

――月光閃火様より

幕間―9

――新暦７５年３月１４日（メメント・モリ攻防戦の２日前）――

ＣＢ側が「ラグランジュ１」と名付けた宇宙には、無数のデブリが浮いていた。中には資源衛星などもあったが、大半はただのデブリだ。大きさが１メートルのものもあれば１０メートルを大きく超えるものもあるなど、大きさは皆それぞれ違っている。

『ヒィッヒィッヒィッヒィッ……！』

視界が茶色で埋め尽くされそうなデブリの数々。その中に混じるようにして、赤い残骸やデバイスと思しきパーツが真空の宙（そら）に止まるようにして浮いていた。赤い残骸は４つ確認でき、パーツは数え切れないほどある。パーツの中には、人間の腕や上半身と一緒に流れていたものもあった。

『化け物だ……あれは化け物だ！　何が殲滅できるだ！　あんなものがあるなんて、聞いていなかったぞ！？　あんな……あんな天使気取りの怪物がいるなんて……！』

もう少し早ければ、１００以上あった人間の死体も確認できたかもしれない。今ではもう何処かへ流されてしまって、ここで発見することは叶わなくなっていたが。

『怪物……怪物だ！　何がＳＳランクだ！　あれはそんなランクで収まるようなモノじゃない！　ＴＲＡＮＳ－ＡＭなしの状態でもあの八神はやてと同じＳＳ＋ランクに到達しているぞ！　そんな怪物をこんな少数で仕留めるなんて、できるわけがなかったんだ！！』

残骸が集まった地点から少し離れた場所で、先程から一人で喋っていたのは、他と同じく宙に浮かんでいた5つ目の赤い残骸――大破したアヘッドのＬｉｃｅｎｓｅｒであった。彼は恐怖により引き攣った声で、さっきまで行われていた戦闘とは呼べない一方的な殺戮を、フラッシュバックのように思い出す。

雨霰と降り注ぐ、砲撃並みの粒子ビーム。障壁やデバイスごと、魔導師を斬り裂く一振りの大剣。そして誰もが追い付けない凄まじい機動力に、ＧＮフィールドやＥ－カーボン製の装甲による堅牢な守り……

全ての性能が高次元で融合し、さらにはクロス、ミドル、ロングレンジまでをも制圧下におく圧倒的な戦闘能力。そんな怪物を相手にしたのでは、たった１００人と5機程度では足りなかった。いや、そもそもアレを倒すことが、この世界の如何様な人物が可能なのかとすら思う。何人たりとも倒せないのではないか、アレは？

それほどまでに、彼らの目標であった『世界に革新を齎すモノ』は絶対的であった。『神』を騙っているのではないかと疑ってしまうぐらいに、それはただ純粋に……強過ぎた。

『高町なのは並みの火力に、フェイト・Ｔ・ハラオウンのようなスピード！　それにあの八神はやての無限とも思える魔力量――粒子量――が合わさっているようなモノと、私たちはどうやって戦えばよかったのだ!?　奇襲？　先制攻撃？　……そんな陳腐な手段で、アレがやられるものか！』

アヘッドのＬｉｃｅｎｓｅｒは、今はＡ－ＬＡＷＳに所属しているが、一時、管理局に所属していた時期があった。その時に見た彼

女たち3人の、天才を超えた「異才」の全てを合わせ持つモノ。それはすでに「反則を超えた反則」、「切り札を超えた切り札」であり、人類が持つにはあまりにも早過ぎる武力であるとさえ思う。

今や超組織にまで成り上がったＡ－ＬＡＷＳの中でも、選りすぐりの精鋭部隊であった彼らたち。それを壊滅させるのに、そのモノが要した時間は僅か9分。たったの9分で、１００人以上いた部隊が壊滅――否、全滅したのである。それも、彼らをここまで運んだ3隻の母艦も含めてだ。

まさに、怖気すら伴う悪鬼の所業。「オーバーＳキラー」の名に恥じぬ戦績。Ｌｉｃｅｎｓｅｒの心までも叩き切ったそれは、「ＣＢの象徴機」が伊達ではないことを証明し、Ａ－ＬＡＷＳ側の貴重な戦力をものの見事に刈り取っていった。

『はは……あははは。もうどうにでもなれ！　どの道、あんなモノが解き放たれれば、世界は終わる！　終わってしまうんだ！　世界に革新が齎され、今までの世界は……終焉を迎える！』

大破したアヘッドのもげた頭部から、火花が飛び出る。どうやら爆発が近いらしい。致命傷に近い損傷を受けていた割には持ったほうだった。さすがは最新鋭機と言ったところか……。

『それを見る前に死ねて、私は幸せ者かもな！　革新なんて、そんなモノだろう！？　なぁ、そうだろう……みん』

Ｌｉｃｅｎｓｅｒの生体情報が詰まった疑似ＧＮドライヴが爆発し、宇宙に一輪の赤い花が咲いた。黄色い花はまだ……咲かない。それはいつ咲くのか、それとも咲かないのか……それはまだ分からない。この狂った時代の誰にも……そう、誰にも、分からないこと。

――新暦７５年３月１５日（メメント・モリ攻防戦の１日前）――

レストラン「バンクーバー」。そこは世界を表裏から支配するＶ．Ｉ．Ｐたちが集う、超一流の高級レストランである。ユーノが４年前から好んで使う完全防諜の「Ｉｎｆｏｒｍａｔｉｏｎ」Ｖ．Ｉ．Ｐルームなどがこのバンクーバーでは有名だが、別に一般向きの部屋がないわけではない。

「……君が、絹江・クロスロードさんかい？」

「そういう貴方は……ヴェロッサ・アコース査察官ですか？」

「ヴェロッサでいいですよ、絹江さん」

「なら、私もクロスロードで結構です。早速ですが、本題に入りましょう」

真ん中にテーブルを置き、三方を壁で囲んだ個室で、テーブルを挟みながら向かい合うヴェロッサと絹江の二人は、互いの情報を交換すべく、資料をテーブルの上に乗せ合う。そして自分に必要な情報だけを取捨選択し、素早く目を通していく。

「あの、お取り込み中に申し訳ございません。オーダーは……」

「コーヒーをお願いします」
「生を一つ、お願いします」
「かしこまりました」
「……こんな時にアルコールですか？」
「こんな時だからこそアルコールです」

運ばれてきたドリンクで喉を潤しつつ、必要な資料に目を通し終えた二人は、そこで初めて互いの目を見つめ合った。絹江の目はアルコールのせいか少し湿り気を帯びており、頬なども色っぽい桃色に染まって、何とも言えぬ艶やかな様相となっていたが、ヴェロッサはその色気を無視して口を開いた。

「それで……ＣＢのことで、何か分かったんですか？」
「……それは、こちらが聞きたいぐらいです。アコースさんは何か分かりましたか？」
「……」
「……」

しかし、その口もすぐ閉じる羽目になった。カリムを通じて知り合った二人だが、一ジャーナリストと一査察官では探れる範囲などたかが知れていた。今までに知り得た情報は、ＣＢを裏切ったイノベイドたちの情報が大半を占めており、逆に言えば、それ以外の情報は全く知られていないということである。

例えば、イオリア・シュヘンベルグの居場所。これに関しては彼らですら知っていなかったようだ。知っているのはＣＢの中でも極僅かな人物だけで、１０人もいないらしい。また、イオリアの経歴やヴェーダの詳細など、脳のロックで話せないことも沢山あるらしかった。

そういった未だ知らされていないＣＢの情報を集めるのが、今の彼らの使命なのだが……結果は酷いもので、何一つとして新情報を発見することができなかった。まるで情報管制でも敷かれているように、本当にＣＢの情報は現実にも電子上にも、残滓すら確認できないほど存在していなかった。

「はぁ……これだけ捜してもないとなると、ＣＢの実在すら怪しく思えてきますよ。ガンダムを目の当たりにした身ですが、ここまで捜しても埃の一つすら見当たらないなんて、信じられません」

「同感よ。ジャーナリストのコネをフルに使っても、猫の毛一本も落ちていなかったわ。これは異常よ、異常過ぎるわ。情報をコントロールするにしても、限度ってものがあるでしょ？　その限度をＣＢは完ッ全に無視しているわ！　やってられないわよ、もう！！」

ガンッ！　とテーブルに大ジョッキを叩きつける絹江。その顔は熟れたリンゴのように真っ赤だ。さすがに呑み過ぎだと思って注意しようとしたヴェロッサだが、絹江はヴェロッサを無視して、溜まったストレスを吐き出すように、

「生の大ジョッキ３つ！　Ｈａｒｒｙ　ｕｐッ！！」

「は、はいぃぃ！」

と、叫ぶようにしてオーダーした。オーダーを取った女性は絹江の様子に怯えながら、すぐに奥へと引っ込んでいった。途中、フリフリのドレスの裾を踏んで転んだが、周りの客の様子を見る限り、何時ものことらしい。

「……で、絹江さんはそのことについてどう思われますか？」

「クロスロードで結構です！　……やはり、誰かが上で操作していると見て間違いないかと。それも、ここまでの隠蔽を可能にするな

ら、提督……いえ、将校クラスの権力がないとできないと思いましゅ」

「（呂律が回ってないじゃないか……大丈夫かな？）……では、管理局の将校の誰かに裏切り者がいる……と？」

一抹の不安を抱えるヴェロッサ。どうやら今日は胸元に仕舞ってある胃薬が活躍しそうである。絹江はそんなヴェロッサの苦労に気付きもせずに、運ばれてきた大ジョッキの生を一気飲みし始めた。

「んぐ……んぐ……ぷは。私としては今拘束中のラルゴ・キール元帥が一番怪しいと思ったんでしゅけど……貴方は？」

「僕も、あまり元帥を疑いたくはありませんが……無限書庫の情報は確かですし、状況を鑑みるに、やはり彼しか該当者がいないと思います、「ラジエル」は」

完全に泥酔している絹江は、うっとりとしながら、

「「ラジエル」……ＣＢ内でも殆ど知られていない、アーカイブ、ラヴクラフトに次ぐ第３のエージェント……本当に「ラジエル」がラルゴ・キール元帥だとしたら、管理局には途轍もないダメージが来るわね」

軽く――近い内に来るであろう未来を言った。

「そうですね。現職の、それも最高評議会の彼が裏切りを働いていたとなると、管理局の信頼はボロボロになって、次元の海は荒れに荒れるでしょうね」

「それだけで済めばいいんだけど……私が心配しているのは、そんな状態でＣＢやＡ－ＬＡＷＳ、それに最近キナ臭くなってきた聖王教会と戦えるのかってこと。良くも悪くも、管理世界は管理局に戦

力を集中させることでこの世界を平定させてきたわ。それが崩れれば……」

「最悪……管理世界が滅ぶ、と？」

「えぇ」

ヴェロッサが常になく真剣な顔をした。管理局が崩壊することは、管理世界の秩序の崩壊も意味する。それは子どもにだって分かる原理だ。そして「ラジエル」がもしこの最悪を狙っているとしたら……

「だとすれば、キール元帥はスクライア先生にあらぬ疑いをかけて、わざと自ら捕まった……？」

「その可能性もなくはないんじゃないかしら？　上での抗争なんて、私たちには分からないけどね」

ユーノの拘束で無限書庫の業務は停滞し、それによって情報網は機能停止に陥り、最終的には戦争での被害拡大を招いた。ユーノ・スクライアを「ラジエル」だと言い、それら一連の失態を犯したキールだが、それがもし自作自演だったら……？

ヴェロッサは思わず身震いをした。管理局は「ラジエル」の手の平で踊らされているのか？　その疑念が膨れ上がる。あの魑魅魍魎とした利権を求める重鎮たちを欺(あざむ)いて、「ラジエル」が――キールがこの管理局を破壊しようとしているのなら……

「もし、これが本当なら、キール元帥の拘束は絶対に隠匿しなくちゃいけないね……」

「えぇ、そうね。ジャーナリストとしては失格かもしれませんけど、管理世界の平和には変えられないわ。……この事はどうするつもりですか？」

「とりあえず、上に報告しておきます。この情報をどうするかは上

の判断に任せるしかありません。一査察官でできることなんて、そのぐらいのものですから」

笑おうとしたヴェロッサだが、笑えなかった。絹江もまた酔いの醒めた顔で、目線を下に下げるしかなかった。

明らかに……明らかに自分たちの手を超えて動き出そうとしている世界に、彼ら二人は何もすることができない。演目に出演することすら叶わない。その事実がただただ……悔しかった。

――新暦75年3月16日（メメント・モリ撃墜後）――

A・Fも解かれ、真空が広がる第6管理世界の宇宙空間。すでに戦闘が終わったのか、先程までの疎らな閃光は全く見えなくなっていた。さらに、地上から一筋の光りが伸びてきたので、もしかしたらメメント・モリも落ちたのかもしれない。

しかし、そんなことは、屈辱に塗れたリボンズ・アルマークには関係のないことである。

『……』

ＧＮフェザーの防御機能が働いた結果か。ガルムガンダムの砲撃によって１０メートルほどのデブリの中心にめり込むようにして埋まっていたのは、隻腕片足となった１（アイ）ガンダムであった。あの美しい機体は見るも無残な傷だらけとなっていて、ただの残骸と見紛うほどの惨めな姿を星座たちに晒していた。デュアルアイにも光りはなく、いつインストールが解けてもおかしくはない状態であった。

『やぁ、聞こえるかいリボンズ・アルマーク？　酷い有り様だね』

『……僕を哂いにでも来たのかい、ラジエル？　それとも、僕に殺されにきたのかい？』

怒りでお湯を沸けそうなリボンズへ、突然、ラジエルからの通信が入った。あまりにも陽気な声に、自然、リボンズの声に苛立ちが混じる。また、こうなったのは誰のせいだとも、言外に含める意味で、リボンズは言った。

それに気付いてか気付いていないのか、ラジエルは陽気な声のまま、リボンズに話しかける。ある取引をする為に。

『いや、ごめんね？　僕の開発が遅れたために、そんな無様な姿をさせてしまって……お礼と言っては何だけど、僕からのプレゼントを是非受け取ってはくれないかい？　きっと気に入ってくれると思うけど……』

『例の、新しいガンダムを開発したのかい？　それは勿論、あのリジェネのガルムガンダムと戦えるモノなんだろうね？』

『それはどうだろうね？　君次第だよ、リボンズ・アルマーク』

『……言ってくれるね』

ラジエルの言動には、自身で開発したガンダムに絶対の自信があ

るように聞こえた。リボンズにはそれが挑発であることが分かっていたが、今はそれに乗るようにして、獣のような獰猛（どうもう）な笑みを浮かべた。

元より、リボンズの答えは決まっているのだ。ガンダムに覆しようのない性能差がない限り、彼がリジェネに負けることなど、あろうはずもない。

『それで？　そのガンダムはどこで手に入れられるんだい？』

『とりあえず、君は一度ＣＢにまで戻ってきて。そこで１ガンダムと交換して渡すから』

『……交換だって？　アップデートはしないのかい？』

『君に渡すガンダムは、新しい疑似ＧＮドライヴを使用するからね。１ガンダムはデータを抽出するためにも、僕の手元に置いておきたいんだ。それに、大がかりな修理と調整が必要だろうからね、その方が合理的だ』

『合理的、ね。本当にそれだけかい？』

リボンズはラジエルの言葉に納得し切れてはいなかった。確かに疑似ＧＮドライヴはＣＢ内には未だ腐るほどあるが、それでも新たに製造するには莫大なコストと手間がかかる。ガンダムならなおさらのこと。ＧＮキャノン？やガガキャノンのような量産を目的とする機体ならともかく、新たなガンダムを作るには、最低でも一国の国家予算数年分を遥かに超えるような資金が必要である。

ただ新たなガンダムを１ガンダムにアップデートすれば済む所を、それだけの資金と手間を投資して新しい疑似太陽炉にするのだ。「合理的」だとラジエルは言ったが、どうしても納得はできなかった。何か裏があるのではないかと勘ぐってしまうのも仕方のないこと。

しかし、ラジエルはそれを取り扱わずに、目が回るほど忙しいからと言って通信を遮断した。リボンズはラジエルに懐疑的な目を向けるが、それでも新たなガンダムが手に入ることに、興奮を抑えることはできなかった。

『……待っていてくれよ、リジェネ』

システムダウンした1ガンダムの中で、リボンズは仄暗い感情のままに呟く。

『君には地獄が生温く見えるほどの苦しみを与えてあげるよ』

新たなガンダムを、力を、武力を手にして、

『そう、手に入れ次第、すぐにもね……！』

リボンズは同胞を討つ決意を、改めて固めた。

2027

ジェイル・スカリエッティは、クアットロの死をスメラギ・李・ノリエガからの通信で知った。遺体は？　と聞いたが、どうやら高町なのはのＳ．Ｌ．Ｂによって跡形もなく消え去ったらしい。物理

破壊設定で撃つということはそういうことだ。メメント・モリを超える砲撃を受けたのでは、クアットロの生存は絶対的に望めないだろう。

「……私に似たクアットロは、どんな最期を迎えたと思う？　クアットロは高町なのはに執着していた。そんな彼女の手によって最期を迎えられたのは、幸運だったのか不幸だったのか……」

スカリエッティは誰もいないラボの中で、静かに独白を続ける。2杯あるグラスには、琥珀色の液体が入っていた。

「もし運命、というモノがあれば、私に最期を与えるのは、私が執着していたフェイト・T・ハラオウンかね？　……クアットロの死は、それを暗に示しているのだろうか？」

ちんっ。グラスを合わせた透明な音が、スカリエッティの鼓膜に響く。テーブルに置かれたグラスを取る手は一つしかない。それが彼に「寂しい」という感情を与えるが、涙は一滴たりとも流れなかった。あるのはただ……次の展望への欲望のみ。

「さようならだ、クアットロ。私の愛しい愛しい４番目の娘よ」

無限の欲望を抱えるスカリエッティには、人道というものはない。あるのは人の道を外れた外道のみ。そんな彼が涙を見せることは、終ぞあり得ないだろう。

実際、彼は訃報を知らされた１０分後には、イアンと共に考案した新たなガンダムの武装の設計図に取りかかっていた。その顔には隠せない喜色が見え、嬉々として設計図の線を引いていた。芯までマッドサイエンティストたるスカリエッティは、娘の死を想うより

も、新たな知識への欲望の方が勝っていたのだ。

もしかしたら、そんな狂気こそが、彼を次元世界屈指のサイエンティストとしたのかもしれない。悪鬼と行く先を共にしても正気を失わないでいられるのは、メメント・モリが大量の殺戮を犯しても正気を保っていられるのは、彼自身がすでに狂気で彩られているからか。

カリム・グラシアの予言で示された「無限」の一つ、「無限の欲望」ジェイル・スカリエッティ。

「アリオス、ケルディム、セラヴィーの強化案はこれでいいとして、問題は『００Ｒ』か。正直、アレには強化案なんて無粋なものにしかならないから要らないと思うけど……」

イオリア・シュヘンベルグと並ぶ頭脳を持つ生粋のマッドサイエンティストにして、次元世界最大最悪の広域指名手配犯。

「……ラジエルの設計図にも取り組まなくちゃいけないし、やれやれ、今日は徹夜かな？　全くもって、僕を楽しませてくれるね、ハハッ！」

死亡した人物のクローンを造るプロジェクト「Ｆ．Ａ．Ｔ．Ｅ」の基礎理論を構築し、管理局を混迷の極みに落とした「Ｊ．Ｓ事件」を起こした彼は、今日もＣＢ内の設備にて、知識欲が刺激されるままに研究を行う。

「はは、ハハハハハハハッ！」

その高らかな笑い声は、夜中、ずっと消えることはなかった。親

ばかとまで言われたフェイトがこれを見たらどう思うのだろうか？
薄情だと罵るのか、怒り狂って殺しに来るのか。そして、その疑問を解くときは来るのだろうか？

その答えは全て、未来にしかない。狂った現代が突き進む未来にしか……

幕間―9（後書き）

曜日感覚が一日ずれていました。本当は昨日投稿するはずだったのに……！

この作品での『００Ｒ』は、
火力と防御力＝なのは
スピードとオールマイティ＝フェイト
魔力量と反則具合＝はやて
といったように、色々と盛り沢山です。「これなんてチート？」と聞かれましたら、「三人娘のチートを全部合わせたチート」と答えましょう。でも００の本編もこんな感じでしたよね？

なお、今回はいつもの一万字より１／４ほど少ないです。

次回の更新予定日：ぶっちゃけもうできていますが、２０１１年９月１０日（土）

第７４話　臨場（前書き）

メメント・モリは、高町なのはのＳ．Ｌ．Ｂによって破壊された。しかし、その直後に攻め込んできた聖王教会の精鋭騎士団により、戦場は更なる混沌に包まれる。精鋭騎士団の中にはブリング・スタビティやノア＝アンダーソン、そして聖王となった高町ヴィヴィオもいた。ノアはカリム・グラシアを助けにいき、ブリングとヴィヴィオはロベルト＝コーナーを撃破した後、ザ・サムライとヴォルテールというオーバーＳと相対する。睨み合う４つのオーバーＳ。それを上から覗いていたのは、革新を司る天上人であった。

【改造すべきは単に世界だけでなく、人間だ。その新しい人間はどこから現われるか？
それは外部からでは決してない。友よ、それをお前自身に見出すことを知れ】

――ダイモン様から、ジイドより

第７４話　臨場

――新暦７５年３月１６日――

メメント・モリを見事破壊した高町なのは。彼女は六課の母艦であるアースラに転送されるなり、急ぎブリッジに向かって走り出した。彼女の娘である高町ヴィヴィオが戦場にて「聖王」として確認された、という情報の正否を確かめるためにである。その顔は正しく我が子のことを思う「母」のものであった……が。

この理不尽な世界は、常と変わらずに、非情な現実を彼女に叩きつけた。力一杯、絶望させるように。

「……うそ、うそよね、はやてちゃん？　あれが……あれがヴィヴィオだなんて、嘘……なだよね！？」

「……ホンマや。そして、私たちはアレを敵の大将として討たなあかんのや、なのはちゃん」

「……あ、あぁ……！」

艦橋の前に広がるモニターが、聖王と化し、さらにはＣＢ製のＧＮデバイスを駆ってアルヴァトーレを撃沈させたヴィヴィオの映像を、無情にも大きく映していた。なのはの身体から力が抜け、ぺたんっと、膝から床に崩れ落ちる。ヴィヴィオの顔に生気がないことも、なのはを追い詰める要因となった。

「にしても、どうしてこの場面で聖王を出したんや？　……いや、聞くだけ野暮やな。機動六課にＡ－ＬＡＷＳのザ・サムライを含む一大戦力、それにＣＢの大半のガンダムがここに集結しているんや。あまつさえ、これまでの戦闘で消耗しているとさえ来ている。これ

を狙わない手はないわな、当然」
「あ……あ、あぁあああ……！」

冷えた頭で分析するはやての声が、酷く冷たく艦橋に響いた。隣りにいるリインは黙ったまま何も言わない。口を開くような雰囲気ではないからだ。

「それで、なのはちゃんはどうするん？　メメント・モリを破壊したから、後は休んでてもええんやで？」
「あ、あぁ……わた、私はヴィヴィオを、ヴィヴィオを迎えに行かないと……！」
「せやな。なのはちゃんならそう言うと思ったで。けどな、なのはちゃんの魔力はもう枯渇寸前や。悪いけど、このまま待機してもらうしかないんや。……ごめんな、なのはちゃん」
「いや……いや！　私はヴィヴィオを……ヴィヴィオを迎えに行かなきゃ……いけないんだ！」

愛杖であるレイジングハートで身体を支えながら艦橋を出ていこうとするなのはの後ろ姿を、はやては何か試すような目で見ていた。なのはの後ろ姿に向かって、はやては非情になりきったまま言う。

「あそこにいるのは高町ヴィヴィオやない、聖王や。それも正気を失った、危険極まりない存在や。せやけど、行くんかい？　助けるために、迎えに行くために、どうしても？」
「……うん。はやてちゃん、命令を無視してごめんね？　でも、これればっかりは譲れないよ」
「……」
「……」

暫し、見つめ合う二人。だが、最初に折れたのは「不屈のエース」

……ではなく、はやての方だった。

「ハァ……リイン、なのはちゃんに私の魔力、分けたげて」

「……え？」

「……いいんですか、はやてちゃん？」

「なのはちゃんは「不屈のエース」やで？　こっちが折れるしかないやろ。それに、ヴィヴィオを助けたいと思っているのはなのはちゃんだけじゃなく、ここにいる皆が思っとることや」

はやてのデバイスであるリインフォース？から、なのはの魔力を十全とするほどの魔力が供給された。はやての魔力量はなのはの魔力量を持ってしてもなお超大であり、ＳＳＳランクに最も近いＳＳ＋ランク保持者としての実力の片鱗を垣間見せた瞬間でもあった。しかし、さすがに魔力を一気に放出したせいか、はやての顔色は若干以上に悪くなっていた。

「はやてちゃん……」

「ギリギリ近くまで転送するで。そっから先はなのはちゃんに任せる。なのはちゃんがヴィヴィオを助けるところを、私はこっから指揮を取りながら見ているで」

「……うん！　ありがとう、はやてちゃん！！」

タタッと駆け去るなのはを、今度は優しい目付きで見送ったはやては、艦橋のクルーたちに指示を出して、なのはをヴィヴィオの近くに転送させるようにすると、自分の椅子に腰を下ろし、大きく息を吐いた。

魔力を一気に消費しただけでなく、はやて自身にも相当な疲労が溜まっていたのだ。戦闘が始まって数時間も経っているが、最初から最後まで劣勢だったこの戦争を支えていたのは、他ならぬ機動六

課の逐次戦力投入であり、そのタイミングをずっと見計らっていたはやてには、相当なプレッシャーがかかっていた。

そもそもとして、機動六課以外にオーバーSを保有している艦隊がいなかったのだ。これまでの数ヶ月間もの長い戦争により、時空管理局はオーバーSの保有数をかつての40人から30人弱にまで減らしていた。中には、大きな機動戦力として編成された次元航行艦隊に配置されたオーバーSが、ガンダムの凶刃に倒れ、オーバーSのいない艦隊になっている部隊もあった。

それが悪いことに、今ここにいる艦隊の全てに当て嵌まり、結果として、オーバーSたるガンダムには、機動六課が全面的に向かい合わなくてはならなかった。その指揮を執っていたはやては、こうなることも向こうの策略の一つではないのかと疑いながら、ヴィヴィオの方に飛んでいくなのはを見据え、再び部隊長としての仕事を再開させた。

地上からたった数百メートルほど浮いた高度で睨み合うブリングのガラッゾ、聖王、それにサムライとヴォルテール、キャロは、ほぼ同時にここに向かって堕ちてくるモノの姿を視認した。左右に大きく広がる機体は、遠目からは翼を広げた天使のように見え、同時

に、全てを破壊する破壊者のようにも見えた。

「アレは、まさか……！」

「……？」

「くっくっくっ……おや？　フルコースはまだ揃っていなかったのか？」

「……グゥウウ」

「……アレ、何？」

緑の粒子を飛散させながら近づいてくる機体は、青と白を基調としたモノだった。大きく張り出した肩部と背面に多少の違いは見受けられるが、頭部の形といい手に持つ大剣といい、それは確かに彼らが「剣士」と呼ぶモノであり、ＣＢが『００』と呼ぶモノであった。

「……そ、そんな、まさか！　……もう、完成したのか、『世界に革新を齎すモノ』が！？」

「……ブリング？」

「……で、では、あれは『００』ではなく『００Ｒ』ということか？　だとすれば……！」

未だ彼らの頭上数百メートルのところを飛ぶ、完成した『世界に革新を齎すモノ』――『００Ｒ』を見て、紫基調のガラッゾがその大きな肩を震わせた。それは恐れからか畏れからなのか……傍にいるヴィヴィオの心配する声すら、今のブリングの耳には届いていなかった。

「……行くぞ、ガラッゾ！　アレが本物かどうか、確かめる！」

『Ｙｅｓ，ｌｉｃｅｎｓｅｒ。お供します』

「あ……！」

硬直状態にあった睨み合いから抜け、『００Ｒ』へと突撃していくブリングに、聖王ヴィヴィオがか細い声を上げた。しかし、ブリングはその声を聞かずに、悠々と空から堕ちてくる『００Ｒ』へと、左右の巨大ビームサーベルで斬りかかっていった。

「ハァアアア！」

『ブリング・スタビティ！　悪いが、ここで破壊させてもらうぞ！』

右と左を同時に動かし、×状に斬ろうとするガラッゾに対し、『００Ｒ』は右手のＧＮソード?を内に引き込み、左から右に一閃する斬撃を放とうとしていた。そして互いの距離が零になった瞬間、目にも止まらぬ速さで相手を斬り付け、離れる2機。

勝敗は……！　と、外野が息を呑む中、不意に『００Ｒ』が態勢を前のめりにした。ヴィヴィオの虚無的な顔に、薄い笑みが浮かぶ。しかし……

「こ、これほどのもの、とは……！」

『これが、『世界に革新を齎すモノ』……！』

世界は……革新を望んでいた。

『ハァアアアッ！！』

『待って、Ｍｅｉｓｔｅｒ！　まずは話し合いを……』

『００Ｒ』の後ろで、ビームサーベルごと左腕と脇腹を斬り裂かれたガラッゾが遠くに離れていった。それとは対照的に、姿勢を前のめりにした『００Ｒ』が、二刀を構えるサムライの方へと、落下するように飛び出してきた。目を見開いたサムライだが、その顔に

は抑えきれない喜びが滲みでていた。

「くっくっくっくっ……！　どうやら、リジェネが言った通りに、とんでもない規格外らしいな！　だが、勝つのは私の方だ、ガンダムッ！！」

背中で十字を作り、奥義「竜殺（りゅうごろし）」を放とうとするサムライ。その身に満ちる魔力には、ヴォルテール戦での消耗など皆無であった。サムライが万全の状態で迎え撃とうとする中、『００Ｒ』は右腕を広げ、左腕を前に出した。

サムライが奥義を出そうというのに、『００Ｒ』はただの斬撃を繰り出そうとしている。しかも何時ぞやの小手先ではなく、力と力による正面衝突で決着をつけようとしていた。侮られているのかと思う中、サムライは吼えるように声を出しながら、自身を象徴する一撃を全力で『００Ｒ』に繰り出した。

「竜殺ッ！」

『……Ｍｅｉｓｔｅｒ！　私の話を聞いて……』

サムライの「村雨」「村正」が、『００Ｒ』のＧＮソード?とぶつかり合う。十字と一文字を描く斬撃が、全力を尽くして相手の刀剣をへし折ろうとする中、サムライは幾時にも引き延ばされた意識下で、自分の刀が軋みを上げたのを、どこか遠くの心境で聞いていた。

ピシッピシッ！

『うぉおおおおッ！』

「……く、くくっ」

ピシピシピシピシッ！！

『おぉおおおおおおおおおッ！！』

「くくくく……あぁ、成程、確かに……」

ピシピシピシピシピシピシッ！！！！

『砕けろぉおおおおッ！！！！』

「こいつは、私などとは比べ物にもならないほど、正真正銘の……怪物だな」

パリィン……！

『ハァアアアア！』

楼上（ろうじょう）が砕けたような儚い音を出して、『００Ｒ』のただの斬撃に耐えかねた「村正」が砕け散った。「村雨」は後ろに大きく弾かれ、サムライはその瞬間、完全に無防備となった。そこに『００Ｒ』の大剣が滑り込み、白い巫女服を、その大和撫子を連想させる白い肌を裂いては肉を斬り、固いはずの骨も軽々と断って、右腕まで切断した。

まるで包丁を使って刺身でも斬るようにして……サムライの右胸と右腕を一刀両断した『００Ｒ』。サムライはその後ろ姿を、痛みと出血で朦朧（もうろう）とする意識の中で見詰めながら、数百メートルもの高さから地面に落ちていった。

『とりあえず、これで２人は戦闘不能になったと見做していいだろう』

『その前に一つ、聞いてもいいかしら？　どうして話し合おうとしなかったのですか、Ｍｅｉｓｔｅｒ？』
『あの二人は明確な殺意を持って此方に攻撃を仕掛けてきた。オレはそれに応対しただけだが……』
『まずは話し合いましょう、Ｍｅｉｓｔｅｒ。争いを避けられるなら、それに越したことはありません』
『アレを見てもまだそれが言えるか？』
『……それでも、私に機会を下さい』

２戟。たったの２戟。瞬きの間より短い時間の中で、オーバーＳの二人がここから消えていった。それも、たった一機によって。その事実が聖王とヴォルテールに最大限の警戒心を抱かせ、一気に戦意を高めさせてしまう結果を招いた。００はそれでも、と言うが、話し合いなど到底不可能な雰囲気が、彼らを取り囲んでいたのも事実であった。

「ブリング……仇は、取る！」
「グオォオオオオオオオオッ！！」

右手と左手に巨大なアームを装着した聖王と、大きく吼えたヴォルテールが、同時に『００Ｒ』へと攻め込んだ。聖王の大きな拳が、ヴォルテールの巨大な掌が迫る中、『００Ｒ』は大きく上に飛翔してそれを避けると、右手のＧＮソード？の大剣を下に折り畳み、３つある銃口から、一条に収束した粒子ビームを放った。

「……ん！？」
「グオォオオオオ！？」

ＡＡＡクラスの砲撃と比肩する威力の粒子ビームが、聖王とヴォルテールのちょうど中間を奔っていった。しかも『００Ｒ』はチャ

ージすることなく2つ3つと収束ビームを連続して放ち、その一撃をシールドやフィールドで防ごうとする聖王とヴォルテールを大きく後ろに後退させていった。気付いた時には、聖王もヴォルテールも、殆ど大地のすぐ近くにまで後退させられていた。

『ヴェーダと私による演算の結果、敵の予測される行動は以下の通りになります、Ｍｅｉｓｔｅｒ。一応、勝率は９９．９９９９％のシックスナインですが……油断はしないで下さい』

『あぁ、分かった。それに、聖王と真竜を同時に相手にしては、油断などできるはずもない。そうだろう、００？』

聖王とヴォルテールの行動を、ヴェーダの莫大なデータから割り出し、推測をする『００Ｒ』は、ジャンヌの「先見」を使っているのではないかと疑ってしまうほどの精度の予測でもって、聖王とヴォルテールを次第に追い詰めていく。

「おかしい。どうしてこっちの動きをここまで正確に……！」

拡散、連射、収束の3つを器用に使いこなし、ありとあらゆる距離でオールマイティな絶対的性能を発揮する『００Ｒ』に、聖王となったヴィヴィオは知らず、息を呑む。彼女のインパクトキャノンもセイクリッドセブンも、『００Ｒ』には掠りもしなかった。

「セイクリッドセブ……！」

『その動きはすでに演算されています。……ごめんなさい』

大きく腕を振り被った瞬間、それを見越したかのようなタイミングで、『００Ｒ』が聖王の懐に入り込んだ。右手の大剣はすでに展開済みである。聖王は魔法をキャンセルして後退しようとしたが、その動きすら『００Ｒ』には見透かされていた。

『ハァ！』

ガガガガッ！　『００Ｒ』の大剣が幾度となく振るわれる。聖王とドッキングしていたＧＮアームズＴＹＰＥ－Ｃは、その連撃により、両肩の砲塔と左右の武装を切断されてしまった。武装の殆どを無力化されたＧＮアームズをすぐさまパージした聖王だが、その目前にはＧＮソード?の銃口が突き付けられていた。

「！?」

「グオオオンッ！！」

『……ちっ！』

『Ｍｅｉｓｔｅｒ、まず戦うのでしたら、ヴォルテールの方と決着をつけたほうがよいと思われます。話し合いに応じてくれるというのであれば別ですが……』

しかし、その銃口から粒子ビームが放たれる寸前に、『００Ｒ』はヴォルテールの尻尾を避けるべく、すぐ下に迫っていた大地に着陸した。だが、聖王にはヴォルテールの尻尾を避けるような時間はなく、直撃を喰らい、遠くへと飛ばされてしまう。

「ヴィヴィオちゃん!?　ヴォルテール、彼女は敵じゃ……」

「グオオオッ！」

「きゃあっ!?」

キャロの注意する声を無視して、ヴォルテールは周辺の大地から魔力を掻き集め、殲滅砲撃である大地の咆哮「ギオ・エルガ」を、着陸の衝撃で身動きの取れない『００Ｒ』に放とうとした。ヴォルテールの眼前に３つの魔力球が形成され、それらが皆、灼熱を思わせる赤色に光り輝く。

『ＧＮフィールド！』
『ＧＮフィールドを展開します』

対する『００Ｒ』は、両肩にあるオーライザーの翼部を前方に展開し、緑色のフィールドを構築して耐え切ろうとしていた。そしてヴォルテールが一際大きく鳴くと、殲滅砲撃に分類された超火力が、容赦なく『００Ｒ』に殺到していった。

その直前に、『００Ｒ』が収束ビームをヴォルテールに放っていたが、その程度では「ギオ・エルガ」は止まらなかった。威力を幾分か削られはしたが、それは『００Ｒ』を含む一帯を焼き尽くし、キロ単位の一帯を死滅の大地にした。

……が。緑色の粒子が輝きを失うことはなかった。

エリオ・モンディアルと意識を取り戻したザフィーラは、この戦いをモニターで見て、戦慄する他なかった。あの角持ちが、あのサムライが一瞬でやられたのもそうだが、ＳＳ一かＳＳと目されるヴ

ォルテールを持ってしても倒せない『００Ｒ』に、彼らは終始、圧倒されっ放しだった。

最大攻撃魔法を防がれたヴォルテールに、防ぎ切った『００Ｒ』は右腕の剣を向けた。そのまま緩急をつけて接近し、その巨体を次々と解体し始める。そのあまりにも凄惨な光景に、エリオはモニターを直視することができなかった。ヴォルテールも必死になって抵抗するが、『００Ｒ』の前では意味はなく、ただ悲痛そうに鳴くことしかできていなかった。

大きな高性能ディスプレイが捉える、残酷で悲痛な解体ショー。それをまざまざと見せつけられた二人を、トーレは静かに見下ろしていた。『００Ｒ』の強さに惹かれつつも、トーレは死亡したであろうクアットロのことを思っていた。二人を見下ろしていたのは、単に目のやり場がそこにしかなかったからだ。セファーを見たくないという心理も働いていたのだろう。

「……で、二人どうする？」

「そう、だな……逃がせ。以上だ」

「分かった。吾輩には逆らう権利がないということも、同時に……！」

自失している二人を、転送魔法の輝きが優しく包んだ。一瞬で視界からいなくなった二人から目を外したトーレは、血溜まりの中に沈んだヴォルテールを足蹴にする『００Ｒ』を見て、背筋をこれまでになく凍えさせた。

明らかに異常過ぎる戦闘能力を、これ以上ないパフォーマンスで見せつけた『００Ｒ』。４人ものオーバーＳと戦い、ＴＲＡＮＳ－ＡＭを使用せずとも圧勝したその姿は、まさにこの世界に降り立っ

た革新の天使――もしくは、破壊を象徴する天使のモノであった。

「これだけのモノを造らなければ、世界に革新は齎されない、か。しかし、人には過ぎた武力ではないか、これは？　真竜すら軽く屠れるなど、どう考えても過剰過ぎる武力であろう？」

「確かに、異常に尽きる。だが、これから忙しくなることを思えば、過剰にあらず。それに、ＣＢの最終目標は「抑止」。武力はあるだけあるに越したことはなし」

「……そうかもしれんがな。いや、お前に言ってもしょうがない」

トーレにはこの過ぎた武力こそがＣＢに破滅を齎すのではないかと思ったのだが、どうやらセファーはそう思っていないらしい。不毛な議論になりそうだと思ったトーレは、この話題を打ち切り、トリニティ艦から離れた所でフェイトたちと合流したエリオとザフィーラの方に視線を映した。

そして、もう一方のディスプレイに映ったなのはとガラッゾの相対する様も、視界に入れる。

「子を想う親の心が分からない私が言うことではないが、高町なのはといいお嬢様といい、つくづく……救われないな」

そう言った顔には、嘘偽りではない、本物の悲しみが混じっていた。フェイトたちが合流し、なのはがブリングと相対していた時は、『００Ｒ』が戻ってきた聖王と戦っていた時であり、その傍では、キャロがヴォルテールの死を嘆いていた時でもあったからだ。

もし聖王が敗れれば、今度はキャロまでもが命を落とすことになる。その遠くない、しかし確実な未来を思い、トーレはクアットロの死を思いながら、喪に服すような気持ちでディスプレイを眺め続

けた……。

『アレが、イオリアの爺さんが全てを込めて造ったっていう『世界に革新を齎すモノ』か……！　おっそろしいぐらいに強いな、ケルディム』

『……あぁ』

「う、うぅ……！」

呻き声を上げるカリム・グラシアを踏みつけたケルディムは、破壊した結界の残滓越しに、『００Ｒ』の獅子奮迅とした戦いを見ていた。どうやら「ガンダムを超えた存在」という触れ込みは本当らしく、このケルディムですら勝てる気がしなかった。

カリムの「世界」によって結界内に閉じ込められていたケルディムには、今一戦況がよく分からなかったが、どうやらＣＢ側はメメント・モリを破壊され、撤退しようとしているらしかった。それを理解して、ケルディムは突き付けていた拳銃のトリガーの引き金に力をこめ、カリムの頭部を撃ち抜こうとした……のだが、

『……何だ？』

その直前にやってきた一枚のシールドが、拳銃から放たれた弾丸からカリムを守った。透明な六角の、平べったい形をしたその盾は、回転しながら幾つもケルディムに方に向かって飛んできて、ケルディムはカリムの身体から足をどけるしかなかった。

「な、なにが起きて……」

「目は覚めましたか、騎士カリム」

「あ、貴方は……ノア！？　どうしてここに……！」

幾つもの盾が飛び出してきた方角から、大きな体躯をした、３０代とみられる男が歩いてやってくるのを、ケルディムは苦い思いで見詰めていた。男の身体は白いフルプレートとフルフルフェイスで覆われていて、背中には９つもの盾を浮かべていた。

その右手には伝説として謳われる剣型アームドデバイス「ジャガーノート」を持っていて、そんな物騒なデバイスを持つ騎士は、この世界でもたった一人しかいない。教会最強の騎士、ノア＝アンダーソンである。その威圧感は正に本物としか言いようがなく、目しか覗いていないにも関わらず、カリムとは桁が違う殺気をケルディムに投げかけていた。

「仮にも教会の騎士たる貴方の援護にやってきたのです。そして、教会に仇なす悪鬼を成敗しにきたのでもあります」

『……おいおい、敵さんはやる気だが、さすがにオーバーＳを二人も同時に相手するのはごめんだぜ？』

『……しかし、どうやら向こうは逃がす気がないらしいな。諦めろ、マイスター』

蒼い柄を握り締め、白い長剣を向けてきたノアに、ケルディムは拳銃を構えた。それが初めから決まっていたかのような、戦いの合

図となった。

「灰は灰に、塵は塵に、土は土に。エイメンッ！！」

『ケルディム、シールドビットだ！　まずはあの９つ浮かんでいるシールドを落とせ！』

『……アレは盾型ストレージデバイス「ゲニウス」だ。確かにシールドビットと性質は似ているが、いいのか？』

『あぁ、同士討ちでも構わないから、まずはあの厄介な盾を封じてくれ！』

『……Ｙｅｓ，ｍｅｉｓｔｅｒ。「ＨＡＲＯ」、頼むぞ』

『リョーカイ、リョーカイ。クルゾ、クルゾ！』

ゲニウスの盾を何枚も前方に並べ、ケルディムの射撃を防ぎつつ距離を詰めるノア。ケルディムはまず厄介なゲニウスを封じるべく、身体の各部から装甲板のようなシールドビットを分離させ、それをゲニウスにぶつけていった。

「教会に仇なす異教徒は滅びよ！」

『お前らとオレは、同じ穴の狢（むじな）だろうが！　だから付き合ってもらうぜ、地獄までな！』

どちらも９つあるゲニウスとシールドビットが激しく衝突し合う中、ケルディムのＧＮビームピストル？とノアのジャガーノートが、閃光を散らしつつ、何度も何度も攻防を行き往きした。ジャガーノートのダイヤすら軽く切断する切れ味は、ピストルの厚い銃身を薄皮一枚ほど削っていき、それが火花となって、砂漠の丘陵に黄色い閃光を生み出していった。

「滅びよ、滅びよ、滅びよ！」

ノアは魔法の仕様をブーストを使う程度に留め、ジャガーノートによる剣技でもってケルディムと対抗してした。ノア自身はそれほど魔法が得意ではなく、寧ろデバイスの高性能を前面に押し出した白兵戦でこそ真価を発揮する戦闘スタイルであった。

ノアは上段、切り返し、逆袈裟と、舞うように技を繋げていき、その全てに魔力を込め、威力を底上げしていた。もしこれが生身の人間なら、その重い斬撃に耐えかね、武器を落とし、押し潰されるようにして命を無くしていただろう。

しかし、彼と相対する相手は、今や次元世界の悪を一身に背負うガンダムの一機、ケルディムである。機械でできた彼は正確この上ない銃捌きでノアの猛攻を凌ぎつつ、着実とゲニウスの数をシールドビットと一緒に減らしていた。

そして、その時は呆気ないほど早くやってきた。

「むぅ、ゲニウスが……！」

『門が開いたぜ！　地獄行きのな！』

シールドビットの残数が０になり、ゲニウスの数もまた０となった。それはノアがケルディムの射撃を防ぎ切れなくなったことも意味し、ケルディムの勝利が確定した瞬間でもあった。

これまでケルディムの射撃を防いでくれた盾が無くなれば、あとはケルディムの独壇場だ。ノアの剣が届かない距離から撃つだけで、ケルディムはノアに勝利することができる。教会最強の騎士といえど、ケルディムを相手にして「リーチの差」を埋めることは無理であった。

「え、えぇい！」

正確無比な射撃がノアへと絶え間なく放たれる。ジャガーノートの刀身で受け止めるが、受け損ねた一発が頬を掠めていった。パッと散る血飛沫が痛みを妙に感じさせる。

『狙い撃つぜ！』

その痛みに気を取られたコンマ以下の間に、ケルディムはもう一発、ノアの身体に粒子ビームを撃ち込んだ。今度は左肩から血飛沫が上がり、左の握力が少し弱まるのを感じた。

すでに劣勢となったノアだが、彼には退く気など毛頭なかった。カリムを守るという意思ではなく、聖王の敵となるガンダムを前にして退くことなどできない、という強い想いが、彼を退くに退けなくさせたのだ。

……が、彼には勝率もあった。ここまでの時間稼ぎは全て……彼女の準備時間でもあったのだから。

「愚者の崖（がけ）ッ！」

魔力を温存していたカリムが、突如として大アルカナの「愚者」のカードを発動させた。そして、それこそがノアの待っていた勝算であった。

『な、何だこりゃッ！？』

ケルディムを中心に、広範囲に渡って空間に亀裂が入る。そこから覗く色は、カリムたちには識別できない、まさに暗黒とでもいう

べき色であった。ケルディムはこの亀裂の向こう側にいる世界を正しく認識していた。

『……これは、虚数空間か？　……魔導師ならば誰もが愚者となる空間に落とそうとは、言い得て妙だな』

そう、亀裂の向こう側は「虚数空間」と呼ばれる空間に繋がっていた。虚数空間とはこの次元世界とはまた異なる次元に存在する、魔法の行使ができない空間であった。

そして、１０年前の「Ｐ・Ｔ事件」では、プレシア・テスタロッサと時の庭園、それに９つの「ジェイルシード」を呑み込んで、事件を半ば強制的に終わらせた空間でもある。

それが今、ケルディムを呑み込むべく、裂け目を広げていった。ケルディムが亀裂の正体に気付き、抜けだそうとした時には、すでに身体の７割ほどが虚数空間に浸っていた。

『虚数空間を作れる魔導師が、ラジエルの他にもいたなんてな。油断したぜ』

足場が崩れ、一気に虚数空間へと呑み込まれていくケルディムを、ノアとカリムが遠くから油断なく見つめていた。入口となった亀裂が閉じて、ケルディムの姿が完全に見えなくなった時に、両者は張っていた気を少しだけ緩めた。

「やった……な。さすがは騎士カリム・グラシア。かつてアリー・アル・サーシェスとも互角にやり合ったというその手腕は、誠に評価するに値する」

「評価をして下さることには感謝を致しますが、今は少々、眠らせ

て下さい。アレを発動させるには、消耗していた魔力の全てを使わなければならなかったので……」

「……安心しろ。私は眠る貴殿に何らかの危害は与えない。仮にも同じ騎士たる私を信頼し、貴殿を運ばせてはもらえないだろうか？」

「……では、お願いします、騎士ノア」

ふっと意識がなくなったようにして眠ったカリムを、お姫様だっこで抱えたノアは、もう一度だけ、ケルディムが呑み込まれた後の空間を振り返ってみる。そこには静寂があるだけで、雑音の一つすら聞こえては来なかった。

「……友人たる「カリフ」を斬って、すまなかったな、騎士カリム。だが、そうでもしなければ、聖王教会はあのままＣＢによって壊滅の憂き目に遭っていただろう。そこだけは理解をしてもらいたい」

ノアの懺悔とも取れる言葉だけが、その場に音となって響く。眠っているカリムは規則正しい寝息を立て、手から零れそうなおぱ～いを上下に動かしていた。

それを見ていたモノは、誰も……いなかった。

第７４話　臨場（後書き）

前書きを前話のダイジェスト風にしてみました。不評だったら止めます。

ノア＝アンダーソンのデバイス、「ジャガーノート」「ゲニウス」は、鴨川秘様から設定の詳細を頂きました。鴨川秘様にはこの場で感謝を述べたいと思います。

「ジャガーノート」
蒼い柄が印象的な、アルハザードの御伽噺に登場する長剣型アームドデバイス。白い長剣の切れ味は、ガンダムの装甲にも難なく傷を付けることができるほど。デバイスだが特殊能力を（何故か）備えており、砲撃以外の魔法なら切り裂いて消滅させることが可能。ただし、この設定は対ガンダム戦では全く活かされないので、ある意味不遇のデバイス。
製作者はＫ．ＨとＳ．Ｒ……らしい。

「ゲニウス」
ジャガーノートと対で語られる、自動防御の浮遊盾型ストレージデバイス。本作品ではシールドビットと相討ちになったが、実は完全に壊されない限り、何度も修復して使用することが可能。最も、相討ちにより完全に破壊されてしまったので、この設定もお蔵入りに。
……これもまた不遇のデバイスになってしまった。
製作者はジャガーノートと同じで、よく分かっていない。

……不遇ばっかりにして、すみません。

『００Ｒ』の無双っぷりといい、カリム＆ノアのコンビといい、作

者が書きたかったものを沢山書けて、満足です。満足です。満足しました。

追伸：万死に値する誤字を修正致しました。

次回の更新予定日：２０１１年９月１７日（土）

第７５話　臨戦（前書き）

臨場した『００Ｒ』は、まさに絶対的な存在だった。ブリング・スタビティ、ザ・サムライ、ヴォルテールという強力極まるオーバーＳを全て降した『００Ｒ』。そんな超越的たる存在に、ヴィヴィオは単身、挑もうとしていた。そして八神はやての魔力を貰った高町なのはは、ヴィヴィオを助けるために、全力で空を飛ぶ……

【一つのものが同時に善であったり、悪であったり、そのいずれでもなかったりすることがある。例えば、音楽は憂鬱な人には善であるが、喪に服している人には悪であり、聾者にとっては善でもなく悪でもない】

――ダイモン様から、スピノザより

第７５話　臨戦

――新暦７６年３月１６日――

聖王・高町ヴィヴィオは、ヴォルテールによって遠くまで飛ばされたが、地面に衝突するや否や、すぐさま起き上がり、再び『００Ｒ』のいる戦場へと戻ってきた。深紅と新緑のオッドアイに宿る戦意は、些かも衰えはせず、より一層激しく燃えていた。

悪鬼の立つ戦場に戻ってきたヴィヴィオがそこで見たのは、真竜を解体し終え、血塗れの中で仁王立ちする『００Ｒ』の真っ赤な異形姿であった。アルザスの大地の守護竜であった真竜「ヴォルテール」の息は、ヴィヴィオが来た時にはもう絶えていた。

「……」

ヴォルテールの光なき虚ろな目。それが自分と被っていることに気付かぬまま、ヴィヴィオは拳を構えた。

強化パーツであったＧＮアームズとアヴァランチダッシュユニットは、すでにこれまでの攻防で機能しなくなり、破棄するしかなかった。今のヴィヴィオは白と金のインナースーツしか着ていなく、武装面で言えば心細いと言えよう。

「……ブリングの、仇！」

心細い……が、それで彼女が止まることはない。地面に降り立ったヴィヴィオは、ヴォルテールを足蹴にしながら視線を寄こす『００Ｒ』を強く見返し、身体に虹色の魔力――聖王の証たる「カイゼ

ル・ファルベ」を纏った。立ち昇る虹の魔力が、煙りのように上空へと立ち昇っていく。

「取らせて……貰うよ！」

絶対的な守備力を持つ聖王の鎧こそ失われているが、彼女にはまだレリックウェポンとしての膨大な魔力があった。ゆりかご決戦時はゆりかごのサポートまでも入れてＳＳランクだった魔導師ランクも、今ではＳＳ－かＳ＋にまで下がっていたが、それでも彼女がいまだ次元世界屈指の魔導師であることは不変の事実である。

仮に、相対する相手が、八神はやて以外で初めてＳＳ＋ランクに到達した怪物でない限りは、今の彼女を負けさすことは、誰にもできなかったかもしれない。「条件付け」によりブリングへの「愛」を強制的に植え付けられたヴィヴィオは、それほどブリングを一蹴した『００Ｒ』に怒りを抱いていたのだ。

しかし、悲しいことに、現在ヴィヴィオが相対している相手は、そのヴィヴィオに「勝てる相手」であり、ヴィヴィオにはどうしようもない実力差を持っている相手――『００Ｒ』であった。それをヴィヴィオは――理解していない。

「ハァアアアア！」

ヴィヴィオが雄叫びを上げ、カイゼル・ファルベの出力を上昇させる。そのまま砂の大地を蹴れば、『００Ｒ』との距離は瞬時に縮まり、ヴィヴィオの得意なクロスレンジに持ち込めた。

それに対し、『００Ｒ』は右手のＧＮソード?を何故かＧＮ粒子に返還させて、ファイティングポーズを取ってヴィヴィオを迎え打

とうとしていた。そのデュアルアイが輝く様は、ヴィヴィオを無情で叩きのめすことをヴィヴィオに伝えてきた。

「ハァッ！」

まず、先に仕掛けたのはヴィヴィオであった。渾身の右ストレートが、ヴォルテールの死骸を、余波だけで跡形もなく吹き飛ばす。爆風のような暴風に飛ばされる小柄な人物の姿もあったが、今のヴィヴィオには『００Ｒ』しか見えていなかった。

「ブリングを傷つけたこと、許さない……絶対ッ！？」

後ろに回った『００Ｒ』に振り向こうとしたヴィヴィオに、振り向きざま、『００Ｒ』の拳が決まった。先程のヴィヴィオの一撃よりさらに強烈な一撃が、ヴィヴィオの脳を揺さぶり、身体を木の葉のように飛ばしていく。１００メートル以上も飛ばされ、砂漠の柔らかい砂に叩きつけられたヴィヴィオだが、その腹に今度は金属的な足がめり込んだ。

「くッ！」

めり込む衝撃で巨大なクレーターができたが、ヴィヴィオには大したダメージがない。相手の背後にサマーソルトキックを放とうとしたが、容易く避けられてしまう。ヴィヴィオはサマーソルトキックの反動で起き上がりながら、再び相手を見据えようとして……正面から、拳で突き飛ばされた。

「がッ！？　こ……このぉおお！！」

怒りに任せた横薙ぎの蹴りを、『００Ｒ』はまるで来るのが分か

っていたかのように左腕でガードすると、返しの蹴りをヴィヴィオの左わきに叩き込んだ。衝撃のあまり、ヴィヴィオの口から胃液が吐き散らされる。だが、それで終わりでなく、『００Ｒ』から見て左に飛ぶヴィヴィオへ追い打ちをかけるように、回転の勢いをつけた左の裏拳をテンプルに直撃させる。

「いっ……！」

それはヴィヴィオの意識を曖昧とさせるほどの威力があり、ヴィヴィオは砂を盛大に巻き上げながらずっと遠くまで転がっていった。そして起き上がろうとした時に、いつの間にか接近してきた『００Ｒ』のアッパーを喰らい、一気に１００メートル近くまで身体を浮かされた。未だ痛みと衝撃で意識が戻り切っていないヴィヴィオだが、『００Ｒ』はお構いなしにヴィヴィオのさらに上空へと舞い上がり、そして……

『ハァッ！』

ドンッ！

……その幼い身体に、縦回転も合わせた渾身の力で踵（かかと）を落とした。それによりヴィヴィオは隕石みたいに砂漠へ落下し、もうもうと舞い上がった砂でその姿を完全に見えなくさせた。

その頭上で目を光輝かせる『００Ｒ』は、掠り傷一つない綺麗な状態であり、絶対的な実力の差を周囲にも見せつけていた。

聖王と『００Ｒ』が戦っている地点からかなり離れた所に緊急着陸をしたブリングのガラッゾは、無くなった左腕を庇いながらＡ－ＬＡＷＳの魔導師による猛攻を退け、急ぎヴィヴィオの元に参じようとしていた。

その胸中にある思いは、焦り。彼をたった一撃で叩きのめした『００Ｒ』が聖王と戦うという危惧が、彼の胸中で荒々しい渦を巻いていたのだ。

完成された『００Ｒ』――開発コード『世界に革新を齎すモノ』は、ブリングの予想を遥かに凌駕する性能を獲得していた。恐らく彼が戻ったとしても、聖王を守ることはできないかもしれない。アレにたった二人で挑むなど、無謀も良い所だ。

「間に合ってくれ、頼む……！」

それでも、彼は聖王の元に馳せなくてはならない。己が誓いのため、信念のために。これ以上の戦乱を防ぎ、犠牲者を出さないようにするという理想を達成する為に、彼は――ブリングは砂漠の青天下を駆け抜けていった。

――それを上空から見下ろしていた白い悪魔に、気付くこと無く。

「アレは……あのガンダムは……！」

八神はやての魔力を貰い、完全に魔力を回復させたなのはは、アースラから転送された後、聖王となったヴィヴィオのいる地点まで全力で飛んでいた。だから、それを見つけたのは本当に偶然――奇跡のようなものだった。

「間違いない……私からヴィヴィオを奪った、あのガンダムッ！！」

上空数百メートルからでも分かる、特徴的な肩を持つガンダム。その「角持ち」と言われる紫色の機体は、なのはの目下を全力で駆けていた。途中に遭う魔導師を全て皆殺しにしながら駆けるそのガンダムは、なのはからヴィヴィオを引き離したガンダムであった。

「レイジングハート、カートリッジロード！」

『Ｙｅｓ，ｍａｓｔｅｒ』

そして、幼いヴィヴィオを聖王にさせた原因を造った……なのはにとって、最も憎いガンダムでもある。

「エクセリオンバスタァアアアア！！」

憎しみで支配された思考の中、なのははカートリッジまでロードした砲撃を、片腕のないガラッゾへと、一切の容赦なく放射した。炸裂効果もある砲撃が空に伸び、見目麗しい爆発を幾つもそらに造り上げる。ガラッゾがいたところなどは、爆発の余波などで目視することすらできなかった。

『反応、消失していません』

完全に不意打ちで放たれたオーバーSクラスの砲撃だが、ガラッゾは直前で左肩のGNフィールドの展開に成功、なのはの一撃に何とか耐えていた。しかし、左肩のGNフィールド発生装置はいきなりやってきた負荷にショートを起こし、使えなくなっていた。

「……そうだよね、ガンダムだものね。私からヴィヴィオを奪ったガンダムだもの。これぐらいじゃ死なないことは、わかってたよ」

右腕のビームサーベルを砂地に突き刺し、辛うじて態勢を保つブリングへと、なのはは実に男らしく、堂々と接近していった。一歩分近づくたびに、レイジングハートを握る力が強くなる。なのは自身、自分にこれだけの憎しみがあったことに驚いていた。

「……ねぇ、子どもを奪われた母親の気持ちを、考えた事ある？凄く辛くて、悲しくて……死んじゃいそうになるんだよ、お母さんは？　そんな気持ちを、貴方は考えたことがあるの？」

「……ない！」

「……そう。だったら……」

5メートルほどの距離を空けて、なのはは立ち止まった。背中には優に30を超える誘導弾を従えており、レイジングハートのストライクフレームの矛先も、ガラッゾの胸を確かに捉えていた。ガラッゾは戦慄でもしているのか、なのはの迫力に呑まれているのか……微塵たりとも動かない。

「少し、頭冷やそうか？」

無表情のまま、無慈悲な死刑執行を宣言した今のなのはは、白い悪魔というには余りにも禍々しかった。さながら、白い魔王と言った方が、実にしっくりと馴染むことだろう。

……そうだ。この瞬間からかもしれない。彼女が悪魔から魔王へと、本格的に変わったのは。そして、この後に起こるもう一つの出来ごとが、彼女の人生を大きく変えるのであった。

なのはの背後がパッと明るくなった。３０以上の誘導弾が、一斉に散ったのだ。なのは自身も腰を落として、砲撃の態勢を取る。その構えは不動の要塞を思わせるほど、重く固いものであった。

「ディバイィン……」
「ガラッゾ！」
『ＧＮ粒子の残量、残り２５％です！　逃げて下さい、ライセンサー！　今の私たちでは……』
「バスタァアアアッ！！」
『彼女に勝てません！』

ガラッゾの視界が、桜色に染められた。ガラッゾの全長より太い直径の砲撃は、大地を抉りながら５メートルしか離れていないガラッゾに直進してきた。ギリギリのタイミングで上に逃れたガラッゾだが、それで白い魔王の攻撃を避け切ったわけではない。いや、そもそもからして、魔王からは誰も逃れられないのだ。

「アクセルシューター！」

「この……全て誘導弾か！」
『人間の持つ空間把握能力とは思えません！』

上に逃れることを想定していたのか、ブリングを囲むようにしてあの３０発以上の誘導弾が上空に配置されていた。四方八方で光る桜色に、ブリングは思わず慄き、動きを止めてしまった。

「エクセリオンバスター！」

そこに、炸裂する砲撃が叩き込まれた。誘導弾を誘爆させながら進むその砲撃は、ガラッゾをその爆炎でもって大きく包んでいく。パパパパッと閃光が奔る中、左肩を犠牲にして難を逃れたガラッゾに、何時生成された分からない誘導弾が何発も直撃する。

「ぐぁ……！」
『ライセンサー、次弾が来ます！』
「……くそ！　オレは聖王の元に行かなければならないというのに、こんな……こんな所で時間を浪費させるわけには……！」
「ヴィヴィオの元には、行かせない！　それに、私は貴方を逃がすつもりなんて……」

誘導弾でまた動きが止まったガラッゾに、桜色の砲撃が光線のように伸びていく。避けられない！　と思ったガラッゾは、残っていた右腕を前に突き出し、収束させたビームクローの爪先で、砲撃を受け止めた。円錐を模って収束されたビームクローは砲撃を中ほどから拡散させ、本体へのダメージを最小限に止めた。

「毛頭、ないの！」

なのはの砲撃を凌いだガラッゾは、砲撃後で硬直しているなのは

へ、最短距離で迫っていった。右手のビームクローを開閉させながら、ガラッゾは残り少ないＧＮ粒子を大量に注ぎ込み、全力を持って最後となるであろう攻撃を行おうとする。その姿が戦っているヴィヴィオと似ていたのは、偶然ではないのかもしれない。

「うぉおおおおおおおッ！！」
「はぁあああああああッ！！」

加速の勢いも味方につけ、なのはに貫手をしようとするガラッゾ。なのははレイジングハートを構えたきり、その場から動かなかった。それを不審に思う前に、ガラッゾの右手がなのはの左腕を根元から斬り飛ばした。それに驚いたのはガラッゾの方だったが、その直後に彼女の意図に気付き、愕然とした。

「しまっ……！！」
「やっと……捕まえた！」

加速した勢いのまま、全速で貫手を繰り出したガラッゾだが、それを狙っていたのはなのはも同じであった。なのははガンダムの装甲を貫くために、ガラッゾの攻撃を利用したのである。それに気付いたからこその、ブリングの愕然であった。

「もう……逃がさない！　レイジングハート、ブラスター１、リリース！」
『ブラスター１、リリースします』

歪な笑みを浮かべたなのはは、ブラスターシステムを発動させて、レイジングハートを殊更強く握り締めながら、その矛先をガラッゾの胸部に突き出した。先程の貫手によって勢いづいたガラッゾには、それを避ける術がなく、吸い込まれるようにして自らレイジングハ

ートに突っ込んでいく。

また、レイジングハートのストライクフレームには、セラヴィーの装甲すら貫き通すだけの貫通力が備わっていた。それがブラスターシステムによって、さらに強化される。

だから、これは必然の流れである。ガラッゾの砲弾すら弾く装甲が背面まで貫かれたのは。そして、その先にあった疑似ＧＮドライヴまでも貫かれることは……高町なのはにとっては、まさに狙い通りの結果であった。

「……ッ！」

コアとなる疑似太陽炉に損傷を負ったことで、ブリング・スタビティというイノベイドを構成する生体情報が乱れ、明瞭だった意識が急激に混濁していく。視界からは色が失われ、感覚もまた次第に失われていく。

「ディバイィン……！」

遠くから聞こえてくる、死を齎すであろう詠唱。それを聞きながらブリングは、

「（オレは……オレは、この世界に何を齎すことが……できたのだろう、か？）」

そう、疑問に思い、そして……

「バスッタァアアアアアアッ！！」

優しさすら伴う桃色の光に、意識を呑み込まれていった……。

『……やったか？』

『いえ……どうやら防御が間に合ったみたいです。かなりのダメージを負ってはいますが、戦闘不能ではありません』

ヴィヴィオに踵落としをし、砂地に平伏させた『００Ｒ』。だが、ヴィヴィオが埋もれた砂塵の中心では、虹色の魔力が弱々しくなっても消えずに灯り続け、戦闘が続行できる状態であることを『００Ｒ』に知らせていた。

『力の差を見せつけるために徒手空拳を選択したのだが、どうやら無意味だったようだな。……あれだけ痛めつけてもまだ此方に向かってくるぞ』

『……仕方ありません。あまり子どもを殺すようなことはしたくなかったのですが……これもＣＢの『計画』のためです、Ｍｅｉｓｔｅｒ』

『あぁ……覚悟を、決めるか』

砂塵を割いて、『００Ｒ』に吶喊（とっかん）してくるヴィヴィオに、刹那と００はついに殺す覚悟を決めた。生半可な覚悟では、彼女を止める

ことはできないと思ったのだろう。左右の腰のマウントにＧＮソード?を形成した『００Ｒ』は、その二刀を引き抜くと、ビームサーベルを刀身の半ばから発生させ、だらんっと、両腕から力を抜いたような構えを取った。

「うわぁあああああッ！」

『……洗脳、か。かつてのオレを、思い出すな』

生気のない瞳、誰かに操られているような顔――それにかつての自分を重ねた刹那だが、その眼光は痛いほど鋭かった。Ａ・Ｉである００の指示を聞き、危うげなくヴィヴィオの攻撃を凌ぎながら、刹那は刀身を2倍にも3倍にもするビームサーベルで、ヴィヴィオの身体の随所を冷静に斬り刻んでいく。

右肩を、左肩を、左足を、右足を。右腕を、左腕を、左腿（もも）を、右腿を。

「が……あぁぁあああああああッ！！」

超高温のビームの刃が、ヴィヴィオのインナースーツを裂き、内にある肉までも焼き切っていく。ヴィヴィオはその痛みに耐え、涙をこらえながら攻撃を続けるも、『００Ｒ』は一切の手加減なく攻撃を捌（さば）いてはヴィヴィオの肉を削いでいった。砂漠の黄色かった砂はすでに血で赤黒く汚れ、踏みしめられた流砂には、ヴィヴィオの小さな肉片が所々に落ちていた。

『だからこそ、オレは……オレ達は、変わらなくてはならないんだ！　このような悲劇を無くすためにも……！』

一際大きくなったビームサーベルを交叉させ、ヴィヴィオの左腕

をすっぱりと斬り落とす。痛みでたたらを踏むヴィヴィオに、『００R』はさらにオーライザーのマイクロミサイルを発射し、その全身を強かに爆撃した。噴煙がヴィヴィオを覆い、虹色の魔力光がさらに弱まる……が、光は、希望の光は未だ潰えてはいなかった。

『世界の「統一」には、聖王の死が必要です。管理世界、管理外世界、ベルカに別れる三勢力を統一させるには、まず、それぞれの中心的立場の人物を倒し、組織そのものを破壊しなければならないのです。……例え根本から間違っているとしても、『計画』の遂行のために、私たちは任務を完了させます』

ＧＮソード?をライフルモードに変形させ、細い光条を連続して砂塵に放つ。当たった手応えはなかったが、向こうのリアクションを誘発させることには成功したようだった。砂塵の側面から飛び出してきたヴィヴィオの行動をすでに予測していた『００R』は、ＧＮソード?の柄を連結させて「ＧＮツインランス」にすると、空いた左手で腰のＧＮビームサーベルをダガーのように投擲（とうてき）して、ヴィヴィオの左足から機動力を奪った。

「うあッ!?　あ、あぁあああッ!?」

それだけでなく、ダガーと一緒に「ＧＮツインランス」もブーメランのように投げ、その回転刃でもってヴィヴィオの右足を付け根から切断した。支えを失ったヴィヴィオが顔から地面に倒れ込み、激痛のあまり呻き声を漏らす。その様子を慎重に観察しながら、『００R』はＧＮソード?を再び右腕に展開し、聖王にゆっくりと近づいていった。

『予想よりも随分手間取ったが……００、こちらの撤退状況はどうなっている?』

『残存戦力の7割ほどが撤退を完了しました』
『7割か……では、そろそろオレ達も撤退しないといけないな。撤退経路を算出しておいてくれ』
『Ｙｅｓ，ｍｅｉｓｔｅｒ』

聖王の危機に駆け付けた聖王教会の騎士もいたが、聖王すら軽く捻った『００Ｒ』相手に、彼らはあまりにも無力であった。枯れ草のように騎士たちを薙ぎ倒していく『００Ｒ』の姿は、本当に……悪鬼そのものであった。

『これで、世界はまた一歩、「統一」に向けて歩きだすはずだ。聖王教会が管理局に統一されれば、あとはＡ－ＬＡＷＳと管理局をどうにかして統一させるだけだからな』
『そのプロセスに至るまでに、今一度、話し合う席を設けた方がいいと思うのですが……』
『……もう誰も、テロリストであるオレ達の話を聞こうとはしないだろう。それが組織の普通の対応だ。降伏の話し合いには応じるだろうがな……』

３００名はいた騎士たちを、数分で壊滅させた『００Ｒ』は、痛みでのた打ち回っている聖王へと、再び近づき始めた。右手で光る大剣は、ただ冷たい光を反射する。

『……ロックオン。オレ達は、変われたのだろうか？　それとも、４年前から何も変わってはいないのだろうか？』

そう呟きを漏らす間にも、『００Ｒ』は聖王へと歩み寄っていった。ＧＮソード?はやはり冷たく光を反射するだけで、何も語ってはくれなかった。

何故なら、剣が語るのは武力と恐怖のみだからだ。それ以外に語ることなど、あろうはずもない。

人を殺さぬ剣など、それは本来的な剣ではないのだから。

「間に合って……！」

ブリング・スタビティが駆るガラッゾの疑似太陽炉を跡形もなく消し飛ばしたなのはは、再びヴィヴィオの元に向かうべく、全力で空を駆けていた。すでに戦闘は終了半ばなのか、彼女の邪魔をする者は誰一人としていない。いない……からこそ逆に、なのはは心中の嫌な予感を振り払えずにいた。

「無事でいて、ヴィヴィオ！　今、ママが助けにいくから……！」

なのはは知らない。すでにヴィヴィオの四肢の幾つかが、『００Ｒ』によって斬り飛ばされていることを。そして、その首元に刃が突き付けられていることを、彼女は知らない。

「だから、だから……！　ヴィヴィオ、無事で……！」

管理局の魔導師も、聖王教会の騎士も、ＡＩＬＡＷＳのＭ・Ｓも、ＣＢの疑似太陽炉搭載機も、皆一緒くたとなって大地に横たわる戦場。その上空を飛ぶなのはは、神話のヴァルキリーのように美しかった。例え左腕がなく、その付け根が赤に染まっていようとも、純白の彼女はこの世のものとは思えない美しさを保っている。

「……ッ！　……ッ！」

だが、その内面では、焦燥と心配がマーブル模様のように、斑（まだら）に入り混じっていた。自分が今どんな顔をしているのか。母の顔なのか、それとも魔王の顔なのか、泣き顔なのか。それすら分からないほど、なのはは混乱した思考のまま、空を飛んでいた。

いつか、娘と飛ぶことを夢見た、眩しいほどの青空を……彼女は今、独りで飛ぶ。

そして、きっとこれからも……

「……見えた！」

……貴方は独りで、飛ぶだろう。

「ヴィヴィオーー！」

仮に。なのはが憎しみに囚われず、ブリングと戦っていなければ。あるいは、ブリングがなのはと遭遇さえしなければ。どちらか一方はこの瞬間に間に合ったのかもしれない。

しかし、現実は実に皮肉だった。同じ人物を守ろうとしていたはずの二人は、導かれるようにして出会い、そして、どちらかが消え

るまで戦った。戦って戦って戦って……守ろうとしていた人を放ってまで、思う存分、戦い尽してしまった。

守ると誓ったはずの人物が危機だったというのに、それでも彼らは各々の戦を優先してしまった。何よりも大事であったはずの誓いを、その時ばかりは二の次にしてまで……

「……この、声は？　……ま、ま？」

その代価が支払われるのは、これもまた必然なのかもしれない。それに、世界は残酷さを求めるものであるからして……やはり、これは必然でしかないのだ。

「そうだ、この声はママの……！　なのはママ、助け……」

一瞬だけとはいえ、正気に戻ったヴィヴィオの声に、なのはは緊張の糸を緩め、安心させるための笑みを作った。ヴィヴィオの右腕が伸びてきたので、なのはもまた、残った右腕をヴィヴィオに向かって精一杯伸ばした。距離はまだ５０メートル以上も離れていたが、なのはにとって、その距離は一瞬で縮められる距離であった。

「たすけ……」

そして……その一瞬が、この一時ばかりは……遅かった。

『貴方の死後が、安らかでありますように……』

『さらばだ、聖王！』

……ザンッ！

これは、「夢」というものなのか？　「夢」の中のヴィヴィオは、聖王などになってなく、またガンダムという怖い敵とも戦っていなかった。これは彼女に訪れるはずだった普通の幸福を描いているのだろうかと、なのはは思う。

『なのはママと一緒に、お空を飛ぶの！』

『それが、ヴィヴィオの「夢」なの？』

ガンダムの一機である『００Ｒ』が、その右腕の大剣を大きく横に振るった。その剣筋に背筋が凍る中、ヴィヴィオの身体から何かがなのはの方に飛んできた。思わずキャッチしたなのはに映ったの

は……

『今は無理でも、いつかきっと、なのはママと一緒に飛びたいの！』
『それじゃ、なのはママもその時までは現役でいようかな？　なのはママもヴィヴィオと一緒にお空を飛びたいからね』

……なのはに助けを求めていたはずの、ヴィヴィオの顔であった。
顔、顔。身体は向こうにあるのに、顔が、頭だけがこちらに来て……！

『ヴィヴィオ、頑張る！　だから、なのはママも頑張って！』
『うん！　なのはママも頑張るよ、ヴィヴィオ！』

「い、いや……いや……！」

『『ゆ～びきりげんまん、うそついたら……』』

「いやぁあああああああああああああああああああッ！？」

――「夢」は、もう二度と……叶わない。

第７５話　臨戦（後書き）

久しぶりにこの小説の「らしさ」を出せた気がします。

次回の更新予定日：２０１１年９月２４日（土）

第７６話　臨終（前書き）

ブリング・スタビティと高町なのは。彼らは高町ヴィヴィオを守る誓いを立てたはずだった。しかし、彼らの間にあった因縁が、その誓いを打ち崩した。出会った瞬間、殺し合いを始める両者。そして最後に立っていたのは、なのはだけだった。

なのははヴィヴィオを救うため、ブリングを殺したあと、空を飛んだ。しかし、なのはとブリングが戦っていた頃には、聖王と『００Ｒ』の戦いに勝敗がついていた。必死に飛んでいたなのはの目に飛び込んできたもの。それは、助けを求める娘の首を刎ねる『００Ｒ』の姿であった。

【夢や信念は麻薬の様な物だ。持っている時は力を与えてくれるが、それが失われた時に狂う奴もいる】

――ココロンＫ様より

第７６話　臨終

――新暦７６年３月１６日――

「あ、あ……あぁあああああああああああああああああッ！！！！！」

それは、心底からの慟哭（どうこく）だった。魂からの……嘆きであった。

「あぁあああああぁあああああぁあああああああああッ！！！！！」

髪をサイドポニーで結んだ娘の――高町ヴィヴィオの頭部を抱え込んだ、管理局屈指のエース、高町なのはは、この時、周囲の目を憚（はばか）らずに……天に向かって、泣いていた。

「あああああああああああああああああああああッ！！！！！」

涙を流し、嗚咽を洩らし、しゃくりを上げながら……天に向かって、啼（な）いていた。

「あ……あぁ……！」

それは、そこに住む天上人を――娘を殺したガンダムを、殺すことを……娘に誓う儀式、のようなものでもあった。

「……ぁあああああッ！！　あ、あぁ……！」

なのははヴィヴィオの瞼をそっと閉じさせた。頭部しかない娘の体重は嫌なほど軽く、それが却ってなのはにヴィヴィオの死を痛感させた。もう笑うことも、ましてや飛ぶことすら叶わなくなった娘

の頭部を、なのはは優しく、慈母のように抱き締めた。それが娘にしてやれる、最後の「親の愛」だというように……

「ヴィヴィオ、ヴィヴィオ……！」

何度も何度も、声が擦（かす）れるまで娘の名を呟くなのは。その目は徐々に復讐の焔（ほむら）に囚われていき、それは『００Ｒ』の姿を見た時に、完全に燃え上がる。

「よくも、よくもヴィヴィオを……私の、娘をぉおおおおッ！！」

ヴィヴィオの頭部を、その髪で身体に括り付けたなのはは、悲しみが溢れ返った叫びを発しながら、『００Ｒ』にレイジングハートを突き付け、その矛先に魔力を集中させる。

「ディバイィン……！」

『遅いッ！』

圧倒的としか言いようのない魔力を溜めるなのは。が、それが放たれる前に、『００Ｒ』の右腕が動いた。ＧＮソード？のクリアパーツがレイジングハートのストライクフレームを半ばから切り落とすと、その返しで、なのはの顔も斬り裂こうとする。

「絶対、許さない！　あなたは……あなただけはッ！！」

左の視界が効かなくなるが、致命傷をかわしたなのはは、片腕を上手く使って『００Ｒ』から距離を取った。大凡大人３人分ほどの距離が、両者の間に出来る。なのはは先程溜めた魔力を解放するため、半分になった矛先を再び『００Ｒ』に向けた。『００Ｒ』も、ＧＮソード？の刃を格納し、三つの銃口をなのはに定める。

「バス……タァアアアアアアッ！！」
『クッ……！』

なのはのディバインバスターが、『００Ｒ』の収束ビームが、互いの中間地点にて衝突した。お互いが拮抗し、目も開けられない光が視界を白くする中、なのはは、

「ブラスター２、解放！」
『……Ｙｅｓ，ｍａｓｔｅｒ！　ブラスター２、リリースします！』

今日３度目となる切り札のブラスターシステムを発動させ、『００Ｒ』の収束ビームを力で押し切ろうとした。ブラスターシステムを解放した砲撃は、集束ビームをも呑み込んで、『００Ｒ』がいたであろう場所を、轟熱と共に通り過ぎていった。しかし、あまりにも手応えがない。

『マスター、上です！』
「えっ！？」

不意に、なのはの上空に影が被さってきた。咄嗟に小さなレイジングハートを思わせるブラスタービットを上方に展開し、２つの障壁を造る。２つ造ったのは、ビットの数が２つであったからなのだが……なのはより３ランクも高い『００Ｒ』には関係のないことであった。

『ハァアアアッ！』
「う、うそ！？　私のシールドを……！」
『プロテクション』

固いことで知られるなのはのシールドをたった一撃で突き崩した『００Ｒ』は、そのままなのはに向かって落下していき、その刃を突きたてようとした。レイジングハートが張った障壁も、『００Ｒ』にとっては紙のようなものでしかなく、一瞬で破られてしまう。

『終わりだ、エース・オブ・エース！』

「まだ……まだ！」

懐に潜り込み、勝利を確信する『００Ｒ』。片腕しかないなのはには、この近距離で『００Ｒ』に立ち向かう術はない。例えあったとしても、砲撃のスペシャリストがクロスレンジのスペシャリストに敵う道理など、あるはずがなかった。

しかし、刹那が向かう相手は、次元世界で「エース・オブ・エース」とまで言われた大魔導師、高町なのはである。教導官として現場に立ち続けたキャリアは、確かな血肉となって、なのはの中で生きていた。

『なっ……この態勢から避けただと！？』

「フラッシュムーヴ！」

『フラッシュムーヴ！』

ＧＮソード？を不可視の速度で振るった『００Ｒ』だったが、なのはは今までの経験則を総動員させ、ツインテールの右側を切られながらも、それを避けることに成功した。『００Ｒ』が驚愕により動きが止まる中、なのははフラッシュムーヴで高速移動し、先程の時よりもさらに距離を空ける。

「ブラスタービット、展開！」

『ブラスタービット、リリース』

ブラスタービットをさらに2つ展開し、計4つものビットを展開したなのはは、その全てを使って『００R』を牽制しながら、自身は周囲の魔力を収束――いや、集束させる。

「カウント！」

『Ｔｅｎ，ｎｉｎｅ，ｅｉｇｈｔ……』

驚愕から抜け出した『００R』が、3つ数える内にブラスタービットを1つ、落とす。

『Ｓｅｖｅｎ，ｓｉｘ，ｆｉｖｅ，ｆｏｕｒ……』

さらに4つ数える合間に、もう一つ、GNソード?を使って落とす。残った2つのブラスタービットで、なのはは必死に時間を稼ごうとする。

『Ｔｈｒｅｅ，ｔｗｏ，ｏｎｅ……Ｓｔａｒ．Ｌｉｇｈｔ．Ｂｒｅａｋｅｒ』

2つを同時に落とし、ビットの障害がなくなった『００R』がなのはに向かって飛んでくる。しかし、なのはのチャージは、この時にはすでに完了していた。凄絶（せいぜつ）な笑みを浮かべながら、なのはは2発目となる極大砲撃を放とうと、照準と態勢を整える。

「スターライト……」

万感の思いを、悲しみを、嘆きを乗せて……咆哮するように、

「ブレイ……カァアアアアアアアア！！！！」

桜色の極光が今、『００Ｒ』に向かって放たれた。

あのメメント・モリの砲撃を真正面から押し退けた究極の砲撃が、『００Ｒ』に迫っていく。『００Ｒ』のモニターは桜色一色に光り、それ以外の色など、全て塗り潰されてしまった。

『そうか、ビットによる時間稼ぎはこのための……！』

『これが、音に聞くＳ．Ｌ．Ｂですか……とても澄んだ、悲しい色ですね』

急ストップした『００Ｒ』だが、その機体はすでにＳ．Ｌ．Ｂの範囲から抜け出すことはできなくなっていた。眼前から迫るＳ．Ｌ．Ｂは、それこそ規格外の砲撃として『００Ｒ』を呑み込もうとしている。

しかし、それを前にしても、刹那と００は焦らなかった。焦る必要がないからだ。

『いきなり本番となったが、仕方がない。アレを使うぞ、００』

『Ｙｅｓ，ｍｅｉｓｔｅｒ』

肩に付いている翼部を前に動かし、後方に逃れようとする『００Ｒ』を、Ｓ．Ｌ．Ｂはしっかりと追尾していく。メメント・モリと撃ち合った時より威力はかなり減衰していたが、それでも『００Ｒ』

をＧＮフィールドごと消し去れるだけの威力は顕在していた。

「これで、終わりよ！」

泣き笑いを浮かべるなのはの顔は、娘の死に対する悲しみと、復讐ができそうなことへの喜びで、酷く複雑そうに歪んでいた。また、Ｓ．Ｌ．Ｂはあまりの太さ故に、なのはから『００Ｒ』の姿を完全に見えなくさせていた。

『トランザム！』
『ＴＲＡＮＳ－ＡＭ』

なのはの見えない所で真紅に染まった『００Ｒ』は、ＧＮソード？の刀身を展開し、その切っ先をＳ．Ｌ．Ｂに向けた。真紅の粒子が渦を巻いて辺り一面に吹き荒れる中、刹那はさらに一言、

『ライザァアアアッ！！』
『ＲＡＩＳＥＲ』

と、付けくわえた。そして、それがなのはと『００Ｒ』による戦闘の勝敗を……決定づけた。

「……え！？」

その光景は、なのはには信じ難いものであった。未だかつて、誰にも止められたことのない、次元世界最強とも謳われる砲撃魔法、Ｓ．Ｌ．Ｂ。あのメメント・モリですら最終的には押し切ってしまった、この高町なのはを象徴する魔法が、今、初めてその進撃を止めていた。……否、止められていた。

「そ、そんな……これでも、Ｓ．Ｌ．Ｂでも駄目なの！？」

Ｓ．Ｌ．Ｂを止めていたのは、それとよく似た桜色の極光――『００Ｒ』が放ったと思われる、極大の粒子ビームであった。Ｓ．Ｌ．Ｂを真ん中から斬り裂きつつ進む粒子ビームは、真紅の輝きを放つ『００Ｒ』の右腕から伸びていた。

「くぅううッ！？」

全身全霊の魔力を注ぎ込んでも、『００Ｒ』の粒子ビームは止まらなかった。なのはは、まるで自分がＳ．Ｌ．Ｂを受けているような錯覚に陥ったが、ふと、この光景に違和感を覚え、『００Ｒ』の右腕を注視した。すると、この粒子ビームと思しき砲撃は、３つあった銃口ではなく、剣そのものから伸びていたものだった。

それを見たなのはは、自身の違和感が氷解したのを感じた。斬り裂きながら進み、剣から伸びるこの粒子ビームは、実は粒子ビームなどではなく……

「び、ビームサーベル！？　こんな巨大なッ！？」

砲撃かと見紛うほどの、超巨大ビームサーベルであったのだ。なのはその桁違いな非常識さに、思わず愕然とした面持ちとなった。

『ＴＲＡＮＳ－ＡＭ－ＲＡＩＳＥＲ、発動終了まで、残り１０秒を切りました、Ｍｅｉｓｔｅｒ！』

『大丈夫だ、行ける！』

ＴＲＡＮＳ－ＡＭ状態の『００Ｒ』が、その深紅の輝きをさらに強める。それに比例するように、超巨大ビームサーベル、ＲＡＩＳ

ＥＲ－ＳＷＯＲＤの出力も高まっていき、Ｓ．Ｌ．Ｂを斬り裂く速度も上がっていく。まさに、天井知らずの粒子量である。高町なのはの魔力量ですら、この『００Ｒ』の粒子量の前では、微塵なモノに過ぎないのか。

『これで、本当に終わりだ、高町なのは！　貴様の復活を、オレが破壊する！』

「あ、あぁ……ぁあああああッ！？」

今度はなのはの視界が、桜色一色に染まった。意識の境界面があやふやになり、レイジングハートの砕ける感触が、彼女の右腕に伝わってきた。

「（ヴぃ……ヴィヴィ、オ。仇を、取れなくて……ごめん）」

そう悔いる刹那、なのはは不思議な白い空間で、ヴィヴィオの声を確かに聞いたような気がした。裸体で娘の頭部と向き合う己の姿が、白色化した宇宙空間のような空間で浮いているのを、鮮明なイメージでどうしてか捉える。困惑する自分を前に、ヴィヴィオは一度、くすりっと、笑ったような気がした。

「（……）」

頭だけとなったヴィヴィオの口が、何か言いたげに動いたように思えた。しかし、言葉までは聞き取れなかった。これは走馬灯なのか、白昼夢なのか……そう思いながら、なのはの視界は今度こそブラックアウトした。

『い、今のは、一体……』

『……これが、『００Ｒ』の真の力です、Ｍｅｉｓｔｅｒ』

吹き飛んでいくなのはには見えなったが、『００R』の刹那と００もまた、先の空間を夢見るように見ていたのであった。そして、それに困惑する刹那には、まだ生きていたなのはを追うだけの余裕は存在しなかった。

「……ぁ」

なのはが目を覚ますと、そこには泣いているヴィータと、辺りを警戒しているシグナムの姿があった。先程まで戦っていた『００R』の姿はなく、自分が仰向けで倒れていただけであった。

「……！　目を覚ましたぞ、シグナム！　転送する魔導師は……シャマルはまだかよ！？」

「泣くな、ヴィータ！　シャマルももうすぐ到着する！　だから、周囲の警戒を怠るな！」

「分かってる……分かってるけどよぉ……！　今のなのはの姿を見ていると、思い出しちまうんだよ！　８年前の、あの事故のことを……！」

涙をぽろぽろと流すヴィータ。それを慰めているシグナムも、非常に辛そうな顔をしていた。なのはは冷めた頭のまま、周囲をぐるりと見渡し……そこで、大破しているレイジングハートを見つけた。

「……レイジング、ハート……」

『……』

声をかけてみるも、応答はない。どうやら中枢のシステムにまで損害を受けているらしく、コアとなる紅玉には、何の光りも灯っていなかった。

「……ヴィータちゃん」

「……ん。何だ、なのは？」

「私は、どうなって……うぅん、ヴィヴィオは……ヴィヴィオは、どこ？」

「……」

なのはの副官を務めるヴィータは、いきなり顔を険しくさせた。なのはには、それは覚悟を決めた顔にも見えた。ヴィータは努めて冷静さを保ちながら、なのはに、一房の髪を見せた。その髪の色は、ヴィヴィオと同じ……黄金色であった。

「……」

「……ヴィータ、ちゃん？」

「……これが」

ヴィータの顔は、とても苦しそうに歪んでいた。

「これが、高町ヴィヴィオの……唯一残っていた遺髪（いはつ）だ、なのは」

「……え？」

そして、なのはの顔は……もっと、苦しそうに歪んでいたことに、なのはは気付いていなかった。また、この時のなのはは、あの時に見た現とも夢とも付かない空間のことを、完全に忘れてしまっていたのであった。

「はやて、どうなっているの！？　なのはは、キャロはどうなって……！」
『ちょい落ちつき、フェイトちゃん。今順を追って説明するから』

ＣＢの大半が撤退し終えたのと、戦闘が終結したのは、ほぼ同時刻のことであった。すでに通信や念話は回復しており、フェイトはエリオをお姫様だっこで壊れ物を扱うように抱え、ザフィーラと一緒に空を飛びながら、アースラにいるはやてと通信を繋げた。画面に映るはやての顔は、嫌な予感を抱くほど強張っており、それがフェイトの不安を増大させていく。

「……それで、状況は？」
『……状況は最悪も最悪。ゆりかご決戦時の時の方がまぁ……まだましやったかもな』
「……！？」

いきなりなはやての言葉に、フェイトは顔を顰めた。「Ｊ・Ｓ事件」でも相当な被害が出たというのに、それすら超える被害がこの戦争で出たのだろうか？　訝しげに思いながらも、ライトニング隊の隊長として、フェイトは冷静に状況を呑み込もうとした。

「それで、具体的には？」
『まず、私たち六課を除いた3艦隊はほぼ壊滅状態。3割か4割は喰われたわ。それだけじゃなくて、メメント・モリ破壊後の聖王教会の襲撃によって、CB側の機体を多く取り逃がしてしもうた。しかも今度は聖王教会の残兵回収までしないとあかん』
はやての言葉を黙って聞いていたフェイトは、残兵回収の言葉を聞いて、首を傾げた。
「……どうして、教会の残兵を回収するの？　敵になっていたんでしょう？　私も何人か倒したけど……」
『……そっか。フェイトちゃんは知らへんかったもんな。だったら、説明するわ。……今回の教会による襲撃には、聖王にさせられたヴィヴィオが参加しとった』
「ヴィヴィオが……！」
「そんな！」
「主よ、それは本当ですか！？」
フェイトとエリオ、それにザフィーラが切羽詰まった様子で聞いてくる中、はやては普段と変わらぬ調子で、その続きを……言った。
『嘘やない、事実や。教会は、ここにほぼ全戦力を投入しとったんや。多分、うちらのような主力となる戦力を壊滅させるためにな。それで、その肝心の聖王が殺された今、教会の方がうちらを頼ってきたわけなんやけど……フェイトちゃん、聞いとんの？』
ただ、事実を伝えるだけの、軽い言葉。しかし、聞き捨てならない単語が、三人の心に大きな衝撃を与えた。
「……はやて。今、なんて？」

『……聖王は、殺されたんや。ＣＢの「剣士」、いや『世界モノ』にな』

「そんな……ヴィヴィオが、ヴィヴィオが……！」

「……ヴィヴィオちゃんが、死んだ」

「……」

高町ヴィヴィオの死。それを知った衝撃は、予想以上に大きかった。フェイトは口を覆いながら、涙を必死に堪えようとする目をはやてに向けた。

執務官となった彼女は、ある程度、人の死に対しても慣れていた。それはザフィーラにも言えたが、エリオだけはいまだショックから覚めていなかった。フェイトは悲しみで泣きそうになりながらも、はやてに他のことを聞いてみた。

「……他には？」

『あとは、そうやな……なのはちゃんのことやけど』

「……なのはが、どうかしたの？」

『実はな、メメント・モリを破壊した後、ヴィヴィオを助けに行ったんや。それで「剣士」に返り討ちにあって、片腕を斬られてしもうた。今はシャマルが治療しとるから安心できるけど……どうやら「剣士」は、なのはちゃんを鎧袖一触（がいしゅういっしょく）できるだけの力があるみたいなんや。もし遭ったら全力で逃げてな、フェイトちゃん』

なのはすら軽くあしらったという「剣士」の実力に驚きながら、フェイトは自分の「娘」がどこにいるのかをはやてに聞いた。しかし、はやては眉を寄せて、唸るだけだった。

『キャロのことなんやけど……まだこっちに戻ってきてないんや。こっちは今色々と忙しいから、フェイトちゃんたちが探してくれる

と助かるんやけど……』
「うん。キャロはこっちで探しとくから、はやてはそっちの仕事を頑張って」
『それじゃ、またアースラで』
言って、通信を切る。ヴィヴィオの死やなのはのことなど、気がかりなことは沢山あるが、今フェイトがやらなければならないことはキャロの捜索であった。すぐに頭を切り替えたフェイトは、ザフィーラとエリオと別れ、各自でキャロの捜索を開始した。
しかし、幾ら探しても、キャロは見つからなかった……。
キャロ・ル・ルシエは、砂に埋もれるようにして転がっていた。あの時、ヴォルテールを『００Ｒ』によって殺された彼女は、その後のヴィヴィオの攻撃の余波を受け、戦場となった地点から遠くまで飛ばされていたのだ。
「うぅうぅ……ヴぉ、ヴォルテール……！」
「きゅるるる……」
ヴォルテールの死を悼むキャロの、涙で濡れた頬を、小さくなったフリードリヒが優しく舐め上げる。そのくすぐったさも、今は何の慰めにもならなかった。ただ悲しみが増すだけである。
しかし、悲しみに暮れるキャロの元に、空気が全く読めない奴がやってきたのは、フェイトたちがキャロの捜索を開始した時だった。

彼女は肩から青いマントを下げ、身体は薄いスーツしか纏っていなかったが、その外見はキャロが「姉」だと思っているフェイトの幼いころに瓜二つ……いや、全く同じであった。

「や、やっと見つけたよ、キャロなんとか！　ぜぇ、ぜぇ……僕にこんなことをさせるなんて。王め！　覚えていろよ！」

キャロの前で息を荒げる彼女は、確かレヴィ・ザ・スラッシャーと名乗った少女であったと、キャロは記憶を掘り起こした。キャロが見た時にいたもう一人の方――はやてにそっくりなロード・ディアーチェの姿は見当たらない。どうやら、彼女だけのようだ。

「こんなことなら、ディアーチェの任務だった、スクライアの集落を襲う方が楽だったかもね。でも、僕は今、任務を確かに達成したんだ！　これでディアーチェにもシュテルにも馬鹿にされずに済むぞぉーー！」

キャロとは正反対に意気揚々としているレヴィは、目を丸くしているキャロを完璧に無視していた。そしていきなりバルフィニカスを取りだすと、その鎌の刃でキャロの意識を絶った。

「きゅるッ！？」
「お前も気絶しろ、子竜！」

返す刃で、フリードリヒの意識も絶つ。レヴィは自分の仕事の出来に満足してか、むふぅッ！　と鼻息を荒げながら、一人と一匹の身体を魔法で持ち上げた。ついでとばかりに、先程回収したヴォルテールの死骸、その骨格も一緒に持ち上げる。意識を失ったキャロたちは、一切の抵抗をせずに、そのまま白い魔法陣に包まれ、この

血生臭い戦場から去っていった。

レヴィがキャロ達を攫(さら)っていった5分後。やっとフェイトがその現場に到着したが、何も気付かないまま、、彼女はキャロの行方をずっと探し続けた。見つかる筈もない、彼女の姿を延々と……フェイトは探し続けた。

メメント・モリの余波から逃れたことに、部族全体で喜びを分かち合うスクライア族。しかし、それに冷や水をかけるように、その時は唐突にやってきた。それとも、これもまた必然――誰かの陰謀だったのだろうか？

「ふはははははッ！　喜ぶがいい、塵芥ども！　我が主の命によりて、ここに、王の裁きを下してやろう！」

沈みかけた太陽を背にし、六枚の黒き翼を広げる闇統べる王、ロード・ディアーチェ。彼女は喜びで湧くスクライア族の遥か上空で、喜びに満ちた笑みを浮かべながら、デバイスであるエルシニアクロイツを下に向ける。

その十字の切っ先は、これから行う所業に期待してか、嬉しそう

な闇色の光りを放っていた。冷たい、破壊を望む光りを。

「古からの民よ！　今、闇の巨重に呑み込まれよ！　出でよ、ジャガーノート！！」

ディアーチェの勇んだ詠唱により、その頭上に巨大な魔法陣が出現した。数十メートルもの大きさのベルカ式魔法陣は、そのまま静かに回転しながら、その中心に闇色の禍玉を生成していった。そして、それが魔法陣よりも大きくなり、１００メートルを優に超えるほどの大きさになると、

「ふはははははッ！　皆々滅ぶがいい、スクライア族よ！」

ディアーチェはそれを、眼下にあるスクライア族のキャンプに落とした。１００メートルを優に超える、巨大な魔力の塊をである。

「な、何だあれは！？」

上空から落ちてくる黒い禍玉に気付いたスクライア族の民衆は、その異様にもそうだが、それの内包する魔力量に恐怖を覚えた。黒い禍玉が内包する魔力量は、彼ら全員の魔力量よりも遥かに多かったのだ。アレが地表に落ちればどうなることか……それに戦慄した一族は、急ぎキャンプ場からの逃走を始めた。

「子どもと老人を最優先にしろ！　魔力がある奴は、全力でアレの進行を止めろ！　遅らせるだけでもいい！　一人でも多くの同胞を助けるんだ！」

危機感に染まった怒号がスクライア族の間を忙しなく駆け巡っていく。その様子を上空から睥睨（へいげい）していたディアーチェは、砂色の髪

を手で梳かしていた。その顔には一切の罪悪感は窺えず、これから起こるであろう破壊と混沌を前にして、胸をときめかせているようであった。

「くっくっくっ……あれから逃れきれるものか。アルハザードの伝説に出てくるジャガーノート宜しく、全てを破壊されるがいい」

ジャガーノートの巨球が、キャンプ場の目前にまで迫ってきた。進行を遅らせようとしていた魔導師たちも、ついに恐怖に耐え切れなくなって、一斉に逃げ出し始めた。しかし、転送魔法を使えるような高ランク魔導師は、先の戦争によってほぼ全員が戦死しており、キャンプ場の出入り口付近まで行くのが精いっぱいであった。

そして、そんなスクライア族の後ろで、ゆっくりと落ちていたジャガーノートが、ついに地面と接触した。その瞬間、視力を無くしそうな強い光と共に、鼓膜が破れそうな轟音が辺り一面に轟いた。

ドォオオオオオンッ！！！！

接触地点の中心から円形に広がっていく闇色の爆発に、スクライア族は成す術もなく呑み込まれていった。ジャガーノートが落ちた地点には、「核」を思わせる闇色のキノコ雲が立ち昇り、スクライア族のほぼ全員を呑み込んだそれは、近くにあった都市の半分も一緒に呑みこんだ。

「ふはははははッ！　我が手にかかれば、この程度のことは造作もないことよ！　我は誰ぞ？闇を統べる王ぞ！　頭が高い！　控えおろう、塵芥共！！」

何もないクレーターが、眼下の光景を大きく変化させていた。に

も関わらず、ディアーチェは嬉々として、それを上から見下ろしていた。圧倒的な破壊を齎した余韻は、彼女の中で快楽に返還されていた。彼女の高圧的な笑い声だけが、そこで反響していた。

この異変に気付いた管理局だが、彼らが駆け付けた時には、すでにディアーチェは去った後だった。彼らにできたことは、辛うじて生き残っている都市の生き残りを救出することだけだった。

そして、スクライア族の方は、見るまでもなく全滅しており、それが機動六課に更なる衝撃を齎すのであった。少なくても、はやてはこの報を聞いた時、持っていた茶碗を思わず落としてしまっていた。

「う……うぅん？　……ノア？」

カリム・グラシアは目が覚めた後、一目散に自分をここまで運んだであろうノア＝アンダーソンの姿を探した。しかし、彼の姿はどこにもなく、あたりは岩塊が転がる砂地が広がっているだけだった。

「ノア？　ノア＝アンダーソン？」

大きな声で呼んでみるも、返事はまるでなし。反響する自分の声しか聞こえてこない。足手まといになった自分を置いて、さっさと戦場に戻ったのだろうかと思ったが、女性に優しいノアがカリムをこんなところに置くわけがないので、その可能性はないだろう。

「……おかしいわね。何処に行ったのかし……あら？　これは一体……」

地面から大きく突き出た岩を、一つ二つと捜していくも、ノアの姿はどこにも見当たらなかった。魔力が枯渇していたカリムはそれだけの運動で息が切れたので、少し休もうと手頃な岩に腰かけたが、そこで彼女は何処かで見たことのあるものを発見した。

それは、四辺が１０センチほどの、四角いペンダントであった。中には一枚の写真があり、そこには笑顔で笑うノアと、もう一人……カリムの友人であった「カリフ」が映っていた。その絵画から出てきたような騎士と代行者の姿に、懐かしさを覚えたカリムは、どうしてこれがここに落ちていたのかを考えた。考え……周囲の異変に気付いた。

この辺りだけが、まるで戦闘でもあったかのように荒れ果てていた。銃痕も、切り傷も、そこかしこに見つけることができた。カリムはそれを見て、ある可能性を思い浮かべ、その真偽を知るべく、すぐさま岩から飛び降りる。

その一面は、酷い有様であった。切り傷もそうだが、何よりも酷いのは、何度も何度も撃ち込まれたであろう、無数の弾痕である。中には、高熱のビームでも浴び続けたのか、岩が大きく溶解してい

るものまであった。

これらを見て、カリムはここで戦闘が起こったことを知った。次に彼女が考えたのは、その戦闘を行ったのが誰か、ということだった。

切り傷の方は、恐らくペンダントからも分かるように、ノア＝アンダーソンのジャガーノートによるものだろう。あちこちにある切断面の鋭利具合からも、それが分かる。では逆に、ノアと対戦したと思われる相手だが……カリムにはたった一人、いや一機しか心当たりがなかった。

だが、その一機は確かにカリムの「愚者の崖」によって、虚数空間に閉じ込めたはずなのだ。虚数空間から出てくることなど、どんな魔導師でも不可能である。だからその線は消してもいいと思うのだが、カリムにはさきほどから嫌な予感がしてならなかった。

「……」

そして、その嫌な予感は……的中した。

「……ノア、貴方に安らかな眠りが訪れますよう、祈りましょう」

ある岩塊の裏を覗いたカリムがそこで見たのは、ジャガーノートで胸を貫かれ、岩に縫い付けられた、頭部のないノア＝アンダーソンの死体であった。顎から上が吹き飛ばされた死体には、時間の経過によってか、何匹もの蟲が集っていて、これがあの教会最強の騎士なのかと思うほど、無残なものだった。

カリムはノアの死体に恐る恐る近づき、死体を近距離から観察し

てみた。撃ち込まれた弾痕は１０を軽く超え、その割には一切の切り傷がなかった。それを見たカリムは、ここに確信を抱いた。

「……どうやって、「三つ目」は虚数空間から抜け出せたのでしょうか？」

ノアを殺したのは、自身が葬ったはずの「三つ目」であることを……。

第７６話　臨終（後書き）

第７５話に引き続き、この鬱展開。ハートフル（）的な展開はどこにいったのでしょうか？

投稿が２日も遅れた理由→身内がずっとインターネットを占拠してくれました。あと残業を増やしてくれる上司は死ねばいいと思います。

しかし、どんな理由があれ、投稿予定を守れなかったことは事実です。そのことを、ここに深く陳謝したいと思います。本当にすみませんでした。

次話の投稿予定日：スピンオフの進み具合により変化。遅くなっても２０１１年１０月８日（土）。

第７７話　裏切（前書き）

【復讐の先には何も亡いと君は言った。
当然だ、何もかもを失ったからこそ復讐を決めた――そんな私には既に何も遺ってはいない】

――ＥＸＡＭ様より

第７７話　裏切

――新暦７６年３月１６日――

「ハァ、ハァ……くく。これほどの怪我をしたのは、一体何時振りであったろうな……」

夕陽が沈みかけた砂漠を、右腕を無くしたザ・サムライが、血だらけで歩いていた。あの『００Ｒ』との死合いで体力・魔力を共に限界近くまで消耗したサムライは、痛む身体を押して、味方であるＡ－ＬＡＷＳの隊員を探していた。

その胸中にあったのは、これ以上ない敗北感と、燃え上がる闘志であった。

「くくくく……それにしても、とんだ怪物だったな。アレを倒すには、この世界の全戦力を結集させなければならないかもしれん。……あるいは、世界の「統一」と「抑止」を目指すＣＢは、それをこそ望んでいるのか……？」

すでに戦闘は大分前に終わっており、大多数の勢力が撤退を終えた今、隊員の一人を探すのも一苦労だった。特に手負いであるサムライは、足を引き摺ってしか移動できなかったので、苦労が２倍にも３倍にもなっていた。慣れていた筈の孤高すら、今は酷く重たげに感じる。

「それに乗るのも癪だが、何よりもまず、管理局が崩壊でもしない限り、組織の「統一」は無理だろうな。天下一品の頑固さを持つあそこが、管理外世界からなる私たちを、同じ人間として認めるもの

か」

見渡す限り広がる大砂漠に、人影は疎らに――本当に数人程度しか見えなかった。しかも大半の人影が、さきほどの黒い爆発によって被害を被った都市の救助活動をしている管理局の局員だったので、中々接触を図れなかった。

いくらメメント・モリ攻防戦で共同作戦（実質的には同じ目標を攻略しようとしただけだったが）を行ったと言っても、彼らは未だに不倶戴天の敵同士なのだ。しかも、サムライはＡ－ＬＡＷＳの貴重なオーバーＳである。手負いの状態で局員と接触すれば、問答無用で拘束されることだろう。

「……もしくは、それにすら手を打っている……のか？　いや、まさかな……それこそあり得ん」

折角極上ともいえる強敵を見つけたのだ。拘束されて戦えなくなるなんて、サムライには真っ平御免であった。それに、彼女はロベルトの師匠であり、彼に鍛錬という名の地獄を強制的に体験させなければならない身だ。いくら責任感が欠片もないサムライといえど、育成中の弟子を放り投げにすることはできなかった。

最も、それだけでなく、ロベルトともっと一緒に世界を動かしたいという想いもあったのだが……本人はあまり、そのことを自覚していなかった。

「……ん？　あれは……フラッグか！　識別コードもＡ－ＬＡＷＳのものだな、うむ」

純白の小袖を血で真っ赤に染め、緋袴まで血を垂らしながら歩く

こと、１時間近く。もしサムライが『竜殺』のレアスキル持ちで、竜並の強靭な身体と生命力を持っていなければ、出血多量で死んでいただろう。だからこそ、仲間を見つけた時の喜びは一段と強く感じた。

「おい、そこのフラッグに乗る魔導師！　貴様はＡ－ＬＡＷＳに所属する者か！？」

「……ザ・サムライ様？　どうしてこんな所に？」

「なに、ただ敗けただけだ。そんな詮索よりも、私を近くの船まで至急運べ。そろそろ、体力も魔力も限界なのでな」

フラッグの外甲を纏った魔導師の声は、幼さを感じさせる少女のものだった。きっとロベルトと同い年の１４歳ぐらいかと見切りをつけたサムライは、遠のいてきた意識の中で、ロベルトの顔をふと、思い浮かべた。そして、彼と出会ったあの夜のことを思いだした。

何故、この時にそんなことを思い出したのか。それは、サムライ自身にも分からなかった。けれど、もし、あの夜に狩った雑魚賞金首……の、傍らにいた娘が生きていれば、ちょうどこのぐらいの歳になっていただろうと思ったのは、彼女の鋭敏な第６感が働いた結果だったのかもしれない。

「……そう、ですか。分かりました。では……」

「……あ、あぁ。頼むぞ」

「はい、分かっています。チャンスは逃すなと、Ａ－ＬＡＷＳの先輩方にも教わりましたから」

「……なに？」

ジャキンッ！　フラッグのリニアライフルから、弾の装填音が聞こえてきた。サムライは音に瞬時反応して身体に魔力を巡らせよう

としたが、限界まで弱り切った彼女には、リニアライフルの実弾を防ぐだけの魔力を用意することができなかった。

「ぐおぉおおおおッ！？」

「左足、ですか。教わった通りに胴を狙ったのですが……射撃はやっぱり慣れませんね」

リニアライフルから吐き出された実弾は、サムライの左足を吹き飛ばしていった。痛みに悶えるサムライを、フラッグは無機質なカメラで見下ろしながら、今度こそサムライの腹に風穴を空けた。腸や胃などの臓物が、その風穴から飛び出す。それをフラッグは足で踏み潰す。

「これで、動けなくなりましたね。いくらオーバーSの化け物である貴方といえど、魔力がない状態では、この程度ですか」

「ぐぉおお……おおッ！　き、貴様……！」

痛みのあまり、声が裏返っているサムライは、怒りを灯した瞳でフラッグを睨んだ。しかし、フラッグはまるで臆さずに、慣れた手つきで次弾の装填を終え、リニアライフルの銃口をサムライの心臓に押し当てる。フラッグから聞こえる声には、鉄のような冷たさとは別に、煮え滾る憎悪までもが見え隠れしていた。

「な、なぜだ！？　何故、私を殺そうとする！？　私たちは同じＡ－ＬＡＷＳの仲間ではないか！？」

「……いいえ？　私はただ、貴方を殺せる力を手に入れるために、Ａ－ＬＡＷＳに入隊しただけです。リンカーコアを持っているというだけで、検査や調査もなしに入れて下さり、ありがとうございます。これで、私の目的は果たせそうです！」

フラッグを纏う少女の声に、憎悪が這い出してくる。それに比例していくようにして、少女のトリガーを引く指の力が強まっていくのを、サムライは確かにその目で見た。

「皆を……そして父を殺した貴方に復讐を果たすという……目的をッ！！」

「まッ……！」

待て、と言おうとしたサムライの口から、どす黒い血が溢れだす。リニアライフルの銃口からは白い煙りが昇り、続いて2射、3射と、連続して軽いトリガーが引かれる。

「あはっははははははっはははははははははッ！！」

実弾の一発一発が、サムライの身体を散り散りにさせていく。腹部は原型を留めず、四肢もどこかへ飛んでいってしまった。サムライは唯一動かせる首を動かし、弱々しい瞳でフラッグの上空を見つめた。

「……く、くくくく」

「……？」

「くくくく……くくくくくくくくッ！」

「……何が、おかしいの？」

その視線の先で光った、相変わらず趣味の悪い金色に笑いを零しながら、サムライは血で濡れた唇を開いた。その口調は自身の死を全く恐れていない、何時もの彼女らしい、自信に満ち満ちたものであった。

「あの夜が、本当に私の運命を決定づけたのか……ロベルト然り、

お前然り。ただ、復讐する先が違うだけで、同じ本質を持つ二人と関わることになろうとは……これもまた、因果なものだ」

「……？」

「復讐の先には、何もないと、人は言う。されど、復讐をするような人間は、大抵が全てを無くした人間だ。何もなくて、当たり前……当然、なのだ。人としての喜びも、殺すことへの快楽も、未来すらも、復讐者には、訪れない……！」

「……それが、遺言ですか？」

「あぁ、遺言だ。そして、お前の後ろにいる奴への、最後の言葉にもなる」

「……なッ！？」

「サムライ、さーーん！！」

サムライの言葉に気を取られていたフラッグが後ろを振り向いた時には、すでにロベルトのアルヴァアロンがビームサーベルを抜き終えていた。アルヴァアロンの背後から噴き出る疑似ＧＮ粒子と同じ、赤橙色のサーベル。それをアルヴァアロンは何の躊躇もなく横に振り切った。人の命を奪う行為に、何も思考しないで。

「しまっ……！」

「よくも、サムライさんを！」

フラッグがプラズマソードを手に取る時間すら与えずに、アルヴァアロンのサーベルがフラッグの胴体を真っ二つにした。空色に設定された装甲の内側から、多量の鮮血が飛び散る。アルヴァアロンは金色に塗られた一対の羽をその血で赤く汚しながら、すかさず刃を返して、サムライに教わった通りにフラッグの首を刎ね、確実に止めを刺す。

「くっくっくっ……上出来だ。それぐらいの芸当ができれば、もう、

私がいなくても何とかやっていけるだろう」
「サムライさん……サムライさん……！」

無言で地に倒れ伏したフラッグを無視して、サムライに駆けよるロベルト。アルヴァアロンを解除し、辛うじて残っていた上半身を抱き上げる。偶にランニングで背負っていたサムライの体重がいつもの半分以下に感じられ、それがロベルトに否応なく死を予感させた。

「泣くな、主人（あるじびと）。お前は私が認めた、唯一の男だ。復讐の狂気に、身を焦がす、この世で最も、狂った男なのだ。そんな、男が、涙を流すなど、あっては、ならん……だろうが」
「だって、だって……！　サムライさんだって、泣いているじゃないですか！？」
「……ふん。何、あまりにも、傷が痛むのでな。少々、涙が、出てしまった、だけだ」

少々ではない涙を流していたサムライだが、彼女自身にも、なぜ涙が出るのか分からなかった。死ぬことに恐怖はない。それは確かだ。では、どうして涙が出るのだろうか？

「（……あぁ、そうか。私はきっと、主人と……ロベルトと一緒に、もっと世界を動かしたかったのか……）」

戦闘狂として恐れられながら２１年間を生きてきたサムライが、初めて抱いたかもしれない、初恋にも似た幼い、純真な気持ち。最後の最後になってそれに気が付くことができたサムライだが、時間はもう残されていなかった。

「死なないで……死なないで下さい、サムライさん！　僕は、まだ

貴方と一緒に……」

「それ以上は言うな、ロベルト。私はここまでだが、お前にはまだ先がある。私などは置いていき、先に進むがいい」

すでに目が見えなくなっていたが、ロベルトの温もりだけは感じることができた。それだけでサムライは満足だった。それは今までずっと何かに飢えていた彼女が、初めて抱いた充足でもあった。その温もりに溺れるようにして、弱々しく目を閉じていく。

「あぁ、けれど……もっと一緒に、ロベルトと世界を、動かし……」

「……サムライ、さん？」

そして、彼女――ザ・サムライは、その長いようで短い生涯に、終止符を打った。その亡骸を抱き締めながら、少年――ロベルト＝コーナーは、サムライの名を連呼し続ける。

「サムライさん……サムライさん……！　サムライ、さぁあああんッ！！」

ガンダムによって運命を狂わされ続けた少年の嘆きだけが、その場に木霊するように響き渡る。それはいつまでもいつまでも、消えることはなかった。

少年の幼馴染みであったケスティ＝アーネット。母親代わりだったコーラン＝ダンヌ。大好きだった義父のアレハンドロ・コーナー。

それに、彼の師であり、憧憬と初恋を抱いていたかもしれない女性、ザ・サムライを亡くした少年は、これを機に、さらにその身を

復讐の炎で焦がすことになる。

その姿が、ザ・サムライを殺した少女と似通っていたことは、恐らくザ・サムライにしか分からなかっただろう。少年は愚かにも少女と同じ道を歩むが如く、軍勢の歩を進めていった。

その憎悪の果てに、何があるのか……それは歩を進める少年にも、分からないことだった。しかし、そんなことは少年には関係がなかった。彼はガンダムを、皆を殺した元凶さえ殺せれば、それでよかったのだから。

復讐の先には、何もないと人は言う。けれど、今のロベルトは、正しくサムライの言葉通りに、何もかもを亡くした人間だった。もう幸せも、快楽も、未来すらも……少年には訪れない。また、復讐に身を投じた少年が報われることも、決して……ありはしないだろう。

――これにて、メメント・モリ攻防戦は、完全に終局を迎えることとなる。

――だが、物語はまだ終わらない。

――世界に革新が齎されるまで、この物語は終わりを迎えることはないのだから……

――新暦７５年３月１８日――

「……リイン、ちょっとうち、無限書庫に行ってくるで。もう知っとるかもしれへんけど、一応ユーノ君に、スクライア族のことを伝えてくるわ」
「はいです、はやてちゃん。ここはリインに任せて下さい！　……はやてちゃんも、ユーノさんに癒されて下さいね？」
「……せやな。ちょっとばかし、甘えてくるわ。それじゃ、任せたで」
「はいですぅ～！　行ってらっしゃい、はやてちゃん」

肩までの茶髪、海を思わせる青い瞳。茶色い管理局の制服を着ていた八神はやては、そう言ってリインに仕事を任せた後、一直線にユーノ・スクライアのいる無限書庫へと向かっていった。その心境にあるのは、どうしようもない気持ちであり、また、どうしようもない怒りであった。

「ヴィヴィオが死に、キャロがＭＩＡとなって、スクライア族もルシエ族も事実上消滅して……その上、今回の首謀者とも言えるＣＢの多くを取り逃がしてしもうたやって？　……はは、なんやこれ？　全く笑えんで、ホンマに……ホンマにな！」

ガンッ！　通路の壁に、はやては苛立ちのまま拳をぶつける。どこにも発散できないもどかしい怒りが彼女の中で膨れ上がっていき、

どうしても冷静になれなかった。ヴィヴィオも、キャロも、どうして死ななければならなかったのか？　どう考えても納得なんて、できるわけがない。できようはずがなかった。

「許さん……許さんで、ＣＢ！　うちらの隊員を、家族を殺したその罪……きっちりと倍返しにしてやるで！」

すでにヴィヴィオを聖王に祀り上げた聖王教会は、その重鎮の全てが刑務所入り、もしくは独房入りとなっていた。それに、聖王だけでなく、ブリング・スタビティやノア＝アンダーソンといった主戦力までも失った聖王教会には、もう管理局にも、ましてやＣＢにも対抗できるだけの力は存在していなかった。

その結果、実にスムーズに管理局との併合が進んでいった。メメント・モリ攻防戦からの２日間だけでも、ベルカ自治領が完全にミッドの領土となり、騎士団のほぼ全戦力が局員化して、それぞれの部隊に急ぎ配属されていった。

そうまでして併合を急いだ背景には、この攻防戦で確認された「ＳＳ＋クラス」、いや、ＴＲＡＮＳ－ＡＭを使用すれば、聖王すら辿りつけなった「ＳＳＳランク」にまで到達し得る『００Ｒ』の存在があったためだった。それに何とか対抗しようとする管理局側の焦りが、この併合には見え隠れしていた。

オーバーＳを同戦場で５つも相手にし、かつその全てを斬り伏せた、前代未聞の怪物。ＴＲＡＮＳ－ＡＭ状態では、高町なのはのＳ．Ｌ．Ｂすら斬り裂いて見せた『００Ｒ』は、すでに八神はやてのＳＳ＋ランクすら当て嵌まらず、それこそ、魔導師の王たるモノにしか辿りつけないとされた「魔導王」の「ＳＳＳランク」しか、彼のモノの戦力を表すことができなかった。

その『００Ｒ』の存在が脅威となり、管理局と聖王教会の併合を、この短期間の内に一気に進めさせていた。ある意味、皮肉と言える結果であった。そうして、武力によって変えられてきた世界が、また一歩、ＣＢの計画通りに進むことにもなる。

それに気付きながらも、なんら手を打つことができないはやては、本当に腹の底が煮えくり返るほどの怒りを抱えこんでいた。今回の戦闘で出なかったアニューの心からの説得がなければ、今すぐにでもＣＢの本拠地に殴りこみ、八神家総員で『００Ｒ』を打倒しようとしただろう。最も、本拠地がどこにあるのかは、まだ分からなかったが。

「……？　やけに静かやな？　受付の人もおらへんし……って、なんやと!?　嘘やろ!?」

怒りを何とか抑え込みながら無限書庫の入口にまで辿り着いたはやてだが、彼女はそこで、「休業中」と書かれた札が、無限書庫の入口に張られているのに気がついた。

「休業中」、「休業中」である。どこの部署も戦後処理で忙しい中、情報を一手に引き受ける無限書庫が、「休業中」である。これほど本当かどうかが疑わしい張札を、はやては生まれて初めて目にしたような気がした。

「さすがにありえへんやろ、これ。ここが休業したら、一体どこが代わりをするねん……って、代わりなんてどこにも務まらなかったやん！　冗談はほどほどにしいや！」

はやてが口にした言葉は尤(もっと)もであり、ユーノが拘束された時にあ

そこまで大騒ぎになったのは、ユーノの代わりと無限書庫の代わりがどこの人材でも部署にも務まらなかったためだ。だからこそ、この部署が休むことなどあってはならないはずなのに……こっそりと中を覗いてみても、本当に司書の一人も見当たらなかった。本当に「休業中」である。

「怪しい……怪し過ぎるで。まさか、何か事件が起きて……って、あれは……あの魔力光は、ユーノ君？」

怪しさのあまり、目を細めていたはやてが視線を上にやると、無数の本に囲まれた翡翠色の光を、かなり遠くの方で発見した。その色ははやての捜していた人物のものであり、そしてこの無限書庫の主でもあるユーノ・スクライアのものであった。

はやては自分の用事とこの休業の訳を聞くべく、ユーノに近づいていく。辛い事実を伝えに行かなければならないということで、はやての心境は想い人に会いに行くというのに、酷く重たかった。

「やっほー、ユーノ君。ちょっと色々と用事があるんやけど、ええかな？」

「やぁ、はやて。そろそろ来ると思ってたよ。僕もはやてに伝えなければならないことがあるんだ。でも、はやての用事から先に話してくれないかな？　僕もあとちょっとで仕事が終わるからさ」

はやての方を向いたユーノは、何時も通りの優しげな笑みを浮かべながら、はやてには理解できない文字列を、次々とブラインドタッチで処理していった。中空に浮かぶ透明なキーを高速でタッチしていく白い指は、さながらピアノを弾く指のような艶めかしい魅力を備えていた。

はやてはその指使いにやや目を奪われながらも、魔力光と同じ翡翠色をしたユーノの、どこか達観している瞳を直視して、まずはスクライア族のことについて切り出した。

「ほな、私から言わせてもらうで。……スクライア族のことなんやけど……」

「あぁ、それなら別にいいよ？　もう気にしてないからさ」

「……へ？」

かなりの勇気を使って口にした用件を、ユーノはばっさりと、「もう気にしていない」と切り捨てた。本当に気にしていないのか、はやてに向ける笑みも変わらず、そのままだった。その笑みを見たはやての心に、何かがジワリっと滲み出す。その何かはまだ……分からない。

「で、他にもまだあるの？　僕の仕事はあとちょっとで終わるけど……」

「……い、いや、もう一つあるんや。えっとな、この無限書庫のことなんやけど」

「もしかして、休業のこと？　だったら、先に説明しておくけど、無限書庫はこの3日間、もう超えちゃいけない一線を超えるぐらい働いちゃったから、皆が皆、過労死の一歩手前でね……今日はリンディさんやレティさんに掛け合って、特別に休みにしてもらったんだよ」

「……そ、そうだったんやな。そか、過労死の一歩手前、か……」

無限書庫が連日連夜、休まずに働いていたことは知っていたが、まさかそこまで司書たちが追い込まれていたとは、はやては知らなかった。ユーノの話を聞くに、どうやら復職してからの3日間は、ずっと不眠不休だったらしい。それによってかなり情報網は再構築

されたので、リンディさんもレティさんも、休むなとは口が裂けても言えなかった……のだろう。

あくまでも推測だったが。そしてはやては、自分がユーノの職場――つまり、この無限書庫に関して、あまり知らないことに、今更ながら気付いた。何故か「手遅れ」という言葉を思い出しながらではあったが。

「それで、はやての用件は終わり？　こっちの仕事は今終わったから、僕の用件を切り出したいんだけど……いいかな？」

「……あ、うん。ええで。ユーノ君の用件って、何なの？」

素朴さを感じさせる稲穂色の長髪。１７０を軽く超える長身に、いつものフレームがないメガネ。メガネのある顔には童顔と女顔が同居しており、そのパーツはこれでもかと言うほど綺麗に整っている。

いつもの彼、いつものユーノ・スクライア。けれど、今のはやてには何か漠然とした違和感があった。あまりにも漠然としていて全く正体を掴めないでいるが、今目の前にいるユーノは本当に「ユーノ・スクライア」なのかと、何故か、疑ってしまう。

『……リイン、ちょっと仕事を抜けだして、無限書庫に来て欲しいんやけど……』

『……？　どうしたんですか、はやてちゃん？　ユーノさんがいなかったんですか？』

『いや、ちょっと……ユーノ君の様子がおかしいんよ。何がおかしいのかは分からへんけど、とにかく、贋物の可能性もあるから、念の為、な』

『……分かりました。リインは今すぐそちらに向かいます！　仕事

はアギトに任せておきますですぅ！』
『んだとばっってんチビ！？　おいちょっと待ってっておま……』

念には念をいれて、リインに来てもらうことにしたはやては、ユーノが急ににっこりと笑ったので、少々、面喰らってしまった。

「はやて、念話をするときはね？　もっと複雑な暗号でセキュリティを構築した方がいいよ？　少なくとも、念話専門の研究者なら、今ぐらいの念話を傍受することなんて簡単にできるんだから」
「……聞いとったんかい、今の念話を。だったら、ユーノ君に一言言っとくで。……乙女のプライバシーを何やと思っておるんや、ユーノ君は！？」
「それは謝るよ。それにしても、僕が贋物、ね。まさか僕の顔を見つめてそんなことを思っていたなんて、恋人としてショックだよ、はやて」
「そ、それは悪いと思っとるけど……」

まるで雲を掴むような話。のらりくらりと、論点がずれていく。そんな中、ユーノは急に表情を引き締めると、はやての方に、大量の文字列が画像と共に並んでいる資料……が、映っているディスプレイを展開した。そこにははやても知っている有名な資産家のネッツ家や王家、その他にも、大中小の資産家、及び無数ともいえる投資家の資産の詳細が映し出されていた。

「これが、どうかしたん？」

睨めっこをするように資料を見ていたはやては、真面目な顔でディスプレイを操作するユーノにこれがどうしたのかと聞いてみた。ユーノは何も言わずに、ただキーを打っている。ユーノが何も言わないのでじっと資料を見つめるしかないはやてであったが、ここに

映しだされた資産の合計を見て、思わず目を飛び出しかけた。

ユーノが詳細に映した資産の総額は、それこそ未だかつて見たことのない天文学的数字であったからだ。声が出そうになるのを必死に抑える。

「あと、これも……だね」

声を抑え込みながら、次に映し出されたのは、様々な私有地――多数の金持ちによって買われた、数多の私有地についてのデータであった。ミッドチルダ、管理世界、管理外世界と、まるで蟻の巣のように点在する私有地の数々を、ユーノは点々と指差しながら、はやてに淡々と、事実だけを言うように、

「知ってた？　これ、全部僕のなんだよ、はやて」

と、いつもと変わらぬ笑み――変わらぬ声で、言った。

「……は？」

はやての間の抜けた声だけが、二人の間に響く。茫然と口を開けるはやてを、ユーノはやはり、どこか違和感を感じる笑みで、静かに見つめていた……

……三辺を真っ白な金属製の壁で囲まれた、生活感の欠片もない、殺風景な小部屋。ここが独房室だということを考慮すれば、至って健全な部屋だと言えるこの部屋で、囚人服を着せられたラルゴ・キ

ールは、ベッドに腰掛けながら座っていた。その顔はかなりやつれており、疲労が溜まっているように見えた。

「……ない、……ます。扉まで……結構……」

「……話し声が聞こえるな。ミゼットか、それともレオーネか……」

正面にある唯一の扉を見据えながら、一人で呟く。扉の近くで話しているのか、ちまちまと話す内容が耳に入ってくる。だが、話し声は、一人は看守のものだったが、もう一人は随分と若そうな女性の声であった。

「……聞こえますか、ラルゴ・キール元帥？」

「元・元帥だ。……私に何か用かね？」

「私は無限書庫司書長の第一秘書、ブック・ロジックと言います。実は、キール元帥のお耳に入れたい情報がありまして……司書長のことなのですが」

（……なんだと？）

随分と若い女の声だと思っていたが、まさかあのスクライア司書長の秘書だったとは……！　キールはやや驚きながらも扉に近づき、少女のようにも聞こえる若い女の声に、耳の神経を集中させた。

それが、彼の命運を分けた。

「……ブック・ロジックと言ったな。それが仮に本当だとして、一体どんな情報なのだ？」

「はい、それは……」

ガシャンッ！　キールの耳に、カートリッジをロードするような音が聞こえてきた。と同時に、彼は目の前の少女と思しき人物に、

ＡＡＡ＋クラスの魔力を感じ取る……が、もう間に合わない。

「……私たちの人形として、その役割を全うして下さった貴方に、是非ともお礼をしてあげなさいという、マスターの有り難いお言葉です」

「なっ……！」

「ルシフェリオン、ブラストファイアー」

『ブラストファイアー』

ドゴォオオオッ！！

キールの視界が、赤に近い朱色に呑み込まれていく。扉を融解させて現れた焔の砲撃がキールの身体を骨まで灼くが、その熱さを感じることもないまま、彼はこの世から……抹消されてしまった。

「呆気ないものです。もっと歯ごたえのある相手を要求します」

サイレンが甲高く鳴り響く中。焼け爛れた合金製の扉を跨いで現れた9歳ほどの少女は、付けていた黒のウィッグを投げ捨て、瞳のカラーコンタクトを外し、本来の茶髪と水色の瞳を露わにした。感情を感じさせない無表情を張り付けた顔には、キールをあまりにも計画通りに殺せたことへの不満が覗いていた。

「こちらのラルゴ・キールの件は終わりました。そちらの首尾はどうですか、レヴィ、我が王？」

『こっちのミゼット何とかは、カッコ良くあんさつできたよ、シュテル！　これでセファーさんに褒めてもらえるかなぁ～？』

『誰に物を言っているつもりだ、シュテルよ？　老いぼれたレオーネ・フィルスなど、我が指先だけで始末できたわ』

「そうですか。どうやら戦果は上々のようですね。では、マスター

も呼んでいるようですし、あちらでお会いしましょう」

念話を切ったシュテルと呼ばれた少女は、跨いだ先で炭化したキールの死体をしっかりと確認してから、白い魔法陣の輝きに包まれていった。その輝きに身を委ねながら、彼女は潤いのある、薄い唇を開く。

「あぁ、それと……私の名前はブック・ロジックなどではありません」

外見にそぐわない、冷淡な表情のまま、

「私は「天使の魔導書（セファー・ラジエル）」の「マテリアルズ」、その理を司る、シュテル・ザ・デストラクターと言います。以後、お間違えのないよう……」

ブック――否、シュテルは、キールを殺した独房室から、転送されていった。

はやては、意味が分からなかった。ユーノが口にした言葉の意味が、彼女には全く持って理解できなかった。それがおかしかったのか、ユーノは笑いを堪える仕草をしながら、はやてに説明をする。自身の、本当の姿を。

「君の知っているアーカイブとラヴクラフトを表舞台で使って、僕はこの半年……いや、４年という歳月の中で、これだけの富と土地

を掻き集めたんだ。これから起こるであろう、最終戦争を見越してね」

「な、何を言っておるんや、ユーノ君？　なぁ、ホンマに何を言って……」

「はやては知らなかっただろうけど、僕は４年前に起こったＣＢとの戦争に駆り出されていたんだよ？　そこで僕は、この無限書庫を通して、ヴェーダとイオリア・シュヘンベルグに出会った。僕は彼の理想に興味を示し、今までずっと、彼の支援をし続けてきた」

はやては、信じたくなかった。ここまで言われれば、もう、何を言わずとも分かる。分かってしまう。

「疑問に思わなかった？　どうしてあれだけの事を仕出かしたＣＢが、管理局の捜索を４年間もかわし切れたのか。どうして、ガンダムのコアも回収できていなかったのに、壊滅したと決めつけたのか。レオーネ・フィルスはどうやらそれに勘付いていたみたいだけど、はやては？」

「……ま、まさか」

「他にもあるよね？　ガンダムの情報が一切見つかっていないことや、無限書庫を嗅ぎ回っていた……確か、ギンガ・ナカジマさんだったかな？　彼女が本局の中で殺されたことを……はやては、疑問に思わなかったの？」

「そ、そんな……！」

「そう。何もかもが、僕の仕業さ。無限書庫を使えば、その程度のことは誰にも知られずに、秘密裏にできてしまうんだよ、はやて」

目の前にいる彼が、自身の恋人であるユーノ・スクライアが……すでに、自分達の知る彼ではないことを。

「じゃ、じゃあ、あの騒動は……ラルゴ・キールの件は……！」

「あれも、僕の自作自演さ。アーカイブは僕にとって都合のいい人事を、ラヴクラフトは資金集めと土地集めのための表の顔として利用してきた。そして、ラルゴ・キールもまた、この一時ばかり時間を稼ぐために、囮になってもらったのさ」
「おと、り……？」
「まぁ、それだけじゃなくて、伝説の三提督の中で唯一、未だにオーバーS級の実力を保っている彼を、無抵抗で殺すための幕劇でもあったんだけど……どうやら、それも終わったようだね」
「……え？」
「今戻りました、マスター」
「今戻ったよ、マスター！」
「今戻ったぞ、主人（しゅじん）」

ユーノの後ろに現れた白い魔法陣。その輝きに目をつぶったはやては、その中から4人の人影が現れたのを見た。そしてその内の三人は……かつての自分達と同じ姿形をしていた。

「案外、速かったね。ちゃんと仕事はしてきたのかい、皆？」
「勿論です。もっとも、私は二人の仕事を確認していませんが」
「ムッ！　僕だってちゃんとしたさ！　ねぇー、我が王？」
「我をあまり、怒らせないほうがいいぞ、主人。寧ろ、あの程度の輩を殺すのに、どうして主人があれだけの策を用いたのか、不思議でならん」
「はは。ま、念の為と思ってくれればいいよ、ディアーチェ。僕としては、君たちの安全を確保してから始末をつけたかったからね」

少し前にキールを殺した、10年前の高町なのはにそっくりな「理」のマテリアル、シュテル・ザ・デストラクター。

度々戦場で確認される、フェイト・T・ハラオウンに似た「力」

のマテリアル、レヴィ・ザ・スラッシャー。

それに、自身の幼き頃に瓜二つの、「王」を司りしマテリアル、ロード・ディアーチェ。

その三人と、そしてもう一人……

「吾輩（わがはい）としては、ロードの意向に従うのみ。ロードの意思は、吾輩の意思。吾輩の意思は、ロードの意思と共にあり」

全身を白尽くめで固めた、仮面を被りし最古のユニゾンデバイス……「天使の魔導書（セファー・ラジエル）」の管制人格「セファー」。それらとユーノを見たはやては、此処でようやく彼の正体を知るに至った。

「そうか……そうやったんやな。アーカイブも、ラヴクラフトも、裏では皆、ユーノ君に操られておったんやな」

本当のサードエージェントたる、彼の正体を。

「――いや、ラジエルッ！！」

「――そうだよ、はやて」

「僕が、ラジエルだったのさ」

第７７話　裏切（後書き）

名もなきオリキャラに、主役級のオーバーＳを殺させたのは、この作品が初めてなのでは？

幕間―10（前書き）

【悪を憎んで悪を為すなら、後に残るのも悪だけだ。そこから芽吹いた怒りと憎しみが、また新たな戦いを呼ぶだろう】

――P3様から、【Fate／zero】のセイバーより

幕間―10

――新暦76年3月17日――

若草色の髪を乱しながら、通路を大股で歩いたのはリボンズ・アルマークだった。彼は不機嫌な表情を崩さぬまま、ラジエルに指示された場所に急行していた。そして指示された部屋につくと、部屋に続くドアをスライドさせ、中に入った。直後、彼は驚きを伴う叫びを発した。

「ば、馬鹿な……なぜ貴様がここに!?　ユーノ・スクライア!」

「やぁ、現実世界では初めましてだね、リボンズ・アルマーク」

スライドしたドアの向こう側、部屋の中央に置かれた革張りの椅子に座っていた人物は、時空管理局の無限書庫司書長、ユーノ・スクライアその人であった。反射的に腰の銃を引き抜き、照準をユーノの胸に合わせるリボンズ。銃を向けられたユーノは、それでも笑みを湛えたまま、リボンズに気軽に話しかけた。

「あはは……気持ちは分かるよ?　けど、さすがに銃を向けるのはやり過ぎだと思うんだ」

「僕は何故かと聞いているんだ、ユーノ・スクライア!　どうしてラグランジュ1に、管理局の貴様が……!」

トリガーに指をかける。リボンズは自分でも分かるほど取り乱しながら、ユーノを殺気立った目で見つめた。ユーノはそのリボンズの様子を、やはりどこか達観した瞳で見透かすように眺めながら、何の気負いもなく口を開く。

「何故かって？　それは、全知のラジエルが入れない場所なんて、この世の何処にも存在しないからだよ。それに、ラジエルはＣＢのエージェント、イオリア・シュヘンベルグの理想に共感せしモノ。なのに、どうしてここに入れないのさ？」

「……なん、だって？　貴様が、あのラジエルだって？」

混乱する頭で、リボンズはもう一度、復唱した。

「そう。僕がラジエルだったんだよ。最強のイノベイド、リボンズ・アルマーク」

それを後押しするように、ユーノが言葉を付けくわえる。リボンズは何か悪い夢でも見たようにふらつきながら、それでも銃を構えることを止めなかった。

「証拠は……何か、あるのかい？」

「君に対する証拠というと……これかな？」

リボンズの言葉に応えるようにして、ユーノが目の前のテーブルに、一つの円錐状の物体――疑似太陽炉を無造作に置いた。疑似太陽炉の側面にはＣＢ－００１．５　１．５ＧＵＮＤＡＭの文字が彫られており、どう見ても本物の……ＧＮデバイスであった。

「これが、君の疑惑に対する僕の証拠だよ。１ガンダムを基に、更なる強化を加えたガンダム。それがこの……１．５（アイズ）ガンダムだ」

「これが……僕の新しいガンダム？」

『Ｙｅｓ，Ｌｉｃｅｎｓｅｒ。私の名前は１．５。短い間でしょうが、よろしくお願いします』

女性を思わせる、オクターブが高いソプラノの声が、目の前の疑

似太陽炉から発せられた。だがリボンズはユーノに対する警戒を解かずに、銃を下ろさなかった。見た目だけ似せたモノかもしれないという疑念が、まだ晴れていなかったのだ。その用心深さに感心しながら、ユーノは疑似太陽炉をリボンズに投げて寄こした。そして目で「変身してみてよ」と伝える。

「……セットアップ」

『セットアップ、レディ』

言葉に反応して、リボンズの体が赤橙色の粒子に包まれる。身体がGN粒子に分解されていき、疑似GNドライヴに内蔵されていくのを無くなった肌で感じた。力が全身から溢れ出し、『神』にでもなったような全能感が、彼の感覚を支配する。

「（これは……この感覚は、まさしくガンダムだね）」

薄らとした微笑みをデータで構築された顔に浮かべ、モニター越しにガンダムとなった自分を見つめてみる。白と青紫を基調とする色彩と機体そのものは変わっていなかったが、バックパックには一対の翼のようなモノが付け加えられていた。

「……ふぅん？」

クルクルとそのバインダーを動かしながら、リボンズはビームライフルの銃口をようやく下げることにした。ユーノは微笑みを浮かべたまま、先程から1ミリも動いていない。その大胆不敵な佇まいが、彼をラジエルだと証明する、何よりの証拠のようにリボンズには思えた。

「……認めるよ。君がラジエルだってことはね」

「それは良かった。これで認められなかったどうしようかと、肝を冷やしたよ」
「そんな嘘はどうでもいいよ。それで？　君が正体を現したんだ、何か途轍もないことが起きるんじゃないのかい？」
「正解」
　にっこりと、三日月に開くユーノの口。これほど作り物めいた笑みを、リボンズは未だかつて見たことがなかった。友好の印だとでもいうように、手を差し伸べたユーノだが、その手をリボンズは掴むことができなかった。
「これから次元世界は、大きく動く。良くも悪くも、ＣＢを中心にしてね」
「ふっ、君が中心の間違いじゃないのかい？」
「それも一理あるけど、何よりも大きなうねりとなるのは……『世界に革新を齎すモノ』だ。あれが引き起こす嵐と比べれば、これから僕が起こす台風なんて、些細なものに過ぎないよ」
「……」
　ユーノは椅子を回転させながら喋っていた。リボンズはガンダムになったまま、真剣にその話を聞いていた。どうしてなのかは、きっと本人も分かっていないだろう。それがユーノの話術なのか、はたまた共鳴できるものがあったからなのか……それは彼自身にも分からぬことであった。
「だから、僕は力が欲しい。荒れ狂う嵐すら乗り切れるだけの力が。その一環として、僕はガンダムを設計しているんだよ、リボンズ・アルマーク」
「……それは、まさか……」
「そう、そのまさかさ。僕はアレを、『世界に革新を齎すモノ』に

並ぶモノを創りたい。『世界を救世に導くモノ』、即ち――『神』を、『救世主』を！　この狂った世界に顕現させたいんだ！！」

美しい悪魔から囁かれる、リボンズにとって、甘言のような言葉の数々。『神』を創るといったユーノの顔は、狂気に支配された人間のものにしか見えなかった。しかし、それはリボンズとて同じこと。ガンダム、つまりは『神』になることこそが、彼の至上の望みでもあるのだから。

「……ふ、ふふ。これを義父は、イオリアは知っているのかい？」
「さすがに知らせているよ？　まぁ好きにしていいと言われたから、好きに弄っているけど……」

狂気に染まってもなお美しい悪魔たちが笑い合う。その光景は、人が足を踏み入れてはいけない領域を土足で踏みにじったような、そんな禁忌の匂いを感じさせた。

「そう言えば、どうして1ガンダムに1．5ガンダムのデータをアップデートしなかったんだい？　そうした方がとても効率的なのに」
「ツインドライヴシステムのためだよ。波長の合う疑似太陽炉はそうそう見つからないから、最初に確保しておいた波長の合う2基に、それぞれのガンダムをインストールしてたんだ」
「成程ね……疑問は解けたよ。それじゃ、僕はちょっとリジェネを殺しにいかなければならないから、また会う時までには完成の目処をつけておいて欲しいかな？」
「その時までには、何とかしておくよ。無事、リジェネを殺せるといいね」
「誰に物を言っているんだい？　最強は最も強いからこそ最強なんだ。そんな僕が彼如きのガンダムに遅れを取るなんて、もう二度とないことさ」

互いが爽やかな、如何にも友好的な笑顔を浮かべながら別れていく。目だけは全く笑っていなかったが、それでもお互いの間に関係が結ばれたことは傍目にも明らかだった。

信用や信頼とは違う、そんな曖昧なものではない、確かな絆――利害の一致という絆。ユーノ・スクライアとリボンズ・アルマークはその強固な絆で結ばれた。

――新暦７５年３月１９日――

ソレスタルビーイングの豪華な家具に囲まれながら、ユーノとイオリア・シュヘンベルグは紅茶を飲んでいた。そして互いの唇が潤ったのを確認してから、話を切り出す。

「まず、「魔女の宴」と「機龍」は完成間近です。ヴェーダと無限書庫による次元世界一斉ハッキングの準備も完了しました。残るは、「蝶」の輸送だけです」

ユーノは紅茶に目線を落としつつ言う。それに対し、イオリアはユーノ顔面を見ながら口を開く。

「こちらも、ヘビーウェポンが完成に近づきつつある。少々、『００Ｒ』に不安定要素が混じっておるが、戦闘に支障はない」

対談するように向かい合う2人。その二人を視界に入れられる所

に浮かぶモニターから、男の声が発せられた。

『こちらも、予定通りメメント・モリ2号機を完成させた。それと、『世界を救世に導くモノ』の基本設計とガジェットたちの量産も、今のところ順調にいっている』

モニターの声の持ち主は、ジェイル・スカリエッティであった。スカリエッティはウーノとトーレと一緒に、この会談に臨んでいた。かくいうユーノも、後ろにセファーとシュテルを控えさせていた。イオリアもまた同じように、ティエリア・アーデと刹那・F・セイエイをここに連れてきている。

「「蝶」は第97管理外世界、その「日本」の海鳴という場所に輸送します。理由は……まぁ、過去との決別とでも思ってくれればいいです」

『ほぅ、過去との決別かね？　すでに過去の仲間たちとも決別したと思っていたが、どうやらまだ未練があるようだね？』

「ですから、ここで断ち切っておきたいんですよ。彼女たちとの絆をね」

モニターで笑うスカリエッティに冷たく微笑み返しながら、ユーノは酷く感情の抜け落ちた声でそう言った。イオリアはその言葉を脳内に止めておきながら、『計画』のプランを映した画面を2人に見せる。

「何はともあれ、これで管理局はＡ－ＬＡＷＳと協力せざるを得なくなる……「統一」は間近だ。あとはこの「統一」された戦力に抗えるだけの武力を整えるのみ……」

聖王教会を吸収した管理局。そして管理外世界をまとめるＡ－Ｌ

ＡＷＳ。この２つを合併させることが、サードフェイズのラストとしてプランには書かれてあった。これで管理世界と管理外世界は真なる意味で統一される。あとは「抑止」の存在として、ＣＢが確固たる組織として存続していくのみ。

「その為にも、まずは裏世界を私たちのコントロール下に置く。無限書庫とヴェーダを用いれば容易いことだ。その間にＤｒ．はＧＮキャノン？とガガキャノン、それにガジェット群を量産しておく」

『了解していますとも、Ｍｒ．シュヘンベルグ』

イオリアの指示に素直に頷くスカリエッティ。イオリアは杖を握りしめると、ユーノにも同様に指示を下した。

「スクライアは私と一緒に動く。いいな？」

「はい。分かっていますよ、イオリアさん」

くすくすと笑いを零す、掴みどころのないユーノの態度に、イオリアの後ろにいた刹那は鋭い視線を浴びせた。その視線にははっきりとした不信感が滲みでていたが、ユーノの笑みは変わらない。変わらぬまま、笑い続ける。

「……刹那、気持ちは分かるが落ち着け。そうでないと、コイツのペースに呑まれることになるぞ」

「……あぁ」

ティエリアに制止され、刹那は視線をずらした。代わりに、明らかな敵対心を含んだ視線を、シュテルから向けられる。

「シュテル、彼は仲間だよ？　疑うのはよくないと、僕は思うんだ」

「……はい、マスター」

ユーノに宥められたシュテルは、刹那を警戒してユーノの前に出していた身体を、一歩分、後ろに下げた。再び正面から相対する格好となったイオリアとユーノだが、彼らはそれ以上の会話をせずに、各々別々に部屋から出ていき、そのまま自分のするべき仕事へと戻っていった。

ユーノはイオリアたちと一緒に会議をしていた部屋から出た後、彼に与えられた研究室の所にまで歩いていった。研究室に着くまでに、彼はシュテルから散々刹那の態度についての愚痴を聞かされていたが、セファーを生贄に捧げることで、その難を逃れていた。セファーは胃がある部位に手を当てていたが、シュテルは愚痴を吐きまくったせいか、随分すっきりとした表情になっていた。

「さて……それじゃあ、最後の仕上げといきますか、「機龍」。それに……キャロ・ル・ルシエ」

研究室のドアを開け、三人は中に入る。中では、全身に銀色の装甲を取り付けた、１５メートルほどの竜らしきものが、２本の足で床に直立していた。その傍らには、緑色の培養液で中を満たしたカプセルがあり、カプセルの内部では、裸身の少女が一人、眠っているように目を瞑っていた。

少女の桃色の髪は水中の中で広がるように浮かんでおり、それが幻想的な光と相まって、少女の存在を希薄なものにしていた。しかし、少女――キャロ・ル・ルシエを雁字搦(がんじがら)めに拘束するような、身

体の至るところを奔る赤いラインが、少女の存在をその空間に縛り付けているように見えた。

「ふ～ん……スカリエッティの機人を参考にしてみたけど、案外うまくいったね。「機龍」とのシンクロ率がばっちりだ。それに、「機龍」を制御する電脳も、中々に良い数値を出してくれるね」

カプセルの下部にあるモニターを覗きこんだユーノは、自身の研究の成果に満足したのか、先程まで浮かべた笑みとはまた異なる質の笑みを浮かべた。セファーとシュテルはその後ろ姿に何も言わない。寧ろ、ロードにしてマスターたる彼が充足している様子に、彼らもまた満足感を感じていた。

「これでルーテシアとエリオ、それにフェイトの動きを止められる。なのははリボンズに任せるとして……これで僕達とはやて達が戦えるようになるはずだ」

「ヴォルケンリッターは私たちマテリアルズが」

「吾輩はロードと共に、夜天の書と」

ゴボゴボと、口に当てられた呼吸器から気泡を出すキャロ。気泡が緑色の光を乱反射させ、ユーノたちの顔に光陰を作る。

「はやて……決着を、つけるよ」

光陰のできた顔が、悲壮で歪められた。その一言がユーノにとってどれだけ重い言葉なのか……それは両端にいるセファーとシュテルにも分からなかった。

ユーノはメガネをかけたまま、「機龍」と巫女を下から見上げた。これから自分がすることは、きっと理解されないし、赦されない。

それを分かっていてもなお……ユーノは前に進むことを決意したのであった。

――新暦７６年３月１７日――

第九次元航行艦隊。この艦隊は「鬼札」クロノ・ハラオウンが艦長を務めるＸＶ級次元航行艦「クラウディア」を旗艦とする艦隊であった。しかし、オーバーＳを特別に２人も抱える彼らは、ここ数ヶ月ほどはずっと、無限書庫で発見された、第１０管理世界に埋まっているという大量破壊兵器の発掘に従事していた。

そして、その成果が今、彼らの目の前で、彼らを圧倒するようにうず高く聳(そび)えていた。

「……大きいな。これをどうやって本局まで運べばいいんだ？　クラウディアの船体下部にでも括りつけるしかない……な」

いつもの真っ黒な服装で決めたクロノは、自分達が発掘したモノの巨大さに呆れていた。同時に、これから繰り出される砲撃の威力を推定し、背筋を凍らせる。

クロノたちが発掘したモノは、全長が優に２００メートルを超えており、細長い筒のような形状でありながら、その先端の口径とも言うべき箇所は、クロノの身長より大きかった。全体の白い装甲板は、十数年の月日を感じさせぬ、新品同様の輝きを放ち、細部に施されている技術は、今でも最先端をゆく技術がふんだんに注ぎ込まれていた。

「これが、「衛星砲」……第１０管理世界に一年戦争を齎した、大量破壊兵器か」

「……はっ」

「確かに、スペック上では中央支局すら一撃で破壊可能なこれが存在すれば、管理局も無視することはできんな」

クロノの部下であるクラウン＝ガバレート、一年戦争の当事者である彼を傍らに置きながら、クロノは「衛星砲」を隅から隅まで見て回った。２００メートルを超える巨体なので、かなり時間がかかってしまったが、今のクロノは数ヶ月にも及ぶ発掘任務から解放された喜びで胸が一杯だった。

「……」

「……」

クラウンは何か思う所があるのか、押し黙ったまま、口を開こうとしない。クロノは無理矢理聞きだすのも嫌だったので、特になにも問わずに、クラウディアに戻ろうとした。

「……艦長」

「ん？　なんだクラウン？」

「管理局は本当に……「衛星砲」を使用するのでありますか？」

「……さあな」

転送される僅か1分ほどの間。その間にクラウンが発した問いに、クロノは答えることができなかった。しかし、クロノは「衛星砲」が使われるであろうことを、ほぼ確信していた。

アルカンシェルが使えない今、その代わりはどちらにしろ必要となる。メメント・モリだって、この「衛星砲」があれば、攻防戦であれだけの被害を出すこともなく、遠くから一撃で撃破できたはずだ。そういった「合理的な判断」も含めて、管理局はこの「衛星砲」の使用を決断するだろう。

そして、その引き金を引くのは、恐らく自分自身。つまり、クロノになるだろう。「衛星砲」――正式名称「ＳＡＴＥＬＬＩＴＥ ＣＡＮＯＮ」――は、一年戦争を引き起こした悪夢の兵器。そのトリガーを引くことには、並大抵でない覚悟と責任がいる。

できれば、引かないですめばいい……そう思うクロノであったが、彼は同時に決意もしていた。来るべき時が来れば、そのトリガーを引くことを、彼はこの時にはすでに決心していたのであった。

――新暦７６年３月１９日――

紫の髪をたなびかせ、同じ紫色のワンピースを着たルーテシアは、牢獄の扉が開く音で目を覚ました。すかさず戦闘態勢を取ろうとしたが、両手に嵌められた手錠により魔法を封じられていることを思い出すと、すぐに抵抗することを諦め、目の前に来た人物に焦点を合わせる。

「……あなたは？」

「初めまして、ルーテシアさん。私の名前はアニュー・リターナーと言います」

名前を聞くと、笑顔で答えられた。予想外の回答にルーテシアは固まってしまった。普通、囚人に名前を聞かれて素直に応える人物がいるだろうか？　そう疑問に思っていると、アニューと名乗った人物の背後から、小さな人影が飛び出してきた。

「ルールー！　悪いようにされてなかったか！？」

「……アギト？」

その空飛ぶ小人は、かつてルーテシアの仲間であったユニゾンデバイス、アギトであった。燃えるような赤い髪が乱れるのも気にせず、ルーテシアに突っ込むアギト。ルーテシアはその体を抱き止めつつ、視線をもう一度、アニューに戻す。

「……シグナム、それにチンクも」

「ほぅ……私の名前を知っていたか。なら、挨拶はいるまい」

「何言ってんだシグナム！　私のロードなら、きちんとルールーに挨拶しろよ！」

「お久しぶりです、ルーテシアお嬢様。久しぶりの再会で悪いのですか……彼女からの話を聞いて下さい」

アニューの後ろにはＢ．Ｊを纏ったシグナムとチンクがいた。恐らくオーバーＳのルーテシアを警戒してのことだろう。しかし、チンクの顔には親しみを垣間見ることができた。シグナムにしても、それほど警戒をしているようには見えない。

「それでは、ルーテシアさん。これは管理局からの命令だと思って聞いて下さい」

「……管理局からの、命令？　どうして私に……」

「それは、後で説明致します。……では」

シグナム、アギト、チンク。この三人のことは知っていたが、ルーテシアはアニューのことは知らなかった。「Ｊ．Ｓ事件」からずっと牢獄に収監されていたルーテシアは、ＣＢが世界で暴れ回っていることを知らないでいた。……無論、昨日の出来事すらも、彼女は知らない。

「時空管理局はルーテシアさんを嘱託魔導師として迎え入れます。ですので、ルーテシアさんは機動六課の一員として、ＣＢとの戦闘に参加して下さい」

「……え？」

だから、彼女は……友達になると言ってくれたキャロ・ル・ルシエがＭＩＡになったことも、勿論知らなかった。

幕間―１０（後書き）

これにて7．は終幕、次からは8．となります。

8．も7．と同じかそれ以上のハートフル（）となる予定ですので、引き返すのなら今の内です。

……ちなみに、スカリエッティ、スクライア、シュヘンベルグは、頭文字が全部Sだということに、作者は今更ながら気が付きました。オーバーSといい、Sには何か特別な意味があるのでしょうか？

次回の更新予定日：現実世界が忙しいため、一ヶ月ほど休載するかもしれません。早ければ１０月以内、遅くても１１月以内には更新する予定ですが、長い目で見てもらえると助かります。

第７８話　瓦解する世界（前書き）

新たな始まり、新たな終わり……

ユーノ・スクライアの「裏切」から大きく動く世界は、一体何を求めるのか。

……それとも、何も求めずに破滅を選ぶのか。

『世界に革新を齎すモノ』

「８．果ての世界」

――開幕。

【長い戦いは緩やかな腐敗を招きます。人間にも組織にも。

――あるいは、皆が無自覚に彼に頼っていたことが、そういう腐敗を集中させてしまったのかもしれません。

『怠惰』の大罪とは、そんな思考停止による腐敗のことでしょう】

――鴨川秘様から、『イスカリオテ』のカルロ・クレメンティより

第７８話　瓦解する世界

――新暦７６年４月１日――

４月１日――その日、次元世界は大いに揺れた。そして、世界は知った。革新の時が来たのだと。

あの日――３月２０日に始まった、ＣＢによる次元世界一斉ハック。ヴェーダと無限書庫が共同で仕掛けたそれは、時空管理局本局のマザーコンピュータ「Ａ．Ｌ．Ｉ．Ｃ．Ｅ」、Ａ－ＬＡＷＳの新世代量子演算処理システム「Ｍａｒｋ－Ｘ－Ｚ」、それに次元世界中のコンピュータも相手にしながら、その全てを退け、ありとあらゆるシステムを裏から掌握することに成功した。

片や存在しない筈の、幾世代も先を行く量子演算処理システム。片や次元世界中から知識を蒐集する、最古のロストロギア級デバイス。世界で最高の性能を持つと断言できるその２つが協力すれば、次元世界がそれらに対抗できる術など、端から存在しなかったのだ。

これにより、次元世界の裏世界――電子世界は、完全にＣＢの物となった。ありとあらゆる情報がＣＢに集まり、それらの全てがユーノ・スクライアによって処理された。処理された情報を用いて、ヴェーダが戦略を、スメラギ・李・ノリエガが戦術を決め、ＣＢはより効率的な武力介入を行う。

最早彼の組織の跳梁跋扈（ちょうりょうばっこ）を阻むことは、どの組織にも――無論、管理局でさえも――不可能であった。最高のソフトと最強のハード――『００Ｒ』――を備えたＣＢは、すでに管理局をも超える「武力」を保有していたのだから。

それを証明するようかのように……それは起きた。時空管理局第一中央支局・本局防衛用機動時空要塞「ウルスラ」が陥落するという緊急事態が、その日――４月１日に、起きるべくして起きてしまった。

この「ウルスラ」は、かつてＣＢに落とされた第三中央支局「ルイエビト」をも軽く上回る戦力が割り振れられているはずだった。何故なら、「ウルスラ」は本局へと続く唯一の次元航路を護る、門番の役割も担っていたからだ。

配備された艦艇の数は百を優に超え、さらには常時、６人のオーバーＳを配備させている、「絶対に落とされてはならない」時空要塞。それが「ウルスラ」だった。ここが落とされれば本局への航路ががら空きとなり、本局への侵攻を易々と許すことになる。

それを阻止するための、だからこその「絶対不落」。だが、その「絶対不落」は今や崩壊の憂き目に遭い、「落ちるはずがない」という常識を覆されていた。他ならぬ悪鬼を束ねる最悪のテロ組織……「ＣＢ」によって。

この管理局の存亡に関わる緊急事態を受け、管理局は提督以上の権力を持つ者たち全員を、早々に本局へと招集させた。そして、常には考えられない早さで臨時会議を開き、この憂慮すべき危険事態に対しての対策が、最高評議会がいない中で話し合われた。

最高評議会は、その任に就いていた伝説の三提督が、３月１８日に「裏切」ったユーノ・スクライアの策謀に嵌り、三人が三人とも、「天使の魔導書」の「マテリアルズ」に暗殺されてしまっていた。それに気付いた時には、すでにユーノと「マテリアルズ」、それと

セファーは、本局から転送魔法で逃げ出していた。……無限書庫にリインとユニゾンした八神はやてだけを残して。

そこで何が起きたのかは……まだ、はやての口から語られていない。彼女は今も、この世界を現実だと直視していなかった。ユーノが彼女を捨てたこの世界を……はやては今も、認めることができないでいた。

――本局に続く次元航路が丸空きという事実から、臨時会議の結論は、「CBが本局へ直接侵攻してくる」ということでまとまった。中には「これは誘導で、奴らは他にも動きを見せるはずだ！」や、「本局に戦力を集めさせるのが目的なのではないでしょうか？」といったクロノ・ハラオウン提督とリンディ・ハラオウン総務統括官の極少数意見もあったが、大勢はこの意見に賛同し、管理局の主要戦力を本局に招集することで可決された。

その時、クロノは母親であるリンディに対し、

「アイツが……ユーノが向こうにいるんですよ！？　それを分かっているのでしょうか、彼らは！？　こんな単純な戦略で、アイツがこの本局に攻め込むだなんて、僕にはどうしても……考えられないです！」

と、悔しそうに洩らしていた。だが、決定は覆らず、管理局は各地に配備していた戦力の大半を本局に招集させ始めた。管理世界、次元空間、そして……管理外世界。ありとあらゆる場所に配備されていた大戦力が、本局を中心にして、続々と集まっていく。

それこそが、クロノやリンディの言う通り、彼らCBの思惑通りだとは知らずに……。

ちなみに、この決定がなされた裏には、ユーノ……いや、ラジエルの影があった。ユーノが裏から操っていたアーカイブとラヴクラフトにより、管理局の上層部は殆ど機能できないほど掻き乱されていた。

アーカイヴの人事権とラヴクラフトの資金（裏金や献金など）、その2つを用いたユーノの撹乱は、この場にて最大の効果を発揮していた。人事権で無能を昇格させ、資金でもって有能な上層部とのパイプを作る。そして裏切を行うと同時にそのパイプを露呈させ、有能な者達を一斉に検挙させる……

検挙された上層部の局員の数は三桁に昇り、当然、それだけの局員がいなくなった上層部はまともに機能しなくなった。中には超法規的な処置で一部を釈放したが、しかし、それでも歯車が以前のように回ることはなかった。もう……二度と。

――そもそも、彼らは「情報を支配される」という事態を甘く見過ぎていた。この臨時会議は極秘理に行われていたが、それすらCBに漏れていたなどと、彼らは知りもしなかった。何故なら、情報の流出はあくまでも一方的であり、双方向のものではないからだ。この認識の甘さは、長きに渡り続いた現場至上主義の弊害でもあった。

管理局が世界中から戦力を集めているという情報を入手したCBは、それが目標水準まで完了すると同時に動き始めた。フェイズ3――「統一」に至る最終プロセスに移行するためにである。その目的は……第97管理外世界を制圧することであった。

第９７管理外世界周辺に配置されていた管理局の艦隊は、この招集に応じ、主要な戦力を引き抜かれ、ほぼ無力化していた。また第９７管理外世界を本拠地とするＡ－ＬＡＷＳにしても、アルヴァトーレが破壊され、ザ・サムライが欠けた今、残ったオーバーＳはミスター・ブシドーと「エンデ」ジャンヌ、それと「超兵」ソーマ・ピーリス、リジェネ・レジェッタの四名のみであり、ＣＢと正面切って戦うには、明らかに戦力が不足していた。

それらの情報を甘味し、統計し、整頓（せいとん）しながら月日は流れ……４月の１９日。ついにＣＢは本格的に、第９７管理外世界の制圧へと乗り出した。

現存するガンダム、そのほぼ全機を投入しての、世界を舞台とした大規模な制圧作戦。管理局はヴェーダの情報操作を受け、このことに気付くのが遅れてしまう。また管理局に救援を求める信号すら、無限書庫により情報ごと揉み消され、上層部にまで届かなかった。

そして、三日三晩続いた制圧作戦は、第９７管理外世界「地球」の各地に地獄を発現させながら、ＣＢ側の勝利で幕を閉じ、Ａ－ＬＡＷＳはこの本拠地での完敗により、全戦力の実に３割近くを失ってしまった。

だが、ＣＢはこれだけに満足せずに、「地球」へとあるロストロギアを持ち込んできた。ユーノが「蝶」と呼ぶ「ロストロギア」である。それを日本の「海鳴」という地域にまで運んだＣＢは、それを護るような防衛陣営を敷くと、そのままそこ――「海鳴」に留まった。

これら3日間の内に起こった出来事を管理局が知ったのは……4月24日、つまり、全てが終わった2日後のことであった。

――新暦76年4月24日――

クロノは目の前で行われている2回目の臨時会議を、茶番だと思いながら静かに見詰めていた。それはリンディも同じなのか、疲れが溜まった溜息を先程から何度も吐いていた。

会議は踊ってこそいないが、されど、回ってもいなかった。保身に奔る馬鹿もいれば、正義感に奔って無謀な作戦を提案する阿呆もいる。そして、前回同様、最高評議会というトップがいない今、これらの意見をまとめるには、多くの時間が必要になるだろう。そう……

金より貴重な時間を馬鹿馬鹿しく浪費して。

今も、反レジアス派だった海側の上層部の一人が、「衛星砲」――サテライトキャノンの使用が大量破壊兵器の使用に繋がるとして、その使用禁止及び破棄を臨時会議で訴えていた。魔導砲「アルカンシェル」がガンダムに対して有効でない今、その代わりとなるはず

のサテライトキャノンだったが、やはり大量破壊兵器だということがネックとなり、集中砲火のような非難を受けていた。

しかも、このサテライトキャノンの発掘を指示したのは、元を辿れば無限書庫だったことが判明し、それがさらに非難を煽る要因になっていた。あの過去に類を見ない「大犯罪者」ユーノ・スクライアが発掘に関わっていたとなれば、サテライトキャノンはもう、反質量兵器を唱える議員たちの格好の的でしかなかった。

……サテライトキャノンが如何に危険なのかを説明し終えた提督に、割れんばかりの拍手が送られる。提督も自身のプレゼンに満足してか、笑顔でその拍手を全身で受け止めていた。それをクロノは、冷たい目で見ていた。

「では、クロノ・ハラオウン提督。先程の弁論に、何か意見がありますかな？」
「……ええ」
「では、壇上にどうぞ……くくっ」

クロノは周りから漏れる嘲笑すら無視して、会議の中央にある壇上に無言で上がる。見上げ、胸を張り、そして……

「……まず言っておきますが、僕はサテライトキャノンを破棄するつもりはありません。そして、この茶番にもならない会議で時間を潰す気も毛頭ありません」
「「「ッ！？」」」

ただ淡々と……宣戦布告をした。

「ここで話し合うべき事柄は、ただ一つ。次元世界にのさばる悪、

即ちＣＢに対し、管理局がどう対処するのか。その一点のみが議題のはず。なのに、なぜ無関係な事ばかりを何時までも長々と話し合っているのでしょうか？」

「そ、それは、サテライトキャノンが大量破壊兵器だから……」

「その大量破壊兵器を使わなければならないほど追い込まれているという自覚が、貴方にはあるのですか！？」

クロノが一喝するように吼えた言葉は、物理的な力を持っているように、大勢の局員たちの胸に突き刺さった。先程の演説を行った提督が怯み、周囲の喧騒が大きくなる。それを押さえ付けるように、クロノは力強い声で続けた。

「管理局が最強だったのは、もう過去のことです！　前人未到のＳＳＳランク！　オーバーテクノロジーでできた量子演算処理システム！　さらには、この管理局の情報を一手に担っていた無限書庫がＣＢにある今！　管理局とＣＢの力関係は、完全に逆転しているのですよ！？　それを、貴方たちはこの期に及んでも、まだ分かっていないのですか！？」

静まる議会の中、しかしクロノだけは、声を荒げる。そこに真摯（しんし）な思いを、厳然たる事実を乗せて。

「もう大量破壊兵器でも使わない限り、管理局はＣＢには勝てません！　今やＣＢは質だけでなく、数までも揃えているのですよ！？　此方が確認しただけでも、ユー……スクライアは莫大な資金と多数の大土地を使って、軽く万を超える機体を生産していました！　ＡＡやＡＡＡランクが万以上ですよ！？　これでも、まだ貴方たちはこの事態を楽観視できるというのですか！？」

怒鳴り、顔を赤くするクロノとは反対に、顔色を青く、白くさせ

ていく上層部の人々。どうやらクロノの演説を聞いて、危機感を改め始めたようだ。だが、これでもまだ足りない。まだ余裕で挽回できるなどと、そう考えている馬鹿が、多数いる。

「スクライアが裏切ったあの日から、何人のオーバーSがやられたと思っているのですか！？　……10人、10人ものオーバーSが、CBのガンダムに討ち取られました！　すでに管理局のオーバーSは20人もいません！　全盛期の半分もいないのです！　それでもまだ……楽勝だと言える口を持ち合わせているのでしょうか、貴方たちは！？」

今まで誰もが目を背けていた事実を、次々と明るみに出すクロノ。上層部たちはそこまで言われて、ようやくグゥの音も出なくなった。管理局の力を誇示してきたオーバーSを半分以上もやられているのだ。もう事態は、彼らに負えるものではないということも、彼らには分かっていた。

だが、だからといって、他の誰かが収拾できる事態でもない。トップがいない今、管理局の上層部で一番熱い事柄は、「誰が責任を取るか」ということであり、それ以外のことはまるで眼中になかった。それを知った上で、クロノはこの場を借りて、敢えて宣言する。

「……これから僕は、自分の艦隊を率いて、CBの大戦力が集まっているという第97管理外世界に赴きます。無論、僕一人でも行くつもりです。そこで起きたあらゆる責任は……当然、僕が全て負います」

上層部が聞きたかったであろう一番の言葉を……クロノはついに、明言した。

「……それはつまり、サテライトキャノンの責任なども、かね？」
「えぇ、もちろんです。ありとあらゆる責任を擦（なす）り付けてもらって構いません。これで貴方方が腰を上げてくれるのならば、僕は喜んで責任を取りましょう」

第一次元航行艦隊を率いる提督が、重々しく尋ねてきた。クロノは淀みなく即答しながら、一気にざわついた臨時議会を見渡す。その中で、彼は見知った色を見た。優しさに満ちた、翠色の髪を。

（……ごめん、母さん。でも、こうするしか……なかったんだ）

顔を伏せるリンディの姿に、クロノは必死になって言い訳をする。こうするしかないのだと、そう自分に言い聞かせる。聞かせ続ける。

でないと、何かに押し潰されそうだったから……。

――新暦７６年４月２５日――

ＣＢが第９７管理外世界を制圧してから、すでに3日が経過していた。第９７管理外世界の軍事力は先の制圧戦でほぼ全滅しており、それに伴って経済もまた、底の見えない泥濘（どろぬま）に嵌（はま）ってしまっていた。

１９２９年の世界恐慌やリーマンショックなどとは比べ物にならないほどの大幅な下落。金融というシステムが耐え切れなくなるほどの恐慌は、ほぼ全ての国家をデフォルト――経済破綻に追いやり、１０億単位の人々に貧困を齎していた。

それによって引き起こされるはずの暴動は、３日経った今でも一つも起きていなかった。世界中に配備された単眼のＧＮキャノン？やガガキャノンが、彼らから抵抗させる気力を無くさせていたのだ。

だが、ＣＢによって制圧されたといっても、それはあくまでも世界の大部分の話であり、地域の単位で見れば、まだ抵抗活動を続けている地域も確かに存在していた。

そして、日本の首都である「東京」もまた、その数少ない地域の一つであった。そこにはＡ－ＬＡＷＳの主要戦力がほぼ揃っており、指導者的な立場となったロベルト＝コーナーもまた、そこにいた。

当然、指導者たる彼の側には、残った４人内、三人ものオーバーＳの面々も集っていた。しかし、そんな彼らも、今では手に汗握り、自分たちの置かれた危機的局面に窮していた。

「随分と大盤振る舞いだな、向こうは……」

「大佐、どうしますか？」

「……ここから撤退する時間を稼ぐ。それしかあるまい。今の戦力では、多勢に無勢で、犬死するだけだ」

すでに素戔男をインストールしているミスター・ブシドーが、二刀ある刀越しに、眼前に広がる悪鬼の大海を見据えた。その数は千を越し、万に届くかもしれなかった。そんな絶望的な場景を見なが

ら、ソーマ・ピーリスはスマルトロンの赤い装甲越しに、傍の大佐――セルゲイ・スミルノフの指示を仰いでいた。

指示を仰がれたセルゲイだが、彼はこの状況では退却しかないということを瞬時に悟っていた。すでに戦力は7割から5割にまで削られ、そろそろ碌な戦闘すらできなくなってきていた。

「……（ろ、ロベルト……）」

「……分かりました。セルゲイさんがそう言うのなら、ＡＬＡＷＳをここから退却させましょう。……殿をお願いしてもよろしいですか？」

「ハッ！　了解であります、盟主殿」

疲れ切った表情をしたロベルトは、ジャンヌの心配そうな瞳を見ないまま、瞳の奥で燃える復讐の炎を抑えつつ、冷静に指示を下し、ＡＬＡＷＳの隊員たちを次元航行艦に乗せ、ここから退却させようとした。その手際の良さは、彼がこれまで潜りぬけてきた死線の数を、それとなく周囲に教えていた。

「……（……ぐすっ）」

ロベルトにそれとなく無視されたジャンヌの目尻には、涙が滲んでいた。それを拭いつつ、自分も殿に加わろうとしたジャンヌに、ピーリスは待ったをかける。

「……ジャンヌ、貴方は盟主様の側にいて下さい。ここは私と大佐、それにミスター・ブシドーで死守致しますので」

「……（で、でも……）」

「心配は無用です。私と大佐がいれば、どんな敵がきても大丈夫です。……一応、盟主様の護衛にはアンドレイ少尉も付けていますが、

念には念を入れて、オーバーSである貴方も護衛に回って下さい。これは、大佐の指示でもあります」

「……（……ありがとう、ピーリス）」

「いえ。友達として、その恋路ぐらいは応援しますよ、ジャンヌ」

「……（本当に、ありがとう）」

笑顔で手を振るジャンヌに、ピーリスもまた笑顔で応える。軽快な足取りでロベルトの後ろに辿り着いた彼女は、ロベルトの困惑した様子を無視して、そのまま一緒に、次元航行艦に乗り込んだ。恋する乙女は強いのだと、ピーリスはその時、深くそう思った。

「……いいのか、ピーリス。盟主殿は敢えて彼女を遠ざけようとしているようだが……」

「いえ、これでいいんです。私と彼女は、友達ですから……」

「……そうか。なら、私は何も言わん」

ロベルトがジャンヌを避ける理由は、きっとジャンヌを死なせたくないからだろう。聞けば、ロベルトと彼女は、４年前にすでに出会っていたらしい。今まではあまり関わっていなかったが、もしこれ以上深い関係になれば……

「……では、そろそろ出向くとしようか。ミスター・ブシドー、準備はいいかね？」

「無論だとも、荒熊よ！　私と素戔男（スサノオ）はいつでも出られるぞ！！」

『えぇ、Ｌｉｃｅｎｓｅｒの言う通り、私たちはもう、戦いたくて戦いたくて仕方がありません。それに、向こうにはあの憎き益荒男（マスラオ）もいますからね……！』

セルゲイは意識を切り替え、目の前の大群に目を向けた。疑似ＧＮデバイスを起動させ、青い装甲のジンクス？を自身の肉体と入れ

替えて構成すると、持った槍の矛先を向け、開戦の砲火を四連、放つ。

「出陣ッ！！」

「はい、大佐！　行くぞスマルトロン！」

『Ｙｅｓ，ｌｉｃｅｎｓｅｒ』

潜伏していた地下施設から一気に飛び出すジンクスとスマルトロン。一拍遅れで、素戔男もそこから躍り出る。手に持つ二刀の白刃を光らせながら、まずは素戔男が吼えた。

「さぁ……そろそろ奴との決着を付けるぞ、素戔男！」

『Ｙｅｓ，ｌｉｃｅｎｓｅｒ。あの武者馬鹿を、今度こそ私たちの手で……！』

彼ら三人が出てくると、目の前の大群からも何かが飛び出してきた。コードネーム「角持ち」「羽付き」「黒鬼」の三機が、彼らと矛を交えるべく、手に武器を取っている。

「「「はぁあああああッ！！」」」

三人と三機がほぼ同時に衝突する。衝撃で地面のアスファルトが剥け、ガラス窓が割れる。大群はその三機に殿の三人を任せると、その数の暴力に物を言わせ、施設を破壊していく。

「ここで会ったが１０００年目！　今日こそ引導を渡してやるぞ、武者ァアアアア！！」

『やれやれ……この６日間、幾度となく刃を交えたが、そろそろ年貢の納め時だとは思わないのか、武士よッ！』

夜天が広がる空で、黒と黒がぶつかり合う。２対の白刃が白い火花で一瞬の閃光を生み、刃の軌跡を鮮明に描く。墨汁を垂らしたような黒い空でその軌跡は、美しいほどの輝きを放っていた。

『馬鹿武者。貴方を倒せば、「力」が「悪」よりも上だと証明できるのです。ですので、大人しくやられなさい！』

『それは御免被るぞ、頭でっかちの武士よ！　某を倒すなら、某を超える「巨悪」でも持ってくるがいい！』

素戔男が神速の速度で二刀を振るい、一番近くにいたＧＮキャノン？ごと、固い地面を砕く。益荒男も負けじと両刀を奔らせ、砕けた地面をさらに細かく切断する。踊るように振るわれる剣戟の嵐が、周囲の者全てを斬り裂きながら、戦場を駆けていく。

「ぬおぉおおおおッ！！」

『ハァアアアッ！！』

荒ぶる感情を現すように、天空で激しい切り結びを行う益荒男と素戔男。武士（スサノオ）と武者（マスラオ）は酷似する互いのこと以外は眼中にも入れずに、ＳＳ－ランク同士で死闘を演じ続ける。

それを下から見上げていたセルゲイは、突如現れた大型のサーベルを、左腕にあるシールドを使ってギリギリで受け流した。シールドとサーベルが擦り合う音が、不協和音となってセルゲイの鼓膜に響く。サーベルに次いで出てきたグレー基調の「角持ち」――ガラッゾが、防がれたのとは逆の手でさらなる追撃を繰り出してきたが、それもまた右手のＧＮランスで弾き、防ぐ。

『荒熊ぁああッ！　今日でＡ－ＬＡＷＳはお終いよ！』

「ぬぅ……！」

ジンクス？とは桁違いのパワーで押し切ろうとするガラッゾに、セルゲイは苦しげな声を漏らした。呼吸する暇すらないほどの連撃が、ジンクス？の装甲を削っていく。致命傷だけは避けているが、それもいつまで持つか分からない。

『ハァアアアッ！！』

ガラッゾが両手を交叉させた。その間に挟まれたＧＮランスの矛先が、すっぱりと切り取られる。

「まだだ！　まだ、終わらん！」

だが、ジンクス？はその切り取られた矛先を、そのままガラッゾへ向けた。ガラッゾは腕を振るった反動で動けない。そんなガラッゾに躊躇なく、粒子ビームを撃ち込む。

ＧＮランスに内蔵されてある四門の粒子ビーム砲から赤橙色の光弾が撃ちだされ、ガラッゾの全身に突き刺さっていった。機体が爆炎で覆われ、思わず後退してしまうガラッゾ。ジンクス？はそのまま足を一歩踏み込み、脚部に格納してあったＧＮビームサーベルを左手で取り出すと、それを一閃させ、ガラッゾの右腕を斬り落とした。

『この……ジンクス如きに負けるはずがぁ……！』

「肉ならくれてやる！　だが、その代わり、貴様の骨を砕かせて貰うぞ、ガンダム！！」

ガラッゾの左腕が伸び、ジンクス？の脇腹を大きく抉る。損傷を表示する警告欄がモニターに踊る中、ジンクス？は矛先のないＧＮ

ランスでガラッゾの体勢を崩すと、今度はその胸にサーベルを突き立てた。

「大佐！？」

「待ってくれ、マリー！」

「邪魔をするな、羽付き！　それと、私はマリーではない！　ソーマ・ピーリスだ！」

密着し、動かなくなったガラッゾとジンクス？を見て、ソーマのスマルトロンの動きが鈍る。その間に羽付き――アリオスガンダムは距離を詰め、スマルトロンを抱き締めようとしてきた。

スマルトロンはこの動作を、自身を拿捕（だほ）するためだと思っていたが、外部スピーカーから流れる男の声が、その思いを否定する。どうやらアリオスのマイスターはソーマのことをマリー・パーファシーだと勘違いしているらしかった。

テストに最後まで残った唯一の超兵、マリー・パーファシー。……だが、彼女は４年前に何故か死亡している。そしてマリーを元に、『プロジェクトF』で造られたのが、ソーマ・ピーリスという「超兵」だった。

それを知らないのか、ソーマが何度言っても、アリオスはソーマのことを「マリー」と呼び、抱きつこうとしてくる。そろそろ限界だったというのもあり、スマルトロンはアリオスを足蹴にし、一瞬の隙を作ると、そのままジンクス？の所まで行き、その腕を掴んだ。

「離脱します！」

そのまま一気に上昇し、今度は堕ちてきた素戔男の腕を中空で掴

む。素戔男と益荒男の戦いは相打ちで締め括られ、眼下を見れば、片膝を着く益荒男の姿が確認できた。

「何をする、ピーリス少尉!?　私はまだ戦えるぞ!」
「補給が望めないのに、粒子残量が半分もない状態で戦おうとするのは無謀です!」
「……ミスター・ブシドー。時間はもう、十分に稼げた。後は我々が撤退するのみだ」
「……あぁ、了解した」

スマルトロンが素戔男とジンクス?を引っ張りながら撤退路を突き進む。背部の大きなスラスターをフルスロットルにし、疑似ＧＮ粒子を大量に噴き散らして、空を飛ぶ。追手が来ることはなく、彼ら3機は苦い思いを噛み締めながらも、この場から退却した。

――新暦７６年４月２６日――

ソーマ、セルゲイ、ミスター・ブシドーの三人がロベルトたちと合流できたのは、殿となって退却戦をした翌日のことであった。だが、その時にはロベルトたちの残存艦隊は、撤退する動きを掴んでいたＣＢによって、さらに3分の1ほど摩(す)り潰されていた。しかも、そこで合流するはずだった2人の人物も、未だ姿を見せていなかった。

だが、彼ら3人が合流した3時間後に、待ち望んでいた人物はやってきた。だ、その人物は1人しか確認できず、他に人影はなかっ

た。

「あの、アイシスさん……」

「……ごめんなさい」

待ち望んでいたはずの2人の人物――アイシスとリジェネ・レジェッタ。だが、ここに来たのはアイシスだけだった。ロベルトが訳を聞こうとしても、アイシスは「ごめんなさい」としか言わなかった。壊れた蓄音器のように、延々と。

……そして、一時間を要して、アイシスが落ち着くのを待ってから、ロベルトはもう一度、静かに聞いてみた。リジェネがどこにいるのか、または……どうなったのかを。

「リジェネは……リジェネ・レジェッタは、新型の「白鬼」と戦って……死にました」

アイシスは涙を零しながら、その時の様子を鮮明に語りだした……

第７８話　瓦解する世界（後書き）

クロノがイケメン過ぎて、書くのが辛い……！

かつて、熊ジンクスがここまで活躍する作品があっただろうか？

いや、ない（はず）！

ふと思ったのですが、ついたーなどで更新を呟いた方がいいのでしょうか？　呟いた方がいい場合はそうしたいと思います。

Ｐ．Ｓ．感想の返信がようやく追い付きました。これからは次話更新までに返信を完了させるよう、尽力致します。

次回の更新予定日：２０１１年１１月５日（土）かその来週。プロットをこねくり回しながら書いているので、遅くなるかもしれません。

第７９話　散りし者（散りゆくモノ）（前書き）

電子世界を掌握し、世界を闊歩するＣＢ。その進撃を止めることは、最早時空管理局にも不可能であり、ＣＢは世界最強となった武力でもって、世界に革新を齎そうとしていた……

第９７管理外世界に大規模な制圧戦をＡ－ＬＡＷＳ相手にしかけたＣＢは、圧倒的な兵力差によって、「地球」の大部分を支配すると、そこに「蝶」と呼ばれる謎のロストロギアを持ち運んだ。「日本」の「海鳴市」に。

そんな中、クロノ・ハラオウンはＣＢの進撃を食い止めるべく、作戦中に起きた全ての責任を負うことで、時空管理局の大艦隊を第９７管理世界に派遣させた。クラウディアに搭載された「衛星砲」サテライトキャノンも持ち込んでの、ほぼ総力戦ともいえる大戦。

その大戦を前にして、ＣＢに制圧された地球では、Ａ－ＬＡＷＳの残党とＣＢが火花を散らし、各地で戦闘を行っていた。しかし、Ａ－ＬＡＷＳの低下した戦力では抵抗し切れず、ついには大規模な撤退戦を行うことになった。その最中、ロベルト＝コーナーたちはアイシスから、リジェネ・レジェッタ戦死の報を……聞いた。

【罪は償えない。
罰は許されない。
そして、決して分けられないし、消えない。
何故なら感情や価値観は個人のモノであり、例え同じ体験をしようが感じたものは一緒では無いからだ。

私達に出来る事は一つ。

罪と罰を背負い生き続けるか、背を向けて逃げるかだ】

――鴨川秋様より

第７９話　散りし者（散りゆくモノ）

――新暦７６年４月２５日――

リジェネ・レジェッタとアイシスは、第９７管理外世界の各地で抵抗活動を続けるＡ－ＬＡＷＳの隊員たちを回収する任務に就いていた。主要な戦力が集まっている「東京」以外にも、「ニューヨーク」や「ロンドン」、「パリ」などで抵抗活動は続けられており、それらの都市には固まった戦力が存在していた。それを「東京」に集めるのが彼ら２人の任務だった。

ＣＢに負けたＡ－ＬＡＷＳが最初に行ったのは、残った隊員を一箇所に集めることであった。負けたとはいえ、残存戦力はまだ７割も残っている。隊員たちを纏め上げれば、まだまだ戦えるはず……それがＡ－ＬＡＷＳの考えであった。

その日は「中国」の「北京」という場所に赴き、総勢１００万人を超える隊員を回収している最中だった。Ａ－ＬＡＷＳがＣＢに、本拠地で大敗北を喫してからすでに３日が経過しており、隊員たちの士気もかなり低下していた。そのことを危惧しながらも、アイシスはここから東京への道程を考えるのを止めなかった。それが任務だと、彼女は割り切っていた。

なお、リジェネはこの時、軍服を着たアイシスの後ろに立っており、彼女のボディーガードをしていた。リジェネはアイシスと同じ緑色の軍服を着ていたが、見るからにだるそうにしており、時折アイシスにちょっかいを出しては、彼女の反応に薄ら笑っていた。

しかし、そんな中、事態は急変を迎える。

「……ん？　このデータは……？」

アイシスが「北京」近辺の情報をサーチし、整理していた時だっ

た。彼女がソレに気付いたのは。
「これは……うそ。これだけのエネルギーが一点に集中したら、この地球が……！」
彼女が気付いたソレは、言わば一つの「破滅」だった。並みのロストロギアを遥かに上回るエネルギーが、ソレのある一点に集中していた。アイシスは大急ぎで地域を特定すると、茫然とした面持ちで、その土地の名前を口にした。

「海鳴市……」

その都市は、ここ１０年で最も次元世界に知れ渡った都市の一つであった。「Ｐ．Ｔ事件」、「闇の書事件」という2つの大事件が起き、さらには高町なのはを始めとする数々の高ランク魔導師とも縁深い土地である「海鳴市」。それだけの都市であるからに、この都市の名は魔導師ならば誰もが知っていた。知っていて当然だった。特に……あの「大犯罪者」ユーノ・スクライアにも関係ある都市として。
「一体……一体ＣＢは、何を……ッ！？」
彼らが何を起こそうとしているのか。未だ膨張を続ける謎の「超高エネルギー体」は、すでにこの次元を完全に呑み込むほどまでに大きくなっていた。それが起動した時の破壊力を想像し、アイシスは生唾を呑み込もうとして……その寸前にやってきた部下の報告に、思わず息を飲む。
部下が報告した内容は、転送魔法が使えなくなったことと、念話が使えなくなったことであった。それを聞いた瞬間、アイシスの血は一気に引いた。傍でそれを聞いていたリジェネも、へらへらとした笑いを引っ込め、真面目な顔になる。
「……リジェネ」
「君が今考えている通りだと思うよ。……どうやら、ボディーガードの仕事をしなくちゃいけないみたいだ」

この２つの異常な事態に対面し、アイシスとリジェネは意識を完全に戦闘のソレに切り替える。すぐにやってくるであろう仇敵――ＣＢと戦う為に。

「総員、第一種戦闘配備！　奴らが……ＣＢがここに来ます！」

「さぁ、誰が来る？　ネーナか、ティエリアか、トーレか……それとも、刹那かな？」

アイシスが肩まである金髪を振り乱しながら、１００万近い隊員たちに即座に的確な指示を下した。リジェネはガルムガンダムをセットアップし、そのトリコロールカラーの機体を揺らしながら、誰（どのガンダム）が来るのかを予想する。

「Ｅセンサーに反応！　数……およそ３万！」

「うち、ガンダムと思われる機体、２機！」

「照合……駄目です、照合できません！　このコンピュータも今、ハックされました！」

次々と舞い込んでくる情報に、アイシスは苦い顔をした。いくらこちらが１００万を越す軍勢だとしても、相手はＡＡやＡＡＡで構成された３万機で、しかもこちらは殆どが一般人だ。ＧＮ粒子の副次的効果により、ミサイルなどの誘導兵器が無力化され、レーダーも使えない今、ただの一般人がＡＡランク以上の性能を持つ機体と戦うには、キルレートが１００でも足りていなかった。

しかも、最低ランクであるガガキャノンですら、戦車砲の直撃を喰らっても装甲が凹む程度なのだ。向こうとの火力差は歴然で、機動性にしても、向こうは空を自在に飛ぶことができるため、比べることすらできなかった。

現に、斥候部隊はものの数瞬で壊滅され、その奥に控えていた待ち伏せ部隊までも、瞬きの間に殲滅されてしまう。制圧作戦の時と同じように、兵の質が違い過ぎて、まるで勝負にならない。

その苦い事実に歯噛みして耐えていると、斥候部隊を壊滅させた軍団から、ガンダムと思しき機体が、一機だけ、何故か突出してきた。訝しげにモニターを見つめるアイシスだが、その機体は途中で

止まると、外部スピーカーを使って此方に声明を送ってきた。
「やぁ、Ａ－ＬＡＷＳの皆さん。早速で悪いけど、リジェネ・レジェッタを出してくれないかな？」
そのガンダム――新型の「白鬼」？　――は、青紫色のバインダーを背中に広げ、傲慢そうに腕を組みながら、こちらを見下ろしてきた。その姿に真っ先に喰らい付いたのは、「白鬼」に呼ばれたリジェネだった。
「……やぁ、リボンズ。どうやらまだしぶとく生きていたみたいだね。君がそんなに意地汚かったなんて、僕は知らなかったよ」
「僕もそうさ。君がまさか、僕を前にしてすぐに出てこないなんて……何時からそんなに臆病になったんだい？　それとも、最初からそうだったのかな？」
「言ってくれるね、負け犬のくせに……！」
「その汚名は君に返上するよ、リジェネ。その汚名は、君にこそ相応しい」
「……ッ！」
ギリッ！　と、はっきり聞こえるほどの歯軋りをして、リジェネは自陣から飛び出すと、リボンズの前へと躍り出た。

「リボンズゥゥウウウ！！」

リジェネ――ガルムが、彼の名を叫びながら突撃してくるのを、腕組みを解いたリボンズ――１．５（アイズ）ガンダムが迎え撃つ。ガルムと１．５ガンダムは互いの機影に銃口を合わせると、何の躊躇もなく、その軽いトリガーを引いた。赤橙色の粒子ビームが光線となって、空を奔る。
「もう一度、地獄に落としてやる！」
「やれるものなら、やってみるがいいさ！」
ガルムが憤怒の形相で連発するビームを、１．５ガンダムはバインダーを小刻みに動かして避ける。性能差は殆どないのか、両者は

近づいては離れ、離れては近づいてを繰り返していた。1．5ガンダムがバインダーを右側に動かして、先程よりも強力な粒子ビームを放つも、それはガルムのGNメガランチャーによる砲撃は、バインダーを左側に動かした1．5ガンダムのGNフィールドに止められた。

逆に、ガルムのGNメガランチャーによる砲撃は、バインダーを左側に動かした1．5ガンダムのGNフィールドに止められる。しかし、無傷ではなく、シールドを破壊することには成功した。続いて2射ほど放つが、後方にバインダーを動かして機動性を増した1．5ガンダムに楽々と避けられてしまう。

「この……ガルム、データ！」

『どうやら、1（アイ）ガンダムに改良を加えた機体みたいです！　後ろのバインダーを動かして、アタック・ディフェンス・ハイスピードと、機体性能を変化させているようです！』

「厄介だね……そして、相変わらずだね、彼は！　一人で何もかも、全部成し遂げられると思い上がっている！　昔から、そして今も！！」

「そうさ、思い上がっているさ。最強のイノベイドたる僕が思い上がって、何がいけないんだい？　僕は君と違って、優秀な上位者なんだよ？　だから……僕は傲慢に振る舞ってもいいのさ！！」

『アルヴァアロンキャノンモード』

バインダーを肩越しに展開した1．5ガンダムは、大量のGN粒子を消費して、その先から巨大な熱線を放つ。回避不可能なタイミングで放たれたそれは、張られたGNフィールドごとガルムを呑み込むと、そのまま山腹まで直進し、山腹の5合目付近を大きく抉った。

舞い上がった土砂で視界が劣悪となる中、リボンズはリジェネの生死も確認しないで、空中で再び腕組みをし、

「ほら、その証拠に、君は大地に這い蹲（つくば）……」

「君にもすぐ地面を舐めさせて上げるよ！」

「な……んだと……！　リジェネ風情がぁあああッ！」

そのまま、ガルムのメガランチャーの直撃をもらい、フィールド

を展開していたバインダーを壊されてしまう。１．５ガンダムは過負荷によって作動しなくなったバインダーをパージすると、先の砲撃で砲身が溶けたメガランチャーを放り投げたガルムへと、怒りが滾るままに急接近していった。

それに対抗すべく、ガルムはビームサーベルを両手に持った。１．５ガンダムは片手にしか握っていなかったが、それでもサーベルを振り被るのを止める気配はない。

「うぉおおおッ！！」

「はぁあああぁッ！！」

一本と二本のサーベルが交叉し、鍔迫り合いとなり、離れ、敵を切りつけ合う。ガルムはこの時点でメガランチャーとＧＮフィールド機能を失っていたが、１．５ガンダムもまたビームライフルとバインダーを失っていた。

両者とも白兵戦をするしかない状況で、戦況は序々にリボンズの方へ傾いていった。元々、１ガンダムより性能が１．５倍もアップしている１．５ガンダムは、ビリー・カタギリやその助手であるティーダが造ったガルムの性能に肉薄しており、差らしい差は殆どなかった。

だから、差がつくのはＬｉｃｅｎｓｅｒの能力の方であり、ただのイノベイドであるリジェネと最強のイノベイドであるリボンズとでは、最初から勝負は決まっているようなものだった。

「グ……くそッ！」

「ほら、どうしたんだい！？　さっきまでの威勢はどこにいったのかな！？」

１．５ガンダムの振るったサーベルが、ガルムの右肩を半分に切り飛ばす。続けて２戟、３戟と打ち合うと、今度はＶ字アンテナの片方が焼き切られた。ガルムも二剣を必死に振り回すが、その全ては軽くいなされ、逆に手痛い反撃を喰らってしまう結果になる。

明らかにＬｉｃｅｎｓｅｒの器量が違い過ぎて、勝負にさえならない。あまりの悔しさに奥歯を噛み砕きそうになりながら、リジェ

ネはいたぶるように剣を振るう1．5ガンダムの攻撃に耐え忍ぶ。

「僕を愚弄した罪を！　ここで、綺麗に、清算させてもらうよ！」

苦渋の思いを味わっているリジェネとは反対に、リボンズは清々とした気分で笑っていた。あの時に味わった挫折の思いが、一振りごとに消えていくのが手に取るように分かった。リボンズは周りの状況も鑑(かんが)みずに、剣を振るうことに夢中となって、ガルムの装甲を細かく削っていく。

「ははははッ！　無様じゃないか、君にはお似合いの姿だよ！」

だが、リボンズは気付いていなかった。リジェネの後ろから、アイシスが狙撃銃で1．5ガンダムに狙いを付けていることを。そして、その他にも数十からなる部隊の斉射が待ち構えていたなどと……彼は終始、気付けなかった。

「リジェネ！」

「……！」

アイシスの声に反応し、いきなり後退したガルムを、1．5ガンダムは不審げに眺めていた。アイシスはそんな1．5ガンダムの様子に構うことなく、部隊に一斉射を命じた。

「第二射、てぇッ！」

山の中腹を燃やし尽くす爆炎が、1．5ガンダムの姿を完全に見えなくさせた。止め処なく放たれる劫火が、熱波となってその大火力をアイシスたちに物語ってくる。さすがに燃料気化爆弾(サーモバリック爆弾)やデイジーカッターなどは用意できなかったが、それでも山の森林を残らず消し炭にするだけの猛火で、1．5ガンダムは焼かれていた。

しかし……それすらも、ガンダムの前では無力であった。

「やれやれ……どうやらまだ、認識が足りていなかったようだね？

GNデバイスには質量兵器は通じないって、いい加減理解したらどうだい？　愚かな人間たちよ」

火山口のようにドロドロに溶けた地面を、1．5ガンダムは苦も無く歩いていた。その身はガルムとの戦闘で傷だらけだったが、さきほどの砲火による損傷は欠片も見られなかった。その悪鬼然とした姿を見た兵士たちは、ついに恐慌に陥り、我先にと逃走を開始する。

「はは……それで？　まさか君まで逃げるつもりかい？　だけどね……この僕が逃がすとでも？」

1．5ガンダムの後ろにたむろしていたGNキャノン？やガガキャノンから、先程のお返しとばかりに粒子ビームが放たれる。空を明るく染めるその火砲は、逃走していた隊員たちの上空に降り注ぎ、無駄な死を加速度的に量産していく。

それを見たアイシスは、数瞬ほど迷いながらも、据えかねていた腹を決めた。そして、一度だけ胎を撫でてから、彼女はリジェネの名前を呼ぶ。

「……リジェネ」

「分かっているさ。僕は君の……ボディーガードだからね」

切なく、どこか……割り切った様子で。

「アイシス。君は先に進んで、後から来る僕を待っててくれ」

それだけで全てを悟ったリジェネは、自分もこうしてジャック・ザ・リッパーに救われたことを不意に思い出した。それに奇妙な縁を感じながら、リジェネはビームサーベル片手にリボンズの前に立ちはだかった。

後ろではアイシスが必死になって部隊を撤退させている。それを邪魔させないよう、まるで本当のボディーガードのようにして、ガルムは傷だらけになりながらも、剣を頭上高くに掲げた。

「……さぁ、決着をつけようか、リボンズ」
「そうだね。僕もそろそろうんざりしていた頃さ。君の甘さと……その弱さにね！」
「ふん……その甘さと弱さを否定するから、ＣＢは世界に認められなかったんだよ！」
　互いの主張を押し通すかのように、１．５ガンダムとガルムは正面から切り結んだ。赤橙色の光剣が、剣筋が見えないほどの早さで振るわれる。一撃一撃が全て必殺であり、たった一度の些細なミスが死に直結する剣戟が、剣舞のように舞われる。
「ＣＢに必要なのは、「強さ」だけさ！　それ以外のもので、この世界に革新を齎すことはできない！」
「そうでも……例えそうでも、僕は！　ぼくらは！　人の持つ可能性を……信じなきゃいけなかったんだ！！」
　先程と違い、ほぼ互角の様相を見せているのは、ひとえに、死を覚悟した者と慢心している者の差があるからだろうか？　それは誰にも分からぬことであったが、少なくともこの時、リジェネは確かにリボンズと拮抗していた。自分をいつも見下していたリボンズと……確かに互角で戦えていた。
　しかし、リジェネがそれに拘泥することはなかった。彼はただ目の前の敵を倒すためだけに思考を回転させていた。大切な人を、温もりを与えてくれた人を護る為に……そして、人を信じる心のためにも、彼は剣を振るう。
「そんな理想が、この理不尽な世界で通じるとでも！？　それが通じるのは、誰かが作ったお話の中だけさ！」
　……だが、それでも、元からあった技量差は如何ともし難いものであった。時間が経過するごとにガルムは不利になっていき、損傷の度合いも酷くなっていった。渾身の力で１．５ガンダムの左腕を斬り飛ばすも、ガルムもまた右腕を斬り飛ばされる。

「はぁあああああッ！！」

しかしながら、ここでリジェネの執念が、勝機を手繰り寄せた。他でもない、リジェネ本人の力で、独力で……彼はリボンズに勝とうとしていたのだ。

「な、なに！？　……馬鹿なッ！？」

雄叫びを上げて、全力で振り抜いた斬撃が１．５ガンダムの首を綺麗にとらえ、根元からそれを切断した。眼下に転がり落ちるガンダムフェイスに動揺したリボンズは、その一瞬、今までの戦闘で一番大きな隙を見せてしまった。

「リボンズ・アルマァアアクッ！」

「リジェネ・レジェッタアアッ！」

そして、最後の力を振り絞るようにして突き出したビームサーベルが、１．５ガンダムの胴部を貫いたのを最後に、リジェネの意識は永遠の闇に閉ざされた……。

――新暦７６年４月２６日――

リジェネ・レジェッタ死亡の報から一夜経った現在、ＡＥＵＳの主要幹部は自力でＣＢを退けるのは無理だという判断を、長い会議の後に下した。アルヴァアロン、ザ・サムライ、リジェネ・レジェッタと、相次いでオーバーＳが倒されていった苦境の中では、その判断は至極当然なものであった。

ＡＥＵＳはその判断を全軍と管理外世界に知らせると、次に、対ＣＢの同盟を結ぶために、時空管理局に連絡を取った。その時の

管理局はクロノ・ハラオウン率いる第九次元航行艦隊を中心とした大艦隊を第９７管理外世界に派遣している最中であった。

といっても、管理局側も大艦隊を派遣してもＣＢに勝てるなどとは口が裂けても言えなかったので、この申し出にすぐに飛びついた。聖王教会の戦力も多数内包する大艦隊とＡ－ＬＡＷＳが協力すれば、あのＣＢにだって勝てると、上層部はそう信じて疑わなかった。

だが、現場の人間はそう考えなかった。いや、考えられなかった。管理局もＡ－ＬＡＷＳも、そして聖王教会でさえも、ＣＢに何度も惨敗しているのだ。現に、今も負け続けている最中だと言えた。最強の名はとっくにＣＢのものとなっているのに、どうして「勝てる」などと楽観視できようか？

「……では、これからはよろしくお願いします」

『こちらこそ……お願いします。では……』

第九次元航行艦隊の旗艦にして、この大艦隊の旗艦でもあるＸＶ級次元航行艦「クラウディア」の艦橋で、クロノとロベルト＝コーナーはモニターを介して通信を行っていた。

その内容は対ＣＢについてであり、その点で彼ら２つの組織は協力し合うことに決めた。つまり、あまりにも強大になったＣＢに対抗すべく、管理局とＡ－ＬＡＷＳは同盟を締結したのであった。

しかし、このあまりにも早い同盟の結びには、「ある訳」があった。

その訳とは、先日、第９７管理外世界にてアイシスが確認した「超高エネルギー体」が、衛星軌道上にいる管理局の艦隊にも観測できるほど、動きを急激に活発化させたのが原因であった。それも、たったの一日の間でソレは、目に見える脅威となって、管理局の役員全てを恐怖のどん底に叩き落としていた。

管理局が観測する「超高エネルギー体」の動きは、一日経った今も同じスピードで膨張を続け、船の計測機で計れる限り、海鳴市に

ある「超高エネルギー体」は、今となっては二桁以上の次元世界を呑み込めるだけのエネルギーを溜めこんでいた。その総量はかつてＣＢ側が使用した「次元の悪夢」――死者１０８億人以上、負傷者７２５億人以上の犠牲者を出したナイトメア・ディメンションをも優に超えており、このまま膨張を続ければ、あと2日ほどで全ての次元世界を呑み込むぐらいにまで増大するかもしれなかった。

そのあまりにも度を超えた危機（破滅）があったからこそ、Ａ－ＬＡＷＳと管理局はたった一日で同盟を結ぶことができた。メメント・モリ攻防戦の時と同様、皮肉と言えば皮肉な結果であるが、やはり人は、破滅を呼ぶほどの危機でもない限り、本格的に協力し合えないのかもしれない。それをＣＢは……世界に対し、証明していた。

――新暦７６年４月２７日――

ロックオン・ストラトス。オリジナルの太陽炉を持つデュナメスガンダムのマイスターである彼は、今、覚悟を決めねばならなかった。本当の、断固たる決意を。

これからＣＢが行おうとするＯｐ.「ブラックヒストリー」の概要は、ラジエル――スクライアが何処からか持ち込んできた「蝶」を発動させるまでの時間を稼ぐという簡単なものだった。

別段、それに不満があるわけでも、それに理解できないわけでもない。ないが……今の彼はもっと切実な問題を抱えていた。それは……

彼女――アニュー・リターナーが、このオペレーションを阻止すべくやってくる管理局の艦隊に乗っているということ。

それがロックオンの悩みであり、この葛藤の訳でもあった。ブリング・スタビティ、リジェネ・レジェッタ、そしてアニュー・リターナー。この三人のイノベイドはＣＢの裏切り者であり、ＣＢとしては絶対に始末しなければならない相手だった。

しかも、先の２５日にリボンズがリジェネを討ち取ったことで、残った裏切り者はアニューただ一人になっていた。スクライアが所持する「天使の魔導書」、それを構成するデバイスの一つであった「無限書庫」が此方にある以上、情報の漏洩（ろうえい）は心配するだけ無駄なのだが、ＣＢを裏切ったからにはそれ相応の報いを与えなければならなかった。

そして、その報いを与えるのは、他でもない、恋人であった彼自身だと……そう、彼は自分で決めていた。

「……ロックオン」

「大丈夫……オレは大丈夫だ、刹那。トリガーを引くぐらい……」

「強がりを言うな。今のお前は、戦えない理由の方が強い」

項垂れるロックオンを見兼ねて、刹那・Ｆ・セイエイが代わりにトリガーを引くことを申し出るも、ロックオンの決意は固かった。

「もしもの時は、俺が引く。その時は俺を恨めば……」

「いや、これはオレの役割だ……強がってなんかねぇぞ。どのみち、アニューは討たなきゃならなかったんだ。だったら、せめて最期はオレが……オレが……！」

ブルブルと拳を震わせながら、ロックオンはそれでも頑なに譲らなかった。アニューに最期を贈る役割を、彼女と過ごせる最後の瞬間を……彼は強く望まず、されど、臨もうとした。

「……そうか。だが、もしもの時は、俺がトリガーを引く。それでいいか？」

「あぁ、いいさ。そんなもしもはやって来ないだろうからな」

ロックオンが顔を上げた。その顔には何時もの笑みが戻っており、少なくとも、戦闘することは可能なように見えた。……アニューと

相対した時にどう変わるかは、刹那にも分からなかったが。
「最終防衛ラインは俺とネーナで守る。だから、後ろは心配しなくていい。ロックオン、お前はただ、彼女と対峙することだけに専念しろ」
「ＳＳランクが二人もいりゃ、そりゃ心配する必要はないわな……オーケーだ、刹那。そろそろ、向こうのリアクションが始まる頃合いだ。……行こう」
「……あぁ」
肩で風を切って歩く姿は、しっかりとした物であった。だが、それが見せかけの虚勢であることに、刹那は気付いていた。もしもの時……もしもの時は、俺が撃つ。その決意を刹那も固めながら、２人はＧＮデバイスからガンダムをインストールし、ＧＮキャノン？やガガキャノン、ガジェット？～？が群れる空へと飛び上がった。
刹那の『００Ｒ』はＧＮソード？を片手に。そして、ロックオンのケルディムは、無手のまま……。

アニュー・リターナーは、目の前に広がる次元空間を見ながら、隣りにいる女性に目を配った。髪の長さはアニューと同じぐらいだったが、アニューが明るい紫なのに対し、その女性の髪は眩しいほどの金であった。
アニューの隣りで淑女然と振る舞う女性は、手を身体の前に組んで、アニューと同じように次元世界を見ながら、口を開く。
「貴方が、あの「三つ目」と恋人であったというアニュー・リターナーさんでしたか……今まで私の友人であるはやてを助けて頂き、ありがとうございます」

「……いえ、そんな」

女性はおっとりとした様子だった。ただ、アニューの方は挙動不審であった。それも当然、女性の経歴を思えば、アニューなど、いつ殺されても文句は言えない。それだけのことを、アニューの恋人であるロックオンはしたのだ。

彼女の秘書兼護衛兼親友であったシャッハ・ヌエラ、それに同じ教会に属するオーバーSのノア＝アンダーソン、そして知り合いの数々を……ロックオンは、ケルディムは殺していた。

無論、アニューはロックオンがどうしてそこまで聖王教会を憎んでいるのか……それを知っていた。

それは、4年前まで教会最強だった「傭兵王」アリー・アル・サーシェスが異端審問官として活躍していた頃の話だ。サーシェスは聖王教以外を信仰していたとある世界の都市部で、異端を排除するという名目の元、自爆テロ紛いの事件を起こした。それに彼の家族は巻き込まれ、たった二人の兄弟を除いて全滅してしまった。

それでも、不幸中の幸いか、サーシェスは四年前の大戦時に、初代ロックオンであった兄のニール・ディランディが命と引き換えにその命を絶った。が、それでも憎しみの連鎖は……終わらなかった。今度は弟のニール・ディランディ――つまりは今のロックオンが、サーシェスを野放しにしていた聖王教会そのものに対し、強い憎悪を抱いてしまったのだ。

唯一残った家族であったニールも、聖王教会に殺された……彼にはきっと、そう見えたのだろう。勿論、アニューだってその点は理解できる。理解し合えた。

しかし、今アニューの目の前にいる女性――デバイス「ジャガーノート」を腰に帯剣するカリム・グラシアは、サーシェスとはほぼ無関係であるのだ。無関係とまでは言えなくとも、殺す所まで発展するほどの関係があるわけではない。そんな彼女の友人知人、果ては彼女自身までも殺そうとするロックオンのことは……どうしても、理解できなかった。

カリムはおっとりとした風体を崩さぬまま、アニューに話しかける。そこに憎しみなどは感じられない。本当に友人を助けた知人として扱おうとしているのが、アニューにも分かった。それに応えるために、アニューもまた話に応じた。

その様子は、遠くから見れば、さながら友人のようであったことを、彼は知っているのだろうか……？

知っていたら、銃口を向けることを止めてくれるだろうか？

そんな詮無きことを考えつつ、アニューとカリムは再会の誓いをして……別れた。

第７９話　散りし者（散りゆくモノ）（後書き）

リボンズ＝慢心王。あとは……分かってくれるかと。
リジェネが原作から大分乖離しているように思える今日この頃。でも、イノベイターの存在を肯定していたっぽいから、リジェネは人間の持つ可能性を信じていたの……かな？　と推測。ぶっちゃけますと、作者を一番困らせたキャラでした。何考えていたのか、本編を見てもｗｉｋｉを読んでも分かりません。でも、それでも大好きでした。容姿とか容姿とか容姿とか。
※０１：３０　置換ミスによる誤字を修正致しました。

次回の更新予定日：２０１１年１１月１２日（土）の予定。ただし、遅れること多々あり。

第８０話　果ての者達（前書き）

謎の「超高エネルギー体」――「蝶」は、４年前に起きた「ナイトメア・ディメンション」よりも大きな災いをこの世界に齎そうとしていた。それに気付いた管理局とＡ－ＬＡＷＳは、対ＣＢ同盟を結び、混同大艦隊を第９７管理外世界の「日本：海鳴市」に派遣する。

奇しくも、再び戦地となった「海鳴市」。そこでロックオンはアニューを待ち構える。全ての清算はつけるため……

そして、アニューもまたロックオンとの決着を願っていた。

リジェネの死から流転する世界の行く末は、一体どこに向かっているのだろうか……？

【今更善人ぶっても関係ない。お前のしてきた事を許す気はないし、罪を投げ出して無意味にした事はもっと許せない。最後まで憎まれたまま殺されろ】

――ココロンＫ様より

第８０話　果ての者達

――新暦７６年４月２５日――

都市機能も内包する時空管理局本局には、移住区も当然設けられていた。そこで生活するのは、本局の局員は勿論のこと、その家族や知り合いも大半はそこで生活していた。

その移住区の中でも、特にセキュリティが厳しい一等地、提督以上の地位を持つ者だけが住める区画に、ハラオウン家の住処はあった。

ハラオウン家はこじんまりした一軒家であったが、住んでいるのはクロノとエイミィ、その子どもであるカレルとリエラに、クロノの母であるリンディと、フェイトの使い魔であるアルフを合わせた６人であったため、むしろ広いぐらいであった。

「……」

多数の防犯装置で堅固に設えた玄関は、その広さも相まって、一人で靴を履いていたクロノに一抹の寂寞感を抱かせた。しかし、それを振り払って、彼は玄関の戸を開けた。戸を開けた瞬間、本局内を照らす人工光で目が痛くなったが、その眩しさすら今のクロノには「未来への希望」のように感じられた。

「……行くのね」

「あぁ……すまない、エイミィ」

「うぅん、謝らないで。……クロノ君がそういう人だってことは、分かっていたから……」

いつの間にか見送りにきていたクロノの妻であるエイミィ・ハラオウンは、そう言って、涙を流しそうになる目を両手で覆った。エイミィは昨日の夜にクロノから現在の状況を説明されており、これから彼が出向く任務についても、おおよそ理解していた。

第９７管理外世界に大戦力を駐在させているＣＢの殲滅。それが

彼に課せられた任務だった。しかし、それが成功する保証は全くなく、それどころか、逆に殲滅され、完敗する可能性すら存在していた。

情報分野を完全に支配され、武力すらCB側に「最強」がある今、管理局は敗北の色が異常に濃い劣勢に立たされていた。それを覆すための、言わばギャンブル、乾坤一擲（けんこんいってき）の大戦。そして、クロノはその総力戦の大将、総責任者として、この数百年間を見ても例を見ない大戦に臨もうとしていた。勝ち目が薄い、大戦に。

だから、彼女はこの朝が来なければいいと思っていた。夜明けがこないことはない。それが分かっていても、彼女は……エイミィは、愛する夫が大戦に臨むことがないよう、祈っていた。例えそれが絶対に届かないとしても、エイミィは祈らずにはいられなかった。

「……エイミィ、僕は必ず帰ってくる。六課の皆や、あのフェレットもどきも連れてな。だから……」

「……うん、待ってる。私はいつまでも待ってるからね、クロノ君。だから、だから絶対に……」

「約束する。僕は必ずここに帰ってくる。母さんの息子として、カレルとリエラの父として、そして……」

「君の夫として」

エイミィの視界は涙でぼんやりとしていた。その視線の先には誰もおらず、空虚な空間があるだけだった。それがさらに彼女の視界を不鮮明にさせた。先程までそこにいた人物は、もう戦いに赴く自分の船に乗るために、ここから去っていった。「必ず帰ってくる」という約束だけを残して。

「……まま、どうしたの？」

「おめめイタイの？」

泣いているエイミィを心配して、双子の子どもたち、カレルとリエラが足元に寄ってきた。そんな二人を抱きしめながら、彼女は祈る。祈ることしかできない。

夫の無事を。そして皆が生きて帰ってくることを。

「大丈夫……ママは大丈夫だから……皆でお父さんの無事を、皆の無事を祈りましょう？」

……10年前とは違い、今のエイミィは限りなく無力である。そして戦時において、無力な者が何をできるかと言えば、答えは一つ、「何もできない」だ。エイミィは昔と違い、戦線に出ることも、後方支援に回ることもできない身である。だから、彼女はここ、クロノの帰るべき場所で、彼が帰ってくることを、そして皆が帰ってくることを祈るしかない。

それは何もしないこと（元より何もできないが）と同意義なのだが、それでも彼女は祈らずにはいられなかった。世界に何も影響を与えないことを知っていても、彼女は……それでも、祈り続ける。

――新暦76年4月28日――

「……お久しぶりです、ハラオウン提督」
「あぁ、そうだな、ヒュドラ＝T」
「いえ……今はヒュドラ＝T＝Hです」
「H？　……そうか、クレス＝Hの」

「……はい」
　16歳でＡＡＡ＋にまで昇り、Ａ－ＬＡＷＳの裏方一般を引き受けてきた天才少女と、20代で提督にまで昇格した努力の青年の再会は、クラウディアの通路の一画で静かに成されていた。窓の向こう側を流れる雲に視線を向けつつ、彼らは互いの目を見ずに会話をする。
「……済まなかった。僕の指示のせいで、君の部隊である「ケルベロス」を壊滅させてしまって」
「……いえ」
　人目を惹くには十分な容姿のヒュドラと、世の女性ならば誰もが放っておかないだろうクロノが立ち並ぶ様は、見目麗しい絵画にはなるが、それは恋人というより、兄妹の色合いが濃かった。事実、クロノには義妹であるフェイト・Ｔ・ハラオウンがいるためか、より「兄」としての色合いを濃くしていた。
「今は、Ａ－ＬＡＷＳで戦っているのか？」
「……はい」
「誰か、親しい人は？」
「……ティーダという、グレアム氏の弟子だった彼と、今は行動を共に……」
　ヒュドラの長い銀髪が揺れる。クロノの黒髪も、同じように揺れた。クロノの肩ぐらいまでしかない身長のヒュドラは、それでも独りで立てるだけの力強さでもって、クロノの質問に答えていた。
「……そう、か。なら、僕の弟子に当たるのかな？　是非とも一度、会ってみたいものだ。……この戦争が終わったら、な」
「……はい」
　クロノは目を伏せながら、言葉を紡いだ。ヒュドラもそれに習うようにして、目を伏せながら言葉を連ねる。この時のクロノの内心は懺悔の気持ちでいっぱいだったが、ヒュドラは先にも言った通り、例え彼の指示による結果だとしても、彼のことを恨んでなどいなかった。

暗部にいた自分たちは、何人もの人々を殺してきた。だから、いつかは報いが来て、誰かに殺されるだろうと思っていた。それが偶然、彼の指示の時にやってきただけのこと。彼女にとっては、それだけのことに過ぎなかった。

だが、それでも……彼女の心の拠り所であった2人を殺した「赤鬼」を赦すことなど、彼女の幼い精神では許容できなかった。彼女たち「ケルベロス」は確かに殺されるだけのことをしてきた。だが、それは向こうとて同じなはず。なのに、何故「赤鬼」はのうのうと生きているのか……！

その不条理を、世界の理不尽を正すために、ヒュドラは、パートナーとも言えるティーダが彼女の為を想って造ってくれたＧＮフラッグを纏って、「赤鬼」と戦おうとしていた。だが、それと同時に、彼女に迷いがあるのもまた事実。

本当に復讐に囚われたままでいいのか、ティーダと共に静謐に暮らしていけないのだろうか……その選択肢を、彼女はまだ選んでいない。だから、彼女は迷っていた。さながら迷子のように、幽鬼のように……

クロノはそんな彼女を、しかし、見ることさえできない。罪の意識が、彼女を正視することを阻んでままならなかった。

もしこの時、彼がヒュドラの瞳に宿る、暗い復讐の炎に気付いていれば、あるいは……

だが、それはただの結果論、決して実現しないＩＦの話である。世界にやり直しなど効くはずもなく、だからこれはただの後悔、懺悔を吐露しているだけである。

世界は何時だって、こんなはずじゃないことばかりなのだから。

目の前に広がる光景は、まさに「圧巻」の一言に尽きた。４年前に見た大艦隊も相当だったが、今回のこれは、それすら遥かに超えていた。

「ついに来たわね」

「あぁ」

「……これで、最後になるのかしら？　私たちの戦いは……」

「分からない。だが、義父はこれを最後の戦いだとは見ていなかった」

「どうして？　「蝶」が発動すれば、次元世界は一旦リセットされるはずじゃ……」

「スクライアがこちらの味方だと決まったわけではない。実際、奴は此方に来る数ヶ月前に、サテライトキャノンを管理局に発掘させている」

「サテライトキャノン！？　もしかして、あの一年戦争の引き金を引いたっていう……」

「あぁ、あの悪名高き大量破壊兵器だ。いくらスクライア秘蔵の「蝶」といえど、それを喰らっては元も子もないだろう。……もしくは、それをも見越してのことか……」

大気圏内を航行する管理局とＡ－ＬＡＷＳの混同大艦隊を、遥か遠くから眺めていたアルケーガンダムドライと『００Ｒ』は、彼らの後ろにある２０メートルほどの「繭」を護るようにして浮くトリニティ艦の艦上に立ちながら、会話を交わしていた。両者共に冷静さを保っているように見えたが、その内心は色々と複雑であった。

アルケーＧＤ（ガンダムエイ）のマイスターであるネーナ・トリニティは、兄であるミハエル・トリニティとヨハン・トリニティを殺した（あるいはそれに関わった）仇敵クロノに対する殺意を燃やし、『００Ｒ』のマイスターである刹那・Ｆ・セイエイは、ロックオンとアニューの

対決を心配していた。
しかも、それだけでなく、ユーノに対する不信や、最後になるかもしれない戦いに臨む心地なども混じり合って、表現し難い気持ちになっていた。
少しでもいいから心の整理する時間を取りたいぐらいであったが、世界は、戦争はそんな悠長な時間を与えてくれるほど、優しいものではない。４年前の最終決戦時よりも大きな規模で始まろうとしている大戦は、最終防衛線の要として配置された彼らＳＳクラスの２人を持ってしても、末恐ろしいとさえ思ってしまう。
「……ねぇ、刹那。こんな時だけど、聞きたいことがあるの。いいかしら？」
「……なんだ？」
ＣＢ側が「蝶」を護るために敷いた防衛線は、「蝶」が置かれた「海鳴大学病院」という場所を中心にして、三重の環になるように組まれていた。それぞれが第一次防衛線、第二次防衛線、最終防衛線というように区分けされ、アルケーＧＤと『００Ｒ』がいるのは、最も中心に展開されていた最終防衛線だった。
そして、それ以外の防衛線にも、当然のことながら他の主要戦力が配されていた。

第一次防衛線――ガデッサ・ガラッゾ・セッテ。
第二次防衛線――アリオス・セラヴィー。
最終防衛線――アルケーＧＤ・『００Ｒ』。
予備戦力――ケルディム・レグナント・益荒男。

なお、ユーノの「天使の魔導書」を含めた戦力は、この何れにも含まれていなかった。彼らは遊撃部隊として、各戦線を回る役割を担っていた。とはいえ、それは逆に、ＣＢ側が彼を、引いては彼らを信じていないことを言外に意味していた。無論、それに気付かないユーノではなかったが、彼は何も言わずに、ただその役割を受け

入れた。それがさらに不信を強める結果となったが、ユーノはそれについて、何も感じていないようだった。

だから刹那のように、ユーノに反感を持つ者は多数いた。ネーナにはどうでも良いことなのだが、どうやら彼はユーノの動向に細心の注意を払っているようであった。

そんな刹那に、ネーナは努めて軽い調子のまま、気になっていたことを尋ねた。

「刹那は、誰が好きなの？」

「……は？」

「だから、誰のことが好きなの？　エクシア？　Ｏガンダム？　Ｏライザー？　それとも、やっぱり……」

「いや、待て、ネーナ・トリニティ！　どうしてそんなことを今、この状況で聞く！？」

「こんな状況だからよ。私はね、刹那。貴方のことを気に入っているの。だから、貴方の好きな人ぐらいは知っておきたいのよ。……最後になるかもしれないしね」

尋ねられた内容が余程予想外だったのか、刹那は狼狽を露わにし、ネーナに「何故」と聞き返した。ネーナはそれに答えながら、機械となった自らの手の平を見る。ごつごつとした、戦う為の手を。

それは、明らかに……乙女の手ではなかった。その事実が、彼女に決心をさせる。ガンダムとして、復讐者として敵を殺す決心を。……好きだった人と、決別する決心を。

「……オレが義父に拾われる前、少年兵だったのを知っているな？」

「えぇ」

「オレはその少年兵になる前、命を捨てる覚悟のために、自分の母親を殺した。「神に捧げる」と言いながら、オレは……この手で銃のトリガー引いて、母親の命を奪った」

「……」

「それから義父に拾われて、オレは、この世界に神がいないことを知った。ガンダムで戦うことがオレの存在意義（レゾンデートル）となり、世界の歪みを破壊することだけに邁進するようになった」

「……」

「オレは戦闘者だ。戦うことでしか己を見いだせない、何かを破壊することしかできない男だ。しかも、幼いころに母親を殺したことで、オレは……人の好意などに対する感性が欠落してしまった」

「だから、自分のことを好きな人に気付けない、もしくは、誰かを好きになることができないっていうの？」

「……あぁ、そうだ。そのとお……」

「あまり、恋する乙女を舐めない方がいいわよ、刹那。少なくても、フェルトはそれを知っても、貴方の傍にいようとするわよ。どんなに重い愛だろうと、ね」

「……なに？」

今度こそ目が点となった刹那を無視し、ネーナはトリニティ艦の上から飛び立った。戦端はすでに開かれ、あちこちから爆発音や砲撃音が聞こえてくる。その中を、深緑の復讐鬼は軽やかに飛び回る。妖精のように、天使のように。

「それは、どういう……」

「あとは貴方自身で知りなさい。……行くわよ、刹那」

「待て、ネーナ！」

そして、獲物を求めて彷徨（さまよ）う幽鬼のように……データに過ぎない顔を鬼の形相をして、ネーナはクロノを待ち構える。

「さぁ、早く来なさいよ、クロノ・ハラオウン……！」

何もかもを捨て去ったネーナの、おどろおどろしい響きの籠った声が、戦場に浸透していく。それを受けてか、戦場の様相はますます激化していった。より凄惨に、凄絶に……ＣＢと他２勢力は、殺し合いを、戦争をし続ける。

まるで、今のネーナの心境に共鳴するように……戦いの音色は止まることを知らない。「平和」を、戦争をなくしたいと思う両者の

想いだけがぶつかり合い、「必然」という運命の元、争いを行うその姿は、正しく愚かで救いようがなく……それでもどこか、人間らしかった。

アルケーGDと『００R』を乗せていたトリニティ艦のブリッジで、翡翠色の本を開いていたユーノは、数々のディスプレイから得た情報から、戦闘が始まったことを知った。

「……どうやら、始まったようだね。この「天使の書」で「無限書庫」から抽出した情報通り、空の混同大艦隊は囮で、地上ルートを進む少数精鋭が第一次防衛線を突破しようとしているのか」

翡翠色の本――彼が言うに、「天使の書」――が光り、無限書庫の新たな情報がユーノの脳内に何枚ものパネル状に刻まれる。ユーノはその少数精鋭の部隊の詳細を知って、さらにはその進攻ルートまでも突き詰めた。

しかし、彼は動かない。今はまだその時ではないことを知っているために。次元世界一の賢者は座した姿勢を崩さずに、その時を静かに待っていた。

他でもない、CBのためでも、管理局のためでもなく、全ては……

「それにしても、大胆な作戦だ……艦隊を囮にするなんて、君らしくもない戦略だね、クロノ。それとも、そうせざるを得ないほど、君たちは追い込まれていたのかな？」

「そうしたのは、吾輩たち。ロードが、原因」

「まぁ、そうなんだけどね……ちょっとやり過ぎた、かな？」

ユーノの後ろで、執事のように振る舞う仮面の男、セファー（ユニゾンデバイス）は、砂糖が9つ入った紅茶を淹れながらユーノの補佐をしていた。といっても、セファーが蒐集蓄積型超巨大ストレージデバイス「無限書

庫」と、そこから情報を引き出す魔導書型ストレージデバイス「天使の書」を内包する「天使の魔導書」の管制人格であるため、彼の許可がない限り、無限書庫を使用することはできないのだが。

「ちょっと、どころでなし。先史時代でも旧暦時代でも、ここまで酷いものは見たことなし」

「う～ん……これでも少しは自重したんだけどなぁ～……やっぱりマザーまで支配したのはまずかったかな？」

「うまいわけなし。まずいに確定。事実、管理局は手に窮し、これを敢行してきた」

今まではセファーが「面倒」という理由で出入りが自由だったが、ユーノという初めてのロードを得たセファーは、先史時代からほぼフリーだった無限書庫に、始めてアクセス制限をかけた。こうなっては、もうセファーの許可なしに無限書庫を使えるのはロードであるユーノとそのデバイスたるセファー、それに彼らの矛でもある「マテリアルズ」の５人だけである。

また、無限書庫は本局と直接繋がっているため、無限書庫を破壊するということは、本局を破棄することと同義であった。そもそも、無限書庫の「無限の叡智（えいち）」に目を付けた旧最高評議会の面々が、それに付け足すようにして本局を建造したのである。そのため、管理局の取れる手段は施設をほぼ隔離するのが関の山で、例え彼らの最重要機密がそこから漏れだしていようとも、それを阻止することは不可能であった。

それが分かっているからこそ、ユーノは無限書庫をわざわざ取りに行くのが面倒な虚数空間に落とさなかったのである。無限書庫の知識の中には、虚数空間にも干渉できる魔法があるため、そこに落としても問題はなかった。それに、セファーが先史時代に、発達し過ぎた文明を持ってしまったが故に破滅間近となってしまった人々と関わるのが嫌になって、一度無限書庫ごと虚数空間に落ちているので、ユーノはそこらへんを全く心配していなかった。セファーは現に、ここにいるのだから。そして、カリムによって虚数空間に落

とされたケルディムもまた……。
「でも、これを敢行するのは当初の予定通りだったよね？　少々の希望を持たせるアフターケアだってしたんだから、多分大丈夫でしょ？」
「……サテライトキャノン。確かに、あれならば完全覚醒前の「蝶」を破壊可能。されど……」
　口ごもるセファーに代わって、ユーノがその続きを口にした。
「それでＣＢの信頼を失うのは愚策だって言いたいの？　でもね、セファー。君のロードとして言うけど、まさか君は、この狂信者が集う組織に、まさか本気になっているのかい？」
「まさか。戦争根絶という夢物語を描く組織に肩を入れる必要なし」
　それはセファーの本心であった。セファーは先史時代――言うなれば、最古の融合騎であるので、世界や文明が興亡するのを何度も見てきたし、ＣＢのような組織を見たのも、これが初というわけではなかった。だから彼は断言できる。このような矛盾した組織が事を成せば、近いうちにこの世界も滅びるだろうと。
「そう。君が今までこの組織に協力してきたのは、僕の命令があったからだ。人の営みの一つとも言える「闘争」を真っ向から否定する彼らに、僕達が肩入れをする必要はない。僕達が求めているのは、あくまでも「統一」された世界だけなんだからね」
「Ｙｅｓ，ｍｙ　ｌｏａｄ」
　恭しく頭を下げるセファーに満足してか、ユーノは手元の「天使の書」に視線を戻した。「天使の書」から湧き出る無限書庫の情報は干からびることを知らず、それを扱うことに特化したユーノでさえも、頭痛を感じずにはいられない。
　キリキリと痛むこめかみを押さえつつ、ユーノはディスプレイを操作して、「彼女」を捜した。「彼女」がこの大戦に参加していることはすでに調べがついていたので、すぐに探し出せた。
「……はやて」
　十字杖を振りかざす「彼女」――八神はやての姿を見て、その名

を愛しそうに呟くユーノ。彼女の魔法が発動する度にＣＢ側の機体が冗談みたいに消し飛ばされていくが、それすら目に入らないほど、彼ははやてに熱を上げていた。

その様子を、セファーだけがジッと見つめていた。赤の他人から見ればさながらピエロのようであったが、そもそも、ユーノ・スクライアという存在自体が「戯事」みたいなものであるので、彼は何を思うわけでもなく、ただ黙ってロードの命令を待っていた。

年月という概念が薄れるほどの時の中で、ようやく得ることのできた始めてのロードなのだ。多少知識過多で狂っていようとも、彼は最期までユーノに付き従おうと、そう考えていた。

先程、無限書庫は隔離されていると言ったが、それはあくまで一般局員に限った話であり、ユーノの下で働いていた司書に限って言えば、それは該当しなかった。彼らは今日も今日とて、無限書庫を前みたいに使えるようにするため、システム系統を片っ端から解析していた。

しかし、その結果は芳しくなく、ユーノとセファーによって構築された強固過ぎるセキュリティにより、敢え無く返り討ちにあってしまった。侵入経路を特定され、これまた解析不可能なウイルスにＯＳを破壊された情報端末を、ユーノに代わって彼らを率いることになったアルフの拳が砕く。これで使えなくなった端末は１００を優に超え、掛かった費用もまた馬鹿にならないほど膨らんでいた。

「ったく、上層部も無茶を言うよ。本局のマザーも使えないのに、どうやってこの固い障壁を突破しろってんだ」

アルフの愚痴は、司書たち一同の愚痴でもあった。マザーがＣＢ

に乗っ取られていることはすでに管理局中……いや、次元世界中に拡散しており、次元世界の裏世界に当たる電子世界がＣＢに乗っ取られたことも、世界の人々は漠然ながらも理解していた。

そして、管理局にとってマザーコンピュータ「Ａ・Ｌ・Ｉ・Ｃ・Ｅ」とは最高の性能を持っているはずのコンピュータであった。それを碌な抵抗もさせずに掌握してしまった無限書庫のパフォーマンスに、ただ普通に高性能なだけの情報端末で如何こうできると言うのか。その事をアルフは小一時間ほど問い詰めたかった。

とはいえ、現在の管理局には新たなマザーを作るだけの猶予はなかった。もし作ったとしても、またハッキングされて終わるだろう。だからこそ、管理局は電子世界をヴェーダと二分する無限書庫を取り戻すべく、予算も人員も、今まででは考えられないほど、大量に費やした。しかし、その結果が……これだ。

情報処理においては、司書長を除けば右に出る者がいない古参の司書たちですら手も足も出なかった。ユーノに次ぐ能力を持っていたアルフにしても、障壁の一枚を突破することさえ叶わなかった。情報の墓場は今や「あらゆる望みが叶う理想郷」と化しているのに、そこに辿り着ける者は誰もいない。

まるで、あの次元の狭間に呑み込まれた御伽噺の古代世界のように、無限書庫は一個の世界として、その門戸を固く閉ざしていた。本当の主であるユーノだけに入口を開き、その内に秘めたる全知に等しい叡智を、彼だけに覗かせる。

今のユーノは正に、あの御伽噺に登場する、遺失した古代世界……「アルハザード」に辿り着けた魔導師のようであった。

「……っと。嫌な想像をしちまったな」

背筋をゾクリと震わす想像を振り払い、アルフは作業に戻っていった。彼女はザフィーラから聞いた「アルハザード式」の魔法の存在を知ったがために、そんな妄想（もうそう）をしたのだと、そう信じていた。

だから、彼女は気付かない。疑念を払拭（ふっしょく）して忘れ去り、絶対に見落としてしまう。

彼女が最初に無限書庫を見た時、あまりにも巨大なスケールから、「こりゃもう、一個の世界みたいなもんだね」と、感想を漏らしていたことを。

ありとあらゆる知識があるということは、「もしかしたら『忘れ去られた秘術』なんて物騒なもんもあったりして」と、冗談交じりに言ったことを。

それ以外にも、なぜ滅びた世界の「遺失した超高度技術（オーバーテクノロジー）」――ロストロギアの情報が、無限書庫にあるのか、といった疑点。無限書庫は「存在する」世界から情報を蒐集するはずだ。なのに、どうして「存在しない」世界の情報まであるのか。

――それはつまり、無限書庫がロストロギアの誕生以前からあったことを示しているのではないだろうか？　「闇の書」もレリックも聖王のゆりかごも、それらが造られる以前から、無限書庫はあったのではないのか。もしくは、それらが無限書庫から流出した情報で造られていたとすれば、その情報が無限書庫にある理由も……

どうして誰も、「ありとあらゆる情報がある」無限書庫を綿密に調査しなかったのか。まるで忘れ去ってしまったように、その存在を放置していたのか。もしくは、放置せざるを得ない事情があったのか。

――それは、忘れられし都「アルハザード」の境遇と似ているのでは？　「アルハザード」もまた辿り着いた者がいないために、存在の実証は宙ぶらりんとなっている。つまり、ある意味「放置」されているとも言える。

そう言った細やかな疑問点に気付くことなく、アルフは仕事に没頭していった。嵌めこんでいけば一つの美しい絵画（解答）になるのに、彼

女はその「嫌な想像」を振り切って、目の前の小事に付きっ切りとなる。

——絵画はもう、完成しているというのに、彼女はそれを、見て見ない振りをする。贋作（がんさく）だと、そう頑なに信じて。……ユーノを信頼して、彼女は今日も、自分にできることをする。

第８０話　果ての者達（後書き）

気が付けば第８０話まで、そして8．の序が終了していました。次は幕間―１１を挟んで、戦争開始の破に移ります。
なので、そろそろ本気を出します。
※昨日参加を表明した（してしまった）ＴＰＰですが、もし参加した場合、この作品も削除しなければならないのかと思い、今から戦々恐々としております。なお、作者は実家が岩手県なこともありまして、ＴＰＰに絶対反対しております。

次回の更新予定日：未来日記（お休みユッキー）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5349j/

世界に革新を齎すモノ

2011年11月14日21時39分発行